（白石製本所　製本）

昭和八年四月一日印刷
昭和八年四月五日發行

（普及版古事類苑　全六十冊）

發行者　後藤亮一

發行者　川俣馨一
東京市芝區金杉新濱町十二番地

印刷者　和田助一

發行所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社
振替口座東京　八九六〇番
電話小石川(85)　一一〇五四番・三二六九番

單式印刷株式會社印刷

明治廿九年十月三十一日印刷
明治廿九年十一月八日發行

神宮司廳

編修總裁　從三位　細川潤次郎
編修　正七位　佐藤誠實
副編修　松本愛重
助修　石井小太郎
同　佐野久成
同　熊谷直一郎
同　山本信哉
顧問　正五位　本居豐穎
同　從五位　木村正辭
同　從五位　栗田寛
同　正六位文學博士　黑川眞頼
同兼校正　井上頼圀

二位、〇平清盛妻時子奉抱幼主沒海中、

〔天皇御元服和抄〕御元服の當日、平明に所司御裝束を奉仕す、〇中略主上童服を〇中略著御し給ひ、北廂の大床子になしまず、攝政御裾に候し、すぐに圓座に候す、〇中略御傍親の人參りて、攝政のかたはらに候ふ座を給はず、此事天永に中納言法性寺〇藤原忠通嘉應右大臣月輪〇藤原兼實文治左大將後京極〇藤原良經仁治右大臣圓明寺〇藤原實經など候はれしにや、永享には御傍親の人なきによりて、一會の傳奏たるによりて、萬里小路大納言時房卿さぶらひしよし、定親大納言記し置ぬ、寶永には橋筒大納言隆賀卿、御外祖父たるによりて候じけるよしつたへ承りぬ、

〔皇年代私記〕桃園院、諱遐仁櫻町院第一皇子、母青綺門院舍子、櫻町院勅定、以二條家爲御外戚、實母開明門院定子、姉小路參議左中將實武女、

〔續世繼 五菊の露〕よにもにさせ給はで、〇藤原忠通いづかたにもうとさやうにきこえさせ給ひて、きんだちなど心もとなくきこえさせ給ひしかども、世中みだれいできてのち、もとのやうに氏の長者にもかへりならせ給き、男君達もくらゐたかくならせ給て、法師におはしますも僧正ともならせ給ふ、ところ〴〵の長吏もせさせ給へり、女御きさきかた〴〵おはして、〇二條后育子、崇德后聖子、よろづあるべきことみなおはしなしき、むかしときにあはせ給ひたる一の人におとらせ給事なかりき、馬をうしなひてなげかざりけんおきなゝどのやうにておはしましゝ、げにやくるしきよをすぐさせ給てのちは、かくさかえさせ給へり、つくらせ給ひたる御詩とて、人の申しは、官祿身にあまりてよをてらすといへども、素閑性にうけて權をあらそはず、とかやつくらせ給へるもその心なるべし、

〔法性寺關白御集〕夏日於桂別業即事

京洛西南桂水邊、地形勝絶任天然、松杉山暗陰雲底、鳥雀林喧落日前、官祿餘身雖照世、素閑承性不爭權、尋來此處有何思、觸境逸遊感緒連、

〔愚管抄 六〕中宮〇順德后立子は、〇中略次の年〇建保六年の正月より、又御懷妊と聞えて、十月十日寅の時に御産平安、皇子〇仲恭誕生、思のごとくの事出きにけり、上皇〇後鳥羽ことに待よろこばせ給て、十一月廿六日にやがて立坊有けり、〇中略さて公經の大納言はこの立坊の春宮大夫になりて、いみじくて候はるゝに、大方この人は閑院の一家の中に、東宮大夫公實の嫡子にたてゝ、ともゑの車などつたへたりける、中納言左衛門督通季のすぢ也、中納言にて若死をして、待賢門院の時外舅ぶるまひもえせず、實能實行など云弟共の方に、大臣大將も出きにけり、

〔玉海〕治承四年二月六日戊子、今日主上〇高倉御覽二品壺、〇平清盛室中宮（德子）母儀進種々引出物云云、

〔百練抄 十 後鳥羽〕文治元年三月廿四日丁未、於長門門司關、爲源軍平氏悉被責落了、前帝〇安德外祖母

〔榮花物語二十若水八〕かくて中宮、（後一條后威子）神無月（〇萬壽三年）になりぬれば、左衛門督（〇兼隆）の家にいでさせ給ておはします、（〇中略）はかなくて月もたちぬ、十二月に成ぬれば、たちぬる月にだにさおはしますべかりしに、おやしく心もとなさを覺しさわぎたり、ついたちもすぎゆけば、いとおやしくいかにとのみおぼしめす程に、十日のひるつかたより、れいならぬ御けしきなれど、わざとも見えさせ給はねば、心のどかにおぼさるゝに、日くるゝまゝにぞまことにくるしげにおはします、このとのばらや、ほかの上達部もまゐりこみ給、こゝらの僧共のこゑをあはせたるほど、すべて物も聞えず、どのゝ御まへ（〇威子父藤原道長）なやましくおぼさるれど、こゝろむまゐらせ給、内（〇後一條）より、女院（〇後一條母后彰子）よりの御つかひつゞきたちたり、（〇中略）戌の時ばかりにぞいとたひらかにせさせ給へる、（〇章子）いまひとつの御ことをのゝしりたり、よろづにその事どもをせさせ給、その後ありさまおとなきにておしはかられたり、どのゝ御まへたひらかにおはしますよりほかの御事なし、物のみおそろしかりつるに、いのちのびぬるこゝちこそすれとて、うれしげにおぼしめしたり、うちにもきこしめして、おなじうはとはいかでか覺しめさゞらん、されどたひらかにおはしますを返々も聞えさせ給て、御はかしもて參りたり、さき〱は女宮には御はかしはもてまゐらざりけれど、三條院御時、一品宮の生れさせ給へりしよりぞかく（〇くの下恐脱あ字）める、内女房などのあなくちをしなど申をきこしめして、こは何事ぞ、たひらかにせさせたまへるこそかぎりなき事なれ、女。と。い。ふ。も。を。と。こ。の。事。な。り。や。む。か。し。か。し。こ。き。み。か。ど。〱。み。な。女。帝。立。給。は。ず。ば。こ。そ。あ。ら。め。とのたまはするに、かしこまりて候べし、つぎ〱の御うぶやしなひなどもつゞきたちたり、

〔台記別記〕久安六年正月七日乙酉、今朝授入内女（〇藤原頼長養女近衛后多子）次第於右大將實能卿、宰相中將敎長卿、尾張守親隆朝臣等、賜敎長卿者、爲令行事也、專行者親隆也、而先例如此大事、家司之外、授次第於親族上達部令行事、仍所授也、大將依。爲。外。祖。授。之。

大赦詔早可下給、可令試候縁事諸司者、各召使部召仰了、其詔書曰、

詔朕以薄德、謬承洪基、愧君臨而及七年、思子育而慎□□、爰外祖前大相國（○道長）營道場於城東之地形、設供養於珪白之秋禮、聽善根之至焉、翹翠華而臨矣、新見土木之壯麗、更知人民之勤功、禪慮所請、唯施仁之情而已、大赦天下、今日昧爽以前、大辟以下、罪無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、繫囚見徒、私鑄錢、八虐、強竊二盜、常赦所不免者咸皆赦、又薰風者應□扇、惠露者欲普霑、仍貧未得解由之徒、不論僧俗、同以原免、庶因功德之兼二世、將顯感動之在一天、布告中外、俾知朕意、主者施行、

〔皇年代略記 一〕永祚二年正月五日壬午、元服、（十一、加冠外祖太政大臣（藤原兼家）、理髮左大臣雅信、）

〔冠儀淺寡抄 四加冠〕加冠名幷人體事

抑古者豫簽之、此專用一族長者、（所以敬其老尊其族、可審々々、）若其人有障、（疾病、服、）擇外戚同門等之內、賢而有禮者、是亦流例也、（並皆不問在官散位、）

或曾祖父、祖父、外祖父、親父等加冠、是雖非本儀、亦古來爲流例、

〔江談抄 二雜事〕濟時卿女參三條院事

爲仲云、濟時卿女、（○藤原娍子）被參三條院（東宮之時）之日夕、大將參大入道殿（○藤原兼家）被申云、被下輦車宣旨哉、件事等欲蒙莫大恩、返答云々、ナドカハ可無恩許之事也、欲奏達云々、大將不堪感悅、起座拜舞退出、及入內之期限、雖相待宣旨、已以無音、敷筵道被參入也、時人密號空拜大將、又彼大將家前庭有紅梅、便稱空拜云々、

〔古事談 二臣節〕濟時大將ヲ、コウバイノ大將ト云故ハ、女子女御（○娍子）ヲ后ニタテント被申ケルヲ、勅許アルゾト被存テ、無左右下庭上被拜舞畢、然而無立后、仍空キ拜ノ大將ト世人云ケリ、而不知案內之人、紅梅ト知也、

みじうおくし給ひて、御てもわなゝくげにや、まどのわたりちかくだによらず、無邊世界をい給
へるに、關白殿色かをくなりぬ、又入道殿〇道長いさせ給ふとて、攝政關白すべきものならば、この
やわたれとおほせらるゝに、はじめのおなじやうに、まどのわるばかりいさせ給ひつ、きやうよ
うしもてはやしきこえさせ給へるけうもさめて、ことにがうなりぬ、ちゝおとゞ帥殿に、なにか
いる、ないそ〳〵とせいせさせ給ひてことさめにけり、入道殿やもどして、やがていでさせ給ひ
ぬ、そのをりは左京大夫とぞ申し、ゆみをいみじくいさせ給ひしなり、又いみじくこのませ給ひ
しなりげうに見ゆべき事ならねども、人のさまのいひいで給ふことのおもむきより、かたへは
おくせられ給ふなめり、

〔政事要略 二十九〕木幡寺鐘銘并序　江匡衡作

木幡山者、左青龍、右白虎、前朱雀、後玄武之勝地也、四方似城、百里不絶、元慶太政大臣昭宣公〇藤原基經
相地之宜、永爲一門埋骨之處、爾來氏族彌廣、子孫繁昌、帝后必出於此門、王侯相將濟々焉、爰皇朝親
舅左丞相〇道長准擬祖墓域多武峰側、建立妙樂寺、修常行三昧之例、茲山下新建道場、修法花三昧、額
曰木幡寺矣、〇下略

〔大鏡裏書〕法成寺供養事
治安二年七月十四日壬午、入道前太政大臣〇藤原道長建立法成寺金堂被供養之、仍天皇〇後一條臨幸、准
御齋會、太政大臣已下被會矣、太皇太后宮〇一條后彰子皇太后宮〇三條后妍子中宮〇後一條后威子、以上三宮並道長女、小一條
院〇敦明親王同以渡御、以天台座主院源爲講師、今日大赦天下、

〔法成寺金堂供養記〕治安二年七月十四日壬午、〇中略左大臣〇藤原頼通奉勅語、臨於堂東南檻、召大外記
淸原眞人頼隆被仰云、可召內記撿非違使者、頼隆稱唯退出、即令參大內記菅原朝臣忠貞、左衞門權
佐大江朝臣保資、各承宣旨退出、是依前大相國有被奏、被行非常大赦也、大臣又召頼隆眞人被仰云、

さるべきことのをりも、この君おそくまかりいで給へば、弓場殿に御さきばかりまゐらせ給ひてぞまちたゝせ給へれば、見奉り給人なんかくてはたゝせ給へると申させ給へば、いでまかり侍る也とぞおほせられける、

〔九暦〕天德四年二月十一日、右大將〇藤原師尹孫皇子爲親王、其名昌平、〇村上皇子左大臣氏人等以下、於仁壽殿東庭奏慶由、依御物忌不參弓場殿、

〔日本紀略五冷泉〕康保五年七月廿三日戊子、於外祖右大臣〇藤原師輔第、立爲皇太子、

〔十訓抄六〕花山院御時、中納言義懷ハ外戚、權左中將惟成は近臣にて、おろ〳〵天下の權をとれり、然るを帝ひそかに内裏を出、花山に幸給由を聞て、兩人追て參上の所に、帝已に比丘たり、惟成もとゞりをきる、又義懷に語て云、外戚として重くおはしつるに、外人となりて今更に世に交らん見ぐるしかるべし、早く出家すべしと、義懷此由を存じて同く出家す、人の敎訓にてしたればいかゞと時の人思ひけるに、始終とふとくて、飯室に住てよまれける、

見し人もわすれのみ行山里に心ながくもきたる春かな〇又見大鏡、古今著聞集、袋草子、

〇按ズルニ、古事談ニ惟成ノ語ヲ以テ、義懷ノ語ト爲セルハ誤レリ、

〔大鏡七太政大臣道長〕帥どの〇藤原伊周のみなみの院にて、人々あつめてゆみあそばしゝに、このとの〇道長わたらせ給へれば、おもひがけずあやしと中關白殿〇伊周父道隆おぼしおどろきて、いみじう饗ようし申させ給ひて、下臈におはしませどさきにたて奉りて、まづいさせたてまつり給ひけるに、帥殿のやかずいまふたつおとり給ひぬ、中關白殿又御前に候人々も、今二度のべさせ給へと申て、のべさせ給へりけるに、やすからずおぼしなりて、さらばのべさせ給へとおほせられて、又いさせ給ふとておほせらるゝやう、道長がいへより御門きさきたちたまふべきものならば、このやあたれとおほせらるゝに、おなじものゝ中心にはあたる物かは、つぎに帥殿いたまふにい

けにや、冷泉院は御物氣によりて、中一年にておりさせ給ぬ、さて圓融院の御方めでたけれど、花山院の御事などわさなしと云もことおろかなり、その御弟にて三條院おはしますを、いたづらになしまゐらせんとおもひて、かゝるやうども出きけるにや、

〔神皇正統記〕〇後一條天暦〇村上の御時、元方の民部卿のむすめの御息所〇祐姫の、一のみこ廣平親王をうみ奉る、九條殿〇藤原師輔の女御〇安子まゐりたまひて、第二の皇子冷泉にましますいできたまひしころより惡靈になりて、このみこも邪氣になやまされましき、花山院俄に世をのがれ、三條院の御目のくらく、此東宮〇小一條院敦明のかく身づからしりぞき給ひぬるも、怨靈のゆゑなりとぞ、

〔大鏡〕五太政大臣公季このおほきおほとの〇藤原公季の御はゝうへは、延喜の御門〇醍醐の御女、女四宮〇康子ときこえさせき、〇中略この太政大臣をはらみたてまつり給ひて、〇中略つひにうせさせ給ひにし、〇中略このうみおきたてまつらせ給へりし太政大臣殿をば、御あねの中宮〇村上后安子さらなり、よのつねならぬ御ごう思ひにおはしませば、やがてやしなひたてまつらせたまふ、うちにのみおはしまして、みかど〇村上もいみじうらうたきものにせさせ給へば、つねには御前にさぶらはせ給ふ、なに事も宮たちの御おなじやうにかしづきもてなし申させ給ふに、御ものめす御だいのたけばかりをぞ一寸おとさせ給ひけるをけぢめに、しるきことにはせさせ給ひける、むかしはみこたちもをさなくおはしますほどは、うちずみせさせ給ふ事なかりけるに、このわか君〇公季のかくてさぶらはせ給ふは、あるまじき事とぞしり申せど、かくておひたゝせ給へれば、なべての殿上人などになずらはせ給ふべきならねど、わかうおはしませば、おのづから御たはぶれなどのほどにも、みなみなにふるまはせ給ひしなれば、圓融院御門おなじほどのをとこどもとおもふにや、かゝらであらばやなどぞうめかせ給ひける、又御むまごの頭中將公成君をことのほかにかなしがり給ひて、うちにも御車のしりにぐせさせ給はぬかぎりはまゐらせたまはず、

雜載

家之姻、與其家門、號裏松亞相、(後小松上皇后資子、道義〈足利義滿〉夫人康子、義持夫人榮子、共重光姉妹、)

〔北山抄 六〕下宣旨事
補女御事、(更衣者、尚侍下所司、聽禁色、)宣仰辨官作官符、同外戚公卿以下奏慶、

〔三代實錄 四清和〕貞觀二年十月廿九日乙巳、正三位行中納言橘朝臣岑繼薨、岑繼者贈太政大臣正一位清友朝臣孫、而右大臣贈從一位氏公朝臣之長子也、氏公朝臣、是仁明天皇之外舅、岑繼所生、是仁明天皇之乳母、故天皇龍潛之日、陪於藩邸、稍蒙龍幸、岑繼身長六尺餘、腰圍差大、爲性寬緩、少年愚鈍、不好文書、天皇見其無才歎曰、岑繼也、是大臣之孫、帝之外家、若有才識、公卿之位、庶幾可企、何其不讀書之甚哉、岑繼竊聞、慙恐於心、乃改節勵精、從師受學、書傳略通意旨、

〔大鏡 四右大臣師輔〕元方民部卿のむまご、(○村上皇子廣平親王)まうけの君にておはするころ、みかどの御庚申せさせ給ふに、この民部卿まゐり給へるさらなり、九條殿(○藤原師輔)さぶらはせ給ひて人々あまたさぶらひて、こうたせ給ふついでに、冷泉院のはらまれおはしましたるほどにて、さらぬだによひといかゞとおもひ申たるに、九條殿こよひのすぐろく、つかうまつらんとおはせらるゝままに、このはらまれ給へるみこ、をとこにおはすべくは、でう六いでことてうたせ給ひけるに、たゞ一どにいでくるものか、ありとある人、めを見かはしてかんじもてはやし給ひ、わが御みづからもいみじとおぼしたりけるに、この民部卿のけしきいとふしうなりて、いろもあをうこそなりたりけれ、さてのちにれいにいでまして、その夜やがてむねにくぎはうちてきこそのたまひけれ、

〔愚管抄 四〕九條殿(○藤原師輔)のゆゝしき願力にこたへて、冷泉院いできておはしませど、天暦(○村上)第一の皇子廣平親王の外戚にて、元方大納言ありけるが、この安子(○村上后)中宮におされまゐらせて、冷泉圓融など出き給て、廣平親王はかひなき事にてありけるを、思死にして惡靈とありにける

んじ給ふに、ひつじのくだりほどにすでにことありぬ、宮の御せうと公相の大納言、皇子御誕生ぞやといとあざやかにのたまふをきく人々のこゝち、夜のあけたらむやうなり、ちゝおとゞまことのたまふまゝに、よろこびの御涙ぞおちぬる、あはれなる御けしきと見たてまつる人もこといみじあへず、公相公基實雄大納言三人、權大夫實藤、大宮中納言公持、みな御ゆかりの殿原、うへのきぬにてさぶらひ給ふ、〇中略かくて八月十日すかやかに太子にたち給ひぬ、〇後のふかくさのゐんの御事也おとゞ御心おちゐて、すゞしくめでたうおぼす、ことわりなり、おほかたかのいみじかりし世のひゞきに、女御子にておはせましかば、いかにしほ〳〵とくちをしからまし、いときら〳〵しうて、さしいで給へりしうれしさを思ひいづれば、見たてまつるごとに涙ぐまれて、かたじけなうおぼえ給ふとぞ、どしたくるまでつねはおとゞ人にものたまひける、中比はさのみしもおはせざりし御家の、ちかくはことのほかに世にもおもくやむごとなうものし給ひつるに、この后の宮まゐりたまふ、春宮むまれさせ給ひなどして、いよ〳〵さかえまさりたまふ、行すゑおしはかられていとめでたし、父の入道どのさへ御いのちながくて、かゝる御すゑども見給ふもさこそは御心ゆくらめとおしはかるもしるく、

〔太平記 一〕立后事

文保二年八月三日、後西園寺太政大臣實兼公ノ御女、〇禧子后妃ノ位ニ備テ、弘徽殿ニ入セ給フ、此家ニ女御ヲ立ラレタル事已ニ五代、是モ承久以後、相模守〇北條氏代々西園寺ノ家ヲ尊崇セシカバ、一家ノ繁昌恰天下ノ耳目ヲ驚セリ、君〇後醍醐モ關東ノ聞エ可然ト思食テ、取分立后ノ御沙汰モ有ケルニヤ、

〔教興卿記〕應永二十年三月十六日、裏松殿圓寂、子刻也天下觸穢也、

〔續本朝通鑑 六十一稱光〕應永二十年三月乙未、大納言從一位藤重光逝、以外戚之親、爲院執權、且依武

おほきおとゞ、そのかみ夢見給へることありて、源氏の中將わらはやみまじなひ給ひし北山のほとりに、世にしらずゆゝしき御堂をたてゝ、名をば西園寺といふめり、この所は、伯三位すけながの領なりしを、をはりの國松えだといふ莊にかへ給ひてけり、もとは田はたけなどおほくて、ひたぶるにゐ中めきたりしを、さらにうちかへしくづして、えんなるそのにつくりなし、山のたゝずまひ木ぶかく、池の心ゆたかにわたつ海をたゝへ、峰よりおつるたきのひゞきも、げに涙もよほしぬべく、心ばせふかき所のさまなり、〇中略北のしんでんにぞおとゞはすみ給ふ、めぐれる山のときは木どもいとふりたるに、なつかしきほどのわか木のさくらなどうゑわたすとて、おとゞうそぶき給ひける、

山ざくらみねにもをにもうゑおかむ見ぬ世の春を人やしのぶと、かの法成寺をのみこそいみじきためしに世繼のいひためれど、これはなほ山のけしきさへおもしろく、都ばなれて眺望そひたれば、いはんかたなくめでたし、峰殿〇藤原道家の御しうと、あづまの將軍〇頼經の御おほぢにて、よろづ世の中御心のまゝに、わかぬ事なくゆゝしくなんおはしける、いまの右のおとゞをさをさおとり給はず、世のおもしにて、いとやんごとなくおはするときこゆる、おくゆかしき御ほどなるべし、〇中略なことゞもやこぞより中宮〇姞子はいつしかたゞならずおはします、六月になりてその程ちかければ、十三社のほうへい勅使たてまつらる、〇中略后の宮いとくるしげにし給ひて、ひたけゆくにいろ／＼の御物のけどもなのりいでゝ、いみじうかしかまし、おとゞ〇實氏きたのかたいかさまにと御心まどひて、おぼしなげくさまあはれにかなし、〇中略内には更衣ばらに若宮二所おはしませど、此御事をまち聞え給ふとて、坊さだまり給はぬほどなり、たとひたひらかにおはしますとも、もし女御子ならばとまが／＼しきわらましは、かねておもふだにむねつぶれてくちをし、かつは我御身のしゆくせ見ゆべききはぞかしとおぼして、おとゞもいみじうね

數十年の間朝廷の故實に練し、大臣大將に昇りて懸車の齡まで仕奉らる、親王の女祇子の女王は宇治の關白の室なり、よりてこの大臣をばかの關白の子にし給ひて、藤氏に變らず春日の社にもまゐり仕奉られけりとぞ、またやがて御堂(○道長)の息女に相嫁せられしかば、子孫も皆かの外孫なり、この故に御堂宇治をば遠祖の如くに思へり、それよりこのかた、和漢の稽古を旨とし、報國の忠節をさきとする誠あるによりてや、この一流のみ絕えずして十餘代に及べり、

〔中右記〕大治五年二月廿一日甲午、立₂女御從三位藤聖子₁爲₂中宮₁、(年九歲)關白忠通(當時執柄女)[illegible]女、母從三位藤宗子、故大納言宗通卿女也、當時執柄之女子立后、永承六年四條宮(○藤原頼通女寛子)之後、八°十°年°間°久°絕°之°處°、今°度°初°有°事°、誠是藤氏之中興時歟、大宮右大臣殿(○宗通父俊家)之末葉、皇后初立給、一家光美後代之美談也、

〔續世繼三紫松〕當代(○高倉)は、一院(○後白河)の御子、御母皇后宮滋子ときこえさせ給、贈左大臣平時信のおとゞの御むすめ也、(○中略)いま又たひらのうぢの國母(○清盛女德子)かくさかえさせ給うへに、おなじうぢのかんだちめ殿上人、このゑづかさなどおほくきこえたまふ、このうぢのさかゆるべくさかえ給ときのいたれるなるべし、たひらのうぢのはじめは、ひとつにおはしましけれど、にきの家とよのかためにおはするすぢとは久しくかはりて、かた〴〵きこえ給を、いづかたもおなじ御よに、みかどきさきおなじ氏にさかえさせ給める、平野はおほたのいへのうぢ神にておはすなれど、御名もとりわきてこの神がきのさかえ給ふときなるべし、

〔諸家知譜拙記二〕高倉(近代撰缺)

範季　高倉祖　順德院外祖

　刑部卿從三位、元久二年薨、贈₂左大臣從一位₁、

〔增鏡五內野の雪〕いま后(○後嵯峨后藤原姞子)の御父は、さきにも聞えつる右大臣(實氏)のおとゞ、その父殿(公經)の

大貳のむすめのはらにおはす、みめもきよらに、和歌などもよくこのみ給ときこえ給き、〇中略三のきみは待賢門院〇鳥羽后璋子におはします、

〔續世繼七うたゝね〕ふぢなみの御ながれのさかえたまふのみにもあらず、みかど一の人の御は、かたには、ちかくは源氏の君たちこそよきかんだちめども、おはすなれ、堀川のみかどの御母賢子の中宮は、おほとの〇藤原師通の御子〇師實とてまゐり給へれど、まことは六條の右のおとゞ〇源顯房の御むすめなり、〇中略そのゆかりのありさまみなもとを尋ぬれば、いとやんごとなくなん侍る、むらかみのみかどの御子に、なかづかさのみこ〇具平親王と申しは、六條の宮とも、後中書王とも申すこの御ことなり、〇中略その御子に、つちみかどの右のおとゞと申しは、はじめてみなもとの姓えさせ給て、師房のおとゞときこえさせ給き、御身のざえもたかく、文つくらせたまふかたもすぐれ給、〇中略みかど一の人の御よそひども、その中にぞおほく侍るなる、御堂〇藤原道長の御むすめは、おほくきさき國母にてのみおはしますに、このとのゝきたのかたのみこそたゞ人はおはしませば、いと〳〵やんごとなし、その御腹に堀川の左のおとゞ俊房、六條の右のおとゞ顯房と申て、あにおとうとならびたまへりき、〇中略六條のおとゞは、〇中略中宮の御おや、ほりかはのみかどの御おほぢにていとめでたくおはしき、

〔續世繼七もしほの煙〕六條のおとゞ、〇源顯房、中略昔よりふぢなみのながれこそ、みかどの御おほぢにこはうちつゞき給へるに、ほりかはの院の御おほぢにゆづらしゝふゝすゑさへ、くらゐこらせたまへる、一の人の御おほぢにうちつゞきておはしますなり、

〔神皇正統記村上〕この天皇、〇中略御子多くまし〳〵し中に、〇中略具平親王六條の宮と申、中務卿に任したまひき、前に兼明親王名譽おはしき、よりてこれをば後の中書王と申す、〇中略此親王ことに才も高く徳もおはしけるにや、その子師房姓を賜はりて人臣に列せられしが、才藝古へに恥ぢず、名望世に聞えあり、十七歳にて納言に任じ、

ふはおどろへぬ、春花秋のもみぢどいへど、春の霞たなびき、あきのきりたちこめつれば、こぼれてもみえず、たゞひとわたりの風にちりぬるときは、水のあわみぎはのちりとこそはなりぬめれ、たゞ此殿の御まへの榮花のみこそ、ひらけはじめさせ給にしよりのち、千とせの春のかすみあきの霧にもたちかくされで風もうごきなくえだをならさねば、かをりまさるようにありがたくめでたき事、優曇花のごとく、水におひたるはなはかをきはちすのようにすぐれて、かにほひたる花はならびなきがごとし、

〔續世繼六たけのよ〕みかど關白につぎ奉りては、御はゝかたのきみだちをこそよにあかるべき人にておはすめれ、九條殿○藤原師輔の御子の中に三郎におはしまし、關白たえずせさせ給、十郎にあまり給へりし、閑院のおほきおとゞ○公季のすゑこそ關白はし給はねども、うちつゞきみかどの御のおほんをぢにて、さるべき人びとおはすめれば、その御ありさま申さんとて、まづみかどの御はゝかたを申つゞけ侍なり、朱雀院村上の御おほぢは堀河殿、○藤原基經冷泉院圓融院の御おほぢは九條殿、○藤原師輔花山院のは一條殿、○藤原伊尹一條のゐん三條院のは東三條殿、○藤原兼家後一條院、後朱雀院、後冷泉院、此三代の御おほぢは御堂の入道殿、○藤原道長この十代みかどは、昭宣公○基經と申堀川殿のひとつ御すゑなり、後三條院こそは、ゝかたもみかどの御まごにておはしませど、御はは陽明門院はみだう○道長の御まごにておはしませば、ひとつ御ながれなり、白川院の御おほぢ閑院の春宮大夫○藤原能信のおなじながれにおはしますを、まことの御おやは、閑院の左兵衞督公成このおなじ御ながれなれど、東三條殿○兼家の御すゑにはおはせで、その御おとうとの閑院のおとゞ○公季の御すゑなり、この閑院のおほきおとゞの御むまごにおはせし、左兵衞のかみ○公成の御すゑよりつゞき、御かどの御おほぢにおはす、このきんなりの左兵衞督の御子、あぜちの大なごんさねすゑは、鳥羽の院の御おほぢなり、此大納言の太郎には、春宮大夫公實と申き、經平の

始祖内大臣、〇鎌足扶持宗廟、保安社稷、淡海公、〇不比等手草詔勅、筆削律令、興佛法、詳帝範、其後后妃丞相、積功累德、寔繁有徒矣、建興福寺法華寺、開勸學院施藥院、忠仁公、〇良房始長講會、昭宣公、〇基經點木幡墓所、貞信公、〇忠平建法性寺、修三昧、九條右相府、〇師輔建楞嚴院、修三昧、先考建法興院、修三昧、此外傍親列祖之善根德本、不遑稱計、方今時々詣墳墓、爲建寺指點形勝、〇中略今日擇曜宿、始法華三昧、剋十月定星之期、廻萬代不朽之計、于時蒙霧開、愛日暖、可謂天地和合、風雨不逆、祖考感應、垂冥助之令、然也、〇中略弟子某歸命稽首敬白、

寛弘二年乙巳十月十九日甲午　左大臣

〔榮花物語十五疑〕そのをりは左大臣〇藤原道長にてぞおはします、此寺の名をば淨妙寺とぞつけられたる、ことゞもはてゝ、殿の御まへをはじめたてまつり、藤氏の殿ばらみな御誦經せさせ給、僧ども祿たまはりてまかりいでぬ、おほかたこの事のみならず、どし比しあつめさせ給へる事かずしらずおほかり、正月より十二月まで、そのとしの中の事ども一事はづれさせたまはず、このをりふしいそぎわたりたる、さるべき僧達、寺々の別當所司をはじめ、よろこびをなしいのりまうす、〇中略あはれなる末の世に、かく佛をつくり、だうをたて、僧をとぶらひ、ちからをかたぶけさせ給、佛法のともし火をかゝげ、人をよろこばせ給て、世のおやとおはします、我御身はひとつにて、三代のみかどの御うしろみせさせ給て、六十よ國六齋日に殺生をとゞめさせ給ふ、よき事をばすゝめ、あしきことをばとゞめさせ給、かゝる程に衆生界つき、衆生の劫つきんよや、この代もつきさせ給はんとみゆ、〇中略世の中にある人、たかきもいやしきも、事とこゝろとあひたがふものなり、うべ木しづかならんと思へど風やまず、子けうせんと思へどおやまたず、一切[illegible]に、どうある物はみな死す、壽命無量なりといへども、かならずつくる期あり、さかりなる物はか[illegible]おとろふ、かうはいする物はわづらひあり、ほうどしてつねなる事なし、あるは昨日さかえて、け

都殿久、散花少僧都院源、律師明肇、引頭慶命、尋光等律師、堂達林懷、莊命等也、任法眼納衆卅人、此中三綱八人、讃衆卅人、梵音衆卅人、錫杖衆卅人、威儀二人、定者二人也、會指圖在別、入禮上達部、右府、内府、前帥、春宮大夫、右衛門督、左衛門督、中宮權大夫、權中納言、藤中納言、勘解由長官、左兵衛督、左大辨、大藏卿、修理大夫、三位中將、宰相中將等也、不來人尹中納言、式部大輔也、内藏頭、冷泉院、花山院、皇太后、中宮、一品宮、有御諷誦、一門男女可然所各此事使、使各祿物、酉時事了、人々還出後、始三昧、以院源僧都令申事由、此前打火可付香者、余〔藤原道長〕取火打白佛言、此願非為現世榮耀、壽命福祿、唯坐此山先考先妣、及奉始昭宣公、諸亡靈、為無上菩提、從今後來之一門人々、為引導極樂也、心中清淨、願釋迦大師、普賢菩薩、自證明給、打火是為用清淨火也、早付為悅、曉付不為恨、祈請打火、不及二度、一度得火、感涙數行、見聞道俗、流涙如雨、付香舉燈明、自寺山進三寶、堂僧時自吹螺、新螺聲未調不快、余作念最始吹螺欲奉三寶、取螺試吹之、螺聲長大也、萬人感悅之、笛會之上達部、春宮大夫、右衛門督、中宮權大夫、左大辨、修理大夫、三位中將、宰相中將等也、別當前大僧正御修、三綱讀役、定別當、堂僧等送房具、寺名觀修付也、式部權大輔願文持來、有祿物、左大辨願文咒願等書、從中宮名香給、使公信朝臣、賜祿物、供養三昧經、作經仰卷初、只手自書、此外法花經一百部、心經百卷供養事了、子時許還來、

【本朝文粹十三】為左大臣〔藤原道長〕供養淨妙寺願文　江匡衡

弟子大日本國左大臣正二位藤原朝臣〔某〕、南白靈山淨土釋迦尊〔寺中〕、昔弱冠著緋之時、從先考大相國〔兼家〕、屢詣木幡墓所、仰三重瞻四纖、古墳纍々、幽遂寂々、佛像不見、只見春花秋月、法音不聞、只聞溪鳥黃猿、當時不覺涙下、竊作斯念、我昔向後至大位、心事相諧者、爭於茲山脚造一堂、修三昧、福助過去、恢弘方來、思以涉歲、不敢語人、爰承累葉之慶、荏苒之思、年三十、極人臣之位、十一年忝王佐之任、皇帝之為舅也、皇后之為父也、榮餘於身、賞過於分、如履虎尾、如攖龍鬚、因錄蹤趁朝庭、雖居私第、發菩提心、凝迴向觀、行住坐臥事三寶、造次顛沛歸一乘、抑撿家譜、萬歲藤之榮、所以卑宗為姓、其理可然、伺者

め、おめのしたをさまれり、神祇をうやまひ、佛法を崇給事むかしにもこえたりけり、かの南山科の大領の跡をば寺になされけり、今の勸修寺これ也、〇中略聖主醍醐寺〇在山科をたてゝ山陵をしめ給事も、この外家のあたりをむつましくゑ給けるゆゑとぞ、彌益の大領は、四品に叙して宮内大輔になりにける、その正しき跡はいまの二所大明神と申是なり、宮道の明神とも申とかや、今の宮道氏はこの大領のすゑにや、まことにめでたかりける御契なり、其跡伽藍となりにければ、延喜の聖代の勅願なるうへに、三條右大臣一堂を建立せられたりける、威風すでになりて、ほどなくかくれ給にければ、朝成朝忠など中御子たち、佛閣の莊嚴をそへて、八月ついたちよりおなじき四日、丞相の御忌日にいたるまで南北の碩才をまねきて、一乘八座の講律をはじめおこなはる、〇中略三公槐門の跡はひさしくたえにたれども、數代藤路の家いまもすたれず、おほよそ天下の要領在して、七辨にくはゝりて、夕郎貫首をへ、八座につらなりて、朝議の開口にあづかる人、おほくは此家よりぞ出給なる、龍作特進はさだまれる前途なり、亞相の大位にいたり給ふ人も代々にきこえ侍り、大織冠の御すゑ、人臣の中にはびこりたまへるうちに、この高藤のおとゞの御ながれひさしく、朝家の要臣たえたまはぬ事をおもふに、蘊祖の忠貞のならひなり、これによりて家門の餘慶も人にすぐれたるなるべし、

〔日本紀略十一〕寛弘二年十月十九日甲午、左大臣〇藤原道長供養木幡淨妙寺三昧堂、准御齋會、今日始三昧、左大臣於佛前、取火打誓言云、若依此功、我子孫相繼可施榮華者、此火一度可付也、一度付之、衆人莫不感歎、

〔御堂關白記〕寛弘二年十月十九日甲午、淨妙寺供養、〇中略辰始著寺、〇中略巳時吉時打鐘、鐘聲如思、此間上達部十人許先來、午時人々來具、未時入堂、大會儀如常無樂、式部彈正著南大門內東西幄座、次諸僧入堂、外記行事、證者覺慶前大僧正、導師前大僧正觀修、咒願大僧都定澄、唄大僧都濟信、前大僧

いまだありやといひ給ふに、侍よしきこえて、やがてむかしの棲へみちびきたてまつりつ、枕さだめしねやのかたにおはしたれば、よろづむかしにかはらず、女君は木丁のかたびらにはたかくれてゐたまへり、○中略かたはらに五六ばかりなる女君の、えもいはずうつくしきぞゐ給へる、たれならんと心えがたくて、いかなる人のなごりにてかととひ給へども、いらへ給事はなくて、いとゞ涙の色はまさり行ば、いとあやしくおぼして、あるじのをとこに、かれはたれにかとたづね給ふに、ひとゝせみえたてまつり給てのち、たゞならずなり給て、いできぬべかなりと申に、このよひとつならぬ御ちぎり、いとあはれにおぼさる、○中略この家あるじは、このこほりの大領宮道の彌益となんいひける、こよひもかりのやどりにたびねし給て、むつごともつきなくに明ぬれば、明日となんちぎりて宮こへかへり給ひぬ、あくる日になりにければ、○中略都より御むかへにまゐれり、八葉の御車に侍二人ばかり雜色などさるべきさまにぞありける、このたびは空だのめにはあらざりけりとはおぼしながら、我身のほどをおぼし志りて、行すゑいかならんとあやふき心ちし給へども、むなしくかへし給べきならねば、みやこへはくれかゝる程をはからひてぞいで給ける、○中略むかへとり給てのちは、かひ〳〵しくもしほのけぶり一すぢになびきて、ことうらにかゝる御心なくてすぐし給ひけり、かくてふたごゝろなくて、年月をおくり給ほどに、うちつゞきをのこ君ふたところいでき給にけり、ありしひと夜のちぎりにいでき給へりし女ぎみは、宇多院の位におはしましける時に入内ありて、皇太后宮胤子と申、皇子いでき給にければ、高藤の公は朝家に又なき權臣にて、内大臣になり給ひにけり、皇子踐祚ありて、延喜の聖の御門○醍醐とぞ申なる、我朝の賢王におはします、帝祖になり給にければ、うせ給てのちは太政大臣正一位を贈せらる、二人のをのこ君と申は、泉の大將定國、三條右大臣定方これ也、いづれも才卿にて、天下におもき人にてなんおはしける、延喜の聖主ことに律令にあきらかに、格式をさだ

〔勧修寺緣起〕閑院贈太政大臣冬嗣のおとゝと申は、大織冠六代の御すゑ、大納言眞楯卿の御孫、右大臣内麻呂の六男にてぞおはしける、その冬嗣の御子に、内舍人良門と申人おはしけり、昔はやむごとなき人も、うひづかさには、内舍人などにも成給けるなるべし、良門の御子に高藤と申おはしけり、わかくいとけなくおはしける、〇中略弱冠におはしけるころ、ちかくつかうまつるをのこどもいざなひて、たかゞりにいで給ぬ、みなみ山科のほとりに狩ゆき給に、空のけしきかきくもり、風吹雨などふりければ、しばしは時雨の山めぐりにやと思に、神さへおどろ〳〵しく、いなびかりのかげむくつけかりければ、〇中略にし山ぎはに人里のみゆるを心ざして、むまにむちうち給ふ、おくゆかしきひがきに葦にてふける門したる家なん有けるに、馬に乗ながらうちいれて、三間ばかりの廊のありけるにおりゐ給ぬ、〇中略あるじいとおどろきて、いそぎ内に歸入て、火ともしとりしつらふ、〇中略日もいたう暮にければ、心ならずよりふしたまひぬ、おくざまなる障子をあけて、とし十四五ばかりにやとみえたる女の、しをん色のふたつぎぬに、こきはかまきたるがあふぎさしかくして、さかづきなどとりてさし置つゝ、うちそばみてゐたれば、その日のと、さだかならねども、かゝる所にあるべしともみえず、いとなさけありてぞおぼされける、〇中略なが月のころなりければ、すがのねのながきよすがら、草の枕におく露のまもまどろみたまはず、行すゑかけてちぎりおきて、夜もあけゆけば、かくてあるべきならねば、はき給へる大刀を、くちせぬかたみにとゞめおきてたち出給ぬ、〇中略鷹の翅だにもかよはず、露のたまづさのたよりもなくて、年月をぞおくり給ける、〇中略かやうにてすぐる程に、むなしく歲のむとせにもなりにけり、〇中略ひとゝせ御ともなりし馬飼のをのこ、〇中略ちかくめしよせて、おりしかりばのあまやどりはおぼゆるやとのたまふに、わすれ侍らぬよし申に、いとうれしくて、御ともの人などおほからぬさまにて、〇中略おはしつきぬ、あるじの男心などひして、いそぎまゐりたれば、あるじ、女君は

條右丞相師輔の公のいへに、攝籙の臣のつきけることは、小野宮どのうせ給ひて、九條殿の嫡子一條攝政伊尹攝籙によりぬ、是は圓融院の外舅にて、右大臣にてあれば、九條殿は攝籙せざりしかば、なにとて肩をならべ競べきものなくて、かくは侍るなり、

〔大鏡裏書〕南圓堂事

安置不空羂索觀音像并四大天王像也、長岡右大臣(内麻呂)殊發大願所奉造也、後閑院贈太政大臣(冬嗣)以弘仁四年造圓堂、所安置尊像也、伏惟故閑院贈太政大臣大閤下、構仁德爲家、哉忠孝爲衣、在朝則周旦之輔君、歸釋則淨名之愛道、先考長岡右大臣殊發大願、敬以奉造不空羂索觀音像、又常歸依妙法蓮華經、尊重至深、竭仰至篤、而尊容功了、假以安置、法門感生、未遑講演、遲疑之間、舟壑忽遷矣、大閤下以爲、尊親莫先於同心、酬往莫先於述志、仍占勝地於伽藍中、建立堂宇於淸淨之刹、遂使八柱圓堂挺玉墀而表麗、八臂之金容、映蓮座而居尊等也、堂之壇ツキケルガ、イタウクヅレケルニ、翁ノイデキテ、此歌ヲウタヒテツカバ、ヨモクヅレジトテ、ウタヒダシタリケル、

フダラクノ南ノキシニダウタテヽ今ゾサカエン北ノフヂナミ、其翁ハ春日ノ明神トゾ申ツタヘタル、其後北家ハナガクサカユナリ、(○又見元亨釋書)

〔神皇正統記(清和)〕藤原の一門、神代より故ありて國主を輔け奉る、(○中略)淡海公(○不比等)の後、參議中衞の大將房前、その子大納言眞楯、その子右大臣内麻呂の三代は、上二代の如く榮えずやありけん、内麻呂の子冬嗣の大臣、(閑院の左大臣といふ、後に贈太政大臣、)藤氏の衰へぬることを歎きて、弘法大師に申し合せて、興福寺に南圓堂を立てヽ祈り申されけり、此時明神役者にまじはりて、補陀洛の南のきしに堂たてヽいまぞ榮えん北のふぢなみ、と詠じ給ひけるとぞ、(○中略)彼の一門の榮えし事、まことに祈請にこえたりと見えたり、

有家者、可不懲前失而防未然哉、

〔文德實錄 一〕嘉祥三年五月辛巳、嵯峨太皇太后崩、　壬午、葬太皇太后于深谷山、遺令薄葬、不營山陵、(〇中略)太皇太后姓橘氏、諱嘉智子、父清友少而沈厚、涉獵書記、身長六尺二寸、眉目如畫、擧止甚都、寶龜八年、高麗國遣使修聘、清友年在弱冠、以良家子、姿儀魁偉、接對遣客、高麗大使獻可大夫史都蒙、見之而器之、問通事舍人山於野上云、彼一少年爲何人乎、野上對、是京洛一白面耳、都蒙明於相法、語野上云、此人毛骨非常、子孫大貴、野上云、請問命之長短、都蒙云、三十二有厄、過此無恙、其後清友娶田口氏女、生后、延曆五年爲內舍人、八年病終於家、時年卅二、驗之果如都蒙之言、后爲人寬和、風容絕異、手過於膝、髮委於地、觀者皆驚、(〇中略)后自明泡幻、篤信佛理、建一仁祠、名檀林寺、遣比丘尼持律者、入住寺家、仁明天皇助其功德、施捨五百戶封、以充供養、后亦與弟右大臣氏公朝臣議、開學舍、名學館院、勸諸子弟誦習經書、朝夕闐闐、時人以比漢鄧皇后、

〔慈慧大師傳〕天慶九年丙午、僕射(〇村上后安子父藤原師輔)於楞嚴院、營法華三昧堂、集衆擧燧而誓曰、若因三昧力、光榮家族、所擧之火不過三、便擊之、火星迸出、不至于再、僕射手以此火點長明燈、于今不滅、乃以此字屬師之法藥矣、

〔愚管抄 三〕九條の右丞相(〇師輔)は、兄の小野宮(〇實頼)どのに先立て、一定うせなんずとさとらせ給ひて、我身こそ短祚にうけたりとも、我子孫に攝籙をば傳へんに、又我子孫を帝の外戚とはなさんと誓ひて、觀音の化身の叡山の慈慧大師と、師檀のちぎりふかくして、横河のみねに楞嚴三昧院といふ寺を立て、九條殿の御存日には、法花堂をまづ作りてとりて、大衆の中にて火打の火をうちて、我此願成就すべくば、三度が中につけとてうたせ給ひけるに、一番に火うちつけて、法花堂の常燈にはつけられたり、いまに消ずと申つたへたり、されぱその御女(〇村上后安子)の腹に、冷泉圓融の兩帝より始て、後冷泉院まで繼體守文の君、內覽攝籙の臣、あざやかにさかり也、(〇中略)さてこの九

〔大鏡七太政大臣道長〕この不比等の大臣の御むすめ二人おはしける、一所は聖武天皇の御はゝ后宮子娘后、〇原作光明皇后、今據一本改、とぞ申ける、今一所の御女は聖武天皇の御女御にて、女御子をぞうみ奉り給へりける、女御子を聖武天皇女帝にすゑ奉り給ひてけり、此女帝をば高野女帝とぞ申て、二度位につかせ給ひたりける、

〔神皇正統記文武〕藤原の内大臣鎌足の子、不比等の大臣、執政の臣にて、律令などもえらび定められき、藤原の氏、この大臣よりいよ〳〵盛になれり、四人の子おはしき、これを四門といふ、一門は武智麻呂の大臣の流れ南家といふ、二門は參議中衛の大將房前のながれ北家といふ、今の執政大臣、およびさるべき藤原の人々はみなこの末なるべし、三門は式部卿宇合のながれ式家といふ、四門は左京大夫麻呂のながれ京家といひしが、はやくたえにけり、南家式家も儒胤にて今に相續すといへども、唯北家のみ繁昌す、房前の大將人にことなる陰德こそおはしけめ、

〔鵞峰文集四十七論〕甲子會紀

淡海公之執政、作律令、垂法於百世、爲兩朝之外戚、開繁榮於一時、分藤浪於四流、

〔大日本史贊藪三〕藤原不比等及子孫傳贊

贊曰、世勞世祿、古之所以延賞也、藤原不比等、極人臣之位、居外祖之貴、謙讓不退、滿而不溢、故能福祚流于子孫、而南北式京、世濟其美、胙之茅土、賜之美諡、朝廷疇庸之典亦至矣、房前受顧命之重、盡匪躬之節、身雖不登顯位、而餘慶延于苗緒、名德相望、袞鉞蟬聯、七世內侍、八葉宰相、未足爲比、盛矣哉、

〔皇朝史略三元明〕外史氏曰、藤原鎌足、佐天智帝、一匡天下、其有功於社稷也大矣、及其子不比等、能幹父蠱、加以外戚之勢、職任台司、位極人臣、厥後子孫家戚里、而世鼎鉉、遂使威福之柄一歸攝關、此雖由國家待功臣之厚、抑亦任以政事之弊也、觀不比等爲右大臣、則可見外戚之盛始於此、嗚呼有國

●良門 勸修寺家祖 ― 高藤 ― 定方 ― 朝忠
　　　　　　　　　　　　　　├ 朝頼 ― 爲輔 甘露寺祖 ― 宣孝 ― 隆光 ― 隆方 ― 爲房 ― 爲隆
　　　　　　　　　　　　　　│　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└ 顯隆 葉室祖
　　　　　　　　　　　　　　├ 朝成
　　　　　　　　　　　　　　├ 仁善子 醍醐女御
　　　　　　　　　　　　　　├ 能子 醍醐女御
　　　　　　　　　　　　　　└ 和香子 醍醐女御
　　　　　　　　　　├ 定國
　　　　　　　　　　└ 胤子 宇多皇后醍醐母

光房 ― 經房 ― 定經 ― 資經 ― 經俊 勸修寺祖 ― 俊定 ― 定資 ― 經顯 ― 經重 ― 經豐
　　　　　　　　　　　└ 資通 万里小路祖 ― 宣房 ― 藤房 ― 季房 ― 仲房 ― 嗣房

時房 ― 冬房 ― 賢房 ― 秀房 ― 惟房
　　　　　　　　　├ 榮子 後奈良皇后正親町母
　　　　　　　　　│　└ 房子 正親町典侍
　　　　　　　　　└ 女子 正親町典侍

經成 ― 教秀 ― 政顯 ― 尚顯 ― 尹豐 ― 晴右 ― 晴豐 ― 光豐
　　　　　　　│　　　　　　　　　　　　　└ 晴子 贈太上天皇誠仁親王妃後陽成母
　　　　　　　├ 房子 後土御門典侍
　　　　　　　└ 藤子 後柏原宮人後奈良母

眞夏 日野祖
濱雄
家宗
弘蔭
繁時
輔道
有國
資業
實綱
有信
實光
資長
兼光
資實
家光
賴資
經光
資宣
俊光
資名
時光
女子 後光嚴宮人
資康
重光
康子 後圓融宮人 後小松準母
資敎
有光
資子 實資國女 後小松宮人 稱光母
資國
盛光
(資子) 女 爲資敎養
兼仲
光業
兼綱
仲光
兼宣
仲子 後光嚴典侍 後圓融母

- 公季 閑院祖
  - 實成
    - 公成
      - 實季
        - 公實
        - (茂子)爲能信養女
        - 茨子 堀河女御鳥羽母
    - 義子 一條女御
  - 實行
    - 公教
      - 實房
        - 公房
          - 實親
            - 公親
              - 實重
                - 公茂
                  - 實忠
                    - 公忠
              - 房子 後深草御匣殿
                - 實冬
                  - 公冬
              - 女子 後二條御匣殿
                - 嚴子 後圓融宮人後小松母
          - 有子 後堀河皇后
          - 女子 後嵯峨御匣殿
        - 公宣 姉小路祖
          - 實尚
            - 公朝
        - 公氏 正親町三條祖
        - 公時
      - 實國 滋野井祖
        - 公清 河鰭祖
          - 實蔭
            - 公貫
              - 實躬
                - 公秀
                  - 實繼
                    - 公豐
                  - 秀子 光嚴宮人崇光後光嚴母
                - 實廉
        - 公佐
          - 實直
            - 公仲
              - 公廉
                - (廉子)爲公賢養女
      - 琮子 後白河女御
  - 通季 西園寺祖
    - 公通
      - 實宗
        - 公經
          - 實氏
            - 公相
              - 實兼
                - 公衡
                  - 實衡
                    - 公宗
                - 鏱子 伏見中宮後伏見准母
                - 寧子 後伏見女御光嚴光明母
              - 嬉子 後嵯峨中宮後深草母
                - 實俊
                  - 公永
          - 實俊 橋本祖
          - 實有 清水谷祖
            - 公子 後深草中宮龜山母
            - 相子 後深草宮人
            - 瑛子 龜山宮人
            - 實俊
          - 實雄
            - 公雄 小倉祖
            - 嬉子 龜山中宮
            - 禧子 後醍醐中宮
            - 英子 伏見宮人
          - 女子 後嵯峨宮人
          - 實基
            - 公守
              - 實泰
                - 公賢
                  - 廉子 實公廉女後醍醐宮人後村上母
                - 守子 後醍醐宮人
                - 女子 崇光女御
            - 佶子 龜山皇后後宇多母
            - 祿子 龜山宮人
              - 實明 正親町祖
                - 公蔭
                  - 忠季
            - 愔子 後深草宮人伏見母
              - 實子 實實明女花園宮人
              - 女子 伏見宮人
              - 女子 光嚴宮人
            - 季子 伏見宮人花園母
            - 實子 後醍醐宮人
            - 公孝
              - 實孝
                - (實子)爲公守養女
                - 女子 後伏見宮人
                - 女子 後伏見宮人
              - 忻子 後二條中宮
              - 女子 花園宮人
  - 實能 德大寺祖
    - 公能
      - 實定
        - 公繼
      - 忻子 後白河中宮
      - (多子)爲賴長養女
    - (育子)爲忠通養女
  - 璋子 白河猶子鳥羽中宮崇德後白河母
    - 女子 鳥羽宮人

佳珠子 清和女御
溫子 宇多中宮
穩子 醍醐皇后朱雀村上母
師氏
師尹
爲光
公季 閑院祖系在別
安子 村上皇后冷泉圓融母
登子 村上尙侍
懷子 冷泉女御
濟時
芳子 村上女御
道兼
道綱
道長
超子 冷泉皇后三條母
詮子 圓融皇后一條母
綏子 三條尙侍
齊信
忯子 花山女御
通任
娀子 三條皇后小一條母
定子 一條皇后
原子 三條女御
尊子 一條女御
兼隆
賴通
敎通
賴宗
顯信
能信
長家
彰子 一條中宮後一條後朱雀母
姸子 三條中宮
威子 後一條皇后
嬉子 後朱雀皇后後冷泉母
寛子 小一條女御
呈子 實伊通女近衛中宮
育子 實實能女二條中宮六條母
師實
嫄子 實敦康親王女後朱雀中宮
寛子 後冷泉皇后
信長
生子 後朱雀女御
歓子 後冷泉皇后
俊家
女子 小一條女御
延子 後朱雀女御
昭子 後三條女御
(能長)爲能信養子
能長 養子
茂子 實公成女後三條女御白河母
師通
家忠 花山院祖
經實 大炊御門祖
忠敎
賢子 實源顯房女白河中宮堀河母
宗俊 中御門祖
基賴 持明院祖
長忠
道子 白河女御
忠實
經宗
懿子 爲源有仁養女後白河女御二條母
忠通
賴長
泰子 初名勳子鳥羽皇后
賴實
師長
多子 實公能女近衛皇后

基經
時平
仲平
忠平
頼子 清和女御
敦忠
褒子 宇多尚侍
實頼
師輔
敦敏
頼忠
齊敏
慶子 朱雀女御
述子 村上女御
實資 養子
伊尹
兼通
兼家
佐理
公任
遵子 圓融皇后
諟子 花山女御
懷平
(實資)爲實頼養子
資平 養子
義孝
義懷
懷子 冷泉皇后 花山母
顯光
朝光
媓子 圓融皇后
道隆
定頼
(資平)爲實資養子
行成
重家
元子 一條女御
延子 小一條女御
朝經
姚子 花山女御
女子 圓融女御
道頼
伊周
隆家
經輔
信隆
基實 近衛祖
兼實 九條祖
聖子 崇德中宮
師信
信清
殖子 高倉典侍 後鳥羽母
基通
良經
任子 後鳥羽中宮
經忠
家實
道家
立子 順德中宮 仲恭母
信輔
兼經
兼平 鷹司祖
長子 後堀河中宮 四條准母
教實
良實 二條祖
實經 一條祖
竴子 後堀河中宮 四條母

後ニ至リテハ、外戚ノ權モ漸ク昔時ノ若クナラズシテ、錄スルニ足ルモノナシ、故ニ多ク闕如ニ從フ、

- ●藤原鎌足
  - 不比等
    - 武智麻呂
      - 豊成
      - 仲麻呂
      - 巨勢麻呂
        - 黒麻呂—春継—良尚—菅根—元方—祐姫 村上更衣
        - 貞嗣—高仁—保蔭—道明—尹文—永頼
      - 女子 聖武夫人
      - 能通—實範—季綱—友實—能兼—範季
        - 範茂
        - 重子 後鳥羽宮人 順德母
    - 房前
      - 鳥養—小黒麻呂—上子 桓武宮人
      - 永手—曹子 光仁夫人
      - 眞楯—内麻呂
        - 冬嗣
          - 長良
            - 高子 清和皇后 陽成母
            - (基經)爲良房養子
          - 良房
            - ●基經 養子 系在別
            - 明子 文德皇后 清和母
          - 良相
            - 多可幾子 文德御女
            - 多美子 清和女御
          - ●良門 勧修寺家祖 系在別
          - 順子 仁明皇后 文德母
          - 古子 文德女御
        - ●眞夏 日野祖 系在別
        - 緒夏 嵯峨夫人
      - 清河
      - 魚名—末茂—總繼
        - 眞道—連茂—輔忠—時朝
        - 澤子 仁明女御 光孝母
          - 賴任—隆經—顯季
            - 長實—顯盛
              - 得子 鳥羽皇后 近衛母
            - 家保—家成—隆季 四條祖
      - 女子 聖武夫人
    - 宇合
      - 廣嗣
      - 良繼—乙牟漏 桓武皇后 平城嵯峨母
      - 清成—種繼
        - 仲成
        - 藥子 平城尚侍
      - 百川
        - 緒嗣
        - 旅子 桓武皇后 淳和母
        - 帶子 平城皇后
    - 麻呂
    - 宮子娘 文武皇后 聖武母
    - 安宿媛 聖武皇后 孝謙母
  - 氷上娘 天武夫人
  - 耳面刀自 弘文宮人

〔讀史餘論 一〕六十三代冷泉より、圓融花山一條三條後一條後朱雀後冷泉、凡八代百三年の間は、外戚權を専にす、三變

〔日本外史 一〕外史氏曰、王權之移於武門、始於平氏、成於源氏、而基之者藤原氏也、（中略）其擅政始於文德云、然余謂、藤原氏驕專、其來久矣、非獨始於文德時也、鎌足助天智、効力王室、其子不比等、爲四朝元老、文武聖武並娶其女、而孝謙其外孫女也、而皆淫縱、惠美押勝嬖於孝謙、殆危國家、實不比等孫、則其家法可知也、其後光仁桓武仁明獨不出於藤原氏、而自平城以下至於文德、又皆其出、文德外祖左大臣冬嗣、爲不比等四世孫、冬嗣之子良房、又納女文德、生清和、文德欲立長子惟喬、而憚良房、遂立清和、則藤原氏之威、懾人主非一日、又可知也、清和生九歲卽位、良房以外祖攝政、其子基經、廢陽成、立光孝、關白萬機、攝關之號始此、基經二子時平忠平、忠平攝政於朱雀之朝、與其二子實賴師輔並列三公、於是乎有天慶之亂、冷泉二弟爲平守平、村上欲立爲平、爲冷泉儲貳、而實賴等以其非藤原氏出沮之、而立守平、是爲圓融、於是乎有安和之變、師輔三子、曰伊尹兼通兼家、兼家三子、曰道隆道兼道長、皆兄弟爭政、伊尹女生花山、兼家女生一條、故兼家令道兼賺花山遜位、而以一條代之、是其最甚者也、後一條而下三帝、皆道長女所生、是其最極寵榮者也、道長二子賴通敎通、相繼執政、而賴通生師實、師實生忠實、忠實疎其長子忠通、而愛少子賴長、於是乎有保元之禍、忠通三子、基實基房兼實、基實生基通、基房生師家、兼實生良經、更執朝政於源平之際、其論議可觀者、獨有兼實、他充位而已、其後一姓分爲五派、更爲攝關、而其進退皆不復關天下事、不足錄也、總之良房而下、奕葉秉鈞、大抵務營私門、不以國家休戚經心、而當其爭權、父子兄弟且不相保、奔競從諛、擧朝成風、宜乎大亂之基於是、而其終與王室俱衰共頽、徒存空名、不可不哀邪、

○按ズルニ、藤原氏ノ常ニ帝室ノ外戚タルコト、數十代千年以上ニ涉レリ、故ニ其本宗支屬ノ相關聯セルモノ遽ニ認メ易カラズ、故ニ今略系ヲ造リ、以テ讀者ニ便ス、然レドモ鎌倉幕府以

一太政大臣伊尹のおとゞは、贈皇后宮懷子（〇冷泉后）の父、花山院の御祖父、

一太政大臣兼家の大臣は、皇太后詮子（〇圓融后）幷贈后（〇冷泉后超子）の父、一條天皇幷三條天皇の御祖父、

一太政大臣道長のおとゞは、太皇太后宮彰子（〇上東門院一條后）皇太后宮（〇三條后妍子）中宮（〇後一條后威子）尚侍（嬉子〇後朱雀后）はるのみやの御息所の御父、當代（〇後一條）幷春宮（〇後朱雀）の御祖父におはします、こゝらの御中に后三人ならびすゑて見たてまつらせ給ふ事は、入道殿（〇道長）より外にきこえさせ給はざめり、

〔大日本史七十四后妃四〕蓋後世立后、必出藤原氏門、他姓不得與焉、輔佐幼冲、秉持鈞衡、外戚之權日重、而宮闈之寵益隆、

〔鵞峰文集四十七論〕甲子會紀

竊聞姬周之興、有任姒之助、劉漢之衰、有王莽之簒、然則皇家之外戚、不可不擇焉、鎌足以誅蘇氏功、其威名冠百僚、淡海公彌揚家聲、仁明皇后者、藤公冬嗣之娘、生文德、所謂五條后是也、文德又納良房公之娘為皇后、所謂染殿后是也、文德崩、而清和幼弱、良房以外祖之權攝政、任太政大臣、所謂忠仁公是也、清和又聘良房姪女以為后、所謂二條后是也、基經者、后之兄也、且養於忠仁公、而嗣其家、威望赫赫、所謂昭宣公是也、世祿世官之貴、雖源信源融之懿親、不能比肩、況於其餘廷臣乎、故廢陽成立光孝之柄在其手、關白之號始於此、雖不及伊尹放大甲之訓、然何劣霍光廢昌邑立病己之大事哉、光孝雖欲歷其權、而未能果、延及宇多、當此時菅丞相起自微賤、文才拔羣、度量超人、頻被選擧、遂拜三公、與時平同輔佐醍醐、藤菅勢不兩立、辛酉之革命、唯有善耀之先見、然菅公不悟、果有宰府之謫、嗚呼命也、時平獨專、民具瞻焉、天子幼冲恭己、上皇唯念佛薙髮、藤氏之威權、過於王室、忠平繼時平之塵、諸子皆顯、朝廷安靜、延喜之政、式為後世之軌範、朱雀之世、東有將門之亂、西有純友之寇、所謂天道虧盈之戒可不愼乎、村上天暦之政、後世雖有慕之者、自我見之、則有疵纇也、延喜以來、倭歌之風日盛、而文學月衰矣、王室漸弱、而攝家彌强矣、可謂本朝之一變也、

累世外戚

〔大鏡太政大臣道長七〕藤氏の御ありさま、たぐひなくめでたし、おなじことのやうなれど、又つゞきを申べきなり、后宮御おや、みかどのおほぢとなり給へるたぐひをこそはわかし申さめとて、

一　内大臣鎌足のおとゞの御女二所、やがてみな天武天皇にたてまつり給へり、をとこ女みこたちおはしませど、みかどとうぐうたゝせ給はざめり、

一　贈太政大臣不比等のおとゞの御女二所、ひとりの御女は、文武天皇の時の女御、〇宮子娘みこむまれ給へり、それを聖武天皇と申、御母をば宮子娘〇原作光明皇后、今據一本改と申き、いまひとりの御女〇安宿媛はやがて御おひの聖武天皇に奉りて、女みこうみたてまつり給へるを、女帝にたてまつり給へるなり、たかのゝ女帝と申これなり、四十六代にわたり給ふ、これおりたまへるに、又みかどひとり〇淳仁をへだてゝ、又四十八代にかへりゐ給へる也、母后を贈皇后と申す、されば不比等の大臣の御女二人ながら后におはすめれど、高野女帝の御母后は、贈皇后と申たるに、おはしまさぬよに后にゐ給へると見えたり、かるがゆゑに不比等大臣は、光明皇后、又贈皇后宮の御ちゝ聖武天皇幷高野女帝の御おほぢ、或本又高野御母后いき給へるよに后に立給ひて、其御名を光明皇后と申さなり、聖武の御母もおはしましゝよに后となりて、贈后と申給はす、

一　贈太政大臣冬嗣のおとゞは、皇太后順子〇仁明后の御父、文徳天皇の御祖父、

一　太政大臣良房のおとゞは、皇太后宮明子〇文徳后の御父、清和天皇の御おほぢ、

一　贈太政大臣長良のおとゞは、皇太后宮高子〇清和后の御父、陽成院の御祖父、

一　贈太政大臣總繼のおとゞは、贈皇太后宮澤子〇仁明后の父、光孝天皇の御おほぢ、

一　内大臣高藤のおとゞは、皇太后宮胤子〇宇多后の父、醍醐天皇の御おほぢ、

一　太政大臣基經のおとゞは、皇后宮穏子〇醍醐后の父、朱雀天皇幷村上帝の御祖父、

一　右大臣師輔のおとゞは、皇后宮安子〇村上后の父、冷泉院幷圓融院の御祖父、

のけて、前の殿家實の御むすめ、（○長子）いまだをさなくておはするまゐり給ひにき、これはいたく御おぼえもなくて、三條后のみや淨土寺とかや引こもりてわたらせ給ふに、御せうそこのみ日に千たびといふばかりかよひなどして、世中すさまじくおぼされながら、さすがに后だちはありつるを、ちゝの殿攝錄かはり給ひて、今の峰殿（○道家、東山殿と申き、）なりかへり給ひぬれば、又姬君入內ありて、もとの中宮はまかで給ひぬ、めづらしきがまゐり給へばとて、などかかうしもあながちならん、もろこしには三千人などもさぶらひ給ひけるとこそつたへきくにも、しな〴〵しからぬ心ちすれど、いかなるにかあらむ、のちにはおの〳〵院號有て、三條殿の后は安喜門院、中のたびまゐり給ひし殿の女御は、たかつかさの院とぞ聞えける、今めかしくすみなし給へり、御はらからの姬君もかたちよくおはする、ひきこめがたしとて、內侍のかみになしたてまつり給ふ、おなじき三年七月五日關白をば御太郎敎實のおとゞにゆづり聞え給ひて、わが御身は大殿とて、后宮の御おやなれば、思ひなしもやんごとなきに、御子どもさへいみじうさかえ給ふさま、ためしなきほどなり、あづまの將軍、（○賴經）山のざす、（○慈源）三井寺のちやうり、（○行昭）山科寺の別當、（○圓實）仁和寺の御室、（○法助）みなこの殿のきんだちにておはすれば、天下はさながらまじる人少う見えたり、

〔榮花物語三樣々の悅〕このさきやうの大夫どの（○藤原道長）の御うへ、（○道長妻倫子）けしきだちてなやましうおぼしたれば、御讀經御修法のそうどもをばさるものにて、しるしありとみえきこえたるそうたちめしあつめのゝしる、大との（○道長父兼家）よりもみや（○兼家女圓融后詮子）よりも、いかに〳〵とある御せうそこひまなうつゞきたりさていみじうのゝしりつれど、いとたひらかにことにいたうもなやませ給はで、めでたき女ぎみ（○彰子）むまれ給を、かならずさきさきがねといみじきことにおぼしたれば、大とのよりも御よろこびたび〳〵きこえさせ給ふ、よろづいとかひあるおほんならひなり、

なりて、一の上して、如父經宗ならばやと思ひけり、さて卿二位が夫にもよろこびて成にける程に、左大臣の事申けるは、大臣の下登むげにめづらしく、有べき事ならずとおぼしめまして、え申得ざりければ、この人内の事を、殿のむすめ參て後はかなふまじ、是まゐりて後は、殿のむすめ參らん事は、例も道理もはゞかるまじければ、一日この本意とげばやと、卿二位して殿下に申うけゝり、殿は院〇後鳥羽に申あはせられけるを、院はこの主上の御事をばとくおろして、東宮にたてゝおはします、脩明門院〇重子の太子〇順徳を位につけまゐらせたらん時、殿のむすめはまゐらせよかしと思召けり、人これを志らず、申あはせられける時、いさゝかこの趣なぞの有けるやらんとぞ人は推知しける、さてさりて頼實の女を人内立后なぞ思のごとくにしてけり、殿はまちざいはいおぼつかなく、當時はうら山しくもやおぼしけん、〇中略元久三年三月七日、やうもならぬ死にせられにけり、〇中略さて故攝政の女はいよ〳〵みなし子に成て、よろづ事なげなくて、いかにと人も思ひたりけれども、さやうに思召きざして有ける上に、春日大明神も、八幡大菩薩も、かく皇子誕生して、世も治り、又祖父の社稷のみち心に入たるさまは、一定佛神もあはれみてちまぜ給ひけんと、人皆思ひたる方のすゑとほる事もあるべければにや、承元三年三月十日十八にて、東宮〇順徳の御息所にまゐられにけり、ぜうとにて、今の左大將〇道家おとなには遙かにまさりて何事もてゝの殿には過たりとのみ人思ひたれば、めでたくしてまゐらせ給にける也、〇中略承元四年十一月廿五日に受禪の事ありけり、さて東宮のみやす所は、やがて承元五年〇建暦元年正月廿五日立后あり、

〔増鏡三藤衣〕はかなゝふけくれて、〇中略寛喜元年になりぬ、此程は光明峰寺殿〇道家又關白にておはす、この御むすめ〇竴子道家女御〇後堀河になまゐり給ふ、世中めでたくはなやかなり、これよりさきに三條のおほきおとゞ〇公房の姫君〇有子なゐり給ひて、きさきだちあり、いみじう時めき給ひしをおし

ぼしき事、禁中の公事などおこしつゝ、攝籙の初より諸卿に意見めしなどして、記錄所殊に執行ひてあり、文治六年正月三日主上御元服なりければ、正月十一日によき日にて、上東門院の例に叶て、女の入內思の如くとげられにけり、〇中略七年〇建久冬の比、事共出來にけり、攝籙臣九條殿おひこめられ給ひぬ、關白をば近衛殿〇基通にかへしなして、中宮も內裏を出で給ひぬ、これは何事ぞと云に、この賴朝が娘を內へまゐらせんの心ふかくつきてあるを、通親の大納言と云人、この御めのとなりし刑部卿三位を妻にして、子ども生せたるをこゝ置たりしを、さらに我女まゐらせんと云文かよはしけり、〇中略同八年七月十四日に、京へまゐらすべしと聞えし賴朝が女、久く煩ひてうせにけり、京より實全法師と云驗者くだしたりしも、全しるしなし、賴朝それまでもゆゆしく心きゝて、宜く成たりと披露してのぼせけるが、いまだ京へのぼりつかぬ先にうせぬるよし聞えて、後京へいれりければ、祈殺して歸りたるにてをかしかりけり、〇中略賴朝この後京の事ども聞て、猶次の女を具して上らんずと聞えて、建久九年はすぐる程に、〇中略人思ひよらぬほどの事にて、おさましき事出きぬ、同十年〇正治元年正月に、關東將軍〇賴朝所勞不快とかやほのかに云し程に、やがて正月十一日出家して、同十三日にうせにけり、

〔尊卑分脈 源〕賴朝――女子〔掌二女御宣旨〕

〔愚管抄 六〕後京極殿〇藤原良經は、院〇後鳥羽もいみじき關白攝政かなとよに御心にかなひて、よき事どもしたりとひしと、思召てありけり、〇中略攝政は主上〇土御門御元服にあひて、てゝの殿〇兼實の例もちかし、又昔の例共もわざとしたらんやうなれば、むすめおほくもちて、能保が聟になりて、いつしかまうけられたりし嫡女〇立子を、又ならぶ人もなく入內せんとて、院にも申つゝいとなませける程に、卿二位〇兼子ふかく申むねありけり、大相國〇賴實もとの妻の腹にをのこはなくて、女御代とて、女〇麗子をもちたりけるを、入內の心ざしふかく、又太政大臣におしなされて、左大臣にかへり

給者也、三月十四日辛卯、別記、

立后〇多子事

〔台記別記〕久安六年四月廿日丙寅、昨暮無温氣、奉書攝政殿、〇藤原忠通問御經營、又申養女〇藤原伊通女呈子入內之間若有可參、可承其月日之狀、報狀曰、恩之狀喜悅承了、忩々無極、老心惘然、臨期可申歟、今夜入內、世間以爲余必愁憤、然而中心無所愁憤、所然者法皇〇鳥羽上皇〇崇德二代、正妃之外無納代女、堀川院以往、所迎不唯一人、加之生子蒙寵、不依他女有無也、此狀先日奏法皇已了、而人慣近代、推疑結憤、甚無其理、〇中略廿一日丁卯、今夜執政養女自東三條入內、今日自伊通卿家參東三條云々、所々殿上侍臣前驅、執政及大納言三人、中納言三人、參議三人連車云々、〇中略六月廿二日丁卯、今日有立后事、〇中略未刻朝服、此間攝政殿下參入、余〇頼長著右仗、于時皇后、四條東洞院、令敷膝突、使藏人辨範家申殿曰、一昨令申可參入之由、而昨日右大臣行召仰事之由只今承之、若愚臣不可行歟、隨處分欲罷退、報命曰、聞依疾坐宇治之由、仰右大臣而已、被參入早可催行、〇去十日猶自宇治、命之趣頗以奇、報即召大外記師業朝臣未參、召少外記中原師直、問諸司具否、申未具之狀、仰可加催之由、良久範宗來傳勅曰、以女御從三位藤原朝臣爲皇后、任例作宣命、〇余問其名、答曰呈子、即召大內記長光、未參、良久參入、仰曰、以女御從三位藤原朝臣呈子爲皇后、作進宣命、須臾持參宣命草、使範宗奏之、移刻返給、賜大內記令清書、〇下略

〔愚管抄 六〕九條の右大臣〇兼實は、〇中略嫡子の良通大納言大將、〇中略その妹に女子のまた同じく最愛なるおはしけり、今の宜秋門院〇任子なり、それを昔の上東門院の例にかなひ、當今〇後鳥羽御元服ちかきにあり、八にならせ給、十一にて御元服あらんずらんに、是を入內立后せんと思ふ心ふかけれど、法皇〇後白河も御出家の後なれど、丹後〇高階榮子が腹に女王おはす、賴朝も女子あんなり、思さまにもかなはじと思て、又この本意とぐまじくば、たゞ出家をこの中陰のはてにしてんと思て、二心なく祈請せさせられけるに、又あらたにとげんする告の有ければ、思ひのせめて善政とお

禪閤命曰、參院(白川北殿、在大炊御門末)陪門邊、今朝自宇治奉書、其報如此、卽以披見、其狀曰、抑留女御立后、以今人內人立后事、聊不存之由攝政所申也、又皇太后可有院號云々、以女御立后故歟、后位皆闕、先例未聞立后事定被仰下歟、此間南向、讀心經一百八卷、奉春日、修諷誦於三箇寺、(六角堂、皮堂、清水寺、)用三位衣一領、(寺別)成時許人傳、禪閤依召參御前者、頃之禪閤過余家、駐車召余、卽候參上、語曰、依召參御前、上面不正、若心不悅歟、余泣々奏請立后、其狀曰、左大臣性急、事若不成、必欲遁世、齡過七旬、將失成長子息、縱無先例、以老僧故許之、而況堀河院母后例在近乎、卽法皇使朝隆朝臣仰此狀於大相、不仰早可宣下之由、卽幸鳥羽了、疑非唯大相抑留、亦是法皇不進給、然者以不仰可宣下之狀、及不待使歸、早幸鳥羽也、須與朝隆朝臣參、車下申曰、大相報奏曰、自本可宣下者、承饋仰可宣下之由所申也云々、頃先奏院而密所申也、卽朝隆參鳥羽、禪閤曰、事猶不成、今夜欲參御之狀、禪閤卽參高陽院御在所、余歸入陪不動尊御前、更深睡眠、曉鐘動後、大舍人助源雅亮驚之、告頭辨(朝隆)來由、卽服直衣冠、此間禪閤賜書狀被仰、喜悅不可言、及今日不問日之吉凶、可定雜事之由出口遂謁朝隆朝臣語曰、參鳥羽奏大相國復命、勅曰、雖不知先例、入道相國所請甚切、無問舊跡必可許之、參大相府申此日有可宣下之報、詣禪閤申之、被仰可仰左丞相之由、故答只今參內可承勅之由、朝隆密問云、仰本家之外宣上卿歟、答曰、唯仰本家、無仰別左、此間右大將衞伏地喜悅、卽參高陽院(土御門)謁禪閤、于時禪閤奉書奏悅由、(法皇)須臾參內、于時東方漸明、昨今兩日、奉親行靈所祓、(女御立后祈)

禪閤御書

只今朝隆來申立后之由、恐悅趣無極思給者也、凡遣申無方、次第沙汰早々可侍也、今夜上卿や可入侍らん、只勅使許可來侍歟、老後忘却、無治術侍也、抑今度事、老僧身在世侍りん事、今夜許トコソ思給つれ、猶春日大明神新に御口あまりにて、筆も不被執侍也、おさなくおはするに、いとめでたく御坐候けるすくせかなとこそうつくしくおぼえ侍れ、我上いかにうれしくおぼすらん、押量思

札之旨、假事已成、未蒙宣旨、中心奇之、不聞事實重啓、十六日唯告有使宣下之由了、　十六日癸亥、此日禪閤仰曰、女院返報曰、院仰曰、可宣下之由、仰太政大臣了、未聞定日云々、若上旨不快歟、有憚重奏、故申曰、此事若不成、臣(頼長)將逝世、禪閤涕泣、傳聞今日大相府養女(伊通卿女)叙從三位、大相參內奏慶云云、　廿日丁卯、此夜招左衞門尉季頼、(法皇近臣)奏、立后事、以此事遲留、今入內人先立后、臣將逝世之狀、(詞書狀)　廿一日戊辰、三位又參內、入夜季頼復命曰、宣使頭藏人等、奏請、(有手詔)重奏曰、頭藏人以聞、必可許之、可從詔命、若不然、爲天下所咲焉、此程無御報、一昨日使季頼奏法皇之時刻、使泰親占之、其占如此、昨日戊時思食事成否如何、

占、今月廿日丁卯時加戊、大衝臨丁爲用、將天空、中神后玄武、終勝光六合、御行年戊上河魁天后、卦遇伏吟龍戰三交、

推之可相叶歟、期件日以後廿五日戊己壬癸日也、

雅樂頭安倍泰親

久安六年二月廿一日

廿三日庚午、禪閤上書法皇、請立后、其詞甚切、以年過七旬、欲失大臣以上子息、古今未聞、若憐老僧早可下宣旨之狀、辰時余奉書美福門院、其詞甚切、及法皇已廢長小臣歟、報狀曰、法皇曰、使頭藏人奏、若自宇治奏請之時、可觸可宣下之狀於太政大臣者、午刻美福門院賜書、(自筆)傳法皇詔曰、只今自宇治奉書狀、所請甚切、因之早可宣下之由、可仰太政大臣者、啓恐悅之餘、已忘東西之由、又恐悅之由奉書奏、法皇報曰、今朝自宇治、以懇切之詞、兩度奏請、是以早御沙汰之由、仰太政大臣已了、定有沙汰歟、何日可被宣下事哉、復奏曰、今日可被宣下、仍只今參內、可得勅使者、報曰、今日可宣下之狀、將仰太政大臣、抑以宇治書狀遣太政大臣第、仰可宣下之由、而稱無先例不肯下、朕已失計矣、重奏、今夜可被宣下之由、此程無御報、即使盛憲申詔趣於宇治、(副書狀)頃之自宇治賜法皇報書、披見之處、雖有可沙汰之由、仰攝政之文似無一決、　廿四日辛未、午刻、盛憲歸來曰、禪閤愁歎尤甚、已及涕泣、今間出京、申刻清種傳

重使泰親占、其占如此、申歲女、今日申時有聞事、吉凶如何、

占、今日戊午時加申、傳送臨午爲用、將白虎、中河魁玄武、終神后天后、御行年戊上神后天后、封遇勝光、

推之當時雖驚事、御向後可有御慶賀乎、

久安六年二月十一日

雅樂頭安部泰親

十二日己未、早朝問法皇報詔之趣於太政大臣、有直可奏之報、不告詔旨、是以密上書問法皇、法皇手書曰、太政大臣手自勘申先例、(其例下賜、一見返、奏勘氷室院已後、)奏、非執柄人女不立后之狀、朕有所憚、難許彼旨入道相國請、此故以彼所請、達太政大臣、(行)便宜歟、朕聊無抑留之意者、(詔旨巨細、不得具載、)主稅允貞俊曰、法皇近臣顯遠季範等曰、禪閤(忠實○)出京、此事早成矣、以詔趣及近臣所告之狀、申宇治、又示出御可勸進之由於播磨(禪閤愛孩)、丑刻禪閤出御、駐駕門下、(余第、大炊)暫以交語、遲明參(御)高陽院御在所、(土御門第)　十三日庚申、辰刻參高陽院、午刻禪閤上書法皇請命曰、可蒙立后宣旨之狀、(兼日雖申、奏不忌之由、)奏聞、宣下了、將還宇治之由、勸制先例、上東門院、(入內後早立后)冷泉圓融母后、堀河院母后(非執柄人女立后)等也、僞奏依高陽院病參入由、又書同趣使朝隆朝臣(頭左中辨)送大相府曰、朝隆爲大相使持參此書於院、隨許可宣下矣、禪閤曰、美福門院、故法皇所愛也、奉書啓彼院、此事早成、對曰、雖事甚切、恐有諂諛之名、禪閤曰、已爲國母、何有諂諛、則奉書(爲憲親使)請之、(未曾奉書、今日初奉之、)申刻法皇報詔來曰、早可仰下之狀、可示攝政者也、同刻美福門院報書(自筆)到來、曰以此旨奏聞、仰曰、遣自宇治所上之書狀於攝政第、示可宣下之由也、次禪閤上書法皇美福門院、奏恐悅由、余上書美福門院啓聞由、戌刻朝隆朝臣參入申曰、以御書獻大相府、有可奏法皇之報、即奏御書法皇、勅曰、宜依先例、故無可宣下之仰、即詣大相府申此趣、仰曰、可申禪閤矣、禪閤示余曰、朝隆所告之詔旨、與御書不同、尤可傾奇、今夜重奏、非無所憚、不如廻思慮後日復奏、余諾之、禪閤入御宇治、余歸家、(大炊御門)　十四日辛酉、此日禪閤賜書曰、昨日恐悅由奏兩院、院無報詔、女院(美福)返報曰、吾亦甚悅云々、報

略いまは小一條いかでつくりたてんとおぼしめす、御門もいまは御はいとげたる御心ちせさせ給らんかし、かくよろづにめでたき御ありさまなれども、皇后宮にはたゞおぼつかなさをのみこそは、つきせぬことにおぼしめすらめ、同じ御心にやおぼしめしけん内より、

うちはへておぼつかなさをよとゝもにおぼゆくみともなりぬべきかなとありかへしに、

つゆばかりあはれをしらん人もがなおぼつかなさをさてもいかにと、

〔台記〕久安六年二月七日甲寅、此日立后事奏院、(鳥羽)依有伊通卿女(○近衛皇后呈子)入内之聞也、有可依先例之報詔、又有可取太政大臣(○藤原忠通)處分之文、　八日乙卯、此日立后事請大相國報可奏之狀、入夜問大相國奏否於法皇、報詔曰、是夕太政大臣使範家奏公書狀、報任例可行之由了、以昨日法皇報詔到來、時刻使泰親占成否、其占如此、此事成否如何、

占今月七日甲寅時加酉、天恩臨卯爲用、將六合、中太一勾陳、終勝先青龍、御行年戊上徴明大陰、卦遇聯茹、

推之可相叶乎、期件日以後卅日內、及來三月四月七月節、中是丙丁壬癸日也、

久安六年二月八日　雅樂頭安倍泰親

九日丙辰、此日問法皇許否於大相公、其報狀有重可奏文、不示許否、參院之時問範家、答云、大相公使範家奏封書、上勅曰、宜勘先例行之者、即書其旨送大相府云々、　十日丁巳、入夜與三位(○藤原賴長養女多子)俱參內宿候、上書法皇奏大相公不示詔旨之由、手詔曰、勘例使範家奏之、大相公經營人內事、太以不穩、故余復奏曰、唯庶幾我女御立后、聊無愁恨入內之口矣、入夜勘入內後早立后之例、(上東門院、四條宮、後冷泉后寬子、待賢門院)招範家付之、　十一日戊午、未刻自內退出、入夜有行幸、(○近衛御方違)今夜大相公迎伊通卿女爲子、(本是美福門院養子)即定入內雜事云々、或曰、其入內大相國爲張本、或曰、美福門院爲張本、法皇又許之、詐爲大相爲張本、此日大相公使範家奏余所勘申之例法皇、(加封、)法皇有報書云々、以範家自殿參院之時刻、

る程に大殿の御心、なにごともあさましきまで人の心のうちをくませ給により、しば〳〵参らせ給て、こゝらのみやたちのおはしますに、宣耀殿のかくておはしますいとふびんなることに侍り、はやう此御事をこそせさせたまはめとそうせさせ給へば、うへこゝにもさは思ふを、この殿上のをのこどものむかし物がたりなどおのおのいふをきけば、うぞねりなどのむすめもむかしはきさきにゐけり、いまも中ごろも納言のむすめのきさきにゐたるなんなきなどいふをば、いかゞはすべからんとこそきけとのたまはすれば、ひがごとに候なり、いかでかさらば故大将(〇済時)をこそは贈大臣の宣旨をくださせ給はめとそうせさせ給へば、さべきやうにおこなひ給べしとの給はすれば、うけ給はらせ給て、官におほせごと給はす、さべき神ごとあらん日をはなちて、よろしき日して、小一條の大將それがしの朝臣、贈太政大臣になして、かのはかに宣命よむべしとの給はす、辨うけ給ぬ、四月にところどころのまつりはてゝ、よき日して、かの大將の御はかに勅使ゝだりて、やがて修理大夫そひてものすべくあれば、かの君もいでたちまゐり給よき御子もたまひて、故大將のかゝるかゆき給ふをぞよの人めでたきことに申ける、かの御いもうとの宣耀殿の女御(〇師尹女芳子)村上の先帝のいみじきものに思ひきこえさせ給ければ、女御にてやみ給にき、をとこみやひとりうみ給へりしかども、そのみやかしこき御なかより出給へるとも見え給はず、いみじき志れものにてやませ給ひにける、その小一條のおとゞ(〇師尹)の御むまごにて、この宮のかうおはします事、世にめでたき事に申おもへり、さて四月(〇長和元年)廿八日きさきにゐ給ぬ、(〇娍子)皇后宮と聞えさす、大夫などにはのぞむ人もことになきにや、さやうのけしきやきこしめしけん、故關白殿(〇道隆)のいづもの中納言(〇隆家)なり給ぬ、宮づかさなどさほひのぞむ人なくゝ、物はなやかになどこそなけれ、よろづたゞおなじことなり、これにつけてもあなめでたや、女の御さいはひのたうしには、此宮をこそ志たてまつらめなど、さゝにゝきゝで世には申す、〇中

びゝきこえさせ給へれど、年比にもならせ給ぬ、みやたちもまだおはしまさず宣耀殿こそまづさやうにはおはしまさめ、内侍のかみの御事はおのづから心いかになどさうせさせ給へば、いとけうなき御心也、この世をふさはしからず思ひたまへるなりなどおとゞの給はすれば、さはよき日してこそは宣旨もくださせ給べかなれどさうして、出させ給ではいかにこの御事どもの御ようゐあり、〻に事もそれにさはり日などのべさせ給べき御世の有さまならねば、二月十四日きさきにゐさせ給とて、中宮ときこえさす、いそぎたゝせ給ぬ、その日になりぬれば、つねのことながらいみじ、やむごとなくめでたし、〇中略御とし十九ばかりにぞおはしましける、参らせ給て三四年ばかりにぞなりぬらんかしとぞおしはかりまうす人々あり、大宮(一條后彰子)は十二にてまゐらせ給て、十三にてこそきさきにゐさせ給けれ、されど此御前はすこしおとなびさせ給にけり、〇中略やがて大饗いとうせさせ給べし、大夫には大殿の御はらからのよろづのわにぎみの大納言なり給、おほかたみやづかさなどみなえりなさせ給、かくていとめでたうふたところさしつゞきておはしますを、よのためしにめづらかなることにきこえさす、うちにはいまは宣耀殿の女御の御ことを、いかでかとおぼしめせど、すがやかに殿にはまうさせ給はぬ程に、宣耀殿にはなにともおぼしめしたゝぬ程に、大かたの女房ゐえん〳〵につきて、さと人のおもひのまゝにものをいひおもふは、いかにいかに、おなへに發しますらん、あさましき世中にはべりや、これはさべきことゝはなど、いとさかしがはにとぶらひまゐらする人々などあるを、此ふみをも又かうなん、それかれは申つるなど、かたり申す人を、女御殿はなどか、かうむづかしういふらん、などみいふ人ありとも、かたいでもおれかし、こゝにはよろづ思ひたえて、いまはたゞ後の世の有さまのみこそわりなけれなど、物ゝ　やゝにおはまさるれば、さこそあれ御心のながませ給へれば、物のあはれわりさまをも知らせ給はぬとさかしうきこえさせける、かゝ

史奉親朝臣云、除目淸書可被奉左府歟云云、除目事不奉也、奉親至愚之又至愚也、奉親朝臣參八省不參內、以下臈史令奉仕御裝束、是極冷談事也、敎賴朝臣所申也、○中略 後聞、諸卿候東三條之間、喚使申可參內之由、打手同音咲、其後嘲哢無極、大藏卿執石打召使兩三度云云、狂亂歟、有神咎歟、有天譴歟、可謂至愚者也、　廿八日乙丑、新后以亮爲任朝臣、被仰昨日行事之悅、參內一兩卿相相共參中宮御方、左府卿相數多被候、思昨日事、彌知王道弱、臣威强、○中略 今夜自皇太后宮退出之間、賚平侍車後云、今日候內陪膳、仰云、近可祗候者、仍進候御臺盤下、仰云、昨日立后事、無止思事也、而始自大臣諸卿不參、大將藤原朝臣應召卽參入、行作大事、悅思無極、久在東宮、不知天下、今適登極、可任意也、不然之事愚頑也、有可然之時、可云合雜事之由、可傳仰此事、汝不外漏、又大將不可漏之人也、汝有所見、仍所傳仰也、仰了早起入給者、余戒云、努々不可談妻子、但明日必候陪膳、只可奏恐由也、希有仰事也、　卅日丁卯、右衞門督示送云、依召今朝參內、被仰立后日事、爲公大辱、不爲皇后、上達部冷談不可仰盡者、後日早參行事尤悅思、可傳仰者、且以賚平令仰者、食祿之身、雖背王命、其咎之責、日夕所歎、　五月一日戊辰、參內、○中略 右衞門督云、昨今候御前、被仰云、立后事、右大將應召參入行事、一所悅思、一伊止保之久奈武思、有可憚恐、諸卿不參、猶參執行、可傳仰此由者、奏以恐申之由、亦談云、左大臣等可爲極奇恠也、諸卿同心失朝威、歎思不少、依如此事、命蹔欲保、頗有所思食歟者、申刻退出、

〔榮花物語 十 日蔭の鬘〕世中にはけふあすきさきたゝせ給べしとのみいふは、かんの殿○藤原道長女、三條后妍子、にや、また宣耀殿○藤原濟時女、三條后娍子、にやさも申めり、かゝる程に宣耀殿にうち○三條より、

春がすみ野邊にたつらんと思へどもおぼつかなきをへだてつるかな、ときこえさせ給へればば御かへし、

かすむめるそらのけしきはそれながらわが身ひとつのあらずもあるかな、と聞えさせ給へれば、あはれとおぼしめさる、○中略 內にはかんの殿のきさきにゐさせ給べき御事を、殿○道長にた

參歟、天無二日、土無二主、仍不懼后害耳、予〇實資令申云、從去夜聊有所勞、相扶可參入、已剋以前雖參入也、〇中略參內、未剋一諸卿不參、大外記敎賴朝臣云、南殿御裝束、及所々屛幔皆立、今日事上卿未被仰下之前、裝束使奉仕、左中辨不參、又史奈親朝臣不參、如云々者、泰親朝臣從宅仰遣下﨟史、所令奉仕也、泰親親候左府者也、若有所承歟者、參入由以資平〇懷平子、實資養子令示頭辨、余著仗座、小庭前立屛幔、宜陽殿西壇同曳、小時頭辨出陣云、今日可有立后事、而爲令行其事、昨日差藏人任平、仰遣右大臣許、令奏云、日來有所勞、不可參入、但無承引之人者扶可參入者、次被仰內大臣、被申物忌由、仍所仰下臣也者、此間藏人任平出陣、居頭辨後、似可傳仰宣旨事、依奇怪示之令退、頭辨同指示而已、頭辨云、先可奏參入由者、即參上殿上相替、任平來、綸旨云、所司具乎者、答云、初無所承、何事乎如何云、今朝差內豎令申云、大臣不可被參、今日立后內辨可奉仕、又未剋可有宣命事、早可參入者、答云、內辨事不承、內豎亦仰可參入之由、至今有勅、可召仰之由奏聞了、〇中略其後頭辨仰云、宣耀殿女御可爲皇后之宣命可令作者、余問云、尊中宮爲皇后、以女御可爲中宮歟、只可爲皇后者、問云、御名娍子〇藤原濟時女歟、云然也者、又云、位從五位下者、內記資信參入、仰從五位下藤原娍子可爲皇后之宣命事、但中宮立給之宣命相同歟、亦宣命前々立后時、無相違爲例、狀須先召見前々宣命草、然而內々有所見仍直仰了、可見合由仰敎賴朝臣、予移南座、內記進宣命草、無事誤、見了奉左相府、時剋多移不歸參、若是無申通之人歟、頭辨幷敎賴朝臣同成此疑、相府立后事、頻有妨遏之故也、萬人致怖畏、按察中納言、隆家右衞門督、懷平修理大夫通任等參入、自餘卿相候中宮、(道長女妍子)東三條、左府(道長)同坐云、召使令申諸卿可參內之由、召出卿相前、口々嘲哢罵辱、不可敢云、似無公事、敎賴朝臣彈指、敎賴朝臣云、左府有召、然而寄事左右、暫不參者、行了今日事之後、可參入之由仰之、今夜戌刻、東三條中宮入給內裏、萬人歸此事、忽諸立后事、宣命版數度催後、中務同式部臨晚僅立標、今日事猶以水投巖、是依相府氣色也、〇中略殿上人一人不參、役送五位五六人許歟、其外不見、〇中略見度々例、大床子師子形自內被奉、而左府妨遏、仍本宮令造云々、後日聞、

〔大鏡〕三太政大臣賴忠をとこ君只今按察大納言公任と申す、〇中略かの大納言殿、無心の事一度そのたまへるや、御いもうとの四條の宮〇遵子后にたゝせ給ひて、はじめてうちへ入たまふに、西洞院のぼりにおはしませば、東三條のまへをわたらせ給ふに、大入道殿〇藤原兼家も故女院〇詮子もむねいたくおぼしめしけるに、按察大納言殿は后の御せうとにて、御心ちよくおぼされけるまゝに、御馬をひかへて、この女御〇詮子はいつか后にたち給ふらんと、うち見いれてのたまへりけるを、殿をはじめたてまつりて、其御ぞうやすからずとおぼしけれど、をとこ宮〇一條おはしませば、たけくぞよその人々もやくなくもの給ふかなときゝ給ふ、一條院位につかせ給へば、又女御后にたゝせ給ひて内に入給ふに、この大納言啓のすけにつかうまつり給ふに、出車よりあふぎをさし出して、やゝ物申さんと女房のきこえければ、何事にかとてうちより給へるに、辨内侍かほをさしいだして、御いもうとのすはらの后は、いづくにかおはすると聞えかけたりけるに、先年の事をおもひおかれたるなりけり、みづからだにいかにとおぼえつる事なれば道理なり、なくなりぬる身にこそとおぼえしかとこその給ひけれ、されど人がらよろづによくなり給ひぬれば、ことにふれてすてられ給はず、かのないしのとがなるにてやみにき、

〔小右記〕寛弘九年〇長和元年四月十六日癸丑、入夜資平來云、右衞門督〇藤原懷平、實資弟、云、昨參內候御前、〇三條被仰雜事次云、左大臣〇藤原道長爲我無禮尤甚、此一兩日寢食不例、頗有愁思、必被天責歟、太不安事也者、所被仰之趣、極以多々、爲相府御氣色不宜、其次被仰云、右大將〇藤原實資我方人略云云、召可然之人云合雜事、亦有何事哉者、　十八日乙卯、入夜修理大夫來談雜事、多立后間雜事也、少々事相示了、四條宮立給間記、又々撰出可送之由同示了、事多有鬱氣、　廿六日癸亥、匠作示送云、明日立后事、左相府不可被行、仍今日差藏人、可被仰遣右相府〇藤原顯光者、　廿七日甲子、內豎來云、先式部仰云、大臣三人〇藤原道長、同顯光、同公季、有障不參、巳剋以前可參內者、不知何事、所推量者、若今日立后事歟、憚左相府所不被

しうて、一のみこむまれ給へるむめつぼをおきて、このにようごのゐ給はんを世人いかにかはいひおもふべからんと、人がたきはとらぬてぞよけれなどおぼしつゝすぐし給へば、などてかむめつぼは、いまはとありともかゝりとも、かならずのきさきなり、世もさだめなきに、このにようごのことをこそいそがれめとつねにの給はすれば、うれしうて人しれずおぼしいそぐほどに、ことしもたちぬれば、くちをしう覺しめす、かゝることゞももりきこえて、右のおとゞうちにまゐらせ給ことかたし、にようごの御はらからのきんだちなどもまうでさせ給はず、にようごもこゝろとけたる御けしきもなければ、一ほんのみやは、世にいふことをもりきこゝ給て、さやうに覺したるにこそと、よを心づきなくおぼしきこえさせ給べし、○中略かゝるほどにことしは天元五年になりぬ、三月十一日中ぐうたちたまはんとて、おほきおとゞいそぎさわがせ給、これにつけても、右のおとゞあさましうのみよろづきこしめさるゝほどに、きさきたゝせ給ぬ、いへばおろかにめでたし、おほきおとゞの思給ふもことわりなり、みかどのおほんこゝろおきてを、世人もめもあやにあさましきことに申おもへり、一のみこおはするにようごをおきながら、かくみこもおはせぬにようごの、きさきにゐ給ひぬることやすからぬことに世人なやみ申て、すばらのきさきとぞつけたてまつりける、されどかくてゐさせ給ぬるのみこそめでたけれ、東三條のおとゞいのちあらばとは覺しながら、なほわかずあさましきことに覺しめす、

〔大日本史贊藪三〕藤原實頼及子弟藤原在衡傳贊

贊曰、戚畹盛則宗室衰、權臣重則朝廷輕、此必然之勢也、兼通忘父子之讎、與兼家相軋、欲使賴忠爲關白、故奪源兼明之左相、處閑散之地、而授大將於濟時、若探囊中物、此與盧從史得照義節度使何異、但從史猶有中使傳旨、而兼通則直授之、而無所顧、主上拱默、聽其所爲、群從子弟皆以性命博美官、世方以榮達貴顯爲賢、而材能操履無所稱道、○中略奔競之風、傷化壞俗、一至於此、可勝歎哉、

しきこえ給ふもむかしの御なさけなさをおもひ給にこそはと、ことわりにおぼさる、東三でうのにようごはむめつぼにすませ給ふ、おほんありさまあいぎやうづきけぢかくうつくしうおはします、○中略そのふゆくわんばくどの丶ひめぎみうちにまゐらせたてまつり給、よの一のところにおはしませば、いみじうめでたきうちに、との丶おほんありさまなどもおくふかくこ丶ろにく丶おはします、むめつぼは、おほかたのおほん心ありさまけぢかくをかしくおはしますに、このたびのにようごは、すこし御おぼえのほどやいかにとみえきこゆれど、たゞいまの御ありさまにうへもまたがはせ給へば、おろかならずおもひきこえさせ給なるべし、いかにしたることにか丶か丶るほどにむめつぼれいならずなやましげにおぼしたれば、ち丶おとゞいかにいかにとおそろしうおもひきこえさせ給へば、たゞにもおはしまさぬなりけり、よもわづらはしければ、一二月はまたのばせ給へど、さりとてかくれあるべきことならねば、三月にてそうせさせ給に、みかどいみじううれしうおぼしめさるべし、○中略くわんばくどの、いとよの中をむすぼゝれ、すゞろはしくおぼさるべし、さばれとありともかゝりとも、わがあらばにようごをばきさきにもすゑたてまつりてんと、おぼしめすべし、はかなくて天元三年かのえたつのとしになりぬ、○中略六月一日とらのときに、えもいはぬをとこみこ、○一條たひらかにいさゝかなやませ給ふほどもなくうまれさせ給へり、○中略東三でうのみかどのわたりには、としごろだにたはやすく人わたらざりつるに、ゐんのみやたちのみところ、○三條及爲尊敦通二親王おはしますだにおろかならぬとの丶うちを、まいて今上一宮のおはしませば、いとことわりにて、いづれの人もよろづにまゐりさわぐ、○中略かくてくわんばくどの丶にようごさぶらはせ給へど、おほんはらみのけなし、おとゞいみじうくちをしう覺しなげくべし、○中略みかどおほきおとゞの御こゝろにたがはせ給はじとおぼしめして、このにようごきさきにすゑたてまつらんとの給はすれど、おとゞなまつゝま

なりけり、御心のまゝにだにあらば、いみじきつくし九國までもとおぼせど、あやまちなければなりけり。○中略かゝるほどに堀河殿の御こゝちいとゞおもりて、たのもしげなきよしを世にまうす、さいつころうちに參らせ給て、東三條の大將をばなくなし奉り給てき、いまひとたびとて内にまゐらせ給ひて、よろづをそうしかためていでさせ給にけり、なに事ならんとゆかしけれどまだおとなし、かくて十一月四日准三宮のくらゐにならせ給ぬ、おなじ月八日うせ給ぬ、おほんとし五十三なり、忠義公と御いみなをきこゆ、あはれにいみじ、かくいくばくもおはしまさゞりけるに、東三でうの大なごんをあさましうなげかせたてまつり給ひけるも心うし、をのゝみやのよりたゞのおとゞに、よはゆづるべきよし一日そうし給しかば、そのまゝにとみかど覺しめして、おなじ月の十一日くわんばくのせんじかうぶり給て、よの中みなうつりぬ、あさましくおもはずなることどもによに申思へり。○中略かくて年もかはりぬ、○貞元三年左のおとゞ○賴忠の御さまいと〳〵めでたし、おほひめぎみ○遵子をいかで内にまゐらせたてまつらんとおぼす、はかなくてつき日もすぎてふゆになりぬ、ねんがうかはりて天元元年といふ、十月二日除目ありて、くわんばくどの太じやう大じんにならせ給ぬ。○中略東三でうどのゝつみもおはせぬを、かくあやしくておはする心えぬことなれば、おほきおとゞたび〳〵そうし給て、やがてこのたびう大じんになり給ぬ、これはたゞぶつ、しんのし給ふとおぼさるべし、内には中ぐうのおはしませば、たれもおぼしはゞかれど、ほりかはのおほん心おきてのあさましく心づきなさに、東三でうのおとど中ぐうにおぢたてまつり給はず、中姫君まゐらせたてまつり給、おほとのゝひめぎみをこそ、まづとおぼしつれど、ほりかはどのゝおほんこゝろをおぼしはゞかるほどに、みぎのおとゞはつゝましからず覺したちてまゐらせたてまつり給、ことわりにみえたり、まゐらせ給へるかひありて、たゞいまはいとときにおはします、中ぐうをかくつゝましからずないがしろにもてな

ど〇超子ときこゆるは、東三でうの大しやうの御むめぎみなり、こぞのなつよりたゞにもおはしまさゞりけるを、二三月ばかりにわたらせ給ひて、その御いのりなどいみじうせさせ給を、大とのきこしめして、東三でうの大しやうは、ゐん〇冷泉のにようご、をとこみこうみ給へ、よの中かまへんとこそい八なれなどきゝにくきことをさへのたまはせければ、むつかしうわづらはしとおぼしながら、さりとてまかせきこえさすべきことならねば、いみじういのりさわがせ給ひけり、さてやよひばかりにいとめでたきをとこみこ〇三條むまれ給へり、ゐんいとものぐるほしきおほん心も、れいざまにおはしますときは、いとうれしきことにおぼしめして、よろづにしりわつかひきこえさせ給けり、おほきおとゞきこしめして、わはれめでたしや、東三でうの大しやうは、ゐんの二宮えたてまつりて、おもひたゞれけしきおもふこそめでたけれなど、いとをこがましげにおぼしの給を、大しやうどのは、おやしうわやにくなる心つい給へる人にこそとやすからずぞおぼしける、〇中略かゝるほどに大とのおぼすやう、よの中もはかなきに、いかでこのうだいじん〇頼忠いますこしなしわげて、わがかはりのそくをもゆづらんと覺したちて、たゞいまのさだいじん兼明のおとゞときこゆる、えんぎのみかど〇醍醐のおほん十六のみやはおはします、それおほんこゝちなやましげなりときこしめして、もとのみこになしたてまつらせたまひつ、さてさだいじんには、小野宮のよりたゞのおとゞをなしたてまつり給ひつ、〇中略みかどはほりかはの院におはしましければ、われはなやましとてさとにおはしますに、わりなくて參らせ給て、この東三條の大將のふのうを奏し給て、かゝる人はよにありては、おほやけの御ために大事いでき侍りなむ、かやうの事はいましめたることそよけれなどそうし給て、貞元二年十月十一日大納言の大將をとり奉り給て、治部卿になしたてまつり給つ、無官の定になしきこえまほしけれど、さすがにその事とさしたることのなければ、おぼしわまりてかくまでもなし聞え給へる

〔榮花物語花山二〕せつしやうには、〇中略九でうどの〇藤原師輔の御二郎、ない大じんかねみちのおとゞなり給ぬ、かゝるほどにねんがうかはりて、てんえん元年といふ、よろづにめでたくておはします、にようご〇兼通女、圓融后媓子、いつしかきさきにとおぼしいそぎたり、〇中略かくてそのとしの七月一日、せつしやうどのゝにようご、きさきにゐさせ給ぬ、中宮と聞えさす、〇中略御わりさまいみじうめでたう、世はかうぞありまほしきとみえさせ給ふ、みかど〇圓融一はんのみや〇資子内親王、圓融同母妹の御かた、中宮の御かたとかよひありかせ給、うちわたりすべていまめかし、はりかはどのとぞこのせつしやうどのをばきこえさする、いまはくわんばくどのとぞきこえさすめる、〇中略この東三でうどの、〇兼家、兼通弟くわんばくどのとの御中ことにあしきを、よの人あやしきことに思ひきこえたり、いかでこの大しやうをなくなしてばやとぞ御心にかゝりて大とのはおぼしけれど、いかでか東三でうどのは、なほいかでこの中ひめぎみ〇詮子をうちにまゐらせん、いひもていけばなにのおそろしかるべきぞと覺しとりて、人しれずおぼしいそぎけり、されどそのけしき人に見せさかせ給はず、このほりかはどのと東三でうどのとは、只閑院をぞへだてたりければ、東三でうにまゐるむまくるまをば、大とのにはそれまゐりたり、かれまうづなりといふことをさこしめして、それかれこそついそうするものはあなれなど、くせんぐしうの給はすれば、いとおそろしきことにて、よるなどぞしのびてまゐる人もありける、さるべきさぶらひしんの御もよほしにや、東三でうどのはいかでけふあすもこの女君まゐらせんなどおぼしたつと、おのづから大とのきこしめして、いとめざましきことなり、中ぐうのかくておはしますに、この大なごんのかくおもひかくるもあさましうこそ、いかによろづにわれをのろふらんなどいふことをさへ、つねにの給はせければ、大なごんどのいとわづらはしくおぼしたえて、さりともおのづからとおぼしけり、はかなく年もかはりぬ、貞元元年ひのえねのとしといふ、かのれいせんゐんのによう

謹飭

〔日本後紀 十二 桓武〕延暦廿三年四月辛未、中納言從三位和朝臣家麻呂薨、贈從二位大納言、家麻呂贈正一位高野朝臣弟嗣之孫也、其先百濟國人也、爲人木訥無才學、以帝外戚特被擢進、蕃人入相府自此始焉、可謂人位有餘、天爵不足、其雖居貴職、逢故人者、不嫌其賤、握手相語、見者感焉、時年七十一、

〔大日本史贊藪 一〕藤原良房及子孫傳贊

贊曰、良房相業雖不多見、而文德帝期以蕭何、則規摸徽猷、必有可觀者、〇中略而奕世昌熾、一門不知其幾后、外戚之盛、實基于此矣、仲平不禳星變、而欲子姪之久職、忠平能全交誼、而反乃兄〇時平之所爲、皆有長者之風焉、

〔大鏡 三 太政大臣實賴〕これたゞひらのおとゞの一男におはします、小野宮のおとゞと申き、御母寛平法皇〇宇多の御むすめ〇傾子大臣位にて二十七年天下執行、攝政關白し給ひて、二十年ばかりやおはしけん、〇中略大かた何事にも有職に、御心うるはしくおはします事は、よのつねの人の本にぞひかれさせ給ふ、をのゝみやの有おもてには、御もとゞりはなちていでさせ給ふ事なかりき、そのゆゑはいなりのすぎのあらはにみゆれば、明神御覽ずらんに、いかでかなめげにてはいでんとの給はせていみじくつゝしませ給ふに、おのづからおぼしわすれぬるをりは、御袖をかづかせ給ひてぞおどろきさわがせ給へる、このおとゞの御女〇述子ぞ、女御にたゝせ給ひにき、村上の御時にや、たしかにおぼえ侍らず、

〔續世繼 七 紫のゆかり〕太政大臣雅實のおとゞと申しは、中宮〇白河后賢子のひとつ御はらからにて、六條の右のおとゞ〇源顯房の太郎におはしき、〇中略こがのおほきおとゞと申き、いと御身のざえなどはおはせざりしかど、よにおもくおもはれたる人にぞおはせし、ちゝおとゞわがまゝなる御心にて、ひが〳〵しきこともしたまひけるにも、このおとゞまゐり給ければとゞまりたまひけり、白河院もはゞからせ給へりけるとこそきこえ侍りしか、

ぶがくのもとひ、ぎよれうしやくはの翫物、おそらくはていけつも仙洞も、これにはすぎじとぞみえし、

〔愚管抄六〕九條殿〇藤原兼實は、攝籙本意にかなひて物もなかりし、興福寺南圓堂の御本尊不空羂索等、丈六佛像、大伽藍、東大寺とはなほ並べて作られけり、同〇建久五年九月廿二日興福寺供養也、甚雨なりけり、前の日殿は春日詣せられけり、中納言以下騎馬と聞えき、御堂〇道長の御時より始まれる例にや、あまりなる事なりと人思ひけり、

〔增鏡六おりゐる雲〕春すぎ夏たけ年さりとしきたれば、康元元年にもなりにけり、大きおとゞ〇藤原實氏の第二の御むすめ、〇後深草后、公子女御にまゐり給ふ、女院〇後嵯峨后、姞子も御はらからなれば、すぐし給へる程なれど、〇公子時二年二十四、天皇ヨリ長ズルコト十一ナリ、かゝるためしはあまた侍るべし、〇中略かくてことしはくれぬ、正月〇正嘉元年いつしか后にたち給ふ、たゞ人の御むすめの、かく后國母にてたちつゞきさぶらひ給へるためしまれにやあらむ、おとゞの御さかえなめり、御子ふたり大臣にておはすきんすけ、きんもち、とて、大將にも左右にならびておはせしぞかし、これもためしいとあまたは聞えぬ事なるべし、我御身太政大臣にて、ふたりの大將を引ぐして、最勝講なりしかとよ、まゐり給へりし御いきほひのめでたさはめづらかなる程にぞ侍りし、后國母の御おや、御門の御おほぢにて、まことにそのうつはものにたりぬと見え給へり、むかし後鳥羽院にさぶらひししもつけの君は、さる世のふるき人にて、おとゞに聞えける、

藤なみのかげさしならぶみかさ山ひとにこえたる木ずゑとぞみる、かへしおとゞ、

おもひやれみかさの山のふぢの花さきならべつゝみつるこゝろを、かゝる御家のさかえを、

身づからもやむごとなしとおぼしつゞけてよみ給ひける、

はるさめはよもの草木をわかねどもしげきめぐみは我身なりけり、

我〇平清盛身のゑいぐわをきはむるのみならず、一門共に繁昌して、ちやく子しげもり内大臣の左大將、次男むねもり中納言の右大將、三なん知盛三位中將、ちやくそんこれ盛四位の少將、すべて一門の公卿十六人、殿上人三十よ人、諸國のしゆ領ゑふ諸司つがふ六十よ人なり、世には又人なくぞ見えられける、昔ならの御門の御時、神龜五年朝家に中衛の大將をはじめおかる、大同四年に中衛を近衛にあらためられしより此かた、兄弟左右にあひならぶ事わづかに三四か度なり、文德天皇の御時は、左によしふさ右大臣の左大將、右に良相大納言の右大將、これは閑院の左大臣冬嗣の御子なり、しゆしやく院の御宇には、左にさねより小野宮殿、右にもろすけ九條殿、貞信公〇平忠の御子なり、後冷泉院の御時は、左にのりみち大二條殿、右によりむねほり川殿、御堂の關白〇道長の御子なり、二條の院の御宇には、左にもとふさ松殿、右にかねざね月の輪殿、法性寺殿〇忠道の御子なり、是みな攝ろくの臣の御子そく、凡人に取ては其れいなし、殿上のまじはりをだにきらはれし人〇平忠盛の子孫にて、禁色雜袍をゆり、綾羅きんしうを身にまとひ、大臣の大將になりて、兄弟左右にあひならぶ事、末代とは云ながら、ふしぎなりし事共なり、其外御むすめ八人おはしき、皆とりどりにさいはひ給へり、〇中略一人〇德子は后にたゝせ給ふ、廿二にて皇子〇安德御誕生有て、皇太子にたち、位につかせ給ひしかば、院がうかうぶらせ給ひて、建禮門院とぞ申ける、入道相國の御娘なるうへ、天下の國母にてましませば、とかう申におよばれず、一人は六條の攝政殿〇藤原基實の北のまん所にならせ給ふ、是は高倉の院御ざいゐの御時、御母代とて准三后のせんじをかうぶらせ給ひて、白川殿とておもき人にてぞましましける、〇中略日本あきつしまは纔に六十六かこく、平家知行の國卅よか國、すでに半國にこえたり、其外莊園田畠いくらといふかずをしらず、きらぢうまんして、だう上花のごとし、けんきぐんじゆして、門前市をなす、やうしうの金、けいしうの玉、ごきんのあや、しよくかうの錦、七ちん万はう、一つとしてかけたる事なし、歌だう

漢ノ才智ヲキハメサセ給フノミニアラズ天下ノマツリゴトヲヨク〳〵キヽオカセ給テ、御即位ノ後、サマ〴〵ノ善政ヲオコナハレケルナカニ、諸國ノ重任ノ功トイフコトナガク停止セラレケル時、興福寺ノ南圓堂ヲツクレリケルニ、國ノ重任ヲ關白大二條殿〇藤原教通マゲテ申サセ給ケルニ、コトカタクシテタビ〳〵ニナリケレバ、主上逆鱗ニオヨビテオホセラレテ云ク、關白攝政ノオモクオソロシキ事ハ帝ノ外祖ナドナルコソアレ、我ハナニトオモハムゾトテ、御ヒゲヲイカラカシテ事ノ外ニ御ムツカリアリケレバ、殿座ヲタチテイデサセ給フトテ、大聲ヲハナチテノタマハク、藤氏ノ上達部ミナマカリタテ、春日大明神ノ御威ハケフウセハテヌルゾトイヒカケテイデ給ヒケレバ、氏ノ公卿、マコトニモ一人モノコラズミナ座ヲタチテ殿ノ御トモニイデケレバ、事ガラオビタヾシクゾアリケル、

〔古事談〕一王道后宮 寛治比、行幸〇堀河出御之時、左府〇源俊房已下列立、右府〇六條源顯房南殿巽角石ニ尻ヲ懸テ被坐テ、宿老ノ大臣帝祖ナドハ、カヤウニテ居タルゾト被云ケリ、

〔愚管抄〕五 清盛が子共重盛宗盛左右大將になりにけり、我身は太政大臣にて、重盛は内大臣左大將にて在ける程に、〇中略承安元年十二月十四日、この平大相國入道〇清盛が女〇高倉后徳子を入内せさせて、やがて同し二年二月十日立后、中宮とてあるに、皇子を生ませまゐらせて、いよ〳〵帝の外祖にて世を皆思ふさまにとりてんと思ひけるにや、様々の祈どもして有けるに、先は母の二位〇平時子日吉に百日いのりけれどもしるしもなかりければ、入道云やう、われが祈るしるしなし、今見給へ、祈出でんと云て、安藝國嚴島をことに信仰したりける上、はや船をつくりて、月詣を福原より初て祈りける、六十日ばかりの後御懷姙と聞えて、治承二年十一月十二日、六波羅にて皇子誕生、思ひの如くありて、思さまに入道帝の外祖になりにけり、

〔平家物語〕一我身のえいぐわの事

て、佛師ども百人ばかりなみゐてつかうまつる、おなじくはこれこそめでたけれとみゆ、御だうのうへを見あぐれば、たくみども二三百人のぼりゐて、大きなる木どもには、ふときをつけて、こゑをあはせておさへ、さとひきあげさわぐ、御堂の內をみれば、佛の御座つくりかゞやかす、いたじきを見れば、とくさむくの葉などして、四五百人手ごとになみゐてみがきのごふ、ひはだぶき、かべぬり、かはらつくりなどかずをつくしたり、又としおいたる翁法師などの、二尺ばかりの石を心にまかせてきりめとゝのふるもあり、池をほるとて、四五百人おりたち、山を疊むとて、五六百人のぼりたち、又おほぢのかたを見れば、ちから車にえもいはぬおほきどもにつなをつけて、さけびのゝしりひきもてのぼる、かも河のかたをみれば、いかだといふ物にくれ材木をいれて、さをさして心ちよげにうたひのゝしりてもてのぼるめり、大津むめづの心ちするも、にしはひんがしといふ事はこれ成けりとみゆ、礎石といふばかりの石を、はかなきいかだにのせてゐてくれぞしづまず、すべていろ〳〵樣々いひつくしまねびやるべきかたなし、かの須達長者の祇園精舍つくりけんもかくやありけんと見ゆるを、冬のむろなゝの風おの〳〵こと〴〵なり、かゝる御いきほひにそへ、入道せさせ給てのちは、いとゞまさらせ給へりとみえさせ給にも、なはなべてならざりける御ありさまかなと、ちかうみたてまつる人はたうとみ、とほきひとははるかにをがみまゐらす、いまはこの御堂の木草ともならんとおもへる人のみおほかり、

〔古事談 六亭宅諸道〕宇治殿〇藤原賴通 京極殿〇賴通子師實 ヲ御車後ニノセテ御行アリケルニ、二條東洞院二町ヲ築籠テ、大二條殿〇賴通弟敎通 被造作ケルヲ御覽ジテ、京中ノ大路ヲモカクハ籠作ニヤト令申給ケレバ、打任テハ不可有事ナレドモ、我等ガセム事ヲバ誰カハ可咎ヤト被仰ケリ、仍高陽院ヲバ四町ヲ築籠テ令作給云々、

〔續古事談 一王道后宮〕後三條院ハ、春宮ニテ廿五年マデオハシマシテ、心シヅカニ御學問アリテ、和

らにもいはずきこえさせんかたなし、〇中略この御なやみは寛仁三年三月十七日よりなやませ給て、廿七日に出家せさせ給へれば、日ながくおぼさるゝまゝに、さるべき僧たち殿ばらなど、御物がたりせさせ給て、御こゝちこよなうおはします、いまはたゞいつしかこの東に御堂たてゝ、すゞしくすむわざせん、となむつくるべき、かくなんたつべきなどいふ御心だくみいみじ、かくて日ごろになるまゝに御心ちさはやぎて、すこし心のどかにならせ給、〇中略かくて世をそむかせ給へれど、御いそぎはうら吹風にや、いまは御心ちれいざまになりはてさせ給ぬれば、みだうの事覺しいそがせ給、攝政どのくに〴〵までさるべきおはやけごとをばある物にて、この御堂のことをさきとつかうまつるべきおはせ事の給、殿の御まへも、このたびいきたるはことごとならず、この願のかなふべきなめりとの給はせて、こと〴〵なく御堂におはします、ほう四町をこめて、おほがきにしてかはらふきたり、さま〴〵におぼしおきていそがせ給ふに、夜のあくるも心もとなく、日のくるゝも口をしうおぼされて、夜もすがらはやまをたゝむべきやう、池をほるべきさま、木をうゑなめさせ、さるべき御だう〳〵かた〴〵さま〴〵つくりつゞけ、御佛はなべてのさまにやはおはします、丈六の金色の佛をかずもしらずつくりなめて、そなたをば北南どめだうをわけて道をとゝのへつくらせ給、とりのなくも久しくおぼされ、よひ曉のおこなひもおこたらず、やすきいも御とのごもらず、たゞこの御堂の事をのみふかく御心にしませ給へり、日々におほくの人々まゐりまかでたちこむ、さるべき殿ばらをはじめたてまつりて、みやみやの御ふ御莊どもより、一日に五六百人の夫を奉るに、かずおほかるをばかしこきことにおぼしたち、國々のかみども、地子官物はおそなはれども、たゞいまは此御堂の夫やく材木檜皮瓦とおほくまゐらすることを、我も〳〵ときはひつかうまつる、おほかたちかきもとほきもまゐりこみて、しな〴〵かた〴〵わたり〳〵につかうまつる、ある所をみれば御佛つかうまつると

でたゞ滅罪生善の法どもをおこなはせ、念佛のこゑをたえずさかばやとの給はすれど、それはつゆ此殿ばらきこしめしいれず、いかでとくはいとげてんとの給はするを、大宮なほいましばし春宮の御よをまたせ給へくきこえさせ給を、心うくあはおぼしめさぬ也けりと恨申させ給へば、いかに〳〵とのみ覺しなげかせ給、御物のけども、いとおどろ〳〵しう申すもれいの事なり、おほやけわたくしのだいじ、たゞいま是よりほかはなに事かはと見えたり、○中略との〻御前さらにいのちをしうも侍らず、さき〳〵世をまつりごち給人々おほかる中に、おのればかりさるべき事どもしたるためしはなくなん、內東宮おはします、三所の后、院の女御おはす、たゞいま內大臣○賴通にて攝政つかまつる、又大納言○教通にて左大將かけたり、又大納言○賴宗あるは左衞門督○能信にて別當かけたり、五をのこ○長家の位ぞいとわさけれど、三位中將にてはべり、みなこれつぎ〳〵おほやけの御うしろみつかうまつるに、○中略ことなるなむなくてすぎ侍ぬ、おのが先祖の貞信公○忠平いみじうおはしたる人、我太政大臣にて、太郎小野宮の左大臣○實賴二郎九條師輔の右大臣、四郎○師氏五郎○師尹などは大納言にてさしならび給へりけれど、后たち給はずなりにけり、ちかうは九條のおとゞ○師輔わが御身は右大臣にてやみ給へれど、おほ后○師輔女、村上后安子、の御はらの冷泉院圓融院さしつゞきおはしまし、十一人のをのこゞの中に、五人太政大臣になり給へり、いまにいみじき御さいはひなりかし、されば后三ところたち給へるためしは、この國にはまたなき事也など、よにめでたき御ありさまをいひつゞけさせ給、ことし五十四なり、しぬともさらにはぢあるまじ、いまゆくすゑもかばかりの事はありがたくやあらん、あかぬ事は尙侍○嬉子東宮にたてまつり、皇太后宮の一品宮○後朱雀后禎子內親王の御事、このふたことをせずなりぬるこそあれど、大宮おはしまし、攝政のおとゞいますかれば、さりともとし給事ありなんといひつづけさせ給、宮々殿ばらせきとめがたうおぼされ、僧俗もなみだとゞめがたし、うへ○道長妻倫子はさ

も、おぼしけることのさまなれば、いとあはれにことわりなり、げにかくもてはやし聞え給にこそはよろづのかざりもまさらせ給ふめれ、千代もあくまじく御行すゑのかずならぬこゝちにだにおもひつゞけらる、宮のおまへきこしめすや、つかうまつれりど我ぼめし給て、宮の御てゝにてまろわろからず、まろがむすめにて宮わろくおはしまさず、はゝもまたさいはひ有とおもひてわらひ給ふめり、よいをとこはもたりかしとおもひたんめりと、たはぶれきこえ給もこよなき御ゑひのまぎれなりとみゆ、さることもなければさわがしき心ちはゑながら、めでたくのみきゝゐさせ給、とのゝうへきゝにくしとおぼすにや、わたらせ給ひぬるけしきなれば、おくりせずとて、はゝうらみ給はん物ぞとて、いそぎて御丁のうちをとほらせ給、宮なめしとおぼすらん、おやのあればこそ子もかしこけれとうちつぶやき給ふを、人々わらひきこゆ、〇又見二榮花物語一

〔小右記〕寛仁二年十月十六日乙巳、今日以二女御藤原威子一立二皇后一〇後一條之日也、前太政大臣(道長)第三娘、一家立二三后一、未二曾有一、〇中略太閤〇藤原道長招二呼下官一云、欲レ讀二和歌一、必可レ和者、答云、何不レ奉レ和乎、又云、誇たる歌になむ有る、但非二宿構一者、此世乎ば我世と所思望月乃虧たる事も無と思へば、余申云、御歌優美也、無レ方二酬答一、満座只可レ誦二此御歌一、元稹菊詩、居易不レ和、深賞歎、終日吟詠、諸卿響應、余言數度吟詠、太閤和解、殊不レ責レ和、夜深月明、扶レ醉各々退出、

〔榮花物語〕十五疑殿の御前、〇中略御心ちれいならずおぼさるれば、人々も夢さわがしく聞えさするに、わが御心ちにもよろしからずおぼさるれば、このたびこそはかぎりなめれど、物心ぼそくおぼさる、殿ばら宮々などにもいとおそろしうおぼしなげくに、いとゞまことにおどろ〳〵しき御心ちのさまなり、かゝればよろづにいみじき御いのりどもさま〴〵なり、〇中略内〇後一條、東宮〇後朱雀より大宮〇一條后彰子皇太后宮〇三條后妍子中宮〇後一條后威子小一條院〇敦明又攝政殿〇頼通内の大い殿〇教通などみな御修法せさせ給程の御ありさま思ひやるべし、〇中略とのゝ御まへ、いまはいのりはせ

二具、又有二枕筥等屏風二十帖几帳二十基一云云、希有之希有事也、文集雜興詩云、小人知レ所レ好、懷レ寶四方來、奸邪得レ藉レ手、從レ此幸門開、古賢遺言仰以可レ信、當時大閤德、如二帝王一、世之興亡只在二我心一、與二吳王一其志相同、　廿六日丁巳、入レ夜宰相重來云、參二大殿一、〈〇藤原道長〉被レ坐二上東門第一、被レ行二寢殿御裝束幷立石引水等事一、攝政已下被二參入一、主人昇降容易、甚以輕々、卿相追從、寸步不レ忘、家子達令レ曳二大石一、夫或五百人、或三四百人、然間京中往還人不レ靜、追執令レ曳、不レ示レ堪、男女亂二入下人宅一、放二取戶幷支木屋壓木敷板等一、以二敷板戶等一敷二石下一、爲二轉料一、日來東西南北曳レ石之愁、京內取レ煩、愁苦無レ極、又止二養田之水一、强曳二入家中一、嗟乎嗟乎、不レ念二稻苗死一歟、可レ詠二文集雜興詩一、尤爲二鑒誡一、

〔紫式部日記〕御いかは霜月のついたちの日、れいの人々のさうぞくたてゝのぼりつどひたる、御前の有さま繪にかきたる物わはせの所にぞいとようにて侍し、〈〇中略〉こよひ少輔のめのといろゆるさる、こゝしきさまうちしたり、みや〈〇後一條〉いだき奉れり、御丁のうちにてとのゝうへ〈〇藤原道長妻倫子〉いだきうつし奉り給て、ゐざりいでさせ給へり、ほかげの御さまけはひことにめでたし、あかいろのからの御ぞ、ぢすりの御裳、うるはしくさうぞき給へるも、かたじけなくもわはれにみゆ、大みや〈〇道長女一條后彰子〉えびぞめの五への御ぞ、すはうの御こうちきたてまつれり、殿もちひはまゐり給ふ、〈〇中略〉ことはつるまゝに、宰相のきみにいひわはせて、かくれなんどするに、東おもてにとのゝきんだち宰相中將〈〇兼隆〉など入てさわがしければ、ふたりみちやうのうしろにゐかくれたるを、とりはらはせ給て、ふたりながらとらへすゑさせ給へり、わかひとつづゝつかうまつれ、さらばゆるさむとの給はす、いとはぢておそろしければきこゆ、

いかにいかゞかぞへやるべき八千とせのあまり久しき君がみよをば、あはれつかうまつれるかなと、二たびばかりずせさせ給て、いととうのたまはせたる、

蘆たづの齡しあればきみがよの千歲の數もかぞへとりてん、さばかりゑひ給へる御こゝちに

りよりむねやませ給ひて、わざとにはおはしまさねど、いかゞおぼしめしけん、俄に廿一日のひつじの時ばかりに〇中略御出家し給へれど、なほ又おなじ五月八日、准三宮の位にならせ給ひて、年官年爵えさせ給ふ、三人后關白左大臣内大臣〇敎通あまたの納言〇賴宗、能信、長家等、の御父、御門東宮の御おほぢにておはします、世をさりたもたせ給ふ事、かくて三十一年ばかりにやならせ給ひぬらむ、今のとしは六十におはしませば、かんのとの〇後朱雀后嬉子の御さんののちに御賀あるべしとこそ人申めれ、いかにまたさま〴〵おはしまさせてめでたく侍らんずらん、おほかた又よになき事なり、大臣の御むすめ三人后にてさしならべ奉らせ給ふ事、あさましくけうのことなり、もろこしにはむかし三千人の后おはしけれど、それはすぢもたづねで、たゞかたちありときこゆるを、となりの國までえらびいだして、その中にやうきひごときは、あまりときめきすぎてかなしき事あり、王昭君はえびすの王に給りて、胡のくにの人となり上陽人は楊貴妃にそばめられて、御門に見えたてまつらで、春のゆき秋のすぐる事をもしらずして、十六にてまゐりて、六十まであありけり、かやうなれば三千人のかひなし、わが國にはならの后こそおはすべけれど、代々に四人ぞたて給ふ、この入道殿下のひとつかどばかりこそは、太皇太后宮〇一條后彰子皇太后宮〇三條后姸子中宮〇後一條后威子三所出おはしたれ、まことにけうの御さいはいなり、皇太后宮〇三條后娍子藤原濟時女、一人のみこそはすぢわかれ給へりといへども、それも貞信公〇忠平の御すゑにおはしませば、それよそ人とおもひ申べき事かは、さかあればたゞよのなかは、このとのゝ御ひかりならずといふ事なし、

〔小右記〕寛仁二年六月廿日辛亥、土御門殿〇藤原道長第寢殿以二一間一、始レ自二南庇一至二北庇一之間也、管子高欄相加、配二諸受領一、不レ論二新舊一、撰二勤事者一、令レ營云々、未レ聞之事也、造作過差萬二倍往跡一、又伊豫守賴光、家中雜具皆悉獻レ之、厨子屏風唐櫛筥具韓櫃銀器鋪設管絃具劒其外物不レ可レ記盡一、厨子納二種々物一、辛櫃等納二夏冬御裝束一、件唐櫛筥等具皆有二

す、○中略この殿は北の政所二所おはします、この宮々の御母うへと申は、土御門左大臣雅信のおとゞの御むすめにおはします、其雅信のおとゞは、亭子のみかど○宇多の御子、一品式部卿宮敦實のみこの御子、左大臣時平のおとゞの御むすめばらにむまさせ給へりし御子なり、其まさのぶのおとゞのむすめを、今の入道殿下の北政所と申なり、そのはらに女君四ところ、をとこ君二ところぞおはします、其御ありさまは只今のことなれば、みな人見たてまつり給ふらめど、ことばつづけ申さんと也、○中略女の御さいはひあるは、この北の政所さはめさせ給へり、御門東宮の御母后とならせ給ふ、あるは御おやよの一の人にておはするには、御子も生れ給はねども后にゐさせ給ふめり、女の御さいはひは、后こそきはめておはします御事なめれ、されどそれはいと所せげにおはします、いみじきとみの事あれどおぼろげならねば、えうごかせ給はず、ぢんやゐぬれば、女房たはやすくこゝろにまかせてもえつかまつらず、かやうにところせげなり、たゞ人と申せど、御門東宮の御むばにて、三后になずらふ御位にて、千戸のみふえさせ給ふ、年官年爵を給はらせ給ふ、からの御車にていとたはやすく御ありきなども、中々御身やすらかにて、ゆかしうおぼしめしける事は、よの中のもののみ、なにの法會やなどあるをりは、御車にても御さじきにてもかならず御らんずめり、うち東宮みや〳〵とわかれ〳〵こそをしくておはしませど、いづかたにもわたりまゐらせ給ひてはさしならびおはします、たゞ今三人后東宮女御關白左大臣の御母、みかど東宮はたゞ申さず、おほかたよのおやにて二所ながらさるべき權者にこそおはしますらめ、○中略殿の御まへは卅より關白せさせ給ひて、一條院三條院の御時よをまつりごち、わが御心のまゝにておはしましゝに、又當代○後一條九にて位につかせ給ひにしかば、御とし五十一にて攝政せさせ給ふとし、わが御身は太政大臣にならせ給ひ、攝政をばいまの關白おとゞ○頼通にゆづり奉らせ給ひて、御年五十四にならせ給ふ、寛仁三年つちのとのひつじ三月十八日、夜中ばか

朝臣源頼光、贈馬三十匹、以煩賓客、世傳以爲宴集盛事、前是所無也、夫頼光時爲東宮大進、其職小也、其祿薄也、而有馬三十匹何哉、使當時公卿有慮天下國家者、可不加之意乎、蓋公卿大夫以恬熙爲務、嬉衣甘食、漁色謳歌、而捕盜討賊之事、委之武臣、世官者曰是賤事耳、而不省地方兵馬之富漸歸其手、他日平治建久之勢、隱然已胚胎於此、而舉朝莫能察、徒以資誇談、爲果無人故也、則其所謂才者可知已、兼家子道長、更極專擅、家出三后、身爲兩朝外祖、嘗詠歌、其意曰、此世吾之世也、嗚呼何知二百年後、代有此世者、更有其人哉、

〔古事談王道后宮〕三條院御時、入道殿○藤原道長參給、被申請事等不許、辭縁令退出給、以敦儀親王喚之、親王於小板敷乍立告勅喚之由、入道殿歸參云、如此之生宮達、立板敷上召執柄人乎云々、經任卿說云、不歸參給、罵宮達直出給云々、

〔大鏡五太政大臣伊尹〕このおとゞ、一條攝政と申さ、○中略御門○冷泉の御をぢ、東宮○花山の御おほぢにて攝政せさせ給へば、世の中はわが御心にかなはぬ事なく、くわさことのほかにこのませ給ひて、大饗せさせ給ふに、寢殿のうら板のかべすこしくろかりければ、俄に御らんじつけて、とかくみちの國の紙をつぶとおさせ給へりけるが、なか〳〵白くきよらに侍ける、おもひよるべき事かはな、御家は今の世尊寺ぞかし、御ぞうの氏寺にておかれたるを、かやうのついでにはたちいりて見給へれば、ただその紙のおされて侍るこそ、むかしにあへる心ちしてあはれに見給へれ、かくやうの御さかえを御らんじおぎて、御年五十にだにたらでうせ給へるあたらしさは、ちゝ大臣師輔○藤原にもおとらせ給はずとこそよ人をしみたてまつりしか、

〔大鏡七太政大臣道長〕太政大臣道長おとゞ、法興院おとゞ○藤原兼家の御五男、御母從四位上行攝津守右京大夫藤原中正朝臣女なり、この朝臣は從二位中納言山蔭の卿七男なり、この道長大臣は、今入道殿下これにおはします、一條院三條院のをぢ、當代○後一條東宮○後朱雀の御おほぢにておはしま

讀ミ給ヘル也ケリ、○又見二古今和歌集一

〔大鏡五太政大臣兼家〕太政大臣兼家のおとゞ、これ九條殿○藤原師輔の三郎君、東三條のおとゞにおはします、御母一條攝政○伊尹におなじ、冷泉院圓融院の御をぢ、一條院三條院の御おほぢ、東三條女院○圓融后詮子贈皇后宮○冷泉后超子の御父、公卿にて廿年、攝政にて五年、太政大臣にて二年、よをしらせ給ひ、さかえて五年ぞおはします、○中略うちにまゐらせ給ふにはさらなり、牛車にて北陣までいらせ給へば、それよりうちはなにばかりの程ならねど、ひもときていらせ給ふとぞ、されどそれはさてもあり、すまひのをり、東宮のおはしませば、ふたところの御衣になにをもおしやりて、御あせとりばかりにてさぶらはせ給ひけることぞ、よにたぐひなくやむごとなき事なれ、すゑには北方もおはしまさゞりければ、をとこずみにて、東三條殿の西對を淸涼殿づくりに御しつらひよりはじめて、すまさせ給ふなどぞあまりなる事に人申めりし、なほたゞ人にならせ給ひぬれば、御果報のおよばせ給はぬにや、さやうの御みもちに、ひさしくはたもたせ給はぬともさだめ申めりき、

〔古事談一王道后宮〕一條幼主御時、夏公事日、公卿等徘二徊露臺一、披二南殿北戸一帶二涼風一、其時大入道○藤原兼家爲二攝政一、放レ祗奉レ抱二主上一、自二披戸一令二指出一給、諸卿皆敬候云々、又云、私ニ云、此儀アマリ也云々、

〔日本紀略一九條〕永延二年九月十六日庚子、攝政○藤原兼家新二造二條京極第一、有二興宴事一、左右大臣○源雅信、藤原爲光、以下多以集會、池頭釣臺盃酌數廻、春宮大進源頼光牽二貢駒卅匹一、大臣以下預レ之有レ差、會者誦二詩句一、唱二歌曲一、河陽遊女等群集、給二絹卅匹米六十石一云云、今日之遊、希代之事也、

〔日本政記一八條〕頼襄曰、一條帝亦有レ志二於治一也、曰、吾得二人才一、一事不レ讓二延喜○醍醐天暦一○村上、然吾觀二其所レ謂人才一、如二四納言一、世所二盛稱一、雖レ棟二達朝章一、大抵容二媚權門一者耳、○中略朝廷之政、爲二權家所一レ擅、使二天子於邑鬱結一、而袖手傍觀、無下敢一二言匡二救之一、可レ謂二之朝廷有一レ人矣乎、攝政兼家之落二二條京極第一也、大宴二

孰愛兄與夫焉、於是皇后不知所問之意趣、輙對曰、愛兄也、則誂皇后曰、夫以色事人、色衰寵緩、今天下多佳人、各遞進求寵、豈永得恃色乎、是以冀吾登鴻祚、必與汝照臨天下、則高枕而永終百年、亦不快乎、願爲我弑天皇、仍取匕首授皇后曰、是匕首佩于裀中、當天皇寢、迺刺頸而弑焉、皇后於是心裏兢戰、不知所如、然視兄王之志、不可得諫、故受其匕首、獨無所藏以著衣中、遂有諫兄之情歟、

〔日本後紀 嵯峨 二十〕弘仁元年九月丁未、繋右兵衛督從四位上藤原朝臣仲成於右兵衛府、詔曰、天皇詔旨良麻止勅御命乎親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、尙侍正三位藤原朝臣〈○中略〉子其兄仲成、己我妹乃不能所波乎不敎正之氏、還恃其勢氏、以虛詐事、先帝乃親王夫人乎凌侮氏、棄家乘路氏東西辛苦世之牟、如此罪惡不可數盡、理乃任爾勘賜比罪奈閉賜布閉久有止毛、所思行有依氏、輕賜比宥賜比氏、藥子者位官解氏、自宮中退賜比、仲成者佐渡國權守退止宣天皇詔旨乎衆聞食止宣、〈○中略〉戊申、是夜令左近衛將監紀朝臣清成、右近衛將曹住吉朝臣豐繼等射殺仲成於禁所、仲成者、參議正三位宇合之曾孫、贈太政大臣正一位種繼之長子也、性狠抗使酒、或昭穆无次、忤於心不憚摯賊、及乎女弟藥子尊朝假威益驕、王公宿德、多見凌辱、民部大輔笠朝臣江人之女適仲成也、其姨頗有色、仲成見而悅之、嫌其不和、欲以力强、女脫奔佐味親王、仲成入王及母夫人家認之、麁言逆行、甚失人道、及遭害、僉以爲自取之矣、　庚戌、是日廢皇太子〈○高岳親王〉立中務卿〈諱淳和〉爲皇太弟、

〔今昔物語 二十二〕閑院冬嗣右大臣幷子息語第五

今昔、〈○中略〉此ノ大臣〈○藤原良房〉ハ、心ノ俸テ廣ク、身ノ才賢クテ、萬ノ事人ニ勝レテゾ御ケル、又和歌ヲゾ微妙ク讀給ケル、御娘ヲバ文德天皇ノ御后〈○明子〉ニテ、水尾ノ天皇〈○淸和〉ノ御母也、染殿ノ后ト申ス此也、其ノ后ノ御前ニ微妙キ櫻ノ花ヲ瓶ニ指テ被置タリケルヲ、父ノ太政大臣見給テ讀給ケル也、

年フレバヨハヒハオイヌシカハアレド花ヲシミレバモノオモヒモナシ、ト后ヲ花ニ譬ヘテ

爲之儲貳、以悦三條帝之意、及一旦升遐、陵土未乾、又奪其位、以立其外孫、(○後朱雀)天子拱默、以受其制、陵替至是、可勝歎哉、

〔榮花物語八初花〕との(○藤原道長)わかみや(○後一條)いだきたてまつらせ給て、御前(○一條)にゐてたてまつらせ給、御こゑいとわかし、辨の宰相の君御はかしとりて參り給、もやのなかの戸のにしに、とのゝうへのおはしますかたにぞ若宮はおはしまさせ給、うへの見たてまつらせ給御心ち、おもひやりきこえさすべし、是につけても一の御子(○敦康)のむまれ給へりしをり、とみにもみずきかざりしはや、猶すぢなし、かゝるすぢにはたゞたのもしうおもふ人のあらむこそ、かひ〴〵しうあるべかめれ、いみじき國王の御位なりとも、うしろみもてはやす人なからんは、わりなかるべきわざかなどおぼさるゝよりも、ゆくすゑまでの御ありさまどものおぼしつゞけられて、まづ人しれずあはれに覺しめされけり、

〔愚管抄二土御門〕此君は、(○中略)御母方、(○承明門院在子)うちたえあゝはなる法師(○能圓)の孫、位に即かせ給ふ事はなしとぞ世に沙汰しける、

〔増鏡七内野の雪〕院(○後嵯峨)のわか宮十三にならせたまふは、きんむねの中將といひし人のむすめの御はらなり、圓滿院の法親王の御でしにならせたまふべしとて、正月(○寶治三年)廿八日にその御ようゐあり、承明院よりわたり給ふ、院のおじろびさしの御車にて、かんだちめは車、どもざねの大納言を上ゑゆにて六人、殿上人十六人、馬にて色々にいとよそほしうめでたくておはしまし、ぬ、その夜やがて御ぐしおろして、御法名圓助ときこゆ、いとうつくしげさ、佛などの心ちしてあはれに見えたまふ、院の宮たちの御中には、御このかみにてものし給へど、御げさくのよわきは、いまもむかしもかゝることぞいといとほしきわざなりけれ、

〔日本書紀六垂仁〕四年九月戊申、皇后(○狹穗姫)母兄狹穗彦王謀反、欲危社稷、因伺皇后之燕居、而語之曰、汝

ほくは元方民部卿の靈のつかうまつりつるなりといへば、このさぶらひ、それもさるべきなり、このほどの御事こそことの外にかはりて侍れ、なにがしはいとゞはしくうけ給はりたることども侍るものをといへば、世つぎ、さも侍らん、つたはりぬる事はいで〳〵うけ給はらばや、ならひにし事なれば、ものゝ猶きかまほしく侍るぞといふ、けうありげにおもひたれば、事のやうだいは、三條院のおはしましけるかぎりこそあれ、うせ給ひにけるのちは、よのつねの東宮の御やうにもなく、殿上人などまゐりて御あそびせさせ給ふや、もてなしかしづき申人などもなく、いとつれ〴〵にまぎるゝかたなくおぼしめされけるまゝに、心やすかりし御ありさまのみ戀しく、ほけ〴〵しきまでおぼえさせ給ひけれど、三條院おはしましけるかぎりは、院の殿上人などもまゐりや、御つかひもしげくまゐりかよひなんどするに、人目もしげくよろづなぐさめさせ給ふを、院うせおはしましては、世の中のものおそろしく、おほぢのみちかひもいかゞとのみわづらはしくふるまひにくきにより、宮司などだにもまゐりつかうまつる事もかたくなりゆけば、ましてげすの心はいかゞはあらん、とのもりづかさの志もべも、おさぎよめつかうまつる事もなければ、庭のくさもしげりまさりつゝ、いとかたじけなき御すみかにておはします、まれまれ參りよる人々はよにきこゆる事とて、三宮〇後朱雀かくておはしますを、心ぐるしく殿も大宮〇一條后彰子も思ひ申させ給ふに、もしうちにをとこ宮もいでおはしましなば、いかゞあらん、さあらぬさきに東宮にたてたてまつらばやとなんおほせらるなる、さればおしてとゝれさせ給へるなり、〇中略さていかなる事にか、東宮御位せめおろしとりたてまつり給ふては、又御むことりたてまつらせ給ふほど、もてかしづきたてまつらせ給ふ御ありさま、まことに御心もなぐさませ給ふばかりこそきこえ侍りしか、

〔皇朝史略六後一條〕外史氏曰、甚哉道長之專也、旣逼三條帝令遜其位、以擁立其外孫〇後一條又立敦明、

けるぞ此たうだいの御事よ、げにさる事ぞかし、

〔榮花物語十三ゆふしで〕東宮〇小一條院敦明なにの御心にかおはしますらん、〇中略皇后宮〇小一條院母娍子に、一生はいくばくに侍らぬに、なほかくて侍こそいといぶせく侍れ、さるべきにや侍らん、いにしへのありさまにこゝろやすくてこそ侍らまほしけれなど、をり〳〵に聞えさせ給へれば、みやはいと心うき御心なり、御物のけのおもはせたてまつるならん〇中略とて、所々に御いのりをせさせ給、〇中略との〇藤原道長のおまへにさるべき人して、かうやうになどまねび申させ給、〇中略殿まゐらせたまへり、〇中略出家とまでおぼしめされば、いとことのほかに侍り〇中略など、よく御心のどかに聞えさせ給てまかで給ぬ、そのまゝにやがて大宮〇一條后彰子にいらせ給て、かう〳〵の事をなん春宮たび〳〵の給はすれど、さらにうけひき申さぬに、めしての給ひつるやうなど、こまやかに申させ給、〇中略さても春宮には三宮〇後朱雀こそはゐさせ給はめと申させ給へば、大宮げにそれはさる事に侍れど、式部卿宮〇敦康のさておはしまさんこそよく侍らめ、それこそみかどにもすゑたてまつらまほしかりしかど、故院のせさせ給し事なればさてやみにき、此たびはかの宮のゐさせ給はんは、故院の御心のうちにおぼしけんほいもあり、宮の御ためにもよくなむあるべき、わかみやは御すくせにまかせてあらばやなん思侍るときこえさせ給へば、殿げにいとありがたうあはれにおほせらるゝことに侍れど、故院もこと事ならず、だゞうしろみなきにより、かしこうおはすれど、かやうの御ありさまは、たゞうしろみがらなり、帥中納言〇隆家だに京になきこそなどあるまじきことにおぼしさだめつ、

〔大鏡三左大臣師尹〕さきの東宮〇敦明をば小一條院と申、いまの東宮〇後一條の御ありさま申かぎりなし、つひのことゝはおもひながら、たゞ今かくとはおもひがけざりし事なりかし、〇中略この院のかくおぼしたちぬる事、かつは殿下〇藤原道長の御報のはやくおはしますにおされ給へるか、又お

皇室後外戚

河院殿とぞ申し、さて嘉禎三年三月に今の殿の聟の左大臣（兼經、岡屋殿）に攝政讓て、同四年四月廿五日に年四十六にて出家し給、其後も威光は益壯りに御坐しけり、出家の人の參內する事は、御堂の關白、（○藤原道長）平太政入道（○平清盛）などの外は、いたく例もなければども、車の文には蓮花をして、行粧ゆゝしくて參內し給、

〔神皇正統記　四條〕四條院、諱ハ秀仁、後堀河の太子、御母藻璧門院藤原竴子、攝政左大臣道家の女なり、壬辰の年即位、（○中略）一とせばかりありて上皇（○後堀河）崩れ給ひしかば、外祖にて道家の大臣王家の權を執りて、昔の執政の如くにこそありしか、東國に仰ぎし征夷大將軍頼經もこの大臣の胤子なれば、文武一にて遷勢おはしけるとぞ、

〔十三朝紀聞　一後水尾〕寛永六年十月、帝令傳旨於幕府曰、遜位以二女（○明正）繼之、大將軍（○徳川家光）大驚、以自遷都以來、久不女主、至今女宮踐極、後世曰外戚之所爲、乃諫之不聽、

〔大鏡　後一條一〕つぎのみかど當代、御いみなあつなり、（○中略）おなじみかどゝ申せども、御うしろみおほくたのもしくおはしまし、御おほぢにて、たゞ今の入道殿下、（○藤原道長）出家せさせ給へれども、よのおや、一切衆生、一子のごとくはぐゝみおはしますす、第一の御をぢにて、たゞ今の關白左大臣、（○頼通）一天下をまつりごちておはすべき、つぎの御をぢ（○教通）と申は內大臣にて左大將かけておはす、あるひは東宮大夫、（○頼宗）中宮權大夫、（○能信）中納言（○長家）など、さまざまにておはします、かたのごとくにおはしまさせば、御うしろみおほくおはします、むかしも今もみかどかしこしと申せど、臣あまたしてかたぶけたてまつるにはかたぶき給ふものなり、さればたゞ一天下は、わが御うしろみのかぎりにておはしませば、いとたのもしく、めでたき事なり、むかし一條の院の御なやみのをりおほせられけるは、すべからくは次第のまゝに、一のみこ（○敦康親王）をなん春宮とすべけれども、うしろみすべき人なきにより思ひかけず、さればこの二宮をばたて奉るなりとおほせられ

るゆるされもなかりけるにや、頼朝も手にあまりたる事かなどもや思ひけん、是等は忘れる人もなきさかひの事也、さて帝の外祖にて、能圓法印現存して在しかば、人もいかにと思ひたりし程に、ほどもなく病て死にき、よき事と世の人思へりけり、

〔増鏡四三神山〕はかなくあけくれて、仁治二年にも成にけり、御門○四條はこと忘十一にて、正月五日御げんぶくし給ふ、御いみな秀仁ときこゆ、そのとしの十二月にとうゐんこ攝政殿のりざねの姫君九になり給ふを、おほぢの大殿、○藤原道家御をぢの殿原などゐたちて、いとよそほしくあらまほしきさまにひゞきて、女御まゐり給へば、父の殿ひとりこそ物し給はねど、大かたのぎしき、よろづあかぬ事なくめでたし、うへもきびはなる御ほどに、女御もまだかくちひさうおはすれば、ひいなあそびのやうにぞ見えさせ給ひける、天の下はさながら大殿の御こゝろのまゝなれば、いとゆゝしくなん、

〔五代帝王物語〕今は院○後堀河もわたらせ給はず、主上○四條も幼稚におはしませば、外祖にて大殿○藤原道家世を行ひ給ふ、將軍頼經卿は御子なれば、武家にもかた〴〵因緣あり、前相國公經公後院の別當なるうへ、大殿のしうとにて、これも關白一體の人なれば、二人申合て行はれけり、大殿は帝の外祖たるうへ、攝政幷征夷將軍の父なれば、世の從ひ恐事、吹風の草木をなびかすよりも速なり、されば山の座主、三井寺の長吏、興福寺の別當、みな御子也、仁和寺の御室は、代々王胤にてこそおはしませども、世を手に握り給うへは、北の政所の腹に、福王御前とて愛子にて御坐をば、御室の弟子に成て、師跡をうけつぎ給き、されば大殿の御葬禮の時も、殿たちよりも上にたちておはしましけるは、父の御素意のとほりなるべし、後は關白の准后法助と申、法師の准三后の宣旨是が始なるべし、かくて大殿は世を治て目出おはしますほどに、文暦二年嘉禎元三月廿八日に攝政○道家子教實廿六にて俄にうせ給ふ、言ばかりなき事なりしを、やがて大殿又成かへり給ぬ、故攝政をば

言にも程なく〈へ〉上つてげんひゐしの別當にも、三がどまで被成給へり、此人の朝務の時は、諸國のせつたうがうたう、山ぞく海ぞくなどをば、やうもなくからめ取て、一々にひぢのもとよりふつ〳〵とうちきり〳〵おつはなたる、されば人あく別當とぞ申ける、

〔讀史餘論 二〕按ずるに、淸盛が妻平時子は、建春門院の女兄也、故に平氏さす〳〵勢を得し也、又建春門院の兄大納言平時忠は、主上〈○高倉〉にも院〈○後白河〉にも平家にも皆親わりし故、權柄を執れり、時人これを平關白といひき、

〔玉海〕建久九年正月七日乙巳、讓位事、傳國等事、自元不及沙汰云々、幼主不甘心之由、東方頻雖令申、綸旨懇切、公朝法師下向之時、被仰子細之時、愁承諾申、然而皇子之中、未被定其人、關東許可之後、敢取孔子賦、又被行御占、皆以能圓孫〈○土御門〉爲吉兆云々、仍被一定了、此旨以飛脚被仰關東了、不待彼歸、來十一日可有傳國之事云々、桑門之外孫曾無例、而通親卿爲振外祖之威〈嫁彼外祖母之故也〉二三歲踐祚、爲不吉例之由申出云々〈信淸孫三歲、通季孫二歲〉、而博陸〈○藤原基通〉又贊應、尤可被忌例、不可及外祖之沙汰之由再三被申行、是則其息新侍從兼基爲桑門之孫、世人爲奇異、爲休其嘲、忘帝者之瑕瑾、同通親謀云々、悲哉以少人入魂、爲小童之才學、國家之滅亡、擧足可待歟、於古卜之吉兆及孔子賦等之條者、如此之事、只依根元之邪正、有靈告之眞僞也、通親忽補後院別當、禁裏仙洞可在掌中歟、彼卿日來猶執國柄〈世稱源博陸、又謂土御門〉、今假外祖之號、獨歩天下之體、只可以目歟、讓位之間、將軍兩人必可供奉、仍內大臣被停左大將了、明日中納言中將可補云々、其後可被行任大臣、右大將昇丞相、奪其將軍、通親可拜云々、外祖猶必可補大臣歟、彼時又內府可被補右大臣之條無異儀、於此等之次第者更不足爲愁、猶恐只濫刑也、

〔愚管抄 六〕九年〈○建久〉正月十一日に、通親はたと讓位を行ひて、この刑部卿三位が腹に、能圓が女にて、この承明門院〈○後鳥羽后在子〉おはしさす腹に、王子〈○土御門〉の四にならせ給ふを踐祚して、この院も今はやう〳〵意にまかせ〔に〕ばやと思召によりて、かく行てけり、關東の賴朝には、いたうたしかな

〔讀史餘論 一〕謹按、鎌倉殿○源頼朝天下の權を分たれし事は、平清盛武功によりて身を起し、遂に外祖の親をもて、權勢を專にせしによれり、清盛かくありし事も、上は上皇の政みだれ、下は藤氏累代、權を恣にせしに倣ひしによれる也、

〔日本外史 一〕外史氏曰、○中略世稱清盛功不償其罪、擧不臣者、輙以爲稱首、而不知相家不臣已什倍清盛、清盛蓋視而學之、否則何遽至此、詩云、唯其有之、是以似之、自相門之專權也、后皆其女、天子皆其女之所生、而卿相皆其子弟親屬、苟非其族類鋤而去之、雖皇族不能免焉、甚則易置其主、視猶奕棊、清盛所爲、無一不似彼己氏者、而加以鷙悍、其意曰、以無功之人、猶擅權寵如此、吾之有大造於王室、何爲而不可、世以其拔興之無漸、羣起咎之、而不言有爲之師者焉、且清盛所以至此、由後白河帝濫養成其勢爾、夫名爵公器、不可私用、人臣而私名爵、是負其君也、人君而私名爵、是負其先王也、帝濫授先王之名爵於清盛、藉以濟其私焉、而長其負功邀上之心、至於不可制、將誰咎哉、雖然成平氏之勢者、不獨始於帝也、初忠盛受寵於白河鳥羽、連進官爵、人以爲不次、蓋朝廷倚其力、以抑源氏、抑源氏所以殺相家之權也、源氏自滿仲頼光、毎爲相門之爪牙、攝政兼家之驅花山也、源頼信實悍衞道途、降至文治之際、朝廷疑關白兼實之助源頼朝、亦非以其世相黨援哉、由是觀之、延平宗以杭相門、院政廟論、所相傳承、其猶寬平之擢任菅氏邪、文武雖異、其意一也、以菅公之賢、猶不能無戀權之意、平氏除重盛之外、皆不學無術、其矜功擅寵、進不知止、曷足尤焉、假設重盛後父而死、盡反其所爲、戒飭子弟、輔翼王室、則雖接踵比隆於藤原氏可也、

〔平家物語 十二〕平大納言のながされの事

平大納言時忠の卿は、○中略出羽のせんじとものぶがまご、ぞう左大臣ときのぶの子なりけり、故建春門院の御兄、高くらの上皇の御ぐわいせき、又入道相國○平清盛の北のかた、八條の二位殿もあねにておはしければ、けんくわんけんえよく思ひのごとく、心のまゝなり、されば正二位の大納

執進セリ、入道近參テ耳語申ケレバ、其儘ニアソバシテタビヌ、入道披之拜テ、今コソ憑シク候ヘトテ、ホクソ笑テ大將ニ見セラル、宗盛此上ハ左右ノ事有ベカラズト申、相國取テ懷ニ入テ立給ケルガ、ヨニモ心地ヨゲニテ各御前ヘ參ラセ給ヘト申ケル時、邦綱卿被參タリ、アヤシト思ハレケレ共、人々口ヲ閉テ申事モナカリケルニ、重衡朝臣イカニゾヤト阿翁ニサヽヤキケレバ、打ウナヅキテ心得タル體也ケレ共、御伴ノ人々ハ其心ヲ得ズ、國莊ヲ給リ給ヘル歟、イカバカリノ悅シ給ヘルゾ、イト覺（オボツカ）ナク思ハレタリ、

〔玉海〕治承五年閏二月五日辛亥、禪門〇平清盛薨逝一定也云云、〇中略巳刻大夫史隆職來、雖念三誦之間、流世間不實、召前問雜事、語云、今日參陣座、少辨行隆密語之、去夜法皇宮武士群集之由有風聞、人以爲法皇與前幕下〇平宗盛有變異之心、誠是天下喪亡之至也云云、昨日朝禪門以圓實法眼滅國家之濫觴、天下之賊也、奏法皇云、愚僧早世之後、萬事仰付宗盛了、每事仰合可被計行也云云者、勅答不詳、爰禪門有含怨之色、召行隆卿仰云、天下事、偏前幕下之最也、不可有異論云云、非啻東國之寇、又有中夏之亂歟云云、小時退下了、相續賴業來、余始念誦了、仍不謁也、

准三宮入道前太政大臣清盛法名淨海者、生累葉武士之家、勇名被世、平治亂逆以後、天下之權偏在彼私門、長女者、始備妻后、而爲國母、次女兩人共爲執政之家室、長嫡重盛、次男宗盛、或昇丞相、或帶將軍、次次子息、昇進悉心、凡過分之榮幸、冠絕古今者歟、就中去々年以降、强大之成勢滿於海內、苛酷之刑罰普於天下、遂衆庶之怨氣答天、四方之句奴成變、何況魔滅天台法相之佛法哉、非煙滅佛像堂舍、顯密正敎悉成灰燼、陟跡相承之口決、抄出諸宗之深義、秘密之奥旨、併遭回祿、如此之逆罪、無非彼之脣吻、倩案修因感果之理、爲敵軍亡其身、被懸首於戈鋒、可曝骸於戰場處、免弓矢刀劍之難、病席終命、誠宿運之貴、非人意之所測歟、但神罰冥罰之條、新以可知、日月不墮地、爰而有憑者歟、此後之天下安否、只奉仕伊勢大神宮春日大明神耳、

シッルゾヤ、心憂トゾ思召ケル、今ハ世ノ事モシロシメシ度モナシ、花山法皇ノ御坐ケン樣ニ、山山寺々ヲモ修行シテ、任御心バヤトゾ被思召ケル、鳥羽殿ニテハサスガ廣カリシカバ、慰ム御事モ有シ物フ、由ナク出ニケル者哉ト思食ケルモ、責テノ御事ト哀ナリ、○中略柏原天皇ト申ハ、平家ノ先祖ニ御坐ス、先祖ノサシモ執シ思召ケル都ヲ、他國ヘ移シ給シモ容ナシ、此京ヲバ平安城トテ、文字ニハ平ラ安キ城ト書リ、旁以難捨、就中主上上皇共ニ平家ノ外孫ニテ御坐、若モ爭カ捨サセ給ベキ、是ハ國々ノ夷共責上テ、平家都ニ跡ヲトヾメズ、山野ニ交ベキ瑞相ニヤトゾ私語ケル、將軍塚ノ守護神爭カ可不成恐、只今世ハ失ナンズ心憂事也、平家專モテハヤスベキ都ヲヤ、入道○平清盛天下ヲ手ニ把リ、心ノ儘ニ振舞給ケル餘リ、當帝ヲ奉下、我孫ヲ位ニ付進セ、法皇ノ第二ノ皇子高倉宮ヲ奉誅、御首ヲ切、太政大臣ノ官ヲ止テ、關白殿○藤原基房ヲ奉流、我聟近衛殿ヲ攝政ニ奉成、惣ジテ卿相雲客北面ノ下薦ニ至マデ、或ハ流シ、或ハ死シ、自由ノ惡行數ヲ盡シテ、今又及遷都ケルコソ不思議ナレ、守護ノ佛神豈享非禮給ハンヤ、

〔源平盛衰記〕二十三新院嚴嶋御幸附入道奉勸起請事

治承四年九月廿一日新院○高倉又嚴嶋ノ御幸アリ、御伴ニハ入道大相國○平清盛前右大將宗盛、大納言邦綱、藤大納言實國、源宰相中將通親、頭左中將重衡、宮内少輔棟範、安藝守在經已下八人也、○中略彼嶋ニ著セ給テ、御參社以前ニ、入道ト宗盛ト父子二人、院ノ御前ニ參ヨリテ、自餘ノ人々ヲバ被除テ、入道被申ケルハ、東國ノ亂逆ニ依テ、賴朝ヲ可追討之由御宣下ノ上ハ不審候ハ子ドモ、源氏ニ一ツ御心アラジト御起請アソバシテ、入道ニ給御座候ヘ、心安存ジイヨ〳〵御宮仕申候ベシ、此言聞召入ラレズハ、君ヲバ此嶋ニ捨置進テ、歸上候ナント申ケレバ、新院少シモサワガセ給ハズ良御計有テ、今メカシ、年來何事ヲカ入道ノソレ申事背タル、今明始テ二心アル身ト思フランコソ本意ナケレバ、彼起請イトヤスシ、イカニモイハンニ隨フベシト仰有ケレバ、前右大將硯紙

國此よしを承て、さては君は小がうゆゑにおぼしめしゑづませ給ひたんなり、さらんに取ては、とて、御かいゑやくの女房たちをも參らせられず、參内ゑたまふ人々もそねまれければ、入道のけんゐにはゞかつて、參りかよふ臣下もなし、男女うちひそめて、禁中いまゝゝしうぞ見えし、○中略主上はかやうの事共に御なうつかせ給ひて、つひにかくれさせ給ひけるとかや、

〔源平盛衰記十二〕安德天皇御位事

二月十九日、○治承四年春宮位ニ卽セ給、安德天皇ト申、僅ニ三歲ニゾ成セ給、イツシカナリ、先帝○高倉モ異ナル御事モマシマサヌ共、我御孫子ヲ付奉ランタメニオロシ奉ル、是モ太政入道○平淸盛ノ萬事思樣ナル故也ト、人々私語傾申ケリ、平大納言時忠卿聞之被申ケルハ、ナジカハイツシカ也ト申ベキ、異國ニハ周ノ成王三歲、晉穆帝二歲、皆襁褓ノ中ニ裹レテ、衣帶ヲ正クセザリシカ共、或ハ攝政負テ位ニツキ、或ハ母后懷テ朝ニ望トイヘリ、後漢孝殤皇帝ハ、生テ百餘日ニテ踐祚アリキ、我朝ニハ近衞院三歲、六條院二歲、コレ皆天子ノ位ヲ踐給フ、非無前蹤、ナジカハ人ノ傾申ベキト嗔リ宣ケレバ、時ノ才人達、穴オソロシゝゝ、物云ハジ、去バ其ハ吉例ニヤハ有トゾツブヤキケル、

〔保建大記三〕臣愿曰、○中略淨海緣亂離建奇功、以舉朝無識、柄用太過、專務鴟張、輕蔑王家、終幽閉法皇、脅迫上皇、貶斥丞相大臣、以擁立外孫襁褓之孺子、罪惡貫盈、弑逆且旦夕、

〔源平盛衰記十六〕遷都附將軍塚附司天臺事

治承四年五月廿九日ニハ、都遷アルベキ由有其沙汰、○中略法皇○後白河ヲバ、福原ニ三間ナル板屋ヲ造テ、四面ニ波多板シ廻シテ、南ニ向テ口一ツ開タルニゾ居エ進ラセケル、筑紫武士石戸ノ諸卿種直ガ子ニ、佐原ノ大夫種益奉守護ケリ、一日ニ二度、如形供御ヲ進セケリ、斯リケレバ此御所ヲバ、當時ハ樓ノ御所トゾ申ケル、守護ノ武士嚴シカリケレバ、帳人モ不參、鳥羽殿ヲ出サセ給シカバ、クツログヤラント思召ケルニ、高倉宮ノ御謀叛ノ事出來テ、又カクノミ渡ラセ給ヘバ、コハ如何

十七日、被レ行二除目一、太政大臣師長已下、至二于撿非違使信盛一卅九人解官、多是院中祗候之輩也、此中大相國可レ追二却關外一之由被二宣下一、十八日、前關白左二遷太宰權帥一、道二大夫尉康綱一令レ追レ之、即以出門、隨身厚景、侍四五人在レ共、雜人滿二途中一見レ之各叫喚、前關白於二路頭一出家云々、前相撲守業房配二流伊豆國一、但逐電不レ逢二追使一、前大納言資賢卿幷雅賢、資時、信賢、可レ追二却京中一之由被二仰下一也、廿日、太上法皇○後白河渡二御鳥羽殿一、非二尋常儀一、入道大相國押申行之、成範脩範等卿、法印靜賢、女房兩三之外不二參入一、閇二門戶一不レ通レ人、武士奉レ守二護之一、

〔平家物語六〕小がうの事

中宮○平德子の御方より、こがうと申女ばうを參らせらる、そも此女ばうと申は、櫻町の中なごんしげのりの卿のむすめ、きん中一のび人、ならびなきことの上手にてぞまし〳〵ける、れいぜいの大納言たかふさ卿、いまだ少將なりし時、見そめたりし女ばうなり、はじめは歌をよみ文をばつくされけれ共、玉づさのかずのみつもりて、なびくけしきもなかりしが、さすがなさけによわる心にや、つひになびき給ひけり、されども今は君○高倉へめされ參らせて、せんかたもなくかなしくて、あかぬわかれの涙にや、袖しほたれてほしあへず、少將○中略今は此よにてあひみん事もかたければ、いきてゐて、とにかくに人をこひしと思はんよりは、たゞしなんとのみぞねがはれける、入道相國○平淸盛此よしをつたへ聞給ひて、中宮と申も御むすめ、冷泉の少將も又むこなり、小がうの殿に二人のむことをとられては、よの中よかるまじ、いかにもして小がうの殿をめし出いて失はんとぞ宣ひける、小がう此よしを聞給ひて、我身のうへはとにもかくにもなりなん、君の御ため御心ぐるしと思はれければ、ある夜內裏をばまぎれ出て、ゆくへもしらずぞうせられける、主上御なげきなのめならず、ひるはよるのおとゞにのみいらせ給ひて、御なみだにしづませおはします、よるは南殿に出御なりて、月のひかりを御らんじてぞなぐさませまし〳〵ける、入道相

止權中納言中將等、

同師家

上卿權中納言雅賴、職事中宮權亮通親、詔書宣命等權辨兼光作云云、

余（○藤原兼實）披見此狀之處、仰天伏地、猶以不信受、夢歟非夢歟、無所辨存、此事由來者、法皇收公越前國、（故入道內大臣（重盛）知行國、經盛朝臣傳之、）幷被補白川殿倉預（前大舍人兼盛）已上兩事、法皇過怠云云、三位中將師家越二位中將基通任中納言、師家年僅八歲、古今無例、是博陸（○基房）之罪科也、凡此外法皇與博陸同意、被亂國政之由入道相國攀緣云云、然之間昨日夕、禪門率數千騎隨兵入洛之後、天下鼓騷、洛中邊動、故不可云、今日及昏黑中宮（○平德子）東宮（○安德）兩宮、忽欲幸八條亭、自被奉相具可赴鎭西方之由風聞、已兩宮行啓、供奉諸司出車已下參集、禁中騷動云云、爰禪門使重衡朝臣奏內裏云、近日恐僧偏以弃嫌、見朝政之體、不可安堵世間、蒙罪科之後、悔而可無益、不如賜身暇隱居邊地、仍爲奉具兩宮所儲行啓也者、忽遣勅使被仰此儀可被行之狀、即以召上卿已下、有詔書宣命等之沙汰云云、（其實自今日右將軍及若州等數還往、內々議定之後被進使云云、）　十六日庚午、昨日以法印靜賢爲御使、兩度被陳子細云云、其後頗事似和氣、然而猶又有可被搦召院近臣等之由謳歌云云、凡近日之巷說、縱横無極、難存一定歟、抑此關白之時、家貽瑕瑾、職付大概、於亂代者、天子之位、攝籙臣、太以無益云云、

〔百練抄（八高倉）〕治承三年十一月十五日、世間嗷々、武士滿洛中、入道大相國（○平清盛）奉怨公家、率一族可下向鎭西之由風聞、上皇（○後白河）以法印靜賢、自今以後萬機不可有御口入之由被仰遣之、今日關白前太政大臣（○藤原基房）幷權中納言師家解官、以二位中將基通卿可爲關白內大臣氏長者之由宣下、不被行節會被任大臣例、今度始之、未曾有之珍事也、

或記云、上皇與關白可令滅平家黨類之由、有密謀之由有其聞、其上師家卿超二位中將任中納言、其爵云々、

位ぢもくと申は、院內の御はからひにもあらず、攝政關白の御せいばいにもおよばず、たゞ一向平家のまゝにて有ければ、德大寺花山の院もなり給はず、入道相國のちやく男小松殿、○重盛其時はいまだ大納言の右大將にてまし〳〵けるが、左にうつりて、次男むねもり中納言にておはせしが、すはいの志やうらうをてうをつ志て、右にくはゝられけるこそ申ばかりもなかりしか、中にも德大寺殿は一の大納言に花族えいゆう才覺ゆうちやう、けちやくにてまし〳〵けるが、平家の次男むねもりの卿に、かゝいこえられ給ひぬるこそいこんの志だいなれ、定て御出家などもや有んずらんと人々さゝやきあはれけれども、德大寺殿は志ばらく世のならんやうをみんとて、大納言を辞して籠居とぞ聞えし、新大納言なりちかの卿の宣ひけるは、德大寺花山院にこえられたらんはいかにせん、平家の次男宗もりの卿にかゝいこえられぬるこそいこんの志だいなれ、いかにもして平家をほろぼし、本もうをとげんと宣ひけるこそおそろしけれ、

〔玉海〕治承三年十一月十四日戊辰、今日入道相國○平清盛入洛、宗盛卿去十一日首途、令參嚴嶋、而自路呼還、相共上洛、武士數千騎、人不知何事、凡京中騷動無雙、今夜出仕雖非無所恐、爲勤公事出仕、不可有橫災之由深存忠、仍令企參仕之處、果以無爲、凡洛中人家運資財於東西、誠以物忩、亂世之至也、十五日己巳、凡世間物忩無極云云、無聞實說、子刻人傳云、天下大事出來云云、不聞委事間、寅刻大夫史隆職注送云、

關白藤基通

內大臣同

氏長者同

止關白

藤基房

〔神皇正統記高倉〕清盛權を專にせし事は、殊更にこの御代の事なり、其女德子入内して女御とす、即ち立后有りき、末つかたやう〳〵處々に反亂の聞え有りき、清盛一家非分の業、天意に背きけるにこそ、嫡子内大臣重盛は心ばへ賢くて、父の惡行なども諫めとゞめけるさへ世を早くしぬ、彌驕をきはめ權をほしきまゝにす、時の執柄にて、菩提院の關白基房の大臣おはせしも、中らひよろしからぬ事ありて、太宰の權帥にうつして配流せらる、妙音院の師長の大臣も京中を出ださる、その外に罪せらるゝ人多かりき、〇中略清盛彌惡行をのみなしければ、主上深く歎かせ給ふ、俄に遜位の事ありしも、世を厭はせまし〳〵ける故とぞ、

〔平家物語一〕清水えんしやうの事

仁安三年三月廿日の日、新帝〇高倉大ごく殿にして御そくゐあり、此君のくらゐにつかせ給ひぬるは、いよ〳〵平家の榮花とぞみえし、國母建春門院〇平滋子と申は、入道相國〇平清盛の北のかた、八條の二位殿の御いもうと也、又平大納言時忠の卿と申も、此女院の御兄なるうへ、内の御外せきなり、内外につけてしつけんの臣とぞみえし、其比のしよゐぢもくと申も、偏に此時忠の卿のまゝなりけり、やうきひがさいはひし時、やうこくちうがさかえしごとし、世の覺え時のきらめでたかりき、入道相國天下の大小事をの給ひあはせられければ、時の人平くわんばくとぞ申ける、

〔平家物語一〕しゝの谷の事

嘉應も三年に成にけり、正月五日の日、主上〇高倉御げんぷく有て、〇中略入道相國〇平清盛の御むすめ、〇德子女御に參らせ給ふ、御とし十五さい、法皇〇後白河御猶子のぎなり、妙音院殿〇藤原師長其比はいまだ内大臣の左大將にてまし〳〵けるが、大將をしし申させ給ふ事有けり、ときに德大寺の大納言しつていの卿、其仁にあひあたり給ふ、又花山の院の中納言兼まさの卿も所もう有、その外故中のみかどの藤中納言家成の卿の三男、新大納言なりちかの卿もひらに申さる、〇中略其比の叙

ケリ、如何ナル賢王聖主ノ御政ヲモ、攝政關白ノ成敗ナレドモ、何トナク世ニアマサレタル徒者ナンドノ、謗リ傾ケ申事ハ常ノ習ゾカシ、サレドモ此入道ノ世ノ間ハ、聊モ忽緒ニ申者ナカリケリ、其故ハ入道ノ計ヒニテ、十四五若ハ十六七計ナル童部ノ髮ヲ頸ノ廻ニ切ツヽ、三百人被召仕ケリ、童ニモアラズ、法師ニモアラズ、コハ何者ノ貌ヤラン、一色ニ長絹ノ直垂ヲ著ル時ハ、褐ノ布袴ヲキセ、一色ニ纈物ノ直垂ヲ著時ハ、赤袴ヲキセ、梅ノ楉ノ三尺計ナルヲ、手モト白ク汰テ右ニ持、鳥ヲ一羽ヅヽ、鈴付ノ羽ニ赤符ヲ付テ、左ノ手ニスヱサセテ、面々ニモタセテ、明テモ暮テモ遊行セシム、是ハ靈鳥頭ノミサキ者トテ、大會宴ノ珠童ヲ學レタリ、又ハ耳聞也、モシ淨海ガアタリニ意趣アラバ、忽緒ニ云者アルベシ、其者ヲバ聞出シテ申モ上ヨ、相尋ントノ給ケレバ、京中ノ條里小路、門々戸々耳ヲ峙、思モ思ハヌモ、其アタリノ事ヲ云ヲバ聞出シ申ケレバ、咎ナキアタリヲモ多ク損ジケリ、最冷クゾ在ケル、不祥ト云モ愚也、入道殿ノ禿ト云ケレハ、京中ニハ又モナキ高家ノ者也、九重白川ノ在家人多ク大事ヲシテ、子孫ヲ禿ニ入ケレバ、三百人洛中ニ充滿タリ、世ヲ趨ル馬牛車宜シキ輿車モ道ヲヨキテゾ通リケル、適路次ニ逢猋ハ、御幸行幸ニ參會タル樣ニテ、手ヲツキ腰ヲカヾメ、走ノキテゾ過行ケル、禿ガ申事ヲバ、善惡ヲ糺サズ入道許容シ給ケレバ、上下萬人是ニ追從シテ、善モ惡モ平家ノ事ヲバ云ズ、又禿ニ惡シト思ハレタル者ハ、入道殿ニ讒セラレテ、咎ナクシテ多ク損ズル者モ有ケリ、

〔玉海〕仁安三年二月十五日戊申、今日上皇〇後白河御下向、本聞明日之由、而俄有御下向、依相國〇平清盛危急歟、即密幸六波羅第云々、　十六日己酉、亥刻許或人告送云、來十九日可有讓位事、於閑院可有其事云云、　十七日庚戌、未刻許參東宮、相合女房談讓位事等、昨日俄出來事云云、上皇有思食事、御出家事歟且因之令急給、又前大相國入道所惱已危急、雖不增日比、更非有減氣、且彼人夭亡之後、天下可亂、依如此等事、頗急思食事歟云云、　十九日壬子、今日有御讓位事、〇中六條

かへらざるは、名行のやぶれそめしによれる事とぞ見えたる、かくてしばし鎮まれりしに、主上上皇〔後白河〕御中悪しくて、主上の外舅大納言經宗〔後に召還されて、大臣大將までなりき、〕御めのと子の別當惟方等、上皇の御意に背きければ、清盛朝臣に仰せて召し捕へられ、配所に遣はさる、これより清盛天下の權をほしきまゝにして、程なく太政大臣にあがり、その子大臣の大將になり、剩へ兄弟左右の大將にて並べりき、〇中略天下の諸國は、なかば過ぐるまで家領となし、官位は多く一門家僕にふさげたり、王室の權、更になきが如くになりぬ、

〔源平盛衰記〕一 清盛捕化鳥幷一族官位昇進付禿童幷王莽事

清盛〇中略仁安元年任内大臣、兼宣旨幷饗祿ナカリケレ共、忠義公〔藤原兼通〕ノ例トゾ聞エシ、同二年ニ太政大臣ニ上ル、左右ヲ經ズシテ此位ニ至ル事、九條大相國信長公ノ外、惣ジテ先蹤ナシ、大將ニアラネ共、兵仗ヲ賜テ隨身ヲ召具シテ執政ノ人ノ如シ、輦車ニ乘テ宮中ヲ出入ス、偏ニ女御入内ノ儀式也、太政大臣ハ訓導之禮重ク、儀刑之寄深ケレバ、地勢大ナリトイヘ共、賢慮不足者、無當其仁雖天才高、政理不明者、猶非其器、非其人、闕べキ官ニアラザレドモ、一天ノ安危由身、萬機ノ理亂在掌ケレバ不及子細、親子兄弟大國ヲ賜リ、兼官重職ニ任ジケル上、三品ノ階級ニ至ルマデ、九代ノ先蹤ヲ越、角榮ケルヲユヽシキ事ト思シ程ニ、清盛仁安三年十一月十一日、歳五十一ニテ重病ニ侵サレ、爲存命忽ニ出家入道ス、法名ハ靜海ナリ、其驗ニヤ宿病立ドコロニ愈テ、天命ヲ全ス、人ノ從ヒ付事ハ、吹風ノ草木ヲ靡スガ如ク、世ノ偏ク仰グ事、降雨ノ國土ヲ潤ニ異ナラズ、サレバ六波羅殿ノ御一家ノ公達ト云テケレバ、花族モ英才モ、面ヲ向ヘ肩ヲ並ル人無リケリ、太政入道ノ小舅ニ、平大納言時忠卿ノ常ノ言ニ、此一門ニアラヌ者ハ、男モ女モ尼法師モ、人非人トゾ被申ケル、斯リケレバ如何ナル人モ相搆テ、其一門其ユカリニムスボヽレントゾシケル、〇中略サレバ烏帽子ノタメヤウ、衣紋ノカヽリヨリ始テ、何事モ六波羅樣ト云テケレバ、天下ノ人皆學之隨之

殿におほせられけるは、〇中略我身德行なしといへども、十善のよくんにこたへて、せんていい〇鳥羽の太子とむまれ、世ぎやうはく也といへども、萬せうのほう位をかたじけなくす、上皇の尊號につらなるべくは、重仁こそ人かずに入べき處に、文にもあらず武にもあらぬ、四の宮に位をこえられて、父子ともにうれひにしづみ給ふ、しかりといへども、故院おはしましつる程はちからなく、二年の春秋をおくれり、今舊院登遐の後は、我天下をうばゝむ事、何のはゞかりか有べき、定て神慮にもかなひ、人望にもそむかじ物をとおほせられければ、左府もとより此君代をとらせ給はゞ、我身攝籙においてはうたがひなしとよろこびて、もつとも思召立處しかるべしとぞすゝめ申されける、

〔愚管抄五〕主上二條院の外舅にて、大納言經宗、ことに鳥羽もつけまゐらせられたりける惟方、撿非違使別當にて在ける、この二人主上にはつきまゐらせて、信賴同心のよしにて有ける、〇中略後白河院をば、その〇永曆元年正月六日、八條堀河の顯長卿が家におはしまさせけるに、その家には棧敷の有けるにて、大路御覽じて、下衆など召寄られければ、經宗惟方などさだして、堀河の棧敷を板にて外よりむすゝゝと打つけてけり、かやうの事どもにて、大方此二人して世を院にしらせまゐらせじ、内の御沙汰にてあるべしと云けるを聞召て、院は淸盛をめして、わが世にありなしはこの惟方經宗にあり、是ら思ふ程いましめてまゐらせよとなくゝゝ仰有ければ、その御前には法性寺殿もおはしましけるとかや、淸盛又思ふやうども有けん、忠景爲長と云二人の郎等して、この二人をからめとりて、陣頭に御幸なして、御車の前に引すゑて、おめかせてまゐらせたりけるなど世には沙汰しき、その有さまはまがゝゝしければかきつくべからず、人皆しれるなるべし、さてやがて經宗をば阿波國、惟方をば長門國へ流してけり、

〔神皇正統記二條〕保元平治よりこのかた、天下亂れて、武用盛に、王位輕くなりぬ、未だ太平の世に

一人内覧になりなんとこそは思はれけんに、例にまかせて大臣内覧の辭表を上たりけるを、返しも給はらで後、次の年正月に、左大臣ばかりはもとのごとしとて有けり、〇中略主上の御事悲しみながら、例にまかせて雅仁親王新院御所におはしましけるむかへまゐらせて、東三條南の町高松殿にて、御讓位の儀めでたく行はれにけり、されば世をしろしめす太上天皇と、攝籙の臣の親の前關白殿ともに、兄を憎みて弟をかたひき給て、かゝる世中の最大事を行はれけるが、世の末のかくなるべき時運もつくりあはせてければ、鳥羽院知足院一御心になりて、しばし天下の有けるを、この巨害のこの世をばかくなしたりける也、されど鳥羽院の御在生まではなのめたり内亂合戰はなくてやみにけり、

〔保元物語〕一新院御むほんおぼしめしたつ事

新院〇崇徳日ごろ思召けるは、昔より位をつぎ、ゆづりをうくる事、かならずちやくそんにはよらねども、其うつはものをえらび、外せきのわんふをもたづねらるゝにてこそあれ、是は只當腹のてうあいといふばかりをもつて、近衛院に位をおしとられて、うらみふかゝ過しところに、せんてい體仁の親王〇近衛かくれ給ぬる上は、重仁親王〇崇徳皇子こそ帝位にそなはり給ふべきに、思ひの外に、又四の宮〇後白河にこえられぬるこそ口をしけれど御いきどほりありければ、御心のゆかせ給ふ事とては、近習の人々に、いかにせんずるぞと常に御だんがふ有けり、宇治の左大臣頼長と申は、知足院禪閤殿下たゞざねこうの三男にておはします、〇中略關白殿〇忠通と〇中略御兄弟の上、父子の御けいやくにて、れいぎふかくおはしましけれども、後には御中あしくぞ聞えし、されば左大臣殿思食けるは、一院〇鳥羽かくれさせ給ひぬ、今新院の一の宮しげひと親王を位につけ奉りて、天下を我まゝにとりおこなはゞやと思ひ立給ひければ、つねに新院へ參り、御殿居有ければ、上皇も此大臣を深く御たのみ有て、おほせあはせらるゝ事ねんごろなり、或夜新院左大臣

とて、內覽の宣旨ばかりくだされにけり、おさなしきことかなと一天のおやしみになりぬ、さて上々の御中わしきことは、崇德院の位におはしなしけるに、鳥羽院は長實中納言がむすめをことに最愛に思召て、初は三位せさせておはしなしけるを東宮にたて、崇德の后には法性寺殿のむすめなゐられたる、皇嘉門院也、その御子のよしにて、外祖の儀にてよく〳〵さだしなゐらせよと仰られければ、ことに心に入て、誠の外祖のはしさに、さだしなゐらせけるに、その定にて讓位候べしと申されければ、崇德院はさ候べしとて、永治元年十二月に御讓位ありける、保延五年八月に東宮○近衞にはたゝせ給にけり、その宣命に皇太子とぞあらんずらんと思召けるを、皇太弟とかゝせられけるとき、こはいかにと又崇德院の御意趣にこもりけり、さて近衞院位にておはしなしけるに、當今おとなしくならせ給ひて、賴長の公內覽の臣にて、左大臣一の上にて、節會の內辨きら〳〵とつとめて、御堂のむかしこのもしくて有ける、節會ごとに、主上御帳に出おはしなす事のなくて、引かうぶりてとのごもり〳〵して、ひとへに違例になりにけり、院よりいかに申させ給ひけるも、きかせおはしなさず、又關白はかど〳〵に成候なんずと返々申されけるをもきかせ給はぬ事にて有ければ、猶これはこの關白がすると思召て、御氣色あしかりけり、されど法性寺殿はすこしも是を思ひ居たるけもなくて、備前國ばかりうちしりて、關白內覽をばとゞむる人もなかりければ、出仕うちしておはしけり、○中略かやうにてすぐるほどに、この左府、惡左府といふ名を天下の諸人つけたりければ、そのしるしあけくれの事にて有けるに、法勝寺御幸に、實衡中納言が車やぶり、又院第一の寵人家成中納言が家つゐふくしたりければ、院の御心にうとみ思召にけり、兄の殿に誠によくいひけるものをと思食ながらさて過けり、○中略さる程に主上近衞院十七にて、久壽二年七月にうせ給にけるは、ひとへにこの左府が呪咀なりと人いひけり、院もおぼしめしたりけり、證據どもゝ有けるにや、かくうせさせ給ぬれば、今は我身は

〔大日本史賛藪三〕藤原道長傳賛

賛曰、〇中略賴通敎通、競以侈靡相尙、峻宇雕牆、韋負之所不能警、其無遠略、雖三尺童子猶能知之、況後三條之英邁乎、然賴通屛居宇治、偃蹇不奉朝命、敎通脅以春日神威、則雖英邁之君、莫能如之何、權臣鉗制人主、一至於此、吁可畏哉、

〔愚管抄四〕白河院は、堀河院に御讓位有て、京極の大殿〇藤原師實は、又後二條殿〇師實子師通に執政を讓りておはする程に、堀河院御成人、後二條殿又殊の外に引はりたる人にて、世の政事、太上天皇にも大殿にもいとも申さでせらるゝ事もまじりたりけるにやとぞ申める、

〔愚管抄四〕賴長の公、日本第一大學生、和漢の才にとみて腹あしく、よろづにきはどき人也けるが、てゝの殿〇藤原忠實に最愛也けり、一日攝籙內覽をえばや〳〵とあまりに申されけるを、一日えさせばやとおぼして、子の法性寺殿〇賴長兄忠通にさも有なんや、後には汝が子孫にこそかへさんずれと、たび〳〵ねんごろに申されけるを、法性寺殿のともかくもその御返事を申されざりければ、後にはやすからずおぼして、鳥羽院にこの由を申て、叶へかなはずは次の事にて、存候はんやうかへりごとの聞度候、上より仰たびて申狀をきかせられ候へと申されければ、この由仰られたりける御返事に、存候むねはとて、年のきは賴長が心ばへはしか〳〵と候也、かれ君の御うしろみになり候はゞ、天下の損じ候ぬべし、このやうを申候はゞ、いよ〳〵腹立れ候はゞ不孝にも候べし、父の申候へばとて承諾し候はゞ、世の爲不忠になり候ぬべし、仰天して候など申されたりけるをつかはされたりければ、かくも返事はありけるは、など我云には返事だになきとて、彌ふかく思つゝ、藤氏長者は君のしろしめさぬ事也とて、久安六年九月廿五日に藤原長者をとり返して、東三條におはしまして、左府に朱器臺盤わたされにけり、さて院をとかくすかしまゐらせられけるほどに、みそかに上卿などもよほして、久安七年正月に內覽はならびたる例もあれば

〔愚管抄四〕御堂〇藤原道長御子の中に、能信大納言といふ人有けり、閑院の中納言〇公成のむすめ〇茂子を子にして有けるを、後三條の后にはまゐらせたる人なり、〇中略白川院のつねに能信をば、故東宮大夫殿おはせずば、我身はかゝる運もあらましやと仰られけるには、必々殿の文字をつけて仰られけり、やむごとなき事也、

〔江談抄三雜事〕壺切は、昔名將劒也、張良劒云云、雄劒ト云僻事也云云、資仲所ㇾ說也、劒ハ壺切、但壺切燒亡歟未ㇾ詳、件劒ハ累代東宮渡物也、而後三條院東宮之時、廿三年之間、入道殿〇藤原教通不ㇾ令ㇾ獻給云云、其故ハ藤氏腹東宮之寶物ナレバ、何此東宮可ㇾ令ㇾ得給乎云云、仍後三條被ㇾ仰之樣、壺切我持無ㇾ益也、更ニホシカラズト被ㇾ仰ケリ、サテ遂ニ御卽位ノ後コソ被ㇾ進ケレ、是皆古今所ㇾ傳談也云云、〇又見ㇾ續古事談

〔神皇正統記白河〕宇治の大臣〇藤原賴通の世となりて、三代の君〇後一條、後朱雀、後冷泉、の執政にて、五十餘年權を專らにせらる、先代には關白の後は如在の禮にてありしに、あまりなるほどになりにければにや、後三條院の坊の御時より、あしざまにおぼしめすよしきこえて、御中らひあしくて、あやぶみおぼしめすほどの事になむありける、踐祚の時、關白をやめて宇治にこもられぬ、弟の二條の敎通の大臣關白せられしが、ことのほかにその權もなくおはしき、さしてこの御代〇白河には、院にて政をきかせたまへば、執柄はたゞ職にそなはりたるばかりになりぬ、

〔大日本史贊藪一〕後三條天皇紀贊

贊曰、一條以來、政歸ㇾ戚里、黨親連ㇾ體、根ㇾ據於朝廷、帝以ㇾ非ㇾ藤原氏出、前星殆易ㇾ動搖、而光芒旣著ㇾ於壺切劍、足ㇾ使ㇾ權貴望而畏ㇾ之也、及ㇾ躬ㇾ總大政、以ㇾ陽剛之才、應ㇾ虎變之象、克己勵精、霄衣旰食、宜ㇾ其君子豹變、小人革ㇾ面、而炳煥明盛之治、如ㇾ日月之麗ㇾ于天也、大江匡房所ㇾ謂可ㇾ比ㇾ隆於承和延喜ㇾ者、可ㇾ以稱ㇾ頌帝德、而紬ㇾ繹政理、專尙ㇾ節儉、吏稱ㇾ其職、民安ㇾ其業、殆有ㇾ漢宣之風、而可ㇾ謂ㇾ中興良主追ㇾ蹤近江朝廷矣、

（東宮敦明親王）也、而有事障、于今未被渡、被置納殿、間東宮辭退後、今日被渡新宮（後朱雀）、頗似有感悲、而　其儀藏人範永持出自納殿、於殿上口授右近少將公成朝臣、（兼東宮權亮）公成朝臣明令持御藏小舍人共侍、參宮御方、（作朝臣爲勅使召之、仍於殿上口取之也、）少將取御劍參進晝御座方、大夫即進請彼御劍、持入御在所之後、亮惟憲朝臣、以白褂一重幷袴給少將云々、

〔小右記〕萬壽元年九月廿二日丁未、昨日右近中將師房叙從三位者、十九日行幸叙正四位下、（元從四位下、已越階、）三箇日內越階只叙三位未曾有、以關白（○藤原賴通）養子、（異姓）禪室（○藤原道長）聟所叙歟、可感□如何、

〔小右記〕萬壽二年七月十一日辛卯、去九日丹生使藏人撿非違使棟仲、大納言能信卿（○藤原道長子）山城國莊雜人打破小舍人頭濫行無極、仍差遣使官人云々、天下田地悉爲一家領所、須無立錐地歟、可悲之世也、

〔小右記〕萬壽二年八月十二日辛酉、禪閤（○藤原道長）以左衞門志爲長、令取豐樂殿鵄尾、豐樂寺衞士之有指宣旨歟、陳不取詞、爲長打調衞士、遂取下鵄尾、先取一鵄尾、造木鵄尾可被置云、昨修理進豐高所申、宰相密談、作鵄尾以鉛鑄造、以鉛爲宛法成寺瓦料云々、萬代之皇居一人自由乎、悲哉々々、

〔續世繼（一司召）〕後三條院、（○中略）まだ御子におはしまし丶とき、ちゝの御門後朱雀院、さきのとしの冬よりわづらはせ給て、むつきの十日（○寬德二年）あまりのころ位さらせ給て、みこの宮（○後冷泉）にゆづり申させたまふことばかりにて、春宮のたゝせ給事はともかくもきこえざりけるを、能信大納言とて、宇治どの（○賴通）などの御おとうとの、たかまつ（○源高明女、明子、）のはらにおはせしが御前にまゐりて、二宮（○後三條）をいづれの僧にかつけたてまつり侍るべきときこえさせ給ひけるに、坊にこそはたてめ、僧にはいかゞつけん、關白（○賴通）の春宮の事はしづかにといへば、のちにこそはとおほせられけるを、けふたゝせ給はずばかなふまじきことに侍りと申給ひければ、さらばけふとてなん春宮はたゝせ給ひける、やがて大夫にはその能信大納言なりたまへりき、君の御爲たゆみなくすゝめ奉り給へりけん、いとありがたし、

府、亦洩達資賴、給官幷內舍人事等、示御返事云、資賴事承之隨使身內舍人事、早可出申文者、故殿關白時、准攝政大臣可見官奏事、又々可聞案內者、大略申了、秉燭後、資平來曰、准攝政之宣旨、明日可被下也、大納言公任候左府、即可奉下之由被命此卿、〇中略准攝政例見官奏事、可行除目事、可行一上事等、明日可被下仰也、是相府詞也、無御惱間詞、又有被仰之類歟、亦無相違歟、今日主上被仰云、我可避位、然而忽不思之、仍讓務於左大臣、若所行有非、必當天譴歟、是能所思得、還爲彼不祥歟、爲我息災也者、春宮大夫齊信云、奉爲主上、當時後代之無極耻辱者、侍從中納言行成云、春宮御代可爲攝籙臣、而俄有斯事、不可被過今年歟、甚愚也、

〔大日本史贊藪一〕三條天皇紀贊

贊曰、自攝政良房居外祖之重、攝籙之家、莫不欲生女爲后妃、以徼幸宰衡之任也、既進女而爲女御、由女御而册中宮、錮寵擅愛、一生皇子、而不擇長幼、不顧明闇、扳而立之、其意若曰、是我家所生也、是我家所立也、太阿之柄、移於外戚、歷世三公、宗族盤互、勢禁威懾、筦執樞機、而其間不能無梁冀之跋扈、揚駿之專愎、雖有英明之主、終莫能如之何、此非一朝一夕之故、席雖默禱求佑、果何所益哉、

〔大鏡三左大臣師尹〕このたびの東宮には、式部卿の宮〇一條皇子敦康をとこそは思しめすべけれ、一條院のはかばかしき御後見なければ、東宮に當代を立て奉るなりとおほせられしかば、これもおなじ事なりと思し定めて、寬仁元年丁巳八月九日こそは九歳にて、三宮〇後朱雀東宮に立たせ給ひて、同月の廿三日にこそは、壺切といふ大刀は內よりもて參りしか、當帝位に即かせ給ひしかば、すなはち東宮にも參るべかりしを、さかるべきにやありけむ、とかくさはりて、この年比內のをさめ殿に候ひつるぞかし、〇中略故三條院度々申させ給ひしかども、とかく申しやりて奉らせざりしとこそ聞き侍りしか、されば故院もさむばれ、なくとも立てではとておはしましゝなり、

〔左經記〕寬仁元年八月廿三日戊子、今朝御物忌也、申二剋被渡壺切御劍於東宮、(後朱雀)件御劍、須御讓位日被渡東宮、(前

〔古事談六亭宅諸道〕一條院御時、以言望顯官之時、有勅許氣、而御堂〇藤原道長令申給云、以言者、鹿馬可迷二世情〈上句鷹鳩不變三春眼、帥内大臣(藤原伊周)御供於西海作也〉ト作者也、爭浴朝恩哉云々、仍不許云々、

〔江談抄四〕鷹鳩不變三春眼、鹿馬可迷二世情、以言

此句依恨暗漢雲之子細、叙感之餘擬補藏人、雖然入道殿〇藤原道長幷殿上人不承引之故不補、仍爲放言所作也、其時殿上人諺曰、湯氣欲上云々、本姓弓削也、

〔古事談一王道后宮〕一條院崩御ノ後、御手習ノ反古ドモノ御手筥ニ入テアリケルヲ、入道〇藤原道長御覽ジケル中ニ、叢蘭欲茂秋風吹破、王事欲章讒臣亂國トアソバシタリケルヲ、吾事ヲ思食テ令書給タリケリトテ、令破給ケリ、

〔愚管抄三〕一條院うせさせ給ひて後に、御堂〇藤原道長は御遺物どものさた有けるに、御手箱の有けるを開き御覽じけるに、宸筆の宣命めかしき物をかゝせおはしましたりける、はじめに三光欲明覆重雲大精暗とあそばされたりけるを御らんじて、次ざまを讀せ給はで、やがて卷こめて燒あげられにけりとこそ、宇治殿〇道長子賴通は隆國〈宇治大納言〉には語らせ給ひけると、隆國はまるして侍なれ、

〔小右記〕長和四年八月四日辛巳、主上〇三條御目昨宜御坐由被仰、然而未供威儀饌、先日有可供之仰、尙不快歟、〇中略又密語云云、仰云、讓位事、左府〇藤原道長近日頻有催事、答云、伊勢祈後、又今年以後隨狀可思定者、太奇事、甚恐事也、　十月二日己卯、資平云、主上密々被仰云、日來左大臣頻責催讓位事、太奇事也、又云、當時宮達不可奉立東宮、依不可堪其器、故院〇一條一三宮〇後一條足爲東宮者、於吾前所定如此左右思慮何爲、至今讓位事都思留了、〇中略又被仰云、大納言公任、中納言俊賢、爲吾多不善事、催左大臣令責吾禪位、此事不安、仍訴申神明、口身及子孫不宜歟、十善故登寶位、而臣下何有危吾位哉、憂心一時不休者、不可外漏、爲見合向後事所記耳、　廿六日癸卯、去夜被物保重之恐、以資平令申左相

にはこよなくひきこし、廿一におはせしときに、内大臣になし奉り給ひて、我○伊周父道隆うせ給ひしかば、この内大臣伊周のおとゞに、百官并天下執行の宣旨給ふべきよし申くださしめ給ひて我は出家せさせ給ひてしかば、此内大臣殿を關白殿とて、よの人あつまり參りし程に、粟田殿○道兼にわたりにしかば、手にすゑたる鷹をそらいたらむやうにてなげかせ給ふ、一家にいみじき事におぼしみだれしほどに、そのうつりつるかたも、夢のごとくにてうせ給ひにしかば、いまの入道殿○道長その年の五月十一日よりして、よをまろしめしゝかば、彼殿いとゞむとくにおはしまし、程に、又の年花山院の御事いできて、御官位とられて、只太宰の權帥になりて、長德二年四月廿四日にこそはくだり給にしか、御年廿三、いかばかりあはれにかなしかりし事なりな、されどげにかならずかやうの事、我おこたりてながされ給べくもあらず、よろづの事身にあまりぬる人の、もろこしにもこの國にもあるわざにぞ侍なる、むかしは北野○菅原道真の御事ぞかしなどいひて、はなうちかむ程もあはれに見ゆ、此殿も御さえ日本にはあまらせ給へりしかば、かゝることもおはしますにこそはべりしか、扨式部卿宮○敦康のむまれさせ給へる悅にこそはめしかへされ給へれ、さて大臣になぞらふる宣旨かうぶらせ給ひて、あるき給ひしありさまもいと落居てもおぼえ侍らざりき、○中略かゝれどたゞ今は一宮○敦康おはしますをたのもしき物におぼし、よの人もさはいへど、またには追從し、おぢ申たりし程に、今の帝○後一條東宮○後朱雀さしつゞきむまれさせ給へりしかば、よをおぼしくづをれて、月ごろ御病もつかせ給ひて寬弘七年正月廿九日うせさせ給ひにしぞかし、

〔古事談一王道后宮〕後一條院未㆓生給㆒之間、萬人入㆑夜參㆓帥殿㆒、○藤原伊周依㆑爲㆓主上○一條一一宮○敦康叔父㆒也、後一條院生給之後、其事都絕云々、

さるべし、位もゆづりきこえさせ侍りぬれば、東宮にはわか宮をなん物すべうはべる、だうりのまゝならば、そちのみや〇敦康をこそはと思ひ侍れど、はかぐ\しきうしろみなどもはべらねばなむ、おほかたの御まつりごとにもとし比したしくなど侍りつるをのこどもに、御ようい有べきものなり、みだりごゝちおこたるまでも、ほいとげはべりなんとし侍り、またさらぬにても、あるべき心ちもし侍らずなど、さまぐ\あはれに申させ給ふ、春宮も御目のごはせ給べし、さてかへらせ給ぬ、中宮はわか宮の御事さだまりぬるを、れいの人におはしまさば、ぜひなくうれしうこそはおぼしめすべきを、うへはだうりのまゝにとこそはおぼしつらめ、かの宮もさりともさやうにこそはあらめとおぼしつらんに、かのよのひゞきにより、ひきたがへおぼしおきつるにこそあらめ、さりともと御心のうちのなげかしうやすからぬ事には、これをこそおぼしめすらんといみじうこゝろぐるしういとほし、わか宮はまだいとをさなくおはしませば、おのづから御すくせにまかせてありなむ物をなどおぼしめいて、殿の御まへにも、なほこの事いかでさゝでありにしがなとなむ思はべる、かの御心の内にはとし比おぼしつらんことのたがふをなんいと心ぐるしうわりなきなど、なくぐ\といふばかりに申させ給へば、殿の御まへ、げにいとありがたき御ことにもおはしますかな、又さるべきことなれば、げにと思給てなんおきてつかうまつるべきを、うへおはしまして、あべい事どもをつぶぐ\とおほせいるゝに、いな辭あしうおほせらるゝ事なり、しだいにこそとそうしかへすべきことにもはべらず、世中いとはかなう侍れば、かくてよにはべるをり、さやうならん御ありさまも見たてまつりはべりなば、後の世もおもひなく、心やすくてこそ侍らめとなん思給ふると申させ給へば、又これもことわりの御事なれば、かへしきこえさせ給はず、

【大鏡六内大臣道隆】皇后宮〇一條后定子と同腹の君、〇中略小千與君〇伊周とて、彼はかばらの大千代君〇道頼

也、等奉見、被勸申御出家事、師共出家可御供之由被契申云々、〔○中略〕粟田殿〔○道兼〕五箇月內自五位少辨至正三位中納言云々、

花山院御出家之時天下騷動、有人申大入道殿〔○藤原兼家〕仰云、ケシウハアラジ、ヨク求ヨ云々、不令騷給云々、

〔讀史餘論一〕按ずるに、道兼の妹一人〔○超子〕は冷泉の女御にて、花山の弟三條の母也、一人〔○詮子〕は圓融の后にて一條の母也、されば花山世をすて給はゞ、我女弟のうみし皇子立給ふべし、さらば帝の外舅となりなむとの事なるべし、古事談に粟田殿五箇月の內、五位少辨より正三位中納言に至るとある事按ずべし、

〔榮花物語九石陰〕御門〔○一條、中略、〕この頃一條院にぞおはします、〔○中略〕六月〔○寛弘八年〕七八九日の程なり、いまはかくておりゐなむとおぼすを、さるべきさまにおきて給へとおほせらるれば、殿〔○藤原道長〕うけたまはらせ給て、春宮に御たいめんこそは例の事なれとて、覺しおきてさせ給程に、春宮には一宮〔○敦康〕をとこそおぼしめすらめど、中宮〔○道長女彰子〕の御心のうちにもおぼしおきてさせ給へるに、うへおはしまして、東宮の御たいめいそがせ給に、世人いかなべいことにかとゆかしう申思ふに、一宮の御かたざまの人々、わか宮〔○後一條〕かくてたのもしう、いみじき御なかよりひかり出させ給へる、いとわづらはしうさやうにこそはとおもひきこえさせたり、又あるひはいでやなどおしはかりきこえさせたり、東宮行啓あり、十一日にわたらせ給程いみじうめでたし、一條院にはいかにおはしまさんとすらんよりほかのなげきに、春宮がたの殿上人など、思ふ事なげなるもつねのことながら、よのあはれなることたゞ時のまにてかはりける、さてわたらせ給へれば、みすごしに御たいめありて、あるべき事ども申させ給、よにはおぼろ〳〵しうきこえさせつれど、いとさはやかによろづの事聞えさせ給へば、世の人のそらごとをもきけるかなと宮はおぼ

に花山寺におはしまして、御出家入道せさせ給へりしとぞ、○中略あはれなる事は、おりおはしましけるよは、ふぢつぼのうへの御つぼねの小どよりいでさせ給ひけるに、有明の月のいみじうあかゝりければ、見證にこそありけれ、如何あるべからむとおほせられけるを、さりとてとまらせ給ふべきやう侍らず、神璽寶劒わたり給ひぬるにはと、あはたのおとゞ○道兼さはがし申給ひける事は、まだ御門出させ給はざりけるさきに、てんじほうけん手づからとりて、東宮○一條の御方に渡し奉り給ひてければ、かへりいらせ給はん事はあるまじくおぼして、しか申させ給ひけるとぞ、さやけきかげをまばゆくおぼしめしつる程に、月のおもてにむら雲のかゝりて、すこしくらかりければ、わが出家は成就するなりけりとおほせられて、あゆみいでさせ給ふ程に、こき殿の女御の御ふみの日ごろやりのこして、御身もはなたず御覽じけるをおぼしめしいでゝ、しばしとてとりにいらせ給ひけるほどぞかし、あはた殿のいかにかくはおぼしめしたちぬるぞ、たゞ今すぎなばおのづからさはりども、いでまうできなんとそらなきし給ひける、○中略花山寺におはしましつきて、御ぐしおろさせ給ひてのちにぞ、あはた殿はまかりいでゝ、おとゞにもかはらぬすがた今一度見え、かくとあんないも申て、かならずまゐり侍らんと申給ひければ、われをばはかるなりけりとてこそ泣かせ給ひけれ、あはれに悲しきことなりな、日頃よく御弟子にて侍らはんとちぎりすかし申給ひけんがおそろしさよ、東三條殿○道兼父兼家は若さる事やし給ふと危さに、さるべくおとなしき人々、何がしかゞしといふいみじき源氏の武者たちをこそ御送りにそへられたりけれ、京の程はかくれて、堤の渡りよりぞうちいでまゐりける、寺などにてはもしおして人などやなし奉るとて、一尺ばかりのかたなどもぬきかけてまもり申けるとぞ、

〔古事談一王道后宮〕花山院御出家、寛和二年六月廿三日事也、○中略此御出家之發心は、弘徽殿女御恒德公(藤原爲光)女鍾愛之間忽薨逝、仍御悲歎之處、町尻殿○藤原道兼得便宜、書世間無常法文妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者等文

冷泉院御位ノ時、現御心モナク御物狂ハシクノミ御坐ケレバ、ナガラヘテ天下ヲ知召サン事モイカヾト思食ケル、ニ、御弟ノ染殿式部卿宮〇爲平ハ、西宮ノ左大臣ノ御婿ニテオハシケルヲ、能人ニテ渡ラセ給フト申ケレバ、中務丞橘敏延、僧連茂、多田ノ滿仲、千晴ナド寄合テ、式部卿宮ヲ取奉テ東國ヘ趣、軍兵ヲ起、卽位進セント、右近ノ馬場ニテ夜々談議シケル程ニ、滿仲心替シテ此由ヲ奏聞シケルニ依テ、西宮殿ハ被流罪給ニケリ、敏延ハ播磨國ヲ賜ラン、連茂ハ一度ニ僧正ニナラントテ、斯ル事ヲ思ヒ立ケリ、滿仲返リ忠シケル事ハ、西宮殿ニテ敏延ト滿仲ト相撲ヲ取ケルニ、滿仲力劣ニテ格子ニ被抛付顏ヲ打欠タリ、滿仲不安思テ腰刀ヲ抜テ敏延ヲ突ントシケル、敏延高欄ノ根木ヲ引放テ、近付バシヤ頭ヲ打破ラントテ立跨テ有ケレバ、滿仲不及力サテ止ヌ、時ノ人アア源氏ノ名折タリト云ケレバ、敏延ヲ失ハントテ返忠シタリトイヘリ、西宮殿ハ聊モ不知召ケルヲ敏延失ン爲ニ讒訴ノ次ニ、式部卿宮ノ御舅ナレバトテ讒シ申ケルヲ、一條左大臣師尹殊ニ申沙汰シテ、西宮左大臣ヲ流シテ、其所ニ成替給タリケルガ、幾程モナク聲ノ失ル病ヲシ、一月餘リ惱テ失給ニケリ、

〔大日本史贊藪二〕醍醐帝諸皇子傳贊

贊曰、醍醐諸子皆有材器、〇中略源高明失勢觖望、時出怨言、竟爲藤原師尹所傾、禍將不測、讒慝乘之、張大其獄、爲之株連、誣以謀反、則誠冤也、要亦其禍有所從來矣、

〔大日本史贊藪二〕村上帝皇子爲平具平二親王傳贊

贊曰、村上諸子、其稱於世者、爲平具平二親王、而爲平親王以結昏於源高明、不爲攝錄者所喜、帝嘗欲傳位親王、而事多支吾、訖不能成、及外祖藤原師輔薨、益不得志、遂起橘繁延藤原千晴等之變、而高明左降、親王剔髮、勢之不可恃固然矣、

〔大鏡一花山〕寬和二年丙戌六月廿三日の夜、あさましく候し事は、人にもしられさせ給はで、みそか

宮にもたち給ふべきに、西宮殿〈○源高明〉の御むこにておはしますにより、御をとゝの〈圓融院〉つぎの宮にひきこされさせ給へるほどなどの事ども、いといみじく侍り、そのゆゑは、式部卿〈爲平〉御門にゐさせ給ひなば、西宮殿〈高明〉の御ぞうによの中うつりて、源氏の御さかえになりぬべければ、御をぢたちのたましひふかく非道に御おとゝをひきこし申させたてまつらせ給へるぞかし、世のなかにも宮の中にも、殿ばらのおぼしかまへけるをば、いかでかはしらん、次第のまゝにこそはと、式部卿宮の御事を思ひ申たりしに、俄に若宮〈圓融院〉御ぐしかいけづり給へなど御めのとたちに仰せられて、大入道殿〈○藤原兼家〉御車にうちのせたてまつりて、北の陣よりなんおはしましけるなどこそつたへ承りしか、されば道理あるべき御かたの人たちはいかゞはおぼされけん、その此宮たちあまたおはせしかど、ことしもあれ、威儀のみこをさへせさせ給へりしよ、み給へりける人もあはれなる事にこそ申けれ、そのほど西宮殿御心ちよな、いかゞおぼしけん、さてぞかし、おそろしくかなしき御事どもいできにしは、かやうに申も中々にいといとことおろかなりや、かくやうの事は人中にてげらうの中にいとかたじけなし、とゞめさぶらひなん、されどなほわれながらふあひの物にておぼえ候にや、

○按ズルニ、大鏡ニ、おそろしくかなしき御事どもいで來にしかば云々ト云ヘルハ、高明ガ流竄ニ遇ヘルヲ指セルナリ、

〔大鏡三左大臣師尹〕この大臣は、忠平の大臣の五郎、小一條大臣と聞えさすめり、〈○中略〉康保四年十二月に左大臣にうつり給ふ事、西宮の筑紫へ下り給ふ御かはりなり、〈○中略〉その御事のみだれは、この小一條の大臣のいひいで給へるとぞ世の人聞えし、さてその年も過さず、うせ給ふなどこそ申すめりしか、それもまことにや、

〔源平盛衰記十六〕滿仲讒西宮殿事

得歟、一見セバヤト仰事アリケレバ、安候事トテ、後日書一巻持參云々、主上ハ裘ナドニヤト被思召ケルニ賦也ケリ、披御覽ジケレバ、君暗臣諛無所愬トアルヲモ、文盲之間不知之取出云々、伊陟不覺在此事云々、

〔大日本史贊藪二〕醍醐帝諸皇子傳贊

贊曰、醍醐諸子皆有材器、〇中略兼明親王博學能文、饒有曹植之才、居鼎鼐之重、兼傅保之任、施設將有可觀、而關白兼通、欲使從兄賴忠代其位、乃尊之爲親王、其實疏而遠之、爲計深矣、親王不勝讒口之囂囂、賦兎裘以見志、亦可悲矣、世謂其子伊陟闇劣、失對於一條帝、遂以賦獻、此殆不然、縱雖至愚極陋之人、豈有不知賦之爲文、裘之爲物者哉、伊陟官至納言、職兼金吾、又豈有不知文字而可以居獻納之職者哉、當此時、權相用事、轉喉觸諱、親王憤世疾邪之志、無由上達、因帝之問、冀其經覽、果使至尊動容、則寓箴規於嘲笑、明先志於泉壤、見其知而未見其愚也、

〔大鏡一圓融〕つぎのみかど圓融院天皇と申き、〇中略此御門の東宮にたゝせ給ふほどは、いときゝにくゝいみじき事どもこそ侍れな、これはみな人のしろしめしたる事なれば、事もながしとゞめ侍りぬ、

〔讀史餘論一〕按するに大鏡にいふ所は、爲平〇村上皇子、圓融同母兄、を立ずして圓融を太子とし、又源高明を流せし類をさすなるべし、〇中略村上崩じてのち、實賴爲平をすてゝ、圓融を太弟とせし事は、爲平も帝の同母弟なりといへども、源高明〇醍醐皇子が女其妃たれば、爲平もし傳位ならば、高明のために藤氏の權を奪るべしとおもひしが故也、高明終に罪せられしも、世人實賴が此擧を議するもの多きが故にみづから疑懼の心あるが故なるべし、さらば此事は村上始にあやまりて、實賴そのあやまりをかさねし也、

〔大鏡四右大臣師輔〕この后〇村上后安子の御はらには、式部卿の宮〇爲平こそは、冷泉院の御つぎに、まづ東

〔本朝文粹一賦〕兎裘賦幷序　前中書王兼明

余龜山之下、聊卜幽居、欲辭官休身、終老於此、逮草堂之漸成、爲執政者枉被陷矣、君昏臣諛、無處于愬、命矣天也、後代俗士、必罪吾以不遂其宿志、然魯隱欲營兎裘之地而老、爲公子翬被害、春秋之義、贊成其志、以爲賢君、後來君子、若有知吾者、無隱之焉、因擬賈生鵩鳥賦、作兎裘賦以自廣、其詞曰、

赤奮若歲、清和之月、陟彼西山、言採其蕨、吟鵩賦而夕惕、願兎裘而朝發、昔隱公之逢害也、誠在天之棄魯、今我之不肖也、何遭世之顚越、天其何言乎、四時行百物成、問之不言、請對以情、惟天高而地廣、上無始下無極、萬物云生、或消或息、風雨陶冶、寒暑廻薄、千變萬化、有何常則、禍福相須、憂喜不定、榮枯同枝、歌哭同徑、下學人事、上達天命、不憂不喜、其唯上聖歟、伯夷得仁而飢、彼無奈其、盜跖以壽而終、是亦若爲、箕子因縶、比干傷夷、天之與善、其信未知、故柳下三黜而不悔、子仲長往而無歸、況今趙高指鹿之日、梁冀跋扈之時、虎而冠兮、匪常理之可謂、鳥也鏡兮、寧彝倫之所賓、夫劒戟者嫌於柔、不嫌剛而摧折、梁棟者取於直、不取撓而傾危、往哲擧措、無有磷緇、不歠其醨、雖孤漁父之誨、不容何病、可祖顏子之詞、亦夫世有治亂、時有否泰、命有通塞、迹有顯晦、扶桑豈無影乎、浮雲掩而乍昏、叢蘭豈不芳乎、秋風吹而先敗、彼尼父之一望也、歎龜山之蔽魯、靈均之五顧也、繞沅湘而傷楚、欲問明訓於先賢、以鑑幽致於萬古、唐風雖移、猶依稀於舊、漢德縱厭、安謟諛於新、殊恨王風之不競、直道之已湮、聞淫蛙而長歎、悲屈蠖之不伸、俟河清日、浮雲幾春、凡人在世也、殆花上之露、如空中之雲、去留無常、生滅不定、聚散相紛、洶穆糺錯、何可勝云、不語靡言、便是淨名翁之病、知者默也、寧非玄元氏之文、喪馬之老、委倚伏於秋草、夢蝶之翁、任是非於春叢、冥々之理、無適無莫、如々之義、非有非空、嗟乎文王早沒、吾何之恨、已矣已矣、命之衰也、吾將入龜緒之巖隈、歸兎裘而去來、（龜緒便恐龜山也、猶如龜尾之謂之、故云、）

〔古事談六亭宅諸道〕伊陟卿、村上（○村上恐一條誤）御宇、近被召仕之間、主上被仰云、故宮（○兼明）ハ常何事ヲカセラレシト、伊陟申云、ウサギノカワゴロモトカヤ申物ヲコソ常被𢬵候シカト被申ケレバ、定被傳

不能張其威福、而道眞左降、藤原氏獨當國、子孫世握政柄、刑賞黜陟一出於其門、而其弊遂至王室陵夷、豈非帝勇於歸佛、遺落國家、專用精明勤勵之力於傳法灌頂之故耶、

〔皇朝史略五醍醐〕外史氏曰、貞觀以後、藤原氏顓權、而天子拱默受制、紀綱陵遲、宇多帝英明、有見于此、登庸菅原道眞、委以大政、欲以收外戚之權、而張王室之勢矣、然帝一旦去位、而道眞亦以讒去、藤原氏之權滋盛、而不可復收矣、由此觀之、道眞之去就、實係國家之興衰、豈得以一身之故去位哉、

〔日本政記五淳和〕賴襄曰、〇中略國朝至文德以後、則宰執皆外戚爲之、備左右大臣大將、皆以其子弟充之、而列朝紀綱、一廢不復、不問其有才與否也、況望其有武功乎、武事以委源平二氏、又別其品流、至不許昇殿、噫何其與古懸絶也、

〔日本外史一〕外史氏曰、〇中略及藤原氏以外戚世執政權、卿相之位、非其族人不擬、官論品流、因習成俗、庶僚百揆、概世其職、

〔神皇正統記朱雀〕天皇諱は寛明、醍醐十一の子、御母皇太后藤原の穩子、關白太政大臣基經の女なり、〇中略外舅左大臣忠平(昭宣公〈基經〉の二男、後に貞信公といふ、)攝政せらる、〇中略この御時平將門といふ者あり、上總介高望が孫なり、〇中略執政の家に仕奉りけるが、使の宣旨をのぞみ申けり、不許なるによりて憤をなし、東國に下向して、叛逆をおこしてけり、〇中略藤原の純友といふもの、かの將門に同意して、西國にて叛亂せしをば、少將小野好古を遣はして追討せらる、

〔讀史餘論一〕謹按、朱雀の初、東南亂るゝ事、延喜の政衰へし上、外戚の權を專にせしによれる歟、

〔日本外史一〕外史氏曰、自我先王之開國也、非無借亂之臣也、而未有謀危社稷者、獨有一將門焉、〇中略抑使將門得一撿非違使、則未必甘爲反賊、故天慶之亂、皆相門驕傲、壅塞上下之所致也、當其無事也、籠朝廷名爵於私門、而不恤人之失職、及其急也、乃遽掲朱紫、呼號天下、使天下英雄有以窺朝廷、後世源平爭起、以功邀其上者、焉知其不基於此也、

を、まさしく御記をみん人も見あはせたらば、我ものになりてあはれに侍なり、

〔政事要略 三十〕阿衡事

御日記云、仁和四年九月十日云々、朕〇宇多之博士〇橘廣相是鴻儒也、當以太政大臣〇藤原基經令攝政之詔書令此人作之、其詔文華雅遺麗、而徒有阿衡之句、是則群邪所託意、於是公卿以下枉稱有罪之人、〇中略仍召對廣相朝臣與佐世等、詳問其事、佐世以爲引阿衡者、是不預政事之義也、以此答之欲定其事、公卿等皆稱病退出、明日左大臣〇源融進奏曰、太政大臣不聽事已久、速出權謀、改詔書可施行、朕聽此言不肯容許、大臣同請、芒刺不可知、速誅錯可防之未然、朕遂不得志、枉隨臣請、濁世之事如是、可爲長大息也、

〔梅城錄〕浪洗苔鬚知鬼語、春生柳眼悅皇情、才高見忌古皆是、貝錦萋兮誰織成、〇中略記曰、昌泰三年庚申正月三日、帝〇醍醐行幸朱雀院與太上皇〇宇多密議、召菅相府〇菅原道眞獨對有關白詔、相府固辭、因奏有召無事、人必怪訝、即以春生柳眼中爲題獻詩、是日兩帝皇行后宮、各賜御衣、榮曜無比、左大臣〇藤原時平頗變色、聖廟記曰、是年八月、公編三代家集備御覽、帝褒寵賜詩曰、門風自古是儒林、今日文華皆悉金、士林榮之、於是時平公忌菅氏盛名、欲陰中之、詐獨謁帝奏曰、右相有秘謀、陛下未之知乎、蓋欲廢陛下、立皇弟本康親王、而身任天下安危耳、言甚巧、聖聽惑焉、一條天皇正曆壬辰十二月四日、安樂寺託宣記曰、我常思昔、其心不安、事元者、是昌泰三年正月三日、朱雀院行幸日事也、其事漏聽、年内成謀、明年有左遷事、

〔大日本史贊藪 一〕宇多天皇紀贊

贊曰、〇中略源親房稱、寬平之政、有上世無爲之風、良有以也、蓋自清和溺於容寂、委政藤原氏、而相府之權日盛、帝有省於此、故擢菅原道眞於非次、而與藤原時平相並秉政、知人之鑑、經邦之猷、可謂明遠矣、惜其崇信佛教之篤、一效清和之所爲、傳位幼主、遂其初志、幸而守邑有器、嗣主賢明、雖藤原氏

難也、光之於昌邑、以己之意立不當立者、故輙立輙廢、不出一歲、何其易也、基經之於陽成、則以先皇嫡嗣不得不立也、己爲其外舅廢之、非其利也、而廢之不得不廢也、八歲立、輔之七年、其爲之難可知也、光孝以親王爲省卿、異於宣帝之在民間、然其疎遠不著略同、光以丙吉奏記始知之、而基經則預察識其當立矣、光有太后爲之主、有張安世與之謀、基經已無所仰稟也、所共議公卿、如源融源多、槩皆紈袴子、是非其器識有勝於光、何能辨此、光立一宣帝而已、基經又定策宇多、亦所謂當立者也、光薦外孫女於昭帝、又計納女於宣、掩妻邪謀、死不血食、累宣之德、而基經無此事、能保功名、君臣兩美、其純爲社稷不爲私、亦有勝於光者也、基經之勝於光也果矣、雖然其自用專擅、貪於權勢、則同、豈皆不學無術故耶、如其門望滋盛、子孫至僭上蔑君者、雖勢之馴至、非其所得知、不無有所以貽之也、

〔國史纂論三〕禎曰、昭宣公歷事四朝、在職績密、以才望稱、陽成帝狂暴公廢之、擇齒德而立光孝帝、世稱其功、以比之伊霍、然今察其心迹、猶是不免貪權固寵之意、如之何得比之伊霍哉、爲人臣而懷私、以事其上、要君以威權、其罪不亦大乎、

〔愚管抄三〕この小松の御門、○光孝御病おもくてうせさせ給ひけるに、御子あまたおはしましけれども、位をつがせんことをばさだかにもえ仰られず、今われ君と仰らるゝことも此おとゞ○藤原基經のわざなれば、又はからひ申てんと思召けるにや、御病のむしろに昭宣公參り給ひて、今は誰にか御讓さふらふべきと申されけるに、其事也、たゞ御はからひにこそと仰られければ、寛平○宇多は王侍從とて、第三の御子おはしましけるを、それにておはしますべく候、よき君にておはしますべきよし申されければ、かぎりなく悅ばせ給ひて、やがてよびまゐらせて、そのよし申させ給ひけり、寛平御記には、左の手にては公が手をとり、右の手にては朕が手をとらへさせ給ひて、なくなく公恩なことにふかし、よく〳〵是をしらせ給へと申おかれけるよしこそ申おかれたんなれ、なか〳〵かやうのことは、かくその御記をみぬ人までもれきく事のかた端を書付たる

昔長良の男、この天皇の外舅なり、忠仁公の故事のごとし、この天皇性惡にして、人主の器にたへず見えたまひければ、攝政なげきて、廢立のことをさだめられにけり、むかし漢の霍光、昭帝世をはやくしたまひしかば、昌邑王を立て天子とす、昌邑不德にして器にたへず、即廢立をおこなひて、宣帝を立てたてまつりき、霍光が大功とこそ志るしつたへはべるめれ、この大臣まさしき外戚の臣にて、政をもつはらにせられしに、天下のため、大義をおもひてさだめおこなはれける、いとめでたし、さればー家にも人こそおほくきこえしかど、攝政關白は、この大臣のすゑのみぞたえせぬことになりにける、つぎ〳〵大臣大將にのぼる藤原の人も、みなこの大臣の苗裔なり、積善の餘慶なりとこそおぼえはべれ、

〔大日本史贊藪一〕陽成天皇紀贊

贊曰、廢立天地之大變、而開闢以來不有人臣行之者、孝謙皇帝以母廢子、天下猶以淡路帝之無罪爲悲、攝政基經、乃以人臣擅行廢立、而朝野肅然、莫敢支吾、豈非帝之失德有以自取歟、傳云、不有廢也、君何以興、帝之被廢、適光孝之所由興、而權歸相府、功烈震主者、亦兆於斯、究其所以、豈非天地之大變耶、

〔讀史餘論一〕基經外舅の親によりて、陽成を廢し、光孝を建しかば、天下の權歸於藤氏、その後關白を置き、或は置ざる代ありしかど、藤氏の權おのづから日々盛也、二變

〔日本政記六陽成〕賴襄曰、國朝有廢太子、未有廢天子、廢天子自藤原基經始、而當時無異議、後世稱之者何哉、由其門望無比乎、藉其父勢乎、抑其器略神識壓服中外乎、三者皆然、然有大焉者、曰所廢當廢者也、所立當立者也、立當立者、而廢當廢者、雖無三者、天下將服之、況有三者、藉而行之、如以巨艦大帆乘順風壯潮、誰能禦之哉、基經不必知古有霍光者也、而能爲光之所爲、豈非大臣慮社稷者有所暗合耶、而吾以基經爲勝於光也、夫光不及基經之負望者、則基經此舉宜如易於光也、而其實爲

惟高親王ハ御位叶ハザリケレバ、小野里ニ引籠給ケリ、小野親王トハ是也、又ハ持明院トモ申ケリ、（○中略）其ヨリシテ山門ノ訴狀ニハ、今ノ代マデモ、慧亮碎腦、尊意振劍トハ書トカヤ、（○又見元亨釋書）

〔本朝通紀〕永井定宗曰、親王（○淸和）生而僅九月、立爲太子、當此時惟喬既四歲、固宜立矣、而立惟仁者、以其爲攝政良房之外孫故也、天皇雖欲立惟喬、豈能得乎、而釋師鍊謂、二皇子爭儲位、帝令鬪藝勝者得位、乃賭競馬相撲、惟喬有力士名虎、惟仁有力士善雄、名虎膂力甚强、惟仁使僧惠亮祈、善雄乃得勝、於是惟仁立爲儲貳、行長之記亦載此事、然名虎之死、已在惟仁不生之前、則其虛誕可知、唯是浮屠夸說其祈驗、而人人吠虛傳訛耳、豈足信也哉、

〔讀史餘論一〕神皇正統記に、光孝より上つかたは、一向上古也、萬の例を勘ふるも、仁和より下つかたをぞ申める、五十六代淸和幼主にて外祖良房攝政す、其外戚專權の始（一變）

〔三代實錄二十九淸和〕貞觀十八年十一月廿九日壬寅、是日天皇讓位於皇太子、（○陽成）勅右大臣從二位兼行左近衞大將藤原朝臣基經、保輔幼主、攝行天子之政、如忠仁公（○藤原良房）故事、

〔愚管抄一光孝〕陽成院御物氣歟、於事勿論之御事也、仍外舅昭宣公（○藤原基經）大臣以下相談して、此御門（○光孝）を位に即まゐらせらる、

〔愚管抄三〕この陽成院、九にて位に卽て八年、十六までの間に、昔の武烈天皇の如く、なのめならずめざましくおはしましければ、をぢにて昭宣公基經は、攝政にて諸の僉議有て、是はいかゞは國主とて、國をも治めおはしますべきとてなんおろしまゐらせんとて、やう〳〵に定めありけるに、仁明の御子にて、時康の親王（○光孝）とて、式部卿宮にておはしましけるをむかへとりて、位に卽まゐらせられけり、

〔神皇正統記陽成〕天皇諱は貞明、淸和第一の子、御母は皇太后藤原の高子、（二條の后と申す）贈太政大臣長良のむすめなり、丁酉のとし卽位改元、右大臣基經攝政して太政大臣に任ず、（この大臣は良房の猶子なり、實は中納

立皇子也、于細ニヤ及バセ給ソベキト平ニ被内奏ケリ、此事誠ニ難題ニテ、公卿僉議アリ、就勝負御位ヲ可被進トテ、初ニハ八幡ニ臨時ノ祭ヲ居テ、十番ノ競馬アリ、四番ハ一宮ニ付、六番ハ二宮ニ付、此上ハ惟仁親王御位ニ即給ノベカリケルヲ、天皇猶御心不飽思召ケレハ、後ニハ大内ニシテ相撲ノ節會ヲ被行テ、重テ勝負ノ有叡覽、可有御讓ト議奏有ケレバ、惟高ノ御方ニハ即外衛左兵衛佐名虎參ケリ、恩愛ノ道コソ哀ナレ、今年三十四、太ク高ク七尺計ノ男、六十人ガ力アリト聞ユ、惟仁ノ御方ニハ能雄少將トテ細ク小キ男、行年二十一、ナベテノ力人ト聞ユレ共、名虎ニハ可敵對モノニ非ズ、去共果報冥加ハ、二宮ノ奉任御運トテ、不敵ニ申請テゾ參ケル、旁有御祈師、一宮ノ御方ニハ東寺ノ柿本ノ眞濟僧正也、徳行高ク顯レテ、修驗擧廣ク、天皇御歸依ノ僧ナリケレバ、名虎是ヲ奉語付ケリ、二宮御方ニハ延暦寺惠亮和尚也、行業年ヲ重テ、薫修日新也、忠仁公ト深ク師壇ノ契ヲ結給ケルニ依テ被奉付ケリ、惠亮ハ西塔寶幢院ニ壇ヲ搆テ、大威德ノ法ヲ修セラレケリ、眞濟ハ東寺ニ壇ヲ立テ、降三世ノ法ヲ行給ケリ、〇中略既其日時ニ成ケレバ、名虎ト能雄ト出合タリ、殆金剛力士ノ如シ、〇中略名虎勝ヌト見エケレバ、一宮ノ御方ヨリハ東寺ヘ使ヲ被立ケリ、忠仁公ヨリハ二宮ノ御方既危ク侍ト、使者ヲ山門ヘ被立事、追繼追繼ニ櫛ノ齒ノ如シ、和尚コハ心苦キ事哉、此時不覺ヲ我山ニ殘サン事口惜カルベシ、二宮ニ即給ハズバ、命生テモ何カハセントテ、犢ノ盛念力ヲ抽デツヽ、爐壇ニ立タル劔ヲ拔キ、健把テ自頭ヲ突破、腦ヲ摧キ芥子ニ入レ、香ノ煙ニ燃具シテ、歸命頂禮大聖大威德明王、願ハ能雄ニ力ヲ付給ヒ、勝事ヲ即時ニ令得給ヘト、黑煙ヲ立テ汗ヲ流シテ、揉ニ揉デゾ祈給ソ、〇中略名虎〇中略身ノ力落テ心惘然トシテ覺ユケル處ヲ、能雄名虎ヲ脇ニ引挾、南庭ヲ三廻シテ、其後曳ト云ソテ擲タレバ、名虎大地ニ被打付テ、血ヲ吐テ不起上、藏人等走寄、大内ヨリ舁出シテ家ニ返シ遣タリケレバ、三日有テ死ニケリ、惠亮腦ヲ摧シカバ、能雄ニ力ハ付ニケリ、名虎相撲ニ負シカバ、惟仁位ニ即給ソ、清和帝ト申ハ彼親王ノ御事也、

被命云、天安皇帝、有讓寶位于惟喬親王之志、太政大臣忠仁公〇藤原良房憚思不出自口之間、漸經數月云々、或祈請于神祇、又修秘法祈于佛力、眞濟僧正者爲小野親王〇惟喬祈師、眞雅僧都者爲東宮〇清和護持僧云々、各專祈念互令相催云々、

〔大日本史贊藪二〕文德皇子惟喬親王傳贊

贊曰、立適以長不以賢、立子以貴不以長、古之道也、蓋諸母皆同埒、則母以子貴、嫡母所生、則子以母貴、義竝行而不相悖、故正嫡有子、則庶子雖長不得立、亦甚明矣、惟喬親王文德之長子、而帝無正嫡、則嬪御皆同埒也、曷爲不立親王爲儲貳、而立幼冲之淸和、是有所畝而然也、淸和所生藤原氏、以相國良房之女、位次稍貴於親王所生紀氏、然未至如魯隱公之母賤而桓公之母貴也、既立其子爲太子、曷爲不立其母爲皇后、六宮爭寵、勢有所不可也、然則曷爲舍親王而立淸和、良房之權重也、帝嫌太子之弱、而欲權立親王以待其長、此又不可行者也、使帝有明斷、則不畏良房之權、立親王以從長子守器之義、不然速正藤原氏之位號、以明嫡庶之分、不由此道、而優柔不斷、既立之又欲易之、此殆啓釁端也、豈不危哉、幸而帝納源信之諫、國本不動搖、此社稷之福也、

〔源平盛衰記三十二〕惟高惟仁位論事

昔文德天皇ノ御子ニ、惟高親王惟仁親王トテ、御兄弟二人御坐ケリ、惟仁ハ第二ノ皇子、惟高ハ第一ノ皇子也、互ニ御位ヲ御意ニ懸サセ給ヘリ、天皇モ分ル御方ナク難棄御事共ニテ、叡慮思召煩ハセ給ヘ共、御嫡子ナレバ惟高親王トゾ内々ハ被思召ケル、第一皇子惟高親王ト申ハ、御母ハ從四位左兵衞佐名虎ガ女、從四位上紀靜子ト申、第二皇子惟仁親王ト申ハ、御母ハ太政大臣良房忠仁公御女藤原明子、後ニハ染殿后ト申是也、一宮ノ御事ヲバ、外祖紀名虎取立奉ラントテ、帝運ノ可然ニテ第一皇子ニ出來御坐セリ、御恙ナシ、サレバ御位ハ此公ニコソハ頻ニ内奏申ケリ、二宮ノ御事ヲバ、外祖ニテ忠仁公奉取立トテ、一宮ハ落胤腹名虎ガ御女也、次弟ハ是執柄家ノ御女后

不然文德何以不敢立所愛長子、而立生甫九月之嬰兒乎、至如源常源信並以嵯峨子位與良房抗、使一發異議、天子將倚以爲重、乃甘附和之、以成其勢、何取於宗室大臣也、豈亦以己爲良房舅而私之耶、其後平清盛之暴進官爵、由於後白河之欲立愛子、而當時朝臣連姻平氏者黨焉、其情同也、

〔大鏡裏書〕四品惟高親王東宮諍事

文德天皇第一皇子、母從四位下紀靜子、正四位下名虎女、嘉祥三年十一月廿五日戊戌、惟仁親王(清和)爲皇太子、誕生之後九箇月也、先是有童謠云、大枝(於)超(天)奔超(天)、騰(加利)躍(上利)超(天)、我(耶)護(て留)田(仁耶)捜(阿佐)留、食(母)志岐(耶)、雌雉(伊)志岐(耶)、識者以爲大枝謂大兄也、是時文德天皇有四皇子、第一惟高、第二惟條、第三惟彥、第四惟仁、天意若曰超三兄而立、故有三超之謠焉、承平元年九月四日夕、參議實賴朝臣來也、談及古事、陳云、文德天皇最愛惟高親王、于時太子幼沖、帝欲先暫立惟高親王、而太子長壯時、還繼洪基、其時先太政大臣(藤原良房)作太子祖父爲朝重臣、帝憚未發、太政大臣憂之、欲之使太子辭讓、是時藤原三仁善天文、諫大臣曰、懸象無變、事必不遂焉、爰帝召信大臣清談良久、乃命以立惟高親王之趣、信大臣奏曰、太子若有罪須廢黜、更不還立、若無罪亦不可立他人、臣不敢奉詔、帝甚不悅、事遂無變、無幾帝崩、太子續位、後應天門有火、良相右大臣、作大納言計謀、欲退信左大臣、其參陣座、時後太政大臣(藤原基經)爲近衞中將兼參議、良相大臣急召之仰云、應天失火、左大臣所爲也、急就第召之、中將對云、太政大臣知之歟、良相大臣云、太政大臣偏信佛法、必不知行如此事、中將則知太政大臣不預知之由、報云、事是非輕、不蒙太政大臣處分、難輙承行、遂辭出到職曹司令啓、太政大臣驚、令人奏曰、左大臣是陛下之大功之臣也、今不知其罪忽被戮、未審因何事、若左大臣必可見誅、老臣先伏罪、帝初不知聞、大驚怪、報詔以不知之由、於是事遂定矣、爾後太政大臣薨、清和天皇爲之期中不擧樂云々、此等事皆左相公所語也、

〔江談抄(二雜事)〕天安皇帝(文德)○有讓位于惟喬親王之志事

橘逸勢伴健岑等謀反之由、日暮不得聞窮、〇中略乙卯、勅使左近衛少將藤原朝臣良相、率近衛卅人圍守皇太子直曹、〇中略是日詔曰、〇中略不慮外爾太上天皇〇嵯峨崩御流依天、晝夜止无久哀迷比焦禮御坐須、春宮坊乃帶刀舍人伴健岑伊、隙仁乘天與橘逸勢合力天逆謀乎構成天國家乎傾亡无止須、此事乎波皇太子波不知毛在世止、不善人仁依天相累事波自古利言來留物奈利、又先先仁毛令法師等天呪咀止云人多安利、而止毛隱蔽乎撥求女无事乎不欲之天奈毛抑忍太留、又近日毛或人乃云、屬坊人等毛有謀止云、若其事乎推究波、恐波不善事乃多有无事乎、加以後太上天皇〇淳和乃厚御恩乎顧天那毛究求女无事乎不知奴、今思保佐久波、直仁皇太子乃位乎停天、彼此無事波善久有部之止思保之女須、又太皇太后乃御言仁毛如此久奈毛思保世留、故是以皇太子乃位乎停退介賜不、又可知事人止爲天奈毛大納言藤原朝臣愛發乎波廢職天京外仁、中納言藤原朝臣吉野乎波太宰員外帥仁、春宮坊大夫文室朝臣秋津乎波出雲國員外乃守留仕賜比宥賜不止宣天皇我御命乎衆聞食與止宣、丙辰、廢皇太子、

〔日本政記六仁明〕賴襄曰、國家盛衰之機、每由於繼續之際、不可不深察也、繼續之爲事大矣、而難言也、愛憎主其中、而黨援乘其外、大利所在、大禍所伏也、不斷以公道、而挾私用術、自謂濟其志、而適爲大姦之地者、往々而然、〇中略仁明生文德、出於藤原氏、生十四而淳和崩、又二年嵯峨不豫、罷橘氏公右大將、以藤原良房代之、四日而嵯峨崩、翌日葬之、其明伴橘之獄起、噫何其速也、據獄詞所傳、則伴橘爲不軌矣、而不可盡信也、至其曰二上皇登遐、太子不得安、則當時之情已、廢太子初請遜而不得、流涕太息、及其受圖曰、吾知有此事久矣、則仁明之心不可掩也、良房者、新太子〇文德之母之兄也、故仁明引以爲之羽翼、又納良房女於東宮、帝崩文德立之月、淸和生、生而九月、立爲太子、七年而超拜良房爲太政大臣、帶劍上殿、其明年文德夭、而髫齔之天子立、外祖攝政焉、亦何速也、而後王室之事、不可復詰矣、夫大臣託孤、何世無之、當用天下之英賢焉、何必賴外戚乎、是亦私心焉爾、論者以爲王室之衰、由文德以幼主爲嗣、余則曰、由仁明之用私於繼續之際而已、至文德之時、則藤原氏勢已成矣、

雜物宜悉收之、即遣使固守三關、○中略此夜押勝走近江、官軍追討、　丙午、高野天皇勅、今聞逆臣惠美仲麻呂、盜取官印已逃去者、忝爲人臣、彪承厚寵、寵極禍滿、自陷淫○一本淫作深刑、仍復却略愚民欲爲僥倖、若有勇士、自能謀計、急爲剪除者、即當重賞、　壬子、軍士石村村主石楯斬押勝、傳首京師、押勝者、近江朝内大臣藤原朝臣鎌足曾孫、平城朝贈太政大臣武智麻呂之第二子也、率性聰敏、略涉書記、○中略天平六年授從五位下、歷任通顯、勝寶元年至正三位大納言兼紫微令中衞大將、樞機之政、獨出掌握、由是豪宗右族皆妬其勢、寶字元年橘奈良麻呂等謀欲除之、事涉廢立、反爲所滅、其年任紫微内相、二年拜太保、優勅加姓中惠美二字、名曰押勝、賜功封三千戸田一百町、特聽鑄錢擧稻、及用惠美家印、四年轉太師、其男正四位上眞光、從四位下訓儒麻呂、朝獦、並爲參議、從五位上小湯麻呂、從五位下薩雄、辛加知、執棹、皆任衞府關國司、其餘顯要之官、莫不姻戚、獨擅權威、猜防日甚、時道鏡常侍禁掖、甚被寵愛、押勝患之、懷不自安、乃諷高野天皇爲都督使、掌兵自衞、准據諸國試兵之法、管内兵士、毎國二十人、五日爲番、集都督衙、簡閲武藝、奏聞畢後、私益其數、用太政官印而行下之、大外記高丘比良麻呂、懼禍及己、密奏其事、乃收中宮院鈴印、遂起兵、及其夜相招黨與、遁自宇治、奔據近江、○中略官軍攻擊之、押勝衆潰、獨與妻子三四人乘船浮江、石楯獲而斬之、及其妻子從黨三十四人、皆斬之於江頭、第六子刷雄以少修禪行免其死、而流隱岐國、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年七月己酉、是日春宮坊帶刀伴健岑、但馬權守從五位下橘朝臣逸勢等、謀反事發覺、令六衞府固守宮門幷内裏、遣右近衞少將從五位上藤原朝臣富士麻呂、右馬助從五位下佐伯宿禰宮成、率勇敢近衞等、各圍健岑逸勢私廬、捕獲其身、○中略先是彈正尹三品阿保親王緘書上呈嵯峨太皇太后、太后喚中納言正三位藤原朝臣良房於御前、密賜緘書以傳奏之、其詞曰、今月十日伴健岑來語云、嵯峨太上皇今將登遐、國家之亂在可待也、請奉皇子○皇太子恒貞入東國者、書中詞多、不可具載、　庚戌、遣參議從四位上左大辨正躬王、參議從四位上右大辨和氣朝臣眞綱於左衞門府、推鞫

比物等、將六衛兵圍長屋王宅、　壬申、巳時遣一品舍人親王、新田部親王、大納言從二位多治比眞人池守、中納言正三位藤原朝臣武智麻呂、右中辨正五位下小野朝臣牛養、少納言外從五位下巨勢朝臣宿奈麻呂等、就長屋王宅、窮問其罪、　癸酉、令王自盡、其室二品吉備内親王、男從四位下膳夫王、無位桑田王、葛木王、鉤取王等同亦自縊、乃悉捉家内人等、禁著於左右衞士兵衞等府、　丙子、勅曰、左大臣正二位長屋王、忍戾昏凶、觸途則著、盡慝窮姧、頓陷疎網、苅夷姧黨、除滅賊惡、宜國司莫令有衆、仍以二月十二日依常施行、

〔日本政記四聖武〕賴襄曰、○中略聖武之爲太子、舍人新田部二親王、並以祖叔父輔佐之、稍習聽政、然後元正禪之位、豈非謂其已堪負荷矣哉、然卽位未周月、輙事巡遊、當此時太白數晝見、蝦夷叛、發九國兵伐之、將帥未復命、而車駕復南矣、所以消災異者、讀經度僧而已矣、長屋王之獄、發於倉卒、不讞而決、莫能審其由、○中略則帝之不君柔暗、不待智者而知也、橘諸兄身爲大臣、而不能匡救、不足深責也、獨怪二親王、久居輔儲之任、及其未立、必睹其不君之質矣、何不白元正廢昏立明、以二親王之資望、烏有不可爲哉、不能睹其不君乎、不明也、睹其不君而不能決廢立乎、不斷也、豈其衰邁耄耋、不能有爲邪、抑勢有不可也、何哉、帝者藤原氏之出也、鎌足之勳在於社稷、不比等歷事四朝、身生二后、朝廷崇寵之至、欲拜太政大臣而爲帝之大援、所以不可搖焉、烏知非長屋王之賢、嘗擬易儲、戚畹所諱、而讒間入之哉、故將兵圍其第、就焉窮治者、皆不比等之子也、而二親王不敢爲別白焉、其事情可見也、○中略是君權所以漸下移、非待文德淸和而然也、

〔續日本紀二十五淳仁〕天平寶字八年九月乙巳、太師藤原惠美朝臣押勝逆謀頗泄、高野天皇○孝謙遣少納言山村王、收中宮院鈴印、押勝聞之、令其男訓儒麻呂等邀而奪之、天皇遣授刀少尉坂上苅田麻呂、將曹牡鹿嶋足等射而殺之、押勝又遣中衞將監矢田部老被甲騎馬、且刧詔使、授刀紀船守亦射殺之、勅曰、太師正一位藤原惠美朝臣押勝幷子孫、起兵作逆、仍解免官位、幷除藤原姓字已畢、其職分功封等

國之民、並百八十部曲、預造雙墓今來、一曰大陵、爲大臣墓、一曰小陵、爲入鹿臣墓、望死之後、勿使勞人、更悉聚上宮乳部之民、（乳部、此云美文、）役使塋兆所、於是上宮大娘姫王、發憤而歎曰、蘇我臣、專擅國政、多行無禮、天無二日、國無二王、何由任意悉役封民、　二年十月壬子、蘇我大臣蝦夷、縁病不朝、私授紫冠於子入鹿、擬大臣位、復呼其弟曰物部大臣、大臣之祖母物部弓削大連之妹、故因母財取威於世、　三年十一月、蘇我大臣蝦夷兒入鹿臣、雙起家於甘檮岡、稱大臣家曰宮門、入鹿家曰谷宮門、（谷、此云波佐麻、）稱男女曰王子、家外作城柵、門傍作兵庫、毎門置盛水舟一、木鉤數十、以備火災、恒使力人持兵守家、大臣使長直於大丹穗山造桙削寺、更起家於畝傍山東、穿池爲城、起庫儲箭、恒將五十兵士、繞身出入、名健人曰東方儐從者、氏氏人等、入侍其門、名曰祖子孺者、漢直等全侍二門、

〔神皇正統記 皇極〕この時に蘇我蝦夷の大臣、（馬子大臣の子）ならびにその子入鹿、朝權を專にして、皇家を蔑にする心あり、その家を宮門といふ、諸子を皇子となんいひける、上古よりの國記重寶、みな私宅に運び置きてける、中にも入鹿悖逆の心甚し、聖德太子の御子達の科なくましましゝをも滅し奉る、こゝに皇子中大兄（天智○）と申すは、舒明の御子、やがてこの天皇御所生なり、中臣鎌足連といふ人と心を一にして入鹿を殺しつ、父蝦夷も家に火をつけてうせぬ、國記重寶はみな燒にけり、蘇我の一門久しく權をとれりしかども、積惡の故にや皆滅びぬ、

〔國史纂論 二〕禎曰、我朝外戚之專權、蘇我氏爲始也、前朝寵馬子太過、遂至於使蝦夷父子謀僭逆矣、書曰、罔啓寵納侮、觀彼歷代外戚專權、宦官肆橫、藩鎭跋扈之類、皆其始啓寵以納侮者也、而其勢既極、則至於不可圖焉、人君操縱之術、不可不謹其微矣、

〔續日本紀 聖武十〕天平元年二月辛未、左京人從七位下漆部造君足、无位中臣宮處連東人等、告密稱左大臣正二位長屋王、私學左道、欲傾國家、其夜遣使固守三關、因遣式部卿從三位藤原朝臣宇合、衛門佐從五位下佐味朝臣虫麻呂、左衛士佐外從五位下津嶋朝臣家道、右衛士佐外從五位下紀朝臣佐

古事類苑

帝王部二十七

外戚下

〔扶桑略紀崇峻三〕五年壬子二月、天皇密勅皇子、〇厩戸言、蘇我馬子内縦私欲、外假驕飾、雖與如來之教、誠無忠義之情、爲之如何、皇子奏曰、忍辱德深、陛下宜行慈忍矣、

〔日本書紀崇峻二十一〕五年十月丙子、有獻山猪、天皇指猪詔曰、何時如斷此猪之頸、斷朕所嫌之人、多設兵仗、有異於常、壬午、蘇我馬子宿禰、聞天皇所詔、恐嫌於己、招聚儻者、謀弑天皇、十一月乙巳、馬子宿禰詐於羣臣曰、今日進東國之調、乃使東漢直駒弑于天皇、〇中略或本云、大伴嬪小手子、恨寵之衰、使人於蘇我馬子宿禰曰、頃者有獻山猪、天皇指猪而詔曰、如斷猪頸、何時斷朕思人、且於內裏大作兵仗、於是馬子宿禰聽而驚之、

〔神皇正統記崇峻〕崇峻天皇は欽明第十二の子、御母は小姉君娘、これも稲目の大臣の女なり、〇中略ある人いはく、外舅蘇我馬子の大臣と御中惡しくて、かの大臣のためにころされ給きともいへり、

〔日本書紀推古二十二〕三十二年十月癸卯朔、大臣〇蘇我馬子遣阿曇連、闕名阿倍臣摩侶二臣、令奏于天皇曰、葛城縣者、元臣之本居也、故因其縣爲姓名、是以冀之、常得其縣、以欲爲臣之封縣、於是天皇詔曰、今朕則自蘇我出之、大臣亦爲朕舅也、故大臣之言、夜言矣則夜不明、日言矣則日不晩、何辭不用、然今當朕之世、頓失是縣、後君曰、愚癡婦人臨天下、以頓亡其縣、豈獨朕不賢耶、大臣亦不忠、是後葉之惡名、則不聽、

〔日本書紀皇極二十四〕元年、〇中略是歲蘇我大臣蝦夷、立己祖廟於葛城高宮、而爲八佾之儛、〇中略又盡發擧

古事類苑

帝王部二十七

外戚下

又御子ども中關白殿〇道隆わはた殿〇道綱法成寺入道殿〇道長これふたゝびなり、ちかくは法性寺殿の御子ども、六條殿もとざね松殿もとふさ月輪殿、兼實是ぞやがていまの峯殿〇道家の御おほぢよ、かやうの事いとたまく〳〵あれど、わはた殿もせんじかうぶり給へりしばかりにて、七十にてうせ給ひにしかば、天下執行し給ふにおよばず、松殿の御子もろいへのおとゞ、夢のやうにて土かも一代にてやみたまひにき、いづれも御すゑまではおはせざりしに、この三所の御後のみいまにたえず、御ながれ久しきふぢなみにて、たちさかえたまへるこそたぐひなきやんごとなさなめれ、すゑのよにもありがたくや侍らん、今の攝政殿をば、のちには圓明寺殿〇實經とぞきこゆめりし、一條殿の御家のはじめなり、攝政にて二とせばかりおはしき、女院〇後嵯峨后姞子、の御父〇藤原實氏も太政大臣になりたまひて、手車ゆり給ふ、さるべき事といひながらいとめでたし、

るは、治承三年の冬より、いかなるべしとも思ひわかで、佛神に祈りて、攝籙の先途には必ず達すべき告有て、十年の後けふ待つけつるといはれけり、十六日やがて拜賀せられにけり、其夜ことに匠はりたりけり、さて後法皇(後白河)には、心ぼそげに見參に入ておりければ、我はかくなにとなきやうなる身なれど、世をば久く見たり、はゞからずたゞよかつんさまにおこなはるべき也など仰有て、おぼえの丹後と云は、淨土寺二位宣陽門院(後白河皇女)の御母也、出ゐはせなどして在けり、

〔保暦間記〕建久三年三月十三日法皇崩御ナル、後追號ヲバ後白河院ト申、保元ヨリ打續キ世亂レテ、御心安キ事モ無テ、年ヲ送セ御坐キ、是末代ニ成リヌル故ニ、皇法ノスタレ行ト覺エタリ、主上(後鳥羽)幼帝ニ坐シケレバ、昔ノ如ク攝政(兼實公、月輪殿)、政事ヲ仕給ケリ、大方ハ一向關東ノ任ニゾ成ケル、

〔公卿補任(順德)〕攝政正二位藤道家　承久三年四月廿日、詔氏長者、依新帝(九條)外舅也、

〔愚管抄(仲恭二)〕攝政左大臣道家(中略)外祖外舅、爲大臣之時、雖不歷二補致之例、道理必然、宣命云々、

〔百練抄(四條)〕嘉禎元年三月廿八日辛酉、前關白(藤原道家)被還補攝政云々、希代例也、

〔保暦間記〕天福元年十二月二日主上(後堀河)ノ一宮(四條)ニ讓國アリキ、先帝ヲバ後堀川院ト申テ、院中ニテ政ヲセサセ給フ處ニ、同二年文暦元年也、八月六日崩御成セ給ツ、當今僅四歳ニ成セ給ケリ、幼帝ニテ爲渡給ケレバ、關白道家昔ノ如ク攝政シ給ケリ、關東ノ將軍(賴經)モ此息男ニテ御坐シケレバ、公家武家一ニテゾ有ケル、

〔增鏡(五內野の雪)〕寛元も四年になりぬ、正月廿八日春宮(後深草)に御位ゆづり申させ給ふ、この御門も又四にぞなつせ給ふ、めでたき御ためしどもなれば、行すゑもおしはかられ給ふ、光明峯寺殿(道家)御三郎君、左大臣さねつねのおとゞ、御とし廿四にて攝政し給ふ、いとめでたし、御あにの福光園院殿(良實)、もと關白にておはしつる、うらみてまふ〳〵におはしけれどちからなし、御はらから三人までせつろくにゐたまへるためし、ふるくは謙德公(伊尹)、忠義公(兼通)、東三條大入道殿(兼家)その

うけ給りに參り候、いかゞと申ければ、その事なり、攝政はさればいか成べきぞと仰有て、無左右如本とこそはあるべけれと仰られけるを、たゞ〳〵とさうなく稱唯して、やかて束帶さはらとならして立ければ、そのうへをばともかくも仰られず、やがて殿下參りて、例にまかせてとく行はれ候べきよし御氣色候と申て、ひし〳〵と行はれにけり、如元とこそはあるべけれども、公實が申やうはなど仰られんと思召けるを、あまりにこはいかにあるべくもなき事かなど、かさどりていかでかさる事候べきと思ひけるにや、九條の右丞相（師輔）の子なれ共、公季思ひもよらで、その子孫實成公成實季と五代までたえはてゝ、ひとへの凡夫にてふるまひて、代々をへて、攝政にはさやうの人のいるべきほどのつかさかは、さる事は又むかしも今もあるべきことならずと、親疎遠近、老少中年、貴賤上下、思ひたることをいさゝかも思召煩ふは、あさましきことかなと思けるなるべし、さりとて又公實の和漢の才に富て、北野天神の御跡をもつぎ、又知足院殿（忠實）に人がらやまと魂のまさりて、識者も實資などやうに思はれたらばやはあらんずる、たゞ外舅になりたるばかりにて、まさしき攝籙の子孫にだにへぬ人こそおほかれ、いかに公實もさほどには思ひよりけるにか、又君も思召煩らふべき程の事かはとて、この物語はみそか事にて、うちまかせてよの人のしりてさたする事にては侍らぬなめり、されどせめて一節を思て、家をおこさんと思はんも、我身になりぬれば誠に又大臣大納言の上臈などにて、外祖外舅なる人の攝籙の子孫なるが、執政の臣に用ゐられぬことは一度もなければ、さほどにも思よりけるにや、あまねき口外にはあらねども、かくこそ申つたへたれ、

〔愚管抄六〕九條の右大臣（兼實藤原）は、文治二年三月十二日につひに攝政の詔、氏の長者と仰下されにけり、去年十二月廿九日より、内覽臣許にて、我も人も何ともなく思てありけるに、かく定りにければ、世の中の人も、げに〳〵しき攝籙の臣こそ出きたれと思へりけり、さて右大臣いはれけ

（白河）位につかせ給しにも又關白にならせ給しかば、四代のみかどの關白にて、ふたゝび攝政と申き、昔もいとたぐひなきことにこそ侍りけめ、おほきおとゞにもふたゞひなり給へりし、いとありがたく侍りき、

〔續世繼五ふぢのはつ花〕攝政前右大臣（藤原基實）とてちかくおはしまししは、法性寺のおとゞ（忠通）の太郎にぞおはしましゝ、（中略）二條のみかどくらゐにつかせ給しに、ちゝおとゞのゆづりにて、保元三年三月十六日關白になり給、御年十六とぞきこえ侍し、むかしよりかくきびはにてなり給へる一の人、これやはじめにておはしますらん、からくにゝ甘羅といひける人は、十二にてぞ大臣になり給ける、よの人をさなしとも申さゞりけり、人によるべきことにこそ侍めれ、（中略）永萬元年六月みかどくらゐ、みこ（六條）にゆづり奉らせ給し日、攝政にならせ給ふ、

〔愚管抄四〕鳥羽院踐祚の時、御母は實季のむすめなり、東宮大夫公實は外舅にて、攝籙の心ありて、家すでに九條右丞相の家にて候、身大納言にて候、いまだ外祖外舅ならぬ人、踐祚にあひて攝籙する事候はず、さ候はぬたび／＼は、大臣大納言などにその人候はぬ時こそ候へと白川院にせめ申けり、我御身も公成のむすめの腹にて、ひき思召御心やふかゝりけん、思召煩ひて御思案あらんとや思召けん、御前へ人のまゐる道を三重までかけまはして、御とのごもりけり、其時今日すでに其日なり、未催なんどもなし、こはいかにとおどろき思ひて、其時の御うしろみ、さうなき院別當にて俊明大納言ありければ、束帶を正しくさうぞきてまゐれりける、御前さまの道みなとぢたりければ、こはいかにとてあらゝかに引けるを、うけ給りてかけたる人いできて、かうかうといひければ、世間の大事申さんとて俊明がまゐるに、猶かけよと云仰はいかでかあらん、ただあけよといひければ、皆あけてけり、近くまゐりてうちしはぶきければ、誰と問せ給ふに俊明となのりければ、何事ぞと仰ありければ、御受禪の間の事いかに候やらん、日も高くなり候へば

長和五年正月廿九日、受禪於京極亭、即以外祖父左大臣爲攝政、

〔榮花物語十五疑〕殿の御まへ〇道長世しりはじめさせ給てのち、御門は三代にならせ給、わが御世は廿三四年ばかりにならせ給に、みかど〇後一條わかうおはしますときは攝政と申、おとなびさせ給ふをりは關白と申ておはしますに、このころ攝政をも御一男、たゞいまの内大臣〇頼通に讓きこえさせ給て、我御身は太政大臣の位にておはしますをも、つねにおほやけにかへし奉らせ給へど、おほやけさらにきこしめしいれぬに、たび／＼わりなくてすぐさせ給、御心にはすさまじうおぼさるゝ事かぎりなし、

〔日本紀略十三後一條〕寛仁三年十二月廿二日甲辰、攝政内大臣〇藤原頼通上表、謝攝政、即詔停攝政、令關白萬機、〇中略 廿八日庚戌、令關白内大臣以攝政儀行官奏除目、

〔愚管抄四〕宇治殿〇藤原頼通は後一條後朱雀後冷泉三代の御門の外舅にて、五十年ばかり執政の臣にておはしけり、後冷泉のすゑに、攝政を大二條殿〇教通と申は、宇治殿の御弟也、てゝの御堂〇道長もよき子とおぼして、宇治殿にもおとらずもてなされけるが、年七十にて左大臣なりけるを我御子には道房の大將とて、かぎりなくみめよく人用ゐたりける御子の、廿にてうせられける後、京極の大殿師實は、むげにわかき人にてありければ、越れむ事のいたましくおぼさるゝ程の器量にて、大二條殿ありければ讓らせ給ひけるを、世の人宇治殿の御高名、善政の本體と思へりけり、

〔續世繼五みかさの松〕ちかくおはしましゝ法性寺のおとゞ〇藤原忠通は、〇中略保安二年のとし關白にならせ給ふ、御とし廿五にぞおはしましゝ、同四年正月に、さぬきのみかど〇崇徳くらゐにつかせ給しかば攝政と申き、みかどおとなにならせ給て關白と申しほどに、近衛のみかど位につかせ給しかば、又攝政にならせ給ひき、久壽二年七月この衛のみかどかくれさせ給ひて、この一院〇後

そうせさせ給ひければ、むづかしうやおぼしめされけん、後にはわたらせ給はざりけり、されば、うへの御つぼねにのぼらせ給ひて、こなたへとは申させ給はで、我よるのおとゞにいらせ給ひて、なく〳〵申させ給ふ、その日は入道殿はうへの御つぼねに候はせ給ふ、いとひさしういでさせ給はねば、御むねつぶれさせ給ひける程に、とばかり有て、とおしあけていでさせ給へりける御かほは、おかみぬれつやめかせ給ひながら、御くちは心よくゑませ給ひて、おはやせんぜくだりぬとこそ申させ給ひけれ、いさゝかの事だにみな此よならず侍るなれば、いはんやかばかりの御ありさまは、人のともかくもおぼしおかんによらせ給ふべきにもあらねど、いかでかは院をおろかにおもひ申させ給はまし、○中略中關白殿○道隆あはた殿うちつゞきうせさせ給ひて、入道殿によようつりしほどは、さもむねつぶれてきよ〳〵とおぼえ侍りしわざかな、

〔小右記〕長和四年七月十日丁巳、安和御時○冷泉故殿○藤原實頼坐關白、主上御惱之間、關白被下可見官奏之宣旨、被例可尋送之由、先日有命、仍聊書出奉之先了、今日重引出書寫、付資平奉之、其御記云、康保四年八月十五日伊尹卿來云、依御惱不御覽官奏之間、准攝政大臣、可見之由將奏聞之云云、先是兼家朝臣奏聞被許了云云、公卿奏事由可仰大辨之事也、

〔小右記〕長和四年十月廿七日甲辰、今日京官除目、而無外記告、○中略今朝官奏除目雜事、准攝政儀宜令左大臣○道長行之由被下宣旨、大納言公任奉下之、官奏事仰左大辨、除目雜事也、仰大外記文義、大納言所談也、余○藤原實資問云、若勞御間とやあるご云、不然者、正二位行權大納言兼太皇太后宮大夫藤原朝臣公任宣、奉勅除目等雜事、宜令左大臣准攝政儀行之者、

長和四年十月廿七日、大外記小野朝臣文義奉、

〔一代要記六後一條〕後一條天皇○中略

〔公卿補任一條〕攝政正二位藤道隆　正暦四年四月□日、上表辭職、廿二、辭攝政、勅令關白萬機、除目官奏於御前行之、年四十一

〔日本紀略後一條十三〕長和五年正月廿九日甲戌未剋、三條院天皇遜位讓皇太子、〇後一條于時皇太子春秋九歲、于時御坐上東門院、令新帝外祖左大臣藤原道長朝臣攝行政事、如忠仁公故事、

〔愚管抄三〕内大臣にて伊周もと内覽の宣旨かうぶりたる人にて在けるに、大納言にて御堂〇藤原道長はおはしけるは、道兼道隆の弟也、この伯父の大納言その器量拔群にして世も人もゆるしたりけり、我身もこの時伊周執政の臣たらば、世は亂れうせなんず、わが身を攝籙の臣におかれなば世はおだしかるべしとさい〳〵と仰られけり、

〔大鏡七太政大臣道長〕女院〇詮子は入道殿〇藤原道長をとりわきたてまつらせ給ひて、いみじうおもひ申させ給へりしかば、帥殿〇伊周はうと〳〵しくもてなさせ給へりけり、みかど〇一條皇后宮〇定子、伊周妹、をねんごろにときめかさせ給ふゆかりに、帥殿はあけくれ御前に候はせ給ひて、入道殿をばさらにも申さず、女院をもよからず、ことにふれて申樣をおのづから心やえさせ給ひけん、いともほいなき事におぼしめしけることわりなりな、入道殿のよを知らせ給はんことを、みかど〇一條いみじうしぶらせ給ひけり、皇后宮父おとゞ〇道隆おはしまさで、よの中をひきかはらせ給はんことを、いと心ぐるしうおぼしめして、あはた殿〇道兼をもとみにやはせんじくだささせ給ひし、されど女院のだうりのまゝのこともおぼしめし、また帥殿をばよからずおもひきこえさせ給ひければ、入道殿の御事をいみじうしぶらせたまひけれど、いかでかくはおぼしめしおほせらるゝぞ、大臣こえられたる事だにいと〳〵をしう侍りしに、ちゝおとゞのあながちにし侍りし事なれば、いなびさせ給はずなりにしにこそ侍れ、あはたのおとゞにはせさせで、これにしも侍らざらむは、いとをしさより御ためなんいとびなくよの人もいひなし侍らんなど、いみじう

ことなり、

〔歷代皇紀〕內大臣藤兼通元中納言 天祿三年十一月廿七日任、四十八 不經大納言、〇中略 去十月廿七日宣、太政大臣不從事之間、宜勤行公務者、即日又召御前曰、朕未更事、汝可爲輔佐者、

〔公卿補任圓融〕關白正三位藤兼通　天延二年二月八日、爲氏長者、廿八日、聽輦車、三月廿六日、詔、帝御年十六、關白萬機、賜內舍人二人、近衛各四人、爲隨身、同聽牛車、

〔愚管抄三〕花山院には、義懷の中納言こそは外舅なれば、執政すべけれど、踐祚の時は藏人頭にてぞ初て四位侍從に任じて、やがてとく中納言になりて、三條關白〇藤原賴忠如元とておはしけれども、國の政はおさへて義懷おこなひけるほどに、わづかに中一年にて、不可思議の事出來にければ云ばかりなし、大入道殿〇藤原兼家はこの繼めにと、日比の遺恨を思しけれども、外祖舅にもあらず、小野宮〇藤原實賴どのゝ子、九條殿〇藤原師輔の子、たゞ同じ事なれば、もと宿老になりて、關白ならんとおもふべきやうなしと思召けるも道理にて、この時はやみにける、

〔大鏡三太政大臣賴忠〕このおとゞ、小野宮實賴大臣次郎なり、御母時平大臣御むすめ、敦敏少將おなじはらなり、大臣の位にて十九年、關白にて九年、〇中略 一條院位につかせ給ひにしかば、よそ人にて關白はのかせたまひにき、

〇按ズルニ、よそ人トハ、當代ノ外戚ナラザルヲ云フ、

〔日本紀略一九條〕寬和二年六月廿三日庚申、花山天皇偸出禁中、奉劒璽於新皇、一條年七〇外祖右大臣藤原兼家參入、令固禁內警備、翌日行先帝諸位之禮、右大臣藤原朝臣攝行萬機、如忠仁公〇藤原良房故事、

〔日本紀略一九條〕正曆元年五月八日、詔令內大臣藤原朝臣道隆關白萬機、廿五日、勅聽關白內大臣乘牛車出入宮內、廿六日、詔以關白內大臣、改關白、攝行政事、如昭宣公〇藤原基經貞信公〇藤原忠平故事、

なり、伊尹の大納言の御さいはひいみじくおはしなす、〇中略東宮〇花山の御年ふたつなり、〇中略かかるほどに五月廿日、一條のおとゞ〇伊尹攝政の宣旨かうぶり給て、一天下我御心におはしなす、東宮の御おほぢ、みかどの御をぢにて、いと〳〵有べきかぎりの御おぼえにてすぐさせ給、此御ありさまにつけても、九條殿の御有樣のみぞなほいとめでたかりける、

〔愚管抄 三〕この九條右丞相師輔の公のいへに、攝籙の臣のつきにけることは、小野宮どの〇實賴うせ給ひて、九條殿の嫡子、一條攝政伊尹攝籙になりぬ、是は圓融院の外舅にて、右大臣にてあれば、九條殿は攝籙せざりしかば、なにとて肩をならべ競べきもなく〳〵てかくは侍る也、地體は藤氏長者といふことは、上よりなさるゝ事なし、家の一なる人に次第に、朱器臺盤印なとをわたし〳〵する事なり、その人また同じく內覽の臣とはなる也、關白攝政どいふことは、必しもたえずなる事はあらず、攝政は幼主の時ばかり也、忠仁公の後は、たゞ藤氏長者內覽の臣になりぬるを一人とは申也、內覽もかならずしもなき事也、關白も昭宣公攝政の後に、關白の詔始りけり、漢の宣帝のとき、霍光がまづあづかり聞しめて後に白せよとうけ給はりける例なるべし、小野宮殿の攝政をへずして、關白詔始りけるをばおそれ申されけり、されば延喜の御時、時平うせ給ひてのちと、天曆の御時には內覽の臣だになく、まして攝政關白といふつかさもなされず、たゞ藤氏長者一のかみにて、延喜の御時は、貞信公〇忠平のちにこそ、朱雀院八にて御位なれば、攝政にはならせ給へ、村上には初は貞信公關白如元とてありけれど、うせさせ給ひて後は、左大臣にて小野宮殿こそはたゞ一の上にて事おこなひて、冷泉院の御時直に關白の詔ありければ、時の君の御器量がらにてかつは習るゝ事也、世の末はみな君も昔には似させ給はず、誠の聖主は有がたければ、今は樣のごとく攝政關白の名はたゆる事なし、それも御堂のはじめ、一條院三條院、知足院殿〇忠實のはじめ堀河院、このふたゝびは內覽ばかりにて、關白にはならせたまはざりけり、やさしき

ぬるにや、

〔濫觴抄下〕關白

宇多元年丁未仁和三十一月廿一日、太政大臣基經公五十二始任之、同廿六日乙丑上表、勅答云、社稷之臣非朕之臣、宜以阿衡之任爲卿之任、左大辨橘廣相作之、時人阿衡之字難云云、仍朝家及嚴密之御沙汰之間、橘廣相思死云云、

〔神皇正統記宇多〕踐祚のはじめより、太政大臣基經また關白せらる、この關白薨じて後は、しばらくその人なし、

〔日本紀略醍醐一〕延長八年九月廿二日壬午、天皇遜位讓於皇太子寛明親王、朱雀○詔曰、左大臣藤原朝臣忠平○保輔幼主攝行政事、

〔神皇正統記朱雀〕天皇諱は寛明、醍醐十一の子、御母皇太后藤原の穩子、關白太政大臣基經の女なり、中略○外舅左大臣忠平昭宣公の三男、後に貞信公といふ、攝政せらる、寛平に昭宣公薨じてのちには、延喜御一代まで攝關なかりき、この君また幼主にてたちたまふによりて、故事にまかせて萬機を攝行せられけるにこそ、

〔一代要記朱雀丘〕攝政

左大臣忠平中略○

天慶四年十月卅日辭攝政、十一月廿八日爲關白、

〔日本紀略朱雀二〕天慶四年十一月廿八日、詔萬機巨細百官總已、皆關白於太政大臣、藤原忠平○然後奏下如仁和故事、

〔榮花物語月の宴一〕安和二年八月十三日なり、御門冷泉○おりさせ給ぬれば、東宮圓融○くらゐにつかせ給ひぬ、御年十一なり、東宮におりゐの御門の御このかみやゐさせたまひぬ、師貞親王花山○

臣波内外乃政乎取持天勤仕奉止己夙夜不懈、又皇太子乃舅氏（[illegible]）見其情操（田村）幼主乎寄託之（倍）然則少王乃未親萬機之間波攝政行事（止）近久忠仁公乃如保佐朕身（久）相扶仕奉（倍）之、（○下略）

〔三代實錄（陽成三十）〕貞觀十八年十二月甲辰朔、右大臣基經抗表辭攝政、言、伏奉去月二十九日傳國詔命、曰、少主未親萬機之間、臣基經攝行政事、如忠仁公、德崇功大、仁義兼資、況先帝（○文德）之親舅、陛下（○清和）外祖、人望皆歸、官爵既貴、陛下知其元老、專倚攝政、天下萬民、僉以爲宜、今臣年出不惑、性猶童蒙、職重大臣、効無匡濟、朝夕流汗、責深罪重、夫代天治民者人君也、尊君從天者人臣也、而詔命曰、比年災異仍見、此復重臣罪責也、漢代以災異免三公之官、臣所尤可懼也、臣平生備員之日、陛下猶引過於一人、臣非常受寄之時、今上何明德於四海、蹇驢既疲坦途、況雲巖不知遠近乎、短檝無利夷浪、況淵水不測邊涯乎、任重道悠、不知所處、今公卿大臣在位者多、皆是有德良人、陛下察而用之、亦亡叔忠仁公、膺纂之夕、重託扶持、陛下莫慰始終之數、臣今緣詔命、離去仙砌、攝事朝廷、進惣矣、敢退忽逆命、臣始辭避之轉眷華、誰知堯心之脫黃屋、臣將隨陛下、爲表中之吠犬、何更歸城闕、爲筆表之鳴鶴、臣之至誠、既其如此、臣基（経）誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪謹言、不許矣、（○又見本朝文粹）

〔神皇正統記（光孝）〕天皇諱は時康、小松の御門とも申す、（○中略）陽成おりゐさせられ給ひし時、攝政昭宣公（○藤原基經）諸の皇子を相し申されけり、この天皇（○中略）人主の器量餘の皇子たちにすぐれましましけるによりて、即ち儀衛をとゝのへて迎へ申されけり、（○中略）萬機のはじめ攝政を改めて關白とす、これ我朝の關白のはじめなり、漢の霍光、攝政たりしか、宣帝のとき政を返して退きけるを、萬機の政なほ光に關り白さしめよとありしが、その名をとりて授けられにけり、（○中略）この御世より藤氏の攝籙の家も他流にうつらず、昭宣公の苗裔のみぞたゞしくつたへられにたる、上は光孝の御子孫、天照大神の王統とさだまり下は昭宣公の子孫、天兒屋根命の嫡流となりたまへり、二神の御ちかひたがはずして、上は帝王三十九代、下は攝關四十餘人、四百七十餘年になり

〔濫觴抄下〕攝政本朝

清和元年戊寅、天安二外祖太政大臣良房公始任之、五十五

〔神皇正統記清和〕天皇諱は惟仁、水尾の帝とも申す、文德第四の子、御母は皇太后藤原の明子、染殿の后と申す、〇中略攝政太政大臣良房の女也、我朝は幼主位に居させ給ふ事稀なりき、この天皇九歳にて即位、戊寅の年なり、己卯に改元、踐祚ありしかば、外祖良房の大臣はじめて攝政せらる、〇中略天皇おとなび給ければ攝政政を還し奉りて、太政大臣にて白河に閑居せられにけり、倩は外孫になしまゐせば、なほも權を專らにせらるともあらそふ人あるまじくや、されど謙退のこゝろふかく、閑適をこのみて、常に朝參などもせられざりけり、

〔大日本史贊藪三〕藤原良房及子孫傳贊

贊曰、良房相業、雖不多見、而文德帝期以蕭何、則規模徽猷、必有可觀者、與排田之觀、欲使幼主知稼穡之艱難、則其輔贊彌縫之功、可推而知也、基經廢昏立明、一爲社稷大計、可謂至公無私、近於霍光之所爲、而其器過於傳亮徐羡之遠矣、然文德帝畏良房勢、不得立惟喬親王、宇多帝懸基經之訟、遂收阿衡之詔、則威權之過、不啻負芒之憚、而奕世昌熾、一門不知其幾后、外戚之盛、實基于此矣、

〔三代實錄清和二十九〕貞觀十八年十一月廿九日壬寅、天皇讓位於皇太子、〇陽成勅右大臣從二位兼行左近衞大將藤原朝臣基經、保輔幼主、攝行天子之政、如忠仁公故事、〇藤原良房詔曰、現神止大八洲國所知倭根子天皇我詔旨良万止勅御命乎、親王諸王諸臣百官乃人等天下公民衆諸聞食止宣、朕以薄德天天日嗣乎忝之賜倍利、日夜無間久愼畏利御坐須、而君臨漸久久年月改隨留熱病頻發利御體疲弱之天不堪聽朝政、〇中略今所思波朕毛昔以幼稚天得鍾此位利、賢臣乃保佐留賴天得至於今日利、然則良佐乃翼戴波皇太子乃大成己止何遠之有牟止奈母念行須、故是以皇太子止定多留貞明親王留此位乎授賜布、諸衆此狀乎悟天清直心乎持天皇太子乎輔導岐仕奉天天下乎平介久安介久有與、〇中略右大臣藤原朝

尙危、若能廻聖慈、矜臣深志、賜以優閑、任其將息、則再造之恩更渥、三舍之惠彌深、豈敢偏惜衰朽之身、唯貪久視太平之化、伏願陛下別垂哀許、不省焉、

〔大鏡二太政大臣良房〕太政大臣良房のおとゞは、〇中略文德天皇のをぢ、太皇太后宮明子の御ちゝ、清和天皇の御祖父にて、太政大臣准三宮位にのぼらせ給ひ、年官年爵の宣旨くだり、攝政關白などし給ひて、十五年こそはおはしましたれ、おほかた公卿にて卅年、大臣の位にて廿五年ぞおはせし、此殿ぞ藤氏のはじめて太政大臣攝政し給ふ、めでたき御ありさまなり、

〔平家物語一〕がくうちろんの事

本朝にぞうていの例を尋ぬるに、清和天皇九さいにして、文德天皇の御ゆづりをうけさせ給ふ、それはかの周公旦の成王にかはり、南面にして一日萬機の政事ををさめ給ひしになぞらへて、外祖忠仁公幼主をふちし給へり、これぞ攝政の始なる、

〔愚管抄三〕さて文德の王子にて清和出來給ふ、〇中略一歲にて東宮に立たせ給ひけり、九歲にて位に即せ給ひければ、幼主の攝政は日本國にはいまだなければ、漢家の成王の御時の周公旦の例をもちゐて、母后のてゝにて、忠仁公良房を初て攝政におかれけり、其後攝政關白といふことは出來たる也、それも始はたゞ内覽の臣に置れて、誠しく攝政の詔下さるゝ事は、七年を經て後、貞觀八年八月十九日にて有けるとぞ日記には侍なる、

〔愚管抄三〕忠仁公、良房藤原清和の御門が日本國の幼主の初にて、外祖にて初て攝政におかれて後、この攝政の家々、帝の外祖外舅ならん大臣のあらん必々執政の臣なるべき道理はひしと作りかためたる道理にて、一度もさなき事はなし、

〔職原抄上〕攝政〇中略清和天皇幼而卽位、外祖忠仁公良房藤原奉文德遺詔而攝政、是本朝以人臣爲攝政之初也、爾來彼一門爲執政之臣、

しより、專ら輔佐の器としてたちかへり、神代の幽契のまゝになりぬるにや、閑院の大臣冬嗣氏のおとろへたることをなげきて、善をつみ、功をかさね、神にいのり、佛に歸せられける、そのしるしも相くはゝりはべりけんかし。

〔三代實錄十三清和〕貞觀八年八月十九日辛卯、勅太政大臣攝行天下之政、〇中略 廿二日甲午、太政大臣從一位藤原朝臣良房抗表言、竊以疲駿倦路、雖責以逐日之能、病鶴忘飛、豈望其凌雷之効、伏惟聖朝陛下、聽踰軒昊、德邁成昭、泣辜之惠非深、扇暍之仁猶薄、臣以庸材、謬膺佐命、唯慙血誠之无比、潛欽日就而不訾、遂乃天從人願、神感聖仁、大成之日已來、歸老之期行及、臣不敢忘盈滿之誡、又深企二疏之風、然而聖慈不許、出於直廬之外、臣誠不忍離自玉階之前、徘徊恩澤、猶侍禁中、而去六年冬、大病以還、體氣疲苶、心魂惆然、坐念立忘、昨知今惑、加以長樂宮御藥之事、夙夜刻思、無顧私第、自然心將事懶、性與物疎、唯欲助衰以明恩、那堪勤政以贊化、而今忽降綸言、更領機務、乍承驚悚、諸謝忘言、臣雖質情之愚薄、而當昔之全狀、唯以勤格之力、幸獲免於罪戾、而今身已衰朽、勤勞何申、心已昏迷、恭俗胡施、即知於公无益、爲私多傷、徒招眼下之耻、還損身後之名、臣竊想古人教射之言、夫去楊葉百步而射、百發而百中、然其弓撥鉤、氣衰力倦、則百發之功盡廢矣、何況平生材望、幸頼偶中、器局力衰之後、更向百步之葉、假令雖專、愚者猶當知其不可焉、伏願陛下察其深衷、矜其疲勞、更廻聖詰、改賜旒聽、則巍々聖帝、無偏之德彌新、欵々微臣、有涯之生少損、無任誠懇之至、謹拜表以聞、不許、勅曰、廼者災異荐臻、內外騷動、然須賴公助理、且得謐靜、 廿四日丙申、太政大臣重抗表言、先傾丹實、仰紫闥、而天顧弗廻、叡情無感、愚衷尚屈、弊喩彌申、陷焦原而非危、履虎尾而倍懼、臣聞日月猶示盈昃、山川未免崩沖、物理自然、人事何忒、臣德薄才拙、任重位高、儻賴聖哲欽明、天人叶贊、得免罪戾、久塵巖階、常愧深恩不窮、淺効無答、如踏鑪炭、似履春氷、況今老大遍來、疲病交集、藥餌無聞、毎闕遂奉、素飡之慙、彌倍平常、安得以此疲勞、重掌機密、上黷國釆、下貽身累、況復神監害盈、鬼瞰貽禍、何忘止足之分、坐待幽冥之責、臣頽齡漸迫、殘命

攝政

國志紀郡當宗氏神祭幣帛使、國司一人專當其事、使食薦等並用國正稅、永爲恒例、當宗社天皇外祖母之氏神也、

〔世俗淺深秘抄下〕一寛平法皇〈〇宇多〉御外祖母氏神、在河內國、所謂當宗社也、仍自仁和五年被祭之、或說曰、實御母儀也、御母儀仲野親王女班子女王由雖記之、其年齡頗不可然、爲後見如此雖註、實ハ當宗氏女也、大概見寛平御記歟、

〔諸社根元記下〕新國史云、延喜十一、正、六、宣旨、山科神二前、右依宮道氏人內藏少允宮道良連等去年八月七日解、初付官帳、四度幣偁、件氏神依去寛平十年三月七日奉勅之宣旨、預享公家春秋祭禮、又預四度幣、

○按ズルニ、山科ノ神ハ、宮道氏ノ祖神ニシテ、宮道氏ハ宇多天皇ノ皇后藤原氏ノ外家ナリ、故ヲ以テ此時始メテ之ヲ祀リシナリ、

〔大鏡三太政大臣忠平〕このおとゞ、これ基經のおとゞの四郎君、御母本院の大臣〈〇時平〉びはの大臣〈〇仲平〉におなじ、このおとゞ〈〇中略〉よをしらせたまふ事廿年、〈〇中略〉のちのいみな貞信公となづけたてまつる、〈〇中略〉三人の大臣〈〇忠平子、實頼、師輔、師尹、〉たちのまゐらせ給ふれうに、小一條のみなみ、かでのこうぢには、いしだゝみをぞせられたりしが、まだ侍るぞかし、むなかたの明神おはしませば、洞院うしろのついぢよりおりさせ給ひしに、おめなどのふる日のれうとぞうけたまはりし、〈〇中略〉此貞信公は宗像神明うつゝにものなど申たまひけり、我よりは御位たかくてゐさせ給へるなんくるしきと申たまひければ、いとふびんなる御事なるかなとて、神位は申まさせ給へるなり、

〔神皇正統記村上〕わが國は神代よりのちかひにて、君は天照大神の御すゑ國をたもち、臣は天兒屋の命の御ながれ君をたすけたてまつるべき器となれり、〈〇中略〉上古には皇子皇孫おほくて、諸國にも封せられ、將相にも任せられき、〈〇中略〉然れど大織冠氏をさかやかし、忠仁公、政を攝せられ

くもりなきよのひかりにや春日野のおなじみちにもたづねゆくらん、かやうに申かよはせ給ふほどのげに〳〵ときこえて、めでたく侍りし、なかにも大宮のあそばしたりし、

みかさ山さしてぞきつるいそのかみふるきみゆきの跡をたづねて、これらぞな、おきなゝどが心のおよばぬにや、わがりてもかくばかりの秀歌えさぶらはじ、その日にとりては、春日明神のよませ給へりけるとおぼえ侍り、

〔伊呂波字類抄五無〕梅宮

謂騰男巻下云、太后橘嘉氏神、祭於圓提寺、此神始犬養太夫人(藤原不比等妻)所祭神也、太夫人子藤原太后(光明子)及牟漏王(美努王女、光明子異父姉)祭於洛隅川頭、其後遷祭於相樂郡拃山、此神爲仁明天皇成祟、出於御卜、復託宣宮人云、我今天子外家神也、我不得國家大幣、是何縁哉云々、天皇揆之、欲盛立神社、准諸大社、毎年令祟壯、太后不肯曰、神道遠而人道近、吾豈得與先帝外家齊乎、天皇固請之、大后曰、但恐爲國家成祟、仍近移祭於葛野川頭、太后自幸拜祭焉、今梅宮祭是也、

〔三代實録三十六陽成〕元慶三年十一月六日辛酉、停梅宮祭、梅宮祠者、仁明天皇母、文德天皇祖母太后橘氏之祖神也、歴承和仁壽二代以爲官祠、今永停廢焉、

〔二十二社註式〕今案仁明母、文德祖母、太皇太后橘嘉智子也、嵯峨后左大臣諸兄之曾孫、贈太政大臣奈良麻呂之孫、贈太政大臣清友之子也、此太后者、嘉祥三年五月四日崩、六十五歳、

〔三代實録四十五光孝〕元慶八年四月七日丁酉、是日始祭梅宮神、是橘氏神、頃年之間停春秋祀、今有勅更始而祭、

〔小野宮年中行事〕四月上酉日當宗祭事午日使立

仁和四年四月乙亥御記云、朕多〇字之外祖母當宗氏神、在河内國、今年始可祭之狀仰了、

〔年中行事秘抄四月〕上酉日當宗氏祭事、午日使立〇中略世記云、寬平五年四月七日戊辰、是日始奉遣河内

大原社事

吉田社事

此二社者春日乎勸請乃社也、依所仁稱彼名於歟、被祭本社ナ上和、後代勸請乃神留天、同時仁被祭事无其謂歟、然而藤氏乃繁昌乃後、風儀尊崇相同哉、氏后和奈度大原野仁行啓寸、昔乃興里事也、已上

〔伊勢物語上〕昔二條の后(○藤原高子清和后)の春宮のみやす所と申けるころ、氏神にまうで給けるに、つかうまつれりけるこのゑづかさなりける翁(○在原業平)人々のろく給はりけるついでに、御車より給はりてよみて奉る、

大原や小鹽の山もけふこそは神世のこともおもひいづらめ(○又見古今和歌集)

〔大鏡七太政大臣道長〕春日の行幸は、さきの一條院の御時よりはじまれるぞかし、それに當代(○後一條)おさなくおはしませども、かならずあるべき事にて、はじまりたるれいになりにたれば、大宮(○彰子)御こしにそひ申させ給ひておはします、よのつねならずときの御おほぢにてうちそひつかうまつらせ給ふ、殿(○藤原道長)の御ありさま御かたちなど、すこしよのつねにもおはしまさましかばわかぬ事にや、そこらあつまりたるゐなかせかいのたみ百姓、これこそたしかにみたてまつりけめ、たゞてんりんしやうわうなどは、かくやとひかるやうにおはしますに、佛を見たてまつりたらんやうに、ひたいに手をあてゝをがみまどふさまことわりなり、大宮のあかいろの御あふぎ、御かたの程などはすこしみえ給ひけり、かばかりにならせ給ひぬる人は、つゆの御すきかげもふたぎ、いかゞとこそもてかくし奉るに、ことかぎりあれば、けふはよそほしき御ありさまも、すこしは人の見たてまつらんもなどかはやともやおぼしけん、とのも宮もいふよしなく御心ゆかせ給へりけることおしはかられ侍るは、殿、大宮に、

そのかみやいのりおきけんかすがのゝおなじみちにもたづねゆくかな、御かへし、

にの給はすれば、すげなくて出させ給ぬ、〇中略よろづあさましくめでたきとの丶ありさまなり、
このつちみかど殿にいくそたび行幸あり、あまたのきさきいでいらせ給ぬらんと、よのあえ物
にきこえつべき殿なり、これを勝地といふなりけり、これを榮花といふにこそあめれど、あやし
のものども、しもをかぎれる者なども丶よろこびゑみさかえたり、

〔一代要記 後冷泉 七〕關白左大臣頼通〇中略
治暦三年十月五日庚戌行‐幸宇治平等院、〇頼通別莊 勅曰、前太政大臣〇頼通、名。雖。爲。君。臣。義。如。父。母。同七
日勅、年官年爵准三宮、賜内舍人二人、左右近衞各六人爲隨身、

〔大鏡 太政大臣道長 七〕かまたりのおとゞ、むまれ給へるは常陸の國なれば、かしこのかしまと云ふ
ところに氏の御神をすましめたてまつり給て、その御よゝりいまにいたるまで、あたらしき御
門后大臣たち給をりは、みてぐらづかひかならずたつ、みかどならにおはしましゝ時は、かしこ
遠しとて、大和國みかさ山にふり奉りて、春日明神となづけたてまつりて、いまに藤氏御氏神に
て、おほやけをとこ女つかひたてさせ給ひ、后宮その氏の大臣公卿、みな此明神につかうまつり
給て、二月十一月上申日御まつりにてなん、さま〴〵のつかひたちのゝしる、みかどこの京にう
つらしめ給ては、又ちかくふり奉りて大原野と申、きさらぎのはつうの日、霜月初子日とさだめ
て、どしに二度のまつりあり、又おなじくおほやけのつかひたつ、藤氏殿原みなこの御神にみて
ぐら十列たてまつり給、なはもちかくとてまたふりたてまつりて、吉田と申ておはしますめり、
この吉田の明神は山かげの中納言のふりたて奉り給へるぞかし、御まつり日四月後の子日、十
一月下申日とをさだめて、我御ぞうにみかど后たち給ふものならば、おほやけまつりになさ
んとちかひ奉りておはしましければ、一條院の御時よりおほやけまつりにはなりたるなり、
〔廿二社本緣〕

女御いのりの僧どもこゑをあはせてのゝしる、加持まゐり、うちまきしちらし、（中略）日ごろいみじかりつる御いのりのしるしにや、いぬの時ばかりにいとたひらかにみこ（三條皇女禎子內親王）むまれ給ぬ、（中略）女におはしませば、うち（三條）にもいますこし心ことにおもひきこえさせ給、たゞおなじくばとこれもおぼさるべし、されど春宮（後一條）のむまれ給へりしを、とのゝおまへ（藤原道長）の御はつむまごにて、榮花のはつはなときこえたるに、この御ことをばつぼみ花とぞ聞えさすべかめる、（中略）九月にも成ぬれば、行幸の事けふあすの程にいそがせ給ふ事いみじ、宮の女房のなりいみじきに、かんの殿（後一條后威子）の御かた、とのゝうへ（道長室源倫子）の御かた、われものゝしることいみじ、ふねのかくなどいみじくとゝのへさせ給へり、行幸の有さまみな例のさほうなれば、かきつゞくまじ、大宮（一條后彰子）の東宮（後一條）のむまれさせ給へりしのちの行幸、たゞそのまゝの有さまなり、（中略）うへ、（中略）御帳のうちにいらせ給て、月比の御物語など、心のどかに聞え給、かゝうつくしき人をいままで見ざりつる事、なほめでたき事なれど、この身のありさまこそくるしけれ、いみじく思人のともかくもおはせんを、とみにもみぬ事、いみじくくちをしかしなど萬に聞えさせ給て、いざちごむかへてなかにふせて見ん、いみじううつくしきものかな、この宮達のちごなりしをこそうつくしうみしかど、なほそれはれいのありさまなり、これはことのほかにをかしくみゆるは、かみのながければなめり、なほ〳〵とく〳〵いらせ給へ、うちにてはめのといるまじ、まろめのとにてはべらんなど聞えさせ給へば、ものぐるはしとてすこしわらはせ給、かゝる程に日もくれぬれば、上達部の御あそびになりぬるが、いみじくなつかしくおもしろきに、（中略）とみに出させ給まじき御けしきなれば、殿いらせ給て、よにいりはべりぬ、かばかりおもしろきあそびども御覧ぜんと申させ給へば、いとおもしろしときゝ侍り、がくのこゑはきくこそおもしろけれ、見るはをかしうやはある、さま〴〵のなにどもはみな見はべりぬといとのどか

仰奉行之、

〔吉記〕安元二年六月卅日癸卯、今日十樂院新御堂棟上也、依有口祇宣奉為贈左府(○平時信)有此營、院司兵部卿主典代盛職、參向行也、

犯罪處分

〔律疏〕六議

一曰議親、(謂皇親、及皇帝五等以上親、及太皇太后、皇太后四等以上親、太皇太后者皇帝祖母也、皇后三也、皇太后者皇帝母也、等以上親、)

〔令義解 六儀制〕凡五等親者、父母、養父母、夫、子、為一等、(謂養子亦同也、)祖父母、嫡母、繼母、伯叔父姑、兄弟姊妹、夫之父母、妻、妾、姪、孫、子婦、為二等、(謂妾亦同、子妾尚為二等、父妾入二等、則其養子之父母及妻者、不得復為夫之父母及子婦也、)曾祖父母、(謂祖父之父母也、)伯叔婦、夫姪、從父兄弟姊妹、異父兄弟姊妹、夫之祖父母、夫之伯叔姑、姪婦、繼父同居、夫前妻妾子、為三等、(謂今妻妾子亦同也、夫姪為三等、夫兄弟為四等、謂伯叔之妻為母、夫之姪為子、又兄弟之子孫子、引而進之、即此義也、從父兄弟、謂兄弟之子、相呼為從父、長者曰兄、少者曰弟也、)高祖父母、從祖祖父姑、(謂祖父之兄弟姊妹也、)從祖伯叔父姑、(謂從祖祖父之子、即父之從父兄弟姊妹也、)夫兄弟姊妹、兄弟妻妾、再從兄弟、(謂從祖伯叔父之子也、)姊妹、外祖父母、舅、姨、(謂母之兄弟曰舅、母之姊妹曰姨、)兄弟孫、從父兄弟子、外甥、曾孫、孫婦、妻妾前夫子、為四等、(○下略)

車駕幸私第

〔三代實錄 八清和〕貞觀六年二月廿五日壬午、車駕幸於太政大臣(○藤原良房)東京染殿第、觀櫻花、中路駐蹕於一條第、即是帝(○清和)降誕之處也、太政大臣以肴醴賜扈從群臣文武官、賜祿物於庭中、令帝覽之、賜有差、遂幸染殿花亭、親王已下侍從已上並侍焉、太政大臣別令伶人奏習樂一部、喚能屬文者、左位已上十人、諸司六位十人、文章生二十人、令賦詩、其醉歡樂、移自花亭、御於射場、帝御弓矢、一發中鵠、群臣稱萬歲、親王已下以次遞射、山城國司守正四位下紀朝臣今守等、率郡司百姓於東垣外、行耕田之禮、欲令帝覽之、知農民之有事也、自晨至暮、極樂而罷、賜親王公卿文武百僚祿、各有差、夜分還宮、

〔榮花物語 十一莟花〕長和二年七月六日の夕かたより御けしきわるさまにおはしませは、(○三條后姸子藤原道長

右左大臣宣、奉勅依件定之、自餘停止者、省宜承知依件行之、符到奉行、

延長八年十二月九日、

〔拾芥抄下本十陵〕天慶九年四月廿六日記曰、被御位田山陵使云、

山階　柏原　嵯峨　深草　後田邑原異本　後山階　後宇治昭宣公〈藤原基經〉墓

後宇治同公室、今上外祖母〔朱書〕　合八箇所

〔九暦〕天暦三年十二月廿三日、以貞信公〇藤原忠平墓所、可預荷前幣之由蒙仰了、可令作官符之由仰有相朝臣事、

〔政事要略二十九〕荷前事

新加太政大臣正一位藤原氏在宇治郡

太政大臣諱實頼　太政大臣伊尹

今案有新加墓之時、如陵不除先墓歟、又堀川相府兼通可入歟可尋知、

〔小右記〕長和三年十二月十七日己巳、昨日内大臣定申荷前使、今月廿七日〇中略

宇治参議道方　中宇治参議頼定　班幣所参議兼隆

〔左經記〕長元元年十二月卅日庚寅、申刻被立御荷前使、先廳備饗六前、居侍所、長官四位少將定良、次官良位朝臣等著饗、余〇源經頼進、両三盃、此間小使二人官史生也、著衣冠、取小筵二枚敷南庭、卯酉為妻、次昇立置納荷前物筥、八足案一脚於中門外、次次官經著、依地濕云々、昇案入從中門、立筵上退出、使少將解劔、挿笏、次官笏挿腰、次小使史生取使料筥置案下筵上、御拜了、令著純色御裳唐衣給云々、次長官昇出案中門外、即御荷前總切裏之、案小御手所儲之云々、次長官昇向木幡〇藤原道長墓、燒之云、

〔兵範記〕仁安三年七月廿五日甲申、今日皇太后宮〇平滋子先公贈左大臣〇平時信御忌日也、從宮被行其式法於東山十樂院被行、是彼時七々中陰堂場也、顯尋法眼之時、有緣被用畢、今忠雲内供誰相承、依官

異同乎、然朝廷奉幣、必止二一墓一而二說不レ同、竟不レ知三其爲二誰墓一、亦太可レ異也、今姑據二二書一定爲二鎌足一、併擧二異同一以待二後考一、

○按ズルニ、鎌足ハ內大臣大織冠タリ、三代實錄ニ、太政大臣正一位トアルハ、往時ノ內大臣ノ、當時ノ太政大臣ニ當リ、大織冠ノ、正一位ニ當ルヲ以テナリ、故ニ此前後ノ書ニ、多ク內大臣大織冠ト云ヘリ、太政大臣正一位ヲ贈リシニ非ザルヲ知ルベシ、天平十三年ノ銅版詔書ニ、鎌足不比等ノ二人ヲ藤原氏前後太政大臣ト云ヒ、興福寺緣起ニ、先正一位太政大臣、後太政大臣ト云ヘルハ、三代實錄ト同一ノ筆法ナリ、多武峯ハ、鎌足ト不比等トヲ移葬セル地ニシテ、初ニハ荷前ニ鎌足ヲ祭リ、後ニハ改メテ不比等ヲ祭リシ故ニ、同一ノ藤原太政大臣多武峯墓ノ文ニシテ、三代實錄ト延喜式ト、其人ヲ異ニスルヲ致セルカ、附シテ以テ他日ノ參攷ニ備フ、

〔政事要略二十九〕太政官符中務省

應□每年荷前山陵幷墓事○中略

一墓八所

大和國一所 多武峯

山城國七所

一所 贈太政大臣藤原氏、在二愛宕郡一、○中略

一所 贈正一位當宗氏、在二葛野郡一、

一所 太政大臣贈正一位藤原氏、在二宇治郡一、

一所 贈太政大臣正一位藤原氏、在二宇治郡一、

一所 贈正一位宮道氏、在二同郡一、

一所 贈正一位王氏、在二同郡一、

次宇治墓贈正一位太政大臣越前公藤原朝臣、在山城國宇治郡、墓戸一烟、
小野墓贈太政大臣正一位藤原朝臣高藤、在山城國宇治郡小野鄕、
後小野墓贈正一位宮道氏、在山城國宇治郡小野鄕、
又宇治墓贈太政大臣正一位藤原朝臣時平、在山城國宇治郡、墓戸一烟、
〔政事要略二十九〕荷前事
多武峯墓贈太政大臣正一位淡海公藤原朝臣、在大和國十市郡、兆域東西十二町、南北十二町、無守戸、
淡海公者、內大臣鎌足之長子也、依爲藤氏之先、雖多他墓別所注也、自餘墓可見式、
〔公卿補任元正〕右大臣正二位藤原不比等　養老四年八月三日薨　十月八日戊子、火葬佐保山椎岡、從遺教也、
〔古事記傳二十〕四墓ハ贈太政大臣正一位藤原朝臣多武峯墓、藤原朝臣冬嗣墓、尙侍藤原朝臣美都子墓、源朝臣潔姬墓これなり、冬嗣公は文德天皇の御外祖、美都子は同御外祖母、潔姬は當代○清和の御外祖母なればなり、然るに多武峯墓は不比等公にて、聖武孝謙の御外祖にこそあれ、清和の御代に殊に祭らるべき由はなきに、此內に置れたるは、此時天皇は未幼坐々ば、凡て良房大臣の御心より出たる故なるべし、さて三代實錄今本に、右の多武峯墓鎌足とあるは、後人のなまさかしらに改めつるものなり、古本には此名なし、多武峯は不比等と諸陵式にも見え、贈太政太臣正一位も鎌足にてはかなはぬ物をや、
〔大日本史禮樂四〕按實錄云、贈太政大臣正一位藤原朝臣鎌足多武峯墓、符宣鈔書法亦同、而延喜式書多武峯墓贈太政大臣正一位淡海公藤原朝臣、政事要略以爲不比等、其說不合、可疑、且鎌足贈位贈官正史無所見、實錄書法亦非無疑、據大織冠傳、鎌足葬山階、公卿補任、帝王編年記、不比等葬椎岡、然皆其火葬地也、意者後人或移葬二人遺骨於多武峯、定爲墳墓而二墓竝在同地、故致此

延喜七年十二月二十一(○一、一本作五、)日、亦依左大臣(○藤原時平)申、止長良墓以宮道列子預荷前事、

〔延喜式 二十一諸陵〕

牧野墓 太皇太后之先和氏、在大和國廣瀬郡、兆域東西三町、南北五町、守戸一烟、

大野墓 太皇太后之先大枝氏、在大和國平群郡、兆域東西六町、南北四町、守戸一烟、

阿陁墓 贈太政大臣藤原朝臣良繼、日本根子推國高彥尊天皇外祖父、在大和國宇智郡、兆域東西十五町、南北十五町、守戸一烟、

村國墓 贈正一位安部命婦(古美奈)、同天皇外祖母、在大和國添下郡、兆域東西四町、南北五町、守戸一烟、

多武岑墓 贈太政大臣正一位淡°海°公°藤原朝臣、在大和國十市郡、兆域東西十二町、南北十二町、無守戸、

後阿陁墓 贈太政大臣正一位藤原朝臣武智麻呂、在大和國宇智郡、兆域東西十五町、南北十五町、守戸一烟、

相樂墓 贈太政大臣正一位藤原朝臣百川、淳和太上天皇外祖父、在山城國相樂郡、兆域東西三町、南北二町、守戸一烟、

後相樂墓 贈正一位藤原氏、同天皇外祖母、在山城國相樂郡、贈太政大臣墓內、無守戸、

加勢山墓 贈太政大臣正一位橘朝臣清友、仁明天皇外祖父、在山城國相樂郡、兆域東西四町、南北六町、守戸一烟、

小山墓 贈正一位田口氏、同天皇外祖母、在河內國交野郡、兆域東西三町、南北五町、守戸二烟、

後宇治墓 贈太政大臣正一位藤原朝臣冬嗣、文德天皇外祖父、在山城國宇治郡、兆域東西十四町、南北十四町、守戸二烟、

次宇治墓 贈正一位藤原氏、同天皇外祖母、在山城國宇治郡、贈太政大臣墓內、

愛宕墓 贈正一位源氏、清和太上天皇外祖母、在山城國愛宕郡、兆域東二町、南一町、西一町五段、北一町五段、守戸一烟、

後愛宕墓 太政大臣贈正一位美濃公藤原朝臣、在山城國愛宕郡、守戸一烟、

深草墓 贈正一位藤原氏、陽成太上天皇外祖母、在山城國紀伊郡、守戸一烟、

河嶋墓 贈正一位當宗氏、在山城國葛野郡、墓戸一烟、

八坂墓 贈正一位藤原氏、在山城國愛宕郡八坂鄉、墓地十町、墓戸一烟、

拜志墓 贈正一位藤原朝臣總繼、在山城國愛宕郡鳥戸鄉、墓地四町、墓戸一烟、

愛宕墓、在山城國愛宕郡、〇又見類聚符宣抄四

〔三代實錄七清和〕貞觀五年二月七日庚子、下知大和國、禁藤原氏先祖贈太政大臣多武岑墓四履之内、百姓伐樹放牧、

〔三代實錄七清和〕貞觀五年三月十五日丁丑、帝外祖母源氏〇潔姬墓、在山城國愛宕郡、詔以域地四町爲四履之限、

〔三代實錄二十二清和〕貞觀十四年十二月十三日己酉、先是天安二年十二月九日定十陵四墓獻年終荷前幣、是日〇中略四墓加太政大臣贈正一位藤原朝臣良房愛宕墓、爲五墓、在山城國愛宕郡、

〔三代實錄三十二陽成〕元慶元年十二月十三日己卯、勅定每年獻荷前幣五墓、贈太政大臣藤原氏多武岑墓、在大和國、贈正一位源氏墓、太政大臣贈正一位藤原氏墓、並在山城國愛宕郡、贈左大臣藤原氏墓、在山城國宇治郡、贈正一位藤原氏墓、在山城國紀伊郡、自餘皆停廢焉、

〔三代實錄三十五陽成〕元慶三年四月十六日乙亥、故太政大臣忠仁公〇藤原良房墓、置守家一烟、

〔三代實錄四十六光孝〕元慶八年十二月廿日丙午、定每年獻荷前幣十陵五墓、〇中略贈太政大臣正一位藤原朝臣多武岑墓、在大和國十市郡、贈太政大臣正一位藤原朝臣墓、在山城國宇治郡、贈正一位藤原氏墓、在山城國紀伊郡、贈太政大臣正一位藤原朝臣墓、在山城國愛宕郡、贈正一位藤原氏墓、在同郡、停廢〇中略太皇太后〇文德后明子考太政大臣贈正一位藤原朝臣、妣贈正一位源氏兩墓、不預別貢荷前幣、

〔三代實錄四十六光孝〕元慶八年十二月廿五日辛亥、勅以山城國愛宕郡鳥戸鄉地四町、爲贈正一位藤原朝臣總繼墓地、以同郡八坂鄉地十町、爲贈正一位藤原朝臣數子墓地、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年十月八日己未、是日勅、皇妣贈皇太后山陵置守家五戸、外祖父贈太政大臣正一位藤原朝臣總繼、外祖母贈正一位藤原朝臣數子墓各一戸、〇中略並在山城國愛宕郡、

〔西宮記十月〕荷前事

冢墓

答於恩、公食於道、假之議者、誰謂不宜、今卿上表爲公讓之、朕雖知其丹誠、未忍割素意、宜如前詔、莫有所請、

〔三代實錄二十四清和〕貞觀十五年十一月六日丁卯、右大臣從二位兼行左近衛大將藤原朝臣基經、上表請還故忠仁公(○藤原良房)封邑云々、勅答曰、右大臣藤原朝臣、得表已知、爲故太政大臣忠仁公讓封、朕聞存立嘉庸、沒受寵渥、古之遺法也、公儀刑道著、輔導年深、仁爲己任、死而後已、朕追加封爵、同之生存、答恩篤也、而卿稟遺旨、再三固辭、朕察其至誠、不拒來請、唯除位封之所輸、以示厚意之不已、今總過忠恭、更求讓還、朕以爲古之功臣、有傳世不絕之寵、況公地居外祖、天下權勳、至其遺封、未謂羨食、於朕失割腴之賞、在公非爲軫(○輸恐軫誤)臂之資、聊添幽穸之榮、兼助奠祭之費、朕不勝感泣、卿勿復請、(○又見都氏文集)

〔公卿補任字多〕太政大臣從一位藤基經　寬平三年正月十三日薨、(年五十六)詔贈正一位、階封越前國、謚曰昭宣公、號堀川太政大臣、生年承和三年丙辰、送山城國宇治郡、攝政十一年、關白八年、

〔愚管抄字多一〕關白太政大臣基經(中略)寬平三年正月十三日薨、五十七、天皇甚哀慟、詔贈正一位、食封資人並如生、故大臣又如故、

〔續日本紀十聖武〕天平二年九月丙子、遣使以渤海郡信物、令獻山陵六所、幷祭故太政大臣藤原朝臣(○不比等)墓、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶七年十月丙午、勅曰、比日之間、太上天皇枕席不安、寢膳乖宜、朕竊念茲、情深惻隱、(○中略)遣使於山科、大內東西、安古、眞弓、奈保山東西等山陵、及太政大臣(○藤原不比等)墓、奉幣以祈請焉、

〔三代實錄一清和〕天安二年十一月五日壬戌、(○中略)從四位上行右兵衞督源朝臣勤、爲今上外祖母源氏(○藤原良房妻潔姬)愛宕墓使、並告以天皇即位也、

〔三代實錄一清和〕天安二年十二月九日丙申、詔定十陵四墓、獻年終荷前之幣、(○中略)贈太政大臣正一位藤原朝臣鎌足(○[illegible])多武峯墓、在大和國十市郡、後贈太政大臣正一位藤原朝臣冬嗣宇治墓、在山城國宇治郡、尚侍贈正一位藤原朝臣美都子(○冬嗣妻)次宇治墓、在山城國宇治郡、贈正一位源朝臣潔姬(○藤原良房妻)

行也、其先朝太政大臣藤原朝臣〇不比等者、非唯功高於天下、是復皇家之外戚、是以先朝贈正一位太政大臣、斯實依我令、已極官位、而准周禮猶有不足、竊思勳績蓋於宇宙、朝賞未允人望、宜依太公故事追以近江國十二郡、封爲淡海公、餘官如故、以繼室從一位縣犬養橘宿禰贈正一位、爲太夫人、又得大師〇藤原押勝奏偁、故臣父及叔者、並爲聖代之棟梁、共作明時之羽翼、位已窮高、官尚未足、伏願廻臣所賜太師之任、欲讓南北兩左大臣者、宜依所請、南卿〇武智麻呂贈太政大臣、北卿〇房前轉贈太政大臣、庶使酬庸之典、垂跡於將來、事君之臣、盡忠於後葉、普告遐邇、知朕意焉、

〔三代實錄二十清和〕貞觀十四年十月十日丁未、正三位守右大臣兼行左近衞大將藤原朝臣基經、抗表辭故太政大臣忠仁公〇藤原良房封邑曰、臣聞昔樊噲侯之遺言、時至猶從厥旨、羊太常之終制、府丞不敢違心、何況忘私義讓、指河日而結誠、愛國忠謀、瀝肝膽而貽誡、臣謹讀去月四日詔書、贈於故太政大臣藤原朝臣、以正一位、又以美濃國封之、爲美濃公、諡曰忠仁、食封資人並同平日、太政大臣之官亦如故矣、崇賁慇懃、寵光輝赫、磐榮之盛、門閥絣萃、伏計先臣幽魄、追榮舊想、添晃藻於天波、退憚新恩、增氷谷於地底、但先臣臨終誡臣曰、余昔奉聖主於襁褓、望成人於日月、上天從欲、明辟累年、吾生自此而歿、世上亦有何思、徒恨時運陵遲、邦國凋弊、雖煩開聖化於東后、猶難起人謠於市田、生時既見蓄藏之空、死後何招錙銖之費、即我下世之後、朝例攸給葬送等物、凡諸應爲公煩者、無小無大、須宜固辭一切勿請、但如此心、事々須面諸皇太后殿下、然而君臣禮隔、男女事殊、何驚長樂之宮、敢幸沈淪之地、吾既無男、汝即猶子、宜述吾志莫忘吾言、而今職位食封既同平日、加之以美濃之一國、公費兼倍於生時、誠非先臣提撕告誡之意也、臣仍具狀以聞、〇中略勅答曰、省表悉之、故太政大臣忠仁公、保養朕躬、不訓告功、朝露溘至、傷如之何、凡褒贈之設所以旌有功表有德也、忠仁公處於外祖之顯地、重以上台之元功、朕思所以加隆、無所不至、但尋公平日之志、深秉謙損之志、是用纔飾以正一位、追封爲美濃公、於朕之心猶有不厭、軍法斬一牙門將者、封侯萬里之外、夫斬一將之功孰與安寧天下、況亦有天爵者、人爵從之、朕

沒後賜封

〔宣胤卿記〕文明十二年正月廿六日丁未、自左少辨許宣下兩通（正一月十三日從一位、同廿六日正二位故內大臣藤原朝臣信宗公宜叙贈太政大臣）到來、極位者內府也、贈官者故大炊御門內府（稱號可尋）也、今日忌日也、當今（○後土御門）御母（○藤原信子）御父分也、仍及此沙汰者也、則下知大內記、

〔台德院殿御實紀（六十）〕元和九年七月廿七日、公（○德川秀忠）は此日より天下を御讓與ましまし、御みづからは大御所と稱し奉る、（○中略）御隱退前後十年にして、寬永九年正月廿四日亥刻、西城の正寢にして薨じ賜ふ、御壽五十四なり、（○中略）二月廿九日勅使參向ありて、台德院殿と勅諡せられ、正一位を贈らせらる、主上（○明正）は太上天皇の尊號を御追贈あらまほしき叡慮おはしけれど、御平常御謙遜の御志ふかくましましける故、こなたよりはかたく御辭退ありければ、先正一位にのぼせ給ひけるとぞ聞えし、

〔諸家知譜拙記（三）〕園基音

靈元院外祖、權大納言正二位號南宗院、承應四、二、十七薨、五十二、贈左大臣、

一本云、基音公寬文七、七、五贈左大臣、勅使少納言豐長朝臣向誓願寺讀宣命、依當今外祖也、

〔十三朝紀聞（仁孝七）〕弘化元年正月、贈故外祖權大納言經逸內大臣、

〔今日抄（孝明一）〕嘉永三年正月二十七日、贈外舅權中納言實光左大臣、

〔公卿補任（元正）〕右大臣正二位藤原朝臣不比等　養老四年八月三日薨、（○中略）聖武孝謙二代外祖、（○中略）十月十日壬寅、詔遣大納言正三位長屋王、（○中略）就右大臣第宣詔、贈太政大臣正一位、謚曰文忠公、

〔續日本紀（聖武十四）〕天平十三年正月丁酉、故太政大臣藤原朝臣（○不比等）家、返上食封五千戶、二千戶依舊返賜其家、三千戶施入諸國國分寺、以充造丈六佛像之料、

食封資人並如全生、

〔續日本紀（淳仁二十三）〕天平寶字四年八月甲子、勅曰、子以祖爲尊、祖以子亦貴、此則不易之彝式、聖主之善

はれり、範季がめひ刑部卿の三位と云しは、能圓法師が妻也、能圓は土御門院の母后、承明門院の父なり、

〔愚管抄六〕當今佐渡院（○順徳）御母は、建永二年六月七日院號ありき、立后はなし、二位せさせ給てきと、准后の官になり給て、修明門院と云院號ありけり、この例は八條院の御時より始りけるとぞ、又東宮御即位の後、院號近例かならず有事也、されば又範季の二位も贈左大臣に成にき、出家いとよにすべかりし人のこの事を思ひて、出家もせずしてうせにしかば、たしてかゝればめでたき事也、

〔増鏡四三神山〕阿波院（○土御門）の宮（○後嵯峨）は、（○中略）御はゝはつちみかどの内大臣みちちかの御子に、宰相の中將みちむねとて、わかくてうせにし人の御むすめなり、（○中略）さて仁治三年三月十八日御くらゐ、よろづあるべきかぎりめでたく過もてゆく、（○中略）當代かくめでたくおはしませば、通宗宰相も左大臣從一位おくられ給ふ、御むすめも后の位をおくり申されし、いとめでたし、

〔贈官宣下記〕文安元年五月六日乙卯、是日贈官位宣下也、御外祖父綾少路源少將經有、去應永十九年五月十五日逝去、今年今月相當三十三年遠忌之間、被贈左大臣從一位者也、國母（○後花園）准后之御父也、庭田中將重賢朝臣之祖父也、上卿權中納言藤原定繼卿、職事藏人右中辨同資重、（奉行）少納言菅原繼長朝臣、權少外記中原康顯、右大史高橋員職等參陣也、其儀上卿著仗座、次職事進仰勅語、上卿移著端座、令敷軾、召少内記高橋員職、仰宣命位記事、（其詞云、外祖父右近衞少將源經有贈左大臣從一位、任例作進詔書宣命位記日）員職退、持參宣命草一通並一卷、（納宮蓋）上卿披見之、令持内記參進弓場、付右中辨奏之、即被返下之、（殿下無御參、不及内覽）上卿取之返給内記、内記於弓場取替清書宣命（草取出令懷中之）位記、又此時懷中之、又被奏之被返下之後、上卿歸著陣、披見宣命位記等、（内記於弓場與陣之間、今度入加位記持參云々）返給宮於内記、猶位記宣命者留前、令退内記、次上卿召少納言於軾、給宣命位記少納言、少納言翌日宣命位記等相具向墓所也、（伏見）

〔朝野群載二十一雜文〕正二位藤原朝臣實季

右可贈正一位

中務、朝之泉藪、世之國華、抽精誠於魏宮、流餘慶於姻婭、嗟乎音響長隔、歳月其徂、睠親之義、惻隱于懷、宜遵飾終之禮、式申贈爵之恩、可依前件、主者施行、

嘉承二年十二月十三日

〔續世繼三花園のにほひ〕このみかど〇二條の御母は、大納言經實の御むすめ、その御母春宮大夫公實の御むすめなり、その大納言の中の君は、花ぞのゝ左のおとゞ〇源有仁の北の方なれば、あねの姫君を子にして、院のいまだ宮とておはしましゝに奉られたりしなり、このみかどうみおき奉りてうせ給にき、后の位をおくられ給て、贈皇太后宮懿子と申なるべし、御おやの按察大納言〇經實も、おほきおとゞ、おほきひとつのくらゐおくられ給へるとなんうけ給はる、さる事やあらんとも知らでうせ給にしかども、やんごとなき位そへられ給へり、御すゑのかざりなるべし、

〔兵範記〕仁安三年六月廿九日己未、今上主上〇六條外祖父母有贈官位事、去三月御即位以後此議出來、連々相障于今延引、上卿著陣、召中務少輔定長、下給詔書、次召少納言泰經、下給宣命位記各二通、泰經出敷政門、令持外記史生、向彼墓所、東山四條末十樂院東、故顯時法眼結界之地、有緣殯斂彼在生時、依連理之契、御坐一所也、仍兩所位記宣命泰經一人爲勅使、右兵衞督以案內者、被副少納言爲指南也、贈左大臣正一位平時信、贈正一位藤原祐子、

〔玉海〕治承三年六月廿九日丙辰、白河殿〇平清盛女盛子、藤原基實妻、准后薨逝間事、〇中略宣命贈位事、准淑子〇藤原長實女、藤原氏宗妻、幷代々外祖母等例者、可被贈正一位歟、〇下略

〔愚管抄五〕贈左大臣範季〇中略は、後鳥羽院を養ひ進らせて、踐祚の時もひとへに沙汰しまゐらせし人也、さて加階は二位までしたりしかども、當今〇順德の母后〇重子のちゝなり、さて贈位もたま

〔三代實錄光孝四十五〕元慶八年三月十三日甲戌、天皇外祖父故從五位上藤原朝臣總繼、外祖母正五位下藤原朝臣數子、並贈正一位、

〔三代實錄光孝四十八〕仁和元年九月十五日丙申、詔曰云云、朕外祖父贈正一位藤原朝臣總繼云云、贈以太政大臣、　十六日丁酉、藤氏公卿大夫、詣闕拜舞、稱賀贈帝外祖父太政大臣也、

〔皇胤紹運錄〕桓武天皇―――仲野親王二品式部卿、贈一品太政大臣、宇多天皇爲外祖故也、

〔勸修寺緣起〕ありしひと夜のちぎりにいでき給へりし女ぎみは、宇多院の位におはしましける時に入内ありて、皇太后宮胤子と申、皇子いでき給にければ、高藤の公は朝家に又なき權臣にて、內大臣になり給ひにけり、皇子踐祚ありて延喜の聖の御門とぞ申なる、我朝の賢王におはします、帝祖になり給にければ、うせ給てのちは、太政大臣正一位を贈せらる、

〔日本紀略醍醐一〕寬平九年十二月十七日戊午、詔贈外祖母故從二位操子女王正一位、

〔日本紀略醍醐一〕延喜九年四月四日、左大臣藤原朝臣時平薨、年卅九、　五日、贈故左大臣太政大臣正一位、有固關警固事、

〔日本紀略村上三〕天曆三年八月十八日己丑、戌時葬太政大臣忠平○藤原於法性寺外艮地、詔贈正一位、諡貞信公、勅使大納言清蔭卿、中納言元方卿、參議庶明朝臣等向彼所、

〔日本紀略冷泉五〕康保四年十月廿四日己卯、詔贈故從三位藤原盛子正一位、天皇外祖母、九條右大臣師輔○藤原室也、宣命使民部大輔源行正、率局史生一人向金龍寺、

〔日本紀略一條九〕永延元年二月十六日己酉、贈故藤原時姬○圓融后詮子母正一位、

〔扶桑略記後冷泉二十九〕天喜二年四月廿六日、皇后寬子○藤原母氏從五位下源朝臣祇子贈從二位、

〔古事談王道后宮一〕白河院延久五年五月六日、天皇先妣藤原茂子能信女贈皇后位、○中略又故權大納言藤原能信卿贈太政大臣正一位、又外祖母藤原祉子贈正一位、

冢一烟、

〔續日本後紀十七仁明〕承和十四年九月丁酉、詔贈大納言從三位橘朝臣奈良麿、更贈太政大臣正一位、崇帝戚也、

〔續日本後紀十七仁明〕承和十四年三月戊子、神祇伯正四位下田口朝臣佐波主卒也、詔贈從三位、以嵯峨太皇太后之外戚也、

〔文德實錄二〕嘉祥三年七月壬辰、追崇外祖父(〇一本外祖父下有左大臣三字)正一位藤原朝臣冬嗣爲太政大臣、外祖母尙侍從三位藤原朝臣美都子贈正一位、策命曰、天皇我勅命留坐宣久、皇祖比敦親留須事波食國乃恒典奈利、故是以追氐太政大臣乃官贈賜比崇賜布勅命乎散位從五位下藤原朝臣雄瀧乎差使氐申賜止久宣、詔曰、貴德重親、前王之令圖、悼往飾終、有國之通典、朕外祖父左大臣正一位藤原朝臣、風標秀上、器宇凝深、德爲時宗、位居朝棟、至忠報國、世異名新、遺愛在人、身徂德盛、外祖母尙侍從三位藤原氏、自家刑國、以孝率忠、嬪規緜於采蘋、母則賢於大姒、春花早落、甄流芳而有餘、石火不留、繼殘焰而仍照、朕寓形苫塊、沈思鼎湖、至哀之餘、懷夫親懿、況國憲有恒、崇班攸歸、宜加寵章、式炎拱木、外祖父可贈太政大臣、外祖母可贈正一位、布告遐邇、稱朕意焉、

〔三代實錄一淸和〕天安二年十一月廿六日癸未、贈故正三位源朝臣潔姬正一位、遣從四位上行越中守源朝臣啓於神樂岡冢、告以贈位、潔姬帝之外祖母也、

〔三代實錄三十陽成〕元慶元年正月廿九日辛丑、詔曰、紀德錄勳、代旣異而加等、飾終追遠、身雖謝而及恩、況乃天愛之深、理切敦族、人道之重、情殷睦親、外祖父故中納言從二位藤原朝臣(〇長良)識度夷雅、餘慶延於身後、外祖母藤原氏、門傳閫訓、家著閨儀、蘋藻之禮彌恭、松蘿之茂交映、並征耀靡、借貸晚景於西峰、圍水易燃、逐遊魂於東岱、悲玉樹之早落、不見孫榮、訪瓊蘭之遺芳、宜從子貴、外祖父可左大臣正一位、外祖母可正一位、死而有知、嘉茲哀贈、主者施行、(〇又見都氏文集)

三位藤原朝臣宇合、大藏卿從三位鈴鹿王、右大辨正四位下大伴宿禰道足、就縣犬養橘宿禰第、宣詔贈從一位、別勅莫收食封資人、

〔續日本紀十二聖武〕天平九年十月丁未、贈民部卿正三位藤原朝臣房前正一位左大臣、並賜食封二千戸於其家、限以二十年、

〔續日本紀三十八桓武〕延曆四年五月丁酉、詔曰、春秋之義、祖以子貴、此則典經之垂範、古今之不易也、朕君臨四海、于茲五載、追尊之典、或猶未崇、興言念此、深以懼焉、宜追贈朕外曾祖贈從一位紀朝臣〇諸人正一位太政大臣、

〔日本後紀十四平城〕大同元年六月辛丑、詔曰、尊祖追榮、先王之茂範、敦親贈號、暴哲之嘉猷、朕以菲薄、嗣守洪基、思欲率循舊章、篤崇典禮、宜朕外祖父贈從一位內大臣藤原朝臣良繼追贈正一位太政大臣、外祖母贈從一位尙藏安倍朝臣古美奈贈正一位、

〔日本後紀二十四嵯峨〕弘仁六年七月壬午、立夫人從三位橘朝臣諱〇嘉智子爲皇后、〇中略贈皇后父正五位下橘朝臣淨友從三位、

〔日本紀略淳和〕弘仁十四年五月己未、詔曰云々、外祖父贈右大臣從二位藤原朝臣〇百川外祖母尙縫從三位藤原氏云々、宜加崇班式照幽壤、外祖父可太政大臣正一位、外祖母可正一位、

〔續日本後紀一仁明〕天長十年三月乙卯、詔曰、盛德無沫、必資加等之榮、徽烈惟昭、非修崇號之制、故使敬宗尊祖、義煥彝篇、追遠俤終、不隔異代、朕外祖父從三位橘朝臣〇清友疏基顯族、驤首高衢、外祖母從三位田口氏、毓彩芝田、騰芳蕙圃、但屬運謝、已從閱川、朕以菲薄、丕承洪業、緬尋既往、想清渾之眇焉、乃詢舊章、宜縟禮而有賁、宜外祖父及外祖母並追贈正一位也、橘朝臣位記狀曰、地居貴戚、爵既隆而加榮、德蘊餘芳、人雖謝而追遠、宜申朝典式賁泉扃、田口氏位狀記曰、曾慶潛行、誕茲婉嫕、粉川行閱、蘭郁猶流、欽若舊章、睦親斯在、宜崇寵贈允迪追榮、勅、山城國相樂郡拃山墓、河內國交野郡小山墓並宜置守

贈官位

行贈位也、又位記宣命可内覽哉否、被問先例、大外記定俊申云、閑院太政大臣時、兼不可内覽之由殿下被仰者、仍令少外記申此旨於殿下、返來云、彼例不可内覽者、（後本不内覽也、仍不被申也、）宣命位記草可奏聞哉否條、先被問大外記、申云、可被奏聞、是先例也、清書請印之後、重相具宣命可被奏者、仍隨定俊眞人申被仰也、　九日、無平座、依爲廢朝中也、但内藏寮居酒肴於殿上、如例諸司供菊花、　十一日、例幣延引之由有大祓、宰相中將保實行之、（右少辨遲參、不被著者、）　十二日、早朝上御簾、幷有音奏、依避日次、引及今日歟、

〔柱史抄下〕贈官位事

母后幷外祖父母多有此事、上卿召内記、内記參軾、仰云、某人可贈（虫損）后宮某人可叙其位、詔書宣命位記任例可奉仕者、被仰下准據之例、即各成草、參進内覽、奏下如恒、（若於位記者、直清書進之、自餘草許也、）上卿於本座、召大内記仰清書事、清書覆奏如例、詔書有御畫、上卿召中務輔賜之、贈后宮宣命使、參議次官五位殿上人也、上卿召少納言給贈位位記宣命、（告文於墓所燒之、至位記者、持向彼子息許之、或以少納言差遣、依人可有其事、）

〔大鏡一後一條〕世はじまりてのち、大臣みなおはしけり、○中略あるひはみかどの御おほぢ、あるひは御門の御をぢなり給ふめる、またしかのごとく帝王の御おほぢをおなぢにて御うしろみし給ふ、大臣納言かずおほくおはす、うせ給ひてのち、贈太政大臣などになり給へるたぐひあまたおはすめり、さやうのたぐひ七人（或本十人）ばかりやおはすらん、わざとの太政大臣はなりがたくすくなくぞおはする、

〔續日本紀八元正〕養老四年八月癸未、是日右大臣正二位藤原朝臣不比等薨、　十月壬寅、詔遣大納言正三位長屋王、中納言正四位下大伴宿禰旅人、就右大臣第宣詔、贈太政大臣正一位、

〔愚管抄一元正〕不比等大臣は、養老四年八月三日薨、謚號淡海公、聖武の外祖にて、病に臥給ふより重く殊にもてなされ給ふ、贈太政大臣と云々、

〔續日本紀十一聖武〕天平五年十二月辛酉、遣一品舍人親王、大納言正三位藤原朝臣武智麻呂、式部卿從

二にならせ給けり、(○中略)とのばらみな皇太后宮の御うすにはひにておはしまし、みやづかさなどこまやかなりつるに、くろつるばみにならせ給、世中の十が九はみなにぶみわたりたり、いはば諒闇ともいひつべし、おほやけよりも諒闇せよといふ宣旨くだりたればなりけり、

〔日本紀略十三後一條〕萬壽四年十二月一日丁卯、(○一月丁卯、恐四日庚午誤、)入道前太政大臣藤原道長公薨於法成寺無量壽院、(法名行覺、年六十二、)十一日丁丑、月次祭神今食等、依入道大相國薨被停止畢、仍有大祓、

〔中右記〕寛治八年(○嘉保元年)九月五日、此曉右大臣(○源顯房)薨、(年五十八、六條亭、)先十餘日勞赤痢病、遂以薨逝、仍今日雖可有宇佐遷宮幷官奏、皆以止了、主上(○堀河)御愁歎之餘、雖供朝夕膳無出御、八日丙午、今夜藤大納言、左大辨(季)參仕仗座、(官人置膝突)有右府薨奏事、先外記申其由、上卿令藏人右少辨時範奏薨奏候之由、仰聞食了由、外記指薨奏於文杖覽上卿之、見了後進御所邊、令時範奏留御所、返給文杖、仰從彼家被申云、賻物別給、葬司等被停止者、上卿還著仗座、時範仰云、可贈正一位、賻物別給任葬司等隨申請、警固幷廢朝三日者、(明日平座停止之由別不被仰下、是依爲廢朝三箇日中也、)仰便賻物等事、可隨申請由被仰時範、了仰史、上卿召內記、少內記菅原宣資參進、(大內記在其、籠九條前太政大臣穢、依召文章生少內記也、)被仰可作宣命並位記之由、此間且召外記被問六府參入由、皆以參仕者、令內豎召六府、入從西中門方、列立仗座前庭、右少將有賢、左衞門權佐有信、除四府將監尉等也、(六位帶弓箭可立北上也、而南上若誤歟、佐尉異位重行、)尤名對面、次仰可警固由、次位記宣命草等內記覽上卿、(入筥)上卿進御所邊、令時範奏返給、歸著仗座、仰內記令清書、清書了後、被位記請印儀如常、但中務輔俄不參仕、依以右少將有賢爲代官、(帶弓箭)少納言家俊請印於位記、上卿進御所重奏覽、返給之後著仗座、目使左大辨、左大辨參上卿前、給宣命於左大辨、次召中務輔代主殿頭公經朝臣、給位記爲使、(內豎一人相具、)宣命使位記使等起座、行向彼家六條亭、時範仰云、來十一日例幣延引、其由可行大祓、上卿召外記返給筥了、次被仰云、廢朝三日、又來十一日例幣延引者、又召右少辨時範、十一日可行大祓之由宣下、時範則仰史、已及夜半事了、上卿先內午之日有贈位例被相尋、法性寺太政大臣時、午日被

知食、今日薨奏固關警固等事被行宜歟、因關被付國最可往、以遣使不可為重、給官符不可為輕、前々式依國司申、被停遣使、或有隨時之儀被屬猶國、此度已及歲暮、事煩可多、被止使一計也、廢朝依勘申可被行、（三箇日）且今日著御錫紵、第四日除可宜歟、外記勘申云、天慶元年十一月十二日記云、四品勤子內親王今月五日薨、（主上御姉）去九日薨奏、同日服御錫紵、同十一日滿三箇日除錫紵也、而當御衰日、仍及四箇日所除也、者如件勘文延一日例分明也、天曆八年九月七日重明親王薨奏服錫紵、廿三日除給、已及四箇日、件例注出、又御衰日除給、康保三年十二月廿二日（壬午）中務卿式明親王薨奏服錫紵、廿四日（甲申）御衰日除給、避復日給也、亦重日除給例、延喜十年二月廿五日（乙酉）均子內親王薨奏服喪服、廿七日（丁亥）除給、同注出、付頭辨、御衰日重日例不宜、前太政大臣御事、能避事忌可被注也、亦日限不滿之例側所覺也、而未尋出、抑日數減例與延行例、且可在御定者也、事事大概以賴隆相傳、外記勘文一見了返授于辨云、可然之樣相定可仰下者、依重事所申達也、辨云、可有賻物乎如何、御使候哉、余答云、至賻物無官職人不可給、但前々親々人、有臨時賻物歟、又云、物數如何、答云、可依太政大臣例歟、又云、勅使乎、予答云、殿上四位辨如何、可有勅定、亦云、可有弔喪御使乎、答云、尤可然事也、御使何等人哉、余答云、宣命時勅使納言、但位記使宰相歟、至別勅使四位如何、可有勅定事也、又云、此間觸下官可左右者、尙書隨身賴隆歸參、依可仰下歟、中將歸來云、以藤宰相一々可申通關白被報云、以頭辨令問畢、今如此消息、今日薨奏服御錫紵事、警固固關可行也、錫紵四箇日除給、有兩度例、尤從事也、依彼等例及四箇日除給也者、入夜中將從內退出云、今日中納言道方卿固關事造國々官符、內印進御所令奏、警固事同行之、（中略）頭辨云、臨時賻物更不可給由關白被命云、又云、弔喪勅使可遣左大辨定賴、（參議）歟、次召遣使者云、不知在所者、上達部供奉葬送御共、至中將給故宮素服、可有事忌、源中納言相同、仍兩人行固關等事、今夜前太政大臣禪閤於鳥戶野葬送、（○中略）十日丙子、中將來云、卯時令除錫紵給云々、

〔榮花物語（三十鶴の林）〕萬壽四年十二月四日うせさせ給て、（○藤原道長）ついたち七日の夜御葬送、御年六十

御記了、明年節會等事、欲聞案內、付中將令達□、歸來云、藤宰相廣業關白被報云、其承□、但明日可行葬送事、同日可有薨奏、御錫紵警固固關□歟、心神不覺、可然之樣可申行、貞信公（〇藤原忠平）御葬家子大臣冠歟直衣歟如何、可示案內者、余報云、因永祚例一々可被准行、先有固關、其後有薨奏、次第違濫有不靜云々、先有警固固關等由被問云々、猶先可被行薨奏、只明日服着錫紵、令除給之日當重日、尋前跡可被行歟、可被縮日數歟、將可被延歟、臨歲末遣固關使、有事煩歟、被屬猶國可宜乎、又貞信公御葬送事、淸愼公（〇實賴）不被憶記、但葬禮皆着凶服、不可着直衣乎、淸愼□信公從家不被行葬禮、先移山寺從彼行葬禮、仍從家相從、上下其裝束如尋常、且明年正月節會等事大略申達、忠仁公九月二日薨、□年十一月豐明節會止、明年正月十六日節會賭射等停、又永祚例、前太政大臣（〇藤原兼家）七月二日薨、八月考定釋奠、過七々忌景雖被行、且三條太后十一月一日崩、正月元日七日十六日節會賭射等止依御卌九日內也、就中御本服三箇月、及明年十一月、太后與臣下尊卑相累、然而太后者、不御御服親前。太政大臣雖臣下外祖父也、隨亦可有三箇月御心喪、御心喪限內也、不可被行節會等、亦先朱雀院踐祚時、法帝（〇宇多祖父也）七月十九日崩、御心喪五箇月及十一月、仍大嘗會延引、次定謂之、御心喪內不可行如此之事等歟、藤宰相相傳云、尤被甘心者、入夜頭辨來傳關白（〇道長）消息云、可被行警固事、御錫紵日數不滿限日事、頗可轉歟、先行固關等事、又擇吉日、薨奏警固固關等同日被行如何、又廢朝日數有過御錫紵日數之例歟、此間事能々可申行者、仰大外記賴隆令勘申前例、次定勘文、明旦令見下官可計行者、但案內之故者、夜間有可被尋覽之文書、撿知前跡、明日可承濫事由、不待返事退去了、明旦可報件返事等、　七日癸酉、早朝中將來、參御堂者、薨奏等事有使、今可令達漏之由、大外記賴隆異人持了、示可來會余給之由、仍早參相待之間辨來、以賴隆傳關白消息云、外記勘文如此、可計行者、固關事可付國歟、薨奏可行、且御錫紵除給日數事可定申、心神不覺、不能具申者、余報云々、以賴隆先有固關後日有薨奏之事、只永祚也、似不被尋行、薨奏以前、不可給固關之官符、依其事可給官符、而無薨奏不可

右大臣〇藤原武智麻呂第授正一位、拜左大臣、即日薨、遣從四位下中臣朝臣名代等監護葬事、所須官給、武智麻呂贈太政大臣、不比等之第一子也、

〔續日本紀三十八桓武〕延暦三年十月乙未、尚藏兼尚侍從三位阿倍朝臣古美奈薨、遣左大辨兼皇后宮大夫從三位佐伯宿禰今毛人、散位從五位上當麻眞人永繼、外從五位下松井連淨山等、監護喪事、古美奈、中務大輔從五位上粳虫之女也、適内大臣贈從一位藤原朝臣良繼、生女、即是皇后〇藤原乙牟漏也、

〔日本紀略六醍醐〕貞元二年十一月八日甲午、依太政大臣〇藤原兼通病、大赦天下、老人賜物、大臣於堀川院薨、年五十三〇中略左大臣〇藤原賴忠仰云、諸陣可打固者、宜陽建春宜秋陰明〇陰或作陽等門開、令出入雜人者、今夜子刻、故太政大臣遷東山雲居寺、　九日乙未、左大臣仰云、瀧口武者帶弓箭、可免出入之者、右大臣〇源雅信以下諸卿參仗、權中納言朝光以散位紀以文令申者、故太政大臣存日命云、可被停止官喪儀贈位等事者、上卿云、明日春日平野祭也、過件神事可奏者、〇中略　十四日庚子、故太政大臣葬送也、仍上官等參、　廿日丙午、奏故太政大臣薨由、廢朝三个日、固三關、詔贈正一位、封遠江國、爲遠江公、謚曰忠義公、食封資人並同生日、本官如元、

〔小右記〕萬壽四年十二月四日庚午、巳時許式光來云、禪閤〇藤原道長昨日入滅、而昨夜有搖動氣云云、〇中略頭辨來、以人相傳云、入道相府不可存云云、此口太不審、先可被下御簾乎、余云、薨奏後可垂御簾、但女院御坐同所、必所有聞食、薨奏以前下御簾可宜歟、可被尋前例、抑可依大入道〇藤原兼家例歟、且當時有臨幸、不可准他時歟、節會等事如何、七々忌内難被行歟、大入道七月二日薨、四十九日内無節會、三條太后十二月一日崩、正月節會停止、七日只牽白馬、誠雖御后位、不御服親、禪室雖云臣下、已是祖父、已蒙准三后宣旨之人也、猶准被三條太后例可被行歟、依重被行何如、〇中略　六日壬申、頭中將顯基問薨奏并着御錫紵事等、以師重相傳左兵衛督示送云、女院別當依御重服、院司可着服給者、件事見邑上天德四年御記、九條丞相薨時、中宮職司等不可着服、口在明法勘狀、不可著由被下宣旨了、見遣

寛治三年十月四日

從五位上行直講中原朝臣章貞
從五位上行直講清原眞人定康
正五位下行助敎兼石見守中原朝臣在國
正五位下行助敎兼越中守清原眞人
正五位上主稅頭兼大外記博士伊與權介中原朝臣師平

〔朝野群載二十一雜文〕薨。奏。
太政官謹奏
　無位藤原朝臣睦子（○藤原實季妻、鳥羽母后苡子母、）
右人去月廿四日卒、今月二日葬、儀制令云、皇帝外祖母喪、不視事三日者、仍錄事狀、謹以申聞、謹奏、
　永久二年三月七日
〔玉海〕治承五年閏二月十四日庚申、此日有禪門（○平清盛）薨奏、雖爲出家之人、依康和之例被行云云、從今日廢朝三箇日云云、
〔續日本紀十一聖武〕天平五年正月庚戌、內命婦正三位縣犬養橘宿禰三千代薨、遣從四位下高安王等監。護。喪。事、賜葬儀准散一位、命婦皇后（○藤原光明子）之母也、
〔續日本紀十二聖武〕天平七年十一月己未、正四位上賀茂朝臣比賣卒、勅以散位葬儀送之、天皇之外祖母也、
〔續日本紀十二聖武〕天平九年二月辛酉、參議民部卿正三位藤原朝臣房前薨、送以大臣葬儀、其家固辭不受、房前贈太政大臣正一位不比等之第二子也、
〔續日本紀十二聖武〕天平九年七月丁酉、勅遣左大辨從三位橘宿禰諸兄右大辨正四位下紀朝臣男人就

薨、八日奏、自此日止音奏警蹕、帝（堀河）外祖而十日十一日共復日也、仍十二日雖為凶會日強不忌、則上御簾畢、

〔續日本紀八元正〕養老四年八月癸未、是日右大臣正二位藤原朝臣不比等薨、帝深悼惜焉、為之廢朝、擧哀內寢、特有優勅弔賻之禮異于群臣、大臣近江朝內大臣大織冠鎌足之第二子也、

〔公卿補任清和〕太政大臣從一位藤良房　貞觀十四年九月二日薨、在官廿五年、同四日賜正一位、號白河殿又染殿、諡云忠仁公、封美乃國、輟朝三箇日、是日、葬山城國愛宕郡白河邊、

〔日本紀略村上三〕天曆三年八月十四日乙酉、戌時太政大臣藤原忠平薨、小一條第、年七十病間公家賜度者卅人、又大赦天下、　十七日戊子、太政大臣薨奏、仰廢朝三箇日、固關。警。固。。

〔日本紀略圓融六〕貞元二年十一月廿日丙午、奏故太政大臣〇藤原兼通薨由、廢朝三箇日、固三關、

〔百練抄堀河五〕寬治三年十月四日、諸卿定申源隆子薨事、右大臣（源顯房）室件人雖為當今外祖母、前中宮〇白河后賢子改姓為藤氏、仍令諸道勘申之、就所養不可有錫紵、但廢朝三ヶ日之由被定了、凡為人養子之者、本生傍親服不可著之由僉議了、

〔朝野群載雜文二十一〕禮喪廢朝

勘申從二位源朝臣隆子薨逝間所被行事

儀禮喪服經曰、為外祖父母、同疏曰、小功五月、章曰、為外祖父母、傳曰、何曰小功也、以尊加也、外祖之服不過緦麻、以祖是尊名、故加至小功、春秋左氏傳杜氏注曰、天子絕傍期、唯有心喪、大唐開元禮云、皇帝本服、大功以上、及外祖父母、皇后父母、百官一品喪、皇帝不視事三日、

就件等文、雖可被行外家之義、猶非無物疑、又准據之文、經典無所見、然則心喪廢朝之禮、依時議可被行歟、

右依宣旨勘申如件

殁後恩遇

〔公卿補任後冷泉〕關白左大臣從一位藤頼通　康平二年二月十一日、上表請罷職并隨身近衞等、勅答近衞依請、三月六日、大赦天下、大臣病、九日、依病重辭大臣、無勅答、

〔中右記〕寛治七年十一月五日、今日伊勢公卿勅使參宮之日也、○中略今日内大臣參使座、有不堪田定、入夜有臨時免者、未斷輕犯者卅三人聊依有所思食、有此恩赦也、是右相府○源顯房之所惱、猶以無減氣、大概此恩赦依件事歟、抑如此大神宮公卿勅使參着之日、有免者之例先被相尋、或被問外記、或被問民部卿並別當、但慥先例未見歟、人々所被申不有一定、但依無日次、推今夜有此事歟、藏人兵部大輔沙汰許事、

〔百錬抄七六條〕仁安三年二月十六日、依入道太政大臣○平清盛病、被行非常赦、

〔百錬抄十四四條〕仁治二年十一月卅日癸丑、被行非常赦、依禪定太閤○藤原家實所惱也、雖非外戚執政之故、異他之故也、

〔令義解九喪葬〕凡天皇爲本服二等以上親喪、服錫紵、謂凡人君即位、服絶旁期、唯有心喪、故云本服、其三后及皇太子不得絶旁期、故律除本服字也、依儀制令、子爲一等、故稱二等以上、即外祖父母亦同、依同令、皇帝不視事、與二等親同、故其天皇爲考妣、令條無文、依式處分也、錫紵者細布、即用淺墨染也、爲三等以下謂四等以上、即五等之内、無服親故也、依儀制令、三等親喪、皇帝不視事一日、即四等親喪、雖不得視事、而除帛之制、亦一日爲限也、及諸臣之喪謂儀制令、皇帝不視事、是也、除帛衣謂白練衣外通用雜色、

〔日本紀略一醍醐〕延喜七年十月十七日辛酉、從三位宮道朝臣列子○藤原高藤妻薨、帝之外祖母也、有薨奏、廿六日庚午、詔贈從三位宮道列子正二位、殊賜絹布等、天皇服錫紵、

〔百錬抄四後冷泉〕天喜元年六月十一日、從一位源倫子薨天皇外祖母左大臣〔藤原頼通〕母、號鷹司殿、廢朝三箇日、主上著錫紵、

〔令義解六儀制〕凡○中略皇帝二等以上親、及外祖父母、右大臣以上、若散一位喪、皇帝不視事三日、謂依喪葬令、從發哀日始計、至三日、其親王亦同、給葬具及賻物、親王與散一位同故也、

〔禁秘御抄下〕廢朝

廢朝三箇日被仰ヌレバ、止音奏警蹕、禁中無物音、垂清涼殿御簾○中略又同年○寛治八年、顯房公薨、五日

づかさ左衛門尉ためかたをば、使かけさせ給宣旨くださせ給、また御堂には五百戸の御封よせさせ給宣旨おなじくくだりぬ、とのゝ御まへいみじううれしきおほせなりと返々なく〳〵よろこび申させ給、うへは又なにごとをと覺しめさるれど、又申させ給事なきをくちをしうおぼしめさる、女院の御かたにいらせ給へれば、女院いみじくなかせ給て、とのゝいみじううれしきことによろこびなき給が、かへす〴〵うれしきことゝよろこひ申させ給、あはれに心うきこと見給ふなどいみじうなかせ給、中宮さておはしませばおなじさまの御事どもこそは、對面などはとみにえあこまじきにこそなどあはれにかたらひ申させ給、さていとゞくかへらせ給ぬ、おほやけより此御堂にきぬ三百疋、布千段、誦經におこなはせ給けり、殿の御壽命のための御誦經なりけり、そのほどげに世のためしに云つべく、ふりがたうめでたき御ありさまなり、ひとゝせの御堂供養に、行幸行啓などおぼしあはせられてかへらせ給ぬ、かくて八日に成ぬれば東宮の行啓あり、同じくとのゝ御まへ、一日のやうにさるべきさまにておはします、東宮見奉らせ給にあはれにあさましきまでなかせたまへば、殿もいみじうなかせ給ふ、あべい事ども申させ給て、いみじうなかせ給ふにも、御心のうちに我よにあはせ給はずなりぬる事を、あはれにくちをしうもあるかな、心のほど見えたてまつらんとおもひつる物をとおぼさるゝに、いとかなしう覺しめさるゝなりけり、いまはかく行幸行啓にまかりあひぬれば、いまなんおぼつかなく心とまる事なくて、極樂にも心きよくまゐり侍るべきとてもなかせ給へば、いとゞあはれにいみじうみたてまつらせ給ふ、女院の御かたにいらせ給ても、この御事よりほかのことは何事かあらん、さてもとくかへらせ給、云ばしもとおもへど、おきゐ給へるがいとくるしければとの給はせても又なかせ給、とのゝ御まへは今はいと心やすし、けふまで世にはありつるなりとの給はするにつけても、僧俗そこらの人々、なみだをながせどいみじうしのびやかなり、

からん日しておはしまさせ給へかし、たゞ思事は、いとなめげにふしながら御覧ぜし事を思ふなり、さらばよき日してとのたまはす、この月（〇萬壽四年十一月）廿五日よろしき日なれば、その日行幸い御用意あり、東宮の行啓はおなじ日あるべけれど、心あはたゞしかるべければ、おなじ月の廿六日とさだめさせ給、さてその日になりて、たつのときばかりに行幸あり、昨日御ぐしなどそゝせ給て、御けさころもなど奉らせ給て、世のつねの御有さまにて、御脇足におしかゝりておはします、うへいといみじうあはれに見たてまつらせ給て、せきもとゞめずなかせ給ふ、あさましうわらぬひとにはならせ給へる御ありさま、哀にかなしく心うく見たてまつらせ給、さてなに事をかおぼしめすこととては、あるときこえさせ給へば、いまはこのよにすべて思ふ事候はず、世中におほやけの御うしろみつかうまつりたる人々おはかる中に、あかりてもかばかりさいはひあり、すべき事のかぎりつかうまつりたる人さぶらはず侍、まづはおほやけのおほぢやなどこそはかやうにて候に、まだかゝるをりの行幸候はず、ちゝみかど母ぎさきの御事にこそは候めれ、それすらさしもあらぬたぐひどもあまたさぶらふ、まづちかうは三條院六月にくらゐにつかせ給て、十月七日冷泉院の御心ちおもらせ給し、行幸あるべくおはせられしかど、諸卿のさだめに、なほ御もののけのいとおそろしうおはしますよし申侍しかば、行幸候はずなりにきなど、いとさはやかに申つゞけさせ給へば、此御心地はちからなげさのいみじきにこそあんめれ、御心ちはゆめにかはらせ給ことなし、あはれやめたてまつらばやとおぼすにいとかなしうて、おほさんまゝの事の給へと返々申させ給へば、すべて思事候はず、世はじまりてのち、この行幸こそはためしに候めれ、これよりほかの事は何事かは、たゞしこの御堂の事つかうまつりつるをのこどもをなんひとつの事をせんと思ひたまへつると申させ給へば、いとやすき事なりとて、關白殿のかみの家司因幡前司ちかたゞをば、よりあきらがかはりに美濃になさせ給、しもの家

十四日庚戌、上東門院○彰子仰諸寺、轉讀壽命經二萬六千餘卷、中宮令讀金光明經涅槃經維摩經等、關白左大臣○藤原頼通行萬僧供養、依祈入道前大相國之除病也、　十七日癸丑、舞姬參入、無御出、依禪下病也、　十八日甲寅、鎭魂祭無御前試、依禪下病也、今日中宮奉爲入道禪下被行修法、左府○頼通爲入道禪下集百口僧、令轉讀觀音經、　十九日乙卯、今日於法成寺藥師堂爲入道禪下除病、中宮令百口僧行仁王經讀經、　廿六日壬戌、天皇幸法成寺、依入道前相國之病也、以封戸五百烟施入寺家、又修諷誦供養、南北諸寺僧萬人、依被申請、以因幡守庶政任美濃守、左衞門權少志豐原爲長爲撿非違使、又造塔事可遂之由云々、　廿九日乙丑、春宮○後朱雀行啓法成寺、依同病也、御坐法成寺阿彌陀堂南廊、

〔小右記〕萬壽四年十一月十三日己酉、民部大外記頼隆來云、今日被行非常赦、依前太政大臣○藤原道長病、按察大納言行成、大内記之作詔右衞門權佐爲善奉宣旨、先是別當經通來簾下、訪所勞、又陳可有赦令之由、入夜中將來云、禪閤○道長無增減、夜前沐浴、被始念佛、外人聞其聲、上下走迷、存入滅乞由云々、公家被奉千人度者、　廿四日庚申、關白○道長子頼通御消息云、日者、携御堂御病、心神不覺如醉人、公家之例事、一々可被驚示、又明日行幸、禪室可被行功德事、何等事宜乎、未思得、可然之事可被示也、非常赦令此時可被行、而早被行至今何爲者、余○藤原實資報云、有所勞籠侍、心神不例、徒然送日、事與心迷、欲申不得、行幸日功德事、左右難申、赦令早被行事、更有何事乎、以早可爲善、抑後日被行萬僧供、又被行賑給如何、不比等大臣病時臨幸、只給度者九十人、被行非常赦令、鎌足大臣病時行幸、給大織冠、任内大臣、其外無所見、亦東三條院御病、又有行幸、

〔榮花物語三十鶴の林〕殿○藤原道長の御まへ、○中略かくて日ごろにならせ給へば、ほいのさまにてこそはおなじくはとて、阿彌陀堂にわたらせ給、もとの御念誦のまにぞ御しつらひしておはします、○中略うち○後一條よりも東宮○後朱雀よりも、かく今までに見奉らせ給はぬなげきの御消息しされば、よ

下病恩給之例、雖有一兩、是爲有功勤公之輩也、今臣（〇藤原忠平）年來經病痾、無由出仕、而蒙不涯之恩、不知所奏者、此仰具承、中納言傳之、被物白大褂一重、　廿二日、昨日因給度者、且分配卅人、令鎮朝律師申上成祈願、

〔九暦〕天暦三年八月十四日、太閤（〇藤原忠平）薨御事、（戌刻）此夕有詔賜度者三十人事、又有赦令事、　十六日、道固關使又警固事、　十八日、御葬送俄事、　廿五日、開關事、

〔九暦〕天德二年二月廿二日、左大閤（〇藤原實頼）御惱殊重、仍又加修法壇云云、爲救左大臣病、給度者十五人是依奏請云々、

〔歷代皇紀（冷泉）〕關白

左大臣藤原實頼（〇中略）

安和元年六月十四日、給度者卅人、依所惱也、

〔日本紀略（一條九）〕正暦元年五月十二日、詔、賜入道太政大臣（〇藤原兼家）度者一百人、大赦天下、大辟以下常赦所不免者赦除、又免調庸加賑給、

〔日本紀略（後一條十三）〕寛仁三年三月廿一日戊寅、前太政大臣從一位藤原朝臣道長落飾入道、（年五十四、法名行觀、後改行覺、）依胸病也、戒師法印院源、剃御頭律師定基、入夜小一條院（〇敦明親王）並太皇太后宮（〇一條后彰子）皇后（〇三條后娍子）中宮（〇後一條后威子、以上三宮並道長女、）渡御、（〇中略）　四月三日庚寅、詔大赦天下、大辟以下罪無輕重常赦所不免者赦除、依入道前相國之病也、

〔小右記〕寛仁三年四月辛卯、早朝彼是口入道殿（〇藤原道長）重惱給、（〇中略）去夜被非常赦、中納言行成卿承之、臨曉更赦免云々、

〔日本紀略（後一條十三）〕萬壽四年十一月八日甲辰、中宮（〇威子）行啓法成寺、依入道前太政大臣（〇藤原道長）所惱也、（〇中略）　十三日己酉、詔大赦天下、又免調庸加賑恤、依救入道大相國之病止（〇止恐衍）也、又給度者千人、

禱之費、　九日己卯、詔曰、酌訓皇源、陶風帝籙、未有不施厚恩以崇盛德、降殊貸以慰元功者、朕外祖父太政大臣藤原朝臣、功蓋三代、位極上台、仁襟被九州而有餘、德水露千里而無盡、自朕在襁褓以至今時、言其顧復保佐之勤、豈以周旦漢光爲伍、朕念不賞之功、將加非常之寵、知其至謙之性、不敢開口而言、聊且欲褒爵加封、以酬萬一、而挹損彌深、遜讓尤切、感夫乃情、不恣相忤、朕之庶幾、賴彼撝謙之誠、增其延壽之福、長生久視、輔導朕身、令若倚南山、坐平原也、是以屈己從人、不奪其志、恐天下以朕爲不知恩也、而今寢瘵私第、日月彌留、珪幣相尋、祈禱未効、朕自鍾此患、寢食無安、心隨思焦、言與淚俱、深患救復之方、誠無所不到矣、聞諸內經、度人歸道之功、能救人之厄命、又先王德政、議獄緩刑、矜老養孤、若施斯仁貸、副朕篤情、縱雖病在膏肓、幸使箴藥得其宜、賜度者八十人、又大赦天下、今日昧爽已前所犯大辟已下、罪无輕重、已結正未結正、已發覺未發覺、皆赦除、唯犯八虐、故殺謀殺、私鑄錢、及強竊二盜、常赦所不免者不在赦限、又天下道俗高年者、鰥寡孤獨篤癃之類、量加賑恤、普告遐邇、俾知此意、

〔菅家文草 八詔勅〕答太政大臣（○宇多后溫子父藤原基經）謝爲病賜度者免罪人勅（○宇多）

勅、太政大臣雅言悉之、皇天不知、公病無損、朕前行志、寘助惟求、欲令出獄門者、開法網以爲公處療之方、入禪道者、轉戒珠以爲公加持之力、功重報輕、朕之過也、謝章忽至、增愧深焉、又國家庶務、關白於公、朕自樂成、業在恭己、而今具叙其意、固辭此職、非唯退閑之謀、期以消伏之術、既云避害、朕豈怍之、雖暗前途、暫順來請、不有日月乎、不有山川乎、所患少間、視事如故、勿使朕當淵氷奔馳之危以無舟檝御轡之備而已、嗟虖朕之砭石、朕之股肱、豈圖令股肱不安和、爲砭石所治攝、捻心而歎、刻骨以傷、公強加飡、莫忘社稷、

寬平二年十一月十九日奉勅製之

〔日本紀略 二朱雀〕天慶七年十月廿四日癸亥、依關白太政大臣（○藤原忠平）重病、賜度者五十人、

〔九曆〕天曆三年正月廿一日、頭有相來仰云、御病重由、助憂不少、爲息災給度者五十人者、復命云、依臣

疾病恩遇

而不承、仍被停止了者、

〔扶桑略記 二十八 後一條〕長元六年癸酉十一月廿九日、於關白左大臣〔○藤原頼通〕高陽院、賀母氏從一位源倫子〔○後一條外祖母〕七十算、有童舞、翌日天皇召覽童舞於禁省、件童等三人被聽昇殿、

〔日本書紀 二十二 推古〕二十二年八月、大臣〔○推古外舅蘇我馬子〕臥病、爲大臣而男女幷一千人出家、

〔公卿補任 文武〕大納言從二位藤原朝臣不比等　慶雲二年五月大納言藤原朝臣臥病、詔賜度者廿人、是賜度者之始也、兼以布四百端、米八十石、施京諸寺、

○按ズルニ、公卿補任ニ不比等ヲ以テ、度者ヲ賜フ始ト爲スト雖モ、既ニ蘇我氏ノ時ニアルコト、前ニ引ク所ノ日本書紀ノ文ヲ見テ知ルベシ、

〔續日本紀 八 元正〕養老四年八月辛巳朔、右大臣正二位藤原朝臣不比等病、賜度三十人、詔曰、右大臣正二位藤原朝臣疹疾漸留、寢膳不安、朕見疲勞、惻隱於心、思其平復、計無所出、宜大赦天下、以救所患、養老四年八月一日午時以前、大辟罪已下、罪無輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、繫囚見徒、私鑄錢及盜人、幷八虐常赦所不免、咸悉赦除、其廢疾之徒、不能自存者、量加賑恤、因令長官親自慰問、量給湯藥、勤從寛優、僧尼亦同之、　壬午、令都下四十八寺、一日一夜讀藥師經、免官戶十一人爲良、除奴婢一十人、從官戶、爲救右大臣病也、

〔愚管抄 一 元正〕不比等大臣ハ養老四年八月三日薨、〔年六十二〕謚號淡海公、聖武の外祖にて、病に臥給ふより、重く殊にもてなされ給ふ、

〔續日本紀 十二 聖武〕天平九年七月乙未、大赦天下、詔曰、比來緣有疫氣多發、祈祭神祇、猶未得可、而今右大臣〔○藤原武智麿〕身體有勞、寢膳不穩、朕以惻隱、可大赦天下、救此病苦、自天平九年七月廿二日昧爽以前、大辟罪已下咸赦除之、其犯八虐、私鑄錢、及强竊二盜、常赦所不免者、並不在赦限、

〔三代實錄 二十一 淸和〕貞觀十四年三月七日丁丑、太政大臣〔○藤原良房〕患咳逆、〔○中略〕是日賜錢五十萬、以充祈

下衣被

〔小右記〕長和四年十月廿五日壬子、今日皇太后〔○一條后彰子〕於上東門宅賀左相府〔○彰子父藤原道長〕五十算、佛兩界曼陀羅經、大般若一部、壽命經五十卷、十僧外百口僧、威儀師二人行事、但十僧給法服、左大臣、內大臣、大納言道綱齊信賴通公任、中納言俊賢行成懷平敎通賴宗經房、參議兼隆定成通任、三位左中將能信、右兵衛督憲定、參議賴定等著饗座、〔東對〕撤御在所〔寢殿〕爲法會堂、佛具新調、幡花縵代同調、花縵代殿上人調進云々、庭中構舞臺、其北屬南階、件舞臺、贊衆梵音錫杖衆等立所料、行香机立舞臺上、誦經物立標東邊、諸僧集會馬場殿、打鐘之後、弟子僧先來置香鑪筥、每座立標位、池東西諸僧參入著座云々、堂童子座立庭、四位各方二人、五位口人、僧不著座之前、左大臣已下起饗座、著堂前座、作法云々、大行道廻池邊、師大僧都定隆俄有所煩辭退、補大僧都慶命、十僧一人闕、補僧都文慶、百僧內多有僧綱云々、〔僧綱八人、大僧都慶命、少僧都文慶、扶公、如源、律師尋圓、永圓、心譽、法橋源賢、凡僧二人、定基、心淸〕藏人頭資平先進左大臣許申給度者由相次就高座下、仰導師慶命〔錫杖後仰之〕云々、給祿於資平云々、資平於東對坤庭再拜、內御誦經勅使、中宮東宮御使、當御諷誦時著座、〔南階簀子敷圓座〕佛事了除右大臣之外、執祿被僧、左右相分、上達部座在南階東西簀子、殿上人地下人同執祿了、僧侶退下、講演中間秉燭撤僧座、敷上達部座〔母屋北北面〕左大臣已下著御前座、居衝重有盃酒、左大臣供御膳於太后、大納言公任執打敷、進母屋御簾下、上達部取膳、膳體不能具記、風流殊甚、件御膳、自西方度御前供之、卿相雲上人等絲竹頻唱、漸及醉鄕、有和歌、與左相府折佛前作花爲挿頭、內府大納言〔道○藤原道綱〕下官傳取同挿冠、依相國命、諸卿祖大納言公任執盃出會、其後左大臣設卿相雲上人祿、有差別、立明主殿寮官人、左大臣隨身、左大將隨身、〔余○實資〕隨身疋絹云々、宮所給歟如何、左大辨諸卿臨東對南面、馬一疋志內大臣、左相國加大納言道綱、令脫衣〔單衣〕給左將軍、次內大臣脫單衣、給左大臣隨身右府生公忠、次左相國脫阿古女一襲、給余隨身番長保重、事了退出、亥終許也、左大臣直廬、設寢殿與東對渡殿四尺御屛風六帖、其和歌近習上達部請書、讀人名、他雜具相[illegible]辭

〔台記〕久安六年十二月廿五日丁卯、傳聞關白〈忠通〉〇息童〈八歲〉於近衞亭加元服、關白加冠、權中納言忠基卿理髮、上達部直衣、殿上人衣冠、宗能忠基經定等之外無來客、無飲食事、冠者直衣、〈用主上御冠〉於堂上拜加冠云々、今夜無敍位禁色昇殿等事云々、〇中略上皇〈〇鳥羽〉及皇嘉門院〈〇崇德后聖子、忠通女、〉御件亭、依此事去夜上皇移御三條第、元服了還御、〇中略元服人三箇日留近衞亭、居女房局云々、是夜元服禮儀、未知誰人何年例、京師傾奇、

〔冠儀淺寡抄〈一說〉〕後世〇中略於正寢、然而嫡家嫡子必行之於正寢之廟、庶流末子者、乃於東西對及出居〈廊或廊〉曹司等行之、〇中略於禁中行之者是聖寵之至也、〇中略又於仙洞並女院等行之亦殊恩也、

〔公卿補任〈高倉〉〕散位　非參議從三位平清宗　治承四年五月卅日敍、〇中略前大納言正二位平宗盛一男、母贈左大臣時信公女、　承安二、正、五從五下、〈建春門院當年御給〉同加元服、〈於二院（後白河）御所加之〉同日、被聽內昇殿、即聽禁色雜袍、

〔玉海〕治承元年十二月卅日乙未、〇中略其夜有小除目云々、花山中納言〈〇兼雅〉息〈大相國入道（平淸盛）外孫〉加元服、即夜敍爵〈從五位下〉昇殿、又拜任侍從云々、拜賀候時可被許禁色候由兼被仰云々、攝錄之息尙未聞元服之夜授官候例、中納言子息元服之日昇殿、太以過分也、但權門之事不能論是非歟、

〔三代實錄〈七淸和〉〕貞觀五年十月廿一日庚辰、天皇宴太政大臣〈〇藤原良房〉於內殿、以賀滿六十之齡、有衣被寶物之贈、每色叶於六數、皆是乘輿服御之物也、特喚諸大夫年六十已上者於仗頭賜飮、太政大臣家令從五位下菅野朝臣弟門、授從五位上、藤原朝臣直方從五位下、從四位下藤原朝臣儉子進從四位上、無位藤原朝臣多美子從四位下、從五位下上毛野朝臣滋子正五位下、慶賀之餘歡、恩獎及餘家人也、〇中略　廿三日壬午、屈六十僧於內殿、限三箇日轉讀大般若經、　十一月廿六日乙卯、中宮〈〇藤原明子、良房女〉於太政大臣染殿第大設齋會、演大乘經、賀太政大臣滿六十也、限三日訖、公卿大夫多參陪焉、　十二月廿四日壬午、中宮爲賀太政大臣齡滿六十設廣讌、親王已下五位已上並侍焉、極歡而罷、賜親王已

令加冠焉、其幞頭巾子、皆是乘輿之所撤也、

〔公卿補任清和〕參議從四位下藤基經　貞觀六年正月十六日任、元藏人頭左中將、中將如元、

家傳云、年十八、於東宮(○清和)寢殿上加冠、天皇(○文德)覽、仁壽元也、

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年正月二日壬午、太政大臣(○藤原基經)第一之男時平、於仁壽殿加元服、于時年十六、帝自手取冠加其首、令主殿助從五位下藤原朝臣末並理鬘、卽日授時平正五位下、其告身天皇親筆書黃紙以賜之、勅參議左大辨從四位上兼行勘解由長官文章博士橘朝臣廣相作告身文、其所須冠巾皆是服御之物也、

〔本朝文粹二位記〕　　橘贈納言(廣相)

無位藤原朝臣時平

右可正五位下

中務、伯禽封魯、辟疆侍中、咨爾時平、名父之子、功臣之嫡、及此良辰、加汝元服、鳳毛酷似、爵命宜殊、可依前件、主者施行、

仁和二年正月二日

〔神皇正統記光孝〕この天皇、昭宣公(○藤原基經)の定によりて立ちたまひしかば、御志も深かりしにや、その子(○時平)を殿上に召して元服せしめ、御自ら位記をあそばして、正五位下になし給ひけるとぞ、

〔扶桑略記二十二宇多〕寛平二年二月十三日己巳、大臣(○藤原基經)參入言曰、可加小童仲平元服、卽簾前立倚子、就之、大臣祇候、爰使散位定國先結髮、次朕著冠、此時左大臣融朝臣參入、太政大臣並仲平相具舞踏、賜仲平白褂一領、朕卽手造位記曰、無位藤仲平、今可正五位下、先帝(○光孝)御宇之日、兄時平加元服、皆率其流也、

吉事恩遇

格言、實(○實恐賞誤)績酬勞、明主彝則、其藤原朝臣仲麻呂、晨昏不怠、恪勤守職、事君忠赤、施務無私、恐拙則降其親、賢良則擧其怨、殄逆徒於未戰、黎元獲安、固危基於未然、聖曆終長、國家無亂、略由若人、平章其勞、良可嘉賞、其伊尹有莘勝臣、一佐成湯、遂荷阿衡之號、呂尙渭濱之遺老、且弼文王、終得營丘之封、況自乃祖近江大津宮内大臣(○鎌足)已來、世有明德、翼輔皇室、君歷十帝、年殆一百、朝廷無事、海内淸平者哉、因此論之、准古無匹、汎惠之美、莫美於斯、自今以後、宜姓中加惠美二字、禁暴勝强、止戈靜亂、故名曰押勝、朕舅之中、汝卿良尙、故字稱尙舅、更給功封三千戸、功田一百町、永爲傳世之賜、以表不常之勳、別聽鑄錢擧稻、及用惠美家印、

〔續日本紀(二十一淳仁)〕天平寶字二年八月丙寅、外從五位下津史秋主等卅四人言、船、葛井、津本是一祖、別爲三氏、其二氏者蒙連姓訖、唯秋主等未霑改姓、請改史字、於是賜姓津連、

〔續日本紀(四十桓武)〕延曆九年十二月壬辰朔、詔曰、春秋之義、祖以子貴、此則禮經之垂典、帝王之恒範、朕君臨寓内十年於茲、追尊之道猶有闕如、興言念之、深以懼焉、宜朕外祖父高野朝臣(○弟嗣)外祖母土師宿禰、並追贈正一位、其改土師氏爲大枝朝臣、夫先秩九族、事彰常典、自近及遠、義存曩籍、亦宜菅原眞仲、土師菅麻呂等、同爲大枝朝臣矣、(○又見本朝月令)

〔續日本後紀(四仁明)〕承和二年正月己巳、是日後太上天皇(○嵯峨)幸嬪橘氏(○嘉智子)所誕育皇子爲親王、左京人右馬寮權大允淸友宿禰眞岡、散位同姓魚引等、賜姓笠品宿禰、非其願也、公家避贈太政大臣橘氏(○嘉智子父淸友)之名耳、

〔續日本後紀(九仁明)〕承和七年十一月辛巳、勅、橘戸、蝮橘、橘連、伴橘連、橘守、橘等六姓、與橘朝臣(○淸友)相渉、宜賜椿戸、蝮椿連、伴椿連、椿守、椿等、自餘以橘字爲姓之類、亦以椿換之、

〔續日本後紀(十三仁明)〕承和十年七月庚戌、致仕左大臣正二位藤原朝臣緒嗣薨、(○中略)緒嗣者、參議正三位式部卿太宰帥宇合之孫、而贈太政大臣正一位百川之長子也、桓武天皇延曆七年春、喚緒嗣於殿上、

ゐ給ひて、ものなどそうし給ふ、みすのうちに、女房さくらのからぎぬどもくつろかにぬぎたれつゝ、ふぢやまぶきなどいろ〳〵にこのもしく、あまたこはじとみのみすよりおし出たるほど、日のおましのかたにおものまゐるあしおとたかしけはひなどをし〳〵といふ聲きこゆ、うらうらとのどかなる日のけしきいとをかしきに、はての御はんもたる藏人まゐりて、おものそうすれば、なかの戸よりわたらせ給ふ、御ともに大納言殿まゐらせ給うて、ありつる花のもとにかへりゐ給へり、宮〇一條后定子、伊周妹、の御まへの御きちやうおしやりて、なげしのもとに出させ給へるなど、たゞなにごともなくよろづにめでたきを、さぶらふ人もおもふ事なきこゝちするに、月も日もかはりゆけども、ひさにふるみむろの山のといふふることを、ゆるゝかにうちよみ出してゐ給へる、いとをかしとおぼゆる、げにぞちとせもあらまほしげなる御ありさまなるや、

〔續日本紀 十聖武〕神龜四年十二月丁丑、正三位縣犬養橘宿禰三千代〇聖武后藤原安宿媛母、言、縣犬養連五百依安麻呂、小山守大麻呂等是一祖子孫、骨肉孔親、請共沐天恩、同給宿禰姓、詔許之、

〔續日本紀 二十孝謙〕天平寶字元年八月癸亥、夫人正二位橘朝臣古那可智、无位橘朝臣宮子、橘朝臣麻都賀、又正六位上橘朝臣綿裳、橘朝臣眞姪改本姓、賜廣岡朝臣、

〔續日本紀 二十一孝謙〕天平寶字二年六月乙丑、大和國葛上郡人從八位上桑原史年足等男女九十六人、近江國神埼郡人正八位下桑原史人勝等男女一千一百五十五人同言曰、伏奉去天平勝寶九歳〇天平寶字元年五月二十六日勅書、偁、内大臣〇藤原鎌足太政大臣〇不比等之名、不得稱者、今年足人勝等、先祖後漢苗裔、劉言興言帝利等、於難波高津宮御宇天皇〇仁德之世、轉自高麗歸化聖境、本是同祖、今分數姓、望請依勅一改史字、因蒙同姓、於是桑原史、大友桑原史、大友史、大友部史、桑原史戸、史戸六氏同賜桑原直姓、船史船直姓、

〔續日本紀 二十一淳仁〕天平寶字二年八月甲子、以紫微内相藤原朝臣仲麻呂任大保、勅曰、褒善懲惡、聖主

加以兩院上皇不弃渭陽之勞功、擬以親舅矣、今上陛下不遺豐沛之父老、貴以外祖焉、太后降尊、忝存爲子之道、少陽厚禮、猶有稱孫之名、其外竹園蘭坡、多是臣之枝苗、二府九卿、半又臣之弟姪、書契以還、未有才德薄、寵榮厚如臣者矣、是以葉公魂驚、何更扶龍闘而招半死、華封齡老、唯須祝鳳曆而送餘生、臣縱過崇班以棲野雲、命存則可仰聖化、臣若叨重寄以先朝露、位尊亦無益微躬、方今塵曠漸深、慙懼彌劇、昔秉鈞柄而過九十、事非安平之強健哉、今辭官職而至再三、則是晤儒之庭羸也、雖降十勅、何改一心、伏望鴻慈殊矜微懇、聽臣欵闕之請、不異敢諫之皷、靜臣懸旆之心、自爲進善之旗、無任悒滿之至、謹重遣正四位下行右近衞中將兼伊豫守藤原朝臣道賴、抗表陳乞以聞、臣某誠競誠惕、頓首頓首、死罪死罪謹言、

永祚二年四月廿一日太政大臣從一位藤原朝臣某上表

〔公卿補任　一條〕攝政太政大臣從一位藤兼家（出家人准三宮初例）　永祚二年五月五日、辭攝政太政大臣、更詔關白、八日、返關白、依病入道、（法名如意）十二日、詔賜度者一百人、廿三日、詔書云、准三宮任人賜爵之儀、擬三宮、以不改采邑茅土之制、制二千而殊加者、固辭不受、七月二日、薨于東三條第、

〔公卿補任　一條〕左大臣正二位藤道長　長德二年七月廿日、叙正二位、廿一日、大將如元、八月九日、辭大將、以童六人爲隨身、十月九日、停童爲左右近衞府生各一人、近衞各四人、

內覽童隨身六人給之、九條右大臣（師輔）例云々、

〔本朝文粹　五表〕爲入道太政大臣（藤原道長）辭左大臣並章奏隨身等表　江匡衡

臣某言、頻表仰恩、未蒙矜遂、馳意半漢、秋鴻之騎方危、盡詞披陳、春木之筆欲腐、臣某（中略）臣辯源淺薄才地荒蕪、偏以母后（一條母后○詮子）之同胞、不次昇進、亦因父祖之餘慶、匪德登用、彼周公旦之夕見七十也、臣未能薦一士、叔孫通之朝儀三千也、臣未能出一言、冰魂雪汗、四廻于茲、天譴鬼瞰、萬念于懷、（○中略）伏望弘慈曲降叡鑑、臣所帶官、及內外章奏、觸臣宜行之事、忽從停止、又隨身近衞府已下十人、名付本府、令

定內舍人二人左右近衞各四人、但任人賜爵等並准三宮、一如先帝策命忠仁公故事、

〔公卿補任醍醐〕左大臣從二位藤時平　延喜二年正月廿八日、賜別封二千戶、

〔公卿補任朱雀〕攝政左大臣正二位藤忠平　延長九年五月廿日、賜內舍人隨身、左右近衞四人任人爵人並准三宮、略〇中承平二年二月廿九日、宣旨聽乘牛車出入上東門、十一月廿六日、叙從一位、

〔日本紀略朱雀二〕天慶二年正月廿八日、太政大臣〇藤原忠平任人賜爵並准三宮、一如貞觀故事、

〔公卿補任圓融〕關白太政大臣從一位藤兼通　貞元二年十月十一日、依病辭關白并太政大臣上表、即有勅許、十一月四日、依請停關白、讓于左大臣、〇藤原賴忠同日詔、任人爵人准三宮、

〔本朝文粹二勅書〕充華山法皇外祖母惠子女王封戶年官年爵勅、　慶保胤

勅漢武即位、滅兒遇封、誠是眇代之恒規、抑亦前史之令典也、朕外祖母王氏、〇藤原伊尹妻禮法在心、閨闈垂範、朕當幼日、早別先妣、〇懷子祖母視朕亦猶子、朕報祖母未如親、往年厭世歸道、出家爲尼、何以塵俗之風、妄訪勸念之月、授邑土三百戶、幷年爵內外官三分等、聊爲湯沐貲、兼與役從之輩、主者施行、

永觀二年十二月十三日

〔日本紀略一條九〕寬和二年六月廿八日乙丑、勅賜攝政右大臣〇藤原兼家內舍人二人左右近衞各四人、爲隨身、

〔本朝文粹四表〕爲入道前太政大臣〇藤原兼家辭職并封戶准三宮第三表　江匡衡

臣某言、頻獻表奏、未蒙照臨、仰前蹤而增戰栗、濡禿筆而惱虞松、臣某誠中臣伏惟察能授官、上聖爲之布德、揣分受職、往賢由其全身、若授受乖其宜、則如養魚龍於層雲之巔、棲鳥雀於重淵之底者也、臣齡先懸車而身已病、器非負鼎而力早衰、騏驥之病也、駑馬先之、況駑馬之病乎、孟賁之衰也、庸夫蔑之、況庸夫之衰乎、凡登高秩者、必飾謙挹之詞、至大年者、即述歸老之志、今臣所請、異於彼焉、夫事無兩全、物難俱有、連枝或臨艾服兮凋枯、臣之餘六旬者可謂家老、末葉多列槐庭兮榮顯、臣之居三公者、是摠國卿、

後一條四年己未寛仁三五月八日、入道前太政大臣藤原道長○重勅如故、出家以後希代之例也、

〔扶桑略記〕二十九後冷泉治暦三年丁未十月七日壬子、前大相國賜准三宮勅書、年官年爵食邑三千戸、内舍人二人、左右近衞兵衞各六人爲隨身、賚人卅人、如忠仁公舊事、

〔公卿補任〕崇德散位　前太政大臣從一位藤忠實　保延六年二月十日、宣旨聽乘輦車出入中重、六月五日、勅宣年官年爵一准三宮、又食邑三千戸、以内舍人二人、左右近衞各六人、爲隨身兵仗、幷給帶仗賚人卅人、如忠仁公故事者、

〔兵範記〕久安五年十月十六日甲子、今日攝政殿藤原忠通○北政所從一位藤原朝臣宗子、有准三宮勅書事、上卿左兵衞督重通卿依召參右仗藏人頭以皇太后宮權亮爲通朝臣宣下之、大内記長光朝臣作之、其勅文曰、

勅○中略從一位藤原朝臣者攝籙之嫡室、皇后崇德后聖子、時爲皇太后、之母儀也、訓導克宣、施榮輝於掖庭之月、節儉夙標、傳佳譽於曲阜之風、況朕義同祖母、禮如順孫、撫養之恩惟深、報酬之忠最切、是以誼語芳躅於倭漢、將准徽號於宮闈、宜授本封外邑土三百戸、年爵幷内外官三分、主者施行、

久安五年十月十六日

〔台記〕久安六年正月廿二日庚子、申刻大相府藤原忠通○與書曰、禪閤藤原忠實○嚴命如此、宜計示者、即見禪閤御消息、載三箇條、一條殿欲加階、已爲從一位、可益加何事乎、角振隼宜加一階、憲雅可加階、而重喪人有憚否、此等事與左大臣藤原賴長○謀議可否、候以聞、法皇者、報狀曰、一條殿已極位、無所可益加、竊以爲帝之高祖母齡過九旬、是年九十一被准三宮、理尤可然、角振隼加階亦必可、○中略是夜候内、後聞内大臣奏勅書云々、勅、有功必酬、貽龢範於竹帛、積善永顯、傳佳猷於典墳、從一位藤原朝臣全子藤原師通室○者、攝籙大相國之祖母也、四德倶備、六行相兼、二代宰臣之致輔弼也、受彼餘裔、當時皇后之儼啓令也、爲其曾孫、仍繼凝安懽之歎、寧忘褒崇之道、宜授邑土三百戸、幷年爵内外官三分、主者施行、

從歸敕、俾夫天地之德、施而彌新、日月之明、照而更盛、無任危懼謙退之至、謹重上表陳請以聞、臣某誠兢誠惕、頓首頓首、死罪死罪謹言、

長德四年三月十二日左大臣正二位兼行左近衞大將藤原朝臣上表

〔日本紀略後一條十三〕長和五年六月十日壬午、勅、左大臣〇藤原道長年爵年官准三宮、本封外加食邑三千戸、以內舍人、左右近衞、左右兵衞等爲隨身兵仗、幷給帶刀資人卅人、如忠仁公〇藤原良房故事、又室家源倫子本封外、給邑土三百戸、年爵內外官三分、　十月二日癸酉、攝政辭表、載左大臣並准三宮事、勅答不許、

〔小右記〕寬仁三年五月八日甲子、四條大納言被示送狀云、昨日依有攝政〇藤原頼通御消息、今日參入、可行勅書事、是入道殿〇道長御封事云々、大入道御時事、若有所聞食歟、御曆被注乎、故宣義抄出詔勘之中有此勅、先入道關白任人賜爵猶擬三宮、封戸不改、勅云々、書中任人賜爵之儀、擬三宮不改采邑茅土之制、割二千而殊加云々、表狀云、讀月日勅書、賜其封二千戸、任人賜爵擬三宮云々、勅答辭其准三宮之儀、謝以封二千之制云々、案之最初勅書割二千、新加之文、本封仁似加別封二千、依之端所書文者、宣義所注也、出家之人何有位封職封乎、表幷勅答者、只有別封加字、非無所疑如何、又勅書無御畫者、不就御所只可奉攝政歟、先例雖幼主皆奏、近代不然、今被加御元服、如此事如何者、報云、曆無所注、或書云、只入道殿例、注准三宮年爵年官幷別封二千、抑出家人不可有位職等封歟、忽無御畫之文、不可被奏者、古跡亦就御所奏聞、從御所被遣攝政所、而近代不然、但事已不輕、進御所被奏宜歟、可有事疑者、先示奏者、隨案內被進止如何、近代事不似古昔耳、　九日己丑、昨日勅書趣幷進奏不等事、問達大納言御許、報云、任人賜爵如故、可被給封戸二千戸、不可有位職等封、仍只被給別封二千戸云々、如大入道殿御時、於入道殿申案內、付御所可宜者、依進御所奏覽、攝政被候御所者、此事合思案、

〔濫觴抄下〕法准三宮

加以兩院上皇不弃渭陽之勞功、擢以親舅矣、今上陛下不遺豐沛之父老、賞以外祖焉、太后降尊、忝存爲子之道、少陽厚禮、猶有稱孫之名、其外竹園蘭坂、多是臣之枝苗、二府九卿、半又臣之弟姪、書契以還、未有才德薄、寵榮厚如臣者矣、是以葉公魂驚、何更扶龍岡而招半死、華封齡老、唯須祝鳳曆而送餘生、臣縱遁崇班以棲野雲、命存則可仰聖化、臣若叨重寄以先朝露、位尊亦無益微躬、方今塵曠漸深、懸懼彌劇、昔秉鈞柄而過九十、事非安平之强健哉、今辭官職而至再三、則是晤儒之厎贏也、雖降十勅、何改一心、伏望鴻慈殊矜微懇、聽臣欵闕之請、不異敢諫之鼓、靜臣懸旆之心、自爲進善之旗、無任悒滿之至、謹重遣正四位下行右近衛中將兼伊豫守藤原朝臣道賴、抗表陳乞以聞、臣某誠兢誠惕、頓首頓首、死罪死罪謹言、

永祚二年四月廿一日太政大臣從一位藤原朝臣某上表

〔公卿補任一條〕攝政太政大臣從一位藤兼家（出家人准三宮初例）　永祚二年五月五日、辭攝政太政大臣、吏詔關白、八日、返關白、依病入道、（法名如意）十二日、詔賜度者一百人、廿三日、詔書云、准三宮任人賜爵之儀、擬三宮、以不改采邑茅土之制、制二千而殊加者、固辭不受、七月二日、薨于東三條第、

〔公卿補任一條〕左大臣正二位藤道長　長德二年七月廿日、叙正二位、廿一日、大將如元、八月九日、辭大將、以童六人爲隨身、十月九日、停童爲左右近衛府生各一人、近衛各四人、

內覽童隨身六人給之、九條右大臣（師輔）例云々、

〔本朝文粹五表〕爲入道太政大臣（○藤原道長）辭左大臣並章奏隨身等表　江匡衡

臣某言、頻表仰恩、未蒙矜遂、馳意牛漢、秋駕之騎方危、盡詞披陳、春木之筆欲腐、臣某（中謝）臣聲源淺薄才地荒蕪、偏以母后（○一條母后詮子）之同胞、不次升進、亦因父祖之餘慶、匪德登用、彼周公旦之夕見七十也、臣未能薦一士、叔孫通之朝儀三千也、臣未能出一言、冰魂雪汗、四廻于茲、天譴鬼瞰、萬念于懷、（○中略）伏望弘慈曲降叡鑑、臣所帶官、及內外章奏、觸臣宜行之事、忽從停止、又隨身近衛府已下十人、名付本府、令

定內舍人二人左右近衞各四人、但任人賜爵等並准三宮、一如先帝策命忠仁公故事、

〔公卿補任醍醐〕左大臣從二位藤時平　延喜二年正月廿八日、賜別封二千戶、

〔公卿補任朱雀〕攝政左大臣正二位藤忠平　延長九年五月廿日、賜內舍人隨身、左右近衞四人任人爵人並准三宮、○中略承平二年二月廿九日、宣旨聽乘牛車出入上東門、十一月廿六日、敘從一位、

〔日本紀略二朱雀〕天慶二年正月廿八日、太政大臣○藤原忠平任人賜爵並准三宮、一如貞觀故事、

〔公卿補任圓融〕關白太政大臣從一位藤兼通　貞元二年十月十一日、依病辭關白并太政大臣上表、即有勅許、十一月四日、依請停關白讓于左大臣、○藤原賴忠同日詔、任人爵人准三宮、

〔本朝文粹二勅書〕充華山法皇外祖母惠子女王封戶年官年爵勅、　慶保胤

勅、漢武即位、減兒遇封、誠是眇代之恒規、抑亦前史之令典也、朕外祖母王氏、○藤原伊尹妻禮法在心、閨闈垂範、朕當幼日、早別先妣、○懷子祖母視朕亦猶子、朕報祖母未如親、往年厭世歸道、出家爲尼、何以塵俗之風、妄訪勸念之月、授邑士三百戶、并年爵內外官三分等、聊爲湯沐資、兼與役從之輩、主者施行、

永觀二年十二月十三日

〔日本紀略一九條〕寬和二年六月廿八日乙丑、勅賜攝政右大臣○藤原兼家內舍人二人左右近衞各四人、爲隨身、

〔本朝文粹四表〕爲入道前太政大臣○藤原兼家辭職并封戶准三宮第三表　江匡衡

臣某言、頻獻表奏、未蒙照臨、仰前蹤而增戰栗、濡禿筆而惱庾松、臣[illegible]系能授官、上聖爲之布德、揣分受職、往賢由其全身、若授受乖其宜、則如養魚鼈於層雲之巔、棲鳥雀於重淵之底者也、臣齡先懸車、而身已病、器非負鼎、而力早衰、騏驥之病也、駑馬先之、況駑馬之病乎、孟賁之衰也、庸夫蔑之、況庸夫之衰乎、凡登高秩者、必飾謙挹之詞、至大年者、即遂歸老之志、今臣所請、異於彼焉、夫事無兩全、物難俱有、連枝或臨艾服兮凋枯、臣之餘六旬者、可謂家老、末葉多列槐庭兮榮顯、臣之居三公者、是摠國卿、

謗於朕躬、夫太政大臣法當食邑三千戸、及隨身兵仗、國有成式、又准三宮給年官、先帝之恩寵也、至于封邑固讓二千、唯享千戸、隨身等事皆辭不受、朕以祿法所當、古賢不辭、既能有其功、居其位、何不食其祿增其威、然則所辭封邑等事、乖元老崇班之義、非國家褒飾之心、故今不敢論法唯盡其所當、宜其封戸全食三千、以內舍人二人左右近衞左右兵衞各六人為其隨身之兵、又給帶仗資人三十人、年官准三宮事、亦當奉遵先帝之遺詔、又大臣所保官爵、皆是先朝之寵章也、於朕之時、無一加益、仍欲增一位之餘階、而深忌亢極、固自遜辭、朕不敢違、全其沖挹、斯亦屈己之志、成人之美也、普告遐邇、令知朕意、十四日庚寅、太政大臣從一位藤原朝臣良房抗表曰、臣伏奉今月十日勅旨、賜臣以食邑如舊命、年官准三宮、帶刀資人隨身兵仗等事、荷恩不力、瞰朕無間、臣聞太政大臣者、上理陰陽、下經邦國、一人有慶、師範猶施、四海無波、儀形自用而先帝不棄臣庸瑣、委以此崇班、純陽未免履冰、臘月逾添流汗、自愧形影、深執撝謙、唯許減封三分有一、又隨身兵仗等事、雖舊貫不敢當其仁、年官則恩是新情、臣未堪為其首、故臣並固辭、以視不虛受、今陛下更憲章先帝、重宜慰鴻私、忠誠不移、先後惟一、臣欲推賢以避路、何私陛下公選之官、將扶老以干城、何分陛下宿衞之士、況比年調和不偶、水旱重仍、倉廩少禮節之資、城池失金湯之險、故去十一年六月二十六日聖主下勅曰、服御常膳並宜減撤、同年七月二日公卿上奏曰、五位已上封祿亦暫減折、其議未復、其事猶存、豈君臣偏好畢謙、蓋內外共待豐稔、若以斯時全食彼邑、猷恥格於先帝、而取嫌猜於當時也、且尸素者、天奪其鑒、亢盈者鬼瞰其家、溫飽有餘、何以忘止足、年齡已暮、暫欲養遊魂、臣所以不奉遵、公私兼濟而已、不任懇欵屛營之至、謹修表狀、陳讓以聞、不許、○又見都氏文集、菅家文草、

〔三代實錄 四十一 陽成〕元慶六年二月甲戌朔、勅曰、舅氏太政大臣藤原朝臣基經、○朕自在提抱、賴其保護、恩隆非常之渥寵、以答莫大之元功、其職封職田資人等、累經以聞、自遜辭、朕不敢違之、聽其所請、又舊儀所賜隨身內舍人二人、左右近衞各六人、左右兵衞各六人、然而隨其固辭、不更加給、依前日之分配、減

賜封戶

なり、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜三年二月廿一日、京都飛脚參著、去十二日、中宮（將軍家（藤原頼經）御姉〇後堀河后竴子）御平產、皇子（〇四條）降誕之由申之云々、　四月十七日、京都使者參著、依中宮御入內賞、去八日將軍家、令叙正四位下御之由申之、

〔續日本紀三文武〕慶雲四年四月壬午、詔曰、天皇詔旨勅久、汝藤原朝臣乃（〇不比等）仕奉狀者、今乃未爾不在、掛母畏支天皇御世御世仕奉而、今母又朕卿止爲而、以明淨心而朕乎助奉事乃重支勞支事乎所念坐御意坐爾依而、多利麻比氐夜夜彌賜閇婆忌忍事爾似事乎志奈母常勞彌所念坐久止宣、又難波大宮御宇掛母畏支天皇命乃（〇孝德）汝父藤原大臣乃（〇鎌足）仕奉賈流狀乎婆、建內宿禰命乃仕奉賈流事止同事止叙勅而、治賜慈賜賈利、是以令文所載多流乎跡止爲而、隨令長遠久始今而次次被賜將往物止叙、食封五千戶賜久止勅命聞宣、辭而不受、減三千戶賜二千戶、一千戶傳于子孫、

〔公卿補任文德〕攝政從一位藤良房　天安二年十一月七日宣旨爲攝政、准。三。宮。、食封、賜內舍人左右近衞爲隨身、帶仗資人卅人、依爲帝外祖被抽賞也、

〔濫觴抄下〕准三宮

清和十四年辛卯（貞觀十三）三月十日丙戌、勅攝政太政大臣准三宮、賜年官封戶三千、內舍人、左右近衞兵衞六人、隨身兵仗資人四十人、

〔三代實錄十九清和〕貞觀十三年四月十日丙戌、勅、功多者賞厚、先王之通規、德茂者位尊、往哲之彝訓、是故蒼精旣著、增高於曲阜之基、朱火以光、加映於博陸之地、爰及本朝、亦有舊典、皆迹存於鉛槧、事絢於緹蒸、太政大臣外祖父藤原朝臣、風槩沉遠、器度淹凝、摘膝之寄攸歸、攄計之任是重、朕自在襁褓、賴其保生、義爲君臣、恩過父母、蓋有不世之功、須受非常之寵、而鳴謙在心、卑損無已、所以顯著之績、春秋繁茂、降崇之典、歲月寂寞、今朕已得成人、大臣頹齡漸暮、若遂捨多之美、不崇加異之章、則恐當時後代、將歸

右近衞大將正二位源朝臣雅實（兼）將曹良定、件良貞申文、頭中將依仰持參御前也、事了大臣取除目、退歸於殿上、召清書上卿（權中納言基定卿）給之、上卿著陣行清書幷下名事等云々、此間大將參弓場殿、付頭中將奏慶賀、次拜舞、（至後再拜之時、隨身等追前、後聞右府命云、後拜ト云ヘ先一拜、次之拜時、隨身可追前也、而至于左右左舞踏後二拜追前、是隨身等失也者、左少辨重資諷諫云々、）拜間、官人發歌笛聲、次府生等ニ御酒給さ被奏、（件詞前ニ、次將以下賜饗祿之奏云々、）勅許之後、渡南庭參中宮御方、令權亮國信朝臣啓慶賀由、拜了還本路、出敷政門代、引率公卿幷次將以下、歸還饗所、（○中略）事了人々退歸之後、大將下南庭、被拜嚴親右相府云々、右府有牽出物、馬一疋者、（○中略）

人々被談云、新大將、此年之間、被拜任事誠大運也、祖父故土御門右府（○師房）五十餘任大將、嚴親右府卅餘任此職、至此納言者、已卅餘也、隨及子孫彌以早速也、就中時口二三の人子姪爲大將之事、誠未曾有也、右相府奇不可思議歟、

十二月廿七日庚午、依任大將事有除目、未時許內府令蒙勅授帶劒宣旨給、頭辨仰下上卿左兵衞督、內府則於弓場殿令奏慶賀由、拜舞之後令著仗座給、（去廿五日、雖可有勅授宣旨、依口後日引及今日也、）左大臣（螺鈿劒、紫緂緒、有文口、）參內、藤大納言、中宮大夫、（師）中納言中將、殿上人親五六輩扈從、前駈十餘人許、此中四位一人、（義綱朝臣）頭中將宗通朝臣、此間出御使往反院、（○中略）

左右大臣、左右大將、源氏同時相並例、未有此事、今年春日御社頻恠異、興福寺大衆亂逆、若是此徵歟、加之大納言五人之中、三人已源氏、六衞府督五人己源氏、七辨之中四人也、他門誠希有之例也、爲藤氏甚有愽之故歟、

〔續世繼〕（三男山）保延五年にや侍りけん、つちのとのひつじの年五月十八日、よになくけうらなる玉のをのこ宮（○近衞）うまれさせ給ぬれバ、院（○鳥羽）のうちさゝなり、世の中もうごくまでよろこびわへるさまいはんかたなし、（○中略）八月十七日春宮にたゝせ給、昭陽舍に御すつらひありてわたらせ給、大夫には堀川の大納言（○師頼）なり給、御母（○鳥羽后得子）のをぢにおはして、ことにえらばせ給へる

給へとうちいだして申ければ、みかどおほせられけるは、おとうとなれども、右大將中宮の御おやにて、このたびならずば法師にならんといふなり、又上らうども有て、われこそなるべけれなどいへば、それもすてがたきなりとおほせられければ、大納言大臣になり侍ることは、かならずしも一二といふこと侍らず、なるべき人をえりてなされ侍るなり、又國のつかさへたる人いかゞなど申侍りければ、ずがはらのおとゞ(〇道眞)もさぬきのかみぞかしとおほせられければ、江帥申けるは、はかせはべちのことに侍り、又さいがくたかく侍らんあにを、大臣になさせ給はんに、出家するおとうともよに侍らじと申ければ、堀川殿はなり給へりけるとぞ、六條のおとゞはそのゝちにぞなり給し、中宮の御おやほりかはのみかどの御おほぢにていとめでたくおはしき、

〔中右記〕寬治七年十一月十五日己巳、今夜有大將召、仰藏人頭左中將宗通朝臣、奉仰令内豎召權大納言源朝臣雅實卿、(于時在右府(顯房)六條)則被參伙座、(被候奥座)宗通朝臣仰云、可成賜右近衛大將日時撰申セ者、則奉此旨退出、〇中略

今夜召仰後、大納言還家書定文、件定文宮内大輔俊信書之云々、

抑今夜五節帳代試也、先被相尋例之處、或有除目下名、或有臨時叙位者、仍所被仰下也、彼大納言年少卅五、是雖有右府讓、超越數輩之上臈、被補顯要之大任、甚有恐事也、但國母之人、先例又如此、是一之道理也、可然云々、戚里之貴誠矣斯言、〇中略

廿日甲午、依可任大將事有除目、今日禁中御物忌也、仍殿下内府令參籠給也、未時許大納言參内、(螺鈿劔、有文帶、紫淡緒、前駈八人、右兵衛督以下、右府子族五人皆扈從、)暫徘徊陣壁外、内大臣此間著伙座、諸卿同被候、則供御前御裝束、其儀如官奏、(東面)但依御物忌、北第一間(只一間也)垂御簾、御物忌付御簾、又大臣圓座外、加敷殿下御料圓座、須臾出御、(御直衣)執柄殿下令候御、召藏人頭宗通朝臣、被仰可召大臣由、宗通朝臣出伙座、召之、内大臣參上、著御前座、即召人、藏人兵部大輔通輔參候、依仰持參紙筆等、

正曆二年九月七日

〔權記〕長德四年十月廿九日甲寅、依召參院、〇一條母后東三條院詮子 仰云、年來御坐左大臣〇藤原道長 土御門家、亦月來御此一條、依有先例欲給爵賞於大臣室家之由可奏、又給三位階如何、其由同加用意可洩申者、依不知御名、詣彼殿案內、丞相命云、名倫子、元從五位上、〇中略 抑此事先日承仰已了、而今爲仰下、內々令申事由之處、仰旨如此、若有難澁御氣色歟、有事次見氣色可示、了〈更不具記〉即參內、申院御消息、仰〇一條云、尤可然事也、早可仰下者也、即奏只今上卿不參、右大將藤原朝臣〇道綱 候、院使可仰歟、仰云、有便之事也、依請、〇中略 即奉勅命先參院、奏御返事旨、〈大臣室〈倫子、〉可敍從三位之趣也、〉

〔日本紀略一條十一〕寬弘三年三月四日丙午、天皇自東三條遷御一條院、中宮〇彰子 同行啓、是日也、天皇先於東三條殿命花宴、〇中略 左大臣室、〇藤原道長妻倫子 並子息家司等各增爵、

〔日本紀略一條十一〕寬弘五年十月十六日癸卯、天皇賀鳳輦、行幸中宮彰子御所上東門第、依第二皇子〇後一條 誕生也、有音樂、即以皇子爲親王、御名敦成、左大臣〇藤原道長 以下於南殿拜舞、宴遊之後給祿有差、又左大臣室源倫子敍從一位、家司等敍位、子剋還御、〈其中左大臣子息二人、（賴通敎通）家司二人敍位、〉

〔御堂關白記〕寬弘五年十月十六日癸卯、道方朝臣召右大臣、〇藤原顯光 候前、御書敍位、以道方被仰云、可賜一階如何、奏聞云、官位共高、仕公間非無其恐、不賜爲慶、又仰云、可然家司一人賜賞、可奏其人者、以季隆奏也、敍位了右府著座、正二位藤原朝臣齊信、從二位源朝臣俊賢、藤原朝臣賴通、從四位下敎通從四位下季隆、以道方奏云、實成朝臣上達部亮被給一階、仰云書落也、早可入者、右大臣承也、書加從三位實成、源倫子從一位、慶賀人々奏聞其由、余並內府同奏、是依子慶也、

〔續世繼七うたゝね〕六條殿〇源顯房は、よのおぼえあに〇源俊房よりもまさり給て、大納言の大將、中宮〇白河后賢子のおほんおやにておはせしに、大臣あきて侍りけるを、白川のみかどおぼしわづらはせ給て、ひごろすぎけるに、匡房の中納言におほせられあはせければ、ほりかはの大納言〇俊房をなさせ

給牟止去春夏間與利仰給大坐、而大臣乃懇爾加志許末利辭讓申仁依天今未仁天延來禮利、今畏岐本御意早
行倍岐物奈利止仰給不御命母安利、故是以太政大臣官爾上給比治給久止勅、但攝政之職波今毋彌益々爾
勤奉仕禮止勅御命乎衆聞食止宣、

〔三代實錄四十三陽成〕元慶七年正月十五日壬午、從四位下行越前權守藤原朝臣弘經卒、弘經者、贈太政
大臣正一位長良朝臣子、太政大臣昭宣公〇藤原基經之弟也、〇中略弘經天皇之外舅也、故天皇特愍、十二
月晦日〇元慶六年授從四位下、就床下賜告身、七年正月遷爲越前權守、後四日卒、年四十五、

〔今昔物語二十二〕高藤內大臣語第七

此ノ高藤ノ君、止事无ク御ケル人ニテ、成上リ給テ大納言マデ成給ヒヌ、彼ノ姬君〇胤子ヲバ宇多
院ノ位ニ御シケル時ニ、女御ニ奉リ給ヒツ、其ノ後幾ク程ヲ不經ズシテ、醍醐ノ天皇ヲバ產奉リ
給ヘル也、〇中略祖父ノ大領〇宮道彌益ハ四位ニ叙シテ、修理ノ大夫ニナム被成タリケル、醍醐ノ天皇
位ニ即セ給ヒニケレバ、祖父ノ高藤ノ大納言ハ內大臣ニ成給ヒニケリ、其後彌益ガ家ヲバ寺ニ
成シテ、今ノ勸修寺此也、向ノ東ノ山邊ニ其妻堂ヲ起タリ、其名ヲバ大宅寺ト云フ、此レ彌益ガ家
ノ當ヲバ、哀レニ睦シク思食ケルニヤ有ケム、

〔權記〕正曆二年九月七日、任大臣事、諸司裝東南殿廂、從額間云々、時刻卿相參陣、大內記爲時朝臣持
宣命令覽於中納言顯光卿、〇中略
天皇我詔旨眞止勅御命乎親王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、太政大臣乃官ハ攝政正二位
藤原道隆朝臣乃可任なり、而謙讓心神之天內大臣乃官をも辭申天支、此般猶令昇進めハ彼心爾
違ぬべし、右大臣從一位藤原爲光朝臣、數代爾歷仕へ天朝乃重臣止あり、仍殊爾太政大臣乃官仁
上給比詔賜布、〇中略正二位行權大納言藤原道兼朝臣ハ朕乃親舅なり、朝恩を可蒙幾人なる仁依天
那牟殊爾內大臣乃官爾任賜久止(中略)勅布天皇我御命乎衆聞食止宣、

〔續日本紀四十桓武〕延暦九年二月甲午、詔授正五位下百濟王玄鏡從四位下、從五位上百濟王仁貞正五位上、正六位上百濟王鏡仁從五位下、是日詔曰、百濟王等者朕之外戚也、今所以擢一兩人加授爵位也、

〔類聚國史三十一帝王〕弘仁五年四月乙巳、幸左近衛大將正四位下藤原朝臣冬嗣閑院、供張之宜、甚有雅致、天皇染翰、群臣獻詩、時人以爲佳會、授冬嗣從三位、无位藤原美都子從五位下、賜五位以上衣被、

〔類聚國史六十六人〕天長十年正月丁未、出雲守正四位下紀朝臣咋麻呂卒、爲人無才、以田原天皇○文德外戚特至四位、終以天命□、時年七十九、

〔文德實錄九〕天安元年二月丁亥、右大臣正二位藤原朝臣良房爲太政大臣、○中略宣制曰、天皇我詔旨耳萬止勅御命乎親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣不、右大臣正二位藤原良房朝臣波朕之外舅那利、又稚親王止大坐時與利助導支供奉禮留所毛安利、今毛又忠貞留心乎持天食國乃天下乃政乎相安奈那比申賜比助奉留事毛漸久玖那利奴、古人有言利、德止之天無不酬止奈毛聞食須、而今所在乃官波掛畏支先帝乃治賜留所那利、朕未有所酬、是以殊爾太政大臣官爾上賜比治賜、○中略天皇御命乎衆聞食止宣、

〔三代實錄三十八陽成〕元慶四年十二月四日癸未、天皇御紫宸殿、喚公卿及百官於殿庭、策拜右大臣正二位藤原朝臣基經爲太政大臣、公卿百僚拜舞而罷、策命曰、天皇我詔旨耳萬止勅御命乎親王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、右大臣正二位藤原基經朝臣波朕之親舅奈利、忠貞心乎持氏御世御世與利天下政乎相安奈々比助奉母久奈利奴、又朕未及初載之時與利輔導崇護供奉禮留所母安利、因茲掛畏太上天皇乃○清和詔命乎持天攝政乃職爾事與佐之治賜倍利、朕我食國乎平久安久天照之治聞食須故波此大臣之力奈利、而所帶官波攝政乃職爾波不相當止頃年參加利大坐都、今掛畏太上天皇乃詔旨爾毛、職波貴天官波賤天也波久年乎歷倍岐、太政官乃其人止波最此卿乎可謂止勅御命母安利支、掛畏岐御命乃任仁上給治

名稱

授官位

五派ト爲リ、之ヲ五攝家ト稱シ、互ニ外戚タリト雖モ、其勢益微ナリ、足利幕府ノ時、攝家ノ輩、將軍ノ偏諱ヲ受クルニ至リテハ、益言フニ足ラズ、

〔伊呂波字類抄久六〕外戚シヤク

〔空穗物語初秋〕なかたゞ、ないしやくにも外。しや。く。にも、女といふものなんともしく侍る、○中略もしはゝかたの外ぞやくこそ、かのとしかげの朝臣のきむはつかうまつらめ、

〔承久軍物語六〕十月十日、○承久三年とさのくにゝせんかう○土御門あるべきにさだめられけり、○中略げ。しや。く。のつちみかどの大納言さだみち卿參りて、なく〳〵御車をよす、

〔下學集態藝下〕外戚ゲシヤク

〔愚管抄三〕九條の右丞相、○中略我子孫を帝の外戚ゲサクとはなさんと誓ひて、觀音の化身の、叡山の慈惠大師と師檀のちぎりふかくして、横河のみねに楞嚴三昧院といふ寺を立、

〔增鏡七北野の雪〕院の宮たちの御中には、御このかみにてものし給へど、御げ。さ。くのよわきはいまもむかしもかゝることぞ、いと〳〵はしきわざなりけれ、

〔運步色葉集久二〕外戚グワイ

〔下學集態藝下〕外戚グワイセキ

〔令義解儀制六〕親戚謂親者内親也、戚者外戚也、

〔安齋隨筆後編一〕内戚外戚　父方の親類を内戚と云、母方の親類を外戚と云、親族に内外を稱する皆是なり、

〔續日本紀八元正〕養老五年正月壬子、授從三位縣犬養橘宿禰三千代○藤原不比等妻正三位、

○按ズルニ、天皇ノ外戚ニシテ、官祿ヲ授ケラレタルモノ、其例甚多ク、悉ク載スルニ勝ヘズ、故ニ今史ニ明文アルカ、若クハ其特ニ著明ナルモノヽミヲ取レリ、

シニアラズ、是ヨリ後外戚ノ王室ニ於ル、大ニ前日ト其觀ヲ異ニセリ、

源頼朝府ヲ鎌倉ニ開クニ及ビテ、亦藤氏ノ轍ニ傚ヒ、其女ヲ後宮ニ納レントシテ成ラザリシ以來、足利幕府ニ至ル迄、遂ニ將軍ノ女ヲ入ルヽノ事ナシ、當時ハ武家天下ノ政權ヲ掌握セシカバ、皇家ノ外戚モ、其力ニ頼ルニアラザレバ、全ク其勢ナシ、是ヲ以テ鎌倉幕府ノ頃ニハ、西園寺氏ハ將家ノ親ヲ以テ、累世帝戚トナリ、室町將軍ノ時ニハ、日野氏裏松氏等ハ、幕府ノ姻ニ依リテ、盛ニ其家門ヲ興セリ、豐臣氏ノ時ニ及ビテ、近衛氏ノ女、關白秀吉ノ養子トナリテ、後陽成天皇ノ宮ニ入リシハ、少カ其類ヲ異ニストモ、蓋シ亦其力ニ頼ルナリ、後水尾天皇ノ朝、征夷大將軍徳川秀忠、其女ヲ納レテ中宮トス、鎌倉幕府ヨリ以來、將軍ノ女ニシテ后位ニ居ルモノ前後絶エテアルコトナシ、明正天皇ハ徳川氏所生ノ皇女ナリ、孝謙天皇以後女主ヲ立ツルノ例久シク絶エタリシガ、是ニ至リテ復女帝アリ、論者或ハ以テ外戚專横ノ致ス所トス、然レドモ徳川氏ハ之ヲ以テ權威ヲ加ヘントスルニハアラズシテ、之ヲ以テ榮トセントスルニ過ギザリシナラン、此時代ニ在リテハ、復外戚ノ爲ニ社寺ニ奉幣布施シ、或ハ度者ヲ賜ヒ、赦令ヲ行フガ如キ事ナシ、而シテ其沒スルニ當リテハ、忌服廢朝、贈位贈官等ノ事、猶舊典ニ據リテ之ヲ行ヘリト雖モ、復固關警固ノ事ナキニ至レリ、時世ノ然ラシムル所ナリ、

要スルニ我皇室ノ外戚ニ於ケル、之ヲ世界萬國ニ求ムルニ、終ニ其比ヲ見ザル所ニシテ、外戚ハ必ズ藤原氏外戚タルニアラザレバ、執政タルヲ得ザルノ姿ナリシカバ、天照大神ノ御子孫ハ、長ク瑞穗國ニ君臨シ給ヒ、天兒屋命ノ後裔ハ、長ク執政ノ臣ト爲リテ、萬世替ルコトナキハ、蓋シ二神ノ幽契ニ起レリト云フ説アルニ至レリ、而シテ藤原氏ハ冬嗣ヨリ以後房前ノ子孫常ニ上流ニ居リ、道長以後其嫡長タル人常ニ攝關タリシガ、鎌倉幕府ノ時、分レテ

ヲ極メ、其富天下ニ冠タリ、諸子亦朝ニ列シテ、高キハ攝關大臣ニ至リ、卑キモ納言參議ヲ失ハズ、百事己ノ意ノ如ク、一事モ缺ケザルヲ以テ自ラ十五夜ノ月ニ比シ、此世ヲ以テ我世ト爲スニ至ル、實ニ攝關ヲ置キテヨリ以來、未ダ富貴滿盈ナルコト、道長ノ如キモノハアラザルナリ、道長ノ子賴通亦先人ノ餘風ヲ承ケテ、驕傲父祖ニ讓ラズ、身ハ三代ノ執柄トナリテ、權ヲ專ニスルコト凡ソ五十餘年ナリ、而シテ敦康親王ノ女嫄子ヲ養ヒ、名ケテ眞ノ所生ト爲シ、是ヲ後朱雀天皇ノ中宮ト爲ス、亦外戚ノ權ヲ貪ルニ過ギズ、而シテ藤原氏ニハ此轍ヲ踏ムモノ殊ニ多シ、

後三條天皇ハ、藤原氏ノ出ニアラザルヲ以テ、儲位ニ升リ給フモ頗ル難カリシガ、登極ニ至リ甚ク藤氏ノ權ヲ制シ給ヒシニ由リ、外家ノ勢力頓ニ挫折シテ、復昔日ノ如クナラズ、白河天皇ノ中宮ハ、賴通ノ子ナル師實ノ女ニシテ、實ハ源顯房ノ女ナリ、堀河天皇ノ朝、顯房外祖ヲ以テ榮達シ、兄俊房ト共ニ左右ノ大臣ト爲リ、大將ヲ兼子、子族亦納言衞府辨官等ノ顯要ニ列シタリ、藤氏ニアラズシテ兄弟左右ノ大臣タルハ、此ヨリ前ニ絕エテ無キ所ナリ、亦以テ世變ヲ觀ルベシ、且ツ當時ハ天下ノ政、皆院中ヨリ出ヅルヲ以テ、藤原氏益勢力ナシ、然レドモ外戚タランコトニ汲々タルハ猶從前ニ異ナラズ、

堀河鳥羽崇德ノ三天皇ノ朝ヲ歷テ、近衞天皇ニ至ル、時ニ賴通ノ玄孫賴長、父忠實ノ寵ヲ恃ミテ、兄忠通ト善カラズ、互ニ女ヲ養ヒテ之ヲ後宮ニ納レントト欲シ、父子相陷レ、兄弟交軋リ、以テ保元ノ亂ヲ釀シ、更ニ平治ノ變ヲ歷テ、平清盛ヲシテ殊勳ヲ樹テシム、是ニ於テ藤氏ハ從前ノ威權ヲ舉ゲテ之ヲ平氏ニ賜セリ、清盛モ亦藤氏ノ所爲ニ倣ヒ、女ヲ納レテ高倉天皇ノ中宮トシ、竟ニ天皇ニ逼リテ外孫ナル皇子ニ讓位セシム、安德天皇是ナリ、清盛愈威權ヲ弄シ、跋扈跳梁至ラザル所ナケレドモ、多クハ功績ニ矜リシモノニテ、專ラ外戚ノ親ヲ怙ミ

平守平二親王ヲ生メリ、村上天皇殊ニ爲平親王ヲ愛シ、冷泉天皇ノ太子ニ立テントシ給ヒシカド、外家ノ援ナキヲ以テ成ラズ、村上天皇崩ジ給フニ及ビテ、實頼遺詔ト稱シテ守平親王ヲ立テ、左大臣源高明ヲ貶竄シ、弟師尹ヲ以テ之ニ代ヘタリ、高明、爲平親王ヲ以テ婿トス、故ニ廢立ノ意アリト云フヲ以テ讒ヲ蒙リシモノニシテ、醍醐天皇ノ朝ニ、菅原道眞ガ、宇多天皇ノ皇子齊世親王ノ外舅タルヲ以テ、流謫セラレシト同一轍ナリ、亦以テ當時外戚ノ狀態ヲ見ルベシ、圓融天皇ノ時、外祖九條師輔ノ子伊尹、伯父實頼ニ繼ギテ攝政トナル、凡ソ攝關ハ常置ノ職ニアラザレドモ、伊尹之ニ任ジテヨリ子弟相續ギ、永ク絶エザルニ至レリ、兼通兄伊尹ニ嗣ギテ關白トナリ、弟兼家ト互ニ女ヲ宮闈ニ納レント爭ヒ、從弟頼忠ヲ引キテ援トス、頼忠亦兼家ト爭フ、兼家花山天皇ヲ賺シテ、其位ヲ遜レシメ、一條三條二天皇ノ外祖トナリ、驕奢日ニ盛ニシテ、袵ヲ放チテ幼主ヲ抱キ、親王ヲ罵ル等ノ事アリ、其長子道隆、次子道兼、相繼ギテ關白トナリ、自專愈盛ナリシガ、三子道長ニ至リテ殆ド其極ニ達セリ、初メ道隆ノ女定子立チテ一條天皇ノ皇后トナリ、敦康親王ヲ生ミシガ、道長又其女彰子ヲ納レテ中宮トシ、敦成親王ヲ生メリ、二后竝立スルコト之ヲ以テ始トス、後相沿ヒテ流例トナリ、名分大ニ紊レタリ、

三條天皇位ヲ嗣ギ給フニ及ビテ、一條天皇、敦康親王ヲ以テ皇太子ニ立テ給ハントス、中宮彰子モ亦其父道長ニ勸メテ之ヲ立テシメントス、而ルニ天皇、道長ヲ憚リ、終ニ敦成親王ヲ立テヽ皇太子トシ給フ、道長又外孫ノ早ク登祚シ給ハンコトヲ欲シ、三條天皇ニ逼リテ讓位セシム、敦成親王乃チ立チタマフ、是ヲ後一條天皇トス、時ニ皇太子ハ三條天皇ノ皇子敦明親王ナリ、道長又己ノ女ノ出ニアラザルヲ以テ其位ヲ去ラシメ、敦良親王ヲ立テヽ後一條天皇ノ皇太弟トセリ、亦道長ノ外孫ナリ、是時ニ當リテ道長三天皇ノ外祖ト爲リ、位人臣

和天皇ノ外祖父トナル、桓武天皇其父ノ故ヲ以テ、長子緒繼ヲ殿上ニ召シテ加冠セシメ給フ、外戚殿上ニ於テ元服スルコト、是ヲ以テ權輿トス、嵯峨天皇ノ后橘氏ハ、諸兄ノ孫淸友ノ女ナリ、弟氏公右大臣ト爲リ、橘氏復大ニ興リ、仁明天皇ニ至リ、其氏神モ官祠ニ列セラル、天皇房前ノ玄孫冬嗣ノ女順子ヲ納レテ女御ト爲シ給フ、順子文德天皇ヲ生ム、文德天皇立チ給フニ及ビテ、冬嗣ノ子良房、又女明子ヲ納レテ其外舅トナリ、威權日ニ重シ、天皇ノ峻嚴ナル猶之ヲ憚リ、長ヲ舍テ幼ヲ立テ給フニ至ル、是ヲ淸和天皇トス、良房、文德天皇ノ遺詔ヲ奉ジテ萬機ヲ攝セリ、攝政ノ稱是ニ昉マル、卽位ノ元年、始テ十陵四墓ノ制ヲ定ム、四墓ノ列ニ在ルモノハ、藤氏ノ祖ト外祖父母、及ビ外祖父ノ父母トノミ、後增減アリト雖モ、要スルニ外家一門ノ外ヲ出デズ、良房其姪基經ヲ養ヒテ子トス、又外舅ノ大臣ヲ以テ陽成天皇ノ朝ニ攝政トナリ、後ニ至リテ始テ關白トナル、後世攝關ノ職、必ズ之ヲ外祖外舅ノ大臣ニ取ルノ例ハ、良房父子ヲ以テ其先蹤ト爲ス、基經、天皇ノ失德アルヲ以テ之ヲ廢シテ、光孝天皇ヲ迎ヘ立ツ、是實ニ人臣ヲ以テ廢立ヲ擅行スル始ナリ、是ヨリ大權全ク相門ニ歸シ、威權王家ヲ震ス、光孝天皇ガ基經ヲ臥內ニ引キテ皇太子ノ事ヲ託シ、宇多天皇ガ阿衡ノ事ヲ以テ自ラ責ヲ引キ給ヒシガ如キ、以テ其一端ヲ窺フニ足ルベシ、宇多天皇ハ英主ナリ、一旦其權ヲ收メント欲シ、菅原道眞ヲ擧ゲテ政ヲ輔ケシメ給ヒシカド、其效ナキノミナラズ、積重ノ威、愈激シテ愈盛ナリ、基經ノ子時平、亦醍醐天皇ノ朝ニ驕ル、天皇ハ高藤ノ女ノ產ム所ニシテ、高藤ハ良房ノ弟良門ノ子ナリ、久シク世ニ沈淪セシガ、是ニ至リテ復タ盛ナリ、是ヲ勸修寺家ノ始祖トス、當時數世ノ間、皇后ヲ立テ給ハザリシハ、蓋シ鑑ミル所アリシ故ナルベシ、
朱雀天皇幼冲ヲ以テ立チ給フニ至リテ、時平ノ弟忠平マタ之ガ攝政トナリ、嫡子實賴亦冷泉天皇ノ朝ニ關白タリ、是ヨリ先キ村上天皇ノ中宮ハ實賴ノ弟師輔ノ女ナリ、天皇及ビ爲

マタ二十二代ニシテ崇峻天皇ノ時、馬子ノ變アリ、馬子ハ武内宿禰ノ子、蘇我石川宿禰ヨリ出ヅ、石川四世ノ孫ヲ稻目ト云フ、二女ヲ倶ニ欽明天皇ニ納レテ、用明推古崇峻三天皇ノ外祖トナル、即チ馬子ノ父ナリ、馬子ノ子蝦夷、孫入鹿、相繼ギテ大臣ト爲リ、父祖ノ威烈ニ藉リ、專恣ヲ極メ、擅ニ封民ヲ役シテ大墓ヲ築キ、祖廟ヲ建テヽ八佾ヲ舞ハシメ、其墓ヲ陵ト云ヒ、其家ヲ宮門ト呼ビ、其子ヲ王子ト稱シテ、密ニ不軌ヲ圖リシカバ、天誅踵ヲ回サズシテ、竟ニ中大兄皇子天智ノ討伐ニ遇ヒ、一門悉ク亡滅ニ歸セリ、而シテ其密議ニ參シ、大憝ヲ殪シ、國家ヲ安ンゼシハ藤原鎌足ノ功ナリ、是ヲ以テ其子不比等、文武天皇ノ朝ニ當リ、洊リニ榮達シテ、天下ノ樞機ヲ掌リ、一門漸ク盛ナリ、其病デ臥スヤ、詔シテ度者ヲ賜ヒ、諸寺ニ布施シ、天下ニ大赦シ、其薨ズルニ及テハ、太政大臣正一位ヲ贈リ、食封資人並ニ生時ノ如クセシム、外戚ノ爲ニ赦令ヲ發シ、贈位贈官及ビ賜封ノ擧アル、蓋シ之ヲ以テ嚆矢トス、時ニ聖武天皇ハ皇太子ニシテ、不比等ノ外孫ナリ、即位ニ至リ、遂ニ不比等ノ女安宿媛ヲ立テヽ皇后トス、古來皇后ハ多クハ之ヲ皇胤ニ擇ブヲ以テ例トシ、大寶ノ令ニハ、妃モ猶之ヲ内親王ニ取リシガ、是ニ至リテ始テ臣下ノ女ヲ採リ、皇后ニ列スル例ヲ開ケリ、是時ニ當リテ、不比等ノ子、武智麻呂、房前、宇合、麻呂等、何レモ顯要ニ列シタルノミナラス、皇后ノ異父兄、橘諸兄ノ如キモ亦大ニ登用セラレ、大臣ノ位ニ昇リ、外戚ノ權甚ダ重シ、是ヨリ藤原氏累世外戚タルノ故事ヲ馴致セリ、孝謙天皇、藤原皇后ノ出ヲ以テ、聖武天皇ノ後ヲ繼ギ給フニ及ビテ、詔シテ外祖ノ名ヲ諱ミ、且ツ外家ノ姓ヲ避ケシム、外戚ノ威益熾ナリ、淳仁天皇ノ朝ニ至リ、終ニ不比等ヲ近江十二郡ニ追封シテ淡海公ト稱シ、其室ヲ以テ太夫人ト爲セリ、此時惠美押勝ノ亂アリ、押勝ハ武智麻呂ノ子ナリ、

稱德光仁二天皇ノ際ニ當リテ、宇合ノ子百川、輔弼ノ功アリ、女旅子ヲ桓武天皇ニ納レテ、淳

古事類苑

帝王部二十六

外戚上

天皇ノ外戚ハ、上古ニ在リテ固リ之ヲ特待セル跡ナキニアラズト雖モ、未ダ其制度ノ見ルベキモノアラズ、其之アルハ蓋シ近江朝廷ノ頃ナルベシ、然レドモ當時ノ制ノ今ニ存セザルヲ以テ亦之ヲ知ルニ由ナシ、大寶ノ制ヨリ以後、其制ト例ト昭々トシテ攷フベシ、凡ソ天皇ノ外戚タルモノハ、毎ニ其官位ヲ進メ、三宮ニ準ジテ封戸ヲ給ヒ、直衣ヲ著スルヲ聽シ、臺盤所ニ入ルヲ得シムルノミナラズ、其病ムニ及ビテハ度者ヲ賜ヒ、諸寺ニ布施シ、神祇ニ奉幣シ、或ハ天下ニ大赦シ、賑給ノ令ヲ發シ、以テ之ヲ救濟スルコトアリ、其犯罪アル、皇太后ノ四等以上ノ親、皇后ノ三等以上ノ親モ皆六議ノ恩典ニ霑ヘリ、是レ其生前ニ於ケル待遇ナリトス、其沒スルヤ天皇爲ニ錫紵ヲ服シ、或ハ帛衣ヲ除キ、廢朝ノ事ヲ行ヒ、或ハ賻物葬儀ヲ賜ヒ、贈位贈官ノ使ヲ發シ給フ等ノ事アリ、而シテ其尤モ貴顯ナルモノニ至リテハ、警固固關シ、爲ニ節會ヲ停廢シ、其墓ハ山陵ニ準ジテ墓戸ヲ置キ、荷前ヲ進メ、天下事アル時ニハ必ズ之ニ告グルヲ以テ例トセリ、是レ其死後ニ於テ享クル所ノ待遇ナリトス、

外戚ガ其生前死後ニ於テ享クル所ノ待遇ハ、大要此ノ如シ、是ヨリ少カ其故事ニ就テ陳ブル所アラントス、玆ニ我國家ノ治亂盛衰ノ跡ヲ歴覽スルニ、外戚ニ關係スルモノ實ニ尠シトセズ、神武天皇ヨリ十一代ニシテ垂仁天皇ノ朝ニ至ル、此時始テ外甥狹穗彦ノ反アリ、後

古事類苑

帝王部二十六

外戚上

ノ時ハ御簾入ナシ、是親王タルニ由テ也、御入輿トハ、俗ニ云婚姻ノ事也、

〔續史愚抄（桃園）〕寛延二年二月七日丙戌、太宰帥典仁親王、於仙洞、（櫻町殿）入于無品成子内親王（譯宮、中御門院）皇女、方簾中、　九日戊子、無品成子内親王、（號ニ譯宮、廿一歳、中御門院皇女、母源内侍局、）自櫻町殿（院御所）移徙太宰帥典仁親王（閑院）第、（嫁娶）扈從公卿皇太后宮大夫（宗長）已下五人、（六條前中納言有起爲ニ人數、）前駈殿上人右中將實觀朝臣已下九人、

源氏のさ大しやう、〇源高明えもいはずかしづき給ひとりむすめを、さやうにとはのめかし聞え給ければ、みかどもみやも、おほんけしきさやうにおぼしければ、よろこびてやがて其夜參り給、例の宮たちは、我さとにおはしそむる事こそ常の事なれ、これは女御更衣のやうに、やがて内におはしますに參らせ奉り給べきさだめあれば、例の女御更衣の參はさることとなり、これはいとめづらかにさまかはりいまめかしうて、おほん元服の夜やがて參り給、帝さささの御。よ。め。あ。つ。か。ひ。の程、いとおかしくなんみえさせ給けり、

〔大鏡三左大臣師尹〕今一所の女君は、〇中略れんせいゐんの四のみこ〇敦道帥宮と申御。う。へ。〇妻にて、二三年計おはせしほどに、〇下略

〔台記〕康仁二年六月十八日癸卯、雅仁親王夫。人。生男、

〔康富記〕文安元年四月廿六日乙巳、今夜有准后宣下事、當今(後花園)幷二宮之御母儀、伏見入道親王北。政。所。、令蒙此宣下給、〇中略
御名字從三位源幸子也、故源宰相經有卿息女也、仍爲經子而被改之爲幸子云々、

〔百一錄〕延寶四年四月六日、平明伏見宮之御。臺。所。好君御方薨御、女院之女二宮之御息女、急病也、八音遏密、

〔百一錄〕元祿十年十一月十六日、仙洞〇靈元宮綾宮御方〇准后腹福子可爲伏見殿簾。中。之由有言入事也、十一年四月廿九日、綾宮御方伏見殿御翠簾入、仙洞姫宮廿有餘歟、　五月二日、綾宮御方、今夕伏見殿亭へ渡御、堂上北面等數輩供奉、

〔故實拾要一〕姫君御入輿
是姫宮ノ親王攝家へ御入輿アル時、攝家ハ其姫宮ノ御所へ、御入輿以前ニ伺候有テ、御所ニ一宿有テ、翌朝退出シ給フ也、之ヲ御簾入(ミスダレイリ)ト云也、御簾入有テ以後ニ、攝家ノ方へ御入輿アル事也、攝家ハ臣下タルニ由テ也、御入輿ノ時ハ、必攝家ノ方ヨリ先有御簾入事也、亦親王家へ御入輿

等、得間逃出、隱膽駒山、〇中略終與子弟妃妻、一時自經俱死也、

〔日本書紀 三十持統〕朱鳥元年十月庚午、賜死皇子大津於譯語田舍、時年二十四、妃皇女山邊、〇天智皇女被髮徒跣、奔赴殉焉、見者皆歔欷、

〔續日本紀 十聖武〕天平元年二月癸酉、令王〇長屋王自盡、其室二品吉備內親王〇中略等同亦縊、

〔文德實錄 五〕仁壽三年五月乙巳、無品齊子內親王薨、親王嵯峨太上天皇第十二女也、母正五位下文室與人久賀麻呂之女、從五位上文子也、親王適三品太宰帥葛井親王、〇桓武皇子內外咸皆恥、其非成禮、

〔明月記〕建曆三年四月十七日、今夜通光卿娘、參六條宮、〇雅成親王、後鳥羽皇子 十九日、傳聞竹園古事有三箇夜儀、 廿一日、今夜初參院、三位中將通方卿暫相談、一夜供奉、宗行、雅清、通時、家兼、師季、顯任、定衡、有敎、資俊、顯平、仲能、資賴、棟基、泰光、長資、十五人云々、清信、守通、雅具等不作云々、雜人等今夜云、以此女房名號可稱女御乎、可稱御息所乎云々、末代人心曾不知物由、不異猿猴歟、天無二日、尾籠之至也、成長云、聞世繼有式部卿宮女御、是若親王妻歟、戴冠奉公者、年餘三十所存如此、末代之極歟、世繼之外不見及歟、可悲々々、若是重明爲平娘事歟、奇異々々、

〔吾妻鏡 四十九〕正元二年二月五日癸卯、酉剋故岡屋禪定殿下兼經公御息女、〇御年二十爲最明寺禪家〇北條時賴御猶子御下著、則入御山內亭、是可令備御息所〇宗尊親王妻給云云、

〔榮花物語 一月宴〕九條殿のきさきの御はらからの中のきみは、しげあきらのしきぶきやうのみやのきたのかたにてぞおはしける、

〔榮花物語 一月宴〕かゝる程に、后のみやも御門〇村上も、四の宮〇爲平親王をかぎりなきものに思ひ聞えさせ給ければ、そのけしきにしたがひて、よろづの殿上人上達部、なびきつかうまつりてもてはやし奉り給程に、やう〳〵十二三ばかりにおはしませば、おほんげんぶくのことおぼしいそがせ給、おほんむすめもたまへるかんたちへは、いみじうけしきばみ聞え給に、宮の大夫と聞ゆる

皇親制

○按ズルニ、玉勝間ニ云フ所ノ諸王ハ、其人アルニアラズシテ、年爵ノ爲ニ假ニ其名ヲ設ケシモノナラン、

〔古事談（四勇士）〕天德四年五月十日夜、强盜入武藏權守源滿仲之宅、爰滿仲射留類人倉橋弘重、弘重指申中務卿親王第二男、及宮內丞中臣良村、土佐權守蕃基之男等所爲、撿非違使右衞門志錦文明參內奏聞、中務卿親王家人申云、件孫王今曉入親王家、其同類紀近輔、中臣良村等在此家、仍以事由告親王、親王令申云、男親繁、日來重煩痢病在此家內、不堪起居、待平安時可進者、依宣旨使官人等搜求同類藏親王家內、遂不捕獲、於成子內親王家內（○宇多皇女）捕獲紀近輔、近輔申云、親繁王爲首入滿仲家事實也、贓物悉可在彼親繁王許ト云、勅云、依不進男、忽科親王罪、猶伺親繁之出外可召捕者、

〔薩戒記〕享保六年四月二日己酉、飛鳥井中納言示送云、今度御百首、伏見宮幷玉河宮等就端作有被尋問事、伏見宮者親王也、然而已入道給、其儀可同法親王歟、然者可被書沙門某歟、於玉川殿者諸王也、可爲某王歟者、予答云、伏見宮者、只法名二字許可令書給、如入道關白之類也、玉川宮者可爲某王也云云、

○按ズルニ、伏見宮ハ崇光天皇ノ皇子榮仁親王ニシテ、玉河宮ハ長慶太上天皇ノ御子ナリ、

○

〔日本書紀（二十七繼體）〕男大迹天皇（○繼體）譽田天皇五世孫、彥主人王子也、母曰振媛、振媛活目天皇（○垂仁）七世孫也、天皇父聞振媛顏容姝妙甚有孅色、自近江國高嶋郡三尾之別業、遣使聘于三國坂中井、納以爲妃、遂產天皇、

〔神皇正統記（敏達）〕二年癸巳の年、天皇の御弟、豐日皇子（○用明）の妃、御子を誕生す、厩戶皇子にてまします、

〔日本書紀（二十四皇極）〕二年十一月丙子朔、（○中略）山背大兄（○用明皇孫厩戶子）仍取馬骨投置內寢、遂率其妃幷子弟

雜載

男、山口王、長津王、船王之男、葦田王、及孫他田王、津守王、豐浦王、宮子王、去天平寶字八年賜姓三長眞人、配丹後國、從四位下三嶋王之女河邊王、葛王、配伊豆國、屬籍、

〔續日本紀光仁三十二〕寶龜三年二月癸酉、先是從五位上掃守王男小月王、賜姓勝間田、流信濃國、至是復除名。

〔續日本紀光仁三十二〕寶龜三年十月壬子、中務大輔從五位上兼少納言信濃守菅生王、坐姧小家內親王、

〔續日本紀聖武十一〕天平五年閏三月戊子、諸王飢乏者二百十三人、召入於殿前、各賜米鹽、詔責其懶惰、令治生業、

〔類聚國史賞賚七十八〕弘仁十三年七月丙申、以新錢一百貫班給諸王貧者、

〔園太曆〕康永三年正月六日、及晩叙位聞書到來、續左、〇中略

從五位下爲實王天曆(村上)御後〇中略

康永三年正月五日

〔園太曆〕貞和二年正月二日、傳聞今日叙位執筆、中院大納言、其外日野大納言、右衞門督、四條宰相、左大辨、右大辨等參陣云々、淸書事、右衞門督奉行云々、執筆左大辨也、　七日、午剋聞書到來、〇中略

從五位下宗友王、天曆(村上)御後〇中略

貞和二年正月六日

〔玉勝間五〕中ごろまでは諸王おほかりし事

園太曆康永三年の除目に、從五位下爲實王、天曆御後貞和二年の除目に、從五位下宗友王、天曆御後同三年の除目に、從五位下資方王、寛和御後延文四年の除目に、從五位下資能王寛和御後などあり、このほどまでは諸王もなほおほかりしと見えたり、

除王名

喬子 大樹家慶公御臺所
寬政七年六月十四日生、號樂宮、 文化元年九月三日下向于關東、 同六年十二月一日婚禮
[illegible]十五

女子 贈從一位德川齊昭簾室
文化元年九月廿五日生、號登美宮、

〔近代帝王系圖〕閑院宮

直仁親王

女子 西本願寺光啓室
享保五年七月十三日生、號始宮、 元文五年九月廿二日嫁、

倫子 大樹家治公御臺所
元文三年正月廿日生、號五十宮、 寬延元年閏十月廿一日來春東行治定 同二年三月五日發輿 寶曆四年十二月十日婚禮

〔續日本紀 十四聖武〕天平十四年十月癸未、禁從四位下鹽燒王、幷女孺四人、下平城獄、 戊子、鹽燒王配流伊豆國三嶋、

〔續日本紀 二十三淳仁〕天平寶字五年三月己酉、葦原王坐以刃殺人、賜姓龍田眞人、流多褹嶋、男女六人復令相隨、葦原王者、三品忍壁親王之孫、從四位下山前王之男、天性凶惡喜遊酒肆、時與御使連麻呂博飲、忽發怒刺殺、屠其股肉、便置胸上而膾之、及他罪狀明白、有司奏請其罪、帝以宗室之故、不忍致法、仍除王名配流、

〔續日本紀 三十一光仁〕寶龜二年七月乙未、故從四位上守部王之男笠王、何鹿王、爲奈王、正三位三原王之

興 十二歳

職仁親王

女子 徳川岩千代室

延享二年九月廿四日生、號長宮、寶曆二年十月廿一日嫁

董子 近衛右大臣經熙公室

寶曆九年三月十一日生、號孝宮、安永四年正月廿五日移于仙洞、同五年十月廿六日入輿治定、號恭宮、十一月廿四日從仙洞嫁 十九歳

音仁親王

女子 爲職仁親王子、佛光寺(堯祐)室、

延享三年五月二日生、號兼宮、明和四年十二月一日嫁 廿二歳

織仁親王

女子

安永九年七月十三日生、號富貴宮、寛政三年二月藝州入輿治定、同四年九月二日赴于關東 尾州家 同五年二月十五日、從尾州嫁于藝州 十四歳

女子 大膳大夫齊房室

天明二年七月十三日生、號同宮、同五年五月長州內約、寛政九年十月五日赴于關東、十一月三日嫁 十六歳

理子　紀伊中納言吉宗卿室

元祿四年生、號眞宮、寶永三年三月十一日赴東武、十一月一日嫁、歳十六

〔百一錄〕元祿九年十月廿四日、伏見殿姫宮、可爲勢州一身田門徒簾中云々、同若君爲仙院御養子、爲常修院宮御弟子、可爲新大納言局母代云云、

〔近代帝王系圖〕京極宮

智仁親王

女子　西本願寺眞如室

慶安元年八月十七日薨、號珠光院

文仁親王　號京極、靈元院皇子

女子　專修寺圓猷室

寶永七年十一月四日生、號美目宮、享保十二年二月廿三日高田一身田聘納、同十四年十二月十六日婚禮

〔近代帝王系圖〕有栖川宮

幸仁親王

女子　東本願寺光性室

元祿四年九月廿四日生、號淑宮、同十五年閏八月一日光性大僧正室治定、十二月四日入

岡大魚勁神等五人、並山村王之孫也、其祖父山村王、以去養老五年、編附此部、自爾以來、子孫蕃息或七八世、分爲數烟、依格六世以下、除承嫡者之外、可科課役、望請承嫡之戸、遷附京戸、自除與姓科課、於是下所司、撿皇親籍、無山村王之名、仍從百姓之例、但不與眞人之姓、

諸王爲人臣嗣

〔執次詔所本御系譜〕閑院宮

直仁親王

─藤原輔平 鷹司關白左大臣

寛保三年十月四日爲櫻町院御猶子、　同廿七日鷹司家相續、一條殿下兼香公爲猶子、　延享二年九月十九日移于鷹司家、

〔近代帝王系圖〕伏見宮

貞清親王

女王婚嫁

─女子 紀伊大納言光貞卿室、號安宮、

明暦三年九月廿七日入輿

─顯子 大樹家綱公御臺所

明暦三年七月十日入輿

〔百一錄〕延寶四年八月五日、大樹公之御臺所伏見殿御姉御薨逝、御年序三十、依內證也、音樂七日遏密云云、

〔近代帝王系圖〕伏見宮

貞致親王

〔續日本紀二十四淳仁〕天平寶字七年十月丙戌、參議禮部卿從三位藤原朝臣弟貞薨、弟貞者平城朝左大臣正二位長屋王子也、〇中略勝寶八歲、安宿黃文謀反、山背王陰上其變、高野天皇嘉之、賜姓藤原、名曰弟貞、

〔類聚國史七十九政理〕延曆十一年七月乙卯、勅、頃年京職輙賜諸王姓、即著籍帳以成常、自今以後、六世以下之王、情願賜姓、注所願姓、先以申請、然後行之、

〔日本後紀十二桓武〕延曆廿三年正月己亥、制、延曆十一年七月三日格、六世已下王、情願改姓者、注所願之姓、先申官待報然後改之、不得輙行者、頃年之間、未有申請、既違格旨、自今以後除承嫡之外、猶不改者、宜抑止計帳、不得疎口、

〔續日本後紀三仁明〕承和元年二月甲午、三品明日香親王薨焉、〇中略先太上天皇〇嵯峨在祚時、親王上表、自請除親王號、同之諸臣、不見許、更祈所生男女賜朝臣姓、感其懇誠乃聽之、孫王賜姓、從此競效之、

〔皇胤紹運錄〕

桓武天皇—葛原親王—平高棟天長二、閏七、賜平姓、

〔續日本後紀一仁明〕天長十年五月甲寅、六世長岡岡於王等男女廿七人、賜姓清原眞人、

〔續日本後紀十仁明〕承和八年七月己卯、右京人、六世御津井王、是雄王、眞雄王、國雄王、本吉王、淨道王、稻雄王、多積王、安富王、伊賀雄王、三輪女王、坂子女王、七世新男王、春男王、三守王、並雄王等十六人、賜姓有澤眞人、

〔續日本後紀十七仁明〕承和十四年七月甲申、右京人、六世賀我王、七世眞桑王等十三人、賜御高眞人姓、

〔續日本紀三十七桓武〕延曆二年九月丙子、近江國言、除王姓、從百姓戶五烟、口一百一人、戶主槻村井上大

廷、是故召王等令問其狀者、臣葛城等本懷此情、無由上達、幸遇恩勅、昧死以聞、昔者輕堺原大宮御宇天皇〇孝元曾孫建內宿禰、盡事君之忠、致人臣之節、創爲八氏之祖、永遺萬代之基、自此以來賜姓命氏、或眞人、或朝臣、始姓王家、流終臣氏、飛鳥淨御原大宮御大八洲天皇、〇天武德覆四海、威震八荒、欽明文思、經天緯地、太上天皇〇元明內脩四德、外撫萬民、化及翼鱗、澤被草木、後太上天皇〇元正無改先軌、守而不違、率土淸淨、民以寧一、于時也葛城等親母、贈從一位縣犬養橘宿禰、上歷淨御原朝廷、下逮藤原大宮、事君致命、移孝爲忠、夙夜忘勞、累代竭力、和銅元年十一月二十一日、供奉擧國大嘗、二十五日御宴、天皇〇元明譽忠誠之至、賜浮杯之橘、勅曰、橘者果子之長、人之所好、柯凌霜雪而繁茂、葉經寒暑而不凋、與珠玉共競光、交金銀以逾美、是以汝姓者、賜橘宿禰也、而今无繼嗣者、恐失明詔、伏惟皇帝陛下、〇聖武光宅天下、充塞八埏、化被海路之所通、德蓋陸道之所極、方船之貢、府无空時、河圖之靈、史不絕記、四民安業、萬姓謳衢、臣葛城幸蒙遭時之恩、濫接九卿之末、進以可否、志在盡忠、身隆絳闕、妻子康家、夫王賜姓定氏、由來遠矣、是以臣葛城等願賜橘宿禰之姓、戴先帝之厚命、流橘氏之殊名、萬歲無窮千葉相傳、

壬辰、詔曰、省從三位葛城王等表、具知意趣、王等情深謙讓、志在顯親、辭皇族之高名、請外家之橘姓、尊思所執、誠得時宜、一依表令賜橘宿禰、千秋萬歲、相繼無窮、

〔新撰姓氏錄左京皇別〕橘朝臣

甘南備眞人同祖、敏達天皇皇子、難波皇子男、贈從二位栗隈王男、治部卿從四位下美努王、美努王娶從四位下縣犬養宿禰東人女、贈從一位縣犬養橘宿禰三千代大夫人、生左大臣諸兄、〇中略和銅元年十一月己卯大嘗會、二十五日癸未曲宴、賜橘宿禰姓於大夫人、天平八年十二月丙子、詔參議從三位行左大辨葛城王、賜橘宿禰諸兄、

〔續日本紀十八稱德〕天平勝寶四年八月乙丑、從三位智努王等、賜文室眞人姓、

〇按ズルニ、智努王ハ、天武天皇ノ皇子長親王ノ御子ニシテ、即チ文屋淨三是ナリ、

二品征夷大將軍、左大將、中納言、中將、元弘三、五、廿二出家、關東滅亡故也、

〔皇胤紹運錄〕

順德院――忠成王――彥仁王――忠房親王文保三〔元應元〕二、十八、无品親王宣下、彈正尹、
　　　　　　　　　　　　　　　――守子內親王

諸王賜姓

〔光臺一覽 二〕親王之事

皇子は童形といへ共親王宣下、生ながらを宮樣と稱し候、御元服の時は、當代の后腹は三品、外之腹は四品也、又伏見、有栖川、京極、閑院之御子は、皇孫と申者にて、直の王子とは違有、故に天子或は院方の御猶子になり給ひ、親王と申給ふ也、

〔光臺一覽 二〕總別親王の御子は、現在皇孫と申者なれ共、二代目は天子か院の御猶子に御成不被成候得者、親王宣下無之候、〇中略 又親王家御子數多有之時は、御門跡方の御附弟と成給へ共、御得度已後法親王宣下有事なれば、いづれも御猶子と云ものに不被爲成して不叶事也、況や俗親王として、天子の御連枝と格の立御家を知り給はんをや、臣下の列に落給へば、今の清華の格が上上也、源經基朝臣、平高望等の格見つべし、何れにても皇孫臣下に落給へば、源氏を給ふ通例也、今の清華之內、久我廣幡其緣也、古への事也、

〇按ズルニ、靈元天皇以後ノ法親王ハ、何レモ御養子ニシテ、御猶子ハ甚ダ稀ナリ、又皇孫ニ姓ヲ賜フ事、必ズシモ源氏ニ限ラザルナリ、

〔續日本紀 十二 聖武〕天平八年十一月丙戌、從三位葛城王、從四位上佐爲王等上表曰、臣葛城等言、去天平五年、故知太政官事一品舍人親王、大將軍一品新田部親王宣勅曰、聞道諸王等願賜臣連姓、供奉朝

小一條院諱敦明、長和五、正、廿九立坊、寛仁元、八、九辭レ之、即授二院號一、

敦貞親王三品式部卿、中務卿、爲二祖帝(三條)子一、

敦元親王爲二祖帝(三條)子一、

儇子內親王配二權中納言信家一、三條院爲レ子、

嘉子內親王齋宮、寛德二、三、十卜定、

〔小右記〕寛仁三年三月五日、早朝宰相來云、故三條院女親王皇后宮腹一夜著袴親王一被レ叙二三品一、當時院〇小一條男女男者左大臣女腹、女者前太政大臣女腹高松、爲二親王一之宣旨下也、爲二故三條院王子一、今被レ下二爲二親王一之宣旨一云々、故花山院御子二人爲二故冷泉院王子一、爲二親王一、依二彼例一所レ被レ行云々、已不二相合一之例也、所以者口冷泉院御口之時爲二彼王子一、而三條院崩已及二三箇年一、令三更爲二彼王子一如何、一時議歟、就レ中高松腹生年産給、以二崩後產給女王一、入二彼三條院王子一爲二親王一、天下如レ有レ言乎、

〔勘仲記〕弘安十年十月四日、諸卿著座、〇中略頭辨於レ軾宣下云、中納言源朝臣、〇惟康爲二親王一、令レ叙二二品一、

上卿召二大辨一被レ仰レ之、〇中略次頭辨又宣下云、二品惟康親王宜レ令レ聽二帶劍一、〇中略抑孫。王。親。王。宜。下、先。例。頗。稀。近則菩提院宮澄覺法親王云々、

〇按ズルニ、惟康親王ハ、後嵯峨天皇ノ皇子、宗尊親王ノ御子ナリ、當時征夷大將軍タルニヨリ、特旨ヲ以テ親王宣下アリシナリ、

〔皇胤紹運錄〕

後深草院——久明親王一品、式部卿、征夷大將軍

守邦親王

子一脚、又以西一許丈、立掃部女孺床子二脚、前又立班祿臺一脚、用長床子、掃部座西南四許尺、立闈司床子、闈司西北去八許尺、立來著床子六脚、祿以西五許尺、更南折一許丈、立別當以下令史已上床子、自此以北樹板障子、辨備已畢、御紫宸殿、正親司引女王等、自月華門參入、女王先入就幄下座、訖別當已下入就座、即唱名賜祿、

〔儀式八〕正月八日賜女王祿儀十一月新嘗會亦同

其日内侍、於縫殿院點撿女王、〇中略佑一人執名薄唱曰、某親王之後、于時一祖之胤、皆下座稱唯、進就賜祿座、座定執薄一々唱名、即稱唯受祿退出、其賜內外命婦祿、或七日或此日、或殿上、或庭、唯臨時勅裁之、

〔延喜式三十九正親〕凡正月八日給祿女王、所司設座於殿庭、立幄二宇於安福殿前、積祿於版位南、亦供奉殿上裝束、天皇御紫宸殿、内侍率女官就座、本司官人、引女王自月華門參入、女王先就幄下座、以世爲次、不據長幼、次官人共趨就前庭座、佑一人執薄唱曰、某親王之後、即一祖之胤皆下座共稱唯、就庭中座、座定執薄一々喚名、女王即稱唯、進受祿退出、餘亦如之、其祿法、人別絹二疋、綿六屯、新嘗會准此、十一月

凡賜祿女王、定二百六十二人、其隨闕補代、代及改姓不爲闕、事並同上條、

凡給女王二節祿見參薄、當日早旦奏之、

〔貴嶺問答〕嚴札之旨謹承候了、二世以下四世以上、謂之女王、五世者自入命婦宮人之例、近年彼顯子之外無女王、仍祿事停止歟、但可尋先例事也、

〔中右記〕嘉承二年十一月十八日、今夕有王祿、左宰相中將忠教、右中辨顯隆勤之、是雖無節會、先例有王祿云々、

孫王爲親王

〔皇胤紹運錄〕

三條院

女王賜祿

右造式所起請偁、太政官去延暦二十年十二月十三日符云、職事諸王上日不滿、應預王祿、但不直本司、經二季已上、量情可責、宜解見任者、案職制律云、以官當徒者、六位以下、以一官當徒一年、仍解見任者、今撿此律、六位以下諸王、不上卅五日以上、自須官當解任、而官符二季以上乃可解任、此乖法意、加以解官之罪、於事不輕、而無奉勅字、若爲處分者、大納言正三位兼行左近衞大將陸奥出羽按察使藤原朝臣宣、奉勅宜改先符、經百二十日不直者、解却見任、永爲恒例、

弘仁十年十二月廿一日

〔三代實錄十七清和〕貞觀十二年二月二十日壬寅、公卿奏請、減諸王季祿、兼立給祿定額、曰、〇中略伏見、故從四位上豐前王等意見表、曰利國之政、節用爲先、今府帑稍空、貢賦少入、當停諸王之祿、存救弊之計者、臣等商量上表之旨、頗有可取、但專停之、則似疎皇親、全給之、則可闕國用、取捨之方、宜勤折中、又王氏蕃昌、萬倍曩日、計其祿賜、所費難支、伏望當時預祿者、四百二十九人爲定員、後生年足者、隨闕補之、但自願賜姓屬籍者、不以爲闕、重以去年炎旱、農民失望、聖上撤服御常膳、群下減食封位祿、而至于王祿、依舊不悛、求諸通論、政渉踳駮、事須准之位祿同從減折、然則適時之要、理无二途、濟世之權、事從一揆、謹錄事狀、伏聽天裁、奏可、　廿五日丁未、勅減諸王季祿四分之一、

〔延喜式三十九正親〕凡給季祿男女王、同世之中、有同名者、速令申換、載帳進之、但新名下注本名、

〔內裏式上〕八日〇正月　賜女王祿式十一月同

其日近衞次將、令所司鋪設於殿庭、（安福殿前張幄二字）積祿於版位南、紫宸殿南廂西戸外、建三尺畫障子、辨備御饌、（謂菓子餅等、殿南廂西第三間安酒器、）幷皇后御座饌、及女御尙侍已下散事已上饌座、（並捐肴菓子等）其御座以西二許丈、設皇后御座、（裝束之儀同御座、但不立御帳、）御座以東設女御以上座、（用疊床子、其色隨人貴賤、）立臺盤置銀筯匙、（但饌各用私物）御座以東二許丈南北相對、立孫王尙侍典侍等床子、（以下同中床子）東廂南北相對、立散事床子、（以上同鋪褥代、又立臺盤、置白銅筯匙、及肴菓子等、）東第一間安酒器、（事具別記）祿東頭少北進北面、立內侍床子、又西去八許尺、立女史床子、床子前立空床

季祿

〔續日本紀十六聖武〕天平十七年五月壬午、制、无位皇親給春秋服者、自今已後、上日不滿一百四十、不在給例、（計上日七十、給春夏服、秋冬亦如之、）但給乳母王不在此限、又據格、承嫡王者、直得王名、不在給服之限、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年二月二日甲寅、從四位上行伊豫守豐前王卒、○中略先是諸王自二世至四世、賜夏冬衣服、不限人數、隨年足符、出多少賜之、或至五六百人、是時藏簿進官者四百餘人、豐前上疏曰、諸王給服人數不定、徒費帑藏、何無紀極、望請以當時所在爲定數、隨闕補之、不聽、輒過從之、

〔延喜式十八式部〕凡皇親時服者、與季祿共給之、

〔延喜式三十九正親〕凡諸王年滿十二、每年十二月、京職移宮內省、省以京職移即付司、令勘會名簿、訖更送省、明年正月待官符到、始預賜時服之例、

〔延喜式三十九正親〕凡諸王給春夏時服者、二世王絹六匹、絲十二絇、調布十八端、鍬三十口、四世王以上並如令、正月廿日錄送省、秋冬准此、（但以綿代絲、以鐵二廷代鍬五口、）皆向大藏受之、不得遣人代請、

凡賜時服王、定四百廿九人、待其死闕、依次補之、但改姓爲臣之闕、不補其代、隨即減定額數、

凡諸王有出家、停給時服、其女王節祿亦停、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字三年六月丙辰、參議從三位氷上眞人鹽燒奏、臣見三世王已下給春秋祿者、是矜王親、而今計上日、不異臣姓、伏乞依令優給、勿求上日、

〔令集解二十三祿〕延曆六年格云、六位諸王、任六位官者依官祿、任七位官者依王祿、自今以後、永爲恒例、

〔令集解二十三祿〕延曆二十年十二月十三日官符云、應職事諸王上日不滿預王祿事、右被右大臣宣偁、準例諸王給祿、不勘上日、而今任官之後、計日入祿、上日不足一無預祿、是緣得官還失其祿、事乖弘恕、理須改易、自今以後、職事諸王、上日不滿、宜給王祿、但不直本司、經二季以上、量情可責、宜解見任、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應職事諸王不直本司解却見任事

〔續日本紀 七元正〕靈龜二年四月壬申、以從四位下大野王爲彈正尹、

〔續日本紀 八元正〕養老二年三月乙巳、以正三位長屋王〇中略爲大納言、

〔續日本紀 九聖武〕神龜元年二月甲午、以右大臣正二位長屋王爲左大臣、

〔三代實錄 四十九光孝〕仁和二年五月十八日丙申、授無位在世王從四位下、于時在世爲伊勢齋內親王家別當也、

〔職原抄 上〕神祇官　伯一人　昔者諸氏混任、或又大中臣氏任之、中古以來花山院御子、彈正尹淸仁親王後胤相續、他人不任之、彼流四五品之時給源姓、雖任中少將等、任伯之日、復于王氏、是近例也、

〔帝王編年記 十七花山〕皇子淸仁親王　此親王子、康資王神祇伯、昔者諸氏混任、或又中臣氏任、中古以來、彼親王流相續、他人不任之、

〔三代實錄 一清和〕天安二年十一月十一日戊辰、無位坂子女王重子女王、並授從四位下、是褰御帳之女王也、凡天皇即位之日、擇王氏女有容儀者二人、充褰御帳之職、因而賜爵、他皆效此、

〔一代要記 一孝謙〕小宅女王 天平勝寶元年九月六日、以從三位三原王(舍人親王御子)女、小宅女王爲齋王、

〇按ズルニ、女王ノ齋宮ト爲リ給ヒシ例甚ダ多シ、神祇部伊勢齋宮篇參看スベシ、

食封

〔令義解 四祿〕凡食封者、〇中略正一位三百戸、從一位二百六十戸、正二位二百戸、從二位一百七十戸、正三位一百三十戸、從三位一百戸、

〔續日本紀 三文武〕慶雲三年二月庚寅、詔曰、〇中略案令諸王諸臣位封、自正一位三百戸、差降止從三位一百戸、冠位已高、食封何薄、宜正一位六百戸、差降止從四位八十戸、

時服

〔令義解 四祿〕凡皇親年十三以上、皆給時服料、春絁二匹、絲二絢、布四端、鍬十口、秋絁二匹、綿二屯、布六端、鐵四廷、其給乳母王者、絁四匹、絲八絢、布十二端、(謂二世王、其親王者不見令條、可有別式、若皇親任官、及敍五位以上者、不可重給、但季祿與王祿、從多給也、)

叙位　任官

等未蒙恩許、望請同被蠲除、許之、

○按ズルニ、本文ニ據ルニ、皇親ハ十一世ニ及ビ、賜姓ノ後モ猶課役ヲ蠲免セラルヽナリ、

〔續日本紀 文武 一〕三年六月丙午、淨廣參日向王卒、遣使弔賻、　丁未、命直冠已下一百五十九人、就日向王第、會喪、

〔令義解 公式 七〕凡應叙親王四品、諸王五位、

〔日本後紀 桓武 五〕延暦十五年十二月丙寅、詔曰、皇親之蔭、事具令條、而皇室之胤、枝族已衆、欲加榮班、難可周及、是以進仕無階、自首不調、眷言於此、實合矜恕、宜其四世五世王、及五世王嫡子年滿廿一者、叙正六位上、但庶子者降一階叙、自今而後、永以爲例、

〔日本書紀 持統 三十〕五年正月癸酉朔、賜親王諸臣内親王女王内命婦等位、

〔續日本紀 聖武 九〕神龜元年二月丙申、授從四位下海上王、智奴王、○中略 並從三位、正四位下山形王正四位上、

〔續日本紀 桓武 三十八〕延暦四年五月癸丑、先是皇后宮赤雀見、是日詔曰、○中略 宜天下有位、○中略 賜爵一級、○中略 四世五世、及承嫡六世已下王年二十以上、並叙六位、

〔日本書紀 天武 二十九〕八年三月己丑、吉備大宰石川王病之薨於吉備、天皇聞之大哀、則降大恩云々、贈諸王二位、

〔官職秘抄 上〕神祇官　伯　以孫王若三四世王氏任之、　太政官○中略　左右内大臣○中略　一世源氏、二世孫王○中略 任之、

〔官職秘抄 下〕諸道官○中略　大學頭○中略　諸王或任之、諸王任例往代事也、已絶畢、○中略　諸王任例、實世、是行、高棟、未給姓以前也、

〔日本書紀 天武 二十九〕四年三月庚申、諸王四位栗隈王爲兵政官長、

待遇

以允貴名之禮從之、

〔日本書紀三十持統〕四年七月甲申、詔曰、凡朝堂座上、見親王者如常、大臣與王、起立堂前、二王以上、下座而跪、

〔三代實錄十八清和〕貞觀十二年十二月廿五日、制、無位二世王、遇三位下馬、七位已下遇無位二世王不下馬、

〔延喜式四十一彈正〕凡無位孫王、逢三位已上下馬、六位已下逢無位孫王不下、

〔令義解二戸〕凡戸主、皆以家長爲之、戸内有課口者爲課戸、無課口者爲不課戸、不課、謂皇親、謂四世以上、其五世王者、本蔭五位、雖非皇親、理宜不課、六世王者、疑准本蔭比五位子、亦是不課、七世王者、雖云絕蔭比五位孫、故輸調免傜、可得出仕、八世以下者、資蔭已絕、差科賦役、一准白丁也、

〔政事要略五十九〕勅、○中略夫王氏者、王號乃止於五世、資蔭不過於六世、典制斯存、沿來浸久、今諸王等、以天河末流、還少液流、若木下枝早虧榮拂、仍抗章表、殊祈優恤、凡所稱引、抑亦可採、朕情在推惠、事尙德音、是以推按古今、聽其所請、宜七世以下計數、至于五世課役蠲除、其既賜姓者、不論先後、一依王蔭、計世容之、亦同此例、豈非糺合枝幹、式雍帝載之義乎、主者明之、稱朕意焉、

天長九年十二月十五日　○又見享祿本類聚三代格、三代實錄、

〔三代實錄七清和〕貞觀五年十月廿七日丙戌、攝津國河邊郡人、九世散位正六位上川原公清宗、正七位上川原公清貞、從八位下川原公清方、十一世大膳大進正六位上爲奈眞人菅雄等五人之戸、並蠲課役、清永等、宣化天皇皇子、火焰之後、計其世數、未可徵課役也、

〔三代實錄三十八陽成〕元慶四年十月廿七日丁未、免攝津國河邊郡人九世從七位下川原公福貞、無位川原公福繼、有馬郡人無位川原公千被、河邊郡人十世從八位下川原公夏吉、大初位下川原公有利等五戸課傜、福貞等自言、宣化天皇第二皇子、火焰親王、是川原公、爲奈眞人等之祖、謹撿天長九年十二月十五日詔書偁、○中略爲奈眞人菅雄、川原公清永等、賴詔旨、貞觀五年閏六月十九日被免課傜、福貞

接物之道、爲人所避、尋常直於侍從局、品藻人物以爲己任、談咲消日、放縱不拘、諸王五世以下、帶五位者、法不聽著紫、豐前爲五世五位著紫、爲有司所糺然後著緋、

〔類聚符宣抄四〕右大臣宣、奉勅自今以後、孫王諸王同色者、用下附孫王爲上、唯異色者如常例、

弘仁三年正月五日

〔續日本紀三文武〕大寶三年十二月甲子、始皇親五世王五位已上子、年滿二十一已上者、錄其歷名申送式部省、

〔類聚國史百七職官〕元慶五年五月十日丁巳、制、令正親司進四世已上諸王歷名帳於太政官、每有闕補隨令改正、一如式兵二省補任帳、下季祿符之日、即備於勘會、

〔享祿本類聚三代格十七〕太政官符

應押署諸王計帳事

右得宮內省解偁、正親司解偁、撿案內去承和元年造王親籍、于今四十餘年、今省仰諸王年足、省符至者、勘會籍帳、早速申送者、須隨符到、勘會合不、而彼年以來、諸王籍帳無在司家、望請押署計帳、一通留司、然則勘據有便、假濫無聞者、省依解狀、謹請官裁者、大納言正三位兼行陸奧出羽按察使源朝臣多宣、奉勅依請、口下知左右京職、依件令行、若有依人愁與改判者、同待押署、然後判之、

貞觀十七年七月八日

〔延喜式三十九正親〕凡諸王計帳者、令造二通、司加押署、東京職判畢、一通留司、待年足符、即勘會申省、

〔延喜式三十九正親〕凡六位已下諸王死去者、喪家申司、司即申省、

〔三代實錄三十七陽成〕元慶四年三月十六日己巳、勅、諸王喚辭、准諸臣之狀、宣告文武百官、先是式部省奏言、依令三位四位五位六位、於太政官寮已上司及中國已下、各有喚辭、或稱大夫、或稱姓、今觀流例、只爲諸臣施此制也、於諸王則不論四位五位、總稱某王、商量事理、尊卑失序、望請稱大夫稱姓、一准諸臣、

絕皇親之籍、遂人諸臣之例、顧念親王之恩、不勝絕籍之痛、自今以後五世之王、在皇親之限、其承嫡者、相承爲王、自餘如令、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年九月己卯、詔、皇親二世准五位、三世以下准六位、

〔續日本紀十聖武〕天平元年八月癸亥、天皇御大極殿、詔曰、○中略五世王嫡子已上、娶孫王生男女者、入皇親之限、自餘依慶雲三年格、

〔日本紀略桓武〕延曆十二年九月丙戌、詔曰云云、見任大臣良家子孫、許娶三世已下、但藤原氏者、累代相承、攝政不絕、以此論之、不可同等、殊可聽娶二世已下者云云、

〔享祿本類聚三代格十七〕勅、依令五世之王、雖得王名、不在皇親之限、爰逮慶雲、升居親限、如聞頑闇之輩、苟規微祿、携養庸流、名爲己胤、遂附屬籍、以汚宗室、非徒速禍於一己、固亦延蹟於七廟、朕所以丁寧過於再三、曾不改悟、彌長奸濫、静言其弊、深合懲凊、宜停後格、一依令條、俾夫玉石殊貫、蘭艾不雜、主者施行、

延曆十七年閏五月廿三日

〔續日本紀二文武〕大寶二年五月辛未、勅、若五世王、自有辭訟、須受理者、特給座席、而與所分、

〔續日本紀三文武〕慶雲三年二月己亥、五世王朝服、依格始著淺紫、

〔續日本紀八元正〕養老四年五月辛酉、制、皇親服制者、以王孫准五位、疎親准六位焉、

〔續日本紀二十八稱德〕神護景雲元年四月辛巳、始授諸王四世者正六位上、五世者從六位下、其朝服用纁色、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲三年正月辛未、御大極殿受朝、文武百官、及陸奥蝦夷各依儀拜賀、是日勅六等已上、身有七位、而帶職事者、始著當階之色、列於六位之上、六位諸王著纁者次之、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年二月二日甲寅、從四位上行伊豫守豐前王卒、○中略豐前爲性簡傲、言語夸浪、

有之候へば、官位の品に依て公卿王之字之品極リ申也、白川殿之王ハ格別事也、

〔歴代皇紀 宇多〕宇多天皇 元慶八年四月十三日爲源氏、歳十八 任侍從、號王侍從、

○按ズルニ、宇多天皇當時孫王タリシヲ以テ王侍從ト云ヒシナリ、

女王初見

〔日本書紀 天武 二十九〕二年二月癸未、天皇初娶鏡王女額田姫王、生十市皇女、

〔日本書紀 持統 三十〕五年正月癸酉朔、賜〇中略 内親王、女王、内命婦等位、

〔續日本紀 文武 一〕三年正月甲申、淨廣參坂合部女王卒、

〔榮花物語 様々の悦 二〕まことや、このごろの齋宮にては、式部卿の宮〇爲平 の、女御〇婉子 の御おとうとのなかのみや〇恭子 ぞおはします、

〔榮花物語 玉村菊 十二〕わるがなかのおとみや〇婥子 は、三條の入道一品宮〇爲平 の御子にゑたてまつらせ給ひし、十ばかりにやおはしますらん、こたみの齋宮にゐさせ給ひぬ、

○按ズルニ、コヽニ云ヘル宮ハ即チ女王ナリ、

〔榮花物語 月宴 一〕朱雀院は、御子たちおはしまさゞりけり、たゞ王女御〇保明女熈子醍醐皇子 ときこえける御はらに、えもいはずうつくしき女みこ〇昌子 一所ぞおはしましける、

〔源氏物語 若菜 五〕内にても里にても、ひるはつく〴〵となかめくらして、くるればわう命婦をせめわりきたまふ、

○按ズルニ、わう命婦トハ、皇族ニシテ命婦タルヲ云フ、

諸王制度

〔令義解 繼嗣 四〕凡皇兄弟皇子皆爲親王、〇中略 以外並爲諸王、自親王五世、雖得王名不在皇親之限、

〔六典 吏部 二〕親王之子承嫡者爲嗣王、皇太子諸子並爲郡王、親王之子承恩澤者、亦封郡王、諸子封郡公、其嗣王郡王、及特封王子孫承襲者、降授國公、

〔續日本紀 文武 三〕慶雲三年二月庚寅、准令五世之王、雖有王名不在皇親之限、今五世之王、雖有王名、已

諸王初見

宰相を以て三度迄被仰遣之、大納言勅答兩度迄ハ、親王被爲思召切之由奏上、至三度兎角勅諚之趣可然ト申候へ共、親王御合點無之に付、九月十二日の夜、御側衆轉法輪右大將勸修寺中納言へ被仰付、禁裏附へ被内通、與力同心召連、兩勅使小倉大納言宅へ相越、早速寺へ不遣之段不屆被思召候、親王可相渡、其方父子は、閉門被仰付候由勅諚之旨申渡、直に飛鳥井隱居屋敷へ奉移、武士警固之由、右之儀に付、中園宰相、竹淵刑部大輔、藪大納言、同中將、鷲津左京大夫、阿野宰相、右何も閉門也云云、五の宮〇御年七東山松木大納言之息女、新大納言之腹、此王子御位可被爲立旨、京都より注進之、

〔紳書〕此立太子〇東山の御時、勅使關東へ參向有しに、其人に親しき關東の御家人詣て物語せしに、今度立太子の御事にて御下向の由、路次の御疲勞察入候、さて此度の御使こそうたてしき御事なり、抑天下の大體と申事を、何れも御存知なき故に、關東を始天下にて、朝廷へ歸し參らする樣をこそ知し召れね、某承り傳ふるに、一の宮には御障子に取付給ひて御歎きありしを、其御手を引放て引立參らせて、御出家を成させ申、今の太子を立させ給ふ由、驚き恐入てこそ候へ、天子の第一の宮にてわたらせ給ふを、かくあらけなく引立參らせ、御心にも染まぬ御出家成させ奉りて苦しからぬ御事に侍らば、今一階押のぼせて、かゝる振舞致しても苦しかるまじき歟と存ずれば、さて淺ましき世には成下り候と涙にむせびて申されし程に、勅使も兎角の返答に及ばざりしとぞ、

〇

〔日本書紀二十九天武〕四年三月庚申、諸王四位栗隈王、爲兵政官長、　八年十二月戊申、由嘉禾、親王諸王諸臣、及百官人等、給祿各有差、　十二年十二月丙寅、遣諸王五位伊勢王〇中略等、巡行天下、限分諸國之境堺、

〔光臺一覽二〕王とは、皇子にても皇孫にても、親王宣下なく、姓も不給は皆王と稱へ申候、叙位任官

〔和長卿記〕明應三年八月一日丁巳、秘傳云、一休和尚者、後小松院落胤皇子也、世無知之人、

〔孝亮宿禰記〕元和七年十一月十五日壬子、昨今古筆求出、(中略)一休和尚等筆也、(一休、後小松院第一皇子、諱宗純云、稱純藏主、正月元日日出降誕宮也、)

〔基量卿記〕天和二年十月廿八日、早天向勸修寺、今日門主渡也、當今、(○靈元)一宮、(○寬清)中納言典侍、(小倉大納言實起卿女○寬清所生)依御生質不宜、從去年大覺寺へ御弟子ニ可被遣之由仰之處、彼宮出家之義、無御素意之由達而固辭之間、小倉大納言幷中納言典侍等、同前ニ辭申時宜、叡慮不快之由、去年小倉父子三人流罪幷親族之輩閉門了、然處大覺寺殿より、彼宮之義申請事迷惑之由、固辭被申之間、今度勸門死去、件寺無住之由、彼宮ヲ被遣了、慈尊院僧正、勸門院家也、依之諸事令申沙汰、予彼僧正有内緣之間、可參訪由、兼日蒙仰之間參向了、

宮親王宣下、去廿五日有之云々、

著座公卿

前源大納言通義卿　日野中納言資茂卿　風早前宰相實種卿

刻限罷催之處、宮兎角無御同心之間、悲歎以外也、種々淸閑寺大納言、(○熙房)萬里小路、予等雖令申、無御覺悟之間、戒師慈尊院僧正被申旨、如此之御樣躰、中々於本堂難沙汰之間、於御居間可遂行也、先年仁和寺殿最樹院殿(後水尾院御兄○眞仁)得度之時、如此之流例有之、如何可有哉之旨也、各申言、於例者可然、若今日御落髮無之時者、彌以父帝逆鱗可爲以外也、如形被遂行哉之旨申之間、衆僧等各參會、御手足ヲ取、無理ニ令落髮了、誠先代未聞之事、不可說之事共也、及暮各退了、勅使梅溪中將、(五種、五荷)被遣、本院使堀川宰相、(○則康)新院使櫛笥中將(○隆賀)等各參、無御對面也、

〔近世見聞錄〕天和元年辛酉、此一之宮、(○靈元皇子寬清)仁和寺へ御弟子に可被遣之由、主上御内意有之處、御出家之儀、御心に不被爲叶、大納言、(○小倉實起)も無是非被存候由、然處仁和寺へ可被遣旨、勅使阿野

實伏見式部卿貞致親王男　元祿九年十二月廿五日爲御養子、養母新大納言局、

守恕法親王

實京極兵部卿文仁親王男　享保三年六月廿四日爲御養子、准母敬法門院、〇東山母后宗子

桃園院

深仁法親王

實閑院太宰帥典仁親王二男　寶曆十年八月廿八日爲御養子、准母恭禮門院、〇桃園后富子

光格天皇

承眞法親王

實有栖川中務卿織仁親王男　文化五年三月十四日爲御養子、以民部卿典侍賴子爲養母、〇[illegible]

略

〔小河一敏筆記〕岩倉具視公ノ御說ニ、御養子親王ハ、燕寢侍御ノ女官ヲ御母代ニ定メラレ、眞ノ母子ノ如ク親昵ニ音信等アリ、參內ノ時ニモ御母代ノ局ニ通リ、時々饗應ナドモアリタリト云云、

〔桂宮御自記〕靈元院御代迄ハ、御養子の事停止被仰出、皆御猶子也、然所女中之沙汰歟、御養子始る、法親王之事故、次第はかいろう可爲處、御猶子之法親王より御養子は上座云云、

〔葉黃記〕寬元四年十一月十五日庚午、櫻井宮〇覺仁被補熊野三山檢校、法親王補之、今度始之、前大僧正道覺、依入道大納言御吹擧、被蒙御約束了、今特移之間相違歟、吉田中納言書院宣〇後嵯峨進之、件書樣任裏不似先例歟、

仁安三年四月廿五日無品道惠法親王薨、（帝御叔父、鳥羽院皇子、）五月廿一日有薨奏、廢朝三箇日、可停音奏之由被仰之、不可有廢朝以後政始之旨被仰之、今日御錫紵三箇日、

嘉應元年十二月十一日二品覺性法親王薨、（帝御叔父、同院皇子、）同廿一日有薨奏廢朝三箇日、可止音奏之由被仰之、今日御錫紵、○中略

四條院

正應元年九月三日三品尊性法親王薨、（帝御伯父）十月廿二日有薨奏、廢朝三箇日、可止音奏警蹕之由被仰之、今日御錫紵即除御、

龜山院

文應元年十月廿三日無品尊守法親王薨、（帝御叔父、後嵯峨院皇子、）

伏見院

正應三年八月十八日無品忠助法親王薨、（帝御叔父、同院皇子、）同六年二月三日無品最助法親王薨、（帝御叔父、同院皇子、）永仁三年七月廿七日無品應助法親王薨、（帝御叔父、同院皇子、）

後伏見院

正安元年六月七日二品深性法親王薨、（帝御叔父、後深草院皇子、）

已上件年々、無薨奏廢朝御錫紵等事乎、

閏九月七日　大外記中原師茂

〔執次詰所本御系譜〕

靈元院

─道仁法親王

無品定惠法親王、（今上後鳥羽御伯父）建久七年四月十八日、御事、同年六月廿六日有薨奏、廢朝三箇日、可止音奏之由被宣下、同日御錫紵、

無品承仁法親王、（今上後鳥羽御叔父）同八年四月廿七日御事、同年五月四日有薨奏、廢朝三箇日、可止音奏之由被宣下、（不可有廢朝以後政始之由被仰外記）

無品仁助法親王、（今上龜山御伯父）弘長二年八月十一日御事、同月廿四日有薨奏、廢朝三箇日、可止音奏之由被宣下、同日御錫紵、

二品圓助法親王、（今上後宇多御伯父）弘安五年八月十二日御事、同年十月五日有薨奏、廢朝三箇日之由被宣下、同日御錫紵、

二品覺雲法親王、（今上後醍醐御伯父）元亨三年十月十八日御事、同月十九日有薨奏、廢朝三箇日、可止音奏之由被宣下、（不可有廢朝以後政始之由被仰外記）同日御錫紵即除御、

右例依仰注進如件

貞和二年閏九月十五日　　左大史小槻清澄

依仁和寺一品法親王御事、禁裏廢朝、御錫紵可為何事哉事、粗引勘先規候之處、御室二品守覺法親王建仁二年八月廿五日御事、聖護院無品靜惠法親王同三年三月十二日御事、兩法親王（後白河院皇子、後鳥羽院御叔父、帝（土御門）御從祖父、）御室三品道法法親王建保二年十一月廿一日御事、（後白河院皇子、後鳥羽院御叔父、帝（順德）御從祖父）御室二品道助法親王寶治二年正月十六日御事、（後鳥羽院皇子、後嵯峨院御叔父、帝（後深草）御從祖父、）御件年々廢朝御錫紵事、外記記無所見、口可被得其御意給哉、師茂誠恐謹言、

後九月四日　　師茂請文

一二等法親王者有故時、有廢朝錫紵例、

高倉院

御政事の得失にこそかゝり給ふべけれ、すべて此等の事よく〳〵御心せさせ給ふべき所也と申せし也、此封事御覽の後、仰下されし事ふたゝび三たびののち申す所そのことわりあり、されどこれ國家の大計也、よく〳〵御思惟有べしと仰下されしに、やがて今の法皇（東山）の皇子秀の宮とか申す御事、親王宣旨あるべき由を申させ給ひたりけり、

入道親王法親王叙品

〔海人藻芥〕法親王叙品之事

二品ハ御室バカリ叙之、而近代諸門跡連綿歟、一品高尾御室（後深草院皇子性仁）於僧中者始叙之、而又大覺寺（龜山院皇子寛尊親王）青蓮院（後伏見院皇子尊道親王）令望叙之云云、

〔仁和寺御傳〕大御室　性信、三條院御四御子、（○中略）永保三（癸亥）年三月十三日於禁中（六條内裏）修孔雀經法、同二十日直叙二品、（御年七十九、僧位始也、正暦元攝政兼家出家後、被蒙准三宮宣旨、准此例令叙給云云、）

法親王待遇

〔長秋記〕大治四年正月廿二日辛丑、大理云、仁和寺二品親王（○覺法）毎年任諸國掾之由所示給也、如此事如何、權大納言預別給之人可然、於巡給別給可給巡年歟、能可被尋前例、攝政聞此事云、問外記可被一定歟、又別當云、如此法親王別當、參議已上可被補歟如何、下官云、入道師明法親王別當參議師成卿也、覺行法親王別當、大納言公實卿也者有何坊哉、凡親王男女童後皆同事也、法親王何別沙汰候哉、權大納言云、尤可然者、

〔園太暦〕貞和二年八月三十日、後聞仁和寺一品御室（寛性法親王）今夜子剋御入滅、御年五十八、閏九月一日、今日評定延引之由有御敎書、一品御室事故歟、且爲驚申此事、申剋許參院、良久有出御、入見參、雜訴已下之事、經顯卿尋沙汰、法親王有事之時無停止例云々、又御百首披講事延否未定云々、依仁和寺宮事、廢朝錫紵事被尋例云々、當今（○光明）者上皇（○光嚴）御猶子也、仍今之□令隔給歟、此例淸隆後日持來、仍續之、其外不審候間尋大理卿□爲俊卿奉行被尋云々、

依仁和寺一品法親王御事、廢朝錫紵有無例事、

せ給ふ御事共はあるなれ、しかはあれど、儲君の外は、皇子皇女皆々御出家の事においては、今もなほおとろへし代のさまにかはり給はず、凡匹夫匹婦の賤しきも、子を生ては、必らず其室家あらむ事を思ふ、これ天下古今の人の情なり、また今農工商の類だにも、男には其貲財をわかち、女には其婚嫁をもとむ、ましてや士より以上、ことゞゝくみなしからざるはなし、かゝる世のならはしとなりて年久しければ、朝家には今まで申させ給ふ御事こそなからめ、此等の御事ねがはせ給ふべき所とも思はれず、たとひ又朝家には申させ給ふ御事こそなからめ、これらの御沙汰なからむ事、上につかふまつらせ給ふ所をつくされしとも申べからず、當時公家の人々、家領のほどもあるなれば、皇子立親王の事おはしまさむにも、いかほどの土地をまゐらせらるべき、皇女御下嫁の事おはしまさむにも、いかほどの國財をか費し給ふべき、この國天祖の御後のかくのみおはしまさむに、當家神祖の御末は、常盤堅盤に、榮えおはしまさむ事を望まむは、いかにやはさふらふべき、されど某が申すごとくならむには、これより後代々の皇子皇女、其數多くおはしまさむに至ては、天下の富もつがせ給はぬ所ありぬべしなど申す事も候はん歟、古より皇子皇女數十人おはしませし代々もすくなからねど、それらの御後、今に至り給ふは、いくばくもおはしまさず、天地の間には、大算數といふものゝある也と古の人は申たりき、これ等の事は、人の智力のおし量るべき所にあらず、只理の當否をこそ論じ申すべけれ、或は又皇子の御後多からむには、つひには武家の御ため、不利の事ども出來ぬべきなど申す事もあるべきにや、高倉宮の令旨によりて、諸國の源氏起りし事もあれど、これは平相國入道のひが事のみ多くして、家滅びぬべき時にあたれるなり、もし此等の事を以て誡とすべきも、高時入道滅びし時に令旨なされしは、梨本の御坊○護良親王にはおはしまさずや、さらばたとひ御出家の御身といふとも、それらの事あらじとは申すべからず、これらはたゞ武家

比丘尼御所

甚由上宣云、件内親王出家人也、有二一品字一否、雖レ然不レ改二一品字一、

〔雲上明覽 文久三年版〕比丘尼御所

大聖寺宮

大聖寺御無住 御宗旨禪

寶鏡寺宮

寶鏡寺御無住 御宗旨禪

曇華院宮

曇華院御無住 御宗旨禪

光照院宮

光照院御無住 御宗旨四宗兼學

靈鑑寺宮

靈鑑寺宗諄入道女王 御宗旨禪、光格天皇御養子、實伏見故貞敬親王御女、

圓照寺宮

圓照寺文秀入道女王 御宗旨禪、今上(孝明)御養子、伏見入道邦家親王御女、

林丘寺宮

林丘寺御無住 御宗旨禪

中宮寺宮

中宮寺尊澄成淳女王 御宗旨眞言律、今上(孝明)御養子、有栖川故一品親王御子、實伏見故貞敬親王御子、

〔折たく柴の記 中〕廿七日〇寶永六年正月に參し時に、また封事を奉る、其事の大要は、〇中略 當家の神祖、〇德川家康天下の事をしろしめされしに及びてこそ、朝家にも絕たるをも繼ぎ、廢れしをも興さ

青蓮院宮

青蓮院御無住御宗旨天台

知恩院宮

知恩院入道尊秀親王御宗旨淨土、今上(孝明)御養子、大樹公御猶子、實伏見入道邦家親王御子、無品、

勸修寺宮醍醐帝御祈願所

勸修寺御無住御宗旨眞言

梶井宮圓融院御門跡、又梨本御門跡、

梶井入道昌仁親王御宗旨天台、光格天皇御養子、實伏見故貞敬親王御子、二品、

曼殊院宮

曼殊院御無住御宗旨天台

圓滿院宮號平等院、猶櫻井

圓滿院御無住御宗旨天台

孫王爲法親王

〔釋家官班記上〕孫王親王例

山　澄覺親王後鳥羽院御孫、雅成親王息、文永十一年三月二日敍二品、大僧正時、于梨本門主、尊覺親王弟子也、孫王親王初例也、

山　承鎭親王順德院曾孫、忠成王孫、三位中將彥仁王子、文保元年敍二品、元應元、梨本門主、後宇多院御猶子、尊胤親王師匠也、

内親王入道

〔續日本後紀十九仁明〕嘉祥二年閏十二月庚午、此月四品安勅内親王入道上表還御品、許之、

〔續日本後紀二十仁明〕嘉祥三年二月辛亥、勅、四品安勅内親王、依願令入道、宜封戸及帳内資人品田收公、但无品本封帳内資人依舊行之、

〔日本紀略一醍醐〕延長三年三月□日、三品綏子内親王落髮、

〔日本紀略十三二條〕長和四年四月廿六日乙亥、一品資子内親王薨、先是落飾、　五月十日己丑、孝資子内親王

〔百一錄〕寶永三年十月三日、仙洞〇靈元御養宮、元有栖川宮之宮也、知恩院門主御儲也、今日大樹〇徳川綱吉御養子云々、先々毎節爲大樹御養子、居知恩院門主云々、

〔門跡傳坤〕勸修寺御門跡

尊信法親王

常磐井一品親王恒明息、龜山法皇孫、後醍醐帝御猶子、

寛寶法親王

伏見殿貞建親王息、延享二、十、二爲櫻町院御猶子、同三、五、八爲親王、同十、八入寺得度、

〔雲上明覽文久三年版〕御門跡方

輪王寺宮號日光宮

輪王寺准后慈性親王御宗旨天台、光格天皇御養子、實有栖川故韶仁親王御子、一品、

毘沙門堂御無住御宗旨天台、輪王寺宮御兼帶、

仁和寺宮御室御所、又御室宮、

仁和寺入道純仁親王御宗旨眞言、仁孝天皇御養子、實伏見入道親王御子、一品、

大覺寺御門跡稱嵯峨山嵯峨院、又稱嵯峨御所、嵯峨殿、

大覺寺御無住御宗旨眞言

妙法院宮號新日吉御門跡

妙法院御無住御宗旨天台

聖護院宮

聖護院雄仁入道親王御宗旨天台、光格天皇御養子、實伏見故貞敬親王御子、一品、

照高院御無住御宗旨天台、聖護院宮御兼帶、

退入、上卿召官人被仰辨可召之由、左中辨信輔朝臣參軾奉之、辨於宜仁門外召史仰之、史康有立留辨前一揖奉之、又一揖退、次予歸昇小板敷參御所方、小時退出、仁惠故院〇後嵯峨宮、撿挍宮御弟子云々、法親王事、以卿忠世朝臣奉行、今夕所相語予也、〇中略今夕不被仰勅別當、且近例如此、

建長四年八月廿八日

法親王宣下　以權大僧都尊助〇土御門皇子宣爲親王

文永十一年三月二日

法親王宣下　前大僧正澄覺〇後鳥羽皇孫宣爲親王

宮門跡

〔門跡傳乾〕日光御門跡

守敬親王

後水尾院第四皇子、寛永廿一、十十一オ親王宣下、慶安元、三、四叙二品、十五オ同九、移東叡山、

公紹法親王

有栖川韶仁親王息、光格天皇御養子、文政十、三、廿五爲親王、四、廿五入室里坊、即日得度、六、二下向關東、

〔門跡傳坤〕知恩院御門跡

良純法親王

後陽成院第八皇子、元和元、六、廿八征夷大將軍家康公爲猶子、智恩院御門跡最初、寛永十九、十二、十六廿九オ爲親王、

尊統法親王

有栖川幸仁親王息、靈元院御養子、元祿十一、八、十三智恩院相續、寶永三、十、三常憲院殿〇徳川綱吉爲猶子、同四、三、廿九爲親王、十二オ〇節略

聞海外、纔受病之後二十餘日、遂以入滅、吁嗟哀哉、

〔中右記〕天永三年十二月廿七日、○中略次召仰、頭辨來仰、以行信可爲親王者、是院○白河御子、仁和寺之宮也、○覺法出家以後有親王宣旨也、大將仰下左大辨重資也、

〔續世繼 六 志賀の御禊〕待賢門院○鳥羽后璋子、中略、うみ奉り給へる第五のみこは、本仁の親王と申し、わらはより出家し給て、仁和寺の法親王○覺性と申なるべし、きさきばらのみや、法師にならせ給ふことありがたきことゝ申せども、佛の道をおもくせさせ給、いとめでたきことなるべし、この宮いとよき人におはして、眞言よくならひ給ひ、御てもかゝせたまひ、詩つくり歌よみなどもよくし給き、

〔百練抄 十二 仲恭〕承久三年十月十三日乙丑、權僧正尊性、權少僧都道深、宜爲禪定仙院○後鳥羽親王之由、藤大納言師經被宣下之、

○按ズルニ、尊性道深ハ、並ニ後鳥羽天皇ノ同母兄守貞親王ノ子ナリ、故ニ後鳥羽天皇ノ皇子トナシ親王宣下アリシナルベシ、

〔百練抄 十五 後嵯峨〕寛元元年十月廿七日庚子、當今○後嵯峨御弟宮、令渡三條宮給御出家、公卿扈從、雲客騎馬、

〔百練抄 十六 後深草〕建長元年正月廿八日庚子、上皇○後嵯峨若宮令入圓滿院宮給、御弟子之儀也、即今夜御出家、圓助

二月十五日丁巳、法親王宣下也、

〔勘仲記〕弘安七年二月十日己丑、及晩參殿下、○藤原兼平内覽事、今夕法親王宣下之由所申入也、次伺申立親王御參事於左大將殿御方、件日有御故障之由被仰下、且入見參申了、次參内相觸女房、法親王宣下之由申入、上卿辨散狀所進入也、○中略中院中納言具房參入、經床子座前著奧座、○中略小時上卿立奧座著端座、○中略次予又參軾仰云、微音、上卿聞程也、以法印權大僧都仁惠宜令親王、上卿被氣色、次右廻

給める、

〔後二條關白記〕康和元年正月三日丙午、有行幸召仰事、○中略有頃還御、被仰賞事、仁和寺宮○覺行被下親王宣旨、

〔初例抄〕上法親王始

仁和寺御室　康和元年正月三日、仁和寺御室令蒙親王宣旨、御年二十五鳥羽殿朝覲行幸、○堀河仙院○白河御賞也、法親王初例也、此日御室○覺行參入、法興院大相國○藤原兼家出家後蒙准三宮之宣、令持院御居箱、以件例今被叙親王云々、○中略御出家以後、蒙親王宣旨初也、仁和寺御室白川院御子、

自少僧都蒙親王宣旨例

少僧都道深○後高倉皇子　金剛光院是也、承久元年月日任、具在別、

僧正後蒙親王宣旨例

僧正最雲○堀河皇子　保元三年三月一日日蝕御祈、於中堂七佛藥師法賞、蒙親王宣下、

〔古事談〕三僧行白川院御時、中御室○覺行御修法勤行間、初夜時ニ令昇給タリケルニ、此佛キト供養シ玉ヘトテ、諸人不見知之繪像一鋪ヲ被獻之、即密密有御聽聞云々、事掛其像於本尊前、ヤガテ令供養給テ、新被圖繪供養給ヘリ、常具利童子トテ、其天ノ功能、本誓目出タク令釋給ヘリ、爲事試俄有此儀云々、御感之餘、後朝被下法親王宣旨云々、法親王之始也、

〔中右記〕長治二年十一月十九日、從殿下○藤原忠實被仰云、去夜亥時許、彼仁和寺二品覺行親王、已以入滅于仁和寺新造北院、年卅一云々

法親王者、太上皇○白河御子、母前大貳經平女也、往年出家、從寛意權大僧都、深傳眞言道、其後頻關勸賞、蒙親王宣旨、并叙二品、關巡給也、出家之後親王宣旨、始於此人、可謂希代之例矣、抑親王、誠是佛日之光華、法門之棟梁也、加之言語分明、文章優妙也、云容體、云心性、誠叶大器、依之威滿天下、名

〔愚管抄七〕宮たちは入道親王とて、御室の中にも有がたかりしを、山にも二人(〇順德皇子尊覺、及皇曾孫承鎭、)ならびておはしますめり、新院(〇順德)當今(〇後堀河)又二宮三宮の御子など云て、數ならずをさなき宮々法師法師にと、師共の許へゐてがはるめり、

〔孝亮宿禰記〕慶長六年三月五日、今日親王御方(中山大納言之女、大典侍局腹也、〇良仁)仁和寺御入室、烏丸大納言、廣橋大納言、中山中納言、勸修寺宰相、上冷泉、五條、予已上七人供奉之、於仁和寺五獻有之、親王御方只有御落涙、漸院家計有御對面、夕陽人々歸家、

今迄正親町院御所、親王爲御座所、今日令出彼御殿給之時、供奉人々各落涙也、(〇又見義演准后記)

法親王宣下式

〔夕拜備急至要抄下〕法親王宣下

日次　上卿(大臣多奉行、大中納言多例、)　辨(大辨、中少辨又有例、)　勅別當(法親王或仰之、或不仰之、)　官外記　親族拜(一向無之)　仰詞(以尊

圓(後鳥羽皇子)宣令爲親王曰、建保、祖父奉行之時如此、

法親王

〔本朝世紀〕康和元年正月三日丙午、法皇(〇白河)子覺行蒙親王宣旨、法興院太政大臣(〇藤原兼家)出家之後准三宮、入道師明親王叙二品之等例也、十一日甲寅、被下親王宣旨(覺行)上卿左大臣(〇源俊房)

〔續世繼八腹々の御子〕仁和寺に覺行法親王ときこえたまひしは、白河の院のみこにおはす、御ぐしおろさせ給て、やう〳〵おとなにならせ給ほどに、いとかひ〳〵しくおはしければ、さらに親王の宣旨かぶり給とぞきこえ侍りし、おほ御むろとておはしまし〻は、三條院の御子師明親王ときこえ給し、まだちごにおはしまして、御子の御名えたまひければ、法師の〻ちも、親王のせんじかぶり給はず、その宮につけたてまつりたまひしに、御でしのみや(〇覺行)はわらはにても、親王の御名えたまはねども、親王のせんじかぶり給へり、後二條のおと〻(〇藤原師通)出家の後は、例なきよし侍りけれども、白川院、内親王といふこともあれば、法親王もなぞかなからんとて、はじめて法師ののち、親王ときこえ給しなり、かくてのちぞうちつゞき、いづくにも出家の後の親王きこえ

（御車、袖外有書之御車也）於寢殿東廊南面、新大納言（國實）候御簾、若宮（例御直衣、其色甚濃、御奴袴二藍、亀甲二倍織物色々文、女郎花單重、濃下袴、無引部裳）乘御之間如蹲居、先出東中門外、（宰相中將云、無品位、又非親王、而公卿可奉居歟如何、予云、雖不經親王、重予公卿何蹲哉、但法皇自御所被奉出立、女院有御猶子之儀、不可有式法、雖奉居不可有厭、雖覺法親王者、白河院御存生之時、公卿皆居之、崩御之後不居、覺性法親王之時公卿皆又居之、只可隨時宜、又覺快親王法印之時、三條太政大臣、同內大臣被奉居、是相國奉育之故歟、他人不居、只隨便可斟酌者、相公云、可然事也、所々參入之由、不着御、不定之體可存事歟者、）此間殿留御車、大納言候御車後、（以前近令立御榻、脱沓於地上、自裏御簾乘之、大納言前駈有二人、皆着布衣、猶可着衣冠、車遣在公卿車後、牛童遣之、車副可遣歟、）予并宰相中將於馬場殿北方乘車、（宰相中將車自中驅、頭替、車副賜當色、牛童同薄色上下、雨皮持笠持裝束同新調、雜色八人皆垂裾、）藏人右少辨親宗也、（右衛門權佐也、着衣冠、）騎馬候御車後、右近將監秦兼賴同候御車後、次公卿車也、出南殿西面北樓門北門（○門恐衍）行、更入北殿西面南方樓門、渡御棧敷前給、（御棧敷在西門腋、仍出御此門者、御見物之門難調行列之故、遙令廻馬場方給也、）出北方西面樓門、經河原（瀨々構橋）京極大路北行、三條大路東行、（此間所々有見物車四五十兩許歟、）廻座主房北東、入南門給、大納言於門外下御車、（先拝御下簾、卷上御、立榻上、頤下御簾、非下簾、於上着沓、）御車牽中門廊、大納言被候御簾、此間予相公入門、下御之間、即昇中門廊、若宮經透渡殿、令入寢殿南庇東向障子給、座主（着香染裝束）兼母屋西方東向被座、其內儀不見及、南庇御簾被垂也、公卿著寢殿東庇座、殿上人等在中門南廊座、源大納言（定房）被座北面簾中、依座主親昵內々被來訪歟、供御膳、陪膳權少僧都實修云々、頃之依右少辨命、大納言以下移著寢殿東北廊、（兼居供菓子八種、飯、油物、製子、柿、菱、野老等、根糖、居御方、中居菓子、不似常躰歟、依次飯次菜、二高坏、今四本也、人々着座之後、卷御簾垂之也、）一獻居冷汁、下箸、二獻居熱汁、三獻居粥漬、伏箸、復本座、役人僧也、（此所非御前、強非儀事歟、今案、座主若以大納言候御前之間、不參其方之由可被示歟、公卿頒饌之儀、於仁和寺御室如此云々、彼者法皇御息也、爲親王、是爲凡人、雖准歟、聊可有會釋之詞歟、）被獻御贈物、（智證大師御手跡、納銀筥、裏紫地錦、以青糸結之、付銀松枝、）源大納言被取之云々、（先年覲院道人爲此座主弟子、實成擬綱下云云、仍座主被奉送、仍被改彼儀、以俗被贈云々、）右少辨取之賜御共廳官、次座主令牽御車於寢殿南階間、大納言候御車簾、此間殿上人騎馬、予相公下立中門外、于時小雨、上下擁笠、但御車不覆雨皮、於河原雨止、經本路還給、今度不廻馬場、直令入七條殿西面南門給、入中門、牽御車、（出御所也）予相公不進出南庭、下御之後昇中門廊、此後上下退出、

〔百練抄 八 高倉〕安元二年十月廿三日、上皇（○後白河）若宮（御室御弟子）入內、是依爲主上御猶子也、

のせんじのみこおはしますその山科の宮に、(○中略)まうで給ひて、(○下略)

○按ズルニ、せんじのみこトハ、仁明天皇ノ皇子人康親王ナリ、

〔日本紀略醍醐一〕延喜二十年閏六月九日、一品式部卿是忠親王出家、號南院親王、

〔日本紀略後一條十三〕寛仁三年三月某日、師明親王(○性信)於仁和寺出家、(于時童稚也)

〔釋家官班記上〕入道親王

仁 性信 (仁和寺大御室、寛弘八年十月五日立親王、七歳、俗名師明、寛仁二年八月十九日出家、十四、大僧正濟信爲師、)

仁 覺性 (紫金臺寺御室、大治四年十月廿四日爲親王、一名本仁、保延六年六月廿二日出家、十二、)

山 尊快 (後鳥羽院御子、山、梨木承圓僧正弟子、承久二年八月二日爲親王、俗名守成、建保二年十二月十日出家、十一歳、)

山 道覺 (後鳥羽院御子、山、青蓮院、號西山宮、承元二年九月廿日爲親王、俗名朝仁、建保四年六月廿日出家、十三、)

山 尊圓 (伏見院御子、青蓮院、延慶三年六月廿八日爲親王、十三、俗名尊彦、應長元年六月廿六日出家、十四、)

寺 尊悟 (伏見院御子、圓滿院、延慶三年六月廿八日爲親王、十二、俗名富永、正和二年三月十八日出家、十三、)

[illegible] 性[illegible] (後宇多院御子、大覺寺、俗名[illegible]、)

法仁 (後醍醐院御子、法守親王弟子、)

山 尊道 (後伏見院御子、曆應四年七月廿四日爲親王、十八、俗名[illegible]、同年同月廿九日出家、)

已上山門園城具載人數、於仁和寺者、覺性以後皆入道親王也、

〔初例抄上〕入道親王始

大御室性信(○三條皇子、師明)

〔山槐記〕安元元年八月十六日、今日法皇(○後白河)若宮(承仁)(建春門院御猶子、實遊女一臈腹、號丹波局、御年七歳、藏人右少辨親宗奉養之、)爲天台座主權僧正明雲(故大納言顯通子)弟子、始令渡彼房給、予爲扈從參之、(先日內々自女院有此仰、申可參之由、仍其後親宗送御教書、)巳刻參院御所七條殿、(着直衣、乘侍從兼口車、頗顯之故也、差網車副一人遣之、着當色、牛童同出狩衣、上下、雨皮持、退紅、笠持等當色新調、雜色十一人、但御棧敷前渡、七八人皆垂括、)午刻牽御車(院庇

〔文德實錄三〕仁壽元年二月丙寅、无品常康親王落髮爲僧、親王者、先皇〇仁明第七子也、母紀氏、少而沉敏、風情可察、先皇諸子之中、特所鍾愛、親王追慕先皇、悲哽無已、遂歸佛理、求冥救也、

〔三代實錄二清和〕貞觀元年五月七日壬戌、四品守彈正尹兼行常陸太守人康親王出家入道、上表曰、臣人康言、身居雲漢之末、才無涓流之效、空備簪纓、徒縈疾病、〇中略臣欲遂頑怯於聖日、不慮幽人長往之蹤、將盡筋骨於明時、豈歸眞如寂滅之道、然而蒙昧之身、荷榮顯、鬼必瞰其滿盈、尊崇之地、處虛羸、天宜奪其年算、斯乃臣所以一寒一暑、膚腠作搆患之機、或晦或明、心肺皆養痾之府者矣、臣今年二月、熱發甚篤、醫藥無所施其方、針熨遂不通其術、即知魂遊岱岳、九原多一死之悲、夢上鈞天、七日無再生之効、綿綴之間、纔發此念、出家功德、免三途苦、仍先請二師、已受十戒、形猶禿丁、服是僧祇、豈計非更生之藥、起朽質於玄廬、無返魂之香、招飛精於鬼錄、此乃如來護念、菩薩加持之力矣、已得蒙其冥助、不得背其深期、伏望被陛下之殊私、爲梵門之禪侶、將使金魚脫佩、長襯紫服之粧、銀驄伏櫪、永罷繡衣之職、陛下若遇臣厚者、思拾獲其保全、若矜臣優者、宜奬收其封職、不勝荒迷之至、謹拜表以聞、詔、人康親王辭其官爵、歸於釋侶、宜准國康親王、收其品封、但本封舊、幷帳內資人、准無品例充之、人康親王者、仁明天皇之第四子也、承和十五年正月敍四品、拜上總太守、仁壽二年遷彈正尹、齊衡四年兼常陸太守、親王自少年時、有歸大乘道之意、今謝病遂本懷焉、

〔續日本後紀四仁明〕承和二年正月壬子、平城舊宮處水陸地三十餘町、永賜高岳親王、親王者、天推國高彥天皇〇平城第三子也、大同年中、末少登儲貳、〇中略遂遭時變失位、落髮披緇位于東寺、

〔三代實錄六清和〕貞觀四年十二月廿五日己未、大藏大輔正五位下在原朝臣善淵奏言、〇中略竊見禪師〇〇親王〇高丘昔搆堂舍之地、今來荒廢基趾猶存、〇中略

〔伊勢物語下〕昔たかきこと申女御おはしましけり、うせ給ひて七々日の御わざ安祥寺にてしけり、右大將藤原のつねゆきといふ人いまそかりけり、其御わざにまうで給ひて、かへさに山しな

古事類苑

帝王部二十五

皇親下

入道親王法親王

〔官職難儀〕法親王は法中にてあるなり、それに差別あり、御出家以前、先俗名にて親王宣下ありて、さて御出家あるをば、入道親王と申て規摸とせらるゝ也、御出家已後宣下あるをば、法親王と申、さりながら入道親王をもその御義勢にあり、さりながらおもてむき法親王とも申事は勿論なり、

皇子出家

〔元亨釋書十五方應〕釋開成、光仁帝子、桓武之兄也、幼敏穎、而志佛乘、上甚鍾愛、天平神護元年正月一日潜出宮入勝尾山、疊石爲塔、禪宴其側、二月十五日仲算二師經行山中、中略卽日就二師剃落受戒、中略天應元年十月四日手執香爐、向西低頭而寂、壽五十八、

〔續日本後紀十九仁明〕嘉祥二年十二月丁亥、三品上總太守基貞親王上表曰、臣基貞言、臣近披肝膽遠叫彤闈、九重隔深、未蒙矜許、臣聞人心所欲、上天或從之以仁、物性攸偏、明主不強之以化、故唐堯道洽、皮冠未妨箕嶺之遊、漢祖風高、羊裘猶全富春之槩、臣幼有厭俗之志、緣叨聖主之恩、矯性勵心、強齒簪紱、欲盡忠勤而獻馘、猶苦稟生之不堪、至今已沈痼疾、不復全人、卽知天授之攸鍾、遂難以人事矯激、伏惟聖主陛下、仁超飛帝、德駕輪王、旣能鑒因果而不疑、冀賜感宿業之攸遠、又臣幸以頑質、厚被聖恩、知在此身、終難報答、但望出家功德、念佛勝利、雖戒行不全、而或補萬一、若更褁頭髮再塵印章、則生爲失志之具臣、死爲含恨之愚鬼、不任懇切之至、重亦拜表以聞、許之、

古事類苑

帝王部二十五

皇親下 皇親妃〔附入〕

廢內親王

被聞食候旨、可申渡于有栖川宮殿下垂命、則被申渡候旨武傳被示、少選御受被示候、此由以大御乳人申入候、

〔實麗卿記〕萬延元年十月十八日、巳刻參內、如日來、今日若狹侍從、橫瀨侍從等、參內有御對面、和宮御緣組之事、御許容被仰出、○中略右大將以一紙被示、續左、

和宮御緣組之事、自關東再三被懇願候に付、正德年中八十宮御約定、井東福門院○後水尾后德川秀忠女御入內之御例も被爲在候儀、且深思食も被爲在候間、御許容被仰出候事、

酉下刻退出、直參和宮申談有子細、又爲御使女房越後大御乳人代云云御緣組御許容之事、被仰進、○下略

○按ズルニ、和宮ハモト有栖川家ニ婚儀治定アリシヲ、後改メテ德川家茂ニ降嫁セラレシナリ、

〔續日本紀稱德二十九〕神護景雲三年五月壬辰、詔曰、不破內親王者、先朝有勅削親王名、而積惡不止、重爲不敬、論其所犯、罪合八虐、但緣有所思、特宥其罪、仍賜厨眞人厨女姓名、莫令在京中、

〔續日本紀光仁三十二〕寶龜三年十二月戊午、復厨眞人厨女屬籍、

〔類聚國史刑法八十七〕寶龜三年十月壬子、中務大輔從五位上兼少納言信濃守菅生王、坐姧小家內親王除名、內親王削屬籍、

後守正喬、御入輿の事總督を仰付られ、來春納采の御使をも命せらる、　十六日、こたび御定婚ありし法皇の姫宮を、八十の宮御方と稱し奉るべき旨仰出さる、

〔有章院殿御實紀十四〕正德六年〔〇享保元年〕二月五日、阿部豐後守正喬、納采の御使として發足す、其御贈物は、八十宮の御方に紅白練絹百端、色絹百匹、緞子百卷、五種五荷、主上〔〇中御門〕へ守次の御大刀、金三十枚、三種二荷、法皇へ宗恒の御大刀、金五十枚、三種二荷、女院に銀二百枚、二種一荷、　閏二月廿一日、阿部豐後守正喬、京より歸り謁し、茶苧島大刀馬料の金を獻る、　廿二日、御納采を賀し群臣出仕して宰臣に謁す、萬石以上の人々、宿老御側用人少老の宅にまかりて賀す、　廿三日、さのふの事により、萬石以下の人々諸老臣に詣賀す、致仕臥病、幷に幼稚の輩使者を出し、在封の人々より使札を獻す、

〔有章院殿御實紀十五〕正德六年〔〇享保元年〕三月七日、勅使德大寺右大將公全卿、庭田前大納言重條卿、法皇使東園前中納言基雅卿、引見あり、〔〇中略〕御納采の御祝とて、大内より御大刀一振、馬料金三枚、三種二荷、院より御大刀一振、馬料の金五枚、三種二荷、女院より一枚、〔〇下略〕

〔執次詰所本御系譜〕

今上〔〇仁孝〕

皇女

弘化三年〔午〕年閏五月十日降誕　同月十七日號和宮　嘉永四年七月十二日有栖川帥宮御緣組御治定

〔言成卿記〕文久元年四月十九日、今日和宮御諱、親子内親王宣下、

〔議奏言渡〕萬延元年八月廿六日、從殿下〔〇九條尚忠〕以御世話卿和宮江被申上相濟、御緣組御延引御理

爲近衞關白左大臣尙嗣公北政所、寛永十三年十一月廿三日嫁于近衞殿、同十四年十二月八日內親王宣下、○節略

〔百一錄〕元祿十五年八月廿六日、近衞關白○基熙御臺級宮○常子御方薨御、六十四歲、號無上法院、後水尾院姬君、廢朝三箇日、市井同斷禁之、

〔百一錄〕貞享三年七月廿三日、後西院姬宮賢宮○益子爲內親王、上卿今出川大納言、八百宮御妹也、廿五日、今夜九條大納言殿○輔實御簾入于賢宮御方、中筋通故准后新廣儀門院舊御所云々、廿七日、賢宮移徙于九條殿新造之御殿、從二條辻固勤之、前驅殿上人、扈從公卿三輩、綾小路、淸閑寺相公、伏原三品、

〔執次詰所本御系譜〕

靈元院

吉子內親王

正德四年八月廿二日生、號八十宮、同五年八月廿七日爲征夷大將軍家繼公○德川御臺所、同六年二月十八日有結納之儀、東使阿部豐後守正喬、同四月三十日家繼公薨去、依之在住皇都、享保十一年十一月廿八日內親王宣下、○節略

〔基熙公記〕正德五年五月廿三日戊午、前攝政被來、今度於關東執權中、兩傳奏へ申旨有之、大樹御嫁緣之事也、申請院姬宮度云云、子細難記之、只歎息而已、兩傳奏今日可奏院云云、委事前攝政可有注記、嗚呼々々、遣書狀東武有要用故也、依上件事自前攝政被遣飛脚了、

〔有章院殿御實紀〕十三正德五年九月廿九日、群臣總出仕あり、法皇○靈元の姬宮御定婚あり、御入輿あるべきよし仰出さる、十月三日、御定婚により、日光山御宮に代參使を立らる、五日、阿部豐

皇女降嫁臣下

〔日本紀略朱雀二〕元慶元年十一月五日、四品勤子內親王薨、先帝〈醍醐〉第二皇女、中納言師輔室、

〔一代要記醍醐四〕韶子內親王帝六女、延喜廿年二月十七日爲親王、始配大納言源清蔭、後配河內守橘惟風、

〔皇胤紹運錄〕

小一條院

　儇子內親王配權中納言信家、三條院爲子、

〔勘仲記〕弘安七年八月十四日己未、抑今夕內大臣殿〇藤原家基令迎新院山〇龜皇女、十六歲日來與按察二品御同宿云々、俄有此儀、頗希代之例也、上皇密々御幸二品第、御出立事有叡覽云云、御車自內府被進之、侍二人、殿上人一人云々、密々儀云々、忠仁公嘉例云々、頗髣髴歟、今度時宜定有子細歟、

〔執次詰所本御系譜〕

後陽成院

　清子內親王

　　爲鷹司關白信尚公北政所、慶長六年十二月九日內親王宣下

　貞子內親王

　　爲二條太閤康道公北政所、〇略

〔執次詰所本御系譜〕

後水尾院

　昭子內親王

事の障子のもとにてぞたてまつりける、みかどは日かずを月なみのかはりにせさせ給なれば、三日御ぶくとぞきこえける、

〔百一錄〕延寶二年九月十二日、夜陰永井伊賀守、同大學上著、女一宮（○靈元皇女）爲吳服料、黃金百兩年々可有進呈之由申來、本院（○明正）御所へ金千兩、是者當年耳、

〔百一錄〕延寶九年八月廿三日、新院姬宮（○後西院皇女）様へ御合力米貳百石

内親王家令

〔令義解一家令職員〕親王、（內親王准此、但文學不在此例、）

○按ズルニ、家令以下ノ職員ハ、上文親王家令ノ條ニ揭ケタリ、故ニ今又此ニ贅セズ、

内親王品田

〔類聚國史百六十五祥瑞〕延曆十六年六月辛酉、三品朝原內親王獻白雀、御監及家司等、賜物有差、

〔延喜式二十二民部〕凡授品田者、親王內親王其數一同、

内親王食封

〔日本書紀二十九天武〕五年八月丁酉、親王以下小錦以上大夫、及皇女姬王內命婦等、給食封各有差、

〔續日本紀三文武〕慶雲元年正月壬寅、詔、御名部內親王、（○中略）益封各一百戶、

〔續日本紀六元明〕和銅七年正月己卯、益二品氷高內親王、（○刊本脫內親二字、據本書下文及日本紀略補）食封一千戶、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年正月甲午、三品泉內親王、四品水主內親王、長谷部內親王、益封各一百戶、

猶子

〔日本紀略十一一條〕寬弘四年正月戊午、勅、二品脩子內親王叙一品、年官年爵准三宮、本封外加千戶、

〔御湯殿の上の日記〕天文廿二年正月廿八日、ひめ宮（○後奈良皇女聖秀尼王）の御方、ぶけ（○足利義晴）の御ゆうじになし參らせらるゝとて、ぶけへ十から十か、みだいへ五から五か參らせらるゝ、これは廿五日の御事なり、けふぜんげ院ぜのへさだめ參らせられて、御てらより五から五か參る、ひめ宮の御かたならしまして、ほうくわうわんまゐられて、御さか月まゐる、めでたし、十二月十一日、ひめ宮の御かた、ぜんげ院ぜのへ御入室にて、すけ殿、ながはし御まゐり、てんきよく、すが〳〵とくわん御なりて、めでたし、御てらより十から十か參る、御じゆかいあり、

家辭而不受、

〔三代實錄清和六〕貞觀四年二月廿五日甲子、无品有子內親王薨、淳和太后奏請不被任葬儀司、詞旨懇切、因而不任、輟朝三日、內親王者、淳和太上天皇之女也、母贈皇后〔諱高志〕桓武天皇之女、生一男三女焉、

〔類聚符宣抄四〕被右大臣宣偁、紀內親王〔〇桓武皇女〕薨之由今日奏聞既訖、宜仰辨官始自今日、令神祇官獻御贖物者、

仁和二年六月廿九日　大外記大藏善行奉

即日仰告當直左少史凡春宗訖

〔類聚符宣抄四〕中納言兼右近衛大將藤原朝臣師尹宣、奉勅一品康子內親王〔〇醍醐皇女〕今月六日薨、須依例任葬官、而依喪家辭申、停任件官者、

天曆十一年〔〇天德元年〕六月十日　少外記國公興奉

〔日本紀略村上四〕天德元年六月六日辛酉、一品康子內親王薨、〔醍醐第十四皇女〕給賻物、件薨胞衣不下之故也、於右大臣〔〇藤原師輔〕坊城第薨、　十日乙丑、御躰御卜如例行之、天皇不服錫紵、以前有御卜奏、於禁中儀於陣外奏之、此間故康子內親王家別當掃部頭藤原在滋、於待賢門付外記申云、今日親王葬送也、葬官不可任之由有遺誡者歟、有薨奏事、今日以後三箇日、不可有音樂之由仰內豎畢、今夕件內親王、葬西八條東河島邊、

〔續世繼六志賀の御魂〕女宮は一品宮とておはしましゝは、禧子の內親王〔〇鳥羽皇女〕とて、賀茂のいつきにたち給へりし、御なやみにてほどなくいで給ひにき、長承二年十月十一日御とし十二にてかくれさせ給にき、〇中略廿七日薨奏とてこのよし內裏に奏すれば、三日は廢朝とて御殿のみすもおろされ、なに事もこゑたてゝそうすることなど侍らざりけり、みかど〔〇崇德〕は御いもうとにおはしませば御ぶくたてまつりなどしけり、もんもなき御かふり、なはえいなどきこえて、年中行

○按ズルニ、吉備內親王ハ、文武天皇ノ皇妹ニシテ、長屋王ノ妃ナリ、其ノ男女王ハ、內親王ノ子ナルヲ以テ、夫王ノ世系ニ關セズ、特ニ皇孫ノ列ニ入レラレシナリ、

〔續日本紀一文武〕三年九月丙子、新田部皇女薨、勅王臣百官人等會葬、天智天皇之皇女也、

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜九年五月癸酉、三品坂合部內親王薨、遣從四位下壹志濃王等監護喪事、所須並官給之、天皇爲之廢朝三日、內親王天宗高紹天皇〇光仁異母姉也、

〔續日本紀三十六光仁〕天應元年二月丙午、三品能登內親王薨、遣右大辨正四位下大伴宿禰家持、刑部卿從四位下石川朝臣豐人等監護喪事、所須官給、遣參議左大辨正四位下大伴宿禰伯麻呂就第宣詔曰、天皇大命良麻止能登內親王爾告與止詔大命乎宣、此月頃間身勞須止聞食氏、伊都之可病止氏參入岐〇岐恐氏訛朕心毛慰米麻佐牟止、今日加有牟明日加有牟止所念食都々待比賜間爾、安加良米佐須如事久、於與豆禮加毛年毛高久成多流朕乎置氏罷麻之奴止聞食氏奈毛驚賜比悔備賜比〇此下恐脫二字大坐須、如此在牟止知末世婆心置氏毛談比賜比相見氏末之物乎、悔加毛哀加毛云部牟須〇部上恐脫二字不知、然毛之在加毛、朕波汝乃志乎波暫久乃間毛忘得末之自美奈毛悲備賜比之乃比賜比大御泣哭川川大坐麻須、然毛治賜牟止所念之位止奈毛、一品贈賜不、子等乎婆二世王爾上賜比治賜不、勞久奈思麻曾、之罷麻牟佐道波、平幸久都々牟事無久、宇志呂毛輕久安久通良止世告與止詔天皇大命乎宣、內親王天皇之女也、適正五位下市原王、生五百井女王、五百枝王、薨時四十九、

○按ズルニ、五百井女王、五百枝王等ハ、內親王ノ子タルヲ以テ、夫王ノ世系ニ關セズ、二世王トセラレシナリ、

〔三代實錄四清和〕貞觀二年閏十月廿日丙寅、無品同子內親王薨、帝不視事三日、內親王者淳和太上天皇之皇女也、母池子丹墀氏、從五位上門成之女也、　廿五日辛未、是日任同子內親王裝束山作等司、從四位下行越中權守房世王爲裝束司長官、治部少輔從五位下安倍朝臣房上爲次官、判官二人、主典二人、散位從五位下廣山王爲山作司長官、從五位下藤原朝臣大野爲次官、判官二人、主典二人、喪

〔言成卿記〕文久元年四月十九日、今日和宮御諱親子、内親王宣下陣儀、巳刻、上卿内大臣、(齊敬)中山大納言、(忠能、勅別當)三條西中納言、(季知)右宰相中將、(實麗)家司敬直朝臣、(中務大輔)實梁(侍從)職事長季、(小倉大夫)敎久(織部大夫)云云、

内親王叙品

〔新儀式五(臨時下)〕内親王初謁事

内親王年七八歲、有初謁事、先定吉日時、(用夜時)當日晩景、垂東廂御簾、御帳中立倚子、撤晝御座、時剋皇上著御御座、親王進出當御座、於東廂肅拜退、更召給祿、(白褂一重、延長五年、康子親王之時、件祿給御匣也、中宮職給男女房祿、)又親王乳母給祿、(各襖子一領)或有給其什物等之事、

〔儀式八〕正月八日叙内親王以下儀

皇帝未御紫宸殿之前、掃部寮立漆案於内廂、(當御座)皇帝既御、内侍置位記筥於大臣之座前、(掃部寮預立案)即臨東檻喚大臣、大臣稱唯、升殿就座、大臣喚内豎二聲、内豎稱唯、入立東庭、大臣宣喚中務省、内豎稱唯出喚、輔以上(若無多之者丞錄)稱唯、入自日花門、立東庭、大臣宣參來、輔唯、卿先升受三位以上位筥、置於案上退下、次輔昇進置五位以上筥於同案退下、次大臣退下、内侍奉可被叙者列南廂、東面北上、異位重行、卿先昇叙之退、(出宣仁門、輔亦同、)次輔昇叙之退下、其被叙者、隨叙北面東上立、肅拜訖引還、掃部寮昇却案、

〔延喜式十二(中務)〕凡叙内親王以下品位者、卿叙品及三位已上、輔叙五位已上、其授宮人位畢、下知縫殿寮、

〔續日本紀三十六(光仁)〕寶龜十一年十一月丁亥、授四品彌努摩内親王三品、

〔日本後紀二十二(桓武)〕延曆廿三年正月辛巳、曲宴某内親王之房、授親王三品、(淳和贈皇后也)〇高志

〔扶桑略記二十九(後三條)〕延久元年六月十九日甲寅、第一内親王聰子叙一品、〇中略俊子内親王叙二品、佳子篤子兩内親王各叙三品、

内親王待遇

〔令義解一(後宮職員)〕凡内親王、女王、及内命婦、朝參行立次第者、各從本位、

〔續日本紀六(元明)〕靈龜元年二月丁丑、勅、以三品吉備内親王男女皆入皇孫之例焉、

難歟、如此事、被問太政大臣被用被定申趣可宜歟、　廿九日庚戌、頭光頼朝臣來曰、内親王改壽子爲姝子〇鳥羽皇女者、示可書下之由、即書檀紙授之、

〔兵範記〕仁安三年八月廿七日丙辰、〇中略

太政官符中務省

　惇子内親王

右内親王所定如件、省宜承知依件行之、符到奉行、

正四位下行權右中辨平朝臣　　左大史正六位上兼皇太后宮少屬中原朝臣

　仁安三年八月廿七日

〔百練抄四十四〕貞永元年十一月廿四日庚午、當今〇四條同胞妹親王宣旨也、御名字暐子、〇一代要記暐子ニ作ル式部大輔爲長卿擇申、

〔平戸記〕延應二年〇仁治元年四月廿一日、今夜兩姫宮被下親王宣旨、大府卿勘申兩御名字、注載一紙以消息付頭辨云々、白河姫宮〇後高倉院姫宮也、先年御出家了、御名能子持明院姫宮〇今上姉也、四條異母姉御名謄子〇百練抄暐子ニ作ル之由被定仰、不被問人々、只今申合入道殿給云云、

〔百練抄四十四〕仁治元年四月廿一日乙卯、親王宣旨、暐子、内親王〇後堀川院御女能子内親王、〇後高倉院御子

〔後深心院關白記〕貞治三年正月五日、裏書、傳聞叙位以前有立親王宣下、上卿藤中納言、今上〇後光嚴女一宮、御名治子、今夜即令預別給給云々、

〔實麗卿記〕文久元年四月十九日丁丑、内親王〇仁孝皇女親子宣下也、〇中略先内大臣齊入敷政門著陣、〇中略職事長順朝臣來下御名字、内府被結申、長順朝臣仰仰詞退入、〇中略次内府仰官人召辨、權右中辨博房著軾、内府賜御名字、博房結申、内府被仰仰詞、博房退仰史、次長順朝臣著軾、仰以權大納言藤原朝臣可爲勅別當之由退入、

〔類聚符宣抄 四〕太政官符、中務式部民部大藏宮內等省、

昌子內親王歳壹

右太上天皇〇朱雀親王所定如件、省宜承知、依例行之、符到奉行、

右中辨　　左大史

天曆四年八月十日

〔榮花物語 月宴 一〕朱雀院は御子たちおはしまさゞり、たゞ王女御〇熙子ときこえける御はらに、えもいはずうつくしきをんなみこ〇昌子一所ぞおはしましける、はゝにようごも御子みつにてうせ給にしかば、みかど〇朱雀われひとゝころ、こゝろぐるしき物にやしなひたてまつり給ける、いかできさきにすゑたてまつらんとおぼしけれど、れいなきことにてくちをしくてぞすぐさせ給ける、昌子內しんわうとぞきこえさせける、

〔本朝世紀〕治曆四年八月十四日、〇中略又內大臣於仗座被下女親王四人宣旨、(聰子、俊子、佳子、篤子、)左少辨正家奉之、

〔台記〕久壽元年八月十八日己亥、饗儀了參內、〇中略更聞光賴朝臣來曰、只今新大納言參入、可用壽字之由所申也、余答曰、壽者衞宣公之子、遇殺者名也、(見桓十六年左傳)非無其忌、如何、光賴退告大納言、大納言曰、夜及深更不能奏鳥羽、勘例統子內親王宣旨後改名、依彼例今夜用壽字、後日改名何事之有乎、余即著陣、光賴朝臣下親王名、余結申、光賴曰、可爲內親王、余稱唯卷之、召左大辨下之、大辨退下、次光賴來、仰以侍從藤原朝臣(成通)爲內親王別當之由、即仰左大辨、(不召立)又示成通卿、次成通公敎重通公能等卿進射場奏慶、此間余參鳥羽(北殿)奏慶、土佐守季行朝臣(別當)傳奏、是大將慶也、此間曉鐘頻報、次昇堂、家司職事申慶了、余退出、(東三條)大將饗三獻間、新大納言奏院宣、送親王名字勘文、曰、依閤下定中本勘申、依壽諱不被用、依仰重擇申也、見作勘文、載姝擇好三字、申曰、禮儀中間不能勘文書、但姝擇無殊

〔皇胤紹運錄〕良純法親王

慶長十九年十二月十六日爲親王、元和元年六月爲東照宮〇德川家康御猶子、同五年九月十七日入寺得度、十六寛永廿年十一月十一日遷於甲州天目山、四十萬治二年六月廿二日歸洛、住泉涌寺中新善光寺、〇五十六中略明和五年八月當百年忌復本位、

〇按ズルニ、十三朝紀聞ニヨルニ、是歲詔罷知恩院法親王良純、放之于天目山、近婦女茹葷醒故トアリ、

〇

皇女初見

〔日本書紀 七景行〕四年二月、喚八坂入媛爲妃、生七男六女、〇中略第六曰渟熨斗皇女、第七曰渟名城皇女、第八曰五百城入姬皇女、第九曰麛依姬皇女、第十二曰高城入姬皇女、第十三曰弟姬皇女、

內親王稱謂

〔運步色葉集 二那〕內親王 皇女、帝之姊妹伯母也、

〔日本書紀 三十持統〕五年正月癸酉朔、賜親王、諸臣、內親王(ヒメミコ)、女王、內命婦等位、

〔續日本紀 二文武〕大寶元年二月己未、遣泉內親王侍於伊勢齋宮、十二月乙丑、大伯內親王薨、天武天皇之皇女也、

〇按ズルニ、是レ內親王ヲ以テ名ノ下ニ連稱スル始メナリ、

內親王宣下

〔續日本紀 二十二淳仁〕天平寶字三年六月庚戌、帝御內安殿、喚諸司主典已上詔曰、〇中略兄弟姉妹悉稱親王止宣天皇御命衆聞食宣、

〔續日本紀 三十一光仁〕寶龜元年十月己丑朔、即天皇位於大極殿、十一月甲子、詔曰、〇中略兄弟姉妹諸王子等悉作親王氏冠位上給治給、〇中略酒人內親王三品、從四位下衣縫女王、難波女王、坂合部女王、能登女王、美努摩女王、並四品、

〇按ズルニ、從四位下衣縫女王以下、並ニ四品ニ叙ストハ、即チ內親王ニ陞セシナリ、

廢親王

〔皇胤紹運錄〕

順德院―忠成王
　　　　彥成王

〔季連宿禰記〕元祿十六年四月三日戊寅、傳聞入江殿(比丘尼、後西院皇女、)入滅、(去月廿七日歟、御閉眼之由風聞、密歟、)今夜奏聞云云、廢朝無之、依無親王宣下之儀歟、洛中自今夜三ケ日止音曲云云、

〔續日本紀〕(二十五淳仁)天平寶字八年十月壬申、(○中略)又詔曰、船親王波、(○中略)又仲麻呂(何)家物計(夫流)書中(爾)仲麻呂(等)通(家)謀(乃)文有、是以親王(乃)名(波)下(氐)、諸王(等)成(氐)、隱岐國(爾)流賜(布)、又池田親王波、此夏馬多集(天)事謀(止)所聞(支)、(○中略)是以親王(乃)名(波)下賜(天)、諸王(等志)土佐國(爾)流賜(布)等詔大命(乎)聞食(止)宣、

〔日本紀略〕(平城)大同二年十月辛巳、蔭子藤原宗成、勸中務卿三品伊豫親王潜謀不軌、十一月乙酉、徙親王幷母夫人藤原吉子於川原寺、幽之一室、不通飮食、乙未、親王母子仰藥而死、時人哀之、

〔日本紀略〕(嵯峨)弘仁十年三月己亥、詔、朕有所思、宜復故皇子伊豫、夫人藤吉子等本位號、

〔續日本後紀〕(八仁明)承和六年九月癸未、中使就故贈二品伊豫親王墓詔曰、(○中略)宜贈榮班以賁幽宅、可贈一品、

○按ズルニ、此伊豫親王ハ、京都上京ナル上御靈神社祭神八柱ノ內ニアリ、御靈會ヲ行フ事ハ、貞觀五年ヨリ興レリ、

〔德川禁令考〕(一)紫宸殿御條目

一親王宮御不行跡之節者、被任先例可令遠流事、

寛保二壬戌年(○月日欠)

號二八條一、豐臣關白秀吉公猶子、童名古佐麻呂、

〔皇胤紹運錄〕

後陽成院

　良純法親王

慶長九年三月廿九日誕生、稱二八宮一、同十九年十二月十六日爲二親王一、元和元年六月爲二東照宮〇徳川家康御猶子一、

皇子皇女不爲親王

〔源平盛衰記十三〕高倉宮廻宣附源氏汰事

一院〇後白河第二ノ御子以仁王ト申ハ、〇中略三條高倉ニ御坐ケレバ、高倉宮トゾ申ケル、〇中略既ニ三十ニ成セ給ヌレドモ、親王ノ宣旨ヲダニモ不レ被レ下シテ、沈テゾ御坐ケル、御手跡モ嚴ク、御才覺モ優ニ御坐ケリ、御位ニ卽セ給タラバ、末代ノ賢王トモ申ツベシナド人々申ケレドモ、女院〇後白河后建春門院德子ニハ繼子ニテ渡ラセ給ケレバ被二打籠一ツヽ、〇中略等閑ニ年月ヲ過サセ給ケリ、

〔皇胤紹運錄〕

土御門院

　秀子

　春子

　知子

　信子

　是子

〔近代帝王系圖〕

後光明院

靈元院

後水尾院皇子、爲後光明院御猶子、承應三年五月廿五日降誕、號高貴宮、明暦四年正月廿八日立親王、叙二品、五歳、節略

○按ズルニ、當代ノ天皇ニ、未ダ皇后女御等ノ入内ナキ時、又ハ入内アリトモ未ダ皇子ノオハセザル間ハ、他ノ皇子ヲ猶子養子トセサセ給ハザル例ニテ、此時後西院天皇ニハ未ダ皇子オハセザリシユヱ、靈元天皇ヲ先帝卽チ後光明天皇ノ御猶子トセサセ給ヒシナリ、

皇子爲人臣養子

〔執次詰所本御系譜〕

後陽成院

藤原信尋

爲近衞三藐院關白准三后信尹公養子、任關白左大臣、

藤原昭良

爲一條自淨心院前關白左大臣内基公養子、任關白左大臣、

〔執次詰所本御系圖〕

陽光院

智仁親王

猶子養子

〔本朝世紀〕寬和二年四月廿八日、四品盛明親王出家入道、醍醐天皇第十五皇子也、春秋五十九云々、○中略件入道親王、初賜朝臣姓、後更爲親王也、

〔日本紀略一醍醐〕延喜廿一年十二月十七日、以第十皇子雅明爲親王、實者法皇○宇多御出家之後、所生皇子也、爲今上御子、

〔日本紀略十一後一條〕寬弘元年五月四日丁亥、以冷泉院皇子昭登淸仁爲親王、實花山院御出家之後產生也、

〔榮花物語八はつ花〕院○花山このみやたちの末のびがたく、あはれにおぼえ給へば、中つかさがはらの一のみこ○昭登むすめのはらのみこ○淸仁ふた宮を、との○道長に申させ給て、これ冷泉院の御子のうちにいれさせ給へとある御消息度々あれば、○中略内にまゐらせ給て、とのよしそうせさせ給て、よきひして宣旨くださせ給ふ、おやばらの御子をば五の宮、むすめばらの御子をば六の宮とて、おの／＼みなべてのみやたちのえ給ふほどの御封どもたまはらせ給ふ、

〔執次詰所本御系譜〕

後伏見院
- 光明院
  後伏見院第二宮、爲光嚴院猶子、

後小松院
- 後花園院
  應永廿年六月十八日降誕、實者後崇光院皇子、爲後小松院御猶子、

賜姓後復親王

於嵯峨太上天皇、請以定爲親王、曰、○中略皇家之胤、徒淪脊庶、眘言猶子、情深矜愍、謹撿弘仁五年五月八日詔旨、除親王之號、賜朝臣之姓、如可闕者、朕殊裁下、特望齒列親王、榮曜貽孫、方寸之思、伏聽天裁者、嵯峨太上天皇遂不聽焉、

〔三代實錄十二清和〕貞觀八年三月二日戊寅、勅、沙彌深寂賜姓貞朝臣名登、○中略先是貞觀五年九月二十日、三品中務卿親王○中略等奏言、深寂是仁明天皇更衣三國氏所生也、承和之初、賜姓源朝臣、預時服月俸、厥後依母過失、被削屬籍、仍出家入道、嘉祥之末、更垂優矜、○中略今善緣不遂、再落俗塵、○中略出家之時、既列皇子、還俗之日、何爲非兒、然則准之人間、宜復本姓、但伏聞嵯峨遺旨、母氏有過者、其子不得爲源氏、望請賜姓名貞朝臣登、叙位階、貫京職、至是詔許之、

〔三代實錄五十光孝〕仁和三年八月廿五日丙寅、詔曰、朕之諸兒皆賜朝臣之姓、斯誠節國用、息民勞之計也、○中略第七皇子定省、年二十一、便侍朕躬、未曾出閤、寬仁孝悌、朕所鍾憐、前被混昆弟之鴈行、遽編一戶、今欲傳祖宗之駿命、何遑請任、苟不爲身、誰嫌反汗、其削臣姓、以列親王、心是宜膺帝子之名、俗岳易辭天孫之號、

○按ズルニ、定省親王ハ其ノ明日立チテ皇太子トナリタマフ、宇多天皇是ナリ、

〔帝王編年記十七醍醐〕貞元二年四月廿四日、左大臣源朝臣兼明、停大臣爲親王、叙二品、　十二月十日任中務卿、號前中書王是也、

〔榮花物語二花山〕大殿○藤原兼通おぼすやう、世の中もはかなきに、いかでこの右大臣○藤原賴忠いますこしなしあげて、わがかはりのそくをもゆづらんと覺したちて、たゞいまの左大臣兼明のおとゞときこゆる、延喜のみかど○醍醐の御十六の宮におはします、それ御心ちなやましげなりときこしめして、もとのみこになしたてまつらせ給ひつ、さて左大臣には、小野宮の賴忠のおとゞをなしたてまつり給ひつ、

たり、皇胤の貴種より出ぬる人、蔭をたのみいと才なども無く、剰へ人にをごり慢する心もある
べきにや、人臣の禮にしたがふ事ありぬべし、寛平の御記に其はし見え侍りしなり、後をもよくか
ゞみさせ給ひけるにこそ、

〔續日本紀 三十九 桓武〕延暦六年二月庚申、勅、諸勝賜姓廣根朝臣、岡成長岡朝臣、

○按ズルニ、諸勝ハ光仁天皇ノ皇子、岡成ハ桓武天皇ノ皇子ニシテ、皇子賜姓ノ始メナリ、

〔公卿補任 桓武〕延暦廿一年十二月己酉、賜良峰朝臣姓于安世、〇桓武皇子 貫右京、

〔享祿本類聚三代格 十七〕詔、朕〇嵯峨 常揖讓、纂踐天位、德愧睿通、化謝覃遠、徒歲序屢換、男女稍衆、未識
子道、還爲人父、辱累封邑、空費府庫、朕傷于懷、思除親王之號、賜朝臣之姓、編爲同籍、從事於公、出身
之初、一叙六位、唯前號親王、不可更改、同母後產、猶復一例、其餘如可闕者、朕殊裁下、夫賢愚異智、顧育
同恩、朕非忍絕廢體餘、分折枝葉、固以天地惟長、皇王遞興、豈競康樂於一朝、忘彫弊於萬代、普告內外、
令知此意、

弘仁五年五月八日 〇又見河海抄

〔新撰姓氏錄 左京皇別〕源朝臣　源朝臣信年六、腹廣井氏 弟源朝臣弘年四、腹上毛野氏 弟源朝臣常年四、弟源
朝臣明年二、已上二人腹飯高氏 妹源朝臣貞姬年六、腹布勢氏 妹源朝臣潔姬年六、妹源朝臣全姬年四、已上二人腹當麻氏 妹
源朝臣善姬年二、腹百濟氏 信等八人是今上〇嵯峨 親王也、而依弘仁五年五月八日勅、賜姓貫於左京一條
一坊、即以信爲戶主、

〔三代實錄 七 清和〕貞觀五年正月三日丙寅、大納言正三位兼行右近衛大將源朝臣定薨、〇中略 定者、嵯峨
太上天皇之子也、〇中略 弘仁五年特蒙明詔、諸皇子未爲親王者、皆賜姓源朝臣、定是源氏之第六郎也、
其源之命氏、始於此矣、太上天皇以定奉淳和天皇爲子、淳和天皇受而愛之過所生之子、更賜寵姬永
原氏令爲之母、故世稱定有二父二母焉、原姬所謂亭子女御也、天長四年二月廿八日、淳和天皇奉書

皇子賜姓

〔神皇正統記 村上〕源氏と云事は、嵯峨の御門世のつひえを思しめして、皇子皇孫に姓を給ひて人臣となし給ふ、すなはち御子あまた源氏の姓を給はる、桓武の御子葛原親王の男高棟、平の姓を給はり、平城の御子阿保親王の男行平業平等有原の姓給る事も此後の事なれど、是はたゞ〳〵の義なり、弘仁以後、代々の御後はみな源の姓を給ひしなり、親王の宣旨を蒙る人は、才不才によらず、國々に封戸など立られて、世のつひえなりしかば人臣につらね、官學して朝要にかなひ、器にしたがひ昇進すべき御おきてなるべし、姓を給る人は直に四位に叙す、皇子皇孫にとりての事也、常君のは三位なるべしと云、かゝれども其例まれなり、嵯峨の御子、大納言定卿、三位に叙せしかど、是も常代にはあらず、かくて代々のあひだ、姓を給ひし人百十餘人もや有けん、然れど他流の源氏大臣以上にいたりて、二代と相續する人の今なできこえぬこそいかなる故ならんとおぼつかなけれ、嵯峨の御子姓を給ひし人二十一人、此中大臣にのぼる人、常の左大臣、兼大將信の左大臣、融の左大臣、仁明の御子に姓を給る人十三人、大臣にのぼる人、多の右大臣、光の右大臣、兼大將文徳の御子に姓を給はる人十二人、大臣にのぼる人、能有の右大臣、兼大將清和の御子に姓を給る人十四人、大臣にのぼる人十世の御末に、實朝の右大臣、兼大將、是は貞純親王の苗裔なり、の陽成の御子に姓を給る人三人、光孝の御子に姓を給る人十五人、宇多の御孫に姓を給りて大臣にのぼる人、雅信の左大臣、重信の左大臣、さもに敦實親王の男なり醍醐の御子に姓を給はる人二十人、大臣にのぼる人高明の左大臣、兼大將兼明の左大臣、後に親王とす、中務卿に任す、前中書王これなり、此後は皇子の姓を給ふ事はたえにけり、皇孫にはあまたあり、任大臣を本と記すによりてことごとく不載、ちかくは後三條の御孫に有仁の左大臣、兼大將、輔仁の親王の男、白河院の御孫、猶子にて直に三位せし人也、二世の源氏にて大臣にのぼれり、かやうにたま〳〵大臣にいたりても、いづれか二代とあひつげる、ほとむど納言以上にて傳はれるだに稀なり、雅信の大臣の末ぞおのづから納言までものぼりて殘りたる、高明の大臣の後、四代大納言にて有しもはやく絶にき、いかにも故ある事かとおぼえ

任也、但一代親王一巡ヅヽ悉被任之極秘說也云云、

別巡給

第一親王每年二合依別勅也、今案別巡給是也云云、別巡給トハ、當帝后腹親王不論男女、可預別巡給之由被宣下ヌレバ、一人御坐ノ時ハ、每年任之、二人之時ハ隔年任之、只可依別巡給之人數也云云、

別給

依勅定懸親王巡也、又非后腹當代親王給之號也、一人之時每年任之、但末代無沙汰、寬元宗尊親王、非后腹當代親王也給可有之歟、不有之歟有沙汰、遂不被申之、非后腹當代親王給、某親王當年別給ト在之、勝子內親王例也、此義可然歟、依勅定懸親王巡云々、寬平九、六、廿六、宣旨云、尙侍藤原淑子別給、擬一人、一分一人、是年給一分之外也每年任之、先人之說也云云、今案攝州師遠歟

〔三代實錄 十淸和〕貞觀七年正月廿五日丁未、太政大臣從一位臣藤原朝臣良房、〇中略等奏議言、伏見自延曆至仁壽六代親王、年料給分、主典史生等、每代各一人、互稱一代、不用通計、是以或隔一年卽給、或經數年稀給、或省內親王不關給例、執論各殊、披訴間出、天慈攸及、還似不平、謹按此事、格式不載、宣旨非切、從見流例、未詳本源、方今年中所出之給、始自三宮至於諸司、有勞應補者、居常苦其不足、而親王之數四十有餘、非隔數年、難可周給、伏請總計親王、不別代々、輪轉而給、鱗次弗愆、將使先後無恨、男女共欣、永々相承、以爲成式、但先來有勅、所別給者、不入此限、謹錄事狀、伏聽天裁、奏可、

〔本朝世紀〕天慶元年十月八日、太政大臣參入職御曹司、被定行雜事、大納言平伊望卿着宜陽殿西廂座、召大外記三統公忠仰云、四品行明親王、去延長五年八月官符偁、件親王今上親王所定如件者、而所司自延長六年、以件親王爲寬平御後、載巡給簿行來久、不可追改、宜准故雅明親王例、從彼延長六年爲寬平御後、宛其年官者、卽書件宣旨續納已了、

〔除目抄〕

一親王巡給事巡給、別巡給、別給、已上其號有三種、年給目一人、一分一人、外巡給二合事也、

一巡給巡給事又在別抄、

一代御後親王、不論男女預之、寛平御後親王有例、巡給別巡給云々、延喜六年五月宣、

一說假令

白川院親王一年　堀川院親王一年　鳥羽院親王一年

今案、是其代親王一巡、悉被申任之心也、

一說假令

白川院第一親王一年　次年同院第二親王　次年同院第三親王

次年堀川院第一親王　次年同第二親王

次年鳥羽院第一親王　次年同第二親王

今案、是其代ノ親王一人ヅヽ可被申之心歟、

一說

一年白河院第一親王　堀河院第一親王　鳥羽院第一親王

次年白河院第二親王　堀河院第二親王　鳥羽院第二親王

次年白河院第三親王　堀河院第三親王　鳥羽院第三親王

今案、是其代ノ一二親王達ヲ分別シテ、一年ヅヽ可被申之心也、

古抄云、江帥卿示予師遠云、巡給ハ一代々々親王ヲ可作巡給之次第也、假令後朱雀院親王一巡、次後冷泉院親王一巡、次後三條院親王一巡之類是也云云、而予師遠所案異之、只依巡給宣旨之次第可被任也、假令巡給ノ人三人アラバ三年ニ一度、四人アラバ四年ニ一度可

〔日本後紀 十七平城〕大同三年五月乙巳、停有品親王月料、

〔續日本紀 三文武〕大寶三年九月辛卯、賜四品志紀親王、近江國鐵穴、

〔續日本紀 三文武〕慶雲二年四月庚申、賜三品刑部親王越前國野一百町、

〔類聚三代格 十二〕太政官符

應禁皇親之祿乞賣賤價事

右撿案內、太政官去延曆十六年四月廿四日下諸國符偁、自今以後、公私擧錢、宜限一年收半倍利、雖積年紀、不得過責者、今右大臣宣、奉勅如聞王親或募多祿、先受少價、或設重質、貸乞賤物、苟貪目前、不顧後弊、報價之日、既過一倍、因茲所司豪民競求利潤、好爲與借、班祿之日、濫訴繁多、自今以後賣買祿物、不得過於半倍之利、如有違犯、依法科處、

延曆十八年三月九日

〔類聚三代格 十二〕太政官符

一應皇親准主典奪祿事

右同前(〇左京職)解偁、被太政官去弘仁十年十一月五日符偁、當路不掃清、穿垣引水、壅水侵途等、諸司諸家幷內外主典已上、移式部兵部、貶考奪祿、四位五位、錄名奏聞、无品親王家、及所々院家、以其別當官准諸家司、亦移省貶奪、其雜色番上已下、不論蔭贖決笞五十者、今案符旨、皇親此雜色之內須不論蔭贖決笞、議案律條、皇親議論人也、蔭同三位、誠雖被下符、驗理不便、望請准主典移省奪祿者、其前符疎而不勞皇親、今如所請、當奏請之、但皇親蕃多、事惟輕碎、宜依請、以前大納言正三位兼行右近衞大將良峯朝臣安世宣、奉勅宜依件行之、

天長五年十二月十六日(〇又見政事要略八十二)

〔拾芥抄 中末御給〕親王 諸國目一人、一分一人、(或云、當代第一親王者、毎年賜祿、自餘親王者、又或式部卿者一分二人也、)

時服　季祿

大同四年六月廿三日

〔日本後紀桓武十二〕延暦廿三年九月甲午、式部省言、案公式令、親王一品已下、職事初位已上、並可自牒諸司、雖是三位已上、曾無以家司牒及解向官司之文、而案去延暦廿一年九月廿三日格云、親王内親王、並年滿四歳、始充帳内者、今親王内親王、或年未成人、或不便文筆、至經官司、若爲申牒、又同令牒式、三位已上去名、然則親王四品已上、去名明矣、而散事數人、同品及同官位姓之類、既不署名、何以辨知、仍問法家、答云、如此之類、可有別式者、未審所從者、勅、幼稚親王、既不便筆、三位已上亦無可署、准據令格、還成疑滯、必須自牒、事有不穩、自今以後、宜親王四品已上、及職事三位已上、並聽以家司牒申牒諸司、其牒首、並具注其官品其親王家、及其官位姓名家牒、以別同異、牒尾、家令已下兩人、署之、无品親王内親王者、並別當官人、署名申牒、牒式准上定、別當人、依勅處分、(下略)

〔延喜式中務十二〕時服(中略)無品親王時服、(内親王亦同)絹五十匹、細布四十七端二丈一尺、(各加綿二百屯)

〔續日本紀文武二〕大寶元年八月己酉、皇親年滿者、不論官不、皆入賜祿之類、

〔延喜式式部十八〕凡親王知太政官事者、其季祿准右大臣預議政者、一品二品准大納言、三品四品准中納言、

〔續日本紀文武三〕慶雲三年二月辛巳、知太政官事二品穗積親王、季祿准右大臣給之、

〔古京遺文〕建多胡郡辨官符碑

辨官符、(中略)和銅四年三月九日甲寅宣、(中略)太政官二品穗積親王、左太臣正二位石上尊、(麻呂)右大臣正二位藤原尊、(不比等)

○按ズルニ、親王ノ季祿ハ右大臣ニ准ズト雖、其官ハ左大臣ノ上ニアルナリ、

〔續日本紀淳仁二十三〕天平寶字五年二月丙辰朔、勅、朕以餘閑、歷覽前史、皆降親王之禮、並在三公之下、是以別預議政者、月料馬料春秋季祿夏冬衣服等、其一品二品准御史大夫、三品四品准中納言給之、

○按ズルニ、親王品田ノコトハ、俸祿部位田ノ篇ニ詳ナリ、就テ看ルベシ、

〔令義解〕四祿 凡食封者、一品八百戸、二品六百戸、三品四百戸、四品三百戸、内親王減半、

〔延喜式〕二十二民部 凡職封者、解官幷身薨即還收、○中略 品位封者、薨年之料、全納喪家、無品封亦准此、

〔日本書紀〕二十九天武 十一年三月辛酉、詔曰、親王以下至于諸臣、被給食封皆止之、更返於公、

〔續日本紀〕二文武 大寶元年七月壬辰、勅、親王已下准其官位賜食封、

〔續日本紀〕三文武 慶雲元年正月丁酉、二品長親王、舍人親王、穗積親王、三品刑部親王、益封各二百戸、三品新田部親王、四品志紀親王各一百戸、

〔續日本紀〕三文武 慶雲二年十一月庚辰、有詔加親王諸王臣食封各有差、先是五位有食封、至是代以位祿也、

〔續日本紀〕六元明 和銅七年正月壬戌、二品長親王、舍人親王、新田部親王、三品志貴親王、益封各二百戸、○中略 封租全給、其食封田租全給封主、自此始矣、

〔續日本紀〕九聖武 神龜元年二月甲午、是日一品舍人親王益封五百戸、

〔類聚三代格〕八 太政官謹奏

應賜無品内親王食封事

右奉勅、件封戸、大同三年十月十九日論奏云、一品已下食封、幷四位祿等並據令説、但先經恩賜、更不收返、其加階進級之日、即便廻給各得其所、又大同三年六月廿九日式云、無品親王食封二百戸、男女並同、但叙品之後、一從停止者、今撿奏意、無品内親王叙四品之日、封邑一百五十戸、然則無品之日封二百、叙品之時還失五十、事之所在、良不穩便、宜議定奏聞者、謹依勅旨、商量件封戸、大同三年論奏、依令已訖、然則女者良宜半減、内親王准令半之、其先經恩賜後據論奏、更不收返、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、勅依奏、

勅別當

〔三代實錄 九 清和〕貞觀六年八月八日壬戌、右京人、二品秀良親王家令正六位上宇自加臣吉人賜姓笠朝臣、〇中略阿波國名東郡人、二品治部卿兼常陸太守賀陽親王家令正六位上安曇部粟麻呂改部字賜宿禰、

〔西宮記 臨時 一〕諸宣旨云云

當代親王勅別當、上卿奉勅賜辨、辨仰史令書宣旨、

〔類聚符宣抄 七〕從二位行權中納言兼中宮大夫右衞門督藤原朝臣齊信

左中辨源朝臣道方傳宣、左大臣宣、奉勅件人宜爲今上敦成親王家別當者、

寛弘五年十月十六日　　左大史小槻宿禰奉親 奉

〔貞信公記〕延長五年二月十二日甲午、東宮御修善於山座主所行也、十親王約口內裏、彼親王別當淑有朝臣、依院御消息昇口、親王及陪從四位以下六位以上、賜祿有差、

帳內舍人

〔令義解 五 軍防〕凡給帳內、一品一百六十人、二品一百四十人、三品一百二十人、四品一百人、〇中略女減中、減數不等從多給、

〔續日本紀 八 元正〕養老三年十月辛丑、詔曰、〇中略舍人新田部親王百世松桂、本枝合於昭穆、萬雉城石、維磐重乎國家、理須吐納清直能輔洪胤、資扶仁義信翼幼齡、然則太平之治可期、隆泰之運應致、可不愼哉、今二親王宗室年長、在朕既重、實加褒賞、深須旌異、然崇德之道、既有舊貫、貴親之理、豈無於今、其賜一品舍人親王內舍人二人、大舍人四人、衞士三十人、益封八百戶、通前二千戶、二品新田部親王內舍人二人、大舍人四人、衞士二十人、益封五百戶、通前一千五百戶、其舍人以供左右雜使、衞士以充行路防禦、於戲欽哉、以副朕意焉、凡在卿等、並宜聞知、

親王品田

〔令義解 三 田〕凡位田、一品八十町、二品六十町、三品五十町、四品三十町、

〔延喜式 二十二 民部〕凡授品田者、親王內親王其數一同、

徳川内府〇慶喜征夷御委任候處、大政返上、將軍職辭退の兩條、斷然被聞召候、抑癸丑〇嘉永六年以來未曾有の國難、先帝〇孝明頻年被惱宸襟候御次第、衆議の所望に付、依之叡慮被決、王政復古、國威挽回、御基被為立候間、自今攝關幕府等廢絶、即今先般の總裁職、議定、參與の三職を置れ、萬機可被為行、諸事神武創業に基き、縉紳武辨、堂上地下の別なく、至當の公議を盡し、天下御休戚を同く可被遊叡慮に付、各勉勵、舊惰の汚習を洗ひ、盡忠報國の誠を以て可奉公事、〇中略

三職人撰

總裁　有栖川宮

議定　仁和寺宮　山科宮〇中略

太政官始追々可被立候間、其旨可被心得候、

〔令義解一家令職員〕親王、内親王准此、但文學不在此例、

一品

文學一人、掌執經講授、餘文學准此、家令一人、掌總知家事、餘家令准此、扶一人、掌同家令、餘扶准此、

大從一人、掌檢校家事、餘從准此、少從一人、掌同大從、大書吏一人、掌勘署文案、餘書吏准此、少書吏

一人、掌同大書吏、

二品

文學一人、家令一人、扶一人、從一人、大書吏一人、少書吏一人、

三品

文學一人、家令一人、扶一人、從一人、書吏一人、

四品

文學一人、家令一人、扶一人、從一人、書吏一人、

〔伏見宮系譜〕朝彦、文久二年九月三日、國事扶助被命、

〔議奏言渡〕慶應元年十月六日、尹宮以使兩役ヘ被附、

不肖臣朝彦、段々蒙仰、昨日迄御用者相務候處、豈計不被爲得止次第ニ相成、積年之宿志不仕貫徹恐入候、是全臣等不盡其職之儀ト恨身外無之、實以不堪恐懼候、仍不忠罪被正、扶助被爲免候樣伏相願候事、

十月六日　朝彦

議奏傳奏衆中

右經内覽以權少輔申上被召留、諸大夫召設申渡候、七日、被召留候御請、不取敢以使被申上、權少輔申上候、

〔議奏言渡〕慶應二年九月四日〇中略尹宮被附

先年來不肖朝彦、格別蒙朝恩畏入候、然處去月晦夜、不顧恐諸藩召之儀押而言上、何共恐入候次第、是迄トテモ不行届、此後尚又不計御失體ヲ釀候儀候而者、實ニ恐懼之至、仍國事扶助以御憐愍被免候樣待御沙汰候事、

九月四日　朝彦

右於御前御評議之處、被止御前、

〔議奏言渡〕慶應二年九月廿七日、常陸宮〇山階宮晃親王、常陸太守、已下御答被仰出、

常陸宮、此度國事掛依所勞理乍申上他出、剩止宿、且從來不行跡、旁以蟄居被仰出候事、

國事掛被止候事、〇中略

但常陸宮諸大夫召設、葉室殿御申渡、小時御請以國分上總被申上候、

〔嘉永明治年間錄十六〕慶應三年十二月十二日、勅シテ總裁議定參與ノ三職ヲ置ク、

太宰府　帥　親王任之　權帥〇中略　北山抄云、爲尊親王爲太宰帥正、惟仲帥之時、以彼親王任他官、此事無謂、可任權帥也、何以正帥任他官哉、

〔日本書紀天智二十七〕十年正月癸卯、是日以大友皇子拜太政大臣、

〔日本書紀持統三十〕四年七月庚辰、以皇子高市爲太政大臣、

〔續日本紀文武三〕大寶三年正月壬午、詔三品刑部親王知太政官事、　慶雲二年九月壬午、詔二品穗積親王知太政官事、

〔公卿補任文武〕慶雲二年、知太政官事二品穗積親王、二月辛巳、准右大臣、

〔續日本紀元正八〕養老四年八月甲申、詔以舍人親王爲知太政官事、新田部親王爲知五衞及授刀舍人事、

〔增鏡五內野の雪〕建長四年正月八日、院〇後嵯峨の御前にて御かうぶりし給ふ、〇中略御とし十一なるべし、中務の卿宗尊親王と申めり、おなじ二〇二、百鍊抄作四、月十九日、都を出給ふ、其日將軍の宣旨かうぶり給ふ、かゝるためしはいまだ侍らぬにや、上下めづらしくおもしろき事にいひさわぐべし、

〔勘仲記〕正應二年十月九日、親王〇後深草皇子久明今夜被宣下征夷大將軍事、　十日、今日將軍御下向關東、先未明入御六波羅、八葉長物見御車、

〇按ズルニ、此他宗尊親王ノ子惟康、久明親王ノ子守邦ノ二親王モ亦、征夷大將軍ニ任ゼラレタレド此ニ略ス、官位部征夷大將軍篇參看スベシ、

〔神皇正統記後醍醐〕かくて親王〇後村上元服したまひ、直に三品に叙し、陸奧の太守に任じまします、このくにの太守ははじめたることなれど、たよりありとてぞ任じたまふ、

〔三代實錄四十二陽成〕元慶六年六月廿六日丁酉、是日以一品行式部卿兼常陸太守諱〇光孝親王爲左相撲司別當、以三品行兵部卿本康親王爲右相撲司別當、兩親王下紫宸殿庭、奉勅拜舞而出、

二品　左右大臣

三品

四品　大納言　太宰帥　八省卿

〔延喜式十八式部〕凡諸王諸臣任太政大臣者、不得以親王爲左右大臣、但得任八省卿、諸臣任太政大臣者、不得以諸王爲左右大臣、親王任左大臣者、得以諸王爲右大臣、但親王諸臣不得爲左右、

〔官職秘抄上〕八省卿　中務　式部　兵部　以上必以親王任之　治部　民部○中略　以親王被任例賀陽親王

〔官職秘抄下〕彈正臺　尹　爲親王官

〔類聚三代格五〕太政官符

應親王任國守事

上總國　常陸國　上野國

右撿中納言從三位兼行左兵衛督清原眞人夏野奏狀偁、設置八省職寮相隸、百官守職庶務俱成、一事有闕萬事皆綏、今親王任八省卿、此人地望素高不得就職、無知碎務、仍官事自懈政迹日蕪、非是庸愚之所致、因地勢使之然也、凡官人遷代必署解由、至有缺物不免償物、居此之職、見其如此、望請點定數國爲親王國、迭任彼國、身留京都、意欲居京官者、一兩人將聽、若有守闕者不補他人、其料物者納置別倉、支无品親王之要、伏聽天裁者、正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良峰朝臣安世宣、奉勅依奏、但件等國守官位卑下、宜改定正四位下官、以爲勅任、號稱太守、限以一代、不可永例、

天長三年九月六日

〔官職秘抄下〕諸國　守○中略　上總、常陸、上野太守爲親王、介爲受領、仍歷外記史輩不任之、與親王不可相並之由、二條關白被執之、然而其例多、又近代不及此儀歟、

任官

〔續日本紀(九聖武)〕神龜元年二月甲午、二品新田部親王授一品、

〔皇胤紹運錄〕賀陽親王(桓武皇子)二品、刑部卿、兵部卿、治部卿、貞觀十三、十、八、薨、八七十、母夫人多治比眞宗、參木長野女、

大野親王(桓武皇子)四品、治部卿、延暦廿二、十、薨、六歳、母同、

坂本親王(桓武皇子)四品、治部卿、母川上眞好、

有明親王(醍醐皇子)三品、兵部卿、母女御和子、光孝女、

〔小右記〕寛弘八年九月十日庚辰、故院(〇一條)宮達叙四品之御慶事、送書狀於母氏許也、 十八日戊子、昨日戌刻故院宮達參內、於射場令奏慶賀訖、(其道經敷政門並南階下云云)即被聽昇殿、依召參御前、候又廂、以菅圓座為座、暫可令退下、中納言隆家、行成、參議經房等相從親王云云、候御前之間、左大臣(〇藤原道長)候御帳邊云云、資平所談、

〇按ズルニ、故院宮達トハ、後朱雀天皇ナルベシ、皇胤紹運錄ヲ按ズルニ、後朱雀院(諱敦良、母同後一條、)寛弘六、十一、廿五降誕、同七、正、十六為親王、トアリ、御母ハ上東門院ナリ、此天皇ヲ除クノ外ハ皇子ナキナリ、

〔光臺一覽二〕扨親王御昇進の次第は、親王宣下は有て、いまだ位に叙し給はぬを無品親王と申、夫より四品三品二品と上り給ひ、一品は至極の先途と心得べし、官は中務卿、式部卿、兵部卿、又は太宰帥、彈正尹等也、

〔有栖川系圖〕韶仁親王

弘化二年二月廿七日一品宣下、非一世親王者、其例邂逅雖不容易、被及六旬有餘、且病氣危篤之間、以格別之叡慮被宣下、不可為後例、

〔令義解一官位〕親王

一品　太政大臣

〔令義解十獄〕凡決大辟罪、皆於市、五位以上及皇親、犯非惡逆以上、聽自盡於家、謂令罪人在家自死也、

〔日本書紀三十持統〕朱鳥元年十月己巳、皇子大津謀反發覺、逮捕皇子大津、・庚午、賜死皇子大津於譯語田舍、

〔續日本紀十聖武〕天平元年二月辛未、左京人從七位下漆部造君足、无位中臣宮處連東人等告密、稱左大臣正二位長屋王私學左道、欲傾國家、　壬申、遣一品舍人親王○中略等、就長屋王宅、窮問其罪、　癸酉、令王自盡其室、　甲戌、勅曰、○中略長屋王者、依犯伏誅、雖准罪人、莫醜其葬矣、

叙品

〔日本書紀二十九天武〕十四年正月丁卯、更改爵位之號、仍增加階級、明位二階、淨位四階、毎階有大廣、幷十二階、以前諸王已上之位、

○按ズルニ、此時ノ制ハ、親王諸王同一ニシテ、諸王トイヘドモ尙諸臣ト異ナリキ、

〔續日本紀二文武〕大寶元年三月甲午、始依新令改制官位號、親王明冠四階、諸王淨冠十四階、合十八階、○中略始停賜冠、易以位記、

○按ズルニ、此ニ至リテ、諸王諸臣ノ位階ハ同一トナリ、親王ノ位階ノミ特異トナレリ、

〔令義解一官位〕親王

一品謂品位也、親王稱品者、別於諸王、　二品　三品　四品○下略

〔令義解七公式〕凡應叙親王四品、

〔光臺一覽二〕親王の位は、臣下の如く正從を不分、上下をいはず、位と稱へず、三品四品或は二品一品と稱へ、無位の親王は無品の親王と稱へ申事也、

〔續日本紀四元明〕和銅元年正月乙巳、是日授四品志貴親王三品、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年正月癸巳、授二品穗積親王一品、

〔續日本紀八元正〕養老二年正月庚子、詔授二品舍人親王一品、

親王、太政大臣、大臣若有國之元老、朝之重臣、別聽乘輦車出入宮中、
〔文德實錄五〕仁壽三年六月癸亥、一品太宰帥葛原親王薨、○中略勅賜輦車入宮、禮儀異諸親王、
〔文德實錄九〕天安元年四月丙戌、有勅許無品惟喬親王帶劍、于時皇子年十四、未加元服、
〔令義解一後宮職員〕凡親王及子者、皆給乳母、謂若內親王嫁諸王所生子者、不在給限也、親王三人、子二人、所養子年十三以上、雖乳母身死、不得更立替、其考叙者、並准宮人、
〔令義解四選叙〕凡蔭皇親者、親王子從四位下、諸王子從五位下、其五世王者、從五位下、子降一階、庶子又降一階、唯別勅處分不拘此令、
〔律疏名例〕六議
一曰議親謂皇族及五等以上親○下略
○按ズルニ、皇親罪アレバ、先ヅ其罪ヲ議センコトヲ奏請シ、裁可ヲ待チテ後決罰スルナリ、
〔令義解九喪葬〕凡百官在職薨卒、當司分番會喪、親王及太政大臣散一位、治部大輔監護喪事、○中略內親王女王、及內命婦亦准此、
〔令義解九喪葬〕凡職事官薨卒賻物、○中略親王及左右大臣准一位、○中略其無位皇親准從五位三分給二、
〔令義解九喪葬〕凡皇親及五位以上喪者、並臨時量給送葬夫、
〔令義解九喪葬〕凡親王及三位以上、暑月薨者、謂六月七月給氷、
〔延喜式十一太政官〕凡親王及大臣薨、即任裝束司及山作司、或任主行所及山作所、輕重隨品高下、事見喪葬記、送葬之日、勅使二人、一人持詔書、一人持位記、若無贈位者、一人持賻物、其使人位階、隨亡者高下、就弟子弔贈、
〔百一錄〕延寶三年六月廿五日、八條中務卿宮薨去、行年廿一新院○後西院第一皇子、禁裏御柱立依三日廢朝延引、雖而今日可被行之處也、　七月十九日、吉良上野介上著、中務卿宮殿八條依薨逝為御悔、
〔百一錄〕元祿七年五月十八日、伏見殿一品式部卿貞致親王薨、遏市中歌舞三ヶ日、

龜井隱岐守家來

五月十八日　福原權左衞門

御附札

書面之通御心得不苦候事

一右御同人樣御用人西金大夫方を以演說

攝家親王方之御同宿之儀、書面之通御心得不苦候得共、於彼方同驛止宿ハ殊之外六ケ敷被申候由、美濃守及承候儀も有之候、心得之儀ハ、書面之通ニて宜候得共、右之義ハ御勘辨可有之義ト存候、此段御心得迄申候樣被申聞候旨被申候、○中略

〔途中行逢會釋〕享和元酉年二月四日、遠藤但馬守樣ゟ高家戶田土佐守樣江御問合

堂上之乘、於途中行逢候節會釋之儀、別に禮節も無之事に候間、旅中にても當地之通相心得、攝家親王門跡方は、乘輿之儘片寄扣居見計通行可致旨、伊豆守殿御書取を以被仰渡候、依之爲心得書付差出、同年二月十六日伊豆守殿江伺置候處、同廿八日御差圖、馬上勤之嫡子、途中にて堂上乘行逢候節之心得も御書取を以、左之通御差圖有之、

乘輿にても馬上にても、同樣之儀と差別無之事、○中略

〔五街道取締〕御朱印其外行逢候節之心得又は及不敬候もの之事

攝家親王門跡方行逢候節、乘輿之儘片寄罷在候は主人之義にて、陪臣之分は、乘輿御屆相濟行列之內に候共、駕籠之儘罷在候儀には有之間敷、下乘いたし可申事に候、尤下に時宜いたし候分には無之候得共、立居候筋には有之間敷候、○中略

〔帝王編年記 十文武〕大寶元年、今年以皇子號親王、又被止親王乘馬出入宮門、

〔新儀式 五臨時下〕親王公卿有別勅聽乘輦車出入宮中幷帶劍事

〔延喜式弾正四十一〕凡三位已下於路遇親王者、下馬而立、但大臣斂馬側立、

〔政事要略八十四〕弾例曰、凡相遇親王者、三位下馬而立、四位已下跪座、但大臣斂馬側立、又條曰、三位於宮中遇親王者跪座、但大臣不得跪座者、

〔西宮記臨時八〕致敬禮

車禮雖不載式(弾正式)以世俗之所為記耳、親王大臣共相遇者、各留車前駈下、納言逢親王大臣抑車、大臣前駈下、

〔拾芥抄中末儀式〕車禮雖不載式(弾正式)以世俗之説註之而已、

親王大臣共相逢者、留車前駈下、納言逢親王者抑車、大臣前駈下、參議逢親王大臣者、參議放牛立榻、不載式納言以下逢親王者放牛可立榻、

〔弘安禮節〕路頭禮事

一遇親王禮　大臣共抑車、僮僕互下馬、大臣前駈以下列居車傍、親王前駈歩行過之、親王車過畢、大臣僮僕騎馬進行、若親王車自後來者、大臣車直對親王車立之、自餘同准之、

〔准后親王座次事〕飛鳥井雅康正筆ノ寫

立車事

二品親王御車ハ、殿下ヨリ上ニ可立之、無品親王ノナラバ、殿下ヨリ下ニ立之、太政大臣ヨリハ上也、但於陽明門者、雖二品親王御車、殿下ノ御車ヨリ下ニ立、

〔途中行逢會釋〕文化十四丑年五月十八日大目付井上美濃守様江差出候處御附札濟

一御攝家方、親王方、御門跡方、御行逢之節ハ、乘輿ノ儘片寄扣罷在、見計致通行候哉、

但御旅中ニて、右之御方之御泊驛ハ、可相成丈ケ止宿不致心得ニ罷在候、然處跡ゟ右之御方之御通行ニて、自然川留等有之、先之驛迄御越不被成、萬一同樣御泊ニ相成候節ハ、御先方御差支不相成候之樣本陣明ケ、同驛ニて脇本陣、或ハ寺院等江止宿仕罷在候儀ハ不苦候哉、

政大臣見親王、及親王見太政大臣、並不動也、以外不動、

〔日本紀略嵯峨〕弘仁十年六月庚戌、制諸司於朝堂見親王太政大臣、以磬折代跪伏、以起立代動座者、

〔延喜式十八式部〕凡在朝堂座、見親王及太政大臣者、皆磬折而立、若見左右大臣、及左右大臣見親王及太政大臣者、並起座、即就座及出門訖、乃以次就座、

〔延喜式十八式部〕凡親王任省卿尹、就曹司廳者、五位已上並立床前、六位已下磬折而立、就座訖乃以次就座、其雜公文令錄疏取署、

〔延喜式四十一弾正〕凡親王、太政大臣、左右大臣入朝堂者、諸司皆起座、親王、太政大臣者、磬折而立、座定乃以次復座、退出亦同、

〔延喜式四十一弾正〕凡親王大臣、及一位二位、於五位以上答拜、於六位以下不須、

〔禁中方御條目十七箇條〕一、三公之下親王、其故者右大臣不比等、著舍人親王之上、殊舍人親王、仲野親王、贈太政大臣、穗積親王准右大臣、是皆一品親王以後、被贈大臣時者、先三公之下可爲勿論歟、親王之次前官之大臣、三公在官之內者、雖爲親王之上、辭表之後者、可爲次座、

〇按ズルニ、公卿補任ニ、刑部親王、穗積親王、知太政官事タル間ハ、三公ノ下ニ列ス、サレドモ續日本紀ヲ見ルニ、親王ハ皆三公ノ上ニ列セリ、不比等ノ舍人親王ノ上ニ著クト云ヘルハ誤ナリ、補任ニ、養老四年右大臣藤原不比等、八月三日薨、知太政官事舍人親王、八月四日任、ト見エタレバ、不比等ノ薨後ニ任ゼラレシモノナリ、二品仲野親王ハ宇多天皇ノ御外祖ナリ、一品太政大臣ヲ贈ラレシナリ、二品穗積親王ノ右大臣ニ准ゼラレシハ、季祿ヲ右大臣ニ准ジテ賜ヒシナリ、要スルニ、此條目ハ深ク典故ヲ考究セザルナリ、

〔令義解六儀制〕凡在路相遇者、三位以下遇親王、皆下馬、謂、稱親王者、有品无品並同、若无品親王遇有品親王者、不可下馬、何者、上條致敬禮、止爲諸王以下、不及親王、此條亦有品、无品无別故也、以外准拜禮、其不下者、皆斂馬側立、謂二位以上遇親王、三位遇一位之類、駐馬拔立於道側也、○下略

待遇

退出、

次上卿引率諸卿參本宮、著對代座、(與端相分)勅別當留立中門外、申慶再拜、(以可補家司若職事之人上為申次)訖加著對代座、(端)

次勅別當依召參進寢殿簾下、給家司職事藏人侍者御監等夾名、(書折紙二通、女房從簾下出之、)復座、

次別當召家司上臈一人、賜家司御監等折紙、

次召職事上臈一人、賜職事藏人侍者等折紙、

次家司以下列立中門外、申慶賀、申次離列申事由、加立列各二拜、

次上卿以下退出、諸卿退出、勅別當留座、

次職事覽家司以下之令旨、(入宮)置座職事退入、

次侍者持參硯、置座退入、

次勅別當加署

次侍者撤硯

次勅別當召家司、賜家司御監等令旨、取之退入、

次勅別當召職事、賜職事藏人侍者等令旨、(乍入宮賜之)取之退入、

次勅別當退出、

〔新儀式〕(五臨時下)親王初謁見事

童親王初謁見、一同正月朝覲之儀、但不賜酒肴、或乳母給祿、

〔日本書紀〕(三十持統)四年七月甲申、詔曰、凡朝堂座上、見親王者如常、大臣與王起立堂前、二王以上下座而跪、

〔令義解〕(六儀制)凡在廳座上、見親王及太政大臣下座、左右大臣當司長官即動座、(謂左右大臣見親王及太政大臣即動座、其太

職事

實豐（○風早舘前橘介）　國典（○芝山宮内大輔）

藏人

大江俊迪（○北小路差次藏人）　大江俊常（○北小路藏人）

侍者

小槻輔世（○壬生新藏人）

御監

平淸德（○粟津左衞門少尉、以下地下官人略之、）

立親王宣下次第

先諸卿著仗座

次上卿移著端座

次上卿令官人敷軾

次職事著軾下御名字

次上卿披見結申、職事仰可爲今上親王之由、

次上卿令官人召辨賜御名字、（大辨候者大辨給之）召仰可爲親王可作官符之由、辨退去、仰史令成官符宣旨、

次職事著軾、仰以某人可爲今上親王勅別當之由、

次上卿召辨仰其人今上親王勅別當事、（某人在座者上﨟示之、而後更召辨仰之、）

次上卿令官人撤軾、

次諸卿起座

次親族拜、（近代不論親疎、各列立、）上卿以下進弓場拜舞、（以頭藏人爲申次、）終退出、勅別當殘留、更令職事奏、別當慶拜舞

○按ズルニ、是即チ親王宣下ノ始ナルベシ、

〔續日本紀 三十一 光仁〕寶龜元年十月己丑朔、卽天皇位於大極殿、十一月甲子、詔曰、○中略兄弟姉妹諸王子等、悉作親王、氏冠位上給治給、○中略天皇御命衆聞食宣、授從四位下諱〇桓武四品、

〔勘仲記〕永仁元年十二月十日辛卯、入夜著束帶、用毛車、參內、立親王定也、職事定房奉行、○中略親王定上卿權大納言遲參之間、所被相待也、小時參入之間、諸卿著仗座、權大納言、中御門中納言、衣笠中納言、下官、堀川宰相等也、小時移著端座、令敷軾、次職事定房下御名字、注于檀紙一枚書之、〇龜山皇女高爲親王、ヨ、職事退、次上卿召辨、右少仲親參進、被下御名字、辨結申退、次職事仰勅別當、以權中納言藤原朝臣爲憙子內親王別當、召辨仰之、次上卿□□起座、進弓場、有親族拜、申次定房、舞踏如例、一揖之後退出、中御門中納言一人立留、奏勅別當慶申、次同前中御門黃門一人可參本所、〇禪林寺殿云々

〔輔世卿記〕天保六年九月十八日、今日巳刻、儲君〇孝明立親王宣下也、奉行頭右中辨正房朝臣、○中略

立親王宣下

公卿

右大臣〇九條尙忠　權大納言〇醍醐輝弘　新源大納言〇廣幡基豐　源中納言〇久我建通　右衛門督〇藤谷爲脩

宮內卿〇梅小路定肖　左兵衛督〇飛鳥井雅久

辨

光暉朝臣〇日野西右中辨

勅別當

新源大納言

家司

能通朝臣〇六角右中將　公前朝臣〇小姉路侍從　延房朝臣〇池尻右兵衞權佐　言成朝臣〇山科內藏頭　定德〇梅小路讃岐權介

寛平

權大納言藤原朝臣公實

右中辨源朝臣重資傳宣、右大臣宣、奉勅件人宜爲今上親王別當也、

康和五年二月九日　左大史紀盛言奉

奉字可忌由見延木記、臣下無擇、

臨字可忌由見天曆記、涉眞臨義、

太政官符中務、式部、民部、大藏、宮內省、

無品崇尊親王歳二、

右今上親王所定如件、省宜承知、依例行之、符到奉行、

已上召仰、

參議左大辨從四位上兼行讚岐權守紀朝臣　左大史正六位上御船宿禰有方

延喜四年二月十日

去年十一月四日丙寅誕生、子今七十箇日

太政官符中務省式部、民部、大藏、宮內等同、

無品宗仁親王

右今上親王所定如件、省宜承知、依例行之、符到奉行、

修理左宮城使正四位上行左中辨兼越前權守源朝臣重資　正六位上行左大史紀朝臣盛言

康和五年六月九日

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字三年六月庚戌、帝御內安殿、喚諸司主典已上、詔曰、○中略兄弟姉妹悉稱親王止宣、天皇御命衆聞食宣、○中略從三位船王、池田王並授三品、○中略從四位下室王、飛鳥田王並四品、

宗仁　尊明　後又慶仁

今上（實綱朝臣擇申）

善仁　守成

院（明衡朝臣撰申、後三條院東宮、）

貞仁　有成　博時

貞尊不宜由公卿等申之（能長實綱等）

陽成院　華山院　三條院云云（並貞字）

故院仰曰、還可爲例、明衡曰、帝王三人被用貞字、可謂無耻辱、

後三條院　後冷泉院（義忠朝臣擇申）

親仁　尊仁　能成

後朱雀院　後一條院（匡房朝臣擇申）

敦成　敦良　敦人

三條院

一一條院（齊光朝臣擇申）

一華山院（同上、或說輔正云々、）

一圓融院（維時擇申）

一冷泉院（在衡卿擇申）

維時擇申故慶賴親王名、仍在衡卿擇申由見九條記、

一村上

一朱雀院（等可尋之）

年月日書部

寛弘康和、以口宣仰下之於頭左中辨、大臣以下著仗座、（道方依大辨不參也）藏人頭下宣旨於大臣、（多用大臣）大臣用大辨下之、（可結、奏聞不結、不可然、治暦、）大辨出版床子下史、（召大夫史）後日成官符、（右状必載今上親王字）次公卿歴階下參於弓場殿、依執柄告可參歟、（以藏人被召）承暦内大臣（○藤原信長）不列而退出、頗不叶時務、列立、（西面北上、雖源氏近代必列、）康和大臣以下不列立、（但外家公卿二人、殿上人二人列立、尤可恠之、）次執柄加列上、（自殿上出）以藏人頭被奏（其詞、某人人候不云云、）人數多時、右（乃イ）大萬不千君等候（不止）可申歟、（皆申爲耳、）返來（持笏）顧向御所方顧曰、聞食ツ、不受拜之前退、（但下自殿上、於宇津保柱邊可取笏歟、）公卿拜舞了、陣此間被仰勅別當（納言）於大臣、大臣又如始仰下之、或於弓場殿被仰下之、

別當一人留弓場殿拜

次公卿相引參入本宮

勅別當仰下家司職事（付藏人等）

家司（四位三人以上）

寛弘廿人、承暦康和三人、

職事、（四位五位三人以上）

承暦康和三人

侍者二人、藏人二人、

予依擇申故致文親王名辭退畢

今宮（正家朝臣擇申）未得解由

親王宣下式

五月六日　　松平越中守

武傳三卿宛

以上以越後申入、披露濟被返書候、

〔新儀式(五臨時下)〕皇子給親王號事

皇子可給親王號、大臣奉勅宣下所司、此日外戚氏公卿、於仁壽殿東庭、令奏慶賀之由、舞踏退出、

〔江家次第十七〕當代親王宣旨事

藏人頭奉仰、仰上﨟博士、令勘申御名字、兼日示氣色、當日仰之、

博士進勘文(江家不注年月日)

三以下(唯注本文并音訓、有裏紙懸紙、用檀紙、)

勘申御名字事

某書某反―也

同上某反―也

右勘申如件

年月日官姓名

頭以文刺奏之

於定被用嘉名

藏人頭書下　宣旨(無裏紙懸紙)

少貞時或有口宣例、然而猶以書爲吉歟、長曆小野大臣俻、無先例不下、範國宣旨書於大辨、

治曆四年、院一人被下親王宣旨(內親王別紙)猶書之、男女親王可爲別紙由内府(○源師房)被申、承曆實政爲頭、

以博士勘文下之、不可然云云、往年注御年、近代不然、可爲今上親王、(近代不注今上字)

月十日、中川宮自今被改稱賀陽宮候旨被仰出、三條殿御奉申達、〇節略

〇按ズルニ、賀陽宮ハ、明治維新後ニ久邇宮ト改稱アリ、

〔議奏言渡〕元治元年正月九日、濟範勅免之旨、殿下〇鷹司輔熙傳宣、御本役御承、

元勧修寺濟範、多年謹愼、且今度一橋中納言已下、段々建言之次第モ有之、誠難被默止之間、以格別之思召、御咎被勅免、伏見家江復系還俗被仰出候事、

勅免御世話卿代、廣橋殿御申渡、復系還俗等武傳被申渡候、明十日右御請、廣橋殿武傳申上、以女房申上候、　十七日、元勧修寺濟範、自今被稱山階宮候旨關白殿傳宣、六條殿御奉、　廿七日、山階宮親王消息宣下相濟旨、頭左中辨言上、以藤丸申上候、山階宮當今御猶子、御願之通被仰出候旨、以大御乳人御申出、　廿八日、山階宮御參被伺天氣、今日元服任官常陸太守宣下、且昨日御猶子親王宣下、御冠拜領、勅使賜物等御禮被申上、賜祝酒、後時於常御殿御對面、賜二獻、女房汲汁訖、令退給、〇節略

〔禁裏御所領〕元和三年禁裏御所領幷公家衆御知行附〇中略

一千石　有栖川中務卿職仁親王　一千石　閑院彈正尹直仁親王

一三千六石六斗八升　八條宮式部卿親王　一千壹石七斗三升三合　伏見院刑部卿親王

〔議奏言渡〕元治元年五月六日、〇中略武傳被附、

中川宮御家領　井伊掃部頭領分上知、近江國神崎郡位田村、市田村、河曲村、簗瀬村之內、右四箇村ニ而千五百石被相渡候、尤地所割方、幷鄉村引渡等之儀者、追而可相達旨年寄共申聞候、此段右家江御達被成候樣にと存候事、

五月

山階宮御方江　御家料千石被進之候

右之通被申出候間、御三卿江御達可申旨年寄共申聞候、右宮江被成御達候樣にと存候以上、

如斯趣にて、秀宮樣には下立賣御門之內下ル處へ、東山院之御舊殿を被用、從江戶造作被成進、千石に而親王家一軒、新規之御取立被進、今之閑院樣是也、是も中御門院御幼年之砌は、隨分御懦弱に見へ給ひける故、其事關東へも洩聞へ、若もの事欠にと思召入有之而、俗親王にて被差置也、夫故格別の思召入依有之被仰出けると、去御秘談承りし所也、然共末代俗親王四軒の列に立給ふ事、結搆成御事也、關東の御書出しなかりせば、何地かの門跡方の御附弟となり給ひ、沙門の物うき御境界たるべきに、文昭院樣〇德川家宣天下を໌ろし召れし時、禁庭御裁判之始なりし故、國王へ對し、仙洞樣へ之御手前、何角にかく被仰出ける物ならんと、無沙法に乍恐奉感歎御事ぞかし、〇節略

〔折たく柴の記中〕廿七日〇寶永六年正月に參し時に、また封事を奉る、〇中略此封事御覽の後仰下されし事ふたゝび三たびのゝち、申す所そのことわりあり、〇中略やがて今の法皇〇東山の皇子秀の宮とか申す御事、親王宣下あるべき由を申させ給ひたりけり

〇按ズルニ、伏見、有栖川、桂、閑院ノ四家ヲ世襲ノ親王家ト爲シ、之ヲ四親王家ト稱ス、

青蓮院宮

〔實麗卿記〕文久三年二月一日、從正親町同文來、續左、廿九日附

方今國事扶助精勤ニ付、非常以格別思召、還俗御內意被仰出候旨、加勢長谷三位被申渡候、〇下略

〔議奏言渡〕文久三年二月十七日、靑蓮院宮、自今被稱中川宮候旨、阿野殿御奉被仰出候旨申達、　八月廿七日、頭左中辨、彈正尹宮、任官消息宣下相濟旨言上、御名字朝彦之旨被届、以兒申上、彈正尹宮、今日元服任官宣下目出思召候、御大刀一腰、御馬一匹、代黄金十兩綿十把、二種一荷等賜之旨、目錄以越後被出、愛宕侍從申渡、尹宮參上、被伺天氣、今日元服任官宣下、名字宸翰拜領、以御使御品々拜領御禮被申上、賜祝酒、後時於御前御掛緒拜領御禮等、各以表使申入候、　十二月九日、尹宮御參、今日隨身兵仗勅授帶劍宣下御禮被申上、以表使申入、先是消息宣下相濟候旨頭辨言上、以藤丸申上、　元治元年十

—愛仁親王（光格天皇御猶子）

文政十一年八月廿三日親王宣下（○下略）

〔議奏日次案〕寶永七年八月十一日甲辰、東山院若宮、（秀宮）親王家可有御取立之由被仰出之、享保三年正月十二日辛酉、以秀宮可被稱閑院之由、（内々法皇（靈元）思召被尋進云々）令櫛司前大納言被仰於宮方、廿三日壬申、辰刻親王（直仁）宣下陣儀也、上卿藤大納言、（永福）辨兼榮、勅別當源大納言、（惟通）奉行職事重孝朝臣、爲御祝儀御大刀御馬代（黄金十兩）鯛二尾昆布（一箱）御樽（一荷）被遣之、御使園中納言、二月十一日庚寅、直仁親王今日元服、被任彈正尹、參入、（自長橋車寄方被參）於常御所被拜龍顏、申次右大將（公全）賜二獻、（女中之沙汰）爲御祝儀御大刀一腰、御馬代（黄金二十兩）一匹、紗綾十卷、（紅白）昆布一箱、鯣一箱、生鯛一折、御樽一荷等被遣之、御使兼親、

〔光臺一覽〕二親王家と申は、伏見、京極、有栖川、閑院の宮也、已前は三軒にて有しが、中御門院の御父帝東山院、宮方多くいましける中に、新大典侍の御腹とて、櫛笥前故内大臣隆賀公之御女之腹に御兩宮、中御門院は御せうと、今の閑院直仁親王は秀宮とて御弟也、外に女院の御本腹に、一ノ宮貴の宮樣とて、姬宮一方居坐かりける、寶永六己丑年極月十七日東山院崩御の砌も、貴の宮樣と秀の宮樣とは、御部屋住にて御座被成けるを從關東被及聞食、御諸司代松平紀伊守信庸江御書到來せり、其寫し傳奏衆へ參り拜見覺ェ居申候、御文言には、

一秀宮之御事、東山院御病中、被遊御苦勞候段被爲聞召候に付、今般親王家一家新規に被成御取立、家領千石被遣之候、是者格別之思召依有之、後々之例には難相成思召候御事

右之趣、兩傳奏衆迄其方差越、急度可申達旨御諚之御事候、恐々謹言、

御老中連名印如前

土屋相模守（名乗書判）

月日

松平紀伊守殿

文政五年十一月十五日爲御猶子十一歲　同六年九月廿三日親王宣下十二歲

熾仁親王仁孝天皇御猶子
嘉永元年十月十八日爲御猶子十四歲　同二年二月十六日親王宣下十五歲〇中略

〔近代帝王系圖〕閑院宮

東山院
直仁親王
寶永七年八月十二日爲親王家　享保三年正月十二日稱閑院　同月二十三日親王宣下

典仁親王櫻町院御猶子
寛保三年九月四日親王宣下

美仁親王桃園院御猶子
寶曆十三年十月十六日親王宣下

孝仁親王光格天皇御猶子
文化五年三月四日親王宣下

寛文七年七月六日相續、同九年八月廿九日親王宣下、同十二年六月八日改花町稱有栖川、

正仁親王 東山院御猶子

寶永四年爲御猶子、同五年九月廿九日親王宣下

職仁親王 靈元院皇子

享保元年十月十一日正仁親王跡相續、同六年十二月三日移于新第、同十一年十一月廿八日親王宣下

音仁親王 櫻町院御猶子

寛保二年三月十六日爲御猶子、同三年九月四日親王宣下

織仁親王 桃園院御猶子

寶暦十二年十二月七日爲御猶子、同十三年十月十六日親王宣下

韶仁親王 光格天皇御猶子

文化四年十二月十三日爲御猶子廿四歳、同五年二月廿一日名字勘進、三月四日親王宣下

幟仁親王 光格天皇御猶子

年三月十六日親王宣下

節仁親王仁孝天皇皇子

天保六年七月廿三日御相續御治定　同七年三月四日依御違例移于桂家　同月五日親王宣下

淑子內親王仁孝天皇皇女〇節略

〇按ズルニ、淑子內親王ハ、天保十三年九月十五日親王宣下、文久二年十二月廿三日內親王ニテ相續セラレタリ、

〔近代帝王系圖〕有栖川宮

後陽成院

好仁親王號高松

慶長十七年十二月廿六日親王宣下、二品彈正尹、

良仁親王號花町、又號桃園、後水尾院皇子、

正保四年九月十五日爲親王　十一月廿七日相續改高松稱花町、即移彼亭、　承應三年十一月廿八日踐祚、號後西院、

幸仁親王號有栖川

長仁親王 後西院皇子

寛文七年十一月穩仁親王跡相續 歲十二　同九年二月廿五日親王宣下

尙仁親王 後西院皇子

延寶三年八月十二日長仁親王跡相續　貞享元年十一月廿七日親王宣下 歲十四

作宮 始正宮、號常磐井、靈元院皇子

元祿二年十月十五日尙仁親王跡相續、稱號改常磐井、

文仁親王 號京極、靈元院皇子、

貞享五年八月六日有栖川幸仁親王爲養子、後被召返仙洞、元祿九年九月四日賜常磐井宮遺跡相續、號京極宮、同十年五月十一日親王宣下

家仁親王 東山院御猶子

寶永五年十二月爲御猶子　同六年四月七日親王宣下

公仁親王 櫻町院御猶子

寛保二年三月十六日爲御猶子　延享二年二月一日親王宣下

盛仁親王 光格天皇皇子 號桂

文化七年九月十八日御相續、稱號依思召自今被稱桂宮、十二月十八日御移徙　同八

御未ダ入内ナカリシカバ、先帝即チ仁孝天皇ノ猶子トナラセ給ヒシナリ、

〔後深心院關白記〕應安元年正月廿一日、今夜上皇○崇光一宮立親王宣下云云、及天明之程、三條大納言來相謁語云、今夜宣下上卿云々、御名字榮仁、公卿亞相、權中納言實綱、平宰相等參入、依別勅各立親族拜云云、

〔貞常親王記〕康正二年十月□日、從內御使源黃門來、故院被用異紋以下之事、其儘永世當家可用、且永世伏見殿御所ト可稱叡慮之旨傳申、

〔近代帝王系圖〕京極宮

正親町院

陽光院

智仁親王 號八條、關白秀吉公猶子、童名古佐麻呂、
天正十九年正月十六日親王宣下十二歲

智忠親王 元忠仁、號八條、
寛永三年十二月四日親王宣下

穩仁親王 後水尾院皇子
寛永廿年四月廿九日生、號幸宮、爲智忠親王養子、明曆元年十月十四日親王宣下、

邦忠親王櫻町院御猶子
寛保二年三月十九日爲御猶子、同三年十月廿五日親王宣下

貞行親王桃園院皇子
寶暦十年六月十八日御相續、同十三年十月八日親王宣下

邦賴親王櫻町院御猶子、初勧修寺寬寶法親王、
延享二年十二月一日御猶子、勧修寺相續、同三年五月八日親王宣下、安永三年十二月廿五日還俗、伏見家相續、同月廿六日親王宣下

貞敬親王後桃園院御猶子
寛政九年閏七月十日御猶子、八月五日親王宣下

邦家親王光格天皇御猶子
文化十四年正月十一日爲御猶子、二月十四日親王宣下

貞敎親王仁孝天皇御猶子
弘化四年五月三日爲御猶子、十二歲嘉永元年三月廿三日親王宣下○節略

○按ズルニ、當代ノ天皇ニ、未ダ皇后女御等ノ入内ナキ時、又ハ入内アリトモ未ダ皇子ノ御誕生ナキ間ハ、猶子養子ヲセサセ給ハザル例ニテ、伏見宮貞敬親王ハ、當時光格天皇ノ中宮ニ未ダ皇子オハセザリシ故ニ、先帝即チ後桃園天皇ノ猶子トナリ、貞敎親王ハ、當時孝明天皇ノ女

永祿六年十二月廿一日親王宣下

邦房親王 貞康親王男、實弟、元邦耳、

天正三年二月廿一日親王宣下

貞清親王 後陽成院御猶子

慶長十九年正月十九日叙二品

邦尙親王 依所勞未元服

承應二年十一月廿九日薨 四十一歲

貞致親王 邦道親王跡相續、後水尾院御猶子、

萬治三年十月十七日親王宣下

邦道親王 邦尙親王跡相續

慶安二年十一月廿六日親王宣下

邦永親王 靈元院御猶子

天和三年三月十二日爲御猶子　元祿八年十二月十四日親王宣下

貞建親王 東山院御猶子

寶永六年五月廿一日親王宣下

栄仁親王（號有栖川）

應永五年五月廿六日出家（四十八歳）

貞成親王（號伏見、後小松院御猶子、）

應永卅二年四月十六日親王宣下　文安四年十一月廿七日尊號太上天皇（七十七歳）　號後崇光院

貞常親王（號伏見殿、貞成親王二男、後花園院御弟、）

文安元年二月廿日親王宣下（廿歳）

邦高親王（元邦康、後土御門院御猶子、）

文明六年四月廿六日親王宣下

貞敦親王（後柏原院御猶子）

永正元年二月廿五日親王宣下（十六歳）

邦輔親王（後奈良院御猶子）

享祿四年四月廿四日親王宣下

貞康親王

全仁親王三品中務卿、太宰帥、號常磐井、　滿仁親王無品出家

直明王○後改直仁　全明親王無品彈正尹、後崇光院御猶子、

恒直親王太宰帥、後柏原院御猶子、

〔皇胤紹運錄〕

後二條院　邦良親王早世、木寺宮、文保二、三、九元服、立太子、正中二、三、廿薨、

康仁親王木寺、中務卿、存宮、廢存宮并親王號、　邦恒王早世

世平王早世　邦康親王二品中務卿

靜覺法親王二品御室、後花園院御猶子、

〔康富記〕康正元年十月廿八日、是日木寺宮有御元服、今年正月有親王宣下、爲仙洞法皇○後小松御養子、令蒙親王宣旨給、後二條院御末孫也○中略是日即御叙品任官事被宣下、非陣儀消息宣下也、是又文安三年三月式部卿親王宣下御例也、令叙三品給、又令任中務卿給、

〔近代帝王系圖〕伏見宮

崇光院

世襲親王

〔延喜式中務十二〕凡諸王以上、娶臣家女爲妻者、不得准夫品位、其內親王及女王、亦不得准夫品位、但五世王者得准夫位、

〔令義解職員一〕正親司

正一人、掌皇親名籍（謂二世以下四世以上名籍、案戸令皇親爲不課、故知於京職亦可有皇親戸籍也、）事、佑一人、大令史一人、少令史一人、使部十人、直丁一人、

〔延喜式宮內十一〕凡親王諸王名籍者、皆於正親司案記、

〔類聚符宣抄六〕

皇親籍三卷

勘出帳一卷

並延曆八年作

右外記曹司無有件書、而今四部之書在正親司、望請取彼一部以爲官料、

弘仁十二年十一月四日　　參議左大辨直世王奉

右大臣宣、依請、

〔延喜式宮內三十一〕凡其有品內親王、若有請事者申省、省受申官、即朝參及勅召者申縫殿寮、又內侍知之、

〔官職難儀〕さていま天子の皇子にてもなくて、二代三代の御末にて、親王宣下侍るは、一向道理に叶はぬ事也、されどもいづれも天子御猶子の號にて宣下也、玄からざるはなきなり、

〔類例略要集〕親王家　御家督御相續之節ニ、御所之御養子ニ被成、仍而御代々稱親王、若無其儀稱何宮、又ハ何王なり、

〔皇胤紹運錄〕

龜山院

恒明親王（一品式部卿、常盤井宮、）

りばらトハ、其母ノ皇族ナルヲ云ヘルナリ、

皇子初見

〔日本書紀六垂仁〕二十三年冬十月壬申、天皇立於大殿前、譽津別皇子侍之、

○按ズルニ、是レ皇子ヲ以テ、名ノ下ニ連ラネタル始メナリ、

親王初見

〔日本書紀二十九天武〕八年十二月戊申、由嘉禾、親王諸王諸臣、及百官人等給祿各有差、

〔續日本紀一文武〕四年六月甲午、勅淨大參刑部親王、〇中略、撰定律令、賜祿各有差、

○按ズルニ、同紀是ヨリ先キ、正月丁巳、授新田部皇子淨廣貳ト見エ、四月癸未、淨廣肆明日香皇女薨ト載タリ、然ルニ本文ノ如ク、六月ニ至リテ、刑部親王ト名ノ下ニ連稱シタリ、蓋シ親王ノ稱ハ、此間ニ於テ制定セラレシモノナランカ、

〔帝王編年記十文武〕大寶元年今年以皇子號親王、

〔神皇正統記文武〕皇子を親王といふこと、此御時にはじまる、

親王制度

〔令義解四繼嗣〕凡皇兄弟皇子皆爲親王、女帝子亦同、謂據下嫁四世以上所生、何者案下條、爲五世王不得娶親王故也、以外並爲諸王、自親王五世雖得王名、不在皇親之限、

〔六典二吏部〕皇兄弟皇子皆封國、謂之親王、

○按ズルニ、女帝ノ子ヲ親王ト爲ストハ、内親王ノ諸王ノ妻トナリテ御子ヲ生ミ給ヒ、夫王歿シテ後ニ即位シ給ヒシ時ノ事ニテ、其御子ハ親王タル事ヲ得ルヲ云フナリ、日本書紀齊明紀ニ、天豐財重日足姫天皇、〇齊明初適於橘豐日天皇〇用明之孫高向王、而生漢皇子、後適於息長足日廣額天皇、〇舒明而生二男一女、〇中略明年正月后即天皇位トアリ、漢皇子ハ即チ此例ナリ、

〔令義解二戸令〕凡戸主皆以家長爲之、戸内有課口者爲課戸、無課口者爲不課戸、不課謂皇親、〇下略

〔令義解四繼嗣〕凡王娶親王、臣娶五世王者聽、唯五世王不得娶親王、

○按ズルニ、五世王ニシテ親王ヲ娶レバ、其子ハ二世王トナルガ故ニ此制アルナラン、

〔榮花物語九石階〕ちご宮の、いみじうあわてさせ給ふほどのうつくしきにも、○下略

〔紫式部日記〕いと宮いだき奉らんと殿のたまふを、いとねたきことにし給ひて、あゝとさいなむ、

○按ズルニ、いと宮トハ最モ季ナル宮ヲ云フナルベシ、

〔榮花物語八初花〕中宮の若宮○後一條今宮○後朱雀さしつゞきて、月日の如くにて光りいで給へるに、○下略

〔大鏡五太政大臣兼家〕いまひとつの御はらのおほいぎみは、冷泉院の女御にて、三條院、彈正宮○爲尊親王、帥宮○敦道親王の御母にて、三條院位につかせおはしましゝかば、贈皇后と申き、

〔源氏物語五若紫〕兵部卿の宮は、いとあてになまめい給へれど、にほひやかになどもあらぬを、○下略

〔紫式部日記〕中務の宮○兼明親王わたりの御事を御心に入れて、そなたの心よせある人とおぼしてかたらはせ給ふ、

○按ズルニ、彈正宮ハ彈正尹ニ任ゼラレ、帥宮ハ太宰帥ニ任ゼラレ、兵部卿の宮、中務の宮、マタ各其官ニ任ゼラレタルナリ、

〔伊勢物語下〕昔心つきて色ごのみなる男、長岡といふ所に家つくりてをりけり、そこのとなりなりける宮ばらに、こともなき女どもの、○下略

○按ズルニ、宮ばらトハ、其母ノ皇族ナルヲ云フ、

〔源氏物語六末摘花〕左衛門のめのとゝて、大貳のあまのさしつぎにおぼいたるがむすめ、大輔の命婦とて、うちにさぶらふ、わかむどほりの兵部の大輔なるがむすめなりけり、

〔落窪物語一〕わかんどほりばらの君とて、母もなき御むすめおはす、

○按ズルニ、わかんとほりハ、河海抄ニ王家無等倫ノ字音ニテ王孫ヲ云フト云ヒ、閑田耕筆ニ王家統天子の御系さいふことなりト云ヒ、和訓栞ニ和漢通リノ義也ト云ヒ、黑川春村ノ北史國語考ニ稚子ワコ御統ミドホリノ義ナルベシト云ヒ、古來諸說一樣ナラズト雖、其皇族ヲ云ヒシコト明ナリ、わかんとは

〔大鏡七 太政大臣道長〕第一の女君は、一條院の御時に、長保元年十一月一日、御年十二にて女御にならせ給ふ、○中略中宮と申し程に、うちつゞきてをとこみこ二人うみ奉り給へりし、

〔榮花物語一 月宴〕基經のおとゞの御女の女御の御はらに、醍醐の宮達あまたおはしましける、

〔玉勝間四〕宮と申す稱

天皇の御胤を宮と申すこと、いにしへは皇子皇女にかぎれり、皇子の御子よりしては、宮と申すことなかりき、然るを中ごろよりして、皇子の御子をも申し、近くは親王の御すぢをば、世々すべて宮と申す事となれり、

〔榮花物語一 月宴〕按察のみやす所、とてさぶらひ給を、とこ三の宮、女三のみや、うみたてまつり給つ、又この九條殿の女御、をとこ四五のみや、うまれ給ぬ、又宣耀殿女御、男六八のみやうまれ給へり、○中略麗景殿の女御、をとこ七の宮、女六の宮、生れ給にけり、式部卿の宮の女御、女四の宮ぞうみたてまつり給へりける、廣幡御息所、女五の宮うまれ給へり、按察の御息所、をとこ九の宮うまれ給などして、又九條殿の女御七九十の宮などあまたさしつゞきうまれさせ給て、○中略おほかたをとこ宮九人、女みや十人ぞおはしける、

〔玉勝間四〕女一宮女二宮など申唱へ

女一ノ宮女二ノ宮など申す女字、音によみならへれども、榮花物語などに、男一ノ宮男二ノ宮などある男は音によむべくもあらず、必をとこ一の宮などゝよむべければ、女もいにしへは、をんな一の宮、をんな二の宮などぞよみつらむ、ことわりをもて思ふにも、字音にはよむまじきつゞきなり、

〔源氏物語二十 若菜〕もてわづらはせたまふ姫宮の御うしろみに、これをやなど、ひとしれずおぼしよりけり、

一トナリ、一位ヨリ五位ニ至リ、蔭子ハ初メ從五位下、若クハ正六位上ニ敍セラルヽヲ例トス、官ハ大臣、納言、神祇伯、或ハ大學頭等ニ任ゼラル、是レマタ諸臣ノ下ニ立タシメズシテ多クハ長官ニ任ゼラルヽ例ナリ、其位記官職アルモノニハ位田食封ヲ賜ヒ、一般ノ男王女王ニハ、其ニ春秋二季ニ時服料、及ビ季祿ヲ賜フ、後諸王漸ク蕃衍スルニ及ビテハ、時服ヲ賜フベキ諸王ノ數ヲ限定シ、其死闕ヲ待チテ、順次之ヲ補フコトニ定メラレタリ、

凡親王ニシテ大罪アレバ、先ツ屬籍ヲ削ル、伊豫親王ノ幽セラレタル、不破內親王ノ流ニ處セラレタル時ノ如キ是ナリ、諸王ニシテ大罪アレバ先ツ王名ヲ除ク、鹽燒王ノ獄ニ下サレタル、長野女王ノ配流セラレタル時ノ如キ是ナリ、但シ親王諸王共ニ、多クハ姓ヲ賜テ庶人トナシ、然ル後處罰セラルヽヲ例トス、

〔日本書紀〈三神武〉〕諸皇子〈ミコ〉

〔類聚名義抄〈六王〉〕親王〈ミコ〉

〔運歩色葉集〈四志〉〕親王〈唐帝、大王、竹園、宗岡、天枝、帝葉、一品、二品、三品、四品、〉

〔下學集〈上人倫〉〕親王〈指皇子、或帝之兄弟、叔父等也、〉　竹園〈親王唐名也〉　天枝　帝葉〈共指親王〉

〔徒然草〈上〉〕竹のそのふの末葉まで、人間のたねならぬぞやんごとなき、

〔史記〈五十八梁孝王世家〉〕於是孝王築東苑、方三百餘里、〈西京雜記云、梁孝王苑中有落猿巖、棲龍岫、雁池、鶴洲、鳧島、諸宮觀相連、奇果佳樹、瑰禽異獸、靡不畢備、俗人言梁孝王竹園也、〉大治宮室、爲複道、自宮連屬於平臺三十餘里、〈今城東二十里、有故臺址、不甚高、俗云平臺、又一名修竹苑、〇中略〉

〔邦輔親王御誕生記〕永正十年三月廿一日、〇中略抑從禁裏御大刀□範久爲御使、若宮誕生珍重之由被仰下、　廿七日、前內府大刀□一腰持參、竹園〇伏見宮貞敦親王御對面、　廿八日、典藥頭親就朝臣、大刀大藏卿、大刀、兩御所進之、四辻大納言、大刀賴孝大刀等持參、各竹園御對面、新典侍殿來臨、一荷兩種被進、三條內府同前大刀持參、於產所有三獻云云、以後竹園御對面、

ビ京極ト改稱シ、更ニ改メテ桂宮ト稱セラレシガ如キ是ナリ、

世襲親王ハ、天皇ノ猶子タラザレバ親王タルヲ得ズ、而シテ世襲親王ノ子ノ宮門跡タルニハ、天皇ノ猶子アリ養子アリ、或ハ又初メ天皇ノ養子トナリ、更ニ將軍ノ猶子トナリテ、然ル後親王宣下アルモアリテ一樣ナラズ、猶子ハ嵯峨天皇ノ皇子源定ヲ以テ、淳和天皇ノ猶子ト爲シ給ヒシニ始マリタレドモ、是ハ普通ノ猶子ニアラズ、次デ宇多天皇ノ皇子雅明ハ、醍醐天皇ノ猶子トナリ、花山天皇ノ昭登清仁ノ二皇子ハ、冷泉天皇ノ猶子トナリテ、共ニ親王宣下ヲ蒙レリ、蓋シコノ時ノ制タル、天皇御出家後ノ所生ノ皇子ハ、親王タルヲ得ザリシ故ニ、斯ルコトモアリシナリ、其他臣下ノ猶子トナリ給ヒシハ、後奈良天皇ノ皇女聖秀尼王ノ、足利義晴ノ猶子トナリ、陽光院ノ皇子智仁親王ノ、豐臣秀吉ノ猶子トナリ給ヒシ類ニシテ、臣下ノ養子トナリ給ヒシハ、後陽成天皇ノ二皇子信尋、昭良ノ、近衞家及ビ一條家ノ養子トナリテ、共ニ其家ヲ相續シ給ヒシ類是ナリ、

諸王ノ稱ハ、既ニ大寶以前ニ見エテ、天武天皇二年ノ紀ニ、諸王四位栗隈王トアリ、又其十二年ノ紀ニ、諸王五位伊勢王トモ見エタレドモ、女王ノ稱ハ文武天皇三年ノ紀ニ、坂合部女王トアルヲ始メトス、大寶ノ制、五世王ハモト皇親ノ限ニアラザリシヲ、慶雲三年ニ至リ親ヲ絕ツニ忍ビズトテ、特ニ皇親ノ列ニ入ルコトヽナレリ、然ルニ桓武天皇延暦十七年ニ至リ、奸濫ノ徒宗室ヲ汚ス懼レアリトテ、再ビ古制ニ復シテ皇親ノ以外ト定メ、其名籍計帳等諸王ニ關スル一切ノ事ハ、總テ正親司ニテ管理シタリ、

諸王ノ待遇ハ、親王ニ比シテ大ニ差降アリト雖、マタ諸臣ト同ジカラズ、其辭訟アル時ハ、特ニ座席ヲ賜ヒ、皇親以外トイヘドモ永世不課戶トシテ、特ニ課役ヲ蠲除スル如キ、優遇他ニ異ナルモノアリ、位階ハモト天武天皇ノ時ハ、親王ト等シカリシモ、大寶ノ制ニテ、諸臣ト同

白河天皇ノ皇子高倉宮以仁王、後西院天皇ノ皇女貞宮ノ如キ、及ビ後世總テ比丘尼御所ト稱スルモノヽ如キハ、共ニ親王宣下ヲ得ズシテ諸王タルモノナリ、而シテ孫王トイヘドモ宣下ヲ蒙レバ、或ハ親王タルコトヲ得ルナリ、孫王ニシテ親王宣下ノ初例トモ見ルベキハ、小一條院ノ御子敦貞敦元ノ二王、及ビ儇子嘉子ノ二女王トス、然レドモ、二王ハ三條天皇ノ皇子ニ准ジテ親王ト爲シ、二女王ハ天皇ノ養女トシテ内親王ノ宣下アリシナリ、此親王宣下ノ制ハ、維新ノ後、廢セラレテ古制ニ復スルコトヽナレリ、

中世以降、皇親漸ク蕃衍シ府庫ヲ費スコト多キヲ以テ、悉ク封戸ノ制ニ從フコト能ハズ、是ニ於テ姓ヲ賜ヒ人臣ニ列スルコト起リ、桓武天皇延暦六年、諸勝岡成ノ二皇子ニ廣根朝臣長岡朝臣ノ姓ヲ賜フ、是ヲ皇子賜姓ノ始メトス、次テ嵯峨天皇ハ、ソノ八皇子ニ悉ク源朝臣ノ姓ヲ賜ヘリ、爾後皇子ノ人臣ニ列スルモノ世々絶エズ、然レドモ種々ノ事情ニヨリ、賜姓ノ後再ビ親王宣下アリテ、皇親ニ列セシモノナシトセズ、醍醐天皇ノ皇子兼明親王ノ如キハコノ類ナリ、諸王ノ姓ヲ賜ヘルハ、聖武天皇天平八年ニ、敏達天皇ノ玄孫葛城王等ニ橘宿禰ノ姓ヲ賜ヒシ類ニテ、稱德天皇天平勝寶四年ニハ、皇孫智努王等ニ文室眞人ノ姓ヲ賜ヒ、爾後漸クソノ數アリ、降リテ仁明天皇ノ朝ニ至リ、明日香親王ガ、其所生ノ男女ニ姓ヲ賜ハンコトヲ懇請シタマヒテヨリ、孫王賜姓ノコト益多シ、後ニハ王號ヲ稱スルモノ大ニ減ジ、獨リ神祇伯ヲ以テ世職トセル白河家ノミハ、永ク王號ヲ繼續シタリ、コノ賜姓ノ事ト、前ニ述ベタル皇子皇女出家ノ事トニヨリテ、皇族ノ數ハ極メテ少クナリ、且世襲親王トテハ、古クハ常盤井宮、木寺宮、近クハ伏見、桂、有栖川ノ三親王ニ過ギザリシヲ、後又閑院宮ヲ立テラレテヨリ、四親王家トナレリ、但シ世襲親王家ニ嗣ナクシテ、皇子ノ入テ其家ニ嗣トナリタマフ時ハ、多クハ宮號ヲ改メ新ニ其家ヲ興スヲ例トス、タトヘバ八條宮ノ常盤井ト改メ、再

天皇ノ皇女親子内親王ノ十四代將軍家茂ニ降嫁アリシニ過ギズ、女王婚嫁ノ例ニ至リテハ、攝關將軍諸侯門跡等極メテ多ク、攝關ニテハ有栖川宮職仁親王ノ女孝宮ノ近衞經熈ニ嫁シタル、將軍ニテハ伏見宮貞清親王ノ女顯子ノ德川家綱ニ嫁シタル、諸侯ニテハ同親王ノ女安宮ノ德川光貞(紀伊)ニ嫁シ、有栖川宮織仁親王ノ女富宮ノ德川齊昭(水戸)ニ嫁シタル、門跡ニテハ有栖川宮幸仁親王ノ女淑宮ノ東本願寺光性ニ嫁シ、閑院宮直仁親王ノ女始宮ノ西本願寺光啓ニ嫁シタル如キ是ナリ、

入道親王ト法親王トハ、共ニ皇兄弟姉妹、皇子皇女、若クハ孫王ノ佛門ニ入レルモノニテ、親王ニシテ入道セルヲ入道親王ト稱シ、出家ノ後親王タルヲ法親王ト號ス、但シ孫王ノ法親王タルハ異例ニシテ普通ノコトニアラズ、抑出家入道セシモノ、親王ニハ平城天皇ノ皇子眞如アリ、親王タラザル皇子ニハ、光仁天皇ノ皇子開成、花山天皇ノ皇子深觀覺源ノ如キアリ、然レドモ此等ハ未ダ入道親王、又法親王ト稱セズ、入道親王ノ稱ハ、三條天皇ノ皇子惟信入道親王ニ始マリ、法親王ノ稱ハ、白河天皇ノ皇子覺行法親王ヲ始メトス、其他孫王ニシテ法親王タリシモノアリ、後鳥羽天皇ノ皇孫澄覺法親王、順德天皇ノ皇曾孫承鎭法親王ノ類是レナリ、而シテ此等ノ皇子皇孫ハ何レモ一旦天皇ノ猶子トナリテ、然ル後法親王タルヲ例トス、中世以後皇親ノ制度漸ク衰へ、武家ノ權勢盛ナルニ及ビテハ、諸王ハモトヨリ、皇子皇女等多クハ落飾シテ僧尼トナリ寺門ニ入リ、皇子ノ住職シ給フベキ寺ヲ宮門跡ト唱へ、皇女ノ寺ヲ比丘尼御所ト稱シ、何レモ十數箇寺アリシナリ、

皇子皇女ハ、モト生レナガラニシテ親王タリシヲ、淳仁天皇以後、親王宣下ト云フコト始マレリ、蓋シ淳仁天皇ハ、皇孫ヲ以テ入テ大統ヲ繼ギタマヒシユヱ、自ラ斯ルコトノ起リシモノニテ、後ニハ皇子皇女モ、宣下ヲ待タザレバ親王タルコトヲ得給ハザルニ至レリ、即チ後

ニ刑部親王ト記セルヲ始トス、蓋シ此時ニ定メラレタルモノナラン、此ヨリ後ハ何レモ某親王又ハ某内親王ト書シテ、名ノ下ニ連稱スルコトヽナレリ、

親王ノ座次ハ、常ニ諸王諸臣ノ上ニアリテ、諸王諸臣ハ、朝堂ニ在テハ座ヲ避ケ、途上ニ於テハ歩ヲ讓ラザルベカラズ、其他親王罪ヲ犯セバ、先ヅ其罪ヲ議センコトヲ奏請シテ裁可ヲ請ヒ、其薨ズル時ハ、天皇爲メニ朝ヲ廢シ、賻物ヲ賜ヒ、使ヲ遣シテ葬事ヲ監セシメ給ン等、待遇極メテ優渥ナリ、其位階ハ品ト稱シテ、諸王諸臣ニ分チ、一品ヨリ四品ニ至ル、品ニ叙セラレザルヲ無品親王ト云フ、蔭子ハ初メ從四位下ニ叙セラルヽヲ例トス、官ハ大臣、太宰帥、八省卿等ニ任ジ、或ハ彈正尹、三國大守等ニモ任ゼラル、是レ親王ハ人臣ノ下ニ立タザル制ナルヲ以テ、長官タルヲ得レドモ、次官タル可ラザル故ナリ、俸祿ニハ品田アリ、食封アリ、時服及ビ季祿アリ、所屬ノ職員ニハ、文學、家令、家扶、家從、書吏、及ビ帳内等アリ、中古以降ハ勅別當、家司、職事、藏人、侍者、御監等ヲ置キ、特ニ内舍人、大舍人等ヲ賜フモアリ、而シテ此等ノ俸祿職員ハ、其品位ニヨリ、又ハ官職ニヨリテ多寡均シカラズ、又男女ニヨリテ其數ヲ異ニシ、大抵内親王ハ男親王ノ半ヲ減ジテ賜フヲ定例トス、後世ニ至リテハ、封戶ノ制多ク行レズ、年官年爵ヲ以テ俸祿ニ代フルニ至レリ、

内親王トハ、天皇ノ皇姉妹皇女等ノ稱ニシテ、天武天皇ノ紀ニ始テ見エタレドモ、之ヲ名ノ下ニ連書スルハ、文武天皇大寶元年ノ紀ニ、泉内親王、大伯内親王ナドアルヲ以テ濫觴トス、内親王ノ臣下ニ降嫁セルコトハ、古クハ醍醐天皇ノ皇女勤子内親王、及ビ韶子内親王ノ、藤原師輔源清蔭等ニ降嫁セル、近クハ後陽成天皇ノ皇女清子貞子ノ兩内親王ノ、鷹司信尚及ビ二條康道ニ降嫁セル類是ナリ、後世攝關ニハ其例甚ダ多カレドモ、其他ニハ只德川氏ニ一二ノ例アルノミニテ、靈元天皇ノ皇女吉子内親王ノ七代將軍家繼ニ結納ノ儀アリ、仁孝

古事類苑

帝王部二十四

皇親上

皇親トハ、皇兄弟姉妹及ビ皇子皇孫以下スベテ天皇ノ親族ヲ云フ、日本書紀ニ據ルニ、其始メ皇親ノ男子ハ皆某尊、又ハ某命ト書シ、女子ハ何レモ某姫又某媛ト記セリ、某皇子、某皇女ノ稱ハ始メテ垂仁紀景行紀ニ見エ、諸王ノ稱ハ推古紀ニ見エタリ、此ヨリ後ハ、天皇ノ御子ハ多クハ某皇子某皇女ト云ヒ、或ハ某王某女王トモ稱セリ、降リテ天武天皇ノ時ニ至リ、親王諸王ノ別アリ、文武天皇大寶元年ニ至リ、皇親ノ制度ヲ立テヽ、皇親ヲ親王ト諸王トニ別チ、皇兄弟姉妹及ビ皇子皇女一世ヲ親王トシ、皇孫二世皇曾孫三世皇玄孫四世マデヲ諸王トス、玄孫ノ子即チ五世王以下モ、王ト稱スルコトヲ得レドモ皇親ノ限ニアラズ、又諸王ハ親王ヲ娶リ若クハ諸臣ニ嫁スルコトヲ得レドモ、親王ハ諸臣ト婚スルコトヲ聽ルサヾル等ノ制アリ、古事記日本書紀ニハ、皇子ヲ稱スルニ某王ヲ以テシタレドモ、續日本紀以後ノ國史ニハ、皇孫以下諸王ニアラザレバ某王ト記サズ、從ヒテ之ヲ訓ズルニモ、親王ハミコ、諸王ハオホキミト差別セリ、

親王トハ、天皇ニ最親シキ王ト云フ義ニシテ、コレニ親王、內親王、入道親王、法親王等ノ別アリ、親王ノ稱ハモト隋唐ノ制ニ、皇帝ノ子ノ某國ノ王タル者ヲ親王ト云フニ依リシモノニテ、此稱早ク天武天皇ノ時ヨリ見エタレドモ、之ヲ名ノ下ニ連書スルハ、文武天皇四年ノ紀

古事類苑

帝王部二十四

皇親上 皇親妃<u>併入</u>

〔百錬抄四一條〕長德四年十二月三日、强盜入宣耀殿東宮○三條御息所、○娍子希代事也、

〔小右記〕長元五年九月十三日辛巳、東宮○後朱雀御息所一品禎子、戌刻產女子、

〔玉葉〕承元三年三月廿三日、此日故攝政前太政大臣○藤原良經長女有入宮事、名立子、生年十八、與余同腹、母權中納言能保卿女、

廿六日、早旦著直衣參東宮○順德御方、即參御息所御方、即退出、歸一條亭、今日以下每夜御息所昇給也、

〔續史愚抄十六花園〕正和三年六月廿日乙巳、春宮○後醍醐御息所藤原朝臣禧子入道前太政大臣實兼女、母從二位藤原朝臣孝子、自去秋盗取給、因無參入儀、今月有露顯云、日闕、著帶、

〔近代御系譜〕青綺門院藤舍子、二條關白吉忠公女、享保十八年九月廿八日、爲東宮○櫻町御息所、

妃名於萬代、

〔日本書紀三十持統〕高天原廣野姫天皇、〇持統 少名鸕野讚良皇女、天命開別天皇〇天智第二女也、母曰遠智娘、〈更名美濃津子娘也〉天皇深沈有大度、天豐財重日足姫天皇〇齊明三年、適天渟中原瀛眞人天皇〇天武爲妃、

〔續日本紀四十桓武〕延暦九年閏三月丙子、是日皇后崩、甲午、參議左大辨正四位上紀朝臣古佐美奉誄人奉誄、諡曰天高藤廣宗照姫尊、〇中略 皇后姓藤原氏、諱乙牟漏、贈内大臣贈從一位良繼之女也、母尚侍贈從一位阿倍朝臣古美奈、后性柔婉美姿、儀閑於女則、有母儀之德焉、今上之在儲宮也、納以爲妃、生皇太子賀美能親王、高志内親王、

〔日本紀略醍醐一〕延喜十九年十月十一日乙巳、女。御。藤原氏〇皇太子保明妃貴子 於東宮賀右大臣〇藤原忠平四十算、

〔日本紀略十一條〕長德元年四月六日壬午、關白正二位藤原朝臣道隆依病入道、年四十三 中宮〇定子并東宮。女。御。〇道隆三條女御 行啓彼里第、

〔大鏡七太政大臣道長〕つぎの女君〇嬉子はそれも内侍のかみ、十五におはしますに、いまの東宮〇後朱雀十三にならせ給ふとし、治安元年二月一日まゐらせ給ひて、春宮女御にてさぶらはせ給ふ、とうくはでんにぞおはしまし、との〇道長入道せさせ給ひて後の事なれば、いまの關白殿〇頼通の御女となづけたてまつりてこそはまゐらせ給ひしか、

〔續世繼三大内渡〕としもかはりぬれば、院〇鳥羽の姫宮、〇姝子東宮〇二條の女御にまゐり給、高松の院と申御事なり、

〔百練抄四一條〕正暦四年閏十月廿日、小右記云、〇中略 十四日〇正暦五年二月 觀修僧都來云、近曾東。宮。更。衣。〇右大將濟時子修法、猛靈忽出來、〇下略

〔河海抄二〕六條御息所〈秋好中宮母儀、前。坊。御。息。所。〉中將御息所〈貞信公女、前。坊。御。息。所。〉

寬弘八年六月十三日

後一條院踐祚

敦明親王立坊

長和五年正月廿九

後冷泉院踐祚

後三條院立坊後朱雀皇子

寬德二年正月十六日

白河院踐祚

實仁親王立坊後三條皇子

〔薩戒記〕應永三十二年二月十六日丁巳、辰刻許下人云、小川宮、院(後小松)第二御子、内(稱光)御一腹儲君、近頃勸修寺中納言經興卿奉養育件御所、彼納言家也、即奉長宿者也、今曉薨御、御頓死也云々、仰天馳參、○中略昨日及秉燭無殊御氣、自去丑刻許令苦惱御、非殊御事歟之由存之處、女房被告危急之由於中納言云々、○中略其後日野大納言入道參入召醫師、先是御息令絶御乎、言語道斷御事也者、○中略或人曰、當年三合災也、又去頃有恠異等、一日吉社竹枯、是竹園災也一日吉大宮寶前有死猿無首云々、彼宮申御歳也、當時此宮爲申歳、此宮御怪異也云々、彼猿事正月廿二日事也云々、

皇太子妃

○

〔日本書紀十七繼體〕八年正月、太子妃春日皇女、晨朝晏出、有異於常、太子意疑、入殿而見、妃臥床涕泣惋痛不能自勝、太子恠問曰、今旦涕泣、有何恨乎、妃曰、非餘事也、唯妾所悲者、飛天之鳥、爲愛養兒、樹巓作巢、其愛深矣、伏地之虫、爲護衞子、土中作窟、其護厚焉、乃至於人、豈得無慮、無嗣之恨、方鍾太子、妾名隨絶、於是太子感痛、而奏天皇、詔曰、朕子麻呂古、汝妃之詞、深稱於理、安得空爾無答慰乎、宜賜匝布屯倉、表

保明親王醍醐子　元名崇象、□養太子

慶賴太子保明子

實仁親王後三條子

惟善親王後二條太子

○按ズルニ、薨太子ハ此ノ他ナホ後醍醐天皇ノ皇子邦良親王、恒良親王、後小松天皇ノ皇子小川宮等アリ、

〔園太曆〕貞和四年十月廿七日庚寅、今日儲皇〇崇光冠儀、幷讓國、〇光明立坊、〇直仁重疊嘉禮之日也、〇中略依踐祚立坊同日例、於陣被行之、右大臣參議忠嗣執筆、

踐祚立坊同日例

淳和天皇踐祚

恒世親王立坊

弘仁十四年四月十七日

圓融院踐祚

華山院立坊

安和二年八月十三日

華山院踐祚

一條院立坊圓融皇子

永觀二年八月廿七日

三條院踐祚

後一條院立坊

御ノ跡ニテハ傳奏ヲハジメ所司議奏ナド參ラルベシ、コノ饗應ニハ權之進タチ參リテハヤシナドアルベキカト仰ラル、申モ恐アルコトナガラ、何ノコトニモセヨ、天下ノ式トナルコトハコレアルベキコトナリ、御身ノタメノミナラズ、御上ノ御爲ニモ然ルベカラズ、初テノ御コト重テハトモカクモ此タビハカクアルベキコトヽ奉二恐察一、イツモノ拜賀元服ナドヽハチガヒテ、殊外ニ心遣ヒナルコトナリ、渡御ノ間ハ諸卿ヲ初トシテ末マデ不レ殘平折敷ナリ、還幸ノ跡ノ饗應ハ、大臣ハ大臣、公卿ハ公卿、殿上人ハ殿上人ト、夫々ニ膳部ヲカヘテ、三寶モアレバ足打立モアリ勿論平折敷モアリ、夫ユヱ二段ニナリテ、別シテヤカマシキコトナリト仰ナリ、　十九日、昨日渡御御祝儀參候、昨日ハ隨分ノ御機嫌ニテ、朝モ正辰刻渡御ニテ、御獻上引ワタシナド相スミテ、乘馬御覽、御方ノ輿ヨセノ前ヲ馬埒トシ、竹ヲ渡シ叡覽ノ假座ニムラサキノ幕ヲ引、最中ニ御簾ヲ下シ、前ノ椽ガハニ高欄ヲツケテ、簾外ニ准后關白ノ御座アリ、乘馬ハ左衛門、一角、甚內、新八ナリ、夫ヨリ御庭御覽、御泉水ノ築山ノ上ニハ、初茸松茸ヲ多ク植ラレタリ、寢殿段上マデ御步行ニテ還幸、御料理スミテ御靈祭御覽、御格子ノ前ニ神輿ヲ下シ奉幣ナドアリ、還幸ノ後御出スグニ初更前ニ還幸ノヨシ、前ニ記スゴトク上ヘ獻上ヲ初メトシテ、女中下々マデ引出物アリ、アナタヨリモ御ミヤゲアリ、上ヲ初トシテ諸大夫隱居諸大夫近習靑士女中方不レ殘下サレモノアリ、

〔二中歷一人代〕薨逝太子

菟道稚郎皇子應神一御子

木梨輕王允恭子

厩戸皇子用明子　號二聖德太子一

草壁皇子天武子　文武父

聖武皇子不レ知レ名

ノ風流ノ御歌ニアラバコソ、父帝ヲミタヒ參ラセテヨミタマヒシユヱナリ、ソレハ又一時ノ感情ヨリ出ヅトモ云ベシ、コノ御コトハ一時ノ感發トモ云ガタシ、治世ノ第一ト云ベシ、母后ヲシタヒマス御心モ、八歳ノ宮ニオトリ給ハズ、八月十二日參候、仰ニ、來ル十八日ニハ、東宮御方、御本殿ヘ渡御ナルベシト仰出サレタリ、目出度コトニ思シメス、近代ナキコト、メヅラシキ御コトナリ、近代ハ急度御外祖ニ執柄ノ家珍ラシキコトユヱ其沙汰ナシ、昔御堂殿〇藤原道長ヘ東宮ノ渡御アリシハ格別ノ御コトニテ、五十四ノ競馬ヲツガヒテ御覽ニ供セラレシコト御記錄ニアリ、近代ニテハ後水尾院ノ應山ノ櫻ノ御所ヘ渡御ナリシハ微々ノ御コトニテ度々ナリシ、其後ハ執柄ノ御外祖タルコトナキ故、コノ御家ニモメヅラシ、末々御人衆モシカトハ究ラズ、先刻ハ治部大輔ガ來リテ、本殿ノ表替掃除ノコトナドカクノ如ク取込ノ由、東宮ヲ初メ奉リ、女中公家地下ノ役人マデ、不殘御饗應ノ上御土產ヲ進セラレシモノアリ、小サキ御厨子棚フンダミ金ノ高マキヱアリ、上ノ段ニ指圖ヲ一通リ不殘ソロヘテ、尉翁ヲ初トシテ小面平太等ヲ並ベラレタリ、香箱ヘハ微塵人形ヲツメラレタリ、外ニ東求院良山御筆ノ法書ノ卷物一卷梅ノ折枝ニ付テ獻ゼラル、コレニ付テフト仰ラルヽハ、大事ノ故實アリ教フベシ、世ニ佐理行成道風ヲ三跡ト云、此三跡ノ字ハ、本ト御堂殿ヘ渡御ノ時ヨリ初テ云習セシコトナリ、コノ時御堂殿ノ獻上、佐理ト道風トノ筆跡ノ卷物ヲ獻ゼラレシガ、今一卷ヲ行成ニカヽセテ梅ノシモトニ付テ上ラレシヨリ、世ニコレヲ三跡ト云シコト御記錄ニアリ、行成ノ手柄世ニ面目ト云ベシ、古ノ佐理道風ニナラベテ行成ニカヽセラレシハ、行成ガ手柄ナリトノミ御咄アリシガ、コノタビモコノ例ヲ追ハルヽナルベシト恐察シ奉ル、〇中略又當日ハ何ゾ外ニ御ナグサミゴトニテモアリヤト伺フ、仰ニ、カネテハ何ゾトコヽロガケシガ、コノ渡御ハ私ノコトニ非ズ、式正一々天下ノ取沙汰トナルベシ、然レバ何ゴトニモセヨ、コノコトアリト風說アリテハ批判アルベシト思召テ止メラレタリ、還

シニ、親王ノ御方ツク〴〵ト聞シメシテ、ソレハナニユヱニト勅問アリ、コノ度東宮立坊ノ御沙汰ニテ候、サアレバ御道具ドモヽ多クナレバ、今ホドニテハ御セバキユヱ、幸ノ御次手ニ、内々ノ勝手アシキ處ヲモ改易セシムルナリト申シ上シカバ、シバラク御思惟ニテ仰出サレシハ、東宮ノ御沙汰アレバ、程ナク御位ニモ御卽ナサルベシ、サアレバ父帝（○中御門）ノ御殿ニ御移リナサルベシ、其上ニテ父帝ノ改メラルヽハ格別、コノ御殿ハモト新中和門院（○櫻町母后尚子）ノ御座所ニテ、コトニ御内々ハ常ニ馴テ御住居ナリシ處ナレバ、タトヒイカホド御不自由ナリトモ、御勝手アシクトモ、東宮ニテ御座アランホドハ、少シモ改ムベカラズト仰出サレシホドニ、大乳ノ人モ六條殿モ何ト申上ベキ言葉モナク、只感涙ニ堪ズシテ退キ、カヤウ〳〵ノ思召ノ上ハ、勝手方ニ於テハ少シモ御好ミモナシ、表向ノ御差圖ノミヨク〳〵吟味セラレヨトアリシホドニ、數日未決ノコト一日ニコトスミ候ト、武家モ臣下モ世ニアリガタキコトニ奉存ナリ、コレヨリ恐ロシグツキテ、表向ニ差圖モ御覽ニ入ズバ、穴カシコ後悔アルベシトテ御覽ニ入シカバ、イザトヨ見ルニ及ブベカラズ、中ノ口マデハ女御ノ御方ニモ常ニハ成セラレシ處ナレバ、コレヲ改ムルハ世ニイマ〳〵シクコソオボシメセ、表向ノコトハトモカクモ儀ノ調テヨキニハカラヒ申セ、上ヨリノ思シ召ハ少シモナシト仰出サル、又々何レモ肝ヲヒヤシテ感歎シ奉ル、准后御方ニモ世ニ御ウレシゲニ忝クモアリガタキコトニ覺召ス、コノ御心ニテハ後來モ御タノモシキコトナリ、御代ノ長久、寶祚ノ御繁榮ウタガヒナキモノカト仰アリ、（兩人ヨリ女中方々ヘツメ、細ドモ、モハヾカリ多キコトナガラ、落涙トヾメガタシ、准后ノ御心中イカバカリ御ウレシクモ、又女御ノ御方ノイマサバ、イカバカリノ御孝行ニオハシマサンモノゾトオボシメスベシト恐察シタテマツリテ、感涙ニテコトバナシ、）申上ルモ恐レアルコトナガラ、八歲ノ宮（○後桃園太子英仁）ノ御發明ナノ、御奇特ナリノト申シ上ルコトニハアラズ、唯々天ノナセル麗質ノ御德義ヨリ出タルコトニテ、全ク才ノコトニアラズト申上シカバ、イカニモ汝ガ申條尤ナリト仰ナリ、日本ニテ八歲ノ宮ノ御歌トテ、古今マレナルコトニ申スモ、外

東宮宣下ノ事案記ナシト云フ事義通ジ難シ、若ハ其東宮宣下トアルハ、儲君宣下ノ事ヲ混ジ云ルニテモアラン歟、○中略靈元院ハ明暦四年正月廿八日立太弟ニテ、其前ニ儲君宣下ノ事見エズ、是ハ東山院、中御門院、當今○櫻町ナドノ如ク、皇考ヨリ位ヲ繼ギタマフニ非ズシテ、皇兄後西院ノ位ヲ嗣ギタマヘレバ、先帝ノ皇弟ニシテ、皇子ニ非ザルガ故ニ、儲君宣下ナカリシナルベシ、然レバ靈元院立太子ノ事ハ案記アリテ、儲君宣下ノ事ハ案記ナキト云フ事ハアルマジ、

○按ズルニ、本書ニ古來女帝ノ立太子イマダ所見アラズトアレド、孝謙天皇ハ、聖武天皇ノ皇太子ト爲リ給ヘリ、ナホ、皇女爲太子ノ條參看スベシ、

〔槐記〕享保十二年五月廿四日、參候、○中略人ニハ咄モナラズ、咄スベキモノモナシ、汝ニカタラントコノホドヨリ思召ス、汝モシルゴトク、今般親王○櫻町ノ御方、東宮立坊ノ御沙汰アリテ、舊殿ヨリ戊亥ノ方ヘタテ出サルヽ筈ニテアリ、御儀式ノ殿ドモノナクテカナハヌ、寢殿大廣間殿上車寄等、忽チ東宮節會ニ諸卿群列ノ儀式行ハルヽヤウニ、表向ノ事ハ自ラ御世話ナサラ子バナラヌニナリテ、先日ヨリ度々御内ヘモ御成アリ、關白ノ第ヘモ御出アリタル事ナリ、奉行ハ石井中納言ナリ、大方儀式ノ御殿其差圖ドモハ出來ズ、内々ニナリテハ儀式ハイラズ、勝手ヨキヤウニ女中方ヨリノ好ミニマカセテオケバ、色々ノ好ミドモ出デヽ、段々ニ推シ出シテ、表ヘツマリテ肝心ノ儀殿ドモノ制ニナルコトアリテ、御差圖サダマラズ、色々ト御難儀ニ思召ス處ニ、一昨日御參内ノ刻、石井申サレシハ、御内々ノ御差圖ハスキト相スミヌ、表向ハ先達テ定メ置レタル通ニテ、早速ニ皆々埒アキヌト申サル、ソレハイカニト尋シニ、コノゴロ御内々ノ御差圖モ大カタニキハマリテ、申シノ口モ二間ヲ一間ニシ、御納戸モセバキヲヒロゲ、御湯ドノモクラキユエヒロゲテ前ニ廊下ヲツケナド致セバ、常ノ御殿ノ前ノ假山草花等ヲ崩サ子バナラズ、コトニ御秘藏ノ山吹ヲ多ク栽ラレタリ、ウカヾハズバ御氣色イカヾナリトテ、大乳ノ人六條ナド申シ上ラレ

明正院ノ皇太弟ニ立タマフベキ事ナレドモ、是モ立太弟ノ事無リシニヤ、近代紹運錄ニモ、後光明院ノ御元服ノ加冠理髪ノ人ノ名ヲサヘ擧タルニ、立太子ノ文ナシ、古例ヲ考フルニ、必ズ太子ニ立テヽ後ニ位ヲ讓リタマフニモ非ズ、國史ニ見ユル所、上代ハ綏靖仁德以下、卽位先帝ノ叡慮ヨリ出タル者ハ、皆立太子ノ事アリ、是此時世ニハ讓位ト云コトナクシテ、崩御マデ御在位ナル故、太子ヲ立テザレバ、次ノ位定マラザルガ故ト見エタリ、皇極天皇ニ至リテ、初メテ位ヲ孝德天皇ニ讓リタマヘリ、而シテ孝德立太子ノ事ナク、輕皇子ト云シヨリ直ニ受禪シタマヘリ、故ニ天智天皇ト互ニ辭遜シタマヒシナリ、是本邦讓位ノ初ニテ、則チ太子ニ立テズシテ位ヲ讓リタマヘリ、其後、陽成天皇位ヲ光孝天皇ニ讓リタマフ、是モ立太子ノ事ナク、光孝一品式部卿親王ニテ在シニ直ニ讓位シタマヘリ、中世以後モ、應安四年三月廿一日、後圓融院ニ親王宣下アリテ、同廿三日後光嚴院讓位シタマフ、中間唯一日、本ヨリ立太子ノ沙汰ナキコト後愚昧記ニモ明ナリ、此外モ數多アルベケレドモ急ニ考擧ゲ難シ、是ヲ以案ズルニ、必讓位シタマフベキ皇子アリテ、早クヨリ其叡慮アラバ立太子アルベク、叡慮遲ク定マリタラバ直ニ讓位アリテ、立太子ニ及バザルト見エタリ、然レバ明正院ノ後光明院ニ讓リタマフモ、急ナル叡慮ニテ、立太子ハ無リシナルベキ歟、

靈元院有二立太子之事一則不レ可レ無二東宮宣下一之事

靈元院ハ、立太子ノ事案記アリテ、東宮宣下ノ事案記ナシトアルヨシ、此事通ゼズ、立太子則東宮宣下ニテ二事ニ非ズ、貞觀儀式以下諸次第ノ立太子ノ式ヲ見ルニ、皇子某ヲ太子ニ立ルヨシノ宣命ヲ群臣ヘ讀聞シムル、是則立太子ノ儀式ナリ、强テ之ヲ別タバ、儀式ナクシテ唯宣下アルヲ東宮宣下ト云ヒ、其宣下ヲ群臣ヘ露顯スル儀式ヲ立太子ト云ン歟、然ラバ宣下ヌリテ儀式ナキ事ハ有ル事モアルベシ、儀式アリテ宣下ナキト云フ事ハアルベカラズ、立太子ノ事案記アリテ、

文德天皇　承和元年八月四日

十七歳

白河院　延久元年四月廿八日

十八歳無例

十九歳

村上天皇

廿歳無例

廿一歳無例

廿二歳

嵯峨天皇　大同元年五月五日

〔増鏡九草枕〕文永十一年正月廿六日、春宮〇後宇多に位讓り申させたまふ、〇中略東の御方〇後深草后藤原愔子の若宮〇伏見を坊に立奉りぬ、十月五日節會行はれていとめでたし、〇中略御門〇後宇多よりはいま二ばかりの御このかみなり、儲の君御年まされるためし、遠き昔はさておきぬ、近頃は三條院、小一條院、高倉院などやおはしましけん、高倉院の御末ぞ今もかく榮えさせおはしませば、かしこき例なめり、

〔羽倉考〕立太子東宮宣下

明正院後光明院後西院不可有立太子乎之事

明正院、後光明院、後西院三代ハ、立太子ノ事見エザルヨシ、案ズルニ、明正院ハ女帝ナレバ立太子ノ事アル可ラズ、古來女帝ノ立太子イマダ所見アラズ、後西院ハ花町殿トテ一品式部卿親王ニテ在シニ、後光明院御在位ニテ俄ニ崩ジ賜ヘレバ、是亦立太子ノ事ナキナルベシ、唯後光明院ハ、

六歳例

當今高倉〇　仁安元年十月日

七歳無例

八歳無例

九歳

恒貞太子　天長十年二月卅日

醍醐天皇　寛平五年四月二日或十四日

圓融院　康保四年九月一日

三條院　寛和二年七月十六日

後朱雀院　寛仁元年八月九日

十歳無例

十二歳

後冷泉院　長暦元年八月十七日

後三條院　寛德二年正月十六日

二條院　久壽二年九月廿三日

十三歳無例

十四歳

仁明天皇　弘仁十四年四月十八日

十五歳無例

十六歳

也、帝位ノ事ナド非祈申、オモハジトハスレドモ、自有即位時ナド思マジユル事時ニ出來ル也、此條奉爲君依可爲不忠、此事ヲ恐申テ拜シ奉ル也云々、成尊聞此御詞涕泣スト云々、

〔玉海〕治承二年十二月十五日甲辰、此日有冊命立太子事、○中略

一歲立太子例

清和天皇	嘉祥三年十一月廿五日戊戌
冷泉院	天曆四年七月廿三日
鳥羽院	康和五年八月十七日
近衞院	保延五年八月十七日

二歲例

陽成院	貞觀十一年二月一日
保明太子	延喜四年二月十日
華山院	安和二年八月十三日
實仁太子	延久四年十二月八日

三歲例

慶賴太子	延長元年四月廿九日
朱雀院	延長三年十月廿一日

四歲例

後一條院	寬弘八年六月十三日

五歲例

一條院	永觀二年八月廿七日

〇後三條御出家の御師のことは、この次に仰せおかるべくや候らんと申たりければ、こはいかに二宮東宮にたゝんずる人をばと勅答ありけるをきゝて、さてはけふその御さた候はで、いつかは候べきと申たりければ、まことにおもひわすれてやまひ重くてとおほせられて、宇治殿めし返して、讓位の宣命に皇太子のよしのせられにけり、能信をば閑院東宮の大夫とぞ申、この申やうこそふかしぎなれと人おもへり、白河院〇後三條皇子のつねに能信をば故春宮大夫殿おはせずば、我身はかゝる運もあらましやと仰られけるには、かならず〳〵殿の字を付ておほせられけり、やんごとなきことなり、

〔續世繼二御法の師〕東宮〇後三條におはしましける時、よのへだて多くおはしましければ、あやふくおぼしけるに、撿非違使の別當にて經成と云し人、なほしにかしはばさみにて、やなぐひおひて中門廊にゐたりける日は、いかなることの出きぬるぞとて、宮の内の女房より始めて隱れさわぎけるとかや、おはしましける所は二條東洞院なりければ、其わたりを軍のうちめぐりてつゝみたりければ、かゝる事こそ侍れなど申あへりける程に、別當のまゐりたりければ、東宮も御直衣奉りなどして御ようい有けるに、別當撿非違使めして、をかしの物はめしとりたりやと問れければ、既にめして侍りと云ければこそ、ともかくも申さでまかり出られけれ、おもくあやまちけるもの、おはします近きわたりに籠りゐたりければ、うちつゝみたりけるに、もし東宮ににげいる事もやあるとてまゐりたりけり、かやうにのみあやぶまれ給て、東宮をもすてられやせさせ給はんずらんとおもはしけるに、殿上人にて衛門權佐ゆきちかと聞えし人の相よくするおぼえ有て、いかにも天の下しろしめすべきよし申けるかひありて、かくならびなくぞおはしましし、

〔古事談一王道后宮〕後三條院春宮ノ御時、御持僧成尊僧都奉問云、北斗ノ御拜候ヤ、被仰云、毎月奉拜

〔歴代皇紀光明〕皇太子成良親王、後醍醐皇子、母准三宮廉子、建武三年十一月十四日立、元上野大守征夷大將軍、

〔皇年代略記光明〕建武三年十一月十四日、以₂先帝〇後醍醐皇子成良親王₁爲₂皇太子₁、十二月先帝又御出奔之後廢之

〔歴代皇紀崇光〕皇太弟直仁親王、一院〇花園第二皇子、母徽安門院、貞和四年十月廿七日立、十四讓位宣命、次觀應三年十一月廢之、

〔椿葉記〕崇光院は、〇中略觀應二年十一月七日、南朝より取たてまつりて御くらゐを廢す、〇中略同三年閏二月廿日、南朝〇後村上の天氣によりて、兩上皇〇光明、光嚴、新院〇崇光、儲皇直仁親王八幡の軍陣に幸しまします、〇中略さてとう宮〇直仁は廢せられて、光嚴院第二宮〇後光嚴同八月十七日踐祚あり、ちヽの御ゆづりにもあらず、ぶしやう〇足利氏のはからひとして申おこなふ、

〔大鏡一後一條〕むかし一條の院の御なやみのをりおほせられけるは、すべからくは次第のまヽに、一のみこ〇敦康をなむ春宮とすべけれど、うしろみすべき人なきにより思ひかけず、さればこの宮をばたて奉るなりとおほせられけるぞ、此たうだい〇後一條の御事よ、げにさる事ぞかし、帝王の御次第は申さずともありぬべけれど、入道殿下〇藤原道長の御榮花もなにヽよりひらけ給ふぞと思へば、まづ御門后の御ありさまを申なり、うゑ木はねを生じてつくろいおほしたてつればこそ、えだもしげりてこのみをもむすべや、しかあればまづ帝王の御つヾきをおぼへて、つぎに大臣の御つヾきはわかさんとなり、

〔愚管抄四〕さて後朱雀の御やまひおもくて、後冷泉に御讓位ありけることを、宇治殿〇藤原頼通なりて申しさたしてたヽせたまひけるに、後三條の御ことのなにとも沙汰もなかりけるに、御堂〇藤原道長をと子の中に能信の大納言といふ人ありけり、閑院の公成中納言のむすめを子にしてありけるを、後三條の后にはまゐらせたる人なり、宇治殿たヽせたまひける跡になりて、二宮

子○康仁節會也、

〔増鏡村時雨十五〕元弘元年、○中略かゝるにつけては、一御ぞうのみいまはわくかたなくさだまり給ふべきかと、世の人も思ひきこゆる程に、龜山院の御ながれのたゆべきにはあらずとにや、先坊○邦良の一宮○康仁を太子にたてまつる、御めのとの雅藤の宰相の、法性寺の家に渡らせ給へるを、土御門高倉の先坊の御跡へ入たてまつりて、十一月八日に坊にさだまり給ふ、今は思たえぬる心ちしつるにいとめでたし、松が浦島に年へ給ひぬる入道の宮も、御おやの心ちにておはしますべければ、太上天皇になずらへて、崇明門院○邦良妃禖子と聞ゆ、

〔歴代皇紀光嚴〕皇太子康仁親王、元弘元年十一月八日立、九月二十五日立親王二年五月廢之、

〔續史愚抄後醍醐〕元弘三年五月十七日己酉、於伯耆船上行宮詔曰、宜廢新帝光嚴院皇位、及康仁親王皇太子位、

〔歴代皇紀後醍醐〕皇太子恒良親王、當今皇子、母准三宮藤廉子、元弘四年十一、廿四立、延元元年十月十三日、爲義貞北國沒落、

〔南方紀傳〕南朝延元四年北朝暦應二年四月十三日、恒良親王薨逝、十五歳

○按ズルニ、恒良親王ノ北國ニ行啓アリシ後、光明天皇ハ成良親王ヲ太子ト定メ給ヒシカバ、恒良親王ハ自ラ廢セラレシモノニテ、神皇正統記後醍醐天皇ノ條ニ、八月○建武三年に至るまで度々合戰有しかど、官軍すゝまず、依て都には、元弘の時の僞主○光嚴の御弟に、三の御子豐仁○光明と申けるを位につけ奉る、十月の頃にや主上都に出させ給ふ、いとあさましかりし事なれど、また行末をおぼしめす道ありしにこそ、東宮○恒良は北國に行啓あり、左衞門督實世卿以下の人々、左中將義貞朝臣をはじめて、さるべき兵もあまたつかうまつりけり、主上をば尊號の儀にてなし〳〵き、御心をやすめ奉らんためにや、成良親王を東宮にすゑ奉る、ト見エタリ、

〔水鏡仁明下〕承和九年七月十五日に、嵯峨法皇うせさせ給ひにき、當代の御ちゝにおはします、十七日平城天皇の御子に阿保親王と申し人、嵯峨のおほぎさきの御もとへ、御せうそくをたてまつりて申給ふやう、東宮のたちはきこはみねと申ものまできて、太上法皇すでにうせさせ給ひぬ、世中のみだれいでき侍りなんず、東宮を東國へわたしたてまつらんと申よしをつげ申給ひしかば、忠仁公〇藤原良房の中納言と申ておはせしを、后よび申させ給ひて、阿保親王の御ふみをみかどにたてまつり給ひき、この事こはみねと但馬權守橘逸勢とはかれりける事にて、東宮はしり給はざりけり、廿四日に事あらはれて、廿五日に但馬權守を伊豆國へつかはし、こはみねをおきへつかはす、又中納言よしの宰相ふきつななどながされにき、〇中略東宮おそりおぢ給ひて、太子をのがれんと申給ひしかば、みかどこの事はこはみねひとりが思ひたちつることなり、東宮の御あやまりにあらず、とかくおぼすことなかれとて、たゞもとのやうにておはしまさせき、〇中略八月三日みかど冷泉ゐんに行幸ありてすゝませ給ひしに、東宮もやがてまゐらせ給ひたりしに、いづかたよりともなくてふみをなげいれたりき、こはみねが東宮をおしへたてまつりたることゞもありしかば、にはかに東宮の宮づかさたちはきおもと人など百餘人とらへられて、東宮を淳和院へかへしたてまつりて、四日當代の第一親王を東宮にたて申給き、文德天皇これにおはします、

〔三代實錄光孝四十六〕元慶八年九月廿日丁丑、恒貞親王薨、不任葬司、以喪家不經奏聞殯殮既訖也、皇帝不親事三日、親王者淳和太上天皇之第二子也、母太皇大后諱正子、嵯峨太上天皇之女焉、天長十二年立爲皇太子、承和九年廢皇太子、依橘逸勢帶刀舍人伴健岑反逆之謀也、嘉祥二年正月授三品、恒貞出家爲沙門、名曰恒寂、崇信佛道、精進持戒、無病而薨、時年六十、遺命薄葬務從率儉、

〔光嚴院御記〕元弘元年十月廿一日癸亥、以通顯卿、自內親王立坊事被申之、十一月八日己卯、立太

〔三代實錄清和二十四〕貞觀十五年十一月十四日乙亥、從四位上行大和守在原朝臣善淵、前肥後守從五位上在原朝臣安貞等上表請、無品高丘親王入唐之後、多歷年序、歸却之期已過、存亡之分難決、而偏准於平常、猶受其封邑、靜而思之、慙悚難耐、望請早被返收、將免謗議、勅存亡難卜、何許來請、

〔續日本後紀仁明十二〕承和九年七月乙卯、是日詔曰、現神止大八洲國所知須倭根子天皇我詔旨止万宣御命乎、親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食與止宣、不慮外爾太上天皇〇嵯峨崩流爾依天、晝夜止无久哀迷比焦禮御坐爾春宮坊乃帶刀舍人伴健岑伊、隙仁乘天與橘逸勢合力天、逆謀乎構成天國家乎傾亡无止奴、此事乎波皇太子波〇淳和皇子恒貞不知毛在女止、不善人仁依天相累事波自古利言來留物奈利、又先先仁毛令法師等天呪咀止云人多安利、而止毛隱蔽乎撥求女无事乎不欲之天奈毛抑忍太留、又近日毛或人乃云、厲坊人等毛有謀止云、若其事乎推究波恐波不善事乃多有无事乎、加以後太上天皇乃〇淳和厚御恩乎顧天那毛究求女无事乎不知奴、今思保佐久波、直仁皇太子乃位乎停天、彼此無事波善久有部之止思保之女須、又太皇大后乃〇嘉智子御言仁毛如此久奈毛思保世留、故是以皇太子乃位乎停退介賜不、又可知事人止爲天奈毛大納言藤原朝臣愛發乎波廢職天京外仁、中納言藤原朝臣吉野乎波太宰員外帥仁、春宮坊大夫文室朝臣秋津乎波出雲國員外守爾任賜比宿賜不止宣天皇我御命乎衆聞食世止宣、丙辰、廢皇太子劔四口納袋付勅使右近衛少將藤原朝臣富士麻呂進藏人所、二口納珠纒袋、二口納錦袋、勅遣參議正四位下勳六等朝野宿禰鹿取等於嵯峨山陵、告廢皇太子狀曰、天皇我御命爾坐、掛畏山陵爾申賜倍止奏久、比者東宮帶刀舍人伴健岑與橘朝臣逸勢挾懷惡心天、謀傾國家介利、掛畏山陵乃厚顧爾依天其事發覺禮奴、搜求事跡事緣皇太子、因茲食國法隨爾皇太子位停退留狀乎、恐美恐毛申賜久止申、八月甲戌、遣參議正躬王送廢太子於淳和院、備前守從四位上紀朝臣長江自院逢迎、其儀駕小車出禁中、到神泉艮角、駕牛車、先是童謠曰、天爾波琵琶乎皆折那留、玉兒牽括乃坊爾牛車波善氣牟夜、辛〻乃小菖之華、有識咸言、童謠不虛、于今驗之矣、

を、みかどの御おとゝの早良親王東宮とておはせしが、人をつかはしていてころさしめ給ひてき、〇中略かくて十月に、東宮をおとくにでらにこめたてまつり給へりしに、十八日までその命たえ給はざりしかば、おはぢの國へながしたてまつり給ひしに、山さきにてうせさせ給ひにき、〇中略同十九年七月己未、みかど思ふところありとのたまひて、前東宮早良親王を崇道天皇と申、又井上內親王を皇太后とすべきよし仰られき、おの〳〵まさぬあとにも、うらみの御心をなづめたてまつらむとおぼしめしけるにこそ侍るめれ、

〔大鏡三左大臣師尹〕世はじまりてのち、東宮位とりさげられ給ふ事は、八九代ばかりにやなりぬらん、なかに法師東宮おはしけることそは、うせ給ひて後に贈太上天皇と申ていはひすゑられ給へば、おほやけもなろしめして、しゆだう天皇とて、官物のはつをさきにたてまつらせ給ふめり、

〔日本後紀二十嵯峨〕弘仁元年九月庚戌、廢皇太子、〇高岳立中務卿諱淳和爲皇太弟、

〔紹運要略〕廢太子、高岳親王、平城子、後號眞如親王、大同四年四月日立坊、弘仁元年九月十二日廢之、出家渡唐、逆旅之間遷化、

〔水鏡下嵯峨〕弘仁元年〇中略九月に內侍のかみ〇藥子太上天皇〇平城をすゝめたてまつりて、位にかへりつきて、われ后にたゝんといふ事いできて、世中靜ならずさゝめきあへりし程に、みかど內侍のかみのつかさ位をとり給ひ、仲成〇藥子兄を土佐國へながしつかはすよし宣旨をくださせ給ひしに、〇中略十一日に太上天皇いくさをおこして、ないしのかみとひとつ御こしにたてまつりて、東國のかたへむかひ給ひしに、〇中略大納言田村麻呂、宰相綿麿をつかはして、そのみちをさへぎりて、仲成をいころしてき、太上天皇すぢなくてかへり給ひて、御ぐしおろして入道し給ひてき、御年三十七なり、內侍のかみみづから命をうしなひてき、おそろしかりし人の心なり、太上天皇の御子の東宮〇高丘をすてたてまつりて、みかどの御おとゝの大伴親王とて、淳和天皇のおはしましゝを、東宮にたて申させ給ひき、

かば、みかどよからんさまにおこなふべしとの給ひしかば、〇中略百川いつはりて宣命をつくりて、人々をもよふして、太政官にして宣命をよましむ、皇后及皇太子をはなちおひたてまつるべきよしなり、此事をある人みかどに申に、みかどおほきにおどろき給ひて、百川をめして、后なはこり給はず、しばし東宮をしりぞけんとこそ申こひつるに、いかにかゝる事はありけるぞとの給ふに、百川申ていはく、しりぞくとはながくしりぞくる名也、母つみあり子おごれり、誠にはなちおはんにたれる事なりと、すこしも私あるけしきなく、ひとへに世のためと思ひたる心かたちにあらはれて見えしかば、みかどかへりて百川におぢ給ひて、ともかくもの給はせずして、うち〳〵になげきかなしび給ふ事かぎりなかりき、

〔續日本紀三十八桓武〕延暦四年九月乙卯、中納言正三位兼式部卿藤原朝臣種繼、被賊射薨、　丙辰、車駕至自平城、捕獲大伴繼人、同竹良等黨與數十人推鞫之、並皆承伏、依法推斷、或斬或流、　十月庚午、遣中納言正三位藤原朝臣小黑麻呂、大膳大夫從五位上笠王於山科山陵、〇天智治部卿從四位上壹志濃王、散位從五位下紀朝臣馬守於田原山陵、〇光仁中務大輔正五位上當麻王、中衞中將從四位下紀朝臣古佐美於後佐保山陵、〇聖武以告廢皇太子〇早良之狀、

〔日本紀略桓武〕延暦四年九月庚申、詔曰、云々、〇中略是日皇太子自內裏歸於東宮、即日戌時、出置乙訓寺、是後太子不自飮食、積十餘日、遣宮內卿石川垣守等、駕船移送淡路、比至高瀨橋頭已絕、載屍至淡路葬、

〔帝王編年記十二桓武〕延暦十九年七月、遣勅使於淡路國、取早良親王之骨、（光仁第三皇子、桓武同母弟也、）納大和國八島寺、（添上郡古市南、）論稱崇道天皇、（八所御靈之內）

〇按ズルニ、崇道天皇ノコトハ、追尊天皇ノ條ヲ參看スベシ、

〔水鏡下桓武〕八月〇延暦四年にならの京へ行幸侍りき、〇中略長岡の京には中納言種繼留守にて候し

〔續日本紀 三十二 光仁〕寶龜三年五月丁未、廢皇太子他戸王爲庶人、詔曰、天皇御命良麻止宣御命乎、百官人等天下百姓衆聞食止宣、今皇太子止定賜部流他戸王、其母井上内親王乃魘魅大逆之事一二遍能味仁不在、遍麻年久發覺奴、其高御座天之日嗣座波非吾一人之私座止奈毛所思行須、故是以天之日嗣止定賜比儲賜部流皇太子位仁、謀反大逆人之子乎治賜部例婆、卿等百官人等天下百姓能念良麻久毛恥志賀多自氣奈志、加以後世乃平久安長久全久可在伎政仁毛不在止神奈賀良母所念行須仁依而奈母、他戸王乎皇太子之位停賜比却賜布止宣天皇御命乎衆聞食止宣、

〔續日本紀 三十三 光仁〕寶龜六年四月己丑、井上内親王、他戸王並卒、

〔類聚國史 七十九 政理〕延暦廿二年正月壬戌、外從五位下槻本公奈氏麻呂授從五位上、弟正七位上豐人、豐成、從五位下、並賜姓宿禰、奈氏麻呂父、故右兵衞佐外從五位下老、天宗高紹天皇〇光仁之舊臣也、初庶人〇他戸王居東宮、暴虐尤甚、與帝〇桓武不穆、過之無禮、老竭心奉帝、陰有輔翼之志、庶人及母廢后〇井上内親王聞老爲帝所昵、甚怨嘆之、切責者數矣、及后有巫蠱之事、老按驗其獄、多發姧狀、以此母子共廢、社稷以寧、帝追思其情、故有此授、

〔水鏡 下 光仁〕この后〇井上内親王御年五十六になり給ひき、此御腹の他戸の親王は、御門の第四の御子にて、御年などもいまだいとけなくおはしまして、ことしは十二にぞなり給ひしかども、此后の御はらにておはせしかば、兄たちを置たてまつりて、こぞの正月に東宮に立給ひしぞかし、〇中略百川此はどの事どもをうかゞひ見るに、后まじわざをして、御井にいれさせ給ひき、みかどをとくうしなひたてまつりて、我御子の東宮を位につけたてまつらむといふ事どもなり、其井にいりたる物をわる人とりて、宮のうちにもてわつかひしかば、此事みな人志りにき、〇中略百川此ことをきゝて、わさましく侍る事なり、后を志ばし縫殿の寮に渡したてまつりて、こらしめたてまつらん、又東宮もわしき御心のみおはす、世のためいと〳〵不便に侍ると申し

茂由梅、乃啓皇子曰、願勿害太子、臣將議、由是太子自死于大前宿禰之家、(一云、流伊豫國、)十二月壬午、穴穗皇子即天皇位、

〔大鏡裏書〕廢太子事九人可勘之

道祖親王(天武天皇孫、一品新田部皇子男、天平勝寶八年立之、寶字元年廢之、)

他戸親王(光仁天皇皇子、寶龜二年立之、同三年廢之、)

早良親王(追號崇道天皇、光仁天皇皇子、天應元年四月四日立之、年卅二、延曆四年十月廢之、左遷淡路國、)

高岳親王(平城天皇皇子、大同四年立之、出家渡唐、逆旅之間遷化、號眞如親王、)

恒貞親王(淳和天皇皇子、天長七年立之、承和元年廢之、)

○按ズルニ、廢太子ハ、此他康仁親王、成良親王、直仁親王等アリ、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年三月丁丑、皇太子道祖王(○天武皇孫、新田部親王子、)身居諒闇、志在淫縱、雖加敎勅、曾无改悔、於是勅召群臣、以示先帝(○聖武)遺詔、因問廢否之事、右大臣已下同奏云、不敢乖違顧命之旨、是日廢皇太子、以王歸第、　四月辛巳、勅曰、國以君爲主、以儲爲固、是以先帝遺詔、立道祖王、昇爲皇太子、而王諒闇未終、陵草未乾、私通侍童、無恭先帝、居喪之禮、曾不合憂、機密之事、皆漏民間、雖屢敎勅、猶無悔情、好用婦言、稍多狠戾、忽出春宮、夜獨歸舍云、臣爲人拙愚、不堪承重、故朕竊計廢此、立大炊王、(○中略)宜從天廢、却還本色、　七月庚戌、分遣諸衞、掩捕逆黨、更遣出雲守從三位百濟王敬福、太宰帥正四位下船王等五人、率諸衞人等、防衞獄囚、拷掠窮問、黃文(改名多夫禮)道祖、(改名麻度比)大伴古麻呂、多治比犢養、小野東人、賀茂角足(改姓乃呂志)等、並杖下死、

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年正月辛巳、立他戸親王爲皇太子、詔曰、明神御大八州養德根子天皇詔旨勅命平、親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、隨法爾皇后御子他戸親王立爲皇太子、故此狀悟氐百官人等仕奉詔天皇御命諸聞食止宣、

太子暴逆自取敗亡

皇子、宜爲儲君、臣今日出家、爲陛下欲修功德、天皇聽之、卽日出家法服、因以收私兵器、悉納於司、壬午入吉野宮、時左大臣蘇賀赤兄臣、右大臣中臣金連、及大納言蘇賀果安臣等送之、自菟道返、或曰、虎著翼放之、是夕御嶋宮、癸未、至吉野而居之、是時聚諸舍人謂之曰、我今入道脩行、故隨欲修道留之、若仕欲成名者、還仕於司、然無退者、更聚舍人而詔如前、是以舍人等半留半退、

〔古事記 下 允恭〕天皇崩之後、定木梨之輕太子所知日繼、未卽位之間、姧其伊呂妹輕大郎女、（中略）是以百官及天下人等、背輕太子而歸穴穗御子、（安康）爾輕太子畏而逃入大前小前宿禰大臣之家、而備作兵器、（爾時所作矢者、銅其箭之內、故號其矢謂輕矢也、）穴穗王子亦作兵器、（此王子所作之矢者、卽今時之矢者也、是謂穴穗箭也、）於是穴穗御子興軍圍大前小前宿禰之家、（中略）爾其大前小前宿禰擧手打膝儛訶那傳（自訶下三字以音）歌參來、（中略）如此歌參歸白之、我天皇之御子、於伊呂兄王無及兵、若及兵者必人咲、僕捕以貢進、爾解兵退坐、故大前小前宿禰捕其輕太子、率參出以貢進、（中略）故其輕太子者流於伊余湯也、

〔日本書紀 十三 允恭〕二十三年三月庚子、立木梨輕皇子爲太子、容姿佳麗、見者自感、同母妹輕大娘皇女亦艶妙也、太子恒念合大娘皇女、畏有罪而默之、然感情既盛、殆將至死、爰以爲徒非死者、雖有罪何得忍乎、遂竊通、乃悒懷少息、　二十四年六月、御膳羹汁凝以作氷、天皇異之、卜其所由、卜者曰、有內亂、蓋親親相姧乎、時有人曰、木梨輕太子姧同母妹輕大娘皇女、因以推問焉、辭既實也、太子是爲儲君不得罪、則流輕大娘皇女於伊豫、

〔日本書紀 十三 安康〕四十二年正月、天皇（允恭）崩、十月葬禮畢之、是時太子行暴虐、淫于婦女、國人謗之、群臣不從、悉隸穴穗皇子、爰太子欲襲穴穗皇子、而密設兵、穴穗皇子（安康）復興兵將戰、故穴穗括箭、輕括箭、始起于此時也、時太子知群臣不從百姓乖違、乃出之匿物部大前宿禰之家、穴穗皇子聞則圍之、大前宿禰出門而迎之、穴穗皇子歌之曰、於朋摩弊、烏摩弊輸區塗餓、訶那杜加礙、訶區多智豫羅泥、阿梅多知夜梅牟、大前宿禰答歌之曰、瀰椰比等能、阿由臂能古輪孺、於智珥岐等、瀰椰比等等豫牟、佐杜弭等

れりしが、太子みづからうせ給ひぬ、尊おぞろきなげき給ふ事かぎりなし、されどのがれますべき道ならねば、癸酉の年卽位、

〔日本書紀 十五 顯宗〕白髮天皇〇淸寧三年四月、立億計王〇仁賢爲皇太子、立天皇〇顯宗爲皇子、五年正月、白髮天皇崩、是月皇太子億計王與天皇讓位、久而不處、由是天皇姉飯豐青皇女、於忍海角刺宮臨朝秉政、十一月、飯豐靑尊崩、　十二月、百官大會、皇太子億計取天皇之璽、置之天皇之座、再拜從諸臣之位曰、此天皇之位、有功者可以處之、著貴蒙迎、皆弟之謀也、以天下讓天皇、天皇顧讓以弟、莫敢卽位、又奉白髮天皇、先欲傳兄立皇太子、前後固辭曰、日月出矣、而爝火不息、其於光也、不亦難矣、時雨降矣、而猶浸灌、不亦勞乎、所貴爲人弟者、奉兄謀逃脫難、照德解紛而無處也、卽有處者、非弟恭之義、弘計不忍處也、兄友弟恭、不易之典、聞諸古老、安自獨輕、皇太子億計曰、白髮天皇以吾兄之故、擧天下之事、而先屬我、我其羞之、惟大王道建利遁、聞之者歎息、彰顯帝孫、見之者殞涕、憫憫搢紳、忻荷戴天之慶、哀哀黔首、悅逢履地之恩、是以克固四維、永隆萬業、功隣造物、淸猷映世、超哉邈矣、粤無得而稱、雖是曰兄、豈先處乎、非功而據、咎悔必至、吾聞天皇不可以久曠、天命不可以謙拒、大王以社稷爲計、百姓爲心、發言慷慨、至于流涕、天皇於是知終不處、不逆兄意、乃聽而不卽御座、世嘉其能以實讓曰、宜哉兄弟怡怡、天下歸德、篤於親族、則民興仁、　元年正月己巳朔、大臣大連等奏言、皇太子億計、聖德明茂、奉讓天下、陛下正統、當奉鴻緒、爲郊廟主、承續祖宗無窮之烈、上當天心、下厭民望、而不肯踐祚、遂令金銀蕃國群僚遠近、莫不失望、天命有屬、皇太子推讓、聖德彌盛、福祚孔章、孺而勤、謙恭慈順、宜奉兄命、承統大業、制曰可、乃召公卿百僚於近飛鳥八釣宮、卽天皇位、百官陪位、皆忻忻焉、

〔日本書紀 二十八 天武〕天命開別天皇〇天智元年、立爲東宮、四年十月庚辰、天皇臥病以痛之甚矣、於是遣蘇賀臣安麻呂、召東宮引入大殿、時安麻呂素東宮所好、密顧東宮曰、有意而言矣、東宮於茲疑有隱謀、而愼之、天皇勅東宮授鴻業、乃辭讓之曰、臣之不幸、元多病、何能保社稷、願陛下擧天下附皇后、仍立大友

太子辭而不卽帝位

〔日本書紀十一仁德〕四十一年二月、譽田天皇〈〇應神〉崩、太子菟道稚郎子讓位于大鷦鷯尊、〈〇仁德〉未卽帝位、仍諮大鷦鷯尊、夫君天下以治萬民者、蓋之如天、容之如地、上有驩心以使百姓、百姓欣然天下安矣、今我也弟之、且文獻不足、何敢繼嗣位登天業乎、大王者、風姿岐嶷、仁孝遠聆、以齒且長、足爲天下之君、其先帝立我爲太子、豈有能才乎、唯愛之者也、亦奉宗廟社稷重事也、僕之不侫、不足以稱、夫昆上而季下、聖君而愚臣、古今之常典焉、願王勿疑、須卽帝位、我則爲臣之助耳、大鷦鷯尊對言、先皇謂皇位者、一日之不可空、故預選明德、立王爲貳、祚之以嗣、授之以民、崇其寵章、令聞於國、我雖不賢、豈棄先帝之命、輙從弟王之願乎、固辭不承、各相讓之、〈〇中略〉既而興宮室於菟道而居之、猶由讓位於大鷦鷯尊、以久不卽皇位、爰皇位空之、既經三載、〈〇中略〉太子曰、我知不可奪兄王之志、豈久生之煩天下乎、乃自死焉、時大鷦鷯尊聞太子薨以驚之、從難波馳之到菟道宮、爰太子薨之經三日、時大鷦鷯尊標擗叫哭、不知所如、乃解髮跨屍以三呼曰、我弟皇子、乃應時而活、自起以居、爰大鷦鷯尊語太子曰、悲兮惜兮、何所以歟自逝之、若死者有知、先帝何謂我乎、乃太子啓兄王曰、天命也、誰能留焉、若有向天皇之御所、具奏兄王聖之且有讓矣、然聖王聞我死、以急馳遠路、豈得無勞乎、乃進同母妹八田皇女曰、雖不足納采、僅充掖庭之數、乃且伏棺而薨、於是大鷦鷯尊素服爲之發哀、哭之甚慟、

〔古事記中應神〕於是大雀命〈〇仁德〉與宇遲能和紀郎子二柱、各讓天下之間、海人貢大贄、爾兄辭令貢於弟、弟辭令貢於兄、相讓之間既經多日、如此相讓非一二時、故海人既疲往還而泣也、故諺曰、海人乎因己物而泣也、然宇遲能和紀郎子者早崩、故大雀命治天下也、

〔神皇正統記仁德〕應神かくれましゝかば、御兄たち、太子〈〇菟道稚郎子〉をうしなはんとせられしを、此尊〈〇大鷦鷯〉さとりて、太子と心を一にしてかれを誅せられにき、爰に太子天位を尊にゆづり給ひ、尊かたくいなみ給ふ、三年になるまでたがひにゆづりて位をむなしくす、太子は山城の宇治にます、尊は攝津の難波にましける、國々の御つぎ物もあなたかなたにうけとらずして、民の愁へとな

どこまかにきこえんと心づよくおぼしめしつれど、まことになりぬるをりはいかになりぬる事ぞとさすがに御心さはがせ給ひぬ、むかひ聞えさせ給ひては方々におくせられ給ひにけりとや、たゞきのふのおなじさまに中々事ずくなにおはせらるゝ御をりは、さりともいかにかくはおぼしめしよりぬるぞなどやうに申させ給ひけんかしな、御けしきの心ぐるしさをかつは見たてまつらせ給ひて、すこしをしのごはせ給ひて、さらばけふよき日なりとて、院になしたてまつらせ給ひて、やがて事どもはじめさせ給ふ日よろづの事さだめおこなはせ給ふ、判官代には宮づかさども藏人などかはるべきにあらず、別當には中宮の權大夫をなしたてまつり給へれば、おはしてはいし申させ給ふ事どももさたよりはてぬればいでさせ給ひぬ、いとあはれに侍りける事は、殿のまださふらはせ給ひける時、母宮の御かたより何方の道よりたづねまゐりたるにか、あらはに御覽ずるも忘らぬけしきにて、いとあやしげなるすがたしたる女房の、わなゝく／＼いかにかくはせさせ給へるぞと、こゑもかはりて申つるなん、あはれにも又をかしうもとこそおほせられけれ、〇中略ひたき屋、ぢん屋などぞとりやられけるほどにこそえたえずしのびねなく人々侍りけれ、まして皇后宮ほり川の女御殿などは、さばかり心ふかくおはしまさふ御心ともに、いかばかりおぼしめしけんとおぼえ侍りし、〇中略さていかなる事にか東宮御位せめおろしとりたてまつり給ひては、又御むこにとりたてまつらせ給ふほどもてかしづきたてまつらせ給ふ御ありさま、まことに御心もなぐさませ給ふばかりこそきこえ侍りしか、おものまゐらするをりは、大ばんどころにおはしまして、御だいやばんなどまで手づからのごはせ給ふ、なにをもめしこゝろみつゝなんまゐらせ給ひける、御ざうしぐちまでもておはしまして、女房にたまはせ、殿上にいだす程にもたちそひてよかるべきさまにをしへなど、これこそは御はゐよとあはれにぞ、〇又見二榮花物語一

のなきに、まぢかきほどなれば、たよりにもと思ひてせうそこし聞えつるなり、そのむねは、かくて侍るこそは本意ある事と思ひ、こゐんのしおかせ給へる事をたがへたてまつらむも、かたがたにはゞかり思はぬにあらねど、かくてあるなん思ひつゞくるにつみふかくもおぼゆる、うちの御ゆくすゑはいとはるかにものせさせ給ふ、いつともなくてはかなき世にいのちもしりがたし、このありさまのきて心にまかせておこなひをもし、物まうでをもし、やすらかにてなんあらまほしきを、むげにさきの東宮にてあらむは見ぐるしかるべきなん、いんがう給ふて、としに受領などありてなんあらまほしきを、いかなるべき事にかとつたへ聞えられよとおほせられければ、かしこまりてまかでさせ給ひぬ、そのよはふけにければ、つとめてぞ殿にまゐらせ給へるに、〇中略東宮にまゐりたりつるかとはせ給へば、よべの御消息くはしく申させ給ふに、さうなりや、おろかにおぼしめさんやは、おしておろしたてまつらむ事はゞかりおぼしめしつるに、かゝる事のいできぬる、御よろこびなほつきせず、まづいみじかりける大宮〇上東門院の御宿世かなどおぼしめす、民部卿〇源俊賢殿に申あはさせ給へば、たゞとく〳〵せさせ給ふべきなり、なにかよき日もとらせ給ふ、すこしものびばおぼしかへして、さらでありなんとあらむをばいかゞはせさせ給はんと申させ給へば、さる事とおぼして、御こよみ御らむずるに、けふもあしき日にもあらざりけり、やがて關白殿〇藤原頼通もまゐらせ給へるほどに、とく〳〵とそゝのかし申させ給ふ、まづいかにも大宮に申てこそはとて、うちにおはしますほどなればまゐらせ給ひて、かくなんときかせたてまつらせたまへば、まして女の御心はいかゞはおぼしめされけん、それよりぞ春宮にまゐらせ給ふ、かう申事は寛仁元年八月六日の事なり、〇中略母の宮だにもしらせ給はざりけり、かくこの御方に物さはがしきを、いかなる事ぞとあやしくおぼしてあないし申させ給へど、れいの女房のまゐるみちをかためさせ給ひてけり、殿にはとしごろおぼしめしつる事な

ておはしますを心ぐるしく、殿も大宮〇上東門院も思ひ申させ給ふに、もしうちにをとこ宮もいでおはしましなばいかゞあらん、さあらぬさきに東宮にたてたてまつらばやとなんおほせらるなり、されば、おしてとられさせ給へるなりなどのみ申を、まことにしもあらざらめど、げに事のさまもよもとおぼゆまじげなればにや、きかせ給ふ御心ちはいとゞうきたちたるやうにおぼしめされて、ひたぶるにとられんよりはわれとやのきなましとおぼしめすに、又たか松どのゝみくしげ殿まゐらせ給ひて、殿のはなやかにもてなしたてまつらせ給ふべかなりとて、れいの事なればよの人さま〴〵さだめ申を、皇后宮きかせ給ひていみじうよろこばせ給ふを、東宮はいとよかるべき事なれど、さだにあらばいとゞ我おもふ事えせじ、なほかくてえあるまじくおぼしめされて、御母宮に玄か〴〵なんおもふと聞えさせ給へば、さうなりやいと〴〵あるまじき御事なり、見くしげどのゝ御ことをこそまことならばすゝみきこえさせ給はめ、さらに〳〵おぼしめしよるまじき事なりと聞えさせたまひて、御もののけのするなりと御いのりどもせさせ給へど、さらにおぼしめしとゞまらぬ御心のうちを、いかでかよひともきゝけん、〇中略さて東宮はつひにおぼしめしたちぬ、〇中略皇后宮にもかくとも申させ給はず、たゞ御心のまゝに殿に御せうそく聞えんとおぼしめすに、むつましうさるべき人もものし給はねば、中宮の權大夫殿のおはします、四條の坊門とにしの洞院とは宮ちかきぞかし、そればかりをこと人よりはとやおぼしめしよりけん、藏人なにがしを御つかひにてあからさまにまゐらせ給へとあるを、〇中略まゐらせ給ふほど日もくれぬ、〇中略見まはさせ給ふに、にはの草もいとふかく、殿上のありさまも春宮のおはしますとは見えず、あさましうかたじけなげなり、〇中略わさがれひのかたにいでさせ給ひて、めしあればまゐり給へり、いとちかくこちとおほせられて、ものせらるゝ事もなきに、おないするもはゞかりおはかれど、おどゞにきこゆべき事のあるを、つたへものすべき人

らさらな〇さらさらハさなノ誤ナランおぼしめしそとせいし給ふに、さらばたゞ本意もあり、出家にこそはわんなれとのたまはするに、さまでおぼしめす事ならばいかゞはともかくも申さん、うちに奏し侍りてをと申させ給ふをりにぞ、御けしきいとよくならせ給ひにける、さて殿うちにまゐらせ給ひて、大宮にもうちにも申させ給ひければ、いかゞはきかせ給ひけん、このたびの東宮には式部卿の宮〇敦康親王ほと〇ほとハなとノ誤ナランこそはおぼしめすべけれど、一條院のはか〴〵しき御うしろみなければ、東宮にたうだいをたてたてまつるなりとおほせられしかば、これもおなじ事なりとおぼしさだめて、寛仁元年丁巳八月五日こそは九さいにて、三宮〇後朱雀東宮にたゝせ給ひて、〇中略寛仁三年己未八月廿八日、御とし十一にて御元服せさせ給ひしか、さきの春宮〇敦明をば小一條院と申、〇中略小一條院わが御心もてのがれ給へる事はこれをはじめとす、〇中略この院のかくおぼしたちぬる事、かつは殿下の御報のはやくおはしますにおされ給へるか、又おほくは元方民部卿の靈のつかうまつりつるなり、〇中略事のやうだいは、三條院のおはしましけるかぎりこそあれ、うせ給ひにけるのちは、よのつねの東宮の御やうにもなく、殿上人などまゐりて御あそびせさせ給ふや、もてなしかしづき申人などもなく、いとつれ〴〵にまぎるゝかたなくおぼしめされけるまゝに、心やすかりし御ありさまのみ戀しく、ほけ〴〵しきまでおぼえさせ給ひけれど、三條院おはしましつるかぎりは、院殿上人などもまゐりや、御つかひも志げくまゐりかよひなんどするに、人目も志げく、よろづなぐさめさせ給ふを、院うせおはしましては、世中ものおそろしく、おほぢの往來もいかゞとのみわづらはしくふるまひにくきにより、宮司などだにもまゐりつかうまつる事もかたくなりゆけば、ましてげすの心はいかゞはあらん、とのもりづかさの志もべもあさぎよめつかうまつる事もなければ、庭のくさも志げりまさりつゝ、いとかたじけなき御すみかにておはします、まれ〳〵參りよる人々は、よにきこゆる事とて、三宮かく

之心、仍余申給受領給如何、其氣色甚能、仍聞可給之由了、又隨身事同被命、承此由等退出、參內啓皇太后宮（〇藤原彰子）此由、其氣色非可云候宿、　七日壬申、早朝從內罷出、可然上達部多來、相定云、如此事日可延、只今吉平可被問、又申曰、非可忌者、召吉平問、申云、明後日吉日、彼日早可被行者也、雜事相定了、即參皇太后、啓案內退出、

〔左經記〕寬仁元年八月十七日壬午、參內、大殿以頭左中辨、被聞攝政殿云、前坊奉授院號、幷年官年爵如舊（春宮時）、又停止進屬、被任判官代主典代如元、兼又左右近衛各五人、可爲隨身之由等也、今日依欠日、不被下宣旨、　廿三日戊子、申二刻被渡壺切御劒於東宮、（件御劒、須御讓位日被渡東宮也、而有障、于今未被渡、置納殿、而間東宮辭退後、今日被渡新宮、頗似有靈感、）　廿五日庚寅、又改前坊爲小一條院、幷年官年爵御封等事如元、兼又止進屬、爲判官代主典代、幷以左右近衛各五人、可爲隨身之由、右少辨奉宣旨、仰右大將、大將即召大外記文義朝臣、於膝突仰之云々、

〔大鏡〕（三左大臣師尹）一のみこ敦明親王とて、式部卿と申し程に、長和五年正月廿九日、三條院おりさせ給へば、たうだい（〇後一條）位につかせ給ひて、この式部卿の宮東宮にたゝせ給ひにき、（〇中略）院（〇三條）うせさせ給ひてのち、二年ばかりありて、いかゞ思召けん、宮たちと申しゝをり、よろづにあそびならはせ給ひて、うるはしき御ありさまいとくるしく、いかでかくてあらばやとおぼしならひて、皇后宮（〇三條后娍子、敦明母、）にかくなんおぼえ侍ると申させ給ふを、いかでかはげにさもとはおぼさんずる、すべてあさましくあるまじきことゝのみいさめ申させ給ふに、おぼしあまりて入道殿（〇藤原道長）に御消息ありければ、まゐらせ給へるに御物がたりこまやかにて、此位さりてたゞ心やすくてあらんとなん思ひ侍ると聞えさせければ、さらに〱うけたまはらじ、さは三條院の御すゑはたえねとおぼしめしおきてさせ給ふか、いとあさましくかなしき御事なり、かゝる御心のつかせ給ふ御事はこと事ならじ、古冷泉院の御ものゝけなどのおもはせたてまつるなり、さ

〔日本紀略淳和〕弘仁十四年四月壬寅、先立侍從從四位下恒世王爲皇太子、太子上表固辭、仍立正良親王爲皇太子、

〔神皇正統記嵯峨〕一旦國をゆづり給ひしのみならず、行末迄もさづけましまさんの御心ざしにや、新帝〇淳和の御子恒世親王を太子に立給ひしを、親王又かたく解退して世をそむき給ひけるこそありがたけれ、上皇〇嵯峨ふかく謙讓しましけるに、親王又かくのがれ給ひける、末代までの美談にや、むかし仁德兄弟相讓給ひし後には聞ざりし事なり、

〔水鏡下嵯峨〕弘仁十四年、みかど位を御おとゝの東宮〇淳和にゆづりたてまつりて、やがてその御子の、治部卿親王恒世を東宮にたて申給ひしを、親王わながちにのがれ申給ひて、こもりゐて御つかひをだにかよはし給はざりしかば、仁明天皇の御子にておはしましゝを、東宮にたて申たまひき、位をこそ東宮にておはしませばかぎりありてゆづりたてまつり給はめ、わが御子のおはしまさぬにてもなきに、おとゝの御子を、東宮にさへたてたてまつらむとし給ひし御心は、ありがたかりしことなり、

〔百練抄四後一條〕寬仁元年八月九日、皇太子敦明親王依病辭遁、廿九日、停前春宮坊爲小一條院、

〔日本紀略十三後一條〕寬仁元年八月九日甲戌、皇太子敦明親王請退儲皇、即日立帝同胞弟敦良親王爲皇太弟、〇中略以前春宮坊爲小一條院、年給官爵如元、

〔御堂關白記〕寬仁元年八月六日辛未、以能信從東宮、〇敦明有今日可來消息、仍詣彼宮、攝政、〇藤原賴通大將、〇藤原敎通左衞門督、〇藤原賴宗二位中將〇藤原能信相從、以雅康令啓參入由、即參御前、被命云、爲申停春宮事、聞消息、立寄事慶申者、余申、須申承由、能思定可被仰者也、皇后宮〇藤原娍子左大臣〇藤原顯光被何申者、命給樣定不快、左大臣任心者、日來間思定所聞也、早停此春宮號、可然相定可宣者、申云、攝政候、召彼同定申者、召攝政相定、中、年官年爵如本、御封又如本、此外各有思食事者只隨仰、御氣色有可給受領

〔榮花物語〕一月宴月日も過て康保四年になりぬ、月頃うち○村上にれいならず、なやましげにおぼしめして、○中略御心ちいとおもければ、小野宮のおとゞ○藤原實賴しのびて奏し給、もし非常のこともおはしまさば、東宮にはたれをかと御けしき給はりたまへば、式部卿の宮○爲平をとこそおもひしかど、いまにおさてはえゐ給はじ、五宮○圓融をなんしか思ふとおほせらるれば、うけたまはり給ひぬ、○中略つひに五月廿五日にうせ給ひぬ、東宮○冷泉くらゐにつかせ給、○中略春宮の御事、まだともかくもなきに、よの人みな心々に思さだめたるもをかし、おとゞはみなしりておはすめるものをと、よろづ御のちの事ぞもいといみじ、○中略すこし心のどかになりても、春宮の御事有べかめる、式部卿宮わたりには、人しれずおとゞの御けしきをまちおぼせど、あへておとなければいかなればにかと御むねつぶるべし、源氏のおとゞ○源高明もしさもあらずば、あさましうもくちをしうもあべきかなと物思ひにおぼされけり、かゝる程に九月一日東宮たち給、五宮○圓融ぞたゝせ給、○中略源氏のおとゞ、○中略あさましく思ひのほかなる世中をぞ、心うきものにおぼしめさるゝ程に、年もかへりぬ、○中略かゝる程に世中にいとけしからぬ事をぞいひ出たるや、それは源氏の左のおとゞの、式部卿の宮の御事を覺して、みかどをかたぶけ奉らむとおぼしかまふといふ事いできて、よにいときゝにくゝのゝしる、いでやよにさるけしからぬ事あらじなど、よ人申思ふ程に、佛神の御ゆるしにや、げに御心のうちにもあるまじき御心やありけん、三月廿六日○安和二年に、この左大臣殿にけびゐし打かこみて、宣命よみのゝしりて、みかどをかたぶけたてまつらむとかまふるつみによりて、大宰權帥になして、ながしつかはすといふことをよみのゝしる、○中略式部卿の宮の御心ち、おほかたならんにてだにいみじとおぼさるべきに、まいてわが御事によりていできたることゝおぼすにせんかたなくおぼされて、われも〳〵といでたちさわがせ給、

ふにかちにけり、二の宮位につかせ給ふ、清和の帝是也、後には水のをの天皇と申き、其よりして山門にはいさゝかの事にも、ゑりやうなづきをくだけば、二帝位につき、そんいちけんをふつしかば、皆相納受し給ふ共つたへたり、是のみや法力にても有けん、其外は皆天照大神の御はからひ也とぞみえたりける、

〔源平盛衰記二十四〕大嘗會儀式附新嘗會事

延暦寺衆徒等誠惶誠恐謹言、〇中略所謂惠亮摧腦、尊意振劍、凡捨身事君、無若我山、

〇按ズルニ、平家物語ノ説ハ、信ズベカラザルコトナレドモ、廣ク世上ニ流傳スルモノナレバ、姑ク此ニ掲ケタリ、

〔大鏡一圓融〕此御門の東宮にたゝせ給ふほどは、いときゝにくゝいみじき事どもこそ侍れな、これはみな人のしろしめしたる事なれば、事もながしとゞめ侍りぬ、

〔大鏡四右大臣師輔〕此后〇村上后安子の御腹には、式部卿の宮〇爲平こそは、冷泉院の御次にまづ東宮にもたち給ふべきに、西宮殿〇源高明の御むこにておはしますにより、御おとゝのつぎの宮〇圓融にひきこされさせ給へるほどなどの事どもいといみじく侍り、そのゆゑは、式部卿御門にゐさせ給ひなば、西宮殿の御ぞうによの中うつりて、源氏の御さかえになりぬべければ、御をぢたちのたましひふかく非道に、御おとゝをばひきこし申させたてまつらせ給へるぞかし、世の中にも宮の中にも、殿ばらのおぼしかまへけるをばいかでかはしらん、次第のまゝにこそはと、式部卿宮の御事を思ひ申たりしに、俄に若宮の御くしかいけづり給へなど御めのとたちにおほせられて、大入道殿〇藤原兼家御車にうちのせたてまつりて、北陣よりなんおはしましけるなどこそつたへうけ給はりしか、されば道理あるべき御かたびとたちはいかゞはおぼされけん、〇中略そのほど西宮殿御心ちよな、いかゞおぼしけんさてぞかし、おそろしくかなしき御事どもいできにしは、

親王家の御祈には、外祖忠仁公の御ぢ僧、ひゑい山のゑりやう和尚ぞうけ給はられける、何もおとらぬ高そうたち也、とみに事行がたうや有んずらん、人々内々さゝやき合れけり、あんのごとく御門かくれさせ給ひしかば、公卿せんぎ有けり、抑臣らがおもんはかりをもつてえらんで位につけ奉らん事、ようしやわたくし有ににたり、萬人脣を返すべし、しらずけい馬すまふのせつをとげ、其うんをしり、しゆうによつてほうそをさづけ奉るべしと議定をはんぬ、去程に同しき九月二日の日、二人のみや達うこんのばゝへ行啓有けり、○中略しんせい僧正は東寺にだんをたて、ゑりやう和尚は大内のしんごんゐんにだんをたていのられけるが、ゑりやうはうせたりといふひろうをなさば、しんせい僧正すこしたゆむ心もやおはすらんとて、ゑりやうはうせたりといふひろうをなして、かんたんをくだいていのられけり、すでに十ばんのけいばはじまる、はじめ四ばんは一の御子これたか親王家かたせ給ふ、後六ばんは二の宮これ仁親王家かたせ給ふ、やがてすまふのせつ有べしとて、一の御子これたか親王家よりは、などらのう兵衛のかみとて、およそ六十人が力あらはしたるゆゝしき人を出されたり、二の宮これ仁親王家よりは、よしをの少將とて、せいちいさうたへにして、かた手にあふべし共見えぬ人、御むさうの御つげ有とて、申うけてぞ出られける、去程に名とらよしをよりあひて、ひし〳〵とつまどりしてのきにけり、しばらく有てなどらつとより、よしをゝ取てさゝげ、二丈ばかりぞなげ上たる、たゞなほつてたをれず、よしを又つとより、などらを取てふせんとす、され共などらは大のをとこかさにまはる、よしを猶あぶなう見えければ、御母儀そめ殿の后より、御つかひくしのはのごとくにしげうはしりかさなつて、御かたすでにまけいろに見ゆ、いかゞせんと仰ければ、ゑりやう和尚は大ゐとくのはうを行はれけるが、こは心うき事なりとて、どつこをもつてかうべをつきやぶり、なづきをくだしにうにわしてごまにたき、くろけぶりを立て一もみもまれたりければ、よしをすま

事遂無變、無幾帝崩、太子續位、後應天門有火、良相右大臣、伴大納言計謀、欲退信左大臣、共參陣座時、後太政大臣〇藤原基經爲近衞中將兼參議、良相大臣急召之、仰云、應天門失火、左大臣所爲也、急就第召之、中將對云、太政大臣知之歟、良相大臣云、太政大臣偏信佛法、必不知行、如此事中將則知、太政大臣不預知之由、報云、事是非輕、不蒙太政大臣處分、難輙承行、遂辭出到職曹司、令諮太政大臣、太政大臣驚令人奏曰、左大臣是陛下之大功之臣也、今不知其罪忽被戮、未審因何事、若左大臣必可被誅、老臣先伏罪、帝初不知聞、大驚怪報、詔以不知之由、於是事遂定矣、宿後太政大臣薨、淸和天皇爲之期中不擧樂云云、此等事皆左相公所語也、

〔江談抄雜事二〕天安皇帝〇文德有讓位于惟喬親王之志事

被命云天安皇帝有讓寶位于惟喬親王之志、太政大臣忠仁公〇藤原良房總攝天下政、爲第一臣、憚思不出自口之間、漸經數月云云、或祈請于神祇、又修祕法祈于佛力、眞濟僧正者、爲小野親王祈師、眞雅僧都者爲東宮〇淸和護持僧云々、各專祈念互令相摧云々、

〔平家物語八〕名とらの事

むかし文德天皇、天安二年八月廿三日かくれさせ給ひぬ、御子の宮たちあまた御位にのぞみをかけてましまし〳〵けれぱ、内々御祈共有けり、一の御子これたかの親王をば、木はらの皇子共申さ、王者の才量を御心にかけ、四かいの安危たな心の中にてらし、百王のりらんは御心にかけ給へり、されば賢聖の名をも取せまし〳〵ぬべき君なりと見え給へり、二の宮これ仁の親王は、其頃のしつへい忠仁公の御娘、そめ殿の后〇明子の御はら也、一門の公卿べつしてもてなし奉らせ給ひしかば、是も又さしおきがたき御事也、かれはしゆ文けいていのきりやう有、是は萬機補佐の臣さう有、かれもこれもいたはしくて、いづれも思召わづらはれき、一の御子これたかの親王家の御祈には、柿の本の紀僧正玄んせいとて、東寺の一の長者弘法大師の御弟子也、二の宮これ仁

見其面、庭中禮拜天地四方、共飲鹽汁、誓曰、將以七月二日闇頭發兵、圍內相宅、殺却、即圍大殿、退皇太子、次傾皇太后宮、而取鈴璽、即召右大臣、將使號令、然後廢帝、簡四王中、立以爲君、於是追被告人等隨來悉禁著、各置別處、一一勘問、

〔水鏡下淳仁〕天平勝寶九年四月に、大臣以下を召て、東宮にはたれをかたてたてまつるべきとさだめ申べきよしおほせ事あり、○中略かくてのち、この東宮にえらびすてられたまひつる王たち、又心ざしわる人々、あまたよりあひて、みかど東宮をかたぶけたてまつり、仲麻呂をうしなはんとすといふ事、おのづからもれきこえしかば、なかまろ內にまゐりてこのよしを申しかば、さまざまのつみをおこなはれき、

〔大鏡一清和〕つぎのみかど清和天皇と申ける、○中略ちゝみかど○文德位につかせ給ひて、五日といふ日生れ給へりけんこそ、いかにをりさへはなやかにめでたかりけんとおぼえ侍れ、これたかの御子の東宮あらそひし給へりけんも、この御事とこそおぼゆれ、

〔大鏡裏書〕四品惟高親王東宮諍事

文德天皇第一皇子、母從四位下紀靜子、正四位下名虎女、嘉祥三年十一月廿五日戊戌、惟仁親王○清和爲皇太子、誕生之後九箇月也、先是有童謠云、大枝於超天、奔超天、騰加利躍土利超天、我耶護毛留田仁耶、捜阿佐食母志岐耶雉雄伊志岐耶、識者以爲、大枝謂大兄也、是時文德天皇有四皇子、第一惟高、第二惟條、第三惟彥、第四惟仁、天意若曰、超三兄而立、故有此三超之謠焉、承平元年九月四日夕、參議實賴朝臣來也、談及古事、陳云、文德天皇最愛惟高親王、于時太子幼沖、帝欲先暫立惟高親王、而太子長壯時還繼洪基、其時先太政大臣○藤原良房作太子祖父、爲朝重臣、帝憚未發、太政大臣憂之、欲使太子辭讓、是時藤原三仁善天文、諫大臣曰、懸象無變事、必不遂焉、爰帝召信大臣、清談良久、乃命以立惟高親王之趣、信大臣奏曰、太子若有罪、須廢黜更不還立、若無罪亦不可立他人、臣不敢奉詔、帝甚不悅、

前朝爲儲君後朝爲太子

欲爲太子而相爭

〔皇胤紹運錄〕後桃園院　寶曆九年正月十八日爲儲君、同年五月十五日爲親王、明和五年二月十九日立太子、十一

〔賴言卿記〕寶曆九年正月十八日庚子、巳刻參內、(中略)〇申刻退出、女院、女御、儲君殿下、前殿下參賀了、五月十五日甲午、今日儲君(御名字英仁、後桃園、)(春秋二歲、)立親王宣下也、(中略)〇自今日御次第、親王准后ト被立了、

〔知音卿記〕明和五年二月十九日戊寅、今日立太子節會、(英仁親王、先帝〈桃園〉第一皇子、御母准后女御、)

〇按ズルニ、後桃園天皇ハ、桃園天皇ノ寶曆九年ニ、儲君ニ立チ給ヒシガ、桃園天皇大漸ノ時ナホ幼冲ナリシカバ、後櫻町天皇皇位ヲ繼承シ給ヒ、其明和五年更ニ皇太子ニ立チ給ヒタリ、

〔續日本紀〕(二十廢帝)天平寶字元年四月辛巳、天皇召群臣問曰、當立誰王以爲皇嗣、右大臣藤原朝臣豐成、中務卿藤原朝臣永手等言曰、道祖王兄鹽燒王可立也、攝津大夫文室眞人珍努、左大辨大伴宿禰古麻呂等言曰、池田王可立也、大納言藤原朝臣仲麻呂言曰、知臣者莫若君、知子者莫若父、唯奉天意所擇者耳、勅曰、宗室中舍人新田部兩親王是尤長也、因茲前者立道祖王、而不順勅教、遂縱淫志、然則可擇舍人親王子中、然船王者閨房不修、池田王者孝行有闕、鹽燒王者太上天皇(〇聖武)責以無禮、唯大炊王雖未長壯、不聞過惡、欲立此王、於諸卿意如何、於是右大臣已下奏曰、唯勅命是聽、先是大納言仲麻呂、招大炊王居於田村第、是日遣內舍人藤原朝臣薩雄中衞二十人、迎大炊王、立爲皇太子、　七月己酉、(中略)〇內相仲麻呂侍御在所、召鹽燒王、安宿王、黃文王、橘奈良麻呂、大伴古麻呂五人、傳太后詔宣曰、鹽燒等五人(乎)人告謀反、汝等爲吾近人、一(毛)吾(乎)可怨事者不所念、汝等(乎)皇朝者己己太久高治賜(乎)、何(乎)怨(志岐)所(志止志加)然將爲不有(加奈母止)所念、是以汝等罪者免賜、今往前然莫爲(止)宣、詔訖五人退出南門外、稽首謝恩、　庚戌、詔更遣中納言藤原朝臣永手等、窮問東人等、款云、每事實也、無異斐太都語、去六月中期會謀事三度、始於奈良麻呂家、次於圖書藏邊庭、後於太政官院庭、其衆者安宿王、黃文王、橘奈良麻呂、大伴古麻呂、多治比犢養、多治比禮麻呂、大伴池主、多治比鷹主、大伴兄人、自餘衆者、闇裏不

〔議奏日次案〕文化四年六月廿六日丁酉、關白〇鷹司政熙參入、被窺天氣、皇子寛宮可有立親王、深叡慮之旨、被仰下將軍家之事、於小御所下段、關白召正由宿禰武士、忍侍從被仰之、武家傳奏廣橋前大納言、千種前中納言、被候座、　七月十八日戊午、關白參入被窺天氣召御前、辰半刻正由宿禰忍侍從參入、於小御所下段、關白令謁給、去六月廿六日、寛宮可有立親王、被仰進于將軍家、申勅答、武家傳奏廣橋前大納言、千種前中納言被候座、廣橋前大納言忠尹、清閑寺前大納言、山科中納言、六條前中納言、千種前中納言等召御前、常御所傍間關白被傳仰、御繼體之事、厚叡慮有之處、自仙洞〇後櫻町御懇篤被仰進、自中宮〇光格后欣子內親王亦敢被仰上、依之今度寛宮爲中宮御實子被定儲君、來九月立親王御治定之事、　九月廿二日辛酉、儲君御名字惠仁〇仁孝親王宣下也、

〔非藏人日記〕文化六年二月五日、立太子〇仁孝日時、來月廿四日辰刻被仰出、

〔言成卿記〕天保六年六月廿一日、回文自久我到來、其寫如左、

熙宮〇孝明追々御生長、自今日被定儲君、來八九月之間、立親王宣下御治定、尤准后御方御養子、御實子御同樣、被仰出候事、　熙宮、自今被稱儲君候事、御次第可爲准后御方御次事、　儲君江言上之儀、於禁中言上可然之事、今明日中御所々々、准后御方、儲君等へ參賀可然候事、

右之通傳奏議奏列座、大宮權大夫被申渡候、仍早々申入候也、

六月廿一日　基豐

七月廿二日、今日儲君、准后御方江、飛香舍也、御移徙被爲在、　九月十八日、今日儲君立親王宣下、予依家司、巳刻前著束帶、參本宮、〇中略廻文到來、親王御名字統仁、於佐右御治定候事、儲君御次第、可爲准后上候、尤節朔以下、儲君江言上之事、可爲是迄之通之事、右之通大宮權大夫被申渡、

〔實久卿記〕天保十一年正月廿八日己未、巳終刻參殿下、〇鷹司政通立太子日時御治定慶賀申入、　三月十四日乙巳、今日立太子〇孝明也、

宣下也、

〔羽倉考〕〔一〕立太子東宮宣下

儲君宣下ハ、初ヨリ嗣位タルベシト、明ナル皇子ヲ先儲君ト定メテ、立太子以前ヨリ其禮自餘ノ皇子ト同ジカラズ、當今〔町〇櫻〕モ立太子以前ニ儲君宣下アリ、年月ハ忘却ス、中御門院モ立太子ノ前年、寶永四年三月廿二日儲君宣下、東山院モ立太子ノ前年、天和二年三月廿五日儲君宣下アリ、但靈元院ハ明暦四年正月廿八日立太弟ニテ、其前ニ儲君宣下ノ事見エズ、是ハ東山院、中御門院、當今ナドノ如ク、皇考ヨリ位ヲ繼ギタマフニ非ズシテ、皇兄後西院ノ位ヲ嗣ギタマヘレバ、先帝ノ皇弟ニシテ、皇子ニ非ザルガ故ニ、儲君宣下ナカリシナルベシ、

〔議奏日次案〕享保十三年二月三日甲申、關白〔家久〇近衛〕參入、召御前、當六月立坊御治定之旨、被仰下諸臣、 五月廿二日壬申、就立坊、自來廿七日、七ケ日、七社〔伊勢、石淸水、賀茂下上、松尾、平野、稻荷、春日、〕七ケ寺〔延暦寺、園城寺、廣隆寺、仁和寺、東大寺、興福寺、東寺、〕御祈之事、被仰出于御祈奉行秀定、 六月四日癸未、七社七ケ寺御祈之解狀卷數等、奉行職事秀定、附内侍所獻之、 十一日庚寅、以昭仁親王〔町〇櫻〕被立皇太子節會也、〇中略 此間壺切御劒、以内侍從鬼間簾中被出之、隆兼朝臣進簾下給之、持參本宮、

〔賴言卿記〕延享三年正月廿一日丁巳、申刻過、茶地宮〔〇桃園〕御繼體御治定候、近々可有親王宣下之由被申渡了、

茶地宮、從今日被稱儲君之旨、帥中納言被申渡候、仍申入候也、

正月廿一日　通枝

三月十六日壬子、儲君〔御名字遐仁〇桃園〕立親王宣下也、

〔賴言卿記〕延享四年三月五日乙未、立坊來十六日御治定、 十六日丙午、遐仁親王可爲皇太子仰宣命之事、大内記家長朝臣作進、

栖川殿亭(内裏子方也)可爲假殿、有栖川殿者可被借用關白(○兼熙)京極亭、就此儀雙方可加修理、其間者有栖川殿、暫可被移居女御里亭(女御本殿向也)之事被仰下、柳原前大納言、高野前中納言等奉之、召關白家、有栖川家之諸大夫於便所傳仰、各被申領狀、　八日、今日議奏等召御前、柳原前大納言、高野前中納言兼候、儲君御殿可有造營於凝花洞被思召、內々被仰入院、令武家兩傳奏被仰聞於武家也、各其旨可存知之由被仰、　十八日、今日辰時、儲君御方遷御于假殿、(有栖川亭)　廿九日、今日巳刻、儲君立親王宣下也、

〔有一錄〕寶永四年三月廿三日、増宮御方(○中御門、通誠公記長宮ニ作ル、)可爲儲君之由、諸家中へ被仰渡、家公番本行被仰出、儲君御方附堂上九人被仰出、藤浪三位、甘露寺辨、千種中將、五辻彈正、近習被仰付、岩倉三品、北小路中書儲君御方云々、　廿七日、儲君増宮御方御參內、供奉堂上十人計、衣冠步儀、山口安房守最後供奉、未刻過還御、　四月廿九日、儲君御方有親王宣下、上卿二條內大臣、勅別當德大寺大納言、奉行頭中將、　五月廿五日、上使畠山下總守上著、被立儲君御賀儀也、　廿七日、上使參內、從大樹(○德川綱吉)御樽三荷、御肴三種、綿三百把、從大納言御方同二百把、御臺所縮綿十卷、准后白銀二百枚、御樽肴三荷三種、從亞相公同百枚、御臺御方縮綿十卷、大准后銀百枚、御樽肴同斷、五十枚、(亞相公)十卷、(御臺)仙院縮綿二十卷、從亞相公羽二重十疋、從御臺御方縮綿十卷、女院御所同上賦、聊有差異失念了、

〔通誠公記〕寶永五年二月十六日、今日巳時以慶仁親王、(○中御門)被立皇太子節會也、(○中略)壺切御劍、以內侍從鬼間簾中被出之、隆典朝臣、進簾下賜之、持參本宮、　廿四日、東宮行啓始也、

〔議奏日次案〕享保五年十月三日丙申、兼而以叡慮院宣關東へ被仰遣之、當冬若宮御方、立親王宣下之事、被任思召之旨、自關東言上之由、權大納言、(通躬)中山大納言等披露之、　十六日己酉、關白(○九條輔實)參入召御前、儲君御方、立親王宣下、來月四日御治定也、　十一月四日丁卯、儲君(御名字昭仁○櫻町)立親王

舊殿、於番衆所各給饗、暫時有召各御對面也、著御童裝束、(夏之御袍二藍白御袴也)供奉之輩各廣御所、其後御見舞之輩者、各依御由緒、於御小座敷御對面也、其後退下參內、珍重申入、及暮迄有御酒、各沈醉無正體事也、珍重々々、　八月四日、今日儲君御治定爲御祝義、從武家使進上、由良信濃守、予儲君へ可參由仰之間、令參了、從禁中參集、柳原、高辻、愛宕、予、三室戶、押小路、持明院等也、　九月廿三日、依召參、儲君今日攝家中、其外內々之公卿雲客、未拜尊顏之輩可有御對面、可參云々、予、愛宕、柳原、持明院中將等、爲御肝煎可參由、從禁中被仰之間參了、是每度如是之刻、依有御由緒如此也、未刻儲君出御於廣御所、(御童裝束)殿下(小直衣烏帽子)次左大臣、(直衣冠)前關白、(衣冠)內大臣、(同上)近衞大納言、(同上)九條大納言、(狩衣)兩傳奏申次之體也、其後被申御盃各退下、攝家中御對面之時御茵計也、撤厚帖、殿下以下被候下段、御殿狹少之間、上段へ不被召候由、花山院各へ被申也、其後被退下、次內々公卿雲客御禮、次儲君非藏人申御禮、內々公卿等ハ無申次、如何々々、雲客之中可勤事也、其後予等給夕饗退下了、　廿四日、參儲君、親王、門跡、外樣諸家、非藏人等御禮、次法親王、大覺寺宮、妙法院宮、一條院宮、實相院若宮、毘沙門堂宮、曼珠院宮御禮、右之衆御禮之刻ハ御茵計也、攝家中昨日御禮之刻尤其通也、其後敷浮疊二帖、其上設御茵、外樣公卿、雲客御禮、於公卿昇長押、雲客簀子也、非藏人等於落緣申御禮、昨日今日、頭中將頭辨等、昇長押申御禮、其後予輩給饗退出了、　十二月二日、今日儲皇親王宣下也、　三日、今日親王可有入內也、　十日、今日親王立坊事、諸家へ以番頭被仰出、來年二月中可有御沙汰也、爲珍重參儲君禁中、

○按ズルニ、儲君ノ字ハ、履中紀二年正月ノ條ニ始メテ見エタレドモ、直ニ皇太子ヲ指シタルモノニテ、後世ノ儲君トハ、其義自異ナレリ、

〔季連宿禰記〕天和三年二月八日辛巳、今日辰刻、於左府御亭有立太子(東山)召仰、

〔通誠公記〕寶永四年三月廿二日乙亥、今日長宮御方、(中御門)(春秋七歲、當今(東山)皇子、母儀新大典侍局、前權中納言藤原隆慶卿女、)被定儲君、　四日、儲君常時御殿者、從先年被假用林丘寺宮里坊、(仙洞南門前東方)此所甚狹少也、本所造畢之間、有

消息、此義從大樹御祝義不被申上以前、諸家御祝義獻上事可爲無用由、稻葉丹後守申之、然ども予義格別之間、難波へ令相談尤之由也、依之今日進上了、　六月十八日、〇中略儲君御在所事、舊院御殿可然由從關東被申、依來二十七日可有御移徙云々、經營以外事也、　廿日、依召參內、仰云、當今御移徙之後、從舊院（後水尾）禁中近臣輩へ被仰出御諚書有之、樣々思召也、若留書等有之候はゞ可獻上由也、則退下窺家公御記之內、引勘之所見之間、近臣中御諚書一通、幷寬文十一年老輩中四人ノ誓狀、幷寬文三年御膳方役人之誓狀等進上、則持參、於小御所拜天顏、別而御機嫌之由仰也、猶此類若所見候はゞ可獻上由仰也、　廿三日、依當番參內、終日儲君渡御之儀御沙汰也、　廿四日、依召參內、儲君廿七日下御殿へ渡御治定之間、其刻各致伺候、諸事內外之儀可被申沙汰、宮御方御由緖之者無之候間、渡御以後、折々可致伺公由、於御前仰也、

園前大納言　柳原大納言・難波中納言　愛宕宰相　予也、各畏入了、

今日公卿雲客供奉之儀被仰出也、公卿五人、殿上人十人、儲君へ伺公之非藏人、松本信濃介、松室壹岐守、松室大和介、佐々下總、松室若狹、松室遠江介被仰付也、　廿六日、明日舊院御殿へ儲君渡御、方角惡敗之間、（唯今二階町、故新廣義門院御殿ニ御座、）今夜密々池尻前中納言亭へ御渡、明早天可有渡御由治定也、今晚渡御密儀也、然ども供奉之儀有之、予參著、儲君常御板輿也、（禁中仕丁奉舁也、六人、）申下刻御出、先武家與力同心拂御先、同心二十人、與力一兩人歟、次鳥飼十人計、次取次五六人、各袴肩衣、次雲客群行不守次第、三室戶右兵衞權佐、持明院中將、押小路中將、難波中將、同少將新藏人、土御門兵部少輔、伏原大藏卿、今城中將、池尻宮內大輔、次御輿、公卿群行御輿之左右、園大納言、三條大納言、葉室大納言、正親町中納言、愛宕宰相、千種宰相、川鰭宰相、梅園三位、柳原大納言、高辻中納言、予等也、各狩衣大ぐゝと也、不及淺沓、次諸家青侍、次ニ佐野修理太夫伺公也、珍重、其後各參內、珍重申入退下、　廿七日、今日黎明參池尻亭、供奉之輩漸參集之節也、予內々蒙仰之間、柳原大納言、難波中納言、三室戶、持明院等同道參ニ

古事類苑

帝王部二十三

皇太子下

皇太子妃〔附入〕

儲君

〔基量卿記〕天和二年三月廿五日、入夜有召參內、仰云、儲君事、第五宮、(東山)中御門亞相息女、大納言典侍局御腹也、女御立后事、鷹司前殿下、〇房輔二條殿下、〇光平等五百石加增、右今度傳奏上洛之刻、從武家被申上也、御機嫌不斜、於御前被下天酒、珍重云々、　廿七日、儲君へ伺公之輩被仰出、

正親町中納言　川鰭前宰相　梅園右兵衛督　池尻宮內大輔　園中將　花山院中將　難波侍從　四辻侍從　土御門兵部少輔

右儲君へ可致伺公、御移徙之後詰番可致也、其迄ハ折々御見舞可申上也、

近臣被仰出衆　西洞院宰相中將　今城中將

從今日可爲近臣由被仰出、右年寄衆へ書付被申渡、其後儲君伺公之輩、爲御迎參儲君、各供奉、宮方御參內、從女御方御參、御輿、常之板輿、青侍十人計、諸家儲君參勤之衆迄也、佐野修理大夫候御後、其後於御學問所、近臣衆御對、主上〇靈元同出御、御茵疊上、宮御方御右之方ニ御座、童御裝束殿ツヽラ、疊ノ下ニ御著座也、有一獻、鶴吸物各給也、參衆之雲客役送、戌刻儲君御方還御、日比二階町傳奏軒ニ御座、元新廣義門院御殿、先年被新造也、予候供奉、其後儲君御方ニ而有御祝、強飯御酒等也、今日從宮御方御樽肴御進上由也、近臣之輩、各獻上御肴鯣三十枚珍重々々、君臣繁榮、千秋萬歲、今日壺切御劍被進、以密儀土御門兵部少輔令持參也、本儀近衞中少將可持參也、　廿八日、今日儲君へ諸家各參賀、但儲君伺候之輩ハ持參銀劍云々、各無御對面、　卅日、儲君へ獻上御肴、鯣十松木亞相へ附

古事類苑

帝王部二十三

皇太子下 皇太子妃〔併入〕

りしかど、參議百川と云し人、此天皇に心ざし奉て、はかりごとをめぐらして定申てき、

先帝崩後爲太子

〔日本書紀二十四皇極〕四年六月庚戌、讓位於輕皇子、〇孝德立中大兄〇天智爲皇太子、

〔革命勘文〕天智天皇者、息長足日廣額天皇舒明天皇之太子也、讓位於母天豐財重日足姫天皇、〇皇極及舅天萬豐日天皇、孝德天皇廿一年間、猶爲太子、攝萬機、

〔皇年代略記天智〕推古天皇廿二年甲戌降誕、孝德天皇大化元年乙巳六月立太子、二代太子也

〔日本書紀三十持統〕三年四月乙未、皇太子草壁皇子尊薨、

〔日本書紀二十九天武〕十年二月甲子、是日立草壁皇子尊爲皇太子、

〔皇胤紹運錄〕草壁皇子、號日並知皇子、淨廣一位、天武十二年立太子、而當皇帝登遐之時、母后(持統)踐祚、仍不嗣位、天武、持統東宮、朱鳥四年四月薨、追號長岡天皇、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年九月庚辰、天皇禪位于氷高內親王、詔曰、〇中略以此神器欲讓皇太子、〇聖武而年齒幼稚未離深宮、〇中略今傳皇帝位於內親王、公卿百寮宜悉祇奉以稱朕意焉、

〔續日本紀九元正〕神龜元年二月甲午、天皇禪位於皇太子、〇聖武

〔水鏡中元正〕元明天皇位をさり給ひし時、聖武天皇を東宮と申しかば、位をつぎ給ふべかりしかども、そのとしぞ御元服し給ひて、御年十四になり給ひしに、なほいまだいとけなくおはしますとて、此御門は御をばにて讓をえたまひしなり、

〔續日本紀三十稱德〕寶龜元年〇神護景雲四年八月癸巳、天皇崩于西宮寢殿、春秋五十三、左大臣從一位藤原朝臣永手、右大臣正二位吉備朝臣眞備、參議兵部卿從三位藤原朝臣宿奈麻呂、參議民部卿從三位藤原朝臣繩麻呂、參議式部卿從三位石上朝臣宅嗣、近衞大將從三位藤原朝臣藏下麻呂等定策禁中、立諱〇光仁爲皇太子、左大臣從一位藤原朝臣永手受遺宣曰、今詔久、事卒爾爾有依天、諸臣等議天、白壁王波、諸王乃中爾年齒毛長利、又先帝乃功毛在故爾太子止定天奏波、奏流麻爾麻宣〇宣恐定誤給布止勅久止宣、

〔神皇正統記光仁〕稱德かくれましヽかば、大臣以下皇胤の中をえらび申けるに、おの〳〵異議あ

年長爲太子

〔皇年代略記 反正〕仁德四十年降誕、履中二年正月己酉立太子、五十

〔皇胤紹運錄〕武烈天皇 允恭三十九年誕生、仁賢七年正月立太子、四十五

〔皇胤紹運錄〕安閑天皇 雄略十年誕生、

〔日本書紀 繼體 十七〕七年十二月戊子、詔曰、○中略 懿哉麻呂古、○安閑 示朕心於八方、盛哉勾大兄、○安閑 光吾風於萬國、○中略 宜處春宮、助朕施仁、翼吾補闕、

○按ズルニ、安閑天皇ハ、雄略天皇十年ノ降誕ナレバ、繼體天皇七年ハ、御年四十八歲ナリ、皇胤紹運錄、皇年代略記等ニ、安閑天皇ノ立太子ヲ繼體天皇ノ二十年トセルハ誤ナリ、

〔皇年代略記 天武〕推古卅一年癸未降誕、天智七年二月戊寅爲皇太弟、

○按ズルニ、天武天皇ハ、推古天皇三十一年ノ降誕ナレバ、天智天皇七年ハ、御年四十六歲ナリ、

〔皇胤紹運錄〕光仁天皇 和銅二己酉誕生、○中略 神護景雲四、八、一、爲皇太子、六十二

〔神皇正統記 光仁〕稱德かくれましゝかば、大臣以下皇胤の中をえらび申けるに、おの〳〵異議ありしかど、參議百川と云し人、此天皇○光仁 に心ざし奉て、はかりごとをめぐらして定申てき、○中略 先皇太子にたち則受禪、御年六十二

〔皇年代略記 桓武〕天平九年丁丑降誕、○中略 寶龜四年正月十四日庚寅立太子、卅七

爲親王卽日爲太子

〔台記〕久壽二年九月二十三日丁卯、今上第一皇子○二條 先被下親王宣旨、次立爲太子、○中略 今朝太子渡御鳥羽南殿、法皇、(後白河)美福門院、夜前渡御、節會了、關白已下參彼殿云云、太子御洛外未聞先例、上下傾奇、

數朝爲太子

〔日本書紀 仁賢 十五〕白髮天皇○清寧 二年四月、遂立億計天皇○仁賢 爲皇太子、五年白髮天皇崩、天皇○仁賢 以天下讓弘計天皇○顯宗 爲皇太子如故、

〔日本書紀 舒明 二十三〕十三年十月丁酉、天皇崩于百濟宮、丙午、殯於宮北、是謂百濟大殯、是時東宮開別皇子○天智 年十六而誄之、

被待四歲頗似延怠、歲内頗雖卒爾、何不被遂行哉、然者今年何事候乎者、歸參奏達了、後參院申此之由、仰云、早可有沙汰之由重可奏内者、定能申云、奉行職事可被定仰歟云云、仰云、汝早可行云云、事已爲大事、重代之輩、奉行宜歟之由雖達天聽、已無勅許、只今參内可奏、去夜院宣云云、郎馳參内了、入道相國一昨夕俄上洛依此事云云、　廿九日戊子、(○中略)又人人十二月其例不快、(實仁太子(白河皇太弟)延久四年十二月八日立、此外無例、)仍可被待四歲之由有豫議云云、愚案四歲立坊不可然、但吉事爲先、近日就中末代之政每事急速也、至此事強不可待四歲歟、月之吉凶強之沙汰也、只歲内被行之條可叶亂世之政者歟、　十二月十五日甲辰、此日有冊命立太子事、(十二月立坊、實仁太子之外無此例、尤有禁諱、然而二歲三歲立坊、又以不吉、被待四歲者事似延怠、損之輕重、歲重月輕、因之歲内所被急行云云、藍安太不甘心、)依康和五年(鳥羽院一歲立之)仁安元年(當今六歲立之)等佳例、有沙汰云云、

〔增鏡一おどろの下〕建保二年十月十日、一の御子(○仲恭)むまれ給へり、(○中略)十一月廿一日やがてみこ(○親王)になしたてまつり給て、おなじき廿六日坊にゐ給ふ、いまだ御いかだにきこしめさぬに、いちはやき御もてなしめづらかなり、心もとなくおぼされければなるべし、

〔增鏡三藤衣〕ことしもはかなくくれて貞永元年になりぬ、(○中略)こぞの二月、后の宮の御はらに一の御子(○四條)いでき給へりしかば、やがて、(○十月二十八日)太子にたゝせ給しぞかし、れいの人のくちさがなさは、かの承久の廢帝(○仲恭)のむまれさせ給ふとひとしく坊にゐ給へりしは、いとふようなりしをなどいふめり、

〔明月記〕寛喜三年二月廿二日己卯、仰云、東宮不坐給之時、不立坊而直踐祚親王、崇德院、六條院、土御門院皆不吉、於堀河院者、實仁東宮依坐給無御立坊、不似當時歟、一歲立坊之内、清和鳥羽院春誕生、秋冬立給吉例也、雖一歲不過五十日百日立給、(冷泉、安德先帝(仲恭))又不吉歟、仍今年秋冬猶可有立坊(○四條)歟由存之、申云、此條尤可然歟、但竊案猶國家之煩歟、

〔皇年代略記後深草〕寛元元年六月十日誕生、同廿六日、爲親王、八月十日、立太子、

布告百官咸令知聞、

〔續日本紀十聖武〕神龜五年九月丙午、皇太子薨、

〔大鏡一清和〕このみかどは、嘉祥三年三月廿五日、母かたの御おほぢおほきおとゞの小一條のにへにて父みかどの位につかせたまひて五日といふ日、生れ給へり、〇中略やがて生れたまへる歳の十一月廿日東宮にたち給ひて、天安二年八月廿七日、御歳九歳にて位につかせ給ふ也、

〔大鏡一陽成〕このみかど貞觀十一年二月一日、二歳にて東宮にたゝせ給ひて、同十八年十一月十一日につかせ給ふ、

〔日本紀略一醍醐〕延喜四年二月十日乙亥、今上第二子崇象親王爲皇太子、〇中略太子年二、

〇按ズルニ、崇象親王ハ、後ニ御名ヲ保明ト改メラル、

〔榮花物語一月宴〕天曆四年五月廿四日に、九條殿の女御男みこ〇冷泉うみ奉り給つ、〇中略はかなう御いかなども過もていきて、むまれ給て三月といふに、七月廿三日に東宮にたゝせ給ひぬ、

〔百練抄五堀河〕康和五年八月十七日、立第一親王宗仁〇鳥羽爲皇太子、一歳、去正月降誕、一歳立坊、清和冷泉二代之例也、

〇按ズルニ、聖武天皇ノ皇子ノ如キ、亦一歳立坊ノ例ナリ、然レドモ立坊後間モナク薨去アリシユヱ、コヽニハ數ヘザルモノナラン、

〔皇代記近衞〕保延五年五月十八日丁酉、酉時降誕、八月十七日甲子、立爲太子、一歳

〔皇年代略記安德〕治承二年戊戌十一月十二日誕生、十二月十五日甲辰立太子、一

〔玉海〕治承二年十一月廿八日丁亥、早旦頭中將定能來云、去夜亥終許自院〇後白河有急召、卽以馳參、時忠卿候御前、仰云、立坊事二歳三歳共以其例不快、今年被遂行如何、且被仰關白可有其沙汰之由、只今參內早可奏聞者、卽參內奏聞之處、可仰關白云云、向彼亭仰此狀、被申云、如被仰下二三歳共不吉、

太子、

○按ズルニ、道祖大炊ノ兩王ハ、共ニ孝謙天皇ノ族叔祖父ニシテ太子トナリタマヒシナリ、其系左ノ如シ、

天武─┬草壁──文武…聖武──孝謙
　　　├舍人　　大炊〔○淳仁〕
　　　└新田部　道祖

再族伯祖父爲太子

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜元年八月四日癸巳、高野天皇〔○稱德〕崩、群臣受遺、卽日立諱〔○光仁〕爲皇太子、

〔皇年代略記光仁〕諱白壁、號日本根子天宗高紹、天智孫田原施基皇子第六子、〔○中略〕神護景雲四年八月一日癸巳、大臣已下議定策禁中、爲皇太子、〔六十二、稱德无繼嗣、病急、仍群臣議立之、〕

○按ズルニ、光仁天皇ハ稱德天皇ノ再族伯祖父ニシテ太子トナリタマヒシナリ、其系左ノ如シ

舒明─┬天智…施基…光仁
　　　└天武──草壁…文武…聖武　稱德

皇女爲太子

〔續日本紀十三聖武〕天平十年正月壬午、立阿倍內親王〔○孝謙〕爲皇太子、

幼冲爲太子

〔日本書紀十應神〕天皇以皇后討新羅之年、歲次庚辰冬十二月、生於筑紫之蚊田、〔○中略〕皇太后攝政之三年立爲皇太子、〔時年三〕

〔續日本紀十聖武〕神龜四年閏九月丁卯、皇子誕生焉、十一月己亥、天皇御中宮、太政官及八省各上表、奉賀皇子誕育、幷獻玩好物、〔○中略〕詔曰、朕賴神祇之祐、蒙宗廟之靈、久有神器、新誕皇子、宜立爲皇太子、

る、いとわづらはしう、さやうにこそはとおもひきこえさせたり、〇中略東宮行啓あり、〇中略みすごしに御たいめありて、あるべき事ども申させ給、〇中略位もゆづりきこえさせ侍りぬれば、東宮にはわか宮をなん物すべうはべる、だうりのまゝならば、そちのみや〇康仁をこそはと思ひ侍れど、はか〴〵しきうしろみなどもはべらねばなむ、〇中略などさま〴〵あはれに申させ給ふ、

〇按ズルニ、後一條天皇ハ、三條天皇ノ從姪ニシテ、太子トナリタマヒシナリ、其系左ノ如シ、

村上─┬─冷泉─三條
　　　└─圓融─一條─後一條

再從姪爲太子

〔皇年代略記後醍醐〕嘉暦元年七月廿四日、後伏見院皇子量仁親王〇光嚴爲立太子、

三從兄弟之子爲太子

〔皇年代略記光嚴〕元弘元年十一月八日、立故皇太子邦長親王子康仁爲太子、

〇按ズルニ、光嚴天皇ハ後醍醐天皇ノ再從姪ニシテ太子トナリ、康仁親王ハ光嚴天皇ノ三從兄弟邦良親王ノ御子ニシテ太子トナリタマヒシナリ、其系左ノ如シ、

後嵯峨─┬─後深草─伏見─後伏見─光嚴
　　　　└─龜山─後宇多─┬─後二條─邦良─康仁
　　　　　　　　　　　　└─後醍醐

叔父爲太子

〔百練抄七六條〕仁安元年十月十日、以憲仁親王〇高倉爲皇太子、

〇按ズルニ、高倉天皇ハ、二條天皇ノ御異母弟ニシテ、六條天皇ノ叔父ナリ、

族叔祖父爲太子

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶八歲五月乙卯、是日太上天皇〇聖武崩於寢殿、遺詔以中務卿從四位上道祖王爲皇太子、

〔續日本紀二十廢帝〕天平寶字元年四月辛巳、是日遣內舍人藤原朝臣薩雄中衞二十人、迎大炊王立爲皇

〔權記〕寛弘八年五月廿七日庚子、雖有所勞無便籠居、相扶參內、有召候御前、仰云、可讓位之由一定已成、一親王○敦康事可如何哉、即奏云、此皇子事所思食歎尤可然、抑忠仁公○藤原良房寛大長者也、昔水尾天皇○清和者、文德天皇第四子也、天皇愛姬紀氏所產第一皇子、○惟喬依其母愛亦被優寵、帝有以正嫡令嗣皇統之志、然而第四皇子○惟仁以外祖父忠仁公朝家重臣之故、遂得爲儲貳、今左大臣○藤原道長者、亦當今重臣、外戚其人也、以外孫第二皇子、○後一條定應欲爲儲宮、尤可然也、今聖上○一條雖欲以嫡爲儲、丞相未必早承引、當有御惱之、時代忽變事若嗷々、如不得弓矢之者、於議無益、徒不可令勞神襟、仁和先帝○光孝依有皇運、雖及老年遂登帝位、恒貞親王始備儲貳、終被棄置、前代得失略以如此、如此大事、只任宗廟社稷之神、非敢人力之所及者也、但故皇后宮○敦康母后定子外戚高氏○高階成忠之先、依齋宮之事、爲其後胤之者、皆以不和也、今爲皇子非無所怖、能可被祈謝大神、猶有愛憐之御意、給年官年爵幷年給受領之吏等、令一兩宮臣得恪勤之便、是上計也者、是亦自去春來、每有雍容所被仰、亦所上奏之旨耳、卽重勅曰、汝以此旨仰左大臣哉如何、則奏曰、左右可隨仰、但如此之事、以御意旨、面可賜仰事歟、因有天許、未參御前之間、於大盤所邊、女房等有悲泣之聲、驚問兵衞典侍云、御惱雖非殊重、忽可有時代之變云云、仍女官悲歎也、此間主上出御晝御座、蒙仰、仰以有難忍之事等、今朝左大臣參東宮、○三條被申御讓位案內云云、此事自昨所發也云云、○節略

〔榮花物語九石蔭〕かくて御かど、○一條いかでおりさせ給なんとのみおぼしのたまはすれど、○中略いまはかくておりゐなむとおぼすを、さるべきさまにおきて給へとおほせらるれば、殿○藤原道長うけたまはらせ給て、東宮に御たいめんこそは例の事なれとて、思しおきてさせ給程に、春宮には一宮○敦康をとこそおぼしめすらめど、中宮の御心のうちにもおぼしおきてさせ給へるに、うへおはしまして、東宮の御たいめいそがせ給に、世人いかなべいことにかとゆかしう申思ふに、一宮の御かたさまの人々、わか宮○後一條かくてたのもしういみじき御なかよりひかり出させ給へ

三從兄弟爲太子

從姪爲太子

命の理りかたじけなくおそれ思ひければにや、俄に立太子のさた有しに、龜山は此君〇後醍醐をすゑたてまつらんと思しめして、八幡宮に告文をさゝめ給ひしかど、一の御子さしたるゆゑなくてすてられがたき御事なりければ、後二條ぞ居給へりし、

〔一代要記後二條十五〕太子富仁親王

〔皇年代略記花園〕諱富仁、伏見院第二皇子、後伏見院御猶子、〇中略正安三年八月廿四日立太子、

〔一代要記花園十五〕太子尊治親王

〔皇年代略記後醍醐〕諱尊治、後宇多第二皇子、〇中略德治三年九月十九日立太子、廿一、後二條院有レ事、邦良皇子幼年、仍法皇被レ仰二關東一、有二沙汰一、

〔皇年代略記光明〕建武三年十一月十四日、以二先帝〇後醍醐皇子成良親王一爲二皇太子一、

〇按ズルニ、後二條天皇ノ後伏見天皇ニ於ケル、花園天皇ノ後二條天皇ニ於ケル、後醍醐天皇ノ花園天皇ニ於ケル、共ニ再從兄弟ニシテ太子トナリタマヒシナリ、而シテ成良親王ノ光明天皇ニ於ケルハ、三從兄弟ニシテ太子トナリタマヒシナリ、其系左ノ如シ、

- 一後嵯峨
  - 二後深草
    - 五伏見
      - 六後伏見
        - 光明
      - 八花園
  - 三龜山
    - 四後宇多
      - 七後二條
      - 九後醍醐
        - 成良

〔百練抄四條三〕寛弘八年六月十三日受禪、是日立二敦成親王一〇後一條爲二皇太子一、四歲、一條院二男、

誰能激揚大節、可以顯著、天皇固辭曰、僕不才、豈敢宣揚德業、億計王曰、弟英才賢德、爰無以過、如是相讓再三、而果使天皇自許稱述、俱就室外、居乎下風、○中略億計王起舞既了、天皇次起、自整衣帶、爲室壽、○中略壽畢乃赴節歌曰、伊儺武斯盧、胷簸泝比野儺擬、寐逗愈凱麼、儺弭企於已陀智、曾能泥播宇世儒、小楯謂之曰、可怜、願復聞之、天皇遂作殊舞、誥之曰、倭者彼彼茅原、淺茅原、弟日僕是也、小楯由是深奇異焉、更使唱之、天皇誥之曰、石上振之神榲、伐本截末、於市邊宮治天下、天萬國萬押磐尊御裔僕是也、小楯大驚、離席悵然再拜、承事供給、率屬欽伏、於是悉發郡民、造宮不日、權奉安置、乃詣京都、求迎二王、白髮天皇聞憙咨歎曰、朕無子也、可以爲嗣、與大臣大連定策禁中、仍使播磨國司來目部小楯持節、將左右舍人至赤石奉迎、白髮天皇三年正月、天皇隨億計王到攝津國、使臣連持節、以王青蓋車迎入宮中、四月立億計王○仁賢爲皇太子、立天皇○顯宗爲皇子、

○按ズルニ、仁賢天皇ハ、清寧天皇ノ再從弟ニシテ太子トナリタマヒシナリ、其系左ノ如シ、

仁德—履中—市邊押磐皇子—仁賢
　　—允恭—雄略—清寧

〔日本紀略十三後一條〕長和五年正月廿九日甲戌、立先皇○三條第一皇子式部卿敦明親王○小一條院爲皇太子、宣制畢、大臣以下諸衛等奉劒璽等、

○按ズルニ、敦明親王ハ後一條天皇ノ再從兄ニシテ太子トナリタマヒシナリ、其系左ノ如シ、

村上—冷泉—三條—敦明
　　—圓融—一條—後一條

〔一代要記十五後伏見〕太子邦治親王

〔皇年代略記後二條〕諱邦治、後宇多第一皇子、○中略永仁六年八月十日立太子、

〔神皇正統記後醍醐〕龜山後宇多世をしろしめさずなりにしを、たひ〳〵關東に仰給ひしかば、大

ぬ、東宮には梅つぼのわかみや〈○一條〉ゐさせ給ぬ、いへばおろかにめでたし、世はかうこそはとみえきこえたり、

○按ズルニ、花山天皇ノ御父冷泉天皇ト、皇太子〈即チ一條天皇〉ノ御父圓融天皇トハ、異母ノ御兄弟ナリ、

〔日本紀略 九 一條〕寛和二年七月十六日壬午、冷泉院第二〈○第二下恐脱皇子二字〉居貞親王、〈○中略、三條、〉今日立親王、爲皇太子、

○按ズルニ、一條天皇ノ御父冷泉天皇ト、皇太子〈即チ三條天皇〉ノ御父冷泉天皇トハ、同母ノ御兄弟ナリ、

再從兄弟爲太子

〔一代要記 十四 後宇多〕頭書　太子熙仁親王、〈○伏見〉後深草第二子、母玄輝門院、建治元年十一月五日爲皇太子、

〔神皇正統記 伏見〕後嵯峨の御門、繼體をば龜山とおぼしめし定めければ、後深草の御ながれいかがとおぼえしを、龜山弟順の儀をおぼしめしけるにや、此君〈○伏見〉を御猶子にして東宮にすゑ給ぬ、〈○中略〉關東の輩も龜山の正統をうけ給へる事はしり侍りしかど、近頃となりて世をうたがはしく思ひければにや、兩皇〈○後深草、龜山、〉の御流れをかはる〴〵すゑ申さんと、相はからひけりとなん、

○按ズルニ、後宇多天皇ノ御父龜山天皇ト、皇太子〈即チ伏見天皇〉ノ御父後深草天皇トハ、同母ノ御兄弟ナリ、又兩統更立ノコトハ、踐祚篇兩統更立條ニ詳ナリ、就テ看ルベシ、

〔日本書紀 十五 顯宗〕白髮天皇〈○淸寧〉二年十一月、播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯、於赤石郡親辨新嘗供物、適會縮見屯倉首縱賞新室、以夜繼晝、爾乃天皇謂兄億計王〈○仁賢〉曰、避亂於斯、年踰數紀、顯名著貴方屬今宵、億計王惻然歎曰、其自導揚見害、孰與全身免厄也歟、天皇曰、吾是去來穗別天皇〈○中略〉之孫、而困事於人、飼牧牛馬、豈若顯名被害也歟、遂與億計王相抱涕泣、不能自禁、億計王曰、然則非弟

也、

○按ズルニ、仁明天皇ノ御父嵯峨天皇ト、皇太子恒貞親王ノ御父淳和天皇トハ、異母ノ御兄弟ナリ、

〔扶桑略記二十七圓融〕永觀二年八月廿七日甲辰、天皇○中略禪位於皇太子師貞親王、○花山同日懷仁親王○一條立皇太子、

〔榮花物語二花山〕時々の事どもはかなく過もて行て、七月○永觀二年すまひも近くなれば、これを若宮○一條に見せばやと宣はすれど、おとゞ○藤原兼家少しふさはぬ樣にて過させ給に、たび〳〵まゐらせ給へとうちよりめしあれど、みだりかせなどさま〴〵のおほんさはりども申させ給ひつゝまゐらせ給はぬを、すまひちかくなりてきりにまゐらせ給へとあれば、まゐり給へれば、いとこまやかに御ものがたりありて、くらゐにつきてことし十六年になりぬ、○中略東宮○花山位につき給なば、わかみやをこそは、春宮にはすゑめとおもふに、いのりところ〴〵によくせさせて、おもひのごとくわべくいのらすべし、おろかならぬこゝろのうちをきらで、だれも〳〵こゝろよからぬけしきのあるいとくちをしきことなり、あまたあるをだに、人はこをばいみじきものにこそおもふなれ、ましていかでかおろかにおもはんなど、よろづあるべきことゞもおほせらるる、うけたまはりてかしこまりてまかで給て、にようごどの○一條母后詮子にものさゝめき申させ給て、おほんとなぶらめしよせて、こよみ御らんじて、ところ〴〵におほんいのりつかひどもたちさわぐを、かう〳〵との給はせねど、よの中の人々けしきを見ておもへるさま、いふもおろかにめでたし、このいへのこのきんだち、いみじうえもいはぬ御けしきどもなり、○中略おとゞのおほんこゝろのうち、はれ〴〵しうてまじらはせ給、かくて八月になりぬれば、廿七日御讓位とてのゝしる、其日になりぬれば、みかど○圓融はおりさせ給ひぬ、とうぐう○花山はくらゐにつかせ給

從兄弟爲太子

〔公卿補任後桃園〕明和五年二月十七日立太子、〇後桃園

〇按ズルニ、後桃園天皇ハ、後櫻町天皇ノ御異母弟ナル桃園天皇ノ皇子ナリ、

〔續日本後紀仁明一〕天長十年二月丁亥、立恒貞親王爲皇太子、詔曰、天皇我詔旨止萬勅御命乎、親王等諸臣等百官人等天下公民衆聞食止宣、朕以撫弱氐掛畏支倭根子天皇我朝廷乃厚慈乎蒙天皇太子止成利天、因畏利萬貴比晝夜止九之、然乎慮外大朝日嗣乎授賜布、依天不堪流狀乎再比三比畏利申賜戶毛止容賜波須、今思行久佐厚恩乎蒙人之必欽信理利有、故是以正嗣止有戶恒貞親王乎皇太子止定賜布、故此之狀乎悟天百官乃人等仕奉止宣布天皇我御命乎衆聞食止宣、〇中略後太上天皇〇淳和遣權中納言從三位藤原朝臣吉野、奉書天皇、辭立皇太子、曰、暴親今日詔再立愚子恒貞爲皇太子、叡旨謬隆、盛典曲施、夫洊雷位重、承祧事尊、非德不昇、非賢何守、恒貞年寶蒙幼、器非夙惠、安可妄鍾大禮、猥主匕鬯、肅奉周道、內知云冥、請停嚴命、更擇賢才、在於重情、定知免啓、縱使天綸不駐、上令必行、則失萬國以貞之望、虧三辰日敬之職、　三月戊子朔、天皇緣後太上天皇辭立太子、奉答表曰、臣某言、伏願詔旨曰、恒貞年寶蒙幼、器非夙惠、安可妄鍾大禮、猥主匕鬯、夫輕者重之端、小者大之本、故魏宮岐嶷、非老大之情、晉儲神姿、是幼稚之謂、然則聰惠在性、不限年齡、伏稽前言、既有故實、臣頻表懷抱、心事共違、家賓之懇渝誰爲助、伏願假彼重明、照蒙昧、資其寬博、備遺忘、臣之至愚、畢衷所驗、雖云無德庶幾有隣、冀垂矜憐、賜緩憤潰、至誠不飾、至敬無文、伏表丹愚、無地取喩、後太上天皇復奉書曰、內揆已審、請易太子、冲齡未廻、憂心如灼、易曰、主器莫若長子、禮曰、登餕受爵以上嗣、斯皆温文誡習、致敬克躋、然後正位前星、替業東序者也、今恒貞漢莊難擬、周儲不追、將何以裨光聖明、助聽天扆、而恩哀遂展、血謝不成、獨雖非宜、與談孰許、恐龍樓之守爰墜、庖俎之譏有聞、望照丹辭、必收紫渙、山朝事隔、無可開言、父子體同、理當分疏、異於婺不恤緯、尸不越樽之義、是以重復鋪陳、佇蒙矜聽、天皇不許、奉還其書、

〔水鏡下仁明〕東宮〇恒貞と申は、淳和天皇の御子なり、みかど〇仁明にはいとこにておはしまし丶

○按ズルニ、皇太子正良親王ハ、淳和天皇ノ御異母兄ナル嵯峨天皇ノ皇子ナリ、

〔日本紀略六圓融〕安和二年八月十三日戊子、立二先帝〇冷泉第一皇子師貞親王一〇花山爲二皇太子一、年二在一條第、

〔神皇正統記圓融〕圓融院、諱ハ守平、村上第五の御子、冷泉院同母の弟なり、

〔公卿補任花園〕文保二年二月廿六日庚午、踐祚新帝、〇後醍醐三月九日庚寅、邦良親王爲二皇太子一、

○按ズルニ、邦良親王ハ、後醍醐天皇ノ御異母兄ナル後二條天皇ノ皇子ナリ、

〔神皇正統記後醍醐〕後二條世をはやくしましまして、父の上皇〇後宇多なげかせ給ひし中にも、よろづ此君〇後醍醐にぞ委附し申させ給ひける、やがて儲君のさだめありしに、後二條の一の御子邦良の親王居給ふべきかと聞えしに、おぼしめす故ありて、此親王を太子にたて給ふ、彼の一の御子をさなくましませば、御子の儀にて傳へさせ給べし、若邦良の親王早世の御事あらば、此御すゑ繼體たるべしとぞしるしおかせましましける、彼親王鶴膝の御病ありて、あやうくおぼしめしける故なるべし、〇中略かゝりし程に後宇多院かくれさせ給ひて、いつしか東宮〇邦良の御方にさぶらふ人々そば／＼に聞えしが、關東に使節をつかはされ、天位をあらそふまでの御中らひに成にき、あづまにも東宮の御事をひきたて申す輩ありて、御いきどほりのはじめとなりぬ、元亨甲子の九月のすゑつかた漸事あらはれにしかども、うけたまはりおこなふ中にいふがひなき事出きにしかど、大方は事なくてやみぬ、其後ほどなく東宮かくれ給ふ、神慮にもかなはず、祖皇の御いましめにもたがはせ給ひけり、とぞおぼえし、

〔歷代皇紀光明〕皇太子益仁親王、〇崇光院〇光嚴皇子、母前權大納言藤公秀女、建武五、八、十三立、五、去八日立親王、後日改二名興仁一、

○按ズルニ、益仁親王ハ、光明天皇ノ御同母兄ナル光嚴天皇ノ皇子ナリ、

皇兄爲太子

〔皇年代略記 亀山〕正嘉二年八月七日、立皇太弟、十後深草同母兄（〇亀山）雖有繼嗣、爲上皇勅立之、

〔皇年代略記 崇光〕貞和四年十月廿七日、以花園院第二皇子直仁親王（爲光嚴院御猶子）爲皇太弟、

〇按ズルニ、崇光天皇ハ光嚴天皇ノ皇子ナリ、

〔日本書紀 十五 仁賢〕億計天皇（〇仁賢）弘計天皇（〇顯宗）同母兄也、白髮天皇（〇清寧）二年四月、立億計天皇爲皇太子、五年白髮天皇崩、天皇（〇仁賢）以天下讓弘計天皇、爲皇太子如故、

皇姪爲太子

〔日本書紀 七 成務〕四十八年三月庚辰朔、立甥足仲彦尊（〇仲哀）爲皇太子、

〔神皇正統記 仲哀〕仲哀天皇は、日本武尊第二の子、景行の御孫なり、（〇中略）太祖神武より第十二代景行までは、代のまゝに繼體し給ふ、日本武尊世をはやくし給ひしにより、成務是を繼給ふ、此天皇を太子としてゆづりまし／＼しより、代と世とかはれるはじめなり、

〔日本書紀 二十二 推古〕元年四月己卯、立厩戸豐聰耳皇子爲皇太子、

〇按ズルニ、厩戸皇子ハ、推古天皇ノ皇兄用明天皇ノ皇子ナリ、

〔續日本紀 九 元正〕神龜元年二月甲午、天皇禪位於皇太子、（〇聖武）

〇按ズルニ、皇太子即チ聖武天皇ハ、元正天皇ノ御同母弟ナル文武天皇ノ皇子ナリ、

〔日本紀略 嵯峨〕大同四年四月己丑、立高岳親王爲皇太子、

〔紹運要略〕高岳親王（平城子、後號眞如親王、大同四年四月日立坊、）

〇按ズルニ、皇太子ノ御父平城天皇ハ、嵯峨天皇ノ御同母兄ナリ、

〔日本紀略 淳和〕弘仁十四年四月壬寅、（〇中略）立侍從從四位下恒世王（〇淳和皇子）爲皇太子、太子上表固辭、仍立正良親王（〇仁明）爲皇太子、 癸卯、太上皇（〇嵯峨）遣權中納言藤原朝臣三守、令齎辭皇太子書上、今上、（〇中略）即令三守奉返、 甲辰、上表太上皇曰、臣諱（〇淳和）言、伏奉昨詔、不許立正良爲皇太子云云、先是皇太子移權中納言藤原朝臣三守宅、即差三守等迎之、兵衞陣列御車前後、至待賢門、更御輦入坊、

立之、

〔日本紀略冷泉五〕康保四年九月一日丙戌、立先皇第五皇子守平親王(○圓融)爲皇太弟、(年九)即任坊官

〔神皇正統記圓融〕圓融院、諱は守平、村上第五の御子、冷泉同母の弟なり、

○按ズルニ、日本紀略安和二年八月十三日ノ條ニハ、天皇讓位於皇太子(○圓融)トアリ、

〔御堂關白記〕寛仁元年八月九日甲戌、以三宮(○後三條皇子敦良)立皇太弟、

〔神皇正統記後一條〕東宮(○敦明)しりぞき給ひしかば、此天皇同母の御弟、敦良親王(○後朱雀)立給ひき、

〔帝王編年記十八後三條〕寛徳二年正月十六日癸酉、立爲皇太弟、

〔神皇正統記後三條〕朱雀の御素意にて、太弟に立給ひき、又三條の御末をもうけ給へり、むかしもかゝるためし侍りき、兩流を内外にうけ給ひて、繼體の主となりましく〳〵き、

〔百練抄五白河〕延久四年十二月八日、是日立實仁親王爲皇太弟、

○按ズルニ、實仁親王ハ、後三條天皇ノ皇子ニシテ、白河天皇ノ御異母弟ナリ、

〔皇年代略記近衛〕保延五年八月十七日、爲皇太弟、一崇徳(○近衛異母兄)雖皇子坐、依上皇御氣色立之、

〔續世繼二八重の潮路〕今の女院(○鳥羽后美福門院得子)時めかせ給ひて、近衛のみかど生奉せたまへる、東宮に奉りて位讓り奉せ給ふ、(○中略)みかどの御やしなひ古例なきとて、皇太弟とぞ宣命には載られ侍りける、

○按ズルニ、近衛天皇ハ、最初皇太子ニ立チ給ヒシガ、永治元年十二月、崇徳天皇御讓位ノ時、鳥羽法皇ノ御意ヲ以テ、更ニ皇太弟ト改テ受禪セシメ給ヒシガ如シ、ナホ讓位篇皇太弟受禪ノ條參看スベシ、

〔神皇正統記土御門〕天下を治め給ふ事十二年、太弟(○順徳)にゆづりて、尊號例のごとし、

〔皇年代略記順徳〕正治二年四月十五日庚子、立太弟、四

のみかどを東宮には立てたてまつらせ給ひしなり、

〔續日本紀桓武三十六〕天應元年四月壬辰、立皇弟早良親王爲皇太子、

〔康道公記〕寛永二十年十月三日、今日避位、〇明正傳皇太子、〇後光明

〇按ズルニ、後光明天皇ハ、明正天皇ノ御異母弟ナリ、

〔忠利宿禰記〕寛文三年正月廿六日乙未、今日被行御讓位〇後西院節會、〇中略御讓位次第〇中略次藏人來仰云、以識仁親王〇靈元爲皇太子、卽讓位、

〇按ズルニ、靈元天皇ハ、後西院天皇ノ御異母弟ナリ、

〔日本書紀天智二十七〕八年十月庚申、遣東宮大皇弟於藤原內大臣家、

〔日本書紀天武二十八〕天渟中原瀛眞人天皇〇天武天命開別天皇〇天智同母弟也、〇中略天命開別天皇元年、立爲東宮、

〇按ズルニ、扶桑略記天智天皇七年二月ノ條ニ、以大海人皇子立皇太子ト見エテ、當時皇太弟、皇太子ノ兩稱ヲ互ニ用ヰシガ如シ、

〔日本紀略平城〕大同元年五月壬午、詔彈正尹某嵯峨定爲皇太弟、

〔神皇正統記嵯峨〕桓武第二の子平城同母の弟なり、太弟に立給へりしが、己丑のとし卽位、〇中略桓武の帝鍾愛無雙の御子になんおはしける、儲君に居給ひけるも、父の帝繼體のために顧命しけるにこそ、

〔日本紀略嵯峨〕弘仁元年〇大同五年九月庚戌、是日〇中略立中務卿〇淳和諱爲皇太弟、詔曰、現神云云、

〔神皇正統記朱雀〕天皇御子ましまさず、一腹の御弟太宰の帥の親王〇村上を太弟に立て、天位をゆづりて尊號あり、

〔皇年代略記村上〕天慶七年四月廿二日甲子、立皇太弟、十九、元三品太宰帥、朱雀無男子、以舍弟爲子

皇弟爲太子

涉經史、頗愛屬文、兼能書畫、淨御原帝〇天武嫡孫、授淨大肆、拜治部卿、高市皇子薨後、皇太后〇持統引王公卿士於禁中、謀立日嗣、時群臣各挾私好、衆議紛紛、王子進奏曰、我國家爲法也、神代以來、子孫相承、以襲天位、若兄弟相及、則亂從此興、仰論天心、誰能敢測、然以人事推之、聖嗣自然定矣、此外誰敢間然乎、弓削皇子在座、欲有言、王子叱之乃止、皇太后嘉其一言定國、殊閲授正四位、拜式部卿、時年卅七、

〔扶桑略記元明六〕和銅七年六月廿八日庚辰、以豐櫻彥親王〇聖武立皇太子、于時年十四歲、令加元服、是聖武天皇也、

〇按ズルニ、聖武天皇ハ文武天皇ノ皇子ニシテ、元明天皇ノ皇孫ナリ、

〔日本紀略醍醐一〕延長元年〇延喜二十三年四月廿九日癸酉、詔以故文獻彥太子息慶賴王爲皇太子、三年

〇按ズルニ、文獻彥太子ハ、醍醐天皇ノ第二ノ皇子保明親王ノ諡號ナリ、

〔神皇正統記朱雀〕御兄保明の太子諡を文彥太子と申す早世、其御子慶賴の太子も打つゞきかくれましゝかば、保明一腹の御弟にてたちたまふ、

〔吉口傳〕以宮子立坊末代不可有事

一品被相語云、保明太子者醍醐天皇第二皇子也、〇中略延長元年三月廿一日薨、廿一歲諡曰文彥、此時保明御子以慶賴、延長元年四月廿九日立皇太子、三歲同三年六月十八日薨、五歲此時醍醐天皇勅定云、保明太子早世、遺愛之餘以彼子立坊之處、又早世、以宮子立坊之條末代不可有事也云云、仍此後一切無其例也、凡桓武以後、慶賴之外中絕人立坊之條未聞其例者也、

〇按ズルニ、後陽成天皇ノ如キモ亦皇孫ナレドモ、立太子ノコトナカリシユヱ、此條ニ載セズ、

〔日本書紀履中十二〕二年正月己酉、立瑞齒別皇子、〇反正爲儲君、

〔水鏡上反正〕仁德天皇第四御子、履中天皇の御をとゝ也、〇中略履中天皇の御子おはせしかども、こ

に、皇大神のとゞめ申させ給ひけるなるべし、後に芳野へ入せまし〳〵て、御目の前にて天位をつがせ給ひしかば、いとゞ思ひあはせられてたふとくも侍るかな、

〔秀長卿記〕應安四年三月廿三日丁未、今日有₂御讓位事₁、今上二宮、諱緒仁、後圓融、○先當日有₂御元服事₁、宣命、緒仁親王平今日新加₂元服₁氐、皇太子止定賜天、此天日嗣平授賜布、○節略

○按ズルニ、歷代皇紀同日ノ條ニ、無₂立太子儀₁トアルハ誤ナリ、

〔武德編年集成四十八〕慶長五年十二月十二日、當今○後陽成第二ノ皇子、政仁親王○後水尾儲王ニ定メラル、御母近衞殿信尹公ノ女也、當今御愛君ニテ、最初皇太子タルべキ所、菊亭右大臣晴季公、德善院玄以ト肯議シ、大閤秀吉ヘ告ゲ、第一ノ皇子良仁親王母ハ中山大納言親綱ノ女ヲ皇太子ニ立ラル、元ヨリ此事叡慮ニ應ゼザル故、頃日近臣ヲ以テ、神君○家康ヘ密詔アリ、神君曰、凡子ヲ知ル事父ニ如ハナシ、臣モ亦男子多シト雖ドモ、繼嗣タル事臣ガ心ニ在ルノミ、第一第二ノ皇子ノ內、皇太子タラン事、孰レ成トモ叡慮ニ任セラルベシ、殊ニ政仁親王、母君貴キ上ハ、猶更然ルベシト奏セラレケレバ、大ニ叡感有テ、此御沙汰ニ及ブト云云、

○按ズルニ、皇子ヲ太子トセラレシ例ハ、此他ニモ猶多ケレド略ス、

〔續日本紀一文武〕高天原廣野姬天皇○持統十一年、立爲₂皇太子₁、

〔日本書紀通證三十五〕私記引₂王子枝別記₁曰、文武天皇、○中略持統天皇十一年春二月丁卯朔壬午、立爲₂皇太子₁、今按壬午十六日、蓋脫文也、

〔神皇正統記持統〕草壁の皇子は太子に立給しが、世をはやくし給ふに依て、其御子輕王を皇太子とす、文武にまします、

〔懷風藻〕葛野王

王子者淡海帝之孫、大友太子之長子也、○中略器範宏邈、風鑒秀遠、材稱₂棟幹₁、地兼₂帝戚₁、少而好₂學₁、博

〔日本紀略 一醍醐〕延喜四年二月十日乙亥、今上第二子崇象親王爲皇太子、

〔扶桑略紀 二十九後三條〕延久元年四月二十八日甲子、以今上第一皇子貞仁親王〇白河立皇太子、

〔百練抄 十五後嵯峨〕寛元元年八月二日、於中宮御方、被定立儲君雜事、其所事兼日被仰合人々、大進時綱書定文、公卿大夫已下參仕云云、　四日、自今日依立太子御祈修五壇法、　六日、今日立坊御所御裝束始也、　八日、頭中將師繼朝臣、參向右大臣亭、〇藤原實經召仰立太子事、　十日、今上第一皇子、〇久仁後深草有立太子事、申刻被始行節會云云、畢於御前被行坊官除目、坊官等於弓場申慶、又參本宮申慶、公卿相引參本宮、事畢自內裏被獻御劒、壺切紛失之間、被渡他御劒、勅使頭中將師繼朝臣賜祿、再拜退出、

〔吉續記〕文永五年八月一日、來廿五日、可有立坊云云、可悅可悅、俄有沙汰被仰合關東之處、可然之由申御返事、故歟、本所頭辨、藏人方左佐奉行云云、一向爲院〇後嵯峨御沙汰、　四日、今夜立太子定、親朝定文奏聞、自仙洞參執筆權中納言云云、可尋記、　廿五日甲辰、今日立太子〇後宇多也、藏人方光朝俄奉行云云、本所藏人佐親朝奉行、予御膳勅使兼日被相催之間申領狀、扶所勞申斜參內、節會已被始、

〔帝王編年記 二十七後伏見〕正應二年四月廿五日、立太子節會、第一皇子胤仁親王〇後伏見

〔神皇正統記 後醍醐〕又の年戊寅の春二月、〇中略陸奥の御子〇後村上又東へむかはしめ給ふべき定あり、〇中略親王は儲の君にたゝせ給ふべきむね申きかせ給ふ、道の程もかたじけなかるべし、〇中略七月の末つかた、伊勢に越させ給ひて、神宮に事のよしを啓して、御船のよそひし、九月のはじめ、ともづなをとかれしに、十日比のことにや、上總の地ちかくより、空のけしきおどろ〲しく、海上あらくなりしかば、又伊豆の崎といふ方にたゞよはれ侍りしに、いとゞ波風おびたゞしくなりて、あまたの船行かたしらず侍りけるに、御子の御船はさはりなく、伊勢の海につかせ給ふ、〇中略方々にたゞよひし中に、此二つの舟おなじ風にて、東西に吹わけらる、末の世にはめづらかなるためしにぞ侍るべき、儲の君にさだまらせ給ひて、例なきひなの御住居もいかゞとおぼえし

〔日本書紀持統三十〕三年四月乙未、皇太子草壁皇子尊薨、

〔日本書紀持統三十〕十年七月庚戌、後皇子尊薨、〇高市

〔皇胤紹運錄〕按草壁薨後、高市立爲太子、仍稱後皇子尊、

〔續日本紀光仁三十二〕寶龜四年正月戊寅、立中務卿四品諱〇桓武爲皇太子、

〔水鏡光仁下〕寶龜四年正月十四日に、山部親王の、中務卿と申ておはせし、東宮にたち給ふ、〇中略大臣以下御門に申ていはく、まうけの君はしばしもおはせずしてあるべき事ならず、すみやかにたて奉り給へと申しかば、御門たれをか立べきとの給はせしかば、百川すゝみて、第一御子山部親王をたて申給ふべしと申き、〇中略濱成申ていはく、山部親王は御母いやしくおはすいかでか位につき給はんと申しかば、御門まことにさる事也、酒人内親王をたて申さんとのたまひき、濱成又申ていはく、第二御子稗田親王御母いやしからず、此親王こそたち給ふべけれと申しを、百川目をいからかし、大刀をひきくつろぎて、濱成をのりていはく、位につき給ふ人、さらに母のいやしきたふときをえらぶべからず、山部親王は御心めでたく、世の人も皆したがひたてまつる心あり、濱成申事道理にあらず、我命をもをしみ侍らず、又二心なし、只はやくみかどの御ことわりをかうぶり侍らんとせめ申しかば、みかどともかくものたまはで、立て内へ入給ひにき、百川此事をうけたまはりきらむとて、はをくひしばりて、少しもねぶらずして、四十餘日たてりき、みかど百川が心のつよくゆるがざる事を御覽じて、さらばとく山部親王の立べきにこそと、しぶ〳〵に仰出し給ひしを、御ことばいまだをはらざりしに、庭におりて手を打よろこぶ聲、おびたゝしく高くして、人々皆おどろきさわぎ、百川やがてつかさづかさをめして、山部親王の御許へたてまつりて、太子にたてまつりにき、

〔三代實錄光孝五十〕仁和三年八月二十六日丁卯、天皇聖體乖豫、是日立第七皇子諱〇宇多爲皇太子、

皇子爲太子

〔新撰姓氏錄左京皇別上〕雀部朝臣、○中略應神御世、代於皇太子大鷦鷯尊、繫木綿襷、掌監御膳、因賜名曰大雀臣、

〔日本書紀三神武〕四十有二年正月甲寅、立皇子神渟名川耳尊○綏靖爲皇太子、

〔日本書紀四綏靖〕二十五年正月戊子、立皇子磯城津彥玉手看尊○安寧爲皇太子、

〔日本書紀五崇神〕四十八年正月戊子、天皇勅豐城命、活目尊○垂仁曰、汝等二子、慈愛共齊、不知曷爲嗣、各宜夢、朕以夢占之、二皇子於是被命、淨沐而祈、寐各得夢也、會明兄豐城命以夢辭奏于天皇曰、自登御諸山、向東而八廻弄槍、八廻擊刀、弟活目尊以夢辭奏言、自登御諸山之嶺、繩絙四方、逐食粟雀、則天皇相夢、謂二子曰、兄則一片向東、當治東國、弟是悉臨四方、宜繼朕位、　四月丙寅、立活目尊○垂仁爲皇太子、以豐城命令治東國、

〔古事記中仲哀〕坐穴門之豐浦宮、及筑紫訶志比宮、治天下也、此天皇○中略又娶息長帶比賣命、○神功是大后生御子品夜和氣命、次大鞆和氣命、亦名品陀和氣命、二柱此太子○應神之御名、所以負大鞆和氣命者、初所生時、如鞆宍生御腕、故著其御名、是以知坐腹中定國也、

〔日本書紀十應神〕四十年正月戊申、天皇召大山守命、大鷦鷯尊、問之曰、汝等者愛子耶、對言甚愛也、亦問之、長與少孰尤焉、大山守命對言、不逮于長子、於是天皇有不悅之色、時大鷦鷯尊預察天皇之色、以對言、長者多經寒暑、既爲成人、更無悒矣、唯少子者、未知其成不、是以少子甚憐之、天皇大悅曰、汝言寔合朕之心、是時天皇常有立菟道稚郞子爲太子之情、然欲知二皇子之意、故發是問、是以不悅大山守命之對言也、　甲子、立菟道稚郞子爲嗣、卽日任大山守命、令掌山川林野、以大鷦鷯尊爲太子輔之、令知國事、

〔日本書紀十九欽明〕十五年正月甲午、立皇子渟中倉太珠敷尊○敏達爲皇太子、

〔日本書紀二十九天武〕十年二月甲子、是日立草壁皇子尊爲皇太子、

古立太子不必一人

〔古事記中景行〕凡此大帯日子天皇○景行之御子等、所録廿一王、不入記五十九王、并八十王之中、若帯日子命、○成務與倭建命亦五百木之入日子命、此三王負太子之名、

〔古事記傳二十六〕三王負太子之名とは、是上代の常なり、抑上ッ御代々々に日嗣御子と申せるは、皇子たちの中に、取分て尊崇めて殊なるさまに定め賜へる物にて、其は必しも一柱には限らず、或は二柱三柱も坐しことなり、(まづは皇后の御腹の御兄、さては殊なる由ある皇子たちなり、)かくて御位は、必其日嗣御子の中なるぞ繼坐ける、○中略いで其證を具に云むには、先葺不合命の御子たち四柱の中に、五瀬命と、若御毛沼命(神武天皇)と二柱太子に坐けむこと、又神武天皇の太子は、神八井耳命と、神沼河耳命(綏靖天皇)と二柱にて坐しこと、共に彼御段に委く辨へたるが如し、次に書紀崇神巻に、四十八年豐城命と、活目命(垂仁天皇)と二柱の内を、御夢に因て、嗣に定賜へるも、元來此二柱太子に坐るが故なり、次に垂仁巻に卅年、天皇詔五十瓊敷命、大足彦尊曰、汝等云々とある、此も此二柱太子に坐しが故なり、(若然らずば、いかでか此二柱に限りて此詔あらむ、五十瓊敷命の御墓、諸陵式に載て、後まで祭賜ふをも思ふべし、)次に應神巻に、四十年天皇召大山守命、大鷦鷯尊問之曰云々とある、是又此二柱も宇遲稚郎子と共に三柱、元より太子に坐が故なり、故其より前二十八年の處にも、太子菟道稚郎子と記され、仁徳巻には、初天皇生日、木菟入于産殿云々、則取鷦鷯名以名太子曰大鷦鷯皇子と見え、此記明宮段にも、太子大雀命、姓氏錄(雀部朝臣條)にも、應神御世皇太子大鷦鷯尊とあり、此ら皆上代よりの傳言の隨に記せる文なり、又宇遲若郎子の、帝位を固く大雀命に讓避賜ひしも、大雀命は御兄にて共に太子に坐が故なるをや、

〔日本書紀十應神〕二十八年九月、高麗王遣使朝貢、○中略時太子菟道稚郎子、讀其表、怒之責高麗之使、

〔日本書紀十一仁徳〕元年正月己卯、大鷦鷯尊卽天皇位、○中略初天皇生日、○中略則取鷦鷯名以名太子曰大鷦鷯皇子、

性薄愚、志耽玄極、遊魂彼岸、銷意道場、過去之世、身歷數十、遷化漢土、僅爲王族、鍊法通覺、期到淨土、而今叨領儲君、委以萬機、神器難滿、寶祚易頹、伏惟陛下紹徽號居紫極、御八州以仁壽之化、撫三才以柔和之猷、海表隨化、率土因蹤、嘉瑞頻來、豐穰相係、伏願陛下擇賢良以輔治、用善哲以撫民、則萬國歡心、四海平安、臣出家入道、爲度外者、興隆佛教、紹耀玄風、天皇不聽、勅曰、阿兒勿歎、汝爲耳目、姥非阿兒、何由治國、太子不敢固辭、天下之人民聞而大悅、如遭慈父愛母、本願緣起云、臣忝膺儲君位、再三固辭、出家入道、爲度外者、興隆佛教、紹耀玄風、天皇不聽、不敢固辭、故製十七憲章、爲王法之規摸、流布諸惡莫作、教爲佛法之棟梁、

〔皇年代略記天智〕孝德天皇大化元年乙巳六月立太子、辛酉年七月齊明崩、以來皇太子厚至孝、不稱即位、壬戌以來於岡本宮攝政五箇年、八年己巳正月戊子即位、

〔神皇正統記齊明〕皇太子と申は、中大兄皇子〇天智の御事なり、孝德の御代より太子に立給ふ、此御時は攝政し給ふと見えたり、

〔革命勘文〕天智天皇者、息長足日廣額天皇〇舒明之太子也、讓位於母天豐財重日足姬天皇、〇皇極及男天萬豐日天皇、〇孝德二十一年間、猶爲太子攝萬機、

〇按ズルニ、職原抄、神皇正統記等ハ、皇太子ノ攝政ヲ以テ齊明天皇ノ朝ニ繫ケ、革命勘文ハ、皇極天皇即位ヨリ齊明天皇崩御マデノ間二十一年間トス、而シテ皇年代略記ニハ、齊明天皇崩御ヨリ天智天皇即位マデノ間トセリ、但シ天智天皇ハ齊明天皇ノ崩後六年ヲ間テヽ、其ノ七年正月戊子ニ即位セラレタレバ、皇年代略記ノ、攝政ヲ五ヶ年トシ、即位ヲ八年正月トセルハ共ニ誤ナリ、

〔日本書紀二十九天武〕十年二月甲子、是日立草壁皇子尊爲皇太子、因以令攝萬機、

〔續日本紀八元正〕養老三年六月丁卯、皇太子〇聖武始聽朝政焉、

〇按ズルニ、皇太子始聽朝政トアルハ、太子攝政トハ異ナレドモ、類ヲ以テ此ニ附載ス、

臣是公、中納言種繼等並爲留守、

〔水鏡 下 桓武〕延暦三年十一月十一日戊申、長岡の京にうつり給ふ、同四年八月にならの京へ行幸侍りき、長岡の京には、中納言種繼留守にて候しを、みかどの御おとゝの早良の親王東宮とておはせしが、人をつかはしていころさしめ給ひてき、ことのおこりは、みかどつねにこゝかしこに行幸し給ひて、世のまつり事を東宮にのみあづけたてまつりしかば、天應二年に佐伯今毛人といひし人を宰相になさせ給ひたりしを、みかどかへらせ給ひたりしに、この種繼、佐伯の氏のかゝることはいまだ侍らずと御門に申しかば、宰相をとり給ひしを、東宮よにくちをしき事におぼして、種繼をたまはらんと申しを、みかどむつかり給ひて、さらに聞給はずして、このゝち東宮にまつり事をあづけたてまつり給ふ事なくなりにしを、やすからずおぼして、そのひまをとしごろうかゞひたまひつるに、よきをりふしにて、かくしたまひつる也、

〔職原抄 上〕攝政、〇中略 推古天皇朝、皇太子厩戸皇子 推古姪也 攝政、齊明天皇御宇皇太子中大兄皇子 〇天智 又攝政、

〔日本書紀 二十一 用明〕元年正月壬子朔、立穴穗部間人皇女爲皇后、是生四男、其一曰厩戸皇子、更名耳聰聖德、或名豐聰耳法大王、或云法主王、此之皇子、初居上宮、後移斑鳩、於豐御食炊屋姫天皇 〇推古 世、位居東宮、總攝萬機、行天皇事、語見豐御食炊屋姫天皇紀、

〔日本書紀 二十二 推古〕元年四月己卯、立厩戸豐聰耳皇子爲皇太子、仍錄攝政、以萬機悉委焉、

〔神皇正統記 推古〕厩戸皇子を皇太子として、萬機の政をまかせ給ふ、攝政と申き、太子の監國と云事もあれど、それはしばらくの事なり、是はひとへに天下を治め給ひけり、

〔聖德太子傳暦 上〕推古天皇元年四月、天皇初聞群臣奏勅曰、吾女人也、性不解物、萬機日塡、國務滋多、宜天下之事皆啓太子、卽日立太子爲皇太子、仍錄攝政、萬機悉委焉、太子受儲君位、固辭再三曰、臣天

天皇出御晝御座、
次以掌侍召皇太子、
皇太子參進御前、
次典侍持御衣奉皇太子、
皇太子進孫廂拜舞、如初、
次入御、
皇太子還御之便、令參二間廂拜母后給、訖還御、傳以下率相從如初、

太子監國

〔實久卿記〕天保十一年三月二十六日丁巳、今日東宮〇孝明拜覲也、辰終刻許、自昭陽舍東宮出御、坊官供奉、於清涼殿廣廂御拜舞云云、

〔令義解〕六儀制凡車駕巡幸及還、百官五位以上辭迎、留守者不在辭迎之限、謂執掌之長官留守者也、假令監國之太子、若執契之公卿之類、

〔令義解〕七公式勅旨式、〇中略皇太子監國亦准此式、以令代勅、

〔令集解〕三十一公式勅旨式、〇中略穴云、宰相以上留守之時、不用式耳、跡云、問、監國未知无皇太子、差宰相以上令留守者何行爲、答、不合行事也、以令代勅、謂乘勅行令啓耳、朱云、皇太子監國亦准此式、以令代勅、謂不得行詔書耳、問、皇太子留守條師記云、雖給鈴契不可給內印、又不在御所事、餘公事不可行者、未知依此式可行令旨、此何色事、答、言云云不明決耳、

〔令義解〕七公式便奏式、〇中略其皇太子監國、謂天子巡幸、太子留守、是爲監國、亦准此式、以奏勅代啓令、

〔令義解〕七公式凡車駕巡幸京師、留守官給鈴契、謂留守官者、皇太子若不在者、餘官留守者亦是也、(中略)其依上條、太子監國之日、唯得用勅旨及便奏、以外大事不得施行、

〔續日本紀〕三十八桓武延暦四年九月丙辰、車駕至自平城、〇中略至於行幸平城、太子〇早良及右大臣藤原朝

肩挾右脇、左ヲ為上、右ヲ為下、復座、長橋次御拜、傳候御後、次令出晝御座給、二枚杉戶ノ方ゟ御出、取脂燭了、次令入議定所了、脂燭殿上人絁篤朝臣、輝季朝臣、保房、房季、丹波尚秀、各束帶奉行光綱也、

〔俊矩記〕文化六年三月十四日甲戌、早朝出納來面、昨夕之趣、委細演說、卽內豎、戶屋主有之、晝之交名一紙返却、此通諸司參勤被仰出間、來月七日巳刻可相催旨申渡、最早別段以切紙不申送旨申聞、內內豎可為一人事、意味委細申含、藏權頭承知、卽示談之上、下行員數令治定如左、

御拜覲御下行

五斗	出納	一人	三斗	內豎	一人
三斗	小舍人	一人	三斗	所衆	一人
二斗	戶屋主	一人	壹斗五升	仕人	一人

〇中略

皇太子拜覲儀

刻限皇太子出御在所、令參御殿給、

傳取御裾、學士二人、亮二人、大夫二人、左右相分前行、上﨟在左大進少進等候御後、或傍親公卿在御供、

天皇出御

豫御帳中立御倚子、撤晝御座、

皇太子進孫廂、當御前西面拜舞、

此間傳大夫留簀子、亮以下候便所、

次拜舞訖、暫令候晝明池障子後給、

次入御

此間撤御帳中御倚子、更供尋常御座、弘廂北第一間敷東京錦茵為皇太子御座、孫廂敷圓座一枚為關白座、

拜舞、於後廂中間拜舞 訖退出、于時天皇下倚子御座、御平敷御座、更令內侍召還皇太弟、還參著座南廂第三間置褥一枚西面 頭之掌侍侍子取御祿、御衣一襲、青色長御衣、蘇芳下襲、綾表御袴、今御袴阿古女等、白綾細長一襲等也、攝政取御祿授於大夫卿、其中以袷單御衣奉掛御頸、又步進南廂再拜舞踏、退出儀式行列如初、便參皇太后宮、是御在所殿東妻也 又再拜舞踏、依母后御氣色入御簾中、有御祿、女裝束一襲 以單御衣奉掛御頸、再拜舞踏又如初、此間作法神妙、上下見者感淚難禁、推而可察、次大夫以下進以上給祿各有差、大夫白大褂一襲、學士亮大進等各紅衾一條、六位進黃襖子一領、於瀧口邊藏人範永賜之、北上西面再拜舞踏、皇太弟御本殿、公卿以下有饗饌也、

〔台記〕久壽二年十月五日己卯、傳聞東宮○二條自鳥羽南殿行啓同田中殿、先例召在禪閤之貞信公青絲毛、今度被用在院之青絲毛云云、件車故待賢門院爲中宮常出入之時、白河院被送云云、太子御裝束闕腋袍、螺鈿劒、絲鞋云々、近後一條院爲太子拜覲日之例也、見爲善記之由、亮親朝臣所談也、

〔渡邊雋記〕享保十三年六月二十三日、今晚御拜覲、御所(中御門)へ御成(櫻町)亥刻、還御子牛刻、 拜覲之義、數百年御中絕之御沙汰、今度御再興、誠以恐悅御事也、御衣紋高倉殿御參、於清涼殿御作法有之由、坊官不殘御參、地下之輩不及參勤、

〔公卿補任中御門〕享保十三年六月二十三日、皇太子○櫻町御拜覲、

〔資方朝臣記〕享保十三年六月二十三日、東宮拜覲也、今夜亥刻計也、東宮傅兼香公令候議定所庇圓座給、南面 東宮出御于議定所艮方之御座、次東宮大夫實憲卿 取御劍歟、御笏歟、次傅卷御簾、次東宮出御、經布障子高遣戶ノ邊ヲ御通リ有之、傅以下供奉、脂燭之輩、布障子ノ前ノ妻戶之內取脂燭、長橋ノ邊西ノ妻戶ノ邊迄也、入御于鬼間、御休息所 垂簾也、傅被候鬼間ノ孫庇、北面 也、此間主上出御于晝御座、御帳臺無几帳、立御倚子、無晝御座之疊、垂簾之內左右有菊燈臺、簾外同前、次頭辨候御簾歟、次傅目、左少辨稙房從御目、傅仰左中辨宣誠可來由、宣誠相從、次孫庇ノ邊ニ御出之道ノ構ヲ被命、次從簾中卷簾、太子御出、傅以下供奉、太子令著晝御座簾外之疊給、大夫取祿行于鬼間孫庇之程、亮跪取祿、了掛左

太子拜覲

〇按ズルニ、此他ナホ東宮ニ供スベキ、調度用途ノ類多ケレド略ス、官位部東宮坊篇ヲ參看スベシ、

〔儲君親王宣下部類〕明曆四年正月十九日、儲皇〇靈元親王宣下之儀有御沙汰、廿一日參院、親王宣下之事條々有沙汰、今度親王宣下、同日可有敍品宣下哉否事、法皇舊院親王宣下同日敍品宣下云云、然ハ爲御佳躅之間、此旨可致沙汰歟之由伺申、仰云、儲君之儀不混自餘親王、縱者雖無品、各別ニ御崇敬、以之爲御規摸乍、然法皇舊院同日御吉例之間、其通可有御沙汰之由御氣色也者退出了、

〔季連宿禰記〕天和二年十一月三日丙午、儲君〇東山御臺所賄料千俵、從武家被獻之由風聞、

〔通誠公記〕寶永五年二月三日、內院中東宮御次第事、主上、仙洞、東宮、女院、中宮大准后、可爲此通之由御治定也、

〔賴言卿記〕寶曆九年五月十五日甲午、今日儲君〇後桃園立親王宣下也、自今日御次第、親王准后ト被立了、〇略節

〔言成卿記〕天保六年九月十八日、今日儲君〇孝明立親王宣下廻文到來、儲君御次第、可爲准后上候、右之通大宮權大夫被申渡、〇略節

〔西宮記正月〕童親王拜覲事

延喜九年二月廿一日、皇太子始朝覲、乘輦入自玄暉門至淸凉殿北簷下輦、候息所直曹、藏人供奉御裝束、〇尋常幞立意于一鏁、懸代、不立置物机、郎太子進當御座拜舞、〇寬平入自南方、於又廂舞踏、此度以太子坊甞殊用正廂拜、此間左大臣候簾下奉引、禮了還、

〔外記日記〕〇立太子部類所引寬仁元年八月二十一日丙戌、此日皇太弟〇後朱雀初參御所朝謁天皇、其儀申二刻皇太弟出東北面對、西行乘御在所殿南庇參給、前攝政幷攝政、幷傳右大臣、坊官大夫權中納言藤原敎通卿、同賴宗卿等立前後、他坊官等於殿下伺候、皇帝〇後一條御倚子御座、〇此御座立於殿南第四間南面皇太弟進而

〔文德實錄〕一嘉祥三年四月己酉、公卿上啓曰、略○中遺制云、皇太子○文德可於柩前卽皇帝位、一依周漢故事、伏惟殿下深仁植性、純孝因心、寢門問豎、竭愛敬之誠、馳道申虔、盡溫恭之禮、臣子之道克宣、天人之望允集、宜肅奉聖旨、屬玆時來、居南面之尊高、應北辰之大寶、而偏纒罔極之至哀、不忍割情以就禮、涉旬踰月、以至今日、○臣等顒々深所未達、況乎先帝仁○明已有遺勅、孝善述父志、何得拘匹夫之情孝、缺萬乘之典章、謹案春秋例、人君卽位有四、初喪卽位一也、旣葬卽位二也、踰年卽位三也、三年諒闇終卽位四也、○殿下已在初喪而忘制、宜追旣葬而示儀、上承七廟之靈、下定萬民之望、臣等自負舊恩於丘山、思致新主於堯舜、不任悾款之至、謹奉啓以勸進、令曰、雖有遺詔、旣踰旬月、況亦陵土未乾、不忍卽正、不聽、

〔令義解七公式〕東宮　皇太子　殿下　右如此之類、並闕字、

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡王臣以下不得輙供大神幣帛、其三后皇太子若有應供者、臨時奏聞、

〔百一錄〕寶永四年四月廿九日、儲君御方○中御門有親王宣下、上卿二條內大臣、勅別當德大寺大納言、奉行頭中將、　經慶卿改經敬、儲君御諱慶仁ヤスヒト依避之也、　五月朔日、隆慶卿改隆賀、季慶朝臣改季通、依避御諱也、

〔延喜式四十三春宮〕凡東宮初立、頓料絹一百五十疋、調布五百端、調綿五百屯、錢百五十貫文、白米百斛、黑米百斛、鹽廿斛、油八斗、

凡東宮湯沐二千戶

凡六月一日、內藏寮供御櫛卅枚、十二月亦同

凡八月二日、御被料長絹二十疋、白綿二百屯、申官請受、

凡十二月二日、來年雜用料絹三百疋、綿七百屯、絲五百約、調布一千端、鍬一千口、鐵五百廷、御履革四張、鞦文革二張、白革二張、申官請受、

宮へ、白銀三十枚、一種一荷、千だい一箱井伊掃部頭獻上、禁中へ、御大刀一腰、蠟燭二千挺、御馬代黄金三十兩一匹、東宮へ、御大刀一腰、蠟燭二千挺、御馬代黄金三十兩一匹、仙洞へ、御大刀一腰、蠟燭千挺、御馬代黄金十兩一匹、中宮へ、縮緬白紅二十卷、蠟燭千挺、戸田土佐守獻上、禁中へ、御大刀一腰、和紙二箱、御馬一匹、代東宮へ、御大刀一腰、和紙二箱、御馬一匹、代仙洞へ、御大刀一腰、和紙二箱、御馬一匹、代黄金十兩中宮へ和紙一箱、

六日乙未、井伊掃部頭來使、有贈物、大刀馬代也、使者口上之趣ハ、備忘切紙持參如左、

此度參內院參首尾能相勤、奉拜龍顏、天盃頂戴、仙洞東宮御目見被仰付、御盃頂戴、重疊難有奉存候、依之爲御祝儀、以使者目錄之通被致進上候、○節略

〔令義解六儀制〕凡○中略率土之內、於三后皇太子上啓稱殿下、自稱皆臣妾、對揚稱名、

〔槐記〕享保十四年九月四日、晚參候、東宮立坊ノ節、滋野井ヨリ、坊官ノ者ノ表文等ニハ臣ト稱シテ苦シカラヌコトニヤ、但シ臣トハ稱スマジキコトヤト問ハル、令ノ集解東宮坊官ノ人臣ト稱スベキコト、唐朝ノ禮ナル由記セリ、唐朝ノモノニモ略出セリ、宋朝以后ノ書ニハ見當ラネドモ、日本ノ禮ハ唐禮ヲ專ラトスルコトナレバ、臣ト稱シテ全クアヤマリナラズト仰遣ハサレシガ、物ハ何ニテモ廣ク見ベキコト也、此頃賓退錄ノ中ニ、宋朝太子ノ臣ト稱スルコトヲ許サレズ、ソレヨリシテ春宮ノ坊官ヲ臣ト稱スルコトヲ廢セラレタリト記セリ、コレニテ唐朝ニテ用タルコトイヨ〳〵慥ナリ、カヤウノコトホド面白キコトハナシ、コチラカラ合セズ、アチラカラ合フコトニアラザレバ本ノコトニ非ズ、宋朝ニ廢セラレタルニテ、唐禮ノタシカナルヲ日本ニハ用ユ、集解モソレヲ載ラレタリ、是等ノコトドモ近キ書ナレバ御覽アルベケレドモ、其不審ナキ時ハ徒ニ看過ナリト、地下ニ此コトノアリタル故ニヒトシホニ思召ヲ、滋野井ニ仰遣ハサレタラバ、何ホドカ嬉シカルベシ、未ダ仰ツカハサレヌト仰ラル、

兵部卿宮、上總宮、常陸宮、前內大臣、德大寺前內大臣、近習番御免、院伺候、　廿七日、內々門跡、口御所々々、入道前大納言、冷泉入道前大納言、內々公卿殿上人、有成朝臣、　四月二日、外樣公卿殿上人、內々外樣入道、　廿一日、文覺寺門跡、大乘院門跡、三寶院門跡、蓮華光院門跡、實相院門跡、大乘院新門跡、三寶院新門跡、　廿二日、諸禮、內院非藏人、　廿四日、東本願寺、　廿五日、養源院、法淨院、南禪寺、五山、小池坊、智積院、蓮臺寺、本國寺、智恩院、

右內々衆御禮以上ハ、悉御三間御對面故、不及坊官總詰、外樣以下ハ皆小御所御對面故、坊官幷東宮近習總詰也、即二月廿一日以下廿六日迄、坊官一統俊常迄連名總詰觸、自三卿、後日被觸出由也、

東宮御禮、此日攝家中以下役人坊官近習等也、仍俊常兼日議奏觸有之、辰半刻小仕、於使所賜御祝、吸物酒肴、未半刻過攝家中以下、悉於御三間御對面、東宮御座中段御板茵也、傅大臣被候南椽座敷、三卿亦南椽座敷杉戶邊列候也、俊常坊官一統之列、於西椽座敷申御對面、其次東宮近習、次近習一統西園寺等御對面也、御對面後御禮之事、於大夫以下俊常以上坊官一統連座、以表使申上御禮也、攝家中御對面而已、御盃之儀無之也、　五日甲午、立坊御祝儀、關東使井伊掃部頭、戶田土佐守、酒井讚岐守、同伴參內也、今日御所方進獻如左、

大樹ヨリ禁中へ、御大刀一腰、御馬代白銀三百枚一匹、三種二荷、干鯛一箱、昆布一箱、鯣一箱、東宮へ、御大刀一腰、綿二百把、御馬代白銀三百枚一匹、仙洞へ、白銀百枚、二種一荷、干鯛一箱、昆布一箱、中宮へ、白銀二百枚、綿百把、二種一荷、干鯛一はこ、こんぶ一はこ、亞相ヨリ禁中へ、御大刀一腰、御馬代白銀三百枚一匹、二種一荷、昆布一箱、鯣一箱、東宮へ、御大刀一腰、綿二百把、御馬代銀二百枚一匹、仙洞へ、白銀五十枚、一種一荷、干鯛一箱中宮へ、白銀百枚、綿百把、一種一荷、干鯛一はこ、御臺ヨリ禁中へ、白銀三十枚、二種一荷、十だい一はこ、こんぶ一はこ、東宮へ、白銀五十枚、二種一荷、干だい一はこ、こんぶ一箱、仙洞へ、紗綾十卷、一種一荷、干だい一はこ中

院殿より銀三十枚、一種一荷、東宮に備前國光重の御大刀、銀三百枚、綿二百把、三種二荷、大納言殿より青江恒次の御大刀、銀二百枚、綿百把、二種一荷、天英院殿より銀五十枚、一種一荷、法皇に銀百枚、二種一荷、大納言殿より銀五十枚、一種一荷、天英院殿より紗綾十卷、一種一荷なり、　六月廿一日、去十一日京にて立坊ありしを賀して、群臣兩城に出仕す、

〔寶曆集成絲綸錄二〕延享四卯年三月十六日、立坊(○桃園)相濟候ニ付、爲御祝儀明廿二日服紗小袖半袴著之、四時總出仕有之候、尤西丸(江)も出仕、大御所樣大納言樣(江)も御祝儀可申上候事、

但出仕無之面々は、月番之老中隱岐守右近將監宅(江)、以使者御祝儀可申上候、

一在國在邑之面々、五萬石以上ハ使札、五萬石以下ハ飛札、老中隱岐守右近將監(江)可差越候事、

右之趣可被相觸候

三月

〔浚明院殿御實紀十七〕明和五年二月七日、京の御使松平下總守忠刻に、備前國守家の御大刀をさづけらる、これ立坊の慶賀とて奉り給ふなり、御臺所よりの進らせられ物は、高家長澤壹岐守資祐に授らる、　二十七日、群臣出仕し、京都の立坊(英仁親王○後桃園院一皇子○桃園院第)を賀す、　四月三日、立坊により、禁裏より屏風一雙、三種二荷、東宮より御大刀、金二枚、白綾十端、女院准后よりもおなじ、大納言殿には、禁裏より畫帖、二種一荷、東宮より御大刀、金一枚、白綾一卷、女院より純子一卷、准后よりも同じく進らせらる、

〔後矩記〕文化六年三月廿五日乙酉、立坊(○仁孝)恐悅、今朝仙洞(御帳)中宮(表使)殿下等令參賀、但於中宮賜御祝(赤飯吸物酒肴也)宮司一統如此由、即參賀之序、於御客間令頂戴、(以非藏人御肝煎迄御禮申入置如例、)東宮御禮式如左、

三月廿五日、攝家中、兩役、院兩使、三卿、坊官、東宮近習、近習、西園寺中納言、　廿六日、中務卿宮、尹宮、

市朝、慕帳蓮扉欣々于巖谷、殿下感瑞光而託孕、應端氣而誕姿、生而神聰、已掩軒轅於五帝之德、立是天授、豈假羽翼於四皓之賢、既賀寢膳之有問、喜悅監撫之有歸、鴻景之基固於磐石、鶴殿之志安於泰山、昔在周武之育成王、全繼聖哲之體、漢文之生景帝、定齊恭儉之名、周漢之風、于茲可親而已、嗟哉出穀之鳳雛、想煙霄於咫尺、離胎之龍子、致雲雨於須臾、斯則雖因高殖、宿分不定、猶如日之不可踰、天之不可階者也、延昌等棲深山之古洞、纔聽嘉鵲之聲、樂大厦之新成、欲表賀燕之志、不勝欣躍抃舞之望、謹遣寺主僧傳燈大法師良藝等、奉賀以聞、謹啓、

天曆四年八月一日

〔左經記〕寬仁元年八月九日甲戌、申剋東宮立給、○後朱雀作法如常、　二十一日丙戌、仁和寺僧正被示云、寺僧爲申慶可參攝政殿、先例僧綱幷所司大衆相會摠二十人參入給祿、僧綱大褂一領、所司大衆等衾各一條也云々、入夜歸參、　二十五日庚寅、今日興福寺僧等參東宮、令申御慶賀之由、於北陣邊、令少進資信啓參上之由、即有給祿事、僧綱二人、別當權別當、白大褂各二領進取之、已講三人、白大褂各一領、大衆諸司各衾一條、屬取授之、摠所參僧等二十一口也、傳聞興福寺僧先參攝政殿、攝政御覽也次參東宮攝政殿同有給祿事云々、

〔常憲院殿御實紀七〕天和三年二月九日、京にて親王立坊、○東山女御立后ありしをはかせ給ひ、賀使進らせ給ふ、松平讃岐守賴常これを奉り暇賜ふ、高家畠山民部大輔基玄もさしそひまかるべしと命せられ同じく暇下さる、その儀物は主上○靈元に、儀刀一振、銀三百枚、皇太子に、眞包御大刀銀三百枚、綿二百把、各三種二荷そふ、本院に、銀百枚、新院中宮に、銀二百枚、綿百把、ともに二種一荷そひたり、御臺所より禁庭に、銀三十枚、東宮に五十枚、中宮には三十枚、各二種一荷そひたり、　二十一日、群臣まうのぼり、老臣に謁し、立坊立后を賀し奉る、

〔有德院殿御實紀二十七〕享保十三年五月廿一日、立坊、○櫻町の慶賀使酒井雅樂頭親本に、進らせ給ふ品々を授らる、禁裏に御大刀、銀三百枚、三種二荷、大納言殿より御大刀、銀二百枚、二種一荷、天英

裏ノ火事ニヤケテ、身バカリノコリタリケルニ、ツカサヤヲ作リテグセラレタル也、

〔百練抄四後冷泉〕康平二年正月八日、皇居一條院燒亡、主上渡御上東門院御所、壺切劍爲灰燼、(不被獻東宮也)

〔百練抄十五後嵯峨〕寛元元年八月十日、今上第一皇子(久仁、後深草)○有立太子事、申刻被始行節會、節會畢於御前被行坊官除目、坊官等於弓場申慶、又參本宮申慶、公卿相引參本宮、事畢自內裏被獻御劍、壺切紛失之間、被渡他御劍、勅使頭中將師繼朝臣、賜祿再拜退出、

〔園太曆〕觀應三年(○文和元年)二月十三日丁亥、今夜參院、○中略去年□□□壺切被渡之儀尋申之、仰云、劍墨置二階、被置折妻戶內、壺切卽被置其傍、藏人範康引導左少將康清(伯卿猶子)參進、範康卷御簾、康清賜之、出中戶納長櫃歟、一身三度賦之云云、

〔基量卿記〕天和二年三月二十七日、今日壺切御劍被進、以密儀土御門兵部少輔令持參也、本儀近衞中少將可持參也、先年萬治度令燒失處、作飾燒了之所、於劍者無別儀、依不及磨云云、不思儀之名劍也、累代寶物無他物也、

〔通誠公記〕寶永五年後正月六日、壺切御劍御裝束調進之事、被仰出武家、兩傳奏奉之、傳仰於武家、二月八日、壺切御劍裝束、今日造進之、(自武家渡於武家兩傳奏、)關白內覽之後、議奏以女房(大和)獻之、

〔槐記〕享保九年九月七日、仰ニ、總ジテ後鳥羽院已來ノ眞記ハ、後光明院ノ時ノ禁裏炎上ニコトゴトク亡ビタリ、○中略五間ニ八間ノ御文庫、一度ニ三ケ所トモニ燒失セリ惜ムベシ、然ルニ壺切ノ御劍、其外ニ今二振ノ御劍モ、念ナク燒失ケルガ、後日二振トモ、鞘モナクテ身バカリヲ燒跡ヨリ探シ出シ奉ルニ、兎ノ毛ノ先ニテツキタルホドノキズモナシ、不思議ト云ベシ、今ノ御劍コレナリト仰ラル、

〔朝野群載一文筆〕延曆寺奉賀儲君始立啓

延曆寺沙門延昌等謹啓、伏聞儲君殿下、(○冷泉)去月十三日正太子之尊、就少陽之位、樵袍藍袖、慬々于

命、祿袿一襲、

按壺切者、漢張良劔、（資仲卿說）長良公劔、（忠仁公兄、花園院御記、）忠仁公劔、（寛平御記）昭宣公劔、（顯兼卿抄）延喜帝（○醍醐）東宮之時被進之、（寛平五年四月二日立太子、以山蔭爲御使、是始歟、）海浦蒔繪有如龍摺具、裝束青滑革、（延久御記）海浦蒔繪、野劔麒麟蝶鈿文、（入車記）後冷泉院康平二、正、八皇居（一條院）燒亡之時爲灰燼、（不被進東宮、後三百練抄）後三條院治曆四、十二、十一、爲灰燼、仍被鑄造、（或抄）此時及殘仍被造鞘、（顯兼卿抄）承久亂逆之時、紛失之由有沙汰、寛元元、（仁治四）八、十（後深草院立太子）被新造、（壺切紛失、被渡他御劔、百練抄）正嘉二、八、七（龜山院立太子）自勝光明院寶藏出現、（承久不紛失、被納寶藏歟云々、或抄）

〔江談抄三雜事〕劔　壺切

壺切者爲張良劔事

又被命云、壺切ハ昔名將劔也、張良劔云々、雄劔ト云僻事也云々、資仲所說也、

壺切事

劔ハ壺切、但壺切燒亡歟未詳、件劔ハ累代東宮渡物也、而後三條院東宮之時、二十三年之間、入道殿（○藤原教通）不令獻給云々、其故ハ、藤氏腹東宮之寶物ナレバ、何此東宮可令得給乎云々、仍後三條院被仰之樣、壺切我持無益也、更ニホシカラズト被仰ケリ、サテ遂ニ御卽位ノ後コソ被進ケレ、

是皆古今所傳談也云々、

〔續古事談一王道后宮〕東宮ノ御マモリニ、ツボキリト云大刀ハ、昭宣公（○藤原基經）ノ大刀也、延喜ノ御門儲君ニオハシマシケルニ奉ラレタリケル、ヨリ傳ハリテ、代々ノ御マモリトナルナリ、後三條院東宮ニ立給時、後冷泉院ヨリワタサレザリケリ、後冷泉院ウセ給テ後モトメイデヽ、大二條殿（○藤原教通）關白ノ時、後三條院ニタテマツラレニケリ、立坊ノ後二十餘年ワタサレデヤミニキ、今位ニツキテ後、トヾメラレズトモアリナムト世ノ人申ケリ、後三條院オホセラレケル、神璽寶劔エウナリシカドモ、二十餘年スギニキ、何カクルシカラントテトヾマリニケリ、其後ホドナク二條內

壺切御劍

次傳以下再拜畢昇殿、　次五位藏人持參御膳具、(小舍人相從)　立南門外、令亮啓事之由、　次亮還出召勅使、勅使著殿上、　次亮取祿(大褂一領)　授勅使、勅使賜之退出、　此間小舍人計渡御膳具、　次御劍勅使捧御劍立南門外、(小舍人引從)　令權亮啓事之由、　次權亮還出召勅使、　次勅使昇殿上沓脱、參進御殿簾前、授御劍於權亮、權亮取之持參夜御殿、　次權亮取祿授勅使、(大褂一重)　次勅使降殿再拜退出、　次諸卿參入、立南門外、令亮啓賀、　次亮還出仰聞食之由、　次諸卿進南庭再拜、(西上北面)　畢退列立南門外、　次諸卿更令權亮啓昇殿之事、　次權亮還出復命、　次諸卿再拜、(不進庭中)　次關白以下公卿著殿上、豫設饗於臺盤、　次一獻、大夫起座勸盃、大進取瓶子、　次二獻、權大夫起座勸盃、權大進取瓶子、

次居汁物關白大臣前、四位殿上人役之、納言以下豫居之、　次三獻、權亮勸盃、權少進取瓶子、　次賜祿、亮取關白祿、(大褂二重)(白)　四位殿上人取大臣祿、(各大褂一重)(白)　五位殿上人取大納言以下參議以上祿、(各白大褂一領)　次諸卿退出、　次供御膳、大夫勤仕陪膳、　次神祇官人奉仕大殿祭、(少進引導之)　若入夜時、御階下主殿署奉仕立明、

〔西宮記(臨時五)〕東宮行啓

寬平九年正月御記曰、大丞相奏云云、昔臣父有名劍、世傳斬壺、但有二名、田邑天皇(文德)○喚件劍賚陰陽師、即爲厭法埋云、于時帝崩、陰陽師逃亡、是見鬼者也、而不知劍所在、彼陰陽師居神泉苑、爰推量其所堀、覓援得此劍、拔所著劍令覽者是也、光彩電耀、目驚霜及、還納室云云、令候東宮劍若是歟、

〔禁秘御抄上〕寶劍神璽、

抑壺切代々東宮寶物也、又時々在公家、延喜以少將定方被渡東宮是始歟、(東宮給褂一重)

〔禁秘御抄階梯上〕寶劍神璽○中略

延喜被渡東宮保明太子、(諡號文彥太子)　醍醐天皇皇子、西宮記、延喜四年二月十九日、召左大臣仰立太子宣命旨云々、使左近少將定方、持切壺劍賜皇太子曰、吾爲太子初、天皇賜此劍、故以賜之、定方奏復

少納言退出召之、　次外辨參列標下（異位重行、西上北面、）　次内辨召宣命使賜宣命、　次宣命使降立軒廊、
次内辨降殿就標　次宣命使就版　宣制一段、群臣再拜、　又一段、群臣再拜、　次宣命使復本列、
次内辨以下退出、脱靴改淺履、還著仗座、　天皇入御、近仗退出、　次職事奉仕除目御裝束、　次職事
來軾召大臣、　次大臣著殿上、　次出御晝御座、　關白著廂圓座、　次職事奉仰、出殿上召大臣、　次
大臣參著御前圓座、　次依天氣大臣召男共、　五位藏人豫參進候簀子、　大臣仰可持參硯續紙之
由、五位藏人持參之、　次大臣依天氣書坊官除目、　次奏聞、御覽畢返給、　次大臣取副除目於笏、還
著仗座、　次大臣以官人召外記、仰可持參硯之由、　次外記持參硯、置參議座上、　次大臣召清書參
議於座前授除目、　參議取副除目於笏復座　次參議候氣色執筆　傳一枚（黄紙）　兩大夫一枚（折
堺）　學士亮一枚（折堺）　次參議清書畢、持參大臣前、　次大臣披見清書　次大臣召外記筥、外記持
參筥、　次大臣納清書於筥給外記　外記持筥候小庭　次大臣進弓場（外記相從）奏清書、御覽畢返給、
次大臣還著陣　外記置筥退入　次大臣更令官人召外記、六位外記候小庭、　次大臣問式省候否、
外記申候由　大臣仰可召之由、外記稱唯退入、　外記進小庭、申式省候由、　大臣仰可召之由、外
記稱唯退入、　外記又進小庭、申式省候之由、　大臣仰可召之由、外記稱唯退入、　次式部丞立小庭、
次大臣取副除目於笏、召式部丞給之、　丞取之立小庭、　次大臣仰仰詞、丞退出、　次大臣令官人
傳仰可撤空筥硯等之由於外記、　次外記參進撤之　此間傳以下進弓場、奏事之由拜舞、（公卿一列、殿上人一
列、）畢參本宮（昭陽舍代）　次職事來軾、仰可差進啓陣之由、　次大臣令官人加敷軾　次大臣召外記、仰可
召近衛之由、　次左右近衛次將來軾　次大臣仰可候啓陣之由、次將稱唯退入、　次大臣引率諸卿
參本宮、

本宮次第

先傳以下參入昭陽舍代、列立南門外、（西上北面、公卿一列、殿上人一列、）　次亮離列啓事之由、還出仰聞食之由、加列、

置之、　次三獻、（勸盃權亮、瓶子權少進、）　次賜祿、　諸卿取之退出、　關白祿（白大褂二領）　亮取之、　大臣祿（白大褂二領）　四位殿上人取之、　納言參議祿（白大褂一領）　五位殿上人取之、　次供御膳、（陪膳大夫、大夫勸之、）

〔輪池叢書（公事）〕立坊の式、後光嚴院より十五代中絶にて、天和三年に再興せさせ給ひしとぞ、○中略天和三年立坊記に云、立坊ノ儀式御執行アルベキトノ御沙汰アリ、然レドモ、近世親王宣下ノ儀ノミニテ事スミ、立坊ノ式ハ、崇光院ヨリ至只今十四代、二百餘年餘絶タル事也、故文獻不足徵、諸家共考ラルベキ記ナシ、伏見殿ニ、崇光院ノ御時立坊式、幷親王ノ御衣トテ、則崇光院御著用、所々蟲バミノ跡アルモノ、笋刀ハ不及申、及天皇元服ノ時、自南殿清涼殿ヘ入御ノ時、御著用ノ空頂黑幘等ノ物マテ存ス、其上册命立坊記、萬一錄ナド云ル舊記アリ、其ニ從ヒ考ラルヽ時ニ大禮ノ儀式粗備レリ、主上悉叡覽アリ、伏見殿ヘ大ニ御感ノ勅諚アリシト聞ユ、既ニシテ陰陽家ニ命ジ玉ヒ、日時ノ勘文ヲ奉ベキトノ勅定ナリ、於茲天和三年春二月九日ニ極リヌ、

〔後矩記〕文化六年三月二十四日立太子（惠仁、〈仁孝〉御歲十、）○中略

立太子次第

前一兩日、職事奉勅向大臣第、有召仰之事、　當日早旦、諸司奉仕南殿御裝束、　刻限大臣著仗座、諸卿次第著座、　次大臣令官人敷軾、　次大臣召大外記、問諸司具否、　次職事來軾、仰以惠仁親王立皇太子、可令作宣命之由、　次大臣召大內記、仰宣命之趣、　次內記持參宣命草、（入筥）　次大臣披見、內記退入、　次大臣令職事奏宣命草、　職事還來、仰可令淸書之由、　次大臣召內記返給宣命草、仰可令淸書之由、內記退入、　次內記持參淸書、大臣披見、次大臣進弓場、（內記持宣命相從）　奏聞、御覽畢返給、　次大臣還著陣、給宣命於內記、仰可候陣腋之由、　次大臣差其人、告可爲宣命使之由、　次諸卿著外辨、　次內辨起座、於陣後著靴、進立軒廊、（內記持宣命相從）　天皇御南殿、（簾中）　近仗引陣、（不設胡床）　次內侍臨東檻、　次內辨昇殿著兀子、　次開門、　次闈司分著、　次內辨召舍人、　次少納言就版、　次內辨召刀禰、

臣前、(草同上之、)返大臣披見了入筥、　次大臣召外記給筥、(外記持筥、立小庭、)　次大臣進弓場代(外記相從)奏聞、御覽了返給、　次大臣還著陣、　外記置筥退　次大臣召外記、　六位外記候小庭、　次大臣問式省候否、外記申候由、　大臣仰可召之由、外記稱唯退下、　外記進小庭、申式省候由、　大臣仰可召由、(或今度無答)外記退、外記又進小庭、申式省候由、(如初)　大臣仰可召由、外記稱唯退、　次式部丞立小庭、　次大臣向奥座、取副除目於笏、召式部丞賜之、　丞取之立小庭、　次大臣仰仰詞、　丞退出　次大臣令官人、傳仰外記可撤硯之由、　外記參進、取筥至參議座、取重硯退下、　此間傳大夫以下、進弓場代付職事、奏事由、拜舞、(公卿一列、四位五位一列、)拜舞了參本宮、　次職事就軾、仰可差進啓陣由、　次大臣令官人加敷軾、次大臣召外記、仰可召近衛由、　次左右近衛次將就軾、大臣仰可候啓陣之由、　次將稱唯退出　次大臣召外記、仰可召兵衛由、　次左右兵衛佐就軾　大臣仰啓陣、(其詞如近衛、)左右兵衛佐稱唯退出、　次大臣以下參本宮、

本宮次第

傳以下參本宮、　次五位藏人持參御膳具、(小舍人相從)立中門外、　以亮奏事由、　次亮歸出召勅使、　勅使著殿上、　次亮取祿(白大褂一領)給勅使、　勅使取之退出(不拜)　此間小舍人計渡御膳具、　次傳以下降立中門外(北上東面、公卿一列、殿上人一列、)　亮離列奏事由、歸出仰聞食之由、退加列、　次傳以下再拜　次再拜了昇殿　次御劒勅使(近衛將)立中門外、(小舍人相從)令權亮奏事由、　次勅使取御劒、昇自中門廊切妻、候便宜所、　權亮出逢取之、置夜御殿、　次勅使著殿上、　權亮取祿授勅使、(白大褂二領)　勅使降庭上再拜退出、

近代立坊斷絶之後、立親王時、被渡護劒、仍被任其佳例、兼依被渡之今度不及此儀、　次諸卿參本宮、列立中門外、令亮奏事由、　次亮歸出仰聞食之由、　次諸卿進立庭中再拜、(東上北面)再拜了退、　次諸卿、更令權亮奏事由、奏昇殿慶再拜、(於中門外拜之)　次關白以下著殿上、(奥端相分)　兼設臺盤居置饗、　次一獻、(勸盃大夫、瓶子大進、)　次二獻(勸盃權大夫、瓶子權大進、)　次居汁物、　關白大臣前居之、四位殿上人役之、納言以下前兼居、

仙洞、仍參萬里小路殿申出也、持參內裏付大納言典侍進入之於鬼間、召俊言朝臣、內侍被出之、賜俊言朝臣、入赤地錦袋、出自無明門代、於弓場給小舍人、康和俊忠令持
隨身、有其雖歟由、仍令持小舍人畢、次俊言朝臣參青闈、次予退出、于時及曉天、○節略

〔天和三年立太子次第〕前一兩日、職事奉勅向大臣亭、仰召仰事、大臣召辨大外記仰之、當日早旦、諸
司奉仕南殿御裝束、刻限大臣著仗座、直端諸卿次第著陣、次內辨令官人敷軾　次內辨召大外
記問諸司具否、次職事來就軾、仰云、以朝仁親王○東山可為皇太子、令作宣命、次內辨召大內記、仰
宣命趣、其詞如職事　次少內記持參宣命草、次內辨以職事奏聞、職事歸來、仰可令清書之由、次內辨
召內記、返給宣命草、仰可令清書之由、次內記進清書、次內辨就弓場代內記相從奏聞、御覽畢返給、
次內辨還著陣、賜宣命於內記、仰可候陣腋之由、次內辨告宣命使於其人、次諸卿著外辨、次內辨
起座、於宜仁門外著靴、進立宜陽殿壇上、內記持宣命相從　次天皇御南殿或不出御　次近仗陣階下不立胡床　次內
辨取副宣命於笏、進立軒廊、次內侍臨西檻、次內辨昇西階著兀子、次開門　次闈司著座　次
內辨召舍人二聲　次少納言就版　次內辨宣、刀禰召、少納言稱唯、出召之、次外辨參列異位重行、東上
北面、次內辨召宣命使賜宣命、次宣命使下殿立軒廊、次內辨下殿向宣命使揖、宣命使答揖、次
內辨就庭中標、次宣命使就版　宣制一段、群臣再拜、又一段、群臣再拜、次宣命使退復本列、次
內辨以下退出、改淺沓還著仗座、次入御　次職事奉仕除目御裝束如女叙位　次職事就軾召大臣
大臣著殿上、次出御晝御座、關白著廂圓座、次職事奉仰、出殿上告召之由、大臣參進著執筆
圓座、次依天氣、大臣召男共、五位藏人參進候簀子、大臣仰硯續紙、五位藏人持參之、次大
臣依仰、書宮司除目、書畢奏聞即返給、次大臣取副除目於笏、出殿上召外記、筥入之、還著仗座、外
記置筥退下、次大臣召外記、仰可持參硯之由、外記持參硯、置參議座上、次大臣目清書參議有大
辨必召　參議進寄大臣前、位次參議、依氣色先著座上、重依目參進、次大臣授除目不給筥　參
議復座候氣色、摺墨染筆書之、傳一枚黃紙　兩大夫一枚折堺　亮以下一枚折堺　次清書了、持參大

（近代當日宣下也、於此節會者、不被仰內辨例也、）次左大臣召外記并頭辨定房朝臣仰之、次定房朝臣著軾仰云、以富仁親王（○花園）可為皇太子令作宣命ヨ、次召大內記清範仰宣命趣、次內記持參宣命草、次內辨於陣以頭左中辨奏聞之、次返下之、次同人奏清書、（先例多就弓場奏、在上御所存、）次令定宣命使、次宸儀（黃櫨染）出御南殿、（兼設筵道、清涼殿額間左右供掌灯、）關白殿令候御裾給、頭辨候御草鞋、內侍二人候劒璽、予候脂燭、次內侍置劒璽於大床子東頭、內侍候御帳東邊、天皇御座定、（簾中御大床子御座、）此間近衞陣立、（不立胡床、次將卷纓緌腋、蒔繪劒、壺胡籙、丸鞆帶、或淺履、或靴、奉行職事於南殿西簀子催促之、）次諸卿著外辨、辨、少納言同著之、內辨（著靴）取副宣命於笏、立軒廊西一間、內侍臨東檻、（自簾中出之扶持之、關白相具令出給之、內侍居東檻即歸入、予同令扶持之、）次內辨昇東階著兀子、此間上官著階下座、次開門、次闈司分著、次內辨召舍人、少納言就版、內辨宣、刀禰召セ、少納言稱唯退入、外辨王卿立標、（異位重行）內辨召宣命使藤中納言（俊光）宣命使參上、給宣命立軒廊第一間、次宣命使著版、宣制兩段、段々再拜、次宣命使歸本列、次公卿退出、還著陣座、次宸儀還御本殿、（其儀如出御、）此間藏人奉仕御殿御裝束、（其儀如官奏、但敷圓座二枚、立切灯臺、）次主上出御晝御座、（御直衣）次關白殿令候御前圓座給、次予參進、承仰召執筆大臣、（其儀出御殿軾、就軾仰左府云、關白御消息云、コナタヘ令參給ヘ、）次左大臣昇自殿上小板敷著執筆座、次執筆召男共、予參進、左府云、硯續紙、次予入硯續紙於柳筥持參之、次執筆書之、書畢入柳筥奏覽、次執筆左大臣歸著陣、令右宰相中將清書之、黃紙一枚、（儲）別紙折堺一枚、（兩大夫）折堺一枚、（學士亮進圖、并監署載一紙、）清書畢大臣奏聞、次奏聞、次返下、先是執筆令書之間、上卿有召仰、參著軾之處、左府被申云、啓陣宣下事可令遲々、早可申請、且上卿申請有其例者、次予起座歸著、仰云、任例令著道除目清書奏聞之後、上卿召官人令敷加軾一枚、次召外記召左少將敦氏、右少將為守朝臣、左兵衞佐資名、右兵衞尉仰之、次坊官傳大夫權大夫等就弓場奏慶賀、予申次也、（其儀先出逢自無明門、代、左府氣色、予又深氣色、次持笏歸出、深氣色、仰聞食由也、左府氣色、次予居之退入、依家禮人々蹲居也、）各舞踏、主上出御之後、藏人兵部大輔經世相具御膳具、參富小路殿、（諸右御所）敕使立中門外、右大辨雅俊朝臣出逢歸出氣色、次敕使著殿上座、賜祿（大褂）退出云々、敕使事予雖有催申、子細畢、坊官奏慶之後、左少將俊言朝臣為敕使、被獻御劒於青闈、（壺切、代々儲君御劒也、此間被置

徘徊同廊、卿相五六人、仰立此所、關白在饗座、又公卿等多群集東宮晝御座、太奇怪也、但舍屋狹少之間更無其所、仍忌憚群居歟、坊官拜畢、左大臣以下昇自中門外方、余問云、可被立南庭拜哉如何、答云、不可立云云、余率人々降自中門外方、列立中門下、(東上北面)此間垂晝御座御簾、(光長役之)次亮重衡朝臣進出示氣色、參御所(可昇自中門外、而昇自內、失也、)啓事由之後(就晝御座簾下也、)退歸、降自中門內方、仰聞食之由、出中門了、次余已下列立南庭(東上北面、殿上人在此列末、)再拜了、歸立中門外、(上﨟兩三經列前退下、中納言已下先以退立本所、如例、)余招光長問云、被下昇殿令旨者、今間可奏慶、若可經程者暫可昇中門邊歟、如何者、答云、早被下口申次人只今所參也者、郎權亮維盛朝臣出來示氣色、昇自中門外方、如初參進簾下、降自中門內方、仰聞食之由、歸出了、次余已下再拜、(不進前庭、於本所拜也、)次余以下昇自中門外、著殿上饗座、豫關白及傳兩大夫等在端座、余著奧座、自餘人々相分著座、參議不著座如何、次一獻、(大夫宗盛卿勸關白、瓶子大進光長、)二獻、(勸盃權大夫兼雅卿、瓶子權大進平經仲、)次箸下、(汁物兼居之、參議不著座之間、不申七暗以下著座例也歟、)次三獻、(勸盃權亮維盛朝臣、瓶子藏人某、緣光長相觸傳云、三獻瓶子誰人可取哉、被答云、六位進可取之、忽不候、藏人何事之有哉云云、)次余扱箸取笏退出、此後給祿人々退出云云、關白幷坊官等留心歟、次御劒勅使頭中將定能朝臣參上云云、後聞坊官除目御前儀了、光雅相具御劒參東宮云云、又余退出禁中之後、左府被奏除目清書、藏人大進基親奏之云云、又清書之間被仰啓陣事云云、其後被下除目、次有坊官拜云云、此等事可尋記也、

宣命　　　　大內記業實

現神止大八洲所知須倭根子天皇我詔旨良萬勅命乎、親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、隨法爾可有支政止爲氏、言仁親王乎○皇太子止定賜布、故此之狀乎悟氏仕奉禮詔天皇勅旨乎衆聞食止宣、

治承二年十二月十五日

〔萬一記〕正安三年八月二十四日、參內、依立太子節會也、早旦諸司奉仕南殿御裝束、秉燭以後人々參集、子刻左大臣已下著仗座、今日冊太子事被宣下、可召仰諸司之由、(年々例前一日下知、寬仁九年前二日被宣下、延久元年當日宣下、)

還到中門下、向西稱唯、出自幔南方、畢、次余已下經幔南、人中門（離列之時余不他人作法不知）不揖、進立標下（余須練也、然而脚痛、更發之上、已及晩陰、仍不練步只徐步也、太奇怪事也、）各揖、皆悉列畢之後（予時日入、未秉燭之程也、）内辨召宣命使、（其詞不聞、以扇被鳴笏、）左兵衛督成範卿揖離列、經大納言列後、我列前東行、經大納言列末北行、入自軒廊東間、到東階下（傍南）一揖、即昇階經東南簀子、於東第一間西柱下一揖、（頗面乾）向西進指笏（如次第八、於柱下可指笏歟、）賜宣命、（不昇長押上）拔笏右廻（若左廻歟、）（慥不見及）經本路、於階下（如本傍南降也）左廻一揖、右廻立軒廊西間北邊（南面）次内辨起座、右廻降自東第二間東頭（立兀子間也）經簀子降自東階北邊、（有階下揖、臨昏之間不見及、後左府於陣被語云、件揖一切忘却、頗歩進之後思出、更向階揖、至恐之甚也云々、）出自軒廊東間、（此軒廊二箇間也、以西間擬西二間、以東間擬東二間也、而令用東間如何、一位大臣可經西間也、抑與宣命使揖哉否不見及、）斜進自南殿巽程、練始、南行經大臣列後、大納言列前（經列間時不練）之立加余上揖、次宣命使出自軒廊東間、南行、當中門北扉程、乍南向一揖、更折西行、就宣命版位一揖、次插笏披宣命捧目上、更口下讀之、押合在腋、（是宣制一段也）左大臣已下再拜、次又宣制一段、群臣再拜、（如北山記者、可舞踏歟、然而代々多以再拜、延久康和共以再拜也、）次宣命使拔笏揖、左廻經尋常版東、親王標西南行、更西折復列、次左大臣揖離列、經余前（不練也）退下、余已下從之、（各經我列前也）於中門邊改著淺沓、各著仗座、（左大臣重自西方被著端、余已下廻東方著奧、）此後可有坊官除目、而光雅先來仰啓陣事、（其詞不聞及）大臣召外記、外記頼業參軾、大臣仰可召四府將佐之由、頼業稱唯退下、此後良久不參來、大臣度々雖被尋催、右近少將候御所方、不告得云云、大臣云、然者只尉可參也云云、然而猶以不見、凡啓陣事、奏下除目之後可被仰下候也、而延久康和除目清書之間被仰之、今除目以前被宣下、太以早速、大臣同被傾奇歟、將佐猶以不參之間、光雅就軾召大臣、大臣參上口、余頃之起座參御所方、於鬼間方伺見除目儀、（先是隆季卿在此所、見余來逐電云云、）於御殿西面有其儀、（尋常晝御座也）主上御引直衣、關白被候御座北間簀子敷、（南面）左大臣候御座當間、（東面）同間北頭、長押上立切燈臺擧燈、次第作法如常歟、余始終不臨見、參朝餉方謁女房等、小時御前議了、大臣赴陣、人人少々著陣、或又立小板敷邊云云、須引大臣相率可參本宮也、然而先例不必然之上、余有所存先以退出、暫參女院、使人見六波羅、聞人々參集之由參東宮、于時坊官拜之間也、余經其前、昇自中門北方、

二棟廊東第一二三間三箇間、南廣廂上板敷、釣格子、敷簀子、搆高欄、母屋中間立御帳、爲東宮晝御座、寢殿不能立御帳之故也、以東方廊爲中宮御所、於寢殿者尤被用兩方御所云云、是康和度、高陽院以西對爲東宮御所、以東小寢殿爲院御所、大寢殿非兩御所之例云云、彼者廣博家也、是狹少之地也、舍屋員少、准據憚多之由時人所傾奇也、但歲末月迫之時儀、爲人有煩、爲世多費、令須儉約之議歟、此條爲善政之由又以謳歌云云、申刻著束帶、(蒔繪螺鈿、紺地平緒、有文帶、不付魚袋、)參內、(閑院第)著仗座、先是左大臣(座端)已下公卿五六人在座、又相次兩三人著座、此後徒經時刻、是關白未被參之間、萬事遲怠云云、酉一點關白參內、卽藏人右少辨光雅就軾仰召仰事、(其詞不聞)大臣召外記(大外記賴業)仰之、外記稱唯退下、次光雅又來仰宣命之趣、以前可被問也、但近代有此例之由大臣自被稱之可尋之、次光雅持歸宣命草、仰可淸書之狀、大臣召內記給之仰同旨、須臾持參淸書、大臣付光雅奏聞如草、御覽畢持歸、大臣召內記給之、被仰近可候之由、次大臣被示可就外辨之由、余起座於陣末馬道著靴、(左大將已下人々同前)入自東幔門、進立第一兀子前、揖之後著之、頗引寄下襲尻、素第一兀子前立床子、置式筥、無下式筥之儀、爲第二大臣(外辨第一)之故也、左大將已下同著之、次權右中辨親宗、少納言仲家等著床子座、(親宗越床子著之如常、仲家自前著之、殿末之人或如此云云、)六位外記史各一人、褰巽角幔著後床子、史生等不著座、外辨座體、(此內裏今日始著外辨、仍委所注也、)

殿上廊前立幄外、引廻幔於三方、(西南東南幔、西端幔一帖頗南方引去立之、仍東方有幔門、大臣已下經作幔門、)副立幄西上南面立兀子床子等、(西面兀子一脚、其前立床子、置式筥、)副東幔南北行立辨少納言外記史床子等、(當參議座末立之)

次余召召使、(二音)召使稱唯、仍人々傳示、其後稱唯、趨來平伏地、余仰云、外記召セ、召使稱唯退去、次在外辨座之外記、經辨官座下進余前跪地、余問云、大舍人ハ候哉、外記申候之由、又問曰、刀禰列候哉、外記申候由、余仰曰、候ハセヨ、外記稱唯復座、次開門、(叩中門也、先是內辨左大臣著靴取宣命、著南庭東第二間兀子歟、不見、及開門之後、闈司分居云云、)次召舍人歟、大舍人稱唯、此後少納言可進也、而聞開門聲、先以進頗早速也、聞舍人稱唯之聲、余已下起座、出自幔門、雁列中門外、(西上西面、余起座之間、左大將已下動座如常、)次少納言出自中門、於幔(中門外南北行、引幔一帖也、)南端召之、

被命著之、次大夫敦通進御前、承昇殿人、公卿及侍臣下令旨了、殿上公卿侍從於殿上邊令啓慶、亮惟憲傳旨、攝政奉可知行宮事之令旨、被加啓其事、相倶拜禮、〇中略諸卿著殿上饗、前攝政出自御前著饗座、更以他臺盤饗續立著元臺盤、依多公卿數三巡後給祿、大將、前攝政同預祿、及子刻退出、今夜供御膳、大夫敦通奉仕陪膳、傳已下參內令奏慶云々、

〔兵範記〕仁安元年九月六日丙午、今日於一院〇後白河殿上東山有立太子定、攝政以下院司公卿十餘人參入、院宣之後、別當內藏頭敦盛朝臣、依攝政命、覽日時勘文、次被定雜事、權中納言資長朝臣執筆、次覽了奏聞云云、今度事併被准行康和例、　十月三日癸酉、東三條殿修造了、被始立太子御裝束、右大將兵部卿以下院司皆參、定宛屬行事奉仕雜役、於此殿被始行御祈等云云、　十日庚辰、有立太子事、太上天皇第二皇子憲仁、〇高倉母故正五位下兵部權大輔平時信女、御年六歲、去年十二月爲親王、今於東三條第有其儀、自東山七條末御所行啓彼亭、于時上皇御同宿、御幸行啓可在同時云云、〇中略次攝政以下更參內、右府著仗座、先被奏宣命草、次清書、次節會始、右府爲內辨、右將軍著外辨、〇中略次於攝政御直廬除目、攝政御坐簾外、〇中略次宮司奏慶賀、次率參春宮坊云々、藏人左少辨右衞門權佐長方、爲御膳具勅使、藏人頭右中將實家朝臣、爲壺〇壺下恐脫切字護劒勅使、供晝膳、大夫卿權亮朝臣、爲朝夕陪膳、次名謁、藏人平時家問之云云、〇中略　十一日辛巳、晚頭公卿參集東三條殿、有盃酌事、初獻、亮敦盛朝臣、瓶子大進知盛二獻、權亮實守朝臣、瓶子權大進光雅三獻、右少將通家朝臣、瓶子殿上五位　十二日壬午、東三條儀、公卿盃酌如昨日、

〔玉海〕治承二年十二月十五日甲辰、此日有冊命立太子事、奉行職事藏人右少辨光雅、院方降季卿、辨內藏頭經房朝臣、右中辨本宮中宮大夫時忠、左衞門權佐光長等也、又關白殊被與其事、其外前太政大臣忠雅公萬事口入云云、法皇今旦卯刻渡御六波羅第、公卿直衣、殿上人衣冠云云、豫於法皇三條烏丸宮可有立坊、依康和仁安例、當日早旦可有晴御幸之由風聞、而尙於六波羅可被行之由禪門計申、仍

歟、今朝有消息、然而依不知案內不報參入一定耳、卿相屬目、仍退出了、

義忠進宣命清書、以資業被覽攝政、此間余出外辨、諸卿相從、左兵衛陣官等居胡床、令仰不可立胡床之由、卽撤却了、右兵衛左右衛門陣不候、仰事由、應響參列、召外記國儀、仰式部可列刀禰之由、小時參列、刀禰不列、令催仰、次兵衛彈正參列、召國儀、問兵部彈正參入之例、申云、天曆四年式部兵部彈正參列者、(後日見彼年外記日記云、有式部彈正、但天慶有二省彈正、召國儀問其由、申云、依多年總以所申、後日大外記文義云、天慶天曆等相分可申其由、而偏申天曆例不可然者、)小時開門、召舍人、舍人稱唯、少納言良經參進、歸出後入幔後息氣、更進立門前召之、(須入立當門之幔後、入列卿相前之幔後、太遺失也、)先是諸卿列立右兵衛陣頭、次第參入各就標、諸大大只三人、(四位一人、五位二人、)立定了、內辨大臣召宣命使、中納言行成、(其詞云、中乃物申官乃權乃藤原朝臣云々、權字多太失也、)稱唯、離列參上、自西階立內辨後、給宣命退下、立西軒廊砌、內辨退下加列、宣命使就版、(舞命時中二點、而及酉終刻、)宣制一段、群臣再拜、次又再拜、(神段再拜式文也、式有後段舞、此事彼是疑慮、猶可依式文之由一定云云、)宣命使右廻經大臣上頭、復列、次大臣已下退出、復仗座、依攝政御消息、右大臣、右大辨朝經參入彼直廬、有坊官監署除目、(除目在裏、)還陣座、大臣下除目簡、令右大辨清書、便見下書、太政官謹奏、清書時注件五箇字、密々余示傍座一兩、云可然事也、問右大辨、云、依攝政命可書之由、此事所存也、而攝籙命何爲者、前攝政除目時、書太政官謹奏、依不被知先傳歟、聞彼敎所命也、大辨清書、(有草紙別紙等、)抑見天曆四年故殿御記、坊官監署除目所被承行也、而依給除目、後召大納言顯忠、被仰傳事、彼時與此時相異、彼時例示大臣、有驚氣、清書令資業覽攝政、被返之、次有可奉遣近衛陣於東宮之命、先召式部給下名、(成字已末介太等也、)敷膝突二枚、(下官所示、)召著左少將誠任右少將兼房、仰之、(其詞不聞、)兩將一度稱唯、右大臣以下參東宮、傳幷宮司等先令啓事由、致拜禮、

次攝政右大臣已下參入、攝政以權亮公成令啓事由、仰聞食由、攝政云、可下御簾乎否、諸卿云、今日下御簾可無便歟、攝政云、不可下御簾者、可出御御座、而不儲裝束之如何、卿相云、雖不出御有何事哉、仍不出御件座、攝政內大臣右大臣已下進御前拜禮、(攝政云、可著靴歟、彼是云、當時立給東宮之日著靴、諸卿陣不可然由、仍今度不著、彼時前攝政依

日立皇太子、詔曰、天皇詔旨勅命乎親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、隨法留可有岐政止志天、道康親王乎立而皇太子定賜布、故此之狀悟天百官人等仕奉止禮詔天皇勅旨乎衆聞食宣、以右大臣從二位源朝臣常爲皇太子傅、左近衞大將如故、參議從四位下安倍朝臣安仁爲春宮大夫、從五位上藤原朝臣諸成爲亮、正五位下小野朝臣篁爲學士、是日解警衞內裏及固兵庫之陣、遣中使告於柏原山陵曰、天皇我詔旨留坐、掛畏岐柏原乃山陵留申之賜止倍申久、頃者東宮帶刀舍人伴健岑與橘逸勢惡心乎挾懷天、國家乎傾止奉謀利禮、掛畏支山陵乃厚顧留依天其事發覺奴、事迹乎搜留緣皇太子、〇恒貞因茲皇太子位乎停退止詐罷奴、食國乃隨法留可有岐政天止之道康親王乎立天皇太子止定賜不、此狀乎參議從三位兼越中守朝野宿禰鹿取、散位頭正五位下楠野王等乎差使天恐美恐美毛申賜久止申、

〔三代實錄十六清和〕貞觀十一年二月己丑朔、天皇臨軒、立貞明親王〇陽成爲皇太子、公卿已下五位已上於庭、諸司六位已下於承明門外拜受、詔命策文曰、天皇我詔旨勅命乎親王諸臣百官人等天下公民衆聞食宣、隨法留可有岐政天止之貞明親王乎立而皇太子止定賜布、故此之狀悟天百官人等仕奉止禮詔天皇勅旨乎衆聞食宣、是日以大納言正三位藤原朝臣氏宗爲兼春宮傅、文章博士從五位下橘朝臣廣相爲學士、參議民部卿正四位下兼行右衞門督伊豫守南淵朝臣年名爲春宮大夫、刑部少輔從五位下藤原朝臣門宗爲亮、散位從五位下藤原朝臣清經爲大進、

〔小右記〕寬仁元年八月九日甲戌、今日皇太弟〇後朱雀立給日、而無外記告、問遣時刻于吉平朝臣、注送云、申二點、仍未剋許參入大內、先左大臣參入在仗座、已次卿相在皇太后宮御方、則是東宮可座之所、北對東舍也、藏人右小辨資業傳仰云皇太弟立宣命趣於右大臣、注宣命大臣仰大內記義忠、則進草、在内々草依攝政命、所作儲歟、見了以資業被覽攝政、〇藤原賴通被示可清書之由、大臣給內記、〇中略參議通任者春宮大夫也、今日參入、極無心之由彼是云々、望新宮大夫云々、舊宮被聞前攝政云々、無便事云々、特其事所參入、

或說、今度不插書杖云々、天慶七年立太子時、直幹奉宣命於內辨九條相府令持宣命、直幹捧笏、具見李部王記矣、内辨取副宣命於笏立軒廊西一間、時剋天皇御南殿、内侍臨檻、内辨即著堂上兀子、此間上官内記著階下座、

〔日本書紀 十七繼體〕七年十二月戊子、詔曰、朕承天緒、獲保宗廟、兢兢業業、間者天下安靜、海内清平、屢致豐年、頻使饒國、懿哉摩呂古、○安閑示朕心於八方、盛哉勾大兄、○安閑光吾風於萬國、日本邕邕、名擅天下、秋津赫赫、譽重王畿、所寶惟賢、爲善最樂、聖化憑玆遠扇、玄功藉此長懸、寔汝之力、宜處春宮、助朕施仁、翼吾補闕、

〔續日本紀 十聖武〕神龜四年十一月己亥、詔曰、朕頼神祇之祐、蒙宗廟之靈、久有神器、新誕皇子、宜立爲皇太子、布告百官、咸令知聞、

〔續日本後紀 十二仁明〕承和九年八月壬戌朔、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣、右大臣從二位源朝臣常已下十二人上表言、周固本枝、寔賚重離之業、漢啓磐石、必建少陽之宮、是以三善守器、承祧之則克隆、四學宜風、貞國之規方遠、頃者昊穹降禍、太上皇帝○嵯峨昇遐、山陵未乾、逆臣謀亂、推究由緒、事屬儲闈、皆頼聖明、並羅憲網、方今上嗣佇賢、前星虛位、其皇太子者國之元基、不可暫曠、監撫惟重、審論所歸、伏望具擧彝章、早立明兩、臣等不勝區區之至、謹上表以聞、　癸亥、詔曰、適者遺家不造、慘結兢惶、劍舃纔存、橋山之慕彌切、天地改色、諒闇之居弗寧、而凶邪扇惑、將行不軌、宗社降祐、覺露伏辜、事處震宮、洊雷失耀、今群公以斷金之誠、致立嗣之請、趣由懇篤、非可謙拒、然而周建季歷、木運于斯克昌、漢黜臨江、炎政藉之延祚、朕之菲薄、無子賢明、宜擇神授之英徽、立玄鑒之韶遠、展也大成、則所望矣、　乙丑、公卿重上表、言應任天下之望、早立儲貳之狀、因循故事、輕用上聞、陛下遠布謙光、未定所請、特降明詔、更使疇咨、臣等道謝博聞、職忝端揆、何能對揚尋求帝系、匡贊皇闈、但周家季歷、漢室臨江、事據權時、非必通典、其樹嫡以長、曠古之徽猷、立子以尊、先王之茂實也、今者皇子道康親王、○文德系當正統、性在溫恭、率土宅心、群后歸美、豈棄震方之元長、擇藩屏之諸王、伏願准的舊儀、立爲太子、不勝丹款之至、謹重上表以聞、是

以卜部兼資宜補同宮主、

已上仰上卿(後日、大夫權大夫間、)　辨(兼宮司人)　官外記(○中略)

春宮坊本封外、宜令奉宛一千戸ヨ

御厨(諸國御厨事也、内覽奏聞、引裏紙事也、加懸紙下之依請、)

同衞士仕丁任例宜令奉充ヨ

已上仰上卿(大夫權大夫之間)

御乳母加階宣下(宣下詞、東宮御乳母藤原公子、宜令叙從五位下ヨ、)

立太子由山陵使發遣(任先例兼日申定)

日次　上卿(大夫)　辨　官外記　陰陽寮　仰詞(皇太子立給由ヲ可被告申山陵事令定申ヨ、日時使定文以辨内覽奏聞、)

當日(於陣發遣)　上卿(大夫)　宰相　内記(告文章進料)　官外記　使(參議五人、次官五々人、儒士多勤之、)

〔柱史抄下〕立太子由被申山陵事

上卿參仗座、召内記、(大内記可參也、)内記著軾、仰云、立太子事被申山陵宣命可草進者、即成草持參内覽、内記持參之、(但可隨上卿命、或以職事被覽也、)内覽奉上卿、上卿令持内記(虫損)奏覽、奏覽畢還著仗座、令清書以六位内記等令書之、清書畢持參覽上卿、奏下之後、分賜使參議等了、

立太子事

天皇讓位之時、被載加宣命、是恒例也、臨時立太子之時有節會、其儀同立后節會、剋限内辨參陣、先是式部省入自日華門、立親王以下標、中務省入自同門、執版置南殿前庭、大臣召官人令敷軾、職事奉勅仰可有立太子之由、大臣召外記問縁事諸司參否、次召内記、仰以某親王可爲皇太子之宣命可草進可用何年例者、内記微音稱唯退出、持參宣命、(入筥)大臣奏覽之後仰清書事、内記即清書持參、奏下如先、大臣暫預宣命於内記、群卿起座、著外辨座、内辨於宣仁門外著靴、歷軒門入軒廊二間、召宣命、(如元入筥、)

略如常、不必差脂燭、作東帶名謁小舍人、主殿今良、○旁書、殿上所召仕也、不與內裏相兼、殿上簡二埒書之、四位五位付上埒、
下﨟五位六位付下埒、亮學士不付簡、受領付裏、○本書刊本有誤脫、據一本改、
〔夕拜備急至要抄下〕立太子。
日次　參陣公卿大臣已下兼申御點、非一上者仰內辨、　近衛次將召陣二人可注之左右　辨　少納言　內記宣命料　闈司出立時　內侍扶持
次將　無御靴　式筥　召內侍次將可扶持、或職事、　南殿御裝束　官外記　奉行六位、出納小舍人、
除目御裝束晝御座如敘位、奉行職事藏人等奉仕之、　出陣召大臣職事　除目　執筆大臣　硯　緒紙二卷已上盛柳筥、職事持
參、　申文盛硯筥蓋、國一束、被官諸司一束、不付短冊、有目六、　淸書上卿於陣可被行　參議
召仰當日職事就仰云、今日可有立太子事、召仰諸司、云々、或兼日仰之、　仰詞以某親王可爲皇太子、若太弟之依其年例可令作進宣命、建保仰詞、以懷成親王可爲皇太子、依康和五年例令作進
宣命、　仰啓陣建保除目淸書之間仰云、左右近衛各一人、左右兵衛佐各一人、差定其仁等、東宮之啓陣任例令差進、云々、
承勅書出、殿上人等給大夫、四位朝臣、五位二字、藏人四人姓名、非藏人不書之、內覽奏聞、於鬼間書之、高檀紙折紙也、
首書、殿上人、幼主時於本宮、上皇被仰大夫、近例也、
相具御調度、職事參本宮事小舍人騎馬寮從
御臺二脚加臺　御膳具一具　銀飯垸一口在盃盤　馬頭盤一枚
御湯器一口在臺　御汁物器二口　御湯盞一口　四種四口
匕二枚銀　窪坏二口、　御盤二枚　盤六枚平
御箸二雙銀　已上入朱漆辛櫃、在兩面殿、
可被奉御劒壹切　勅使頭中將、或兼亮次將、　內侍司差進奉行職事、兼觸勾當內侍、　采女差文六人奉行職事、兼仰藏人令進差文、　主殿
司仰藏人召差文、　小舍人同　宮主藏人方兼申定、仰神祇官令召差文、
春宮坊頓給料任例可奉宛
同內膳屋令修理職造進云々、

南西二面几帳立御座、南第二三間母屋東邊、第五間三尺几帳直立之、又頼開夜御所南戶東扉、御硯引上置於御座上、御硯入水、廣廂當御前、敷菅圓座一枚、若有闕白者、又敷一枚於北柱下、次令藏人頭若五位藏人召上卿、詞曰、關白乃御消息ニ此方令參給へ、上卿候殿上、依重召經簀子敷著御前座、次依御氣色召男共、御云、硯紙持參、硯、即持參、大臣依仰書宮司除目、事訖退下於陣、副除目於笏、令參議清書、黃紙一枚、公卿一枚、非參議一枚、並用折堺、次奏聞如恒、次召式省給之、先召外記問、式乃書候哉ト、外記申候由、次又申式書候、上不答、次又申、並立小庭、靴上卿目之、丞著軾、上卿給除目、丞取之後立小庭、上卿仰曰、マケタヘ、次博士已下於弓場殿奏慶、公卿一列、四位五位一列、以藏人頭若近衞次將令奏、其人帶劍取笏、來仰間食由、公卿以下再拜、此間被定殿上人藏人、四位五位藏人四人、非藏人二人、主上令書出給、大夫於宮令宣下之、次被仰啓陣可差遣由、或大臣申請、或進被仰之、大臣仰外記令召之、加軾一枚於常軾東、先召左右近衞次將仰之、○傍書、詞曰、東宮啓陣來候へ、次召左右兵衞佐仰之、○傍書、詞曰、啓陣候ラヘ、各帶劍執笏參入、其後參本宮、卷纓帶壺胡籙警衞、太子御禁中者、不差兵衞、先是本府進差文、將佐以下府生以上各一人、近衞兵衞各十人、番長府掌在此中、於本宮各有啓陣、次上卿仰供奉諸司事、次公卿以下參本宮、令宮亮啓之、進御前再拜、透履、執柄傳或不立此列、候簾中、此間被仰昇殿人々、公卿已下公卿以下令啓昇殿慶、付亮再拜了、便所著殿上座、被奉護身劍、壺切、○○入錦袋、或御對面日被奉、以頭中將兼亮次將遣之、自持之參本宮、立便所、令亮奏、亮歸來取之置御所、次亮取祿給勅使、先召上之、或敷座茵、近代不必敷、祿代々不同、或褂二領、或褂袴、或褂一領、下庭再拜、歸參復命、次差殿上饗、殿上人役送之、執柄著座者、四位陪膳、三巡後給祿、殿上人取之、大臣白大褂二領、納言以下三領、參議以上一領、四位參議紅袿、居常臺盤、或公卿退後、定藏人所雜色以下、或兩三人先補之、啓時、其詞云、姓名時戌刻、小舍人啓之、供御膳、臺盤不加臺、用殿上臺盤內路、采女六人供奉之、先是本司進差文、朝大夫、多大納言奉供、夕亮、書陪膳記、或幼宮時、以女房爲陪膳、上髮、女藏人四人、以上傳供之、藏人一人、居土器二口於御盤持參、即受御三把、奉帳中阿末加津云云、但有常阿末加津土器撤、其後供比々奈、內侍司進差文、女史一人、御髮上一人、番所二人、水取二人、墨摺一人、主殿女孺三人、或六人厨女孺一人、洗二人、長女二人、御厠人二人、油守二人、掃部女孺六人、采女進差文、神祇官奉仕大殿祭、藏人引導、掃脂燭、依本官申、史下申上宣旨、比々奈料絹本宮給之、左先御殿、御膳宿、上下御厨子所、御井等也、給祿、五位以下衾、六位疋絹、付殿上并女房、及藏人所簡、召能書者於所令書之、其人々名簿、或新書之啓之、被下後付之次名謁、藏人問之、大

陽殿西廂板敷、承明門東西內掖、各鋪蘆蓆、上各置草墪、圖司北面座　中務錄入自日華門、尋常版位北去一許丈、置宣命版位、內裏式、開門後置件版、而儀式、非前例如之、式部丞錄率史生省掌、入從永安門立標、尊常版南七尺東折二丈五尺立親王標、南立大臣標、次大納言標、次中納言標、以七尺為間、東去八尺、南折二尺立三位參議標、次非參議三位標、次王四位標、次臣四位標、次五位標、以上八尺為間、尋常版西二丈五尺、南折三丈五尺、立王四位五位標、次臣四位標、次五位標、長樂門南面、東掖第一間東柱下、設外辨親王公卿座、東西行立兀子、獨床子、簀子敷床子、南面西上其南壇下庭中、立白木床子二脚、少納言辨座東立二脚、外記史生座並七尺為間、西面北上上卿座前立白木床子一脚、置式筥今日不立宣陽殿西廂內辨兀子、但九條殿天曆四年立太子記立之

前一日大臣奉仰、仰外記令誡所司、清涼抄云、令外記召式部省、仰明日可令集會刀禰之狀、又召內記令作宣命、可依某年例仰之以上近代多當日早旦行之、五位藏人持參御物、依仰也御帳二具、先是以吉時立之、仍使不必具、御臺盤二脚、加御器御器一具、納辛櫃、每御器以下敷紙裹之、參本宮令職事申之、給祿、白一領再拜而退、上卿參入奏宣命、付弓場殿奏、不書御名、清書之時書之、若非一上者、仰內辨之後可從事歟、次奏清書、返給之後、令持內記令候、次上卿於陣座預定宣命使、中納言、近例不奏之、次主上御南殿、位袍、內侍許相從、他女房等不必相從、異常出御、或不出御、左右近陣階下、次將以下立陣也、縫腋壺胡籙、蒔繪劍著靴、但諸衞皆如此、主檢非違使佐著平胡籙、內裏式、近仗服中儀云々、王卿出外辨、於爲曹司著靴如常、不著魚袋、螺鈿劍、蘿文帶、若非第二大臣者、召使令式筥、召外記問諸司、大舍人候哉、刀禰列候哉、外記每度申候由、上宣令候、大臣著靴進立軒廊、西一間內侍臨檻、內辨參上、著南廂兀子、取副宣命於笏次開門、開建禮承明兩門、不開長樂永安門、見延長三年十月二十一日立太子御記、闈司著座、雖無奏事、依例猶著大臣召舍人、二音大舍人四人稱唯、少納言著版、入自承明門左扉、大臣宣、刀禰召世、少納言稱唯出召之、外辨王卿參入立標、異位重行、北面西上、大臣與大納言之間一丈計置之、依內辨可違也、大臣召中納言一人、微音召之、叩扇示之、宣命使參上、出自列前、入自軒廊東二間、於東階下揖、經東階非簀子敷、立第二間東柱下、揖、插笏、進、大臣給宣命、宣命使進磬折、作立給之、大臣自座上方給之、左廻、退下於東階有揖、或有廻年々不詞宣命使立軒廊西第一間北邊、或立二間、出東一間、天德二年立后日、師氏卿立二間、同四年任大臣日、雅信立一間、九記六六、大臣退下、左廻、於東階下左廻、揖、右廻、又與宣命使相揖、就庭中版、自東二間出、大臣著、經下、大臣與納言列座間上立、上、宣命使著版、自東二間出、如拒、或說立太子日出一間、為吉、宣制一段、群臣再拜、又一段訖、群臣再拜、北山抄曰、拜舞云云、是依儀式、譲國儀、延長三年立太子日記、非叙位時、視族拜歟、然而年年例多再拜也、依無別宣命歟、宣命使經列西復本位、每曲折有揖、王卿退出自本路、於爲曹司脫靴、還著陣、此間羞饌、近代不見、主上還御、次清涼殿裝束、如女叙位、以晝御座

大夫從本列東度、昇自東階、就大臣兀子後、授宣命文、受之暫立軒廊之邊、大臣起座、下自東階就本位、承詔者進就版、宣制曰、現神止大八州所知須倭根子天皇我詔旨止良萬勅命乎、親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、群官稱唯再拜、訖更宣云、隨法仁可有岐政止爲氏、某乎立氏皇太子止定賜布、故此狀乎悟氏仕奉禮止詔布天皇勅命乎衆聞食止宣、王公共稱唯再拜、被立者不稱宣制者復本所、次皇太子兩段再拜、舞蹈退出、出自日華門五位已上退出、寢儀還御本殿、大臣依召參上御前、有除目事、被拜除傅、學士、春宮坊官屬以上、被官諸司等、事畢退下、又參射殿奏淸書、皇太子若出、傅若大夫奉勅定補藏人、昇殿者、陣頭、大夫傅者等下令旨、厥後又試其武藝、補帶刀、或天皇御射殿覽其射藝、貞觀十一年例也、後日遣使二陵、告以冊命皇太子之狀、

〔江家次第十七〕立太子事

前一日、令主殿寮掃除南殿、仰左右衞門府令敷砂、左衞門從長樂門、右衞門從永安門、並裝束使仰左右近陣令開之、撤去東炬火屋、置日華門北掖、主殿寮役之、上南殿御格子、掃部女孺供奉、灑掃殿上、主殿仕女供奉、置殿東廂布障子二枚於北廂、掃部官人率史生以下供奉、今案近例、本無件障子、仍無撤儀、自殿東第三間北頭西柱下南行、至南廂頭柱下、更西行至于西戶、同懸御簾、但戶間懸內東方御簾西、立宣五尺漢書御屛風、南北行、西向、傍御簾內母屋柱南面四間、東西行立漢書御屛風、南向、從其西端南北行、同立御屛風、東向、其內四間敷滿廣筵幷細貫筵、額間設御座、敷紫二色綾毯代、立廣蒔大床子一雙、鋪高麗端御帳、乾角傍緋御障子、立廻五尺大宋御屛風二帖、南方開戶、其內敷細貫筵二枚、立赤漆小倚子、爲御裝物所、東第三間東柱西北角去二許尺、立兀子一脚、爲內辨座、近例、第二間西柱邊立之、又宮記云、件兀子在長押上云云、北山抄、并近代記多如此、但新儀式立第三間柱東下、節當簾前云云、左近陣座南庭中央東西行、曳斑幔二條、一條始自紫宸殿東北階南端、東行竟庭中、一條其東端幔柱、南去三許尺、小西進立幔柱、東行、竟宜陽殿西廂砌、宜陽殿西廂板敷、南西二面張斑幔、從右近陣東南角滿東方北行、屬射場西南角柱、更東折至于廊東第二間西柱、張同幔、右近陣東南角以北立幔柱、射場殿西南角以東、至北廊第二間西柱、結着貫、又從月華門內南掖築上南行、張同幔一條、又春興殿南廊西面結管貫張同幔、又自安福殿南行、更東折從瑚屋東北角南折、至于永安門西腋張同幔、承明建禮兩門前差南去東西行、張斑幔各二帖、移鈴印辛櫃於宜

二人上表言、周固本枝、寔資重離之業、漢啓磐石、必建少陽之宮、〇中略頃者昊穹降禍、太上皇帝〇嵯峨昇遐、山陵未乾、逆臣謀亂、推究由緒、事鍾儲闈、皆賴聖明、並羅憲網、方今上嗣佇賢、前星虛位、其皇太子者、國之元基、不可暫曠、監撫惟重、審諭所歸、伏望早舉彝章、早立明兩、〇下略

〔朝野群載一文筆〕延曆寺奉賀儲君始立啓

延曆寺沙門延昌等謹啓、伏聞儲君殿下、〇冷泉去月廿三日、正太子之尊、就少陽之位、〇中略

天曆四年八月一日

〔北史九十四倭國〕倭王、姓阿每、字多利思比孤、〇中略名太子為利歌彌多弗利、

〔北史國語考〕名太子為利歌彌多弗利、上の利は和の誤りなり按ニ、ワカミトホリと訓べし、中昔の假字書どもに、わかむどほりと見えたるは、此語を訛れるなり、〇中略此語の本意をいまだ詳に明したる說なし、故つら〳〵稽ふるに、疑ふらくは、稚子御統の義なるべし、

〔儀式五〕立太子儀

前一日、太政官召式部省、仰可令會集刀禰之狀、當日早旦、式部丞錄率史生省掌等、於建禮門前庭、左右相分列立刀禰、爰中務丞執版參入、置紫宸殿前庭退出、詔所司開閤門、親王以下應召、左右相分參、五位以上在承明門內庭、六位以下在同門外、錄稱容止如常、立定宣命大夫進就版、宣制曰、天皇詔旨勅命乎、親王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、隨法爾可有伎政止志氏、某親王立而皇太子止定賜布、故此之狀悟天百官人等仕奉止詔天皇勅命乎衆聞食宣、訖宣命大夫復本位、皇太子進拜舞而退、次親王以下退出、

〔新儀式五臨時下〕冊命皇太子事

冊命皇太子、或依公卿論奏、或有勅答、承和仁壽延喜例也或不待上表、隨法冊命也、前一日、大臣奉勅行事、並當日早旦、所司裝束南殿、近仗陣階下、開門、親王以下五位以上、依喚參入、列立之儀等、皆同冊命皇后之儀、但親王已下列立之後、應被立者、入自日華門、立親王前、若幼稚不關此儀、雖長大不必參入矣、大臣喚宣命大夫、中納言

答に、東宮とは、皇太子の御身をさすといふはさる事ながら、いか成故にさはいふといはぬは答のかひなし、先此御事をいと古へは日嗣の皇子命と申し、又某の皇子命とのみも申せし也、さて後に字にては、皇太子儲君など書たり、令など行はるゝほどより、その皇太子の御在所を東宮とかき、大夫以下官人の奉仕所を春宮と書つけたり、それより後々に、東宮と書は卽皇太子の御身をさす事となりぬ、又此答に、春宮は坊に奉仕傅大夫云云と云は誤れり、大夫以下は春宮に奉仕れり、傅と學士は輔導奉說の職故に、卽太子の御在所に侍りて春宮坊にはゐず、持統紀より以下の書に、皆東宮傅、東宮學士と有也、

　天智紀に、太子をさして東宮と書しことあれど、是は奈良の朝にて書し物のみ、

〔下學集上人倫〕儲君（チヨクン）（マウケノキミ）

〔源氏物語一桐壺〕一のみこは、右大臣の女御の御はらにてよせおもく、うたがひなきまうけのきみと世にもてかしづき聞ゆれど、此御にほひにはならび給ふべくもあらざりければ、〇下略

〔伊呂波字類抄波一〕坊（バウ）東宮、

〔源氏物語一桐壺〕坊にも、ようせずはこのみこのゐ給ふべきなめりと、一のみこの女御はおぼしうたがへり、

〔拾芥抄中本唐名〕春宮　春闈儲武　靑宮詹事　昭陽龍樓　少陽鶴禁　儲君前星　儲闈明兩

〔續日本紀二十四淳仁〕天平寶字六年十月己未、夫人正三位縣犬養宿禰廣刀自薨、〇中略聖武皇帝儲貳之日、納夫人、生安積親王、

〔續日本後紀一仁明〕天長十年三月戊子朔、後太上天皇〇淳和復奉書曰、〇中略今恒貞漢庄雖擬、周儲不追、〇中略恐龍樓之守爰墜、鮑狙之譏有聞、〇下略

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年八月壬戌、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣、右大臣從二位源朝臣常已下十

ひとつだにあることなし、つら〳〵思遣り奉るに、中昔の書どもに、皇子の中にて皇太子に立て給ふべきえたがたにかしづき給ふを、坊がねと稱せるに似たるを、古は其崇稱を儲て、然は大兄と稱せる例のありしにこそト云ヘリ、以テ參考ニ供ス、

〔日本書紀三十持統〕三年四月乙未、皇太子草壁皇子尊薨、

〔萬葉集二挽歌〕日並〇並下恐脫知字皇子尊〇草壁殯宮之時、柿本人麻呂作歌、

天地之初時之、〇中略吾王、皇子之命乃、天下所知食世者、〇下略

〔萬葉集二挽歌〕高市皇子尊城上殯宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌、〇歌略

〔續日本紀六元明〕和銅六年五月甲戌、讃岐守正五位下大伴宿禰道足等言、〇中略故皇子命宮〇草壁撿括飼丁之便、誤認亂等、爲飼丁焉、〇下略

〇按ズルニ、皇子尊モ亦大兄ト同ジク、古ヘ皇太子ノ崇稱ナリシガ如シ、

〔運歩色葉集一登〕東宮、春宮、皇太子事

〔毛詩註疏三之二碩人〕齊侯之子、衛侯之妻、東宮之妹、邢侯之姨、譚公維私、傳東宮齊太子也、正義曰、太子居東宮、因以東宮表太子、

〔八雲御抄三下異名〕春宮　はるのみや　あをき宮　みこのみや　まうけのみや

〔大唐皇帝述三藏聖敎序記跋〕皇帝在春宮日製此文、龍朔三年歲次癸亥六月癸未朔二十三日乙巳建、大唐褚遂良書在同州倅廳、

〔新野問答〕春宮幷東宮

東宮春宮此二品いかゞ覺悟候哉、　答〇野宮定基　東宮は、皇太子の御身の上を書申候時、東宮と書申候、春宮は、坊に奉仕傅大夫亮進、役の官の名を書申候、ひつきやう二字共に同心にて候、東春二字とも、はじめ又は一の心にて候、歌には春の宮とよみ申候、

〔雜問答考〕東宮春宮と書耳

御子に用ひたるなり、さるは遂に御位を嗣坐が、其御子等の中にて、元來も然定置賜へる物なれば、彼皇太子よく當りたれども、彼は元より一人に限りて定めたる稱、此は一柱には限らざる御稱なるは同じからず、異なることわり、されば、ひたぶるに太子の字には泥むべからず、上代のさまをよく考ふべきなり、

〔古事記上〕豐玉毘賣命、○中略白其父曰、吾門有麗人、御海神自出見云、此人者、天津日高之御子、虚空津日高矣、

〔古事記傳十七〕虚空津日高、谷川氏、天津日高は天子の稱、虚空津日高は太子の稱なりと云り、信に然るべし、其故は、先邇々藝命、穗々手見命、鵜葺草葺不合命、みな天津日高と申せる、これ天津日嗣所知看せるうへの大御稱なり、かくて此は穗々手見命、いまだ皇太子にて坐ほどなるが故に、天津日高之御子と申せり、さて其を虚空津日高と稱す所以は、虚空は天と地との中間なる故に、天津日高に亞で尊み申す御稱なるべし、

〔日本書紀十七繼體〕七年十二月戊子、詔曰、盛哉勾大兄、○中略安宜處東宮助朕施仁、翼吾補闕、

〔日本書紀十九欽明〕二年三月、納五妃、○中略蘇我大臣稻目宿禰女曰堅鹽媛、生七男六女、其一曰大兄皇子、是爲橘豐日尊、○用明

〔日本書紀二十四皇極〕二年十一月丙子朔、○中略於是山背大兄王等自山還入斑鳩寺、

〔日本書紀二十五孝德〕天豐財重日足姬天皇四年六月庚戌、○中略思欲傳位於中大兄、○天智而詔曰云云、

○按ズルニ、大兄ヲ以テ直ニ皇太子ノ稱トハ定メ難ケレドモ、古ヘ太子トナリテ皇位ヲ繼承セラルヽ皇子ニハ、多ク此稱アリシガ如シ、長等山風附錄、大兄名稱考ノ條ニモ、本語ハオホヒ子なるが、音の約りてオヒ子とも申し、又オホ子ともかよはして申し奉りたりしにて、書紀に十八ところに、同じ訓ざまを註して、なべて近世によみなれたるがごとく、オホエとよめるは

名稱

二識等ナリトス、又親王宣下ト云フコト始マリテ後、親王トナリテ即日太子トナリ給ヒシハ、二條天皇是ナリ、其他前後兩朝、又ハ數朝ノ間太子トナリ給ヒシハ、天智天皇、聖武天皇、及ビ草壁太子ニシテ、先朝ニ儲君トナリ、後朝ニ太子トナリ給ヒシハ、後桃園天皇ナリ、又光仁天皇ノ、先帝崩後太子トナリ給ヒシ如キハ、極メテ異例ナリトス、

皇太子ヲ立テ給フニ當リ、時ニ爭ヒナキコト能ハズ、清和天皇立太子ノ時、惟喬親王ノ爭ハレシガ如キ、圓融天皇立太子ノ時、爲平親王ノ爭ハレシガ如キ是ナリ、之ニ反シテ淳和天皇ノ皇子恒世親王ノ如キハ、上表シテ太子タルヲ固辭セラレシモノナリ、又太子ニシテ儲位ヲ辭シ給ヒシハ、小一條院ニシテ、太子ニシテ帝位ニ即クヲ辭シ給ヒシハ、菟道稚郎子、及ビ仁賢天皇、天武天皇等トス、又太子ニシテ自ラ敗亡シ給ヒシ、アリ、木梨輕皇子是ナリ、其他廢太子アリ、孝謙天皇ノ太子道祖王ハ、淫縱ナリシカバ廢セラレテ諸王トナリ、光仁天皇ノ太子他戸親王ハ、其母井上内親王ノ大逆ニ坐シテ庶人トセラレ、桓武天皇ノ太子早良親王ハ、專恣ニシテ幽流セラレ、嵯峨天皇ノ太子高岳親王ハ、御父平城天皇ノ亂ニ坐シテ廢セラレシカバ、出家シテ入唐シ、仁明天皇ノ太子恒貞親王ハ、伴健岑等ノ亂ニ坐シテ廢セラル、其他光嚴天皇ノ太子康仁親王ハ、後醍醐天皇ニ廢セラレ、後醍醐天皇ノ太子成良親王ハ、光明天皇ニ廢セラレ、崇光天皇ノ太弟直仁親王ハ、後村上天皇ニ廢セラレ給ヒシガ如キ是ナリ、凡皇太子ノ待遇ニツキテハ東宮坊ノ事ハ官位部東宮職ニ、供給ノ事ハ封祿部ニ詳ナリ、

皇太子ノ御寢ニ侍スルモノニハ、妃アリ、女御アリ、更衣、御息所アリ、並ニ此ニ附載ス、

〔日本書紀 三神武〕天皇生而明達、意確如也、年十五、立爲太子(ヒツギノミコ)、

〔日本書紀 三神武〕四十有二年正月甲寅、立皇子神渟名川耳尊爲皇太子(ヒツギノミコト)、

〔古事記傳 二十六〕漢國にて、王の位を嗣ぐべく定めたる子を皇太子と云、故に其字を取て、日嗣

トヲ處理セシム、此等ノ制、後世悉クハ行ハレザリシカドモ、ナホ其待遇ハ自餘ノ親王皇子ニ超出シ、而シテ其妃ハ、中世以後多クハ女御、又ハ御息所ト稱セリ、

上古、太子ヲ立ツルコト、必ズシモ一人ニ限ラザリシガ、其後定メテ一人トナシタリ、此等ノ太子ハ皆皇子ヲ立ツルヲ例トセシカドモ、種々ノ事情ニヨリテ、必ズシモ然ラザルアリテ、或ハ皇女ヲ太子トシ給ヒシアリ、聖武天皇ノ孝謙天皇ニ於ケルガ如キ是ナリ、皇孫ヲ太子トシ給ヒシアリ、持統天皇ノ文武天皇ニ於ケル、元明天皇ノ聖武天皇ニ於ケル、醍醐天皇ノ慶頼王ニ於ケルガ如キ是ナリ、皇兄ヲ太子トシ給ヒシハ、顯宗天皇ノ御兄仁賢天皇ヲ皇太子トシ給ヒシノミナレドモ、皇弟ヲ太子又ハ太弟トシ給ヒシハ、履中、天智以下、後光明、後西院天皇等極メテ多シ、或ハ從兄弟ニシテ、太子トナリ給ヒシアリ、一條、三條、伏見天皇等ナリ、再從兄弟ニシテ太子トナリ給ヒシアリ、後二條、花園、後醍醐天皇、及ビ小一條院等ナリ、三從兄弟ニシテ太子トナリ給ヒシハ、光明天皇ノ太子成良親王アリシノミ、其他成務、推古、圓融、後櫻町等ノ天皇ハ、皇姪ヲ太子トシ、三條天皇ハ從姪、後醍醐天皇ハ再從姪、光嚴天皇ハ、三從兄弟ノ御子ヲ太子トシ給ヘリ、殊ニ異例ナルハ、六條天皇ノ、其叔父高倉天皇ヲ太子トシ、孝謙天皇ノ、其族叔祖父道祖王、大炊王ヲ太子トシ、稱德天皇ノ、其再族伯祖父光仁天皇ヲ太子トシ給ヒシ類ナリ、蓋シ是等ノ諸例ハ、皇子ノオハセヌニ因レルモ多ケレド、或ハマタ種々ノ事情ニヨリテ、勢止ムヲ得ザルニ出デシモ尠ナカラズ、彼ノ兩統更立ノ如キモ、亦當時ノ情勢已ムヲ得ズシテ遂ニ斯ル變體ヲ生ゼシモノナルベシ、

立太子ノ年齡モ亦種々ニシテ一樣ナラズ、其極メテ幼冲ナリシハ、聖武天皇ノ皇子、及ビ安德、仲恭、後深草天皇等ニシテ、何レモ御誕生後數十日ニシテ太子ニ立チ給ヒタリ、之ニ反シテ年長ニシテ太子ニ立チ給ヒシハ、反正天皇五十歲、安閑天皇四十八歲、天武天皇四十六歲、光仁天皇六十

古事類苑

帝王部二十二

皇太子上

皇太子ハ、皇位ヲ繼承シ給フベキ皇子ヲ云フ、日本書紀履中紀ノ古訓ニハ、儲君及ビ太子王ヲヒツギノミコトアリ、繼體紀用明紀ニハ、春宮及ビ東宮ヲモ、ヒツギノミコ、又ハ、ヒツギノミヤト訓ゼリ、其他太弟ト云ヒ、或ハ坊ナドヽモ云ヒテ、種々ノ稱アレドモ、共ニ皇太子ノ稱ナリ、但シ近世ハ先ヅ皇嗣ヲ定メテ之ヲ儲君ト稱シ、然ル後、立太子ノ儀アルヲ例トセリ、立太子ノ詔ハ、早ク繼體天皇ノ朝ニ見エ、爾後其儀式漸ク整頓セシガ、南北分立、崇光天皇ノ朝ヨリ後西院天皇ノ朝ニ至ルマデ、十五代二百餘年間全ク中絶シ、靈元天皇ノ天和三年ニ再興セラレタリ、立太子ノ時山陵ニ告ゲラルヽコトハ、後世廢タレテ社寺ノ祈禱ト變ジタレドモ、壺切御劍ヲ傳ヘ、及ビ拜覲節會等ノ儀式ハ、曾テ絶エタルコトナシ、其他公卿寺僧等ノ參賀ハ古ヨリノ例ナレドモ、殊ニ德川氏ノ時ハ、將軍ハ使ヲ遣シテ、參賀進獻ノ禮ヲ行ヒ、在藩ノ諸侯ハ、書翰ヲ以テ幕府ニ慶ヲ陳ベタリ、

皇太子ハ單ニ儲ケノ君タルノミナラズ、時ニハ國事ヲ監シ、時ニハ萬機ヲ攝行シ給フコトアリ、其命ヲ令ト云ヒ、其他ニ往キ給フヲ行啓ト云ヒ、群臣ノ皇太子ニ白スヲ啓ト云ヒ、上啓ニハ皇太子ヲ稱シテ殿下ト云ヒ、自稱ニハ臣妾及ビ名ヲ用キシム、大寶ノ制、太子ニハ傅、學士ヲ附シテ輔導ノ職ニ任ゼシメ、東宮坊ニハ大夫以下多クノ職員ヲ定メテ、東宮一切ノコ

古事類苑

帝王部二十二

皇太子上 皇太子妃併入

る、年廿三、出家はもとより望みなりけれども、心ならず尼になされ、こき墨染にやつれはて、嵯峨のおくにぞすまれける、無下にうたてき事どもなり、主上はかやうの事どもに御なうつかせ給ひて、終にかくれさせ給ひけるとかや、

〔太平記 一〕立后事付三位殿御局事

阿野中將公廉ノ女ニ、三位殿ノ局ト申ケル女房、中宮ノ御方ニ候ハレケルヲ、君〇後醍醐一度御覽ゼラレテ、他ニ異ナル御覺アリ、三千ノ寵愛一身ニ在シカバ、六宮ノ粉黛ハ顏色無ガ如ク也、都テ三夫人、九嬪、二十七世婦、八十一女御、曁後宮ノ美人、樂府ノ妓女ト云ヘドモ、天子顧眄ノ御心ヲ付ラレズ、啻ニ殊艷尤態ノ獨ヨク是ヲ致スノミニ非ズ、蓋シ善巧便佞、叡旨ニ先タチテ奇ヲ爭シカバ、花ノ下ノ春ノ遊、月ノ前ノ秋ノ宴、駕スレバ輦ヲ共ニシ、幸スレバ席ヲ專ニシ給フ、是ヨリ君王朝政ヲシ給ハズ、忽ニ准后ノ宣旨ヲ下サレシカバ、人皆皇后元妃ノ思ヲナセリ、驚キ見ル光彩ノ始テ門戶ニ生ルコトヲ、此時天下ノ人、男ヲ生ム事ヲ輕ジテ、女ヲ生ム事ヲ重ゼリ、サレバ御前ノ評定、雜訴ノ御沙汰マデモ准后ノ御口入トダニ云テケレバ、上卿モ忠ナキニ賞ヲ與ヘ、奉行モ理アルヲ非トセリ、關雎樂而不淫、哀而不傷、詩人採テ后妃ノ德トス、奈何セン傾城傾國ノ亂、今ニ有ヌト覺テ、淺增カリシ事共也、

給ひけり、そこにも聞給ひつらんやうに、入道あまりにおそろしき事をのみ申と聞しが淺ましさに、或夜ひそかに忍びつゝ内裏をばまぎれ出て、今はかゝる所の住ひなれば、琴ひく事もなかりしが、明日より大原のおくへ思ひ立事の侍らへば、主の女房こよひばかりの名殘ををしみ、今は夜もふけぬ立聞人もあらじなどすゝむる間、さぞなむかしの名殘もさすがにゆかしくて、手なれし琴をひくほどに、やすうも聞出されけりとて、御泪せきあへ給はねば、仲國もそゞろに袖をしぼりける、やゝあつて仲國泪をおさへて申けるは、明日より大原のおくへ思し召立事と候は、定めて御樣などもや替させ給ひ候はんずらん、然るべうも候はず、扨君をば何とかし參らせ給ふべき、努々かなひ候まじ、相かまへて此女房出し參らすなとて、ともに召ぐしたる馬部吉上など留めおき、そのやを守護せさせ、我身は寮の御馬に打乘て、内裏へかへり參つたれば、夜はほのぐ〵とぞ明にける、仲國やがてれうの御馬つながせ、女房の文やうぞくをば、はね馬の障子に打かけて、今は定めて御寢もなりつらん、誰してか申べきと思ひ、南殿をさして參るほどに、主上はいまだ夕べの御座にぞまし〳〵ける、南にかけり北にむかふ、かんうんを秋のかりにつけが、たし、東に出で西にながる、たゞせんばうをあかつきの月によすと、御心ぼそげに打ながめさせ給ふ所に、仲國つと參りつゝ、小督のとのゝ御返事をこそ參らせけれ、主上斜ならずに御感あつて、さらば汝やがて夕さりぐして參れとぞ仰ける、仲國、入道相國のかへり聞給はん所は恐ろしけれども、これ又勅定なれば人に車かつて嵯峨へ行向ふ、小督のとの參るまじき由宣へども、やう〳〵にこしらへ奉りて、車にのせ奉りて、内裏へ參りたりければ、幽なる所に忍ばせて、夜な夜な召れ參らせける程に、ひめ宮御一所出來させ給ひけり、坊門の女院、○土御門准母範子とは此みやの御事なり、入道相國小督が失たりといふは、跡かたもなきそらごとなり、いかにもして失はんと宣ひけるが、何としてかたばかり出されたりけん、小督のとのをとらへつゝ、尼になしてぞ追放た

督のとのに似たる女房だにもなかりけり、空しう歸り參りたらんは、參らざらんより中々惡かるべし、是よりいづちへも迷ひ行ばやとは思へども、いづくか王地ならぬ、身をかくすべき宿もなし、いかゞせんとあんじわづらふ、誠や法輪は程近ければ、月の光にさそはれて參り給へる事もやと、そなたへ向ひてぞあくがれける、龜山のあたり近く松のあるかたに、幽に琴ぞ聞えける、峯の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音か、覺束なくは思へども、駒をはやめて行程に、かた折戸したる内に琴をぞ引すまされたる、ひかへて是を聞ければ、少もまがふべうもなく、小督のとのゝつまをとなり、樂は何ぞと聞ければ、夫を想てこふとよむ想夫戀といふ樂なりけり、仲國さればこそ、君の御事思ひ出參らせて、樂こそ多けれ、此がくをひき給ふ事のやさしさよと思ひ、こしよりやうでうぬきいだし、ちつとならひて門をほと〳〵とたゝけば、琴をばひきやみ給ひぬ、是は内裏より仲國が御使に參りて候、あけさせ給へとてたゝけども〳〵、とがむるものもなかりけり、漸あつて内より人の出るおとしけり、うれしう思ひて待つ所に、ぢやうをはづし、門をほそめにあけ、いたいけしたる小女房のかほばかりさし出て、是はさやうに内裏より御使など給はるべき所でも侍らはず、若かどたがへてぞ侍らふらんといひければ、仲國へんじせば、門たてられ、ぢやうさゝれなんずとやおもひけん、せひなく押あけてぞ入にける、つま戸の際なるえんに居て、何とてかやうの所に御わたり候やらん、君は御ゆゑに思召しづませ給ひて、御命も既に危くこそ見えさせまし〳〵候へ、かやうに申さばうはのそらとや覺召れ候らん、御書を賜りて候とて取出て奉る、ありつる女房とりついで、小督のとのにぞ參らせける、是をあけて見給ふに、誠に君の御書にてぞありける、頓て御返書かいて引むすび、女房の裝束一かさねそへてぞ出されたる、仲國御返事のうへは、とかう申に及び候はねども、別の御使にても候はゞこそ、直の御返事うけ給はらでは、爭か歸り參り候べきと申ければ、小督のとのげにもとや思れけん、みづから返事し

ゆゑにおぼし召しづませ給ひたんなり、さらんに取てはとて、御かいしやくの女房達をも參らせられず、參內し給ふ人々もそねまれければ、入道の權威に憚かつて參り通ふ臣下もなし、男女打ひそめて禁中忌々しうぞ見えし、頃は八月十日あまりの事なれば、さしもくまなき空なれども、主上は御涙にくもらせ給ひて、月の光もおぼろにぞ御覽せられける、やゝ深更に及んで、人やある人やあるとめされけれども、御いらへ申者もなし、稍あつて彈正の大ひつ仲國、その夜しも御宿直に參りて遙に遠う候ひけるが、仲國と御いらへ申す、汝ちかう參れ、仰下さるべき旨ありと仰せければ、何事やらんと思ひ、御前ちかうぞ參じたる、汝若小がうがゆくへや知たると仰ければ、爭かしり參らせ候べきと申す、誠や小がうは嵯峨の邊、かた折戶とかやしたる內にあると申者のあるぞとよ、あるじが名をばしらずとも、尋て參らせてんやと仰ければ、仲國あるじが名を知り候はでは、爭か尋ねあひ參らせ候べきと申ければ、主上げにもとて御涙せきあへさせましまさず、仲國つく〳〵物を案ずるに、誠や小督の殿は琴ひき給ひしぞかし、此月の明さに君の御事思ひ出參らせて、琴引給はぬ事はよもあらじ、內裏にて琴ひき給ひしとき、仲國笛の役にめされ參らせしかば、其琴の音はいづくにても聞しらんずる物を、嵯峨の在家いく程かあらん、打廻てたづねんに、などか聞出さであるべきと思ひ、左候はゞあるじが名はしらず候とも、たづね參らせ候べき、たとひ尋ねあひまゐらせて候とも、御書など候はずば、うはの空とや思召れ候はんずらん、御書を賜つて參り候はんと申ければ、主上げにもとて、頓て御書をあそばいてぞ下されける、寮の御馬に乘てゆけと仰ければ、仲國れうの御馬賜はつて、明月にむちをあげ、西をさしてぞあゆませける、小鹿なく此山里とえいじけん、嵯峨のあたりの秋のころ、さこそはあはれにも覺えけめ、かた折戶したる屋を見付ては、此內にもやおはすらんと、扣々聞けれども、琴ひく所はなかりけり、御だうなどへも參り給へる事もやと、しやか堂をはじめて、堂々見まはれども、小

〔續世繼四宇治の川瀬〕白河院の御世にきさきみやすどころなどかくれさせ給て、さるかた〴〵もおはせざりしに、白川殿ときこえ給ふ人おはしましき、その人待賢門院をばやしなひたてまつり給ひて、院も御むすめとてもてなしきこえさせ給しなり、その白川殿わさましき御宿世おはしける人なるべし、宣旨などはくだされざりけれども、世の人ぎをむの女御とぞ申めりし、もとよりかの院のうちのつぼねわたりにおはしけるを、はつかに御らんじつけさせ給て、三千の寵愛ひとりのみなりけり、たゞ人にはおはせざるべし、賀茂の女御と世にはいひて、うれしきいはひをとて、わねおとうとのちにつゞきてきこえしかど、それはかの社のつかさ重助がむすめどもにて、女房にまゐりたりしかば御目ちかゝりしを、これははつかに御覧じつけられて、それがやうにはなくて、これはことの外におもきさまにきこえ給ひき、

〔山槐記〕治承四年四月十二日甲午、今日初齋院、（御年四歲、新院〈高倉〉第一御女、內親王也、母權中納言成範御女、號小督殿、即新院女房也、〇下略）

〔平家物語六〕小がうの事

主上（〇高倉）は、れんぼの御涙に思召しづませ給ひたるを、申慰め參らせんとて、中宮の御方より、小督と申女房をまゐらせらる、そも此女房と申は、櫻町の中納言しげのりの卿のむすめ、禁中一の美人、ならびなき琴の上手にてぞまし〳〵ける、冷泉の大納言たかふさ卿未だ少將なりし時、見そめたりし女房なり、（〇中略）入道相國（〇平淸盛）此よしを傳聞給ひて、中宮と申も御娘、（〇德子）冷泉の少將も又聟なり、小がうの殿に二人の聟を取られては、世の中よかるまじ、いかにもして小がうの殿を召出いて失なはんとぞ宣ひける、小督此よしを聞給ひて、我身の上はとにもかくにも成なん、君の御爲御心ぐるしと思はれければ、或夜內裏をばまぎれ出て、行へもしらずぞ失られける、主上御歎き斜ならず、晝はよるのおとゞにのみ入せ給ひて御涙にしづませおはします、夜は南殿に出御成て、月の光を御覽じてぞ慰ませまし〳〵ける、入道相國此よしを承つて、扨は君は小督

ぼしながら、なき御かげにもおぼしめさん事、おそろしうつゝましうおぼさるゝに、そのゝち御文しきりにて參り給へ〳〵とあれど、いかでかはおもひのまゝにはいでたち給はん、いかになど覺しみだるゝ程に、おほんはらからの君達に、うへしのびて此事をのたまはせて、それ參らせよとおほせられければ、かゝることのありけるを、みやのけしきにもいださで、としごろおはしましけることゝおぼす、なにゝつけてもいとかなしう思いで聞え給、さてかしこまりてまかで給て、はやうまゐりたまへなど聞え給へば、わべい事にもあらずおぼしたれば、いまはじめたる御事にもあらざなるをなど、はづかしげに聞え給て、この君たち同じ心にそゝのかし、さるべき御さまにきこえ給ふ、うちよりはくらづかさにおほせられて、さるべきさまのこまかなる事どもも有べし、さはとていでたちまゐり給を、御はらからの君たち、さすがにいかにぞやうちおもひ給へる御けしきども、すゞろはしくおぼさるべし、さて參り給へり、登花殿にて御つぼねしたる、それよりとして御とのゐしきりて、こと御かた〴〵あへてたちいで給はず、故宮子○安の女房、みやたちの御めのとなどやすからぬことにおもへり、かゝる事のいつしかとなる事、たゞいまかくはおはしますべき事かはなど、ことしものろひなどしたまひつらんやうにきこえなすも、いと〳〵かたはらいたし、御かた〴〵には宮の御心の哀なりし事をこひしのびきこえ給ふに、かゝることさへあれば、いと心つぎなきことにすげなくそしりそねみ、やすからぬことにきこえ給、まゐり給てのちすべてよるひるふしおきむつれさせ給ひて、よのまつりごとをしらせ給はぬさまなれば、只いまのそしりぐさにはこの御事ぞありける、わたりなかりしおり、あやにくなりしにやとおぼされつる御心ざし、いましもいとゞまさりていみじう思聞えさせ給てのあまりには、人のこなどうみ給はざらましかば、きさきにもすゑてましとおぼしめしの給はせて、内侍のかみになさせ給つ、

〔類聚國史百八十七佛道〕弘仁八年八月戊午朔、散事從三位橘朝臣常子薨云々、皇統彌照天皇○桓武納之後宮、有寵、生三品大宅內親王、延曆年中授從四位下、宮車晏駕、出家爲尼、太上天皇敬重之、叙從三位、

〔日本紀略○嵯峨〕弘仁八年八月戊午朔、散事從三位橘朝臣常子薨、左大臣正一位橘諸兄之曾孫、正五位下兵部大輔島田麻呂之女也、皇統彌照天皇○桓武納之後宮、有寵、生三品大宅內親王、宮車晏駕、出家爲尼、薨年卅、

〔日本後紀二十嵯峨〕弘仁元年九月己酉、藤原朝臣藥子自殺、藥子贈太政大臣種繼之女、中納言藤原朝臣繩主之妻也、有三男二女、長女太上天皇○平城爲太子時、以選入宮、其後藥子以東宮宣旨出入臥內、天皇私焉、皇統彌照天皇○桓武慮婬之傷義、即令駈逐、天皇之嗣位、徵爲尙侍、巧求愛媚、恩寵隆渥、所言之事、無不聽容、百司衆務、吐納自由、威福之盛、熏灼四方、屬倉卒之際、與天皇同輦、知衆惡之歸己、遂仰藥而死、

〔續日本後紀十七仁明〕承和十四年十一月己巳、尙藏從二位緒繼女王薨、女王能有妖媚之德、淳和太上天皇殊賜寵幸、令陪宮掖、薨時遺命不受葬使、于時年六十一、

〔三代實錄七清和〕貞觀五年正月三日丙寅、大納言正三位兼行右近衞大將源朝臣定薨、○中略定者嵯峨天皇之子也、母百濟王氏、其名曰慶命、天皇納之、特蒙優寵、動有禮則、甚見尊異、宮闈之權、可謂無比、官爲尙侍、爵至二位、及薨贈一位、始太上天皇○嵯峨遷御嵯峨院之時、爲築別館、令爲居所、號曰小院、太上天皇所居爲大院、尙侍所居、爲其次故也、權勢之隆至如此焉、定生而岐嶷、太上天皇在鍾愛、

〔榮花物語一月の宴〕六月○康保元年つごもりに、みかど○村上の覺しめしけるやう、式部卿の宮○重明親王の北方○藤原登子はひとりおはすらんかしとおぼし出て、御文物せさせ給ふに、后の宮○藤原安子の御おとゝの御かた〴〵をとこ君たち、たゞおやともきみとも宮をこそたのみ申つるに、火をうちけちたるやうなるをあはれにおぼしなどふ。○中略みやの北の方はめづらしき御文をうれしうお

而不參向、又重七喚、猶固辭以不至、於是天皇不悅、而復勅一舍人中臣烏賊津使主曰、皇后所進之娘子弟姫、喚而不來、汝自往之召將弟姫以來、必敦賞矣、爰烏賊津使主、承命退之、裹糒褌中到坂田、伏于弟姫庭中、言天皇命以召之、弟姫對曰、豈非懼天皇之命、唯不欲傷皇后之志耳、妾雖身亡、不參赴、時烏賊津使主對言、臣既被天皇命、必召率來矣、若不將來、必罪之、故返被極刑、寧伏庭而死耳、仍經七日伏於庭中、與飲食而不飡、密食懷中之糒、於是弟姫以爲、妾因皇后之嫉、既拒天皇命、且亡君之忠臣、是亦妾罪、則從烏賊津使主而來之、到倭春日食于櫟井上、弟姫親賜酒于使主、慰其意、使主即日至京、留弟姫於倭直吾子籠之家、復命天皇、天皇大歡之、美烏賊津使主、而敦寵焉、然皇后之色不平、是以勿近宮中、則別搆殿屋於藤原而居也、　八年二月、幸于藤原、密察衣通郎姫之消息、是夕衣通姫戀天皇而獨居、其不知天皇之臨、而歌曰、和餓勢故餓、句倍枳豫臂奈利、佐瑳餓泥能、區茂能於虚奈比、虚豫比辭流辭毛、天皇聆是歌、則有感情、而歌之曰、佐瑳羅餓多、邇之枳能臂毛弘、等枳舍氣帝、阿麻多絆泥受邇、多儀比等用能未、明旦天皇見井傍櫻華、而歌之曰、波那具波辭、佐區羅能梅涅、許等梅涅麼、波椰區波梅涅孺、和我梅豆留古羅、皇后聞之且大恨也、於是衣通郎姫奏言、妾常近王宮、而晝夜相續欲視陛下之威儀、然皇后則妾之姉也、因妾以恒恨陛下、亦爲妾苦、是以冀離王居、而欲遠居、若皇后嫉意少息歟、天皇則更興造宮室於河內茅渟、而衣通郎姫令居、因此以屢遊獵于日根野、　十一年三月丙午、幸於茅渟宮、衣通郎姫歌之曰、等虚辭陪邇、枳彌母阿閉椰毛、異舍儺等利、宇彌能波摩毛能、余留等枳等枳弘、時天皇謂衣通郎姫曰、是歌不可聆他人、皇后聞必大恨、故時人號濱藻、謂奈能利曾毛也、先是衣通郎姫、居于藤原宮、時天皇詔大伴宿屋連曰、朕頃得美麗孃子、是皇后母弟也、朕心異愛之、冀其名欲傳于後葉奈何、室屋連依勅而奏可、則科諸國造等、爲衣通郎姫定藤原部、

〔日本後紀五桓武〕延曆十五年十月壬申、正四位上因幡造淨成女卒、淨成女元因幡國高草郡之采女也、天皇特加寵愛、終至顯位、

後宮雜載

此篇ハ妃夫人嬪、若クハ女御更衣ニアラズシテ、殊ニ寵幸ヲ蒙リシモノヲ擧ゲタリ、而シテ其收ムル所ニハ、當時ソノ職名アリテ史冊ニ佚セルモノモアルベシ、

〔古事記(中應神)〕一時天皇越幸近淡海國之時、(○中略)故到坐木幡村之時、麗美孃子遇其道衢、爾天皇問其孃子曰、汝者誰子、答白、丸邇之比布禮能意富美之女、名宮主矢河枝比賣、天皇即詔其孃子、吾明日還幸之時入坐汝家、故矢河枝比賣委曲語其父、於是父答曰、是者天皇坐那理、(此二字以音)恐之我子仕奉云、而嚴飾其家候待者、明日入坐、故獻大御饗之時、其女矢河枝比賣令取大御酒盞而獻、於是天皇任令取其大御酒盞而御歌曰、許能迦邇夜、伊豆久能迦邇、毛毛豆多布都奴賀能迦邇、余許佐良布、伊豆久邇伊多流、伊知遲志麻、美志麻邇斗岐、美本杼理能、迦豆伎伊岐豆岐、志那陀由布、佐佐那美遲袁、須久須久登、和賀伊麻勢婆夜、許波多能美知邇、阿波志斯袁登賣、宇斯呂傳波、袁陀氐呂迦母、波那美波志、比斯那須、伊知比韋能、和邇佐能邇袁、波都邇波、波陀阿可良氣美、志波邇波、邇具漏岐由惠、美都具理能、曾能那迦都邇袁、加夫都久、麻肥邇波阿氐受、麻用賀岐、許邇加岐多禮、阿波志斯袁美那、迦母賀登、和賀美斯古良、迦久母賀登、阿賀美斯古邇、宇多多氣陀邇、牟迦比袁流迦母、伊蘇比袁流迦母、如此御合生御子、宇遲能和紀(自宇下五字以音)郎子也、

〔日本書紀(十三允恭)〕七年十二月壬戌朔、讌于新室、天皇親之撫琴、皇后起儛、儛既終而不言禮事、當時風俗、於宴會儛者、儛終則自對座長曰、奉娘子也、時天皇謂皇后曰、何失常禮也、皇后惶之、復起儛、儛竟言奉娘子、天皇即問皇后曰、所奉娘子者誰也、欲知姓字、皇后不獲已而奏言、妾弟名弟姬焉、弟姬容姿絕妙無比、其艶色徹衣而晃之、是以時人號曰衣通郎姬也、天皇之志存于衣通郎姬、故強皇后而令進、皇后知之、不輙言禮事、爰天皇歡喜、則明日遣使者喚弟姬、時弟姬隨母以在於近江坂田、弟姬畏皇后之情、

院御息所

所。とていますかりけるいとこ成けり、

○按ズルニ、おほみやすん所トハ藤原明子ヲ指スナリ、清和天皇ノ朝ニ、御生母ナルヲ以テ皇太夫人トナリ、尋テ皇太后トナレリ、

〔伊勢集上〕いづれの御時にかありけん、おほみやすん所と聞ゆるみつぼねに、やまとにおやある人さぶらひけり、おやいとかなしうして男なども逢はせざりけるを、御息所の御せうとしごろいひわたり給、○下略

○按ズルニ、此大御息所ハ、醍醐天皇ノ皇太夫人藤原温子ナリ、

〔大和物語上〕故源大納言宰相におはしける時、京極のみやすどころ、○褒子亭子院○宇多の御賀つかうまつり給とて、かゝる事をなんせんと思ふ、さゝげ物一枝ふた枝せさせ給へと聞え給ひければ、ひげこをあまたせさせ給ふて、俊子にいろいろにそめさせ給ひけり、しきものゝおりものども、いろいろにそめよりくみ何かと、みなあづけてせさせ給ひけり、

〔小右記〕寛仁三年四月十一日戊戌、去夜者左大臣○藤原顯光二娘○院御息所延子忽以己逝云々、心労云々、

○按ズルニ、院トハ小一條院敦明親王ノ事ナリ、上皇ニアラズト雖トモ、名稱ノ同ジキヲ以テ玆ニ附載ス、

大御息所

〔古事談王道后宮一〕寛平法皇、〇宇多與京極御休所同車、渡御川原院、歷覽山河形勢、入夜月明、令取下御車疊假爲御座、與御息所被行房內之間、開塗籠之戶有出之聲、法皇令問給、對云、融候、欲賜御息所、法皇答云、汝在生之時爲臣下、我天子、何漫出此言哉、早可退歸者、靈物忽抱法皇御腰、半死御坐、前驅等皆候中門外、御聲不可及達、牛童頗近侍食御牛、召件童舍人、差寄御車、令乘御息所、顏色無色、足不能起立、令扶抱乘、還御之後、召淨藏大法師令加持、纔蘇生云々、法皇依前世行業、爲日本之王、雖避寶位、神祇奉守護、追退融靈也、件戶面有打物跡、守護神令退入押覆也云々、

〔西宮記臨時一裏書〕延喜七年正月九日、貞信公記云、御息所御口令良少將奏大殿、自大納言至左兵衛督及氏五位以上十餘人、於左近陣東庭拜舞、亦參東宮令啓、

〔今昔物語二十四〕延喜御屛風伊勢御息所讀和歌語第三十一

今昔、延喜天皇〇醍醐御子ノ宮ノ御著袴ノ料ニ御屛風ヲ爲サセ給テ、其色紙形ニ可書キ故ニ、歌讀共ニ各和歌讀テ奉レト仰セ給ヒケレバ、皆讀テ奉タリケルヲ、小野道風ト云手書ヲ以テ令書給ケレバ、春ノ帖ニ櫻ノ花ノ榮タル所ニ、女車ノ山路行タル繪ヲ書タル所ニ當テ色紙形有リ、其ヲ思シ食シ落シテ、歌讀共ニモ不給リケレバ、道風書キ持行クニ其歌ナケレバ、天皇此レヲ御覽ジテ、此ハ何カセムト爲ル、今日ニ成テハ俄ニ誰カ此ヲ可讀キ、可咲所ノ歌シモナカラムコソ口惜ケレト被仰テ、暫ク思食シ廻シテ、藤原伊衡ト云殿上人ノ少將ニテ有ケルヲ召ヌ、即チ參ヌ、被仰テ云ク、只今伊勢御息所ノ許ニ行テ、此ル事ナム有ル、此歌讀テトテ遣ス、〇中略然テ此御息所ハ極テ物ノ上手ニテ有ケル、大和守藤原忠房ト云人ノ娘ナリ、亭子院ノ天皇ノ御時ニ參テ有ケレバ、天皇極ク時メキ思食シテ、御息所ニモ被成タルナリ、形チ心バセヨリ始メ、故有テ可咲ク微妙カリケリ、和歌ヲ讀ム事ハ、其時ノ躬恒貫之ニモ不劣リケリ、

〔伊勢物語下〕昔おほやけおぼしてつかう給ふ女〇藤原高子の、色ゆるされたる有けり、おほみやすん。

稱侍御寢者爲御息所

こよひこそなみだの河にゐる千鳥なきてかへると君はしらずや

〔大和物語上〕おなじ右のおほいどの〇藤原定方のみ。や。す。ど。こ。ろ、〇醍醐女御仁善子帝おはしまさずなりて後、式部卿の宮〇宇多皇子敦慶なんすみたてまつり給けるを、いかゞありけんおはしまさゞりける頃、齋宮の御もとより御文たてまつりたまへりけるに、みやすむどころ宮のおはしまさぬ事など聞給うておくに、

ゑらやまにふりにし雪の跡たえていまはこし路の人もかよはず、となんありける、御返あれど本になしとあり、かくて九の君の侍從の君にあはせ奉り給ひてけり、

〔十訓抄八〕成明親王〇村上の位につかせ給ひたりけるに、女御あまたさぶらはせ給ひける中に、廣幡の御息所は、ことに御心ばせあるさまに御門もおぼしめしたり、

〔續世繼八源氏の御息所〕御門の御おほぢにはおはせねど、春宮〇實仁親王やみやたちの御母におはせしは、後三條院の女御にて、侍從の宰相基平の御むすめこそおはせしか、その宰相は小一條院の御子におはしき、その源氏のみ。や。す。所。御名は基子女御とぞ申し、

〔續世繼二玉章〕さてこの御時にみ。や。す。所。はこれかれさだめられ給へりけれども、御をばの前齋院〇後三條皇女篤子ぞ女御にまゐり給ひて中宮にたち給ひし、ことのほかの御よはひなれど、をさなくよりたぐひなくみとりたてまつらせ給て、たゞ四宮をとかや仰せられければにや侍けん、まゐらせ給ひけるよも、いとわかぬ事にて、御車にもたてまつらざりければ、わか月ちかくなるまでぞ心もとなく侍ける、鳥羽の御門の御母の女御どのもまゐり給ひて、院もてなし聞えさせ給へば、はなやかにおはしましゝかども、中宮はつきせぬ御心ざしになんきこえさせ給ひし、

〔十訓抄十〕亭子院〇宇多に、御息所あまた御そうしして住たまふに、河原院の見所あるさまに、いとめでたくつくらせ給ひて、京極御息所〇尙侍藤原褒子一ところをのみ具し奉りて、わたらせ給ひけり、

ておほせごとあるあひだに、日はてりながら雪のかしらにふりかゝりけるをよませ給ひける、

ふんやのやすひで

春の日の光りにあたる我なれど頭の雪となるぞわびしき

〔源氏物語一桐壺〕此みこ〇源氏むまれ賜ひてのちは、いと心ことにおぼしおきてたれば、坊にもようせずばこのみこの居賜べきなめりと、一のみこの女御はおぼしうたがへり、

〔伊勢物語上〕むかし春宮の女御の御かたの花の賀に、めしあづけられたりけるに、〇歌略

〔玉勝間五〕東宮の御息所

二條后は、清和天皇の中宮也、貞觀八年に女御となり賜ひ、同十年に貞明親王を生奉り賜ひ、同十一年に其親王皇太子に立せ賜ふ、これ陽成天皇におはします、これよりして元慶元年に中宮となり賜ふ迄のあひだ、女御にて皇太子の御母にましますを以て、東宮の女御とも、東宮の御息所とも申けること、契冲が餘材抄、勢語臆斷などにいへるが如し、東宮の御母女御、御母御息所といふことなり、

〔大和物語上〕故式部卿〇宇多皇子敦慶二條のみやすどころにたえ給ふて、又のとしのむ月のなぬかの日に若菜奉り給ひけるに、

ふるさとゝあれにし宿の草の葉も君がためとぞまづはつみける　とありけり、

〇按ズルニ、二條のみやすどころハ、三條のみやすどころノ誤ナルベシ、三條御息所ハ醍醐天皇ノ女御藤原仁善子ニシテ三條右大臣定方ノ女ナリ、

〔大和物語上〕桂の御子〇宇多皇女孚子の御もとに、よしたねが來たりけるを、母御息所きゝつけ給て、門をさゝせ給ければ、夜ひと夜たちわづらひてかへるとて、かくきこえ給へとて、かどのはざまよりいひいれける、

稱女御爲御息所

ぶらひ給ふ、

○按ズルニ、古說ニ女御更衣ノ御子ヲ生メルモノヲ御息所ト云ツトアレドモ然ラズ、本文ニ依ルニ、御子生レ給ハヌヲモ御息所ト稱セリ、

〔空穗物語藏びらき中〕おやにするばかりにてぞ、また西わたりには、更衣などいますかり、その更衣は、宰相の中將のひめみこの母なり、むめつぼのみやすどころといひし、

〔源氏物語桐壺一〕その年の夏、みやすどころはかなきこゝちにわづらひてまかでなむとし給を、いとまさらにゆるさせ給はず、○中略内より御つかひあり、三位のくらゐおくり給ふよし勅使きてその宣命よむならんかなしき事なりける、女御とだにいはせずなりぬるが、あかずくちをしうおぼさるれば、今ひときざみの位をだにと贈らせ給ふなりけり、

〔源氏物語賢木十〕さるの時に内にまゐり給、みやす所御こしにのり給へるにつけても、父おとゞのかぎりなきすぢにおぼし心ざして、いつきたてまつり給ひし有さまかはりて、すゑの世にうちを見給にも、物のみつきせずあはれにおぼさる、十六にて故宮にまゐり給て、廿にておくれたてまつり給ふ、卅にてぞけふまた九重を見給ける、

そのかみをけふはかけじと忍ぶれど心のうちにものぞかなしき

〔續世繼あしたづ九〕むかし清和のみかどの御とき、かたがたおほくおはしけるなかに、ひとりのみやす所○女御藤原多美子の、太上法皇○清和かくれさせ給へりけるとき御經供養してほとけのみちとぶらひたてまつられけるに、みのりかきたまへりけるきしのいろの、ゆふべのそらのうす雲などのやうにすみぞめなりければ、人々あやしくおもひけるに、むかし給はりたまへりける御ふみどもをきさしにすきて、みのりのれうしになされたりけるなりけり、

〔古今和歌集一春〕二條后○清和女御高子のとう宮のみやすむ所ときこえける時、正月三日おまへにめし

御息所

名稱

御息所トハ、天皇ノ御寢ニ侍スルモノナリ、其名モト天皇ノ休憩シタマフ便殿ヨリ起レルヲ以テ、更衣ヲ指シテ言ヘルナリ、然レドモ亦女御ヲモ謂ヒ、或ハ御寢ニ侍スレドモ、其職名ナキ者ヲモ謂ヘリ、之ヲ要スルニ、一箇ノ私稱ニシテ、東大寺要錄ニ引ケル惠運ノ記ニ既ニ此名アルヲ視レバ、淸和天皇ヨリ前ニ起リシナリ、鳥羽天皇以後ニハ亦見エズシテ、專ラ皇太子、親王ノ妃ノ稱ト爲レリ、皇太子ノ御息所ハ別ニ擧ゲタリ、

〔大和物語上〕みやすむどころ

〔榮花物語月の宴一〕みやすどころ

初見

〔東大寺要錄一〕惠運僧都記文

貞觀三年四月廿五日、皇太后(〇仁明后、藤原順子)幷北御。息。所。(〇文德女御、藤原古子、)剃頭出家、

稱更衣爲御息所

〔大和物語下〕堤の中納言の君、十三のみこ(〇醍醐皇子章明親王)の母御息所(〇醍醐更衣桑子)を內に奉りけるはじめに、御かどはいかゞおぼしめすらんなどいとかしこく思なげき給けり、さてみかどによみて奉り給ける、

ひとのおやの心はやみにあらねども子をおもふみちにまどひぬるかな、先帝いとあはれに思しめしたりけり、御返しはありけれど人えしらず、

〔榮花物語月の宴一〕又在衡のあぜち大納言のむすめ、あぜちの御息所(〇村上更衣)とてさぶらひ給ふ、小一條の師尹のおとゞの御むすめ(〇芳子)いみじううつくしくて、宣耀殿のにようご(〇村上)ときこえさす、又廣幡の中なごん廣明のおほんむすめ、廣幡のみやすどころ(〇村上更衣計子)とておはす、さてもこのおほんかた〴〵、みな御子むまれ給へるもあり、御子むまれ給はぬ御息所たちもあまたさ

たゞめざましきものにおとしめそねみ給、おなじ程それより下らうの更衣たちは、ましてや、すからず、朝夕のみやづかへにつけても人の心をうごかし、うらみをおふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心ぼそげにさとがちなるを、いよ〳〵あはれなるものにおぼして、人のそしりをもえはゞからせたまはず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり、

〔源平盛衰記 二〕清盛息女事

御娘八人御坐ケルモ、皆取々ニ幸シ給ヘリ、○中略七ニハ安藝嚴島ノ内侍ガ腹ノ娘也、指タル才藝ハナカリケレ共、美貌ハ人ニ勝給ヘリ、嬋娟タル兩鬢ハ秋ノ蟬ノ翼、宛轉タル雙蛾ハ遠山ノ色トゾ見エ給フ、秋夜月ヲ待、ハツカニ山ヲ出ル清光ヲ見ガ如シ、夏日蓮ヲ思初テ、水ヲ穿紅艷ヲ見ヨリモ潔シ、此御娘十八ノ年、後白河院ヘ參給ヘリ、更衣。。ノ后ニテゾ御坐ケル、入道○平清盛サシモナキ事セラレタリト申合ケリ、其上程ナク失給ニケリ、

〔增鏡 五内野の雪〕こぞ○仁治三年より、中宮○藤原姞子は、いつしかたゞならずおはします、六月○寛元元年になりて、○中略十日のあけぼのよりその御氣しきあれば、殿のうちたちさわぐ、○中略内○後嵯峨には更衣ばらに、わか宮二所おはしませど、此御事をまち聞え給ふとて納さだまり給はぬほどなり、

ひのゝしる、いでさせ給夜は曉までおはしまし、御ともの人などのたちやすらふも昔物がたりの心ちす、さべきむつまじき殿上人御おくりすべき宣旨ありていとめでたし、殿ばらなど獨女こそもつべきものはあれなどめで給ふ、〇中略御息所更衣などにみな中じやう少將のむすめ受領のもみなまゐりけるを、このちかき世にはおぼろげの人はまゐり給はぬものにならひたるに、いとあさましきなり、〇中略三月〇延久三年九日いらせ給ふ、ぎしき有さまいとめでたし、車五六ひきつゞけていと心ことなり、女御になりていらせ給、更衣などいひしをだに世にめでたくめづらしきことに思申しを、けさやかにめでたくいみじく世にためしなきことに、世人このころのことぐさにしけり、

〔空穗物語初秋〕かくてすまひの節、明日になりて、内にいとかしこくまかなひにわたり給へる宮す所かうゐたちと、まうのぼり給ふべき事をおぼしつゝ、てつくしたる御けしやうをしおはします、そのすまひの日、仁壽殿にてなむきこしめしける、なえむ思ひたがへたるなるべし、その日あしたの御まかなひには仁壽殿の女御、ひるのまかなひには承香殿の女御、よさりの御まかなひには式部卿の女御、かうゐ十人、色ゆるされ給へるかぎり色をつくして奉れり、更衣たちみな日のよそひし、あめの下のめづらしきあやのもむをたてまつりつくし、宮す所たちまかなひつかうまつり給はぬは、うないにてなむさぶらひ給ひけり、

〔空穗物語俊蔭〕二年十八にて侍從になりぬ、そのとしの五節の心みの夜、后宮よりはじめたてまつりて、おほくの女御更衣まうのぼり給へるにも、このいだしの五節のかたちようゐはかなくうちふるまへるも人にはことにて、うへには御心とゞめて御らんず、

〔源氏物語一桐壺〕いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに、いとやむごとなききはにはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり、はじめよりわれはと思ひあがり給へる御か

祇候所

夜遣使賜物、

〔禁秘御抄上〕上御局 號藤壺上御局

后女御更衣參上所也 近代爲御所

上御局 號弘徽殿御局、

是御行ナド有所也、女御更衣可參上、

出家

〔日本紀略冷泉五〕康保五年七月十五日壬寅、今日先帝〇村上女御從四位上莊子女王、幷更衣藤原祐姫等爲尼、

更衣叙爲女御

〔三代實錄光孝五十〕仁和三年二月十六日庚申、勅以更衣從五位上藤原朝臣元善爲女御、中納言從三位山蔭之女也、

〇按ズルニ、コレ更衣ヨリ陞リテ女御トナリシ始メナリ、

雜載

〔簾中抄下〕更衣　これべちのつかさにはあらねども、内侍のかみなどになさるゝをりあり、

〔大和物語上〕先帝〇宇多の御時、刑部のきみとてさぶらひ給ひける更衣の、さとにまかりいで給ひて、ひさしうまゐり給はざりけるにつかはしける、

おほぞらをわたる春日のかげなれやよそにのみしてのどけかるらむ

〔榮花物語三十八松の下枝〕一品の宮にまゐらせ給ひし、侍從宰相〇源基平の御むすめ、〇基子うち〇後三條おぼしめすといふ事世にきこえて、たゞそなたになんおはしますなどいふ程に、たゞならずならせ給へり、おほかたもみやづかへさまにもあらずもてかしづき聞えさせ給て、たゞみやの御おなじことにて、御だいなど參らすることもひめ君の御だいとて、女房とりてまゐらするに、ましてかくさへものせさせ給へば、いと心ことにもてなさせ給ふ、〇中略七月に尾張前司つねひらといふ人のいへにいでさせ給、このたびかへり參らせ給はんには、更衣などにてなんおはすべきとい

敍位

職掌

待遇

〔公卿補任朱雀〕天慶七年(甲辰)參議從四位上源兼明、(○中略)母參議藤原菅根女、(更衣從四位上淑姫)

〔北山抄六〕下宣旨事云々　補女御事(更衣者、尚侍宣下所司、聽禁色、)

〔侍中群要八〕內親王以下宣旨

更衣事、大臣於御前承可成之由、即召藏人、令付簡、問案內、付第一云々、件等事可案內、

〔禁秘御抄下〕女房　上臈

上古可然人女、皆爲女御更衣、

〔文德實錄十〕天安二年正月辛丑、紀朝臣靜子(○文德天皇更衣)授正五位下、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年十一月廿七日丁未、授更衣從五位下藤原朝臣元子從五位上、

〔小野宮年中行事〕正月廿日內宴事

仁和四年正月己未御記云、太政大臣送朕書云、內宴陪膳、古跡以采女爲奉仕之、而先帝令更衣陪膳、令問古老、采女等自奏之、若無更衣、復舊用采女、

〔山槐記〕保元四年正月廿一日丙子、今日內宴也、(○中略)次陪膳典侍、(此役更衣役之、然而無其人之故也、)

〔延喜式三十八掃部〕凡設座者、(○中略)四位命婦及更衣藏人兩面草墪、(藍染兩面表緣、紺調布裏、)

〔延喜式四十一彈正〕凡內親王三位已上內命婦及更衣以上、並聽乘絲葺有庇之車、幷著緋牛鞦、

〔延喜式四十一彈正〕凡車馬從者、(○中略)更衣十人、

〔侍中群要八〕諸使事

更衣已上初參後朝使(殿上六位以上)

女御更衣養產使(藏人○一本藏人下、有所民甫三字、)

〔新儀式五臨時下〕皇后產事

皇后有御產事、先遣中使被奉問之、七夜仰內藏寮令設饗饌、有賜祿物、(或穀倉院屯倉等也、)設女御更衣產所、七

從五位上、並太上天皇○嵯峨更衣也、

〔一代要記淳和一〕更衣從五位上藤原朝臣潔子右大臣内麻呂孫、散位從四位上長岡女、

〔三代實錄清和二十八〕貞觀十八年三月十三日辛卯、皇子貞數爲親王、年二歲、母更衣、參議太宰權帥從三位在原朝臣行平之女也、皇女識子爲内親王、年三歲、母更衣、故神祇伯從四位下藤原朝臣良近之女也、皇子長頼賜姓源朝臣、年二歲、母更衣、從五位下行信濃權介佐伯宿禰子房之女也、

〔三代實錄清和二十九〕貞觀十八年十一月廿五日戊戌、皇子貞眞年一歲、貞頼年一歲、並爲親王、貞眞親王、母更衣、齋宮頭從五位上藤原朝臣諸藤之女也、貞頼親王、母更衣、木工允正四位上藤原朝臣眞宗之女也、

〔大鏡裏書〕贈皇太后宮胤子御事宇多天皇女御、醍醐天皇母儀、
勸修寺贈太政大臣高藤公女、○中略仁和四年九月廿二日爲更衣、同日聽禁色、

〔諸官符案〕太政官符
中務省
　三世德姫女王　源朝臣久子　藤原朝臣靜子
右左大臣藤原朝臣宣、奉勅宜爲更衣者、
辨　左大史
　寛平四年十二月十五日

〔皇胤紹運錄〕依子内親王宇多皇女、母更衣源貞子、民部卿昇女、

〔一代要記三醍醐〕更衣源封子

〔皇胤紹運錄〕代明親王醍醐皇子、母更衣藤鮮子、伊豫介連永女、

〔公卿補任朱雀〕天慶二年己亥正四位下源高明、○中略母右大辨源唱朝臣女、更衣從四位下周子

更衣

更衣ハ、天皇ノ御衣ヲ更サセ給フ便殿ヲ謂ヒテ、即チ其殿ニ在リテ更衣ヲ主ルヲ以テ名トシ、亦御寢ニ侍セリ、其位女御ヨリ下レルモノニテ、多ク五位ニ過ギズ、罕ニ四位ニ進ムモノアリ、亦陞リテ女御ト爲ルモノアリ、此稱ハ桓武天皇ノ更衣乙魚ガ、伊呂波字類抄ニ引ク所ノ本朝事始、仁明天皇承和三年ノ條ニ見ハレタルヲ以テ始トシ、冷泉天皇以下亦此職ニ居ルモノナシ、源平盛衰記増鏡ナドニ稀ニ其名見エタルハ古キヲ摸シテ寫シ出セルナラン、カク此名ノ絶エシハ、蓋シ尚侍典侍ノ名ヲ以テ、御寢ニ侍スルモノアルニ由レルナルベシ、

名稱

〔空穗物語藏びらき上〕雛きじなどは、この頃こうみ給へる、ときのかうい〈〇〇〉の御もとに奉り給へり、

〔伊呂波字類抄加三〕更衣カウイ

〔名目抄人體〕更衣カウイ

〔後漢書三孝章〕永平〈〇孝明年號〉十八年十二月癸巳、有司奏言、〈〇中略〉臣愚以爲、更衣〈〇〇〉在中門之外、處所殊別、〈(中略)續漢書曰、更衣者、非正處也、園中有寢有便殿、寢者陵上正殿、便殿寢側之別殿、即更衣也、〉

〔河海抄一〕更衣事

案之、更衣は便殿なり、主上御衣など著しかへ給ふ所なり、故に號更衣歟、又寢側の別殿なる故に、更衣を御息所とも稱するか、休息の儀なり、水原抄には、更衣後に御息所と見えたり、猶昇進の儀歟云々、

員數

〔西宮記臨時一裏書〕清涼記云、更衣、〈其員十二人〇〇安不滿其數〉以尚侍宣下諸司、聽著禁色、

初見

〔本朝事始伊呂波字類抄所引〕仁明天皇承和三年、紀朝臣乙魚授從四位下、柏原天皇〈〇桓武〉之更衣也、

〔續日本後紀十一仁明〕承和九年正月戊戌、是日詔授從五位下秋篠朝臣康子正五位下、無位山田宿禰近

〔太平記 一〕立后事

文保二年八月三日、後西園寺太政大臣實兼公ノ御女、〇禧子后妃ノ位ニ備テ弘徽殿ニ入セ給フ、此家ニ女御ヲ立ラレタル事已ニ五代、是モ承久以後、相模守〇北條代々西園寺ノ家ヲ尊崇セシカバ、一家ノ繁昌恰モ天下ノ耳目ヲ驚セリ、

〔新葉和歌集 十六雜〕嘉喜門院〇後村上后勝子女御と申ける比、八月十五夜家に十五番歌合し侍ける時、禁中月といふ事をよみ侍りける、

福恩寺前關白内大臣

おなじくは秋の宮井に澄のぼる光をそへよ雲の上の月

〔大日本史 八十五后妃〕歷考本書、〇新葉和歌集門院爲女御時、福恩寺前關白内大臣家有歌合、命題禁中月、關白所詠有期望女御升后位之意、據之則門院蓋福恩寺關白之女、然福恩寺關白亦未知爲誰、女御爲后之文、諸書無所考、

〔嘉喜門院御集〕けんとく二年なが月の末つかた、びはの大なる枝に、つたの紅葉のかゝりたりしをわきてそめけるも、なにとなく御めとまる心ちしてとて、女御殿〇後龜山后某よりまゐらせられたりし御返事に、

君がはや秋の宮井にうつるべきほどをもみぢの色にこそしれ

〇按ズルニ、此歌マタ新葉和歌集ニ載セテ、其端書ニ、中宮女御にておはしましける比、紅葉の枝を奉らせ給たりければト見エタリ、

雜載

母源高明女嬉子、後爲二小一條院女御一いでさせ給へり、その車のそでくちかずもしらずおほくかさなりかゞやけり、みかど童におはしませば、大宮○母后藤原彰子、御輿にたてまつりたれば、其ほどまねびやらんかたなくめでたし、

〔台記〕康治元年十月廿六日、今日大嘗會御禊也、予○藤原頼長養女○多子女御代、子細具二別記一、

〔五代帝王物語〕主上○後堀河は、貞應元年正月二日御元服、御年十一、中宮にははじめに三條太政大臣公房公の女、安喜門院○藤原有子御禊の女御代に參りたりしが、やがて貞應元年十二月十七日女御として、同二年二月に立后、嘉祿二年七月に皇后宮とす、

〔女院小傳〕京極院藤佶子、龜山后、後宇多母、左大臣實雄一女、母從二位藤榮子、文應元、十二、十一爲二女御代一、十二月七日叙二從三位一、廿五爲二女御一、

〔大嘗會御禊事〕後二條　正安三年十月二十八日甲午、　女御代右大臣公孝女　女實故內府公親公女

當今○花園　延慶二年十月二十一日、　女御代太政大臣信嗣女　女實權中納言冬氏卿女

〔榮花物語十日蔭の鬘〕さて世中には、けふあすきさきたゝせ給べしとのみいふは、かんのとの○姸子にや、またせんようでん○娍子にやとも申めり、かゝるほどに宣耀殿に、うち○三條より、

はるがすみのべにたつらんと思へどもおぼつかなさをへだてつるかな、ときこえさせ給へれば、御かへし、

かすむめるそらのけしきはそれながらわがみひとつのあらずもあるかな、ときこえさせ給へれば、あはれとおぼしめさる、

〔長秋記〕長承三年三月二日壬子、以二院○鳥羽女御○藤原泰子一叙二從四位下一、有二准三宮宣旨一、來八日可レ立レ后兼宣旨、十九日可レ有二宣命事一云々、○中略太上皇○鳥羽以二夫人一立后例未レ聞者、○下略

○按ズルニ、此ハ女御ヲ指シテ夫人ト稱セリ、

御禊行幸裏書

寛和、皇后同輿、又有女御代、仍尋舊例、貞觀元慶、皇后不御、又無女御代、河原指圖無其幕所也、天祿、皇后不御、女御代供奉、今案、皇后同輿時、又不可有女御代、然而承平、皇后同輿、又尙侍供奉、寛和依此例也、

〔江家次第十四踐祚上〕大嘗會御禊皇后同輿儀

早旦御沐浴、○中略次女。御。代。車列立都芳門外北掖、以南爲上次皇后出車立其南、同上女。御。代。參入之後、有行幸、

○按ズルニ、女御代ハ大嘗會御禊ノ女御ヨリ起レリ、上ニ擧ゲタル貞觀儀式ニ就キテ見ルベシ、後ニ幼帝ノ御禊ニ女御代ヲ置キシガ、又其後ニハ女御代ハ、終ニ御禊定置ノ職ト爲リテ、成人ノ天皇ニモコレアリ、且女御代タル人ハ、御禊ノ後ニ眞ノ女御タル者モ多カレド、女御タラザル者モ亦少カラズ、

〔大嘗會御禊事〕朱雀　承平二年十月二十五日癸酉、　女御代御匣殿別當命婦、尙侍藤貴子、左大臣忠平女、

〔榮花物語三様々の悦〕かくて十月○寛和二年になりぬれば、御禊大嘗會とて世のゝしりたり、みかど○一條なゝつにおはしませば、御こしにはみや○母后詮子もろともにたてまつるべければ、みやのおほんかたの女ばうなどさまぐ〜いみじうのゝしりたり、女御代の御ことなどすべて、よのいみじき大事なり、

○按ズルニ、此女御代ハ詳ナラズ、大嘗會御禊事、一條天皇ノ條ニ、女御代尙侍綏子歟攝政兼家公女ト疑ヘリ、

〔榮花物語十二玉の村菊〕長和五年正月十九日御讓位、○中略二月九日御卽位なり、みかど○後一條は九にならせ給、○中略御禊になりぬればいみじうつねにもわかす、○中略女御代には、高松殿の姫君○藤原道長女、

凡此君〈○高倉〉幼稚ノ御時ヨリ賢聖ノ名ヲ揚、仁德ノ行ヲ施ス、御情深キ御事共多カリケル、〈○中略〉又建春門院御入内ノ比、安元ノ始ノ年、中宮ノ御方ニ候ケル女房ノ召仕ケル女童二人アリ、一人ヲバ葵、一人ヲバ宿禰ト云フ、葵ハ美形世ニ勝レタリケレドモ、心ノ色少シ劣レリ、宿禰ハミメ形ハチト劣リタリケレドモ、心ノ色ハ深カリケリ、主上不慮ニ、始メハ葵ヲ召レケルガ、後ニハ心ノ色ニ御耽アリテ、宿禰ニ思召ツカセ給ツヽ、類ヒナキ御事ナリケレバ、彼女房龍顏ニ近付進ラセテ立サル事モナシ、白地ノ御事ニモアラデ夜々是ヲ被召、御志深ク見エサセ給ケレバ、主ノ女房モ召仕コトナク、還テ主ノ如クニイツキガシヅキ給ヒケリ、此事天下ニ漏聞エケレバ、時ノ人古キ謠詠ニ云事有トテ、文ヲ引テ云、生女勿悲酸、生男勿喜歡、男不封侯、女作妃ト、只今此女房、女御后ニモ立、國母仙院トモ祝レ給ナン、ユヽシカリケル幸哉ト披露スト聞召テ、後ハ敢テ召ルヽ事ナシ、御志ノ盡サセ給ニアラズ、世ノ謗ヲ思召ケル故也、サレバ常ハ御ナガメガチニテ、夜ノオトヾニゾ入ラセ給ケル、

御禊女御

〔儀式二〕踐祚大嘗祭儀上

其御禊座雙立五丈紺幄二宇、〈○中略〉又去御幄二丈立七丈幄二宇、爲女御女孺以上候處、

〔日本紀略八花山〕寛和二年十月廿五日乙丑、大嘗會御禊午刻御出、左大臣以下參入、右大臣〈○藤原兼家〉爲節下、太政大臣息女〈○藤原賴忠女諟子〉爲女御、

〔本朝世紀〕治曆四年十月廿八日丁卯、大嘗會御禊也、二條末巳二點御出、〈○後三條〉左右大臣內大臣以下參入、左大臣爲節下、〈○中略〉故入道右大臣〈○藤原賴宗〉第五女〈○昭子〉爲女御、

○按ズルニ、諟子ハ永觀二年女御ト爲リ、昭子ハ治曆二年女御ト爲ル、此ニ爲女御トアルハ、御禊ノ女御トナレルナリ、大嘗會御禊事ニ、共ニ女御代トアレドモ蓋シ誤ナラン、

女御代

〔北山抄五〕大嘗會御禊

〔平家物語六〕あふひのまへの事

それに何より又哀なりし事には、中宮の御方に候はれける女房の召仕ひける上童、思はざる外龍顏〇高倉にしせきする事ありけり、たゞ世のつねあからさまにてもなくして、まめやかに御心ざし深かりければ、主の女房も召つかはず、却て主のごとくにぞいつきもてなしける、〇中略此人女御きさきともてなされ、こくも仙院ともあをがれなんずとて、其名を葵の前と申ければ、内にはあふひ女御などぞさゝやきあはれける、主上は是をきこしめして、その後はめさゞりけり、是は御心ざしの盡ぬるにはあらず、只世のそしりをはゞからせ給ふによつてなり、されば御ながめがちにて、つや〳〵供御もきこしめさず、御惱とて常は夜のおとゞにのみ入らせおはします、其の時の關白松殿〇基房此よし承りて、主上御心つきぬる事こそおはすなれ、申なぐさめ參らせんとて、急ぎ御參内ありて、さやうにえい慮に懸らせましまさんにおいては何條事か候べき、件の女房召れ參らすべしと覺え候、しな尋ねらるゝに及ばず、基房やがて猶子に仕候はんと奏せさせ給へば、主上仰せ有けるは、いざとよそこにはからひ申もさる事なれども、位をすべつて後はまゝさる例もあるなり、まさしう在位の時、さやうの事は後代のそしり成べしとて、聞召も入れざりければ、關白殿力およはせ給はず、御涙をおさへて御退出ありけり、其後主上綠のうすえうの匂ひことに深かりけるに、古き事なれども思召出て、かうぞあそばされける、

忍れど色にいでにけり我こひはものやおもふと人のとふまで、冷泉の少將たかふさ、是を賜はりついで、件のあふひの前にたばせたれば、是を取て懷に入れ、かほ打あかめ、例ならぬ心ち出來たりとてさとへ歸り、打ふす事五六日にして、終にはかなく成にけり、君が一日の恩の爲に、妾が百年の身をあやまつとも、かやうの事をや申べき、

〔源平盛衰記二十五〕此君賢聖幷紅葉山葵宿禰付鄭仁基女事

准女御

假稱女御

〔小右記〕長和四年十月三日、今夜參議通任婚ニ子代女御、○前右大臣道兼女一條女御尊子

〔日本紀略七圓融〕天元元年四月十日甲子、左大臣○藤原賴忠二女遵子入ニ掖庭、准。女。御。被ニ免ニ禁、

〔仁和寺諸堂記〕威德寺　白河院御寵人東御方俗號ニ祇園女御、件人建立、本佛百體大威德也、

〔續世繼四宇治の川瀨〕白河院の御世に、きさき御息所などかくれさせ給ひて、さるかた〴〵もおはせざりしに、白河殿ときこえ給ふ人おはしましき、その人待賢門院をば、やしなひたてまつり給て、院も御むすめとてもてなしきこえさせ給ひしなり、その白河殿わさましき御すくせおはしける人なるべし、宣旨などはくだされざりけれども、世の人は祇園の女御とぞ申めりし、もとより彼院のうちのつぼねわたりにおはしけるを、はつかに御らんじつけさせ給て、三千の寵愛ひとりのみなりけり、たゞ人にはおはせざるべし、加茂の女御と世にはいひて、うれしきいはひとて、おねおとうとのちにつゞきてきこえしかば、それはかの社のつかさ重助がむすめどもにて、女房にまゐりたりしかば御めちかゝりしを、これははつかに御らんじつけられて、それがやうにはなくて、これはことのほかにおもきさまに聞え給ひき、

〔源平盛衰記二十六〕祇園女御事

古人ノ申ケルハ、清盛ハ忠盛ガ子ニハ非、白川院ノ御子也、其故ハ彼帝○白河感神院ヲ信ジ御坐テ、常ニ御幸ゾ有ケル、或時祇園ノ西大門ノ大路ニ、小家ノ女ノ怪ガ水汲桶ヲ戴テ、麻ノ狹衣ノツマヲ擧ツヽ、幹ホダ、ニ桶ヲ居置テ御幸ヲ奉ニ拜、帝御目ニ懸ル御事有ケレバ、還御ノ後彼女ヲ宮中ニ被ニ召テ、常ニ玉體ニ近ヅキ進セケリ、祇園社ノ巽ニ當テ御所ヲ造テ被ニ居タリ、公卿殿上人重キ人ニ奉ニ思テ祇園女御トゾ申ケル、角テ年比ヲ經ル程ニ、小夜深人定テ御ツレ〴〵ニ思召出サセ給テ、祇園ノ女御ヘ御幸アリ、

○按ズルニ、吾妻鏡正治元年八月十九日ノ條ニ、鳥羽院御寵祇園女御トアリ、恐クハ誤ナラン、

追福

再嫁

〔三代實錄五十光孝〕仁和三年五月廿四日丁酉、勅爲仁明天皇女御藤原氏、〇貞子於嘉祥寺修轉念功德、嚫料信濃調布二百端、公卿以下參會行事、女御者仁明天皇第八親王之所生也、

〔日本紀略五冷泉〕安和元年七月廿五日丙午、於法性寺、有先皇〇村上女御芳子周忌御態、

〔大鏡三太政大臣實頼〕齊敏の君の御をのこゝ、御おほぢをのゝみやのおとゞ〇藤原實頼御子にし給ひて、さねすけとつけたてまつり給ひて、いみじうかなしうし給ひき、このおとゞの、〇中略北方は花山院の女御、〇婉子女王ためひらの式部卿の御むすめ、院そむかせ給ひてこの女御、殿にさぶらひたまひしなり、〇下略

〔榮花物語十一莟花〕一條院うせさせ給ひて後、女御更衣の御ありさまどもさま〴〵にきこゆるに、承香殿の女御〇藤原元子に、故式部卿宮の源宰相の君頼定の君忍びつゝかよひきこえ給ふ程に、右のおとゞ〇元子父顯光きゝ給て、まことそらごとあらはしきこえんとおぼしけるほどに、御めにまことなりけりと見給ひてければ、いみじうむつからせ給て、さばかりうつくしき御ぐしを、てづから尼になしたてまつり給ふに、うき事數えらずみえたり、あさましうあやしきことによ人も殿のうちにもいひさわぐ程に、其のちもなほえのびつゝかよひ給ひければ、そのたびはいづちもいづちもおはしねとあれば、女御の御めのとゝあるは、實誓僧都といふ人のくるまやどりなり、その家にわたり給ぬ、宰相もさるべきにこそと思ひつゝおろかならずかよひ給ふ程に、おのづから御ぐしなどもめやすくなりもていく、おやえうひが〳〵しきことによの人も思きこえたり、おなじきわかきんだちといへ共、これは村上の四宮源帥殿の御むすめのはらなれば、いとものきよくものし給を、おやにくにこの殿、の給をぞかへす〴〵あやしき事に人きこゆめる、又くらべやの女御〇藤原尊子と聞えしには、母の藤三位いまの宣耀殿の御はらからのすりのかみ〇藤原通任をぞあはせ聞えためる、

下弘宗王等監護葬事、貞子者、右大臣贈従一位三守朝臣之女也、風容甚美、婉順天至、仁明天皇為儲貳、以選入宸宮、寵愛日隆、天皇踐祚之初、天長十年十一月授従四位下、承和六年正月進爵授従三位、嘉祥三年七月加正三位、先是誕育一皇子二皇女、皇子者第八成康親王是也、雖不登后位、而宮闈權勢无與、為燕私加愛、終始無衰焉、

〔日本紀略（三村上）〕天暦元年十月五日丙戌、女御藤原述子卒東三條第、（年十五）依疱瘡之間産生也、號弘徽殿女御、左大臣（〇實頼）女也、　十三日甲午、此夜葬弘徽殿女御、天皇詔贈従四位上、勅使左大辨朝綱朝臣、左近少將國紀等讀宣命文、

〔日本紀略（八花山）〕寛和元年七月十八日辛酉、未刻女御藤原忯子卒、大納言為光卿女也、懐孕之間、日來病惱天下哀之、件喪家、前播磨守藤原共政室町西、春日北宅、　廿二日乙丑、贈故女御忯子従四位上位記宣命等藏人式部少輔藤原惟成作之、

〔本朝世紀〕康和五年正月十六日丙申、今夜子刻女御有御産事、（皇子、五條北、高倉西、右少辨顯隆朝臣宅也、）一天之歡何事如之哉、　廿五日乙巳、上皇（〇白河）為令奉見皇子給、御幸于女御殿、（日者御于顯季朝臣高松宅也、）有勸賞、（正五位下藤通季、右兵衛佐）途路之間、世為壯觀而已、亥刻女御俄卒去、（春秋廿八、従四位下也、）一日之内、哀樂相變、視聽之處、莫不悲歎者歟、上皇忽又御幸、令奉迎皇子給畢、女御従四位上藤原朝臣苡子薨、女御者正二位行大納言兼陸奥出羽按察使藤原實季卿女、母前太宰大貳従三位藤原經平卿女也、承德二年十月廿九日初入内、十二月為女御、（〇堀河）康和元年正月、授従四位下、五年正月十六日誕第一皇子、其後經十箇日薨逝、二月三日贈従二位、殯殮之日也、薨時春秋廿八、　二月三日壬子、權中納言季仲、（雖當衰日、院宣參入、）依參議家政參入、被行故女御贈位事、（元従四位下、今贈従二位、）并廢朝事、（三ヶ日）無薨奏廢朝之條、去寛治二年九月、右大臣室従二位源隆子時例也、家政卿給宣命、前常陸介源經仲朝臣給位記、（依衰老、以外記給之、）各參向女御本家、（樋口町尻齋宮也）次被仰廢朝事、今夜被御葬送也、（鳥戸野南邊云々）

〔榮花物語 三十八 松の下枝〕四月〇延久五年廿九日、御ぐしおろさせ給〇後三條とのゝしる、〇中略つひに五月七日うせさせ給ぬ、みや〳〵女ゐんのおぼしめしまどはせ給ふさまかぎりなし、もの覺えさせたまはぬ御心にも、その日やがて一品宮〇聰子内親王女御殿〇源基子あまにならせ給ぬ、のちにぞ戒などもうけさせ給ける、〇中略あさましくあはれなりともおろかなり、わかくめでたき御ぐしどもをそがせ給て、いかにめでたくおはしますらん、かたちかへつれば四五十の人だに、わかくこそ見ゆれ、ましていかにおはしましけん、御いみのほどに堀河女御〇藤原昭子も成給ぬ、ほり河の院におこなひてものせさせ給もあはれなり、

〔風雅和歌集 十七 雜下〕後醍醐院かくれ給ける十月に、女御榮子〇二條道平女さまかへ侍ける戒師にて、その哀など申とて讀侍ける、

二品法親王慈道

おもひやれふかき涙の一しほも色にいでたるすみ染の袖

〔續日本後紀 八 仁明〕承和六年四月乙卯、女御從四位下藤原朝臣淨子卒、〇大日本史作澤子故紀伊守從五位下綱繼之女也、天皇納之誕三皇子一皇女也、〇宗康時康人康新子是也寵愛之隆、獨冠後宮、俄病而困篤、載之小車出自禁中、纔到里第便絕矣、天皇聞之哀悼、遣中使贈從三位也、左京大夫從四位下藤原朝臣文山、少納言從五位下藤原朝臣秋常等並監護喪事、

〇按ズルニ、此女御ハ、光孝天皇ノ御母タルヲ以テ、天皇即位ノ後、追尊シテ皇太后ト稱シ、墓ヲ改メテ山陵ト號シ、國忌齋ヲ置キ、十陵ニ列シ、守戶五戶ヲ置ク、蓋シ女御ニシテ皇太后ノ稱ヲ追尊スルモノ是ヲ始メトス、

〔三代實錄 九 清和〕貞觀六年八月三日丁巳、是日仁明天皇女御正三位藤原朝臣貞子薨、勅贈從一位、葬深草山陵兆域之內、仁明天皇在平昔賜顏色所許也、遣參議大藏卿正四位下源朝臣生、散位從四位

出家

使憲親布衣賜女子名字、書多子二字於檀紙一枚、余親書之、無禮紙、曰、非可奏此書、爲令知汝賜之、

○按ズルニ、多子、當時未ダ女御タラズト雖モ、已ニ入内セシヲ以テ、此叙位アリシナラン、

〔續史愚抄後二條〕正安四年二月一日丙寅、此日藤原朝臣忻子右大臣公孝女、一院御猶子、叙從三位、勅使藏人頭大藏卿經繼朝臣、參一院御所申入云、

〔近代御系譜〕今上御母、皇太后藤原夙子、九條從一位尚忠公女、○中略嘉永元年十二月七日叙從三位、同月十五日入內、十六同月十六日女御、同六年五月七日叙正三位、爲准三后、

〔文德實錄三〕仁壽元年二月丁卯、正三位藤原朝臣貞子出家爲尼、貞子者先皇○仁明之女御、風姿魁麗、言必典禮、宮掖之內仰其德行、先皇重之、寵數殊絕、雖有內愛、必加外敬、先皇崩後、哀慕追戀不肯飮食、形容毀削、臥頭之下、每旦有涕泣處、左右見之不堪悲感、遂爲先皇誓入大乘道、戒行薰修、無有遺類、道俗稱之、

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年十月廿九日甲戌、正二位藤原朝臣多美子薨、右大臣贈正一位良相朝臣少女、淸和太上天皇之女御也、性安詳、容色妍華、以婦德見稱、○中略天皇入道之日、出家爲尼、潔齋勤修、晏駕之後、收拾生前所賜御筆手書、作紙、以書寫法華經、設大齋會、恭敬供養、奉酬太上天皇不次恩德也、卽日受大乘戒、聞而聽者、莫不感歎、熱發奄薨、

〔日本紀略五冷泉〕康保五年七月十五日壬寅、今日先帝○村上女御從四位上莊子女王、幷更衣藤原祐姬等爲尼、

〔小右記〕天元五年四月九日庚午、傳聞昨夜二品女親王承香殿女御○一條女御尊子不使人知、密親切髮云云、或說云、邪氣之所致者、又云、年來本意者、宮人秘隱不云實誠、早朝義懷朝臣參入、令奏此由云云、又云、是非多切、唯額髮許云云、頗似秘藏詞、

〔日本紀略後一條十三〕萬壽三年十二月十八日庚寅、前女御藤原義子○一條女御落髮、

(位取)童女出來行酒、(銚子提等之類)爾後給御返事授祿、(后宮祿者、下地再拜、自餘無拜、)隨仰歸參、(御返事祿等入車)陣中之間、御返事令持小舍人立後、祿物令持從者在後、於昇殿之所自取御返事以祿懸肱參上、(祿落置便所、若參上御座方、可置年中行事障子邊、)(參朝于飯方者、置巴繪馬障子邊、令通見自大盤所、)獻御返事了退去而已、此儀初度御書、若年首事也、當時無酒祿等、但陣中御書自持、從殿々之上往反、有祿者即以自持、不具小舍人、凡御書使路頭雖逢大臣不下車云々、而今樣令隱御書猶下云々、

〔柱史抄上〕位記

女御

中務、德敎已備、芳徽久彰、婦人之所儀、彤管之所記、宜增榮爵式照恩輝、可依前件主者施行、

〔續日本後紀十四仁明〕承和十一年正月壬辰、皇太子(○文德)入覲於淸涼殿、拜舞給、被授所生女御藤原氏(○順子)從三位也、

〔文德實錄三〕仁壽元年九月甲戌、散事從四位下百濟王貴命卒、(○中略)嵯峨太上天皇御宇之時、引爲女御、(○中略)弘仁十年正月叙從五位上、十月十一日叙從四位下、

〔三代實錄一淸和〕天安二年十一月七日甲子、是日進文德天皇女御從三位藤原朝臣古子階、加從一位、

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年十月廿九日甲戌、正二位藤原朝臣多美子薨、(○中略)貞觀六年春正月朔日、天皇(○淸和)加元服、此夕以選入後宮、有專房之寵、少頃爲女御、是年秋進從三位、九年加正三位、元慶元年授從二位、七年至正二位、德行甚高、爲中表所依懷焉、

〔權記〕長保二年八月廿日甲子、勅云、女御元子、叙從三位事仰左大臣、(右大臣〈藤原顯光〉息女、切々有被申也、本位正五位下、超越不次、非常又非常之事也)

〔台記別記〕久安四年八月九日甲子、今日女子多子(年九)叙從三位、(本無位)自昨日修除家中、(大炊御門北、高倉東方一町亭、右大將同居、)敷砂、今朝余出巡檢、午刻右大將(○實能)來、余示依衆議將用多字之由、對曰、諸、未刻範家來、(先月招之

女御〇後桃園后近衛維子入内ニ付獻上物

禁裏江

御大刀

御馬代黃金三枚宛

女御江

白銀貳拾枚

松平加賀守〇以下人名略

當十二月上旬女御入内ニ付、爲御祝儀使者を以右之通可有獻上候、使者衣服勤方日限等者、於京都土井大炊頭江承合候樣可被申付候、

右之通可被相達候

十月

〔天保集成絲綸錄二〕文化十四丑年十一月

女御〇仁孝后鷹司繫子入内ニ付、禁裏女御江諸家より獻上物使者、來年正月十六日十七日頃迄ニ、不殘京著物揃候樣可致旨可被相達候、

大目付江

十一月

御書使

〔侍中群要八〕御書使事

賜御書之後、整置日記辛櫃上、以扇敷下、若殿上無人、令主殿司守、或置所御膳棚上、以小舍人令預之、於直廬理鬢髮整衣服、畢取御書退出、陣中之間、令持小舍人、小舍人令着表衣也、前行至門乘車、若無自車乘在門之車、令相觸車主、又路間以御書指夾車前榫立穴也、參其所於中門邊自取御書、參上本家儲座、召之勅使進就簾前、以膝可懸簾端故實也、獻入御書、頃之女房自簾中出盃、肴物可然之五

白銀貳十枚宛　　松平加賀守〇以下十二人略

禁裏江

御大刀

御馬代黄金貳枚宛

女御江

白銀拾枚宛　　松平讃岐守〇以下九人略

禁裏江

御大刀

御馬代黄金壹枚宛

女御江

白銀拾枚宛　　松平左京大夫〇以下五人略

來月下旬女御入內ニ付、爲御祝儀以使者右之通可有獻上候、使者衣服勤方日限等者、於京都酒井讃岐守江承合候樣可被申付候、

右之通可被相達候

十月　　大目付江

〔天明集成絲綸錄〕明和九辰年十月

松平新太郎　松平大隅守　松平相模守　松平安藝守
松平大膳大夫　細川越中守　松平右衛門佐　松平丹後守
藤堂和泉守　松平龜千代
右者禁裏江御大刀御馬代黃金三枚ツヽ、女御江白銀二拾枚ツヽ、
松平越後守　松平讃岐守　保科筑前守　酒井雅樂頭
右者禁裏江御大刀御馬代黃金二枚ツヽ、女御江白銀十枚ツヽ、女院御所江同斷、
佐竹修理大夫　森內記　松平淡路守　丹羽左京大夫
松平出羽守　松平大和守　本多內記　松平下總守
松平土佐守　有馬中務大輔　蜂須賀千松　上杉喜平次
右者禁裏江御大刀御馬代黃金三枚ツヽ、女御江白銀十枚ツヽ
松平但馬守　伊達遠江守　宗對馬守　織田山城守
右者禁裏江御大刀御馬代黃金一枚ツヽ、女御江白銀十枚ツヽ、
阿部豐後守　稻葉美濃守　久世大和守　土屋但馬守
板倉內膳正　牧野佐渡守　松平美作守
右者禁裏江御大刀御馬代黃金一枚ツヽ、女御江白銀十枚ツヽ、女院御所江同斷、
〔寶曆集成絲綸錄〕二寶曆五亥年十月、女御〇桃園后一條富子入內ニ付獻上物、
禁裏江
御大刀
御馬代黃金三枚宛
女御江

一銜重日別廿箇
十日隱岐　十一日佐渡　十二日飛驒
一露顯日饗
駿河
一內臺盤所垸飯
安藝

參賀進獻

〔台德院殿御實紀五十二〕元和六年六月十八日、都にてはけふ女御〇後水尾后德川和子入內し給ふ、〇中略廿二日、內にてはけふより廿四日迄、攝家淸華の人々、あるは法親王たち女御の新殿へ參りあひ、おもひおもひに御祝ひのもの奉りことぶかる、權中納言の局萬にうけはり沙汰す、廿五日、武家の輩とりどり御祝物さゝぐ、酒井雅樂頭忠世、土井大炊頭利勝はじめ、內にも女御の御方にもささげものすれば、兩傳奏御使して、この輩にも御大刀を給はり、女御の御方よりも金に御衣そへてかづけられ、女院よりも時服下さる、

〔享保集成絲綸錄三〕寬文九酉年閏十月
一來月廿一日、女御〇靈元后鷹司房子御入內ニ付而、爲御祝儀以使者此書立之面々可被差上之旨、自老中被相觸之、所謂、
尾張中納言殿〇光義　紀伊中納言殿〇光貞　甲府宰相殿〇綱重　館林宰相殿〇綱吉
水戶宰相殿〇光圀　松平加賀守〇綱利　松平越前守〇光通　井伊掃部頭〇直隆
右者禁裏江御大刀御馬代黃金三枚ツヽ、女御江白銀貳拾枚ツヽ、女院御所江同斷、
尾張中將殿　水戶少將殿
右者禁裏江御大刀御馬代黃金中將殿二枚、少將殿一枚、女御江白銀十枚ツヽ、

一綾掛十二重
伊豫　播磨　因幡　土佐　越中
伯耆
已上各二重
一平絹褂廿六重
越後　遠江
已上各三重
駿河　能登　出雲　甲斐　相模
讃岐　備中　長門　美作　常陸
已上各二重
一濃袴三十六腰
上總　下總　信濃　周防　安房
伊豆　淡路　攝津　河內　和泉
紀伊　出羽
已上各三腰
一打衣四領
上野　下野
已上各二領
一饗
十日播磨　十一日伊豫　十二日近江

入內用途

〔實久卿記〕嘉永元年十二月十五日乙卯、此日女御〈○九條夙子〉入內也、巳刻艶書使右中將實德朝臣參、九條亭、酉剋許入內也、先出車一兩、次殿上人實城、政季、隆晃、宣諭、隆賢、親賀、在光等朝臣、藤原助胤、次諸大夫六人、次車〈青糸毛、車副八人、〉次後騎俊克朝臣、次公卿左大臣、〈尙〉日野大納言、〈隆〉九條大納言、〈幸〉姉小路中納言、〈公〉新菅中納言、〈聰〉左大辨宰相、〈愛〉新右三位中將〈師〉等乘車扈從、亥剋許出御于夜御殿、

〔公卿補任〈孝明〉〕弘化五年〈○嘉永元年〉十二月七日女叙位〈藤原夙子、從三位、〉宣下、〈消息〉上卿姉小路中納言、奉行俊克朝臣、〈○中略〉十五日、從三位藤原夙子入內、同日輦車〈從三位藤原夙子〉宣下等、奉行俊克朝臣、十六日女御〈從三位藤原夙子〉宣下、〈消息〉上卿姉小路中納言、辨光愛、奉行俊克朝臣、

〔台記別記〕久安五年十月廿五日癸酉、充催入內諸國所課、

諸國所課、久安五年十月廿五日催之、

一差筵
　伊豫　讃岐　備中　備後　安藝
　周防　美作
　　已上各六枚
一小筵十枚
　若狹
一女裝束十三具〈織物唐衣裳濃裳〉
　美濃　尾張　但馬　加賀　參河
　武藏
　　已上各二具
　若狹一具

殿の御規式は、おぼろげならぬ御事なればしるすにおよばず、御對面は時を點じて、亥の二ッ計
とぞきこえける、女御の御方より御祝の奉りもの、

御さうぞくのぐ　夏冬
御呉服　百
銀子

清涼殿よりつねの御殿へあがりて、御式三獻の後叡覽に備へ奉らるとぞ、三五の日までとりぞ
りの御ことぶき、あげてかぞふべからず、〇下略

〔百一錄〕元祿九年十月朔日、有栖川宮〇幸仁親王姬君輝宮御方〇幸子爲女御、〇東山女御可有入內之由議定、
十年二月廿五日、有栖川宮息女輝宮御方、爲女御代入內、巳刻事了、出車一兩檳榔牛駕之、次前驅七
輩、扈從五輩計供奉、奉行今城黃門、御車兩牛駕之、

〔百一錄〕享保元年十一月十三日、午刻女御〇中御門女御入內、近衞前攝政〇家熙息女〇尙子十七歲、扈從廣橋
亞相、廣橋黃門、水無瀨相公、小倉相公四人也、各轅自後令持、前驅十人、日野西辨、七條少將、差次藏錦
小路也、此外云々、　十五日、入內、〇中略諸家中御大刀計獻上于禁裏、女御御方由緒有之輩御肴獻上、
十八日、始入御于女御御方、　廿一日、松平出羽守、中條對馬守參內、參院、女御入內御使也、布衣白
張素襖十餘輩出羽守召具、近來供奉之不見及珍奇也、三家使者今日勤仕、　廿五日、老中國守十萬
石以上使者御大刀馬代獻上、但若老中者不獻之、朽木間部等使者參上也、爲侍從以上也、　廿六日、
上使御暇被仰出、

〔一條家系圖〕吉忠――女子
永姬、諱舍子、享保十八年九月廿八日東宮〇櫻町爲御息所、享保廿年十一月三日爲女御、元文元年
十一月十五日入內、同五年五月廿七日敍從三位、准后宣下、上卿坊城大納言俊將〇下略

御匂唐櫃　一荷　　御呉服唐櫃　十荷

天皇御裝束唐櫃　　右同御呉服唐櫃

右各唐織縫御紋之覆掛之

綺羅をみがける御道具、目をおどろかす計也、此持人數千人、おさぎ染の素袍を著す、執事の陪臣是を奉行す、其外の財物雜具、下つかたの女房前後の日にさし遣されて、穩便の御沙汰と云々、かくてより月卿雲客諸司格勤の輩、其程々に供奉のさうぞくを刷ひ、巳の時ばかりに二條の御所へ御むかひにぞ參られける、各殿中へ入給ひ、しばしが程ながら位次に隨ひ座につき給ひ、あるじまうけをとり〳〵に、盃のめぐりも過ければ、時もやう〳〵至りぬと行啓をすゝめ奉る、かずかずの御いはひ、どりわきよろづの作法をはらひの輪とて、へんばいをふませらるゝ事までおこなはれ、出御も氣色たちぬれば、日亭午におよび、供奉の行列次第にまかせて、われも〳〵と出立給ふ、〇中略行列の次第をみださず、前後を圍めぐらし奉り、花軒香車をとゞろかし、巍々蕩々として綺羅天にかゞやき、威勢地をうごかすよそほひ、見物の貴賤渴仰の頭を傾け、感情の聲をのめり、かくて大内に入らせ給ふより、扈從の面々そのさま〳〵に潛り、新造の御所へ御車をめぐらさる、武家の隨身は唐どの御門の左右をわけて床机につらなり、御壺の召次は中門の間の白洲に蹲踞す、御車よせまで廣橋前内府三條の亞相出むかはれ、帷幄をひきはへ御車を入奉る、御供の車はつぎ〳〵に軒の外よりおり給ふ、おの〳〵五つぎぬに緋のはかまを著し、かんざしをかうぶり、つま紅のあふぎをかざし、靑女房に裙裳をひかせてぞ入られける、關白殿近衞殿一條殿をはじめ奉り、公卿の人々中門のみぎりに揖してひかへ給ふ、諸司御隨身のやからに至るまで其ゑりへに伺公す、伶倫はおこたらず千秋の樂を奏し其側に候せり、御車おさまりてより、內府亞相庭上へおり、三公へ式對ありてともに殿中へ入給へば、參勤の人々みな退き出侍りぬ、內

道をつくり、辻がための警衛、ものゝふの陪臣に仰て、所々をわかちあてらる、凡此度の大營には天が下の大小名をもめしあつめてこそ行はせ給べかりしを、もとよりも倹約を用ひ奢侈をいましめ、萬民のつひえをおぼしやらせ給ひしかば、かねて國々よりの參勤はとゞめ給ひ、たゞ御重代の大名、都近き分國の人々計ぞ召れける、前二三日の程より、見物の輩思ひ〳〵の支度をかまへ、あるひは堀川のほとりに棧敷をかきならべ、あるひはかど〳〵の蔀格子さし離ちて、錦繡のとばり繪かけるすだれをかけ、晴をわたして飾あへり、洛中の貴賤、遠境の道俗、十七日の暮かけて夜もすがら行つどひ、家居にもれし輩は、こゝの辻かしこの軒の下端まで、尺地もあらず充滿ちて、東雲の空も明行ば、警固の衛士辻々をかため、二條の御所より郁芳門の砌まで、十餘町のほど大路の左右につらなり、往還をたゞし、非常をいましむ、朝まだきよりそゝぎし雨もやゝ晴て、辰の一てむより御物の具をぞ送られけり、

長櫃	百六拾掉	四方行器	十荷
御屛風箱	三十雙	御簏箱	一對
御几帳箱	二荷	御幕箱	三
御長疊箱	一	御丸行器	十荷
御小行器	五荷	御膳行器	二荷
御辨當	五荷	御葛籠	十荷
御挾箱	一荷	御擔	二十荷
御長櫃	百掉	御琴箱	三
廿一代集箱	一	御黑棚	一
御厨子棚	一	御貝桶	一荷

つねの御所にて三こん參る、又よこんはうそう、二こんかべに御ひら、三こんふな、御はいせんすけ殿ながはしいよ殿、女御はいせん、女中御とをりあり、そのゝち御ゆどのゝ上御たき火にて御はんじゆくもしたぶ、日しく也、めでたしく、

○按ズルニ、女御入內ノ儀ハ、南北朝ノ頃ヨリ久シク廢絶セシガ、是ニ至リテ、豐臣秀吉之ヲ再興セシモノナリ、

〔視聽草五集七〕女御入內之記

こゝに大樹秀忠〇德川すゑの御姬君、御年比に成給しより、たゞならぬ御瑞相ありて、御かしづきもわさからぬおはしけり、女御にそなはらせ給ふべきにさだまりぬれば、辭し給ふべきにもあらず、あらかじめ御まうけし給ひ、元和六のとし五月はじめの八日に、江戶の柳營を出御ならせ給ふ、執事酒井雅樂頭忠世、土井大炊頭利勝、ならびに松平右衞門大夫正久以下の侍あまた扈從せられ、前後の警蹕瑤輿侍女の乘物、御調度の運送、道すがらの行粧簇次を正し、事ゆへなう同じき後の八日の日都へいらせ給ふ、見物の貴賤ちまたをさへぎり、阡陌の紅塵雲に連る、二條の御所に移らせ給ふべければ、內との御使もたび重りまして諸家の雜參りつどへり、かくて御入內の式法さまぐにとりつくのはせ給ふ、天文曆の博士に仰せて其良辰をえらばせ、みな月十八日にぞ定らる、先は國母の女院にうつらせ給ふべき宣旨ありて、舊例にもいやまし御儀式ことごとしう催され、公卿大夫に至るまで、供奉のよそほひ華麗を盡し、六月二日に鳳輦をめぐらし三つの位にあがらせ給ふ、めでたかりし次第也、同じき十二日には、關白殿、近衞殿、八條殿おのく二條の御前へ渡御ありて、忠世利勝以下の侍臣等をめされて、其事の法要をゆだねてのたまはせきかせらる、殊には御調度の具そこく高覽に備ふ、おほみきなど奉り、御土器とりぐにして還御ならせ給ふ、やうく其日も近づきにければ、二條の御所より大內までのあひだ、行啓の

戸北、拔倚之簡在南、辛櫃在北、又同朝臣書長仰書、次政所吉書、（入宮）知家事主税允佐伯貞俊（年預）覽親隆朝臣、親隆朝臣見了覽余、次就初所付女房覽之、如名簿返給、下政所成返抄、加判之後、親隆朝臣向侍所、召仰所司、（無仰書、）次下長仰書於所司親頼、次侍所吉書、職事頼方書之、下所司親頼、（不覽余及女御、）次家司（親隆朝臣同著）職事侍等著臺盤、（先是備饌於臺盤、交居合子飯、菓、非職諸大夫不著臺盤云々、）食後書著到、（一通家司、一通職事侍等、）無官侍先例依蔭定座次、今度勘余家上日多少定之、紀久光未參、仍在最末、源宗澄少上日、而千覺加憐殊甚、仍不依上日次爲第二臈、是依千覺之功勞也、衆庶勿愛、

〔玉海〕承安元年十二月十四日甲寅、此日院姬君（○後白河養子、平清盛女德子、）入内也、（○中略）廿六日丙寅、此日女御宣旨下、露顯日也、下官不出仕、仍不能記、主上（○高倉）渡御、御共人攝政、左大臣、内大臣、平大納言、右衞門督、權中納言時忠等也、（永久五人、今度六人、）

〔百練抄（十一土御門）〕元久二年三月一日、有宣下、以無位藤原麗子叙從三位、四月七日、女御（○麗子）有入内事、十三日、今日女御有露顯事、主上渡御女御御方、又被下女御宣旨、政所幷侍始、

〔百練抄（十四四條）〕仁治二年十二月一日甲寅、被定女御入内事、（御名字彥子）被叙從三位事、十三日丙寅、今夜女御入内也、（故攝政（藤原實經）御女、母儀入道相國女、左府爲猶子、行年十四、）

〔續史愚抄（後醍醐）〕元弘三年十二月廿八日、此日左大臣（道平、前關白、）女藤原朝臣榮子、（母從三位藤原朝臣隆子、）爲女御入内、以安福殿爲曹子、

〔尊卑分脈（藤原）〕

（二條）
○道平――良基
　　　└女子（後醍醐院女御榮子、安福殿祗候、）

〔御湯殿の上の日記〕天正十四年十二月十六日、このへどのひめぎみ、（○近衞前久女前子）くわんぱく殿（○豐臣秀吉）ようしにし參られて、女御（○後陽成后）に御參り、御たる十かう十か參る、御くしあげ御さたありて、

執御劔、女房授之、經本路還御、成雅朝臣前行、余以下候御後、於晝御座範家取御挿鞋、次女御家司重方、祿行事相具祿辛櫃五合、退紅、下部十人舁之、合別二人、參內御方二棟廊東面妻戶下、大內儀參高遣戶下、而今隨便宜耳、須祿、色目在奧敎長卿在堂上、二棟廊行事、先御乳母祿、公親朝臣公保、舁裝束置鬼間長押上、他四位取絹裹祿置同所、了兼長卿搢笏、依不搢得、公能卿搢之、取絹裹祿置臺盤所入自臺盤所下障子歸出、復取絹裹祿置臺盤所、裝束甚重不能獨持、又無可相舁之人、仍不取之、扱笏退出、典侍掌侍祿、殿上四位已下取之、自臺盤所東面簾奉入之、或置簾前簀子、典侍祿四五位取之、掌侍祿四五位取之、六位可取由臨期余仰之、命婦藏人得選祿、女官取置之鬼間長押下障子外、對東廂也訖使女官獻垸飯於臺盤所、饗行事盛憲、立二棟廊東面妻戶下、行其事、自臺盤所東面獻之、其路或經二棟廊內、或經同廊北簀子、兩道不可然、須用一道、此間下家司貞俊須女官祿、下家司取之、非藏人別賜之、以總數爲一結、賜其所女官貫首者、此間諠譁殊甚、逸興晴催、余向二棟廊今麻呂同之見之、御服所命婦望祿懇切、雖無先例、余仰行事賜之、下家司取之、以殿上人祿用殘充之、白褂一重、濃袴一腰也、爲令衆心歡也、得選已上祿委女官掠取、仍賜祿法於藏人邦綱、仰慥可須之由、而勾當內侍常陸、使女官取入祿於簾中須之、仍邦綱付祿法於彼內侍、內侍賜祿、了敎長卿退出、余參御前、今麻呂同之即上、御冠御衣紅生袴、不著直衣、渡御女御廬、此間及暗、今麻呂把脂燭前行、余候御後、御廂座、女御服日來所著之白衣候御前、殿上人藏人等下格子、依上御也女房乍著打出衣頗退入、殿上上簾、所出之衣猶在之、次上覽沃懸地調度、余所申行也此間女房中將取燭盃候御前、著打出唐衣也頃之還御、余後之其後撤沃懸地調度、立前齋院調度、與母屋調度一具也、明日使盛憲返奉沃懸地調度於宇治、○○○○余歸女御殿上、先是饗膳撤此間親隆朝臣參入、依非殿上主上渡御間不參入、次進簡及辛櫃於臺盤所、被下女御宣旨、復勘可造兩所簡、侍所、臺盤所、之日時、不覽余及女御令內匠寮造之、召木工寮板令盛經公基等書簡及袋銘、臺盤所簡、式部大夫盛經書之、侍所簡、同公基書之、袋銘兩方俱盛經書之、待賢門院簡、盛經書之、于今猶存、仍先催盛經而申力疲目暗不能書二簡之由、仍副公基書、二人書之不知先例、然而非可忌憚之故也、先自臺盤所注賜女房姓名及次第、其次第依□□分上中下臈同臈中依隆也、任注文寫簡、以注文納朱漆辛櫃、副簡、入袋進臺盤所、辛櫃傍立簡、臺盤上藤東方倚之、簡在西、辛櫃在東、長滿義名簿未進、仍忽令人書之無官名簿盛筥、謂覽筥、後效之、親隆朝臣先覽余、見訖返給、親隆就殿上上簾、付女房覽之、女房覽女御返給、親隆朝臣取之退下之間、余仰侍長二人、源滿義、藤仲賴、所司二人、五位前內藏助爲經、六位治部丞中原親賴、親隆朝臣名簿與書仰書、納朱漆辛櫃副簡、入袋置侍所、臺盤上妻

次□但以多子二字音仰之、余訓仰之、上達部未参集、相待之間時刻推移、及未刻参集、即相率列立射場、（立蔀内、家成卿遅参、待被□遅）（射場、）上達部一列（西上北面、余、右衛門督家成卿、右兵衛督公能卿、權中納言忠基卿、参議公隆卿、右宰相中将教長卿、二位中将兼長卿、上東門院女御宣旨之日、□忠□等朝立列時、公卿相）（不立之、然則同姓人、雖非親族皆立、他姓人、雖親族不立、自明、仍家成卿依余立之、参議右大辨資信朝臣雖可立拜、依外記遅参、仍不立之、勘北山備忘、補女御事、仰辨宣作宣旨、内外戚公卿已下参履、臣云）（外戚、女御母同姓人可立拜列歟、而上東門院母儀源氏也、彼時源氏不立拜列、與北山抄不同、今用上東門院例耳、）殿上人一列（西上北面、在上達部後、頭中将公通朝臣、右少将公親朝臣、同公保、侍從師長、右兵衛佐實定、殿上人者令立近族、不盡同姓也、）次余招公通朝臣、即出列來前、使作朝臣奏候由、公通朝臣昇自小板敷、（先解劔撤笏後昇）進御所奏之退下、（於小板敷下帶劔把笏）仰曰、聞食ツト宣フ、余已下同音稱唯、公通朝臣復列之後、倶拜舞、了余昇自小板敷参御前、公能卿候殿上、他卿皆向女御宿廬著饗座、次公通朝臣應召参上、奉仕御装束、（御冠直衣紅打衣白御衣二領紅單張袴、可用生御袴、張袴失也、）出御暫御晝御座邊、此間殿上□四位已下巻晝御座御簾、（今日御物忌、仍垂御簾、依渡御事有議被破之、若然今朝可巻之、今始巻之可謂緩怠、）藏人等巻渡殿南面御簾、次左中将成雅朝臣（帶劔把笏）不執書御座御劔参入、藏人右少辨範家奉御挿鞋、次經對西簀子渡殿南簀子、人自同渡殿中間南面格子出自同中間北面南妻戸、經同小簀子女御廬舎東簀子等、（余、公能卿、公通朝臣、範家、令座□□□□等在御共、成雅朝臣前行、）人自帳間（女房不出衣）□簾（余褰簾範家取挿鞋、）御廂座、成雅朝臣付御劔於女房堀川、（忠基朝女、擇英□□定仰也、）堀川持之、（内方手持御劔□之、女房著座所）（出之厚衣、）余自同簀子北行著端座、公能卿公通朝臣範家等、經東舎西簀子渡打板著座、（□家不著座、先是上達部立座、立拜）（之人々也、此外右大辨資信朝臣來加、殿上人唯公通朝臣、公親朝臣、依主上渡御提劔笏著座、）次一献頭中将公通朝臣勸盃、藏人右近将監爲頼取瓶、二献右宰相中将教長卿勸盃、俊光（殿上人）取瓶、此間（二献後）右大臣（實行、有主上渡御恩從之、雖無□遅参云々、）經東舎西簀子渡打板經座末著奥座、三献藤宰相公隆卿勸盃、治部大輔雅頼（殿上人）取瓶居汁物、（余手長藏人右少辨範家、右大臣手長右馬權頭顯定、納言宰相手長右近少将公保、依主上渡御殿上人役之、役送告六位須五位次也、手長役送者皆撤劔笏、）四献（自此献用土器）新中納言忠基卿勸盃、公保（殿上人）取瓶、（余譲右府令取盃、右府數辭、余強之、右府遂取之、）五献右兵衛督公能卿勸盃、右馬權頭顯定（殿上人）取瓶、羞著薯蕷粥、（手長如前）不待居了食之、次賜殿上人祿、（藏人取之、不著座者皆賜之、藏人祿請大夫作立地賜之、□人不□、無公卿祿、）次余、右大臣公能卿起座、余、右大臣候御在所東簀子、公能卿渡打板經東舎西簀子参會、上出自初人間、（余褰簾）範家獻御挿鞋、成雅朝臣

入來上達部
右大將實能　右兵衞督公能　新中納言忠基　堀川宰相中將經定　右宰相中將教長　三位
中將兼長　右大辨資信
殿上人
光忠朝臣　公親朝臣　顯定　成隆　公保　能忠　教良　師長

〔台記別記〕久安六年正月十九日丁酉、早旦納插鞋於余辛櫃、先取出心裏眼、夫人取插鞋授余、放本鳥著璃衣、納辛櫃、日來間他女房觸手、無有其憚、次女房筑前雖有密夫、早離別、密夫者、謂不以婚禮嫁、取納燈盃之櫃日來所納之櫃也、所生著炭之火盛土器、今朝加納之、備自滅也、賜敦任、敦任青鈍指貫賜知家事主稅允貞俊、布衣、貞俊妻早夭、然而灯使不可強忌、貞俊先向進物所令生著灯於炭、次持向大炊殿姉小路南坊東令生著燈於炭、歸參後、使女房少納言取出餅筥、自饗御所二階廚子取出之、余取之賜敦任、敦任青鈍指貫向西築垣下自女御廬舍當西方、是生氣方也、令埋之、貞俊同□□所□所舍人取鋤、掘地一尺六寸一分、覆土、畢持參宮盃箸箸臺等悉在中付女房、此間備饗膳於殿上、女房出袖如三箇日、巳刻許著束帶、吉服在三位晝御座邊、催行雜事、此間三位整衣裳蘇芳織物衣八領、青單、萌黃二重織物五重、表著濃打衣、赤色織物五重、唐衣、白羅裳、濃袴、是入內夜皇太后所賜之裝束也、著小褂、否頗有所疑、寬治五年入內御曆云、使能遠獻□御衣、色々御衣、紅打衣、萌木表著、葡萄染小褂、赤色唐衣、地摺裳云、云、如此文者似重著小褂唐衣、先日高陽院傳四條大后語曰、著唐衣不著小褂、著小褂不著唐衣、是例也、今依此旨案御曆文、唯記所獻、不記所著、無二物俱著時之故、不用小褂歟、仍今日不著小褂、出居母屋座、母儀紅梅□領、青單、紅打衣、梅表、著紅張袴、不著裳唐衣小褂、竊居帳北疊爲伺龍顏也、外祖母右大將著厚衣、室、在作合間細所爲竊望龍顏也、頗開遣戶、南一間、近江越後候二間、大納言堀川候三間、候間人不候四間、右衞督中將候殿上之簾中、大夫少納言候、已上著打出厚衣、童女二人著裝束候同間、件間北遣戶開之、爲令童女見上也、洞院候廂南二間南邊、衣色同打出、但綿薄、土佐候廂南四間北邊、用私衣、依非女房員數也、依爲內女房用唐衣、鏡臺立硯南、頗西寄、鏡乾面、是稱閑所傳之秘說也、備主上自顧面也、脇息副二尺几帳、以己亥乙未爲妻置之、余未知此事、而今淸職申曰、若如手□置脇息、主人入御時既無御路、仍如此改置、是文雅職法師所傳也、所言有理、仍從其言、此間所司敷筵道、東對西簀子御座間以北、渡殿南簀子中央間以東、簀子中央間以西、女御廬舍東簀子帳間以南敷之、渡殿不敷之、次著陣、□□于時午刻也、卿相兩三來著、即令敷膝突、于時陣官不候、仍用兵時□□、次公通朝臣來仰曰、從三位藤原朝臣多子爲女御者、余召右少辨範家仰之、其詞

口記、三獻右宰相中將敦長卿勸盃、（儀如前、少納言能忠取瓶、）勅使取盃目三位中將、中將揖之、邦綱飲了進居卿座前、取瓶子者進盛酒、邦綱即傳中將、此間敦長卿起出戸、經簀子著圓座、邦綱還座、（傳中將了歸卿）中將飲了置盃於座邊、羞肴物於敦長卿同前、四獻（此獻已後用土器、）右宰相中將經定卿勸盃、（儀如前、右近少將公保取瓶、）了著座同前、今度邦綱轉敦長卿、敦長卿轉兼長卿、羞肴物於經定卿如前、五獻新中納言忠基卿勸盃、（儀如前、少納言成隆取瓶、）了著座同前、今度邦綱轉經定卿已下流巡、羞肴物於忠基卿、六獻右兵衞督公能卿勸盃、（儀如前、左馬懷頭顯定取瓶、）畢著座同前、今度邦綱轉忠基卿已下流巡、羞肴物於公能卿如前、七獻右大將實能（直衣薄色堅文織物指貫、自去年不出仕、今日節會又不參、）勸盃、（儀如前、散位師長取瓶、爲尊大將也、）直歸本座、今度勅使轉於盃公能卿已下流巡、次女房（近江）取祿出之、（女裝束、重方、從蓬萊盤所、）自南袖間出之、（出衣二具、仍有兩袖也、無返事、）使取之、（左肩懸之）降自渡殿南階、（不著沓）再拜（此間不還座、）相歸參、次上達部起座（不復本座、）立中門外、余降自渡殿南階、於門下乘車參內、公卿及殿上人連車、于時午四刻許也、須諸大夫撤物座等、余忩參內、（奉仕內辨、相具兼長卿及師長今麻呂、）諸大夫多前驅、仍諸司官人撤之云々、御書使藏座後、召小舍人於中門南命設紫端帖、羞肴物、（周濟惟机、諸司官人役之、）次勸盃酒、（三獻外記大夫三人、國中忠光著束帶勸之、諸司官人取瓶子、）次賜祿（六丈絹二疋、外記大夫疊袷取之、）事了歸亭、時於門外初賜御書、六禮中當納幣、（納幣儀禮疏第四、）見婚禮於焉成、自此始尊敬之故、不得乘車出入家門、謁三位必整衣裳、（今朝未賜御書之前、乍放本島謂之、此事非斟前隆、今案儀禮意所爲也、）近代唯當日有勅使、兼日無此事、而中古以往多有此事、就中今度用上東門院例、彼例前四个日使藏人賜御書、依彼例七日可使藏人賜御書之由先日申大相府、上古婦人將嫁必笄、而勘上東門院例御堂御記無此事、仍今度無之、豫所議節會後可遣御書、而今日口口節會後自內裏退出、皇居仍節會前有此事、是大相府氣色也、御書不擇吉時、無日時勘文、但陰陽師擇申吉日、今日加持僧不參（依御書也）遣三位（子）〇多衣命加持著之、但不動法尙在家中（中門南廊）僧不出、

今日無上達部殿上人諸大夫饗所々敷莚、上達部座後、及上下立屛風、（事具十日記）寢殿簾中調度未立、上達部座障子可張絹、今日猶爲唐紙不可然、（九日張絹）

陰陽師在憲奉親參入

可有沙汰事

日次事正月十九日壬寅

御所事大炊御門高倉家

御祈事神吉佛吉在別紙

〔台記別記〕久安六年正月七日乙酉、今朝授入內次第於右大將實能卿、宰相中將敎長卿、尾張守親隆朝臣等、賜敎長卿者、爲令行事也、專行者親隆也、而先例如此大事、家司之外、授次第於親族上達部、令行事、仍所授也、大將依爲外祖授之、辰時上達部殿上人來會、用節會服、左馬權頭顯定著縫腋、不可然、先是寢殿南廂西向妻戸、女房出袖及裳、此間不近例出御、不可然、出有祿闕命、仍不出之、刻著束帶、吉服押笏紙著座、上達部座勅使暫遲々、仍偸使人問、答曰、頭中將參入之後、可賜御書之由有大相府仰、仍所遲々也、及午刻左衞門尉藤原邦綱、青色布帶野劔、不著絲鞋著淺沓、夜前邦綱來問裝束及作法、即授次第仰曰、裝束事雖輙仰、其故先仰著青色、而當節會日可用節會服歟、又御書節會前也、可用青色細劔事歟、又依節會著野劔布帶、可服青色歟、三說之間未能一决、傳案此事、有節會日著他服、候禁中之例者、宜用青色細劔、若無其例者、可尊節會日著野劔布帶服青色之例、若復無例者、唯著節會服不可服青色、後日余問邦綱曰、用野劔布帶青色何時例乎、答曰、節會日著細劔理不可然、節會日不著青色由無所見、因茲所爲也、更不尋知先例、來入自西門、四足立西中門、小舍人著布袴、盛御書於柳筥、持之前行追前、勅使立其後、此間余起座、居寢殿南廂、向妻戸簾中、右少將公親朝臣闕腋袍、螺鈿劔取笏、自中門廊東簀子謁之、不著沓歸昇居寢殿南庇西向妻戸前、申御書使參來由、即仰親隆朝臣令敷座、此間公親朝臣暫退去諸大夫敷勅使座於同妻戸前南邊、東西妻高麗一帖、上加東京錦茵帖、二人舁敷、茵一人敷之、次公親朝臣經初路、告可來此方由於勅使、勅使搢笏取御書、不取柳筥昇自中門廊東簀子、跪同妻戸簾前奉入御書、寢簾、女房江近傳取、自簾中出、余取之與大夫、大夫取之令見三位、拔笏退著座、不正一獻左少將光忠朝臣勸盃、敍位清基取瓶子、參院、已後同之、經寢殿西北廊南弘廂、寢殿西簀子等勸之、了退歸、件人本自不著殿上次諸大夫敷菅圓座五枚渡殿、東上、南面、第一圓座在勅使座間西柱下、二獻三位中將兼長卿、起座跪弘廂取盃、清則傳取授之、中務少輔教貞取瓶子、歷初路勸之、了出戸經簀子著最末圓座、次諸大夫肴物於勅使及卿、給折敷高坏、勅使卿各二本、菓子二坏、干物二盃、窪坏酢鹽醬盞、近例卿盞一本、而可盞二本由見延久三年隆

〔台記別記〕久安四年七月三日戊子、此日密々始行女子（原○藤原公能女藤原頼長養子多子）入内事、（以往事不記）祈禱於内出居、令尾張守親隆朝臣（布衣浅香奴袴）書之、先之大將（烏帽直衣）被來、因之著裝束、（立烏帽直衣）先書長保元年例、（上東門院入内）余讀御堂御記、令書之、以今度可從彼例故也、次書月日出立所祈事、次問吉日於陰陽師、（在憲參入）親申曰、正月十九日可也、但爲陽將日、勘例中宮安子（冷泉圓融二代母后）配村上、（親王時、天慶三年四月十九日甲寅）中宮賢子（堀川院母后、延久三年三月九日甲午、）配白河院（時太子）爲陽將日、鷹司殿配御堂（永延元年十二月十六日甲辰）爲陽將日、君臣已有吉例者、出立所、廼者所居大炊（北）高倉（東）第、不當禁忌方、（攝東三條、若小六條、若四條東洞院爲皇居云々、）

入内事

長保元年例（上東門院）

二月十九日癸巳著裳

同廿一日乙未叙從三位

即日左大臣參弓場奏慶賀

九月廿五日甲辰定入内事

十月廿五日甲戌渡御西京速理宅

同廿七日丙子自大内有御使

十一月一日庚辰入内

同二日辛巳御使參

同三日三位殿被免禁（鷹司殿）

同七日丙戌被下女御宣旨

同日主上始渡御女御御方

七月三日沙汰始（親隆朝臣執筆）

御使參南庇簾前令獻御書、次勸盃酒、一獻右少將顯雅朝臣、二獻左中將宗通朝臣、以上瓶子諸大夫 三獻右兵衛督、雅俊 四獻藤中納言、宗俊 五獻源大納言、師忠、以上瓶子殿上人々、自三獻居肴物、御使前二本、卿相前一本、折敷高坏、上達部不起座、肴物諸大夫役之、 次自簾中給御返事幷祿、女裝束一具、加綾細長唐衣一襲也、 頭辨退下、御書令持小舍人、祿物令持雜色、經本道歸參了、依例有御返事、 次殿下、右府、內府、中宮大夫、三位中將起座被參御所、爲被扈從御共也、次主上渡御、御直衣 豫南殿北庇供筵道、左中將宗通朝臣取御劍前行、侍臣扈從、次殿下令著本座給、□□人數此道參上 頭辨朝臣候座末、他殿上人不參著、一獻、殿下陪膳右少將有家朝臣、自餘役殿上五位六位奉仕、寬仁殿上五位數少、召加當時藏人五位四人、云々、近代多殿上人奉仕也、 次二獻、頭辨勸盃、藏人取瓶子、 次居汁、此間秉燭、主殿官人勤仕立明、 次三獻、上達部勤盃、 次祿殿上人給之、四位褂袴、五位褂、六位袴、上達部不給、永承五年延久三年例、次主上還御、人人扈從如初、侍臣供奉脂燭、次給女房祿、宰相中將、經實三位中將、忠三位侍從、能實右兵衛督、雅俊被傳取之、殿上五位六位取之、於鬼間奉上達部、件祿物入辛櫃、舁立殿上四戶邊□□沙汰支度也、次賜女官祿、色目在別紙、

〔殿曆〕永久五年十二月十二日、皇后宮行啓院、○白河 白河御所依腰結役也、裏書 申剋許、著束帶參院、依入內、○鳥羽女御藤原璋子 也、申了程從內有御使、四位少將忠宗書使也 其儀如常、勸盃、一獻權右中辨伊通、二獻右衛門督、三獻藤大納言經實、及秉燭東御堂泉御所方ニ自夜前皇后宮御坐爪、而著裳腰結料也、渡給此御所、此間余依仰參內、其間事不記、參內候御前、戌了程入內云々、不見仍不記、主上○鳥羽 入御夜大殿之後、參院退出、後聞入內之後、上達部有饗事云々、三獻云々、今夜衾役、民部卿 御ヒウカイダク人同、仍彼卿妻參內裏候云々、今夜民部著柳下襲如何、是心喪物也、可有憚歟、不知案內人如此不覺、

〔長秋記〕大治四年正月九日戊子、攝政大相國○藤原忠通 長女從三位聖子入內、○崇德 云々、 十五日甲午、別當新中納言、頭中將會合、話談之間及天明、多是公事沙汰也、撿非違使等云、燒亡奏可候歟、入內三ケ日無此事、而三箇日已過畢、但御露顯未候之間也如何、別當云、三箇日過畢可奏、又云、撿非違使等不存此旨、分散爲之如何、又仰且加催且隨候、雖兩三人可奏、必不指人數事也、 十六日乙未、今日女御宜旨下、又有御露顯事云々、

（男、邦宗等、已有主雅不從、侍中以賓朝臣文被字入、又近來不字牛入、）總御之後、入御自東中門、寄對代弘廂東橋、人御之後供御膳、（御臺六本、用銀器、）次女房御使參、（參河掌侍、給祿、女房儲之、女裝束一具、但可加細長者、）頭之昇御、（其道經南殿北庇、入自夜御殿東戸、）主上著御直衣、兼御帳中、云々、（著御御挿鞋、殿下同取給、以藏人永實進御直廬三ヶ夜有御殿所、次被納云々、又夜御殿燈付布脂燭、殿下結口了持參宮御方令付御燈、枚女房三ヶ夜可給大炊殿者、是審々事也、）北政所被供御被、先是上達部以下著膳、（殿下御隨身奉仕立明、）二獻并居汁、一度之後、殿下令起座給、了女房衛重、本宮廳官奉仕者、（三ヶ夜可口者、）又所々給屯食、召所司、每夜二十具也、御畫、（往古物、已廢紛失之間、無覺先例之人、仍爲後日記之、往設朱漆若上昔）（錄、四面有糸總、御簾染蘇芳、纈牡丹孔雀等、左右立障子、張紫絹、畫番繪、其內垂紫帷、前後有杆、其體如衣架、床下構少輪、擬車內敷疊茵等、擬御之時放障子、有繡下帷、不具摺、）上東門院御人內時、沃懸地御調度、四條宮入御之時被獻之、其後被納平等院、故中宮入御之時、又被立之、件調度二階上被立唾壺、其南被居泔坏、此由令尋申殿下之處、仰云、件調度依無火取、本自居唾壺也、於其火取者、必不可依其例者云々、　二十七日壬申、三夜御餅依厭對日不被供、往例不求日次云々、　二十八日辛未、參內、次依召參院、持參御位祿充文、御所燈、（三日不滅、）今日依爲復日、明後日可給大炊殿之由仰公俊朝臣了云々、　十一月一日乙酉、宮御方燈、今日給大炊殿、（渡殿夜以夜御殿燈移口、燈之穴也、）云々、　二日丙戌、今日午後殿下令參院給、次御參內、茲夜被供三夜餅、（去月二十七日當三夜、而道言依可忌厭對日之由、及今日、先例或不忌日次、）宮昇給之後被供之、民部卿（經信）被調獻、（銀盤三枚盛小餅、銀箸臺洲濱鶴一雙、翼上納紫檀地筥、筥如小硯筥、有織立鶴食松枝、并李島等螺鈿歟、）三位中將殿令持作宮給、殿下入自夜御殿東戸給、（明蓋）令供奉給、主上合眼餅三枚給、（三坏上各一枚、）次返給、被奉宮御方、被納二蓋御厨子云々、此事了、子剋余自內罷出了云々、　七日辛卯、今日主上可渡御宮御方、又可遣後朝御書者、殊被洒掃東對代東庇四ヶ間、（日來三ヶ間、今日又北面、）儲饗饌、（給折敷高坏十九前、）頗以絕席鋪紫緣二枚、居殿上人饗、（机物四納、以上近江守爲家朝臣勤仕也、）御所南面五ヶ間、（除晝御座、）并對代南面一間、東面三ヶ間女房出袖、（菊重黃衣三重、濃淺蘇芳打衣、山吹織物、唐衣摺裳、）其北間童女出衣、（蘇芳織物裝物、）未剋卿相參集、（殿下、左府、右府、內府、大納言□□□□□□□□□□□民部、源禮部、大貳、權三位、中將殿、侍從、合十八人、中宮大夫、中納言、藤禮部、右金吾、宰相中將、左大辨、皇后宮權大夫、）申剋御使參入、頭辨季仲朝臣、（雖有頭中將、中觸由、仍頭辨參仕、後朝御使多藏人頭奉仕、辨例道方定賴等翔云々、經北道、御書令持小舍人前行、多近衛將奉仕之、）佇立中門邊、右中辨師賴朝臣相逢、令申事由、次敷座、（疊茵等、能遠爲隆取之、）次召御使、

緂繝二枚、其上鋪唐錦緣地鋪、同緣茵等、其面頭立四尺御屛風一帖、各帖其前立蠻繪沃懸地御調度、二階

上水火取、布汁坏、中階北臺南打亂筥、二階南居口其南鏡筥臺、御茵前立脇息、其西置御硯筥、地鋪上御帳東供御座、同用錦緣地鋪茵、

先々被鋪東二條早錦緣地鋪錦茵、今度兼日無儲之上、有儀被用唐錦、其北立五尺御屛風、其前立同蠻繪二階御厨子二脚、置柳筥二合、菓子筥二合、

藥筥二合、香壺箱二合如例、御帳北間通西壁立御衣架一脚、母屋四面懸壁代、東西北立廻五尺御屛風、庇左右立

四尺御屛風、所々御簾差筵御几帳邊鋪等如例、仍不具記、北面儲藝御所、東對代爲女房候所、其東庇

三ヶ間爲上達部座、北上對座、敷高麗端帖八枚、東西幷南戸卷簾、紫八枚、居机饗十七、居殿御料無對座歟、東中門西廊爲殿上人座、西上對座、敷紫緣帖四枚、

居机饗八前、以上備中國勤役、東北中門東廊爲侍所、臺盤上居諸大夫料饗、安藝國奉仕之、北對東十一ヶ間爲女房曹局、東北渡殿爲

臺盤所、其東廊北庇爲上卿御厨子御裝束、及秉燭、關白殿率內府以下、被參陽明門院、于時坐鴨院、自東三條可參御

之由雖有其儀、內裏大白方、仍被改定了、當頭之右近少將顯實朝臣持參御書、紅紙裹付物枝、近代不付之云、又先例當日以前一兩度有御書、今度無日次上、永承五

年四條宮、延久三年中宮當日被獻例也、右中辨師賴朝臣本宮別當申事由、次東戸前鋪勅使座、高麗帖一枚上敷東京錦茵、能遠仲實取之、院殿上侍臣也、盤

地下饗、相具可勤仕之由左府被定下、次召勅使、師賴仰之使參上獻御書於簾中、次勸盃權左中辨基綱朝臣、瓶子散位有家、

二獻新中納言、基忠、瓶子兵部大輔通輔、次居肴物、折敷高坏、使前二前、勸盃人前一本、三獻新大納言、家忠、瓶子左少將有賢、地下也、次自簾中被出

祿、女裝束一襲御使差笏給之、拔笏起座、下自中門腋東頭、顛進前庭、再拜退出、小舍人則季衣冠相從、於東廳座給酒肴、廳官勸盃、又給

祿絹二疋、次女房乘出車、御使參間、東面出衣、次寄御車於南階、于時亥剋、糸毛被用、貞信公御車、車副十二人、冠褐布帶脛巾也、殿下幷三位中將被候御車寄所、主計

頭道言朝臣奉仕御反閇、事了給祿、散位以綱取之、次駕御、今夜御裝束女院被調奉、赤色御唐衣、白羅御裳、蘇芳色御衣、有織物小袿表著打衣云々、故中納言資綱卿姬候

御車也、殿上人頭以下幷諸大夫四位以下奉仕前駈、雲客皆參、地下人被定仰、又陽明門院殿上人參仕也、出車十兩、檳榔、車副布冠、女房十八

人、色々衣五領、濃打衣、白梅唐衣、童女二人、躑躅汗衫、以各二人駕車、關白殿、左右內三相府、民部卿源大納言、中宮大夫、新大納言、治部

卿、左兵衛督、新中納言、二位宰相中將、左大辨、三位中將、三位侍從、右兵衛督等扈從、出御院東門、自室

町小路北行、至二條大路西折、至內裏北東小門、扣御車立榻、藏人左兵衛尉永實召吉上、二聲仰輦車

宣旨、其詞云、三品內親王乃參り給、牛車令入歟、次昇居御輦於糸毛鵄尾上、左右差几帳、五位十二人、兼被定下、率御輦、能遠、行綱、清實、孝清、以綱、仲實、盛賢、有定、爲隆、盛

令進北政所給云々、藏人永實傳取奉之、十一月二日丙戌、女御入内之後、有三夜餠之事、件餠民部卿〈○源經信〉所被調進也、是高年之人所役者、紫檀筥有螺鈿立鶴形、紺地唐錦折立有蓋、銀坏三盃、餠洲濱、以鶴形置銀御箸、〈件玄島之事見月令并史記殷本紀云々、大略庶幾次之吉祥歟、〉主上入御帳之後、關白殿取之令進給者、七日辛卯、有後朝使事、御使藏人頭左中辨藤季仲朝臣也、未刻許關白左右内府諸卿殿上人等、參會女御殿方之後、有御使、〈件御使、先於朝干飯方有召、給御書、紅薄様、典侍藤師子傳給之、不付枝、〉取御書歸殿上、令持小舍人〈冠〉前行、經北面至東中門、先付右中辨源師頼朝臣啓事由、此間敷御使座、〈疊二枚之上敷茵、諸大夫五位役之、〉次召使、則進簾前獻御書、〈東對代南庇也〉有盃酌、初獻、〈左少將源顯雅朝臣、了居肴物、〉二獻、〈左中將宗通朝臣〉三獻、〈右兵衞督源雅俊朝臣〉四獻、〈中納言殿〉五獻、〈源大納言殿〉給御返事祿等、〈女裝束、又給祿於小舍人、〉則歸參獻御返事、及酉刻主上初渡御女御御方、〈御直衣〉殿下有内府中宮大夫三位中將殿上人扈從、左中將宗通朝臣持御劍前行、其路經南殿御後敷筵道也、其後有公卿殿上人饗饌盃酌之事、殿下陪膳、少將有家朝臣、自餘殿上五位役供、是依寢儀御也、秉燭之後還御、殿上人候脂燭、〈先給殿上人於祿、各有差、〉其後御乳母典侍掌侍命婦藏人女官等給祿各有差、祿行事爲房也、今夜女御殿不令上給、是依吉日、初令留御在所給也云々、

今夜北政所依吉日初渡女御殿御方給、有御對面事、今日無公卿祿、是永承之例云々、

〔大御記〕寛治五年十月二十五日庚辰、今日四宮〈○篤子〉入御大内、殿下令沙汰給、御○元○服○之○後、○代○々○其○年○○女○御○被○參、而及三年依無其人歟、圓融院御時及二年歟、御被兩方被儲、〈夜御帳中内藏獻之、宮御帳料自殿下被□之、〉天晴、今日三品篤子内親王〈後三條院第四内親王、前齋院、陽明門院爲養女、前日被下准后宣旨、母贈后茂子、與院同胞、春秋三十四、〉入御大内、仍未明殿下并北政所令參内給、召主計頭道言朝臣、被問可立御帳之隠限、爲房覧勘文、〈今日巳刻〉又以道言御所四角令打札、自去十九日被始御裝束、其儀寢殿東北二棟渡殿北庇〈擬天井、准母屋、〉自西第二間立御帳、〈有帳臺、唐綾白表、裏推紫、黒紺以泥〉〈金纐纈下給先了、不給三面、立御几帳唐綾纐纈帷垂了、〉鏡懸角御座、如例、中央敷於筵、〈唐綾繧繝縁、打絹裏、〉並置沈御枕一雙、其左右各立一尺五御几帳一基、〈紫拉比、紫織物、帷四幅、〉御被兼置其中、御劍置枕上、入錦袋用本宮御帳南間、〈以母屋准庇〉供遣御座

しなきことに世人このごろのことぐさに云たり、さらぬ事だにきゝにくきものいひはましてことわりなり、かくもてなさせ給ふも、人の御ほど御位こそわさくものし給ひしか、侍從宰相はこの齋院の御せうと小一條院の御子、堀河の右大臣の御ひめぎみの御腹なぞてかわろからんとおぼしめすなるべし、

〔中右記〕寛治五年十月十九日、殿下（○藤原師實）初令參陽明門院（○後三條母后）給、是依女御入内之事也、廿五日庚辰、有三品篤子内親王入内之事、（是三條院第四女、母贈太后藤茂子、太上皇（白河）同母弟也、陽明門院養爲御子、）秉燭之程、公卿殿上人參會之後、先有御使、（右近少將藤顯實朝臣、給御書之後、令持小舍人、件小舍人著衣冠、）則參入女院御所鴨院、先於中門申事由、（右中辨源師頼朝臣啓事由也、）則召御前、（先諸座加茵、）勅使參進獻御書於簾中、次有盃酌三獻、初獻、（權左中辨源基綱朝臣、瓶子散位源有家、）二獻、（新中納言基忠、瓶子藏人兵部大輔藤道輔、）三獻、（新大納言家忠、瓶子左少將有賢、）事了自簾中推出祿、（女裝束一襲、）無御返事、勅使二拜、則歸參内、（申共由、有御返事之時ハ不拜云々、）及亥刻寄御車、（糸毛、）女房車十輛、（檳榔、女房十八人、童女二人、合廿人、）前駈殿上人皆參、諸大夫廿人、乘御車之間、（有反閇之事、）其路出自北門、經室町二條大路、至堀川院北門、（皇居御堀川院也、件門二條面東小門也、）暫留御車、次藏人左兵衛尉藤永實、（著青色、）仰牽車宣旨、（先小舍人著衣冠、指燭出門前之後、仰云、吉上二聲、上臈云々、傳官稱唯之後、三品内親王參給、牛車令入歟、）歸入之後、移御牽車、寄東對代廊南庇東妻、其後公卿殿上人、有饗饌之事、（公卿同對代廊東庇、殿上人中門廊、女御御所用此東對也、）盃酌一兩巡之後、各々退出、

今日公卿、（殿下、左大臣、右大臣、内大臣、民部卿、源源大納言、師中宮大夫、雅新大納言、宗中納言、宗治部卿、俊別當、俊新中納言、基二位宰相中將、雅三位中將、忠三位中將殿、忠三位侍從、能皆是殿下親昵之公卿也、）今夜女房御使、掌侍源盛子、（源經綱朝臣姬也、）有祿、女裝束、御衾、役殿下北政所、凡入内之義、一事以上關白殿令沙汰給也、今夜女御御裝束、裏濃蘇芳御衣五、濃御單、同御袴、同打衣上著、梅花五重上著、黄菊五重小打著、赤色五重唐衣、白羅御裳也、

廿六、七日、三ヶ日間、於女御殿御方、有公卿殿上人饗饌之事、最初之夜以夜御殿、並寅角燈爐火付脂燭、以藏人永實、遣女御殿御方、（如凡人禮、三ヶ夜不滅、）又主上入御之間召御草鞋、中宮大夫取之、以三位中將殿、

よりよろづになにごともせさせ給ふ、さるべき人々をばんにとのゐにさしつゝまゐらせさせ給ふ、一品の宮にまゐりとまゐる人を、みやの仰言にてまゐるべくおはせらる、內のおぼしめしよらぬことなくせさせ給ふに、宮にもせさせ給ふなるべし、いづれかおろかにおもひきこえさせ給ふと申ながら、このうちの一品の宮、おもひまうけさせ給へる御ありさま世の常ならず、さればこの宮にまゐりつかうまつらぬ人なし、それをかのとのゐにもせさせ給ふなるべし、母上の御はらからの姬君たちも皆おはして、いかに〳〵とうれしきもの〻おそろしふおぼす、その程になりていたくなやみ給へば、殿上人かんたちめのこりなくまゐり、內の御使宮の御使のひまもなくまゐりちがひたり、しるしありときかせ給ふ、そうをばめしてつかはす、そのわたり四五丁は道もさりあへず、一の人の御娘の后宮のうませ給はんもかくこそはあらめ、おもひしより過ぎたる御ありさまなり、四五日つれなくわけくれつゝいとあさましく、いかに〳〵と內にも宮にもおぼしめす、六日といふに、いときらゝかなるをとこにておはしませば、さるべき人々おきどころなくおぼさる、內の御使、宮の御使、われまづ奏せん〳〵とぞいそぎまゐる、かばかり年頃いづかたにもかたよりつる御ことのめづらかにあさましともおろかなり、源中納言の四位少將いへかた御はかしもて參るを見つけたる心ちなり、さるべきならでたゞうち見る人もめでたしとはこれをこそはいはめ、か〻ることをまたこそ見ざりつれとあさましくめでたく見給ひけり、御湯殿の儀式ありさまなど、藏人五位よきかぎり廿人弦うちに奉らせ給ふ、いへばおろかなり、御めのとには小侍從の內侍とてさぶらふを奉らせたまへり、上野守範國が女、尾張守惟經が女、藏人よりかうぶりえたる式部大輔惟輔が女なり、三月九日いらせ給ふ儀式ありさまいとめでたし、車五六ひきつゞけていと心ことなり、女御になりていらせ給ふ、更衣などいひしをだに、世にめでたくめづらしきことに思ひ申しを、けざやかにめでたくいみじくよにため

云々、

〔榮花物語三十八松の下枝〕一品の宮にまゐらせ給ひし侍從宰相〇源基平の御むすめ、〇基子内〇後三條おぼしめすといふ事世にきこえて、たゞそなたになんおはしますなどいふ程に、たゞならずならせ給へり、かはかたちもみやづかへさまにもあらず、もてかしづききこえさせ給ひて、たゞ宮の御おなじ事にて御だいなどまゐらすることも姬君の御だいとて、女房とりてまゐらするに、ましてかくさへものせさせ給へば、いとこゝろことにもてなさせ給ふ、もとより御門の御母になり給ふべきすくようものし給ふ、御夢にも紫の雲たちてなん見え給ひけるなどきこゆるを、なほさこそ人はものはいへといひしを、まことに只今まではかなひぬべきにやと人々はおもひいふめり、七月に尾張の前司つねひらといふ人の家にいでさせ給ふ、このたび歸りまゐり給はむには、更衣などにてなんおはすべきといひのゝしる、いでさせ給ふ夜はあかつきまでおはしまし、御ども人などのたちやすらふもむかしものがたりの心地すさべきむつまじき殿上人御おくりすべき宣旨ありていとめでたし、とのばらなどなほ女子こそもつべきものはあれなどめで給ふ、母北の方もよしよりの中納言の娘にものし給へる、なからひいとあてやかにむかしものがたりのこゝちす、御息所更衣などみな中將少將のむすめ受領のも皆まゐりけるを、この近き世にはおぼろげの人はまゐり給はぬものにならひたるにいとあさましきなり、入道殿にきさき御門はおはしますものとおもふに、この關白殿右おほとのだにおとゞにてこそまゐらせたまひしかゞかへりてかく人の宿世もさだめあるべきことかはとなるべし、かみわざのひまにはまゐらせたまふ、御使ひまもなし、御修法御讀經などせさせ給ふ程いとめでたし母方のおぢ東宮の權大夫、さきの少將といひしは、刑部の權大輔またなにの權守とかいひてもあり、阿ざりなどにても、まゐたしくつかひいでいりし給ふも、女御のかしづきなどまゐたるもめやすし、宮

いろあひよりはじめなべてならずみえさせ給、

〔春記〕長暦三年十二月廿一日丁丑、内大臣〇藤原教通長女〇生子今夜初入内、可御西北對也、其作事藏人右少辨經家行事、而除目以後籠居、依不轉任之怨也云々、仰云、内大臣女可入内、可聽輦車之事可示關白、〇中略此間左少將經季、四位自内府家歸參、御書返事令持小舍人、小舍人腰挿之又女裝束一具、令持隨身之、以藏人令申案内、依御物忌也、依仰持參御書、祿自取置便所、〇中略亥終許内大臣長女參入於北陣下云々、以北御門爲玄輝門、然者許輦平門程可下給歟、如何、而近々御所、此間左衛門尉賴資著青色袍、帶劍出陣外、小舍人二人取火前行仰聽人輦車之事、其詞云畢退入、良久乘輦車參入給、信長頭經季經家顯家取炬火前行、信長爲藏人頭如何々々、内府幷子族公卿等、左衛門督、四條中納言等扈從、入給西北對已畢云々、其次女房廿人、童女參人云々、予竊見之、又無他殿上人云々、予時許以少將内侍差遣之、是可令上給之由云々、搆打橋自西對令昇給云々、輦車雖被借申關白殿不被借、仍新作云々、事之大略、太以過差也、予可奉仕後朝御使之由被仰也、窮老之人何爲哉、又不可辭申也、此時許退出、　廿二日戊寅、未時許參内、良久之有召、仍參御前給御書、作御書紙有下給、頗以凡事也、予取之退下、暫置殿上大盤上、以經季少將令案内彼御方、事具不也、申時許有可參入之告、予即取御書給小舍人、自小板敷給之令立前參彼御方、西北對予不帶劍、宮中御使之例也、右府所命也、又隨身一人令裝束也、予於板敷下取書奉之畢、即居無座、女房等皆出衣如花、太以過差々々、小時敷座、高麗端一枚、其上敷茵、此對南向對也、仍南面敷之、次居肴物也、次對中將信長勸盃、次左衛門督、次四條大納言、次新中納言、長家次三位侍從通基等也、酒氣重疊、心神如亂、此間自簾中出女裝一襲、予取之、但不懸頸、次給御返事、右手取之退下、御書給小舍人、祿給隨身、參殿上取御書等參御前、祿置打毬御障子下、獻御書畢、退歸以主殿女令取祿物給隨身、暫候殿上退私、酒氣深入、心神失度、終宵惱煩、更無術計也、今日事太以過差也、但近習人外、又他人不參彼御方、是依畏關白氣色歟、太以無由事也、　廿三日己卯、今夜宿侍、女御參上給如昨日云、四條中納言幷一族人々扈從云々、内府幷北方相共臥給二間云々、彼北方奉抱御被之料

子くらべや〔○尊子、以上並一條女御、〕などまゐりこませ給たり、されどさるべきみこたちもいでおはしまさで、中ぐうのみこそはかくみこたちおはしますめれ、この御かた〔○彰子〕ふぢつぼにおはしますに、御しつらひもたまもすこしみがきたるは、ひかりのどかなるやうにもあり、これはてりかゞやきて、にようばうもせう〳〵の人の御前のかたにまゐりつかうまつるべぎやうもみえず、いといみしうあさましうさまことなるまでしつらはせ給へり、御几帳御屏風のおそひまでみな蒔繪螺鈿をせさせ給へり、にようばうはおなじきはうみのすりも、おりものゝからぎぬなど、むかしよりいまにおなじやうなれど、これはいかにしたるとまでぞみえたる、にようご〔○彰子〕のはかなうたてまつりたる、御ぞのいろかをりなどぞよにめでたきためしにしつべき、御とのゐしきりなり、よき日して御めのとゞも命ぶくら人陣の吉上衛士仕丁までおくりものを給はすれば、としおいたる女官とじなど世にいひしらぬまで御いのりを申いのりたてまつる、御めのとたちさへきぬわやおりものゝしやうぞくどもかずおほくかさねさせ給て、ころもばこにつゝませ給て、さま〳〵のものどもそへさせ給へり、

〔榮花物語十四淺緑〕二月〔○寛仁二年〕になりぬれば、おほとのゝ尚侍殿〔○藤原威子、道長女〕内〔○後一條〕へまゐらせ給、よろづのことゞものへさせ給へり、おとな四十人、わらは六人、しもづかへおなじかずなり、はじめのみや〳〵〔○一條后彰子、三條后研子、〕攝政殿などにみな人々まゐりて、いまはえしもとおぼしめしつれど、いづれもはぢなき人々おほくまゐりこみたり、わらはゝそのよくるまよするまでえりとゝのへさせ給へるおしはかるべし、ふたみやの御まゐりのをりのことをぞ、よがたりに人々きこえさすめるを、これはいますこしまさりたり、世中の人の御おきてきのふけふはまさりてのみみゆるわざなれば、よろづそれにしたがひてめでたし、みかど〔○後一條、時歳十一、〕の御ありさまよりは、かんのとの〔○威子、時歳二十、〕こよなくおとなびさせ給へり、御かたちいみじうおかしげにおいぎやうづき、

やむごとなきをばさらにもいはず、四ゐ五ゐのむすめといへど、ことにまじらひわろくなり、いでたちきよげならぬをば、あへてつかうまつらせ給べきにもあらず、ものきら〻かになりいでよきをえらせ給へり、さべきわらはなどは、によう院〇一條母后東三條院詮子などよりたてまつらせ給へり、これはやがてこのたびのわらはのなども内人院人宮人殿人などやうつげあつめさせ給へり、ひめぎみの御ありさまさらなることなれど、御ぐしたけに五六寸ばかりあまらせ給へり、御かたちきこえさせんかたなくをかしげにおはします、まだいとをさなかるべきほどにいさ〻かいはけたることなく、いへばおろかにめでたくおはします、みたてまつりつかうまつる人々も、あまりわかくおはしますを、いかにもの〻はえなくやなどおもひきこえさせしかど、あさましきまでおとなびさせ給へり、よろづめづらかなるまでにてまゐらせ給、むかしの人のありさまをいまき〻あはするには、いとぞものぐるほしうそのをりの人のきぬずくなにわたうすくてめでたきをりふしもいでまじらひ、うち〳〵にもいかでありたへたらんとおぼえたり、このごろの人はうたてなさけなきまできかさねても、なほこそはかせなどもおこるめれ、さればいにしへのにようごきさきの御かた〴〵など、おもふやうにかたはしだにあらずやとみえたり、かくてまゐらせ給へるに、うへ〇一條むげにねび、もの〻こ〻ちしらせ給へれば、〇一條帝時歳二十いとゞものはえもあり、またはづかしうおはします、中ぐう〇定子のまゐらせ給へりしほどなどは、うへもいとわかくおはしまし〻かば、これはさらなることながら、おほんこ〻ろおきて御けしきなど、すべてすゑの世のみかどにはあまらせ給へりとまでぞ、世人やむごとなききみにおはしますと、時の大臣公卿も申きこえさせける、故くわんばくどの〇定子父藤原道隆の御ありさまは、いとどものはなやかにいまめかしうわいぎやうつきけぢかうぞありしかば、中ぐうの御かたは、てんじやう人もはそぞのつねにゆかしうあらまほしげにぞおもひたりし、こきでん〇義子承香でん〇元

女御母氏在暗戸屋曹司、欲纒頭於予、予見其氣色直退、向陣仰此事之間、自彼曹司差從女、令招若雄丸、若雄丸不進向、從女只持女裝束歸曹司、見者有嘲色云々、參右府之間予時入夜自宅送書云、慮外有外人、署女裝束置侍所、侍所人不取斧之、下人更指置東面高欄下、依無由緒不取入、使下人早遁去、此事甚奇云々、推量女御曹司人所作也、仍遣取示案内於説孝辨令入其束、件尚書與彼女御通家也、仍令志此送物無由緒之旨令返却也、家女不取入件物、馳送消息、時人稱之、後聞女御母氏依此事有怨氣、愁申院幷左府云云、甚偽惜也、

〔榮花物語三十四晩待星〕其頃○後朱雀いせのたくせんなどいひて、藤氏のきさきおはしまさぬわしきことなりとて、うちおほとの○藤原教通の御くしげどの○生子まゐらせ給べしといふこといできて、七月ついたちごろといそがせ給ほどに、六月廿七日○長暦三年うちやけぬ、○中略はかなく月日もすぎて、うちおほとのゝみくしげどの、志はすにまゐらせ給ふ、宮の御こと○中宮嫄子崩のほどなきになどとの○頼通はおぼしめしたり、ことしぞ廿六にならせ給ける、としごろいつしかとおぼしめしける御ことにて、どの御こゝろをつくさせ給へり、

上皇養子爲女御

〔玉海〕承安元年十二月二日壬寅、此日於院○後白河殿上法住寺殿被定女御入内雜事、○中略此女御平入道○清盛姫○徳子也、而重盛爲子、又院○後白河爲子、依永久例○鳥羽后璋子、藤原公實女、白河上皇養子、有沙汰、凡毎事殊勝、以詞不可言莫言、

十四日甲寅、此日院姫君○徳子入内也、○中略入道相國女、法皇○後白河御養子、永久例云々、但彼者自誕生之昔有撫育之禮、随又主上御孫也、仍於儀無妨、今度已可爲姉妹歟、尤以有忌如何、

入内儀

〔百練抄八高倉〕承安元年十二月二日、入道太政大臣○平清盛女○徳子爲上皇○後白河御猶子參入、今日被定入内事、

〔榮花物語六耀く藤壺〕大殿○藤原道長の姫ぎみ○彰子十二にならせ給へば、としの内に御裳著ありて、やがて内○一條にとおぼしいそがせ給ふ、○中略かくてまゐらせ給こと長保元年十一月一日のことなり、にようばう四十人、わらは六人、しもづかへ六人なり、いみじくえりとゝのへさせ給へるに、

〔河海抄 一〕侍臣の女猶女御の例あり、其上大中納言の女、立后の例等もあれば、女御とだにといふか、だには猶不足の心歟、中古までは、女御も多く四位五位なり、近代は叙₂從三位₁、後に女御宣下なり、

大中納言女后例

藤原高子（故中納言長良女、二條后、）清和天皇后、陽成院母后、　皇后宮娍子（故大納言濟時女、）三條院后、　贈皇后超子（法興院入道關白〈藤原兼家〉女、父于時中納言、）冷泉院女御、

公卿女爲₂女御₁例

女御藤原元善子（光孝天皇女御、中納言山蔭女、）　女御橘義子（宇多院女御、參議廣相女、）　女御藤原和香子（醍醐天皇女御、右大將定國女、）

女御藤原淑姫子（同女御、參議菅根女、）　女御藤原姚子（花山院女御）

侍臣女爲₂女御₁例

女御從三位橘三井子（桓武女御、從四位下入鹿女、）　女御藤原澤子（仁明女御、紀伊守總繼女、）　女御藤原媓子（圓融院女御、堀川關白兼通女、于時父宮內卿、）　女御贈皇后藤原超子（冷泉院女御、安和元年十二月七日爲₂女御₁、于時父法興院關白藏人頭、）

以更衣爲女御

〔三代實錄 五十光孝〕仁和三年二年十六日庚申、勅以₂更衣從五位上藤原朝臣元善₁爲₂女御₁、中納言從三位山蔭之女也、

以御息所爲女御

〔扶桑略記 二十九後三條〕延久三年二月廿九日、御息所從五位下源基子爲₂女御₁、

以尙侍爲女御

〔日本紀略 十三後一條〕寬和二年三月七日庚子、尙侍從三位藤原朝臣威子入₂掖庭₁（前太政大臣〈道長〉第三女○中略）四月廿八日辛卯、今日尙侍從三位藤原朝臣威子爲₂女御₁、

〔小右記〕寬仁二年四月廿八日辛卯、今日行幸以前、尙侍藤原威子女御宣旨下、氏上達申₂奏慶₁、

以御匣殿別當爲女御

〔日本紀略 五冷泉〕安和元年十二月七日乙卯、以₂從四位下藤原㤗子、御匣殿同超子₁爲₂女御₁、

〔權記〕長保二年八月廿日甲子、此日御匣殿別當（○藤原尊子）可₂爲₂女御（○一條）之事、於₂朝餉₁奉₂勅命₁、退出之間

辨

年　月　日

〔日本紀略一條十〕長德二年八月九日丁未、今日以藤原義子爲女御、〈春宮大夫公季卿女〉

〔扶桑略記一條二十七〕長保二年八月廿日、關白道兼女尊子爲女御、

〔日本紀略三條十二〕寬弘八年八月廿三日甲子、今日右大臣、〈○中略〉召右大辨道方下女御二人宣旨、一人尙侍從二位藤原姸子、〈左大臣○道長〉二女、一人無位藤原娍子、故大納言濟時卿女、

〔春記〕長曆三年閏十二月十三日己亥、內府娘〈○藤原敎通女生子〉今日可爲女御〈○後朱雀〉之事可示關白者、又參關白殿以隆佐令申、命云、承畢早召可然之上卿可仰者、卽奏此由畢、遣召左衞門督入夜參入、又奏此由、仰云、早可仰者、予於殿上仰之、以生子爲女御之由、畢內大臣、左衞門督、新中納言、四條中納言、頭中將信長、經家等立西廊內、以予令奏慶賀由、予奏畢帶劒仰復命畢退入、思此事內府先被申子慶之後、相次可被申氏人慶歟如何、

〔扶桑略記後朱雀二十八〕長久三年十月　　、藤原延子爲女御焉、

〔官局宣旨留〕

從三位藤原朝臣夙子

權右中辨藤原朝臣光愛傳宣、權中納言藤原朝臣公逐宣、奉勅宜爲女御〈○孝明〉者、

嘉永元年十二月十六日　　修理東大寺大佛長官主殿頭兼左大史小槻宿禰輔世奉

〔一代要記冷泉三〕女御藤原超子〈藏人頭從三位兼家一女、未爲公卿女、爲女御初例也、〉

〔源氏物語桐壺一〕內より御つかひあり、三位のくらゐおくり給ふよし、勅使きてその宣命よむなんかなしき事なりける、女御とだにいはせずなりぬるがあかず口をしうおぼさるれば、今一階の位をだにと贈らせ給ふなりけり、

とて、誠に久しく人まゐるよもなくてすぎさせ給ふ。○中略宇多の院位につかせ給ひて、けふまでその御たうにおはします、母上はききさきにならせ給ても、御丁のめぐりを日に一ど物かはんとみそかにいひて、めぐりありかせ給ひけると申傳たり、誠にやそれは小松宮より市に出て、物をうりかはせ給ひて、かくせねば心ちのむつかしきとて、ゝつれば心地のよくならせ給ひけると申傳へたり、

○按ズルニ、是レ即チ王女御班子ノ事ヲ云ヘルナリ、

〔文德實錄 二〕嘉祥三年七月甲申、從四位下藤原朝臣古子、無位東子女王、藤原朝臣年子、藤原朝臣多賀幾子、藤原朝臣是子等爲女御、

〔三代實錄 十三 淸和〕貞觀八年十二月廿七日戊戌、以從五位下藤原朝臣高子爲女御、

〔日本紀略 一 醍醐〕延喜元年三月日、以藤原穩子爲女御、昭宣公女

〔類聚符宣抄 四〕太政官符中務大藏宮內等省 外

從四位下藤原朝臣安子

右女御如件、省宜承知依例行之、符到奉行、

右中辨　　右少史

天慶九年五月廿七日

〔日本紀略 五 冷泉〕康保四年九月四日己丑、以藤原懷子爲女御、

〔日本紀略 七 圓融〕天元元年五月廿二日丙午、宣旨、以藤原遵子爲女御、

〔朝野群載 四 朝儀〕太政官符 中務大藏宮內等省 別作

藤原義子

右女御如件、省宜承知依例行之、符到奉行、

書名下給

遣ㇾ仰爲二女御一之由於其所一事

遣二藏人一若上御曹司遣二女藏人一歟、天祿四年遣二御乳母一云云、

〔禁秘御抄下〕上﨟

上古可ㇾ然人女、皆爲二女御更衣一、〇下略

〔諸官符案〕太政官符

中務宮內兩省

從四位下藤原朝臣多美子

右女御如ㇾ件、兩省承知、依ㇾ例行ㇾ之、符到奉行、

正五位下守左中辨兼行介藤原朝臣家宣、正六位上行左少史都宿禰文憲

貞觀六年□月廿七日

〔諸官符案〕太政官符

宮內省

源朝臣暄子

右去年十二月廿九日、定二女御一如ㇾ件、省宜二承知一、符到奉行、

從五位上守左少辨橘朝臣、正六位上行左少史伴連

貞觀□年三月十七日

〔三代實錄四十五光孝〕元慶八年四月辛卯朔、從三位諱女王、中宮〇班子爲二女御一、

〔一代要記四光孝〕女御　從二位班子女王元慶八年四月□日爲二女御一、式部卿仲野親王女、母當宗氏、

〔世繼物語上〕今はむかし、小松の御門なん、をひ清和天皇の御時位につかせたまはで小松の宮

被仰云、件人宜令候侍所者、

同年同月同日、別當正四位下行尾張守藤原朝臣親隆奉、

祗候所

〔禁秘御抄 上〕上御局 號藤壺上御局

后女御更衣參上所也、近代爲御所、○中略

上御局 號弘徽殿上御局

是御行ナド有所也、女御更衣可參上、

女御初見

〔日本書紀 十四 雄略〕七年、是歲吉備上道臣田狹、侍於殿側、盛稱稚媛於朋友曰、天下麗人莫若吾婦、茂矣綽矣、諸好備矣、曄矣温矣、種相足矣、鉛花弗御、蘭澤無加、曠世罕儔、當時獨秀者也、天皇傾耳遙聽、而心悅焉、便欲自求稚媛爲女御、拜田狹爲任那國司、俄而天皇幸稚媛、

〔續日本後紀 五 仁明〕承和三年八月丁巳、正五位上紀朝臣乙魚、授從四位下、柏原天皇○桓武女御也、

〔續日本後紀 九 仁明〕承和七年十一月辛丑、從四位下百濟王敎法卒、桓武天皇之女御也、

〔一代要記 二 桓武〕後宮

女御　從三位橘御井子 從四位下入居女也　　女御　從四位下紀朝臣乙魚

女御　從四位下百濟王敎法　　女御　正四位下藤原仲子 參議家依女

女御　橘田村子 入居朝臣女

○按ズルニ、是レ實ニ女御ノ始メナリ、大日本史后妃傳ニハ、紀朝臣乙魚、百濟王敎法ノ二人ノミヲ女御ト爲シ、他ノ三人ハ他書ニ見エザルヲ以テ取ラズト云ヘリ、

補任

〔北山抄 六〕下宣旨事　補女御事 更衣者、尙侍宣下所司、聽禁色、仰辨官作官符、內外成公卿以下奏慶、

〔侍中群要 八〕內親王以下宣旨

爲女御宣旨

廿三日戊寅、重奏法皇〔○鳥羽〕曰、諸國所課自院充催得其貢、私充催非無所恐、亦諸國吏不受命焉、手詔曰、先例諸國所課、自本家充催、供奉人自院催之、〔指大治歟〕今度何以異彼、先自家充催、其吏不受命者、自院可催者、信範傳女院仰曰、先日所借之後儀可借給者、報啓恐悅之狀是余無後儀、故入內經營之間所借申也、

○按ズルニ、多子未ダ女御ノ宣旨ヲ蒙ラズト雖ドモ、久安四年七月已ニ入內セシヲ以テ、此任命アリシモノナレバ此ニ掲グ、

〔台記別記〕久安六年正月十九日丁酉、女御宣旨〔○近衞后多子〕上〔○近衞〕初渡御女御盧事

蔭子正六位上藤原朝臣仲賴

被仰云、件人宜爲侍所長者、

久安六年正月十九日、別當正四位下行尾張守藤原朝臣親隆奉、

散位從五位上藤原朝臣爲經

久安六年正月十九日

被仰云、件人宜令候侍所者、

同年同月同日、別當正四位下行尾張守藤原朝臣親隆奉、

正六位上行治部丞中原朝臣親賴

久安六年正月十九日

被仰云、件人宜令候侍所者、

同年同月同日、別當正四位下行尾張守藤原朝臣親隆奉、

蔭子正六位上宮道朝臣重能

久安六年正月十九日

被仰偁、件等人、宜爲三位御方〇藤原多子別當者、
久安四年八月十四日、別當從四位下行尾張守藤原朝臣親隆奉、
散位從五位下藤原朝臣顯方
散位從五位下藤原朝臣賴方
散位從五位下藤原朝臣盛憲
散位從五位下藤原朝臣憲親
被仰偁、件等人、宜爲三位方侍所別當者、
久安四年八月十四日、別當從四位下行尾張守藤原朝臣親隆奉、
蔭孫正六位上藤原朝臣憲賴
被仰偁件人宜爲三位方侍所勾當者、
久安四年八月十四日、別當從四位下行尾張守藤原朝臣親隆奉、
正六位上行右衛門志佐伯宿禰義仲
右辨官史生從七位上紀朝臣俊元
已上可爲知家事、
正六位上行大炊少允高階朝臣行則
右辨官史生從七位上伴朝臣久兼
右官掌從七位上紀朝臣重兼
已上可爲案主、
被仰偁件等人、宜令從三位方政所事者、
久安四年八月十四日、別當從四位下行尾張守藤原朝臣親隆奉、

家司

〔延喜式彈正四十一〕凡内親王、孫王、女御、〇中略並聽乘用金銀裝車屋形、

〔延喜式彈正四十一〕凡車馬從者、〇中略女御十六人、

〔延喜式雜五十〕凡乘輦車出入内裏者、妃限曹司、夫人及内親王限温明後涼殿後、命婦三位限兵衞陣、但嬪女御及孫王大臣嫡妻乘輦限兵衞陣、

〔日本後紀嵯峨二十四〕弘仁六年十月壬戌、勅親王、内親王、女御、及三位已上嫡妻子、並聽著蘇芳色、象牙刀子、但緋色鞦勒一切禁斷、〇中略内親王、孫王、及女御已上、四位已上内命婦、四位參議已上嫡妻子、大臣孫、並聽乘金銀裝車、自餘一切禁斷、

〔百一錄〕享保五年正月廿日、女御御方〇中御門女御近衞尙子有准后宣下陣議、御產御不快、今日薨御、廿四日迄五ヶ日廢朝、

〔享保集成絲綸錄三〕享保五子年正月

一新准后女御御事〇近衞尙子去廿日薨去ニ付、今日より廿六日迄、鳴物三日停止ニ候、

但普請者不苦候、

右之通可被相觸候、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

當代親王勅別當、上卿奉勅賜辨、辨仰史令書宣旨、女御同之、天慶九年以左少辨在躬爲女御藤□子別當、仰宣旨下

〔台記別記〕久安四年八月十四日己巳、今日補兩三位家司以下、妻三位唯有家司而已、〇中略

仰書樣

從四位下行尾張守藤原朝臣親隆

散位從五位上藤原朝臣敦任

散位從五位下藤原朝臣憲親

待遇

所司治部丞中原朝臣在判
頼方刑部少輔藤原朝臣在判
爲經散位藤原朝臣在判
成憲散位藤原朝臣在判
憲親散位藤原朝臣在判
憲頼勾當藤原朝臣在判

今案可ㇾ書ニ臺盤所一

〔享保集成絲綸錄三〕享保元申年十一月
女御御里御殿御築地高掛リ金、五萬石以上、五畿内近江丹波播磨城主之分差出付而、左之通以ニ書付一相達之、
一女御御里御殿御築地入用高掛リ金可ㇾ被ニ差出一候、割合等ハ從ニ水野和泉守一可ニ相達一候間、可ㇾ被ㇾ得ニ其意一候、
十一月
井伊掃部頭〇以下十人署名略

〔儀式八〕正月八日賜ニ女王祿一儀十一月新嘗會亦同
其日内侍於ニ縫殿院一點ニ檢女王所司預張ニ幄二字於安福殿前一、亦設ニ座於殿庭一、積ニ祿物於版以南一、紫宸殿南廂西戸外立ニ三尺畫障子一、辨ニ備御饌一、謂ニ菓子雜餅等一、殿南廂西第三間安ニ酒器一、并皇后饌、及女御〇〇尚侍已下散事已上饌、並謂ニ菓子等一御座以西皇后座去二許丈、裝束之儀同ニ御一、但不ㇾ立ㇾ幌、御座以東設ニ女御以上座一、用ニ鋪床子一、其色隨ㇾ人、不ㇾ責ㇾ賤、立ニ臺盤一、置ニ銀筋匙一、但饌各用ニ私物一〇下略

〔延喜式三十八掃部〕凡設ㇾ座者、〇中略女御錦草墪褾地散花錦表、青褐車前子兩面縁、褾東絁裏、疊床子、敷ニ二色綾褥一、

〔延喜式四十一彈正〕凡親王以下五位以上、及内親王、孫王、女御〇中略等從、並聽ㇾ著ニ染袴一、

〔三代實錄清和十二〕貞觀八年正月十三日庚寅、是日勅、女御從三位藤原朝臣多美子、自今以後、每年給二分官一人、一分官一人、

〔日本紀略村上三十七〕天曆二年正月廿七日丁丑、是日下梨壺女御預年給宣旨、

〔台記別記〕久安六年正月十九日丁酉、

能登國解　申進上御封庸米事

合佰斛

右當年料進上如件以解

久安六年正月十九日

守藤原朝臣基家

女御家政所返抄　能登國

撿納庸米佰斛事

右當年御封撿納如件故返抄

久安六年正月十九日

知家事主稅允佐伯在判

別當尾張守藤原朝臣在判

女御家侍所牒　能登國衙

可早令進上垂布十五段事

牒侍所用途料可進上之狀牒送如件故牒

久安六年正月十九日

頭方別當散位藤原朝臣在判

名稱

〔伊呂波字類抄〕〔二〕〔七〕女御 これ別のつかさにはあらねども、内侍のかみなどになさるゝをりあり、

〔簾中抄〕〔下〕女御ニヨゴ

〔運歩色葉集〕〔丹〕女御ニヨゴ 皇后 女御、更衣、仕人之名也、

〔名目抄〕〔人體〕女御ニヨウゴ

○按ズルニ、唐六典ニハ、六儀ノ下ニ美人〔正三品〕アリ、是ヲ周官二十七世婦ノ位トス、美人ノ下ニ才人〔正四品〕アリ、是ヲ周官ノ八十一女御ノ位トス、周官即チ周禮ノ天官ニ、女御掌御叙于王之燕寢、以歲時獻功事トアリテ禮記ノ昏義ニハ、女御ヲ御妻ト爲セリ、我邦ノ女御ノ稱ハ、蓋シ此ニ依リシナラン、

供給

〔延喜式〕〔十二中務〕後宮時服、

女御、絹廿疋、緜布卅端、〔冬加綿一百屯〕前件時服、夏四月五日、冬十月五日、內侍具錄人數及物色、移省、造解文、申官、

〔延喜式〕〔三十三大膳下〕親王以下月料

女御、醬、未醬各六升〔日二合〕鹽六升、腊五斤十兩〔日三兩〕鮨九斤六兩〔日五兩〕紫菜、海松各一斤十四兩〔日一兩〕海藻七斤八兩〔日四兩〕

〔延喜式〕〔三十五大炊〕親王以下月料

無品親王、內親王、妃、夫人、女御、〔日米各五升〕

〔延喜式〕〔三十八掃部〕年料鋪設

雜給兩面端帖十六枚〔厚薄各八枚、女御已上料、〕

〔小野宮年中行事〕四月五日中務省申妃夫人嬪女御夏衣服文事

〔小野宮年中行事〕十月四日中務卿申妃夫人嬪女御冬衣服文事

女御

女御ハ周禮ニ依リテ立テタル名稱ニテ、亦御寢ニ侍スルモノナリ、其稱初テ日本書紀ノ雄略天皇ノ紀ニ見エタレド、汎ク御寢ニ侍スルモノヲ言ヘルニテ、當時ノ的稱ニアラズ、此稱ハ實ニ桓武天皇ノ朝ニ起リテ、紀乙魚、百濟教法ヲ以テ之ニ充ツルヲ始トス、爾後妃夫人ノ稱漸ク絶エテ、女御更衣之ニ代ル、然レドモ其初ハ四位五位ノ間ニ過ギズシテ、嬪ノ改稱ナルガ如クナリシガ、仁明天皇ノ朝ヨリ後、文徳、清和、陽成、光孝天皇等ノ數朝ヲ歷テ、宇多天皇ノ朝マデ皇后ヲ立テ給ハザリシニ因テ、女御ノ位漸ク貴クナレリ、時ニ後宮ハ位階ノ尊キモノ、其班首ニ居リシナラン、即チ仁明天皇ノ朝ニハ、女御藤原貞子アリ、文徳天皇ノ朝ニハ、女御藤原古子アリ、清和天皇ノ朝ニハ、女御藤原多美子アリ、陽成天皇ノ朝ニハ、姉子女王アリ、光孝天皇ノ朝ニハ、班子女王アリ、宇多天皇ノ朝ニハ、女御藤原温子アリ、而シテ其父攝關ノ職ニ居リテ勢力アリ、其所生ノ皇子、皇太子ト爲リ給フトキハ、下位ニ在ルモノ超進シテ皇太夫人ト爲リ、中宮ト稱ス、仁明天皇ノ女御藤原順子、文徳天皇ノ藤原明子(史ニ其文ナケレド、女御タリシナラン)、清和天皇ノ藤原高子ノ如キ是ナリ、藤原基經ノ女穩子、醍醐天皇ノ女御ト爲リ、尋デ皇后ト爲ルニ至リテ女御ノ位益貴シ、是ヨリ後直ニ皇后タリシモノハ極メテ少クシテ、概ネ女御ヨリ進ミシナリ、故ニ女御ハ多クハ攝關等ノ女ヲ以テ之ニ充テタリ、是ニ於テ女御入内ノ儀アリテ、直ニ三位ニ叙シ、職員ヲ置キ、朝廷ヨリ書ヲ賜フアリ、又命名アリ、著袴等ノ事アリテ、其式頗ル壯ナリシガ、南北朝ノ頃ヨリ女御入内ノ儀全ク廢絶セリ、其後、後陽成天皇ノ朝ニ、豐臣秀吉、近衛前久ノ女ヲ養ヒテ、掖庭ニ入レテ女御トナシテヨリ、女御入内ノ儀マタ興ル、

〔延喜式中務十二〕後宮時服

嬪、絹四十疋、細布廿端、曝布卅端、冬加綿二百屯、〇中略前件時服、夏四月五日、冬十月五日、内侍具錄人數及物色、移省造解文申官、

〔延喜式式部十八上〕凡嬪以上位分資人、不在減限、

〇按ズルニ、當時供給ノ制、女人ハ凡テ半減ナリ、然レドモ嬪以上ニ至リテハ其限ニアラズ、故ニ不在減限ト云フ、

嬪字初見

〔小野宮年中行事〕四月五日中務省申妃夫人嬪女御夏衣服文事

〔小野宮年中行事〕十月四日中務省申妃夫人嬪女御冬衣服文事

〔日本書紀履中十二〕六年二月癸丑朔、喚鯽魚磯別王之女大姫郎姫、高鶴郎姫、納於後宮、並爲嬪、

補任

〔日本書紀用明二十一〕元年正月壬子朔、立蘇我大臣稻目宿禰女石寸名、爲嬪、是生田目皇子、更名豐浦皇子、

〔日本書紀天智二十七〕七年二月戊寅、納四嬪、有蘇我山田石川麻呂大臣女、曰遠智娘、〇中略次有遠智娘弟、曰姪娘、〇中略次有阿倍倉梯麻呂大臣女、曰橘娘、〇中略次有蘇我赤兄大臣女、曰常陸娘、〇下略

〔續日本紀一文武〕高天原廣野姫天皇十一年〇文武元年八月癸未、紀朝臣竈門娘石川朝臣刀子娘爲嬪、〇刊本作妃、今據下文改、

貶黜

〔續日本紀六元明〕和銅六年十一月乙丑、貶石川紀二嬪〇文武號、不得稱嬪、

嬪

嬪ハ夫人ニ次グルモノナリ、古訓ミメト云フ、日本書紀履中天皇ノ紀ニ、初テ見エタレド、亦追書ニ係レルナリ、大寶ノ制、嬪四員ヲ置キ、四位五位ト定ム、此嬪ノ名ハ、天智天皇文武天皇ノ兩朝ニ見エタルノミニテ、以後曾テ所見ナシ、

名稱

〔名目抄人體〕嬪ヒム

〔令義解一後宮職員〕嬪四員　右五位以上

〔令集解六職員〕古記云、尙書曰、嬪於虞氏、注云、嬪、婦也、

○按ズルニ、唐六典ニハ淑儀等ノ六儀アリテ、之ヲ妃即チ夫人ノ下ニ居キ、是ヲ周官ノ九嬪ニ擬ス、而ルニ我大寶令ニハ、嬪ヲ置キテ、之ヲ夫人ノ下ニ位セシメタリ、

待遇

〔延喜式四十一彈正〕凡車馬從者、〇中略嬪十八人、

〔延喜式五十雜〕凡乘輦車出入內裏者、妃限曹司、夫人及內親王限温明後涼殿後、〇中略但嬪女御及孫王大臣嫡妻乘輦限兵衛陣、

家司

〔令義解四考課〕凡家令、〇中略每年本主、准諸司考法立考、嬪以上、及內親王家事、繫宮內省、謂家事者、考事、即宮內省承主旨、定其考第也、考訖申省案記、准考應解者、同諸司法、

○按ズルニ、嬪以上ノ言ニ據レバ、妃夫人ニモ各家令アレドモ、今一々分載セズ、

供給

〔令義解四祿〕凡嬪以上、並依品位給封祿、謂欲顯不減半、故云依品位、其封祿是重優令、准男、資人位田、灼然不減、其春夏給號祿者、〇中略嬪、絁十二疋、糸廿四絇、布卅六端、若帶官者、累給、秋冬亦如之、以綿代糸、

〔令義解十雜〕凡給後宮及親王炭、謂嬪以上、其皇后者、自入供進之例、起十月一日盡二月卅日、其薪、知用多少量給、供進炭者、不在此例、

武藤原氏、〇吉子敬造刻檀釋迦牟尼佛像一軀、觀世音菩薩像一軀、虚空藏菩薩像一軀、〇下略

〔性靈集七〕和氣夫人於法華寺奉入千燈料願文一首、〇願文略

〇按ズルニ、和氣夫人本書目錄ニハ和命婦トアリ、眞ノ夫人カ未詳カナラザレドモ、姑ク此ニ附載ス、

〔日本紀略淳和〕弘仁十四年七月丁丑、故從三位夫人藤原朝臣吉子復號位、帳內資人亦依法行之、

〔日本紀略醍醐一〕昌泰元年六月廿二日、依天下疾疫、遣宣命使於藤原夫人〇桓武夫人吉子墳墓、

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年四月甲午朔、從三位中務卿石上朝臣乙麻呂宣、〇中略縣犬養橘夫人乃天皇御世重氏明淨心以氏仕奉利、皇朕御世當氏毛無怠緩事久助仕奉利加以祖父大臣乃殿門荒穢須事無久守川川在自之事、伊蘇之美宇牟賀斯美忘不給止自氏奈母孫等一二治賜夫、〇下略

〇按ズルニ、縣犬養橘夫人ハ、名ヲ三千代ト云フ、藤原不比等ノ妻ニシテ、聖武天皇ノ皇后安宿媛ノ母ナリ、此ハ眞ノ夫人ニアラズ特例ナリ、

〔續日本紀九元正〕養老七年正月丙子、授夫人〈○文武〉藤原朝臣宮子從二位、〈○藤原、原作土、今據日本紀略訂、〉

〔續日本紀十二聖武〕天平九年二月戊午、天皇臨朝、授夫人無位藤原朝臣二人〈名闕〉並正三位、

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年四月甲午朔、授正三位橘夫人〈○古那可智、後賜廣岡朝臣姓、〉從二位、

〔續日本紀九聖武〕神龜元年七月庚午、夫人〈○天武〉正三位石川朝臣大蕤比賣薨、遣從三位阿倍朝臣廣庭、正四位下石川朝臣石足等、監護葬事、又遣中納言正三位大伴宿禰旅人等、就第宣詔、贈正二位、賻絁三百匹、絲四百絢、布四百端、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字四年正月辛卯、從二位藤原夫人〈○聖武〉薨、贈正一位、太政大臣房前之女也、

〔續日本紀二十四淳仁〕天平寶字六年十月己未、夫人正三位縣犬養宿禰廣刀自薨、賻絁百疋、絲三百絢、布三百端、米九十石、夫人者讚岐守從五位下唐之女也、聖武皇帝儲貳之日、納夫人、生安積親王、年未弱冠、天平十三〈○三、作六、〉年薨、又生井上內親王、不破內親王、

〔日本紀略淳和〕弘仁十四年六月甲午、正三位多治比眞宗薨、參議從三位長野之女也、初桓武天皇入之掖庭、生六親王云々、贈正二位、時年五十五、　丙申、任葬司、四位二人、五位五人、六位已下十一人、丁酉、天皇詔旨〈止〉夫人〈眞宗〉多治比眞人〈闕〉云々、

〔文德實錄七〕齊衡二年十月丙戌、夫人〈○嵯峨〉從三位藤原朝臣緒夏薨、夫人贈左大臣從一位內麻呂之女也、弘仁元年十一月敍從五位上、三年正月敍從四位下、立爲夫人、六年七月敍從三位、薨後贈正二位、

○按ズルニ、日本後紀、類聚國史ノ二書ニ、緒夏ノ夫人トナルヲ以テ、之ヲ弘仁六年ノ下ニ係ケタリ、然ルニ實錄獨リ三年トナス、位階ニ據リテ之ヲ推スニ、二書蓋シ誤レリ、

〔性靈集六〕東太上爲故中務卿親王、造刻檀像願文、

伏惟皇帝陛下〈○嵯峨〉允仁允慈、含弘光大、且智且文、道義是親、所以爲故中務卿親王〈○伊豫〉及故夫人〈○桓

補任

〔日本書紀二十敏達〕四年正月甲子、是月立一夫人、春日臣仲君女、曰老女君夫人、（更名藥君娘也）

〔日本書紀二十三舒明〕二年正月戊寅、夫人蘇我島大臣女法提郎媛、生古人皇子、

〔日本書紀二十九天武〕二年二月癸未、夫人藤原大臣女氷上娘、生但馬皇女、次夫人氷上娘弟五百重娘、生新田部皇子、次夫人蘇我赤兄大臣女大蕤娘、生一男二女、其一曰穗積皇子、其二曰紀皇女、其三曰田形皇女、

〔萬葉集二相聞〕明日香清御原宮御宇天皇〇天武代天皇賜藤原夫人御歌一首〇歌略

〔萬葉集八夏雜〕藤原夫人歌（明日香清御原御宇天皇之夫人（五百重娘）也、字曰大原大刀自、即新田部皇子之母也、〇歌略）

〔萬葉集二十〕藤原夫人歌一首（淨御原御宇天皇之夫人也、字曰氷上大刀自也、〇歌略）

〔續日本紀一文武〕高天原廣野姫〇持統天皇十一年〇文武元年八月癸未、以藤原朝臣宮子娘為夫人、

〔續日本紀十七聖武〕天平二十年六月壬寅、正三位藤原夫人薨、贈太政大臣武智麻呂之女也、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字三年七月己巳、夫人〇聖武正三位廣岡朝臣古那可智薨、正四位上橘宿禰佐為之女也、天平勝寶九歲八月十八日、有勅賜性廣岡朝臣、

〔一代要記二光仁〕夫人高野新笠（贈正一位乙繼女）

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年八月己丑、從三位藤原朝臣曹子為夫人、

〔續日本紀三十七桓武〕延暦二年二月甲寅、正三位藤原朝臣乙牟漏、從三位藤原朝臣吉子、並為夫人、

〔續日本紀三十九桓武〕延暦五年正月戊申、以從三位藤原朝臣旅子為夫人、

〔帝王編年記十二桓武〕萬多親王（母夫人藤原小屎、鷹取女、）

〔類聚國史四十後宮〕大同四年六月丁亥、橘朝臣某〇嘉智子多治比眞人高子為夫人、

〔日本後紀二十四嵯峨〕弘仁六年七月壬午、從四位下藤原朝臣緒夏為夫人、

〔一代要記二嵯峨〕夫人正三位藤產子、（弘仁二年從三位、次正三位、後為夫人、）

〔延喜式三十三大膳下〕親王以下月料

夫人、醤一斗二升、日四合未醤六升、日二合鹽一斗五升、日五合東鰒八斤、日四兩三分隱岐鰒、堅魚、烏賊、海藻各六斤、日三兩二分堅魚七斤、日三兩二分五銖鮭十隻、日三分之一腊十八斤、日九兩三分三銖鮨廿斤、日十兩二分四銖堅魚煎、紫菜、海松各一斤、日三分二銖

〔延喜式三十五大炊〕親王以下月料

無品親王、内親王、妃、夫人、女御、日米各五升

〔延喜式四十主水〕凡齋内親王、〇中略夫人、〇中略起五月盡八月、日別一顆、〇氷

〔小野宮年中行事〕四月朔日主水司始貢氷事

中宮東宮起五月盡八月、齋内親王妃夫人尚侍相同雜給、起五月五日盡八月卅日、具在主水司式、

〔小野宮年中行事〕四月五日中務省申妃夫人嬪女御夏衣服文事

〔小野宮年中行事〕十月四日中務省申妃夫人嬪女御冬衣服文事

賜封

〔續日本紀三文武〕慶雲元年正月壬寅、詔御名部内親王、石川夫人、〇天武益封各一百戸、

〔續日本紀十聖武〕神龜四年閏九月丁卯、皇子誕生焉、十一月己亥、詔曰、〇中略新誕皇子宜立爲皇太子、

戊午、賜從三位藤原夫人〇皇太子母光明子食封一千戸、

〔日本紀略嵯峨〕大同四年十二月甲午、夫人正四位下橘朝臣嘉智子、正四位下多治比眞人高子二人、賜封各一百戸、

待遇

〔延喜式三十八掃部〕凡設座者、〇中略夫人錦草墪、黄地覆錦夫、紫地車前子兩面縁、縹東絁裏、

〔延喜式四十一彈正〕凡車馬從者、〇中略夫人廿人、

〔延喜式五十雜〕凡乘輦車出入内裏者、妃限曹司、夫人及内親王限温明後凉殿後、

夫人字初見

〔日本書紀十二反正〕元年八月己酉、立大宅臣祖木事之女津野媛爲皇夫人、生香火姫皇女、圓皇女、

夫人

夫人ハ、其位妃ニ次グルモノナリ、古訓ニ、ミメ、キサキ、或ハオホトジト云フ、夫人ノ名ハ、日本書紀反正天皇ノ紀ニ初テ見エタレドモ、是亦後世ヨリ追書セルモノニテ、當時此稱アリシニアラズ、大寶ノ制、始メテ夫人三員ヲ置キ、三位以上トシ、多ク大臣ノ女ヲ以テ之ニ充ツ、爾後歷朝大カタ絶ユルコト無カリシガ、淳和天皇以來復此名稱ヲ見ザルニ至ル、蓋シ女御更衣等ノ職起ルニヨリ、自然廢絶ニ歸シタルモノナルベシ、

歷朝ノ間ニ於テ、人臣ノ妻ニシテ夫人ノ稱ヲ得シモノハ、藤原不比等ノ後妻橘三千代一人ノミ、其薨後ニ太夫人ト爲レリ、亦此外ニ其例ヲ見ズ、

制度

〔令義解一後宮職員〕夫人三員、右三位以上

〔令集解六職員〕古記云、漢書云、天子妾稱夫人、

○按ズルニ、唐六典ニハ惠妃麗妃華妃ヲ夫人ト云ヒシガ、我邦ニハ妃ノ下ニ、夫人ヲ置ケリ、

〔令義解七公式〕太皇太后、謂天子祖母登后位者、爲太皇太后、居夫人位者、爲太皇太夫人也、太皇太妃太皇太夫人同、皇太后、謂天子母登后位者、爲皇太后、居夫人位者、爲皇太夫人也、皇太妃皇太夫人同、○中略

右皆平出

供給

〔令義解四祿令〕凡嬪以上、並依品位給封祿、謂欲顯不減半、故云依品位、其封祿是重、優令准男、貴人位田灼然不減、其春夏給號祿者、○中略夫人絁十八疋、糸卅六絇、布五十四端、○中略若帶官者、累給、秋冬亦如之、以綿代糸、

〔延喜式十二中務〕後宮時服

夫人、絹五十五疋、細布卅端、曝布五十端、冬加綿二百五十屯、○中略前件時服、夏四月五日、冬十月五日、內侍具錄人數及物色移、省造解文申官

補任式

〔諸官符案〕太政官符
中務式部民部宮內等省
　三品爲子內親王
右大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣時平宣、奉勅以件內親王定爲妃者、省承知、符到奉行、
藤原朝臣枝良　　遣唐錄事從七位上守左少史
　寬平九年七月廿五日、

以夫人爲妃

〔日本後紀二十四 嵯峨〕弘仁六年七月壬午、夫人從三位多治比眞人高子爲妃、

叙位

〔日本紀略 醍醐一〕寬平九年七月廿五日戊戌、以無品爲子內親王、叙三品爲妃、

贈位

〔日本紀略 淳和〕天長三年三月己巳、妃〇嵯峨從二位多治比眞人高子薨、贈從一位、年卅九、遣使就第詔曰云々、

贈妃

〔日本紀略 醍醐一〕昌泰二年三月十四日丁未、妃三品爲子內親王薨、天皇不視事三日、　廿一日甲寅、贈故妃爲子內親王一品、兼給大藏省商布民部省米、宛喪料云々、差中納言藤原國經等爲使、就家宣制、
〔續日本紀三十九 桓武〕延曆七年五月辛亥、夫人從三位藤原朝臣旅子薨、詔遣中納言正三位兼中務卿藤原朝臣小黑麻呂、參議治部卿正四位下壹志濃王等、監護喪事、又遣中納言從三位兼兵部卿皇后宮大夫石川朝臣名足、參議左大辨正四位下兼春宮大夫中衛中將紀朝臣古佐美、就第宣詔、贈妃幷正一位、妃、贈右大臣從二位藤原朝臣百川之女也、延曆初納於後宮、尋授從三位、五年進爲夫人、生大伴親王、薨時年三十、

辭職

〔日本後紀二十二 嵯峨〕弘仁三年五月癸酉、妃〇平城二品朝原內親王辭職許之、　癸未、妃四品大宅內親王辭職許之、

第一の御子山部親王をたて申賜ふべしと申き、〇中略濱成申ていはく、山部親王は御母いやしくおはす、いかでか位につき賜はんと申しかば、御門なことにさる事也、酒人内親王をたて申さんとのたまひき、

〇按ズルニ、酒人内親王ハ、井上皇后ノ女ニシテ、桓武天皇ノ庶妹ナリ、然ルニ大日本史后妃傳ニ、日本後紀ノ贈吉野皇后ヲ、桓武天皇ノ御母高野贈皇后ノ事トシ、桓武天皇ト酒人内親王トヲ、同皇后ノ所生トセシハ誤ナリ、其御同母ニアラザルコトハ上文ニテ明ナリ、

〔類聚國史四十後宮〕大同四年六月丁亥、立高津内親王爲妃、

次妃

〔日本書紀四孝元〕七年二月丁卯、次妃河内青玉繋女埴安媛、生武埴安彦命、

〔日本書紀四開化〕六年正月甲寅、次妃和珥臣遠祖姥津命之妹姥津媛、生彦坐王、

〔日本書紀五崇神〕元年二月丙寅、次妃尾張大海媛、生八坂入彦命、

〔日本書紀七景行〕四年二月甲子、次妃五十河媛、生神櫛皇子、〇中略次妃阿倍氏木事之女高田媛、生武國凝別皇子、〇中略次妃日向髪長大田根媛、生日向襲津彦皇子、〇中略次妃襲武媛、生國乳別皇子、

〔日本書紀十應神〕二年三月壬午、次妃和珥臣祖、日觸使主之女、宮主宅媛、〇中略次妃宅媛之弟、小甂媛小甂此云烏儺謎、〇中略次妃河派仲彦女弟媛、〇中略次妃櫻井田部連男鉏之妹糸媛、〇中略次妃日向泉長媛、

〔日本書紀十七繼體〕元年三月癸酉、納八妃、〇中略次妃三尾角折君妹曰稚子媛、〇下略

〔日本書紀十九欽明〕二年三月、納五妃、〇中略次妃蘇我大臣稻目宿禰女曰堅鹽媛、堅鹽此云岐拕志、生七男六女、〇下略

〔日本書紀二十五孝德〕大化元年七月戊辰、立二妃、〇中略次妃蘇我山田石川麻呂大臣女曰乳娘、

〔日本書紀二十九天武〕二年二月癸未、先納皇后姉大田皇女爲妃、生大來皇女與大津皇子、次妃大江皇女生長皇子與弓削皇子、次妃新田部皇女、生舍人皇子、

庶妃

〔日本書紀十八宣化〕元年三月己酉、前庶妃大河内稚子媛、生一男、是曰火焔皇子、是椎田君之先也、

此云區玖利能彌椰、鯉魚浮池、朝夕臨視而戯遊、時弟媛欲見其鯉魚遊、而密來臨池、天皇則留而通之、爰弟媛以爲、夫婦之道、古今達則也、然於吾而不便、則請天皇曰、妾性不欲交接之道、今不勝皇命之威、暫納帷幕之中、然意所不快、亦形姿穢陋、久之不堪陪於掖庭、唯有妾姉、名曰八坂入媛、容姿麗美、志亦貞潔、宜納後宮、天皇聽之、仍喚八坂入媛爲妃、

〔日本書紀八仲哀〕二年正月甲子、先是娶叔父彦人大兄之女大中姫爲妃、

〔日本書紀十應神〕二年三月壬午、先是天皇以皇后姉高城入姫爲妃、○中略 又妃皇后弟弟姫、

〔日本書紀十一仁德〕二年三月戊寅、妃日向髮長媛、生大草香皇子、幡梭(ハタヒノ)皇女、

〔日本書紀十二履中〕元年七月壬子、立葦田宿禰之女黑媛爲皇妃、

〔日本書紀十三安康〕元年二月戊辰朔、爰取大草香皇子之妻中蒂(ナカシ)姫、納于宮中、因爲妃、

〔日本書紀十八安閑〕元年三月戊子、立三妃(ミメ)、許勢男人大臣女紗手媛、紗手媛弟香香有媛、物部木蓮子(木蓮子、此云伊拖寐)大連女宅(ヤカ)媛、

〔日本書紀二十一崇峻〕元年三月、立大伴糠手連女小手子爲妃、是生蜂子皇子與錦代皇女、

〔一代要記二桓武〕妃三品酒人内親王(天皇庶妹也、齋宮後、天皇納之掖庭、寵幸第一也、)

〔日本後紀東大寺要錄所引〕天長六年八月丁卯、二品酒人内親王薨、廣仁(光仁)天皇之皇女也、母贈吉野皇后(○井上内親王)也、容貌妖麗、柔質窈窕、幼配齋宮、年長而還、俄叙三品、桓武納之掖庭、寵幸方盛、生皇子朝原内親王、爲性倨傲、情操不修、天皇不禁、任其所欲、婬行彌增、不能自制、弘仁中、優其衰暮特授二品、○中略 薨時年七十六、

〔水鏡下光仁〕寶龜四年正月十四日に、山部親王(○桓武)の中務卿と申しておはせし、東宮にたち給ふ、○中略 大臣以下、御門(○光仁)に申していはく、儲君はしばしもおはせずしてあるべき事ならず、すみやかに立て奉り賜へと申しかば、御門たれをかたつべきとの賜はせしかば、百川すゝみて、

元妃

〔日本書紀神代二〕一書曰、天照大神、以思兼神妹萬幡豐秋津姫命、配正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊爲妃、

〔日本書紀神武三〕天皇生而明達、意礭如也、○中略長娶日向國吾田邑吾平津媛爲妃、生手研耳命、

〔日本書紀雄略十四〕元年三月、是月立三妃、元。妃。葛城圓大臣女曰韓媛、○中略次有吉備上道臣女稚媛、○中略次有春日和珥臣深目女、曰童女君、○下略

〔日本書紀繼體十七〕元年三月癸酉、納八妃、元。妃。尾張連草香女曰目子媛、更名色部

〔日本書紀欽明十九〕二年三月、納五妃、元。妃。皇后弟、曰倉稚綾姫皇女、是生石上皇子、次有皇后弟、曰日影皇女、是生倉皇子、

〔日本書紀孝德二十五〕大化元年七月戊辰、立息長足日廣額天皇舒明○女、間人皇女爲皇后、立二妃、元。妃。阿倍倉梯麻呂大臣女曰小足媛、生有間皇子、

正妃

〔日本書紀神武三〕庚申年九月己巳、納媛蹈鞴五十鈴媛命以爲正。妃。

〔日本書紀宣化十八〕元年三月己酉、詔曰、立前正。妃。億計天皇女橘仲皇女爲皇后、

〔日本書紀天武二十八〕納天命開別天皇女、菟野皇女爲正。妃。

單稱妃

〔日本書紀孝元四〕二年二月丙寅、妃倭國香媛亦名絙某姉生倭迹迹日百襲姫命、○中略亦妃絙某弟生彥狹島命、○下略

〔日本書紀孝元四〕七年二月丁卯、○中略妃伊香色謎命生彥太忍信命、

〔日本書紀開化四〕六年正月甲寅、先是天皇、納丹波竹野媛爲妃、

〔日本書紀崇神五〕元年二月丙寅、妃紀伊國荒河戸畔女、遠津年魚眼眼妙媛、○中略生豐城入彥命、○下略

〔日本書紀垂仁六〕十五年八月壬午朔、立日葉酢媛命爲皇后、以皇后之三女弟爲妃、

〔日本書紀景行七〕四年二月甲子、天皇幸美濃、左右奏言之、玆國有佳人曰弟媛、容姿端正、八坂入彥皇子之女也、天皇欲得爲妃、幸弟媛之家、弟媛聞乘輿車駕、則隱竹林、於是天皇權令弟媛至、而居于泳宮、泳宮

待遇

七斤八兩、(日四兩)鮭十五隻、(日二分之一)腊十八斤十二兩、(日十兩)鮨廿五斤十兩、(日十三兩二分一銖)堅魚煎、紫菜、海松各一斤十四兩、(日一兩)

〔延喜式　三十五大炊〕親王已下月料

無品親王、內親王、妃、夫人、女御、(日米各五升)

〔延喜式　四十主水〕凡齋內親王、妃、(中略)起五月、盡八月、日別一顆、(氷)

〔小野宮年中行事〕四月朔日、主水司始貢氷事

中宮東宮起五月盡八月、齋內親王妃。夫人尙侍相同、雜給起五月五日盡八月卅日、具在主水司式、

〔延喜式　四十一彈正〕凡車馬從者、(中略)其妃廿二人、

〔小野宮年中行事〕四月五日、中務省申妃夫人嬪夏衣服文事

〔小野宮年中行事〕四月十日、中務省奏後宮幷女官夏時服文事

〔小野宮年中行事〕十月三日以前、點定五節舞姬事

藏人頭奉仰、召仰可獻五節舞姬之公卿或親王、但后妃女御尙侍可獻之、別遣中使令仰示矣、

〔小野宮年中行事〕十月四日、中務省申妃夫人嬪女御冬服衣服文事

〔延喜式　三十八掃部〕凡設座者、(中略)妃夫人錦草墪(黃地覆錦錦表、紫地車前子兩面緣、縹束絁裏、)

〔延喜式　五十雜〕凡乘輦車出入內裏者、妃限曹司、

〔延喜式　五十雜〕凡乘車出入宮城門者、妃已下大臣嫡妻已上限宮門外、

凡大嘗聽妃已下三位已上及大臣嫡妻、

妃字初見

〔日本書紀　一神代〕一書曰、是時素戔嗚尊下到於安藝國可愛之川上也、彼處有神、名曰脚摩手摩、其妻名曰稻田宮主簀狹之八個耳、(中略)是後以稻田宮主簀狹之八個耳生兒眞髮觸奇稻田媛、遷置於出雲國簸川上、而長養焉、然後素戔嗚尊以爲妃、

制度

〔令義解一後宮職員〕妃二員 右四品以上

〔令集解六後宮職員〕古記云、禮記○曲禮云、天子之妃曰后、令法用妃以下皆爲妾也、朱云、妃二員、謂皇后之次妻也、凡妃夫人嬪者、並皆天子之婦也、其高下者如文列也、婦數有若干色可習也、如臣下不可准思妻妾耳、

〔唐六典十二内官〕妃三人正一品、周官三夫人之位也、 夫人佐后、坐而論婦禮者也、其於内則無所不統、故不以一務名焉、

〔令義解一後宮職員〕後宮職員令第三、謂妃夫人嬪、此無所掌而處職員者、下有十二司、擧其多者言之職員、

〔類聚符宣抄六〕中納言兼兵部卿藤原朝臣繩主宣、奉勅、少納言奏、有稱妃某姓邑刀自之辭、自今以後、宜除姓只稱妃邑刀自、若有兩妃事須相疑者、更聽勅裁、

弘仁八年六月廿三日 少外記高丘宿禰潔門奉

〔令義解七公式〕太皇太后謂天子祖母登后位者、爲太皇太后、居妃位者、爲太皇太妃、居夫人位者、爲太皇太夫人也、 太皇太妃、太皇太夫人同、

皇太后謂天子母登后位者、爲皇太后、居妃位者、爲皇太妃、居夫人位者、爲皇太夫人也、 皇太妃、皇太夫人同、○中略

右皆平出

供給

〔令義解四祿〕凡嬪以上、並依品位給封祿、謂欲頗不減中、故云依品位、其封祿是重、優令准男、貴人位田、灼然不減、其春夏給號祿者、妃、絁廿疋、糸卌絇、布六十端、○中略若帶官者、累給、秋冬亦如之、以綿代糸、

〔延喜式十二中務〕後宮時服

妃、絹六十疋、細布卌端、貲布五十端、冬加綿三百屯、○中略 前件時服、夏四月五日、冬十月五日、内侍具錄人數及物色、移省造解文申官、

〔延喜式三十三大膳下〕親王以下月料

妃、醬一斗二升、日四合、末醬六升、日二合、鹽一斗五升、日五合、東鰒九斤六兩、日五兩、隱岐鰒、堅魚、烏賊、海藻各

古事類苑

帝王部二十一

妃

名稱

妃ハ、皇后ノ次位ニ在ル御妻ノ稱ナリ、古訓ニ、ミメト云フ、即チ御妻ノ義ナリ、又キサキト云フ、其訓后ニ同ジ、キサキトハ專ラ言ヘバ皇后ヲ指シ、汎ク言ヘバ御寢ニ侍スルコトナレバ、妃ニモ此訓ハアルナリ、日本書紀ニ據ルニ、神代ヨリ此名アレド、後世ヨリ追書セシモノナレバ、其何ノ時ニ起レルヲ知ラズ、故ニ元妃ト曰ヒ、正妃ト曰ヒ、次妃庶妃ト曰ヘルモ、汎ク其等級ヲ擧グルニ過ギズ、文武天皇ノ大寶制令ニ至リ、妃二員ヲ置キ、其品秩ヲ四品以上ト定メタリ、品ハ皇族ノ位階ナレバ、皇族ヲ以テ之ニ充テタルナリ、是ニ於テ、妃ノ制度始テ見ハル、然レドモ當時妃ト稱スルモノ甚ダ少シ、僅ニ大寶元年七月ノ紀ニ、皇太妃(恐クハ元明天皇ヲ指セルナラン、)ノ名アルノミ、桓武天皇ノ時ニ至リ、夫人藤原旅子ニ妃ノ號ヲ贈ル、是ヲ制令後ノ再見トス、此時皇族ヲ以テ充ツルノ制ハ既ニ壞レタリ、是ヨリ後妃ノ稱ノ史上ニ見ハルヽモノ、僅ニ二三ニ過ギズ、

〔新撰字鏡 女〕娓(以之、以爲二反、妃也、支佐支、)

〔類聚名義抄 女二〕妃(ニ非反、キサキ、)

〔名目抄 人體〕妃(ヒ)

〔伊呂波字類抄 比十〕妃(ヒ)嘉偶曰レ妃、后妃也、

更衣進爲女御　同

雜載　同

御息所

後宮雜載

更衣

女御

夫人

嬪

古事類苑

帝王部二十一

妃

嘉永三年二月廿七日

大外記兼掃部頭造酒正中原朝臣師身奉

左少辨藤原朝臣保傳宣

權大納言源朝臣基豐宣奉

勅、從三位藤原朝臣雅子封宜ㆍ宛ㆍ賜壹仟戶ㆍ者、

嘉永三年二月廿七日　修理東大寺大佛長官主殿頭兼左大史小槻宿禰輔世奉

勅、母因ㆍ子貴、竹帛所ㆍ存、封因ㆍ位厚、禮典所ㆍ重、爰從三位藤原朝臣雅子奉ㆍ仕先皇、〇仁孝無ㆍ險詖之心、誕ㆍ育當今、〇孝明致ㆍ慈愛之誠、今以ㆍ報酬之誠實、特准ㆍ三宮之崇班、宜ㆍ授ㆍ邑土千戶、任人賜俸、一如ㆍ舊典、主者施行、

御畫二十七

嘉永三年二月〇〇日

剃髮後准三宮

〔女院小傳〕西華門院、源基子　後宇多妃、後二條母、內大臣具守一女、父大相國基具爲ㆍ子、母從三位平親繼女、弘安八、月日奉ㆍ誕ㆍ後二條、十七、或十六、德治三、八、廿六爲ㆍ尼、〇〇淸淨法、卅、依ㆍ後二條御事ㆍ也、延慶元、十一、廿七叙ㆍ從三位、十二月准〇三〇宮〇、同日院號、

〔女院小傳〕萬秋門院、頊子　圓明寺關白〇藤原實經女、母中納言典侍、中納言成俊女乾元二、三、五爲ㆍ後二條尙侍、卅六同日叙ㆍ從三位、德治三、後八、十六爲〇尼〇、後二條御事、四十一、元應二、三、廿六准三宮、五十三同日院號、建武五、三、廿六御事、七十

贈准三宮

〔續三宮傳〕新崇賢門院、中御門院御親母　寶永六年十二月廿九日薨、同七年三月廿六日、贈准三宮、〇節略

〔續三宮傳〕東京極院、仁孝帝御親母　天保十四年三月廿一日薨去、六十四歲同十五年二月十三日贈〇准〇三〇宮、〇節略

〔百一錄〕延寶五年七月五日、戌下刻陣儀始、新中納言殿（○藤原國子、靈元帝母）被任准后宣下云々、上卿今出河大納言、今曉新中納言殿薨逝、御年序五十有四云々、今上皇帝（○靈元）之御萱堂（○國子）、園亞相基福卿妹、東園大納言（○基賢）姉公也、御一腹之宮方、主上御方、妙門一乘院、青蓮院宮、大聖寺殿級宮御方（近衛殿內室）云々、無觸穢諒闇之儀云々、但三日御廢朝、三日內著御喪服、

〔續三宮傳〕敬法門院（東山帝御母、諱宗子、）親松木前內大臣宗條公女、號大納言局、（後稱上﨟局、又大典侍局、）元祿二年正月廿九日准三宮、正德元年十月廿三日門號定、

〔嘉永三年二月廿七日准三后門號宣下次第〕准三后宣下次第

上卿著仗座、（奥）職事來仰、仰詞、（仰、從三位藤原朝臣雅子（孝明母后）チ以三宮ニ准シ、御封千戸ヲ宛賜ハラシメヨ、）次上卿移著端座、令官人敷軾、次上卿令官人召文章博士、博士著軾、次上卿仰勅書事、博士進勅書草、上卿披見、訖目許博士退、次上卿召官人、仰可令持參於內記筥由、內記進筥、次上卿入於文筥賜內記、內記取之立小庭、次上卿起座、就弓場（內記相從）附職事、內覽奏聞訖返賜、次上卿復仗座（內記置筥）返給、仰可清書之由、次內記進清書、（入筥）上卿披見起座、更就弓場、附職事奏聞如初、訖返賜、次上卿於弓場見御畫有無、次上卿復仗座、內記置筥座前退、次上卿令官人召大外記、問中務輔候否、仰可召由、中務敷軾、次上卿下勅書、（作筥入）輔取之退、次上卿令官人召大外記、大外記參軾、上卿仰年官年爵事、外記稱唯退、次上卿令官人召辨、辨參軾、上卿仰封戶事、辨稱唯退、次上卿令官人撤軾、次上卿起座退出、

准后宣下上卿辨廣幡大納言胤保、奉行頭右中辨資宗朝臣、准后宣下參仕外記方、少外記邦昌、副使宗岡行誠、使部中務省少䘚職孚、內記局少邦昌、掃部寮權助藤原利政、陣官人橘久芳、（○中略）

宣旨勅書等、兩局幷中務省、本殿ヘ持參、

正二位行權大納言兼右近衛大將源朝臣基豐奉宣
勅以從三位藤原朝臣雅子宜賜准三宮年官年爵者

官年爵者、

文安元年四月廿六日　大外記中原朝臣師鄕才

〔和長卿記〕大永六年五月廿日壬寅、今夜東洞院殿〇後奈良母后藤子有准后宣下事云々、上卿大納言公條卿著陣、官外記各自參陣云々、勅書事兼日爲大内記爲康前菅相公相代作草、今度職事頭辨誤以詔書分送、御教書仍詔書之草也、予云、准后宣下必可爲勅書之子細令演說、同舊草等出授之間、令承諾畢、又彼相公所作草之文、贈准后之勅書之樣也、一向不及沙汰不可然之間改直者也、其文者朕叔妣也、又國忌山陵如舊典云々、本文生云父母死云考妣、叔妣何哉、年官年爵可書載處、國忌山陵何哉、云彼云是言語道斷也、

今度草

勅、天之所覆、遍成造化之功、人之所親、莫過母子道、前從三位藤原朝臣藤子者、奉前朝得寵幸第一之譽、登庸被進、無險詖私謁之心、平生在溫柔、內訓垂法、頃日依踐祚褒章呈誠、上以三品重准后宮、宜授邑士千五百戶、任人賜爵一如舊典、主者施行、

大永六年五月御畫日

昭宣公、元慶六年二月准三后勅書、任人賜爵准三宮、如忠仁公故事云々、凡法中之准后、女中之准后之勅書者、任人賜爵之文宜云々、左右近衞帶仗資人卅人等除之故也、內舍人二人計賜之也、爲後規巨細注之、爲散菅相公之惑也、

〔執次詰所本御系譜〕後陽成院御母、新上東明院、准三后晴子、勸修寺內大臣晴右公女、

〔執次詰所本御系譜〕清子內親王、〇後陽成皇女母中和門院、〇後水尾帝母准三后藤前子、近衞入道前關白太政大臣前久公女、元和六年六月二日門號定、寬永七年七月三日崩、五十六歲、

〔百一錄〕貞享二年五月廿二日、御匣殿〇後西院帝母藤原隆子被任准后云々、今日薨御、八十二才、

〔康富記〕文安元年四月廿六日乙巳、參伏見殿、〇中略今夜有准后宣下事、國母（今（後花園）幷二宮之御母儀、伏見入道親王（後崇光）北政所、）令蒙此宣旨給、上卿權大納言藤原公保卿、按察使職事左中辨藤原俊秀、大外記師鄉朝臣、六位外記不參、官務不參、六位史安倍盛時、中務權大輔源家種等參之、大內記菅原在治、依違例不參、以六位史盛時（非少內記）爲少內記入勤代、召仰勅書草進事、即持參草、（大內記內々作進之、侯密々儀付職事云々、職事被下內記代、）上卿召中務輔被下之、召大外記師鄉朝臣、被仰年官年爵事、次召左中辨、被仰封戶事、辨仰六位史云々、御名字從三位源幸子也、故源宰相經有卿息女也、仍爲經子、而被改之爲幸子云々、今上皇帝（〇後花園）爲後小松院御養子、仍光範門院（〇後小松后）爲御養母、雖然兩院共非御存生之間、實之御父母伏見宮幷上樣也、可爲御實母歟之由、自禁裏被尋申前攝政殿下處、可爲御實母之由者也云々、前攝政殿被申御意見、仍詔書之文被載御實母由者也云々、及曉更中務輔家種、（東帶、劒、）持參詔書於伏見殿、（于時土御門高倉南面角、權大納言實量卿亭也、自去年冬爲竹園御所、國母御同宿也、）大外記師鄉朝臣（東帶）持參年官年爵宣旨云々、於東向御緣被召入宣旨詔書畢、庭田中將源重賢朝臣（衣冠）爲申次云々、其後左大史晨照宿禰（東帶）持參封戶宣旨云々、今月宣下分配予也、自局務送狀可參陣之處、有故障、可構參之由被相催之間、致領掌之處、可參之由又被示之、予不令參陣也、次職事左中辨令立寄給、被語云、今夜大內記不參也、爲少內記可被參陣、詔書作進事、可被致用意之由被仰之間、予申云、於宣命位記等者、少內記草進、有連綿之例、於詔勅者頗希也、且當座不覺悟之由申了、及半更自禁裏職事度々雖被招引、不令參仕者也、如案於詔書者、菅左大丞等有申子細、被載朕之母也之字云々、又幸子事、武家鹿苑院相國（〇足利義滿）之養母之御名也、雖然非女院之由有御沙汰、不被憚之云々、左大辨益長卿被撰進歟、本御名字經子也、强無其憚歟、幸子事、貞治二年六月廿九日敍從三位、應安二年十一月廿五日又二品歟、雖然非女院准后之列之間、不可被憚之由左大辨被申之、

正二位行權大納言兼陸奥出羽按察使藤原朝臣公保宣、奉勅以從三位源朝臣幸子准三宮宜賜年

妃爲准母

〔女院小傳〕皇嘉門院、（藤聖子）崇德后、近衞准母、法性寺關白（○藤原忠通）第一女、母大納言宗通卿女、從三位藤宗子、（○中略）大治五、二、廿一爲中宮、（○下略）

〔歷代皇紀（伏見）〕中宮藤鏱子、太政大臣實兼女、母內大臣源通成女、正應元年八月廿日冊、去六月八日爲女御、伏見院后、後伏見准母、

〔女院部類〕徽安門院壽子、花園院皇女、光嚴院妃、後光嚴院准母、建武四年二月五日院號、（○節略）

○

女御准三宮

〔扶桑略記（二十九後冷泉）〕永承六年六月廿四日、右大臣藤原朝臣敎通三女、女御歡子、准三宮、賜年官年爵封戶千戶、一云、七月十日准三宮云々、

〔扶桑略記（二十九後三條）〕延久四年十二月一日乙亥、女御源朝臣基子准三后、給年官年爵幷封戶五百烟、

〔一代要記（五白河）〕女御從四位下藤朝臣道子（內大臣能長一女、母贈從三位源濟政女、延久元年八月廿二日入太子宮、二十八、同五年七月廿三日爲女御、叙從四位下、承保二年十二月廿八日准三后、三十四、）

〔平戶記〕仁治三年十二月十八日丙寅、今日故四條院女御（○彥子）被下准后宣旨、殿下（○藤原實經）御猶子之儀云々、仍令申請給也、

帝母准三宮

〔續三宮傳〕新皇嘉門院（仁孝帝女御諱繫子）文化十四年十二月十一日入內、（廿一歲）同月十二日、女御宣下、（○中略）文政三年十二月廿六日、准三宮宣下、

〔玉海〕文治六年四月十九日壬寅、今日當今（○後鳥羽）母儀（○殖子）叙三品、即被下准后宣旨了、是予再三所奏請也、勅別當權中納言親信卿云々、（彼母儀伯父也、）上卿內大臣、

〔業資王記〕正治元年十二月十三日辛未、主上（○土御門）御母儀（○在子）被下准后宣旨、（追日三品、局、所勞殊大事云々、）

〔女院部類〕光範門院資子、贈左大臣藤資國女、准大臣資敎爲子、後小松院妾、稱光母、後花園養母、（○中略）應永三十一年七月廿九日准三宮、同日院號、

由被定申云々、仍今日有其定、内府以下卿相參著仗座、可號八條院之由各被定申、藏人大進於仗座仰以左衛門權佐爲親、近江守實清、(大宮年預)可爲判官代、次盛親(皇嘉年預)可爲主典代之由、内府召大外記師元宣下云々、后宮院號、以大夫爲別當、以進爲判官代、以屬爲主典代之由宣下、今度之儀、何樣可被仰下哉之由先被問公卿、判官代以下可被宣下、公卿院司逐可被仰下之旨被定申云々、仍如此、(中略)今日之次第頗迷可否歟、予下宿所之間、補判官代之由藏人告送、又迷是非、可參賀之由相公殿有返答、仍東帶(平緒、門部召具)、先參内、院司事畏申旨、付女房奏聞、次參八條殿、

〔女院小傳〕八條院、(暲子)鳥羽第三女、母長實卿女美福門院、保延四、四、九爲内親王、(二年)勅別當中納言伊通、(中略)久安二、四、十六准三后、保元二、五、十九爲尼、(廿一、金剛觀)、應保元、十二、十六乙卯院號、(依准母直有此事、兼問公卿殊有沙汰、年廿五、)建暦元、六御事、(七十五)

〔續世繼(三山)〕保延五年にや侍けん、つちのとのひつじのとし五月十八日、世になくけうらなる玉のをのこ宮(近衛)うまれさせ給ぬれば、院のうちさらなり、世中もうごくまでよろこびあへるさまいはんかたなし、(中略)日にそへてめづらかなるちごの御かたちなるにつけても、いかでかすかやかに、みこのみやにもくらゐにもとおぼせども、きさきばらにみこだちあまたおはしますを、さしこゆべきならねば、おもはしめしわづらふほどに、當代(崇徳)の御子になし奉り給ふ事いできて、みな月の廿六日、皇子内へいらせ給ふ、御供に上達部殿上人えらびて、常のみゆきにも心ことなり、みやこのうち車もさりあへず、みるもの所もなき程になん侍りける、内へいらせ給ふにてぐるまの宣旨など、藏人仰せつゝ、すでに參らせ給て、中宮(崇徳后聖子)を御母にて、まだ御子もうませ給はねば、めづらしくやしなひ申させたまふ、后の御おやにては、關白殿(藤原忠通)おはしませば、皇子のおはぢにて、かた〴〵みかどもきさきも御子おはしまさぬに、院(鳥羽)御心ゆかせ給て、いと心よき事いできて、いつしか八月十七日春宮にたゝせ給ふ、

出家後爲准母

由被仰云々、下官聞此事、心中所思、先帝(堀河)八歳即帝位、獨以行幸、其後及數年、強不可有母后要之處、以郁芳門院准母儀、有立后之事、故天道不受歟、今度今上(鳥羽)五歳、獨不可御輿中、必可有同輿人、然者又必可有立后也、帝實母早夭亡、仍此人尤謂昭穆已叶母儀、立后之事天之所許、世之所推、誠當其仁、何云非據哉、此旨密々先申殿下了、内大臣以下必可有立后由被申、〇中略　廿九日、今夕前齋院(令子)立后宣旨被下、是准母儀、先日令入内御東對也、

〔續世繼三大内渡〕院(〇鳥羽)の姫宮、(〇姝子)東宮(〇二條)の女御にまゐり給、高松院と申御事なり、前齋院とて、いまの上西門院(〇鳥羽皇女統子)おはしましゝを、御母(〇二條)にゐたてまつらせ給とうけ給はりしは、きさき美福門院おはしませば、べちの御母なくともおはしましぬべければ、いますこしねんごろなる御心にや侍りけん、

〔女院記〕殷富門院、(〇亮子)後白河院御女、母從三位藤原成子、安德顯德二帝准母儀、保元元年四月十九日内親王、卜定齋王、壽永元年八月十四日皇后宮、(年卅六)

坊門院、(〇範子)高倉院御女、土御門院准母儀、治承二年六月廿七日内親王、卜定賀茂齋院、(年二)建久五年八月退下、同六年十月廿一日准三宮、(年十九)同九年三月三日皇后宮、(年廿二)此日天皇(〇土御門)即位、准母儀、〇節略、

〔皇胤紹運錄〕春華門院(〇後鳥羽皇女昇子)一品皇后、順德院准母、

〔女院記〕安嘉門院、(〇邦子)後高倉院御女、(第二)母北白河院、中納言基家卿女、後堀河院准母儀、承久三年十一月廿五日内親王、(十三)同年十二月一日皇后宮、(年十三、此日天皇即位、准母儀、)

式乾門院、(〇利子)後高倉院御女、母北白河院、四條院准母儀、嘉祿二年十一月廿六日内親王、卜定齋王、天福元年二月五日伊勢ヨリカヘリ、同年六月廿日皇后准母后、

〔女院小傳〕遊義門院、(〇姈子)後宇多后、後二條准母、深草一女、〇中略　弘安八、八、十九爲皇后宮(十六)

〔爲親記〕應保元年十二月十六日甲寅、今日無品内親王障子、(〇鳥羽院姫宮也)被成母后之儀云々、仍可有院號之由、自去比沙汰出來云々、而内親王院號無先規歟、其間事被問人々云々、可爲母儀者、院號可宜之、

〔一代要記入堀河〕中宮媞子內親王（白河院長女、今上〈堀河〉母儀、〈中略〉寛治五年正月爲中宮、依爲母儀也、）

〔後二條關白記〕寛治五年正月廿二日壬午、予午時參內、著左仗奧座、此間宣命者、院被奏聞也、還歸參、宣命返給、〇中略

宣命

現神ト大八洲所知（須）倭根子天皇（〇堀河）詔旨（止宣）萬勅（布）大命ヲ、親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食ト宣、朕以幼齡（天）辱嗣寶位（利計）、而太上天皇（〇白河）之宣久（者）、無品內親王（〇白河皇女媞子）者同胞之親（天）ト之、心整操修（天）御坐（メル）、此內親王ヲ如所生（〇〇〇〇）（爾）相憑相賴□□□□□賜（ヘル）上（爾）、觸事（天）心與ニ依（天）如所生（爾）尊登（計）奉仕ト所念行（天）奈、故是以無品內親王ナ（云々、今日宣命書樣、內親王字下連而書皇后字、猶可被上云々、民部卿）皇后（爾）崇奉ル、此事者只朕（加）愚慮（爾）始行（布）事（爾）者非ズ、往代（乃）賢王（毋）舊迹有（ト）奈所聞念行ス、故此狀（乎）悟而供奉ト勅（布）天皇大命ヲ衆聞食ト宣、

寛治五年正月廿二日、

〔中右記〕嘉承二年閏十月九日、前齋院（〇白河皇女令子）准母儀（〇爲鳥羽）可有立后事、〇中略人々被申旨、諒闇之中不可有憚、至母后准一條院母后、猶早可有立后也、就中御即位日、必可令同輿給也、乍前齋院同輿之條、前字尤可有憚、下官申旨同之、殊加詞申云、我朝帝王、皇后齋王之外無乘輿人、仍尤可有立后也、前齋院尤可有憚、於帝妻者、即位以前立后、古人不許、於帝母者、彼東三條例尤吉例也、可被用也、十一月廿六日、仍召參殿下、是依可有僉議之事也、〇中略是前齋院依可有同輿事、前日令入內給了、而必可有立后歟、又與帝同可御大極殿高御座歟、清和母后、幷陽成院母后、其御即位日立后之由、同被載宣命文之故、今度可依彼例歟云々、此日者可有院（〇白河）御定由存之處、仰云、我卿有所思、此事左右不可知、只攝政（〇藤原忠實）與諸卿相議、爲朝家可爲善事之樣可量申者、仍俄所相定也、人々互可被申之由殿下被仰下也、（密々件事院御氣色云、非帝母非帝妻之人、先年故郁芳門院立后、世人不甘心之間、彼女院重惱之時、我悔此事、謝申大宮了、其後彼女院遂以不吉、每思出此事、全不可口入之）

五月四日遺令奏、卽警固、廢朝三ヶ日、止音奏、又有錫紵事、

五日左近騎射如常

七日除御錫紵、上御卷、又音奏被行解陣、十一日廢朝以後政始、

師茂

春花門院、（後鳥羽院皇女、順德院准母、）

建曆元年十一月七日御事、今日關白以下於殿上議此事、九日關白以下參院御所、議定大祀以下事、十一日大禮延引、可爲明年之由議定、

十二日諸社祭延否有其沙汰

十六日春花門院遺令奏、廢朝三ヶ日被仰警固事（無固關事）天皇著御錫紵、（卽御除）是日大原野、園韓神、鎭魂、新嘗祭停止、又大嘗會停止、大祓可行之由宣下、今夜春花門院御葬禮、十七日解陣

十九日大嘗會、新嘗會共停止、大祓、　廿二日廢朝以後政始、是日以後公事如例、

殷富門院、（後白河皇女、順德院養母、）

建保四年四月廿一日御事（件度公事書略無之、又被行事不見、）

匡遠　淸澄

遊義門院（後深草院皇女、後宇多院妻后、後二條院准母、日來國母儀、）

德治二年七月廿四日御事、廿六日御葬禮也、

八月四日北野祭御拜以下如例

同五日前遊義門院遺令奏、素服擧哀停止、廢朝三ヶ日、固關警固事被仰之、

主上著御錫紵、卽除御、可爲三ヶ日之由雖有沙汰、卽除御、　同七日開關解陣　同十五日石淸水放生會被付宮寺、

待賢門院 鳥羽院妻后、近衛院繼母、

久安元年八月廿二日御事、同廿九日遺令奏、廢朝云々、今度公家不召錫紵、

九月三日御燈依廢朝中停止、同四日開關解陣、

同七日廢朝以後政始

匡遠

從三位平盛子 高倉院御養母

治承三年六月十七日御事

七月廿日薨奏、廢朝三日、音奏停止同被仰之、警固之事無沙汰、又今日有贈位事、今日本家使不及參陣云々、

同日著御錫紵、可爲三日也、但依日次不宜即除御之、

清澄

上西門院 後鳥羽院准母

文治五年七月廿日御事

八月十日釋奠無穩座、十五日石清水放生會如例、十六日駒牽如例、

十月十一日遺令奏、廢朝三ヶ日、同十七日廢朝以後政始、

師茂

坊門院 高倉院皇女土御門院准母

承元四年四月十二日御事

十三日齋院御禊、十四日警固、十五日日吉祭等如例、十六日賀茂祭春宮使被止之、依坊門院御事也、公家依爲觸穢、以前不被憚歟

十七日解陣　十九日吉田祭

七月廿五日今日中宮七々日御態、於極樂寺施之、

師茂　廿九日相撲召合停止、依大納言源貞恒喪也、或本、依中宮崩給云々、

三人一同

郁芳門院 白河院皇女、堀河院養母、

嘉保三年八月七日御事　八日女院御入棺

同十五日令諸道博士勘申郁芳門院崩後雜事

同十六日諸卿著仗座被定申之御錫紵三日、廢朝五日之由有僉議、

同日有遺令奏、外記依應德中宮職時例、被行之、但不申山陵國忌事、又警固固關、廢朝音奏停止等事同被仰之、今夜女院御葬禮、

同廿日有解陣開關之事、今日主上著御錫紵、同廿二日除御錫紵、

廿七日被定女院三七日御誦經使、七寺、五六七々日、毎々被定、今度寺員依天曆三年、使々依佳例、

九月四日廢朝以後政始

今度御錫紵以下事、被用延喜七年例之由有所見、

十月九日前郁芳門院舊臣公卿已下、可除服從事之由宣下、

清澄　匡遠

中宮篤子 鳥羽院御繼母

永久二年十月一日御事、同七日遺令奏、廢朝五ケ日、

同日七日公家被召錫紵、即除御、同九日開關解陣、自次不宜之間、被縮日數、

同十三日廢朝以後政始

清澄　匡遠

大臣隆致公女、貞享二年五月十七日敘從三位、同十八日准三宮、同廿二日薨、追號逢春門院、

〔續三宮傳〕新崇賢門院、中御門帝御親母、諱賀子、寶永六年九月廿八日敘從三位、同六年十二月廿九日薨、同七年正月廿三日葬于天台廬山寺、同年三月廿六日贈准三宮、同日門號、新崇賢門院

〔續三宮傳〕新中和門院、中御門帝女御、御諱熙子、享保五年正月廿日准三宮宣下、同日薨御、同月廿七日門號定、

〔續三宮傳〕東京極院、仁孝帝御親母〇婧子天保十三年十二月一日敘從三位、同十四年三月廿一日薨去、同年四月廿一日贈准三宮、同日院號定、

〔續三宮傳〕新皇嘉門院、仁孝帝女御、御諱繁子、文政六年四月三日薨去、二十七歲、同月六日門號定、

○

〔續世繼〕三内宴 かくて年もかはりぬれば、〇保元三年てうきんの行幸、〇後白河びふく門院〇鳥羽后得子にせさせ給ふ、まことの御子におはしまさねども、このゑのみかどおはしまさぬ世にも、國母になぞらへられておはします、いとかしこき御さかえなり、又春宮〇二條行啓ありて、姫君の御母〇鳥羽皇女暲子二條准母とてはいし奉り給、この姫宮と申は、八條院と申なるべし、

〔園太曆〕文和元年十二月五日、今度官外記匡遠宿禰、師茂、清澄、勘例抄之、附合年々一人之外略之、其趣注之、

匡遠　師茂

中宮藤原温子昭宣公三女、醍醐天皇養母、

延喜七年六月八日、於東七條宮御事、

匡遠 依遺令不任葬司、素服舉哀同停止之、又有警固固關之事、

同九日中宮御葬也、

師茂 同日止月次神今食、是日令紀傳明法博士勘申中宮崩時天子御服有無之狀、可有三日御服者、

匡遠 則召縫殿寮、仰御服御衣可縫供之由、貲布自內藏寮進之、

十四准三宮、十六十二月廿四院號、

〔一代要記後深草八〕永安門院（穠子、順德院女、建長三年十一月六日爲親王准后、同十三年日院號、）

〔帝王編年記後深草二十五〕神仙門院（後堀河天皇御女、康元元年三月七日院號、今日准三宮、元内親王、）

〔歷代皇紀龜山〕和德門院（義子内親王）九條先帝（○仲恭）女、母順德院右京大夫、弘長元年三月八日院號、同日先准三宮、

〔女院小傳〕月華門院、（綜子）後嵯峨一女、母大宮院、寶治元、十二、二爲内親王、弘長三、七、廿准三宮、十七同日院號、

〔歷代皇紀後宇多〕延政門院、（悅子内親王）後嵯峨院皇女、母太政大臣公經女、弘安七年二月廿八日院號、同日先准三宮、八年八月廿四日尼、（廿八）

〔帝王編年記伏見二十七〕永陽門院（後深草院第二皇女、久子内親王、永仁二年二月七日院號、）

〔續々紹運錄〕孝子内親王、（○後光明皇女）母源大典侍、庭田重秀朝臣女、號小一條局、（貞享二年四月二日逝、號榮雅院、）慶安三年十月十五日誕生、稱女一宮、天和三年十二月三日爲内親王、（三十四）寶永五年正月廿三日叙一品、（五十）享保十年六月廿六日准三后號禮成門院、同日薨、（七十六）七月七日葬般舟院、

辭院號

〔女院小傳〕修明門院、（藤重子）後鳥羽后、順德母、（○中略）承元元、六、七准三宮、同日院號、承久三、七、八爲尼、同十一、廿二被辭申院號并年官年爵封戶諸司例給等、

崩後贈院號

〔一代要記龜山十三〕京極院佶子、（元皇后宮、後院號、）

〔歷代皇紀後醍醐〕後京極院、（○後醍醐后禧子）元弘三年七月十一日、爲皇太后宮、同年十、六、崩、追號後京極院、

〔女院部類〕豐樂門院藤子、贈左大臣藤敎秀女、後柏原院妾、後奈良院母、天文四年正月十一日崩、（七十二歲）同月十二日院號、

〔執次詰所本御系譜〕後西院、（良仁、後水尾天皇皇子）御母東福門院、實逢春門院藤原隆子、始稱御匣局、櫛笥贈左

取御所之號、不可有其難歟、但衆之所成不可毀、宣陽一同之定又難被棄置歟、左右可有勅定者、宗頼資實相共參院了、（陣頭議定以前、自院內々被問人々、是近古以來例也、）中一點余著束帶參內、于時公卿少々參入、○中略中終左大臣（實○藤原房）已下參入云々、即頼宗朝臣出仗座仰云、親子內親王可有院號事、何樣可申哉、可被定申者、左大臣以下議定了、招宗頼奏之、大略一同宣陽門也、（少々雖有相加之人一同也、）余仰云、以親子內親王可爲宣陽門院之由、可仰下者、（先是宗頼自院歸參、仰云、中門之號、誠雖無例、人々議定一揆也、仍可用宣陽門、）宗頼向陣頭仰之、但不仰判官代主典代等事云々、是於院左金吾通親（院近臣、姬宮後見、今日之事、本家執行人也、）幷資實等、不可仰院司之事之由示宗頼、宗頼觸余、余只可隨本所之命之由仰了、其故此事本家雖不可被知之事、近代之事、萬事不可自專之上、於此事者非居位之人、院號之時於陣仰院司、頗無其謂之由古人所相傾也、（八條院例、於陣仰之、時人難之、七條院又追彼例之耳、）仍通親等之言非無其理、加之是又勅定之由相存之故、不加思臣之詞而已、其後公卿等起坐、召留兼光卿、宣下母儀𦾔子、（丹三品也、）可敍從二位之由、余即參院、候公卿座、（今日爲姬宮殿上、座末敷紫端疊二枚也、著端也、）相次右大將頼實參入、此間招資實入見參、歸來、院號宣下尤神妙云々、小時三丞相（○左大臣藤原實房、右大臣同兼雅、內大臣同兼房、）參入、（左內兩府、常爾痾、今日早參、）其後數刻、晚頭獻女院別當、右中將通宗朝臣、依召（資實傳之、）參御前、（寢殿南庇、東面妻戶爲御前、）賜院司折紙、授余、余頗居向座末方、置笏取折紙、見之即返授、仰可仰之由、通宗退下、次右大臣、右大將、左衞門督、（○源通親、）右宰相中將、（藤原公時、）已上公卿院司四人也、此外不補、公卿院司皆在此座、大臣院司、建春門女院始之、起座降起中門外、（四位五位院司、同列之云々、）付右中辨棟範朝臣、（別當也、）奏事由、（御所如初、歩過南面、依御咳音、更參東面、）歸出仰聞食之由、各拜了昇堂上、即余退出、

〔帝王編年記 二十三 順德〕嘉陽門院（後鳥羽院皇女、（禮子內親王、）建保二年六月十日院號、承久三年十一月廿二日落飾爲尼、時年廿一、）

〔歷代皇紀 四條〕明義門院（諦子內親王、）順德院第一皇女、母東一條院、嘉禎二、十二、廿二院號、去十月准三宮、

〔一代要記 八 後嵯峨〕仙花門院曦子（土御門女、建長三年三月廿七日院號、）

〔帝王編年記 二十五 後嵯峨〕正親町院（無品覺子內親王、土御門院御女、寬元元年六月廿六日院號、）

〔女院次第〕室町院（暐子○百練抄作暉子、女院小傳作暐子、一代要記作暐子、）後堀河第一女、延應二、四、廿一爲內親王、（十三）寬元元、七、

女御以下宮人爲院

〔續三宮傳〕承秋門院、（東山帝中宮、御諱幸子、）有栖川一品兵部卿幸仁親王御女、元祿十年二月廿五日入內、寶永五年二月廿六日中宮宣下、同七年三月廿一日止中宮職、同日門號定、號承秋門院、自今奉稱女院、

○按ズルニ、三后ニシテ院ト稱スル例猶少カラズ、上文國母爲院ノ條參看スベシ、

〔增鏡（九草枕）〕まことや新院（○龜山）には、ひとゝせ近衞の大殿（もとひら）のひめ君、（○位子）女御に參り給にしぞかし、女御と聞えつるを、此ほど（○文永十一年三月二十四日）院號ありて、新陽明門院とぞきこゆる、

〔增鏡（十一今日の日陰）〕やうふく（○永福）もん院の、御さしつぎのひめぎみ、（○藤原兼實女瑛子）はや御さかりもすぐるほどなりしを、このほうわう（○龜山）に參らせたてまつらせ給へりしが、かひ〴〵しく水のゑらなみにわかやがせ給て、やがてゐんがうありしかば、せうさん（○昭訓）もん院ときこえつる、

〔百練抄（十五後嵯峨）〕寬元元年二月廿三日庚午、以從三位藤原彥子、（四條院女御）爲宣仁門院、

内親王爲院

〔女院小傳〕永嘉門院、（瑞子）中務卿宗尊女、母大納言通具孫女、准后家女房、叙品幷親王宣下無之歟、正安四、正、廿准三宮、同日院號、元亨四、七、廿九出家、後宇多五七日也、（○後宇多宮人）

〔女院小傳〕八條院暲子、鳥羽第三女、母長實卿女美福門院、保延四、四、九、爲內親王、（年二中略）○應保元、十二、十六乙卯、院號、

〔百練抄（十後鳥羽）〕建久二年六月廿七日癸卯、以親子內親王（○後白河皇女）爲宣陽門院、又母儀高階業子叙從三位、自親王院號、以八條院（○鳥羽皇女暲子）例也、

〔玉海〕建久二年六月廿六日癸卯、此日法皇（○後白河）最第三姬、覲子內親王有院號事、（母法皇愛妃、丹後局、三品也、）准后之人直院號、八條院七條院（○後鳥羽母后殖子）例也、非母后之人蒙院號、二條院（○後冷泉后章子）九條院（○近衞后呈子）是也、雖准后擬母儀、雖非母儀、又皇后也、非后位、非母儀、蒙院號之例、今度始也、然而時議之所推、不及是非者歟、午刻宗賴申公卿散狀、資實爲院御使來云、院號之條、人々所申如此、（注折紙）可計申者也、（人々多申宣陽門也）余申云、群議已一同、宣陽門不可及異議歟、然而被用中門之號、未有先例、安嘉宣秋等之門如何、又被

〔兵範記〕仁安三年三月十四日丙子、巳刻許參院、可有院號事、條々奉仰、次歸參內、上皇御旨申殿下、(○藤原基房)晩頭公卿參著仗座、左大臣(○藤原經宗)直被候端座、召官人被敷軾、次下官出軾、仰大臣云、皇太后宮職、令定申院號日、左府稱唯、下官退去、次令議、右大辨實綱朝臣爲發語人、

左大臣　中納言實房　宗家　右衛門督實國　參議親範　右大辨實綱等奉號九條院、

大納言師長　安嘉門院　坊門院

參議家通朝臣　五條院　坊門院

次左府召下官於軾、被示人々申趣、下官退去申殿下、(令候御所給朝餉)九條院宜由有仰旨、(此條須參啓上皇而只申殿下、就宜可宜下由兼奉仰、申殿下了、)次下官出軾仰云、改皇太后宮職可奉號九條院、(○近衛后皇子)止進屬可爲判官代主典代、年官年爵如舊、(御季御服御封被止了、依不仰、)內膳御飯可令停止者、次左府召大外記清原頼業眞人仰云、其詞如下官宣旨、(但內膳御飯事不被仰外記、)次召右少辨重方被仰云、改皇太后宮職可爲九條院、內膳御飯可令停止者、右少辨於床子座、左大史隆職宿禰了、次公卿退出、下官宿侍、

〔女院記〕宜秋門院、(任子)後法性寺殿(○藤原兼實)御女、母從三位季行卿女、顯德院(○後鳥羽初號)妃、建久元年四月廿六日中宮、正治二年六月廿八日宜秋門院ト申、(○中略)

〔女院記〕陰明門院、(麗子)中山入道太政大臣(○藤原頼實)女、母左京大夫定隆卿女、土御門院妃、元久二年七月十一日中宮、承元四年三月十九日陰明門院ト申、(○中略)

〔女院記〕安喜門院、(有子)三條入道太政大臣(公房)女、母入道太宰大貳範能女、後堀河院妃、貞應二年二月廿五日中宮、安貞元年二月廿日安喜門院ト申、(○中略)

〔女院小傳〕永福門院、(鏱子)伏見后、大相國實兼一女、(○中略)正應元、八、廿爲中宮、永仁六、八、廿一院號、(廿八)

〔續三宮傳〕新上西門院、(靈元帝皇后、御諱房子、)鷹司前左大臣敎平公御女、寬永九年十一月廿一日入內、天和三年二月十四日中宮宣下、貞享四年三月廿五日門號定、

大宮宰相〈○藤原公保〉
可申殷富門院之由申人
左大辨〈○藤原資長〉
次令官人召予、予著軾、
右府各可□□之由示人々、仍次第被申、此度右府被申坊門院之由、先定度至于內府被申之右府不被申、今度被仰予也、
次予奏聞、〈主上此間御不豫壇上〉仰云、可觸前關白者、〈○中略〉
次又奏聞、此間仰云、又可觸前關白、
次參大殿付高佐申、此間令申云、高松院可宜候、
次歸參又奏聞、仰云、其旨可仰者、重奏云御封以下事任例可仰下歟、仰云、定事歟、予奏云、例事、仍仰云、早可仰下、
次出仗座仰云、停中宮職、爲高松院、改進屬爲判官代主典代、年官年爵、御季御服、御封雜物等如元、可停內膳御飯、
右府被揖、予退入、〈○中略〉
女院四人無其例、今始有之、
當時　皇嘉門院〈○崇德后聖子〉上西門院〈○二條准母統子〉八條院〈○鳥羽皇女暲子〉高松院〈已上四后〉
當時后院號無其例、
東三條院以後、或母儀、或先帝后等也、而近代以院號爲貴歟、仍被計行歟、雖當時后、又爲后之故歟、先日此事所被問人々也、女御依可有立后、□門院號、
高松號、內府後日被命曰、以木名爲院號、太無謂事也、謂枇杷殿、不號枇杷院、謂桂殿、未號桂院、不快事也、又被命云、高松殿、經家卿以後、美福門院之外、其主不宜也、

みかどの御おやならでは、受領などはえさせ給はじとて、給はらせ給はず、ことごとくは后におはしまし、同じ事なりれいはみかどの御むすめきさきにたちてのちに、女帝にゐ給ふもなくやはありける、まして院分などかなからんと申給上達部もおはす、大女院〇上東門院は、我御院分をゆづり申さんと奏せさせ給、〇中略此院をば二條院とぞ聞えさせける、

〔百練抄 六崇德〕永治元年五月五日、高陽院御出家、四十七、入道前太政大臣〈藤原忠實〉女、太上天皇〈鳥羽〉后、

〔一代要記 九近衛〕皇太后宮藤聖子〈新院(崇德)后(中略)久安六年二月廿七日、改皇太后號、爲皇嘉門院、〉

〔十訓抄 七〕皇嘉門院、始て院號かうふらせ給へりける比、侍從大納言成通卿參りて、左衞門佐と云女房にあひて物語して、此宮の院號は何と申侍ぞと問ければ、皇嘉門院とさだかにいらへたりけり、次に兵衞と云女房に此事を云て問ければ、何とかやよづかぬやうなる御名にてとかといへりけるを、兵衞はゆうのもの也、左衞門佐がさりとてまからざらんやはと思て、いみじくいらへたりし、おやしう覺えしに、ゆうにこそおぼめきたりしかと感じ給けり、

〔山槐記〕應保二年二月五日壬寅、〇中略予出仗座、著膝突、仰云、中宮〈〇二條后姝子〉院號定申、〇右府〈〇藤原基房〉小口歸出、次右府被示座中、次自下次第定申、

白河院御所、爲三條坊門末、付御所可申坊門院之由、被申之人々、

右大臣　內大臣〈〇藤原宗能〉　新藤中納言〈〇俊通〉　土御門宰相

中宮大夫〈〇源雅通〉　權大夫〈〇藤原實長〉　宰相中將〈〇藤原實國〉

當時雖無御所、以御領爲其號例也、且立后之時爲御所、可申高松院由被申人々、

權中納言

可申殷富門院、安嘉門院之由被申人、

高松院、坊門院之間可在勅定之由申人、

三后爲院

略

〔執次詰所本御系譜〕東山院、（諱朝仁、靈元院皇子、）御實母敬法門院藤宗子、中御門前内大臣宗條公女、（○中略）

〔本朝紹運續錄〕中御門院（諱慶仁、御母新崇賢門院賀子、櫛笥隆賀公女、）

〔皇胤鑑〕櫻町院、（諱昭仁、○中略）御母女御、近衛攝政家煕公女、新中和門院尚子、

〔續百一錄〕寛延三年六月廿七日、大宮御所（○後櫻町帝母）御門號青綺門院様と御治定候、自今可奉稱女院様旨被仰出候、

〔續々紹運錄〕後桃園院、（諱英仁、治九年、）母恭禮門院藤富子、一條前關白兼香公女、

〔執次詰所本御系譜〕光格天皇、（○中略）天明三年十月十二日、御養母盛化門院崩、同十一月十七日、渡御于倚廬、著御錫紵、

〔續三宮傳〕新清和院、（光格帝皇后、御諱欣子、）後桃園院第一皇女、寛政六年三月七日、立太后、文化四年七月十八日、寛宮（○仁孝）御實子御治定、天保十二年後正月廿二日、院號定、（新清和院、自今奉稱女院、）

〔續三宮傳〕新朔平門院、（仁孝帝後參女御、諱祺子、）鷹司關白政通公女、文政八年八月廿二日、聽輦車入内、弘化四年三月十四日、皇太后宮、同年十月十三日、院號定、稱新朔平門院、

〔一代要記〕（八白河）太皇太后章子内親王（承保元年六月十六日、停后、（後冷泉后）號二條院、非帝母儀賜院號初例也、）

〔榮花物語〕（三十九布引瀧）后たゝせ給ふべけれど隙なきことをいかゞとおぼしめされて、きさき（○後三條后馨子）を院になし奉らんと思しめす、（○中略）十六日（○承保元年六月）に、太皇太后宮（○後冷泉后章子）女院にならせ給ぬ、どしごろも一どころ院にならせ給べし、まだいにては太皇太后宮ならせ給べし、さらずば中宮こそは故院の后にもおはしまし、内（○白河）の御まゝ母にもおはしませばなど申つるを太皇太后宮ならせ給ぬれば、きさきにてもおはしまさでと申人もあり、又ならせ給はではいかゞはなど申人もありけり、みかどの御おやならぬは、まだならせ給はざりければ、めづらしき事に人申、

〔貴女抄〕光範門院資子、(應永廿二、七、廿九、院號、)後小松妃、稱光御母、資國卿女、

〔謚號雜記〕嘉樂門院信子、信宗公女、後花園院后、後土御門院母、文明十三年七月廿六日、院號、

〔女院記〕豐樂門院藤子、贈左大臣藤敎秀公第四女、今上(○後奈良)國母、

〔女院部類〕吉德門院、(○藤原榮子)萬里小路宰相賢房卿女、(○中略)正親町院母、

〔女院部類〕新上東門院晴子、贈左大臣晴秀公女、母□□□、正親町院妾、後陽成院母、年月日准三宮、慶長五年十二月廿九日、院號、

〔執次詰所本御系譜〕後陽成院、(諱周仁)御母新上東門院准三后晴子、勸修寺內大臣晴右公女、

〔執次詰所本御系譜〕淸子內親王、(○後陽成皇女)母中和門院(○後水尾母后)准三后藤前子、近衞入道前關白太政大臣前久公女、元和六年六月二日門號定、寬永七年七月三日崩、五十六歲、

〔續々紹運錄〕明正院、(諱興子)母中宮源和子、太政大臣秀忠公女、號東福門院、(中宮和子、元和六年庚申六月十八日入內、爲女御、寬永元年十一月廿八日立后、延寶六戊午年六月十五日崩、七十二、葬泉涌寺、)

〔宣順卿記〕承應三年十月五日、秉燭之後、自殿下資熙可參之由有御使、則伺候、御命云、院宣、京極局、(亡主)(後光明)御母准后院號宣下、(日付去八月十八日、消息宣下、院號消息宣下、此度初例、)可爲上卿三條中納言(實敎)辨資熙、以密儀(女院憚給)可有御沙汰之旨、以園前大納言被仰下、(舊主內々雖有此御氣色、女院憚給、無御沙汰、)此仰之旨、行三黃許可傳仰由殿下御命也、仍向三黃、三黃云、此頃依未著陣、雖不諸下知、如此之時節申子細如何、承之由答、此次而京極局名字繼子、亡主御諱紹(ツグ)仁、同訓不可然之由申了、(後日改光子、從三位、)壬生院、(此院號、院御所(後水尾)御定、)准后院號等消息宣下不可然、無消息只口ヅカラ可仰旨被命、外記ニハ、參內次而召寄可仰云々、大內記ニモ口ヅカラ可仰云々、宣旨被請事、(院號ハ宣旨、封戶ハ外記宣旨、准后ハ勅書、)自待賢門院已後不請、子細ハ院ヘ被進宣旨事有間敷事也、(○中略)近クハ北山院被請、仍今度宣旨不被請者可然之由上卿被命、

〔執次詰所本御系譜〕後西院、(諱良仁、後水尾天皇皇子、)御母東福門院、實逢春門院隆子、櫛笥贈左大臣隆致公女、(○節

候之旨、以當家佳例、可被申新待賢門院之由被宣下了、本所等事、尤可被申沙汰候、建武准三后之時、被約申之子細候歟、存其由、委細定自本所可被申候、

〔細々要記　六〕應安二年、南方正平二十四〇四三號年三月十一日、南山ノ帝崩御、御年四十三ト云々、　四月廿九日、皇太子熙成親王受禪、先帝ヲ後村上天皇ト追號シ奉ルト云々、　十二月十一日、先帝ノ御后、〇藤原勝子近衞關白經忠公ノ御女、當今〇後龜山ノ御母后ナリ、院號蒙ラセ給ヒ、嘉喜門院ト申奉ルヨシ云々、

〔皇胤紹運錄〕光嚴院、〇中略母廣義門院、〇藤原寧子公衡公女、光明院、〇中略母同、爲光嚴院御猶子、

〔園太曆〕文和元年十月廿一日、抑帥卿〇公秀送狀、大內門號有不審事、有抄物者可借與云々、〇中略息女三品院號事有沙汰歟、母儀〇後光嚴母后不及左右哉、　廿二日、今日大納言云、來廿九日可有陣定、可參仕旨藏人左兵衞佐忠光觸之、可有院號定云々、三品事歟、可謂珍重、及晚帥卿送消息、院號推量附合了、大納言參謁之間、難出仕、門號事、光範、陽祿、無巨難哉之旨仰了、〇中略　廿七日、入夜三條新大納言實繼卿來、無內外人也、仍雖服藥中、招入臥內謁之、院號間事、幷院司以下事談合也、彼本人病氣以外也、大略可有大事之外、仍急可沙汰云々、　廿九日、及晚三條新大納言送狀、院號間事也、院司事、就本所儀被略不可被仰云々、其間事示合也、時宜無力歟之旨仰了、追引勘之處、先蹤少々有歟、今日從三位藤原秀子、有准后宣下幷院號定、陽祿門院、上卿右大臣殿、權大納言實繼卿、權中納言隆持卿、參議公直卿〇左中將左中辨敎光朝臣、職事藏人左兵衞權佐忠光、四位左大史匡遠宿禰、大外記師茂、右大史高橋秀職等參陣、右少辨時光、草進准后勅書、

〔貴女抄〕崇賢門院仲子、〇永德三、四、廿五、院號、後光嚴妃、後圓融御母、兼綱公女、

〔歷代皇紀　〇後小松〕通陽門院、〇嚴子應永二年四月九日、准三宮、同二年七月廿四日、院號、當今御實母、但非母后之儀、

ち給てうせ給にき、御堂〇藤原道長の御女上東門院、後一條後朱雀の御母にて、御孫後冷泉後三條まで見奉り給ひしかども、みなさきだゝせ給しかば、さかさまの御なげきたゆる世なく、御命あまりながくて、中々人目をはづる思ひふかくおはしましき、これもみな一の人にて、世のおやとなり給へりしだに、やうをかへてさま〳〵の御身のうれへはありき、たゞ人には大納言公實の御女こそ待賢門院とて、崇德院後白河院の御母にておはせしかど、それも後白河の御世をば御らんせず、讃岐の院の御すゑもおはしまさず、されば今のやうに、たゞ人の御身にて、三代國のおもしといつかれ、兩院とこしなへに、おふぎさゝげたてまつらせ給へば、さきの世もいかばかりのくどくおはしまし、この世にも春日大明神をはじめ、よろづの神明佛陀の擁護あつくものし給ふにこそ、ありがたくぞおしはかられ給ふ、

〔歷代皇紀伏見〕玄輝門院藤愔子、左大臣實雄公女、母大納言隆房卿女、後深草妃、伏見母、正應元年十二月十六日院號、同日先准后、四十三

〔諡號雜記〕顯親門院季子、實雄公女、伏見院后、花園院母、正中三年二月七日院號、

〔歷代皇紀後醍醐〕先帝後醍醐母、〇中略談天門院藤忠子、參議忠繼女、母卜部兼夏女、文保二年四月十二日院號、

〔園太曆〕觀應三年正月二日、抑今日自賀名生殿〇後村上有御書文、女房狀副之、案文寫之續、〇續下恐脫左字

兩所尊號事被宣下了、存其旨可被申沙汰候也、

皇太后〇後村上母藤原廉子事、先朝被染宸筆候、仍停皇太后宮職、可被申新待賢門院由被仰出、具忠朝臣無異無事歸參候、目出候、抑彼兩所尊號事、載別紙候、殊可被申沙汰候、

一昨日廿八日神宴無異被遂行之、且又准后〇廉子御院號事其沙汰候、尤兼日可申談之所、山中諸司等不具之間、參仕公卿無其仁候之間、以御神樂參仕候次、被仰上卿於實守卿畢、新號又使儀難事行

〔皇胤紹運錄〕後堀河院、〇陳子母北白河院、基家卿女、

〔五代帝王物語〕中宮〇後堀河后藤原竴子は、御懷姙ありて、寛喜三年二月十二日、四條院御降誕、おなめでたとて、やがて十月廿八日に、太子に立せ給ふ、〇中略貞永元年十月四日、主上〇後堀河御位を遜て東宮〇四條に讓奉る、御年二歲、いつしかなるうへ、先例もよろしからずおぼえ侍き、中宮は同二年〇天福元四月三日院號ありて、藻壁門院と申、此院號又いかゞとおぼえしに、同年九月に御產こてひしめくほどに、御ものゝけこはくてうみかねさせ給ふ、内外の御いのり數をつくし、大法祕法のこる事なしといへども、つひにかなはせ給はず、餘りに大事にして、大臣いかゞせんずると、女院申させ給へば、大殿は御淚にむせびて東西も覺え給はず、御寶物皆やきあげられけれどもかひなし、九月十八日つひにうせ給ぬ、御年廿五、あさましとも云ばかりなし、

〔百練抄 十六後深草〕寶治二年六月十八日甲午、院號定也、〇改中宮職爲大宮院、後深草母后藤原姞子左大臣以下參仕之、

〔増鏡 十老の波〕大かた此大宮院〇後嵯峨后の御宿世、いとありがたくおはします、すべていにしへより今まで、后國母おほくすぎ給ぬれど、かくばかりとりあつめいみじきためしは、いまだきゝおよび侍らず、御位のはじめよりえらばれ參り給ひて、あらそひきしらふ人もなく、三千の寵愛ひとりにをさめ給、兩院〇後深草、龜山、うちつゞきいでものし給へりし、いづれも平らかに思ひの如く三代の國母にて、いまはすでに御むまご〇後宇多の位をさへ見たまふまで、いさゝかも御心にあはず、おぼしむすぼるゝ一ふしもなく、めでたくおはしますさま、きし方もたぐひなく、行すゑにもまれにやあらん、いにしへの基經のおとゞの御女、〇醍醐后穏子延喜の御代の太后宮、二代〇朱雀、村上、の國母にておはせしも、はじめいでき給て、ことにかなしうし給ひし前坊〇保明におくれ聞え給て、御命のうちにたへぬ御なげきつきせざりき、九條のおとゞ師輔の御むすめ、〇藤原安子天暦〇村上のきさきにておはせし、冷泉圓融兩代の御母なりしかど、めでたき御代をも見奉り給はず、御門にもさきだ

交名、於院御前左衛門督時忠〇平書之云々、重服人尤可憚歟、何年例哉、

別當

左衛門督平朝臣時忠、元大夫、重服先例被憚之歟、尤以爲奇、　權中納言藤原朝臣忠親

右衛門督藤原朝臣實家、元權大夫、　宰相中將源朝臣通親、元權亮、

前越前守平朝臣通盛元亮　勘解由次官藤原宗頼元大進五位

判官代

散位藤原光綱元權大進　出雲守藤原朝定同

散位藤原尹範元少進

主典代

右衛門少尉安倍資成元少屬　右衛門府生同資忠元權少屬

宗頼補別當事、天治之例云々、彼時四品大進也、全不相似彼例歟、況不帶顯官院號日補之、何年例哉、頗驚聞者也、

〔百練抄後鳥羽十〕建久元年四月廿二日乙巳、以母儀從三位藤原殖子奉號七條院、去十九日、准后、

〔神皇正統記後鳥羽〕第八十二代第四十四世、後鳥羽院、諱は尊成、高倉第四の子、御母は七條院藤原殖子、先代母儀、おほくは后宮、さらぬは贈后なり、院號ありしは、みな先の立后の後のさだめなり、此七條院立后なくて院號のはじめなり、たゞしまづ准后の勅あり、入道修理大夫信隆の女なり、

〔百練抄土御門十一〕建仁二年正月十五日、院號定、以源在子爲承明門院、今上母儀、　廿七日、承明門院院號之後、初御入内有勸賞、　二月二日、今日承明門院殿上始也、

〔女院小傳〕東一條院、藤立子順德后、先帝〇仲恭母、後京極關白〇藤原良經女、〇中略承元五、正、廿二、爲中宮、承久四、六、廿五、院號、

予申定可被宣下之趣、被相待左大將（藤原實定）參入之間暫以遲々、大將被參之後予著膝突、仰左大臣云、中宮（平德子）可有院號、可奉稱何院哉、宜令申、仰了之後退去、次左有必被與奪可被定申之由、次自下臈定申之、（新宰相發語、）

左大臣（五條院、修明門院、春花門院、）　左大將（實定、宣陽門院、建禮門院、坊門院、）　藤中納言（實國、建禮門院、）

堀河中納言（忠親、坊門院、建禮門院、）　三條中納言（朝方、建禮門院、五條院、）　別當（實家、建禮門院、宣陽門院、）

右宰相中將（實守、建禮門院、）　藤宰相（定能、建禮門院、）　源宰相中將（通親、建禮門院、宣陽門院、東五條院、）

新宰相（光能、建禮門院、聊有被申之詞、）

定了之後左府被召予、仍參著膝突、左府定申詞許示給之、人々申狀未聞歟如何之由被尋之、大略奉之由申之、但少々依有不審進寄與座相尋了、次退去昇殿申人々申狀於殿下、此次依被尋仰申內議之趣了、雖可院奏不可然之由、昨日御氣色候之由同申之、仍可爲建禮門院之由有仰、是人々多定申候上、聊有內談之故也、次予出陣仰左府云、止中宮職可奉稱建禮門院、改進屬爲判官代主典代、年官年爵御季御服御封雜物等如舊、但內膳司御飯可從停止者、次予退入、次上卿召大外記清原賴業眞人、被仰下院號幷年官年爵事、次官人出來告召之由、仍參進、上卿被仰云、御封等事可令奉行歟、有先例之由所覺悟也、予申云、可隨仰、但天治之例、中辨奉行也、仍所催儲候也、許諾予退出、（於重事者大辨奉行、鮮有例、度度院號之時、御封以下事大辨奉行、管見未及、何況天治之度、頭辨雅兼爲大辨宣下、然而官方事權辨顯賴奉行之、）次召權右中辨光雅朝臣、被仰御季御服御封雜物內膳司御飯等事、次辨仰大夫史隆職宿禰、次諸卿率參建禮門院、予又參入、毎事有遲々之氣、依不有指役退出、

後聞法皇（申剋許臨幸云々、但其儀密幸也、）召通盛朝臣、下給院司交名、通盛朝臣申殿下、次召年預資成下知之、次判官代光綱參書御座、撤圓座小筵等、（依御重喪撤大床子、以圓座爲其代之故也、）次撤炬火屋陣屋時簡御膳棚等、次院司公卿以下於西中門外申慶賀、通盛朝臣申次、依重喪無拜、次申院御方、申次同前、二拜、次人々退出、院司

代者、上卿召大外記爲長、被仰下、次召辨正家、被仰下、除内膳御膳之外如舊之由可仰所司者、次上達部被參彼院、(二條堀川、但暫時)被補別當云々、新大納言、新宰相二人云々、

〔大外記師遠記〕天治元年十一月廿四日丁酉、午刻右大臣(〇藤原家忠)權大納言藤原宗忠卿、源能俊卿、藤原忠教卿、中納言顯雅卿、權中納言通季卿、同顯隆卿、源雅定卿、藤原實能卿、參議同宗輔朝臣、源師時朝臣、藤原爲隆朝臣、同伊通朝臣參著仗座、被定申院號事、(〇崇德母后璋子)伊通申云、二條院可宜歟、爲隆申云、美福門院如何、師時云、坊門院、顯隆卿、待賢門院可宜、是上東門院陽明門院二代母后也、以門列次第奉號事、待賢門第三門也、第三度母后令奉號、件門名相叶宜歟、諸卿被同之、大臣以頭辨雅兼被奏院、其後大臣先召予仰云、停中宮職、爲待賢門院、改進爲判官代、改屬爲主典代、次召權右中辨顯頼朝臣仰云、待賢門院御季御服御封雜物、年官年爵如舊奉宛、但御飯從停止者、辨於床子座仰左大史政重宿禰、其後大臣以下相引被參院、須臾退出、本院無饗饌事、今日被補院司以下、別當(權大納言源能俊卿、權中納言藤原通季卿、權大夫同顯隆卿、内藏頭藤原家保朝臣、右近中將忠宗朝臣、侍從左少辨平實親、大學頭藤資先、)主典代(屬三人、如本)別當以下下知以後、於庭中有拜舞事云々、女院啓陣、諸衛吉上幷所々女官等、各給祿退歸云々、予申藤中納言云、寛治之度院號宣旨、官外記相共持參本院、萬壽治暦無此事、今度如何、被示云、事々被用陽明門院例、寛治頗不快、不可待參、後日可申此旨、於院尤有用心事也、今日無陽明門代幔、寛治有門代幔云々、今日大臣以下相引被參院之間、上官無出立事、今日右大臣年官年爵事早被仰予、予於藤宰早尋申被仰辨、大臣退出給之間、於敷政門尋申、仰云、只隨有先例可下知、忽忘之故也、被聞此旨不仰官、(〇中略)十二月一日甲辰、是日待賢門院殿上始也、有饗饌事云々、公卿別當以下參著、昇殿人々有其數、被補藏人、(高階通忠、源盛宗、)

〔吉記〕養和元年十一月廿五日、今日院號定也、依有相勞事申刻參内、此間公卿漸以參集、左大臣(〇藤原經宗)相次參著仗座、先令置膝突、(官人運參、以掃部寮官人令敷之、)諸卿各以著座、或又追參加、頃之殿下(〇藤原基通)令參給、

國母爲院

間事等不細知、後日可尋記、

〔左經記〕萬壽三年正月十九日丁酉、早旦參關白殿、○藤原頼通即御共參大宮、○後一條母后彰子今日可有出家事、仍上達部多以參入、及未刻關白殿入內、則右府○藤原實資已下上達部引入內、著左仗座、關白殿候御前、朝下飯方召余、○藤原經頼被仰云、太皇太后宮○彰子今日可有御出家事、院號等事、准東三條院例可被行、別當可有可被加行之事歟、上達部相共可定申之由可仰右大臣者、余進座下申右府云々、奉綸旨移著南座、上達部相共議定、令余覆奏云、院號等事、大略准故東三條院例可被行歟、則以御在所上東門院傳名號爲院號、停進屬可爲判官代主典代歟、又內膳御飯、幷御菜御封御季御服物等、如舊可奉宛歟、又年官年爵、彼時御出家次年也、正月如元可奉宛之由有宣旨、彼者依叙位除目程遠、忽無宣旨歟、於今度者除目在近、今日同可有宣旨歟者、即參御所奏此狀、仰云、停太皇太后宮職爲上東門院、停進屬可爲判官代主典代、又御封幷御季御服物、內膳御菜等皆如元可奉充、但內膳御飯者、自本宮被奏可停之由、仍可隨停止者、又年官年爵如元可奉宛者、則進陣仰此旨、則奉御封幷御季御服物、內膳御菜等如元可奉宛之由、兼又奉可停止上內膳御飯令仰、歸陣腋仰大夫史貞行宿禰、次右府召大外記頼隆眞人滕突召仰、院號幷年官年爵等事云々、頃之右府率上達部歸參上東門院、○下略

〔左經記〕治曆五年○延久元年二月十七日甲寅、午刻參內、○中略被仰下云、可有太皇太后宮○後三條母后禎子院號之事、而御所未定之間、可何名申乎、藤宰相○長基匠作○平資仲等申云、枇杷殿本御領所也、若可申枇杷院歟、僕○藤原經頼申云、只今御在所非本御所、以一定可令渡御所可名申歟、先々定事不候之故也、□□或同匠作、或同僕、新大納言○藤原能長被申云、可申陽明門院、次右府○藤原師實更以中將被奏定申詞、次仰曰、枇杷院陽明門院之間、以何名可申乎、又被仰下、藤宰相□申此名何事候哉、仍可被用一所歟、匠作申云、枇杷院殿久時名也、可被用此歟、僕申云、如是之事、同者以文字□可被用歟、然者陽明之字尤吉候歟、人々如先□被同仰云、以太皇太后可申陽明門院之由可下宣旨、又以進爲判官代、以屬可爲主典

申入了、

○按ズルニ、靈元天皇、此年二月ヲ以テ、皇太子東山天皇ニ讓位アリ、仍テ當代ノ國母ハ、准后宗子(敬法門院)ナレドモ、上西門院モ亦先帝ノ中宮ナレバ、本文ノ如ク、權道ヲ行ハレシナリ、

〔百一錄〕享保五年二月十一日、女院御所崩御、市中禁音樂廢朝七ヶ日、春秋四十一齡、依御疱瘡也、預有院號、號承秋門院、有栖川幸仁親王姬宮、(○幸子女王)東山院皇后、傳奏坊城亞相、奉行日野西、

〔公卿補任 光格〕天明三癸卯年十月十二日、院號定、(維子、號盛化門院、○後桃園后)上卿右大臣、辨良顯、奉行隆彭朝臣、同夜盛化門院崩、廿二日、內裏觸穢、十一月十三日、遣令奏、幷警固固關、上卿三條大納言、辨良顯、遣令使右中將隆久朝臣、諒闇傳奏日野前中納言、奉行賴熙朝臣、同夜盛化門院奉葬于泉涌寺、凶事傳奏日野中納言、奉行俊親、十七日、渡御倚廬、奉行賴熙朝臣、廿一日、春日祭被附社司、廿九日、自倚廬還御、奉行隆彭朝臣、同日、御禊、陪膳隆彭朝臣、同日、開關解陣、幷橡宣下、上卿右大將、辨良顯、奉行隆彭朝臣、○中略十二月十三日、觸穢畢淸祓、奉行俊親、

〔公卿補任 仁孝〕天保十二年後正月廿二日、院號定、(欣子、號新淸和院、列官代、主典代等再興、)

〔小右記〕正曆二年九月十六日壬辰、午時幸(○一條)職御曹司、母公(○詮子)御件曹司、今日出家給、仍有行幸、○中略還御如例、(今日公卿著靴、侍臣脫根表文、著位袍、)公卿還著陣座、藏人頭扶義出陣、仰左大臣云、依御出家、可止職號及大炊寮御稻、畿內御贄、抑可有院號歟、若可有判官代主典代歟、若又先例如何、隨宜可定申者、公卿令議云云、淳和后、嵯峨大后、染殿后、(○淸和母后)國史更不細記其旨、院號者、以御領處爲其號、不承其處、將又判官代主典代等事、不能尋得憶例、又云、令勘進可定申歟、但二條皇后廢以後、有判官代主典代之由云々、是又未明也、縱雖有其例、非宜例歟、若可避、假者可謂進代屬代歟如何、抑可在御定之由令定申了、被定下云、依院例判官代主典代可宜矣、又院號可號東三條院、此間入夜雨降、右大臣以下參職御曹司、戌時御出家云々、大僧都遐賀、(天台座主)僧都覺慶、律師勸修、阿闍梨嚴久、明豪等預參其事云々、此

倚廬御裝束、同御服事、
倚廬還御之後、開闢解陣宣下上卿事、
蘆簾事、(先清涼殿可爲母屋庇、先庇五箇間可被替被仰云、唯臺盤所五箇間之由予申候、仰云、唯朝干飯二間許可替之、殘所不可及沙汰、)清涼殿御帳又不可被替云々、舖設事、更其在所何所可被替哉不定、
可賜素服公卿殿上人事、(女房上臈中臈下臈)
權中納言(公兼)殿上人未定　各一人
女院方事　素服人予　在數(院司)
御葬禮供奉公卿　權帥(前大納言教忠)　予(前中納言)　按察　冷泉　新中納言(爲庭)　侍從中納言　殘忘却、倚廬傳奏中御門中納言(永享中御門中納言祖父)　職事頭辨政賁朝臣(補傳奏之由予口入)　五十日之間、予在數等、可祗候御寺、(相安禪寺殿云々、可有五旬儀云々、)大概此條々、此外以詞言上、亦被仰條々繁多、不被記盡、　院中御法事權帥年預、後名朝臣云々、

〔基量卿記〕貞享四年十二月廿五日、依被申上事、參攝政、攝政言上之趣、來春拜禮申行候ニ付、女院拜禮之事、先例勘見申候所、非國母非准母女院、拜禮所見無之候、○中宮皇后宮に候は、非國母非准母も拜禮勿論に候、然者當時女院、(新上西門院靈元后房子)○非國母又非准母、如何候半、拜禮有間敷候歟、乍然舊記に、件等女院拜禮無之由は不記候得共、又拜禮有之候例は不見當候、依之自攝政、(冬經)女院へ拜禮可有旨被申入、從女院被受間敷由被仰出候はゞ、無何此度無拜禮可然存候、右柳原千種に內々被示合、自攝政被申入候とも、被受間敷由被仰出樣に願度旨被仰談候所、とかく柳原千種了簡仕候間、先仙洞〇(靈元)へ可申入旨、兩人申候間、寬申候由也、則言上之處、尤に思召也、所詮小朝拜拜禮とも從先日於禁中、直に攝政主上〇(東山)、仙洞へ被申上候事に候間、女院のも仙洞聞召、所も狹少之間、可爲無用之由、攝政へ被仰進、女院へ可被仰之間、更に女院へ、自攝政被申入に不及由仰也、則其通示攝政、

云、及書有女院崩御云云、(御年廿五)上下悲歎、言語難及、云僧侶云陰陽、恥辱此秋也、卜筮算勘以下、皆以相違、諸道陵夷何事如之、　十九日庚申、大嘗會延引了、　廿四日乙丑、右中辨光俊朝臣爲遺令使參陣、固關警固事被宣下、又諒闇儀也、但主上錫紵事有豫議、嘉承之度、卽位以前御別殿、當今已成人之禮也、仍可召錫紵者、　卅日辛未、主上(三歲)召錫紵遷御別殿、以(弘御所北面爲其所、)幼主七歲以前無倚廬儀、又不召錫紵也、然而依憚永萬養和例、聊被相違也、今夜藻壁門院凶禮也、大嘗會撿校行事、幷辨奉之條、神慮難測歟、

〔女院部類〕廣義門院寧子、後伏見院妃、花園院養母、光嚴院母、延慶二年正月准三宮、延文二年閏四月廿一日子刻崩、同年八月二日遺令奏、廢朝、○節略

〔親長卿記〕長享二年三月五日、女院(○後土御門母后、嘉樂門院信子、)御不例、聊雖被取延、一昨日又有御發氣、今一度有御對面度也、忍有行幸度也、其儀可爲何樣候哉、予申云、女院御所無御門、可被召御輿之事不可叶、雖被忍仰不可有其隱之間、御步儀等是又不可叶也、咫尺之時、廊下等密々行幸有其例、郭外之事不可然、所詮御絕息有隙之時、以密々之儀被召御輿、長橋局マデ片時有御入內之儀、乍御輿內御合眼可然歟之由申了、　九日、早旦民部卿奉折紙到來、女院次第無御憑、就此儀條々可被仰談、今日雖爲御衰日(禁裏)、忩可參云々、勸修寺同有此仰、加奉返遣折紙了、○中略參內番衆所、勸亞相未參、小時相待、午後參仕、兩人參仕之由申入、可參御前云々、於御學問所妻戶內有御對面、仰云、凶事方事、種々雖有御思案被沙汰是非無用脚事、自江州(大樹(足利義熙)自去年九月十二日、予今在陣江州、)如是事被申東山殿(○足利義政)、其間モ無油斷候間、可被申借用御臺(丹波上村、每年三萬匹在所也、今無沙汰、二萬余匹許、每年進之、可被入年紀云々、)可被進勾當內侍於長谷云々、所詮是非共可爲諒闇儀、尤省略事等可沙汰付云々、已被出御硯料紙、勸亞相與奪予、予堅固辭右筆了、勸亞相右筆、(折紙引合書之、)押筆伺予氣色、予申云、可被申御所存分歟、猶無是非之間、先諒闇方禁中事可被載歟、仍端書云、凶事方禁中如是歟忘却、倚廬御殿、警固固關、遺令奏、(先規雖爲各別、可爲同時歟、)素服等宣下上卿以下、

子天皇詔旨(止)宣詔(乎)、親王王臣百官人等天下公民衆聞食宣、比來太皇太后(○光明子聖武后)御命以(氐)朕(爾)語宣久、太政之始(波)、人心未定在(波)、吾子爲(氐)皇太子(止)定(氐)、先奉昇於君位畢(氐)、諸意靜了(奈牟)後(爾)傍上(乎波)宣(牟止)爲(天奈母)抑(閉氐)在(津流)、然今(波)君坐(氐)御宇事日月重(奴)、是以先皇追皇(止)爲、親母太夫人(止)爲、兄弟姉妹親王(止)爲(與止)仰給(夫)貴(岐)御命(乎)頂受給(利)歡(備)貴(美)懼(知)恐(利氐)、○中略故是以自今以後、追皇舍人親王、宜稱崇道盡敬皇帝、當麻夫人(○母后淳仁)稱大夫人、兄弟姉妹悉稱親王(止)宣天皇御命衆聞食宣、七月丁卯、從四位下佐味朝臣虫麻呂爲中宮大夫、備前守如故、從五位下佐佐貴山君親人爲亮、

○

女院稱呼

〔名目抄〕女院(ニヨウヰン)(常音ニ□也、名目ノ時引之、)

待遇

〔小右記〕正曆六年(○長德元年)正月二日己酉、巳時許參內、今日行幸也、(○中略)鳳輦欲入西門之間、主上(○一條)以藏人頭齊信朝臣先被啓也、(○母后東三條院詮子)復命之後入鳳輦、於中門外下給也、

〔日本紀略十一條〕長保三年十月三日庚子、奉賀東三條院御算、諸寺諷誦事、今日於右近馬場、撿非違使行賑給事、大炊寮米二百石、九日丙午、於上東門第、有東三條院卅御賀、仍天皇行幸、中宮行啓、令侍臣奏舞、

○案ズルニ、以上二條ハ、母儀ニ對スル敬禮ナレバ、尋常女院ノ待遇トハ殊ナル事アルベシ、此條帝母ニ係ルモノハ皆然リ、

〔小右記〕萬壽四年四月五日乙亥、參東宮、(○後朱雀)若宮著袴日也、(○中略)次供御膳、(懸盤六本、淺香歟、御膳盛銀器、大夫頼宗奉仕、)中納言長家執行打敷、四位已下益供、稱警蹕、(警蹕事余疑、其故者、女院(上東門院彰子)御座、仍處疑也、彼是可疑事也、關白云、官最初事也、無警蹕如何、予云、左右可隨定、仍警蹕、○下略)

〔百練抄十四四條〕天福元年九月十二日癸丑、自去夜女院(○母后藻璧門院竴子)御產氣云云、來月御當月也、人以驚云々、十八日己未、御產氣日來連々、今曉殊物忩之間、寅刻皇子降誕、萬人悅豫之處、皇子有御事云

女御爲皇太夫人

略天宗高紹天皇○光仁龍潜之日、娉而納焉、生今上早良親王能登內親王、寶龜中改姓爲高野朝臣、今上即位尊爲皇太夫人、九年追上尊號曰皇太后、

〔續日本後紀十四仁明〕承和十一年正月壬辰、皇太子○文德入覲於淸涼殿、拜舞給、被授所生女御藤原氏○順子從三位也、

〔三代實錄二十清和〕貞觀十三年九月廿八日辛丑、○中略太皇太后姓藤原氏、諱順子、○中略仁明天皇儲貳之日、聘以入宮、寵遇隆篤、生文德天皇、仁明天皇踐祚之初、授從四位下、承和十年加從三位、嘉祥三年四月甲子、文德天皇即位、是日尊爲皇太夫人、

〔大鏡裏書〕太皇太后宮明子御事、文德天皇后、清和天皇母儀、忠仁公女、母贈正一位源潔姫、嵯峨天皇皇女、天安二年十一月廿五日爲皇太夫人、貞觀六年正月七日爲皇太后宮、

○按ズルニ、明子ハ女御ノ明文ナシト雖、文德實錄仁壽三年正月己亥條ニ、女御古子ト並ニ從三位ヲ授ケラル、蓋シ女御タリシニ由リシナラン、

〔三代實錄十三清和〕貞觀八年十二月廿七日戊戌、以從五位下藤原朝臣高子爲女御、

帝母爲太夫人

〔三代實錄三十陽成〕天皇諱貞明、先太上天皇○淸和之第一子也、母皇太后○高子贈太政大臣正一位藤原朝臣長良之女也、后兄右大臣藤原朝臣基經、初夢后露臥庭中、著腹脹滿、頃之腹潰、氣昇屬天、即使成日、其後后以選入被庭、遂有身、去貞觀十年十二月十六日乙亥、生帝於染殿院、○中略元慶元年正月三日乙亥、天皇即位於豐樂殿、大極殿未作、故用豐樂殿云々、詔曰、○中略辭別宣久、凡人子乃蒙福末久欲爲流事波、於夜乃多米爾止奈毛聞行須、故是以朕親母藤原氏○高子皇太夫人止上奉利治奉流、○下略

〔古今集目錄〕七條后者、昭宣公三女、諱溫子、宇多天皇后、生一女、均子內親王仁和四年十月六日、○六日、當作九日、爲女御、寛平九年七月廿六日爲皇太夫人、廿六

〔續日本紀二十三淳仁〕天平寶字三年六月庚戌、帝御內安殿、喚諸司主典以上詔曰、現神大八洲所知倭根

夫人爲皇太夫人

介外從五位下林連浦海、六位已下官八人爲養民司、左衞士佐從五位下巨勢朝臣島人、丹波介從五位下丹比宿禰眞淨、六位已下官三人爲作路司、差發左右京五畿內近江丹波等國役夫、天皇服錫紵、避正殿御西廂、率皇太子及群臣擧哀、百官及畿內以三十日爲服期、諸國三日、並率所部百姓擧哀、但神郷不在此限、勅曰、中宮七々御齋、當來年二月十六日、宜令天下諸國國分二寺見僧尼奉爲誦經焉、又每七日遣使諸寺誦經以追福焉、　九年正月癸亥、以從二位藤原朝臣繼繩、正三位藤原朝臣小黑麻呂、正四位上神王、正四位下紀朝臣古佐美、從四位上和氣朝臣淸麻呂、正五位下文室眞人與企、從五位上藤原朝臣黑麻呂、百濟王仁貞、三島眞人名繼、從五位下文室眞人八島爲周忌佛齋會司、六位已下官九人、　丁卯、百官釋服從吉、是日大祓、　十一月戊寅、勅曰、中宮周忌當來月廿八日、禮制乍畢、新歲須及、忌景俄臨、彌切罔極之痛、元正肇啓、何受惟新之歡、與言永悲、不能自忍、賀正之禮、宜從停止焉、　己卯、是日當新嘗、而爲諒闇未終、於神祇官行之、　十二月壬辰朔、詔曰、春秋之義、祖以子貴、此則禮經之垂典、帝王之恒範、朕君臨寓內、十年於茲、追尊之道、猶有闕如、與言念之、深以懼焉、宜朕外祖父高野朝臣、外祖母土師宿禰、並追贈正一位、其改土師氏爲大枝朝臣、夫先秩九族、事彰常典、自近及遠、義存曩籍、亦宜菅原眞仲土師菅麻呂等同爲大枝朝臣、

〔續日本紀九聖武〕神龜元年二月丙申、勅尊正一位藤原夫人〇宮子母后稱太夫人、　三月辛巳、左大臣正二位長屋王等言、伏見二月四日勅、藤原夫人、天下皆稱太夫人者、臣等謹撿公式令、云皇太夫人、欲依勅號應失皇字、欲須令文恐作違勅、不知所定、伏聽進止、詔曰、宜文則皇太夫人、語則大御祖、追收先勅、頒下後號、

〔續日本紀三十六桓武〕天應元年四月癸卯、天皇御大極殿、詔曰、〇中略朕親母高野高人乎稱皇太夫人止冠位上奉利治奉流、

〔續日本紀四十桓武〕延曆八年十二月乙未、皇太后崩、〇中略　壬子、葬於大枝山陵、皇太后姓和氏、諱新笠、〇中

小黒麻呂奉誄人奉誄、上諡曰天高知日之子姫尊、壬子、葬於大枝山陵、皇太后姓和氏、諱新笠、贈正一位乙繼之女也、母贈正一位大枝朝臣眞妹、后先出自百濟武寧王之子純陀太子、皇后容德淑茂、夙著聲譽、天宗高紹天皇〈○光仁〉龍潛之日、娉而納焉、生今上〈○桓武〉早良親王能登内親王、寶龜中改姓爲高野朝臣、今上即位、尊爲皇太夫人、九年追上尊號曰皇太后、其百濟遠祖都慕王者、河伯之女、感日精而所生、皇太后即其後也、因以奉諡焉、

〔續日本紀 四十 桓武〕延曆九年閏三月丙子、是日皇后〈○乙牟漏〉崩、〈○中略〉甲午、參議左大辨正四位上紀朝臣古佐美奉誄人奉誄、諡曰天之高藤廣宗照姫之尊、

○

皇太夫人

〔令義解 七 公式〕皇太后、〈謂天子母登后位者、爲皇太后、居妃位者、爲皇太妃、居夫人位者、爲皇太夫人也、〉皇太妃　皇太夫人同、〈○中略〉右皆平出、

〔皇代記 聖武〕母皇太夫人宮子、右大臣不比等女、

待遇

〔續日本紀 四十 桓武〕延曆八年十二月庚寅、勅頃者中宮不豫、稍經旬日、雖勤醫療、未有應驗、思歸至道、令復安穩、宜令畿内七道諸寺、一七箇日讀誦大般若經焉、　乙未、皇太后〈○母后高野新笠〉崩、　丙申、以大納言從二位藤原朝臣繼繩、參議彈正尹正四位上神王、備前守正五位上當麻王、散位從五位上氣多王、内禮正從五位上廣上王、參議左大辨正四位下紀朝臣古佐美、宮内卿從四位下石上朝臣家成、右京大夫從四位下藤原朝臣菅繼、右中辨正五位下文室眞人與企、治部大輔從五位上藤原朝臣黒麻呂、散位從五位上桑原公足床、出雲守從五位下紀朝臣兄原、雅樂助外從五位下息長眞人淨繼、大炊助從五位下中臣栗原連子公、六位已下官九人、爲御葬司、中納言正三位藤原朝臣小黒麻呂、參議治部卿正四位下壹志濃王、阿波守從五位上小倉王、散位從五位下大庭王、正五位下藤原朝臣眞友、因幡守從五位上文室眞人忍坂麻呂、但馬介從五位上文室眞人久賀麻呂、左少辨從五位上門倍朝臣弟當、彈正弼從五位下文室眞人八島、六位已下官十四人、爲山作司、信濃介從五位下多治比眞人賀智、安藝

諡號

天之位、深仁下濟、爰照法地之猷、日月於是貞明、乾坤以之交泰、遂乃欽承顧命、議定皇儲、東親舉誄、心在公正、實存志於天下、永無私於一己、旣而遊神慧苑、體三空之玄宗、降迹禪林、開一眞之妙覺、大慈至深、建藥院而普濟、弘願潜運、設悲田而廣救、是以煙浮寢殿、寶錄呈祥、蠶彫藤枝、織文告德、遂使百神協贊、天平之化不窮、黎元樂推、地成之德逾遠、臣等入參帷扆、出廁周行、鳴佩曳綸、綿積年祀、覩斯盛德、敢斯昌化、臣子之義、何無稱贊、人欲而天必從、狂言而聖尙擇、謹據典策、敢上尊號、伏乞奉稱上臺寶字稱德孝謙皇帝、奉稱中臺天平應眞仁正皇太后、上協天休、傳鴻名於萬歲、下從人望、揚雅稱於千秋、不勝至懇踊躍之甚、謹詣朝堂、奉表以聞、僧綱表曰、沙門菩提等言、略○中皇太后遊心五乘、披襟八正、化侔四供、道雙至眞、發揮神化之丹青、抑揚陶甄之鎔範、正慮獨斷、捜離明於舜濱、深仁幽覃、浮赤文於堯渚、故能遠安近肅、至治美於成康、治定功成、無爲盛於軒昊、固足以垂顯號、建嘉名、軼三五而飛英、超八九而騰茂者也、陛下謙讓推而不居、菩提等竊疑焉、菩提等遜察前徵、緬鏡遐載、隨時立制、權代適宜、皇王雖殊、其揆一也、菩提等不勝丹款之誠、謹上尊號、陛下稱曰寶字稱德孝謙皇帝、皇太后稱曰天平應眞仁正皇太后、伏願陛下皇太后、抑謙光之小節、從梵侶之讜言、庶使蟠木之鄉、燭龍之地、問號仰澤、聽聲傾光、凡厥在生、誰不幸甚、沙門菩提等不任下情、謹奉表以聞、詔報曰、略○中又見上皇太后尊號、感喜交懷、日興忘倦、任公卿之所表、從耆緇之所乞、策曰天平應眞仁正皇太后、受此惟新之號、何無洗舊之名、宜改百官之名、載施寬之大澤、略○下

〔日本書紀神功九〕六十九年四月丁丑、皇太后○神功崩於稚櫻宮、時年一百歲　十月壬申、葬狹城盾列陵、是日追尊皇太后、曰氣長足姬尊、

〔續日本紀孝謙十九〕天平勝寶六年七月壬子、太皇太后○文武后宮子崩於中宮、略○中　八月丁卯、正四位下安宿王率誄人奉誄、謚曰千尋葛藤高知宮姬尊、

〔續日本紀桓武四十〕延曆八年十二月乙未、皇太后崩、略○中　明年正月十四日辛亥、中納言正三位藤原朝臣

皇后攝政

〔日本書紀 九 神功〕氣長足姬尊、○神功 稚日本根子彥大日日天皇○開化 之曾孫、氣長宿禰王之女也、母曰葛城高顙媛、足仲彥天皇○仲哀 二年、立爲皇后、○中略 九年二月足仲彥天皇崩於筑紫橿日宮、○中略 十二月辛亥、生譽田天皇於筑紫、○中略 明年二月皇后領群卿及百寮、移于穴門豐浦宮、卽收天皇喪、從海路以向京、○中略 十月甲子、群臣尊皇后曰皇太后、是年也大歲辛巳、卽爲攝政元年、

〔日本書紀 三十 持統〕高天原廣野姬天皇、○中略 天命開別天皇○天智 第二女也、○中略 二年○天武 立爲皇后、○中略 朱鳥元年九月丙午、天渟中原瀛眞人天皇○天武 崩、皇后臨朝稱制、

皇后登帝位

〔日本書紀 二十二 推古〕豐御食炊屋姬天皇、○推古 天國排開廣庭天皇○欽明 中女也、橘豐日天皇○用明 同母妹也、幼曰額田部皇女、姿色端麗、進止軌制、年十八歲、立爲渟中倉太玉敷天皇○敏達 之皇后、三十四歲渟中倉太玉敷天皇崩、三十九歲當于泊瀨部天皇○崇峻 五年十一月、天皇爲大臣馬子宿禰見殺、嗣位既空、群臣請渟中倉太珠敷天皇之皇后額田部皇女、以將令踐祚、皇后辭讓之、百寮上表、勸進至于三、乃從之、因以奉天皇璽印、十二月己卯、皇后卽天皇位於豐浦宮、

〔日本書紀 二十四 皇極〕天豐財重日重日、此云伊柯之比、足姬天皇、○皇極 渟中倉太珠敷天皇○敏達 曾孫、押坂彥人大兄皇子孫、茅渟王女也、母曰吉備姬王、天皇順考古道、而爲政也、息長足日廣額天皇○舒明 二年立爲皇后、十三年十月息長足日廣額天皇崩、　元年正月辛未、皇后卽天皇位、

〔神皇正統記 持統〕持統天皇は、天智の御女なり、御母は越智娘、蘇我の山田石川丸の大臣の女なり、天武天皇太子になし〳〵しより、妃とし給ふ、後に皇后とす、○中略 庚寅の春正月一日卽位、大和の藤原の宮になしなす、○中略 この天皇天下を治め給ふ事十年、位を太子にゆづりて、太上天皇と申き、

尊號

〔續日本紀 二十一 淳仁〕天平寶字二年八月庚子朔、高野天皇禪位於皇太子、○淳仁○中略 是日百官及僧綱、詣朝堂上表、上上臺○孝謙 中臺○孝謙母后藤原安宿媛 尊號、其百官表曰、臣仲麻呂等言、○中略 皇太后叡德上昇、善穆儷

ば、殘り給ふ御名はおなじ事なるべし、

〔帝王編年記二十四後嵯峨〕仁治三年三月十八日、天皇即位于太政官廳、御歲二十三、○中略七月十一日、今上御母儀○通子被贈皇太后宮、御外祖父源通宗被贈左大臣正一位、

〔二水記〕永正元年七月十九日丁未、今日今上○後柏原御母○朝子准三宮今度贈皇太后宮御十三回、就之於城內般舟三昧院、有御經供養、導師定法寺、大僧正公助

〔皇胤紹運錄〕正親町院　母吉德門院、贈皇太后榮子、三木藤賢房女、

〔近代後宮小傳〕新中和門院、藤原尚子近衞前相國家熙公姬君、正德二年三月七日御入內、享保五年正月廿日准三宮宣下、同日門院號宣下、同日薨、同月葬、同十三年六月廿六日贈皇太后宮、

〔先代舊事本紀七孝元〕八年二月、尊皇后曰皇太后、皇太后○細媛追贈太皇太后、

〔先代舊事本紀七崇神〕元年正月甲午、皇太子尊即天皇位、尊皇后曰皇太后、尊皇太后○鬱色謎命追贈太皇太后、

○此他同書ニ、景行天皇元年、皇太后御間城入姬ニ、太皇太后ヲ追贈シ、成務天皇元年、皇太后日葉洲媛命ニ、太皇太后ヲ追贈シ、仲哀天皇元年、皇太后八坂入姬命ニ、太皇太后ヲ追贈シ、履中天皇元年、皇太后仲媛命ニ、太皇太后ヲ追贈シ、安康天皇即位、皇太后弊之姬命ニ、太皇太后ヲ追贈セラレシ事見エタレドモ、煩シケレバ此ニ揭ゲズ、

〔日本後紀十四平城〕大同元年五月辛巳、即位於大極殿、○中略壬午、追尊皇太后、○光仁后新笠爲太皇太后、

〔日本紀略六圓融〕安和二年八月廿五日庚子、太上天皇○冷泉尊號詔、內大記伊輔作之、又贈妣贈皇太后藤原安子○村上后太皇太后、

○按ズルニ、光仁后高野新笠ハ、皇太夫人ニテ薨ジ、後ニ皇太后又太皇太后ヲ贈ラレ、村上后藤原安子ハ、皇后ニテ崩ジ、後ニ皇太后又太皇太后ヲ贈ラレタリ、倶ニ異例ト云フベシ、

皇太夫人正一位高野朝臣新笠贈正一位乙繼朝臣女、延暦八年十二月薨、諡曰天高(高下續日本紀有知字)日之子姫尊、同九年追上尊曰皇太后、

〔日本紀略淳和〕弘仁十四年五月甲寅朔、詔云々、皇妣○桓武妃旅子云々、降年不永、早從昇天、朕在幼稚、已違慈顏、追上徽號、爲皇太后、

〔三代實錄四十五光孝〕元慶八年二月廿二日甲寅、天皇卽位於大極殿、詔曰、○中略辭別宣久、凡人子乃欲蒙福事波、於夜乃多米止毛奈聞召須、故是以、朕先妣藤原氏附、○仁明女御澤子皇太后尊號乎追贈奉流、○下略

〔大鏡裏書〕贈皇太后胤子御事、宇多天皇女御、醍醐天皇母儀、勸修寺贈太政大臣高藤公女、母贈正二位宮道朝臣列子、宮內大輔彌益女、仁和四年九月廿二日爲更衣、同日聽禁色、寬平五年正月廿二日爲女御、從四位下同八年六月卅日卒、同九年七月十九日贈皇太后宮、

〔日本紀略十二三條〕寬弘八年六月十三日乙卯、一條院天皇逃位於新皇、○三條中略、十二月廿七日丙寅、詔追尊皇妣女御從四位上藤原朝臣超子、贈皇太后、置國忌山陵、

〔十三代要略一後朱雀〕寬德二年正月十六日癸酉、皇太子○後冷泉受禪、○中略四月八日、新帝卽位於大極殿、年廿一八月十一日、追尊皇母嬉子、爲皇太后、

〔十三代要略二白河〕延久五年五月六日、天皇先妣藤原氏○茂子贈皇太后、

〔續世繼三花園の匂〕此御門○二條の御母は、大納言經實の御むすめ、その御母、春宮大夫公實の御むすめなり、その大納言の中の君は、花ぞのゝ右のおとゞの北のかたなれば、姉の姫君を子にして、院○後白河のいま宮とておはしましゝに、たてまつられたりしなり、この帝うみおき奉りてうせ給にき、后の位おくられ給ひて、贈皇太后宮懿子と申すなるべし、御おやの按察大納言○經實も、おほきおとゞ、おほきひとつのくらゐおくられ給へるとなんうけ給はる、さることもやあらんとも知らでうせ給にしかども、やんごとなきくらゐそへられ給へり、御末のかざり成べし、はかなくて消させ給にし露の御いのちも、后贈られ給へば、生てなり給へるもむかしがたりになりぬれ

七日爲皇太后宮、元慶六年正月七日爲太皇太后宮、○節略

〔日本紀略二朱雀〕天慶九年四月廿日庚辰、天皇遜位於皇太弟成明親王、○中略、村上、又皇太后○朱雀母穩子后、爲太皇太后、

〔日本紀略十二三條〕長和元年二月十四日壬子、宣命、尊皇太后○圓融后遵子、爲太皇太后、

〔一代要記七後三條〕後宮

皇后爲太皇太后

太皇太后禎子內親王永承六年二月十三日轉皇太后、治暦四年四月十七日爲太皇太后、後朱雀院后、

〔帝王編年記二十一後白河〕皇后○近衛后多子保元元年十月廿七日爲皇太后、同二年二月十三日爲太皇太后、

〔一代要記九崇德〕後宮

中宮爲太皇太后

太皇太后宮令子內親王(白河皇女、鳥羽准母)長承三年三月十九日改皇后爲太皇太后、泰子立后(鳥羽后)日也、大治五年七月廿六日落飾爲尼、

〔一代要記九崇德〕後宮

皇后宮藤原朝臣得子鳥羽院后、(中略)永治元年十二月廿七日辛卯立后、天皇即位、今日止中宮爲太皇太后宮、

贈皇后

〔日本後紀十四平城〕大同元年六月辛丑、詔藤原某朝臣、追贈皇后、遣伊勢守藤原朝臣大繼等、告皇后陵、皇后諱帶子、贈太政大臣正一位藏原朝臣百川之女也、帝○平城在儲宮、納之爲妃、

〔日本紀略淳和〕弘仁十四年六月己丑、追立贈一品高志內親王爲皇后、詔曰、天皇大命云々、贈一品高志內親王云々、追天母皇后止贈賜部止云々、

〔延喜式二十一諸陵〕石作陵贈皇后高志內親王、在山城國乙訓郡、○下略

〔續三宮傳〕仁孝帝女御、新皇嘉門院、御諱繁子、鷹司故准后前關白政熙公御女、文化十四年十二月十一日入內、廿一歳文政三年十二月廿六日准后宣下、同六年四月三日薨去、廿七歳同七年七月十二日贈皇后宮宣下、○節略

贈皇太后

〔一代要記二桓武〕後宮

待遇

〔西宮記　臨時五〕皇后行啓〈○中略〉太皇太后〈祖母長信宮〉

〔三代實錄　二十清和〕貞觀十三年九月廿八日辛丑、太皇太后〈○仁明后順子〉崩、　廿九日壬寅晦、諸衞警固、令伊勢近江美濃等諸關警固、勅曰、今月廿八日太皇太后崩、事須遣使警固、然而時在秋收、恐妨農業、況復牧宰其人、宜停發使一委國吏勤令警察、　十月四日丙午、太皇太后遺令、不聽天下著素、仍令京畿七道停擧哀幷著素服、　五日丁未、天皇服錫紵、近臣皆素服、葬太皇太后於山城國宇治郡後山階山陵、七日己酉、天皇釋服、近臣隨除、諸衞解嚴、令伊勢近江美濃國解關、

皇太后爲太皇太后

〔先代舊事本紀　七開化〕二年正月、尊皇后曰皇太后、追贈皇太后〈○細媛〉曰太皇太后、

〔先代舊事本紀　七垂仁〕元年正月戊寅、皇太子尊即天皇位、尊皇后曰皇太后、尊皇太后〈○伊香色謎命〉曰太皇太后、

○按ズルニ、此兩條疑無キニ非ザレドモ、姑ク原文ニ從フ、

〔文德實錄　一〕嘉祥三年五月辛巳、嵯峨太皇太后崩、　壬午、葬太皇太后于深草山、〈○中略〉太皇太后姓橘氏、諱嘉智子、〈○中略〉嵯峨太上天皇初爲親王納后、寵遇日隆、天皇登祚、弘仁之始、拜爲夫人、先是數日、后夢出自針孔立左市中、六年〈○弘仁〉秋七月七日、后亦夢著佛瓔絡、居五六日立爲皇后、十四年天皇〈○嵯峨〉禪位於淳和皇帝、尊天皇爲太上天皇、皇后爲皇太后、仁明天皇受禪、尊皇太后爲太皇太后、

〔三代實錄　三十五陽成〕元慶三年三月廿三日癸丑、淳和太皇太后崩、〈○中略〉太后諱正子、〈○中略〉仁明天皇受讓之後三月二日乙丑、〈○天長十年〉尊淳和天皇爲太上天皇、皇后爲皇太后、〈○中略〉文德天皇齊衡元年四月、尊皇太后爲太皇太后、

〔大鏡裏書〕太皇太后宮〈順子〉御事、〈仁明天皇后、文德天皇母儀、〉閑院贈太政大臣〈冬嗣公〉女、嘉祥三年四月爲皇太夫人、齊衡元年四月爲皇太后宮、貞觀三年二月廿九日癸酉、爲太皇太后宮、

太皇太后宮〈明子〉御事、〈文德天皇后、清和天皇母儀、〉忠仁公女、天安二年十一月廿五日爲皇太夫人、貞觀六年正月

皇太夫人爲皇太后

〔三代實錄二十清和〕貞觀十三年九月廿八日辛丑、太皇太后崩、太皇太后姓藤原氏、諱順子、贈太政大臣正一位冬嗣朝臣之女也、母尚侍贈正二位藤原朝臣美都子、后美姿色、雅性和厚、嘗在父大臣家、晨起澡手、有小虹降盥器、卜占者曰、至重之祥、其慶不可言焉、仁明天皇儲貳之日、聘以入宮、寵遇隆篤、生文德天皇、仁明天皇踐祚之初、授從四位下、承和十一年加從三位、嘉祥三年四月甲子、文德天皇卽位、是日尊爲皇太夫人、齊衡元年爲皇太后、

〔大鏡裏書〕皇太后宮班子女王、(光孝天皇后、宇多天皇母儀、)式部卿仲野親王女、母贈正一位當宗氏、元慶八年四月辛卯爲女御、仁和三年正月八日叙從二位、十一月十一日爲皇太夫人、寬平九年七月爲皇太后、

女御爲皇太后

〔日本紀略九一條〕寬和二年七月五日辛未、詔、(○中略)以母儀女御藤原詮子爲皇太后、僧尼施物、又大辟以下罪常赦所不免者赦除、卽日任宮司、　九日乙亥、皇太后宮自右大臣(○藤原兼家)東三條第參(○參恐衍)入御內裏、諸卿以下有祿、又正三位藤原道隆叙之、皇后(○詮子)同母兄也、

准后爲皇太后

〔續三宮傳〕青綺門院、(櫻町院皇后、御諱舍子、二條前關白贈准后吉忠公御女、御母從三位菅原利子、)元文元年十一月廿五日入內、同日女御宣下、同五年五月廿七日准三后、延享四年五月廿七日皇太后宮、(三十二歲)

剃髮後爲皇太后

〔女院小傳〕陽明門院、(禎子)後朱雀后、後三條母、三條院第三皇女、母法成寺關白(○藤原道長)第二女、皇太后藤姸子、(○中略)長元十、二、十三爲中宮、廿五、三、一爲皇后宮、寬德二、七、廿二爲尼、(卅三、妙法覺、今年正、十六後朱雀院有御事、)永承六、二、十三爲皇太后、(卅九)

院號後爲皇太后

〔女院小傳〕後京極院、(嬉子)入道大相國實兼三女、(○中略)元應元、八、七爲中宮、(○後醍醐后)正慶元、五、廿院號、爲禮(成門院、而元弘止之、)元弘二、八、卅爲尼、同三、七、十一爲皇太后宮、

○

太皇太后稱呼

〔令義解七公式〕太皇太后、(謂天子祖母登后位者、爲太皇太后、居妃位者、爲太皇太妃、居夫人位者、爲太皇太夫人也、)太皇太妃、太皇太夫人同、(○中略)右皆平出、

中宮爲皇太后

〔日本書紀 四安寧〕磯城津彦玉手看天皇、（安寧○）神渟名川耳天皇太子也、母曰五十鈴依媛命、事代主神之少女也、三十三年（○綏靖、中略、）其年七月乙丑、太子（○安寧）即天皇位、元年、（○中略）尊皇后（○綏靖后）曰皇太后、

〔日本書紀 四懿德〕大日本彦耜友天皇、（○懿德）磯城津彦玉手看天皇第二子也、母曰渟名底仲媛命、事代主神孫鴨王女也、（○中略）元年二月壬子、皇太子（○懿德）即天皇位、（○中略）九月乙丑、尊皇后（○安寧后）曰皇太后、

○按ズルニ、此他日本書紀ニ載スル所、歷代大概同例ナレバ略ス、

〔日本後紀 十四平城〕大同元年五月壬午、追尊皇太后（○光仁后、新笠、）爲太皇太后、皇后（○桓武后、乙牟漏、平城母后、）爲皇太后、

〔三代實錄 三十五陽成〕元慶三年三月廿三日癸丑、淳和太皇太后崩、（○中略）太后諱正子、嵯峨太上天皇之長女、與仁明天皇同產也、（○中略）天長四年二月爲皇后、（○中略）十年二月廿八日乙酉、天皇（○淳和）遷御淳和院、讓位於皇太子、（○仁明）天皇詔、停太上天皇及皇太后之號、即使停廢后宮官屬、仁明天皇受讓之後、三月二日己丑、尊淳和天皇爲太上天皇、皇后爲皇太后、

〔日本紀略 二朱雀〕承平元年十一月廿八日辛亥、詔尊母儀皇后（○醍醐后、穩子、）爲皇太后、凡服御物、湯沐邑、幷職中諸事、皆悉如舊典、

〔續三宮傳〕新淸和院、（光格帝皇后、仁孝母后、御諱欣子、後桃園院第一皇女、御母盛化門院、）寬政六年三月七日立皇后、文政三年三月十四日御轉皇太后宮、（自今奉稱大宮、○節略）

〔日本紀略 十三後一條〕長和元年二月十四日壬子、宣命、（○中略）中宮（○一條后、彰子、）爲皇太后、

〔續世繼 四藤波〕このきさき（○後一條后、威子、）のうみたてまつりたまへる姬宮、章子內親王と申、二條院と申この御事なり、後冷泉院東宮におはしまし〻時まゐらせ給ひて、永承元年七月に中宮にた〻せ給、治曆四年四月に、皇太后宮にあがらせ給ひき、

〔女院小傳〕皇嘉門院（藤聖子）崇德后、近衞准母、法性寺關白（○藤原忠通）第一女、母大納言宗通卿女、從三位藤宗子、大治五年二、廿一爲中宮、永治元、十二、廿七爲皇太后、（天皇（近衞）即位日、年廿一、）

りさせ給ふ、おかくなるに見れば御まへよりはじめ、みな墨染におはしましあふに、いとゞかなし、よろづ𛀁たてゝひつじの時ばかりに事はじまる、所々の御誦經ども、庭のおもて見えぬまで、池のきはに出してつみわたしたり、殿の御まへ、○藤原道長女院、○一條后上東門院彰子、妍子姉、中納言、關白殿、○藤原頼通つぎ〳〵の殿ばら、一品宮みやづかさども𛀁もべまで、かたじきなきまで、つかうまつること、かたはらいたし、女房の御誦經、みなきぬをぞつゝみてつかうまつる、御誦經に御装束二くだりなり、れいの御装束に、またわ𛂦の御装束、ひるのにてせさせ給へり、○中略ほとけは、このつくらせ給へる阿彌陀の三尊、御經のほどおしはかるべし、講師などの申つゞけ給ふありさま、中々なる物まねびなればかゝず、

供給

〔日本紀略淳和〕弘仁十四年六月乙酉、奉宛封戸、太上天皇○嵯峨一千五百烟、皇太后○嵯峨后嘉智子十烟、

〔續日本後紀仁明四〕承和二年三月丁巳、勅後太上天皇○淳和御封二千戸、皇太后○淳和后正子内親王御封一千戸、准冷泉院○嵯峨御封行之、若當有損年、以公相補令進之、

〔續日本後紀仁明五〕承和三年二月壬午、河内國丹比郡荒廢田十三町、充皇太后宮○正子内親王後院、

〔執次詰所本御系譜〕青綺門院○櫻町后藤舍子、○中略延享四年五月廿四日立后、○立皇太后稱大宮、○中略寛延三年十月廿一日、千石御増地、

〔執次詰所本御系譜〕恭禮門院○桃園后藤富子、寶暦五年十月十四日二千石御料被定、同十一月廿六日入内、明和八年五月九日立太后、同九年十月六日御増地千石被定、

○按ズルニ、此他後桃園天皇女御藤原維子、仁孝天皇女御藤原祺子モ亦立太后ノ後千石増地ノ事、本書ニ載セタレドモ今略ス、

皇后爲皇太后

〔日本書紀綏靖四〕神渟名川耳天皇、○綏靖神日本磐余彦天皇第三子也、母曰媛蹈鞴五十鈴媛命、事代主神之大女也、○中略元年正月己卯、神渟名川耳尊即天皇位、○中略尊皇后○神武后曰皇太后、

子正四位下、正五位下藤原朝臣宣子從四位下、藤原朝臣御康正五位下、正六位上藤原朝臣貞子、多治眞人安子、無位大江朝臣告子並從五位下、七日饗宴之餘慶、特有此殊寵焉、

〔日本紀略二朱雀〕承平元年十一月廿八日辛亥、詔尊母儀皇后〇藤原穩子爲皇太后、凡服御物、湯沐邑、幷職中諸事、皆悉如舊典、

〔日本紀略十三後一條〕萬壽四年九月十四日辛亥、皇太后〇三條后藤原妍子、依病落飾卽崩、年卅四、　十六日癸丑、奉葬皇太后於大峯寺前野了、

〔榮花物語二十九玉の飾〕三月八日よりなやませ給て、萬壽四年九月十四日のさるの時にうせさせ給ひぬ、〇中略、妍子、一品宮〇三條皇女禎子内親王御ぶくやつれ、いとあはれに心ぐるしう給にもかゝまほしうおはします、女房みやづかさなど、皆いとくろましたり、さぶらひの人々は、さすがにこきかぎり、きぬはかまにて冠をばしたる、〇中略五七日にもならせ給ぬれば、日ごろつくらせ給へる、五丈尊一万の不動尊供養したてまつらせ給、その頃はあしき御ものゝけどもにてうせさせ給ぬれば、佛道さまたげにやとて、今にたゞ極樂へとのみ御心ざしなりけり、講師には、けうえん法橋、いといみじうつかまつる、殿のうへの御前〇藤原倫子、道長妻妍子母、などいみじうなかせ給、女房など、おなかたはらいたと思ふまでなければ、講師はあきれつゝをやみがちなり、御法事は十月廿八日とさだめさせ給へり、それにはしろがねの御ぐどもして、阿彌陀の三尊をぞつくり奉らせ給ける、〇中略御法事の僧の法服、御誦經のれうの御ぞの事、染殿にも、おほかたの人々もいそぎみちたり、かゝる程にはかなくて廿七日になりぬれば、阿彌陀堂に莊嚴御しつらひなどせさせ給ふ、まだあかつきに、とのゝうへの御まへ、一品宮ひとつ御車にてわたらせおはします、とのゝ御方宮など、女房車廿ばかりあり、宮の女房こたみばかりのみやづかへとおもふに殘りなく參りたり、萬まだくらき程にておぼつかなければ、くはしくかきあらためず、おはしましつきて、此堂の北の方の廊にお

待遇

（森）少納言侍源正香　（和田）辨侍橘吉胤　使部二人
（平田）中務省少丞職季　（渡邊）史生平華　（下田）內記局少職季
（永井）大舍人寮少丞藤井常足　（谷口）式部省少丞平胤典　（永田）史生源義直
（堀川）大藏省少丞兼木工寮弘度　史生　（小野）主殿寮助伴重安
（小野）權助職保　史生　火炬師
（平岡）掃部寮權助利常　（清水）大允平田藤原利政　（平田）藤原利和
（岡田）左衞府少尉源孟綱　（世續）右衞門府大尉藤原重登　（山路）左兵衞府少尉平信實
（三上）右兵衞大尉景偕　（橫田）陣官人橘久芳　（富島）源元方
（高橋）御厨子所預宗愛　（後藤）內膳司奉膳高橋實定　（德岡）大膳職大進小野久古
各膳部二人宛
藏人方
（平田）出納職賓朝臣　（平田）職修　（山科）御藏小舍人生直
（山科）正恒　（栗津）職敬　（神岡）藏人所衆兼上南座文景
（結城）秀伴　戸屋主　仕人

〔三代實錄 清和十五〕貞觀十年十二月五日甲子、勅遣使者於近京四十箇寺、平城四十箇寺、修轉經功德、襯錢寺別有數、賀皇太后（清和母后藤原順子）春秋盈四十、以續餘算也、　七日丙寅、天皇曲宴皇太后於常寧殿、王公卿士並侍焉、歡樂竟日、群臣具醉、賜祿各有差、是日於朱雀門前、召集京邑貧人、賜物有差、　九日戊辰、詔授從四位上行皇太后宮大夫藤原朝臣良世正四位下、從四位下行左中辨兼皇太后宮亮藤原朝臣家宗從四位上、齊院長官從五位下兼行皇太后宮大進藤原朝臣忠主從五位下、外從五位下皇太后宮少進菅野朝臣愛甲從五位下、正六位上藤原朝臣清生從五位下、從四位下上毛野朝臣滋

權大夫　從二位藤原朝臣忠能兼

弘化四年三月十四日

太政官謹奏

皇太后宮職

亮　正四位上藤原朝臣恭光兼

權亮　正四位下藤原朝臣季知兼

大進　正五位上藤原朝臣顯彰兼

權大進　正五位下藤原朝臣胤保兼

少進　正五位下藤原朝臣哲長兼

權少進　正六位上丹波朝臣賴永兼

大屬　從五位下中原朝臣職孚兼

少屬　正六位上紀朝臣定厚兼

權少屬　正六位下宗岡朝臣行誠兼

弘化四年三月十四日

參仕

押小路大外記師身朝臣　壬生新左大史輔世　平田權少外記職孚

出鹿右少史秀興　行事官右史生以昌　宗岡史生宗岡經成

三宅史生代宗岡行邦　岩崎左官掌紀氏萬　小野紀氏明

筆右官掌紀親成　筆紀孟親　三宅召使宗岡行邦

青木宗岡行誠　三宅宗岡行健　青木臨期不參宗岡行要

衛門府
三室戸右衛門佐雄光朝臣　高野左衛門佐保美朝臣
兵衛府
萩原右兵衛佐員光朝臣　裏松左兵衛佐勳光
冊命使
正親町三條右中將實愛朝臣
御調度使
北小路極﨟大江俊常
傳奏
柳原中納言隆光卿
奉行
坊城頭左中辨俊克朝臣
四位侍從
櫛笥隆韶朝臣　阿野公誠朝臣
五位侍從
葉室長順　河鰭公述
陪膳殿上人
錦小路中務少輔賴易朝臣　竹內治部大輔惟和朝臣　勘解由小路中務權少輔資生
堤大和權介哲長　倉橋因幡權介泰顯
陪膳諸大夫
保田刑部權大輔利壽　靑木治部少輔吉誠　石井刑部少輔在正
西村出雲守世誠　小山兵部權少輔長敎
除目二通之寫宿紙也
太政官謹奏
皇太后宮職
大夫　正二位源朝臣基豐兼

神祇官人奉₂仕大殿祭₁(少進導之、)引₂若入₁レ夜時、御階左右主殿寮奉₂仕立明₁、

立太后宣命之寫、散狀之寫、并役送參仕等交名、除目二通之寫、

現神止大八洲國所知須天皇我詔旨萬宣布勅乎、親王諸王諸臣百官等天下公民衆聞食止宣、凡爲レ人者、於夜乃恩愛乎酬比天、崇飾留古止波、米豆良可爾新伎政爾波非須、往代乃聖主毛、行來迹事止曾所聞食須、故是以准三宮藤原氏乎皇太后爾上奉利崇賜乎、此狀宜悟氏、隨法仁供奉止勅天皇我御命乎衆聞食止宣、

弘化四年三月十四日(黄紙也)

散狀之寫立后節會　公卿

內辨　近衞內大臣(忠熙公)

外辨第一　花山院右大將(家厚公)　德大寺大納言(實堅卿)

除目陣上卿　久我權中納言(建通卿)

宣命使　飛鳥井中納言(雅久卿)

除目陣執筆　野宮宰相中將(定祥卿)　四辻新宰相中將(公績卿)

少納言(淸岡)長熙朝臣　辨(柳原右少辨)光愛

次將左

(東園左中將)基貞朝臣　(大宮左少將)政季朝臣　(鷲尾左少將)公賢朝臣

右

(正親町右中將)實德朝臣　(油小路右少將)隆晃朝臣　(野宮右少將)定功朝臣

啓陣　近衞府

(西四辻右少將)公恪朝臣　(中山左少將)忠愛朝臣

卿參本宮、

本宮次第

先大夫以下參本宮、列立南棟門外、（西面南上、公卿一列、殿上人一列、）次亮離列啓事之由、還出仰聞食之由、加列、次大夫以下拜舞畢昇殿、次册命勅使立南棟門外、令亮啓事之由、此間敷勅使座於渡殿、（高麗端疊加茵、）次亮還出告召之由、勅使著座、啓册命之趣、次大夫取祿（白大褂一領、諸大夫持參之、）授勅使、降殿拜舞退出、次六位藏人相具御調度、（小舍人相從、）立南棟門外、令亮啓事由、次大進出南棟門召藏人、次藏人著座、次權大夫取祿（女裝束、）授勅使、次勅使降殿拜舞退出、此間賜小舍人祿、（匹絹、於南棟門邊大褂授之、）撤勅使座、次宮司（自亮至少進、）運送御倚子以下調度物、設母屋庇等、此間出納計渡御膳具、次六府各率官人以下一員近衞等參、（左右近衞、左右兵衞在門內、左右衞門在門外、）次公卿（大夫權大夫加列、）殿上人等列立南棟門外、（公卿一列、殿上人二列、西面南上、）次令權亮啓賀、皇太后著御倚子、（殿中、）次權亮還出復命、次公卿殿上人進庭中拜舞、（公卿一列、殿上人一列、）次公卿昇殿著庇座、（南上東面相對、）座前豫設赤木机、居肴物、次四位侍從著横敷座、（西上南面、）座前豫設黑木机、居肴物、次五位侍從著廊代座、（南上西面、）座前設黑木机、居肴物、次一獻、端勸盃大納言、瓶子大進、奧勸盃大夫、瓶子權大進、巡流至四位侍從、四位侍從前、五位諸大夫取瓶子、五位侍從前、大進勸盃、五位諸大夫取瓶子、若關白太政大臣追加著坐者、立机獻盃、（勸盃大納言、瓶子大進、）次二獻、奧勸盃中納言、瓶子五位殿上人、端勸盃權大夫、瓶子五位殿上人、巡流同一獻、四位侍從前、五位諸大夫取瓶子、次居餛飩、關白太政大臣前、四位殿上人役之、納言參議前、五位殿上人役之、四位五位等侍從前、五位諸大夫役之、各居畢參議申箸、次三獻、奧勸盃參議、瓶子五位殿上人、端勸盃亮、瓶子五位殿上人、巡流同一二獻、四位侍從前、勸盃大進、五位諸大夫取瓶子、五位侍從前、少進勸盃、五位諸大夫取瓶子、次居飯、（役送同餛飩、）各居畢參議告箸上、次居冷汁、次居熱汁、次居追物、次居菓子、次居薯蕷粥、每居畢參議申箸、次賜祿退出、諸大夫取祿、殿上人（各匹絹、於五位者黃絹、）五位殿上人取納言參議等祿、（各白大褂一領、）權亮取大臣祿、（白織物大褂一重、）大夫取關白太政大臣祿、（同上、）次供御膳、上臈女房勸仕陪膳、次

可為宣命使之由、次諸卿著外辨、次大臣起座、於陣後著靴、進宜陽殿壇上、（内記持宣命相從）天皇御南殿、（簾中）近仗陣階下、（下設胡床）次内辨取副宣命於笏、進立軒廊、次内侍臨東檻、次内辨昇殿著兀子、次開門、次闈司著座、次内辨召舍人、次少納言就版、次内辨召刀禰、少納言稱唯退出召之、次外辨參列標下、（異位重行、北面西上、）次内辨召宣命使給宣命、次宣命使降立軒廊、次内辨降殿就標、次宣命使就版、宣制一段、群臣再拜、又一段、群臣再拜、次宣命使復本列、次内辨以下退出、改著淺履還著仗座、天皇入御、近仗退出、次職事奉仕除目御裝束、次職事就軾召大臣、次大臣著殿上、次出御晝御座、關白著御簾前、次職事奉仰召大臣、次大臣參進御前圓座、次依天氣召男共、五位藏人豫參進候簀子、大臣仰可持參硯宣紙之由、五位藏人持參之、次大臣依天氣書宮司除目、次奏聞御覽畢返給、次大臣取副除目於笏退著殿上座、次大臣召外記筥納之、令持外記還著仗座、外記置筥退出、次大臣更以官人召外記、仰可持參硯之由、次外記持參硯置參議座上、次大臣召清書參議於座前授除目、參議復座、次參議候氣色、執筆兩大夫一枚、（折堺）亮以下一枚、（折堺）次參議清書畢持參大臣前、次大臣披見畢納筥、次大臣召外記給筥、外記持筥候小庭、次大臣進弓場、（外記相從）奏清書、御覽畢返給、次大臣還著陣、外記置筥退出、次大臣更以官人召外記、六位外記候小庭、次大臣問、式省候否、外記申候之由、大臣仰可召之由、外記稱唯退出、外記進小庭、申式省候之由、大臣仰可召之由、外記稱唯退、外記又進小庭、申式省候之由、大臣仰可召之由、外記稱唯退出、次式部丞立小庭、次大臣取副除目於笏、召式部丞給之、丞取之立小庭、次大臣仰仰詞、丞退出、次大臣令官人傳仰可撤筥硯等之由於外記、次外記參進撤之、此間大夫以下、進弓場奏慶賀拜舞、（公卿一列、殿上人一列、）畢參本宮、次職事就軾、仰可差進啓陣之由、次大臣令官人加敷軾、次大臣召外記、仰可召近衞之由、次左右近衞次將就軾、次大臣仰可候啓陣之由、次將稱唯退出、次大臣召外記、仰可召衞門之由、次左右衞門佐就軾、次大臣仰可候啓陣之由、佐稱唯退出、次大臣召外記、仰可召兵衞之由、次左右兵衞佐就軾、次大臣仰可候啓陣之由、佐稱唯退出、次大臣令官人撤軾、次大臣以下起座、次大臣引諸

房筞、次祿、先地下召人疋絹、諸大夫取之、次五位侍從黃絹各一疋、次四位侍從白絹各一疋、（已上諸大夫役之、御遊之間、自上﨟給之、）次參議幷散三位各白大褂一領、（殿上人役之、自一﨟給之、）次中納言同褂各一重、次大納言、（爲宮司公卿不錄、已上殿上人役之、）次大臣各同褂一重、加萠黃織物褂一領、（兩貫首權亮役之、）次攝政御祿、（如大臣、加女裝束一具、權大夫役之、）次諸卿退出、

今日綾殿南面八間、（除階間、）西面四間、女房、有打出事、紅薄樣萠黃表著、葡萄染唐衣、同色打衣、

後聞、理髮髮上掌侍命婦藏人等祿、宮司向宿所給之、次供朝夕御膳、釆女六人理髮役之、皇后御大床子、御匣殿陪膳女房八人役之、

亮定隆朝臣、於侍所令書侍女房等日給簡、下御匣殿宣旨等令貢、

主水司供御手水、

神祇官奉仕大殿祭、

主殿女孺供掌燈、

宮司以下下格子、

次亮以下名謁、

召次啓時、

所々饗衙重前物等見定文、支配可尋、

〔弘化四年三月十四日立太后次第〕前一兩日職事奉勅向大臣第、有召仰之事、

當日早旦、諸司奉仕南殿御裝束、刻限諸卿著仗座、次大臣令官人敷軾、次大臣召大外記問諸司具否、次職事來軾、仰以准三后藤原氏（仁孝妃藤原祺子、鷹司政通女、號新朔平門院、）爲皇太后可令作宣命之由、次大臣召大內記仰宣命之趣、次內記持參宣命草、（入筥、）次大臣披見、內記退入、次大臣令職事奏宣命草、職事還來仰可令清書之由、次大臣召內記返給宣命草、仰可令清書之由、內記退入、次內記持參清書、次大臣披見、畢更進弓場、（內記持宣命相從、）奏聞、御覽畢返給、次大臣還著陣、給宣命於內記、仰可候陣腋之由、次大臣差其人告

此間攝政殿下、左大臣、（經）右大臣、（兼）内大臣、（忠）大夫雅通、大納言師長、定房、公保、左衛門督隆季、中納言實房、宗家、右衛門督實國、權中納言成親、資忠、忠親、參議資賢、左大辨雅頼、右宰相中將宗盛、右兵衛督時忠、參議親範、家通、右大辨實綱、（已上一列、東上北面、）四位侍從八人中、藏人頭内藏頭敎盛朝臣、同權右中辨信範、（右少將）通能、左少將通親、（右中將實守朝臣、實宗朝臣等不列、有所存歟、右中將頼實雖入此列、依任宮司不列立歟、）五位侍從六人中、右少辨重方、左少辨爲親、右少將有房、侍從伊輔、兵衛佐通盛、（藏人大進雖入此列、依任宮司不列歟、）於中門外、令權亮頼實朝臣啓拜禮之由、皇后理髮出御御座、女房廿人上簾候御前、諸卿侍從舞踏、此間皇后御椅子後、次諸卿退入著座、（大臣昇自南階、納言以下昇自中門廊、侍從出自中門、四位侍從著南廊座、五位侍從著中門廊座、預内藏頭有一座下、下官又著其次、中將實守等有下官下、）次一獻、攝政殿起端座、於侍從座上廣庇、令取坏給、亮定隆朝臣居折敷傳進之、此間一族卿相、中納言實房、宗家、實國起座、參議資賢、親範、實綱下廣廂、與座左大辨雅頼起座、下官下長押平伏、依家禮也、殿下經侍從座末令勸與座左府給、大藏卿長成朝臣取瓶子、源大納言起與座、於廣廂取坏、諸大夫傳獻、中務大輔長明取瓶子、納言勸端座右大臣、端座坏傳四位侍從座、大進經房勸五位侍從座、次諸大夫取瓶子、次二獻、左大臣起座、於南弘廂取盃、前長門守隆輔朝臣傳之、殿上五位中務大輔長明取瓶子、左府奉勸端座殿下、右府起端座、被勸與座内府、侍從俊光朝臣傳獻盃、侍從俊定取瓶子、次居餛飩、亮定隆朝臣爲殿下陪膳、權大進親宗取折敷、大臣陪膳殿上四位勤之、納言手長再役諸大夫役之、四位五位侍從藏人五位手長、次諸八夫役之、次三獻、内大臣起與座、被勸端座殿下、大藏卿長成朝臣傳獻盃、侍從實明取瓶子、藤大納言起端座、被勸左府、侍從伊輔取瓶子、次居飯、陪膳以下役人如初、便撤餛飩、次居汁、役人同前、（已上餛飩飯汁居畢、每度大辨申上之、）次下著、次諸大夫取菅圓座、敷南階以西簀子及透渡殿、（件圓座在錄所、）次諸卿移著、地下召人六人著砌座、掃部寮敷黄緣疊、次居穩座肴物、（備給折敷高坏、大臣三本、納言二本、亮大進三人供殿下御料、左府以下陪膳被省略云々、）次地下召人賜衝重、次右衛門督勸盃、藏人治部少輔兼光取瓶子、次置御遊具、諸大夫役之、殿上召人候座末、藤大納言琵琶、權中納言宗家拍子、成親笛、參議資賢和琴、家通箏、左少將定能朝臣篳篥、右大將隆

下官同馳参（法住寺御所）

次摂政殿、左大臣、右大臣、内大臣、大夫以下、納言参議、皆被著対代南庇、

未刻、勅使右近権中将実守朝臣参上、（縫腋袍、蒔絵剣、改闕腋抜袍也、）立中門辺、亮定隆朝臣下逢、帰昇寝殿南簾下啓事由、退出、令敷座、（寝殿西庇戸前、高麗畳一枚、其上東京錦茵、諸大夫役之、）次定隆朝臣召中使、中使参上、啓所命事由、大夫取白大袿一領、給勅使、勅使纏頭、降自対南階、再拝退出、次蔵人平信広、相具御物参上、（青色袍、欵冬下襲、萌木表袴著之、）於中門辺啓事由、其儀如先、勅使座未撤、次権大夫取女装束一襲給之、信広於前勅使所舞踏退出、（再拝由雖載式文、已母后也、可舞踏由下官所存也、）但大進経房啓事由、又召蔵人、次権大進光雅、親宗、兵衛佐盛頼、左衛門佐信基、持参御物、

平文御倚子一脚（在白織物面褥）

二色綾毯代　金銅犀形鎮子四　已上掃部寮人持参之

螺鈿大床子二脚（在高麗敷物）　菅円座一枚

師子形二頭（立洲浜）　御挿鞋一足（押紫織物、置柳筥、）

右兵衛督伊与守信隆、亮定隆、於紫宸殿簾中持置也、御膳具、出納右衛門志中原頼光、御倉小舎人丹治宗時等、相具渡御膳宿、大進経房卿、属宗家令撿知、預御膳宿女官畢、

銀器　飯垸一口（加蓋）　四種四口　盤八枚　窪器二口　汁物器二口　水垸一口　酒盞一口（在盞居）　馬頭盤一枚　箸二雙　匕二枚　朱御盤四枚　中御盤二枚

已上納朱漆唐櫃一合（在両面覆）

御臺盤二脚　黒漆厨子一脚

次修理職献炬屋（当南階立之）

次内匠寮立時簡、民部大夫長親書銘、（於聴書之）立西中門北腋、木工寮立御膳棚於其傍、

下官奏聞、(先例無草奏、今日依有立后事、被草奏也、)即返給、仰令清書、次殿下退下直廬、有宮司除目事、御座撤疊敷圓座、執筆圓座如例、公卿座不敷加、次出御御座、令下官召左大辨、左大辨參著圓座、次召五位藏人兼光參進、召硯續紙、即持參、置執筆前、

次除目

大夫正二位大納言源雅通

權大夫從三位右近中將平宗盛

亮正四位下左京大夫藤原定隆

權亮從四位上右近中將藤原賴實

大進正五位下左衛門權佐藤原經房(藏人)

權大進正五位下藤原光雅(藏人)

從五位上兵部少輔伯耆守平親宗

少進從五位下平時家

權少進正六位上高階經仲

大屬從五位下伊豆守中原宗家

少屬左大史中原盛直

權少屬西市祐中原久孝

除目畢、執筆獻大間退下、次召中納言實房卿給大間、次實房卿給大間退下向陣座、率宰相相伴行清書事、次下二省、此間下官仰上卿云、皇太后宮職令差進啓陣、次上卿召仰將佐了、此間殿下令參皇太后宮給畢、

大夫源大納言於弓場殿奏慶賀、遂電被參本宮、次大夫以下宮司於中門邊啓慶由、

大輔清季、（今夜陪膳以下、無見知給人、每人問之、）權亮家嗣、（兼）大進資頼、權大進成長、定高、少進光經、（定經卿子、）權少進仲資子、（○仲資子三字恐分註）四位五位侍從不聞、啓將左近時賢、右頼房朝臣、左衞門正家季、右衞門權經高、兵衞二人無參來者、今夜職事可著侍由、成長俄示予、尤兼日催儲、稱障出了、後聞亮辨親定朝臣等、取入師子形、後女房見晝御座無師子形、奇求之處、揖入御帳之內隱之云云、

〔女院小傳〕春花門院、（昇子）後鳥羽第一女、（中略）建久六、十、十六爲內親王、同七、四、十六准三宮、同年十二、五入御八條院、承元二、八、八爲皇后宮、（十四）

○按ズルニ、本文ハ後鳥羽天皇第一皇女、昇子內親王（春花門院）立后ノ儀ナリ、此皇女ハ御妻、マタ准母ニ非ズシテ、皇后ト爲リタマヘリ、

〔歷代皇紀（後醍醐）〕達智門院　奬子內親王、後宇多皇女、今上同母弟、元應元年十一月十五日院號、同廿一日御出家、（三十四、眞理覺、）去三月廿九日爲皇后宮、元前齋宮、

〔增鏡（四秋の深山）〕みかど（○後醍醐）のおなじ御腹の、前齋宮（○奬子內親王）も后にたゝせ給ふ、

○按ズルニ、此他御妻トナラズシテ、皇后ノ稱ヲ得給ヒシ內親王ハ准母タレバ、其條ニ出セリ、

皇太后稱呼

○

〔令義解（七公式）〕皇太后（謂、天子母、登后位者、爲皇太后、居妃位者、爲皇太妃、居夫人位者、爲皇太夫人也、皇太妃、皇太夫人同、中略）右皆平出、

〔西宮記（臨時五）〕皇后行啓、（中略）皇太后（母、長樂宮）

〔拾芥抄（中本、官位唐名）〕國母（外戚、右戚、戚里、渭院、國母、仙院、堯母門、堯門、以提、德比姬嫄、周文王母云大姬、周武王母云大姒、）

皇太后宮（長樂宮、帝親母、）

尊爲皇太后儀

〔兵範記〕仁安三年三月十四日丙子、今日有立后御裝束始事、其儀法住寺御所、院司皆參、定隆朝臣經房等殊執行、（中略）廿日壬午、（○此日高倉天皇即位）卯時內辨左大臣（○藤原經宗）參著仗座、下官奉仰出軾、仰云、皇太后宮（○高倉母后平滋子）冊命事、可載宣命者、（此兼日中定申左府了、依例也、又當日宣下也、）次上卿召大內記光範、仰宣命奏、即召

令語給事等、左大臣(内弁)奏宣命、清書復陣座之後、不示外辨事、良久之間可罷著外辨歟由示之、答云、出御之後ヨソ、答云、不可依出御歟、即立了、其後いかにかくは早速に還不請云々、公房卿又立、内辨喚止云、出御之後トヨソ存候へ、不答而立了云々、權大夫殿、內辨宣命ヲ入宮令持内記、尻に具して進東階下寄而可寄、又練樣早速なにとなし、外辨退出時、公房卿經三位宰相之後四位宰相前、又極奇事也、良久之後、勅使右近中將公氏參、(不見其事)大夫通光卿取祿、次被渡御物具、藏人參入云々、權大夫殿取祿給、成長(權大進今夜奉行)於中門廊北(對代巽)奉祿、命云、向祿所可取、成長云、大夫もこゝにてこそ被取候つれ、賓實卿聞之云、早可儲祿所、申狀甚無謂、即向祿所獻之、亦不參云々、女房裝束也、可參由被仰、大相國於祿所簾中被見物、不參之條大被咎、參裝唐衣、猶不參袴、亦令參、(予在閑所不見之)公卿下立中門外、如元日拜禮列立、予、能季朝臣、右大將殿、御後內大臣殿、今夜伊時在御共、此間不見、無取御沓之人、不穩云云、左府、(保季)右府、(家兼云々)右大將、(隨身取)左大將、(能季)權亮家嗣申繼、(進中門外、蒙博陸御氣色昇內沓脫入妻戶參進申之、中門下氣色退、)關白以下列立、四位五位侍從在後列、(無殿上之所、以頭爲上由存云々、經通有家已下、)五位侍從不立以前、公卿被拜之間、五位一拜退云云、右府ハ關白殿家禮云云、拜訖各昇對代南階著座、前駈行時取內大臣殿御沓、甚以不便、更不令取給事也、此男推參取之、無殿上人者召使可取也、兩大將隨身取之、予今夜不可備于威儀之由兼申之了、著奧座之人、左大臣、右大臣、右大將、大宮大納言、自四位侍從座末、經其奧著之、只可入座末間之由、權大夫殿後日語給、歸出之時、左右府被用座末云云、一獻殿下右大將、二獻左右府、三獻內府宮大夫、皆閣計也、關白殿起給之間、右府依家禮先起座、參議不得其心之間、光親平伏、長房長兼動座、(長兼引光親袍云、やれこちこやれ、各咲盛云々、)居物事等了、公卿著隱座、亦居衝重、(未及左大將、不居云云、尤可給大納言歟、)次不持參勸坏之坏、先持參御遊具、權大夫殿退返給、持參坏、權大夫殿勸之、(即退出)次御遊、右府、(箏)右大將、(拍子)大夫、(琵琶)按察、(笛、此時著座、)右衛門督、(笙)定季、(篳篥)忠行、(和琴)侍從實俊、(付歌、今夜初、)御遊良久不取祿、奉行有若亡云々、大將殿此間御退出、御共參歸廬、曉鐘以後也、宮司大夫通光、權大夫良平、亮從四位上前中務

離前庭本列、登自軒廊、自南簀子敷進内辨之後、指笏被賜宣命、了持笏下立軒廊之後、内辨大臣立座下、自軒廊相加庭中本列、(其路經大納言上、大臣下、相加本位、此間參議平伏、)次宣命使進版位、指笏讀宣命、群臣再拜、又重讀之、又群臣再拜、此間宣命使持笏相加本列、其後公卿各退歸如例、近衛陣又退、次還御本殿、其後於關白(○藤原師實)御直廬、有宮司除目事、儀式如例歟、(○中略)事了於陣座清書(上卿皇后宮權大夫)如例、宮司等早參本宮、於中門邊被啓慶賀、此間殿下令參本宮給、(二位中將、三位中將、三位侍從、殿上人等扈從、)於左仗座、左府召六府次將、仰可候啓陣由、右近權中將仲實朝臣、爲勅使參入、先敷座、(高麗端疊一枚、上敷茵、地下五位役之、)依召勅使着座、啓事由、(宣命由歟)次給祿、(白衣、權大納言(本宮大夫)取之、)於中門邊拜舞、次藏人右近少將藤俊忠爲勅使參入、依召參仕、(初勅使座也、此勅使行事、藏人所役也、而永實依無□宣、有議定、藏人少將被勸也、)是依被奉御調度也、大床子師子形(爲院殿上人五位取之、)御倚子(爲章朝臣高實朝臣昇之、)立寢殿中間、了給祿於勅使、(女裝束、爲家朝臣取之、)勅使拜舞如前、又藏人藤永實(著青色、)爲勅使參仕、(御調度行事也)參仕(○參仕恐攙入)但不召御前、是又依被奉御調度也、御飯宿具御厨子御臺盤等具也、(於便所付宮司了、日者行事也、)申刻許公卿引被參宮、(二條西洞院、引廊幔、有出立儀、)先令權亮仲實朝臣啓可拜禮候由、了自東御門列立前庭、(公卿一列、殿上人一列、以貫首爲先、)欲拜之處、宮無其告、經刻(是宮御裝束了、令著御倚子給間也、)頃而關白殿下令氣色給、群臣拜舞、(前例必不舞踏、是依母后儀歟、)了各著座、(如臨時客儀、東對母屋、)次殿上人著座、(四位對南横切座、號四位侍從、五位中門廊號五位侍從、)次初獻、(○中略)次第可尋注、及秉燭掌燈、主殿寮女官等、以燈爐供燈、院御隨身等立明南庭、事了有穩座、先敷圓座於寢殿南簀子、(五位役之、)公卿著座、居肴物、有盃酌、(勸盃別當)召人等著南檻下座、堪管絃殿上人依召參進、有御遊之興、(○中略)于時本宮御太上皇(○白河)御所大炊殿、陣屋炬屋今日立之、内膳屋立之、供御膳、(○下略)

○按ズルニ、本文ハ御妻ニ非ル内親王ヲ、皇后ニ立ラレシ初例ナリ、此ハ堀河天皇ノ准母ノ故ナルコト、准母ノ條ニ在リ、參看スベシ、

〔明月記〕承元二年八月八日、申時立后(○後鳥羽皇女昇子内親王)、節會、外辨列立之由聞之、秉燭束帶、(打梨)參左大將殿御共、參立后院御所、宮司拜之間也、大將殿令入東面簾中給、(内大臣殿御坐)新任權大夫殿加其座給、各

法皇モ此事然ルベカラズト度々申サセ給ケレ共、主上ノ仰ニハ、天子ニ父母ナシ、萬乘ノ寶位ヲ忝セシ上ハ、此程ノ事叡慮ニ任スベシトテ、既御入内ノ日時ヲ宣下セラレケル上ハ子細ニ及バズ、后ハ此御事聞召レケルヨリ、引カヅキオハシマシツヽ、御歎ノ色深クゾ見エサセ給ケル、先帝ニ後レ進ラセシ久壽ノ秋ノ始ニ、同ジ草葉ノ露トモ消、家ヲ出世ヲ遁タリセバ、懸ル例シナキ事ハ聞ザラマシトゾ思召ケル、父ノ大臣彼宮ニ參テ、世ニ隨フヲ以テ人倫トシ、世ニ背クヲ以テ狂人トスト云事侍リ、既ニ詔命ヲ下サルヽノ上ハ、子細ヲ申ニ及バズ、タヾ疾參ラセオハシマスベキ也、是偏ニ愚老ヲ助サセ給フベキ孝養ノ御計タルベシ、知ズ此末ニ皇子御誕生ナドモ有テ、君モ國母ト祝ハレ、愚老モ亦帝祖トイハルベキ、家門繁昌ノ榮花ニテモヤ侍ラント、樣々コシラヘ申サセ給ケレドモ、皇后ハ御返事ナカリケリ、只御涙ノミゾスヽマセ給ケル、○中略既ニ御入内ノ日時ニモ成シカバ、父ノ大臣ハ供奉ノ上達部、出車ノ儀式、心モ詞モ及バズ、小夜モ漸更ケレバ、后ハ御車ニ扶ケ乘セラレオハシマシケリ、色深キ御衣ヲバ召レズ、殊ニ白キ御衣十許ゾ召レケル、内ヘ參ラセ給ヒシカバヤガテ恩ヲ蒙リ、麗景殿ニゾ渡ラセ給ケル、ヒタスラ朝政ヲ勸申サセ給フ御有樣也、

〔中右記〕寛治五年五月廿二日壬午、有立后之事、無品内親王媞子○白河皇女其儀南殿懸御簾、自日隱間西、大略如相撲時儀歟、東西引屛幔如例、巳刻許右大臣○源顯房參仗座、仰外記令草宣命、了付藏人頭秀仲朝臣令奏覽則返給、重奏清書之後、御出南殿、是密儀御直衣、仍不取御劔、午四刻左右近衛引陣、不立胡床、立陣、壺胡籙蒔繪、細劔著靴、官人等胡籙在後、次開門、近衛黄袍闈司着座、召舍人、二音内豎稱唯、少納言源成宗相代參入、内辨仰云、刀禰召セ、稱唯退出、外辨上卿列立庭中、右大臣、内大臣、○藤原師房按察大納言、實民部卿、經源大納言、師權大納言、雅左衛門督、家皇后宮權大夫、公二位中將、經左京大夫、公別當、俊左宰相中將、基右大辨、通左大辨、匡新宰相中將、保三位侍從、能三位中將、忠、令叙三位給之後、令列公卿、皇太后宮權大夫、公、中納言以上一列、三位以上一列、四位參議一列、内辨召皇后權大夫、中納言

〔日本書紀十四雄略〕元年三月壬子、立草香幡梭姫皇女爲皇后、更名橘姫

〇按ズルニ、内藤廣前ノ說ニ、履中ノ后ナル幡梭皇女ハ、古事記應神ノ段ニ、日向ノ泉長比賣ノ生メル、幡日若郎女トアル皇女ニテ、雄略ノ后ナル幡梭皇女ハ、古事記仁德ノ段ナル、日向諸縣君牛諸ノ女髮長比賣ノ生メル、波多毘能若郎女トアル皇女ナリ、サレバ履中ノ后ト雄略ノ后トハ、同名異人ナリト云ヘリ、然レドモ履中天皇ノ后ナル幡梭皇女ヲ應神天皇ノ皇女トスル時ハ、假ニ應神天皇崩年ノ誕生トスルモ、履中天皇元年ニハ九十餘歲ナレバ、年代合ハズ、又大日本史ニハ同人トシタレドモ、假ニ幡梭皇女ノ履中天皇ノ元年ニ十三四歲ニシテ后ニ立チ、皇女ヲ生ミ給フトスルモ、雄略天皇ノ元年ニハ、七十餘歲トナレリ、是又年代合ハズ、故ニコノ皇后ハ同名異人ナルカ、ハタ同人ナルカ詳ナラズ、姑ク附記シテ後考ヲ竢ツ、

〔源平盛衰記二〕二代后事

故近衛院ノ后、太皇太后宮〇多子ト申ハ、德大寺左大臣公能ノ御娘也、中宮ヨリ太皇太后ニ上ラセ給タリケルガ、先帝ニ後レサセ給テ後ハ、九重ノ中ヲバ住憂思召テ、近衛河原ノ御所ニゾ移住セ給ケル、先朝ノ后宮ニテ、フルメカシク幽ナル御有樣也ケルガ、永曆應保ノ比ハ、御年二十七八ノ程ニモヤ成セ給ケン、天下第一ノ美人ニテオハシマス由聞エサセ給ケレバ、主上〇二條御色ニソムル御心有テ、密ニ高力士ニ詔シテ、外宮ニ引求サセ給テ、忍ツヽ彼太皇太后宮ヘ御書有ケレ共、后ウツヽナラズ思召レケレバ、更ニ聞召入サセ給ズ、主上ハ忍ノ御書モ度重リケレ共、空シキ御書ナリケレバ、今ハヒタスラ穗ニアラハレマシ〳〵テ、后入内有ベキ由、父ノ左大臣家ニ宣旨ヲ下サレケリ、此事珍シキ御事也、先帝ノ后宮、二代ノ后ニ祝奉ル、如何有ベキトテ、公卿僉議有ケレ共、各意得難キノ由申サレケリ、但先例ヲ相尋ベキノ旨議定アリ、〇中略本朝ノ先規ヲ勘ルニ、神武天皇ヨリ以來人王七十餘代、イマダ二代ノ后ニ立給ヘル其例ヲ聞ズト、諸卿僉議一同也ケレバ、

〔後宮譜證註〕畏庵隨筆ニ云、板本日本紀、即庶母也ノ四字ノ小注アリ、古卷ニ无シ、孝元天皇ノ妃、伊香色謎命ト同名ニシテ、同人ニアラズ、年齡考フベシトアリ、書紀集解ニ、四字ノ小注ハ爲後人加筆刪去トアリ、〇久邇宮御藏本ニハ、此四字ノ小注ナシ、後人ノ加筆ナルコト明ナリ、又河内志茨田郡ニ伊香、澁川郡ニ伊賀々、二所ノ村名アリ、是等ヲ以テ考レバ、孝元天皇即位ノ元年、假ニ十七八歳ニテ妃トナレルト見テモ、開化天皇ノ六年ニ至リテハ、八十餘歳ナレバ、如此事ノアルベクモ非ズ、コレ同人ニ非ルコト著明ナリ、然ルヲ同名ナルガ故ニ、同人ト思ヒ誤リテ、後人ノ書入シガ、既ニ日本紀ニハ本註トナリ、古事記ニ本文トナレルナリ、

〇按ズルニ、孝元天皇ノ妃ハ、古事記ニ内色許男命之女トアリ、開化天皇ノ后ハ、崇神紀ニ大綜麻杵之女也トアリテ其父ヲ異ニセリ、天孫本紀ニ據ルニ、欝色雄命ト大綜麻杵命トハ兄弟ニシテ、共ニ大水口宿禰命ノ子ナリ、然レバ孝元天皇ノ妃ハ兄ノ女、開化天皇ノ后ハ弟ノ女ニシテ別人ナルヲ、御名ノ同ジキ故ニ混ゼシモノカ、附記シテ後考ヲ竢ツ、

〔日本書紀十二履中〕六年正月戊子、立幡梭皇女爲皇后、

〔日本書紀十三安康〕元年二月戊辰朔、天皇爲大泊瀨皇子、〇雄略欲聘大草香皇子妹幡梭皇女、則遣坂本臣祖根使主、請於大草香皇子曰、願得幡梭皇女以欲配大泊瀨皇子、爰大草香皇子對言、僕頃患重病不得愈、譬如物積船以待潮者、然死之命也、何足惜乎、但以妹幡梭皇女之孤、而不能易死耳、今陛下不嫌其醜、將滿荇菜之數、是甚之大恩也、何辭命辱、故欲呈丹心、捧私實名押木珠縵、一云立縵、又云磐木縵、附所使臣根使主、而敢奉獻、願物雖輕賤、納爲信契、於是根使主見押木珠縵、感其麗以爲、盜爲己實、則詐之奏天皇曰、大草香皇子者不奉命、乃謂臣曰、其雖同族、豈以吾妹得爲妻耶、既而留縵入己而不獻、於是天皇信根使主之讒言、則大怒之、起兵圍大草香皇子之家而殺之、〇中略爰取大草香皇子之妻中蔕姫、納于宮中因爲妃、復遂喚幡梭皇女、配大泊瀨王子、

二朝爲后

后既亡、兄王何以面目莅天下耶、則抱皇子譽津別命、而入之於兄王稻城、天皇更益軍衆、悉圍其城、即勅城中曰、急出皇后與皇子、然不出矣、則將軍八綱田放火焚其城、於焉皇后令懷抱皇子、踰城上而出之、因以奏請曰、妾始所以逃入兄城、若有因妾子免兄罪乎、今不得免、乃知妾有罪、何得面縛、自經而死耳、唯妾雖死之、敢勿忘天皇之恩、願妾所掌后宮之事、宜授好仇、丹波國有五婦人、志並貞潔、是丹波道主王之女也、(道主王者、稚日本根子太日日天皇子彥坐王子也、一云、彥湯隅王之子也、)當納掖庭、以盈后宮之數、天皇聽矣、時火興城崩、軍衆悉走、狹穗彥與妹共死于城中、

〔日本書紀十一仁德〕二年三月戊寅、立磐之媛命爲皇后、　二十二年正月、天皇語皇后曰、納八田皇女將爲妃、皇后不聽、　三十年九月乙丑、皇后遊行紀國、到熊野岬、即取其處之御綱葉、(葉、此云箇始婆、)而還、於是日、天皇伺皇后不在、而娶八田皇女納於宮中、時皇后到難波濟、聞天皇合八田皇女而大恨之、則其所採御綱葉投於海、而不著岸、故時人號散葉之海曰葉濟也、爰天皇不知皇后忿不著岸、親幸大津待皇后之船、(○中略)時皇后不泊于大津、更引之泝江、自山背廻而向倭、明日天皇遣舍人鳥山令還皇后、(○中略)皇后不還猶行之、(○中略)更還山背、興宮室於筒城岡南而居之、　十月甲申朔、遣的臣祖口持臣喚皇后、(○中略)十一月庚申、天皇浮江幸山背、(○中略)明日乘輿詣于筒城宮喚皇后、皇后不參見、(○中略)于時皇后令奏言、陛下納八田皇女爲妃、其不欲副皇女而爲后、遂不奉見、乃車駕還宮、　三十五年六月、皇后磐之媛命薨於筒城宮、

〔女院小傳〕宣政門院、(懽子、○光嚴院)后、後醍醐女、母後京極院、元應元、六、廿六、爲內親王、同年十、廿八、敍一品、元德二、十二、十九、卜定齋宮、同三、正、十二、准三宮、元弘元月日退下、(自野宮退)年月日密入上皇(○光嚴)宮、建武二、二、二、院號、曆應三、五、廿九、潛。出。上。皇。御。所。御。出。家。、

〔日本書紀四孝元〕七年二月、(○中略)妃伊香色謎命生彥太忍信命、

〔日本書紀四開化〕六年正月甲寅、立伊香色謎命爲皇后、(是庶母也、)后生御間城入彥五十瓊殖天皇、(○崇神)

后自去宮

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜九年正月丁卯、遣從四位下壹志濃王、石川朝臣朝守等、改葬故二品井上内親王、

〔日本紀略桓武〕延暦十九年七月己未、詔曰、〇中略故皇后井上内親王、追復稱皇后、其墓并稱山陵、

〇按ズルニ、井上内親王廢后ノ事ニ就キ、水鏡ニ異説アレド、信ズルニ足ラザレバ今採ラズ、

〔大鏡裏書〕皇太后宮高子御事、清和天皇后、陽成院母、長良公女、母贈正一位□□□元慶元年正月十九日爲皇太夫人、或中宮同六年正月七日爲皇太后宮、寛平八年九月廿二日廢后位、同廿三日賜封四百戸、延喜十年三月廿三日薨、年六十九、天慶六年五月廿七日追復本位、

〔日本書紀六垂仁〕四年九月戊申、皇后〇狹穗姫母兄狹穗彥王謀反、欲危社稷、因伺皇后之燕居、而語之曰、汝孰愛兄與夫焉、於是皇后不知所問之意趣、輙對曰、愛兄也、則誂皇后曰、夫以色事人、色衰寵緩、今天下多佳人、各遞進求寵、豈永得恃色乎、是以冀吾登鴻祚、必與汝照臨天下、則高枕而永終百年、亦不快乎、願爲我弑天皇、仍取匕首授皇后曰、是匕首佩于裀中、當天皇之寢、廼刺頸而弑焉、皇后於是心裏兢戰、不知所如、然視兄王之志、便不可得諫、故受其匕首、獨無所藏、以著衣中、遂有諫兄之情歟、　五年十月己卯朔、天皇幸來目、居於高宮、時天皇枕皇后膝而晝寢、於是皇后既無成事、而空思之、兄王所謀適是時也、即眼淚流之落帝面、天皇則寤之、語皇后曰、朕今日夢矣、錦色小蛇繞于朕頸、復大雨從狹穗發而來之濡面、是何祥也、皇后則知不得匿謀、而悚恐伏地、曲上兄王之反狀、因以奏曰、妾不能違兄王之志、亦不得背天皇之恩、告言則亡兄王、不言則傾社稷、是以一則以懼、一則以悲、俯仰哽咽、進退而血泣、日夜懷悒、無所訴言、唯今日也、天皇枕妾膝而寢之、於是妾一思矣、若有狂婦成兄志者、適遇是時、不勞以成功乎、茲意未竟、眼涕自流、則擧袖拭涕、從袖溢之沾帝面、故今日夢也、必是事應焉、錦色小蛇、則授妾匕首也、大雨忽發、則妾眼涕也、天皇謂皇后曰、是非汝罪也、即發近縣卒、命上毛野君遠祖八綱田、令擊狹穗彥、時狹穗彥興師距之、忽積稻作城、其堅不可破、此謂稻城也、踰月不降、於是皇后悲之曰、吾雖皇

廢后

りなし、西園寺の女御○嬉子もさしつゞきてまゐり給ふを、いかさまならんと御胸つぶれておぼせど、さしもあらず、これは九にぞなり給ひける、冷泉のおとゞ公相の御女なり、大宮院○後嵯峨后の御子にし給ふとぞ聞えし、いづれもはなれぬ御中に、いどみきしろひたまふほどきゝにくき事もあるべし、○中略これも后にたちたまへば、もとの中宮はあがりて、皇后宮とぞ聞え給ふ、いま后はあそびにのみ心いれ給ひて、なまめかにも見えたてまつらせ給はねど、御おぼえおとりざまにきこゆるを、おもはずなる事に、世の人もいひさたしける、

〔續日本紀 三十二 光仁〕寶龜三年三月癸未、皇后井上內親王坐巫蠱廢、詔曰、天皇御命良麻止宣御命乎、百官人等天下百姓衆聞食倍止宣、今裳咋足島謀反事自首之申世利、勘問爾、申事波度年經月爾計利、法勘流爾足島毛罪在倍之、然度年經月氐毛尼奈良何自首之申良乎、久勘賜比冠位上賜比治賜波久宣天皇御命乎衆聞食倍止宣、辭別宣久、謀反事爾預氐隱而申左奴奴等粟田廣上、安都堅石女波、隨法斬乃罪爾行賜倍之、然思保須大御心坐爾依而、免賜比奈多毎賜比氐、遠流罪爾治賜波久宣天皇御命乎衆聞食倍止宣、授從七位上裳咋臣足島外從五位下、五月丁未、廢皇太子他戶王爲庶人、詔曰、天皇御命良麻止宣御命乎、百官人等天下百姓衆聞食倍止宣、今皇太子止定賜部流他戶王、其母井上內親王乃魘魅大逆之事、一二遍能味仁不在、遍麻年久發覺奴、其高御座天之日嗣座波、非吾一人之私坐止奈毛所思行須、故是以天之日嗣止定賜比儲賜倍流皇太子位仁、謀反大逆人之子乎治賜部例婆、卿等百官人等天下百姓乃念良麻久毛恥志、賀多自氣奈志、加以後世乃平久安長久全久可在伎政仁毛不在止、神奈賀良母所念行須仁依而奈母、他戶王乎皇太子之位停賜比却賜布止宣天皇御命乎衆聞食倍止宣、四年十月辛酉、初井上內親王坐巫蠱廢、後復魘魅難波內親王、是日詔幽內親王及他戶王于大和國宇智郡沒官之宅、

〔續日本紀 三十三 光仁〕寶龜六年四月己丑、井上內親王他戶王並卒、

〔續日本紀 三十四 光仁〕寶龜八年十二月乙巳、改葬井上內親王、其墳墓稱御墓、置守冢一烟、

中宮呈子帝后、久安六年以二女御從三位一爲二中宮一、大納言伊通女、〇節略

〔續世繼 三男山〕同〇保延七年〇永治元年十二月七日、御とし三にて位ゆづり申させ給ふ、〇近衛、受禪、中略おとなにならせ給ふまゝに、御ありさましかるべきさきの世の御ちぎりと見え給へり、攝政殿の御おとゝの左のおとゞ、〇藤原頼長女御〇多子たてまつらせ給て、皇后宮にたち給ひぬ、なほたらずやおぼしめすらむ、院〇鳥羽より御さたせさせ給て、大宮大納言〇藤原伊通のむすめ、〇呈子關白〇藤原忠通殿の御子とて、此の政所〇忠通妻宗子の御せうとのむすめなれば、御子にし奉り給ふ、御かた〲花々といぞみがはなるべし、との〻わに〇忠通おとうと〇頼長の御なかよくもおはしまさねば、宮もいとゞへだておはかるに、關白殿はうちのひとつにて、ひとへに中宮〇呈子のみのぼらせ給て、皇后宮の御かたをばうとくおはしましける、〇中略うちにはさ。さ。き。ふ。た。り。た。ち。給。ひ。て。いとかた〲おほくおはするところなるべし、

〔一代要記 八後堀河〕中宮藤有子帝后、太政大臣公房女、母從二位藤修子、貞應元年十月御禊女御代、同十二月□日入内、同二年二月立爲二中宮一、嘉祿二年七月十九日爲二皇后宮一、依二女御入内一也、

中宮藤長子帝后、前關白家實公女、嘉祿二年六月十九日入内、年九歲、七月二十日爲二中宮一、

〔増鏡 七北野の雪〕この入道殿〇藤原實氏の御おとゝに、そのころ右大臣實雄ときこゆるぞ、姫君あまたもち給へる中に、すぐれたるを〇佶子らうたきものにおぼしかしづく、今上〇龜山の女御代にいで給ふべきを、やがてそのついで、文應元年入内あるべくおぼしおきてたり、院にも御氣色たまはり給ふ、入道殿の御孫の姫君〇嬉子も、まゐり給ふべき聞えはあれど、さしもやはと出したち給ふ、いとたけき御心なるべし、〇中略十月廿二日〇一代要記作二十二月廿六日一まゐり給ふ、ぎしきこれもいとめでたし、〇中略よろづの事よりも、女御〇佶子の御さまかたちのめでたくおはしませば、上〇龜山もおぼしつきにたり、〇中略ほどもなく、〇弘長元年二月八日后立ちありしかば、おとゞ心ゆきておぼさるゝ事かぎ

以神事可為先、中宮雖為正妃、已被出家入道、隨不勤神事、依有殊私之恩無止職號、全納封戶也、重立妃為后令掌氏祭可宜歟、又大原野祭、尋其濫觴、在於后宮之所祈、而當時二后共無所勤、左大臣依氏長者獨勤其祭、雖不致闕怠、恐非神明之本意歟、是亦可謂神事之違例、小臣以藤氏末葉為思氏祭所申也、於其可否只在聖擇、此間所奏雖多、不能悉詳之、主上大臣具所知食也、大臣奉勅命之後、以女裝束一襲被勅使、大臣參進御所、令奏慶由拜舞、（大藏卿正光朝臣傳之）亦參院、上御簾啓慶再拜、（下啓之）予以立后舊記奉之、依先日命也、

〔榮花物語六輝く藤壺〕大殿（○藤原道長）の姫君（○彰子）十二にならせ給へば、年の内に御裳著ありて、やがて内にと思しいそがせ給、よろづしつくさせ給へり、○中略かくて參らせ給ふ事長保元年十一月一日の事なり、○中略はかなく年もかへりぬれば、（○長保二年）今年は后にたゝせ給べしといふ事世に申せば、此御前の御事なるべし、中宮（○藤原道隆女定子）は宮々（○脩子、敦康、）の御事を思しわつかひなどして、參らせ給べき事唯今見えさせ給はず、○中略斯くて三月に藤壺（○彰子）后に立せ給べき宣旨下りぬ、中宮（○定子）をば皇后宮と聞えさす、此侍らはせ給と聞えさす、

〔十三代要略一條〕中宮藤原妍子（寛弘九年二月十四日為皇后）皇后藤原娍子（大納言濟時一女、正暦年中入太子宮、寛弘八年八月廿三日為女御、九年四月廿七日為皇后、○節略）

〔春記〕長暦四年十二月十八日、○中略人々云、皇后宮（○後朱雀后禎子）此四年不參入給、已如棄置、不異上陽人、依故中宮（○嫄子）參入給事也、而彼宮忽然已逝給、其後内府女御（○藤原教通女生子）參入、仍又遲々、而今彼女御忽有事故退出、仍此宮參入給、不計事等也、世間不定如浮雲、不可愁、不可悅歟、

〔十三代要略二後冷泉〕中宮藤原寛子（宇治相國（藤原頼通）女、母祇子、）永承六年二月三日（為皇后、十六、治暦四年四月十七日為中宮、）皇后藤原歡子（左大臣（藤原教通）三女、母権大納言公任女、）治暦四年四月十六日為皇后、○節略

〔皇代略記三近衞〕皇后宮多子（帝后、久安六年三月十四日、以女御從三位為皇后宮、大納言公能女、左大臣（藤原頼長）為養子、）

古事類苑

帝王部二十

皇后下 皇太后、太皇太后、皇太夫人、女院、准母、准三宮 附入

〔職原抄 上〕中宮職 中宮者、卽皇后也、本朝並置二宮、太無其謂、

〔標注職原抄校本 上本〕中宮者卽皇后也とは、此は中宮の字を、居所の稱とせずして、后位の事といへるものなり、榮花月宴に、女御も后にたゝせ給て、中宮と申と云々、此外かくざまにいへる詞いと多し、みな皇后と中宮とおなじきよしなり、されど上件に論るごとく、令條にては、中宮は皇后の宮の事なり、漢書の注に、師古曰、中宮、皇后宮也これなり、然るを後に、きさき二人おはしますより、一人を皇后といひ、今一人を別に稱すべき號なきまゝに、居所の名を用られたるなり、

〔權記〕長保二年正月廿八日丙午、早旦參內、此日藏人頭正光朝臣奉勅詔女御〇藤原彰子御曹司傳之左大臣〇藤原道長立后宣命日可令擇申之由、先日內々以此氣色可告大臣之由蒙勅命、然而申自院被傳仰可有便宜之由上、諾之、此事去冬之末、太后〇冷泉后昌子崩給以來、度々催奏其旨、當時所坐藤氏皇后東三條院〇圓融后詮子皇太后宮〇圓融后遵子中宮〇一條后定子皆依出家無勤氏祀職納之物可充神事也、有其數、然而入道之後不勤其事、雖帝后位、雖有納物、如尸祿素飡之臣、徒費私用空貪公物、論之朝政未有何益、度依怪所司卜申神事違例之由、疑慮所至、恐在如此之漸歟、永祚中有四后、是漢哀亂代之例也、初立之議雖有謗毀、例致爰出、准據無難歟、況當時所在二后也、今加其一令勤神事、有何事哉、我朝神國也、

古事類苑

帝王部二十

皇后下

皇太后、太皇太后、皇太夫人、女院、准母、准三宮、〔附入〕

幼女爲后

〔十三代要略二崇德〕大治四年正月一日庚辰、天皇於土御門内裏加元服、十一〇中略　九日從三位藤原聖子參內、九〇中略　十六日被下女御宣旨、〇中略　五年二月廿一日、女御聖子册爲中宮、

〔五代帝王物語〕關白〇藤原家實の女、〇長子纔に九歲にて、六月〇嘉祿二年參り給て、やがて廿九日立后、〇後堀河后ゆゝしくてさふらひ給ふほどに、嘉祿二年十二月關白をとゞめられて、前攝政〇道家光明峯寺殿成かへり給にければ、中宮の御光も隱れて、又その關白の御女〇竴子參り給へば、中宮おりさせ給ひぬ、よしなかりける中かなと上下思ひたりけり、

〔一代要記九龜山〕後宮

中宮藤嬉子前左大臣藤公相公女、號今出川院、弘長元年六月十四日入內女御九歲、同八月廿日爲中宮職、

〇按ズルニ、嬉子、仲資王記ニハ、瑄子ニ作ル、未ダ孰カ是ナルヲ知ラズ、

事を、殿（藤原道長）にたび／＼聞えさせ給へれど、年ごろにもならせ給ぬ、宮だちあまたおはします、宣耀殿（娍子）こそまづさやうにはおはしまさめ、内侍のかみの御事は、おのづから心のどかになどそうせさせ給へば、いとけうなき御心也、此世をふさはしからず思ひ給へるなりなどゑじの給はすれば、さはよき日してこそ宣旨もくださせ給べかなれと奏して、出させ給てにはかに此御事どもの御用意あり、何事もそれにさはり、日などのべさせ給べき御世の有さまならねば、二月十四日（長和元年）にきさきにゐさせ給とて、中宮（妍子）と聞えさす、（中略）かゝる程に大殿の御心、何事もあさましきまで人の心の中をくませ給により、しば／＼參らせ給てこゝらの宮達のおはしますに、宣耀殿のかくておはしますいとふびんなる事に侍り、はやう此御事をこそせさせ給はめど、そうせさせ給へば、（中略）四月廿八日（長和元年）后にゐ給ひぬ、皇后宮（娍子）と聞えさす、（中略）内にも御ぶくたちぬる月（十一月）にぬかせ給て、冷泉院の御はてもせさせ給て、今は此事（大嘗會御禊）をいみじき事にのゝしらせ給、

〔中右記〕嘉承二年十一月廿九日、今夕前齋院（令子）立后宣旨被下、是准母后儀、先日令入内給御東對也、殿下以下諸卿參入齋院御方、（東對南面）先勅使藏人頭爲房朝臣參上、於東中門下申事由、（紀伊守有佐朝臣申之）對南令敷座、（高麗端帖上敷茵一枚、其前敷圓座一枚、爲殿下御座、）召勅使爲房參上、殿下令相逢給、被申事由給祿、（女裝束、左衛門督雅俊卿取之、）勅使下南庭二拜退下、（人々皆諒闇裝束也、雖然有此拜賀也、）次於東庇方被定立后雜事、（右中辨爲隆、在東簀子敷書定文、）事了退出、

（裏書）諒闇立后例

昌子內親王（康保四年九月四日立、朱雀院女、冷泉院后、即位以前、）

中宮藤妍子（寛弘九年（長和元年）二月十四日立、御堂（藤原道長）中女、三條院后、即位以後、）

皇后藤娍子（同年四月廿七日立、大納言濟時女、三條院后同、）

件三后諒闇之中立后、但非即位已、

諒闇立后

聞えて、たゞ人にはえゆるさじともてあつかはれける程に、〇中略しのびて御せうそこ有て、かくれつゝ參り給ひけるほどに、日にそへてたぐひなき御心ざしにて時めきたまふ程に、たゞならぬ事さへおはしければ、御いのりおどろ〳〵しきまでかた〳〵せさせ給ふほどに、女宮〇資子うみ奉らせ給へれば、めづらしきをばよろこびながら、男におはしまさぬをぞくちをしうおぼしめしけるに、又うみ奉り給へるも〇子略おなじさまなれば、まめやかにくちをしうおぼしめしたれど、さすがいかゞはせんにておはしますなるべし、〇中略しばしはあの御方など申ておはしまし〳〵程に、三位のくらゐそへさせ給て、この御事をのみたぐひなき御もてなしなれば、世の人ならびなく見奉るに、又たゞならぬとおはしませば、〇中略いひしらぬ御いのりども有けるほどに、保延五年にや侍りけん、つちのとのひつじのとし五月十八日、よになくけうらなる玉のをのこ宮〇近衞うまれさせ給ぬれば、院のうちさらなり、世中もうごくまでよろこびあへるさまいはん方なし、〇中略かくて同七年十二月七日、御とし三にて位ゆづり申させ給ふ、ちかくは五なとにてぞつかせ給へども、心もとなさにやすかやかにゐさせ給ぬ、御母女御殿、皇后宮にたゝせ給、御とし廿五にや、

〔日本紀略五冷泉〕康保四年五月廿五日癸丑、巳時天皇〇村上崩於清涼殿、　九月四日己丑、以三品昌子内親王爲皇后、故朱雀院皇女、卽有宮司除目、　安和元年五月廿七日己酉、於朱雀門大祓、依諒闇也、今日申一點、音奏御膳供魚味、

〔榮花物語十日蔭の葛〕寛弘八年六月十三日御讓位、〇一條十月十六日御卽位、〇三條なり、〇中略かゝる程に十月廿四日、冷泉院うせさせ給ぬ、〇中略世の中みな諒闇になりぬ、〇中略はかなくて月日もすぎて、年號かはりて長和元年といふ、元三日のありさま、たゞならましかばいかにめでたからまし、たれこめて殿上にも出させ給はずなどして、〇中略内にはかんの殿〇妍子の后にゐさせ給べき御

即位前立后

〔日本紀略（五冷泉）〕康保四年九月四日己丑、以三品昌子內親王爲皇后、故朱雀院皇女、（〇中略）十月十一日丙寅、天皇於紫宸殿即位、

〔長秋記〕長承三年三月二日壬子、以院（〇鳥羽）女御（〇藤原勳子）叙從四位下、有准三宮宣旨、來八日可立后兼宣旨、十九日可有宣命事云々、（〇中略）大內記令明朝臣、勅旨可用何例哉、太上皇以夫人立后例未聞者、隨仰可令左右、上卿以內記令申關白、（〇藤原忠通）關白又被申大相國、（〇藤原忠實）各不案得無詳仰、令明重申云、且前大相國仕三代朝、奉公尤高、仍以娘子准后之由例載何事候哉、大相國可然之由答給云々、十九日己巳、院立從四位下勳子爲皇后宮、後日源大納言光臨次談云未時參內、（〇中略）大納言入門間、藏人資信待向、傳勅云、皇后宮傳上、以今后可爲皇后宮也、而本皇后宮付可傳上、可爲太皇太后宮歟、可皇太后宮歟、件事可量申者、超令昇太皇太后宮事、外記官共申無例之由、但於明法者、以帝祖母可爲太皇太后宮由見令文者、皇后宮准上皇母儀立后也、爲當今祖母、有何憚哉申云々、大納言被申云、前例之條無指證文之時儀也、如法家申者、令文既顯然也、不可依例之有無、就中立后之後准母儀、超中宮爲皇后宮、且爲太皇太后宮有何難哉、內大臣民部卿被申此旨云々、此後良久資信仰左大臣云、以皇后宮（〇鳥羽准母令子）爲太皇太后宮、以從四位下泰子爲皇后宮之宣命可令奏者、件人本名勳子也、而依衆難被改泰字叶愚意、

讓位後立后

〔一代要記（五崇德）〕後宮

皇后宮藤原朝臣得子（鳥羽院后美福門院、故權中納言太宰權帥長實卿女、太上天皇（鳥羽）納之爲后、（中略）永治元年十二月廿七日辛卯立后、）

〔續世繼（三男山）〕院（〇鳥羽）には、いづかたにもうときやうにてのみおはしまし〻に、こののびてまゐり給へる御方（〇得子）おはしまして、や〻わさまつりごとも、おこたらせ給ふさまにて、夜がれさせ給ふ事なかるべし、いとやむごとあき〻はにはあらねども、中納言（〇藤原長實）にて、御おやはおはしけるに、母きたのかたは、源氏のはり川のおと〻のむすめにおはしけるうへに、だぐひなくかしづき

行職事勾勘、後日所ㇾ相談ㇾ也、於ㇾ先例ㇾ者不ㇾ分明ㇾ云々、

〔増鏡十一今日の日陰〕西園寺大納言〇藤原實兼の姫君、〇伏見后鏱子、中略、六月二日〇正應元年入内あり、八日御ところあらはしとて、女御の君は、〇中略かくて八月廿日后に立給、

〔歴代皇紀後二條〕中宮藤忻子　前太政大臣公孝女、母内大臣公親女、乾元元、八、廿八、爲女御、嘉元元、九、廿四、冊立、

〔續三宮傳〕東福門院、後水尾皇后御諱和子　徳川將軍太政大臣秀忠公御女、〇中略元和六年六月十八日入内、十六歳　同日女御宣下、寛永元年十一月十八日皇后宣下、

初爲准后後爲后

〔扶桑略記二十九後冷泉〕永承六年六月廿四日、右大臣藤原朝臣敎通三女女御歡子准三宮、賜年官年爵封戶千戶、一云、七月十日准三宮云々、〇中略治暦四年四月十六日丁巳、立女御藤原歡子爲皇后宮、

〔歴代皇紀後冷泉〕皇后藤歡子　敎通三女、准三宮、後皇后、希代例也、

〔女院記〕高陽院、泰子　知足院殿〇藤原忠實御女、母從三位源師子、〇中略長承二年六月廿九日、太上天皇鳥羽マヰル、年卅九、女御ト申、　同三年三月二日敍從四位下、准三宮、同月十九日皇后宮、年四十

〔均光卿記〕寛政六年三月七日甲午、可ㇾ有立后日也、准三后欣子內親王〇光格后　寅剋著束帶早參、職事頭中將已下參集、

立后次第〇中略

宣命　大內記長親作ㇾ進之、

現神止大八洲國所知須倭根子天皇我詔止耳萬宣布大命遠、親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣布、人倫正婆計禮天下和岐、婚姻時乎以須禮波、怨女曠夫無牟止奈、常所聞行奈利、故爾好逑乎得氏、王化宣成久廣久願欲利邊、爰爾准三宮欣子內親王者、誠莊婉娩乃德備利奴、依氏皇后止定賜布、此儀乎悟氏隨法爾供奉止勅布天皇我御命乎衆聞食止宣、

大進平時繼兼　權大進藤資定兼　同高經兼　少進平時基
權少進藤　大屬安倍資高

入夜節會始云々、其後諸卿率參本宮、夜未曙及事之終頭云々、

〔五代帝王物語〕主上〇後深草は建長五年正月三日御元服あり、女御は大宮院〇後嵯峨后姞子の御妹〇公子參らせ給ふ、もとは大宮院に候はせ給て、御熊野詣の時も御參ありしを、圓明寺殿〇藤原實經を聟にとるべしとて日限まで定りたりけるを、院〇後嵯峨の御はからひにて俄に參らせ給へば、引かへ目出度事にてぞ有ける、康元元年十一月に女御に參りて、同二年二月に立后あり、御年ははるかの御あねにてぞおはします、

〔五代帝王物語〕正嘉二年八月七日、院の第六の皇子、恒仁親王〇龜山春宮にたゝせ給ふ、御年十歳、是も大宮院の御腹なり、正元元年八月廿六日御元服、同十一月廿六日、春宮位につかせ給ふ、御年十一、十二月廿八日即位の儀あり、〇中略新帝の女御には、右大臣〇山科左府實雄公の女〇京極院佶子文應元年十一月廿一日御禊の女御代に供奉して、同十二月廿二日入内、御年十六なり、同二年二月立后ありて候給ふ、

〔仁部記〕弘長元年八月廿日庚戌、今日女御〇藤原嬉子有立后〇龜山中宮事、節會可參仕之由、先日爲藏人次官奉行、被仰下之間、雖申領狀、此間痢病所勞更發之間不出仕、傳聞本宮事、藏人佐頼親奉行云々、宮司除目

大夫源雅忠　權大夫藤隆顯　亮藤隆保　權亮藤公孝
大進藤頼親　權大進同高朝　同俊定　少進平資兼
權少進藤定世　大屬安倍資國　少屬中原職成　少屬中原國民

前中宮〇藤原佶子今夜卽令轉皇后宮給云云、宮司□□次第被轉上之由、被宣下之、不被載除目之由、奉

即召頭辨(季仲)仰其旨了、申刻上達部分散、　廿二日己巳、殿下、余、著冠參內、寢殿御裝束了、透垣邊曳幔幕云云、未曳以前罷出、延久元年有立后事、用件日記云云、有別記、

〔玉海〕文治五年四月三日癸亥、〇中略今日戌刻、自天王寺定能卿傳院宣、余女子(〇任子)入內事聞食了、假雖他人令申、如是令申上不可及異議、況無他人申事、早可致沙汰、又有宸筆勅報、其趣惟同、歡喜之思、千廻萬廻也、〇中略　六年正月十一日丙寅、此日攝政太政大臣(〇實兼)長女、從三位任子有入內事、(生年十八、)(余四十二、)蓋依長保永久例行之、〇中略　十六日辛未、取御插鞋納余辛櫃、又取御衾納御辛櫃、此日御書使、主上渡御、女御宣旨、女官祿等也、先女房等著裝束(紅櫻白)參之、〇中略　四月十四日、此日立后兼宣旨也、(〇後鳥羽后)勅使成經朝臣、余自取祿、〇中略　廿六日己酉、此日册命立后也、以女御從三位任子為中宮職、子細在別記、　廿七日庚戌、立后第二日也、盃酌如常、　廿八日辛亥、立后第三日也、又御書使(實明朝臣)啓陣還祿氏院參賀、　廿九日壬子、今日雖可撤御裝束、依日次不宜、明日可撤之、

〔增鏡三藤衣〕寬喜元年になりぬ、此ほどは光明峰寺殿、(道家)又關白にておはす、この御むすめ、(〇後堀河后竴子)女御にまゐり給ふ、世の中めでたくはなやかなり、〇中略やがて后立あり、(〇寬喜二年二月十六日)藤つぼわたりいまめかしく住なし給へり、〇中略おなじ三年七月、關白をば御太郎敎實のおとゞにゆづり聞え給て、わが御身は大殿とて、后宮の御おやなれば、思なしもやむごとなきに、御子どもさへいみじうさかへ給さま、ためしなきほどなり、

〔平戸記〕仁治三年八月九日己未、早旦頭辨來問今日事、今日女御(姞子、前右大臣實氏公女、〇後嵯峨后)有立后事、內辨大納言具實卿、宣命使左衞門督顯親卿云々、節會了於御前被行宮司除目、內辨候執筆云々、藏人方事、左衞門權佐經俊奉行、本宮事右少辨時繼奉行、晚頭頭辨來訪宮司間之故實不經程歸了、

宮司除目

中宮大夫藤公相(兼)　亮平時高(兼)

權大夫藤實藤(兼)　權亮源顯房(兼)

程にことしは天元五年になりぬ、三月十一日中宮たち給はんとて、おほきおとゞ急ぎさわがせ給、これにつけても右のおとゞ、あさましうのみ萬きこしめさるゝ程に、きさきたゝせ給ひぬ、いへばおろかにめでたし、大きおとゞのし給ふもことわりなり、帝の御心おきてを、世人も目もあやに淺ましき事に申思へり、一のみこおはする女御（○詮子）をおきながら、かくみこもおはせぬ女御（○遵子）の后にゐ給ひぬるを安からぬ事に世人なやみ申て、すばらの后とぞつけ奉りたりける、

〔榮花物語三様々の悦〕今年をば正暦元年といふ、正月五日内（○一條）の御元服せさせ給ふ、（○中略）二月には内大臣殿（○藤原道隆）の大姫君（○定子）内へ參らせ給有さまいみじうのゝしらせ給へり、（○中略）やがて其夜のうちに女御にならせ給ひぬ、（○中略）かゝる程に大殿（○藤原兼家）の御心ちなやましうおぼしたれば、（○中略）五月八日出家せさせ給、この日攝政の宣旨内大臣殿かうぶらせ給、（○中略）攝政殿御けしき給はりて、まづ此女御、后にすゑ奉らんの騒ぎをせさせ給ふ、（○中略）六月一日后にたゝせ給ひぬ、

〔後二條關白記〕寛治七年正月廿三日辛丑、未刻民部卿來臨相逢、參高陽院之由相語云、中納言□□著冠直衣、殿下（○藤原師實）御使參女御（○堀河后篤子内親王）告申立后事、　廿五日癸卯、未刻參高陽院、殿下參六條院給候御共、自院御方參新院給、殿下御坐殿上、即參院御前、頭之殿出自御前、御坐殿上、自懐中執出一紙、下給別當、（權大納言雅實）給了殿下參内、其後被始殿上飲食、二獻、（頭辨季仲）三獻、（右大辨通俊）黃昏程事了、引上達部等參内、（左大臣不參、右大臣留於新院、）頭辨勅使敷座、殿下圓座也、（勅使西、殿下東、）源大納言取女裝束給勅使、殿歸給於座、頭辨於庭再拜、了簀子敷燈臺立、召陰陽師道時朝臣、令擇立后日時、付行家奉之、召行家令書定文如常、事了被召日時、（件勘文者、今夜出御日時也、）　廿七日乙巳、女御御出高陽院、其後今日有勘文云云、勅使延引之由有聞云云、　二月十三日己未、戌刻於女御有勅使事如恒、鹿嶋使文覽、予開見即下云云、　廿一日戊辰、參高陽院、南庇二階之立様所被沙汰、二階立西御屏風面東面也、其前立二階如常、有立后宣旨有一兩日、今日依主上御衰日、已以延引、左大臣、民部卿、左大辨等被申定、當日早且可被行之者也、

穩子爲女御後爲后

皇太后章子内親王〈後一條院長女、母中宮威子、〉

長暦年中入太子〈○後冷泉〉宮、永承元年七月十日爲中宮、治暦四年四月十二日皇太后、〈○中略〉

〔扶桑略記 二十九後三條〕延久三年三月九日甲午、左大臣藤原師實朝臣、取左兵衛督源顯房卿息女〈賢子〉爲養子、令入皇太子〈○白河〉宮、

〔扶桑略記 三十白河〕延久六年六月廿日丙子、女御藤原賢子冊爲中宮、

〔玉蘂〕承元三年三月廿三日、此日故攝政前太政大臣〈○藤原良經〉長女、有入宮事、〈名立子、生年十八、與余同腹、母權中納言能保卿女、〉陽明門院〈○後朱雀后禎子〉四月廿三日入宮、賢子中宮〈○白河后〉三月九日入宮、日月叶萬壽例、支干同延久跡、可吉祥耳、〈○中略〉廿六日、早旦著直衣、參東宮〈○順德〉御方、卽參御息所御方、卽退出、歸一條亭、今日以下毎夜御息所昇給也、但無女房來召、并覆衾之儀、今日以後有御朝餉云々、

〔百練抄 十二順德〕建暦元年正月廿二日、有立后事、〈以藤原立子爲中宮、〉

〔女院小傳〕後京極院〈禧子〉入道大相國實兼三女、□□入太子〈○後醍醐〉宮、文保二、四、廿從三位、七月廿八爲女御、元應元、八、七爲中宮、

〔扶桑略記 二十四醍醐〕延喜廿三年四月廿六日癸酉、女御藤原穩子立皇后、

〔日本紀略 四村上〕天德二年十月廿七日甲辰、策立女御從三位藤原朝臣安子爲皇后、卽日任宮司、

○按ズルニ、穩子ハ、日本紀略、帝王編年記、一代要記、大鏡裏書等ニハ、中宮ニ作リ、安子ハ、扶桑略記ニ爲中宮ト見エ、帝王編年記ニ、皇后藤安子云々、號中宮ト記ス、是レ當時中宮皇后相通ジテ稱セシナリ、

〔榮花物語 二花山〕其冬〈○天元元年〉關白〈○藤原賴忠〉殿の姫君〈○遵子〉うちに參らせ奉り給ふ、世の一の所にはしませば、いみじうめでたきうちに、殿の御ありさまなども奥深く心にくゝおはします、〈○中略〉只今の御有樣に上〈○圓融〉もえたがはせ給へば、おろかならず思ひ聞えさせ給なるべし、〈○中略〉かゝる

太子者、誕而三月立爲皇太子、神龜五年夭而薨焉、時年二、天平元年尊太夫人爲皇后、

〔續日本紀考證淳仁八〕授正一位、爲太夫人、（按神龜元年、授正一位、爲太夫人者、聖武天皇母宮子娘、而非光明皇后也、光明皇后、神龜四年十一月紀、天平元年八月紀、並書夫人、而爲夫人史不載、年月無所考、蓋宮子娘、光明皇后、俱不比等公之女、一爲文武夫人、一爲聖武夫人、事蹟相涉、致此混淆耳、）尊太夫人爲皇后、（天平元年八月紀云、詔立正三位藤原夫人爲皇后、此亦混宮子娘事、云尊太夫人誤、）

〔續日本紀桓武四十〕延曆九年閏三月丙子、是日皇后崩、〇中略甲午、〇中略皇后姓藤原氏、諱乙牟漏、贈內大臣從一位良繼之女也、母尙侍贈從一位阿部朝臣古美奈、后性柔婉美姿儀、閑於女則、有母儀之德焉、今上之在儲宮也、納以爲妃、生皇太子、〇平城賀美能親王、〇嵯峨高志內親王、及於卽位、立爲皇后、

〔村上天皇宸記〕應和四年四月廿九日、辰刻使藏人文利問中宮、兼令問產養否之由、還來申、伊尹朝臣令申云、自今曉寅刻計、氣息雖纔通、不可敢存坐、更不可行他事、〇中略又遣文利問中宮、巳刻崩、文利還來申云、中宮已崩、加持僧等皆退下、皇后是前右大臣師輔朝臣第一女、諱安子、母故出羽守藤原經邦之女盛子也、予〇村上在藩之時、以天慶三年四月配合、爲儲貳之後、同八年正月、以太弟妃授從五位上、及予登帝位、爲女御、授從四位下、厥後頻進級、又授從三位、天曆四年五月生男子、以同年七月立爲皇太子、太子初謁見之日、又授從二位、至天德二年策命爲皇后、以應和四年四月廿四日、於主殿寮廳誕生女兒、今日巳刻終于同寮、時年三十八、在后位七載、

〔日本紀略一條十一〕寬弘元年十一月廿七日丁丑、以正四位下藤原姸子爲尙侍、左大臣第二御息女、〇中略

七年二月廿日庚子、尙侍藤原朝臣姸子初入東宮、〇三條

〔日本紀略三條十二〕寬弘八年八月廿三日甲子、召右大辨道方下女御二人宣旨、一人尙侍從二位藤原姸子、〇中略 長和元年二月十四日壬子、宣命、尊皇太后〇圓融后遵子爲太皇太后、中宮〇一條后彰子爲皇太后、女御正二位藤原朝臣姸子爲中宮、

〔十三代要略二後冷泉〕後宮

〔神皇正統記 後醍醐〕諱は尊治、〈○中略〉御母は談天門院藤原忠子、内大臣師繼の女、實は入道參議忠繼の女なり、

〔歷代皇紀〕稱光天皇、諱躬仁、改實仁、後小松院第一皇子、母光範門院、儀同三司資敎女、實贈左大臣資國女、

〔宣胤卿記別記〕文明十三年七月廿六日己亥、今日當今〈○後土御門〉母儀准后、〈信子、元名孝子、實父故藤原孝長朝臣也、故和氣郷成朝臣爲猶子、其後故保家朝臣猶子、後又故大炊御門入道前内大臣宗■公、今年正月六日叙從三位、十三日云々、爲猶子、依當今母儀也、○下略〉

〔御湯殿の上の日記〕天正十四年十二月十六日、このへどの〈○藤原前久〉ひめぎみ〈○前子〉くわんばく殿〈○豐臣秀吉〉やうしに參られて、女御〈○後陽成〉に御參り、御たる十から十か參る、御くしあげ御さたありて、つねの御所にて三こん參る、ゑよこんはうそう、二こんかへに御ひら、三こんふな、御はいせん、すけ殿ながはし、いよ殿、女御はいせん、女中御とをりあり、

〔日本書紀 十七 繼體〕八年正月、太子〈○安閑〉妃春日皇女、晨朝晏出、有異於常、〈○中略〉太子怪問曰、今旦涕泣有何恨乎、〈○下略〉

初爲太子妃後爲后

〔日本書紀 十八 安閑〕元年三月戊子、有司爲天皇、納采億計天皇女春日山田皇女爲皇后、

〔日本書紀 三十 持統〕高天原廣野姬天皇、少名鸕野讚良皇女、〈○中略〉天豐財重日足姬天皇三年、適天渟中原瀛眞人天皇、〈○天武〉爲妃、〈○中略〉天渟中原瀛眞人天皇元年六月、從天渟中原瀛眞人天皇、避難東國、〈○中略〉二年立爲皇后、

〔續日本紀 二十 淳仁〕天平寶字四年六月乙丑、天平應眞仁正皇太后〈○聖武后光明子〉崩、姓藤原氏、近江朝大織冠内大臣鎌足之孫、平城朝贈正一位太政大臣不比等之女也、母曰贈正一位縣犬養橘宿禰三千代、皇太后幼而聰慧、早播聲譽、勝寶感神聖武皇帝儲貳之日、納以爲妃、時年十六、攝引衆御、皆盡其歡、雅閑禮訓、敦崇佛道、神龜元年、聖武皇帝即位、授正一位、〈○正一位、從三位誤〉爲太夫人、生高野天皇及皇太子、其皇

〔百練抄近衞七〕久安六年正月十日、左大臣○藤原賴長女○多子入內、實權中納言公能女

〔續世繼大刀五〕ふけの入道○藤原忠實おとゞの御子は、法性寺のおほきおとゞ、○忠通つぎには宇治の左のおとゞ賴長ときこえ給へりし、○中略この左のおとゞは、このゑのみかどの御時、女御たてまつり給へりき、おほいのみかどの右大臣公能のおとゞの三君を御子にし給ひて、たてまつり給て、皇后宮多子とぞ申しゝ、その左のおとゞの北方○幸子は、大炊御門のおとゞの御いもうとなれば、そのゆかりに御子にし給へるなるべし、

〔續世繼五つかひまし〕近衞のみかどの御時の中宮呈子と申しも、太政大臣伊通のおとゞの御むすめを、この法性寺殿○藤原忠通の御子とてぞ奉り給へる、此比九條院と申なるべし、まことの御子ならねども、院號も關白の御子とてはべるとかや、

〔女院小傳〕九條院、藤呈子近衞后、太政大臣伊通公女、法性寺關白○藤原忠通爲子、母權中納言顯隆女、久安六、二、十六、叙從三位、十九四月廿八爲女御、六月廿二爲中宮、

〔續世繼三なさけの葉〕二條のみかどへ申すは、この院○後白河の一のみこにおはしましき、○中略その御はゝ、左大臣有仁のおとゞの御むすめ、○後白河后懿子まことの御おやはつねざねの大納言におはす、

〔皇胤紹運錄〕六條院

母中宮○二條后育子忠通公女、實大藏大輔伊岐善盛女、

〔增鏡一おどろの下〕いまの御門○土御門の御いみなは爲仁と申き、御はゝは能圓ほういんといふ人のむすめ、さいしやうの君○後鳥羽后在子とてつかうまつられけるほどに、この御門むまれさせ給ひて、のちには內大臣通親の御子になり給ひ、すゑには承明門院と聞えき、このおとゞの北のかたのはらにておはしければ、もとよりのちのおやなるに、御さいはひさへひきいで給ひしかば、まことの御むすめにかはらず、この御門も、やがてかの殿にぞやしなひたてまつらせ給ひける、

子、實是大納言源顯房女也、

〔愚管抄四〕宇治殿〇藤原頼通は、年八十に成て、宇治にこもりゐて、御子の京極の大殿の左大臣〇藤原師實とておはしけるを、内裏へ日々參せよ、さしたる事なくとも日をかゝず參りて、奉公をつとむべきぞと敎へ申されければ、其まゝ參りて殿上に候ていで〳〵せられけるに、主上〇後三條は常に藏人を召て、殿上に誰々か候々と日に二三度もとはせおはしましけるに、度毎に左大臣候と申て日比月比になりける程に、或日の夕に御尋有けるに、又左大臣と申けるを、是へといへと仰の有ければ、藏人參りて御前の召し候と申ければ、めづらしき事かな、何事を仰あらんずるにかと思して、心づくろひせられて、御裝束引つくろひて參られたりければ、近くそれへと仰られて、何となき世の御物語どもありて、夜もやう〳〵更行ける終つかたに、みむすめやもたれたると仰出されたりければ、ことやうに候女子〇賢のわらは候と申されけり、我むすめにはなかりけるを、師房の大臣の子の顯房のむすめを乳のうちより子にしてもたせ給へりけるなり、〇中略これをきこしめして、さやうのむすめもたらば、とく〳〵東宮へ參らせらるべきなりと仰られけるを、うけ給はりかしこまりて御前を立て、世間もおぼつかなかりつるに、今はひしと世は落居ぬると、いそぎ宇治殿にきかせ參らせんとおぼして、内裏より夜更てやがて宇治へ參られければ、〇中略いかにも事ありとおぼして、いかに〳〵何事ぞと仰られければ、日比仰のごとく、參内日をかゝずつかうまつり候つるほどに、〇中略むすめあらば東宮へ參らせよといふ勅定を、眼前にうけ給はゝ候つれば、急ぎ參りて申候也と申されければ、是を聞せ給ひて、宇治殿はさうなくはら〳〵と涙を落して、世の中のおぼつかなかりつるに、あはれ猶此君はめでたき君かな、とく〳〵出立て參らせられよとて、ひし〳〵とさたありて、東宮と申は、白河院なり、東宮の女御にまゐらせられにけり、位につかせ給ひては中宮と申、立后ありて今に賢子の中宮とて、堀河院の御母是なり、

大臣養子爲后

〔五代帝王物語〕同年弘長元年六月十四日、左大臣今出川の公相公、大相國の女今出川院女御にまゐり給ふ、御歳九なり、大宮院〇後嵯峨后姑子御子にせさせ給ふ、御母は德大寺の大相國實基公の女なり、八月廿日立后、

〔續世繼一初春〕む月〇長曆元年の七日、關白左のおとゞ〇藤原賴通とて、宇治のおはきおとゞおはしまし、女御たてまつらせ給、みかど〇後朱雀の御あにゝおはしましゝ式部卿〇敦康親王の御子の女ぎみ〇嫄子の、むらかみの中つかさの宮〇具平親王の御むすめの御はらにおはせしを、關白殿御子にえたてまつり賜て、女御に奉り給へるなり、一條院の皇后宮〇定子のうみたてまつり給へりし一の御子におはしませば、春宮にもたち給べかりしを、御うしろみおはしまさずとて、二のみこにてせむだい、〇後一條三のみこにてこのみかど〇後朱雀ふたりみだうのむまご、關白の御おひにおはしませば、うちつゞきつかせ給へるなり、かの一條院の皇后宮は、御せうとのうちのおとゞ〇藤原伊周の、つくしにおはしましゝ事どもにおもほしなげかせ給て、御さまかへさせ給へりしのちに、式部卿の御子、をうみ奉らせたまへるなり、〇中略その式部卿の御子の御むすめにおはしませば、みかどにはめひにあたらせ給へり、かくてやよひのついたちに、きさきにたゝせ給ぬ、

〔愚管抄四〕この敦康親王の母は、道隆關白の女にて、たゞの親王にて、位は思ひもよらず、されど御前は又具平親王の御女にてありければ、宇治殿〇藤原賴通の北政所をば、高倉の北政所と申にや、おさなしく命ながくて孫までおはしけり、この北政所の弟にて、この敦康の御前にておはしければ、其御女にて嫄子の中宮はおはしますによりて、宇治殿の子にして、姓も藤原氏の中宮にて入内立后も有けるなり、

〔扶桑略記後三條二十九〕延久三年三月九日甲午、左大臣藤原師實朝臣、取左兵衞督源顯房卿息女〇賢子爲養子、令入皇太子〇白河宮、

〔扶桑略記白河三十〕延久六年〇承保元年六月廿日丙子、女御藤原賢子册爲中宮、右大臣藤原朝臣師實之猶

前后養子爲后

鳥羽院はをさなくおはしましける時、ひわひなることなどもありて、瀧口が顔に、小弓の矢射てなどせさせ給ふと人もしりけるを恐れ給ひけるにやなどぞ人は申ぬる、又公實のむすめ（璋子）を御子にしてもたせ給たりけるをば、法性寺殿（○藤原忠通）をむことらんとおぼしめして、すでにそのさたありける程に、日なみなどえらばるゝに及びたりけるが、忘かるべくてさはりおほくいできいできしていまだとげられざりける程に、知足院殿むすめをえまゐらせじと申されけるに、わたに御はらだちて、待賢門院をば、法性寺殿の儀をあらためて、やがて入内ありけるとぞ、鳥羽院は、あやにくにおとなしくならせおはしましては、殊にめでたき御心ばへの君におひなりてこそはおはしましけれ、さて白河院は、かの公實のむすめをとりて、御子にしてもたせ給へりけるを、鳥羽院に入内立后してぞおはします、待賢門院と申はこれなり、

〔玉海〕承安元年十二月十四日甲寅、此日院姫君入内也、○中略女御（其衣裏濃蘇芳云云、女房衣色云云、）入道相國（○平清盛）女、法皇（○後白河）御養子、永久例云々、但彼者自誕生之昔撫育之禮、随又主上御孫也、仍於儀無妨、今度已可爲姉妹歟、尤以有忌如何、　二年二月十日己酉、此日有冊命皇后事（女御徳子爲中宮）

〔中右記〕寛治五年十月十九日、殿下（○藤原忠實）初令參陽明門院（○後朱雀后禎子内親王）給、是依女御入内之事也、

廿五日庚辰、有三品篤子内親王（○鳥羽后）入内之事、（是後三條院第四女、母贈太后藤茂子、太上皇（白河）同母弟也、陽明門院養爲御子、○中略）先有御使、（右近少將藤原顯實朝臣○中略）及亥剋寄御車、（糸毛）女房車十輌、（檳榔、女房十八人、童女二人、合廿人、）前駈殿上人皆參、○中略其後公卿殿上人有饗饌之事、○中略

今夜女房御使、掌侍源盛子（源頼綱朝臣姫也）有祿、女裝束、御衾役殿下北政所、凡入内之儀、一事以上關白殿令御沙汰也、○中略

十一月二日丙戌、女御入内之後、有三夜餅事、件餅民部卿所被調進也、

〔帝王編年記〕（十九堀河）中宮篤子内親王（後三條院第四皇女、寛治七年三月廿二日立后、）

前帝妻子爲后

憂之、走幣群神、祈請百端、后勸帝、錄囚徒、廢作役、未及終朝、澍雨晻合、帝逾加愛焉云々、

〔扶桑略記 後冷泉二十九〕永承元年七月十日戊子、章子內親王立中宮、後一條天皇長女、母前中宮藤原威子也、

〔十三代要略 後朱雀一〕皇后禎子內親王、三條院第三女、母皇太后妍子、萬壽四年三月廿三日入太子宮、長元十年二月十三日爲皇后、

〔續世繼 藤浪四〕馨子の內親王と申も、又おなじ〇威子御はらにおはします、長元四年に加茂のいつきにて、同九年に出させ給ひて、永承六年十一月、後三條院東宮におはしまし丶女御に參らせたまひき、御年二十三、延久元年七月廿三日、皇后にたち給、

〔續世繼 虫の音三〕永治元年十一月にや侍けん、かのとのとりのとし、又ひめ宮〇鳥羽皇女姝子六條殿にてうみ奉り給へりし、二條のみかど春宮と聞えさせ給し時、保元二年の頃、みやす所ときこえさせ給て、みかど〇二條位につかせ給しかば、平治元年二月廿一日、〇原作十二月廿六日、今改、中宮ときこえさせ給しに、永曆元年八月十九日御なやみとて、御ぐしおろさせ給、

〔女院小傳〕宣政門院、懽子〇光嚴院后、後醍醐女、母京極院、

〔續三宮傳〕承秋門院、幸子東山后 有栖川一品兵部卿幸仁親王御女、元祿十年二月廿五日、入內、十六才同日女御宣下、寶永四年五月三日准三宮、同月十八日、內親王宣下、同五年二月廿六日、中宮宣下、〇節略

〔執次詰所記〕欣子內親王〇後桃園皇女、光格后、

安永八年正月廿四日降誕、號女一宮、〇中略寬政三年六月卅日、依先帝遺詔可被立皇后被仰出、同十二月四日、御齒黑始、同五年十二月廿四日、准后宣下、陣同六年三月一日、入內、十六歲同六日、御退去于仙洞、同七日、立后奉稱中宮、被行節會宮司除目等、本宮仙洞被假用自今稱中宮、

〔愚管抄四〕鳥羽院位のはじめに后だちあるべきに、知足院殿〇藤原忠實のむすめをまゐらせよと仰ありけるを、かたく辭してまゐらせられざりけり、人これを心得ずおもひけり、これを推するに、

之名、嗟夫可不愼歟、請立手白香皇女、納爲皇后、遣神祇伯等、敬祭神祇、求天皇息、允答民望、天皇曰、可矣、　三月庚申朔、詔曰、神祇不可乏主、宇宙不可無君、天生黎庶、樹以元首、使司助養、令全性命、大連憂朕無息、披誠款以國家、世々盡忠、豈唯朕日歟、宜備禮儀、奉迎手白香皇女、　甲子、立皇后手白香皇女、脩敎于內、遂生一男、是爲天國排開廣庭尊、○欽明

〔日本書紀安閑十八〕元年三月戊子、有司爲天皇、納采億計天皇女春日山田皇女、爲皇后、更名山田赤見皇女

〔一代要記宣化一〕後宮

皇后橘仲皇女仁賢女、天皇元年三月己酉立、

〔水鏡中敏達〕つぎの御門敏達天皇と申き、欽明天皇第二の御子、御母宣化天皇御女、石姬皇后也、

〔日本書紀敏達二十〕四年正月甲子、立息長眞手王女廣姬爲皇后、　十一月、皇后廣姬薨、　五年三月戊子、有司請立皇后、詔立豐御食炊屋姬○欽明皇女尊爲皇后、

〔日本書紀用明二十一〕元年正月壬子朔、立穴穗部間人皇女爲皇后、

〔日本書紀舒明二十三〕二年正月戊寅、立寶皇女、○敏達皇子押坂彥人大兄皇子子、茅渟王女、爲皇后、

〔日本書紀孝德二十五〕大化元年七月戊辰、立息長足日廣額天皇○舒明女、間人皇女爲皇后、

〔日本書紀天智二十七〕七年二月戊寅、立古人大兄皇子女倭姬王爲皇后、

〔續日本紀光仁三十一〕寶龜元年十一月甲子、詔曰、現神大八洲所知倭根子天皇詔旨止宣詔旨乎親王王臣百官人等天下公民衆聞食宣、朕以幼弱身忝鴻業氏、恐利畏、進毛不知爾退毛不知爾所念波、慶佐御命自獨能夜味受給武止所念氏奈毛法能麻爾麻爾○中略以井上內親王定皇后止宣天皇御命衆聞食宣、

〔三代實錄陽成三十五〕元慶三年三月廿三日癸丑、淳和太皇太后崩、○中略太后諱正子、嵯峨太上天皇之長女、與仁明天皇同產也、母太皇太后橘氏、后美姿顏、貞婉有禮度、存母儀之德、中表則之、太上天皇太皇太后甚鍾愛之、淳和天皇備禮娉之、納於掖庭、寵敬兼人、天長四年二月立爲皇后、八年亢旱爲災、帝深

卅人、節別各限二箇日給食、人別日飯米二升、餘節准之、

右三節料依前件一度請受、節別分供、但射禮料用此內、又十八日賭射辨備肴物、給王卿及近衞次將等、○此下五月五日、七月七日、九月九日節料略、

擇貴族

〔日本書紀　三神武〕庚申年八月戊辰、天皇當立正妃、改廣求華冑、時有人奏之曰、事代主神共三嶋溝橛耳神之女玉櫛媛所生兒、號曰媛蹈韛五十鈴媛命、是國色之秀者也、天皇悅之、　九月己巳、納媛蹈韛五十鈴媛命、以爲正妃、　辛酉年正月庚辰朔、天皇卽帝位於橿原宮、是歲爲天皇元年、尊正妃爲皇后、

皇族爲后

〔日本書紀　四懿德〕二年二月癸丑、立天豐津媛命、○安寧皇子、息石耳命女、爲皇后、

〔日本書紀　四孝安〕廿六年二月壬寅、立姪押媛、○孝昭皇子、天足彥國押人命女、爲皇后、

〔日本書紀　五崇神〕元年二月丙寅、立御間城姬、○孝元皇子、大彥命女、爲皇后、

〔日本書紀　六垂仁〕二年二月己卯、立狹穗姬、○開化皇子、彥坐王女、爲皇后、

〔古事記　中開化〕若倭根子日子大毘毘命、○開化、坐春日之伊邪河宮、治天下也、此天皇、○中略、又娶丸邇臣之祖、日子國意祁都命之妹、意祁都比賣命、意祁都三字以音、生御子日子坐王、○中略、日子坐王、○中略、又娶春日建國勝戶賣之女、名沙本之大闇見戶賣、生子、○中略、次沙本毘賣命、亦名佐波遲比賣、此沙本毘賣命者、爲伊久米天皇(垂仁)之后、

〔日本書紀　六垂仁〕十五年八月壬午朔、立日葉酢媛命爲皇后、

〔古事記　中垂仁〕此天皇、○中略、又娶旦波比古多多須美知能宇斯王女、氷羽州比賣命、

〔日本書紀　十五顯宗〕元年正月、是月、立皇后難波小野王、赦天下、難波小野王、雄朝津間稚子宿禰天皇(允恭)曾孫、磐城王孫、丘稚子王之女也、

〔日本書紀　十五仁賢〕元年二月壬子、立前妃春日大娘皇女爲皇后、春日大娘皇女、大泊瀨天皇(雄略)娶和珥臣深目之女童女君所生也、

〔日本書紀　十七繼體〕元年二月庚子、大伴大連奏請曰、臣聞前王之宰世也、非維城之固、無以鎭其乾坤、非掖庭之親、無以繼其趺蕚、是故白髮天皇、○淸寧無嗣、遣臣祖父大連室屋、每州安置三種白髮部、以留後世

(別二銖)領巾四條、料紗三丈六尺、(別九尺)絲四銖、(別一銖)表袷裙二腰、(白一腰、夾纈幷作日一腰、)料絹二疋一丈、(別一疋五尺)絲一分二銖、(別四銖)同腰料絹一丈、(別五尺)絲二銖、(別一銖)下裙二腰、(白)料白絹二疋一丈、(別一疋五尺)絲一分二銖、(別四銖)同腰料絹一丈、(別五尺)絲二銖、(別一銖)袴十五腰、(紅)料絹十二疋三尺、(別五丈)絲一兩三分三銖、(別三銖)單袴廿腰、(紅)料絹八疋五丈、(別二丈六尺五寸)絲一兩二分四銖、(別二銖)袿衣、單袿衣各三領、料絹五疋三丈七尺五寸、(袷別一疋一丈五尺、單別三丈七尺五寸、)綿廿四屯、(別八屯)絲二分、(別四銖)被六條、(三月減二條、)料絹十一疋二尺四寸、(別一疋五丈四寸)綿六十屯、(別十屯)絲一兩二分、(別一分)褥三條、料絹五疋、(別一疋四丈)綿十五屯、(別五屯)絲一分三銖、(別三銖)御厠殿料絹十疋、綿卅屯、○此下夏秋冬御衣略

右四季御服、並依前件、每年依數從內藏寮受之、准例染縫、(臨時定色、)月別一日十六日兩般、均分供進、若數不等者上般加之、

〔延喜式三十五大炊〕凡供御稻米粟米舂備、日別送內膳司、(中宮亦同、但東宮送主膳監、)

凡供御料、稻粟並用官田、(中宮東宮齋宮亦同、但齋宮者在京之間供之、)其舂得米一束二把、五升、糯米亦同、(一人日舂三束、)但藁充內膳司、其舂米女丁八人、(御井中宮各三人、東宮二人、)

中宮雜給料、(日別米四斗平飯、六升糯飯料、)

〔延喜式三十九內膳〕諸節供御料、(中宮亦同、下皆准之、)

正月三節

米三斗、糯米四斗六升五合、糯稻十五束、糒糯三升、粟子糯六升、小麥一斗二升、荏子九升、胡麻子八升四合、大豆三升三合、小豆二升四合、清酒濁酒酢油各一斗五升、醬三斗、鹽六升、東鰒八斤四兩、隱岐鰒十一斤一兩、煮堅魚四斤二兩、螺四斤三兩、紫菜一斤、干薑一斤、棗子三升、搗栗子九升、生栗子六斗四升二合、干柹子六連、椎子六升、菱子三升、橘子卅六蔭、柞橘子十五枝、擬橘子一斗、長櫃五合、熬堝十八口、竹三圍、料理所炭十二石、薪一千八百斤、供奉膳部卅人、(廿人御、十人中宮、)各給紺布衫一領、(通用三節、)其下番膳

供給

〔德川禁令考二公家〕享保五庚子年二月十四日ノ令、女院（○東山后幸子女王）崩御ニ付、鳴物三日停止、普請ハ不苦、

〔令義解四祿〕凡食封者、（○中略）中宮湯沐二千戸、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字四年六月乙丑、天平應眞仁正皇太后（○聖武后）崩、姓藤原氏、（○中略）天平元年、尊太夫人（○太夫人、大夫人誤）爲皇后、湯沐之外更加別封一千戸、

〔日本紀略五冷泉〕康保四年九月廿三日戊申、今日充中宮（○昌子）御封千五百戸、

〔榮花物語三浦々の別〕宮の御前（○一條后定子）の御内參りのこと、そゝのかし啓しつるにぞ、思したゝせ給へる、明順道順よろづにそゝぎ奉る、國々の御封などめし物すれど、ものすかやかに辨へ申人もなければ、さるべき御莊などぞ、絹奉らせんなど案内申人ありければ、きぬめしてよろづにいそがせ給ふ、（○中略）中宮には、三月ばかりにぞ御子生れ給べき程なれば、御愼みをよろづに思せど、殊に御封などすが〳〵しう辨へ申人なし、內藏づかさより、例のさま〴〵の御具どももてはこび、女院などよりも、萬おぼしはかり聞えさせ給へば、それにて何事もいそがせ給ふ、

〔續三宮傳〕新清和院（光格帝皇后）寛政六年三月七日、立皇后、同日御領三千石被定進、（○節略）

〔延喜式十三中宮〕凡每月晦日、進錦鞋三兩、但雜給料臨時定之、

凡每月十一日、請來月料米一百斛、（白五十石、黑五十石、）

凡十二月二日、來年雜用料調布一千端、預申辨官請受、

〔延喜式十四縫殿〕中宮

春季

正月料、（二月三月亦同）袍十領、（白一領、白橡九領、）作目料白絹四疋一丈、（別二丈五尺、）絲一兩一分、（別三銖、）背子十領、（白一領、白橡九領、）料絹五疋、（別三丈、）絲一兩一分、（別三銖、）單衣十領、（白一領、韓紅二領、蘇芳三領、蒲萄二領、藍二領、）料絹二疋五尺、（別一丈二尺五寸、）絲三分二銖

〔三代實錄 三十陽成〕元慶元年二月廿二日甲子、掌侍從五位下春澄朝臣高子、改名給子、以觸中宮○陽成母后藤原高子諱也、○中略 閏二月七日己卯、正五位下安倍朝臣高子、改名基子、外從五位下葛木宿禰高子、改名賀美子、以觸中宮諱也、

〔續世繼 一星合〕中宮、○後朱雀后藤原嫄子、中略、又のとしもおなじやうにまかり出させ給て、丹後守ゆきたふのぬしの家にて、長暦三年八月十九日、猶女宮○祺子うみ奉り給て、おなじき廿八日にうせ給にき、御年廿四、あさましくあはれなる事かぎりなし、いとゞ秋のあはれそひて、有明の月のかげも心をいたましむるいろ、ゆふべの露のしげきも涙を催すつまなるべし、かくて九月九日に、うちより故中宮の御爲に、七寺にみず經せさせ給ふ、みかど○後朱雀御ぶく奉りて、廢朝とて清涼殿のみすおろしこめられ、日のおもの參るも、こゑたてゝそうしなどすることもせず、よろづしめりたるさまには、ゆふべのほたるをもあはれとながめさせ給、秋のともし火かゝげつくさせ給つゝぞ、心くるしき折ふしなりけるに、廿日ぞ解陣とかいひて、よろづれいざまにて、御殿のみすなどもまきあげられ、すこしはるゝけしきなりけれど、なほ御けしきはつきせずぞみえさせ給ける、神無月もすぎぬれば、御いみ末になりて、かのうせ給にし宮にて御佛事あり、○中略 しも月の七日ぞ、内にははじめてまつりごとせさせ給、○中略 又のとし○長久元年、の七月七日、關白殿○藤原頼通嫄子養父にうちより御せうそこありて、

こぞのけふわかれし星もあひぬなりなどたぐひなき我身なるらん、とよませ給て侍りけんこそ、いとかたじけなくなさけおほくおはしましける御事かなとうけたまはりしか、

〔台記〕天養二年八月廿二日乙未、酉剋待賢門院○鳥羽后藤原璋子崩、三條高倉第 上皇○鳥羽先之坐同所、病急告法皇、卽幸臨終、法皇打磬哭泣、然後群臣哭、 廿三日丙申、待賢門院先入棺、次幸仁和寺三昧堂、其儀如生存、但群臣皆歩行、卽安置石穴云云、 廿七日庚子、傳聞法皇著服、○其色黑、

領、五位綿一連、亮唱四位五位名賜之、參議已上令女藏人賜之、五位以上令宮司賜之、若亮有闕、臨時權任、事見儀式同日早朝、中務省召職司、給次侍從已上見參、即別錄四位已上名簿進內侍、爲令辨備祿物

〔延喜式十三中宮〕同日正月二〇日受女官朝賀

其日內侍仰闈司、置版位於殿上及殿庭、版位十枚、方五寸、厚一寸、內親王以下女官命婦以上、以次入立於殿上、闈司引六位以下、以次入立於庭、爲首者當御前跪賀、內侍進承令退、隨便而立稱令旨、再拜訖退出、先是內侍令諸司鋪座立臺盤、女御以上先著座、次尙侍以下四位以上、次內外命婦、北面次闈司引六位以下北面列座、昇殿者留著座、不昇殿者退出、饗宴訖賜祿、妃白褂衣一襲、夫人內親王各白褂衣一領、三位以上六幅被一條、四位四幅被一條、五位衣一領、三位以上要四幅被一條、四位以下要衣一領、女孺之中、給折櫃食百合、祿調綿二百屯、事見儀式

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡王臣以下不得輙供大神幣帛、其三。后。皇太子若有應供者、臨時奏聞、

〔續日本紀四十桓武〕延曆九年閏三月丙子、有勅度二百人出家、又左右京五畿內、高年鰥寡孤獨疹疾不能自存者、普加賑恤、並爲。皇。后。藤原乙牟漏不。豫。也、是日皇后崩、　丁丑、天皇移御近衛府、以從二位藤原朝臣繼繩、正四位上神王、從四位下當麻王、從五位上氣多王、從五位下廣上王、正四位上紀朝臣古佐美、從四位下石上朝臣家成、藤原朝臣雄友、藤原朝臣內麻呂、正五位下文室眞人那保企、從五位上藤原朝臣黑麻呂、桑原公足床、阿部朝臣廣津麻呂、外從五位下高篠連廣浪、中臣栗原連子公爲御葬司、六位已下官八人、正三位藤原朝臣小黑麻呂、正四位下壹志濃王、從五位下大庭王、從四位下藤原朝臣菅繼、文室眞人高嶋、正五位下文室眞人八多麻呂、藤原朝臣眞友、從五位下文室眞人八嶋、藤原朝臣眞鷲爲山作司、六位已下官十二人、從五位下多智比眞人賀智、外從五位下林連浦海爲養民司、六位已下官五人、從五位下巨勢朝臣嶋人、丹比宿禰眞淨爲作路司、六位已下官三人、差遣左右京五畿內近江丹波等國役夫、令京畿七道自今月十八日始素服擧哀、以晦日爲限、〇中略　甲午、參議左大辨正四位上紀朝臣古佐美、率誄人奉誄、謚曰天之高藤廣宗照姬之尊、是日葬於長岡山陵、

〔儀式六〕正月二日朝拜皇后儀

當日早朝、掃部寮、設式部省輔已下座於縫殿寮東道、○中略巳刻省丞已下列立於寮南道、(南面西上)于時史生執簿唱列五位以上、隨唱稱唯、列立同道南邊、(先是參議已上、在玄暉門西廊、)省掌趨進云、大夫等參進二盤、五位已上以次參入、(錄立明平門內、稱容止、)列立玄暉門外、(南面西上)次丞錄率六位已下刀禰、入列立五位之後、(省掌且稱容止、)次彈正忠已下在式部次、立定時典儀云、再拜、贊者承傳、親王已下再拜、訖職大夫出就版位、賀壽者進自列南向稱壽詞、(詞見元日儀式、)復列、職大夫參入、令內侍啓、即參入、奉令旨、退出傳宣、大夫退出、就位宣令旨、親王及群臣稱唯拜、訖大夫參入、典儀曰、再拜、贊者承傳、王公百官再拜、訖以次退出、

〔延喜式中宮十三〕二日(○正月)受皇太子朝賀

其日早朝、職官設皇太子版位於常寧殿□西面□南、差退設司賓位、又南退設司贊位、□□□□司賓引太子入、立定司贊唱再拜、太子再拜、司賓引太子到東階、太子昇自□□□□賀訖俛伏興、引降復位、內侍進承令、降詣太子前、東面稱令旨、太子再拜、宣命訖又再拜、司贊唱再拜、太子又再拜、司賓引太子出、(事見儀式、)

〔延喜式中宮十三〕同日(○正月二日)早朝受群臣朝賀

同日早朝、所司鋪設於玄暉門外西廊、(親王以下諸王五位於廊上、諸臣五位於廊下南面、)式部置典儀位於同門東、差東北退設贊者位、並西面南上、設職大夫位於門西南面、依時剋式部引五位以上六位以下、列於同門外南面、典儀曰再拜、贊者承傳、群官俱再拜、職大夫出就位、爲首者進南向跪稱賀詞、訖復位、群官俱再拜、職大夫入申內侍、內侍奉令旨傳宣、大夫奉令旨退出、就位南面傳宣、群官稱唯再拜、訖退出、但中務輔引次侍從以上著座、于時內侍一人率女藏人三人、納祿物於櫃二合令持、職舍人四人置廊下上東、(自親王座東去一許)(丈)綿六百屯、(受大藏省、)置廊下、(掃部寮設座賓、)亮進屬各一人、史生二人、侍賜祿所、(所司設座、)事訖賜祿、親王以下大納言以上各白御衣二領、中納言三位參議白褂衣一領、非參議三位幷四位參議御衣一領、四位小褂衣一

右春官坊啓式、奉令後、注啓官位姓

亮　位　姓

〔令集解二十八儀制〕釋云、名例律云、稱乘輿車駕及御者、太皇太后、皇太后、皇后並同、

〔律疏〕六議

一曰議親、謂皇親、及皇帝五等以上親、及太皇太后、皇太后四等以上親、太皇太后者、皇帝祖母也、皇太后者、皇帝母也、皇后三等以上親、

〔律疏名例〕凡六議者、犯死罪、皆條所坐及應議之狀、先奏請議、議定奏裁、此名議章、六議人犯死罪者、皆條錄所犯應死之坐、及錄親故賢能應議之狀、先奏請議、議者原情議罪、稱定刑之律、而不正決之、原情議罪者、謂原其本情、議其犯罪、稱定刑之律、而不正決之者、謂奏狀之內、唯云准犯依律合死、不敢正言絞斬、故云不正決之、流罪以下減一等、其犯八虐者不用此律、流罪以下、犯狀既輕、所司減訖、自依常斷、其犯八虐者、死罪不得上議、流罪以下、不得減罪、故云不用此律、

〔儀式六〕元正朝賀儀〇中略

辰一刻、乘輿出自建禮門、御大極殿後房、少時皇后亦入後房、自此以下可書注、左右近衛次將各一人、率將監將曹府生各一人、近衛各卌人、左右兵衛尉已上各一人、率志府生各一人、兵衛各卌人、更還、自此以下皆可書注、後注後宮供奉、訖女孺十八人執翳三行、就戶前座、以南為上、褰帳內親王二人、威儀命婦四人、各著禮服、相分以次就座、〇中略皇帝服冕服就高御座、命婦四人以內親王以下五位以上為之、服色同威儀、以服禮服分在御前、至御座下立、御座定引還、更供奉皇后御前、干時殿下擊鉦三下、皇后服禮服後就座、〇中略皇太子再拜、〇中略王公百官再拜、

〔儀式六〕元日御豐樂院儀〇中略

掃部寮敷御座於高御座、殿西第二間南面設皇后座、〇中略內膳司預辨供皇帝皇后御饌、主膳監供皇太子饌、大膳職設次侍從以上饌、〇中略皇帝受群臣賀、訖遷御清暑堂、少時御豐樂殿、皇后出御亦如常儀、諸衛服上儀、

〔令義解公式七〕太皇太后、太皇太妃、太皇太夫人同、　皇太后、皇太妃、皇太夫人同、　皇后、

右皆平出、(謂平頭抄出、卽歸當時天子、及闕忌可廢務者、其下條闕字亦准此、)

中宮、　御、(謂斥至尊、故不可復平闕、其闕字之號、若當行上者、不可闕之、猶須平出、謂一人也、三后亦准此、凡明神御字如此之類、非是斥說一人、)　殿下、

右如此之類並闕字

○按ズルニ、此文以下律疏六議ニ至ルマデハ、三后ニ亘レル文ナリ、篇中皇太后宮、太皇太后宮ノ條ニハ、畧シテ載セズ、重復ヲ厭ヒテナリ、

〔令義解公式七〕皇太子令旨式、(三后亦准此式、)

令旨云々

年　月　日

大夫位姓名

亮位姓名

奉令旨如右、令到奉行、

右受令人、宣送春宮坊、春宮坊覆啓訖、留晝日爲案、(謂准勅旨式、亦須印署也、)更寫一通施行、(謂或送太政官、或下被管諸司、)

啓式、(三后亦准此式、)

春宮坊啓

其事云々謹啓

年　月　日

大夫位姓名

亮位姓名

奉令依啓、若不依啓者、卽云、令處分云々、

待遇

宰相加赤絹、侍從疋絹、四位白絹、　大相府御祿、大夫執奉、鷄鳴公卿退出、

〔孝亮宿禰記〕寛永元年十一月廿八日己卯、今日立后、〇後水尾后德川和子被行片節會幷小除目、〇中略　廿九日庚辰、參一條殿幷兩傳奏、令申昨日之御祝儀、就立中宮之儀、自江戸大御所〇德川秀忠御使吉良少將、御大刀馬代銀千枚、自大樹〇德川家光御使大澤少將、銀千枚進上云々、自甲斐、尾張、〇德川義直紀伊〇德川賴宣等中納言殿、銀五十枚宛、自水戸宰相殿〇德川賴房三十枚有進上、　十二月四日甲申、御樽一荷御肴三種、進上中宮御所、兩局同道祗候、　八日戊子、立后節會御訪方可書立之由、自傳奏中院有命、今日局務以下人々三十許來入、各令沙汰、

〔季連宿禰記〕寛永元年十二月五日、自妻許三荷三種、進上中宮御所、又杉原十帖、進權中納言局、

〔萬天日錄〕天和三年正月十八日、松平讃岐守被召也、儲君御方へ〇東山春宮、女御御方へ〇靈元后藤原房子中宮之宣下有之、爲御祝御使、京都へ可被遣之候間、可致用意之由、筑前守被申渡之、老中之面々列座也、〇中略　二月廿日、春宮中宮宣下相濟之間、昨日注進之、依之諸大名今日登城、

〔妙法院日次記〕天和三年二月十四日、今日准后〇藤原房子中宮宣下也、　十五日、爲立后御祝儀一荷大樽二種こんぶ、被進之、禁中へも右同斷被獻也、〇御使坊官中略　十六日、今日行啓始のよし也、〇中略　十七日、行啓御祝義として、昆布一箱被獻、禁中へも右同斷御獻上〇御使坊官中略　一從兩傳來口上覺、明十八日午之刻、東宮樣へ院家衆御禮御座候間、此旨可被相達候、中宮樣ニも御勝手次第御悅可被仰上旨ニ御座候也、以上、二月十七日、

廿四日、中宮より御使來、去頃御祝義被進候爲御返禮、一荷三種來也、

〔令義解儀制六〕凡皇后皇太子以下率土之內、於天皇太上天皇上表、同稱臣妾名、對揚稱名、謂凡臣下面在君所、稱揚皇后皇太子、於太皇太后皇太后、率土之內、於三后皇子上啓、稱殿下、自稱皆臣妾、對揚稱名、自名者、唯稱某甲、不言臣某、其太皇太后皇太后、於天皇太上天皇、及太皇太后皇太后皇太子、相稱之辭、不見令條、待式處分之、

參賀獻進

〔扶桑略記〕二十九後冷泉治曆四年戊申四月十六日丁巳、立女御藤原朝臣歡子爲皇后宮、但無宣命、以宣旨立之、關白教通朝臣之女也、母前大納言藤原公任女也、

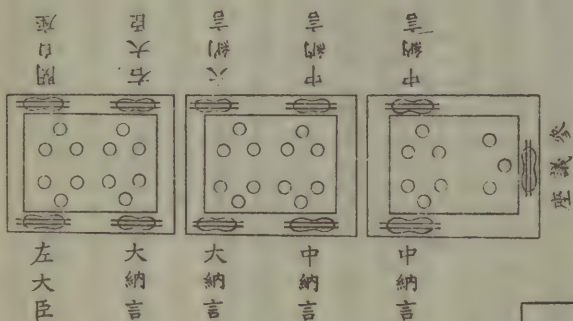
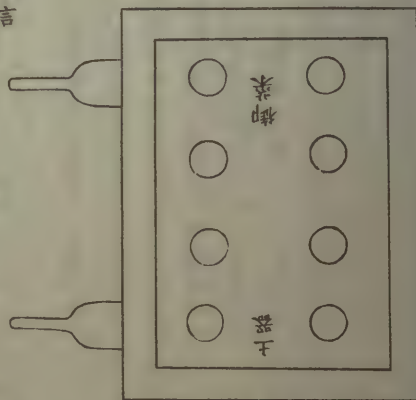
○按ズルニ、立后ニハ必ズ册命アリ、今宣旨ヲ以テセシハ異例ナリ、

〔北山抄〕四立后事○中略王卿侍從相引參賀彼宮、○皇后宮

〔江家次第〕十七立后事

公卿相率參彼宮、令亮奏慶由、歸來曰、聞食悅給、或曰、聞食ツ、皇后著御倚子、白織御唐衣、白羅御裳、御挿鞋、先是上御髮、公卿參入列立再拜、四位侍從以下可在後列、訖退出、亮告有儲由、公卿著座、對母屋東西對座、大臣茵、大納言以下置床机用赤木、四位侍從著南庇座、西上東上對座、五位侍從著中御門北廊座、諸衞將佐著同廊、次坏酌兩三巡、長曆元年關白勸盃、二獻居粉熟、三獻居飯、次居汁物追物等、如恒、執政手長或權亮、奉仕大臣前、四位或亮、次穩座、圓座敷寢殿簀子、上達部進著、召人著砌下、預其數居座、居突重、次勸坏、或公卿取之、次御遊、先取出御遊具、次二獻、次侍從、四位白絹、五位黃絹、諸大夫四位以下取之、召人、疋絹、次給祿、殿上、四位五位取之、先參議料、次納言料、次大臣料、但執政祿、或大夫執之付前駈、大臣白大褂一重、加一襲、大中納言白大褂一重、參議白大褂一領、

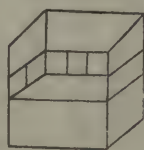
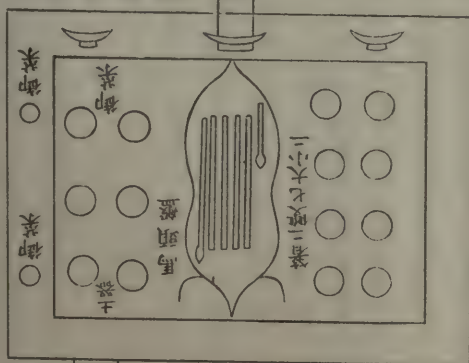
〔小右記〕天元五年三月十一日癸卯、參殿、次參內、今日以女御從四位下藤遵子立皇后、○中略參中宮、同車以左中辨懷遠令啓慶由、大進少進等如之入自中門、於西對巽邊拜禮、此間左大臣以下參入、以余被啓、公卿拜禮間、皇后理髮、白御衣白袴、著給白御裝束、著給倚子云云、典侍恭子理髮云云、上達部參入者、被仰云聞食者、左大臣以下侍從進庭中拜禮、了著西對座、先是寢殿御簾外、以燈臺炬燈、此間主殿女孺等參入、以燈爐供之、其儀以東廂爲公卿座、東面兩、簾不懸、敷高麗端疊、其上敷茵圓座等、右大將之、皆用圓座也、四位侍從座在南庇、敷紫端疊、五位侍從座在南廊、諸大夫座在本藏人所、殿上人座本藏人所、宮侍座本侍所、左右近衞、左右兵衞在門內、左右衞門在門外、皆用平張、上卿座定立机、公卿兩三依座席狹、假召圓座敷東頭、對座大夫濟時勸盃一巡之後、大相府出著座、御座、公卿座上東頭、用菅圓座、南面、即立机、下官獻盃、一巡獻大相國、次居飯、須先居粉熟、而不儲云云、次右中辨獻盃、亦遞勸盃、數巡之後、宮司納侍從祿於韓櫃、舁出庭前、中務少輔致時朝臣唱見參、此間公卿給祿、大褂、二位

コノ二ツノ膳ノ下ニ毯代ヲ布キ、四隅ニ銅ノ獅子ヲ置キ、此ヲ鎮子ト云、毯代ノ押也、凡此打敷ノ上ニ落タル物ハ、又上テ備フ不苦、親王ノ陪膳ハ大夫勤之、然ルニ此度ハ、近衛家幼弱故ニ、次ノ權大夫勤之、中宮ノ陪膳ハ亮勤之、親王并ニ中宮ハ御簾ノ内ニ豫メ供シテ置キ、御簾ノ外ヘ内ノ事不知故ニ扇ヲ鳴シ玉フト、入御ト心得、御膳ヲ撤スル事也、

此臺盤ハ朱塗ナリ、互ニ向合テ食之、陣ノ座ノ儀ノ如シ、大勢アレバ、又臺盤ヲ陪ス、參議ハ横座ナリ、竹ノ黑塗ノ箸一雙ヲ耳土器ニ居エ置ク、此耳土器ハ馬頭盤ノ形ニシテ、略シタルナリ、切臺盤ハ、一人前ニテ、四角ナルモノナリ

テ賜ㇾ祿、大褂衣ハ白キ袷ノ如キ物ナリ、關白殿下ヘハ五位人役送シ、ソレヲ家ノ諸大夫ニ遣ス、是ヲ殿下ノ一覽ニ入テ引ㇾ之ナリ、殿下以下ハ五位役送シテ、直ニ其人ニ渡ス、始メ小袖ノ領ノ方ヲ右ノ方ニシテ出シテ、渡ストキハ左ノ方ニトリナホシ渡ス、直ニ請取、左ノ肩ニカケテ退出ナリ、

立后次第、委在二別冊一

本宮次第、委在二別冊一

○按ズルニ、別冊所載ノ立后次第、本宮次第ハ上文引載ノ江家次第ト粗同ジケレバ略ス、

此大床子ノ御膳四脚内ハ[illegible]黒塗連子ノ如ク、シゲクサニヲ打ツ、縁ハウルミ朱塗一方ニ獅子ノ如クナル物向合テ居ル、紋二ツ宛アリ、凡紋四角ナルモノハ惣テ筥形ト云、丸キヲ蠻繪ト云、南蠻ノ獸ナドノ蟠ル形ヲ畫ニコリ蠻繪ト云カ、此御膳ニアルモ、異國ノ獸、螺鈿ニシテアリ、此本膳ハ横ニスヱテ常ナリ、二ノ膳ハ竪ニスヱ、此供物ハ高橋肥前并ニ濱島内膳各調進、

上也、物召等有之、著外辨乘、大中納言參議以上八人、少納言爲適、六位外記安倍亮盛、史三芳英房、召使等著之、宣命使四辻中納言、小除目陣執筆左大辨宰相、兼賢入眼上卿中御門大納言資胤等也、奉行頭右中將季俊朝臣、大外記師生朝臣、左大史孝亮、節會之儀畢、於中宮御作法有之、大殿祭有之云云、

〔立坊立后記〕天和二年十二月六日、當今○靈元ノ女御藤房子○鷹司教平女准后宣下アリ、上卿ハ勸修寺大納言經慶、辨ハ小河坊城藏人正五位上俊方、奉行ハ油小路右頭中將隆眞ナリ、同三年二月十四日立后ノ片節會ヲ行ハル、內辨ハ鷹司右大臣兼熈、外辨ハ葉室大納言賴孝、勸修寺大納言經慶、今出川中納言伊季、兼宣命使正親町中納言公通、七條參議隆豐、庭田參議重條、奉行ハ清閑寺辨熈定、少納言ハ石井行豐ナリ、中宮職大夫ハ從二位藤原朝臣實通兼之、權大夫ハ正三位西園寺中納言兼敦兼之、亮ハ高倉從四位上藤原朝臣永福兼之、權亮ハ大炊御門從四位上藤原朝臣信名兼之、但依所勞、廣幡左中將豐忠代之、大進ハ小河坊城正五位上藤原朝臣俊方兼之、權大進ハ交野彈正少弼從五位上平朝臣時香、少進ハ豐岡從五位上侍從藤原朝臣弘昌兼之、權少進慈光寺正六位源朝臣寬仲兼之、大屬ハ從五位下中原朝臣職永、少屬ハ正五位下賀茂縣主有顯、權少屬ハ從六位下宗岡朝臣信行也、六日辰刻出仕、除目ノ執筆於御前鷹司兼熈勤之、陣頭ニテハ庭田重條勤之、硯ハ外記ノ硯ヲ用ユ、墨ヲ磨ルニ故實アリ、未ノ上刻一會事終テ、各中宮ノ殿へ參向、東福門院立后ノ節會アリケレドモ、諸式此度ノ如クニハ不調、催馬樂ハ、寬永年中、二條行幸ノ時アリケル以後ノ事也、御椅子御履氈代鎮子大床子ノ御膳、幷切臺盤等ハ出納ヨリ調進ナリ、○中略催馬樂ノ役人、歌物ハ綾小路俊景、幷持明院基時、琵琶ハ今出川伊季、花園公晴、琴ハ白川雅元、和琴ハ四辻公韶ナリ、地下樂人六人階下ニ候ス、笛ハ上越後、山井近江、笙豐主殿、園淡路守、篳篥ハ東儀左衛門、窪甲斐也、三方ヨリ三人宛出座ヲ望申セドモ、二條行幸ノ時ノ樂人ノ位階ニ合セテ、用之給フト聞エシ、庭上ニ

可著座、大辨外大略退出、冊命勅使師季朝臣、取祿人(大夫)被渡御調度、藏人(忠時)殿上人隨其役、外辨內府、忠房、雅親、家良、通方、伊平、經高、少納言爲綱、辨有親、伶人殿下、(笙)左府、(拍子)家嗣、(和琴)經通、(笛)實基、(比巴)盛兼、(篳篥)基平、(箏)宗平、有賚付歌、　八月一日、未一點出門、有參內之志、於東洞院、平宰相車馳過之間、不參內、相共參宮、早速事可始由被催云々、大納言忠房、雅親、大夫殿、中納言家嗣、通方、實基、具實、參議經高、盛兼、爲家、家光著座、殿下(衣冠)令著端座給、(昨日無御著座)座并四位侍從座、偏同一昨日、殿上人兩頭、(頭中將退參、亮被盃進之間、追著座四位侍從所也、)宗平、賴隆、定平、信盛、初獻亮、於中門方取盃、(不見其事)自弘庇經侍從座上參進、二獻(此相公擢笏)揖立奥座、經殿上人末出弘庇、跪坐末間妻戶、西腋柱之程、取盃、(定政、定清子持來、)瓶子皇后宮權大進光氏、經西簀子南第二間進御座北、(持盃揖)勸坏取續酌、拔笏揖之間、坏及雅親卿、起經本路之間、頭中將進受、大辨坏、即復座、居汁物、殿下陪膳保綱朝臣、(納言以下兼居)大辨申上箸下、三獻通方卿大略同、但入殿上人座上妻戶、(南第一間也)持盃不揖、不取杓、經本路復座、次殿下令立給、參議之間經高卿退出了、端兩人(盛兼、家光、)次第ニ退テ下簀子了、殿下自南面簀子令入給之後暫復座、大納言被立之間皆競立、別當具實等不揖、逆出之間皆立了、此間舊臣仲家、頻列役諸大夫云々、昨日忠房卿以下濟々不委聞、初獻亮、二獻經高、(作法偏同今日、)三獻賴資卿云々、氏院參賀云々、

〔孝亮宿禰記〕寬永元年十一月十四日乙巳、自傳奏西三條大納言、就中宮(○後水尾后德川和子)之事、明日六位史召具可來云々、一條殿立中宮、依上卿兩局參之、(○中略)　廿四日乙亥、就中宮事參一條殿、窺申之事等有之、參中院中納言、中宮方宣旨等之事、(封戶、官符、從三位中宮職之事、三通文書先日令懸御目、)今度不及御沙汰之由有命、

廿六日丁巳、禁中立后御習禮有之、(○中略)　廿八日己卯、今日立后被行、片節會并小除目、內辨右大臣、(一條殿兼遐公)外辨中御門大納言、(資胤)日野大納言、(資勝)廣橋大納言、(兼光)四辻中納言、(季繼)白川宰相、(雅朝)廣橋宰相、(兼賢)柳原宰相、(業光)西洞院右衞門督、(時直)次將左、水無瀨中將兼俊、中山中將元親、藤谷中將爲賢、北畠親顯、右庭田重秀、下冷泉爲尙、姉小路公景、庭中鳥瓶子不置之、外辨昇殿無之內辨計堂

（居了後起了、）申上下箸、又居汁、申上下箸如恒、次三獻、（權大夫時忠卿、瓶子殿上五位、）次居菓子、次欲著薯蕷粥、而左大臣云、可略之、仍不居之、殿上人座一獻、（大進基親、瓶子次五位、）二獻、（權大夫光雅、瓶子同、）三獻、（權大夫宗賴、瓶子同、）次殿上人起座了、此間敷啓陣座、又立黑柹机、不居飯、遲々也、次大夫召宮司、宗賴參上、仰可召亮之由、則重衡朝臣參候廣庇、大夫仰云、啓陣將召、（或曰、啓陣將可御云々、可尋也、）亮退下、次啓陣將佐、左近中將定能朝臣、右近少將隆房朝臣、右衞門權佐光雅、左兵衞佐光範、右兵衞佐兼能等著座、（各蒔繪緌、壺胡籙也、）次欲居飯、爰大夫怒仰云、先可居者、兼可居之、不然者二獻之後可居、甚以奇恠、即進歸了、（尤可然、）行事基親失錯歟、次一獻、（權亮維盛、雖年少十四云々、作法優美、人々感歎、瓶子次五位、）次二獻、（權大進基親、瓶子同、）居飯汁、（次五位、）次三獻、（權大進光憲、起啓陣座勤之、瓶子同、）次給祿、（四位可給大褂云々、而皆單重也、）宮司等取之、將佐取祿退出了、次余退出、此後事不見及、依爲他氏、（○藤原氏ナラザルヲ云フ）御寺氏院等參賀不可有云々、又有八幡奉幣定云々、其事大夫可行也云々、打出欵冬匂也、

〔明月記〕嘉祿二年七月廿九日壬午、皇后册命日也、（○中略）申刻內裏事始、中宮（○後堀河后藤原有子）爲皇后宮、從三位長子（○後堀河后藤原氏）爲中宮、左大臣、（內辨）內大臣、大納言忠房、雅親、中納言家良、家嗣、通方、經通、實基、具實、賴資、參議伊平、經高、隆親、盛兼、爲家、家光、（四位宰相、在三位中納言後、如例、）列立了、召賴資卿、放列參進東階、揖昇立內辨後口揖笏、內辨賜宣命、宣命使拔笏、右廻副南檻下階揖、立軒廊東二間北方、內辨右廻、經簀子副北欄下階揖、於西第二間揖、宣命使出同間、自簀下東行、下東一間砌步出、歷大臣後如例、宣命使步出、當日華北扉揖、西折練去、宣命版五尺許立、宣制訖左廻、至于四位宰相前程練、（其邊懷中宣命、）經四位宰相前加本列、內辨以下退出、（左廻內辨二丈許練、練樣神妙歟、）內府以下不練、經下簀前、通方（卿）經高卿左廻、經下簀後、（於土御門內裏、有此儀之由、各陣之云々、）具實卿右廻、經下簀後、（後日云、我モ左廻了、）家光朝臣又左廻云々、引陣將、左資季、資俊、實光、實清、右實忠、有教、□□宮司大夫兼經、（遲參內、）權大夫實基、亮範輔、權亮定雅、（入道右大臣子、侍從、）大進光俊、權大進範賴、（亮子）少進經氏、（經高子）六位、（佐清子）大屬資朝、□□四位侍從、（宣經、實忠、實俊、顯平、時賢、伊成、賴宗平、親長、賴隆、資俊、五位、行伊、忠能、定、）啓將定平、有教、信時、信成、親氏、顯氏、召仰上卿、（通方卿、）於本宮列立庭中、拜後昇中門各退出、于時及夜半、依座狹不

從座在南庇、五位侍從座在中門廊、如去仁安儀云々、以傳說所記也、

宮司

大夫權大納言藤原朝臣隆季　權大夫權中納言平朝臣時忠

亮左馬頭平重衡　權亮右中將平維盛（重盛卿男）

大進勘解由次官平基親　權大進左兵衛佐藤原光憲

權大進前伯耆守藤原宗頼　少進佐渡守藤原重頼

權少進正六位上源兼綱（頼行子、頼政養子、女御之時勾當也、）　年預（右衛門志検非違使資成）

御遊召人

琵琶（左大將）拍子（宗家卿）箏（兼雅）笛（成親）和琴（忠親）篳篥（定能朝臣）笙（隆房朝臣）付歌（實宗朝臣、維盛、）

曲

呂　安名尊（二反）　鳥破　席田（二反）

律　伊勢海　萬歲樂（此間侍從給祿）　三臺急（數反）

此間公卿給祿、（先宰相、次中納言、次大納言、次大臣、）　十一日庚戌、今日立后之處第二日也、左大臣左大將以下濟々參入云々、又御書使、（參通朝臣、件御書紅薄樣、有上裹薄樣云々、永久第三日有此事、今度依日次宜、今日仰之、）　十二日辛亥、此日未刻參獻（○獻恐殿誤）中宮、（同院女院居）人々未參、仍參院御方、殿上隆季卿獨候之、暫言談、申刻又々參集、次下官及隆季等著座、

○中略　次左大臣內大臣參上、左大臣著端、內大臣著奧、便宜頗惡、仍下官移奧、內府著端居替了、

今日座儲、對代南面三箇間對座、敷高麗端疊、（有弘筵差筵等、）立赤木机、備饗饌、（大臣頗不居飯也、）爲公卿座、同南孫庇（同數筵）迫南柱、敷紫端疊二枚、立黑柿机、備饗、爲殿上人座、（東上一行、）中門廊副西壁、敷紫端疊三枚、爲啓陣座、（北上一行、但隨期數之、）

先一獻亮重衡朝臣、（瓶子地下五位、）二獻左大辨實綱、（瓶子殿上五位、）次居飯、（居飯手長四位也、經家朝臣勤之、殿上人也、）次居汁、（手長不起座、待

上了、付藏人辨令內覽、殿下令候御前給故歟、則返給又被奏、仰云、令清書則召內記返給、令進清書如初以藏人辨令內覽、後又奏覽、右府召大外記被問諸司具否、右大將〇藤原忠家已下向外辨、此間陰雲俄掩、小雨間灑、可用雨儀之由、人々議定、〇中略此間主上出御晝御座、御直衣殿下〇藤原忠實令候給、敷圓座二枚、如女叙位時、依御出告右府、入從殿上上戸、經年中行事御障子北並簀子敷、入從御座間著圓座、敷圓座之間也依御氣色召男共、藏人辨參、仰硯續紙可持參之由、則入柳筥入從執筆座南間、置大臣座前、依仰被任宮司等、宣命ニハ皇后ト雖書、除目ニハ被書中宮職也、又太政官謄奏字不被書也、彼一家皆被書、而今不被書如何、〇中略或人談云、寛平以後、大納言姫立后仕人、小一條大將姫皇后宮娍子、與此中宮也、誠希有之例、大幸之人也、

〔玉海〕承安二年二月十日己酉、此日有冊命皇后〇高倉后事、女御徳子〔平清盛女〕爲中宮、以皇后宮爲皇太后宮、以中宮爲皇后、太皇太后不御坐也、下官依遠忌不參仕、後聞內辨左大臣〇藤原經宗宣命草並清書、乍在陣座被奏之頭辨云云、宣命使別當成親卿、永久別當忠教勤仕之例云々外辨上首左大將〇藤原師長云々、宣制了退出之時、左大臣不被練云々、宮司除目之時、執筆并清書上卿執筆左大臣、清書上中納言、許被召直廬、寛治五年立后幼之時也、郁芳門院、之時、大臣以下豫參直廬、仍今度人々存其旨之間、無召立可尋事也、宮司等拜了則參本宮、先是宣制之後、勅使頼實朝臣參本宮、而大夫除目以後參入、被相待彼之間、數刻候云々、下除目並仰啓陣事、左大臣被讓源中納言、左大臣以下參本宮、出內裏之間有出立事云々、以二條町爲陽明門代、北南門幔差去東引之、而門出立之朝撤件前幔云々、于時左大臣不居陣降自中門、人々相率少納言辨外記史以下、在左衛門陣代內、官掌召使等進出、大臣被留御前之時、相代可參之故也、出門之後大臣被留之、相代召使前行追如常、至二條町、左大臣將以下雁行、路北大將迫者路東面立、仍以下重立、或第一人傾倚北東面、其以下傾左ヌザカヒテ、坤方ザマニ雁行云々、大臣立還揖歸出了、其後人々次第乘車、主上御簾中、

本宮儀、先宮司中慶、次勅使被召、大夫取祿、大褂次勅使藏人參入、權大夫取祿、女裝束、次左大臣進前庭再拜、攝政不被立拜次上卿著座、攝政著端云々一獻攝政、左大將、二獻、左大臣、內大臣、三獻、源大納言、大夫、永久一獻、上﨟二人被取之、尙不心得事也、尙一獻大夫權大夫可取之也、然而代々不定、仍今度被遂永久例云々、打出歟冬匂云々、四位侍

〈左手給之〉納言搢笏進寄給之、右廻下殿侍、大臣下自殿就列、然後就宣命版、宣制一段、群卿再拜、又宣制一段、群卿又再拜、納言右廻就本位、大臣以下退出、此間仰藏人則隆差出納、令奉中宮大床子二脚、師子形二頭、插鞋一足、天皇還御本殿、先是右大臣命云、今日依當衰日、不可候除目之由可申左大臣者、但中案內了、于時左大臣、令權中將〈成信〉密告源大納言參中宮、若依不可堪除目歟、有召參御前、仰云、可有除目、召右大將藤原朝臣、予奉勅、召藏人所菅圓座一枚、鋪南之庇、〈但不垂御簾〉于時殿司供燭、主上出御、召人大藏卿〈正光〉參入、依仰召大將〈此間大臣奉進經房中將於中宮、被申可立大床子置中師子形、並可立倚子事等也〉次召紙筆、〈左大臣從申上、代獻上之也〉除目訖大將退下、大夫源時中兼、權大夫藤原齊信兼、亮藤原正光兼、權亮源則忠兼、大進大江清通兼、權大進源高雅兼、少進橘忠範兼、藤原陳泰兼、大屬丸部兼善兼、少屬飛鳥戶光正兼、權少屬、左大臣被奏云、以橘朝臣良藝子〈院辨命婦〉爲宮內侍、奏聞了亦被仰六衞啓陣、依例可令遣之由仰右大臣、大將暫立壁後、大臣召仰諸衞、退出之後可著陣令清書也、此間申左大臣參中宮〈大臣以下、清書之後可被參中宮也〉、因御消息相過藤三位問理髮事〈被奉仕可宜之由、內內相示也〉中宮御寢殿東對南放出四間、母屋南北行東西對座鋪高麗端、上敷上鋪圓座、爲參議以上座、〈並北上、親王著東座、鋪錦端疊、大臣著西座、及納言以下參議以上座、用高麗端〉南廂鋪兩面端疊、爲四位侍從座、南廊鋪紫端疊、爲五位侍從座、皆豫備饗上饌、東孫廂儲殿上人座、〈予仰侍宮藝信理令奉仕〉銚頭之諸卿被參西中門、令亮正光朝臣啓事由、〈拜賀侍從相從〉訖次第著座、次彈正尹、太宰帥兩親王著座、事了召於御前、又御下召管絃者、于時鷄吻頻飛、鳳管數鳴、萬春之樂未央、一夜之漏將曙、事了賜祿有差、與藤中將同車歸宅、皇后宮爲皇太后宮職、中宮職爲皇后宮、新皇后爲中宮、

〔中右記〕永久六年正月廿六日己酉、今日女御立后也、〈○中略〉以藏人辨實光被仰下云云、女御從三位藤原朝臣璋子可爲中宮〈○鳥羽后〉由可令載宣命者、〈頭辨今日依本宮沙汰不參內、仍被仰下也、〉右府〈○源雅實〉召大內記永實仰作趣、則進草、〈入筥〉右府以作草被見人々、予取之披見之處、入新后御名也、申云、草案不入后名、清書之時可入之由見舊記如何、〈永承元年被結事也〉但別當被申云、或有入之時者、予以下不見、早可返奏之由右府被示、予返

絹十疋、少貳兵衞命婦等候之、不知給物、可尋記、入夜罷出、參大夫殿、爲令申慶、依被參宮罷出、　十三日乙巳、參左府、令申慶由、依御出來以罷出、次參東宮、令啓慶由、拜了付殿上簡、頃之參中宮、今日召著諸衞佐等於侍所給祿、判官以下直給、（但例第四日早朝給之、明日依當御衰日、今日給、今夜祗候、明日可罷出之由、令仰之、）女房等給祿有差、又宮主裝束史官掌史生等同給、所所饗饌如昨、給祿色目、所所饗等有別紙、今日初啓時刻、又有名謁、入夜參內、籠候御物忌、　十五日丁未、參中宮、大夫同被參、被定所所別當預下部等、又定女房局遠侍者、大番侍者藏人等侍所名簿等同下給、興福寺僧等參入、賜祿有差、　廿三日乙卯、參中宮、今日始廳事、申時宮司等相率始行請印政、（件印以書博士可令書其文、而透行以直講賀陽毅明、令書之、中宮職印者、給內匠寮令鑄、櫃子同寮奉仕、）廳座儲酒饌、大夫不著、於便所、大夫相共定、遷御大裏之雜事、侍所女房簡、今日始之、女房日給女史奉之、入夜退私、

〔權記〕長保二年二月廿五日癸酉、此日立后、丞相命云、今日御使前々給親昵人云云、（天祿二年謙德公、天祿四年閑院大納言、天元元年右衞督、皆后兄弟、）亦大床子師子形等、宣命了卽可給者、參內、（一條院）南殿裝束准紫宸殿供奉、但間數減二間、然而御簾西間、立內辨几子、如例、被仰宣命事、奏云、以四條后（○圓融后遵子、）爲皇太后、宜歟、亦被仰先先行事、亦中御使可遣之事、依仰遣召權中將、（成信）頃之參入、又暫之左大臣被參、宣命刻限酉二刻也先之右大臣被參、有召參昇御座、仰云、以皇后爲皇太后、以女御從三位藤原彰子爲皇后之由可仰、卽刻右仗仰右大臣、右大臣移南座、召官人令置膝突、令召內記、卽大內記宣義朝臣參、奉仰以草覽、大臣參御所、（殿上小板敷戶外、）令余奏之、仰云、依草、（件草依左府命、豫仰宣義朝臣令書儲之、）次出御、次右大臣於便所亦被奏淸書、（此度若參母屋御簾下、可被付侍歟、）返給之後、近仗陣階下、內侍臨檻、大臣參上、闈司出、（不開門、西中門本自開也、）大臣召舍人、（二音）大舍人於中門外稱唯、少納言藤原朝臣朝典代就版、大臣宣刀禰召、朝典稱唯出中門外、召大納言源時仲卿、藤原道綱卿、權大納言同懷忠卿、中納言平惟仲卿、藤原時光卿、參議藤原誠信卿、同公任朝臣、同忠輔朝臣、齊信朝臣、源俊賢朝臣等、參入就標下、（四位以下不列入、）大臣召中納言平朝臣、（詞云、中乃物申司乃平朝臣、其爲長官者、不召上字、仍只召ム官乃、而今稱司乃、繆案也、）平朝臣稱唯、揖而離列、斜行經南殿西南渡殿昇殿、立大臣左方長押下、大臣給宣命、

亮不注其人、即書一紙加封被奏云、宮下司（○一本作宮司下）如此、至大夫可在勅定者、以下官可爲亮之由、以右中辨被奏也、被仰云、大夫事猶以定申者、此間天皇出御南殿、（酉時一點）内侍喚入、左大臣著靴參上著座、諸衛開門、内辨召舍人二聲、稱唯少納言師衡代參、内辨云、召刀禰者、稱唯退還、大納言爲光以下諸大夫參入、内辨召中納言文範、（民部卿）稱唯參上、給宣命立東軒廊、其間内辨大臣起座加列、宣命使加列、宣制如式、群臣拜如式、拜了左大臣以下出自承明門、諸衛門閉門、天皇還御、大相府被參、被候殿上奏云、皇后宣命慶、前後不覺、頻戴朝恩、不知所爲、被仰云、夜依深更不召御前者、唯被仰聞食由、大相府被奏云、右大將藤原朝臣、（濟時）中納言朝臣、（保光）共是可堪仕者也、濟時者、爲氏公卿之内、又爲上﨟、保光者爲無□□上且爲傍親、此間可在御定者、仰云、猶可定申者、被奏云、又如初奏、仰云、右大將藤原朝臣爲上﨟、以彼可爲大夫者、大相府被退出、（被參中宮）云云、仰云、依例壁□等可令參中宮者、即仰左大臣、傳聞召諸衛佐於膝突座御、仰云云、（無佐之時、以外記令仰云云）召左大臣於御前、被定中宮職司、（大夫右大將濟時、兼亮下官、兼大進散位源輔成、少進爲政、正信、大屬式部大錄肥田維延兼、）頃之退下、其後參射殿邊、被奏清書、無維延兼字、仍被仰註兼字、又重於陣被奏、右大將下官、於射殿以藏人宣孝令奏慶由、（依無近衛府、以藏人令奏、）下官即改註名所於殿上簡大夫下、（○中略）今夜奉令旨、以藤詮子爲宣旨、（是皇后大夫妻、中宮姉、）以藤原淑子爲御匣殿別當、（參議佐理妻）以藤原近子爲内侍、（信濃守忠孝妻）以下官及右中辨懷遠爲侍所別當、大進輔成朝臣奉令旨、男女房簡今夜始書、宣旨内侍著簡、依無先例不著、御匣殿別當少將乳母（夏峯美子）同著簡、下官、右中辨侍所長藤原長忠、同望弘等同著簡、而以四人付籍、頗有詞忌、仍加阿波守公任朝臣侍所長、今夜被下令旨理御髮典侍泰（○泰一本作秦）子有給物云云、憶不知色目、或說云、絹云云、可尋問之、今日午時許、召侍從公任朝臣、爲中使被奉中宮、有給祿女裝束、十二日甲辰、參殿令申慶、次參宮令申北御方、（○皇后母、賴忠妻）今日勸學院學生等參入於宮、先下令旨於啓陣入學生、令大進輔成朝臣令啓慶由、傳内侍令啓、仰聞食由、奉拜了給匹絹、（或時給贄、或時事依倉卒不被儲贄、職事者白匹絹、學生赤絹、□□大六位、或取祿給之、）畢又致拜禮云云、少將乳母從昨日祗候、今日給平綾六匹絹十匹、納通宮、陪從女中給

〔日本後紀嵯峨二十四〕弘仁六年七月壬午、立夫人從三位橘朝臣諱子嘉智爲皇后、參議宮內卿正四位下藤原朝臣緒嗣、進就閤門宣命、其詞曰、天皇大命止良萬勅布大命乎親王等臣等百官人等天下公民衆聞食止宣、食國天下政波獨知倍伎物爾波不有、必母斯理幣乃政有倍止之自古行來留事、皇后定氏志閫中乃政波成物止毛奈常毛所聞看行須、故是以從三位橘夫人乎皇后止定賜布、故此狀乎悟而供奉止勅布天皇御命乎衆聞食止宣、贈皇后父正五位下橘朝臣淨友從三位云云、從四位上藤原朝臣貞繼爲皇后宮大夫、從五位下紀朝臣繼足爲亮、

〔小右記〕天元五年三月五日丁酉、殿下○藤原賴忠被命云、皇后○圓融后遵子、賴忠女、事未承其日、今日吉日若可然者、令蒙仰定申可立皇后之日、如此之事、若及迫事定難成歟、以之爲思、早參內以此旨可洩奏者、參內此趣被仰云、事既一定、早可奏立后之日者、參式殿下被參式、○式ハ中宮職ナルベシ、申此由、即著給朝服、召御前、親執給祿女裝束一襲、加織物袿、被奏云、○云一本作之、年來頻蒙朝恩、已昇高位、日夕之思○思一本作恩、朝恩難報、重及今日更戴此仰、載悅之深不知所爲、朝恩餘身前後不覺者、給祿纒頭、下庭中再拜、此間大相府、下自長押座、歸參內奏此由、即大相府參射場殿、以余○藤原實資、賴忠姪、被奏慶由、被仰聞食之由、著劒傳綸旨舞踏了、參上殿上、被仰趣如前、被仰云、須召御前仰此由、而亂間不能召御前者、大相府退下被仰云、以弘徽殿息所可立給皇后、供奉所司、且可誡仰之由可仰左大臣、至于冊命之日追可仰者、左大臣依直物事候左仗、即以綸旨仰了、候陣公卿等參弘徽殿、被申皇后慶、○中略、今夜於式被定立后雜事、又以光榮朝臣被勘申立后日時也、勘申云、來十一日癸卯、時酉二點、○中略、十一日癸卯、參殿次參內、今日以女御從四位下藤原遵子立皇后、其儀南殿御裝束、略如相撲召合儀、垂御簾、南廂東第三間立內辨兀子、又不立宣陽殿兀子、左大臣被奏云、可奏宣命草、依內裏式文可有歟、將可有鈴○一本作論、詞歟者、被仰云、依前前例可載鈴詞者、左大臣參射場殿、以余被奏宣命草、御覽了返給、此間大相國被參式、依召參入、以余被書出中宮職司等、大進正五位下源輔成、少進正六位上藤原爲政、少進正六位上藤原正信、大屬正六位上肥田維延、大夫

府將佐各一人、

本宮儀略不記、三ヶ日參入裝束如先、至第三日、著中門廊座、有盃酌、其後給祿退出、不拜

〔續日本紀十聖武〕天平元年八月戊辰、詔立正三位藤原夫人爲皇后、〇聖武皇后壬午、喚入五位及諸司長官于內裏、而知太政官事一品舍人親王宣勅曰、天皇大命良麻止親王等又汝王臣等語賜部止勅久、皇朕高御座爾坐初由利今年麻氐六年爾成奴、此乃間爾天都位爾嗣坐倍伎次止爲氐皇太子侍豆、由是其婆婆止在須藤原夫人乎皇后止定賜、加久定賜者皇朕御身毛年月積奴、天下君坐而年緒長久皇后不坐事母一豆乃善有良努行爾在、又於天下政置而獨知倍伎物不有、必母斯理幣能政有倍之、此者事立爾不有、天爾日月在如、地爾山川有如、並坐而可有止言事者汝等王臣等明見所知在、然此位乎遲定久米豆良波刀比止麻爾母己我夜氣授留人乎波一日二日止擇比十日廿日止試定斯止伊波婆許貴太斯伎意保伎天下乃事乎夜多夜須久行無止所念坐而、此乃六年乃內乎擇賜試賜而、今日今時眼當衆乎喚賜而細事乃狀語賜布止詔勅聞宣、賀久詔者挂畏支於此宮坐氐現神大八洲國所知倭根子天皇我王祖母天皇乃始斯皇后乎朕賜日爾勅豆良久女止云波婆美夜我加久云其父侍大臣乃皇我朝乎助奉輔奉氐頂伎恐美供奉乍夜半曉時止休息無久淨伎明心乎持氐波々刀比供奉乎所見賜者、其人乃宇武何志伎事歟事乎、遂不得忘、我兒我王過无罪無有者捨麻奈須忘麻奈須負賜宣賜志大命依而、加爾加久爾年乃六年乎試賜使賜氐此皇后位乎授賜、然毛朕時乃末爾波不有、難波高津宮御宇大鷦鷯天皇、〇仁德葛城曾豆比古女子伊波乃比賣命皇后止御相坐而食國天下之政治賜家利、今米豆良可爾新伎政者不有、本由理行來迹事曾止詔勅聞宣、既而中納言從三位阿倍朝臣廣庭更宣勅曰、天皇詔旨今勅御事法者、常事爾波不有武都事止思坐故猶在倍伎物爾有止爲夜思行之氐、大御物賜久止宣、賜親王絁三百疋、大納言二百疋、中納言一百疋、三位八十疋、四位三十疋、五位二十疋、六位五疋、內親王一百疋、內命婦三位六十疋、四位一十五疋、五位一十疋、

標、〈經大臣與納言列間、立上〉宣命使著版、〈自東二間出、曲折揖如常、〉每宣制一段、〈群臣再拜、〉又一段、〈群臣再拜、北山抄曰、拜舞云云、崇依新儀式論國儀、雖延喜三年立太子日記、雖叙位時親族拜舞、而六年之例多再拜也、〉宣命使經列西、復本位、〈或從東邊復、〉王卿退出、主上還御、次令藏人召大臣、〈攝政於直廬行之、參議執筆、〉大臣先候殿上、依重召經簀子敷著御前圓座、次召五位藏人令進紙筆如恒、大臣依仰書宮司除目、事訖退下、於陣令參議清書、〈用折堺、公卿一枚、非參議一枚、〉次奏聞如恒、次召式部給之、〈外記三度申、如恒、丞立小庭、上卿召曰末宇古、丞取文返立、又仰萬計當、若被加任武官者、亦同其儀、〉先是清書被奏之後、職司公卿并亮等奏慶、〈弓場殿〉拜舞、次參彼宮令奏慶再拜、了各行事、此間勅使次將參本宮、申宣命由、先敷座〈茵帖〉令著之、公卿一人執女裝束給之、〈長曆元年三月春宮權大夫取之、永承六年二月十三日、大夫取之、使下地再拜退、〉藏人令持御椅子一脚、〈紫檀地螺鈿、白織物數物、加白地紫文繧繝、毯代錦子四枚、〉大床子二脚、〈座蒔繪螺鈿、高麗褥、加圓座一枚、〉師子形二、御插鞋一足、〈盛柳筥、或加御膳具銀器、並御臺盤等、〉其儀如前、〈公卿一人執女裝束給之、又給小舍人祿絹二匹、〉藏人下地再拜、退立御椅子、〈撤御帳南面茵帖等、不撤唐匣等、〉即立於晝御座跡、御插鞋〈置鏡臺下、〉師子形〈立御帳南面左右、〉大床子二脚立帳東頭、〈東西妻、其上敷圓座一枚、〉炬火屋、〈立於庭中、〉修理職時簡、御膳棚、〈以上立於中門腋、〉大臣被仰六府啓陣可參由、〈或依仰、〉大臣召膝突一枚、〈次第仰之、先左右近將、次左右衛門佐、次左右兵衛佐、〉六府各率官人以下一員、近衛等十人參彼宮、〈中略〉○神祇官奉仕大殿祭、〈或先是奉仕之宮司一人引道、可令本仕、〉供御膳、〈采女六人、經簀子自階次間供之、到御簾下付女藏人、女藏人六人、傳取之、供大床子前、御臺盤有臺、〉本所上臈女房爲陪膳、皇后經御帳後御大床子、立御箸入御、次撤之如恒、次又供夕膳、又供御手水、〈在臺、於大床子供之、〉下格子後、侍者名謁奏時、〈近代例不定〉被補御匣殿宣旨內侍、〈以上大夫仰亮、亮侍知其人、〉補侍職事以下女房、衝重所所屯食、

〔羽林要秘抄〕立后〈縫腋蒔繪劍、相具綏壺胡籙靴等、不必取笏、或臨期卷纓、或自亭卷纓、或懸綏、隨身壺垂袴、〉時刻渡御南殿、〈或不渡御、〉左右近衛陣階下、〈不立胡床、帶弓箭、著靴或淺沓、〉內辨著堂上召舍人、外辨公卿列立、宣命使宣制、諸卿退下、次將退下、〈自上臈退、左近左廻、右近右廻、未事終退者、左近右廻、右近左廻、以後垂纓撤弓箭、〉次宮司除目比、差近衛次將一人、被申冊命由本宮、〈除目大夫參宮後可參著、〉申事由、依召升自中門著座、賜祿降地再拜、出中門退、被仰六府將佐可候啓陣由、上卿著陣敷加軾一枚、先召左右次將、垂纓綏帶劍取笏淺沓、入宣仁門著軾、〈經柱外砌內、〉上卿云、其宮啓陣仁候、微音稱唯退下、〈左廻、經下臈後、〉衛門兵衛又如此、參彼宮之時、卷纓綏帶劍壺胡籙、著中門廊座、〈不必然歟、〉六

卿出、外辨大臣著靴、取副件宣命於笏、進立軒廊、（西一間、不必宜陽殿兀子、）著内侍召人、即參上著南廂第二間（西柱下）兀子、（北面）次開門、闈司著座、大臣喚舍人、刀禰參入儀如常、（延喜四年、依天長承和例、不召舍人、少納言引列云云、是違式也、）大臣召中納言一人（任大臣日召參議）授宣命、（讓國式云、執宣命文、乃定堪宣命參議以上一人、付內侍奏、任參議以上式云、大臣預簡堪宣命者定云々、近例更不奏、於陣座示之、）受之下殿、立軒廊西第一間北邊、（或立二間、東一間云々）出大臣退下就庭中標、宣命使出自東一間就宣命版、（內裏儀式、開門後置作版、而儀式立標之次預置之、前例又如此、）宣制一段、群臣再拜、又一段、訖拜舞、（內裏儀式、再拜六々、而儀式讓國儀拜舞者、其立后太子等式、止再拜、又任大臣式如元有正文、然則立后太子儀、准讓位可有拜舞歟、仍檢舊例、多用再拜、但延長三年立太子日、拜舞由見吏部王記、今按、如敘位任官皆有親族拜舞、立后太子等日、何無此儀乎、任大臣無拜舞也、）宣命使經列西復本位、（或從東就）親王以下退出、即還御、任宮司、訖大臣召六府佐、仰可候啓陣之由、（鋪膝著二枚、左右一度召仰、天德二年例）也、王卿侍從相引參賀彼宮、（行啓儀、大路同行幸、或御牛車、貞觀年中也、皇太后向大原野社、御牛車、藤氏大位爲御車副、此社爲氏皇后參拜、依本社遠所草創也、）立太子儀同之、但衛門陣不候、上卿仰近衛次將如立后、仰兵衛佐之啓陣令候、即是尋常所候依佐不參也、未補帶刀之前、近衛陣猶候、

康保四年諒闇間立后例、王卿不著吉服、有纓緌、但入內日无其事、諸衛舍人等不知案內、稱頸冷由云云、

〔江家次第　十七〕立后事

前一日、大臣奉仰云、外記令誡所司、又召內記令作宣命、以上近代或當日早旦行之、大臣參入奏宣命草、次奏清書、（返給之後、令持內記令候、）次大臣於陣座、豫定宣命使中納言、（公卿螺鈿劍、隱文帶、不著魚袋、）主上御南殿、（或不渡御）引陣、（近仗、將縫腋袍、壺胡籙、蒔繪劍、著靴、外記亦同、但檢非違使佐、平胡籙、內裏儀式、近仗服中儀云云、申候由、上宣令候之、）大臣於陣後着靴、取副宣命於笏、進立軒廊、內侍臨檻、內辨參上著南廂兀子、（裝束記文、新儀式等同、東方三間東柱側、西宮四條抄等同、東第二間西邊、代代例亦以不定、但多依後說、）開門（開承明門建禮門、不開撤門、）闈司著座、大臣召舍人、（二音）大舍人稱唯、少納言着版、大臣宣刀禰召世、外辨王卿參入立標、（出自列前、入軒廊東二間、於東階下揖、經東階、並簀子數、立二間東柱下、）大臣給宣命、給之退於東階下、歸向揖、立軒廊西第一間北邊、（或二間、天德二年立后日、師氏卿立二間、同四年任大臣日、雅信卿立一間、）大臣退下、（於東階下、歸向揖、使揖自東二間出、）又與宣命就庭中

參入、五位已上在承明門内、六位已下在同門外、式部録稱容止如常、訖宣命大夫進就版宣制、其詞曰、天皇大命止其萬勅布大命乎親王等百官人等天下公民衆聞食止宣、食國天下政波獨知倍伎物留波不有、必母斯理倍乃政有倍之、自古行來留事皇后定天之圖中乃政波成物止毛奈常毛所聞看行須、故是以其色其位某乎皇后止定賜布、故此狀乎悟而供奉止勅天皇御命乎衆聞食止宣、訖各退出、後日早朝、外記召式部省、仰可令集會刀禰之狀、時刻親王以下參入、五位以上在北中門外、六位以下稍退在後、于時内侍一人進宣云云、五位以上六位以下稱唯、拜舞退出、

〔新儀式五臨時下〕册命皇后事

前一日大臣奉勅、令外記召式部省、仰明日可令集會刀禰之狀、又召内記令作宣命、當日早旦、大臣參弓場、以宣命草付藏人令奏之、覽訖返給復座、令清書重奏覽返給候之、所司裝束南殿、延喜廿三年、懸御簾、立御屛風、供大床子南廂第三間迫立、兀子一基、即在東面御簾前、時刻出御、左右近仗即陣階下、内裏儀式、近仗服中儀服、内侍臨東檻喚大臣、大臣參上著兀子、次開門、闈司相分座承明門左右腋、中務丞入置版位、次大臣喚舍人、少納言參入就版、大臣仰可召大夫等之狀、稱唯退出、次親王以下五位以上、參入列立庭中、六位以下在承明門之外、大臣喚中納言一人、稱唯東度昇自東階、就大臣後、進受宣命退下、大臣起座下殿就庭中木位、此間承詔者候東軒廊北邊、次宣命大夫進就版宣制曰、現神止大八洲所知須和根子天皇詔旨止其萬勅命乎親王王公百寮人等天下公民衆聞食止宣、群官稱唯再拜、訖更宣云、食國天下政波獨知倍支物留波不有、必之毛後倍乃政有倍之、自古行來留底事皇后定氐志圖中乃政波成物止毛奈常毛所聞志行須、故是以某乎皇后止定賜布、故此狀悟而供奉止勅布天皇命乎衆聞食止宣、群官倶稱唯再拜、此間宣命大夫就本位、訖親王以下退出、即以還御、大臣依召參上、有除目儀、任中宮職司也、延喜二十三年例也、事訖退下、大臣又參射殿令奏除目清書、

〔北山抄四〕立后事

前一日、大臣奉勅仰外記令誡所司、大臣奏宣命、奏草及清書如常、返給内記令候陣座、訖御南殿、懸御簾、近仗陣階下、立陣、王

立后儀

葉二に、近江大津宮御宇天皇〇天智 崩之時、大后奉御歌、また天皇大殯之時、大后御歌、また明日香清御原宮御宇天皇〇天武 崩之時、大后御作歌など見え、又伊豫國風土記に、天皇等於湯幸行降坐五度也、以大帶日子天皇〇景行 與大后八坂入姫命二軀爲一度也、以帶中日子天皇〇仲哀 與大后息長足姫命二軀爲一度也云々とある是らなり、さて上件の如く、古に大后と申せしは、當御代の第一なる御妻なり、然るを萬の御制、漢國のにならひ賜ふ御代となりては、正しき文書などには、當代のをば皇后、先代のを皇太后と書ることゝなれり、されど口に言語、又打とけたる文などには、奈良のころまでも、猶古のまゝに當代のを大后、先御代のをば大御祖と申せるを、〔されば書紀などに、皇太后、皇太妃、皇太夫人などゝあるをば、皆意富美意夜と訓べし、古の稱は然なり、まことに大御母に坐を、伎佐伎美賣などいはゞ、申まじき理なり、然るを書紀清寧卷に、皇太夫人を意富伊伎佐伎と訓るは、古に叶はず、皇極卷に、天皇の御母吉備姫王を、吉備嶋皇祖母命とあるも、此が古の稱なる、又續紀九に、藤原夫人を、宜文則天皇太夫人、語則大御祖、との詔のあるを思ふべし、皇后にまれ、夫人にまれ、大の字を加へて御母の事にするは、漢國の定めにこそあれ、皇國の古にはさることなし、故文には漢樣を用ひながら、語にはなほ古のまゝに申されしなり、いまだ漢籍を取用ひられざりし前の御世には、太妃、太夫人など云品の差別はあらざりしかば、大后にまれ、凡の后たちにまれ、御母となりて坐ては、凡て大御祖とぞ申ましゝ、孝德紀に、皇極天皇を皇祖母尊と、御號奉らること見えたる、こは天皇に坐すら如是申せるを以て、后も夫人も大御祖と申すに差別はなかりしことさとるべし、さて皇極は孝德の大御姉にませども、大御母に准へて、此御號奉り給へりしなり、さて又こは御母と申すことなるに、祖母と書れたるはいかにと疑ふ人あり、凡て古は母を多く美意夜と申して、古書どもに御祖と書れば、其例のまゝに祖字を書き、又皇祖尊と書ては、先代天皇にまぎるゝ故に、御母なる事を知らしめむ爲に、母の字をも添られたるなり、○中略〕其後遂に常の語にも、當代の嫡后をば、たゞ后と申し、大御母を大后と申すことにはなれるぞかし、凡て何事にもかく漢樣にのみ變りはてゝは、古樣をよく辨知る人もなく、たま／＼古書に遺在を見ては、返りて疑をさへなすめり、師の萬葉考にすら、彼二卷なる大后を疑ひて、天皇いまだ崩坐ざるほどなれば、大后とあるは誤なりとて、皇后と書改められ、又別記に、夫人の訓をば論はれたるなど、中々にみな誤りなり、

〔儀式五〕立皇后儀

前一日、太政官召式部省、仰可令集會刀禰之狀、當日早朝中務省、置宣命版於尋常版北、式部丞錄率史生省掌等、於建禮門前庭、東西相分列立刀禰、于時閤內大臣喚舍人、如常、親王以下應召左右相分

〔九成宮醴泉銘〕上及中宮、歴覽臺觀、

〔後漢書紀十上皇后〕會有司奏建長秋宮、帝曰、皇后之尊與朕同體、承宗廟母天下、豈易哉、

〔古事記傳二十〕大后は字のまゝに、意富岐佐岐と訓べし、後世の皇后なり、古は天皇の大御妻等を后と申て、其中の最上なる一柱を、殊に尊みて大后とは申志しこと、上卷八千矛神段の傳十一三十一葉に云るが如し、大は、大臣大連などの大と同じくて、あるが中に、一人を尊みて云稱なり、されど猶疑わらむ人の爲に、其證どもを擧て、なほつばらに云む、先古に后とは一柱に限らず、後に妃夫人などゝ申す班までを幾柱にても申せり、今世女童の詞に、十二人の御后さいふなるは、愚なるに似たれども、かへりて古に近し、倭建命段に、弟橘比賣命を、其后とありて又次に坐倭后等云々とあるは、橘比賣をも坐倭をも、共に后と申せるなり、倭建命は、尚を天皇に准へて申せる例なり、又等と云るを以ても、一柱に限らざることを知べし、されば書紀反正卷に、皇夫人、又た夫人、敏達卷にも夫人、これらを伎佐伎と訓るは古にかなへる訓なり、字鏡にも、妃也、支佐支と、あり、又書紀に、夫人をば、意富刀自と訓る處もあるは心得ず、又妃夫人嬪女御などを多くは美賣と訓り、そも〳〵御賣とは、皇后を始奉て、夫人嬪などの列までも通ひて申すべければ、此訓は惡からず、但神武卷に、尊二正妃一爲二皇后一とある、正妃を牟加比賣、皇后を伎佐伎と訓る、こは文字に就ては、然も訓べけれども、當時の實の稱には叶ふべくも非ず、牟加比賣とは、皇后を申すべく、又伎佐伎とは、妃などにもわたる稱なればなり、されば、ここに正妃を伎佐伎、皇后を意富伎佐伎と訓て宜し、凡ていづこにても、妃夫人などは伎佐伎、皇后は意富伎佐伎と訓べきなり、さて其后等の中の第一なるを、大后と申せし證は此處を始として、玉垣宮〇垂仁段に、其大后比婆須比賣命と見え、訶志比宮〇仲哀段に、息長足比賣命を大后と申し、高津宮〇仁德段に、大后石之日賣命と見え、又遠飛鳥宮〇允恭段、朝倉宮〇雄略段などにも、同く大后と申せり、又書紀天智卷に、天皇御病甚重くならせ給へる時に、天武天皇の儲君に坐けるが、後事を辭申給へる御言に、請奉洪業付屬大后云々、とある大后も、皇后倭姫王を申たまへるなり、凡て書紀の例は、上代の事を記されたるも、後世の如く漢國の定めに隨ひて、當代の大后をば皇后と書き、御母后をこそ、皇太后とは書れたるに、此は其例に違ひて、たゞ〳〵當時の實の稱のまゝに、當代の大后を大后とは書れたるなり、此餘にもかくさりはづして、凡ての漢樣の例に違ひて、古の稱のまゝに書れたる事もまゝ見えたり、御子なば皇子皇女と書るが、凡ての例なるに、なり〳〵は、王とも書れたる例なり、又萬

稱呼

後ノ准母アリ、此准母ハ多クハ内親王ナレド、希ニハ中宮等ニシテ准母タルアリ、

准三宮ハ、准三后トモ准后トモ稱ス、三皇后ニ准ズルノ謂ナリ、是ハ女子ニ限ラズ、親王、法親王、大臣等、毎ニ此ニ居ル、蓋シ文德天皇ノ朝ニ、藤原良房、三宮ニ准ジテ、年官ヲ賜ヒシヨリ起リシガ、後ニハ一ノ職名ノ如クナレリ、而シテ后位ニ昇ラズシテ女院タルモノハ、必ズ之ヲ經由スルヲ例トス、サテ此篇ニ就キテハ、女御、女院出家、山陵、外戚等ノ諸篇及官位部ノ中宮職、院司等ノ篇ヲ參看スベシ、

〔新撰字鏡　女〕妃(以之以爲二反、妃也、支佐支、)

〔字鏡集　口十一〕后(コウ キサキ)

〔令義解　七公式〕皇后、(謂、天子之嫡妻也、)

〔西宮記　臨時五〕皇后行啓、(○中略)中宮、(妻、長秋宮、)或說、長秋者后宮總名云々、皇后總名也、但后宮四人御坐之時、皇后宮職可被置歟云々、

〔拾芥抄　中本官位唐名〕后宮(長秋宮　長信宮(公后宮)　堯母門　後宮(上)　後庭　掖庭　椒房　闈省　闈殿　玉堂　椒閣　宮掖　三千人)

中宮(長秋宮　三千人　椒房　掖庭　椒庭　椒掖　昭陽殿　椒風　螽斯　陰教　内則　芣苡　關雎之德　樛木之歌　鹿苑之美　葛覃之詠)　皇后宮(秋宮)

〔古今和歌集　一春上〕寛平御時、きさいの宮の歌合のうた、(○歌略)

〔榮花物語　三十七煙の後〕七月七日、(○天喜五年)中宮の御まへに、前栽にむらごの糸をひきて、いろ〳〵のたまをつらぬきたり、(○中略)女房、

しらつゆも玉をみがきて千代ふべき秋のみやにはつきせざりけり

〔八雲御抄　三下異名〕后　むらさきの雲　しりへのみや

〔漢官舊儀　下〕皇后稱中宮、

〔唐六典　四禮部〕外命婦朝中宮、爲皇后稱觴獻壽、

院トナリテ後ニ陞ルアリ、多クハ所生ノ天皇ノ御卽位ニ由ルナリ、
太皇太后ハ、皇太后ヨリ陞ルヲ以テ常トスレドモ、皇后中宮ヨリ直ニ進ムモノアリ、然レドモ女院ノ稱ノ起リテヨリ後ハ、此位ニ居ルモノ少ナシ、
皇太夫人ハ、天皇ノ御生母ナル夫人女御ヲ稱スルナリ、是ヲ中宮ト稱セシコトハ上ニ云ヘルガ如シ、皇太夫人ノ稱ハ、後ニ亡ビテ復聞エズ、又皇太妃アリ、令ニハ載セタレドモ、歴史上ニハ、續日本紀、文武天皇大寶元年七月ノ下ニ、纔ニ一見スルノミ、
贈號ノ事ヲ言ヘバ、皇后ノ稱ハ、妃准后ニ贈リシ例アリ、皇太后ハ、皇后ニ贈ルアリ、直ニ女御等ニ贈ルアリ、女院ニ贈ルアルナリ、太皇太后ハ、贈皇太后ニ、更ニ贈リシ外ニ例ナシ、
女院ハ太上天皇ニ准ズルモノナリ、其所屬ノ職員等、概ネ太上天皇ニ同ジ、一條天皇ノ朝ニ、皇太后藤原詮子ヲ東三條院ト稱セシヲ以テ、女院ノ始トス、次ニ太皇太后藤原彰子アリ、後朱雀天皇ノ朝ニ女院トナリ、上東門院ト稱ス、門院ノ號此ニ始マル、是ニ於テ女院ノ稱ハ、單ニ某院ト云フモノト、某門院ト云フモノトノ二種トナリテ、後世之ヲ遵用セリ、此兩女院ハ、皆國母ニシテ剃髮シタルモノナレバ、國母ハ女院タルヲ以テ例ト爲セドモ、國母ニアラザル女院モ亦頗ル多シ、若シ后位ニ居ラザルモノヽ女院タルニハ、必ズ一タビ准后ヲ經ルヲ以テ例トス、
女院ノ稱ハ、其住處ヨリ起リシガ、後ニハ徒ニ禁門ノ名、地ノ名ヲ取ルアリ、或ハ門ニモ地ニモ由ラザルアリ、或ハ前女院ノ號ニ、後ノ字新ノ字ヲ加フルアリ、後高松院、新待賢門院ノ如キ是ナリ、要スルニ、女院ハ生前ノ號ナレド、希ニハ歿後ニ追稱スルモノアリ、後京極院ノ如キ是ナリ、
准母ハ帝母ニ准ズルモノニテ、女院タルハ常ノ事ナレドモ、或ハ皇后ト稱スルアリ、又剃髮

朝ノ高野新笠、陽成天皇ノ朝ノ藤原高子、宇多天皇ノ朝ノ班子女王、醍醐天皇ノ朝ノ藤原溫子ノ如シ、而シテ在位ノ天皇ノ后ヲ中宮ト稱セシコトハ、醍醐天皇ノ皇后藤原穩子ニ昉リ、繼デ村上天皇ノ皇后藤原安子アリ、然レドモ皇后ノ稱ハ、毎ニ贈號ニ用ヰ、御寢ニ侍セザルモノニモ假スコトアレドモ、中宮ノ稱ハカク汎ク用ヰシ事ナシ、

皇后ハ、上古ヨリ貴族ヲ擇ビテ冊立スルコトニテ、大寶令制定ノ時ニ至リテハ、妃ヲ內親王ニ限ルコトヽシタレバ、后ハ皇族タルコト勿論ナリ、是蓋シ從前ノ法ナルベシ、故ニ聖武天皇ノ藤原安宿媛ヲ皇后ト爲シタマヒシ時ニハ、縷々數十言ヲ以テ辨疏シタマヘリ、是ヨリ後ニハ、皇后ハ多ク藤原氏ニシテ、以テ外戚擅權ノ端ヲ啓ケリ、然レドモ多クハ大臣ノ女ニシテ、納言以下ナルヲ以テ異例ト爲シタリ、其間ニハ執柄ノ人ニシテ、人ノ女ヲ養ヒテ入內セシムルアリ、天皇讓位ノ後ニ、之ヲ納レテ后ト爲スアリ、又十歲未滿ノ后アリ、皆異例ナリ、其異例ノ尤モ甚キハ、御寢ニ侍セズシテ后ノ稱ヲ得ルアリ、此例ハ堀河天皇ノ朝ニ、皇姊媞子內親王ヲ以テ准母ト爲シ、皇后ト稱セシヲ以テ始トス、但シ內親王ニ限ル、サテ后位ニ進ムニハ、皇太子ノ妃ヨリスルアリ、女御ヨリスルアリ、准后ヨリスルアリ、或ハ直ニ后位ニ昇ルモノアリ、或ハ其勢ナキニ由リテ、中宮ヨリ皇后トナルアリ、

皇后ハ內政ヲ理シ給フモノニシテ、大夫以下ノ職員アリテ之ニ屬シ、元日等ノ朝儀ニハ、天皇ト共ニ、皇太子以下ノ拜ヲ受ケ、其禮遇殆ド天皇ト均シキコト多クシテ、國忌山陵ヲ置ク等ノ事アリ、上古ハ其物故ヲ薨ト云ヒシガ、後ニハ是モ崩ト云ヘリ、而シテ其他ニ行キ給フヲ行啓ト云ヒ、臣庶ヨリ皇后ニ白スヲ啓ト云ヒ、其上啓ニハ殿下ト稱スルガ如キ、一ニ皇太子ノ例ニ同ジ、

皇太后ハ、皇后中宮ヨリ進ムアリ、女御ヨリ進ムアリ、准后ヨリ進ムアリ、剃髮後ナルアリ、女

古事類苑

帝王部十九

皇后上 皇太后、太皇太后、皇太夫人、女院、准母、准三宮、[併入]

皇后ヲキサキト云フ、上古ハ天皇ノ御寢ニ侍スルモノヲ、汎クキサキト稱シ、其中ニテ嫡妻一人ノミヲ大后[オホキサキ]ト云ヒシガ、漢土ノ制ヲ摸サレテヨリ、后ノ稱ハ嫡后ニ止マリ、御母ヲ皇太后ト云ヒ、御祖母ヲ太皇太后ト云ヒ、以上之ヲ三后又ハ三宮ト稱ス、

立后ニハ冊命ヲ以テシ、其式極メテ嚴ナリシガ、南北朝ノ比ヨリ、立后ノ典ヲ擧ゲサセ給ハザルノミナラズ、女御ヲ置カセ給フコトモ甚ダ希ニシテ、終ニ全ク廢絶セシガ、後陽成天皇ノ朝ニ、豐臣秀吉、近衞前久ノ女ヲ養ヒテ、掖庭ニ入レテ女御トナシ、後水尾天皇ガ、德川秀忠ノ女ヲ納レテ、中宮ト爲シタマヒシニ至リ、中宮女御復興ル、

三后ハ、各同時ニ二人以上並ビ立ツヲ得ズ、故ニ一條天皇ノ朝ニ、藤原定子ガ中宮タルニ至リ、藤原遵子ノ中宮ヲ改メテ、皇后ト爲シタリ、遵子ハ帝ノ御父ノ中宮タリシカド、帝ノ御生母、皇太后タルヲ以テ、皇太后タル事ヲ得ズシテ、仍ホ中宮ト稱セシナリ、然レドモ是ハ婦姑ノ間ナレバ、其秩序ヲ紊スマデノ事ナリシニ、其後藤原道長ノ女彰子入内シテ、中宮タルニ至リ、定子ノ中宮ヲ改メテ皇后トス、是ニ於テ一帝ニ兩后アリ、是ヨリ此例ヲ逐ヒシコト間間アリテ、中宮ノ勢ハ、反テ皇后ノ右ニ在リ、令ニ據ルニ、中宮ハ三后ノ總稱ナルガ、聖武天皇ノ朝ニ、皇太夫人藤原宮子娘ヲ中宮ト稱セシヨリ、毎ニ皇太夫人ノ稱ト爲レリ、桓武天皇ノ

古事類苑

帝王部十九

皇后上

皇太后、太皇太后、皇太夫人、女院、准母、准三后、併入

しきことあらん、こなたへと申せとて、やがて面をあはしけり、脩靜ふかく歡びて、夙くより思ひ起せし志願の由を說示し、山陵志著述の爲に、古き御陵を尋んとて、旅寐をしつることの趣云云とかたりいづるに、蘆庵も只管感歎して、足下は得がたき學士なり、さる志ならんには吾庵に杖をとゞめて、こゝらわたりの御陵をしづかに訪求したまへとて、又他事もなくもてなしけり、これにより脩靜は日每に古陵を尋巡に、ともすれば日暮て歸るを、主人は自ら風呂を焚て浴させぬる老人の心づかひを胸苦しとて辭とも從はず、これ等の事は、只管に客を愛する故のみならず、吾も亦かゝる奇人に宿することの、歡しさに、足下の疲勞を慰て、恙なかれと思ふよしは、國の爲に力を竭す人の助にならんとてなり、必辭退したまふなとて、後々までも然かしてけり、

〔陵墓一隅抄序〕戊申〇嘉永元年春、余觀花於芳野、過上市村、偶見一古謄本於店頭、引而撿之、乃具載帝陵、頗備焉、但不記著人姓名、購歸雜之史籍、他日閱之、宿昔疑之、未能質明者、渙然氷釋、其爲喜何如歟、于嗟山陵之頽廢也久矣、彼大和河內之諸地、有其物而名或不正、若我京郊、其物既亡、名亦隨亡、悲哉、繇是前賢往々覃思極力、各就所見樹一家之私議、彼如松下見林廟陵記、蒲生君藏山陵志等、雖頗益後生、務主閎博、一從一違、同異混淆、不免葑菲勞采也、顧茲瑣々冊子、未足窺作者全力、然而精鑿的實、較諸前書大有徑庭、余倍珍重、以示之於老友水島永政、永政亦奇之、反覆數回、謂余曰、今熟玩其辭意、非淺者之所能辨、其或成於若宮水枝之手、水枝者、濃國郡上之一祝氏、自少慨山陵及式社之荒凉、著書有數種、嘗與同列不合、逃居京師、終赴和、沒於龍門土神之祠官、惜哉、天祿不長、名亦不顯、斯書必係其遺筐之物也耶、余深然之、後屢誘永政拜聖蹟、每挿之行囊、苟有所見、輒加私註、題曰陵墓一隅抄、別作圖副之、頃者俱謀、更校訂以傳之世、覽者留意於茲一隅、庶幾三隅可以反矣歟、時嘉永甲寅春正月平安後學津久井清影撰、

を促し、且その友鍵屋靜齋等が貲を借て、製本全く成しかば、之を京師に獻り、及關東の搢紳、並に有職の人々にまゐらせけり、○中略初脩靜が山陵訪求の爲に京に赴きしとき、彼地に絕て識人なし、當時小澤蘆庵は、古學を好みて萬葉風の詠歌に名高く、世にすねたる隱逸なりとかねて傳へ聞しかば、渠が助を借らばやとて、その京に入りし日に、やがて蘆庵が宿所を尋て云云とおとなふ程に、小澤が家僕出迎へて、いづこよりと問ふ、いひよるよしもなきまゝに、脩靜まづ作りて、某は下野なる宇都宮のほとりにて、蒲生伊三郎と呼るゝ者なり、琴を好み候へども、田舍にはよき師なし、主人の翁は琴の妙手にておはするよし、東野の果までかくれなし、是によりおほん弟子にならまく欲して、遙々と來つるにて候といふ、その僕こゝろを得て奧に赴き、云云と告にけん、蘆庵は聲を高くして、あな無益しき問ごとかな、汝出てしか答へよ、主人は久しう客を辭して交を絕たれば、都の中だにも親しう物せるは稀なり、琴は若かりし時掻鳴したりけるを、をちこちの人に知られて、彼に聽せよ、此に敎よといはるゝがうるさければ、近ごろ打摧きて薪に代たり、かゝれば所望にしたがふべくもあらず、他に行て求めたまへといふ聲の、むし襖一重を隔て定かにぞ聞えける、脩靜は僕が報るに及て、そがしか〱といふをしもまたず、更に又推かへして云、翁のおほん答はこゝにもつばらに漏聞たり、某猶一言あり、願は枉て聞たまへ、吾は下野なる儒者なり、云々の志願あれば、屢江戶に遊學し、こたみ都に上りしかども、相識れる者絕てなし、翁の古學を好みたまふと、その氣質の俗ならぬは、かねて傳聞ものから、いひよるよしのなきまゝに、琴を學ん爲にとて來つるとはいひし也、こは長者を欺くに似たれども、その虛言は已ことを得ざりし實情より出たれば、許されて對面せられば、肝膽を吐き、志願を告て、翁の貲を借らんと欲す、かくても意に稱はずば退けられんこと勿論たるべし、今一たび和殿を勞さん、此由執次たまへといふ、蘆庵もこれを洩聞て、さりとは思ひがけざりき、そは奇しき客人なり、對面せずば悔

を勤めたるに依て諸大夫被₌仰付₋戸田大和守と改め、其後山陵奉行を命せられ、歳俸米二百人扶持、萬石以上の格、然るに去々子年、〇元治元年水府動亂事件に就き、宇津宮侯減高、且所替を命せられ、其後所替御沙汰止と成たり、之に依て大和守の二百人扶持返上、更に宇津宮侯高の內七千石、新田三千石〇田下恐脫₌三字₋都合一萬石を以て分地となし、諸侯の列には爲せり、

〔玉勝間 三〕神武天皇の御陵

大和國人に、竹口英齋〇中略此英齋といふ人は、すべて御世々々の天皇の御陵を始め奉りて、皇后皇子皇女たちなどの御墓まで、廣く考へて、陵墓志といふ物を著さんとすとて、かつ〴〵書出たるをも見せたりしは、おのれはた常に深く思ひわたる筋の事なれば、いと〳〵うれしくて、必なしをへられよと、返す〳〵すゝめおきしはいかになりぬらん、其後はしらずなん、

〔曲亭雜記 一上〕蒲の花かたみ

抑脩靜庵はもと福田氏、後に其先祖の氏鄕朝臣の族より出たりと聞に及て、氏を蒲生に改めけり、これらのよしは、墓表に具なればこゝに贅せず、名は秀實、一名は夷吾、字は君平、脩靜はその號、下毛州河內郡宇都宮の人なり、〇中略脩靜、九志を編述の志あり、古昔の山陵多く荒廢して、その迹定かならざるもの有と聞こと久しきをもて、まづ山陵志より剏んとて、獨行して京に赴き、南海を越、淡路に渡るに、素より路費の乏しきを憂とせず、嶮を履み、風雪を犯して、六十六國その半を經歷し、あるは里老に問ひ、或は舊圖を考へ、諸陵存亡の趣を目擊したりける、辛苦をその著述の爲に辭せず、月日は旅寢に移れども、其志移ずして愈精力を盡しけり、かゝりし程に文化丁卯の年、北虜邊塞を擾るの風聞あり、時に脩靜江戶にあり、かの事を傳へ聞て、憂ひ且憤に堪ず、即不恤緯五編を著し上書して之を國老の執事に奉りしに、おほんとり上はなかりけり、とかくする程に、山陵志一巻やうやくに稿を脫て、刻本にせまく欲するに、脩靜素より擔石の儲なければ、同志に告て未刻以前に入銀

神武天皇御陵之儀者、其方知行所内ニ被爲在、今度御修補ニ付、松材數本御用ニ相成、御滿足被思召候、依白銀二十枚御所より賜候旨、傳奏衆被相達候間、此段相達候、尤銀子之儀者、御納戸頭申談、請取頂戴候樣可被致候、

右二月廿七日〇元治元年

〔嘉永明治年間錄十三〕元治元年六月十六日、古來陵墓ノ不審ナルモノハ、決裁ヲ朝廷ニ請ヒ、妄リニ臆斷ヲ以テ定ムル事ヲ禁ズ、

山陵御修補に付、元來御場所未定の分、此節專ら探索方仰出され候處、兼て異論の御場所、爲鑑定穿ち候樣有之哉に相聞候、尊重の御場所、一己の存寄を以て勝手拜見のみならず、右樣所業を以て竊定候儀、恐懼の至に思召候間、以後異論の御場所は、山陵奉行へ申出、同向々に於て一同立會、篤と敬見遂評議候上にて、彌難決候は朝廷へ被相伺、御差圖受候樣可致候、今般先帝爲御尊崇奉行被仰付候儀に付、都て山陵に拘り候御儀は同向へ申出、差圖受候樣可致、一己の存寄を以て、妄に山陵へ手を附候儀は、決て不相成候、御尊崇難相立候間、心得違無之樣可致候、且又國々皇子皇后等の御墓、其外重き身分の墓、所々右樣の類、以後大切相心得、破壞不致樣被仰出候、右之趣末々不洩樣急度可申達事、

右之通京都より被仰出候間、諸國津々浦々に至る迄、不洩樣早々可相觸候、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年丙寅三月廿日戸田大和守諸侯ニ列ス

野州宇都宮城主戸田土佐守高の內七千石、新田三千石、都合一萬石、家族戸田大和守へ分地いたし、御奉公爲相勤度、且大和守取來、二百人扶持差上度旨、願之通被仰付、席の儀は菊之間緣頰と可被心得候、右於芙蓉之間老中列座、和泉守申渡之、

此は文久二壬戌閏八月、宇都宮侯內願に依て、御陵修補御用命ぜられ、家老間瀨和三郎、重立是

文久三年二月

〔公卿補任孝明〕文久三年十一月廿八日、神武帝山陵使發遣日時定、依レ被レ告二山陵修理成功一也上卿權大納言、辨勝長、使日野中納言、奉行豐房朝臣、

〔德川禁令考八修復〕文久四元治元甲子年正月

叙位宣下　家茂公

叙從一位

山陵荒頽、就レ中神武天皇御陵、可レ及二廢絶一形勢、多年御恐懼御憂傷之處、先年已來、追々探索、舊冬御修補成功、二千餘年之今日ニ至、盛大復古之儀、第一御追孝相立、加之皇威を四表ニ輝候事、叡感不レ斜候、右者從二往古一等閑ニ相成居候處、當大樹朝廷尊奉之志厚、方今國事鞅掌之半、御修補行届候段、誠忠深宸賞被レ爲レ在、依レ之被二宣下一、

正月　職事淸閑寺豐房

〔文久紀事〕於二京都一申渡候書付

二月十日〇元治元年　戸田越前守名代

御刀白鞘、美濃國兼信、代金二十五枚、　秋元但馬守

山陵御修補之御用相勤、今般神武天皇御陵を始、千載を過候御場所、追々御修補御成功相成候段、朝廷御尊崇之御趣意深相辨、公武之御爲厚相心得候より之儀と、一段事ニ被二思召一候、依レ之御刀拜領被レ仰二付之一、

同文言　神保山城守

右之通於二京都一申渡候事

〔實麗卿記〕文久三年二月十八日甲午、（中略）頭右大辨長順朝臣來軾、仰宣命趣幷使事、（其間神武帝山陵御荒廢、可告申御修補之由、宣命使發遣、宣命令作、以權中納言藤原朝臣實則爲長官、權右中辨藤原朝臣爲次官、）

〔忠熙公記〕文久三年二月十四日、長順朝臣方伺、　廿二日、今日山陵使發遣、

太政官符大和國

應預奉告令修造神武天皇山陵荒廢事

使從二位行權中納言藤原實則

權右中辨正五位上兼行右衞門權佐藤原博房

右左大臣宣、奉勅、爲奉告令修造彼山陵荒廢、差件等人、宛使發遣如件、國宜承知、依宣行之、符到奉行、

正五位上行右少辨藤原朝臣判　從五位上行左大史小槻宿禰判奉

文久三年二月十八日

十六日、長順朝臣方山陵使宣命草ノ草、別紙之通來、

天皇我詔旨止宣麻掛畏岐畝火山東北陵爾申給止波久申須、高天原爾事始給比志神漏岐神漏美乃命持氐、吾皇御孫尊乃長御代遠御代止天津日嗣乎彌繼繼爾所知食來斯御代中波、其岐世乃亂逆毛有氐、諸陵寮乃官人毛何時志加絕果氐、每年乃巡撿使毛不巡撿成里、御陵守留預人戶人共能不堪守果奴留間爾、御陵波里人乃薪樵流山止變里、或波壞知氐畠爾作里、周圍乃堀波埋禮氐水田止左幣留變果去都部、遠御代御代乃天皇乃高久嚴岐大御陵毛、穢焦久微少久荒果放留、如此荒果去流多御陵等乃穢濊乎清米氐拂治米、損壞乎廣米氐修堅米志牟止女官位姓名等乎奉出志氐、御陵乃御前爾令告申給久幣平氐、平爾安爾所念食氐、天皇我朝廷遠堅磐爾常磐爾護給幸給幣、又此御事負持氐大陵乃邊爾仕奉牟人人乃覺受犯過事有牟遠、見直聞直坐氐、御心穩爾咎給波受、勤美志令奉給止幣畏美畏美毛申給止波久申、

今度山陵御締向御普請等の御用被仰付候處、是迄御普請、其外御手傳の御用被仰付候振合と違ひ、御普請等仕方見込に御任せ相成り、國々へ家來差遣し爲仕立候事にも候間、重役の內、重立引受取扱候者無之候ては、御用辨も立間敷儀に付、右和三郞へ取扱申付、萬端麁畧の儀無之樣、大切に爲取計被申候樣被存候事、

間瀨和三郞義、諸大夫被仰付、戶田家一門の事故、戶田大和守と受領有之、

戶田越前守へ、內願の趣達御聽、御機嫌に被思召、今度出張御締向御普請御用被仰付候、右芙蓉間老中列座、周防守〇松平康直申渡之、

前書間瀨和三郞、戶田大和守と改め、追て山陵奉行を命せらる、藏俸米二百人扶持、萬石以上格、慶應二丙寅に至り、二百人扶持返上、宇津宮侯高の內七千石、新田三千石、都合一萬石の分地、諸侯の列に入る、

〔戶田忠友家記〕山陵修營ハ、年序ヲ經ズ速成スベク、且戶田和三郞へ奉行仰出サレ候旨御沙汰、

國々山陵荒廢ニ及、多年叡慮不安ニ付、御修復ノ儀被仰立候處、去後八月遵奉、御修復御用、戶田越前守へ被申付候旨言上有之、御滿足思召候、右御請ノ上ハ、不經年序、速成就有之度被思召候、頃日越前守家族、戶田和三郞上京ノ旨被聞食候ニ付、於官家夫々御用掛被仰付候、然ル上ハ武邊ノ方奉行無之候テハ御不都合ノ儀被思召、幸ヒ越前守家族ノ儀ニモ候ヘバ、右戶田和三郞へ奉行被仰出候、仍此段達候事、

十月〇文久二年十月廿二日

戶田大和守諸大夫格ヲ命ゼラル、〇文久二年十月廿九日達

今度山陵御取締奉行被仰付候ニ付テハ、御所向御扱方、諸大夫格今日ヨリ被仰付候事、

十月廿九日

被仰出候へば、必ず御爲筋と奉存候、尤此節柄の儀に御座候へバ、萬一國持衆より、右の儀天朝へ直願の程も難計哉に心痛仕候間、可相成ハ早々被仰出候樣奉存候、今般厚き御沙汰の趣難有奉存候間、愚意の趣此段奉申上候以上、

戸田越前守

別紙

御陵御修補被仰出候へば、私爲冥加右御用相勤申度、全く數代の御高恩を奉報度微衷に御座候、尤も右御入用筋の儀、公邊御散財不相成樣家來共申付、工夫爲仕度、私儀も元來勝手向不如意には御座候へ共、斯御時節御爲筋に相成候に付、如何樣共力を盡し、家中粥を啜候共、尊敬心切を心掛修補可仕候、尤も公邊御役人御出張にては、彼是御手重に相成、御入費も不少、御陵被爲在候國々村里の者共、自然と迷惑可仕、私へ被仰付候得ば、重役共先立、風雨寒暑にも苦心奔走仕り、謹て修補可仕候、斯奉願候に付、是迄の流弊に習ひ、寸功を以て後賞を心懸候儀に無之、又名聞にも無之、全く國家の御爲を存じ、此度被仰出候、流弊御一洗の一端にも可相成哉と存込候儀に御座候、尤も平常の御用筋にては、兼々必至困窮の勝手、中々難相勤候得共、別紙申上候通り、國家の御爲筋、士氣振起の基と奉存候、亦國持衆へ對し、御譜代の家筋にて、一應の御爲筋不相勤儀、赤面の次第に付、必至の窮迫を顧みず、奉願候儀に御座候、且攘夷の節に至り候ハヾ、御陵御用中にても早速先途仕り、報國の働き仕度奉存候、微忠の處御賢察被成下、御陵御修補御用被仰付被下置候ハヾ、冥加至極難有仕合奉存候、尤數ヶ國所々の御儀に付、急々修補相整ひ申間敷、積年の丹誠を以て成就仕候樣心掛可申候、此段奉願候以上、

戸田越前守

御附札

山陵御締向御普請等の仕方、見込に御任せ被成候間、國々へ家來差遣し爲仕立候樣可被致候、尤も土地奉行へ可被談候、且又右御普請御入用金の儀、追て御下げ相成候間、御入用高等取調可申聞候、

書付

戸田越前守家老
間瀬和三郎

探索之勞、後世有誰亦擧之於口、何不發行斐之銅鐫、以展喜眉、偶薩人贈其封內神代三陵圖、仍併增修斯書、以弘四方、其愚考與戸田氏進奏本異說者、宜速改之、但以抱痾累月、懶事筆硯、姑存其舊、覽者幸勿怪諸、世稱宇都宮侯之偉効顯績、鎌府以來未見其比也、實非溢美矣、嗟也余輩賤陋菲賢、亦何幸遭遇今日之盛典、追憶今古、盛喜罔已、重誌其由乎簡左、永矢弗諼、時慶應二年丙寅之春、津久井清影跋、

〔嘉永明治年間錄十二〕文久二年閏八月廿九日戸田越前守山陵ノ修補ヲ請フ建白並指令、

此度御國政の儀、不憚忌諱申上候樣厚く被仰出、難有次第奉存候間、謹て言上仕候、〇中略當今の急務は、士氣振氣仕候儀第一と奉存候、其士氣振起仕候には、反始報本より人情を厚し、忠孝を養ひ立候事、眞に強國の基と奉存候、彼血氣の小勇より起り候强は、粗暴の所業にも至り、眞の強國とは相成申間敷候、右反始報本は、祖先を不遺、始本より大切に存候、實情の厚より溢出る忠孝の勇を振立候、士氣盛强國の根元實滿と奉存候、此忠孝の大節を天下に示され、天朝御代々樣の御陵多分荒廢相成居候、此儀古來有志の者、憂傷仕候段兼々承知仕候、乍恐萬乘御遺體を被爲納候處、荒蕪の儘にて被差置候儀、誠無勿體儀恐懼悲傷仕候事に御座候、臣子の分にては一儀安心難仕儀と奉存候、誠に今般從天朝御緣組被爲遊候上は、猶更御陵御修補の儀御執行被遊候樣奉存候、右樣相成候ば、乍恐今上皇帝には巨遠莫大の御孝道に相成、於御當家は廣大の御忠節相立、官武御一和の御趣意彌以相顯れ、且官武御一同に、忠節の道を以て御埀教被遊候へば、海内一般御德化に洽し、反始報本の情厚く、眞の忠孝の士氣振起可仕、且御陵御修復の事、鎌倉以來、數百年來絕て無御座候處、御當家に至り御修補相成候へば、千萬年不朽の御盛功にて、御忠義の道相立候て、天朝の御氣色に被爲叶、天下の人民一統感戴仕り、武威も無限に相輝き可申と奉存候、依之御陵御修補の儀ハ、御強國の基、則天下無雙の一大成の事と奉存候間、追て御上洛前に、御修補の儀も

ク樣可作、入口ヨリ内ハ不殘石ヲ敷可申、

右山陵之儀ニ付、神道兼職藤田虎之介へ申聞吟味致セ候處、左之通リ也、

山陵之儀、古制ニ御本づき被遊、石垣堀等ニても御築立被遊候尊慮と奉存候處、此間中大和國の地理ニ拘り候書物類、大抵殘りなく吟味仕候處、何れにも神武陵の地所しかと相決し兼申候、先日被仰付候通、七郎衛門〇河瀬方へ問合候間、近日何と歟申來候儀とは存候へ共、十の八九は分り兼候儀と奉存候、扨疑はしき地所を推量にていよ〳〵こゝと申す樣ニも罷成兼候故、つまる所疑しき地所一二ヶ所一ト通りのかこひニても被遊、神武陵と申傳候場所故、旅人等入こみ不申樣、石表ニても御立被遊候外有之間敷、仍而は山陵の御修復は出來兼候故、神武田邊へなりと、橿原の神宮御建立被遊候外無之樣奉存候、

藤田彪

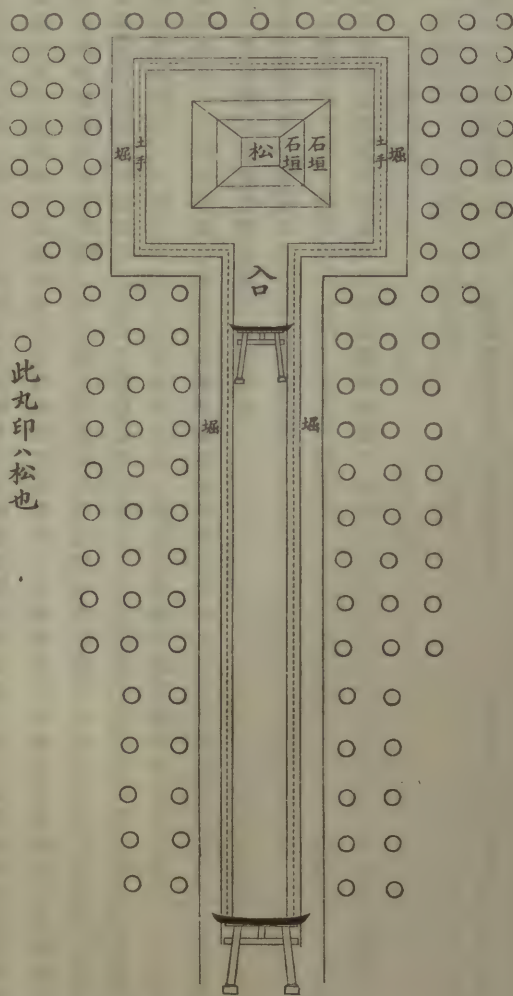
〔議奏言渡〕文久二年閏八月廿一日武傳被附

山陵御取締之儀ニ付而者、是迄既ニ御取調御世話も有之候得共、今度改而國々山陵御締向御普請御修復之御用、戸田越前守江可被仰付思召候間、此段御達置可申旨年寄共より申越候事、

閏八月

右以大御乳人、披露被返出返却候、

〔陵墓一隅抄跋〕安政己未〇六年夏、余負終身幽蟄之咎、時年六十六、乃絕思於塵寰、日撿山陵筆記、其中謀抽繹此書及聖蹟圖志、以遺子後世、心獨謂以寫本嘱故舊、一旦罹水火、悉付烏有、更竊謀銅鐫、人或惆之捐貲助其志、遂又欲依其人秘之于竹生島神庫、以爲身後之頒布、而未果其事也、文久壬戌載、宇都宮侯〇戸田氏請任諸陵修補職、其族戸田和州代侯率大小臣屬入京、適余蒙遺赦免罪、尋命充撿陵參謀、朝廷賞下褒章、抑亦望外之榮也、乙丑〇慶應元年之秋、修陵功成、宇都宮侯及和州以下、重所褒賞或勸云、今也百有餘所之諸陵、崇麗踰越前古、彌年度日、耤里老士人、遂至不知昔日荒廢之狀、況吾子積年

候へば、猶當禁仙洞などの儀は勿論、常ニ吟味は六ヶ敷、又火急の節はとても吟味間ニ合不申と申事ニ成行候半故、神武皇の山陵を取定メ置候へば、跡々は右ニならひ出來候半と被存候、古例等たとひ分り不申候とも、是は全く申さば上への餙ニて、御手厚くさへ出來候はゞ、古例ニ叶不申候とても、先ヅ不苦樣被存候者也、

○此丸印ハ松也

一山陵ハ下ノ石垣ハ、四方十間四方位、高サハ三丈位、中上ノ石垣ハ、下ノ石垣ニならひ可然作ル、三段ノ上ヘハ松ヲ植ル、山陵廻リ土手ノ上ヘハ忌垣を可作、入口ト認候處ハ、忌垣ヘ門サシテ開

ざる御儀と奉存候、○中略此度感應寺御建立之儀なぞは、西丸樣○家慶御厄年故にも可有之哉、又は御武運御長久之御祈願にも可有之哉と推察いたし候處、其上にも帝皇始祖之御廟御修被遊候はゞ、なすく\御至德相顯れ、御武運彌御長久に可有御座と存候間、何とぞ京都へ被仰出、御修復被爲在候樣不堪至願候、日光、兩山○寬永寺、增上寺、なぞの御儀と違ひ、古制御斟酌之上、御修被遊候はゞ、格別の御入用も有之間敷哉ト奉存候、夫とも公邊にては御故障も御座候はゞ、拙者より公邊へ相願候ては如何可有之哉、鹿島幷領中大社の御札、追々差上來り、尙又御厄年等の節は、右之外にも伊勢にて御祈禱爲仕差上候類も候へば、爲冥加太祖の山陵御修覆爲御濟にも相成候も、日本史等編修いたし候廉へも相當り、面目無此上事に候、御承知之不經濟、莫大の入費も有之事は、所詮不相叶候へ共、格別之事にも無之候間、何れとか相辨可申候、神武天皇元年より天保五年迄は、二千四百九十四年、來る子年にて、二千五百年に相成候處、當年は西丸樣御厄かたく\故、當年より取懸り、子の年には御祭にても被遊、此上皇統の無窮、武運の長久御祈願も被爲在候はゞ、實に目出度御事に可有之と存候間、心願之趣有りのまゝ相認申進候、御存分御差圖の上、何れの道なりとも、心願成就いたし候樣、御工風偏ニ致企望候、御摸樣次第別に書取にいたし、家老御宅へ差出候とも可致候、

〔山海二策上〕一山陵御改之儀は、如此にも相成候はゞ、可然哉と一己○德川齊昭の了簡にて認候、圖面の覺、但し此圖面は、加州は勿論、誰へも未見せ不申、全くの了簡にて認置候事故、以後御改にも相成候節は、衆評の上にて、御改に可致事、

本文山陵之義は、故實吟味いたし候はゞ、定て色々の說も出可申、第一には久敷打絕候事にて相分申間敷、又常には右樣の事穿鑿も有憚、又火急の節に至り候ては、吟味も間に合不申なぞいふ事にては、いつとても出來可申時なければ、先づ本文の位にもいたし置候て、追々に古例等御たゞしに相成候はゞ可然哉に被存候、神武皇の陵にてさへ機會をのがし候ては六ヶ敷

林の間、或は荒廢の寺院の內などに僅に存しこ、雜人士人の爲に犯し穢さるゝ類多し、又上古の陵には、四維に壘して小丘を構、其營嚴に數千載の後迄、方境最分明なるも有、其類は士人妄に穿つ事も不能、和州畝傍の邊にある陵は凡如此、それだに石棺を穿ちあばきて、內に詰たる朱を奪偸も有し也、斯陵の傾壞するを關るべきに非とて、享保三四年の頃、其御沙汰有て、京師兩廳の與力石崎喜右衞門、入江安右衞門に被命、畿內近國に在處の陵を點撿させられ、各陵圖に寫して、玉垣石垣等の修理を積、又安定ならぬ事は、其邊の領主の方、幷地下人へ尋、土地に隨て修理の品を被究、然れ共百餘皇の陵、其上往古の事なれば、分明ならぬ事數多有て、年を超て不成、後年同與力加納武助、飯沼助左衞門是を繼て、其遺るを補ひ稍改畢て、陵每に制札を建、或は玉垣、或は石垣等を修營し、後年破損に及ばゝ、所の者より可訴旨令して、右兩人打廻りて撿之、後來妄ならざらしむ、但遠邊國に在陵の分は、京都より不指揮、是は其領の者方へ其砌達せられしや未考、其砌京所司代水野和泉守、町奉行山口安房守、諏訪肥後守なり、○又見享保年間山陵請

〔烈公行實〕夏四月(○天保五年)參府、秋以太祖(○神武)山陵荒壞、臣民悲慨、故建議于幕府、欲及二千五百年期、自太祖辛酉元年、至天保十一年、歲數實二千五百年也、圖其修復、以祈寶祚無窮、武門昌熾、蓋繼義公之遺志也、

〔藤田彪手記〕天保五年甲午は、將軍家世子家慶公の四十二歲に相當せし年にして、世俗忌み嫌ふ所の厄年なれば、其厄拂ひの爲めにする所なりとて、大に感應寺といふ寺觀を建立して、冥福を修むるよし聞えければ、此時こそ山陵興復の機會なれと思ひ立ち、幕府の老中大久保加賀守忠眞に書を贈り、始めて神武陵修築の議を陳べたるは九月十三日なりき、其建議に曰、拙者如きものにては申も憚多候へ共、御當家御至德之儀は、三分天下有其二、以服事殷と申處には無之、日本國中誰有之、將軍家の御下知を受不申人は一人も無之處、悉く天朝を御尊敬被遊、鎌倉室町等とは格別之御儀に被爲在候故、御武運益御長久にて、二百餘年の太平を被爲保候段、實に偶然なら

右五帝、陵三ヶ所一園ニ有、
崇神　天武　持統　一條
一ヶ所文武　二ヶ所　二ヶ所
景行　欽明　堀川　後朱雀　後冷泉　堀川
一ヶ所　一ヶ所　後堀川（御骨後嵯峨御塔ニ納ルノ由シ）
二條　近衛　後伏見（御骨仁明御塔ニ納ノ由シ）
右十四帝、陵七ヶ所難一決、或ハ一所ニ御骨ヲ藏ムト申傳テ不分明、
一九帝、陵所園有、　仁明（鳥井垣等有）　鳥羽（中門園有）　後白川（法住寺堂園アリ）　花園（微笑菴堂中ニ有築地アリ）　四條（總棒石垣）
（唐門ノ中ニアリ）　後土御門（同）　後柏原（同）　後奈良（同）　正親町（同）
右園有來ニ付、不及結垣、
一十二帝　仁賢　陽成　宇多　村上　花山　後一條　後三條　後深草　伏見　崇光　稱光
六條
右陵所不知
陵八十二ヶ所、結垣出來、
九ヶ所、園出來、不及結垣
十三ヶ所難相知
右ハ松平紀伊守（信庸）京都所司代中、蒙關東御命、吟味之帳面ヲ以テ拔書之、此外ニ陵地面之圖有之云云、其後有德院殿之時、又有御吟味云云、先王廟記ノ中ヘ以朱書入置了、
〔翁草三十八〕陵之事
近世の天子は、洛東泉涌寺に陵赫々たれば、汙穢不淨の論なし、其餘は所々散在して、或は曠野山

郡勢力村天皇屋形山、同國板野郡大寺村金泉寺、同郡里村、淡路國三原郡中島村、津名郡柳澤村ともに七所は、山陵のよしまうし傳ふるといへども、何帝の陵なる事たしかならず、もしくは南朝の陵にもあるべければ、これも垣墻をまうけしむとなり、

〔一老略傳〕柳澤氏、廣澤〇細井知愼先生に武備を任ず、〇中略添るに天下の寺社の事を司らしむ、天下大小となく柳澤氏に歸す故なり、時に朝廷上古の諸陵、亂世を經し故やらん大に廢し、其處を失ひ、其號名をも失ひ、破たる御陵などを鬼陵などゝ號し、農民穢すもの多し、廣澤先生其兄細井甚藏芝山の號是を歎じ、廣澤先生をして公に告て、此時より初めて諸陵周垣の絕たるを繼、廢たるを起したる事擧て數ふべからず、諸陵周垣の記あり、九皐先生〇知愼子知文家藏なり、

〔先哲叢談後編三〕細井廣澤

名知愼、字公謹、號廣澤、〇中略通稱次郎大夫、遠江人、仕于河越侯松平美濃守吉保後給仕于幕府、〇中略廣澤仕于河越二年、進爲鐵砲隊長、步卒二十人屬之領下、兼掌海內神社佛閣、勘合條制之事、故廣澤能知其舊貫班格該管隸屬等之故、嘗歎保元以降六百年、累帝諸陵、屢經兵燹、失其所在、既不知其陵者二十五、告之侯建議、據古史紀傳所載、搜索其不可知者、果皆得其所在、而後修葺其屋宇、或造石垣、三年諸陵全成焉、實可謂繼廢興絕也、故當時命諸臣修撰歷代諸陵修垣實記五十卷、其事皆本於廣澤所建議矣云、

〔寶山外志〕二條陵、在船岡東北一町、元祿戊寅、公府修陵、地頭天瑞

〔寶石類書百二十葬〕御代々御陵

八十一帝陵場所　八十二ヶ所內嵯峨　淳和　冷泉　後鳥羽　土御門　龜山

右六帝葬所藏所、或車ロト申傳テ、二ヶ所有之、

嵯峨　土御門　後嵯峨　後光嚴　後圓融

なかりし、所の民ぶ°ぶ°の田とよび侍りき、神武を傳へあやまると見えたり、京兆の命をうけて、土を重ね垣をゆひて、士民近づく事を得ず、其外あまたの陵も皆かくの如し、誠に昭代の御政おほき中にも、是等こそ唐土までも聞えて目出度御事なめりといふ、知愼心の中におもひ合せ侍りぬ、されどことに出すべきことならねば、げにもとのみ云てやみぬ、かくて曉ちかきころ夢に我兄を見侍るに、其よはひ三十にたらぬほどに見えて、容貌ことにうれしげにうち笑ひ給ふが、忽然として見え給はず、夢心地にまことに世をさり給ひし人也とまたはしく悲しかりしが、又ましばし有て同じさまに見え給ふが、夢に見奉るとはおぼけれども、かくうるはしくよろこばしき有樣は侍らず、まさしく是はきのふのくれ、帝陵の御事ども申侍りしを悦給ふならむとおもふに、なつかしき事も又やるかたなし、

元祿十二己卯歲九月廿八日雨そぼ降日、淺草の鄕如意菴の南の窓のもとに識す、

細井知愼

〔常憲院殿御實紀三十九〕元祿十二年四月廿九日、こゝに本朝元弘建武の大亂以後、古帝王の寢陵荒廢して、其ありかたしかならず、樵牧雉兎の蹊徑となりき、然るを數百年をへて修治する事もなし、是一大關典といふべし、ましかるを當代感じ思召旨ありて、この年頃御料は代官、私領は領主に仰ごと下り、あまねく古跡を搜索せしめ、藩籬をまうけ、樵采を禁せられしに、この月その事成功せるよし、京職松平紀伊守信庸より注進す、〇中略すべて神武天皇より後花園院まで百三代、重祚二代〇齊明稱德と安德天皇を除きて外、崇神仁賢繼體欽明陽成宇多村上花山一條三條後一條後朱雀後冷泉後三條堀河二條六條後深草伏見後伏見崇光稱光の廿二陵は、湮沒して其跡もさだかならず、現存七十八陵のうち、十二陵は舊垣あり、六十六陵はこたびあらたに表章せられぬ、此外阿波國麻殖郡木屋平山、同國三好郡白地村雲透寺は、後龜山院の御陵なりと申傳へたり、又同

出侍りぬ、其秋我兄の一子世をはやうせり、又我兄も大にやまひつき給ふ、其折ふし我主知愼に命じて、帝陵の御在所を考へしめ、まさに諸陵に事あらんの御あらましなれば、いそぎ我兄にかくと告奉りぬ、我兄やまひの床にありて手をあはせ、聖君あり、賢佐有、時なる哉、知名死すとも骨朽ざらんと感涙をおとし給ふ、又先考先妣を拜して、其敎誨によりて、此心をけふにたもちて、此時にあへりと大によろこび給ふ、知愼心におもふ、此大善事をなす人いかで福壽を得ざらん、疾病平安日をさしてうたがふべからず、且又子孫も出來て必繁茂せんと、心肝に銘じてたのもしかりしに、いく日ならず、八月朔日四十二歲にてうせ給ふ、嗣子さへなくていふかひなき事どもなり、翌年寅の八月に、知愼主命により禁廷にのぼりぬ、爰かしこ帝陵を見奉れば、皆艸の周垣を新に作れり、人にとへば東武の尊命有てかくのごとし、世に有がたき御事也、國家の御祈禱、又此上有べからず、昨日今日までも、士人等登臨の處として、牛馬に草かひ侍りぬ、まことに今おもへば淺ましき事なりしといふ、さてこそかくやと思ひて、有難きに涙とゞまらざりし、又翌年卯五月、我主君知愼をして、此一冊幷一紙をかゝせ給ひて、是なんぢ兄弟の志心より出てかく事ゆきぬ、爾も一通を寫して家につたへよ、又我家乘にも書載せよと宣ひぬ、我兄世にまし〳〵なばと思へばとゞまらぬ涙也、さるによりて一通を繕寫して、まづ我兄の牌前に供へ、且又我子孫に傳へて此美を殘さんと欲す、夫匹夫の志をおこして百王の寢陵におよぶ事、誠に有がたきためし也、もろこしにて陵墓を修せし事、蕭統の文選にのせ、又宋の帝の陵を修補せし胡元の時趙人有、されどもそれは例もかはり、わづかに一二帝のみなりしをだに、萬世に傳へて美譚とせり、我兄子孫あらましかばと思ふもはてしなき憾や、今年大和の國宇多の仕人我同僚と成侍る、九月廿七日その人のがりまうでけるに語ていへらく、をとゞし帝陵の御たづね有て某も役にさゝれ、大和路の舊蹟悉く巡り侍りしが、神武天皇の陵、畝傍山の東北におはします、田の中にてしる人

褻醜類之窺窬、爾後置字佐使、奉承神勅、其功可與天智天皇討賊撥亂同奉稱者歟、而源頼信及義家、仰以爲軍神、未詳其義、若論軍神、在古軍師道臣命、及大將軍日本武尊耳、凡厥流弊因襲不改、蓋以其初尊祖之教有所未備歟、願神武天皇神殿宏麗盡美、而又修天智天皇廟、侔壯大於應神天皇宮、可謂盛德大業其至者矣、世人知拜神祖天照大神、而不知拜帝祖神武天皇、知敬近世之陵墓、而不知敬先王之山陵、夫繼絶興廢聖賢所褒、伏望追尊太祖、祭其所祭、追求諸陵、修其可修、示孝於萬世、知報本之道、垂教於不朽、致追遠之誠、謹言、

○按ズルニ、本文ハ水戸藩士森尚謙ガ幕府ニ建言セント欲シテ草スル所ナレドモ、故アリテ果ザリシト云フ、

〔諡尻四〕前王舊陵

元祿十年、和州所在の前王舊陵、吏をして其圖方境を記さしめ、柳營の御府に奉らしめたまふ(其圖鴨の祠官梨本家にあり)

〔諸陵周垣成就記序〕我兄芝山先生、(名知名、字孟賓、)嘗大和國郡山にすみたまへり、古の帝都なれば諸陵こゝかしこにおはします、世くだりて士民攀踏り、もしくは發ぎなどして、あさましきことを深くなげき、其國に君たる人、其所に令たる者の、世々を重ねて心なきことをかなしみおそれ給へども、力に及ばぬ事なればと打過したまひしが、元祿十年の春、知愼がもとへ書をよせたまふ、よみて見れば、和州におはせし時、おもひ給ひしことゞもかいつらねて、今聖代にわたりて絶たるを繼、廢たるを興し給ふ、爾がつかふる主〇柳澤氏は當世の柱梁として、わきて神祠佛寺修造の事を司りたまふ、又幸になんぢ其事をあづかりうけたまはるなれば、時ありて此事を聞え上てんや、萬乙此事成就せば、いかなる御いのり御造立にも踰なんなど有、知愼かゝること申出んは、品をこえて其恐すくなからねど、かばかりの大善事をいかでやむべきやとおもひて、事のついでに申

一本御塔ト申候者、往古ハ三重之塔ニ而、本尊ハ坐像等身之阿彌陀如來、塔面東向ニ御座候、是又法皇御造營、御奉行藤中納言家成卿、保延五年二月廿二日、御供養御導師覺法法親王、保元元年七月二日、法皇崩御、依御遺詔、御尊骸ヲ此御塔之下ニ奉葬、則此御塔內ニ法皇御宸影奉安置、本願尊儀ト奉仰候、此御塔モ又天文十七年回祿仕候故、慶長十七年九月、建立仕候假堂ニ御座候、當御塔ニ六口之禪衆ヲ被爲置、則當時現存仕候、本御塔六ヶ院ハ、其遺跡ニ御座候、

一新御塔ト申者、是又法皇之叡慮ニ而、美福門院御藏骨ノ御爲ニ、二重之多寶塔御建立、本尊ハ坐像等身之阿彌陀如來、塔面東向、御奉行少納言入道信西、保元二年十二月二日、御供養御導師、鳥羽院、第五宮覺性法親王、當御塔モ又本御塔ニ准ジ、淨侶六口被爲置之、則當時現存仕候、新御塔六ヶ院是其遺跡ニ御座候、然ルニ美福門院薨去之節、御遺命ニ而、御骨ハ高野山ニ被爲納候ヘ共、御骨如被爲在、可奉供養旨蒙綸命候由ニ御座候、其後長寬元年十一月廿八日、近衞院御骨ヲ當御塔之下ニ奉納候由ニ御座候、當御塔ハ天文中回祿之變無之、往古之儘ニ有之候處、慶長元年閏七月十二日夜之大地震ニ顚倒仕候、同十一年五月、豐臣秀頼公、如往古多寶塔御建立、奉行片桐東市正且元ニ御座候、

〔儼塾集〕恭惟吾朝天孫之正統、自神武至今上一百十四世、二千三百五十餘年、皇胤相繼、寶祚永保、可謂功德過於三五矣、所恨綿邈之間、陵墓或失其地、舊史所錄難推求焉、吾朝古先哲王、邦有大事、必告祖考山陵、事之如生、祭之如在、遣使奉幣、置陵戶守之、每年修理其兆域垣溝、故明德昭々、峻極于天、夫神武天皇、開吾大八洲、殄盡兇徒、創造洪基、其功德巍々、萬世仰之、宜敬其廟、嚴其祭、光被威靈於億兆者也、夫上報本追遠之典未全、則下亦效之有甚焉者、在昔平清盛當祭其所出桓武天皇子葛原親王、而何致敬嚴島明神、源賴朝當祭其所出淸和天皇子桃園親王、而何厚信鶴岡八幡、噫二子不學之失、延及後世、不辨尊始祖之道、不及藤原氏奉崇春日談岑之爲得道也遠矣、且應神天皇者、自宇佐託宣、

壞者、令守戸修理、專當官人巡加撿校、

〔續日本紀一文武〕三年十月甲午、詔赦天下有罪者、但十惡強竊二盜不在赦限、爲欲營造越智〔○齊明〕山科〔○天智〕二山陵也、　辛丑、遣淨廣肆衣縫王、直大壹當麻眞人國見、直廣參土師宿禰根麻呂、直大肆田中朝臣法麻呂、判官四人、主典二人、大工二人於越智山陵、淨廣肆大石王、直大貳粟田朝臣眞人、直廣參土師宿禰馬手、直廣肆小治田朝臣當麻、判官四人、主典二人、大工二人於山科山陵、分功修造焉、

〔續日本紀十一聖武〕天平六年四月戊戌、地大震、壞天下百姓廬舍、　戊申、詔曰、今月七日、地震殊常、恐動山陵、宜遣諸王眞人、副土師宿禰一人、撿看諱所八處、及有功王之墓、

〔續日本紀考證五〕諱所、蓋謂山陵歟、八處亦未詳其所指言、

〔續日本紀十四聖武〕天平十四年五月癸丑、越智山陵〔○齊明〕崩壞、長一十一丈、廣五丈二尺、　丙辰、遣知太政官事正三位鈴鹿王等十人、率雜工修緝之、又遣采女女孺等供奉其事、

〔文德實錄一〕嘉祥三年四月乙丑、先是深草陵〔○仁明〕窣堵婆所藏陀羅尼自發落地、遣參議伴宿禰善男、就加安置、

〔親長卿記〕文明十七年十一月十三日、今日舊院〔○後花園〕山作所、〔悲田院寺內、本堂北御葬所、椿木生長了、〕廻垣破裂、可被造直、民部卿與予可見廻云々、仍罷向了、凡如意見了、

〔安樂壽院由緒書〕無寺務本寺眞言宗、山城國紀伊郡竹田安樂壽院、〔○中略〕一當院儀者、鳥羽法皇城南離宮御院地之御佛殿也、保延三年御造營、御奉行藤中納言家成卿、同十月十五日御供養、御導師白河院第四宮覺法法親王、勅會舞樂之曼荼羅供被行之、其後年久敷相成及破壞候處、建武二年九月廿二日、仰前左馬佐令修造給、又天文十七年回祿仕候ニ付、同十一月三十日、忝再建之御綸旨賜之候、然シ年ヲ經候儀ニ而、其餘之興廢分明ニ難相知、當時有之候諸堂坊舍ハ、多ク慶長頃修造仕候假建ニ御座候、

所憑、決不可行凌辱如右、蓋深草木幡、或仁和寺諸地之陵墓被剝蝕也、由於伏見聚樂之營築、至此上來之諸說一一脗合、龜前堂之爲桓陵、山本院之爲守司、又秦氏及長三等之爲隷屬、判然而定、竟乃多日之疑朦澌洗、斷乎自得、因不自揣、恭欲作聖蹟圖志一編、以頒告四方、成稿有日、續當繕寫進呈、嗚乎汙陵者之病癩、秦氏之絕祖饗、實天誅灼々者、可不懼畏哉、今夫傭夫臺奴、逢佳時令日、猶獲上墓望壠布香火陳酒菓、以慰其先於地下、赫々皇祖、橫遭犯濫、失威靈之所託、某恒念之、痛息慨嘆、殆忘起臥、方今財路日繁、蠲租之地需貢賦、封外之土羅金穀、其下不堪誅求、罪逆非理、往々而出焉、陵墓之墜、實根乎此、犯者固雖不容於誅、上之人重設共恪之章、誰敢穢之侮之、仰望閤下傷陵所湮鐵如彼、恕愚忠質直如此、指摘典故、參畫公卿、併與閤下向來所自考定、仔細收錄、輸送大朝、載之簡冊、納之秘府、設必依舊制、不許所告訴、先簡拔異陵顯著者、宜喩國矦邑主、厚行奉護、又其罹穢辱者、覆土石、禁芻牧、柵埒皆如初、以竢異日之裁命、其小國無祖廟、及係寺觀之封內者、所轄官署、便宜共給吏者、常以歲時按部、專察奸民不法、且後村上後龜山二陵、本在擯斥中、請從今列之于諸陵、速喩其郡國、同加葺理、承者苟有人心、皆驩欣順旨、若夫寬平之於仁和寺、弘仁之於大覺寺、兆域崇侈、時饗不闕、幷非今日考問之例也、但有司錄之、巡視勿失其時、則長免可傷之患、今也中外多事、度支告急之時、雖然閤下少回慮、以計事宜、則不至多耗錢穀、勞吏民矣、在古承應帝〇後光明之崩也、賈人魚屋某、盡傷天子火葬之違祖制、感奮嗚志有司、廟廊善之、葬禮遂復古典、又河尻氏吏五條日、加禮管內之山陵、令民知其可敬畏、以垂千載不遷之法、後以善政多、改任松前、嘗請造巨艦、攻山丹、其忠勇凡如此、時人錄其著者、傳之乎世、惟修陵一事、遺而不載、爲可深惜、況公矦有土之君、於封地之陵墓、闕其崇禮而可邪、願閤下襲茲嘉謀、服茲令聞、聽某上稟、則天下大幸也、狂冒至愚、不知所置、惟閤下寬其罪、某誠恐以聞、

安政二年二月十七日（書之上此書時乙卯春、官長即淺野中書君也、）

〔延喜式二十一諸陵〕凡諸陵墓者、每年二月十日、差遣官人巡撿、仍當月一日錄名申省、其兆域垣溝若有損

一之谷、其爲城内可知也、又古記載、柏原陵從東邊二町許、入在稲荷山南野、今之御草山、古之爲柏原、是爲其證、大島武好山城名勝志云、大谷口山有向原者、是恐柏原舊跡也、又並河永山城志云、柏原野、在大龜谷北、土人呼乞丐原、類聚國史曰、延暦十四年八月、遊獵于柏原野、又僧白慧山州名跡志云、柏原地名曰谷口同所、但此號今不稱、中比轉云癩病原、其故地在御陵、土人不知之、登穢者聞爲癩病、依而號也、谷口之爲柏原、此丘之爲眞陵、是爲其證、其佗參證數柄、今不煩條陳、別欲具一書、嗚痛哉、聖王之山陵、名實兩廢、至雖父老田竣、朝夕來往者、不認辨之、所以然者何、請姑援他辨之、隆治以還、帝陵頽圮、相踵如上演、而大和地爲尤甚、獻廟時、寧樂府進奏云、大和國帝陵無之、元祿頃、京兆尹松平源公謂曰、前年寧樂以何術隱伏其難隱伏者、有司猶如此、下情奚足怪、往昔喪亂不失巍々之姿、却失於昇代撿陵之日者亡他、撿吏之所臨視、驅役下民、推究口狀、來往繹尋、不一而定、土人不堪勞擾、相爭匿眞、欲以免其苛督也、草山志有云、深草山者、東西十町餘、南北十八町餘、舊爲深草住士秦氏之私德、慶長頃、其家獻馬糧於烈祖、歷朝定以爲貢草地、京兆府、世下制章禁侵犯、山中原谷凡可五十、皆古跡也、此記蔽匿數多之古跡、或亦指擬陵地曰柏原、僉匪徒之欺騙同、和州、某便遣人于秦氏後長谷川某、乞貸御草山圖、其家秘惜不出、強請閲之、曖昧罔標、某爽然自失、于呰偶聞山本院秀建者語、遂獲其驗左、傳者道曰、山本院寶淨藏之冑、淨藏嘗以業力安法觀寺塔、天子賞以深草山之地、嗣法相傳、住于龕前堂原、中爲坊宇文書悉付兵火、子孫遂衰、世臣秦某幸之、擅奪賜地、獻諸公所、闕原役、以功已爲其頭目、遡古谷口全村、本垣陵之守戸、詣今彼家有凶禮、闔郷來會葬事、秦某亦佐執紼、因示以正嘉二年諸陵雜事記一通、中有云柏原下司大進阿闍梨其子永秀、世又稱元祿撿陵時、秦某怖奸詐之露、與里人長三相謀、指點他山爲帝陵、併沒柏原之稱呼、爾後其家祟厲並臻、子孫不祀、餘殃之所延、他人有室者、亦皆死于狂顚癩疾、乞丐原之名果不浮、今也龕前堂原、及山伏冢、變爲野棋鉦竹、只古松數株、財不失舊裝、會泉涌寺土木之功興、山伏冢古松亦所充用、嘗聞伐此樹時、役夫有蒙傷害者、假令不眞陵、一旦神明之

足、答上帝之眷相、清邊陲之祲氛、恩民之貪利、帝陵后墓、不識那物、有盜土石、斬樹木、暴露斂具、至甚者起亭樹、窮宴佚於其上、某偶覩之、不覺汗洒透衣、今擧狀其近、以仰遠方之思察、切祈閣下少垂鑒念、伏惟近京如深草木幡諸地、桓武以下、中葉妃嬪勳戚之壟壞、相望郊野、歷年之久、遺址存者無幾耳、近時陶瓦多取材此、或往々墾闢田圃林藪、山丘漸作平野、封隧奄爲稻麥、嗟取陵上一抔之土、葺民間棲息之屋、巨罪章々、塗粉其軀、何以足慰神威、謹按畝火山之神武陵、柏原之桓武陵、此帝陵之尤者、宜超他顯異崇禮、今此二陵、實滅厥所、國家之闕典莫甚之、某不量其分、先以撿尋柏陵爲己務、或勞力履歷、或覃思舊志、其事雖細微、勤苦不敢讓故人、概昔之論者、皆依準僞陵費嘴辨、此即所以不得其眞也、一云、今伏見城山、古御香、大亀谷、總柏原之地也、然而陵之所在、爲城中央、築城時陵壞必矣、一云、小栗栖管內一丘、稱六兜者即是也、一云、谷口人家之東左傍、俗呼山伏冢即陵也、帝潛龍時、稱山部、山伏蓋山部之轉訛也、以上紛紜不決、其徒殆倦搜索、遂泥執於山槐記中、柏原者伏見山松原中也、又入伏見柏原內等之章句、當同於松（〇松下見林）蒲（〇蒲生秀實）二氏者有之、按城山古之木幡山、巨幡墓及門址今現存焉、陵壞之說乃不取也、仍憶雄略紀載深草埴器條、曰山脊國內俯見、古者深草都稱伏見、三峰稻荷社、今稱伏見稻荷、此其類也、然則山槐記之伏見山、恐非城山矣、以愚見論之、山伏冢、此爲初葬之陵、冢畔有溪流一帶、常史載大同元年十月御改葬事、註云、是歲大水、或山陵壞損、以故有遷築之擧者此邪、又其東南有稱籠前堂原地、豐公居伏見時、穿其丘後通道山階、自是遂失其位置、惟南面存巍巍之狀、恰與延曆年間之制合、又其東方有小丘、呼曰御輿冢、以有此等、人之指斯地爲葬所、不亦宜哉、是爲其一證、陵本名柏原、今偏稱擬陵、不唱他、以故世俗莫知谷口之爲柏原者、而其邊總稱御草山、廣袤東西六百十六弓、南北千九十八弓、中有深草管地之犬牙焉、東踵于向原頂上、西踵于大龜谷內大谷町、此所上古和州之官道、南踵于小栗栖道右、北踵于瓦町東北峰、四疆俱十一町、乃合於兆域之古法、而陵固倚西被置、城內亦以有山谷、經界不釐正、故或云、東八町、西三町、又云、加丑寅角二岑一谷、今其北方有谷、呼

洛西野人津久井某、謹獻書官長閣下。〇中略某少小最耽典籍、特注心皇朝史乘、偶閱山陵志中言帝陵頹壞之狀、未嘗不掩卷而泣下也、竊自謂、方今聖上撫運、百廢興發、獨山陵一議、未足饜人情也、饒敏官家不暇修之、苟食其土者、何不盡尊崇焉乎哉、欲試以此于諸侯顧職非其人、加以吏道之倥偬、未公詣人矣、居諸荏苒、空抱素志、某昔以蔭補、叅塵吏曹末、而於材無可取、於德無可議、況亦天與疲弱、不欲永、壅賢者之路、屢移病乞休、退職以來、周流畿甸、歷拜累聖山陵、因記其模制、以備異日之采要、越壬子春山陵點撿之命下、不圖以賤息充奉役、某喜出望外、私於使者曰、凡墳陵事、蹤蹟紛棼、范亡確據者、不特爲少矣、參稽咨謀、不積以日月、未輙易決定、古今論者、騁說互出、彼此牴牾、大都雖傳故家之筆札、耤父老之口實、要之不過臆度偏見之二、今觀元祿享保之論定、似少有粗漏、試言其一、夫寬平幽宮、奉子仁和寺大內山、蓋下火所、在于其山後宇多野、衆之所仰瞻、和州適有同名、以故至遂謂大和國宇多陵所在不知、夫審決正僞、必無遺憾也、識者猶難之、而況其他哉、宜召學問淵博、通曉今古者、以揷之行間、兩府故事、凡審實機密、悲田院垣外屬例任之、今亦踵襲舊制、以至尊陵墓、付之乎捕虜賤人、恐非所以副國家恭順之意也、爾曹其心之、庶依學士柴野氏採訪和州故事、分差使臣於四方、撿討陵地、嘗薦其說祭酒林君、時以儒官無堪其任者、弗錄用、某甚失望、然守志彌堅、專尋振援之路、矩意閣下誤聽、不以某爲下、訪以當世、某喜懼交荷、具陳帝陵頹敗之狀、閣下每言稱善、當是之時、某心竊誇寵榮、以爲帝陵事、必成於閣下之手、亡幾果有撿陵之令、躬親巡視近郊、特簡僚屬中縝密純良者、贊協其議、包容不舍、於是好古篤志之倫、爭獻所見、僉願爲閣下用、某領命以來、感戴罔鄂、刮目以望事成、仄承大朝重發令曰、當今以國用叢脞庶績蝟毛、姑因循元享之舊制、補理從前之垣柵、又聞坂府奉令、既就祇役、若然者山陵志已降、諸家所述作、當寘不問、是狀某之所大望乎今日也、恭以聖子神孫、臨御宇內、奕葉累世、宰制生民、河山之固、六服來同、帶礪之誓、九州奔走、可謂皇統億載、天下一家者、而山陵之典甕未備具、某竊爲明時惜之、比年蠻夷並進、民情不靖、朝廷大有事于群神、於斯時也、決行撿陵、垂禁禦之法於將來、實

陽成院崩御之時分出來、其以後破損にて、雨露も掛り候體如何ニ候間、此度之事願之由、御灰ヲ泉涌寺ニ治申也、

〔朝野群載 八別奏〕諸陵寮

請特蒙天裁被下宣旨於五箇國且停止國司收公且給官使任官省符條里坪附入口要劇陵戸田作人等募權勢遁避地子狀

陵墓所在

山城國卅四所　大和國五十七所　河內國十五所　和泉國四所　攝津國一所（要劇田廿町五反二百八十分）

紀伊國一所　近江國一所

右謹撿案內、被始置陵墓之後、年代尙、兆域東西南北陵戸、幷要劇等田具見格式、而近代之吏背制令悉收公、陵戸田之丁地、已以減少、只隨國司之所行、不辨陵戸之地利、因之兆域垣溝無久修造、牛馬狐狼有日夜棲、抑五箇國之中、和泉國四箇所陵墓者、是履中仁德反正三帝山陵、垂仁天皇第三皇子墳墓也、而件陵戸田、前代以往全無收公、有信良兼二代之吏、忽以收公、論之政途理可然乎、但至于山陵兆域陵戸、幷要劇田者、神社佛事、權門勢家、不可成妨之由、度々之官符、嚴制稠疊、作人縱雖恐暗國宰何乖憲法、倩案事情、刈伐山陵草木、闌入兆域內之輩、尙有其罪、況置陵戸田、令守陵墓、損破之時、令守戸修理、專當官人、每月一度、可加巡撿之由式條炳焉、是則制令設而不行、人心口而無愼、爲愁之甚最在此事、望請天裁被下宣旨於五箇國、裁許件條、將令知陵墓之嚴重、仍注事狀謹解、

康和二年七月十七日　正六位上權助藤原朝臣資懷

正六位上行助源朝臣伊實

從五位下行頭藤原朝臣淸俊

〔陵墓一隅抄〕上官長論山陵牋

ホヤケニモノシ奉ルモ勿體ナク、スヾロニ涙コボルヽバカリ也、御廟ハ萬治元年、松平出羽守、此嶋ヲ預リ玉ヘル時新ニ建立也、ソレマデハ御廟モ石バカリナリシトゾ、此嶋寛永十四年ヨリ、松平出羽守アヅカリ玉フ、元祿元年ヨリ御代官、又享保四年ヨリ、出羽守アヅカリ玉フ、亦今ハ修覆モナクテアレハテタリ、

〔金ケ原地藏院過去帳〕夫地藏院ハ、金原寺の別院にして、開山聖覺法師より、數百年の星霜を經たり、然に當山堅空泰峯上人、深く金原寺の諸堂滅亡せしことを歎き、再建の志願ありといへども時至らず、猶亦兩帝の法華堂も燒失して其跡ばかりなれば、毎月十一日と十七日に、御陵前に誦經念佛せり、ある夜の夢に、或人異相を感見せしとかや、則法華堂は土御門院、後嵯峨院、兩帝の御骨を此堂に納め奉る、卽金原寺の北に當り、一町餘の道法、土〇土恐大誤石の塚あり、これ法華堂のあとなり、時に泰峯上人、慶長十九年七月廿七日入寂せり、其のち太空說全上人、前代の如く毎月御陵前に回向せられける、說全上人、寛永十二年八月廿九日遷化せり、金原寺は其名計なれば、當山より兼つとめたり、今西谷の佛石は金原寺のあとなり、當山も度々陣火にあへども、再建ありて存在せりと云、爾寛永十三年二月、地藏院主專空玄智記、

〔嵯峨覽勝志〕蓮華峯寺陵、後宇多法皇、正中元年六月廿五日、大覺寺殿にて崩ず、此山に葬奉る、昔時陵園營構美を盡せりと、此邊麓の圃までも、廻廊の礎石古瓦、土に埋れて猶存せり、陵門廻垣は皆田圃にすたれ、御塔の砌までも、樵夫の往來となれるぞ最かなしき、近き比まで八角の小堂もて御塔を膽ひしと見え侍りて、俗みな八角堂と呼べり、近世わづかに松の屋を搆て、數步の內をかこへり、

〔後水尾院崩御記〕延寶八年八月十九日乙亥、今朝寅上剋、太上法皇崩御也、寶算八十五才、申剋般舟院陽空長老來祝、口狀書一通持參、前例多候間、此度仙洞御火葬ニ願候、深草安樂行院ニ治御骨、骨堂も後

ゆるにこそ、かくても侍べかりしに、浮世の中には思をとゞめじとおもひ侍しかば、立離なんとし侍しほどに、新院〇崇德の御墓所ををがみ奉らんとて、白嶺と云所に尋參侍りしに、松の一むらしげれるほとりにくぎぬきしまはしたり、是ならん御墓にやと、今更かきくらされて物も覺えず、まのあたりみ奉りし事ぞかし、淸涼紫宸の間にやすみし給て、百官にいつかれさせ、後宮後房のうてなには、三千の翡翠のかんざしあざやかにて、御まなじりにかゝらんとのみしあはせ給ひしぞかし、萬機の政をたなごゝろににぎらせ給のみにあらず、春は花の宴を專にし、秋は月の前の興盡せず侍き、あに思きや今かゝるべしとは、かけてもはかりきや他國邊土の山中のおどろの下にくち給べしとは、貝鐘の聲もせず、法花三昧つとむる僧一人もなき所に、只嶺の松風の烈きのみにて、鳥だにもかけらぬありさま、見奉るにすゞろに泪をおとし侍き、始ある物は終ありとは聞侍しか共、いまだかゝる例をば承侍らず、されば思をとむまじきは此世也、一天の君、萬乘の主も、しかの如くの苦みを離れまし〳〵侍らねば、せつりもしゆだもかはらず、宮もわらやも共に果しなき物なれば、高位もねがはしきに非、我等も幾度か彼の國主ともなり給ひけんなれ共、隔生即忘して、すべて覺侍らず、只行て留り果べき、佛果圓滿の位のみぞゆかしく侍る、とにもかくにも思ひつゞくるまゝに、泪のもれ出侍しかば、

　よしや君昔の玉のゆかとてもかゝらん後は何にかはせん、と打詠られて侍き、盛衰は今に始ぬわざなれ共、殊更心のおどろかれぬるに侍り、

〔藪原北鯤隱岐國紀行〕隱岐國嶋前海士村、葛田山源福寺、眞宗二百石、後鳥羽天皇御堂ノ高一丈九尺ニ、四方ハ二間ニ二間半、丸木柱、白木造、カツヲ木柿ブキ、高欄キダ橋アリテ、外ハ丸木ノ矢來ナリ、御屋根ハ皆朽果テ、雨露尊容ヲケガシ奉レリ、軒ニハ蓬シノブ心ノマヽニ生茂リテ、尊體ハ大キナル瓶棺ニ納奉リテ、上ニハツヤアルサヾレ石ヲカキ上テ、下民ノ眸ニカヽラセ玉ソニゾ、オ

荒廢

掛畏岐山陵乃兆域乃内爾佛堂乎建天、死屍乎埋世在止中事任、仍今令所司委曲勘定、若事有實者、即破堂撥屍天、淨掃比奉仕志米此狀乎、參議正四位下行右大辨兼播磨權守大枝朝臣音人乎差使天聞奉出賜布、掛畏岐山陵乎聞食天、天皇朝延乎平安爾矜賜止恐美恐美毛申賜止波久申、

〔前王廟陵記 上〕今按畝傍山、今奈良西南六里、久米寺北、俗云慈明寺山是也、東北陵可百年以來、壞爲糞田、民呼其田字神武田、暴汗之所、爲可痛哭也、餘數畝爲一封、農夫登之、恬不爲怪、及觀之寒心、夫神武天皇繼神代草昧之蹤、東征平中州、闢四門朝八方、王道之興、治教之美、實創於此、我國君臣億兆、當致尊信之廟陵也、澆季至於此、噫哀哉、

〔大和廻〕畝傍山　今井八木の南道の四五町西にあり、里人は持明寺山と云、○中略神武の陵は、うねび山の艮に在、今はわづかに殘れり、田の中に有、里人は神武田と云、

〔和州舊跡幽考〕佐紀山に陵三四基あり、それが中に、神功皇后の陵といふものあり、外はいづれの御代の陵にやありけむわかちがたし、又云、今この神功皇后陵を見るに、年ふりにければにや、石棺土を出、埴輪草むらのかげにのこりたり、

〔山陵志〕安康陵、○中略又有呼爲西蓬萊山、今已犂爲田、惟其溝未埋處、環殘陵若干月然、蓋方其未毀、與東陵乾乎相望也、

〔山陵志〕花山陵、在石影、○中略三條陵乃列其側焉、按二陵並皆壞、難得其所、

〔撰集抄 一〕新院御墓白峯事
過にし仁安の比、西國はるばる修行つかうまつり侍りし次に、讚州みを坂の林と云所にしばらく住侍き、深山べの栭の葉にていほりむすびて、つま木こりたく山中のけしき、花の木末によわる風、誰とへとてかよぶこ鳥、蓬の本の鶉、日終に哀ならずといふ事なし、長夜の曉、さびたる猿の聲を聞に、そゞろに腸を斷侍り、かゝる栖家は後の世の爲としも侍らね共心そゞろに澄ておぼ

建佛堂

自餘山陵告文准此、

〔文德實錄十〕天安二年三月癸酉、宣命曰、天皇恐美恐毛美掛畏支深草山陵〇仁明爾奏賜止倍奏久、頃年怪異屢示、其由乎卜求爾、掛畏岐山陵乃御在所乃近地爾汙穢事觸行己止不止之所致止卜申利世、因茲參議左大辨從四位上藤原朝臣氏宗、右大辨從四位下藤原朝臣良繼等乎差使天奉出須此狀乎且聞食天、無咎祟志女賜倍波、使等乃申爾隨天、汙穢事可令糺潔支狀乎恐見恐毛見奏、

〔三代實錄三十一陽成〕元慶元年七月三日壬寅、比月炎旱、神功皇后楯列山陵成祟、遣使巡撿、守護義倉者、於倉下解鹿喫肉、百姓伐取南〇成務北〇神功二陵樹木三百卅二株、守倉人及諸陵官人科罪、　十日己酉、遣使於楯列山陵、申謝伐木解鹿之祟、

〔長秋記〕長承二年九月五日丙辰、禮部云、〇中略或人云、支天下之臣四人也、〇中略此中誰人先可死哉、余答云、忠宗卿死期近云々、〇中略抑忠宗卿下居於山階、朝暮往反、件所近天智天皇山陵、定經廻彼莊之間、自然致無禮歟、偏依此祟薨由所令存也、愚思件人、與彼山階論田畠云々、不可然由所聞也、小野齊尊僧都住醍醐山陵傍、依其祟死者、仁和寺覺行法親王、掘小松山陵有祟薨逝、彼時故民部卿俊明卿夢有行幸、怪問人、答云、小松帝依被破山陵、參大神宮被訟申、蒙裁許所還御、其執人可處死刑者、薨後不經幾程薨給云云、如此於山陵邊令致無禮、自今以後可懲止事也、

〔三代實錄十三淸和〕貞觀八年九月廿二日甲子、是日大納言伴宿禰善男、〇中略坐燒應天門當斬、詔降死一等、並處之遠流、善男配伊豆國、　廿五日丁卯、是日遣使於柏原〇桓武深草〇仁明山陵、告以配流善男等、深草御陵告文曰、〇中略善男、掛畏岐山陵爾平生爾奉仕留禮舊功、又每年爾八講會乎設天、山陵飾奉留勞等在爾依天、一等減天遠流賜布、又御陵乃前頭爾嘉祥寺乃食堂乎作天、汙穢事等在介利、因茲令破棄天潔久掃奉仕志牟、此狀乎從三位守權大納言兼右近衞大將藤原朝臣氏宗乎差使天聞奉出賜布、掛畏岐山陵乎聞食天、天皇朝廷乎平安爾矜賜止恐美恐毛美奏賜止波久奏、柏原御陵告文曰、〇中略善男、

火災

[illegible]

〔三代實錄十五清和〕貞觀十年二月十八日壬午、野火燒損田邑山陵、〇文德兆域中之樹木、廿五日己丑、詔下公卿及諸儒、博議山陵火災並爲禮制、從四位下行博士兼伊豫權守大春日朝臣雄繼議曰、禮記曰、有焚其先人之室、則三日哭、然則當據禮而行之、文章博士從五位下兼備後介巨勢朝臣文雄議曰、漢書曰、武帝建元六年四月、高園便殿火、帝素服五日、昭帝元鳳四年五月、孝文廟正殿火、帝及群臣皆素服、山陵失火未見故實、至于宗廟前聞如此、公卿本乎漢家之故事、酙酌禮度之所宜、取文雄議而奏、於是帝避正殿、服錫紵、撤去常膳、進御蔬菲、輟朝五日、公卿及諸近臣皆失彩飾、一准凶儀、遣使於山陵、告以事由、告文曰、天皇我掛畏岐田邑御陵爾恐美恐美毛奏賜倍止奏久、去十八日、不慮之外爾野火進引天御陵乎燒損介利、聞食天那加良驚怪憚畏己止無限量志、此驚畏留狀、奇怪比恐比津津介奉仕之事乎、大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣氏宗、從四位下行大學頭潔世王等乎差使天聞申爾奉出、但不愼護奉天致怠留御陵守等波介勘罪那倍賜波牟、掛畏岐御陵平久聞食天、天皇朝廷乎護幸比、國家無事久、矜助賜倍止恐美毛奏賜止波久奏、

〔新記東大寺要錄所引〕延喜十年七月十二日己酉、右京佐保、仁正皇后〇聖武后光明子聖武天皇兩山陵有火災、仍奉遣參議藤原朝臣宣方、左衛門佐平朝臣惟世等、令祈謝之、

〔扶桑略記三十白河〕永保二年五月廿日庚子、奉幣石淸水宮、被告神功皇后山陵樹木燒失之由也、

〔三代實錄十三清和〕貞觀八年八月十八日庚寅、分遣使者於諸山陵、告應天門火也、田邑山陵〇文德告文云、天皇我掛畏岐御陵爾恐美恐美毛奏賜倍止奏之、去閏三月十日夜、應天門、及東西樓爾有火災天皆悉燒失奴、其咎乎卜求波禮掛畏岐御陵乎犯穢世留事在、又猶火事可有、又疾事毛可有止卜申利、因茲恐畏天利申世禮止奉出給牟須留間爾、頻有穢事天至今延息禮利、因以去十四日巡撿留爾、御陵乃木數多久伐事阿利止撿申利、今御陵守等乎波隨法爾罪那倍賜牟須止爲申此狀、中納言正三位兼行陸奥出羽按察使源朝臣融、少納言從五位上良峯朝臣繼世等乎差使天奉出給布、此狀乎聞食天、平久安久護幸賜止恐美毛奏賜止波久奏、

〔章武朝臣記〕嘉永五年四月十三日、傳奏三條家ゟ招ニ應シ、爲名代章甫出頭之處、直接御尋之筋ニ付、可相成者後刻ニ而も直参候樣被命、依之申刻出頭、大納言實萬卿面會、近來風説有之候、南都ニ而掘山陵候犯人一條ニ付、内々武邊ヨリ役邊ヲ以テ打合之儀有之、乍内々殿下政通公江及言上之處、官外記之外ニ東坊城聰長卿、幷ニ章武等學者之邊ヲ以テ、勘例幷所存等可勘進旨被命候間、篤と勘考、不日可申上旨被命、左之書附被渡、

於奈良奉行所召捕候盜人、成務天皇陵内ゟ取出候物、幷一旦堀穿候跡、取計方等之事、

但堀穿候所如元埋置有之趣之事

〔奈良奉行調書〕嘉永五年十二月、和州添下郡横領村百姓嘉兵衛外四人、成務天皇御陵堀穿、曲玉朱管石等盜取候犯罪ヲ以テ、磔ニ處セラル、尤同人判決前死亡ニ付、鹽詰ニテ奈良町引廻シ候ナリ、

〔前王廟陵記上〕高野陵、(稱德)今按御陵山西北陵若是乎、往年有人、發此陵、奪陵中財之黨、身腫苦死、觀者恐還財于本處云、

〔日本書紀十五顯宗〕二年八月己未朔、天皇謂皇太子億計(仁賢)曰、吾父(市邊押磐皇子)先王無罪、而大泊瀬天皇(雄略)射殺、棄骨郊野、至今未獲、憤歎盈懷、臥泣行號、志雪讐耻、(中略)況吾立爲天子、二年于今矣、願壞其陵、摧骨投散、今以此報不亦孝乎、皇太子億計歔欷不能答、乃諫曰、不可、大泊瀬天皇正統萬機、臨照天下、華夷欣仰、天皇之身也、吾父先王雖是天皇(履中)之子、遭遇迍邅、不登天位、以此觀之、尊卑惟別、而忍懷陵墓、誰人主以奉天之靈、其不可毀一也、又天皇與億計、曾不蒙遇白髮天皇(清寧)厚寵殊恩、豈臨寶位、大泊瀬天皇、白髮天皇之父也、億計聞諸老賢、曰無言不讎、無德不報、有恩不報、敗俗之深者也、陛下饗國、德行廣聞於天下、而毀陵、翻見於華裔、億計恐其不可以莅國子民也、其不可毀二也、天皇曰、善哉、令罷役、

はしくあり、其跡とみえ、頂上大に凹にして、いかにも盗人の所爲の跡と覺ゆる、天子の陵なれど、西面にして谷の細川南を流れ、池なとの跡とも覺えず、然とも祟にて上賀茂近きとて、柏原へうつされし程の所なれば、今少入念あらんか、甚窮窟の地なり、大龜谷谷口町の北側、水茶屋の庭より入、うらの山麓にあり、此茶店陵戸と覺ゆる、天明大火後、大火の事、禁裏の女中なとより何か俗事申なし、九條殿の御領にて、深草の莊屋長谷川太郎兵衛此陵の木をきりし故、九條殿御相續の障りなと丶異說も出で、此御陵へ度々御內々の御使あり、千年御忌にも御內使立し故、此陵上の凹を平均して陵のかたちを失ひ、茶店のうらより至る所を分道に直し、天子の御陵を東面にしたり、猶糺すべし、

〔公衡公記〕弘安十一年二月廿五日、官人章貞來、召㆓取山陵犯人㆒（繼體天皇、攝津國島上陵、）勅賞事申入云云、付㆓長官㆒申入、自㆓內々㆒又可㆓存知㆒之由示㆑之、贓物（御鏡以下）持來之、然而明後日伊勢幣家君御神事也、仍不㆓取入㆒返給、仰㆓聞食之由㆒畢、

〔高國記〕柳本高屋合戰之事

其時分河內國ノ守護ハ畠山稙長ナリ、父尙慶十八歲ニテ入道シト山ト云、高屋ノ城ヲトリ立テヽ子息ニユヅリ、紀州廣ト云所エ隱居シケル、此高屋ノ城、昔安閑天皇ノ御廟ナリ、然レバ要害ヨケレバトテ城ニ築立ラレケレドモ、本城ニハ恐レテ畠山殿モ二ノ丸ニ住シケル、柳本此時勢ヲ分テ、二千餘人高屋城エ馳向ヒ、其マヽ押寄責ケレバ、稙長難儀シ、已ニ被㆓責落㆒ト見ユル事度々也、○中略此城ニ一ノ不思議アリ、安閑天皇ノ御廟ヲ城ニ用ラレシ故ニヤ、大和路ノ水越ト云道ヨリ、城エ入ル者生テ歸ル事ナシトテ、水越路ヲムカシヨリ明道ニテ、手向ノサタモナカリケル、

〔前王廟陵記上〕古市高屋丘陵、（○安閑）或曰、今高屋村城山是也、（明應中、畠山尙慶築㆑城、）或曰、近年土民發㆑陵、得㆓古代器物等㆒、

上記如此、

○按ズルニ諸陵雜事注文ニ、大和青木御陵天武天皇御陵トアリ、又西大寺三寶料田畠目錄ニモ、御廟東邊二段青木字トアリ、阿不幾ハ即チ青木ナルベシ、

〔仁部記〕文永十二年二月十七日戊午、柏原山陵堀穿事、舊年窮臘被實檢了、件覆奏文、今日可奏聞也、

○中略

實檢言上柏原山陵被堀發事

御在所嶺、東西一丈三尺許、南北一丈六尺餘所堀發也、以土假以塞之、

右依宣旨實檢言上如件、抑件山陵登十許丈、壇廻八十餘丈、但於陵中者不及實檢、仍注在狀謹解、

文永十一年十二月廿九日　諸陵寮

頭賀茂朝臣在為

使　左大史小槻宿禰秀氏

〔山陵志〕按柏原名久廢、其地難認、廟陵記引山槐記指南云、稻荷山南、則極樂寺趾、今是爲寶塔寺、其南則霞谷、是仁明帝陵所也、又其南伏見之山、有柏原焉、是桓武帝陵所也、據式條兆域及山槐記所載、閱當時地圖、即今之伏見城山、古御香、大龜谷等地、總是皆柏原、則陵之所在、想當在城之中央、蓋築城時、爲所毀壞、又按仁部記、文永十一年、以盜發柏原山陵、諸陵寮上言、其狀曰、御所之巓、東西一丈三尺、南北一丈六尺發堀、上似塞以石、又云、件陵登十丈、壇圍八十丈、明是全體必不卑小、而今問其所、終于難認、則云壞於築城果然也、噫其城亦已墟、桑海之感又奚耐焉、

〔寺井菊居筆記〕柏原陵、いろ〳〵近世說ありて、今の所には有べからず、桃山の内なぞ申說もあり、予明和九辰年三月、至りて御陵へも上り見しに、文永中、盜人御陵をあばきし事、名勝志にく

〔實躬卿記〕正應六年四月十二日、抑彼卿定〇俊相語曰、先日官人章文、於河東邊行廣法師ヲ召取、其故者天武天皇堀御廟取彼御頭臨下取之由風聞、仍召取云云、件御頭納櫃持之取之、奉置法勝寺阿彌陀堂云云、此事實彼御頭歟、彼實否未決、件等事後定可申沙汰之由、先日關白被仰、凡無才學事也、嘉禎堀彼御廟有盜人、官人召取之渡大路、自彼手傳取又所相傳也、白狀云云、此事爲賴藤勅使被問諸人云云、先阿彌陀堂之御不穩便、實否落居以前奉堀、彌宜□佛由人々申之由所相語云云、件頭大過普通之由章文申入云云、

〔阿不幾乃山陵記高山寺文書〕　里號野口

盜人亂入事文曆二年三月廿日、廿□□兩夜入云云、

件陵形八角、石壇一通一町許歟、五重也、此五重ノ峯有森十餘株、南面有石門、門前ニ有石橋、此石門ヲ盜人等纔人一身通許切開、御陵ノ內ニ有內外陣、先外陣方丈間許歟、皆馬腦也、天井高七尺許、此モ馬腦、無繼目一枚ヲ打覆云、內陣ノ廣、南北一丈四五尺、東西一丈許、內陣有金銅ノ妻戶、廣左右扉各三尺五寸、七尺、扉厚一寸五分、高六尺五寸、左右ノ腋柱、廣四寸五分、厚四寸、マクサ三寸、鼠走リ三寸、冠木、廣四寸五分、厚四寸、已上金銅扉ノ金物六、內小四三寸五分許大二四寸許皆金已上形如蓮花古不ノ形師子也、內陣三方上下皆馬腦歟、朱塗也、御棺張物也、以布張之、入角也朱塗、長七尺、廣二尺五寸許、深二尺五寸許也、御棺ノ蓋ハ木也、朱塗、御棺ノ床ノ金銅厚五分、互上ヲ彫透、左右ニ八、尻頭ニ四、クリカタ四、尻二、頭二、御骨首ハ普通ヨリスコシ大也其色赤黑也、御脛骨長一尺六寸、肘長一尺四寸、御棺內ニ紅御衣ノ朽タル少々在之、盜人取殘物等被移橘寺內、石御帶一筋、其形ハ以銀兵庫クサリニシテ、以種々玉飾之、石二アリ、形如連錢、表手石、長三寸、石色如水精、似玉帶、御枕以金銀珠玉飾之、似唐物、依難及言語不注之、假令其形如鼓、金銅桶一納一斗許歟居床、其形如禮盤、鏁少々クリカタ一在之、又此外御念珠一連在之、三匝ノ琥珀御念珠ヲ以銅ノ糸貫之、而多武峯法師取了、又彼御棺中ニ、銅カケカケ二在之已

十一月廿五日癸卯、今日實撿山陵之使、右少史時重歸洛、信實陳申云、信實弟子權上座玄實、爲造持佛堂、奈保山石少々所引也、聖武天皇山陵者在佐保山所在、此山者元正天皇山陵也、所曳之石、兆域之外也者、東大寺諸司申云、佐保山奈保山是一所異名也者、難一決、子細見于問註記了、

〔山陵志〕聖武陵、○中略按今爲眉間寺地、爲之所殘削無完也、然猶撿其跡、則後溝圓、而前溝方、所象宮車尚有存焉、

〔山陵考略〕式○延喜佐保山南陵、聖武天皇、在大和國添上郡、奈良の北、法蓮村眉間寺の山上に在、久安年中に、當寺を建て後、陵地を削れる事は山陵志に委し、但今も猶後面には環池の跡みえたり、此陵は東大寺より守護して、祭祀懈怠なし、陵地の全くして、事實の分明ならぬには猶勝れりと云べし、按に、此地戰國の時、松永氏城を築くと云傳ふ、損壞も蓋當時の所爲にも有べきなり、

〔百練抄十四〕天福元年三月七日辛亥、今夜群盜亂入鳥羽安樂壽院法華堂、○鳥羽搜取銀御塔幷種々寶物云々、

〔百練抄十四〕嘉禎元年四月八日庚午、或人云、去月廿日、以大和國高市郡天武天皇御陵爲群盜被穿鑿搜取重寶云云、多是金銀之類云云、　二年四月十五日辛丑、爲實撿天武天皇御陵被遣勅使、參議左大辨爲經、諸陵頭惟宗盛能、率寮下部參內、稱康平之例、不及穢氣沙汰歟、　曆仁元年二月七日癸未、中大夫判官友景、相具犯人天武山陵盜人也參大理門前、見物之車塞路壯觀也、

〔帝王編年記二十四〕嘉禎元年四月十一日、大和國高市山陵、去比爲盜人被穿破、近邊南都幷京中諸人、多入陵中、奉拜御骨等、天武天皇山陵也、

〔明月記〕文曆二年○嘉禎元年四月廿二日甲申、發山陵盜事、天武天皇大內山陵云云、只白骨相連、又御白髮猶殘云云、　六月六日、暐寺入來之次、談奉見山陵者傳々說、每聞增哀慟之思、於御陵者又奉固由有其聞、定僞略歟、於女帝御骨者、爲犯用銀筥、奉弃路頭了、雖塵灰猶可被尋收歟、等閑沙汰可恐事歟

使右衛門權佐藤原朝臣實光

件文書等下給天相尋之處、彼淸水寺近代全無其跡、又立屋里在廣隆寺邊之由寺僧等所申上也、仍不可有一定事歟、但喜多院造作之間、小松山陵、時々鳴動之由僧都所被語也、今案件山陵四至、強不可被尋、只今度彼喜多院造作之間、爲面築垣、小松山陵之東邊、爲下人頗被堀破也、被修補件所者可宜歟、其由見參之次奏聞了、

〔百練抄五 堀河〕嘉承元年二月廿八日、發遣參議宗忠卿於後田邑陵、〇光孝謝申堀損之由、去十三日、令左衛門權佐實光實撿之、覺行親王修造喜多院之間、誤堀損云云、任式文可修固之由宣下、

〔本朝世紀〕久安五年十月卅日戊寅、今日右少史惟宗時重下向南都、是爲實撿聖武天皇山陵也、去十日、東大寺所司等訴申云、件山陵去七月、爲興福寺上座信實被掇堀之由云云、

左辨官下大和國

應遣使實撿言上東大寺所司等言上堀穎本願聖武天皇山陵運取數多大石等事

使右少史惟宗時重　從伍人

左史生　從參人

右史生　從參人

使部貳人　從各壹人

副下東大寺解狀幷山陵給面延喜式文等、

右左大臣宣、奉勅、堀穎彼山陵、運取大石等之事、爲令實撿言上、差件人等、宛使發遣、如件者、國宜承知、使者經彼之間、依例勤供給、官符追下、

久安五年十月卅日　大史小槻宿禰師經

右少辨平朝臣範家

是依天氣、此次聊被破件山陵邊事、依有可廻見之由仰也、雖然已臨夜陰不知東西、空居緣樹之下、只尋破損之趣許也、覺意僧都申云、故覺行法親王、被作北院僧房之時、山陵與彼房面築垣、相攝之間、下人頗犯其土、人々見付（天）制止了、但如延喜式者、件山陵四至又不分明也、仍前日遣右衞門權佐實光、令實撿之處、四至不分明由注申了者、以此旨可奏聞者、今日告文之趣、雖有破損之疑、未有一定由、仍且被謝申也、及深更歸來、且奏此旨了、（○中略）

實撿後田邑并村上二陵破損事

後田邑陵（○光孝）

新堀損陵東邊三箇所

一所南北十五丈五尺（廣所一丈八尺、深所八尺餘、）

（狹所八尺餘、淺所三四尺許、）

一所南北八丈五尺（廣所一丈三尺、深所六尺、）

（狹所七八尺許、淺所三四尺許、）

一所南北二丈二尺（廣所一丈、深所五尺、）

（狹所六尺許、淺所二尺、）

一喜多院丑寅築垣外北小路（東西十五丈五尺、廣一丈二尺、）

但四至不分明之由、寺家所申也、

邑上陵（○村上）

加實撿之處、全無破損、四至不分明之由寺家同所申也、

右依宣旨實撿如件

長治三年二月十三日

諸陵寮官人代山末吉

掘損

美恐美毛申賜波止久申、

〔三代實錄清和二十七〕貞觀十七年七月三日癸未、遣從四位上行民部大輔潔世王、散位從五位下有能王、向楯列山陵神功申謝百姓伐陵中樹、兼祈甘雨、

〔扶桑略記後三條二十九〕延久二年庚戌正月十三日、成務天皇神功皇后等山陵兆域內狩獵、幷伐損樹木之輩、會赦否由被問法家、其後件犯人等、令撿非違使尋捕、

〔中右記〕大治五年五月九日庚戌、今日被立天智天皇山陵使、大納言能俊卿、中略去年十二月比、備前守忠盛朝臣郞等、切彼山陵樹木也、度々被尋問之處、依不承伏、沙汰之間、自及數月也、但一日令忠盛朝臣召進彼下手人也、仍此使也、可被行罪之由被申云云、

〔扶桑略記後冷泉二十九〕康平三年六月二日、河內國司言上盜人撥推古天皇山陵之由、

〔扶桑略記後冷泉二十九〕康平六年五月十三日、發遣山陵使、是依去三月盜人撥池後成務山陵掠奪寶物也、九月廿六日、被定山陵寶物等如舊可返納之狀、紀傳明經等諸道勘文、幷犯人罪名被勘法家、十月十七日、興福寺僧靜範、坐山陵事配流伊豆國、緣坐者十六人、僧俗共配流安房常陸佐渡隱岐土佐等國、此日立興福寺使、參議左大辨藤原經家卿、少納言源師賢等爲遣流寺家僧被告其由也、

〔百鍊抄後冷泉四〕康平六年九月廿六日、諸卿定申諸道勘申、山陵寶物等可返置議法、十二月十五日盾列山陵成務修覆、幷返納盜人所取出之寶物、

〔中右記〕長治三年嘉承元年二月十九日、小松山陵光孝使可被立、日時使右大將被定申、來廿八日是仁和寺法親王、去年被造房舍之間、西築垣入山陵四至內、頗被堀破了、其後彼山陵頻鳴云云、又入滅、近日公家玉體不豫之間、祖廟成祟之由見御卜、遣右衞門權佐實光實撿之處、事已實也、爲被申件事可被立山陵使云云、予入其使、次官保隆者、廿八日、午時參內、是爲勤仕小松山陵使所參入也、予給告文、出從陽明門、行向後田邑山陵、小松陵也先二拜讀告文、又二拜、了令燒幣物、爰仁和寺別當權大僧都覺意來、

久護賜比矜賜倍止恐美恐美毛申賜久止申、

〔三代實錄清和十三〕貞觀八年六月廿九日壬寅晦、先是大和國言、楯列山陵〇神功守等多伐樹木、神祇官卜云、炎旱之災、實因伐木、是日遣使申謝、告文云、天皇我掛畏岐御陵爾恐美毛申賜部止申久、比來涉旬天不雨之天農業失便利、是有何祟咎天所致乃災奈良牟止左右爾憂歎岐賜布間爾、大和國司上須久、其掛畏岐御陵乃木乎陵守等數多久伐損利、依此天旱災波所致奈留之度部申世利、此爾驚畏利天御卜爾令問求爾此事實奈利止卜申世利、是以謹恐惟己止限量毛奈之、犯過留陵守幷能不巡撿留諸陵司等乎波今任法爾勘倍賜比罪奈倍賜波牟止須、此狀乎參議正四位下行右衞門督兼讃岐守藤原朝臣良繩、散位從四位下秀世王等乎差使天謝申天畏申爾奉出須、掛畏岐御陵平久聞食天、時毛換佐須甘雨令零女賜比、國家無事久、農稼無妨久矜惠比助波牟止恐美毛申賜波久止申、十月十四日乙酉、遣使於山階〇天智田邑〇文德等山陵、申謝陵中樹木多被伐損之狀、告文曰、天皇我掛畏岐山階乃御陵爾恐美恐美毛申賜止申久、掛畏岐御陵乃木乎陵守數多伐損世利、依此天犯過留陵守幷能不巡撿留諸陵司等乎任法爾勘賜比罪奈倍賜倍岐狀乎去六月七日爾、從三位守權大納言兼右近衞大將藤原朝臣氏宗等乎差使天謝申天畏美申爾奉出賜倍利、而今勘賜爾諸陵戶等或畏罪天逃退、或依病不參、仍其身侍留限波且任法爾勘賜比罪奈倍賜部、但被病及逃退輩波相續勘賜牟此狀乎、同前使氏宗乎差天聞申爾奉出賜布、掛畏岐御陵平久聞食天、天皇朝廷乎護幸倍賜比、天下無事久矜賜倍止恐美恐美毛申佐久止申、又天皇掛畏岐田邑御陵爾恐美恐美毛申賜止申、掛畏岐御陵乃木乎陵守等數多伐損世利、依此天犯過留陵守幷能不巡撿留諸陵司等乎任法爾勘賜比罪奈倍賜倍岐狀乎六月廿一日爾、正三位行中納言兼陸奧出羽按察使源朝臣融乎差使天謝申之畏利申爾奉出賜倍利、而今勘賜爾陵戶等或畏罪天逃退多利、仍其身侍留限波且任法爾勘賜罪奈倍賜都、但逃退輩波相續勘賜牟此狀乎、參議正四位下行左大辨兼勘解由長官南淵朝臣年名乎差使天聞申爾奉出賜布、掛畏岐御陵平氣久聞食天、天皇朝廷乎護幸倍賜比、天下無事久矜賜倍止恐

賜幣留依天之所苦平痊天、國家無事久可有止恐美恐美毛申賜久止申、

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年四月己未朔、楯列陵守等言、去月十八日食時、山陵鳴二度、其聲如雷、即赤氣如飄風、指離飛去、申時亦鳴、其氣如初、指兌飛亘、遣參議正躬王加檢察、伐陵木七十七株、至楉木等不可勝計、便即勘當陵守長百濟春繼上奏矣、　己卯、使參議從四位上藤原朝臣助、掃部頭從五位下坂上大宿禰正野等、奉謝楯列北南二山陵、依去三月十八日有奇異、搜檢圖錄、有二楯列山陵、北則神功皇后之陵、倭名大足姬命皇后南則成務天皇之陵、倭名稚足彥天皇世人相傳、以南陵爲神功皇后之陵、偏依是口傳、每有神功皇后之祟、空謝成務天皇陵、先年緣神功皇后之祟、所作弓劍之類、誤進於成務天皇陵、今日改奉神功皇后陵、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年十二月庚辰、獻楯列山陵神寶曰、天皇我詔旨掛畏支神功皇后御陵留申給閇止申久、御心留念行須事有留依天、御寶弓劍等設備天、吉日良辰乎擇天、參議從四位上式部大輔兼讃岐守滋野朝臣貞主乎差使賜天奉出此狀乎聞食天、御心留念行如久留國家乎平久護比於賜閇止恐美恐美毛申賜久止申、

〔續日本後紀二十仁明〕嘉祥三年三月壬辰、卜食申柏原山陵〇桓武、告祟、仍遣使奉宣命曰、天皇我大命掛畏岐柏原乃御陵留申賜倍止申久、頃間物恠在留依天卜求禮波、掛畏岐御陵爲祟賜倍利止申利、因玆恐畏己止无波〇波恐極誤若久波御陵內留犯穢世留事毛也在止令巡察无止爲天毛奈、參議從四位上行左兵衞督藤原朝臣助、從四位下行宮內大輔房世王等乎差使天奉出須此狀乎聞食天、御體平安留、寶祚无動久護賜比於賜倍止恐美恐美毛申賜久止申、　甲午、復奉宣命曰、天皇我大命止掛畏岐柏原乃御陵留申賜倍止申久、頃間御占申留爲祟賜倍留依天、使臣乎奉出天令巡察留留、御陵內留斫樹留事在祁利、此乎乍聞食恐畏萬利天、御陵司等乎波法隨留勘賜比、御陵守等乎波替退賜己止訖奴、是以參議從四位上行左兵衞督藤原朝臣助、民部大輔從四位下基兄王等乎差使天、申謝奉出此狀乎聞食天、天皇朝廷乎御體平安留、寶祚无動

〔寶麗卿記〕文久三年三月廿一日丁卯、今日神武帝幷神功皇后等山陵使發遣日時定、上卿新大納言、實 資辨博房、奉行豐房朝臣、宣命使菊亭中納言、實 攘夷御祈請云云、

〔扶桑略記二十九後冷泉〕康平六年五月廿九日、軒廊御卜、深草山陵(○仁明)鳴之異也、

〔中右記〕天仁元年八月十五日、晚頭參內、是依可行軒廊御卜也、近曾八幡宮言上、大和國池後池上(○成)務山陵鳴動事可卜申者、予於仗座行御卜、如常、官卜申云、神事不信、公家御愼、寮又大略同意也、付頭爲房令奏、仰云、早可被立山陵使也、件日時等可定申者、則仰權辨爲隆令勘日時、來廿日者、則置勘文召外記召例文、令權辨書使定文、使宰相俊忠、次官內藏助政仲、

〔葉黃記〕寬元四年八月十七日癸卯、天智天皇陵鳴動事、被立山陵使云云、

〔百練抄十後鳥羽〕建久五年七月廿三日壬午、被立後白河院御廟山陵使、彼御廟去月廿日依鳴動事、

〔百練抄十六後深草〕實治元年六月廿三日甲辰、大宮大納言公相參仕、被發遣山陵使、先被行定、使二位中納言、眞敎辨親賴朝臣也、去頃天智天皇御陵依鳴動也云々、

〔類聚國史三十六帝王〕弘仁七年六月壬戌、神祇官言、伐高畠山陵(○桓武后藤原乙牟漏)樹崇見龜兆者、勅、朕(○嵯峨)情所敬、唯在山陵、而有司不勤督察、致斯咎徵、求之國典、其刑非輕、自今以後、嚴加禁斷、

〔類聚國史三十六帝王〕天長四年十一月癸未、告柏原山陵(○桓武)詞云、天皇(○淳和)畏畏毛申賜閇止申久、御陵木切禮留事、撿見使等申久、御在所上爾木生多利止申爾依氐、掃却介淨奉牟我爲爾、參議正四位下直世王、左京大夫正四位上石川朝臣河主等乎差使天、奉出須止申賜布狀乎畏畏毛申賜波久止申、

〔續日本後紀十仁明〕承和八年十月乙未、詔曰、天皇我詔旨止掛畏支柏原乃御陵爾申賜倍止申久、頃者御病發天惱苦比大坐、依此天卜求禮波、掛畏支御陵乃木伐幷犯穢流祟有利、讀經奉仕波無咎久可有卜申、乍驚恐畏流狀乎差使參議從四位下大和守正躬王、右近衞中將從四位上藤原朝臣助等天奉出、卜申我己止久讀經毛令奉仕、又巡見撿天犯狀乃隨爾山陵守等乎波勘賜牟、此狀乎平久聞食天、護賜比矜

> 祈國家平安

獻御書也、依代々例、御侍讀左大辨菅原益長卿被作進御書、御清書宸筆也、舊例如此、今度三箇所也、後白川院山陵法住寺使四條宰相隆遠卿、次官右少將藤原成任、後深草院深草法華堂使正親町宰相中將持季卿、次官左衛門權佐藤原親長、後小松院泉涌寺使左大辨益長卿、次官左少將藤原季春等也、藏人權右中辨俊季奉行之、自禁中使被進發云々、

〔吉續記〕文永五年六月廿二日、今日依異國事、〇元寇被發遣山陵使、頭中將奉行也、上卿內府被參陣、御陵七ヶ所告文、右少辨經業草、使皆參之後、內府著仗座、頭中將參進軾、可定申日時幷使事之由仰之、次召辨頼親被仰日時事、主上〇龜山內々有出御中門被御覽、〇中略使著仗座賜告文、〇中略

山陵使次第

楯列池上〇神功
　權中納言源朝臣通頼
　皇后宮少進橘長宣
大內山〇宇多
　參議藤原朝臣高定
　紀伊守橘朝臣兼朝
法住寺〇後白河
　參議源朝臣具氏
　散位源朝臣則有
金原〇土御門
　宮內卿藤原朝臣重氏
　散位源朝臣則雅

山階〇天智
　權中納言藤原朝臣長雅
　前能登守高階朝臣泰遠
圓宗寺〇後三條
　參議源朝臣雅言
　散位源朝臣雅範
大原〇後鳥羽
　參議藤原朝臣公孝
　左近將監源朝臣頼基

可有止思食天、參議大和守從四位下正躬王乎差使氏奉出狀乎聞食天、天皇朝廷乎無動久大坐米、國家乎平久護賜比助賜止倍恐美恐毛申賜止久申須、是日遣宣命使於山科○天智柏原○桓武兩山陵、賽祟焉、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年二月十七日己巳、勅遣參議從四位下守右大辨大枝朝臣音人、從四位下行中務大輔忠範王等、向山階山陵、○天智告以神靈池水沸騰、預防災害、告文云、天皇我詔旨留坐、掛畏支山階御陵留申賜止倍申久、自去年至于今月、天變地災不止、加以肥後國阿蘇郡留在流神靈池無故沸溢利、乍驚卜求波禮兵疫乃事可有止申利、自此之外毛留物恠亦多、依此天左右留念行留、掛畏岐御陵乃護賜留平依天、無事久可有止思食天、去去月留差使天奉出之无止支、然乎忽留依有穢天奉出古止不得留奈利支、今吉日良辰乎擇定天、參議從四位下守右大辨大枝朝臣音人、從四位下行中務大輔忠範王等乎差使天、奉出須、此狀乎聞食天、天下平介久群臣忠心乎懷岐、上下有序利、兵疫不發天之實祚無動久護賜比、堅磐常磐留矜幸倍賜止倍恐美恐毛美申賜止波久申、參議正四位下行右衞門督兼讚岐守藤原朝臣良繩、從五位上行兵部少輔源朝臣直等、向柏原山陵、○桓武從三位守權大納言兼右近衞大將藤原朝臣氏宗、從五位上行民部少輔源朝臣穎等、向嵯峨山陵、○嵯峨大納言正三位兼行民部卿太皇太后宮大夫伴宿禰善男、散位從四位上茂世王等、向深草山陵、○仁明參議正四位下行左大辨兼勘解由長官南淵朝臣年名、從四位上行侍從利基王等、向田邑山陵、○文德告文一同山階山陵、

〔三代實錄二十六清和〕貞觀十六年九月五日庚寅、遣參議從四位上行左兵衞督源朝臣能有、從四位上行伊勢守基棟王、向柏原山陵、申謝風水災、

〔園太曆〕康永四年八月八日、傳聞、今日爲彗星御祈、發遣山陵使、○中略深草、後深草、後伏見、御同所、侍從三位實益卿也、御書在成卿草之、宸筆御淸書、上皇御束帶有御拜、御書自寢殿東面妻戶被出之、

〔康富記〕文安元年三月十一日辛酉、是日被立山陵使者也、去年九月內裏炎上以後、今年甲子也、旁被

〔續日本後紀八仁明〕承和六年十二月辛酉、天皇御建禮門、分遣使者、奉唐物於後田原、〇光仁八嶋、〇崇道天皇早良楊梅、〇平城柏原〇桓武等山陵、庚午、天皇御建禮門、奉唐物於長岡山陵、〇桓武后藤原乙牟漏爲漏先日之頒幣也、

〔三代實錄一清和〕天安二年十月廿三日庚戌、遣外從五位下行陰陽助兼陰陽權博士笠朝臣名高、鎭謝眞原山陵、〇文德

〔言成卿記〕文久三年二月廿四日、今日未刻、神武帝山陵使、奉向陵前誦宣命、刻限主上〇孝明著帛御服、下御東庭、被准四方拜云云、令向于大和畝火山方給御拜云云、

祈疾

〔續日本紀十聖武〕神龜五年八月丙戌、天皇御東宮、緣皇太子病、遣使奉幣帛於諸陵、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶七年十月丙午、勅曰、頃日之間、太上天皇〇聖武枕席不安、寢膳乖宜、〇中略遣使於山科、〇天智大内東西、〇天武持統、安古、〇文武眞弓、〇岡宮天皇草壁奈保山東西〇元明元正、等山陵、及太政大臣〇藤原不比等墓、奉幣以祈請焉、

祈災異

〔類聚國史三十六帝王〕天長五年八月辛未、爲有天地災變、奉幣柏原先陵、〇桓武祈請之、其詞曰、天皇〇淳和恐美恐美毛申賜止申久、頃間天地變異有留依天、左右爾念爾、掛畏支天皇我朝廷乃護賜比矜賜布爾依天之、平久介無事久有倍之止念賜天奈毛、大納言正三位良岑朝臣安世、左京大夫正四位上石川朝臣河主等差使天、護賜比矜賜布倍支狀乎恐美恐美毛申賜波久止申、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年六月己酉、物恠見于内裏、柏原山陵〇桓武爲祟、遣中納言正三位藤原朝臣愛發等於山陵祈禱焉、

〔續日本後紀十仁明〕承和八年五月壬申、詔曰、天皇我詔旨留坐、掛畏支神功皇后乃御陵爾申賜閉止申久、頃者在肥後國阿蘇郡神靈池無故涸減卅丈、又伊豆國爾有地震之變、作筮問求禮波旱疫之災、及兵事可有止申、自此之外毛爾物恠亦多、依此左右爾念行爾、掛畏支神功皇后乃護賜比助賜牟爾依天、無事久

而更依人告(氏)破却之事如本記成、此(毛)亦無禮之事(奈利)、今如前改正之狀、差參議正四位下藤原朝臣緒嗣、毋(弼)毋(毛本)申賜(久止)奏、是日宮中戒嚴、

告外蕃來朝

〔續日本紀(孝謙十八)〕天平勝寶四年閏三月乙亥、遣使於大內(○天武)山科(○天智)惠我(○延喜諸陵式、仲哀應神允恭三天皇陵、並稱惠我、)直山、(○延喜諸陵式、元明元正二天皇陵、並稱奈保山、)等陵、以告新羅王子來朝之狀、

告火災

〔玉海〕壽永二年五月十五日戊寅、今日被立佐保山陵(○聖武)使、被謝申東大寺大佛燒損、并近日修補事云々、

○按ズルニ、山陵ニ告グルハ、其事多端ニシテ、各部各篇ニ散見セリ、即位、皇太子ノ篇及ビ政治部ノ改元篇、禮式部ノ元服篇等ニ、各告祭ノ事アルガ如シ、

祭陵

〔延喜式(中務十二)〕凡臨時遣山陵使侍從次侍從、若致闕怠、一准闕荷前使之例、

〔日本書紀(天武二十八)〕元年七月壬子、先是軍金綱井之時、高市郡大領高市縣主許梅、倐忽口閉而不能言也、三日之後、方著神以言、吾者高市社所居名事代主神、又牟狹社所居名生雷神者也、乃顯之曰、於神日本磐余彥天皇之陵、奉馬及種々兵器、(○中略)言訖則醒矣、故是以便遣許梅而祭拜御陵、因以奉馬及兵器、

〔續日本紀(文武一)〕二年正月庚辰、遣直廣參土師宿禰馬手、獻新羅貢物于大內山陵、(○天武)

〔續日本紀(文武四)〕慶雲四年七月庚子、有事于大內山陵、(○天武)

〔續日本紀(聖武十)〕天平二年九月丙子、遣使以渤海郡信物、令獻山陵六所、

〔續日本紀(聖武十四)〕天平十四年五月庚申、遣內藏頭外從五位下路眞人宮守等、賷種々獻物奉山陵、

〔續日本紀(聖武十六)〕天平十七年五月戊辰、奉幣帛於諸陵、

〔續日本紀(聖武十七)〕天平二十年十二月甲寅、遣使鎭祭佐保山陵、(○文武后藤原宮子娘)度僧尼各一千、

〔續日本紀(孝謙十九)〕天平勝寶六年三月丙午、遣使奉唐國信物於山科陵、

〔日本書紀二十九天武〕八年三月丁亥、天皇幸於越智、拜後岡本天皇〈〇齊明〉陵、

〔小右記〕永觀二年十月廿七日癸卯、辰時許參院、〈〇圓融〉令修諷誦於七箇日、〈寺家〉巳時參御邑上山陵、〈〇中略〉留御車於鳥居外、即下御、余候御劒、前行之、置御座、〈〇下略〉

告祥瑞

〔文德實錄二〕嘉祥三年十月己酉、遣中納言正三位源朝臣定、左京大夫從四位上正行王向山科山陵、〈〇天智〉散位從五位下春原朝臣末繼、内舍人從六位下安陪朝臣弘行向前田原山陵、〈〇春日宮天皇施基〉右京大夫從四位下藤原朝臣諸成向後田原山陵、〈〇光仁〉參議正四位下滋野朝臣貞主、掃部頭從五位下滋野朝臣善蔭向柏原山陵、〈〇桓武〉中納言從三位源朝臣弘、彈正大弼從四位上藤原朝臣衞向楊梅山陵、〈〇平城〉中納言正三位安倍朝臣安仁、從四位下宮内大輔房世王向嵯峨山陵、〈〇嵯峨〉從三位大藏卿平朝臣高棟、散位從四位下藤原朝臣輔嗣向大原山陵、〈〇淳和〉參議從四位上伴宿禰善男、侍從從五位下藤原朝臣諸葛向深草山陵、〈〇仁明〉告以賀瑞之由、策文曰、天皇恐見恐見毛掛畏支山陵爾申賜倍止申久、維嘉祥三年八月十七日爾公卿等奏久、世間攝津國美作國備前國并獻白龜利、石見國獻甘露禮久乎進止奏利世、如此支希世留大瑞波、是薄德乃可令感致支物爾波非須、掛畏支山陵乃慈賜比示賜倍留物奈利止為天奈毛、貴喜比受賜利畏萬留狀乎進出、恐見恐見毛申賜波久止申、

告事變

〔類聚國史三十六帝王〕大同五年九月丁未、遣使告于柏原陵、〈〇桓武〉曰、天皇〈〇嵯峨〉御命坐、掛畏支柏原大朝庭爾申賜止申久、内侍尚侍正三位藤原朝臣藥子者、初太上天皇〈〇平城〉乃東宮止坐之時爾、東宮宣旨止為天仕賜比支、其為性乃不能所乎知食氏退賜比去賜氏支、然物乎百方趁逐氏、太上天皇爾近支奉氏、非御言事乎御言止云都都、褒貶任意氏、莫所恐憚、又萬代宮止定賜之平安京乎毛棄賜比、停賜氏之平城古京爾遷左止奉勸氏、天下乎擾亂百姓乎亡弊、又其兄仲成恃己妹勢氏、以虛詐事親王夫人乎凌侮氏、棄家乘路氏東西辛苦世牟之、如此罪惡不可數盡、因玆藥子者官位解氏、自宮中退賜、仲成者佐渡國權守退賜比都、又續日本紀所載乃崇道天皇〈〇早良〉與贈太政大臣藤原朝臣〈〇種繼〉不好之事、皆悉破却賜氏支、

生絹參拾陸疋參丈五尺

黑染絹拾疋

糸參拾絇參兩

麻布佰貳拾參端

麻佰貳拾參斤

倭文拾伍端伍疋

黑葛參拾陸斤

木綿參拾捌斤捌兩

黑鷹肆拾伍枚壹丈陸尺

中取一具高二尺、弘各三尺、

右件幣料依例所請如件謹解

天治二年十二月□日

頭兼算博士越後介三善朝臣

〔年中行事歌合〕三十四番

右　荷前使十二月廿三日　宗信法眼

かしこしなのさきの箱をになひもて年にかはらずたつる使は○中略

荷前とは、先皇の御陵へ、年の終に幣帛を奉らせたまふなり、

〔天書神武二〕十二年六月、行幸于日州、拜皇祖皇考等陵、令守護之、

○按ズルニ、神武天皇ノ、日向ニ行幸アリテ、祖陵ヲ拜シ給フコト、日本書紀、古事記、古語拾遺等ニ見エズ、疑フ可シ、姑ク記シテ後考ニ備フ、

擔夫三人二人擔物、一人雜給、

〔朝野群載六太政官〕官切下文

五色絹六疋下大藏　糸七十約　兩面二疋　帛一疋三丈　綾一疋　苧十斤　白木唐櫃六合

紅花大十七斤九兩　黃蘗大四十三斤　茜大廿三斤　錢四貫六百文　紫草大百四十斤　白紙

二百六十枚下中務　油二斗五升六合下宮內

右、奉山陵幷所々荷前料內藏寮所請如件

寬弘元年十二月十二日　左少史私

左大臣宣旨充之　右少辨藤原朝臣

〔朝野群載二十一雜文〕荷前幣物請文

諸陵寮解申請　荷前幣物事

合陵墓佰貳拾參處

山陵七十七處

墓三十六處

近陵十處

一處料

生絹一丈五尺　黑染絹五尺

糸一兩　麻布一端

麻一斤　倭文一丈

木綿十三兩　黑葛六兩

褁料薦五尺

日荷前使、須レ依二式條一宜レ從二解却一者、

應和二年正月十九日　大外記主税權助周防介御船宿禰傳說本

〔帥記〕治暦四年十二月廿七日、今日荷前也、○中略 僕向二後田邑一、○光孝 次官信國介申二乘馬一、○馬下一本有二由二字一 密留了、共人三人、向二仁和寺西山松下一、再拜之後令レ燒レ幣了、

幣物

〔延喜式十五內藏〕奉二諸陵一幣

錦綾各二丈八尺、別各二尺八寸 兩面二丈、別二尺 夾纈纈帛各二疋二丈、別各一丈四尺 中緑淺緑帛各一疋四丈、別各一丈 白絹五丈五尺、別五尺五寸 生絹三疋二丈、別二丈 絁五丈、別五尺 蘇芳紫紱支子紱紅花紱白橡紱帛各一疋五丈、別各一丈一尺 緑紱紅花紱蘇芳紱紫紱絲白絲各四絇二兩、別各五兩 橡絲皁絲生絲各一絇八兩、別各二兩 蘇芳紱紫紱紅紱支子紱縹紱綿各三屯四兩、別各四兩 雜色紱木綿大三斤二兩、別五兩 細屯綿十屯、別一屯 三嶋木綿卅枚、別四枚 鴨頭草木綿廿枚、別二枚 色紙百五十枚、別十五枚 細布二端二丈五尺、別一丈五寸 曝布二端二丈五尺、別一丈五寸

已上陵十所料

緋縹黃皁白等帛各一疋五丈、別各一丈一尺 緑緋縹黃等絲各二絇六兩、別各三兩 橡絲生絲皁絲各十兩、別各一兩 練絲白絲各三絇四兩、別四兩 雜色紱木綿大二斤八兩、別四兩 苧麻各大三斤二兩、別五兩 安藝木綿大十五兩、別一兩二分 紙百五十張、別十五張

已上陵十所雜給料○中略

右陵墓幣料、預前支料具錄二色目一、十二月上旬申レ省、即待二官符一請受、依レ件練染、又小刀廿柄、燈臺廿基儲之、白木工用、受レ數、前一日晚差二史生四人一、色別備賫、於二縫殿寮南院一候之、內侍已下從二內裏一退出、通夜裁成、達曉裹畢、所別盛二柳筥一合一、裹以二夾纈表淺緑裏一、結以二縹帶二條一、更納二漆櫃一、安二漆高案一、帕以二紫綾表緋裏一、其雜給料、所別筥一合、裹以二黃表帛裏一、結以二縹帶二條一、更以二縹帶一著レ木、○中略 陵別以二駕輿丁三人一充

貞觀二年十二月卅日　　大輔淸原眞人瀧雄本

被中納言兼右大將從三位行春宮大夫藤原時平卿宣偁、奉勅、雖在放免雜役人、宜差奉荷前幣使者、

寬平五年十二月十日　　少外記安倍安直本

從五位下平朝臣忠則　源朝臣公輔　藤原朝臣滋茂

右被左大臣（○藤原忠平）宣偁、件等人闕去年荷前儲使、仍不可預今年位祿、幷來十一月大嘗會祿者、

延長九年（○承平元年）二月六日　　大外記伴宿禰久永本

應依式科責闕荷前使侍從次侍從散位等事

右、（○中略）今被右大臣（○藤原師輔）宣偁、奉勅、闕使侍從次侍從、從解却、幷不可預節會之由、式條已存、非侍從事、同在彼式、而近年之間、人情懈怠、不守法式、不參者多、事煩尤甚、侍從等稱病費、參待賢門之時、遣官掌加實撿、爰其病雖非顯著、依入數已多、殊成優容、未必解任、但爲將來或抑節祿、非侍從等雖不預節會、未及奪位祿、爰積習成常、彌致懈怠、至于當日、依人數不足、召求近邊諸司五位已上之間、刻限自移、物煩彌甚、國家大事、豈合如此、宜仰所司重張嚴制、侍從等參待賢門之後、令使者加實撿之時、自先日有其聞之中、彼病顯然者、依實可免、假稱本病發動之由、事涉虛誕者、依式卽從解却、又令中務移式部、不可預七日節、至于非侍從、解其科法、總如式條、曾不寬宥者、（召仰中務大錄縣犬養眞宗了）

天曆元年十二月十三日　　大外記三統宿禰公忠本

大納言正三位源朝臣高明宣、奉勅、山城介藤原朝臣季方、依闕去年荷前使、召勘之日、進過狀先了、然則返給彼過狀、當年位祿官符不得捺印者、

天曆十年七月七日　　大外記安倍衆與本

橘朝臣敏通　小槻宿禰糸平　藤原朝臣時柏（○柏恐柄誤）　藤原朝臣遠量

右權大納言正三位兼行右近衛大將春宮大夫藤原朝臣師尹宣、奉勅、件等侍從、闕去年十二月廿一

弘仁四年正月七日　少外記船連湊守奉

參議秋篠朝臣安人宣、承前之例、供奉荷前使五位已上、外記所定、今被右大臣〇藤原園人宣、自今以後、中務省點定、爲恒例者、但三位以上、外記申上可點者、

弘仁四年十二月十五日

右大臣〇藤原園人宣、荷前使參近處者、當日奏返事、自今以後、爲常例者、

弘仁七年十二月十七日　大外記上毛野朝臣穎人奉

右大臣〇藤原冬嗣宣、奉勅山階〇天智後田原〇光仁大枝〇桓武母后高野新笠柏原〇桓武長岡〇平城嵯峨母后藤原乙牟漏後大枝〇淳和母后藤原旅子楊梅〇平城石作〇淳和后高志内親王等山陵獻荷前使、宜差參議以上若非參議用三位以上、立爲恒例、

天長元年十二月十六日　大外記宮原宿禰村繼奉

右大臣〇藤原冬嗣宣、獻荷前物山陵使、五位已上六位已下、自今以後、定辰一點、參供於殯庭、以爲永例、

天長元年十二月廿三日　少外記島田朝臣清田奉

應勘責侍從非侍從闕荷前使事

右去弘仁十三年二月五日、右大臣〇藤原夏野清原宣、奉勅荷前使五位已上侍從次侍從闕怠件使、自今以後、解侍從任非侍從者、宜奪位祿者、今被右大臣宣偁、宣旨之興其責已重、而頃年之間猶致違闕、奉公之義豈合如此、宜自今以後、闕事之輩、不論侍從非侍從、一切莫預正月七日節會共引前後之宣、以令懲將來者、

承和二年十二月九日

從五位上源朝臣叙

右人依闕今月十五日荷前使、解次侍從任、而今右大臣〇藤原三守相宣、奉勅殊免此度者、

點五位已上、訖使人進執獻物、（若帶劔者、解劔從事、）入置御所、出候御幔外、隨闈司告進執幣物退出、授内豎大舍人等、

凡供諸陵幣使大舍人者、依治部移、令本寮差定移送歷名、

凡荷前使次侍從已上、若有闕怠者、移式部省、不預正月七日節、兼從解却、

凡後田原八嶋二陵荷前使侍從次侍從往還定五箇日、若此内當元會者、雖身不參、猶預見參、

凡荷前使内舍人有闕怠者、奪一年季祿、大舍人奪夏冬衣服、

〔延喜式十八式部〕凡點散位五位已上十人、補荷前使侍從不參之闕、其名簿預前進太政官、

凡闕荷前使之侍從、及次侍從者、待中務移、無預正月七日節、非侍從者奪位祿、亦無預同節、

〔西宮記臨時五〕諸社使、帶劔人不解劔、詣賀茂御祖者可解放、○中略山陵使向陵拜禮、同解之把笏、

〔類聚三代格七〕太政官符

應停土師宿禰等預凶儀事

右太政官今月十四日論奏稱、○中略緬尋古風、野見宿禰獻策往帝、弘仁政於昔年、停殉陵之、垂遺愛於後世、傳曰、善善及子孫、惡惡止其身、然則野見宿禰苗裔、應霑延賞之澤、而職掌凶儀、不預吉禮、夫喪葬之事、人情所惡、專定一氏、爲其職掌、於事論之、實爲不穩、臣等伏望、永從停止、縱有吉凶、同於諸氏、其殯宮御膳誄人長、及年終。。奉幣。。諸。。陵使。。者、普擇所司及左右大舍人雜色人等充之、伏聽天裁、謹以申聞者、晝聞既訖、省宜承知、年終幣使者、依治部省移、差蔭子孫散位位子等充之、自今以後、永爲恒例、

延暦十六年四月廿三日

〔類聚符宣抄四〕荷前

左大辨秋篠朝臣安人宣、内裏獻山陵物使、五位已上不參者、自今以後不得預節會、縱使會山陵、不參奉班庭亦同者、自今以後宜預擧申簡點、應必參者、

發使

り、其後御代々々に廢置ありて、延喜式のころは、十陵八墓なり、かくて後々には、たゞ此近陵墓の御祭のみの如くになりて、遠陵の奉幣のことは隱れゆきて、をさ〳〵物にも見えず、いと心うきことなりかし、抑近陵墓は、當代に近きを殊に厚く祭り坐なれば然もあるべきことなるを、其中に天智天皇をば永く廢かれぬことになりぬるは、此も彼漢國の制に、太祖の廟をば、百世といへども廢ずと云にならひ賜へるなるべし、されど始清和の御代に、此天皇を第一に置れたるは、當代の大御父尊より、上七世なる故にこそありつらめ、必しも太祖とし賜ひしにはあらざるべし、然るを其より後々の御代に至ても、猶此天皇を殊に祭坐は何の由にかおぼつかなし、續紀御代々々の宣命に、近江大津宮御宇、大倭根子天皇乃、與天地共長、與日月共遠不改常典止立賜敷賜覇留法乎云々、などゝありて、殊なる由もありげなれども、此天皇は皇太子に坐しゝほどより、藤原大臣○鎌足と共に謀給て、蘇我入鹿を滅し給し御功と、又天下の御制度を漢樣に革め給へることゝこそあれ、其他に殊なることも坐まさず、凡孝德の御世に、萬の御制の古より有來ぬるを廢て、多く漢樣にしもなれるは、此天智天皇と、藤原大臣との御心より出づとぞ見えたる、後世に此天皇をしも、中興の主など申すめるは、此漢樣の事を多く創坐る故なるべし、かくて此天皇の御陵をしも、永く殊に祭坐とならば、神武天皇の御陵をこそ、第一に厚く祭り賜ふべく、猶又餘にも有べきをや、

〔延喜式十二中務〕凡十二月奉諸陵幣者、令陰陽寮擇日、訖即申官、其別貢幣者、臨幸使所奉送、其使參議已上及非參議三位、太政官定之、自餘省點之、山階柏原長岡深草田邑鳥戶後田邑小野八陵、參議已上若非參議三位一人、四位若五位一人、內舍人內豎大舍人各一人、後田原八嶋二陵、○中略四位若五位二人、內舍人內豎大舍人各一人、○中略其使侍從四位已下差文、以十二月五日入太政官、當日平旦、丞錄率史生省掌等、候御在所幔外、史生微聲計列內舍人幷大舍人等、丞率內舍人等入就幔內座、即遙

天皇爲田原〇光仁父施基之皇子、而因群臣推戴、得登帝祚、於是天智之流勃興、加之天智天皇始制法令、謂之近江朝廷之令、天下百世因准之、爾來至今皆天智之一流、而爲太祖不遷之廟、豈不可乎、亦光仁已爲中興之主、故爲第二世、桓武創平安京、故爲三世、光仁桓武比周之七廟、文世室武世室、所謂劉子駿九廟之說也、其餘隨世互有廢置、然而仁明光孝醍醐、其德蓋天下、不忍毀去、是以後世聖君、遺詔不立山陵國忌、其意者不可過七廟故也、但三女主猶可得毀之、鳥羽苡子〇鳥羽母后藤原氏毀穩子〇朱雀村上母后藤原氏之國忌、寛元〇後嵯峨通子〇後嵯峨母后源氏去安子〇冷泉圓融母后藤原氏之國忌者也、又案履脫爲上皇、則不置國忌、隨亦有遺詔、崇道天皇國史云、延暦廿四年四月甲辰、令諸國奉爲崇道天皇建小倉、納正稅四十束、幷預國忌及奉幣之例、謝怨靈也、今案崇道天皇、爲謝其怨靈、准國忌、非廢務之例、故公家固不知之也、

〔古事記傳二十〕近陵遠陵近墓遠墓とは、路程の近遠を以云に非ず、近陵墓はいはゆる十陵八墓にて、其餘を凡て遠陵墓とす、近とは、當代に親しく近き意を以云なり、故近陵の幣物は、こよなく多く、なほ又別貢の幣物も多くありて、其は別に內藏寮より供ることにて、其色目は內藏式に見え、又中務式に、凡十二月奉諸陵幣者云々、其別貢幣者、臨幸便所奉送、其使參議已上、及非參議三位、太政官定之、自餘省點之云々などゝ見えたる如く、近と遠とは甚く差別あるなり、抑此近遠の定まりしは、三代實錄に、天安二年十二月九日、詔定十陵四墓、獻年終荷前之幣とあるや始ならむ、其十陵は、天智天皇、田原天皇、光仁天皇、桓武天皇、平城天皇、仁明天皇、文德天皇と七代、是當代の皇祖等なり、平城は然らざれども、近き故に加られたりと見ゆ、嵯峨淳和は近けれども、遺詔にて山陵を置れざる故に入ず、如此七代をしも定められしは、漢國の七廟の制をまねばれたるなるべし、さて餘の三陵は、桓武の御母后と皇后と崇道天皇となり、崇道天皇は延暦の廢太子にて、そのころ厲給へりしより殊に祭らるゝなり、〇中略さて又元慶八年十二月廿日、定每年獻荷前幣十陵五墓云々、この時さきに定まれる內を廢かれたると、新に置れたるとあ

文德天皇田邑山陵、在山城國葛野郡、太皇太后藤原氏（〇文德母后順子）後山階山陵、在山城國宇治郡、贈皇太后藤原氏（〇光孝母后澤子）鳥戸山陵、在山城國愛宕郡、

〔政事要略二十九〕太政官符中務省

應每年荷前山陵幷墓事（〇應下恐有脫字）

一山陵十所

山階山陵（近江宮御宇天智天皇、在山城國宇治郡、）

後田原山陵（平城宮御宇天宗高紹天皇（光仁）、在大和國添上郡、）

柏原山陵（平安宮御宇桓武天皇、在山城國紀伊郡、）

長岡山陵（贈太皇太后藤原氏（平城嵯峨母后乙牟漏）在山城國乙訓郡、）

八嶋山陵（崇道天皇（桓武太子早良）在大和國添上郡、）

深草山陵（仁明天皇、在山城國紀伊郡、）

鳥戸山陵（贈皇太后藤原氏（光孝母后澤子）在山城國愛宕郡、）

後田邑山陵（光孝天皇、在山城國葛野郡、）

小野山陵（贈皇太后藤原氏（醍醐母后胤子）在山城國宇治郡、）

後山階山陵（後太上天皇（醍醐）在山城國宇治郡、〇中略）

右左大臣（〇藤原忠平）宣、奉勅、依件定之、自餘停止者、省宜承知依件行之、符到奉行、

延長八年十二月九日

〔江家次第抄三〕國忌

今案、天子七廟、或有九廟之說、故陽成天皇以前、或八廟、或七廟、其數不定、然光孝以來定爲九廟、其中以天智爲太祖廟、蓋天武天智皆舒明之子、然文武至廢帝（〇淳仁）天武之裔即位、天智之流如絕、爰光仁

定陵墓數

頭書　勅使役之人、當日早旦、先遣使令催陵戸、可令敷帖儲手水、

〔園太曆〕觀應元年十二月廿九日庚戌、欲行荷前、次官無之、奉行職事季定不催具云々、外記又懈怠歟、寅刻許、頭辨仲房朝臣入來、無次官可被行歟、將又停止歟、可爲何樣哉、可計旨示之、予申云、荷前停止曾不承及事也、又無次官被行其儀之條難計申、本儀可向件陵々也、依略儀不向、爲如泥事之處、猶又被略者、如形昇立之儀不爲之哉、事恐尤多、仍彼是難計申、可在時宜之旨申了、但今夜内侍所御神樂云々、然者定有參仕陪從歟、以彼御神樂以後、可被用次官哉之旨申之、後聞次官遂不出來、御神樂陪從無之上、擬侍從荷前文書不具、俄難召寄之旨、參仕權少外記利顯申之、仍遂以不被行云々、

〔三代實錄一清和〕天安二年十二月九日丙申、詔定十陵四墓、獻年終荷前之幣、天智天皇山階山陵、在山城國宇治郡、春日宮御宇天皇（〇光仁父施基）田原山陵、在大和國添上郡、天宗高紹天皇（〇光仁）後田原山陵、在大和國添上郡、贈太皇太后高野氏（〇桓武母后新笠）大枝山陵、在山城國乙訓郡、桓武天皇柏原山陵、在山城國紀伊郡、贈太皇太后藤原氏（〇平城嵯峨母后乙牟漏）長岡山陵、在山城國乙訓郡、崇道天皇（〇桓武弟太子早良）八島山陵、在大和國添上郡、先太上天皇（〇平城）楊梅山陵、在大和國添上郡、仁明天皇深草山陵、在山城國紀伊郡、文德天皇田邑山陵、在山城國葛野郡、（〇四墓略）

〔三代實錄二十二清和〕貞觀十四年十二月十三日己酉、先是天安二年十二月九日、定十陵四墓、獻年終荷前幣、是日十陵除贈太皇太后高野氏（〇桓武母后新笠）大枝山陵、加太皇太后藤原氏（〇文德母后順子）後山階山陵、以足其數、在山城國宇治郡、（〇下略）

〔三代實錄四十六光孝〕元慶八年十二月廿日丙午、定每年獻荷前幣十陵五墓、近江宮御宇天皇（〇天智）山階山陵、在山城國宇治郡、平城宮御宇天皇（〇光仁）後田原山陵、在大和國添上郡、桓武天皇柏原山陵、在山城國紀伊郡、贈太皇太后藤原氏（〇平城嵯峨母后乙牟漏）長岡山陵、在山城國乙訓郡、崇道天皇（〇桓武弟太子早良）八島山陵、在大和國添上郡、平城太上天皇楊梅山陵、在大和國添上郡、仁明天皇深草山陵、在山城國紀伊郡、

代。又。無。此。出。御。云々、

〔年中行事秘抄十二月〕荷前事（立春以前大神祭以後云々）

弘仁式云、天皇御二便殿一、禮拜奉レ班、

國史云、天安二年十二月、詔定二十陵四墓一、獻二年終荷前幣一、使不レ憚二念誦一、小浴可レ宜云々、雖レ似二神事一、頗涉二不淨一、仍不レ行二他神事一、

〔類聚符宣抄四〕荷前

大納言正三位兼行右近衛大將良岑朝臣（○安世）宣、擇二定獻二山陵荷前一日時一解文、所司理須二預定早進一、而期促、年中不レ便二行事一、自今而後、宜下仰二辨官幷中務省等一、雖レ定二遠日一、十二月五日以前、爲レ例令中進者上、（即日宣二告右大史高丘宿禰繁門、中務大輔安倍吉人朝臣一訖、）

天長六年十二月十三日　大外記島田朝臣清田奉

〔類聚符宣抄四〕荷前

被二右大臣（○源多）宣一云、中務省擇申、奉二荷前一事、今月廿三日可レ行者、而彼日當二國忌一、（○仁光）因レ茲更令三陰陽寮勘二申自餘吉日一、寮勘申云、除二件日一之外、皆有レ可二忌避一、無レ可レ用之日一、宜下雖レ當二國忌之日一、依二陰陽寮擇定一、廿三日行上レ之、（即仰二左大史丸部百世一了）

元慶七年十二月十八日　少外記大藏善行奉

〔建武年中行事〕荷前は、つかひ〳〵を兼て定られて、おの〳〵御陵に奉らる、使は公卿也、次官そひたり、

〔江家次第十一十二月〕荷前事

荷前彩帛、廿日以前、省（○治部）受取、預錄一人、（史生一人）諸陵率二陵戸一（辨裹）授レ省令レ納、（省掌一人、藏部一人、）

〔江家次第十一十二月〕荷前事

時申詞、陵稱獻出、幕稱申出、

〔延喜式大藏三十〕十二月供諸陵幣、(其物納調之日、別收正倉、供幣數見諸陵式)其儀隨符到、前一日、與諸陵寮依例裏備、又設御座於建禮門外、立五丈紺幄二宇、次立七丈五丈紺幄各一宇、幷懸幔、又於正倉院立七丈紺幄一宇、(列置幣物)立五丈紺幄二宇、(一宇東面、懸幔、設參議以上人座、一宇北面、設辨官以下座、)

當日早朝、掃部寮設幄下座及所司座、又鋪積幣物薦於幄前、訖即與諸陵寮共積幣物、參議以上及辨官就座、丞進就版位、(治部預置版位)申積畢狀、治部輔就座、省輔一人進就座、丞錄各一人共進就座、諸陵寮亦就座、訖治部輔唱使人名、省丞錄二人、取幣物付使人、

凡荷前物裏備之日、縫殿寮南庭、立五丈紺幄一宇、懸幔、薦三枚、帖四枚、

〔延喜式掃部三十八〕奉山陵幣御座、設於建禮門前幄下、大臣已下及辨官已上座、設於東幄下、設幣帛下敷、

凡辨備山陵幣之座、設縫殿寮南院、幷大藏省正倉院、

〔政事要略二十九〕荷前事

清涼記、荷前事、　當日早旦、供御浴、御南殿、御腰輿、行幸建禮門前幄、(書御帛御衣、諸衛不稱警蹕、)

〔北山抄十二月〕荷前事

天曆八年勘申、諒闇年例、元慶四年不出御、承和九年出御、延喜十五年御記、見不出御之例、又可令勘申者、(御記云、當物忌之中、諒闇年不出御、仍不自拜、而承和出御、然則不御失禮也、)

安和二年、令勘申幼主御時例、承平元、二、三、五年不出御、四年六七年無日記者、依承平例不出御、當御物忌時、不向神社山陵之由、見九條記、

〔江家次第十一十二月〕荷前事(近代無御出、亦不行晴儀、)

裏書云、荷前、天皇行幸建禮門前幄、有此事、雨儀大臣以下向承明門外行事、天皇出御宜陽殿西廂、近

屬以上進就座、省掌率使者等(神功皇后陵寮屬以上一人、自餘各陵墓預人、)列于庭中、西面北上、先是大藏丞錄各一人、進就須幣座、治部輔就唱陵號座、諸陵允取陵墓使者歷名札授輔、輔以次唱諸陵號、(始唱陵號、群官下座、)及唱使名、大藏取幣(近陵丞取之、自餘錄取之、)授使者、即受退、事畢群官俱退、其須幣之時申詞、貴所種獻出、凡所稱奉出、墓稱申出、

〔皇年代略記 持統〕首書　荷前事、初此代云々、

〔延喜式 十一 太政官〕凡季冬獻幣於諸山陵及墓、皆用當年調物、中務省預擇大神祭後、立春前之吉日、十二月五日以前申送、進太政官、又式部點散位已上進其交名、(爲補侍從不參之闕、)當日參議已上、少納言辨外記史等、著別供幣所幄行事、其幣者內藏寮供擬、(色數見內藏寮式、)至時刻天皇御建禮門前幄、禮拜奉班、但常幣者、參議已上一人、辨外記史等向大藏省奉班、其使者中務式部差定移送治部、(事見儀式、)

〔延喜式 十六 陰陽〕凡獻荷前日者、預擇定大神祭後、立春以前、十二月五日申省、(中務)○

〔延喜式 二十一 諸陵〕嵯峨陵(太皇太后橘氏(嵯峨后嘉智子)在山城國葛野郡、兆域東西六町、南二町、北五町、守戶三烟、不入頒幣之例、)

〔大日本史 禮樂 四〕按皇后遺令不營山陵、故不預頒幣乎、

〔延喜式 二十一 諸陵〕凡每年十二月奉幣諸陵及墓、其陵別五色帛各三尺、庸布一段一丈四尺、倭文三尺、木綿四兩、麻一斤、近陵別五色帛各一丈、絁一疋、絲一絇、調布一端、倭文一丈、木綿十三兩、麻三斤五兩、裹料薦五尺、黑葛三兩、遠墓及近墓幣、各同遠陵例、○中略　同月上旬、錄幣物數幷伊勢近江紀伊淡路等國使名及鈴數申省、(國別二剋驛鈴一口、不限位高下、)　省申官、頒幣日、差各陵墓預人奉、(但神功皇后陵、差寮主典已上奉、)其日依時刻省輔丞錄各一人、率寮屬以上及使者集大藏省、參議已上一人率辨官就版位、大藏省進申積幣物訖、(事見大藏式、)　即參議已上令召使喚治部省、如常、丞進就版位、即宣曰、率使者等參來、兩省輔、寮屬已上、進共就座、省掌率使者等列於庭中、(西面北上、)先是大藏丞錄各一人、就頒幣之座、治部輔先就稱陵號之座、然後寮允取使人名札授輔、以次舉諸陵號、(始舉陵號、群官下座、)及唱使名、大藏授幣、使人受退、事畢群官共退、其頒幣之

〔儀式十〕奉山陵幣儀

十二月上旬、諸陵寮錄幣物數并應擇日之狀、申送治部省、省申官行下、中務省仰陰陽寮擇日、(用立春前、大神祭後吉日、)前十日、中務省差定使次侍從以上內舍人大舍人、總錄名簿進太政官、式部點非侍從五位十人進之、(補侍從非常闕、)同月十三日、大臣定參議以上使、令少納言就內侍奏、(定元會侍從之次、同定件使、其次侍從以上五位以上使同共奏之、)其使山階、此一陵、中納言以上、柏原深草田邑後山階五陵、參議以上、若非參議三位以上各一人、四位若五位一人、內舍人一人、大舍人一人、楊梅一陵、四位一人、五位一人、大舍人一人、田原後田原八島三陵、宇治後宇治愛宕三墓、四位若五位二人、大舍人一人、多武峯墓、內舍人一人、大舍人一人、別貢物、內藏寮預前具錄色目申省、省即申官、官下符所司請受練染、前一日、大藏木工等省寮、建禮門外、橫立五丈斑幄二宇、(北一宇、其下備經幄設御座、南一宇、爲陳設幣物之所、)其東三許丈縱立七丈幄一宇、(北頭與陳幣幄相當、北二間爲陳不置御所、幣上之所、南五間設大臣以下五位以上座、)其東縱立五丈幄一宇、設外記史以下座、先是縫殿寮南庭、立五丈幄一宇懸幔、設內侍已下裹別貢物座、大藏省正倉院中區、縱立五丈幄一宇懸幔、設參議已上一人座、其南橫亦立一宇、設辨官座、大藏省官人、率藏部等裹備幣物、(幣料納宮年調之日、別設正倉、)又內藏寮差史生四人、令賫幣物於縫殿寮南庭候之、內侍以下從內裏退出、通夜裁成、逮曉裹畢、所別盛楊筥一合、裹以纐纈表淺綠裏、結以綵帶二條、更納漆櫃、安漆高案、帊以紫綾表緋裏、其雜給料、所筥一合、裹以黃表帛裏、結以縹帶二條、更以縹帶著木、但多武峰料者、裹以葉薦半枚著木、陵別以駕輿丁三人充擔夫、(二人幣物、一人雜給、但多武峰一人、)其擔夫皆著橡衫布袴、(彩事了返上、)其日平旦、大臣以下就座、時刻乘輿御輕幄、訖使公卿以下進執幣、(若帶劍者、暫解供事、)入置物所、復本座、隨內侍宣進執幣物退出、授大舍人、但多武峰宇治後宇治愛宕四墓幣物、不置御所、便執退出、同時治部輔丞錄各一人、率諸陵寮屬以上及使者集大藏省、參議以上一人并辨外記史各一人、率史生官掌等各就幄座、大藏省錄進就版、申陳幣物訖、(預裹幣物引率庭中、)即參議以上喚召使、稱唯就版、參議宣喚治部省、召使稱唯趨出喚之、稱唯丞代進就版、參議宣率使者等參來、丞稱唯趨出、治部大藏兩輔、率諸陵寮

古事類苑

帝王部十八

山陵下

荷前名稱

〔伊呂波字類抄 五 能〕荷前 ノザキ

〔政事要略 二十九〕基案、義解 ○職員令義解 所謂荷前者、四方國進、御調荷前取奉、故云荷前、見式

〔延喜式 四 伊勢大神宮〕九月神嘗祭 ○中略 調荷前絹一百十三疋一丈二尺、○下略

〔延喜式 八 祝詞〕祈年祭 ○中略

辭別伊勢爾坐天照大御神能大前爾白久、○中略 荷前者、皇大御神能大前爾如横山打積置氏、殘波平聞看、○下略

〔續日本後紀 九 仁明〕承和七年五月辛巳、後太上天皇 ○淳和 顧命皇太子 ○仁明 曰、○中略 又歲竟分綵、號曰荷前、

〔萬葉集 二 相聞〕久米禪師娉石川郎女時歌

東人之荷向篋乃荷之緒爾毛妹情爾乘爾家留香聞

〔萬葉集略解 二〕荷向は、いづれの國にても、年毎に始に奉る調物を荷前と云、

儀式

〔令義解 一 職員〕諸陵司

正一人、掌祭陵靈、謂十二月奉荷前幣是也 喪葬、凶禮、諸陵、及陵戸名籍事、

古事類苑

帝王部十八

山陵下

陵守長　陵預　御陵守

〔類聚國史帝王三十六〕延曆十九年七月壬戌、分淡路國津名郡戶二烟、以奉守崇道天皇陵、大和國宇智郡戶一烟、奉守皇后○光仁井上后陵、

〔延喜式諸陵二十一〕宇智陵　皇后（光仁）井上內親王、在大和國宇智郡、（中略）守戶一烟、

八嶋陵　崇道天皇、桓武殿太子早良、在大和國添上郡、（中略）守戶二烟、

嵯峨陵　太皇太后橘氏（嵯峨后嘉智子）在山城國葛野郡、（中略）守戶三烟、

○按ズルニ、此他清和天皇皇后藤原高子ノ後深草陵ニ、守戶三烟アリ、今之ヲ略ス、

〔延喜式諸陵二十一〕中尾陵　贈皇太后藤原氏（仁明后澤子）在山城國愛宕郡鳥部鄉、陵戶五烟、

白河陵　太皇太后藤原氏、（文德后明子）在山城國愛宕郡上粟田鄉、陵戶三烟、

〔續日本後紀仁明十三〕承和十年四月己未朔、楯列陵守等言、去月十八日食時、山陵鳴二度、其聲如雷、即赤氣如飄風、指離飛去、申時亦鳴、其氣如初、指兌飛亘、遣參議正躬王、加撿察、伐陵木七十七株、至楮木等、不可勝計、便即勘當陵守長百濟春繼、上奏矣、

〔延喜式諸陵二十一〕凡每年十二月、奉幣諸陵及墓、○中略頒幣日、差各陵墓預人奉、但神功皇后陵、差寮主典已上奉、

〔愚昧記〕仁安三年四月三十日、今日即位由可被告山陵也、○中略即參向山階山陵、○天智令尋陵預、頃之出來、

〔戶田忠友家記〕文久二年十二月十日伺書

一御陵守リ、一ケ所ニ付、三竈位ヅヽハ、被差置候樣可仕候哉ノ事、

書面ノ通

右ケ條ノ趣一應奉伺候間、御取極次第、關東ヘ可申立候以上、

十二月十日　戶田和三郎

陵戸守戸皇充

○按ズルニ、此他允恭、推古、元正ノ三天皇陵ニ、守戸各四烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、

〔延喜式諸陵二十一〕古市高屋丘陵（勾金橋宮御宇安閑天皇、在河内國古市郡、（中略）守戸二烟、）

〔愚昧記〕安元三年五月十七日丙辰、讚岐院（○崇德）御事、一以御墓所勅稱山陵、（○中略）割分民烟一兩、令守御陵、

〔延喜式諸陵二十一〕春日率川坂上陵（春日率川宮御宇開化天皇、在大和國添上郡、（中略）以在京戸十烟、毎年差充令守、）

〔延喜式諸陵二十一〕菅原伏見東陵（纒向珠城宮御宇垂仁天皇、（中略）陵戸二烟、守戸三烟、）

惠我長野西陵（穴門豐浦宮御宇仲哀天皇、（中略）陵戸一烟、守戸四烟、）

惠我藻伏崗陵（輕島明宮御宇應神天皇、（中略）陵戸二烟、守戸三烟、）

惠我長野北陵（遠飛鳥宮御宇允恭天皇、（中略）陵戸一烟、守戸四烟、）

傍丘磐杯丘南陵（近飛鳥八鈎宮御宇顯宗天皇、（中略）陵戸一烟、守戸三烟、）

古市高屋丘陵（勾金[illegible]宮御宇安閑天皇、（中略）陵戸一烟、守戸二烟、）

磯長山田陵（小治田宮御宇推古天皇、（中略）[illegible]戸一烟、守戸四烟、）

皇后及追尊天皇陵戸守戸

〔延喜式諸陵二十一〕狹城盾列池上陵（磐余稚櫻宮御宇神功皇后、在大和國添下郡、（中略）守戸五烟、）

〔續日本後紀仁明十三〕承和十年五月癸卯、盾列山陵（○神功）守丁、聽隨闕差京戸幷浪人、以當土無人差課也、

○按ズルニ、此他延喜式ニ、文武天皇皇后藤原宮子娘ノ佐保西陵、聖武天皇皇后藤原光明子ノ佐保東陵、光仁天皇母后紀橡姫ノ吉隱陵、光仁天皇皇后高野新笠ノ大枝陵、桓武天皇皇后藤原乙牟漏ノ高畠陵、藤原旅子ノ宇波多陵、平城天皇皇后藤原帶子ノ河上陵、淳和天皇皇后高志内親王ノ石作陵等ニ、守戸各五烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、

〔延喜式諸陵二十一〕眞弓丘陵（岡宮御宇天皇、（天武皇太子草壁）在大和國高市郡、（中略）陵戸六烟、）

田原西陵（春日宮御宇天皇、（光仁皇考施基親王）在大和國添上郡、（中略）守戸五烟、）

守戸定額

左少辨紀朝臣

　康保元年十二月四日　　　左少史井原

○按ズルニ、村上天皇ノ皇后藤原安子、康保元年四月崩ズ、而シテ江家次第荷前ノ下ニ、陵ヲ今宇治ト稱ス、本文所謂宇治新陵ハ、即チ今宇治陵ノ事ナルベシ、

〔延喜式諸陵二十一〕畝傍山東北陵　畝傍橿原宮御宇神武天皇、在大和國高市郡、(中略)守戸五烟、

〔山陵志〕神武陵、在畝傍山東北隅、〇中略其下曰洞村、今居者之聚也、相傳其民故神武陵守戸、凡守陵戸皆賤稱、本以罪隸沒入者、不齒鄉人也、以故其守戸之子孫、逐轉聚居者、稱穢多、亦勢也、

○按ズルニ、延喜式ニ此他綏靖、安寧、懿德、孝昭、孝安、孝靈、孝元、成務、仁賢、武烈、繼體、宣化、敏達、元明、聖武、孝謙、光仁、桓武、平城、仁明、文德ノ二十一天皇陵ニ、守戸各五烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、

〔延喜式諸陵二十一〕山邊道上陵　磯城瑞籬宮御宇崇神天皇、在大和國城上郡、(中略)守戸一烟、

○按ズルニ、此他景行淳仁ノ二天皇陵ニ、守戸各一烟アリ、景行天皇ハ今之ヲ略ス、

〔延喜式諸陵二十一〕菅原伏見東陵　纒向珠城宮御宇垂仁天皇、在大和國添下郡、(中略)守戸三烟、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年四月庚申、櫛見山陵生目入日子伊佐知天皇(垂仁)之陵也宛守陵三戸、

〔續日本紀考證三〕此云櫛見山陵、與諸書不同、本居氏曰、伏櫛邦訓近、元融案、櫛一本作節、節見即伏見、

○按ズルニ、延喜式ニ、此他應神、安康、元明天皇ノ靈龜中、守陵四戸ヲ置ク、乃チ下文ニ見ユ、顯宗、用明、孝德ノ五天皇陵ニ、守戸各三烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年四月庚申、櫛見山陵生目入日子伊佐知天皇(垂仁)之陵也宛守陵三戸、伏見山陵穴穗天皇(安康)之陵也四戸、

〔延喜式諸陵二十一〕惠我長野西陵　穴門豐浦宮御宇仲哀天皇、在河內國志紀郡、(中略)守戸四烟、

假陵戸

〔黑川道祐石山紀行〕十三日、〇天和三年五月天智天皇ノ廟祉ヲ拜ス、〇中略此前村ヲ陵村ト號ス、斯一村中、十六家ノ人、斯陵ヲ守レリ、古ヘ守陵戸ノ末裔カ、到今免課役、右ノ十六家ノ内、竹鼻氏ノ者アリ、是ハ古ノ沙汰人ノ内ニテ、綸旨幷御敎書等ハ此家ニ殘レリ、

〔延喜式二十一諸陵〕檜隈大內陵藤原宮御宇持統天皇、合葬檜隈大內陵、(天武)陵戸更不重充、

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜九年三月己巳、勅淡路親王〇淳仁墓、宜稱山陵、其先妣當麻氏墓稱御墓、充隨近百姓一戸守之、

〔類聚國史三十六帝王〕天長元年十月丙戌、陵戸五烟、奉宛先太上天皇〇平城山陵、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年五月丁酉、勅後太上天皇〇淳和崩後、國忌荷前陵戸等事、宜遵遺制以停、奉行焉、

〔三代實錄一清和〕天安二年十二月十四日辛丑、奉充田邑山陵〇文德陵戸四烟、

〔醍醐雜事記〕御陵付寺家宣旨

右大辨紀朝臣淑光傳宣、中納言藤原朝臣□□宣、山階新陵〇醍醐陵戸五烟、徭丁貳拾伍人、暫停諸陵寮□□醍醐寺令守御陵者、

承平四年七月十三日　左大史坂上在判奉

〔日本紀略五冷泉〕康保四年六月九日丙寅、村上御陵、〇中略可充陵戸伍烟官符、

〔延喜式二十一諸陵〕後山科陵太皇太后藤原氏、(仁明后順子)在山城國宇治郡、假陵戸五烟、

〔政事要略二十九〕荷前事

太政官符山城國司

應充假陵戸伍烟事

右宇治新陵料、所仰如件、國宜承知、依件行之、但隔十箇年、依例相替、符到奉行、

陵戸定額

と云るにて、是は其陵戸無きか、或はたらざれば、其陵の近き民戸を差充て守らしむるをいふ、

諸陵式各陵の下に、守戸とあるは是なり、

〔日本書紀三十持統〕五年十月乙巳、詔曰、凡先皇陵戸者置五戸以上、自餘王等有功者置三戸、若陵戸不足、以百姓充、免其徭役、三年一替、

〔延喜式二十一諸陵〕凡山陵者、置陵戸五烟、令守之、有功臣墓者、置墓戸三烟、其非陵墓戸差點令守者、先取近陵墓戸充之、

〔延喜式二十一諸陵〕日向埃山陵 天津彦彦火瓊瓊杵尊、在日向國、無陵戸、

日向高屋山上陵 彦火火出見尊、在日向國、無陵戸、

日向吾平山上陵 彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊、在日向國、無陵戸、

〔延喜式二十一諸陵〕菅原伏見東陵 纏向珠城宮御宇垂仁天皇、在大和國添下郡、(中略)陵戸二烟、

○按ズルニ、此他應神天皇陵ニ陵戸二烟アリ、今之ヲ略ス、

〔延喜式二十一諸陵〕山邊道上陵 纏向日代宮御宇景行天皇、在大和國城上郡、(中略)陵戸一烟、

○按ズルニ、此他、仲哀、允恭、顯宗、安閑、推古ノ五天皇陵ニ、陵戸各一烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、

〔延喜式二十一諸陵〕百舌鳥耳原中陵 難波高津宮御宇仁德天皇、在和泉國大鳥郡、(中略)陵戸五烟、

○按ズルニ、此他、履中、反正、欽明、皇極、天武、文武ノ六天皇陵ニ、陵戸各五烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、

〔延喜式二十一諸陵〕丹比高鷲原陵 泊瀬朝倉宮御宇雄略天皇、在河內國丹比郡、(中略)陵戸四烟、

○按ズルニ、此他清寧光孝ノ二天皇陵ニ、陵戸各四烟アリ、今並ニ之ヲ略ス、

〔延喜式二十一諸陵〕倉梯岡陵 倉梯宮御宇崇峻天皇、在大和國十市郡、無陵地幷陵戸、

押坂內陵 高市崗本宮御宇舒明天皇、在大和國城上郡、(中略)陵戸三烟、

山科陵 近江大津宮御宇天智天皇、在山城國宇治郡、(中略)陵戸六烟、

之墓トアリテ、有功ノ外ハ、皇子モ陵ト稱スルヲ得ザリシヲ以テ知ルベシ、故ニ蘇我父子ノ大陵小陵ト稱セシハ僭越ノ至ナリ、

〔令義解 一 職員〕諸陵司

正一人(掌祭陵靈、○中略及陵戸名籍事、)

〔唐六典 十四 大常寺〕諸陵署(○中略)陵戸

〔令義解 九 喪葬〕凡先皇陵、(謂先代以來、帝王山陵皆是也、○中略)置陵戸令守、非陵戸令守者、十年一替、

〔令義解 二 戸〕凡造計帳、毎年六月三十日以前、京國官司、責所部手實、(謂手實者、戸頭所造之帳、其戸籍亦責手實也、)具注家口年紀、(謂年紀猶云年歳也、○中略)收訖依式造帳、(謂造計帳模樣也、)連署、八月三十日以前、申送太政官、(謂雜戸陵戸計帳、亦同申送也、)

〔延喜式 二十一 諸陵〕凡陵戸及守戸計帳者、寮差專當人、注名申省、分遣本郷、與國司共相知、勘造其戸籍、亦差遣專當官人勘造、

〔令義解 二 戸〕凡戸籍、六年一造、起十一月上旬、依式勘造、里別爲卷、總寫三通、(○中略)二通申送太政官、一通留國、(其雜戸陵戸籍、則更寫一通、各送本司、○下略)

凡陵戸、官戸、家人、公私奴婢、皆當色爲婚、(謂凡此五色、相當爲婚、即異色相娶者、律無罪名、並當違令、既乖本色、亦合正之、若異色相娶、所生男女、即知情者、自合從重、其官戸、陵戸、家人、是此三色者、官戸爲輕、二色爲重、亦公賤爲輕、私賤爲重、但陵戸家人相婚、所生者、從母爲定也、)

凡官戸、陵戸、家人、公私奴婢、與良人爲夫妻、(謂夫良妻賤、及夫賤妻良並是、故云爲夫妻、若與他家人奴合、所生者、即須從母、)所生男女、不知情者從良、皆離之、其逃亡所生男女皆從賤、

〔令義解 三 賦役〕凡陵戸免課役、(○節略)

〔延喜式 二十五 主計下〕凡勘大帳者、(○中略)其依符所免、爲符損、(八位嫡子、(中略)陵戸、(中略)並爲不課、)

〔律疏 賊盜〕凡緣坐、(○中略)僧尼、及婦人、若官戸、陵戸、家人、公私奴婢、犯反逆者、止坐其身、

〔古事記傳 二十〕陵戸と云は、永く其陵々に屬たる戸なり、非陵戸令守と云は、持統紀に以百姓充

者、〈○中略〉是日召聚耆宿、天皇親歴問、有一老嫗進曰、置目〈○嫗名〉知御骨埋處、請以奉示、於是天皇與皇太子億計〈○仁賢〉將老嫗婦、幸于近江國來田綿蚊屋野中、掘出而見、果如婦語、〈○中略〉仲子〈○市邊押磐皇子帳内〉之尸交横御骨、莫能別者、〈○中略〉由是仍於蚊屋野中造起雙陵、相似如一、葬儀無異、　五月、狹狹城山君韓帒宿禰、事連謀殺皇子押磐、臨誅叩頭、言詞極哀、天皇不忍加戮、充陵戸、兼守山、削除籍帳、隷山部連、

【古事記　下顯宗】此天皇、求其父王市邊王之御骨時、〈○中略〉爾起民掘地、求其御骨、即獲其御骨、而於其蚊屋野之東山作御陵葬、以韓帒之子等令守其御陵、

【日本書紀　十五顯宗】白髮天皇〈○清寧〉三年四月、立億計王〈○仁賢〉爲皇太子、立天皇爲皇子、五年正月、白髮天皇崩、是月皇太子億計王、與天皇讓位久而不處、由是天皇姉、飯豐青皇女、於忍海角刺宮、臨朝秉政、自稱忍海飯豐青尊、　十一月、飯豐青尊崩、葬葛城埴口丘陵、

【延喜式　二十一諸陵】埴口墓〈飯豐皇女、在大和國葛下郡、兆域東西一町、南北一町、守戸三烟、〉

【續日本紀　一文武】四年八月戊申、宇尼備、〈○神武〉賀久山、〈○不詳〉成會山陵、〈○敏達皇子押坂彦人大兄〉及吉野宮邊樹木、無故凋枯、

【延喜式　二十一諸陵】成相墓〈押坂彦人大兄皇子、在大和國廣瀨郡、兆域東西十五町、南北廿町、守戸五烟、〉

【日本書紀　二十二推古】元年四月己卯、立厩戸豐聰耳皇子爲皇太子、仍録攝政、以萬機悉委焉、橘豐日天皇〈○用明〉第二子也、　二十九年二月癸巳、半夜厩戸豐聰耳皇子命、薨于斑鳩宮、〈○中略〉是月、葬上宮太子〈○厩戸〉於磯長陵、

【延喜式　二十一諸陵】磯長墓〈橘豐日天皇之皇太子、名云聖德、(厩戸)在河内國石川郡、兆域東西三町、南北二町、守戸三烟、〉

【日本書紀　二十四皇極】元年、是歲蘇我大臣蝦夷、立己祖廟於葛城高宮、〈○中略〉又盡發擧國之民、幷百八十部曲、預造雙墓今來、一曰大陵、爲大臣〈○蝦夷〉墓、一曰小陵、爲入鹿〈○蝦夷子〉臣墓、

○按ズルニ、陵墓ノ稱、當時其制極メテ嚴ナリシコトハ、同書孝德天皇大化二年ノ詔ニ、王以上

重崇道天皇

〔延喜式二十一諸陵〕八嶋陵崇道天皇(光仁皇子、桓武皇太子早良)在大和國添上郡、兆域東西五町、南北四町、守戸二烟、

〔古事記中神武〕於是與登美毘古戰之時、五瀨命於御手、負登美毘古之痛矢串、○中略到紀國男之水門而詔、負賤奴之手乎死、爲男建而崩、○中略陵即在紀國之竈山也、

〔日本書紀六垂仁〕二十八年十月庚午、天皇母弟倭彥命薨、十一月丁酉、葬倭彥命于身狹桃花鳥坂、於是集近習者、悉生而埋立於陵域、

〔日本書紀七景行〕四十年十月癸丑、日本武尊發路之、○中略逮于能褒野、而痛甚之、○中略既而崩于能褒野、時年三十、天皇聞之、寢不安席、食不甘味、○中略即詔群卿命百寮、仍葬於伊勢國能褒野陵、時日本武尊化白鳥、從陵出之、指倭國而飛之、○中略於是遣使者、追尋白鳥、則停於倭琴彈原、仍於其處造陵焉、白鳥更飛至河内、留舊市邑、亦其處作陵、故時人號是三陵、曰白鳥陵、

〔古事記中景行〕於是坐倭后等、及御子等諸下到、而作御陵、○中略於是化八尋白智鳥翔天、而向濱飛行、○中略故自其國飛翔、行留河内國之志幾、故於其地作御陵鎮坐也、即號其御陵、謂白鳥御陵也、

〔日本書紀八仲哀〕元年十一月乙酉朔、詔群臣曰、朕未逮于弱冠、而父王〇日本武尊既崩之、乃神靈化白鳥上天、仰望之情一日勿息、是以冀獲白鳥、養之於陵域之池、因以覩其鳥、欲慰顧情、則令諸國俾貢白鳥、

〔日本書紀十一仁徳〕六十年十月、差白鳥陵守等充役丁、時天皇臨于役所、爰陵守目杵、忽化白鹿以走、於是天皇詔之曰、是陵自本空、故欲除其陵守、而甫差役丁、今視是恠者甚懼之、無動陵守者、則且授土師連等、

〔續日本紀二文武〕大寶二年八月癸卯、震倭建命墓、遣使祭之、

〔延喜式二十一諸陵〕能褒野墓日本武尊、在伊勢國鈴鹿郡、兆域東西二町、南北二町、守戸三烟、

〔日本書紀十五顯宗〕元年二月壬寅、詔曰、先王〇履中皇子市邊押磐、即天皇父、遭離多難、殞命荒郊、○中略廣求御骨、莫能知

追尊天皇陵

〔延喜式二十一諸陵〕小野陵贈皇太后藤原氏(宇多后胤子)在山城國宇治郡小野鄉、陵戶五烟、四至東限百姓口分、井觀修院山、南限小栗栖寺山井道、西限檜尾山岑、北限松尾山尾、井百姓口分、

〔江家次第十一十二月〕荷前事

宇治三所參議以上一人、就三所之例太多、

太后朱雀村上母后　太后穩子(醍醐后)　中宇治

中后冷泉圓融母后　中后安子(村上后)　今宇治

院母后院(白河)母后茂子○後三條后

〔拾芥抄下本十陵〕十陵○中略

中宇治贈皇太后宮藤安子、宇治三所於木幡大門前、使以官等兩陵云云、

後宇治贈皇太后苡子鳥羽后藤原氏○

後宇治贈皇太后宮茂子

〔百練抄十五後嵯峨〕仁治三年七月十一日辛卯、母儀源氏土御門后○通子贈皇后、被定山陵國忌云云

〔延喜式二十一諸陵〕田原西陵春日宮御宇天皇(天智皇子、光仁父、施基親王)在大和國添上郡、兆域東西九町、南北九町、守戶五烟、

〔延喜式二十一諸陵〕眞弓丘陵岡宮御宇天皇(天武皇子、文武父、草壁)在大和國高市郡、兆域東西二町、南北二町、陵戶六烟、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年十月辛未、行幸紀伊國、是日到大和國高市郡小治田宮、　壬申、車駕巡歷大原長岡、臨明日香川而還、　癸酉、過檀山陵、○岡宮天皇草壁詔陪從百官悉令下馬、儀衞卷其旗幟、是日到宇智郡、

〔類聚國史三十六帝王〕延曆十九年七月己未、詔曰、朕有所思、宜故皇太子早良親王追稱崇道天皇、○中略其墓並稱山陵、令從五位上守近衞少將兼春宮亮丹波守大伴宿禰是成、率陰陽師衆僧、鎭謝在淡路國崇道天皇山陵、　壬戌、分淡路國津名郡戶二烟、以奉守崇道天皇陵、

〔帝王編年記十二桓武〕延曆十九年七月、遣勅使於淡路國、取故早良親王骨、奉納大和國八嶋寺、添上郡古市南崇

〔類聚國史〕三十六帝王延暦十九年七月己未、詔曰、朕有所思、○中略故廢皇后井上内親王、追復稱皇后、其墓並稱山陵、

〔延喜式〕二十一諸陵宇智陵皇后(光仁)井上内親王、在大和國宇智郡、兆域東西十町、南北七町、守戸一烟、

〔延喜式〕二十一諸陵大枝陵太皇太后高野氏(光仁后新笠)在山城國乙訓郡、兆域東一町一段、西九段、南二町、北三町、守戸五烟、

〔續日本紀〕四十桓武延暦九年閏三月丙子、是日皇后○藤原乙牟漏崩、　甲午、是日葬於長岡山陵、

〔延喜式〕二十一諸陵高白田陵皇太后藤原氏(桓武后乙牟漏)在山城國乙訓郡、兆域東三町、西五町、南三町、北六町、守戸五烟、

〔大日本史〕禮樂四按延喜諸陵式作高畠、而中務式作長岡、蓋互稱也、

〔延喜式〕二十一諸陵宇波多陵贈皇太后藤原氏(桓武后旅子)在山城國乙訓郡、兆域東西四町、南一町、北三町、守戸五烟、

〔延喜式〕二十一諸陵河上陵贈皇后藤原氏(平城后帶子)在大和國添下郡、兆域東西四町、南北四町、守戸五烟、

〔文德實錄〕一嘉祥三年五月辛巳、嵯峨太皇太后○嵯峨后橘嘉智子崩、　壬午、葬太皇太后于深谷山、遺令薄葬、不營山陵、

〔延喜式〕二十一諸陵嵯峨陵太皇太后橘氏(嵯峨后橘嘉智子)在山城國葛野郡、兆域東西六町、南二町、北五町、守戸三烟、不入頒幣之例、

〔延喜式〕二十一諸陵石作陵贈皇后(淳和)高志内親王、在山城國乙訓郡、兆域東西三町、南三町、北六町、守戸五烟、

〔延喜式〕二十一諸陵後山科陵太皇太后藤原氏(仁明后順子)在山城國宇治郡、假陵戸五烟、

〔三代實錄〕四十六光孝元慶八年十二月十六日壬寅、定贈皇太后○仁明后澤子山城國愛宕郡中尾山陵四至之堺、東限谷、南田、西隍、北谷、有田四町五段、

〔三代實錄〕四十八光孝仁和元年十月八日己未、是日勅、皇妣贈皇太后○仁明后藤原澤子山陵置守冢五戸、

〔延喜式〕二十一諸陵中尾陵贈皇太后藤原氏(仁明后澤子)在山城國愛宕郡鳥部郷、陵戸五烟、山四町五段、四至東限谷、南限田、西限隍、北限谷、

〔延喜式〕二十一諸陵白河陵太皇太后藤原氏(文德后明子)在山城國愛宕郡上粟田郷、陵戸三烟、四至東限許隆寺東谷、南限白御在所南去十一丈、西限贈正一位源氏墓北、北限白河、

〔延喜式〕二十一諸陵後深草陵中宮藤原氏(宇多后温子)在山城國紀伊郡深草郷、守戸三烟、東限禪定寺、南限大墓、西限極樂寺、北限佐能谷、

后妃陵

後土御門院　嘉樂門院〈○後土御門母后信子〉　後柏原院　後奈良院　豐樂門院〈○後奈良母后藤子〉　正親町院
後陽成院　中和門院〈○後水尾母后前子〉　如此御代々御火葬連綿相續仕候、

〔古事記 中垂仁〕大后比婆須比賣命之時、定石祝作、又定土師部、此后者葬狹木之寺間陵也、

〔日本書紀 六垂仁〕三十二年七月己卯、皇后日葉酢媛命薨、〈○中略〉土物始立于日葉酢媛命之墓、

○按ズルニ、日葉酢媛皇后ノ墓ヲ、古事記ニハ陵ト爲シ、日本書紀ニハ墓ト爲セリ、當時其稱ノ一ナラザリシナラン、然レドモ皇后ハ普通ニハ墓ト稱セシコト、此文ニ據リテ見ルベシ、

〔延喜式 二十一諸陵〕狹城盾列池上陵〈磐余稚櫻宮御宇神功皇后、在大和國添下郡、兆域東西二町、南北二町、守戸五烟、〉

〔日本書紀 九神功〕六十九年四月丁丑、皇太后〈○神功〉崩於稚櫻宮、　十月壬申、葬狹城盾列陵、

〔輶軒小錄〕山陵の事
神功皇后の陵は、奈良より西、三十町許にありと云ふ、上に梓宮を奉藏する處あり、人畏れ敢て近付かず、其脇に二斗許入る壺多くあり、大樣一間四方に一つ程のわりにて、地に埋め有りと云ふ、

〔續日本紀 二十三淳仁〕天平寶字四年十二月戊辰、勅、太皇太后宮、〈○文武后藤原宮子娘、中略、〉御墓者、自今以後、並稱山陵、

〔延喜式 二十一諸陵〕佐保山西陵〈平城朝太皇太后藤原氏、文武后宮子娘、在大和國添上郡、兆域東西十二町、南北十二町、守戸五烟、〉

〔續日本紀 二十三淳仁〕天平寶字四年十二月戊辰、勅、〈○中略〉皇太后〈○聖武后藤原安宿媛〉御墓者、自今以後並稱山陵、

〔延喜式 二十一諸陵〕佐保山東陵〈平城朝皇太后藤原氏、聖武后安宿媛、在大和國添上郡、兆域東三町、西四段、南北七町、守戸五烟、〉

〔續日本紀 三十一光仁〕寶龜二年十二月丁卯、勅、先妣紀氏未追尊號、自今以後宜奉稱皇太后、御墓者稱山陵、其忌日者亦入國忌例、設齋如式、

〔延喜式 二十一諸陵〕吉隱陵〈皇太后紀氏、光仁母后橡姫、在大和國城上郡、兆域東西四町、南北四町、守戸五烟、〉

〔中原師夏記〕應安七年正月廿八日、酉下刻新院（彌仁、後光嚴、御年卅七、）於柳原殿崩御、　二月二日丁酉、子刻後光嚴院御葬禮御幸也、奉送泉涌寺、　廿六日、舊院御遺骨、被奉納所々、深草法華堂　天龍寺（金剛院）天王寺（難波浦）　高野山　泉涌寺　安樂光院

〔神事雜類抄〕舊院（○後花園）仙骨、伏見大光明寺、地藏殿之築山、先年奉納由云、明後日（十日）般舟三昧院之石塔可奉渡之、如此一身燒灰仙骨一箱入歟、被置之事候、既可堀起申之上者、可爲卅ケ日穢限存候、御所存可爲如何哉、具以可被注申旨被仰出候也、恐々謹言、

（長享二）七月八日　忠富

舊院玉骨、先年被安置大光明寺築山、然來十日、可被遷申般舟三昧院之石塔云云、此條可被守改葬法歟、爲全分御灰者、卅箇日穢、勿論候乎、

〔和長卿記〕明應九年九月廿八日庚辰、今夜戌刻、有御北首事、（○後土御門）　十一月十一日辛酉、今夜御葬禮也、　十二日壬戌、今朝御收骨儀也、上卿甘露寺中納言、（爲凶事傳奏）即有分散儀、一分如例、上卿持之、（納宮懸頸云々、今度如何哉、）奉籠深草法花堂、又一分雲龍院、又一分般舟院、皆寺僧賜之、又山國常照寺被籠之、然寺僧不參之間無其沙汰、比丘尼御所々々、於火屋面々取給之、雖非先規不及制之云々、

髮塔

〔顯廣王記〕永萬元年十月十五日辛卯、右大臣被參高野廟、是二條院御髮爲奉收彼山云云、堀川院例也、

灰塚

〔後方朝臣記（後水尾院崩御記所引）〕延寶八年八月十九日乙亥、今朝寅上刻、太上法皇（○後水尾）圓淨（御俗名政仁）終崩御也、○中略申刻般舟院陽空長老來駕、口狀書一通持參、前例多候間、此度仙洞御火葬爾願候、深草安樂行院ニ、治御骨骨堂モ、後陽成院崩御之時分出來、其以後破損ニテ、雨露も掛り候體如何に候間、此度之事願之由、御灰ヲ泉涌寺ニ治申也、

口上書

分骨所

〔一代要記〕近衛九久壽二年七月廿三日、於近衛內裏崩、八月一日、火葬船岡西野、

〔增鏡〕藤衣三此浦岐〇隱にすませ給て、十九年ばかりにや有けん、延應元年といふ二月廿二日、六十にてかくれさせ給ぬ、後鳥羽〇中略、近き山にて例のさほうになし奉るも、むげに人ずくなに心細き御有さまいとあはれになん、御骨をば能茂といひし北面の入道して、御ともにさぶらひしぞくびにかけて奉りて都にのぼりける、

〔增鏡〕十一今日の日隆嘉元も三年になりぬ、萬里小路殿の法皇〇龜山又御なやみとて龜山殿へうつらせ給、〇中略九月十五日のあけぼのに、終にかくれさせ給ぬ、〇中略十七日に御わざの事せさせ給、〇中略よそほしかりつる御ありさまもいとほどなく、只時のまの烟にてのぼり給ぬ、

〔後光嚴院崩御記〕應安七年正月廿九日、寅刻御年卅七ニテ終ニ崩御ナリ、〇中略二月二日、東山泉涌寺ヘ御葬禮、〇中略スグニ穴ニ御棺ヲ入奉テ、御輿ヲバ取除、長老ヨリテ又燒香シテ、薪ニ火ヲタイ松ニテツケラレ給、〇中略同三日、御骨ヲ當寺ノ僧ノ沙汰ニテ拾奉ル、

〔山の霞〕文明二の年十二月廿六日、夜半ばかりより、法皇〇後花園御中風の御所勞いできまし〳〵て、終に辰の刻ばかりに崩御ならせ給ふ、〇中略三日〇文明三年正月申の刻に、悲田院にて御葬送の儀あり、〇中略ほどなく烟となり給へるを見參らせけるに、白樂天が石火光中寄此身とつくれりしも眼前におぼえて、

立のぼる後のけぶりとなるまでに雲ゐに高き名をのこすかな

〔長秋記〕天永四年三月廿二日、堀河院御骨、自香隆寺分渡仁和寺御、〇中略及酉時奉突埋、此後立石塔、三重其內安置法花經四卷經、種々要文陁羅尼等、

〔文應皇帝外紀〕嘉元三年秋、上皇〇龜山病龜山宮、〇中略九月望、上皇崩、〇中略闍毘後、藏仙骨於三所、淨金剛院、南禪寺、金剛峯寺、且順顧命也、

水尼 御石塔供養也、人々濟々參詣、

〔後拾遺和歌集十哀傷〕圓融院法皇うせ給て、紫野に御葬送侍けるに、一とせ此所にて子日せさせたまひし事など思ひ出てよみ侍ける、

　　　　左大將朝光

紫の雲のかけても思ひきや春の霞になして見んとは

　　　　大納言行成

おくれじと常のみゆきはいそぎしをけぶりにそはぬたびのかなしさ

〔榮花物語九石陰〕寛弘八年六月廿二日のひるつ方、あさましうならせ給ぬ、〇中略、一條、かくて八日〇七月のゆふべ、いはかげといふ所へおはしますぎしきふり、〇中略 おはしましつきては、いみじき御有樣と申つれど、はかなき雲霧とならせたまひぬるは、いかゞはあはれならぬ、長き夜といへどはかなうあけぬれば、曉がたには御骨など、そちの殿〇藤原伊周 などとらせ給て事はてぬれば、大藏卿正光朝臣おひ奉りて、歸らせ給はほどなどいみじうかなし、

〔類聚雜例〕長元九年四月十七日乙丑、主上〇後一條 自去三月之比不例御、〇中略 漸及戌刻之間、遂崩於清涼殿、　五月十三日庚寅、及晩景、資業朝臣時棟等歸參申云、巡撿神樂岡東邊、自一條以南、自上東門末以北、自御在所申方有便所、以其地可爲山作所也、　十九日丙申、令向山作所給、〇中略 及辰刻奉擧茶毘、〇下略

〔皇年代略記後冷泉〕治曆四年四月十九日庚申、崩於賀陽院、四十四、五月五日丙子、火葬船岡乾原、御骨安置仁和寺、

〔長秋記〕大治四年七月十五日辛卯、法皇〇白河 御葬送、〇中略 至高隆寺西北御墓所、于時淸庭御所安御棺、次奉移貴所、霊所也 次開御棺蓋、積御體廻折松薪等、上置藁、又不覆蓋、次取前火付薪、

〔中右記〕嘉承二年七月十九日癸卯、主上〇堀河 辰刻許、御氣色斷給也、　廿四日戊申、今夕御葬送也、〇中略 至高隆寺坤方野、〇中略 奉茶毘、

陵塔石卒都婆

〔中右記〕永久二年十二月廿一日、荷前也、予共人五人、撿非違使資清相具、於深草山陵烏居前下従車、入烏居、洗手、（山陵守儲手水、）令燒幣物、此間解劍持笏、兩段再拜、了歸洛、

〔中右記〕永久五年十二月廿四日、荷前也、○中略騎馬相具共人五六人、此間秉燭、從粟田口到山科之山陵、（天智、）○中略南烏居前、陵守出來敷疊令洗手、進陵前兩段再拜、

〔愚昧記〕仁安三年四月卅日、今日即位（高倉、）○中略由可被告山陵也、○中略即參向山階山陵、（天智、）○中略令尋陵預、頃之出來、予問云、參御山歟、將候此烏居歟、答云、此烏居下令候也、

〔類聚雜例〕長元九年五月十九日丙申、○中略式部大輔資業朝臣、美作守定經朝臣等向御葬所、（後一條、）○中略採勸殯士其後人夫等從此役、御墓上立石卒都婆、藏陁羅尼、其廻立釘貫、又右衞門尉季任令人夫堀墉、其廻令殖樹云云、

〔中右記〕嘉承二年七月廿四日戊申、今夕御喪送也、（堀河、）○中略廿五日、內大臣獨留御墓所、令作山陵、（墓上立石卒都婆、納陁羅尼、立釘貫、）

〔前王廟陵記下〕或曰、二條院御墓、在舟岡北麓、所謂香隆寺艮野者是耶、上有五重石塔、近世嗜茶千利休、取九輪爲己塔、立聚光院、又塔穿竅處爲手水鉢、不幾利休逢禍、

〔建內記〕正長二年七月四日、稱光院殿去年崩御、御殿（黑戶）渡殿（御路御出御之事也、）之門（出御之門也、北面上大門也、）今日被撤却之、新中納言（親光）奉行之、運渡泉涌寺雲龍院也、稱光院御塔以在彼院之故也、今更催餘意者也、五日、黑戶渡殿門等、今日悉壞渡雲龍院云云、　四日、著狩衣、參泉涌寺雲龍院、是則兩代（後光嚴院、後圓融院、）塔幷稱光院御塔也、

〔續史愚抄後光明〕承應三年十一月廿一日丁未、被供養後光明院御石塔於泉涌寺、先有御塔開眼事、已上導師報恩院某、公卿右大臣（實晴、）已下五人參仕、奉行藏人頭左中將宗良朝臣、

〔淳房卿記〕延寶八年十月廿三日戊申、巳刻相伴右宰相中將右衞門督行豐朝臣第、詣泉涌寺、舊院（後○

右中納言從三位右衛門督藤原朝臣恒佐宣、奉勅件人堀涅後山科山陵之間、宜免陣直者、

承平元年十一月廿七日　少外記嶋田公鑒奉

同日、召仰大志高志常直了、

〔愚昧記〕安元三年五月十七日丙辰、讃岐院（○崇徳）御事、一以彼御墓所、勅稱山陵、其邊堀隍不令汙穢、

陵樹

〔兵範記〕久壽二年七月廿三日戊辰、午刻天皇（○近衛）崩于近衛殿、八月二日丁丑、巳刻大納言歸向御葬所、築陵植樹堀隍、

〔續日本紀（八元正）〕養老五年十月丁亥、太上天皇（○元明）召入右大臣從二位長屋王、參議從三位藤原朝臣房前詔曰、（○中略）朕崩之後、宜於大和國添上郡藏寶山雍良岑造竈火葬、（○中略）庚寅、太上天皇又詔曰、（○中略）就山作竈、芟棘開場、即爲喪所、又其地者、皆殖常葉之樹、即立刻字之碑、

〔日本紀略（嵯峨）〕弘仁五年五月、是月有虫、食柏原山陵（○桓武）樹、東北方六十丈許皆枯焉、

〔文德實錄（一）〕嘉祥三年四月辛酉、遣左近衛將曹粟田眞持於深草陵（○仁明）、列栽樹木、間以一丈、相襲成行、

〔三代實錄（十五清和）〕貞觀十年二月十八日壬午、野火燒損田邑山陵（○文德）兆域中之樹木、

〔日本紀略（四村上）〕康保四年六月九日丙寅、村上御陵可殖樹之由、被仰左右衛門、

〔二水記〕享祿四年四月七日、聖忌（○後柏原）請一僧了、午前參泉涌寺、於法塔密々著直垂、拜御廟了、先年巳後始諸事、今更拭愁涙了、後土御門院御廟椿、先皇御廟松也、法塔（東椿、西松、）

○按ズルニ、後土御門後柏原ノ二天皇陵ハ、並ニ深草法花堂ニ在リ、然レバ本文御廟ト稱スルモノハ、宮內省撰定ノ陵墓一覽ニ所謂、灰塚ノ事ナランカ、

陵前鳥居

〔小右記〕永觀二年十月廿七日癸卯、辰時許參院、（○圓融）令修諷誦於七箇日、（寺家）巳時參御邑上山陵、（○中略）留御車於鳥居外、即下御、余候御劍、前行之置御座、（鳥居中五六段許、有御在所、立幔、其上張幄、）公卿侍臣幄在鳥居外、（○下略）

〔類聚國史 帝王三十六〕大同二年八月己巳、大和山城二國、定八嶋(○桓武皇太子崇道天皇)河上(○平城后藤原帶子)柏原山陵兆域、陵之四至各有其限、其百姓田并地、在八嶋河上二陵界內者、以乘田賜之、但地者准估賜直、

〔延喜式 諸陵二十一〕柏原陵(平安宮御宇桓武天皇、(中略)兆域東八町、西三町、南五町、北六町、加丑寅角二岑一谷、)

〔三代實錄 清和十四〕貞觀九年十二月十八日癸未、庶人伴善男建立道場、在山城國紀伊郡柏原山陵兆域之內、勅令移却、

〔延喜式 諸陵二十一〕楊梅陵(平安宮御宇日本根子推國高彥尊天皇、(平城、中略)兆域東西二町、南北四町、)

〔三代實錄 清和五〕貞觀三年六月十七日庚申、詔定仁明天皇深草山陵四至、東西限一町五段、南限純子內親王家地、北限峯、

〔三代實錄 清和十二〕貞觀八年十二月廿二日癸巳、勅改定深草山陵(○仁明)四至、東至大墓、南至純子內親王家北垣、西至貞觀寺東垣、北至谷、

〔延喜式 諸陵二十一〕深草陵(平安宮御宇仁明天皇、(中略)兆域東西一町五段、南七段、北二町、)

〔延喜式 諸陵二十一〕田邑陵(平安宮御宇文德天皇、(中略)兆域東西四町、南北四町、)

後田邑陵(光孝天皇、(中略)四至西限芸原岳岑、南限大道、東限清水寺東、北限大岳岑、)

〔醍醐雜事記〕醍醐天皇崩事

延長八年從七月中旬不豫、　九月廿七日丁亥、亥三刻先皇御車、遷御於右近衞府大將曹司、　廿九日、上皇受於山座主三歸三聚淨戒等、未刻崩於右近府、(春秋四十六)　十月十日庚子、亥四刻奉葬於醍醐寺北笠取山西方、四面八十町、東西八町、南北十町、穴深九尺、廣三丈、校倉高四尺三寸、縱橫各一丈、十一日、天漸明、辰四剋到醍醐寺北山陵、諸寺八十六所、夾路設幕、擊鐘念佛、　十二日、山作所於山陵立卒都婆三基、

〔類聚符宣抄 四〕左衞門權少尉源添

山陵、一云、河內國石川郡、高四丈、方九町、

〔延喜式二十一諸陵〕越智崗上陵飛鳥川原宮御宇皇極天皇、(中略)兆域東西五町、南北五町、

〔扶桑略記四齊明〕七年七月廿四日、天皇崩、山陵朝倉山、陵高三丈、方五町、改葬大和國高市郡越智大堀○堀一本作握間山陵、十一月改之

〔延喜式二十一諸陵〕大坂磯長陵難波長柄豐碕宮御宇孝德天皇、(中略)兆域東西五町、南北五町、

〔扶桑略記四孝德〕白雉五年十月、天皇崩、山陵河內國石川郡大坂磯長、十二月、葬磯長山陵、高二丈、方五町、

〔延喜式二十一諸陵〕山科陵近江大津宮御宇天智天皇、(中略)兆域東西十四町、南北十四町、

〔扶桑略記五天智〕十年十二月三日、天皇崩、○中略山陵山城國宇治郡山科鄕北山、高二丈、方十四町、

〔延喜式二十一諸陵〕檜隈大內陵飛鳥淨御原宮御宇天武天皇、(中略)兆域東西五町、南北四町、

〔扶桑略記五天武〕十五年九月四日、天皇崩、山陵大和國高市郡檜隈大內、高五丈、方五町、

〔延喜式二十一諸陵〕檜前安古岡上陵藤原宮御宇文武天皇、(中略)兆域東西三町、南北三町、

〔扶桑略記五文武〕慶雲四年六月十五日、天皇春秋廿五崩、山陵大和國高市郡檜前安古岡上、高三丈、方一町、

〔延喜式二十一諸陵〕奈保山東陵平城宮御宇元明天皇、(中略)兆域東西三町、南北五町、

〔扶桑略記六元正〕養老五年十二月四日、太上天皇崩、年六十一、元明天皇也、火葬于椎山陵、依遺詔不具喪禮、陵高三丈、方三町、自°此°以°後°、不°作°高°陵°、

〔延喜式二十一諸陵〕奈保山西陵平城宮御宇淨足姬天皇、(元正、中略)兆域東西三町、南北五町、

佐保山南陵平城宮御宇勝寶感神聖武天皇、(中略、)兆域東四段、西七町、南北七町、

高野陵平城宮御宇天皇、(孝謙、中略、)兆域東西五町、南北三町、

淡路陵廢帝、(淳仁、中略、)兆域東西六町、南北六町、

田原東陵平城宮御宇天宗高紹天皇、(光仁、中略、)兆域東西八町、南北九町、

檜隈寺者、奉爲欽明天皇所創建大伽藍也、北邊礎石所ノ存在故、

〔波夫理和射乃考〕砂礫を以て陵上を葺くといふは、何の料にしたるにかいまだ考へず、されど前王廟陵記云、山科陵天智天皇在鏡山麓、陵四面野名御廟野、陵狀有八角石壇、上在六角丘、皆以磧礫築之、壝周廻亦敷磧礫、樹木叢生、とあるも同じ造狀なるべければ、此御世の頃はなべて然せる制度なりけむと思はる、大柱を建るも何の用なるかしらず、字典に、釋氏は冢上立柱といふは似たる事ながら、さることも思はれず、又陵土の崩頽の爲にものせるかともおもへど、あらず、信濃國諏訪神社上諏訪に拜殿は有れど宮作はなく、社地に大なる石窟あるを神の坐所と申して、其四隅に大なる柱を立て、此を御柱と云て宮に擬へたり、此柱を七年に一度づゝ立替あり、其祭を御柱祭といふ、木は杉檜披樫何にても大木を用ふる例なりこれは平田篤胤の古史傳にいへる趣なりと云を按ふに、古へは山陵を神靈の坐所としつるものと通ゆれば、大きなる柱を建て、卽神祭の料とせるにやあらむ、何にも由ありげなり、

〔延喜式二十一諸陵〕河内磯長中尾陵譯語田宮御宇敏達天皇、(中略)兆域東西三町、南北三町、

〔扶桑略記三敏達〕十四年八月十五日、天皇春秋廿四歲崩、山陵河内國石川郡磯長中尾、高三丈、方二町、

〔延喜式二十一諸陵〕河内磯長原陵磐余池邊列槻宮御宇用明天皇、(中略)兆域東西二町、南北三町、

〔扶桑略記三用明〕二年四月九日、天皇崩、○中略推古天皇元年九月、改葬河内國石河郡磯長原山陵、高三丈、方三町、

〔延喜式二十一諸陵〕磯長山田陵小治田宮御宇推古天皇、(中略)兆域東西二町、南北二町、

〔扶桑略記四推古〕三十六年三月、天皇春秋七十三崩、○中略山陵河内國石川郡科長山田、或本云、山陵大和國高市郡、高二丈、方二町、

〔延喜式二十一諸陵〕押坂内陵高市崗本宮御宇舒明天皇、(中略)兆域東西九町、南北六町、

〔扶桑略記四舒明〕十三年十月九日、天皇於百濟宮崩、○中略皇極天皇三年九月、改葬大和國城上郡押坂

〔延喜式二十一諸陵〕古市高屋丘陵勾金橋宮御宇安閑天皇、(中略)兆域東西一町、南北一町五段、

〔扶桑略記三安閑〕二年十二月十七日、天皇七十崩、葬于河内國古市郡古市高屋丘陵、高三丈、方二町、

〔延喜式二十一諸陵〕身狹桃花鳥坂上陵檜隈廬入野宮御宇宣化天皇、(中略)兆域東西二町、南北二町、

〔扶桑略記三宣化〕四年己未二月十日、天皇春秋七十二崩、葬于大倭國高市郡身狹桃花鳥坂上陵、高三丈、方三町、

〔延喜式二十一諸陵〕檜隈坂合陵磯城島金刺宮御宇欽明天皇、(中略)兆域東西四町、南北四町、

〔扶桑略記三欽明〕三十二年四月十五日、天皇崩、葬于大和國高市郡檜隈坂合陵、高四丈、方四町、

〔日本書紀二十二推古〕廿八年十月、以砂礫葺檜隈陵上、欽明○則域外積土成山、仍毎氏科之、建大柱於土山上、時倭漢坂上直樹柱勝之大高、時人號之曰大柱直、

〔播磨國風土記揖保郡〕日下部里立野、所以號立野者、昔土師弩美宿禰、往來於出雲國、宿於日下部野、乃得病死、爾時出雲國人來到、連立人衆、運傳上川礫、作墓山、故號立野、即號其墓屋、爲出雲墓屋、

〔陵墓志〕檜隈坂合陵　欽明天皇、在大和國高市郡下平田村、字梅山、大和志曰、高市郡平田村、俗呼梅山、推古天皇廿八年十月、以砂礫葺陵上、即是傍有翁仲二軀、　御陵所考曰、高市郡檜隈村近邊陵二ヶ所アリ、然ドモ欽明天武持統文武ノ際一決シ難シ、尚重按、大和志説得正矣、御陵所考説未決、然今此山陵、各以砂石葺之、與日本書紀合、況近世此陵前周池之側、堀出於檜木大柱、其地字池田、其傍有稱机ノ地名、是宣命場乎、大柱者、近隣越村醫服部宗堅秘藏而納宮、希代之柱木、今細礫其屑而已、以此等事考ルニ、梅山陵、是即坂合陵的當ス、山陵ノ域内小冢多、曰經塚、曰金冢、石窟有之、此陵或曰石山、葺砂石之故乎、御陵所考、字鐘子山、今尋込之、圖亦似差、今俗號猿山、以翁仲二軀形呼猿訛之、廟陵記云フ、檜隈寺ハ、今在檜隈村中道與寺側、十三層石浮屠存之、甚古物也、往古

〔扶桑略記二允恭〕卅二年癸巳正月十四日、天皇春秋八十崩、十月、葬河内國志紀郡惠我長野北原陵、高四丈、方三町、

〔河内國陵墓圖〕允恭天皇御陵、岡村ヨリ十二町東、澤田村志紀郡、土岐山城守領、ノ東南ニツヽケリ、四面有池、處々水存ス、堤周千四百五十歩、池幅四十歩、或七十歩、山高百二十歩餘陵上處々ノ如ナル石イブ、長一寸、或五六分、俗ニマガ玉トイフ、青石尤堅シ、馬腦水晶等ニテ作ル、山形如圖、○圖略

〔延喜式二十一諸陵〕菅原伏見西陵石上穴穗宮御宇安康天皇、(中略)兆域東西二町、南北三町、

〔扶桑略記二安康〕三年八月壬辰日、○中略天皇春秋五十六崩、葬大和國添下郡菅原伏見西陵、高三丈、方二町、

〔延喜式二十一諸陵〕丹比高鷲原陵泊瀨朝倉宮御宇雄略天皇、(中略)兆域東西三町、南北三町、

〔扶桑略記二雄略〕廿三年己未八月、天皇年九十三崩、葬于河内國丹遲郡北高鷲原陵、高二丈、方二町、

〔延喜式二十一諸陵〕河内坂門原陵磐余甕栗宮御宇清寧天皇、(中略)兆域東西二町、南北二町、

〔扶桑略記二清寧〕五年甲子正月、天皇春秋卅九崩、葬于河内國古市郡坂門原陵、高二丈、方二町、

〔延喜式二十一諸陵〕傍丘磐坏丘南陵近飛鳥八釣宮御宇顯宗天皇、(中略)兆域東西二町、南北三町、

〔扶桑略記二顯宗〕三年四月、天皇四十八歲崩、葬于大和國葛下郡傍丘磐坏丘南陵、高三丈、東西二町、南北三町、

〔延喜式二十一諸陵〕埴生坂本陵石上廣高宮御宇仁賢天皇、(中略)兆域東西二町、南北二町、

〔扶桑略記二仁賢〕十一年戊寅八月、天皇春秋五十歲崩、葬于河内國丹遲郡埴生坂本陵、高二丈、方二町、

〔延喜式二十一諸陵〕傍丘磐坏丘北陵泊瀨列城宮御宇武烈天皇、(中略)兆域東西二町、南北三町、

〔扶桑略記二武烈〕八年十二月、天皇春秋十八歲崩、葬于大和國葛下郡傍丘磐坏丘北陵、高二丈、方二町、

〔延喜式二十一諸陵〕三嶋藍野陵磐余玉穗宮御宇繼體天皇、(中略)兆域東西三町、南北三町、

〔扶桑略記三繼體〕廿五年辛亥二月、天皇春秋八十二崩、同年十二月、葬于攝津國嶋上郡三嶋藍野陵、高三丈、方三町、

山ノ根廻七百二十間、山ノ南ノ高十四間、北ノ高十六間四尺、中ノ高十間五尺、中島摠ジテ此陵ヨリ方角ヲ取テ、餘ノ陵所記ス、秀吉公度々此陵ニテ獵シ玉フニ、假ニ居ヲ構玉ヒケレバ、其墟ヲ今ニ茶屋山ト所ノ人云リ、

〔泉州志〕仁德天皇陵、（號大山陵）在舳松領、兆域今所存、外堤千二百八十三間、中堤九百五十五間、山根七百六十三間、南峰高十四間、北峰高十六間四尺、四畔小塚九箇、

〔輶軒小錄〕山陵の事

仁德帝の陵は、泉州堺の東廿町許にあり、周回十丁餘ありて、まはりに堀あり、はゞ三四間あり、小舟一艘ありて往來す、上に登れば谷々ありて小山の如し、予兩回まで拜覽す、土人此を大仙陵と云ふ、

〔北窓瑣談中〕泉州堺の東、六七町ばかりに、仁德天王の陵あり、俗に大仙陵といふ、はなはだ大にして南北に長し、その長三四五町ばかりもあり、回迫に池あり、みさゝきは北の方高く、南の方ひくし、樹木おびたゞしく生茂げり、その大なること天造の岡山の如く、人作のやうにはみえず、今も樹木をきり下くさをかることを官より禁じ、雜人の入ことをゆるさず、天下の陵の大いなるものは、此陵を第一とすべし、

〔延喜式二十一諸陵〕百舌鳥耳原南陵（磐余稚櫻宮御宇履中天皇、（中略）兆域東西五町、南北五町、）

〔扶桑略記二履中〕六年三月十五日、天皇春秋六十七崩、十月四日、葬于和泉國大鳥郡百舌鳥耳原南陵、（五丈、五町、）

〔延喜式二十一諸陵〕百舌鳥耳原北陵（丹比柴籬宮御宇反正天皇、（中略）兆域東西三町、南北二町、）

〔扶桑略記二反正〕六年正月、天皇六十崩、葬和泉國大鳥郡百舌鳥耳原北陵、（高五丈、廣三町、）

〔延喜式二十一諸陵〕惠我長野北陵（遠飛鳥宮御宇允恭天皇、（中略）兆域東西三町、南北二町、）

玉手丘上陵室秋津島宮御宇孝安天皇、(中略)兆域東西六町、南北六町、

片丘馬坂陵黒田廬戸宮御宇孝靈天皇、(中略)兆域東西五町、南北五町、

劒池嶋上陵輕境原宮御宇孝元天皇、(中略)兆域東西二町、南北一町、

春日率川坂上陵春日率川宮御宇開化天皇、(中略)兆域東西五段、南北五段、

山邊道上陵磯城瑞籬宮御宇崇神天皇、(中略)兆域東西二町、南北二町、

菅原伏見東陵纏向珠城宮御宇垂仁天皇、(中略)兆域東西二町、南北二町、

山邊道上陵纏向日代宮御宇景行天皇、(中略)兆域東西二町、南北二町、

狹城盾列池後陵志賀高穴穗宮御宇成務天皇、(中略)兆域東西一町、南北三町、

惠我長野西陵穴門豐浦宮御宇仲哀天皇、(中略)兆域東西二町、南北二町、

惠我藻伏崗陵輕島明宮御宇應神天皇、(中略)兆域東西五町、南北五町、

〔扶桑略記二應神〕四十一年二月十五日、天皇春秋百十一歲崩、葬于河內國志紀郡惠我藻伏陵、高五丈、方五町、

〔檜軒小錄〕山陵の事

應神天皇の陵は河州にあり、大仙陵〇仁德陵見下の如し、山少く小く、周回の池なし、譽田八幡と云ふ社あり、社領二百石にて、社家社僧あり、東一院、西一院、大滿院など云ふ寺十軒許あり、予癸丑の夏拜見す、

〔延喜式二十一諸陵〕百舌鳥耳原中陵難波高津宮御宇仁德天皇、(中略)兆域東西八町、南北八町、

〔扶桑略記二仁德〕八十七年己亥正月十六日、天皇一百十歲崩、一云、百廿三歲、同年十月、葬于和泉國大鳥郡百舌鳥耳原中陵、五丈、八町、

〔堺鑑〕百舌鳥耳原中陵、仁德天皇此陵ハ泉河攝ノ堺、大小路(オホヒウヂ)ノ東ノ町外(ハヅレ)ヨリ八町許離タリ、世人大仙陵ト云リ、天皇己亥ノ歲ニ崩ズ、宮廟ハ難波ノ邊高津ニ平野明神ト號ス、〇中略山ノ間數ノ事、總

光城

後村上天皇檜尾陵（河內國錦部郡寺元村）
後龜山天皇嵯峨小倉陵（山城國葛野郡上嵯峨村）
光嚴天皇山國陵（丹波國桑田郡井戸村）
光明天皇大光明寺陵（山城國紀伊郡堀內村）
崇光天皇大光明寺陵（山城國紀伊郡堀內村）
後光嚴天皇深草法華堂（山城國紀伊郡深草村）
後圓融天皇深草法華堂（同上）
後小松天皇深草法華堂（同上）
稱光天皇深草法華堂（同上）
後花園天皇後山國陵（丹波國桑田郡井戸村）
後土御門天皇深草法華堂（山城國紀伊郡深草村村）
後柏原天皇深草法華堂（同上）
後奈良天皇深草法華堂（同上）
正親町天皇深草法華堂（同上）
後陽成天皇深草法華堂（同上）
後水尾天皇月輪陵（山城國愛宕郡今熊野村）
明正天皇月輪陵（同上）
後光明天皇月輪陵（同上）
後西院天皇月輪陵（同上）
靈元天皇月輪陵（同上）
東山天皇月輪陵（同上）
中御門天皇月輪陵（同上）
櫻町天皇月輪陵（同上）
桃園天皇月輪陵（同上）
後櫻町天皇月輪陵（同上）
後桃園天皇月輪陵（同上）
光格天皇後月輪陵（同上）
仁孝天皇後月輪陵（同上）
孝明天皇後月輪東山陵（同上）

〔延喜式二十一諸陵〕畝傍山東北陵（畝傍橿原宮御宇神武天皇（中略）兆城東西一町、南北二町、）
桃花鳥田丘上陵（葛城高丘宮御宇綏靖天皇（中略）兆城東西一町、南北一町、）
畝傍山西南御陰井上陵（片鹽浮穴宮御宇安寧天皇（中略）兆城東西三町、南北二町、）
畝傍山南纖沙溪上陵（輕曲峽宮御宇懿德天皇（中略）兆城東西一町、南北一町、）
掖上博多山上陵（掖上池心宮御宇孝昭天皇（中略）兆城東西六町、南北六町、）

陽成天皇神樂岡東陵 山城國愛宕郡淨土寺村
宇多天皇大內山陵 山城國葛野郡宇多野村
朱雀天皇醍醐陵 山城國宇治郡醍醐村
冷泉天皇櫻本陵 京都市上京區鹿谷町
花山天皇紙屋上陵 山城國葛野郡大北山村
三條天皇北山陵 山城國葛野郡衣笠村
後朱雀天皇圓乘寺陵 山城國葛野郡谷口村
後三條天皇圓宗寺陵 山城國葛野郡谷口村
堀河天皇後圓敎寺陵 山城國葛野郡谷口村
崇德天皇白峰陵 讚岐國阿野郡青海村
後白河天皇法住寺法華堂 山城國愛宕郡三十三間堂前
六條天皇清閑寺陵 山城國愛宕郡清閑寺村
安德天皇阿彌陀寺陵 長門國赤間關市
土御門天皇金原陵 山城國乙訓郡金ヶ原村
仲恭天皇九條陵 山城國紀伊郡深草村
四條天皇月輪陵 山城國愛宕郡今熊野村
後深草天皇深草法華堂 山城國紀伊郡深草村
後宇多天皇蓮華峯寺陵 山城國葛野郡上嵯峨村
後伏見天皇深草法華堂 山城國紀伊郡深草村
花園天皇十樂院上陵 山城國愛宕郡粟田口村

光孝天皇後田邑陵 山城國葛野郡花園村
醍醐天皇後山科陵 山城國宇治郡醍醐村
村上天皇村上陵 山城國葛野郡花園村
圓融天皇後村上陵 山城國葛野郡花園村
一條天皇圓融寺北陵 山城國葛野郡谷口村
後一條天皇菩提樹院陵 京都市上京區淨土寺町
後冷泉天皇圓敎寺陵 山城國葛野郡谷口村
白河天皇成菩提院陵 山城國紀伊郡竹田村
鳥羽天皇安樂壽院陵 山城國紀伊郡竹田村
近衛天皇安樂壽院南陵 山城國紀伊郡竹田村
二條天皇香隆寺陵 山城國葛野郡衣笠村
高倉天皇清閑寺法華堂 山城國愛宕郡清閑寺村
後鳥羽天皇大原法華堂 山城國愛宕郡勝林院村
順德天皇大原陵 山城國愛宕郡大原村
後堀河天皇觀音寺陵 山城國愛宕郡今熊野村
後嵯峨天皇嵯峨殿法華堂 山城國葛野郡天龍寺村
龜山天皇龜山殿法華堂 山城國葛野郡天龍寺村
伏見天皇深草法華堂 山城國紀伊郡深草村
後二條天皇北白河陵 山城國愛宕郡白川村
後醍醐天皇塔尾陵 大和國吉野郡吉野山

應神天皇惠我藻伏崗陵　河內國古市郡譽田村
履中天皇百舌鳥耳原南陵　和泉國大鳥郡上石津村
允恭天皇惠我長野北陵　河內國志紀郡國府村
雄略天皇丹比高鷲原陵　河內國丹北郡島泉村丹南郡南島泉村界
顯宗天皇傍丘磐杯丘南陵　大和國葛下郡下田村
武烈天皇傍丘磐杯丘北陵　大和國葛下郡志都美村
安閑天皇古市高屋丘陵　河內國古市郡古市村
欽明天皇檜隈坂合陵　大和國高市郡平田村
用明天皇河內磯長原陵　河內國石川郡春日村
推古天皇磯長山田陵　河內國石川郡山田村
皇極齊明天皇越智崗上陵　大和國高市郡車木村
天智天皇山科陵　山城國宇治郡御陵村
天武天皇檜隈大內陵　大和國高市郡野口村
文武天皇檜前安古岡上陵　大和國高市郡栗原村
元正天皇奈保山西陵　大和國添上郡奈良坂村
孝謙稱德天皇高野陵　大和國添下郡山陵村
光仁天皇田原東陵　大和國添上郡日笠村
平城天皇楊梅陵　大和國添下郡佐紀村
淳和天皇大原野西嶺上陵　山城國乙訓郡大原野村
文德天皇田邑陵　山城國葛野郡仲野村

仁德天皇百舌鳥耳原中陵　和泉國大鳥郡舳松村
反正天皇百舌鳥耳原北陵　和泉國大鳥郡中筋村
安康天皇菅原伏見西陵　大和國添下郡寶來村
清寧天皇河內坂門原陵　河內國古市郡西浦村
仁賢天皇埴生坂本陵　河內國丹南郡野中村
繼體天皇三嶋藍野陵　攝津國島下郡太田村
宣化天皇身狹桃花鳥坂上陵　大和國高市郡鳥屋村
敏達天皇河內磯長中尾陵　河內國石川郡太子村
崇峻天皇倉梯岡陵　大和國十市郡倉橋村
舒明天皇押坂內陵　大和國城上郡忍坂村
孝德天皇大坂磯長陵　河內國石川郡山田村
弘文天皇長等山前陵　近江國滋賀郡別所村
持統天皇檜隈大內陵　大和國高市郡野口村
元明天皇奈保山東陵　大和國添上郡奈良坂村
聖武天皇佐保山南陵　大和國添上郡法蓮村
淳仁天皇淡路陵　淡路國三原郡加集村
桓武天皇柏原陵　山城國紀伊郡堀內村
嵯峨天皇嵯峨山上陵　山城國葛野郡上嵯峨村
仁明天皇深草陵　山城國紀伊郡深草村
清和天皇水尾山陵　山城國葛野郡水尾村

御築造ト申候而者、定而御議論モ相生シ可申候得共、是迄龕前堂山頭堂ナドト申、費所之冗費ヲ相省候時者、是亦容易ニ御築造成功可仕奉存候、乍然無據御差支之御次第柄モ被爲在、前文之御儀御採用不相成、是迄之御圍內ニ葬御被爲在候御儀ニ御座候ハヽ、斷然內外一致、御埋葬之御禮儀ニ被爲復、御茶毘無實之御規式、一切御廢止ニ相成候樣仕度奉存候、將又名分國體者、天下人心之向背ニ關係仕候儀ニ付、右早々御英斷有之、臣子忠孝之標準御敎諭無御座候而者、御陵之儀取調出來兼候ニ付、微衷申上候、此段奉伺候以上、

十二月　　戸田大和守

四日、大行天皇〇孝明山陵、今度依舊蹤御再興、尤被營泉山〇泉涌寺候事、右按察卿被示傳了、　廿七日、酉刻御出棺云々、是迄御茶毘御作法之間、移御枕火於御前火、殿上人取之、今度御埋葬之間、不及其儀、龕前堂稱御車寄、百味食供進在之云々、山陵東山頭云々、供奉各隨、子刻比著御、泉山御式濟、未天曙云々、葬場使左少將公允朝臣參向、丑半刻許歸參、其後攝政殿御退出云云、

〇按ズルニ、山陵ノ地ハ、古來其所在ヲ知ラザルモノ多カリシガ、諸陵寮ニテ多年精査シテ之ヲ定メタリ、今之ヲ節略シテ左ニ擧ゲ、以テ參照ニ便ニス、

神武天皇畝傍山東北陵大和國高市郡山本村

安寧天皇畝傍山西南御陰井上陵大和國高市郡吉田村

孝昭天皇掖上博多山上陵大和國葛上郡三室村

孝靈天皇片丘馬坂陵大和國葛下郡王子村

開化天皇春日率川坂上陵大和國添上郡平城油坂町

垂仁天皇菅原伏見東陵大和國添下郡寶音寺村

成務天皇狹城盾列池後陵大和國添下郡山陵村

綏靖天皇桃花鳥田丘上陵大和國高市郡四條村

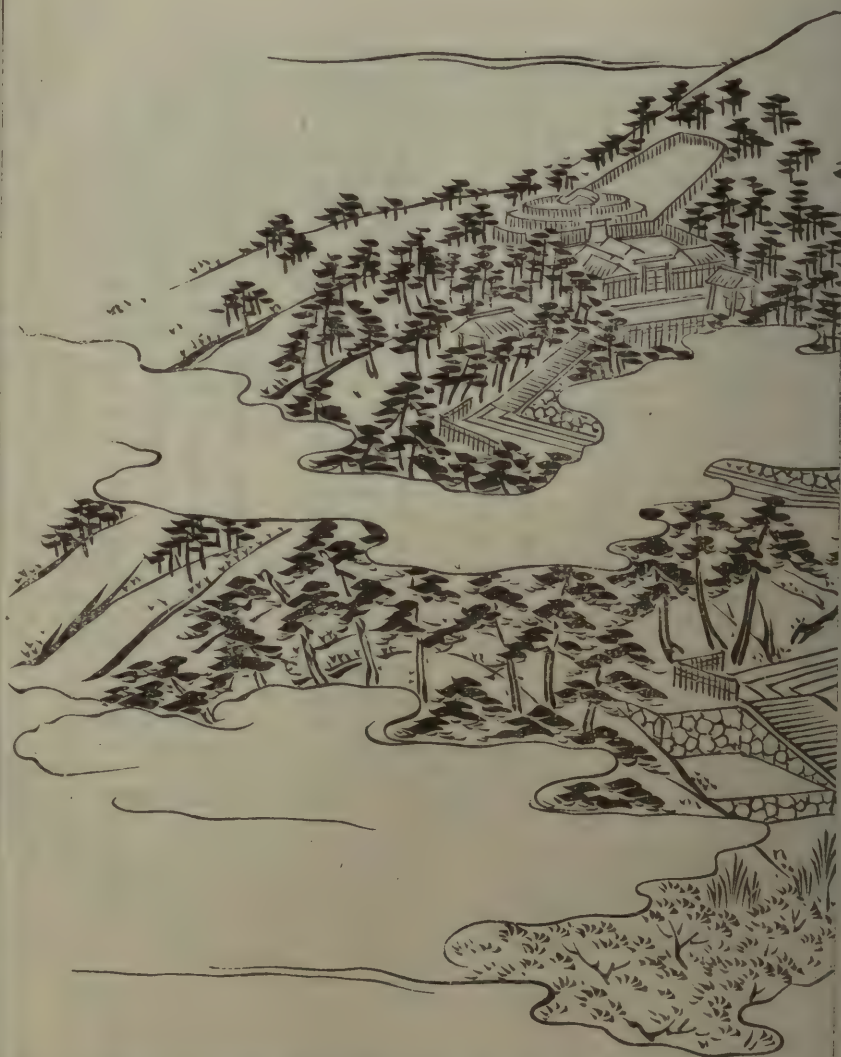
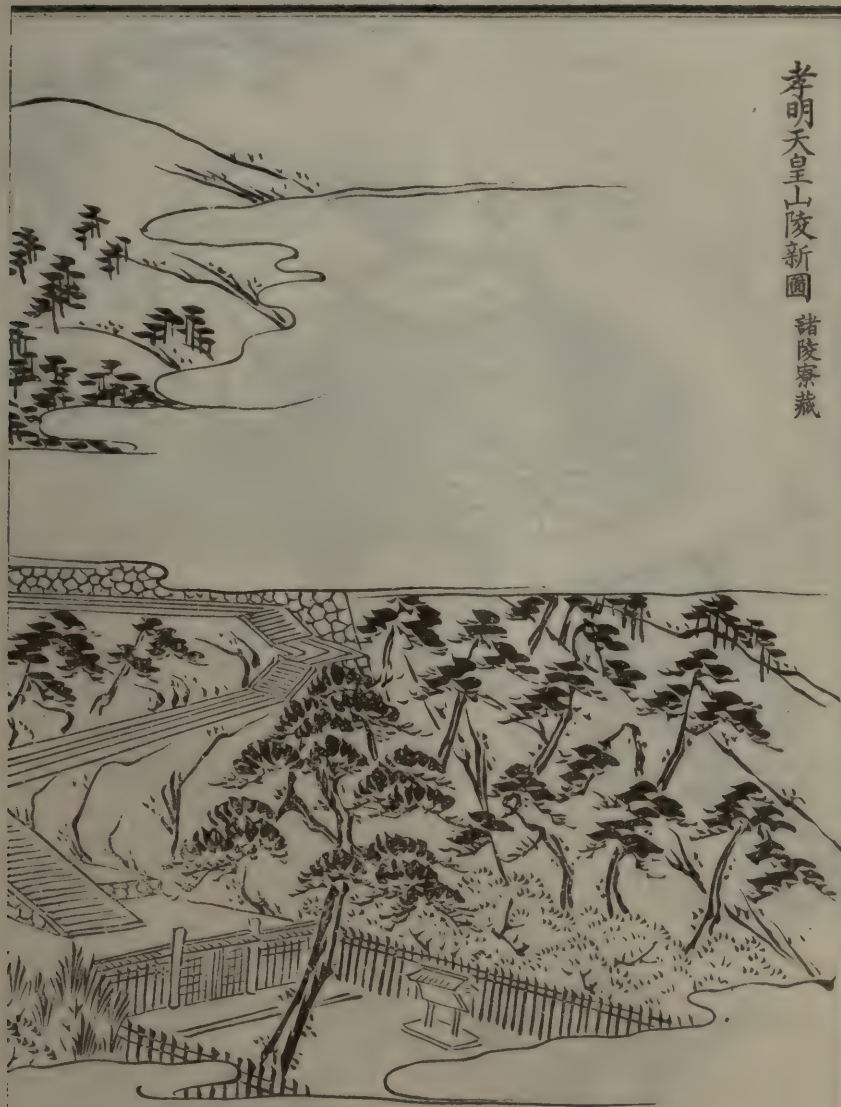
懿德天皇畝傍山南纖沙谿上陵大和國高市郡池尻村

孝安天皇玉手丘上陵大和國葛上郡玉手村

孝元天皇劒池嶋上陵大和國高市郡石川村

崇神天皇山邊道上陵大和國城上郡柳本村

景行天皇山邊道上陵大和國城上郡澁谷村

仲哀天皇惠我長野西陵河內國丹南郡岡村

孝明天皇山陵新圖 諸陵寮藏

戸田忠至山陵圖
孝明天皇山陵

〔公卿補任 後桃園〕安永八年十一月九日、天皇崩、奉諡後桃園院、十二月十日、奉葬于泉涌寺、

〔公卿補任 仁孝〕天保十一年十二月二十日、〇中略太上天皇〇光格奉葬于泉涌寺、

〔近代御系譜〕天保十二年閏正月廿七日、以御石塔擬山陵、號後月輪陵、〇光格

〔近代御系譜〕弘化三年二月六日、崩御内裏、〇仁孝三月朔日、以御塔號弘化廟、同月四日、〇中略同夜葬于泉涌寺、

〔言成卿記〕慶應三年正月一日、右大將觸書廻文到來、御葬送是迄御茶毘之分ニ而、自山頭御密行ト被稱候得共、以來表向御埋葬、山陵御築造可被爲在旨ニ付、現任一同所存可申上、殿下被命之旨、廣橋大納言被申渡候、〇中略戸田大和守建言寫、

今度御陵〇孝明御製造之儀、取調進達仕候樣、廣橋大納言殿被仰出奉畏候、中古佛法渡來以後、御製造之形樣モ變革仕、遂ニ淳朴之風、刻薄殘忍ト相化シ、奉始持統天皇、御茶毘之事、世々御常例ト相成、乍恐萬乘之玉體ヲ一旦灰燼ニ奉委、九輪石之御塔御表ト仕候儀、數百年來之御定例ト相成、遷延今日ニ至リ候段、恐懼悲歎之至、有志輩同一揆ニ御座候處、後光明天皇御新喪之御時ヨリ、御火葬被爲廢候ヘ共、其後御代々樣御葬送、御龕前堂ヘ入御、御式被爲濟、夫ヨリ山頭堂ニ而、御茶毘之御作法有之、其所ヨリ御廟所迄、寺門僧侶共御密行ト奉稱、御表向御火葬、御内實ハ御埋葬ト申御儀奉存候、元來卑賤之凡夫ニ而モ、生者始、死者終、始終臣子忠孝之道ニオイテ、最重大之事ニ奉存候故、其身分ニ應ジ、禮節ヲ重候儀御座候處、無勿體モ一天萬乘之大君ヲシテ、表裏不合之御禮節有之候御儀ニ而ハ、四海臨御之御體裁ニオイテ、乍恐御瑕瑾ニモ可被爲渉ト奉痛哭候、且御先代樣ヨリ、尊號ニ被爲復、諸國御陵モ御復古ニ相成候御時節ニ相成候得者、何卒泉涌寺是迄之御廟所甚狹隘ニ而、可然御地所無之候付、同寺地中ニ而清淨之御地所被爲卜、御陵築造御成候樣仕度奉存候、尤數百年來、御薄葬御因循之御儀ニ御座候得者、一時ニ山陵

〔時慶卿記〕文祿二年正月五日、院御所〇正親町御心チ急ノ義ニ早參、少焉崩御、六日過シ曉院ヲバ盗出シ奉リ、泉涌寺ヘ成シマヰラセ候、二月廿三日、正親町院御葬禮戌刻ニアリ、〇中略泉涌寺ノ構ノ口ニ奉待也、〇中略其後下火、則各歸洛ナリ、

〇按ズルニ、本文御葬所ノ事見エザレドモ、宮内省ノ陵墓一覽ニ、正親町院天皇陵、京都府山城國紀伊郡深草村トアリ、即チ所謂深草法華堂是ナリ、

〔皇年代略記後陽成〕元和三年八月廿六日、崩於洞宮、同九月廿日壬申、奉葬泉涌寺、翌朝奉納御骨於深草法華堂、

〔後方朝臣記後水尾院崩御記所引〕延寶八年八月十九日乙亥、今朝寅上刻、太上法皇〇後水尾圓淨御俗名政仁終崩御也、〇中略申刻般舟院陽空長老來駕、口狀書一通持參、前例多候間、此度仙洞御火葬に願候、深草安樂行院ニ治御骨、骨堂モ、後陽成院崩御之時分出來、其以後破損ニテ、雨露モ掛リ候體如何ニ候間、此度之事願之由、御灰ヲ泉涌寺ニ治申也、

〔近代帝王系譜〕明正院　元祿九年十一月十日崩、同月廿五日、葬于泉涌寺、

〔近代帝王系譜〕後光明院　承應三年九月廿日、依疱瘡於仙洞崩、同年十月十五日、葬于泉涌寺、

〔近代帝王系譜〕後西院　貞享二年二月廿二日崩、同年三月七日、葬于泉涌寺、

〔近代帝王系譜〕靈元院　享保十七年八月六日崩、同月廿九日、葬泉涌寺、

〔近代帝王系譜〕東山院　寶永六年十二月十七日、申刻依疱瘡崩、〇中略同七年正月十日、葬泉涌寺、

〔近代帝王系譜〕中御門院　元文二年四月十一日、依御急症崩、同年五月八日、葬于泉涌寺、

〔近代帝王系譜〕櫻町院　寛延三年四月廿三日崩、同年五月十八日、葬泉涌寺、

〔公卿補任桃園〕寶曆十二年七月廿一日、天皇崩、八月廿二日、奉葬于泉涌寺、

〔公卿補任光格〕文化十年十二月十六日、後櫻町院遺詔奏、〇中略同夜奉葬于泉涌寺、

泉涌寺月輪御陵圖　諸陵寮藏

四條天皇
後水尾天皇
明正天皇
後光明天皇
後西院天皇
靈元天皇
東山天皇
中御門天皇
櫻町天皇
桃園天皇
後櫻町天皇
後桃園天皇

奉ㇾ懸之、納₂深草法花堂₁云々、

○本書、此文年月ヲ缺グ、

〔後小松院崩御記〕神無月廿日〔○永享五年〕といふに、〔○中略〕夕つかたつひの御事侍り、おへなさ申ばかりなし、〔○中略〕かくておなじき廿七日のまだよひのほどに、霜がれの芝の砌を出し奉りて、東山のほとり、泉涌寺といふ所へ御幸なし奉る、御車はあじろのいとなれたるに、前右大臣〔○藤原公冬〕以下の上達部うへ人かちにて供奉したてまつる、〔○中略〕程なくかの所に送り奉りて、御はてのわざとりおこなはれ侍りて、つひに烟となし奉る、

〔皇年代略記〕〔稱光〕正長元年七月廿日、卯刻於₂土御門皇居黒戸₁崩、同廿九日、奉ㇾ葬₂泉涌寺₁、八月四日、奉ㇾ納₂御骨於深草法華堂₁、

〔親長卿記〕文明二年十二月廿六日、卯刻許已御命終、〔○後花園〕上下愁傷悲歎云云、 三年正月九日、先早旦詣₂悲田院₁、今日御拾骨也、 二月十一日、今日被ㇾ移₂申仙骨於大原法華堂₁、〔少々先日被ㇾ分₂散山國常照寺₁、所ㇾ殘也、〕

〔和長卿記〕明應九年九月廿八日庚辰、今夜戌刻許、有₂御北首事₁、〔○後土御門〕 十一月十一日辛酉、今夜御葬禮也、 十二日壬戌、今朝即御收骨儀也、上卿甘露寺中納言、即有₂分散儀₁、一分如ㇾ例、上卿持之奉ㇾ籠₂深草法華堂₁、又一分雲龍院、又一分般舟院、皆寺僧賜ㇾ之、又一分山國常照寺被ㇾ籠ㇾ之、

〔二水記〕大永六年四月七日、卯刻遂以崩御、〔○後柏原〕 五月三日、今夜可ㇾ有₂喪禮御幸₁也、 四日、巳刻源宰相中將懸₂御骨於肩₁、奉ㇾ收₂深草₁云々、

〔後奈良院御拾骨記〕弘治三年九月五日崩御、〔○中略〕同廿五日、卯刻御拾骨、〔○中略〕先傳奏廣橋大納言殿、長一尺四寸之板、紐ワナニ結、御肩ニ掛テ、〔○中略〕即直ニ深草安樂行院ニ御骨奉ㇾ納也、

〔弘治三年記〕弘治三年九月五日、今曉寅刻、主上〔○後奈良〕崩御、 十一月廿二日、故院御葬禮也、奉ㇾ葬₂東山泉涌寺₁、 廿五日、卯刻御拾骨也、〔○中略〕廣橋大納言〔國光卿〕懸₂御骨於頸₁、納₂于深草安樂行院₁、

土人云、愛宕山一鳥居傍、有稱福田寺、其堂後有古石塔、此塔後絶山院御廟也、

〔太平記三十九〕光嚴院禪定法皇行脚御事

丹波國山國ト云所ヘ、迹ヲ銷シテ移セ給ケル、〇中略翌年〇貞治三年ノ夏頃ヨリ俄ニ御不豫ノ事有テ、遂ニ七月七日ニ隱サセ給ニケリ、

〔太平記三十九〕法皇御葬禮事

此時ノ新院光明院殿モ、山門ノ貫首梶井宮モ、共ニ皆禪僧ニ成セ給ヒテ、伏見殿ニ御坐有ケレバ、急ギ彼ノ遷化〇光嚴ノ山陰ヘ御下リ有テ、御茶毘ノ事ドモ取營マセ給ヒテ、後ノ山ニ葬シ奉ル、

〔尾張本神皇系圖〕光明院、康曆二年六月廿四日崩、於大和國長谷寺、御骨奉入伏見大光明寺、

〔迎陽記〕應永五年正月廿三日辛未、傳聞今日伏見法皇〇崇光御葬禮也、〇中略於大光明寺有其儀、

〔外記中原師夏記〕應安七年三月廿二日、故院〇後光嚴御遺骨自泉涌寺被渡嵯峨金剛院、彼長老參泉涌寺奉迎取云云、此外御拾骨之時、奉渡深草殿、藤中納言忠光卿、奉懸頸被奉入云云、又奉入安樂光院之由承及者也、廿六日、舊院御遺骨被奉納所々、深草法華堂　天龍寺金剛院　天王寺渡邊　高野山　泉涌寺　安樂光院

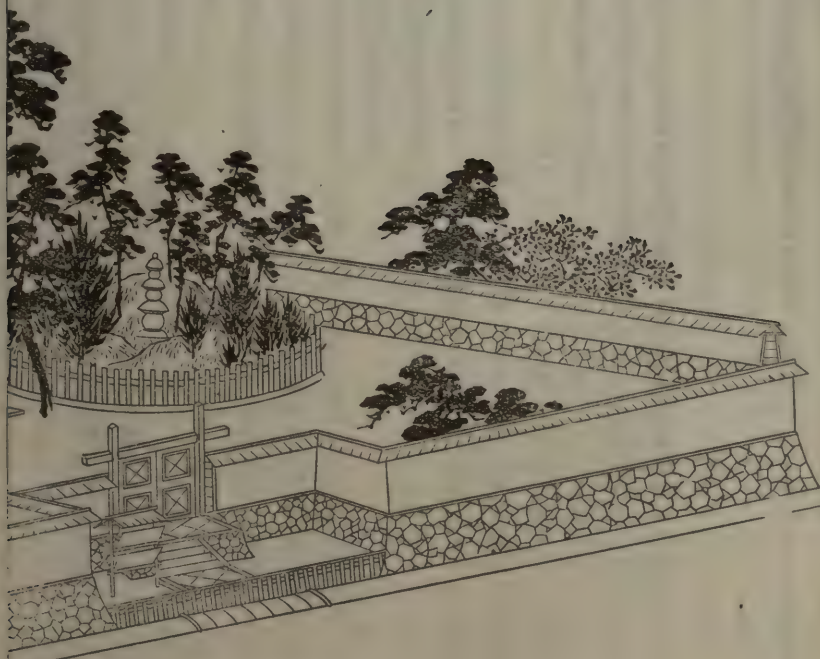
〔後光嚴院崩御記〕應安七年正月廿九日、寅刻御年卅七ニテ終ニ崩御ナリ、後光嚴院トゾ尊號ハ申セル、〇中略二月二日、東山泉涌寺ヘ御葬禮、〇中略同三日、御骨ヲ當寺ノ僧ノ沙汰ニテ拾タテマツル、藤中納言頸ニカケテ、深草ノ法華堂ニヲサメテ、泣々京ヘゾ歸給ケル、

〔常樂記〕明德四年四月廿六日、後圓融院、於小河仙洞薨御、御歲卅六於泉涌寺廿七日茶毘、左大臣殿以下公卿殿上人供奉、

〔皇年代略記後圓融〕明德四年四月廿六日辛丑崩、同廿七日、奉葬泉涌寺、奉納御骨於深草法花堂、如代々

〔後小松院御葬禮記〕子刻許入御泉涌寺、〇中略此後御茶毘、〇中略日野新中納言由緒人也入仙骨於御手匣

深草法華堂御陵圖　諸陵寮藏

後深草天皇
伏見天皇
後伏見天皇
後光嚴天皇
後圓融天皇
後小松天皇
稱光天皇
後土御門天皇
後柏原天皇
後奈良天皇
正親町天皇
後陽成天皇

おく露もひとつはちすにむすべとやけぶりもおなじ野べにきゆらん

〔皇代記後二條〕德治三年八月廿六日、崩二條高倉皇居、同廿八日、奉葬北白河殿、

〔慈嚴僧正記〕貞和四年十一月十一日、午刻太上天皇、〇花園於仁和寺萩原仙居安駕、十三日、御葬禮、〇中略於十樂院上山、搆山作所奉葬之、

〔太平記二十一〕先帝崩御事

南朝ノ年號延元三年八月九日ヨリ、吉野ノ主上〇後醍醐御不豫ノ御事有ケルガ、次第ニ重ラセ給、〇中略八月十六日丑刻ニ、遂ニ崩御ナリニケリ、〇中略葬禮ノ御事、兼テ遺勅有シカバ、御終焉ノ御形ヲ改メズ、棺槨ヲ厚シ、御座ヲ正シテ、吉野山ノ麓藏王堂ノ艮ナル林ノ奧ニ、圓丘ヲ高ク築テ、北向ニ奉葬、

〔參考太平記二十一〕後醍醐天皇崩御事

毛利家、天正本云、〇中略藏王堂ノ艮ノ林ノ奧ニ天正本云、塔尾ト云所云々、葬奉ル云々、

〔吉野拾遺〕十五日〇延元四年八月の夜、〇中略いざよひの月と共に雲がくれさせ給ひけるに、つきゝたがひ奉りし人々は、たゞやみぢにまよふ心ちなんし給ひける、御すがたを改奉らで、如意輪寺の御堂のうしろのかたにをさめ奉り、〇下略

〔新葉和歌集雜十六〕正平七年きさらぎの十日餘り、吉野にまうでゝ、塔尾の御陵〇後醍醐など見奉りけるに花はまださかぬ頃にて、よろづものあはれにおぼえければ、思ひつゞけ侍ける、

祥子內親王

さく花のちるわかれにはあはじとてまだしきほどをたづねてぞ見る

〔觀心寺記〕正平廿三年四月廿日、奉葬河內國錦部郡檜尾山陵、〇觀心寺後山 廿八日、奉追號後村上天皇、

〔山城名勝志九葛野郡〕後龜山院仙居

〔入道左府記〕嘉元二年七月十七日、今夜後深草院御葬送也、○中略御骨被ㇾ納安樂行院佛壇下、

〔玉葉和歌集〕十七雜 遊義門院○後宇多院后姈子内親王かくれさせ給て後、後深草院の御忌日に、法華堂へ御幸ありてよませ給ひける、

院○伏見御製

こぞまではわけこし友もつゆときえてひとりしをるゝふかくさの野べ

〔增鏡〕十一今日の日陰 としかへりぬれば、嘉元も三とせになりぬ、萬里小路殿の法皇、○龜山又御なやみとて龜山殿へうつらせ給ふ、○中略九月十五日の明ぼのに、つひにかくれさせ給ひぬ、○中略おなじ十七日に、御わざの事せさせ給ふ、○中略御骨もこの院に法華堂をたてさせ給へば、龜山院とぞ申べかめる、

〔文應皇帝外記〕嘉元三年秋、上皇○龜山病ㇾ龜山宮、召ㇾ圓○僧祖圓館ㇾ壽量院、時々侍ㇾ看養、○中略圓馳ㇾ使告ㇾ予、○僧師錬予便陪ㇾ壽量、九月望、上皇崩、予陪之四日也、闍毘後藏ㇾ仙骨於三所、淨金剛院、南禪寺、金剛峰寺、且順ㇾ顧命也、黃門侍郎藤賴藤主ㇾ喪事、於ㇾ淨金剛院、分ㇾ仙骨、納ㇾ五青瓷、三瓷留ㇾ淨金剛院、南禪金剛峰各一、圓令ㇾ予承ㇾ仙瓷、予擎歸ㇾ龍山、○南禪寺共ㇾ圓閟ㇾ寶塔、

〔皇代記〕後宇多 元亨四年六月廿五日、寅刻崩ㇾ大覺寺、同廿八日、葬ㇾ蓮華峯寺傍山、

〔伏見上皇御中陰記〕文保元年九月三日、寅刻法皇○伏見有ㇾ御事、　四日、今日御葬禮事也、山作所深草○中略　丑刻奉ㇾ入ㇾ深草殿、　五日、今曉前大納言經親卿、舊院執權也、於ㇾ深草出家、即直參ㇾ御茶毘所、午刻事了之間、以ㇾ御骨奉ㇾ懸ㇾ頸、奉ㇾ納ㇾ後深草院法華堂、

〔皇年代略記〕後伏見 延元元年四月六日、崩ㇾ於持明院殿、四十九 號ㇾ後伏見院、依ㇾ遺詔也 同八日、葬ㇾ於嵯峨野、安ㇾ仙骨於後深草院法華堂、

〔風雅和歌集〕十七雜 後伏見院かくれ給ひてのち、仙骨を從三位守子の墓所にならべて置奉るべきよし、御遺誡にまかせて納奉るとて、

表書之通、佐州雜太郡竹田村之內、高八斗七升九合七勺之所、從當年物成、眞輪寺へ可被相渡候斷は本文に有之候、

喜右衛門○勘定奉行甲斐莊
五兵衛○同德山
內藏允○同杉浦正照
備中守○同[illegible]部駿河勝[illegible]初名勅
能登守○老中土井利房
加賀守○老中大久保忠朝
美濃守○老中稻葉正則

〔一代要記〕十二後堀河文暦元年八月六日崩、○中略同十一日、葬東山觀音寺傍、

〔皇代記〕後堀河天福二年○文暦元年八月六日、亥刻崩、○中略十三日、葬觀音寺北邊、

〔後中記〕仁治三年正月九日壬辰、自丑刻許大略御絶入、○四條廿五日戊申、今夜四條院御葬禮、○中略入御泉涌寺畢、

〔增鏡〕四御神山むつ月の五日、○仁治三年より、内の上○四條例ならぬ御事にて、九日の曉かくれさせ給ぬ、○中略廿五日に、東山の泉涌寺とかやいふほとりにをさめたてまつる、

〔五代帝王物語〕十七日○文永九年二月卯の時に、法皇○後嵯峨つひに御事きれさせ給ふ、○中略御骨は帥中納言經任掛まゐらせて、法華堂建立のほど、まづ淨金剛院へ入せ給ふ、

〔帝王編年記〕二十六龜山文永十年二月十一日、嵯峨殿法華堂供養、大宮院御造營御導師天台座主、上皇○龜山御幸、

〔吉續記〕文永十年六月廿一日辛未、今日先院御骨、○後嵯峨遷御法華堂也、

給、同五月二日、立出雲國、同十四日、著御水成瀨殿、同十五日、入御大原西林院御堂、但過宮城不入大原、安置之、〇中略仁治二年二月八日、御骨自西林院御堂奉渡法華堂、

〔平戶記〕仁治三年四月十六日戊辰、淸範入道送消息、聞云、大原法華堂、顯德院(後鳥羽)御墓所、〇下略、

〔增鏡三藤衣〕延應元年といふ二月廿二日、六そぢにてかくれさせ給ぬ、〇後鳥羽、中略、ちかき山にてれいのさはふになし奉るも、むげに人ずくなに心ぼそき御ありさまいとあはれになむ、御骨をば能茂といひし北面の、入道して御ともにさぶらひしぞ、くびにかけ奉りて宮こにのぼりける、さて大原の法華堂とて、いまもむかしの御莊の所々、三昧料によせられたるにてつとめたえず、

〔一代要記十一土御門〕寬喜三年十月十一日崩、三十七、月日、納御骨於西山金原(カネガハラ)御堂、

〔明月記〕天福元年十二月十一日辛巳、承明門院〇土御門母源在子月來御經營金原御堂、終被修功、依明日供養、今曉渡御件所、被奉安故院〇土御門御骨、被立此堂御遺誡云々、

〔百練抄十五後嵯峨〕寬元元年四月廿八日甲戌、佐渡院〇順德御骨、康光法師奉懸首、渡御大原云々、　五月十三日、佐渡院御骨、今日奉納大原御墓所、

〔佐渡年代記〕覺

高八斗七升九合七勺　佐州雜太郡竹田村之內

內
七斗五升九合七勺　本途
壹斗貳升　屋敷地子

右高八斗七升九合七勺に、屋敷間數竪五拾間、横五拾間、

右は順德院御廟所、今度被遊御寄附候間、從當未年物成、眞野村眞輪寺へ引渡申候以上、

延寶七年未九月　曾根五郎兵衞〇佐渡奉行

御勘定所

條御卽位のこと有しに、同七月廿八日、御とし廿三にて新院うせさせ給ひにき、新院とは二條院の御事なり、八月七日、かうりう寺にわからさまにやどしまゐらせて、のち彼寺のうしとらに、れんだい野といふ所にをさめたてまつる、

〔百練抄八高倉〕嘉應二年五月十七日、二條院御骨、自香隆寺本堂渡三昧堂、件堂以二條皇居崩御殿、左大臣渡造之、

〔一代要記十六條〕安元二年七月十七日崩、〇中略葬栖霞寺堂、

〔山槐記〕治承五年正月十四日、新院〇高倉已崩御云云、今夜渡御邦綱卿淸閑寺小堂、抑是六條院御墓所堂云々、

〔長門本平家物語十二〕養和元年正月十四日、六はらの池殿にてつひに崩御なりぬ、新院〇高倉おはせおかせ給ひけるとて、今夜やがて東山のふもと、淸閑寺といふ山寺へおくり奉る、

〔山槐記〕治承五年正月十四日辛酉、新院〇高倉已崩御、〇中略今夜渡御邦綱卿淸閑寺小堂、抑是六條院御墓所堂云々、

〔玉海〕建久六年九月三日甲申、資實申、高倉院法華堂三昧僧供田事、六口各二町、可充賜交坂大墓兩御領之由仰畢、

〔玉海〕元暦二年四月四日丁巳、去三月廿四日午刻、於長門國團浦合戰、〇中略但舊主〇安德御事不分明云々、　建久二年閏十二月十四日戊午、未刻參院、以資實入見參、崇德院、幷安德天皇等崩御之所建一堂、可資彼菩提幷亡命之士卒滅罪之勝因事、可申沙汰之由仰泰經了、　廿八日壬申、今日以宗頼被仰條々事等、又長門國可建一堂之由可宣下者、皆任御定可宣下之由仰了、

〇按ズルニ、安德天皇ノ陵地、此文ニテハ明ナラズ、尙下ニ掲ゲタル表ニ就キテ見ルベシ、

〔一代要記十一後鳥羽〕延應元年二月廿二日、於隱岐國崩、〇中略同四月十二日、依有順風、御骨令渡出雲國

〔白峯寺縁起〕長寛二年八月廿六日に、御年四十六と申に崩御ならせましますと、〇崇徳中略、同九月十八日戌のときに、當寺の西北の石巖にて茶毘し奉る、これも御遺詔の故なり、

〔愚昧記〕安元三年五月十七日丙辰、讃岐院〇崇徳御事、一以彼御墓所勅稱山陵、

〔吾妻鏡四〕元暦二年四月廿九日壬午、今日以備中國妖尾郷、被付崇徳院法華堂、是爲沒官領、武衞所令拜領給也、

〔兵範記〕久壽二年七月廿三日戊辰、午刻天皇〇近衞崩於近衞殿、〇中略八月一日丙子、今日近衞院御葬送也、寅刻陰陽助賀茂在憲、鎭山作所地、船岡西北

〔一代要記九近衞〕久壽二年七月廿三日、於近衞内裏崩、〇中略八月一日、火葬船岡西野、御骨暫置知足院常行堂、

〔百練抄七二條〕長寛元年十一月廿八日、奉渡近衞院御骨於鳥羽東殿、美福門院御塔、

〔大外記師茂勘例夏外記師所引記〕建久三年三月十三日、太上法皇後白川院崩給、十五日、法皇御葬送也、以平生之儀、奉渡蓮華王院法花堂、

〔百練抄十後鳥羽〕建久三年三月十五日丁亥、法皇〇後白河凶禮也、以御平生之儀、奉渡蓮華王院東法華堂、

〔吾妻鏡十二〕建久三年三月十六日戊子、未刻京都飛脚參著、去十三日寅刻、太上法皇〇後白河於六條殿崩御、廿六日戊戌、彼崩御事、今日具披露于關東、〇中略十五日、奉葬法住寺法華堂、

〔山陵志〕蓮華王院、舊是法住寺地、法住寺爲木曾義仲所火、就其墟而所創也、

〔顯廣王記〕永萬元年七月廿九日丙子、去曉新院〇二條遂以崩押小路東洞院亭、八月七日癸未、先皇〇二條御葬送也、高隆寺京

〔一代要記二十條〕永萬元年八月七日、葬香隆寺艮野、

〔長門本平家物語一〕永萬元年の春頃より、主上〇二條御不豫のことおはしまし、六月廿七日、新帝〇六

御墓所近邊云々、御墓所衣笠岳之東下、(諸寺參仕)　十六日壬辰、山陵事辰刻也、仁和寺宮二人以下、奉拾御骨、藤宰相長實奉懸御骨、奉送香隆寺、

〔百練抄 六崇德〕天承元年七月九日、白河院御骨、自香隆寺奉渡鳥羽殿三重塔、是御平生叡慮也、

〔吉記〕壽永二年六月廿一日甲寅、被立山陵使、成菩提院、(白河院)

〔中右記〕嘉承二年七月廿四日戊申、今夕御喪送也、(○堀河)云々、(○中略)至高隆寺坤方野云々、奉荼毘、(○中略)奉拾御骨、奉納茶垸、源中納言國信卿奉懸頸、奉置香隆寺僧房、(○中略)雖可奉置圓融院山陵、從今年大將軍方在西、仍三箇年可御此寺也、

〔百練抄 五鳥羽〕天永四年三月廿二日、先朝(○堀河)御骨、從香隆寺奉移圓融院、

〔本朝世紀〕久安五年十二月廿五日癸酉、今日御元服由被告山陵、件山陵使、各可向安置御骨之所也、(○中略)香隆寺被安置堀河院御骨、而號後圓教寺也、

〔帝王編年記 二十一後白河〕保元元年七月二日、申時法皇崩御於鳥羽殿、御年五十四、即夜奉渡安樂壽院御塔、擬山陵也、號鳥羽院、

〔百練抄 七後白河〕保元元年七月二日、禪定仙院(○鳥羽)崩于鳥羽安樂壽院、(五十四、葬同御塔、擬山陵也、)

〔保元物語 三〕新院御經沈附崩事

御年四十六ニテ、志度ト云所ニテ隱サセ給ヒケルヲ、白峯ト云所ニテ烟ニナシ奉ル、(○中略)治承元年六月廿九日、追號有テ崇德院トゾ申ケル、

〔源平盛衰記 八〕讃岐院事

長寬二年八月廿四日、御年四十六ニテ、支度ト云所ニテ遂ニ隱レサセ給ニケリ、(○崇德)讃岐御下向ノ後九年ニゾ成給ケル、白峯ト云山寺ニ送奉リ燒上奉ケルガ、(○中略)御骨ヲバ必高野ヘ送レトノ御遺言アリケルトカヤ、

〔日本紀略十三後一條〕寛仁元年五月十二日己酉、今夜奉葬三條院於石垣、

〔帝王編年記十七三條〕寛仁元年五月十二日戊戌、葬船岡西邊、奉埋御骨於北山小寺中、

〔類聚雜例〕長元九年四月十七日乙丑、主上〇後一條自去三月之比不例御、〇中略遂崩於清涼殿、十三日庚寅、被定雜事、〇中略及晩景資業朝臣時親等歸參申云、巡撿神樂岡東邊、自一條以南、自上東門末以北、自御在所申方有便所、以其地可爲山作所也、

〔日本紀略後一條十四〕長元九年四月十七日乙丑、戌刻天皇落飾、崩于清涼殿、五月十九日丙申、奉火葬淨土寺西原、神樂岡東面也、〇中略從今日立伽藍於神樂岡東、名曰菩提樹院、御葬之間長家以下拾御骨、經輔懸御骨、安置淨土寺畢、

〔百練抄四後朱雀〕長暦元年六月二日、上東門院〇後一條母后彰子供養菩提樹院、後一條院御墓所、號櫻下、

〔扶桑略記二十八後一條〕寛德二年正月十八日、太上天皇〇後朱雀春秋卅七、於東三條第崩、二月廿一日戊申、葬高隆寺乾原、置御骨於圓教寺、

〔百練抄四後冷泉〕天喜三年十月廿五日、供養圓教寺新堂、題號圓乘寺、是先皇〇後朱雀御願未遂也、

〔玉海〕安元三年五月三日壬寅、頭書、二東記云、〇中略圓乘寺後朱雀之山、賴業所申也、

〔扶桑略記二十九後冷泉〕治暦四年四月十九日庚申、寅刻天皇於高陽院中殿崩、五月五日丙子、葬船岳西野、安御骨於圓教寺、

〔皇年代略記後三條〕延久五年五月七日崩、十七日、葬神樂岡南原、安置御骨於禪林寺、

〔扶桑略記三十白河〕延久五年五月七日庚戌、太上天皇〇後三條春秋四十崩、十七日庚申、葬神樂岳東原、六月廿二日甲午、於圓宗寺、被修七々御法事、

〔吉記〕壽永二年六月廿一日甲寅、被立山陵使、圓宗寺、後三條院

〔中右記〕大治四年七月十五日辛卯、今夕太上法皇〇白河御葬送也、〇中略至御墓所香隆寺乾野、堀河院

〔皇陵志一〕冷泉、〇中略此火葬所山城國葛野郡小野之鄕下村ニ有ㇾ之、陵ハ同郡同鄕上村ニ有ㇾ之候、

〔日本紀略一九條〕正曆二年二月十九日庚申、葬太上法皇〇圓融於圓融寺北原、置御骨於村上山陵傍、

〔小右記〕長德五年〇長保元年七月廿三日癸卯、山陵使立云々、〇中略後邑上〇圓融參議懷平、

〔三僧記〕保壽院御幸事、保延三年九月十四日癸酉、自今夜於永嚴僧都房、院〇鳥羽御祈、〇中略件房圓融院山陵隔壁也、代々御骨及于堀川院、皆御坐此所、仍臨幸尤可ㇾ有ㇾ憚云々、

〔日本紀略一條十一〕寛弘五年二月十七日戊申、今夜奉ㇾ葬花山法皇於紙屋川上法音寺北、

〔法成寺攝政記〕寛弘五年二月十七日戊申、花山院御葬送、大和寺東邊云々、

〔榮花物語九石陰〕寛弘八年六月廿二日のひるつかた、おさましうならせ給ひぬ、〇中略一條、かくて八日〇七月のゆふべ、いはかげといふ處へおましますゝ

〔日本紀略一條十一〕寛弘八年六月廿二日甲子、午剋太上皇〇一條崩于一條院中殿、春秋三十二、七月八日己卯、〇中略今日奉ㇾ葬先皇於北山長坂野、左大臣以下參集、正光卿持御骨、暫奉ㇾ安置於圓成寺、

〔大鏡裏書〕寛弘八年七月八日、奉ㇾ葬于北山長坂野、安置御骨於圓成寺、

〔皇年代私記一條〕寛弘八年七月八日己卯、葬石陰、暫安置、九日、奉ㇾ渡御骨圓成寺、

〔權記〕寛弘八年七月廿日、酉剋歸參院、權律師懷壽尋圓云、圓融院法皇御陵邊可ㇾ奉ㇾ收〇一條之由、御存生有天氣、去九日早旦、於山作所丞相云、土葬并法皇御陵側可ㇾ奉ㇾ置之由、御存生所ㇾ被ㇾ仰也、日者總不ㇾ覺、只今思出也、然而言而無ㇾ益、事已定也云云、

〔小右記〕寛弘八年七月廿日辛卯、傳聞故院〇一條御骸骨、日來奉ㇾ安置圓成寺、今日吉日、仍作ㇾ如小韓櫃物、深蓋納御骨壺、作ㇾ如倉代物、方二尺、一面有ㇾ戶、納辛櫃、辛櫃上造小屋、居寶形、安置戶內、三箇年後、又更可ㇾ奉ㇾ移御存生之時御本意處云々、謂御本意處、是圓融院御陵邊、

〔左經記〕寛仁四年六月十六日丙申、故一條院御骨、爲ㇾ避方忌、年來奉ㇾ置圓成寺、而依方開、主計頭吉平朝臣奉ㇾ仰、可ㇾ奉ㇾ置御骨之處、卜鎭圓融寺邊、今日奉ㇾ渡、〇中略以戊刻奉ㇾ遷御骨於圓融寺北方、圓融院御陵邊也、

入夜堀川宰相歸參內、依無陵所也、於仁和寺中雖相尋、更無御所、參御室尋申之處、遺詔不置陵云々、其上無才學之由被仰之間空歸參、

〔大日本史禮樂四〕文永中、不能識其處者可疑矣、意帝遺詔不置山陵、故仁和寺僧徒拘泥遺詔、而不之告乎、

〔日本紀略一醍醐〕延長八年十月十日庚子、奉葬大行皇帝(○醍醐)於山城國宇治郡山科陵、醍醐寺北笠取山西、小野寺下、

〔扶桑略記二十五朱雀〕延長八年九月廿九日、太上天皇崩、(醍醐、四十六、)　十月十日、葬後山科山陵、

〔江家次第十一十一月〕荷前事(○中略)
後山階　頭書、路或自北山階東、或踰阿彌陀嶺乘馬、曼荼羅寺艮角也、

〔皇年代略記朱雀〕天曆六年八月十五日崩、葬山城國來定寺北野陵、置御骨於醍醐山陵、

〔帝王編年記十五朱雀〕天曆六年八月十五日崩、御年三十、同廿日癸卯、葬來定寺、或記云、葬法性寺東中尾南原陵、置御骨於醍醐山陵傍、

〔日本紀略五冷泉〕康保四年六月四日辛酉、今夕奉土葬先皇上(○村上)於山城國葛野郡田邑鄉北中尾、

〔山槐記〕治承四年七月廿一日辛未、於福原被立山陵使、(○中略)村上(仁和寺長尾)八條三位、(宗清)

〔日本紀略十一後一條〕寬弘八年十一月十六日乙酉、今夜奉火葬太上天皇(○冷泉)於櫻本寺前野、(○中略)木工頭雅通朝臣奉持御骨、奉安置件山傍、奉埋御骨了、

〔帝王編年記十六冷泉〕寬弘八年十月廿四日崩、御年六十二、同十一月十六日乙酉、葬櫻本寺乾原、

〔法成寺攝政記〕寬弘八年十月廿四日癸亥、入夜則隆來云、院(○冷泉)御惱極重不覺給云々、仍馳參、□時崩給、　十一月十三日壬午、參入冷泉院、以惟貞朝臣幷吉平等、令見御葬所幷御陵所、還來申云、櫻本寺北方在平地、件處御葬所幷御陵吉由、吉平定申者、

勤深草山陵使、未刻許參內、○中略向嘉祥寺、從西大門南行、更頗東行、下居山陵前、○下略

〔文德實錄 十〕天安二年九月庚申、大納言安倍朝臣安仁、率陰陽權助滋岳朝臣川人、助笠朝臣名高等、至山城國葛野郡田邑鄕眞原岳、點定山陵、　甲子、夜葬大行皇帝○文德於田邑山陵、

〔三代實錄 一清和〕天安二年十二月十日丁酉、詔改眞原山陵、爲田邑山陵、

〔三代實錄 三十八陽成〕元慶四年十二月七日丙戌、是夜酉四刻、奉葬太上天皇○清和於山城國愛宕郡上粟田山、奉置御骸於水尾山上、

〔一代要記 四清和〕元慶四年十二月四日、崩于圓覺寺、時年卅一、同七日、火葬於粟田山白川陵、置御骨於水尾山、

〔山陵志〕水尾山、本丹波國地、今隸于山城葛野、

〔日本紀略 三村上〕天曆三年十月三日壬申、今夜奉葬陽成院太上天皇於神樂岡東北、○又見大鏡裏書、

〔扶桑略記 二十二光孝〕仁和三年八月廿六日丁卯、是日巳二刻、天皇崩於仁壽殿、春秋五十八、　九月二日壬申、葬山城國葛野郡後田邑陵、一云、小松山陵、

〔帝王編年記 十四宇多〕承平元年辛卯七月十九日崩、　八月五日庚申、火葬葛野郡大內山陵、仁和寺奧、池尾山、

〔新撰和歌名所要抄 十九〕仁和寺の奧、池尾の山を大內山と號す、

〔仁和寺御傳〕宇多法皇　承平元年辛卯年七月十九日甲辰、崩仁和寺、御年六十五、　亥時、奉移大內山魂殿、依遺詔不置陵、

〔吉續記〕文永五年六月廿二日、今日依異國事、被發遣山陵使、○中略

大內山○宇多

參議藤原朝臣高定

紀伊守橘朝臣兼朝○中略

〔續日本紀三十七桓武〕延曆元年八月己未、遣治部卿從四位上壹志濃王〇中略等六位已下、解陰陽者、合一十三人於大和國、行相山陵之地、爲改葬天宗高紹天皇〇光仁也、

〔續日本紀三十九桓武〕延曆五年十月甲申、改葬太上天皇〇光仁於大和國田原陵、〇延喜式、田原東陵ニ作ル、

〔日本後紀十三桓武〕大同元年三月辛巳、天皇崩於正寢、　癸未、以山城國葛野郡宇太野、爲山陵地、是日西北兩山有火自焚、　丁亥、是日日赤無光、大井比叡小野栗栖野等山共燒、煙灰四滿、京中晝昏、上〇平城以爲、所定山陵地近賀茂神、疑是神社致災火乎、即決卜筮、果有其祟、上曰、初卜山陵、筮從龜不從也、今災異頻來、可不愼歟、即自禱祈、火災立滅、　四月庚子、葬於山城國紀伊郡柏原山陵、

〔類聚國史三十五帝王〕大同元年十月辛酉、令天下諸國、以今月十一日、素服擧哀、改葬皇統彌照天皇〇桓武也、　庚午、改葬皇統彌照天皇於柏原陵、

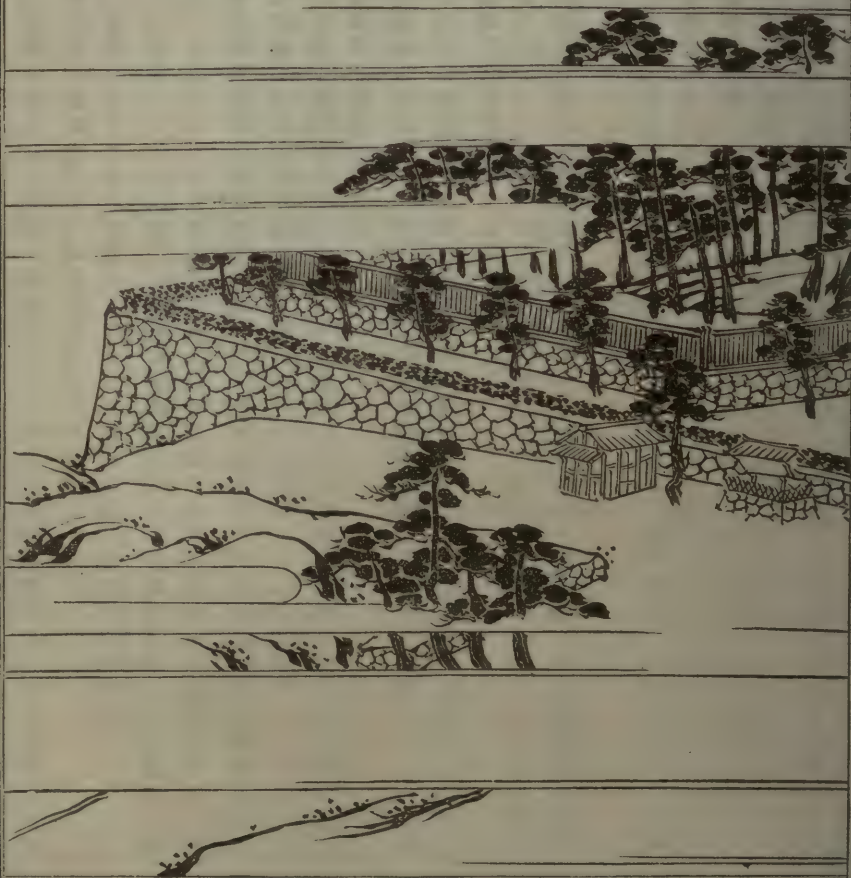
〔類聚國史三十五帝王〕天長元年七月甲寅、平城天皇崩、　己未、葬楊梅陵、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年七月丁未、太上天皇〇嵯峨崩于嵯峨院、　戊申、擇山〇嵯峨北幽僻之地、定山陵、〇中略　即日御葬畢、

〔山槐記〕元曆元年八月廿三日己卯、今日被立御卽位〇後鳥羽山陵使、嵯峨、〇參議左大辨經房　翌日於攝政亭、左大辨曰、向嵯峨不知其所、相尋邑老之處、大覺寺內北方山云々、向件寺之間、余車不通、忽騎馬向彼所拜了、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年五月辛巳、後太上天皇〇淳和顧命皇太子〇恒貞曰、〇中略重命曰、予聞人歿精魂歸天、而空存冢墓、鬼物憑焉、終乃爲祟、長貽後累、今宜碎骨爲粉散之山中、　癸未、後太上天皇崩于淳和院、　戊子、此夕奉葬後太上天皇於山城國乙訓郡物集村、御骨碎粉、奉散大原野西山嶺上、

〔續日本後紀二十仁明〕嘉祥三年三月己亥、帝崩於淸涼殿、　癸卯、奉葬天皇於山城國紀伊郡深草山陵、

〔中右記〕嘉承三年二月廿二日癸卯、今日御卽位〇鳥羽由、被告申諸山陵使所被立也、下官〇藤原宗忠依可

桓武天皇山陵新圖

諸陵寮藏

〔好古小錄上〕此碑何レノ時ニカ土中ニ埋レテ後、御陵ノ南ノ崩ル丶所ヨリ出タルヲ、奈良坂ノ春日社ノ庭中ニ移シ立、

〔續日本紀十七聖武〕天平二十年四月丁卯、是日火葬太上天皇〔○元正〕於佐保山陵、

〔續日本紀十八孝謙〕天平勝寶二年十月癸酉、太上天皇〔○元正〕改葬於奈保山陵、〔○延喜式、奈保山西陵ニ作ル、〕

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶八歲五月壬申、奉葬太上天皇〔○聖武〕於佐保山陵、〔○延喜式、佐保山南陵ニ作ル、〕

〔續日本紀三十光仁〕神護景雲四年〔○寶龜元年〕八月癸巳、與左右京四畿內伊賀近江丹波播磨紀伊等國役夫六千三百人、以供山陵、〔○稱德〕 戊戌、授正五位下豐野眞人出雲從四位下、從五位上豐野眞人奄智正五位下、從五位下豐野眞人五十戶從五位上、以其父故式部卿從二位鈴鹿王舊宅爲山陵故也、 丙午、葬高野天皇〔○稱德〕於大和國添下郡佐貴鄉高野山陵、

〔西大寺文書〕神護景雲三年九月四日、崩于西宮寢殿、春秋五十三、卽築山陵於西大寺之東北、

○按ズルニ、三年九月ハ四年八月ノ誤リナリ、

〔皇胤紹運錄〕稱德天皇、〔○中略〕葬大和國高野陵、〔西大寺北也〕

〔西大寺資財流記〕夫西大寺者、平城宮御宇寶字稱德孝謙皇帝、去天平寶字八年九月十一日誓願、〔○中略〕居地參拾壹町、在右京一條三四坊、東限佐貴路、〔除東北角喪儀寮〕南限一條南路、西限京極、〔除山陵八町〕北限京極路、

〔帝王編年記十一淳仁〕天平神護元年乙巳十月崩、御年三十二、奉葬淡路國三原郡、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜三年八月丙辰、遣從五位下三方王、外從五位下士師宿禰和麻呂、及六位已下三人、改葬廢帝〔○淳仁〕於淡路、

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜九年三月己巳、勅、淡路親王〔○淳仁〕墓宜稱山陵、〔○中略〕充隨近百姓一戶守之、

〔續日本紀三十六光仁〕天應元年十二月丁未、太上天皇〔○光仁〕崩、 庚申、葬於廣岡山陵、

〔今昔物語三十一〕元明天皇陵點定惠和尚語第三十五

今昔、元明天皇ノ失給ヘリケル時、陵取ラムガ爲ニ、大織冠ノ御一男、定惠和尚ト申ケル人ヲ差シテ、大和國ヘ遣シケリ、然レバ吉野郡藏橋山ノ峯、多武峯ノ岸重レルガ後ニ峯有リ、前ヘニ七ノ谷向テ有リ、定惠和尚此レヲ見給テ、哀レ微妙カルベキ止事无キ地カナ、但シ天皇ノ御墓所ニテハ左右ハ下レリ、口口ノ人不有ジ、前々モ狹キニ依テ不取ザリケル也ケリトテ不取ナリヌ、然テ其麓ニ戌亥ノ方廣キ所有リ、其ヲ取ツ、輕寺ノ南也、此レ元明天皇ノ檜前ノ陵也、石ノ鬼形共ヲ廻ノ池邊陵ノ基様ニ立テ、微妙ク造レル石ナド外ニハ勝レタリ、

〔東大寺要錄八裏書〕奈保山太上天皇明〇元山陵碑文

馬腦石鎸之

大倭國御谷郡平城	之宮馭宇八洲	太上天皇之陵高其	所也	養老五年歳次辛酉	冬十二月癸酉擽十	三日乙酉葬

碑高三尺許
廣二尺許
厚一尺許

野ニ到リ、天智天皇ノ廟社ヲ拜ス、石ノ華表ニ額アリ、天智天皇ノ四字分明ナリ、毎年十二月、天皇崩日祭アリトナム、社ノ後ニ陵アリ、陵山ノ南ノ麓ニ、縱六尺許、横一丈餘ノ石ノ蓋アリ、斯下ナン正シク葬所ト見ユ、陵山ノ上、古木森蔚トシテ、草茅繁茂ス、古ハ四方ニ池廻レリト見エテ其跡殘レリ、

〔日本書紀二十八天武〕元年七月辛亥、男依等到瀬田、○中略則大友皇子○弘文左右大臣等、僅身免以逃之、○中略於是大友皇子、走無所入、乃還隱山前、以自縊焉、

〔前王廟陵記下〕山前、長等山之山前也、

〔日本書紀三十持統〕元年十月壬子、皇太子○草壁率公卿百寮人等、幷諸國司國造、及百姓男女、始築大內陵、

二年十一月乙丑、葬于大內陵、○延喜式、檜隈大內陵ニ作ル、

〔續日本紀三文武〕大寶三年十二月癸酉、從四位上當麻眞人智德、率諸王諸臣、奉誄太上天皇、○持統諡曰大倭根子天之廣野日女尊、是日火葬於飛鳥岡、　壬午、合葬於大內山陵、○天武

〔續日本紀四元明〕慶雲四年十一月甲寅、葬倭根子豐祖父天皇○文武于安古山陵、○延喜式、檜隈安古岡上陵ニ作ル、

〔山陵志〕文武陵、○中略按以陵上孤松茂盛、今呼高松山、一名美貴佐伊、

〔續日本紀八元正〕養老五年十月丁亥、太上天皇○元明召入右大臣從二位長屋王、參議從三位藤原朝臣房前、詔曰、○中略朕崩之後、宜於大和國添上郡藏寶山雍良岑、造竈火葬、莫改他處、諡號稱其國其郡朝庭馭宇天皇、流傳後世、　庚寅、太上天皇又詔曰、○中略就山作竈、芟棘開場、即爲喪所、又其地者、皆殖常葉之樹、即立刻字之碑、　十二月乙酉、太上天皇○元明葬於大和國添上郡椎山陵、○延喜式、奈保山東陵ニ作ル、不用喪儀、由遺詔也、

〔前王廟陵記上〕今按、據延喜式觀之、則椎猶字之誤、猶訓奈保、

〔大日本史禮樂四〕新撰字鏡、椎訓奈良乃木、椎山即奈良山也、

〔日本書紀崇峻二十一〕五年十一月乙巳、馬子宿禰、〇中略乃使東漢直駒殺于天皇、是日葬天皇于倉梯岡陵、

〔日本書紀推古二十二〕三十六年三月癸丑、天皇崩、九月戊午、〇中略先是天皇遺詔於群臣曰、比年五穀不登、百姓大飢、其爲朕興陵、以勿厚葬、便宜葬于竹田皇子之陵、壬辰、葬竹田皇子之陵、

〔古事記推古下〕御陵在大野岡上、後遷科長大陵也、〇延喜式、磯長山田陵ニ作ル、

〇按ズルニ、竹田皇子ノ墓ヲ陵ト云フハ、推古天皇ヲ葬ルニ就テ言ヘルナラン、

〔日本書紀皇極二十四〕元年十二月壬寅、葬息長足日廣額天皇〇舒明于滑谷岡、二年九月壬午、葬息長足日廣額天皇于押坂陵、〇延喜式、押坂内陵ニ作ル、

〔日本書紀天智二十七〕六年二月戊午、合葬天豐財重日足姫天皇〇皇極齊明與間人皇女〇孝徳后於小市岡上陵、〇中略皇太子〇天智謂群臣曰、我奉皇太后天皇〇齊明之所勅、憂恤萬民之故、不起石槨之役、所冀永代以爲鏡誡焉、

〔山陵志〕越智村西、則車木村也、〇中略其東岡崇敷十河、呼爲天皇山、是蓋山陵也、

〔日本書紀孝徳二十五〕白雉五年十月壬子、天皇崩于正寢、十二月己酉、葬于大坂磯長陵、

〔扶桑略記天智五〕十年十二月三日、天皇崩、〇中略山陵山城國宇治郡山科郷北山、〇延喜式、山科陵ニ作ル、

〔日本書紀天武二十八〕元年五月、〇中略是月朴井連雄君奏天皇曰、臣以有私事、獨至美濃、時朝廷〇弘文宣美濃尾張兩國司曰、爲造山陵、〇天智豫差定人夫、則人別令執兵、臣以爲非爲山陵、必有事矣、〇中略天皇惡之、因令問察、以知事已實、〇下略

〔萬葉集二挽歌〕從山科御陵〇天智退散之時、額田王作歌一首、

八隅知之和期大王之、恐也御陵奉仕流、山科乃鏡山爾、夜者毛夜之盡、晝者母日之盡、哭耳呼泣乍在而哉、百礒城乃大宮人者去別南、

〔黒川道祐石山紀行〕十三日、〇天和三年五月三昧奥白雲村ヲ出テ、三條ノ橋ヲ渡リ、〇中略日岡ニ到リ、御廟

〔大日本史禮樂四〕陵南有佛寺、號高鷲山、即古名之遺也、

〔日本書紀十五清寧〕五年正月己丑、天皇崩于宮、十一月戊寅、葬于河内坂門原陵、

〔山陵志〕呼爲白髮山、仍其御名也、○天皇御名白髮武廣國押稚日本根子天皇

〔日本書紀十五仁賢〕元年十月己酉、葬弘計天皇○顯宗于傍丘磐杯丘陵、○延喜式、傍丘磐杯丘南陵ニ作ル、

〔日本書紀十五仁賢〕十一年八月丁巳、天皇崩于正寢、十月癸丑、葬埴生坂本陵、

〔日本書紀十七繼體〕二年十月癸丑、葬小泊瀨稚鷦鷯天皇○武烈于傍丘磐杯丘陵、○延喜式、傍丘磐杯丘北陵ニ作ル、

〔日本書紀十七繼體〕二十五年二月丁未、天皇崩于磐余玉穗宮、十二月庚子、葬于藍野陵、

〔古事記下繼體〕御陵者三島之藍也、

〔日本書紀十八安閑〕二年十二月己丑、天皇崩于勾金橋宮、○中略是月、葬天皇于河内舊市高屋丘陵、

〔古事記下安閑〕御陵在河内之古市高屋村也、

〔日本書紀十八宣化〕四年二月甲午、天皇崩于檜隈廬入野宮、十一月丙寅、葬天皇於大倭國身狹桃花鳥坂上陵、

〔享保年間山陵誌〕宣化　大和國高市郡鳥屋村に在、字ミサンザイ、

〔日本書紀十九欽明〕三十二年四月壬辰、天皇遂崩于内寢、九月、葬于檜隈坂合陵、

〔日本書紀二十一崇峻〕四年四月甲子、葬譯語田天皇○敏達於磯長陵、○延喜式、磯長中尾陵ニ作ル、

〔古事記下敏達〕御陵在川内科長也、

〔日本書紀二十一用明〕二年四月癸丑、天皇崩于大殿、七月甲午、葬于磐余池上陵、

〔日本書紀二十二推古〕元年九月、改葬橘豐日天皇○用明於河内磯長陵、○延喜式、磯長原陵ニ作ル、

〔古事記下用明〕御陵在石寸掖上、○掖恐池誤、後遷科長中陵也、

山陵震動放火之異也、

〔日本書紀 仁徳 十一〕六十七年十月甲申、幸河内石津原、以定陵地、丁酉、始築陵、是日有鹿忽起野中、走之入役民之中而仆死、時異其忽死、以探其痍、即百舌鳥自耳出之飛去、因視耳中、悉咋剝、故號其處曰百舌鳥耳原者、其是之緣也、

〔山陵志〕蓋壽藏自此始

〔日本書紀 仁徳 十一〕八十七年正月癸卯、天皇崩、　十月己丑、葬于百舌鳥野陵、〇延喜式、百舌鳥耳原中陵ニ作ル、

〔古事記 下 仁徳〕御陵在毛受之耳上原也

〔山陵志〕仁徳陵上田處、名尾張谷、即尾張役夫不畢其功者然也、口碑所存、實其爾哉、

〔日本書紀 履中 十二〕六年三月丙申、略〇中崩于稚櫻宮、　十月壬子、葬百舌鳥耳原陵、〇延喜式、百舌鳥耳原南陵ニ作ル、

〔古事記 下 履中〕御陵在毛受也

〔山陵志〕呼爲美貲佐伊、在石津村北、

〔日本書紀 允恭 十三〕五年十一月甲申、葬瑞歯別天皇、反正〇于耳原陵、〇延喜式、百舌鳥耳原北陵ニ作ル、

〔古事記 下 反正〕御陵在毛受野也

〔日本書紀 允恭 十三〕四十二年正月戊子、天皇崩、　十月己卯、葬天皇於河内長野原陵、〇延喜式、惠我長野北陵ニ作ル、

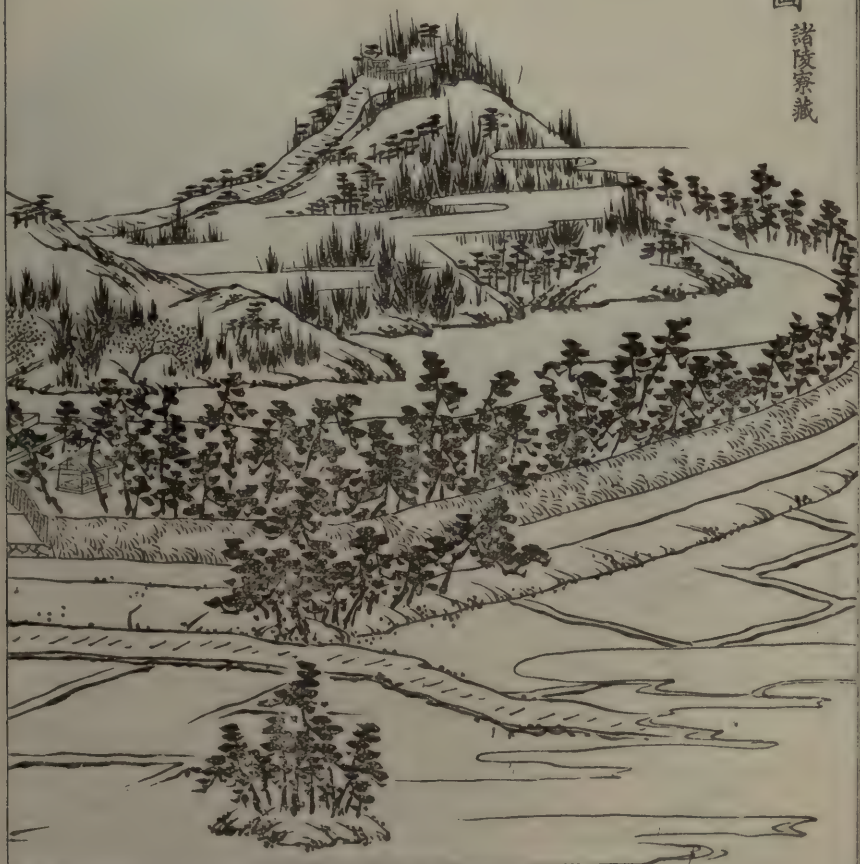
〔古事記 下 允恭〕御陵在河内之惠賀長枝也

〔日本書紀 安康 十三〕三年八月壬辰、天皇爲眉輪王見弒、三年後、乃葬菅原伏見陵、〇延喜式、菅原伏見西陵ニ作ル、

〔古事記 下 安康〕御陵在菅原之伏見岡也

〔山陵志〕呼爲保天堂、安康御名穴穗、穗音保、省穴字呼之、則保天堂、即穗天皇訛也、

〔日本書紀 清寧 十五〕元年十月辛丑、葬大泊瀬天皇、雄略〇于丹比高鷲原陵、

〔古事記 下 雄略〕御陵在河内之多治比高鸇也

仁德天皇山陵新圖
諸陵寮藏

應神天皇山陵新圖
諸陵寮藏

〔古事記 中垂仁〕御陵在菅原之御立野中也、

〔日本書紀 七成務〕二年十一月壬午、葬大足彦天皇（○景行）於倭國山邊道上陵、

〔日本書紀 八仲哀〕稚足彦天皇（○成務）六十年天皇（○成務）崩、明年九月丁酉、葬于倭國狹城盾列陵、（○延喜式、狹城盾列池後陵ニ作ル、）

〔續日本後紀 十三仁明〕承和十年四月己卯、使參議從四位上藤原朝臣助、掃部頭從五位下坂上大宿禰正野等、奉謝楯列北南二山陵、依去三月十八日有奇異、捜撿圖錄、有二楯列山陵、北則神功皇后之陵、（倭名大足姬命皇后）南則成務天皇之陵、（倭名稚足彦天皇）世人相傳、以南陵爲神功皇后之陵、偏依是口傳、每有神功皇后之祟、空謝成務天皇陵、先年緣神功皇后之祟、所作弓劒之類、誤進於成務天皇陵、今日改奉神功皇后陵、

〔日本書紀 九神功〕二年十一月甲午、葬天皇（○仲哀）於河内國長野陵、（○延喜式、惠我長野西陵ニ作ル、）

〔古事記 中仲哀〕御陵在河內惠我之長江也、

〔日本書紀 九神功〕元年二月、皇后領群卿及百寮、移于穴門豐浦宮、即收天皇之喪、從海路以向京、時麛坂王、忍熊王、聞天皇崩、亦皇后西征幷皇子新生、而密謀之、（○中略）乃佯爲天皇作陵、詣播磨、興山陵於赤石、仍編船絙于淡路嶋、運其嶋石而造之、則每人令取兵、而待皇后、

〔古事記 中應神〕御陵在川內惠賀之裳伏岡也、

〔日本書紀 十四雄略〕九年七月壬辰朔、河內國言、飛鳥戸郡人田邊史伯孫女者、古市郡人書首加龍之妻也、伯孫聞女產兒、往賀聟家、而月夜還於蓬蔂丘譽田陵下、（○應神御名）（○下略）

〔山陵志〕應神陵東北之隅、營築未了處、名甲斐坂、土人傳、是當時甲斐人所當役、會其邦有故、不得來焉、而後遂不復治也、

〔扶桑略記 二十九後冷泉〕治曆二年五月廿五日、石淸水宮司、言上去三月廿八日戌刻、河內國譽田天皇（○應神）

〔日本書紀 四安寧〕元年十月丙申、葬神渟名川耳天皇〇綏靖於倭桃花鳥田丘上陵、

〔享保年間山陵誌〕綏靖　大和國高市郡慈明寺村に在、字スヰゼント云、

〔日本書紀 四懿德〕元年八月丙午朔、葬磯城津彦玉手看天皇〇安寧於畝傍山南御陰井上陵、

〔古事記 中安寧〕御陵在畝火山之美富登也、

〔享保年間山陵誌〕安寧　大和國高市郡吉田村東南、マナゴ山の中に在、字安寧山と云、

〔日本書紀 四孝昭〕天皇以大日本彦耜友天皇〇懿德廿二年二月、立爲皇太子、三十四年九月、大日本彦耜友天皇崩、明年十月庚午、葬大日本彦耜友天皇於畝傍山南纖沙谿上陵、

〔古事記 中懿德〕御陵在畝火山之眞名子谷上也、

〔皇陵志 上〕孝昭〇中略此陵大和國葛上郡三室村ニ在之、字天皇山與申候、

〔日本書紀 四孝安〕三十八年八月己丑、葬觀松彦香殖稻天皇〇孝昭于掖上博多山上陵、

〔日本書紀 四孝靈〕天皇以日本足彦國押人天皇〇孝安七十六年正月、立爲皇太子、百二年九月丙午、葬日本足彦國押人天皇于玉手丘上陵、

〔日本書紀 四孝元〕六年九月癸卯、葬大日本根子彦太瓊天皇〇孝靈于片丘馬坂陵、

〔日本書紀 四開化〕五年二月壬子、葬大日本根子彦國牽天皇〇孝元于劍池嶋上陵、

〔古事記 中孝元〕御陵在劍池之中岡上也、

〔日本書紀 四開化〕六十年四月甲子、天皇崩、十月乙卯、葬于春日率川坂本陵、一云、坂上陵、

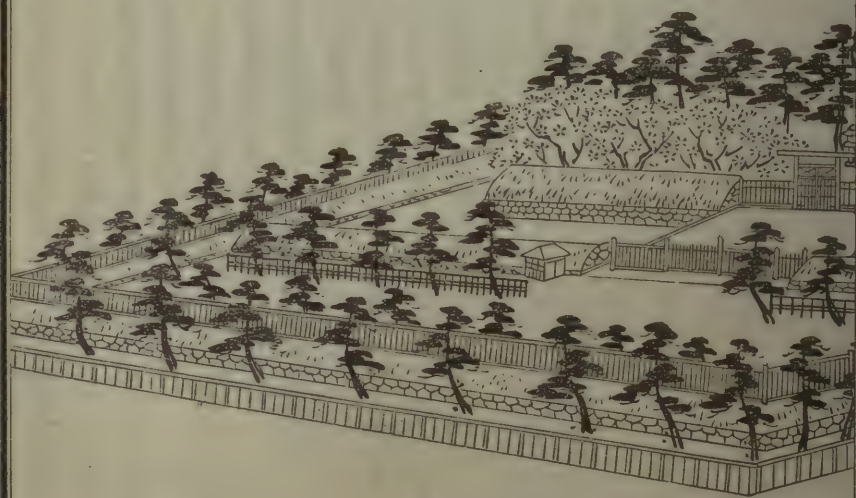
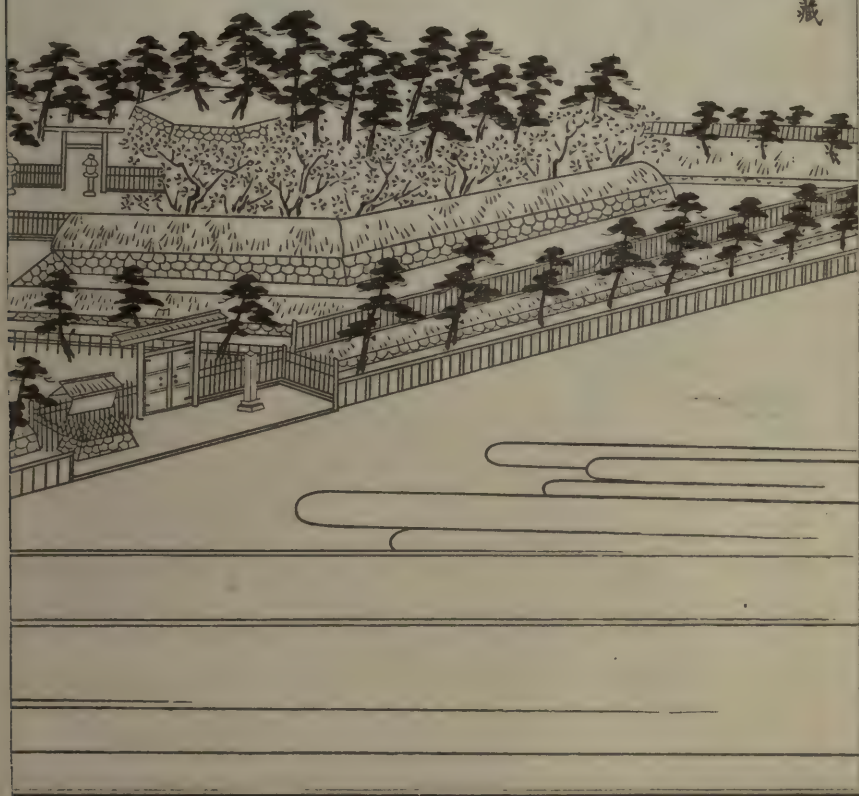
〔古事記 中開化〕御陵在伊邪河之坂上也、

〔日本書紀 五崇神〕六十八年十二月壬子崩、〇中略明年八月甲寅、葬于山邊道上陵、

〔古事記 中崇神〕在山邊道勾之岡上也、

〔日本書紀 六垂仁〕九十九年七月戊午、天皇崩、〇中略十二月壬子、葬於菅原伏見陵、〇延喜式、菅原伏見東陵ニ作ル、

神武天皇山陵新圖 諸陵寮藏

北
道
今度奉窺候垣之印
西
今度奉窺候溝之印
高七尺
四條村
南

諸陵周垣成就記

神武天皇山陵圖

大和國高市郡四條村
植村右衛門佐領地

臺山惣廻五十間

山根ヨリ迄一間半

惣溝堀割

惣溝廻り三十六間

高一丈

〔權記〕寛弘五年二月九日庚子、去夜亥時許、院（○花山）令崩給云々、十一日壬寅、令別當兼業朝臣告遺詔於外記、（○中略）遺詔云、擧哀素服國忌山陵等、可停止之由可令奏、毎事不異凡人云々、

〔日本紀略（十一一條）〕寛弘八年六月廿二日甲子、午刻太上皇（○一條）崩于一條院中殿、七月八日己卯、院司内藏頭公信朝臣參陣外、付大外記敦頼奏遺詔、可止山陵國忌素服擧哀者、

〔日本紀略（十四後一條）〕長元九年四月十七日乙丑、戌刻天皇落飾、崩于清涼殿、五月十九日丙申、奉火葬淨土寺西原、遺詔停素服擧哀、不任喪司、不置國忌山陵、

〔大外記師茂勘例（貞治三年七月師夏記所引）〕延久五年五月七日、太上天皇（後三條院）崩給、十七日、權中納言隆俊卿參入、被奏太上天皇遺詔事、素服擧哀山陵荷前等可停止、

〔百練抄（十五後嵯峨）〕仁治三年七月八日戊子、被立山陵使、隱岐法皇、改顯德院爲後鳥羽院、依御遺誡、不被置山陵國忌之由被申擧、

〔日本書紀（二神代）〕天津彥彥火瓊瓊杵尊崩、因葬筑紫日向可愛（可愛、此云埃）之山陵、

〔延喜式（二十一諸陵）〕日向埃山陵（天津彥彥火瓊々杵尊、在日向國、無陵戸、）

〔日本書紀（二神代）〕彥火火出見尊崩、葬日向高屋山上陵、

〔古事記（上）〕日子穗々手見命者、坐高千穗宮、伍佰捌拾歲、御陵者、即在其高千穗山之西也、

〔延喜式（二十一諸陵）〕日向高屋山上陵（彥火々出見尊、在日向國、無陵戸、）

〔日本書紀（二神代）〕彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊、崩於西州之宮、因葬日向吾平山上陵、

〔延喜式（二十一諸陵）〕日向吾平山上陵（彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊、在日向國、無陵戸、）

（已上神代三陵、於山城國葛野郡田邑陵南原祭之、其兆域東西一町、南北一町、）

〔日本書紀（三神武）〕七十有六年三月甲辰、天皇崩于橿原宮、（○中略）明年九月丙寅、葬畝傍山東北陵、

〔古事記（中神武）〕凡此神倭伊波禮毘古天皇、（○中略）御陵在畝火山之北方白檮尾上也、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年五月辛巳、後太上天皇〇淳和顧命皇太子〇恒貞曰、〇中略予聞人歿精魂歸天、而空存冢墓、鬼物憑焉、終乃爲祟、長貽後累、今宜碎骨爲粉、散之山中、於是中納言藤原朝臣吉野奏言、昔宇治稚彥皇子者、我朝之賢明也、此皇子遺教、自使散骨、後世效之、然是親王之事、而非帝王之迹、我國自上古不起山陵、所未聞也、山陵猶宗廟也、縱無宗廟者、臣子何處仰、於是更報命曰、予氣力綿惙、不能論決、卿等奏聞嵯峨聖皇、以蒙裁耳、　癸未、後太上天皇崩于淳和院、　戊子、此夕奉葬後太上天皇於山城國乙訓郡物集村、御骨碎粉、奉散大原野西山嶺上、　丁酉、勅後太上天皇崩後、國忌荷前陵戶等事、宜遵遺制以停奉行焉、

〇按ズルニ、嵯峨淳和二天皇ノ山陵ヲ置カセ給ハザリシ事ハ、延喜ノ諸陵式ニ之ヲ掲ゲザルニテ知ルベシ、

〔三代實錄三十八陽成〕元慶四年十二月四日癸未、是日申二刻太上天皇〇淸和崩圓覺寺、時春秋三十一、〇中略遺詔火葬於中野、不起山陵、　七日丙戌、是夜酉四刻奉葬太上天皇於山城國愛宕郡上粟田山、奉置御骸於水尾山上、

〔扶桑略記二十五朱雀〕承平元年七月十九日、太上法皇崩、年六十五、宇多院、八月五日、火葬山城國葛野郡大內山、依遺詔不造山陵、不入國忌、

〔仁和寺御傳〕宇多法皇　承平元辛卯年七月十九日甲辰、崩仁和寺、御年六十五、亥時奉移大內山魂殿、依遺詔不置陵、

〔扶桑略記二十五村上〕天曆六年八月十五日、朱雀太上法皇、春秋三十崩、葬愛宕郡山、置御骨於醍醐山陵傍、依遺詔不建山陵、不入國忌、

〔日本紀略一九條〕正曆二年二月十二日癸丑、今日圓融寺法皇〇圓融崩、　十九日庚申、〇中略依遺詔停素服擧哀國忌山陵、

遺詔不起山陵

蓋當時所陪葬者也、其狀率皆圓、則人臣墓制、亦從可知、然其象宮車不必爲帝陵也、何者其類間有之、而以其非史及諸陵式之所載、莫審爲何物、疑是皇后皇子、若重臣別勅所許、或帝王改葬、而其故陵尙存也、自用明至于文武凡十陵、特變是則、但圓造之、穿治玄室於其內、而築之以堊、覆之以巨石、石棺在其內南面、故其戶南向、而累石爲之羨道、其制嚴密、旣已如是、是以不復環之以溝也、班鳩太子〇聖徳治壽藏于河內磯長、即是制也、當時太子自負聰明有才藝、居作者之聖、於舊章多所變替、乃若山陵蓋亦然歟、〇中略迄于南都、更復舊制、惟其所仍、正南面而已矣、

〔高畠敬筆記〕泉涌寺御代々陵ノ作樣ハ、地ヲ掘ルコト二間四方、松板一尺二寸厚サノ木ヲ以テ、一丈四方ノ船ヲ作リ、其中ニ納メ、其內ヲ厚一尺ノ作リ石ニテ築堅ム、作石トハ、石灰タヽキ土ノコトナリ、其內ヘ六尺四方ノ石ノ御棺ヲ納ム、白川石ナリ、其內ヘ御棺ヲ納ム、御棺ハ檜ノ厚一尺ノ木ヲ以テ作ル、其上ハ厚八寸ノ板ヲ以ヲ天秤指ニ作リ、其上箱ハ八寸ノ板ヲ以テ造リ、チヤン流シ、厚五寸以上、御棺三重ナリ、目方凡三百貫目餘、御石棺ノ嚴重ニナリシハ、桃園院ヨリ始ルトイフ、

〔日本書紀推古二十二〕三十六年九月戊午、先是天皇遺詔於群臣曰、比年五穀不登、百姓大飢、其爲朕興陵以勿厚葬、便宜葬于竹田皇子之陵、

〔日本書紀天智二十七〕六年二月戊午、皇太子〇天智謂群臣曰、我奉皇太后天皇〇皇極之所勅、憂恤萬民之故、不起石槨之役、所冀永代以爲鏡誡焉、

〔續日本後紀仁明十二〕承和九年七月丁未、太上天皇〇嵯峨崩于嵯峨院、春秋五十七、遺詔曰、〇中略擇山北幽僻不毛地、葬限不過三日、無信卜筮、無拘俗事、〇中略穿院淺深縱橫、可容棺矣、棺旣已下了、不封不樹、土與地平、使草生上、長絕祭祀、但子中長者私置守冢、三年之後停之、　戊申、擇山北幽僻之地定山陵、以商布二千段錢一千貫文奉充御葬料、即日御葬畢、

〔三代實錄陽成三十五〕元慶三年三月廿三日癸丑、淳和太皇太后崩、〇中略太后寢疾綿篤、命左右曰、天長天子、〇淳和顧命火葬、不置山陵、無園廟之可陪、〇下略

陵制

し某天皇の御陵など云ときは、美波加と云べく、其御陵を指ては、美佐邪紀とも云べし、たとへば某皇の美佐々紀は、某天皇の美波加ぞなど云むが如し、某天皇の美佐々紀などは云ざりけむ、凡て同物も、指さまことよりて名のかはる類多し、後世になりては、陵をば、すべて美佐邪紀と申して、墓と別ことゝなれり、

〔令義解七公式〕大社　陵號　乘輿略〇中　右如此之類並闕字

〔令義解九喪葬〕凡先皇陵、略〇中兆域内、謂兆域也亦不得葬埋及耕牧樵採、

〔律疏名例〕八虐

二曰謀大逆、謂謀毀山陵及宮闕、謂有人獲罪於天、不知紀極、潜思釋憾、將圖不逞、遂起惡心、謀毀山陵及宮闕、

〔律疏賊盜〕凡謀反、及大逆者皆斬、

〔政事要略二十九〕衛禁律云、闌入山陵兆域門者笞五十、謂周兆故爲塋域者越垣者杖一百、陵戸不覺減二等、謂墓當主帥又減一等、謂親當者監當者故縱者、各與同罪、集解云、附釋云、三秦記云、秦謂天子墳爲山、漢云陵、亦通言、

山陵、

〔律疏賊盜〕凡盜山陵内木者杖一百、草者減三等、謂帝皇山陵、草木不合芟刈、而有盜者、

〔延喜式二十一諸陵〕凡陵墓側近有原野者、寮仰守戸、并移所在國司、共相知燒除、

〇按ズルニ、此守戸ハ、陵戸墓戸、及陵墓ノ守戸ヲ云フナルベシ、

〔山陵志〕上古大朴、山陵之制未備、瓊杵氏、炎見氏、彥波瀲武氏邈矣、三陵皆在日向國自太祖至乎孝元、猶就丘隴而起墳焉、自開化其後蓋寖有制、及垂仁始備、下至于敏達、凡二十有三陵、制略同焉、凡其營陵因山、從其形勢、所向無方、大小高卑、長短無定、其爲制也、必象宮車、而使前方後圓、爲壇三成、且環以溝、延暦十一年、以皇太子早良爲崇、勅謝之、其冢下置隍、勿使濫穢、隍溝也、因知諸陵之溝、亦其故然也、壇不必三成、擧其率言之、夫其圓而高者、如張蓋也、頂爲一封、即其所葬、方而平者如置衡也、其上隆起、如梁輈也、前後相接、其間稍卑、而左右有圓丘倚其下墳、如兩輪也、及至後世、民睹之而莫能識焉、猶號曰車塚、蓋亦以是也、凡陵側之地、必有三五丘冢、乃親之陵、頗小、而班列其前後左右、此

奈良の若草山と云ふは、仁德帝の后の陵にて、鶯の陵と云ふとなり、近年並河五一郎吟味ありて、其上に標ありと云ふ、其奥に鶯の谷と云ふ處あり、

〔大日本史 禮樂四〕孝德大坂磯長陵、在石川郡、〇按、(中略)枕草紙有鶯陵、今山田嶺一曰鶯關、關西五町、即陵地、據此鶯陵蓋謂此也、

〔蜻蛉日記 下〕五月〇康保四年(中略)十よ日に、うち〇村上の御藥の事ありとのゝしるほどもなくて、廿よ日のほどにかくれさせ給ひぬ、(中略)みさゝぎや何やときくにときめき給へる人々いかにと思ひやり聞ゆるあはれなり、やう〳〵日頃になりて、貞觀殿御方〇尚侍藤原登子に、いかになど聞えけるついでに、

世の中をはかなきものとみさゝぎのうもるゝやまになげくらんやぞ、御かへりごといとかなしげにて、

おくれじとうきみさゝぎに思ひいる心はしでのやまにやわるらん

〔源氏物語 十二 須磨〕院〇桐壺帝の御はかをがみ奉りたまふとて、北山へまうでたまふ、(中略)御山に參り侍るを、御ことゞてやときこえ給、(中略)御山にまうで給て、おはしまし〻御有さま、唯目の前のやうにおぼし出らる、(中略)御はかは道の草しげくなりて、わけ入給ほどいとゞ露けきに、月も雲がくれて森の木だちこぶかく心すごし、

〔和訓栞 美 三十〕みさゝき　日本紀に、陵又山陵をよめり、御狹々城の義なるべし、

〔古事記傳 十七〕御陵は美波加と訓べし、萬葉二(二十四丁)に、八隅知之、和期大王之、恐也、御陵奉仕流、山科乃、鏡山爾云々、師〇賀茂眞淵の考に、古は天皇の山陵をも、御墓とぞ云つらむ、此も御陵とは書たれど、みさゝきとは訓がたく必みはかと訓べければなりとあり、書紀仁德卷推古卷などに、難波荒陵と云地名もあり、源氏物語須磨卷に、院の御はかとあり、又御山ともあり、古書にも、御陵を築くを山作といへり、又美佐邪紀と云も古き稱なり、和名抄に山陵美佐々岐、また諸陵寮美佐々岐乃豆加佐とあり、但

名稱

ノ議起ル、抑モ此議ヤ、鎌倉幕府ヨリ足利氏ヲ歷テ、當時ノ人ノ曾テ耳朶ニモ觸レザリシ所ニシテ、之ヲ發スルハ德川幕府ノ時ノ儒生細井知愼ニシテ、將軍綱吉ハ、此議ニ本ヅキテ大ニ修造ヲ加ヘタリ、實ニ曠世ノ盛事ナリ、當時ハ實ニ闇黑ヲ脫シ、開明ニ趨ケルモノニテ、文物爾興シケレバ、王室ノ衰替ヲ歎キ、山陵ノ事ニ感ジ、之ガ爲ニ書ヲ著シヽモノモ少カラズ、松下見林ガ前王廟陵記ノ如キ其一ナリ、蒲生秀實ハ、天保ノ比ノ人ナリ、一ノ窮措大ヲ以テ、山川ヲ跋涉シ、辛苦經營シテ、以テ山陵志ヲ著シ、以テ勤王ノ志氣ヲ鼓舞セシハ、止ニ攷索ニ供スベキノミナラズシテ、其功誠ニ偉ナリトス、是ヨリ後、孝明天皇ノ朝ニ、戶田越前守忠恕ノ建議ニ依リ、將軍家茂ハ忠恕ノ家臣、間瀨和三郎忠至（後ニ戶田大和守ト稱ス）ヲシテ大ニ力ヲ修陵ノ事ニ用ヰシメシガ、維新ノ初ニハ、特ニ諸陵寮ヲ興シタマヒシカバ、漸次ニ舊觀ニ復スルニ至レリ、

〔新撰字鏡 下阝〕陵（大阜曰陵、乎加、又豆不禮、又彌佐々木、）

〔倭名類聚抄 十四調度〕山陵　日本紀私記云、山陵（美佐佐岐）

〔伊呂波字類抄 見九〕山陵（ミサヽキ）

〔令義解 九喪葬〕凡先皇陵（謂先代以來、帝王山陵皆是也、帝王墳墓、如山如陵、故謂之山陵、○下略）

〔令集解 四十喪葬〕釋云、帝皇葬因陵、如陵、故云陵也、見名例、古記云、陵謂墓一種、以貴賤爲別名耳、

○按ズルニ、令集解ニ見名例トアレド、今ノ律ニ此文ナシ、恐クハ古律ナルベシ、而シテ唐律名例謀大逆ノ疏議ニ、山陵者、古先帝王因山而葬、黃帝葬橋山、即其事也、或云、帝王之葬、如山如陵、故曰山陵トアルハ、此文ノ原ヅク所ナリ、

〔枕草子 一〕みさゝきは　鶯のみさゝき、かしは原の陵、あめのみさゝき、

〔輶軒小錄〕山陵の事

禮門ニ親臨シテ御拜アリ、其使ニハ納言以下ヲ以テ之ニ充ツ、此餘ノ陵墓ノ使ハ、陵墓ノ預人等ヲ以テ之ニ充テ、大藏省ニテ幣物ヲ授ケテ發セシム、爾ルニ其後、荷前ノ儀モ漸ク衰ヘテ、後三條天皇ノ頃ニハ、僅ニ故事ヲ存スルノミナリシガ、幾モナクシテ終ニ廢絶セリ、荷前ハ恒例ノ事ナレド、臨時ニモ告祭スル事毎ニアリテ、卽位ノ如キ、改元ノ如キ、外國人ノ朝貢ノ如キ、之ニ告ゲザルハナク、天皇ノ疾病ノ如キ、災異ノ如キ、亦多ク之ニ祈レリ、斯ル事モ後ニハ漸ク其數ヲ減ジ、殆ド絶無ノ姿ニナリシガ、孝明天皇ノ朝ニ、四海ノ騷擾ニ際シ、祈禱ヲ行ハセ給ヒシハ、廢典ヲ興シタマヒシナリ、

山陵ノ事ハ、治部省ノ諸陵寮ニテ掌ルコトニテ、其下ニ陵戸アリ、陵戸ハ雜戸ノ類ニテ、良民ニ齒スルヲ得ズ、調庸及ビ雜徭ヲ蠲カレテ、世々山陵ヲ守ルモノナリ、原來五戸ニテ一帝ノ山陵ヲ守ルベキ制ナレド、或ハ六戸ナルアリ、乃至一戸ナルアリ、陵戸ナキモアリテ一ナラズ、而シテ陵戸少クシテ、其陵ニ充ツルニ足ラザル地ハ、陵ニ近キ百姓ヲ點ジ、年ヲ限リ庸徭ヲ除キ、守戸ト爲シテ之ヲ補ヒ、全ク陵戸ナキ地ハ、守戸ノミヲ以テ之ヲ守ラシムルナリ、守戸ハ良民ニテ、其陵戸ニ於ケルハ、恰モ品部ノ雜戸ニ於ケルガ如シ、

山陵ハ律令ニ明文アリテ、兆域門内ニ闌入シ、及ビ寸草尺木ヲ攀折スルモ罪アルノミナラズ、其意中ニ之ヲ毀タントト謀ルトキハ、未ダ之ヲ實行セズト雖モ、證跡明白ナルトキハ、是ヲ謀大逆ト爲シ、首從ノ別ナク皆之ヲ斬ニ處スルナリ、然ルニ其法ノ斯ク嚴ナルニ拘ハラズ、樹木ヲ伐リ、及ビ汗穢ヲ蒙ラシメ、兆域ノ内ニ佛堂ヲ建ツル等ノ事アリテ、朝廷ヨリ鎭祭シタヒシ事屢アリ、朝威漸ク衰ヘ、武人權ヲ弄シ、四海鼎沸スルニ及テハ、所在ノ山陵ハ、大ニ頽圮シテ、其狀況ハ、愚民ノ一抔ノ土ヲ取ルノミナラズシテ、凡ソ臣子タル者ノ、痛哭流涕シ、言ハントト欲シテ言フニ忍ビズ、筆セントト欲シテ筆スルコト能ハザルモノアリ、是ニ於テ修築

當時火葬盛ニ行ハレ、且ツ薄葬ヲ以テ主ト爲シヽカバ、遺詔ニ依リテ山陵ヲ起サヾル事モアリテ、其極ヤ陵ノ所在ヲモ詳ニセザルニ至ル、蓋シ至尊ノ火葬ハ、持統天皇ニ起リシ事ニテ、其遺骨ハ天武天皇ノ陵ニ合葬セシヲ以テ、其地ハ明ニ知ラレタレドモ、嵯峨淳和ノ二天皇ハ、山陵ヲ置カザルニ由リ、荷前ノ例幣ニモ預リタマハズ、清和天皇ノ御骨ヲ水尾山上ニ置キ、宇多天皇ヲ大内山ニ瘞ミ奉リシガ如キ、均シク此類ナリ、是ヨリ後ハ多ク寺院ニ葬リテ、古ノ山陵ノ如キモノ益尠ク、後白河天皇ヲ法華堂ニ收メ奉リショリ、法華堂ニ於テスルモノ亦多シ、後深草天皇ノ如キハ、安樂行院ノ佛壇ノ下ニ收メ奉レリ、亦法華堂ノ類ナリ、而シテ四條天皇ヲ泉涌寺ニ瘞ミ奉リショリ、此寺ニ收メ奉ルコトモ數世ナリシガ、後陽成天皇ヨリ後ハ、此ヲ以テ例ト爲シ、泉涌寺ハ殆ド御菩提所ノ如クナレリ、然ルニ孝明天皇ノ崩ジタマヒシ後ニ、壯大ナル山陵ヲ起シタマヒシハ、聖上ノ孝思ニ本ヅキシモノニテ、從前ノ陋習ヲ一洗スルモノナリ、

毎年ノ終ニ、使者ヲ諸陵、及ビ外戚ノ墓等ニ分遣シ、幣ヲ進ラシムル事アリ、是ヲ荷前（ノサキ）ト云フ、荷前トハ、先ヅ諸國ノ貢物ヲ抽キテ、之ヲ薦ムルノ謂ナリ、清和天皇ノ即位ノ初ニ、十陵四墓ノ制ヲ立ツ、十陵ハ、天智、光仁、桓武、平城、仁明、文德ノ六天皇、及ビ田原、崇道ノ追尊天皇、幷ニ桓武天皇ノ母后、嵯峨天皇ノ母后（亦平城御母ナリ）ナリ、天智平城、崇道ノ外ハ、當時ノ本系ノ親ナリ、蓋シ天智天皇ハ制度改革ノ功ヲ以テシ、崇道天皇ハ怨魂ヲ慰スルニ出デシナラン、並ニ歷世替ラズ、平城天皇ハ其故ヲ詳ニセザレドモ、或ハ嵯峨天皇ヲ祭ラザリシニ由リテ之ニ代フルモノカ、是ヨリ二回ノ改定ヲ歷テ朱雀天皇ノ朝ニハ、天智、光仁、桓武、仁明、光孝、醍醐ノ六天皇、及ビ崇道天皇、幷ニ嵯峨天皇ノ母后、光孝天皇ノ母后、醍醐天皇ノ母后ヲ十陵トス、是ニ於テ傍系ナルモノハ獨リ崇道天皇ノミ、抑モ荷前ノ幣ヲ獻ズルニハ、十陵ヲ首ト爲シ、天皇、建

古事類苑

帝王部十七

山陵上

山陵トハ帝皇ノ冢墓ヲ云フ、蓋シ其高大ナルコト、山ノ如ク陵ノ如クナルヲ以テ名ヅクル所ニシテ、或ハ古昔陵ニ因リテ之ヲ爲シヽニ起ルト云フ、其之ヲミハカト云フハ、普通ノ稱ニ敬語ヲ加ヘタルモノニテ、ミサヽキト云フハ、帝皇ニ限レル特稱ナリ、原來山陵ノ稱ハ、斯ク至尊ニノミ用ヰルコトナレド、有功ノ皇子等モ、其墓ヲ陵ト稱スルヲ得ルハ往時ノ制ナリ、其後孝謙天皇ノ朝ニ、特ニ勅アリテ、母后藤原安宿媛、及ビ聖武天皇ノ母后藤原宮子娘ノ墓ヲ陵ト稱セシメ給ヒシヨリ、皇后ノ墓ハ總テ陵ト稱スル事ト爲レリ、然レドモ從前ノ皇后ニハ及ボサズ、且ツ此時ハ有功ノ皇子等モ、陵トハ稱セザル事トナリテ、日本武尊、飯豐青皇女ノ如キハ、原ハ陵ト稱セシガ、延喜式ニハ降シテ墓ト爲セリ、蓋シ延喜ヨリ前ノ制ナラン、是レ陵墓ノ稱ノ一變ナリ、獨リ神功皇后ハ、久シク朝ニ臨ミ政ヲ攝シ、殆ド至尊ト均シキヲ以テ、日本書紀ニハ其墓ヲ陵ト稱シ、延喜式ニモ磐余稚櫻宮御宇神功皇后ト書シテ、亦陵ト云ヘリ、當時又陵墓ニ近陵遠陵ノ稱アリ、血屬ノ親疎ニ隨ヒテ之ヲ別ツナリ、

上古ノ山陵ハ皆高大ニシテ、兆域甚ダ廣ク、四面ニ池ヲ環ラシ、羨道アリテ出入スベク、其棺ハ石造ナリ、中ニ就キテ特ニ偉觀ナルヲ仁徳天皇ノ陵トス、其周圍ハ十町ニ過ギ、高サハ十七間ニ近シ、是ヨリ藤原奈良ノ二朝ヲ歷テ、平安ノ初ニ至リテハ漸ク古ノ如ク壯大ナラズ、

古事類苑

帝王部十七

山陵上

錫類之德彌厚、不以逸遊爲念、俯以謙卑在懷、瑞璽藻文、薦聖壽之遐祉、寶字結象、開皇基之永昌、(中略)陛下謙讓、推而不居、菩提等竊疑焉、菩提等逖察前徵、緬鏡遐載、隨時立制、權代適宜、王皇雖殊、其揆一也、菩提等不勝丹款之誠、謹上尊號、陛下稱曰寶字稱德孝謙皇帝、皇太后稱曰天平應眞仁正皇太后、伏願陛下皇太后、抑謙光之小節、從梵侶之讜言、庶使蟠木之鄕、燭龍之地、問號仰澤、聽聲向光、凡厥在生、誰不幸甚、沙門菩提等不任下情、謹奉表以聞、詔報曰、朕覽卿等所請、鴻業良峻、祗畏允深、忝以寡薄、何當休名、而上天降祐、帳宇開平、原地薦祥、璽文表德、竊惟此事、天意難違、俯從衆願、敬膺典禮、號曰寶字稱德孝謙皇帝、

〔續日本紀 十八 孝謙〕寶字稱德孝謙皇帝(出家歸佛、更不奉諡、因取寶字二年百官所上尊號稱之、)

○按ズルニ、扶桑略記稱德天皇重祚ノ下ニ、四十九代高野天皇是也、前謂孝謙天皇トアリ、前トハ即前位ヲ謂フ、又愚管抄ニモ、重祚して位にかへりたまひにけり、(中略)孝謙を此度は稱德天皇と申けりトアリ、孝謙稱德ノ追號ハ、此尊號ヲ分稱スル所ナリ、

漢風尊號

〔日本書紀二十七天智〕天命開別天皇、息長足日廣額天皇舒明太子也、

〔日本書紀通證二十七天智〕天命開別天皇蓋誅入鹿、定日位、命美稱、

〔書紀集解二十七天智〕天命開別天皇按天智辭遜、待時而登天位、如有命所開、故以爲諡也、

〔皇年代略記〕天智天皇諱葛城、又號天命開別天皇、

〔日本書紀二十三舒明〕二年正月戊寅、立寶皇女皇極○爲皇后、后生二男一女、一曰葛城皇子、近江大津宮御宇天皇、

〔日本書紀二十八天武〕天渟中原瀛眞人天皇、天命開別天皇天智○同母弟也、幼曰大海人皇子、

〔皇年代略記〕天武天皇諱大海人、又名天渟名原瀛眞人、

〔續日本紀二十一淳仁〕天平寶字二年八月庚子朔、高野天皇禪位於皇太子、中略○是日百官及僧綱、詣朝堂上表、上上臺中臺尊號、其百官表曰、臣仲麻呂等言、臣聞、星廻日薄、懸象著明之謂天、出震發乾、乘時首出之謂聖、天以不言爲德、非言無以暢其神、聖以無名體道、非名安可詮其用、冬穴夏巢之世、猶昧典章、雲官火紀之君、方崇徽號、寔乃發揮功業、闡揚尊名、名之爲義、其來尚矣、伏惟皇帝孝謙○陛下、臨馭天下、十有餘年、海內淸平、朝廷無事、祥瑞頻至、寶字荐臻、乃聖乃神、允文允武、諒無得而稱焉、豈乎國絶皇嗣、人懷彼此、降天尊於人願、鳴謙克光、損乾德於坤儀、鴻基遂固、展誠敬而追遠、攀慕惟深、勤溫凊以承顏、因心懇至、故有九服宅心、咸荷望雲之慶、萬方傾首、俱承就日之輝、中略○臣等入參帷扆、出廁周行、鳴珮曳綸、綿積年祀、覩斯盛德、戴斯昌化、臣子之義、何無稱贊、人欲而天必從、狂言而聖尙擇、謹據典策、敢上尊號、伏乞奉稱上臺寶字稱德孝謙皇帝、奉稱中臺天平應眞仁正皇太后、上協天休、傳鴻名於萬歲、下從人望、揚雅稱於千秋、不勝至懇踊躍之甚、謹詣朝堂奉表以聞、僧綱表曰、沙門菩提等言、菩提聞、乾坤高大、覆載以之顯功、日月貞明、照臨由其甄用、至於混群有而饒益、撫萬物而曲成、獨標十號之尊、式崇四大之極、故徽猷歷前古以不朽、妙迹流後葉而恒新、然則表德稱功、莫不由於名號、伏惟皇帝陛下、乃聖繼聖、括六合而承其○其疑衍基、乃神襲神、環四瀛而光宅、則政道於刑措、駈懷生於仁宜、追遠之孝尤重、

〔皇年代略記〕推古天皇諱額田部、又號豐御食炊屋姬、

〔日本書紀推古二十二〕三十六年三月壬子、天皇病甚、不可諱、則召田村皇子、○舒明

〔日本書紀舒明二十三〕息長足日廣額天皇、渟中倉太珠敷天皇孫、彥人大兄皇子之子也、母曰糠手姬皇女、

〔古事記敏達下〕此天皇之御子等、幷十七王之中、日子人太子、娶庶妹田村王、亦名糠手比賣命、生御子、坐岡本宮、治天下之天皇、○舒明

〔書紀集解舒明二十三〕按、息長近江地名、皇祖母所號、○彥人大兄皇子母、息長眞手王女廣姬、足日美稱、廣額蓋表天容也、

〔大安寺伽藍緣起〕初飛鳥岡基御宇天皇、○舒明之未登極位、號曰田村皇子、

〔皇年代略記〕舒明天皇諱田村、號息長足日廣額天皇、

〔日本書紀舒明二十三〕二年正月戊寅、立寶皇女、○皇極爲皇后、

〔日本書紀皇極二十四〕天豐財重日足姬天皇、渟中倉太珠敷天皇曾孫、押坂彥人大兄皇子孫、茅渟王女也、

〔皇年代略記〕皇極天皇諱寶、又天豐財重日足姬天皇、

〔日本書紀皇極二十四〕四年六月庚戌、讓位於輕皇子、○孝德

〔書紀集解皇極二十四〕財卽寶、○中略餘皆美號、

〔日本書紀孝德二十五〕天萬豐日天皇、天豐財重日足姬天皇同母弟也、

〔皇年代略記〕孝德天皇諱輕、又號天萬豐日天皇、

〔日本書紀舒明二十三〕十三年十月丁酉、天皇崩于百濟宮、○中略是時東宮開別皇子、○天智年十六而誄之、

〔大安寺伽藍緣起〕天皇、○齊明行幸筑紫朝倉宮、將崩賜時、甚痛憂勅久、此寺授誰參來止、先帝○舒明待問賜者、如何答申止憂賜、爾時近江宮御宇天皇、○天智奏久、開伊髻墨刺、肩負鋸、腰刺斧、奉爲奏支、

兄光吾鳳於萬國、○下略

〔皇年代略記〕安閑天皇諱勾大兄、又廣國押武金日、

〔古事記下安閑〕廣國押建金日命、坐勾之金箸宮、治天下也、

〔日本書紀通證二十二繼體〕摩呂古安閑別號

〔古事記傳四十四〕勾は、大和國廣瀨郡なるべきか、○中略此天皇○安閑の御名、書紀に勾大兄皇子とあれば、本より此地に住居坐りしなり、

〔日本書紀繼體七上〕元年三月癸酉、納八妃、元妃尾張連草香女曰目子媛、生二子、皆有天下、○中略其二曰檜隈高田皇子、是爲武小廣國排盾尊、○宣化

〔皇年代略記〕宣化天皇諱高田、又武小廣國排楯、

〔古事記下宣化〕建小廣國押楯命、坐檜坰之廬入野宮、治天下也、

〔古事記下欽明〕天皇、○宣化娶檜坰天皇之御子石比賣命、

〔日本書紀繼體七上〕元年三月甲子、立皇后手白香皇女、脩敎于內、遂生一男、是爲天國排開廣庭尊、是嫡子而幼年、於二兄○安閑、宣化、治後、有其天下、

〔古事記下繼體〕天皇、○中略娶意富祁天皇○仁賢之御子、手白髮命、是大后也生御子、天國押波流岐廣庭命、波流岐三字以音

〔上宮聖德法王帝說〕斯歸斯麻宮治天下天皇、○欽明名阿米久爾意斯波留支比里爾波乃彌己等、

〔日本書紀十九欽明〕二年三月、納五妃、○中略次蘇我大臣稻目宿禰女、曰堅鹽媛、生七男六女、其一曰大兄皇子、是爲橘豐日尊、○用明

〔日本往生極樂記〕聖德太子者、豐日天皇○用明第二子也、

〔日本書紀二十二推古〕豐御食炊屋姬天皇、天國排開廣庭天皇○欽明中女也、○中略幼曰額田部皇女、

總十九人、改宿禰賜朝臣、國牽天皇三世孫、武内宿禰第六男、葛木襲津彦之後、

〔日本書紀孝元四〕七年二月丁卯、立欝色謎命爲皇后、后生二男一女、○中略第二曰稚日本根子彦大日日天皇、○開化

〔古事記傳二十二〕大御父天皇○孝元の御名の、大倭根子に對へて、若倭根子とは稱へ奉れるなり、

〔日本書紀崇神五〕十二年九月己丑、始校人民更科調役、此謂男之弭調、女之手末調也、是以天神地祇共和享、而風雨順時、百穀用成、家給人足、天下太平矣、故稱謂御肇國天皇也、

〔古事記崇神中〕僃天下太平、人民富榮、於是初令貢男弓端之調、女手末之調、故稱其御世、謂所知初國之御眞木天皇也、

〔古事記傳二十三〕所知初國は、波都久邇斯羅志斯と訓り、此稱辭は、後の御世に至て申せし言なるべし、其御世と云、又大御名をも申せるなど、當御世に申せる物とは聞えざればなり、○中略さて此は師○眞淵加茂の神武天皇を如此稱申して、○事見上文更に又此にも如此申せる故は、是より先にはいまだ服はざりし遙の國々まで、初て皇化のゆきたらはして、天下悉く大平ぬる御世なればなりといはれしが如し、

〔日本書紀雄略十四〕元年三月壬子、○中略是月立三妃、元妃葛城圓大臣女曰韓媛、生白髮武廣國押稚日本根子天皇、○淸寧與稚足姬皇女、

〔日本書紀淸寧十五〕白髮武廣國押稚日本根子天皇、大泊瀨幼武天皇○雄略第三子也、○中略天皇生而白髮

〔古事記雄略下〕天皇、○中略娶都夫良意富美之女韓比賣、生御子白髮命、○淸寧

〔古事記淸寧下〕白髮大倭根子命、○中略此天皇無皇后、亦無御子、故御名代定白髮部、

〔日本書紀繼體十七〕元年三月癸酉、納八妃、元妃尾張連草香女曰目子媛、生二子、皆有天下、其一曰勾大兄皇子、是爲廣國排武金日尊、○安閑七年十二月戊子、詔曰、○中略懿哉摩呂古示朕心於八方、盛哉勾大

勅近江崇福寺者、天智天皇之創建也、〇中略本願天皇、朕多〇宇之遠祖大廟也、予末小子何不祇承、〇中略寛平二年歳次庚戌十二月四日、散位正五位下菅原〇道眞奉勅記、

〇按ズルニ、江家次第抄國忌條ニハ、天智天皇ヲ太祖トシ、光仁天皇ヲ中祖トセシコトアリ、山陵篇荷前條ニ引載セリ、參看スベシ、

〔日本書紀神代二〕一書曰、狹野尊、〇神武亦號神日本磐余彥尊、所稱狹野者、是年少時之號也、後撥平天下、奄有八洲、故復加號、曰神日本磐余彥尊、

〔日本書紀神武三〕辛酉年正月庚辰朔、天皇卽帝位於橿原宮、〇中略古語稱之曰、於畝傍之橿原也、太立宮柱於底磐之根、峻峙搏風於高天之原、而始馭天下之天皇、曰神日本磐余彥火火出見天皇焉、

〔日本書紀孝德二十五〕大化三年四月壬午、詔曰、〇中略自始治國皇祖〇神武之時、天下大同、都無彼此者也、

〔日本書紀安寧四〕三年正月壬午、立渟名底仲媛命爲皇后、先是后生二皇子、〇中略第二曰大日本彥耜友天皇、〇懿德

〔日本書紀孝昭四〕二十九年正月丙午、立世襲足媛爲皇后、后生〇中略日本足彥國押人天皇、〇孝安

〔日本書紀孝安四〕二十六年二月壬寅、立姪押媛爲皇后、后生大日本根子彥太瓊天皇、〇孝靈

〔古事記傳二十二〕根子は尊稱にて、景行天皇の御子にも、倭根子命と申すあり、凡人にも、記中に難波根子、書紀神功卷に、山背根子など云名見えたり、天皇は大倭國知ろしめすを以て、倭根子とは申し奉るなり、〇中略すべて御代々々の天皇の御通號となりて、詔命などにも、みな倭根子天皇と申し奉ることなり、

〔日本書紀孝靈四〕二年二月丙寅、立細媛命爲皇后、后生大日本根子彥國牽天皇、〇孝元三十六年正月己亥朔、立彥國牽尊、爲皇太子、

〔續日本後紀仁明十二〕承和九年十二月癸酉、右京人參議從三位兼越中守勳六等朝野宿禰鹿取、男女

右件厨子、○中略天皇、○持統傳賜藤原宮御宇大行天皇○文武

〔萬葉集一雜歌〕藤原宮御宇天皇○文武代

大行天皇○文武幸于難波宮時歌、○下略

〔日本後紀十三平城〕大同元年三月丙戌、上謂公卿曰、○中略報曰、大行天皇○桓武聖德弘茂、海內清平、○下略

〔文德實錄一〕嘉祥三年四月己酉、公卿上啓曰、○中略大行聖帝、○仁明仁明齊日月、道括乾坤、○下略

〔三代實錄一清和〕天安二年九月三日辛酉、是日大行皇帝○文德晏駕之後、始盈七日、遣使於近陵諸寺、各修功德、

〔日本紀略一醍醐〕延長八年十月十日庚子、奉葬大行皇帝○醍醐於山城國宇治郡山科陵、

〔日本紀略四村上〕康保四年六月四日辛酉、奉葬大行皇帝○村上於村上山陵、

〔百練抄十五後嵯峨〕仁治三年正月廿日、踐祚、○中略諸卿群參大行皇帝○四條御在所、閑院奉三種寶物、被參新帝御所、

〔弘化諒闇記〕弘化三丙午歲二月六日、先帝○仁孝追而被奉御諡號迄、被稱大行天皇之旨被仰出

〔嘉永明治年間錄十六〕慶應三年正月、周防守殿○老中松平康直渡書付、先帝○孝明御諡號迄、奉稱大行天皇候事、

〔革命勘文〕一高野天皇○稱德改天平寶字九年、爲天平神護元年之例

謹案國史、○中略遠履太祖神武之遺蹤、近襲中宗天智之基業、宜創此更始、期彼中興、建元號於鳳曆、施作解於雷散、○下略

〔神皇正統記仲哀〕太祖神武より、第十二代景行までは、代のまゝに繼體したまふ、

〔神皇正統記天智〕此天皇、中興の祖にまします、

〔菅家文草七記〕崇福寺綵錦寶幢記

大行

〔神皇正統記神武〕此御代より代ごとに宮所を遷されしかば、其所を名づけて御名とす、(○御號トスト云フ誤ナリ)此天皇をば橿原の宮と申なり、

○按ズルニ、代ゴトニ宮所ヲ遷スト云フコト誤ナリ、(下文代ごとに都を改めト云フ、亦同ジ、)事ハ、本居宣長ノ古事記傳二十ニ見ユ、

〔神皇正統記元明〕三年庚戌に、始めて大倭の平城の宮に都を定めらる、古は代ごとに都を改め、則其みかどの御名によび奉りき、

〔古事記傳十八〕すべて古の御代を、古は或は近江ノ大津ノ宮御宇天皇(○天智)或は飛鳥ノ淨御原ノ朝(○天武)などゝこそ申せるを、後世人はたゞ後の漢諡をのみ知て、返て本の眞の御稱をば更に志らず、古書に記せるを見ても、何れの御代の稱とも、え辨へぬ人のみ多し、甚しき者は漢諡を當昔の眞の御名と心得て、上代を疑ふ者もあるをや、古を尙む人はよく思ふべき事なりかし、

〔日本書紀持統三十〕三年五月甲戌、命土師宿禰根麻呂、詔新羅弔使級飡金道那等曰、(○中略)遣田中朝臣法麻呂等、相告大行天皇(○天武)喪、(○下略)

〔史記漢景帝十一〕中六年四月、大行爲行人、(服虔曰、天子死未有諡、稱大行、晉灼曰、禮有大行小行、主謚官、故以此名之、如淳曰、不反之辭也、)

〔文獻通考國恤百二十二〕帝(○漢高祖)初登遐、朝臣稱曰大行皇帝、

魏孫毓曰、大行之稱、起於漢氏、漢書曰、大行在前殿、又曰、大行無遺詔、謚法大行受大名、小行受小名、初崩未謚、而嗣帝已立、臣下所稱、僻宜有異、故謂之大行、言其有大德行、必受大名、若稱謚也、

〔好古小錄上〕伊福吉部德足比賣臣墓誌

藤原大宮御宇大行天皇(○文武)御世、慶雲四年歲次丁未春二月二十五日、從七位下被賜仕奉矣、(○下略)

〔東大寺獻物帳〕獻盧舍那佛

御製裟合玖領(○中略)

へども、誰も不心付といへり、餘り近き世の事故探り見べき日記も手廻らず、泉涌寺は、東山に有が故ならんなど丶答ふる人もあれど、歴代追々御陵なしまし、今更をくれて此時東山を用ひられん事當らず、何も合點不行事也、或時書房本城小兵衛來云、泉涌寺方丈の額は、張即之の筆にして東山とありといへり、然れども是もさてさて不審難晴といへども、向後校正の一助にひかへおく也トアレバ信ト爲シ難シ、又鳩巣隨筆ニハ、院といふはもと宮中屋宇の名なり、（中略）東山に御座あるを以て東山院と稱するの類なりトアレド、是又明徵ナケレバ據リ難シ、

〔光榮公記〕元文二年四月廿四日、右府（一條兼香）云、御院號每度攝家勸進也云々、內々中御門院御治定也、

〔續史愚抄 櫻町〕元文二年五月五日癸巳、故院御追號、爲中御門院、（去月廿七日、內々治定云、）

○按ズルニ、飯田忠彥ノ野史ニ、天皇讓位ノ後、櫻町仙院ニ遷御ノ事アリ、拾芥抄ニ、櫻町、中御門北、萬里小路東南ト見ユ、今京ノ制ニハアラザレドモ據ナキニアラズ、錄シテ參考ニ供ス、

〔賴言卿記〕寶曆十二年七月廿三日甲申、御追號、儒卿三人各勸進、以一封被出也、　廿六日丁亥、儒卿勸進御追號、　廿八日己丑、先帝御追號桃園院、御牌名筆者妙法院宮云々、

〔續史愚抄 桃園〕寶曆十二年七月二十九日庚寅、此日以先帝御追號、爲桃園院、（今度不被擇御追號、抑櫻町院宸筆依有此號、被取用云、）

〔續日本紀 元正八〕養老五年十月丁亥、太上天皇（元明）召入右大臣從二位長屋王、參議從三位藤原朝臣房前、詔曰、（中略）朕崩之後、宜（中略）諡號稱某國某郡朝庭馭宇天皇、流傳後世、

〔東大寺要錄 八〕奈保山太上天皇（元明）山陵牌文（養老五年十二月七日崩）

大倭國御谷（御谷恐添上誤）郡平城之宮馭宇八洲　太上天皇之陵是其所也
養老五年歲次辛酉、冬十二月癸酉撥（撥恐朔誤）十三日乙酉葬、

所號不詳

の院〇後鳥羽遙に移らせたまひぬるに、のどかにて都にてわらん事いと恐れありとおぼされて、御心もて其年〇承久三年閏十月十日、土佐の國はたといふ所に渡らせたまひぬ、〇中略せめて近き程に〇下恐脱二に字一わづまより奏したりければ、後には阿波國に移らせ給ひにき、〇中略おりさせたまひて〇後鳥羽後も、土佐院十二年、〇下略

〔皇代記〕土御門天皇、世云二阿波院一、

〔増鏡三藤衣〕その年〇寛喜三年十月十一日、あはの院〇土御門かくれさせ賜ひぬ、

〔皇代記〕順德天皇、世云二佐渡院一、

〔増鏡二新島守〕新院も佐渡國に移らせ賜ふ、〇中略佐渡院〇順德おけくれ御おこなひをのみし賜ふ、

〔紹運要略〕土御門院寛喜三年十月十二日、崩二阿波國一、仁治三年七月八日、可レ奉レ號二土御門院一之由、被レ奏二宸筆之御書於仁原法華堂一、

〔陵墓一覽宮内省撰定〕土御門院天皇陵山城國乙訓郡金ケ原村

〇按ズルニ、吾妻鏡承久三年六月八日、叡山御幸ノ條ニ、上皇後鳥羽土御門院、新院順德ト云ヒ、百練抄ニモ同時ニ、一院後鳥羽土御門院、新院順德トアリテ、承久軍物語ニ、土佐國ニ遷幸わるべきに定められけり、應司萬里小路の御所より御出ありげしやくの土御門の大納言定通〇外祖父藤原通親子卿参りて、なく〳〵御車をよすトアレバ、遜位ノ後ハ、常ニ土御門院母后承明門院御在所在子ニ御坐セシヲ以テ、當時土御門院トハ稱シ奉リケルニヤ、附シテ後考ニ供ス、

〔續史愚抄東山〕寶永六年十二月廿八日、故院御追號爲二東山院一、自レ院被二仰定一者、

〔章弘宿禰記〕寶永七年正月七日癸酉、今日辰半刻遺詔奏云々、故院御追號、東山院之由御治定云々、

〔中御門院御昇壇記〕寶永七年正月十日、新院御院號、奉レ稱二東山院一、

〇按ズルニ、此號ノ事、伊藤長胤ノ盍簪錄ニ、奉レ葬二于東山泉涌寺一、奉レ號曰二東山院一ト見エ、雍州府志ニ、泉涌寺號二東山一トアレド、筆者不詳ノ諡陵記ト云フ書ニ、兼而此東山之不審、折々人に尋とい

國名爲一號

有之哉、被尋下本所之處、兩號被染宸筆有之由、則寫之自新大納言局被入叡覽、靈元（孝靈、孝元）、中正（履中、反正）、件兩號之間可爲何號哉、靈元可然思召候、猶被群議可有言上之由、則申關白右府等之處、少時衆議之上、兩號之間可爲端方、叡慮之通奉り無子細候歟、殊近來明正院御例、（元明、元正取合、故院御定也、）旁可然歟之由議奏者奉之、參御前奏之、

〔續日本紀 二十五淳仁〕天平寶字八年十月壬申、高野天皇（○孝謙）遣兵部卿和氣王、左兵衞督山村王（○中略）等、率兵數百圍中宮院、山村王宣詔曰、（○中略）帝位乎方退賜天、親王乃位賜天、淡路國乃公止退賜止勅、（○下略）

〔皇年代略記 淳仁〕天平神護元年九月薨、稱淡路廢帝、

〔玉海〕安元三年七月二十九日、巳刻右中辨親宗、爲院（○後白河）御使來云々、此次親宗語事等、讃岐院（○崇德）院號、幷宇治左府贈官贈位等事、來月三日可被行此事、後聞、今日被行院號等事、宜止讃岐院號爲崇德院、

〔續世繼 二 春の調〕讃岐におはしましゝかば、（○崇德）讃岐のみかどゝこそ聞えさせたまふらめ、

〔源平盛衰記 八〕讃岐院事

新院（○崇德）讃州配流ノ後ハ、讃岐院ト申ケル、

〔承久軍物語 六〕十三日、（○承久三年七月）法皇（○後鳥羽）隱岐國へ還幸あるべき由きこしめせば、（○中略）八月五日と申には、隱岐國海部郡苅田鄕と申所につかせたまへば、領主あやしき御所を造りまうけて移し奉る、

〔皇代記〕顯德天皇（○後鳥羽）又曰隱岐院、

〔百練抄 十四 四條〕延應元年二月廿二日壬戌、隱岐法皇崩御、　五月廿九日戊戌、侍從中納言（爲家）參著、召大外記師兼仰云、以隱岐院（○後鳥羽）可奉號顯德院者、

〔增鏡 二 新島守〕中院（○土御門）は、始よりしろしめさぬ事なれば、（○承久ノ亂ヲ謂フ）あづまにもとがめ申さねど、父

併用二帝諡爲號

〔皇年代略記光嚴〕貞治三年七月七日、崩御、○中略以此間御庵號被擬追號、奉號光嚴院、是依遺勅也、

〔皇年代略記光明〕康曆二年六月廿四日、崩於勝尾御草庵、奉號光明院、日來奉號光明院、依遺勅不改其號、

〔敦有卿記〕應永五年正月十三日、午刻法皇崩于伏見仙洞、御年六十五、追號崇光院、御遺誡云々、

〔椿葉記〕應永四年の冬より御惱にて、同五年正月十三日崩御なりぬ、遺勅にて崇光院と申、

〔皇年代略記後圓融〕明德四年四月廿六日辛丑崩、○中略諡號後圓融院、自去年遺勅也云々

〔看聞日記〕永享五年十月廿七日、御追號事、爲遺勅被定置後小松院、

〔椿葉記跋〕抑仙洞、○後小松此一兩年御不豫にまし〳〵つるが、同とし神な月廿日、○永享五年つひに崩御なりぬ、遺勅にて後小松院と申、

〔皇胤紹運錄後水尾〕延寶八年八月十九日崩、依遺詔奉號後水尾院、

〔後成恩寺關白諒闇抄〕正長元年七月廿一日、追號定、　廿二日、爲清朝臣勘進於前關白、○藤原滿敎直廬、被定之、萬里小路大納言、勸修寺中納言、經成右大辨宰相親光朝臣等、相議奉號稱光院云々、順德院御號時、有淳陽號、取淳和陽成之一字、置上下、仍今度就此儀、一兩勘進之內加稱光、稱德光仁一字、置上下、直依院仰進勘文云々、儒中猶存先蹤、勘申雖勿論、淳陽既不被採用、定有子細歟、今度難資准的歟、議奏之次第如何、理可然乎、但稱光無殊難歟云々、

〔季連宿禰記〕元祿九年十一月廿五日戊寅、今日故本院帝御姑、仙洞御姉、御院號明正院云々、風聞云、是勅號云々、不知子細、遺詔奏障儀也、○中略明正院之事、風聞云、勅號云々、後日伊豫局被示云、此御院號非勅號、於仙洞○霊元被議定云々、明正ノ二字、元明。元正。天皇字云々、

〔光榮公記〕享保十七年八月廿九日、舊院御追號、被稱靈元院、○中略密傳聞、此御院號、舊院思食寄、被書付置趣、宮達言上御定云々、以元明元正兩字、稱明正院間、以孝靈。孝元。兩字、被思召寄歟、由有人々說、

〔宗建卿記〕享保十七年八月六日、法皇崩御、　九日、議奏輩召御前仰云、故院御追號、御在世之時思召

〔少外記康雄記〕弘治三年九月五日、當今崩御也、〇中略號後奈良院、

〔公卿補任(後奈良)〕弘治三年、(九月五日、帝崩、六十二歲、號後奈良院、)

〔皇年代略記(後水尾)〕延寶八年後八月八日、奉葬泉涌寺、奉號後水尾院、(依遺詔也)

〔基量卿記〕貞享二年二月廿九日、參內、今日御追號之儀治定、後西院云々、淳和天皇從御兄受禪、且又御弟(〇弟恐兄誤)之子へ讓位、御在位十ヶ年、新院九年也、年數略相同、讓位受禪之處等同前之間、今日如此御治定也、

〔季連宿禰記〕貞享二年三月五日乙丑、新院御追號事、後西院治定云々

〔中右記〕大治四年七月八日甲申、著直衣參新院(〇鳥羽)殿上、治部卿被參、以右衛門督實行被仰云、〇中略本院院號事、頗被沙汰、可號白河院之由、御存生之時、被仰置云々、仍其定也、(〇傍書云、件文書、本院御存生之時被書置也、)十三日己丑、奉號白河院之由、內々議定了、

〔皇年代略記(後嵯峨)〕文永九年二月十七日、崩於龜山殿別院藥草院、(號後嵯峨院、依遺勅也、)

〔皇年代略記(後深草)〕嘉元二年七月十六日崩、號後深草院、(依遺勅也)

〔皇年代略記(龜山)〕嘉元三年九月十五日崩、(於龜山殿)號龜山院、(依遺勅也)

〔皇年代略記(後宇多)〕元亨四年(〇正中元年)六月廿五日、崩於大覺寺、同廿八日、追號奉號後宇多院、(依遺勅也、)

〔皇年代略記(後伏見)〕延元元年四月六日、崩於持明院殿、(號後伏見院、依遺勅也、)

〔皇年代略記(花園)〕貞和四年十一月十一日、崩於萩原仙洞、(五十三)奉號花園院、(依遺詔也)

〔神皇正統記(後醍醐)〕後の號をば仰のまゝにて、後醍醐の天皇と申す、

〔太平記(二十一)〕因遺勅被成綸旨事

群臣相議シテ、先帝ニ尊號ヲ獻ル、御在位ノ間、風敎多クハ延喜(〇醍醐)ノ聖代ヲ追レシカバ、尤其寄セアリトテ、後醍醐天皇ト謚ヲ奉ル、

（加後字、異前帝一號）

號事、今日治定云々、被用後土御門畢、

〔後法興院關白記〕明應九年十月九日、右少辨尙顯來、令對面、舊主追號事、後陽成院、後土御門院、兩號何可宜哉、被申所存、就群議欲被一定矣、仰詞此分注折紙、　十日、昨日之申詞、注折紙、付奉行辨、許如常、余申詞、

舊主追號事、土御門號、遷座御事可有其憚候歟、後陽成院無亙難候哉、

〔皇年代略記（後陽成）〕元和三年九月廿日壬午、奉葬泉涌寺、奉號後陽成院、

〔忠利宿禰記〕承應三年十月十五日辛未、今夜酉刻、先帝（御追號後光明院云々）御葬送（泉涌寺也）

〔寶久卿記〕文化十年閏十一月十一日、午刻參舊院、○中略 御追號奉稱後櫻町院、於禁中被定之由、被示評定了、

〔後桃園院崩御記〕安永八年十一月九日、寅刻ツヒニ崩御云々、後桃園院ト追號シ奉ル、

〔公卿補任（後桃園）〕安永八年十一月九日、天皇崩、（奉號後桃園院）

〔入道左府記〕嘉元二年七月十七日、今夜後深草院（無追號之定、兼被思食御號之故也）御葬送也、

〔增鏡（十一今日の日蔭）〕二條富小路にてかくれさせたまひぬ、○中略 又の日、夜に入て深草殿へいでわたし奉る、○中略 後深草院とぞ聞ゆめる、

〔滿濟准后日記〕永享五年十月廿四日、就諒闇事、尋申一條前攝政（兼良）○中略 昨日返報今日到來了、○中略 小松院御號事、先例皆以有其寄之號所用來也、此御號當時無由緖之上、爲光孝天皇御一號之間、難被用之、旣爲遺詔之上者、摸後深草御號、被加後字、可被宥用乎、已上前攝政御申詞、

〔二水記〕大永六年四月廿七日、御追號事、可爲後柏原院之由有其沙汰云々、今度依仰各被撰申訖、○中略 御追號後柏原院治定了、桓武天皇號柏原帝也、

〔菅別記〕大永六年四月廿七日庚辰、御追號、後柏原院治定、陽明准后（尙通）○近衞 被撰定申云々、

〔伯耆卷〕暦應元年（〇延元四年）八月八日（〇八日、當作十六日）、帝（〇後醍醐）崩御し給ふ、第七皇子御位に即せ給ふ、後村上天皇と申奉るは是なり、

〔皇胤紹運錄〕義良親王　於南朝稱君、號後村上天皇云々、

〔嶋嶺雜事記〕應安元年三月十一日、住吉御所崩御、（御年四十一、奉號後村上院、）

〔南方紀傳〕應永三十一年四月十二日、小倉殿崩御、（南方法皇）諡後龜山院、

〔後愚昧記〕應安七年二月二日、有諡號定、太閤（良基公）近衞前關白（道嗣公）前內府（實繼公）預其儀、後光嚴院治定云々、

〔皇年代略記〕（後圓融）明德四年癸酉四月廿六日辛丑、未刻崩、〇中略同廿七日、奉葬泉涌寺、〇中略諡號後圓融院、自去年遺勅也云々、

〔親長卿記〕文明三年正月二日、舊院御追號事、後文德、後花園等、可計申之由、奉行藏人左少辨（季光）奉書到來、（其仰詞在別）注一紙申入了、（其案在別）二月五日、日野大納言（資綱）相語云、今度御追號事（後文德院）自一條大閤（藤原兼良）（御坐南都）被申云、於文德者、田邑御門諡號也、被加後字於諡號之條、無先例歟、無勿體之由被申、（作御追號、新大納言、後文德、後花園等、兩號勘進獻之、二條大閤（藤原持通）前內大臣、（勝光）右大將、（公敎）中院大納言、廣橋大納言異見、予之外悉後文德云々、仍被言說、公武時宜人々申狀、就御不審重可被尋聞云々、）仍重可申所存云々、〇中略十九日、後聞、今日有宣下事、止後文德院號、宜爲後花園院云云、（仰詞如此）上卿日野大納言（資綱）、奉行藏人左少辨季光、（素服）上卿仰外記云々、

〔皇年代略記〕（後花園）文明二年十二月廿七日、俄御惱頓崩室町第、〇中略始奉號後文德院、後改爲後花園院、（改顯德院、奉爲後鳥羽院之例、）

〔晉別記〕明應九年十月七日戊子、參關白殿、（〇藤原冬良）今度之御次第共、御沙汰之時分也、〇中略予申云、於追號者非儒中之撰、諸卿內々定申也、又被仰云、傳奏頻可計申之由申請之間、二號被注進畢云々、此上不能是非、後陽成院、後土御門、〇中略廿一日壬寅、今夜於番所、源相公羽林參會、被語云、御追

〔皇年代略記後鳥羽〕仁治三年七月八日、以顯德院可奉號後鳥羽院之由、重被成宣旨、其辭云、顯德乃尊號諡乎者秘之天申佐須、世俗爾者常仁御在所乎以氏後鳥羽院止申佐牟者可宜云々、

〔增鏡三藤衣〕初めはけんとく院と定め申されたりけれど、おはしましゝ世の御あらましなりけるとて、仁治の頃ぞ、後鳥羽とは、更に聞え直されけるとなん、

〇按ズルニ、文ニおはしましゝ世のあらましト云フ、あらましトハ豫定ト云ハンガ如シ、蓋シ遺詔ヲ奉ズルナラン、記シテ疑ヲ存ス、

〔平戸記〕仁治三年六月廿六日、今日殿下〇藤原良實御物語云、顯德院諡號可被改、可奉號後鳥羽云々、此事前內府申行歟、案此事我朝無例歟、至漢朝者一兩度相存之由、大府卿申之、又御改名之儀、太不得其心、何故云々、不叶冥慮者又如何、

〔一代要記十後堀河〕文曆元年八月六日崩、同十日、諡號定後堀河、

〔明月記〕天福二年八月十一日丁丑、世間不審、問金吾、返事云、〇中略御名後堀川院云々、甚悅思此御名年來代々無申人、而無此事、今如此、聖代之御名可然事歟、奉爲公家、尤可爲吉例歟、

〔增鏡八飛鳥川〕十七日の朝より御氣色かはる、〇中略つひに其日の酉の時に、御年五十三にてかくれさせ給ぬ、後嵯峨院とぞ申める、ことしは文永九年なり、

〔皇年代略記後宇多〕元亨四年〇正中元年六月廿八日、葬蓮華峯寺傍山、同日先追號、奉號後宇多院、依遺勅也

〔皇年代略記後伏見〕延元元年四月六日、崩於持明院殿、四十九奉號後伏見院、依遺勅也

〔皇年代略記後二條〕德治三年八月廿五日、崩二條高倉皇居、同廿七日、追號後二條院、於關白直廬議定

〔增鏡十二浦千鳥〕廿八日、〇德治三年八月先帝も御わざのさたあり、院號ありて後二條院とぞ聞ゆる、

〔神皇正統記後醍醐〕後の號をば、仰のまゝにて後醍醐の天皇と申す、

〔觀心寺記〕正平廿三年四月廿日、奉葬河內國錦部郡檜尾山陵、觀心寺後山廿八日、奉追號後村上天皇、

〔皇年代略記醍醐〕延長八年十月十日、葬後山科陵、

〔大鏡一醍醐〕次の帝、醍醐天皇と申き、〇中略みさゝき山しなにあり、後の山しなといふ、

〔日本紀略三村上〕天暦元年九月二十九日、後山階太上天皇〇醍醐國忌也、

〇按ズルニ、後山階トハ、天智天皇ノ、山科陵ニ對シテ稱スル所ナルベシ、

〔一代要記三醍醐〕醍醐天皇號小野、

〇按ズルニ、日本紀略ニ、延長八年十月十日、奉葬大行皇帝於山城國宇治郡山科陵、醍醐寺北、笠取山西、小野寺下トアリ、是亦陵地ニ依テ稱スル所ナルベシ、

加後字襲前號

〔菅別記〕明應九年十月十七日、凡儒中故實者、天皇之追號、後字用音讀、大臣稱號之時、後字用訓讀、是通法之故實也、後深草院一號者、後字用訓讀云々、其樣御不孝之讀、不聞好之儀也、後深草院

〇按ズルニ、菅別記ニ、後字用音讀トアレド、古書往々後字ノ下ニノヽ字ヲ添ヘタルモノアリ、特ニ後深草ノミニアラザルナリ、

〔類聚雜例〕長元九年五月一日戊寅、關白相府〇藤原頼通等、於殿上被定御正日雜事、〇中略又有可奉稱號之儀、相府命云、尋一條院御時例無宣旨、只奉稱一條院云々、仍准彼例、奉稱後一條院、如何、彼此被申云、甚佳事也、

〇按ズルニ、此次後朱雀後冷泉ノ二帝、奉號ノ事所見ナシ、拾芥抄ニ、朱雀院累代後院トアレドモ後朱雀同院ニ移御ノコト、是亦徵證ナシ、後冷泉ハ、是モ拾芥抄ニ、冷泉院累代後院トアリテ、扶桑略記ニ、永承天喜ノ間、同院ニ還幸ノ事アリ、是レ後冷泉ト號スル所以ナルベシ錄シテ參考ニ供ス、

〔榮花物語三十八松の下枝〕此院をば一院とぞ人々申しける、後三條院とも申すめり、

〔山槐記〕建久三年三月十四日丙戌、昨日於舊院、院司公卿被定院號、後白河院云々、

〔皇年代略記 文德〕天安二年八月廿七日乙卯、崩於冷泉院、　九月六日、葬田邑山陵、號田邑帝、

〔一代要記 二文德〕文德天皇、號田邑、

〔三代實錄 二淸和〕貞觀元年三月十九日乙亥、大僧都傳燈大法師位眞雅抗表曰、〇中略田邑先皇〇文德無價之寶彌照、

〔三代實錄 三十陽成〕貞觀十八年十二月二十九日壬申、遣參議從三位行右衞門督大江朝臣音人、從四位下行右馬頭在原朝臣業平、向田邑山陵、〇文德告以天皇受讓、告文曰、〇中略掛畏岐田邑御門(タムラノミカド)乃御陵爾、衿賜比厚慈乎受戴天〇下略

〔古今和歌集 十七雜〕田村のみかど〇文德の御時に〇下略

〔皇年代略記 淸和〕元慶四年十二月四日崩、號水尾帝、〇同七日、火葬粟田山白河陵、置御骨水尾山、仍號水尾帝、

〔大鏡 一淸和〕次の帝淸和天皇と申ける、〇中略みづのをのみかどゝ申す、

〔大和物語 下〕水尾のみかど〇淸和の御時、左大辨のむすめ、べんの御息所とていますかりける、

〔皇年代略記 光孝〕仁和三年八月廿六日崩、　九月二日葬小松山陵、號小松帝、

〔帝王編年記 十四光孝〕仁和三年九月二日、奉葬于小松山陵、〇葛野郡仁和寺號光孝天皇、又小松帝、

〔扶桑略記 二十二光孝〕小松天皇、五十九代諱時康

〔大鏡 一光孝〕次の帝光孝天皇と申き、〇中略小松のみかどゝ申す、

〔仁和寺御傳 序〕夫考當寺之濫觴、光孝天皇、相當城州葛野郡小松鄕大内山之麓、攘荊棘、穿衆木、草創一院、仁和寺是也、以里號稱小松帝、

〔滿濟准后日記〕永享五年十月廿四日、就諒闇事、尋申一條前攝政、〇藤原兼良昨日返報今日到來了、〇中略小松院御號事、先例皆以有其寄之號所用來也、此御號當時無由緖之上、爲光孝天皇御一號之間、〇下略

臣仲世等言、（○中略）後田原天皇（○光仁）寶龜十一年、數奏此事、

○按ズルニ、後田原トハ、延喜諸陵式ニ、皇考施基親王陵（寶龜元年、追尊シテ御春日宮天皇ト云フ、）ヲ田原西陵ト云ヒ、此天皇陵ヲ田原東陵トアリテ、續日本紀光仁天皇紀ノ首ニハ、施基親王ヲ稱シテ、田原天皇ト云フコトモ見エタリ、是レ此天皇ヲ稱シテ、後田原ト云フ所以ナルベシ、

〔續日本後紀（一仁明）〕天長十年三月二日壬辰、須遣中納言從三位行民部卿藤原朝臣愛發（○中略）等於柏原長岡二山陵、豫告可即位之狀曰、（○中略）掛畏（伎）柏原御門（乃○桓武）天朝、（○下略）

〔扶桑略記（抜萃桓武）〕桓武天皇（世謂柏原天皇）

〔簾中抄（上）〕かしは原のみかどゝ申す、（○桓武）これみさゝぎの名なり、

〔皇年代略記（桓武）〕延曆廿五年三月十七日崩、　四月七日、葬山城國柏原陵、號柏原帝、

〔類聚國史（百八十佛道）〕天長元年九月壬申、正五位下行河內守和氣朝臣眞綱、從五位下彈正少弼和氣朝臣仲世等言、（○中略）柏原先帝卽以前詔、普告天下、

〔扶桑略記（二十二宇多）〕寬平二年庚戌二月十三日己巳、（○中略）太政大臣會語曰、白壁天皇（○光仁）時、將立皇太子、（○中略）爰藤原百川破其書、立柏原親王、爲皇太子、大臣歎曰、我年耄、親耻如此、柏原天皇（○桓武）緣百川之功親臨、

〔皇年代略記（仁明）〕嘉祥三年三月廿一日乙亥、崩于清涼殿、　同廿四日、葬深草山陵、號深草帝、

〔愚管抄（一仁明）〕此みかどは、深草のみかどゝ常に人申すなり、みさゝぎの名なり、（○又見簾中抄）

〔神皇正統記（仁明）〕第五十四代第三十世仁明天皇、深草の帝とも申す、

〔三代實錄（二清和）〕貞觀元年三月十九日乙亥、大僧都傳燈大法師位眞雅抗表曰、（○中略）嘉祥寺者、先帝（○文德）奉爲深草天皇（○仁明）所建立也、

〔古今和歌集（十六哀傷）〕深草のみかど（○仁明）の御國忌の日（○下略）

陵地爲號

女院、九條殿

〔皇代記〕廢帝〇仲恭 諱懷成、〇中略 號九條廢帝、

〔帝王編年記〕二十四 四條 文暦元年五月二十一日、承久先帝〇仲恭 崩御、號後廢帝、

〔帝王編年記〕二十四 仲恭 後廢帝、〇中略 大嘗會不被行以前退下、世稱半帝。。

〇按ズルニ、後廢帝トハ、是ヨリ先キ淡路廢帝淳仁アレバナルベシ、

〔後成恩寺關白諒闇記〕先皇追號事

追號事、〇中略 山陵號、宇多、醍醐、村上等、

〇按ズルニ、舊說多ク宇多ヲ以テ、陵地號トスレドモ非ナリ、大日本史ノ宇多天皇紀ニ、稱亭子院、稱宇多院、皆因其所居爲號トアルニ從フベシ、

〔日本紀略〕一 醍醐 延長八年十月十日、奉葬大行皇帝〇醍醐 於山城國宇治郡山科陵、醍醐寺北、笠取山西、小野寺下、

〔帝王編年記〕十五 醍醐 延長八年九月廿九日、崩御、四十六、十月十日庚子、奉葬山科山陵、號醍醐天皇、

〔皇年代略記〕村上 康保四年五月廿五日崩、　六月四日葬村上山陵、山城葛野郡

〔帝王編年記〕十六 村上 康保四年六月四日、葬村上山陵、號村上天皇、

陵地爲一號

〔續日本紀〕二十一 淳仁 天平寶字二年八月庚子朔、高野天皇〇孝謙 禪位於皇太子、

〇按ズルニ、村尾元融ノ續日本紀考證ニ、元融案、寶龜元年八月紀云、葬高野天皇於大和國添下郡高野山陵、又高野陵見諸陵式、蓋山陵所在、因以爲稱歟、不詳トアレド、萬葉集一ニ、長皇子與志貴皇子於佐紀宮俱宴歌、秋去者今毛見如妻戀爾鹿將鳴山曾高野原之宇倍トアレバ、陵號ナルコト疑フ可ラズ、

〔類聚國史〕百八十 佛道 天長元年九月壬申、正五位下行河內守和氣朝臣眞綱、從五位下彈正少弼和氣朝

〔一代要記二平城〕平城天皇俗號奈良帝

〔類聚國史二十八帝王〕天長十年二月辛巳、皇帝〇淳和遷御西院、爲讓位也、

〔皇年代略記淳和〕天長十年二月廿八日乙酉、禪位、四十八先是天皇遷御西院、承和七年五月八日崩、五十五號西院帝、

〔神皇正統記淳和〕第五十三代淳和天皇、西院の帝とも申す、

〔伊勢物語上〕むかし西院のみかど〇淳和と申すみかどおはしましけり

〔一代要記二淳和〕淳和天皇號西院帝、

〔拾芥抄中末宮城〕淳和院天長卜上皇(淳和)離宮、今西院、

〔古今童蒙抄〕亭子院は、宇多のみかどの御所なり、

〔拾芥抄中末諸名所〕亭子院、寛平法皇御所、

〔大鏡一宇多〕次の帝亭子のみかど〇宇多と申き、

〔皇年代略記宇多〕承平元年七月十九日崩、六十五、於仁和寺、號亭子院、

〔日本紀略一醍醐〕醍醐天皇諱敦仁、亭子天皇第一之子也、

〔大和物語上〕亭子院のみかど、今はおりゐ給ひなんとするころ、〇下略

〔後撰和歌集十九離別〕亭子院のみかど〇宇多おりゐ賜ふける秋〇下略

〔大日本史三十宇多〕按帝脫屣後、居朱雀院、及中六條院、故初稱六條院太上皇、又稱朱雀院太上皇、旣而請辭尊號、單稱朱雀院、醍醐帝從之、後又稱亭子院、稱宇多院、皆因其所居爲號、崩後停諡、故又因襲生時之號、稱某院耳、

〔百錬抄十二仲恭〕承久三年七月八日、主上密々渡御九條殿、

〔百錬抄十四四條〕文暦元年五月二十日、廢帝〇仲恭崩御、〇中略御母儀東一條院也、承久亂逆之後、御同所于

御在所爲一號

久夏六月廿六日、(七七日御佛事日)爲載御願文被定御號云々、遺詔已後、此等子細可被申□仙洞(○崇光)哉、此上宜在時議矣、

〔太平記三十九〕光嚴法皇行脚附崩御事

光嚴院禪定法皇ハ、(○中略)伏見ノ里ノ奥、光嚴院ト聞エシ幽閑ノ地ニゾ住セ給ヒケル、

〔皇年代略記(光嚴)〕貞治三年七月七日、崩御、(○中略)以此間御庵號被擬追號、本號光嚴院、是依遺勅也、

〔太平記三十三〕持明院三上皇自吉野還幸事

新院(○光明)ハ、伏見ノ大光明寺ニゾ御坐有ケル、

〔太平記三十九〕法皇御葬禮事

此時ノ新院、光明院殿、(○下略)

〔皇年代略記(光明)〕康曆二年六月二十四日、崩於勝尾御草庵、本號光明院、(日來本號光明院、依遺勅不改其號、)

〔皇年代略記(正親町)〕文祿二年正月五日、崩於仙洞、七十五、追號正親町院、

〔時慶卿記〕文祿二年二月六日、今夜遺詔、陣ノ儀被行云々、號正親町院、二條殿ヨリ定被申、院ノ北ノ御門、正親町ノ通ナル故ト、

〔皇胤紹運錄〕櫻町院　延享四年五月二日、行幸于櫻町殿、同日讓位、

〔閑窓自語〕櫻町仙洞、此地ハ天正十四年、正親町院御讓位の後、仙洞に用ゐられし地にて、代々の洞裏たり、櫻町のみかど御脫屣わらんとて、此地に仙居を造られ、延享四年二月二十八日、此後櫻町殿と稱すべき由仰らる、

〔賴言卿記〕寬延三年四月廿九日辛未、舊院御追號、被稱櫻町院之由被申傳了、

〔扶桑略記(拔萃平城)〕平城天皇(世謂奈良天皇、)

〔帝王編年記(十三淳和)〕太上皇平城(稱奈良天皇、是平城之謂也、)

門北、東洞院東、前大納言邦綱朝臣家、先ニ時々爲皇居之所也トアリ、又拾芥抄諸名所部ニ、高倉殿(土御門南、高倉西、)トアリ、其京程圖ヲ按ズルニ、(此圖ニ據レバ、山槐記ニ土御門北トアル北ハ、南ノ誤ナルガ如シ、)即チ前文土御門亭ト全ク同所ニシテ、此號ノ御在所號タル事ヲ證スルニ足ル、

〔後中記〕仁治三年正月十九日壬寅、參閑院、於攝政(○藤原良實)直廬、可被定舊主(○四條)追號、(○中略)殿下仰、舊主追號事可定申者、拾遺相公(四條)民部卿、(後六條)二條中納言、(四條五條)吉田中納言、(後鳥羽)予、(四條)前内府、(後鳥羽)殿下、(四條五條)重議定之時、可奉號四條院之由、人々大略一同如此、追號先例多是用御居所、今度三條西洞院右幕下第、可爲御葬家所云々、謂三條者是四條也、號東三條是二條也、彼可准之由、拾遺相公所計申也、

〔入道左府記〕嘉元三年九月(○日欠)御號兼被思食定、(○龜山院)仍不及追號定云々、

〔增鏡十一今日の日蔭〕萬里小路殿の法皇、又御惱みとて龜山殿へ遷らせたまふ、(○中略)九月十五日(○嘉元三年)の曙に、終にかくれさせたまひぬ、(○中略)御骨も此院(○龜山)に法華堂を立させたまへば、龜山院とぞ申すべかめる、

〔增鏡十二浦千鳥〕持明院殿、(○中略)伏見殿がちにのみぞおはしまし丶程に、そこはかと御惱月日經て、文保元年九月三日かくれさせ給にき、伏見院と申き、

〔迎陽記〕貞治三年七月十日、自殿中被下御書、有召、不俟駕參仕、條々事有沙汰、舊院(○光嚴)院號事有勅問、御申詞有御談合、余淸書副奉書遣嗣房許、

院號事、近例於舊院有其沙汰歟、或御在所、或被尋御素意被定其號、今度儀不存知子細間、短慮無左右難定申、圓融土御門間可爲何樣哉、但土御門者登極地、雖似有其寄、當時皇居、尤可有儀、且以訓不可稱之由有其説歟、旁不宜哉、圓融雖無殊由緒、聖代之徽號被准用之條存先規、抑光嚴院爲幽閑地、然者若可叶御素意哉、寺號傍例、醍醐寺圓融寺被用畢、不可有巨難哉、縡爲重事、猶可被決群議歟、延

○按ズルニ、此號中右記ニハ、遺詔ニ依テ稱スル所ト云フ、猶追號依遺詔ノ條參看スベシ、

〔皇年代略記堀河〕嘉承二年七月十九日癸卯、崩於堀河院、同廿四日戊申、追號堀河院、

〔中右記〕嘉承二年七月廿四日戊寅、於攝政殿(○藤原忠實)堀河殿御直廬、聊有僉議、云々、今日付代々例、可奉號堀川院之由、以右大辨時範朝臣、被仰下大外記師遠了、

〔百練抄七後白河〕保元元年七月二日、禪定仙院(○鳥羽)崩于鳥羽安樂壽院、

〔帝王編年記二十二後白河〕保元元年七月二日辛丑、崩於鳥羽殿、(○中略)號鳥羽院、

〔百練抄七近衞〕久壽二年七月廿三日、天皇崩于近衞皇居、

〔兵範記〕久壽二年七月廿七日壬申、有院號定云々、遂以近衞院可奉號之由議定了、

〔皇年代略記二條〕永萬元年七月廿八日、崩於二條皇居、(○中略)號二條院、

〔續世繼三花園の匂ひ〕廿三にておはしましゝ御年、御病重くて若宮に讓り申させ給て、いくばくもおはしまさゞりき、(○中略)二條院とぞ申すなる、古き后の御名なれど、(○後冷泉后二條院章子)男女かはらせたまへれば、なかはせたまふまじきなるべし、されど同じ御名は、古くも侍らぬにや、

〔一代要記六條十六〕安元二年七月十七日崩、同日葬栖霞寺堂、同日號六條院、

〔一代要記高倉十六〕上皇六條院(安元二年七月十七日、崩於六條乳母三位亭、(中略)同日號六條院、宣下、)

○按ズルニ、本文ニ據レバ、崩所六條、故ニ六條院ト追號セシモノヽ如シ、然レドモ百練抄ニハ、日來御院(○後白河)御所、而依痢病出御邦綱卿東山亭、於件所有此事トアリ、

〔百練抄九安德〕養和元年正月十四日、太上天皇(○高倉)崩于六波羅頼盛卿亭、(御年廿一、號高倉院、)

〔高倉院昇遐記〕治承五の年、(○中略)殿上にて先後の御名の定めあるにつけても、高倉いかなる大路にて、憂名の御形見に殘り、(○下略)

○按ズルニ、山槐記ニ天皇遜位ノ後、治承四年三月四日、土御門亭ニ遷幸ノ事アリテ、注ニ土御

〔帝王編年記 十四 宇多〕承平元年辛卯七月十九日崩、中略號宇多天皇、又亭子院、

〔大日本史 三十 宇多一〕稱亭子院、稱宇多院、皆因其所居爲號、崩後停諡、故又因襲生時之號、稱某院耳、

〔日本紀略 二 朱雀〕天慶九年七月十日、太上皇朱雀出禁中、遷朱雀院、

○按ズルニ、此號ハ拾芥抄ノ諸院部ニ、朱雀院累代後院トアリ、以テ徴ト爲スベシ、

〔榮花物語 一 月の宴〕安和二年八月十三日なり、みかど冷泉おりさせたまひぬ、中略おりゐのみかどは、冷泉院にぞおはします、されば冷泉院と聞えさす、

〔日本紀略 十二 三條〕寛弘八年十月廿四日癸亥、戌刻冷泉院太上天皇崩于南院、即冷泉院春秋六十二、

〔日本紀略 八 花山〕寛和元年九月十九日庚寅、後太上法皇圓融自堀河院遷御圓融院、

〔日本紀略 九 一條〕正暦二年二月十二日癸丑、依圓融寺法皇不豫、大赦天下、中略今日法皇崩、十九日庚申、葬太上法皇於圓融寺北原、

○按ズルニ、文ニ圓融寺法皇トアリ、其御在所號ナルコト知ルベシ、

〔拾遺抄注 雑上〕花山ハ山階ニアリ、元慶寺ト云御寺建ラレタリ、花山院ハ彼寺ニ御幸アリテ御出家アリ、仍稱花山法皇、後ニ京ニ御坐ノ御所ヲ花山院ト號スルナリ、

〔日本紀略 十一 一條〕寛弘八年六月十三日乙卯、有御讓位事、廿二日甲子、太上皇一條崩一條院中殿、

〔左經記〕長元九年五月一日、有可奉稱號之議、後一條ノ崩御ニ由ルナリ相府命云、尋一條院御時例無宜旨、只奉稱一條院云々、

〔日本紀略 後一條 十三〕寛仁元年五月九日丙午、太上天皇三條崩于三條殿、

〔榮花物語 十二 玉の村菊〕長和五年正月廿九日、御讓位、中略おりゐのみかどをも三條院と聞えさす、

〔續世繼 二 釣せぬ浦々〕鳥羽殿は、此法皇の造らせたまへれば、さやうにや申さんと思へりしかども、白河にもかた〳〵御所ども侍りしかば、白河院とぞ定めまゐらせ侍りける、

皇トアリ、以テ徵ト爲スベシ、

〔皇年代略記（嵯峨）〕承和元年八月丁亥、遷嵯峨院、　九年七月十五日崩、（五十八）葬嵯峨院北山地、號嵯峨帝、

〔類聚三代格（一）〕太政官符

應充正一位平野神社地一町事（○中略）

右得彼社預從五位下卜部宿禰平麻呂解狀偁、（○中略）嵯峨院去承和五年十月十五日、割取八段賜時統宿禰諸兄、（○中略）

貞觀十四年十二月十五日

〔類聚國史（二十八帝王）〕天長十年二月乙酉、皇帝（○淳和）於淳和院讓位于皇太子、

〔續日本後紀（十三仁明）〕承和十年二月壬戌、散位從四位下勳七等大野朝臣眞鷹卒、（○中略）淳和天皇踐祚、天長之初、任右近衞權少將、

〔拾芥抄（中宮城）〕淳和院（天長上皇（淳和）離宮、卜今西院、）

〔三代實錄（三十八陽成）〕元慶四年十二月四日癸未、太上天皇（○淸和）崩、自遜皇位、御淸和院、

〔三代實錄（三十陽成）〕貞觀十八年十二月八日辛亥、上淸和天皇尊號、爲太上天皇、

〔皇年代略記（淸和）〕元慶四年十二月四日崩、後日諡號淸和天皇、

〔三代實錄（四十四陽成）〕元慶八年二月四日、天皇（○陽成）出自綾綺殿、遷幸二條院、

〔河海抄（二）〕陽成院を二條院と號云々、脫屣之後御此院、（○又見今昔物語二十七）

〔皇年代略記（陽成）〕天曆三年九月廿九日、崩於冷泉院、號陽成院、

〔日本紀略（二醍醐）〕延長二年正月廿七日丙寅、御賀（○天皇四十賀）之後、宇多仙院、被奉御馬四十匹、

〔日本紀略（二朱雀）〕承平元年七月十九日甲辰、戌時宇多院太上法皇、崩於仁和寺御室、

弘文天皇

廢帝

淳仁天皇

九條廢帝

仲恭天皇

右之通三帝御諡被ㇾ爲ㇾ奉候ニ付、此旨相達候事、

一帝二諡

〔神皇正統記 齊明〕齊明天皇は皇極の重祚なり、重祚といふ事は、本朝には是に始まれり、異朝には、○中略唐の世となりて則天皇后世を亂られし時、我所生の子なりしかども、中宗をすてゝ盧陵王とす、同じ御子豫王を立られしも、又すてゝ自ら位に即きたまふ、後に中宗位にかへりて唐の祚たえず、豫王も又重祚あり、これを睿宗といふ、是ぞまさしき重祚なれども、二代にはたてず、中宗睿宗とぞつらねたる、我朝に皇極の重祚を齊明と號し、孝謙の重祚を稱德と號す、異朝にかはれり、是天つ日嗣を重くする故か、先賢の義定めて由あるにや、

〔大日本史贊藪 一〕復位肇ㇾ於皇極、後世上ㇾ諡以ㇾ分ㇾ前後、蓋出ㇾ於一時之議、而非ㇾ萬世之通制ㇾ也、

御在所爲號

〔後成恩寺關白諒闇記〕先皇追號事

於ㇾ諡號并新號ㇾ者及ㇾ議奏、於ㇾ追號ㇾ者内々有ㇾ其沙汰、

追號事、御在所嵯峨、淳和、清和、陽成、華山、一條、○中略菴室號、光嚴、光明、崇光等、

〔帝王編年記 十三淳和〕太上皇平城 稱ニ奈良天皇一、是平城之謂也、

〔愚管抄 一平城〕おりゐのみかどにて、○中略ならにおはします、依て奈良のみかどゝ申なり、

○按ズルニ、平城ノ號ハ、日本後紀ニ、大同四年四月、天皇遂傳ㇾ位、避ㇾ病於數處、五遷之後、宮ㇾ于平城ㇾト見エ、類聚國史ニ、天長元年七月甲寅、平城天皇崩、丙辰、奉ㇾ誄曰、畏哉讓ㇾ國、而平城宮 留 御坐 志 天

孝明　孝經曰、明王事父孝、故事天明、

〔隆祐〕〇上中略　大行天皇御諡號勘文、現任一同被爲見下、勅問之間、明後七日中、御所意否、可有言上之旨、加勢治部卿被申渡候、〇中略　二月十六日、今日大行天皇御諡號、辰刻使定陣儀云々、〇中略　傳聞、上卿内府忠房公、參議源宰相中將通善著陣、奉行辨豐房朝臣被下御諡號、使定、執筆參議通善奉仕云々、使廳司大納言輔政著陣云々、御諡號孝明天皇、宣命分作大内記、先奉草大臣著弓場奏之云々、攝政齊敬〇二條於鬼間内覽云々、被仰清書同斷、

〔官務文書〕詔書寫

詔、諡者顯德表行、聖經之遺訓、而王者之大猷也、恭惟孝明天皇、聰明叡智、而功烈光于四海、寛裕溫柔、而仁風行於千載、睿開川流、神襟蘭郁、父老堯舜先德、韜光憲章文武、君道方被、於是蔑物不得其所、庶國弗蒙其恩、嗚呼哀哉、晨輼解鳳、早館神躬于塡末、曉蓋俄金、旣散靈魄於天潯、追惟盛德、爭有大號、爰奉尊諡、恭稱孝明天皇、仰願傳大名於後昆、與磐石長不朽、耀餘威於萬邦、與日月共無彊、普告天下、俾知朕意、主者施行、

慶應三年二月十六日

〔憲法類編〕十四祭典　大友帝外二帝奉諡御祭典ノ事

庚午〇明治三年七月廿二日御布告

大友帝　廢帝　九條廢帝

三帝御諡號被奉候ニ付、明廿三日八字、於神祇官御祭典被爲行候事、

庚午七月廿四日御布告

大友帝

〔回天詩史下〕太上天皇○光格崩、公○水戸齊昭聞之、又建葬祭之議於幕府、又寄書謀於關白藤公○鷹司藤公深感公之忠誠、蓋入乙夜之覽云、藤公以爲、葬祭之禮難遽復古、至於諡號、則不可不奉也、乃議之於關東、又使公贊成之、幕府不敢違、遂奉諡曰光格天皇、

〔實久卿記〕弘化三年二月十一日丁酉、自去夜祗候、大行天皇○仁孝可被奉尊諡號、勘文、現任一同可有勅問、殿下○鷹司政通被命、左大臣以下攝家人々、自殿下被傳旨同上、○中略勘者儀同三司、勘解由小路前中納言、新宰相、式部大輔、式部權大輔等也、勘文續左、○中略

仁孝

諡法曰、慈惠愛親曰孝、禮記曰、仁人不過乎物、孝子不過乎物、是故仁人之事親也、如事天、事天如事親、是故孝子成其身、

聽長上

十二日戊戌、御諡號勅答、今日付相役、一封獻上了、

大行天皇可被奉授尊諡號、以勘文被尋下、謹奉候、　仁孝　孝明　右字儀引文等、別而珍重候哉、雖然以何被採用存心無之候、宜在聖斷候焉、

實久上

三月一日丙辰、巳刻許參內、申沙汰如日來、殿下於八景間、三條大納言以下相役各御招、今日被奉御諡號仁孝天皇、且御廟號可奉稱弘化被仰傳、三條大納言於御棺前可奉告、折紙一紙被授之、其後中殿於西庭可燒拂被命、即三條大納言被奉告了、於西庭燒拂、予、新宰相等扶持了、其灰鴨河令流了、昏時退出、

〔言成卿記〕慶應三年正月六日、大行天皇○孝明御諡號、現任一同江勅問之旨、明七日中可奉返答、右大將被示了、勘進寫三折略寫

御諡號事○中略

先使長官以下、於山門外下馬、但於六波總門外下馬、雖同雜色、止同門前敷、任先例使以下下馬、各下馬繫之、　此間傳奏奉行、仰列奉行、先令設漆櫃於唐門下、内舍人内竪等守護、直丁擔夫等在同邊、寺僧出逢于總門外、長老幷役者、自山門邊整列前行、入總門幷山門、於同門外止僮僕、但諸大夫侍隨身等、一兩輩宛相從、　於唐門外、各先假立于便所、次解劒、次下水、寺門役之、長老以下、入同門、著假座、此間寺門、豫後月輪山陵前敷薦、其前設鈍色縁半帖、有下敷薦、爲長次官及誄人座、在指圖、次内舍人内竪、於唐門下解劒、自漆櫃取出案、載幣物雜給幣物等、　相共舁之參進、置山陵前薦上、畢退在便所、

次使長官入唐門、參進著座、次官相從著座、次誄人同著座、

次使長次官誄人、相共兩段再拜、畢長官讀宣命、或燒宣命畢後、兩段再拜、訖誄人奉誄之間、長官授宣命於次官、次官起座、進跪受之復座、召内竪授之、内竪參進跪賜之、於瑞籬内燒之、内竪持宣命、以脂燭燒之、内舍人扶持、兼仰寺門用意脂燭、若雨降者、於假建内燒之、

次燒幣物、今度宣命許燒之、於幣物者、年久中絕之儀、令納寺門之由、傳奏奉行仰寺門僧、宣命寫添之、又長次官誄人共兩段再拜、　次長次官誄人等起座、内舍人内竪等相從、出唐門經本路、内々於寺中休息、

次諸陵使向其陵、　今度幣物用代、准寛治七年、荷前使幣物遲來例、先兩段再拜、先是設使座、如初、　申宣命之趣、又兩段再拜、了起座出唐門、○中略

各傳奏奉行、寺門傳奏等、撿知無異之後、使々退出、於寺中休息、

次使長官以下歸洛、僮僕雜色前行、至長官里亭、

傳奏奉行、於便所授宣命誄等寫、幣物賜寺門之事、請奏寫渡之、　幣代早可備進之事等、仰長老役者等、其品々令授之、寺門傳奏心得示含、食事之後歸洛、參關白殿、申萬端無異被遂行之由、又以書狀告議奏、是爲早速也、更明日奏聞賀無異、最雖無山陵使、諸御願有之仍如此、

使次官歸宅、沐浴了參内、申無異于義奏、略儀、但依荷前准據例、

使々翌日參内賀無異、○中略

圓座給、職事等閉御屏風、退在軒廊、御劒將尙在御屏風外、
次兩段再拜給　御拜訖御咳之後、以藏人告使長官、（其儀藏人隨便宜進退、其詞云、使罷之由仰之、）
次御拜訖職事等參進、開御屏風、藏人頭供御草鞋、關白殿令執御裾給、於御屏風外、撤御笏取御扇給、
次御服人參進、刷御袖了退、
天皇還御、近衞將取御劒前行、以下准出御之儀、（淸涼記、餉前使執幣者退出、事畢還宮云々、今度先還御、次開長樂門、次舁出案、此間以下使退出、）
此間傳奏奉行、率六位藏人催促諸事、先於高遣戶邊合列奉行、（修理職兼令廻于此邊、）可開長樂門之旨、內々
傳仰近衞官人、（隼人官人同在門外、）近衞官人即押開參入、直開長樂門、
次使長官起座前行、次官同起座、進而搢笏、內舍人內竪等入長樂門、進跪與次官相共舁案退、內舍人
執雜給幣退、內舍人內竪等納漆櫃、（件櫃自本在承明門南壇上、御前之儀訖、幣物舁出之後、與內藏寮相替、內舍人等守護、直丁擔夫等在此邊、案幷下敷薦、內々自內藏寮、以六位藏人、附傳奏奉行、納長櫃、密持向泉涌寺、）
次長官以下各於大臣宿所、或樂人部屋餉、（但使長官大臣宿所、使々次官以下各樂人部屋、）　此間御裝束撤却以下之事、與
奪五位職事、且用意次第發向旨、先申關白殿、以議奏言上置、傳奏奉行、仰列奉行令整行粧、
次發遣（於待賢門騎馬、在指圖、町小門六外、）
先太政官直丁持梠前行、（右左）內藏寮幣、納漆櫃、（擔夫二人、以仕丁充之、）衞之、雜給幣擔夫肩之、內舍人二人、內竪一人、次使長
官、次官、次誄人、（兼諸陵寮之官人、以之使色、）自中御門、（以陽明門擬之、）櫻町殿前（邊南江、）萬里小路敎業（邊東江、）大和大路（邊南
江、）伏見街道（邊）順路、東山（江）參向、（但於途中一兩度休息、至仙遊寺待案內、）
此間御幣發遣之後、傳奏奉行、自宜秋門方、（兼長櫃二合、納諸陵幣代、每陵白銀三枚宛、廿一、以檀紙包之、居白木臺雲脚、外ニ附塞、幷目六等納之、掛油單、以
白張仕丁令舁之、令副居于尋常車寄邊、副使[illegible]）經便路馳參泉山、先向方丈、（令長櫃便宜所舁合之、）寺門傳奏
面會問事具否、
山陵儀

今度諸陵幣被用代、仍使等不進御前、在門外、又內舍人執雜給幣從之、樹案之間相去二許丈、暫立於

其後、樹案畢後進置薦上、以上帶劍人者解而從事、訖退出立門外、

欲出御之間、暫閉長樂門、近衞官人陣閉之、了出左掖門、在同門外、又敷政、宣仁、和德、左青璅等門、先之陣了可閉、兼仰兩局、六位藏人點撿、

御拜出御儀、中殿御裝束如例、開御殿自孫廂至渡廊長橋乾妻戶外、敷筵道、加布單、御殿御裝束、任近例不改、諒闇御裝束、[illegible]東軒廊、宜陽殿、承明、長樂等門外布設、任指圖、

先出御朝餉御座、關白殿令參御前給、傳奏奉行早參、職事等候下戶邊、議奏候馬形障子邊、武傳近習候渡廊、御服奉仕御劍將等候同所、

此間詔書宣命等有御覽、草清書御覽直奏、若附內侍、有御覽之事、如度例、御笏議奏授職事、職事持候、[illegible]

次著御帛御服、不供御幘、本御冠者御依諒闇一期也、奉仕人參仕如例、兩役參懸盤所候、御操出御袖等如例、

次移御御手水間、關白殿令候御裾給、藏人頭候陪膳如例

次御手水訖還御朝餉御座、關白殿御裾、了石灰壇自御屏風妻、經孫廂等著中殿圓座給、兩役近習候南廊、御服奉仕在此列、奉行職事早參、職事御劍將等候中殿簀子、此間傳奏率六位藏人一兩輩、徘徊南殿宜陽殿等、催促諸事、使長次官著圓座、內舍人置雜給幣、退閉長樂門之後、馳參附議奏、內々言上、先中關白殿、

天皇出御、關白殿令候御裾給、藏人頭供帛御草鞋、近衞將取御劍、職事等陪從、持御笏、傳奏奉從、兩役近習等供奉如例、經孫廂南廊、長橋南殿乾妻戶、自孫庇至乾妻戶外、敷筵道、加布單、御後中間、御帳東、出東面妻戶、簀子敷筵道布單等、除階級、降東階給、自階下至軒廊、宜陽殿砌敷藁薦、其上鋪筵道布單、以爲幸路、經軒廊、五位職事二人、左右相分爲進、開御屏風候後、宜陽殿砌等、入御御拜御座、西廂南四ヶ間敷滿折薦、其上敷廣筵、南第三間、斜向山陵方、供御半帖、下敷加小筵、加紫稜褥、引廻大宋御屏風、巽方聊開置之、御座、可設輕幄也、然而當時例幣御拜座、於南殿廂敷折薦、上供御半帖、引廻大宋御屏風爲御座、准此例無輕幄沙汰、又件御座、用元旦拜山陵御座、近代、四方拜雖諒闇中、供吉御座、仍從之、　於御屏風外、職事供御笏、撤御扇令取御笏給、御座定、關白殿帖置御裾、退著同廂

次上卿以官人召大内記、大内記來膝突、仰詞、（如職事）

次内記來膝突奉草、（詔書不入日、宣命等納一筥、）上卿披見、退（内記）

次上卿以官人召職事、職事來膝突、被仰内覽奏聞、職事參朝餉奏之、（先之於鬼間令内覽給）若就臺盤所簾下附

掌侍奏之、御覽訖返給、職事歸來膝突仰清書事、退（職事）

次上卿以官人召内記、内記來膝突、被仰清書事、退（内記）

次内記持參清書、（兩文書黃紙、）上卿披見一如草文、（但上卿披見了、乍筥押出、内記取之在小庭、）

次上卿起座經御後、（宜陽殿設御座、依便宜用兩儀禮、）就弓場、（内記相從）職事出逢、被仰内覽奏聞之事、（内記所持之清書、乍筥授之、）

次職事奏聞（先内覽）一如草文、御書訖返給、職事歸出、仰御覽訖事、（上卿取筥奉仰、令持内記、乍立取文披見御畫日之有無、）

次上卿歸著仗座、（經本路、内記置筥退）

次上卿令官人召大外記、大外記來膝突、（爲少外記者候小庭、）問中務候否、外記申候由、上卿仰可召之由、外記退、

次中務輔來膝突、上卿賜詔書、被仰施行之事、（輔退）若有詔事者、職事來仰之、（上卿召辨仰之）

次上卿令官人召大外記、大外記來膝突、問使々參否、申皆參之由、退（外記）

次上卿召官人令撤膝突、

次上卿起座、率公卿并辨外記史等、經宜陽春興兩殿西廂、出自長樂門、著外辨座、（同門外面西掖、設公卿座、東上南面、）召使長官賜宣命、又令召使召辨、辨來膝突、問（掖設辨使等座、東西并前史幣、外記史等在便所、參議對座、上卿座前敷膝突、同東）

幣物具否、辨申具之由、訖退復座、

次内舍人内竪等舁案、（置幣物）立長樂門前、（敷疊薦、幣物本在承明門南壇上、内藏官人史生等守護、臨期開櫃取出之、又准建永元年賀茂一社奉幣、幣物遲々、使發遣例、不置幣物代、）雖給幣、内舍人等置同薦上、

次使長次官起座、入長樂門相共舁幣物、（上藏左、下藏右、）經左掖門前、到春興殿西廂北砌上、（南北爲妻）退立左掖門

内北掖、（北上西面、次官在後、但今度假著圓座、）

畏哉讓國而御坐志天皇乎恐美恐母誄白、臣某、畏哉日本根子天皇者久俱帝位爾御坐氐、常爾務治乃道乎求給布止古伊夜益須益爾深計禮、故乎温氐新乎知志女、廢多留乎毛興志、絶多留乎毛繼岐、孝乎本止志氐政乎爲志、儉乎專爾志氐物乎愛美給布加故爾、仁恩乃光天下爾被利至奴、是遠仰岐彼遠仰爾、代代爾絶奴留尊岐御名乎奉、天地乃共長、日月乃共遠久稱白佐止率奏麻爾麻爾、御諡乎奉給布、臣等毛共爾稱白佐久恐美恐母誄白、臣某、

卿誄

畏哉讓國而御坐志天皇乎恐美恐母誄白、臣某、畏哉日本根子天皇者、聰明仁愛爾御坐志氐、然毛謙讓乃心深久下遠憐美太萬布情厚志、萬乃政恐岐波〇謨岐百世乃則止誰加不奉仰、嗚呼哀哉、姑射雲暗志氐、龍駕何乃日加還給止率恐美恐母誄白、臣某、

侍臣誄

畏哉讓國而御坐志天皇乎恐美恐母誄白、臣某、畏哉日本根子天皇者、仁愛乃御心深計禮遠、仕奉留人々毛、厚恩乎酬只奉止率恐美恐母誄白、臣某、

〔輔世卿記〕天保十二年後正月廿七日戊午、御諡號宣下當日也、各丑半刻早參、兩局出納以下諸司如例、交名、散狀交名等如左、御裾關白、〇藤原政通御劒言成朝臣、御挿鞋光政、御笏資宗、御手水陪膳愛長朝臣、益供恭光源常德、

陣儀

先上卿著仗座

次參議同候横敷　辨以下政官在床子座如例

次奉行職事來仰仰詞（尊誄諡、幷臨時奉幣宣命之事、詔書之事、）

次上卿移著端座　令官人敷膝突

拱天天下乎治賜古止三十九年、無事久無故久上下倍和睦久、公民茂愈富足牟止畏食氏奈毛宮殿乎毛古乃法乃隨爾營多萬比、廢多留祭禮乎毛興志賜布、又諸乃事乎毛古爾復志賜古止多介禮婆、百官毛皆慶仰岐、公民毛厚慈乎蒙戴氏仕奉奴、讓國賜志與利國家愈平爾、臣庶愈忠心乎懷天仕奉天、此食國乃猶毛能治奴留事波、偏爾恤賜比矜賜布加故奈利止仰岐畏美賜比氏、天地止共爾長久孝道乎盡志仕奉牟止念行世志爾、近來御藥乃事有氏驚岐聞食氏、朝止久奈夕止久奈神祇爾祈利奉利賜志加、少久愈賜比氏古來爾毛稀奈留聖算乎重賜比志乎、一多比波以氏喜備一多比波以氏懼知給爾岐、早毛朝覲乃禮乎行給者牟止思保之都々大坐坐間爾、不慮毛此孝子乎捨給比氏姑射乃霞爾登利賜布止聞食氏、驚岐惜彌痛彌酸彌賜比氏大御泣哭之大坐勢利、曾毛曾毛御名乃事者久俱絕奴禮止、孝波父乎嚴爾須留與利大奈留波莫止奈毛、又大行阿波禮大名乎受止奈毛聞食須、御諡乎不奉婆山與利高久仰奉留恩德乎伊何爾可須倍岐止所念志、又大臣毛進奏須隨爾、故是以氏吉日良辰乎擇定氏、御諡乎光格天皇止稱白志奉利、恒爾之毛無岐御幣乎令捧持氏奉出利、正二位行權大納言兼左近衞大將春宮大夫藤原朝臣輔熙、正四位下行右近衞權中將藤原朝臣實愛等乎差使氏、誄人乎率志免恐美恐母誄奏志牟、又此山爾御坐須掛畏岐代々乃御陵爾毛、正三位行右大辨兼勘解由長官菅原朝臣聰長、正四位下行右近衞權少將源朝臣通熙、正五位下行侍從兼春宮權大進藤原朝臣胤保等乎志天御幣乎令捧持氏奉出賜布、今與利後天下乃政波大臣乃正岐直岐心以、相穴奈比相扶奉麻爾麻爾治賜比、長秋宮爾波〇光格后欣子內親王愈孝心乎盡天怠良須仕奉利、皇女者〇藤子內親王一人乃令妹奈禮者猶毛愛美給者牟止所念行須、天之日嗣止定賜比儲賜倍留皇太子者〇孝明日嗣月爾無事久成長勢賜波牟古止乎、夜守日守爾護幸倍賜倍止、此狀乎平久安久聞食止恐美恐美毛奏賜倍止奏、

天保十二年閏正月二十七日

大臣誄

同參向、未刻許策命使左大將(輔)參向、(騎馬、前驅六人、連騎右兵衛佐公恪朝臣、左中將爲知朝臣云々、不及見、)次官左中將實愛朝臣、誄人右大辨(聰)右少將通熙朝臣、侍從胤保(各兼諸陵奉幣使、各騎馬、)等參向、權中納言(一會傳奏)頭左中辨光政朝臣、(同上奉行)予、東久世三位、勸修寺侍從(寺門執奏)等、御陵北方假屋座爲詰候、先內豎內舍人等舁黑漆案立山陵前、次置御幣、(裹夾纈絹、如荷前幣、)次置雜給幣、次左大將被著陵前座、次次官實愛朝臣著座、(大將後方、少南方)次其方少退、誄人右大辨通熙朝臣、胤保等著座、次左大將以下兩段再拜、(四拜也、)次大將被讀宣命、(乍立)了亦兩段再拜、(四拜也)次日實愛朝臣、實愛朝臣參進被渡宣命、實愛爲內豎內舍人、於陵前令燒宣命御幣、(御幣者其實不燒)此間誄人申誄詞、事了左大將以下退出、次代々御陵有御幣、自明正帝至後桃園帝九帝、使右大辨勤仕、(依兩儀合拜也、)四條院、幷自後土御門帝至後水尾帝六帝、使通熙朝臣勤仕、(同上)各此山御陵也、此外當寺內、後光嚴帝、後圓融帝、後小松帝、(已上有雲龍院、)後花園帝(有悲田院、)等、胤保勤仕、各事了使々退出、予此後退出、今日陣上卿右大臣、於宜陽殿西廂有御拜、抑而御幣舁立以下如荷前云々、委不及聞、宣命詔書誄詞等後聞、續左、

詔書

詔、謚者德之表、行之迹、周家遺訓、我邦彜典也、仰以太上天皇、叡哲溫恭、以御萬民、清肅嚴默、以臨四海、不治而人自化、無爲而事寔成、履唐堯之典、星辰軌道、行虞舜之政、風雨順時、上下平章、咸歌望雲之慶、華夷協和、俱承就日之輝、於是蔑物不得其所、靡人弗蒙其恩、蕩々仁化、溢於八荒、巍々德光、格於四表、宜上大號以旌盛德、雖禮文之久闕、奈孝思之無已、爰上尊號、恭稱光格。。。。天皇、庶幾傳大名於萬代、與乾坤以長施、揚茂實於千秋、與日月而久照、普告天下、俾知朕意、主者施行、

天保十二年閏正月廿七日

宣命

天皇掛畏岐後月輪山陵爾恐美恐美毛奏賜倍止奏久、明久明久淨岐御意以氐大八洲國所知志利、與端

中廏四ッ折、同紙包、

今度太上皇大行御諡號之事、臣等誠仰願所候、上皇御仁愛御洪德無于論物候者、不拘久々廢絕之儀、速被任叡慮、可被奉御諡號哉、宜在聖斷矣、

實久上

十二年正月廿八日甲寅、巳終刻參舊院、午終刻參內、可參朝自殿下(鷹司政通)示給謁殿下之處、今度被奉御諡號之事、關東被仰遣之處、可爲叡慮之通被申上、川越侍從所司代書取寫、爲心得見給、續左、

故院御在位、古來稀成御年數ニ而、踐祚以後、多分被爲復舊儀、公事御再興茂不少、都而御仁愛深、衆庶一同奉蒙恩澤候儀共、全偏ニ舊典を慕被思召之段、於主上茂今更御厚感被思召候ニ付、如舊儀御諡號被爲進度被思召候、併近例者、御追號ニ而、御諡號之御沙汰者不被爲在御事ニ候得共、故院御高德、被及萬代候樣、御追孝之思召を被爲盡、被思召候御內慮之趣關東江宜申入旨被仰聞、則相達及言上候處、御諡號之儀、數年中絕ニ者候得共、故院御高德、被及萬代度との叡慮之趣も有之、且者兼々御質素之叡慮深ク、修飾之儀者不被爲好御儀等者、於關東茂被聞召及候御事茂被爲在候間、此度者格別之御譯柄を以、御諡號之儀御內慮之通たるべき旨可被仰出、右之趣御兩卿江御傳可申旨、年寄共より申越候事、

正月

故院御諡號之儀、御內慮之通可被仰出候得共、後年御追號之儀與不相混候樣有之度候間、右之趣者御記錄江茂御書載有之候樣、關白殿幷御兩卿被御心得置候樣可及御示談旨、年寄共より申越候事、

正月

後正月廿七日壬午、今日尊號諡策命使、泉涌寺江參向也、仍巳刻許予泉涌寺參向、衣袍乘輿東久世三位

漢風諡再興

出家の君も諡をたてまつる、天皇とのみこそ申すめれ、中古の先賢の義なれども、こゝろを得ぬ事に侍るなり、

○按ズルニ、諡ヲ奉ラザルコトハ、宇多天皇ニ起ルニアラズ、聖武、孝謙、稱德等ノ御名モ、諡ニアラズシテ尊號ナリ、

〔續日本後紀〈十二仁明〉〕承和九年七月丁未、太上天皇〈〇嵯峨〉崩于嵯峨院、春秋五十七、遺詔曰、〈〇中略〉無拘俗事、謂諡誄〈〇中略〉等事、

〔李部王記〈醍醐寺雜事記所引〉〕延長八年九月廿九日、丑時院〈〇醍醐〉御病大漸、〈〇中略〉左大臣〈〇藤原忠平〉進御所、〈〇中略〉還陣乃命、以不可上諡號、

〔實久卿記〕天保十一年十二月三日己未、巳終刻參舊院、〈〇中略〉自內裏以按察前大納言、御追號追可被進之旨、以一紙被仰下、續左、

先例可被進御追號之處、依被爲有叡慮、追可被進候迄、奉稱故院候事、

右以女房令沙汰、　廿一日丁丑、深更新源大納言被來、今度太上皇大行可被奉御諡哉、久々廢絕、依之大臣以下參議以上現任公卿、以一紙被尋下之旨被仰傳了、續左、

太上皇如中古以來、雖可被奉御追號、御登壇以來、被興復故典舊儀、公事再興不少、御在位卅有餘年、古代茂稀ニ、加之被貴質素、不被好修飾、專御仁愛之聖慮、遂及衆庶、一同安懷之事、今上〈〇仁孝〉深御感悅、依之被奉御諡號、至萬代被竭御孝道度叡慮候、雖然小松帝〈〇光孝〉以後、壽永帝之外、不被奉御諡號、今度被奉御諡號、可有如何哉、被尋所存候事、

別紙之通、被尋御諡號之事、久々廢絕之儀候、於有御所意者、必不被殘心中、可有言上候事、

右勅答、明廿二日中可言上被示、予謹奉了、尤以一封可附議奏卿云々、　廿二日戊寅、今日以一封御諡號勅答獻之了、續左、以使付議奏左兵衞督了

漢風諡中絶

聖皇后、奏聞公家、諸寺聽衆相共集會、始行法花會、

〔東大寺要錄 八〕東大寺櫻會緣起 亦名法花會

敬白、○中略 以去天平十八年丙戌三月、奉爲挂畏大雄大聖天皇、孝謙皇帝、仁聖大后、莊嚴堂閣、羅列幡蓋、○下略

〔皇年代略記 光仁〕天應元年十二月二十三日崩、諡曰光仁、

〔玉海〕安元三年○治承元年 七月廿九日丙寅、後聞、今日被行贈官位、○藤原賴長 並院號○崇德 等事、○中略 宜止讃岐院號、爲崇德院、○大外記清原賴業奉之 余案之、崇德院號如何、我朝太上天皇贈號未聞、若可改讃岐院者、只可稱土御門土○土恐衍字 院歟、崇德字未叶心、通典文云々、永範撰申、上卿隆季卿云々、

〔玉海〕元曆二年○文治元年 七月三日甲申、先帝○安德 御事、示送頭辨之許、其狀曰、○中略 禮紙追申、崇道天皇○桓武太子早良 已下之例、或爲太子或爲親王、仍贈帝王之號、其理可然、不似今度之儀、院號條又不叶物議歟、仍只以諡號可爲詮歟、如此間事委可有歟、

〔玉海〕文治三年四月廿三日甲午、被下先朝○安德 諡號勅、延曆例也

〔百練抄 十四〕延應元年五月廿九日戊戌、侍從中納言爲家 參著、召大外記師兼仰云、以隱岐院、○後鳥羽 可奉號顯德院者、依治承崇德院例、無勅書、只外記承存許也、件諡號字、式部大輔爲長卿勘申、

○按ズルニ、後仁治三年ニ至リテ、顯德院ヲ改メテ、更ニ後鳥羽院ト改稱セラレタリ、下文加後字號前號ノ條、參看スベシ、

〔百練抄 十六後深草〕建長元年七月廿日己丑、被行佐渡院追號事、順德院、

〔神皇正統記 冷泉〕この御門より天皇の號を申さず、また宇多よりのち諡をたてまつらず、遺詔ありて國忌山陵をおかれざることは、君父のかしこき道なれど、尊號をとゞめらるゝことは、臣子の義にあらず、神武以來の御號も、みな後代のさだめなり、持統元明よりこのかた、遜位あるひは

漢風諡

皇の御時、この天皇に特に始て、漢様の御諡を奉られたるにぞあるべき、○中略猶其證とすべき事は、伊福部臣徳足比賣の墓誌に、安永三年、因幡國法美郡、府中さる處にて堀出せる也、藤原大宮御宇大行天皇大行の字、右の方へよせて小さく書たり、御世、慶雲四年歳次丁未春二月二十五日、従七位下被賜仕奉、和銅元年歳次戊申秋七月一日卒云々、故謹錄錍、和銅三年十一月十三日己未と記せる、大行天皇は文武天皇の御事なるを、玄か大行としも稱せるは、漢國にて王の死て諡せぬ間の稱なるを、其頃まねばせ給へるにて、○中略其は此天皇慶雲四年六月辛巳十五日に崩給ひたるに、始て漢様の御諡を奉らるべき御定ありて、諒闇はてゝ後奉らるゝまでは、大行天皇と稱し奉るべく御おきてありけるによれるものなるべし、故徳足比賣の卒れる和銅元年七月は、元明天皇いまだ諒闇にまし〳〵て、いまだ其御諡奉られざりつる間なりければ、當時の御稱をもて玄か記せるものなるべし、萬葉集卷一のに、大行天皇幸于難波宮時歌、また大行天皇幸于吉野宮時歌と書る、既に岡部翁○眞淵の考おかれつるごとく、文武天皇の御事なるを、これもかの御諡奉られざるほどに、記おけるまゝの文なるを、其まゝに書集めたるものなるべし、おもひ合すべし、

〔續日本紀淳仁二十一〕天平寶字二年八月戊申、勅曰、子尊其考、禮家所稱、策書鴻名、古人所貴、昔者先帝○聖武敬發洪誓、奉造盧舍那金銅大像、若有朕時不得造了、願於來世改身猶作、既而鎔銅已成、塗金不足、天感至心之信、終出勝寶之金、我國家於是初有奇珍、開闢已來未聞、若斯盛徳者也、加以賊臣懷惡潜結逆徒、謀危社稷、良日久矣、而畏威武、欽仰仁風、不敢競鋒、咸自馴服、可謂聖武之徳比古有餘也、其不奉揚洪業、何以示於後世、敬依舊典、追上尊號、策稱勝寶感神聖武皇帝、諡稱天璽國押開豐櫻彥尊、欲使傳休名於萬代、與乾坤而長施、揚茂實於千秋、共日月而久照、普告遐邇、知朕意焉、

〔延喜式諸陵二十一〕佐保山南陵　平城宮御宇勝寶感神聖武天皇、○下略

〔東大寺要錄一〕天平十八年三月十六日、良辨僧正於羂索院、奉為大雄大聖天皇、○聖武孝謙皇帝、仁

文武四十二代者、是淡海公所製事已幽合也、其後儀式、依平日之德行諡號或以後院御所諡成追號、有山陵之由緒、有庵號之遺詔、彼是非一者乎、

〔古事記傳十八〕凡て御代御代の漢樣の諡のこと、書紀私記に、師說、神武等諡名者、淡海御船奉勅撰也とあり、まことに然るべし、時は桓武の朝と成說に云るも然るべし、(中略)續紀を考るに、持統より以來御代御代の天皇崩の時、みな古禮の諡を奉しことのみ見えて、漢樣のはすべて見えず、然るに天平寶字二年八月に、寶字稱德孝謙皇帝と云尊號を奉しことあり、是は當代の御事にて、諡には非ざれども、漢樣音讀の號の始に有ける、さて同月に、豐櫻彦天皇に勝寶感神聖武皇帝と云尊號を奉らる、是ぞ諡號の漢樣の始なる、されど此時にも、古の歷代天皇の漢諡のさだはなかりき、さて光仁天皇崩坐て、上尊諡曰天宗高紹天皇とあるは、音讀の漢諡の如聞ゆめれども、さにあらず、なほ古禮の諡なり、文武天皇の天眞宗云々、桓武天皇の皇統云云なども、皇朝樣の諡ながら漢めきたるは、やうやくに漢意のまじれる故ぞかし、此天宗高紹天皇も、漢樣のは別に光仁と申て、本紀の首に細字にて光仁天皇と注せり、續紀の例、凡て古體の諡を標て、其下に漢樣のを注せれば、是も其例なるにこそ、明けし、又此後仁明天皇までは、御代々々皆古禮の諡あれば、光仁天皇にのみ無るべきに非ず、孝謙天皇は出家し賜へるに因て諡を奉らず、かの寶字二年の尊號を用る由見ゆ、嵯峨天皇のは有けるが傳らざるか、又元より無りしか、物に見えず、此二御代の餘は、仁明まで皆有なり、如此て桓武天皇の御代に至て、かの御船眞人の在せし延曆四年七月までの間にぞ、神武より光仁までの漢樣の諡は撰定めしめ賜ひけむ、其證は、延曆十六年に成れる續紀に、古の天皇たちのも往々見えたり、第一卷に天武天皇天智天皇などある類是なり、然るに如此く漢諡を以て記されたる處を考るに、皆撰者の文のみにして、書の文を載たるには、皆某宮御宇天皇、或は某宮朝などとのみありて、漢諡は見えたることなし、これらを以て撰ばれたる時を定むべし、然るに甘露寺親長卿記などに、文武天皇の御世に、淡海公藤原不比等に勅して定めしめ賜へる由あるは、委曲も考へざる浮たる說なり、そは淡海御船てふ人は、世に聞なれざる故に、ゆくりなく淡海公に思ひまがへて、桓武の御世をも文武と誤れるものなり、

〔比古婆衣五〕古事記傳漢樣御諡附考

延曆より前に、既に漢ざまの御諡を奉られし事は、淡海御船眞人の、天平勝寶三年十一月に撰める由序せる懷風藻に、文武天皇と題て御詩を載たり、序文に作者六十四人、具題姓名、並顯爵里、冠篇首と記したれば、此御諡は素より、然題記したりしなり、さて其天平勝寶三年は、孝謙天皇の御世にて、御船眞人は廿五の齡にて、いまだ姓を賜はらざりし時に當れり、故按に文武天皇は、天縱寬仁、慍不形色、博涉經史と續日本紀に載られ、〇中略さるにあはせて次の御代元明天

佛、更不ㇾ奉ㇾ諡、所司宜ㇾ知ㇾ之、

〔續日本紀 十八孝謙〕寳字稱德孝謙皇帝 出家歸ㇾ佛、更不ㇾ奉ㇾ諡、因取二寳字二年百官所ㇾ上尊號一稱ㇾ之、

○按ズルニ、大鏡一ニ太政大臣といへど、出家しつるはいみなゝしトアリ、いみなハ即チ諡號ノ義、文忠公 藤原不比等 ノ類是ナリ、

漢風諡法

〔令義解 七公式〕天皇諡 謂、諡者累二生時之行迹一、爲二死後之稱號一、即經二緯天地一爲ㇾ文、撥ㇾ亂反ㇾ正爲ㇾ武之類也、

〔御中陰御佛凡人相違事 歷代殘闕日記所收〕一依二或人問一太閤所ㇾ答條々 文明三、四、十二、書寫了、

一諡號、追號、此かはりめは、諡をばおくりなとよみて、生時の行跡によりて沒後の號として、仁德ましまし候へば仁德天皇と申し、武德おはしまし候へば桓武天皇と申候、くはしく合ひたる事は候はねども、本說此分にて候、是は德によりて可ㇾ申候、所名にはよらず候、追號と申すは多分御在所の號、又山陵の號なぞを用ゐられ候、嵯峨、淳和、陽成などは、御在所の名を御追號に用られ、宇多、醍醐、村上などは、みさゝぎの號にて、光嚴、光明、崇光などは、御庵室の號にて、遺勅によりて被ㇾ用候、これも御在所に准じ、すべておぼしめし候、崇德、顯德 後鳥羽初御號、順德等三代は、遠嶋の御事にて候程に、院號を撰られておくり申され候、近頃稱光院などは此例たるべく候かにて候、然としたる御在所は候はねども、院號に用られ候、安德天皇などは諡號の准たるべく候、諡號は其人の德によりたる號にて候程に、後の字を加へて用られたる事は今に其例なく候、又出家の後は諡號なきにて候、是によりて寬平法皇 ○宇多 より後は、天子の諡號たえたる事にて候、右兼良公 ○一條 一言誓云云、

始撰定漢風諡

〔釋日本紀 九述義〕私記曰、師說、神武等諡名者、淡海御船奉ㇾ勅撰也、

〔親長卿別記〕文明三年二月十三日、抑今度舊院 ○後花園 御追號事、○中略 中院大納言 ○源通秀

舊院御追號可ㇾ被ㇾ改哉事重預二下問一、彌迷二勅答一者也、凡諡法事、起二於周道一、遠及二日域一者歟、神武已來、至二

テ、倭根子天之眞宗豐祖父天皇ト云ヘリ、此後元明天皇ニ日本根子天津御代豐國成姫天皇ト稱シ、元正天皇ニ、日本根子高瑞淨足姫天皇ト稱シ奉ルガ如キ、並ニ史ニ明文ノ徵トスルニ足ルモノ無シトイヘドモ、大日本史ニ、諡號トスルモノ是ナルガ如シ、

〔續日本紀　二十一淳仁〕天平寶字二年八月戊申、勅曰、昔者先帝(〇聖武)(中略)開闢已來、未聞若斯盛德者也、(〇中略)敬依舊典、(〇中略)諡稱天璽國押開豐櫻彥尊、

〔續日本紀　三十六光仁〕天應元年十二月丁未、太上天皇(〇光仁)崩、　癸丑、(〇中略)誄人奉誄、上尊諡曰天宗高紹天皇、(〇皇年代記ニハ、天宗ノ上ニ、日本根子ノ四字アリ、)

〔日本後紀　十三桓武〕大同元年三月辛巳、天皇崩於正寢、　四月甲午朔、中納言正三位藤原雄友、(〇中略)奉誄曰、(〇中略)畏哉日本根子天皇乃天地乃共長久、日月乃共遠久、所白將去御謚止稱白久、日本根子皇統彌照尊止稱白止久恐牟恐母誄白、臣某、

〔類聚國史　三十五帝王〕天長元年七月甲寅、平城天皇崩、　丙辰奉誄曰、(〇中略)畏哉日本根子天皇乃天地乃共長久、日月乃共遠久、所白將去御謚止稱白久、日本根子天推國高彥尊止稱白止久恐牟恐母誄曰、臣某、

〔續日本後紀　九仁明〕承和七年五月癸未、後太上天皇(〇淳和)崩于淳和院、　甲申、(〇中略)畏哉日本根子天皇乃天地止共長久、月日止共遠久、所白將往御謚止稱白久、日本根子天高讓彌遠尊止稱白止久恐美恐母誄白、

〇按ズルニ、凡國風諡ニシテ史ニ載セラレタルモノ、實ニ前掲七天皇ニ過ギズ、此後仁明天皇ヲ日本根子豐聰慧(〇皇胤紹運錄、一代要記等ニ見ユ、)ト稱シ奉ルガ如キ、是亦元明元正二天皇ト同ジク國風諡ナルベシ、然レドモ本史ニ闕逸セルヲ以テ、今本項ニ掲ゲズ、

出家不上諡

〔續日本紀　十九孝謙〕天平勝寶八歲五月乙卯、是日太上天皇(〇聖武)崩於寢殿、　壬申、勅曰、太上天皇出家歸

國風諡

此他國名ヲ以テ一ノ稱號トスルモノアリ、淡路廢帝淳仁讃岐院崇德隱岐院後鳥羽土佐院土御門阿波院同上佐渡院順德ノ如キ是ナリ、

又當時ノ年號ヲ以テ稱スルアリ、仁和帝光孝寛平法皇宇多延喜帝醍醐天暦帝村上ノ如キ是ナリ、

別ニ一種胎中天皇應神聖帝仁德有德天皇雄略大惡天皇同上至德天皇皇極太后天皇持統太皇后天皇同上法師天皇聖武帥天子安德田村院靈元ノ如キアレドモ、今ハ省キテ擧ゲズ、

古代ニ在テ一種ノ稱號ト云フベキモノアリ、垂仁天皇ヲ卷向玉城宮御宇天皇ト稱シ奉ル如キ、即チ元明天皇ノ遺詔ニ、某國某郡朝廷馭宇天皇ト稱スベシトアルモノ是ナリ、今總ニ其例證一二ヲ收メテ、他ハ闕略ニ從フ、顧フニ是レ所謂御在所號ノ權輿ナランカ、

又太祖、中宗ハ廟號ナリ、大行天皇ハ未ダ諡ヲ奉ラザル間ノ稱ナリ、共ニ此ニ附載ス、

尊號ハ、其帝德ヲ賛嘆褒美シテ稱スル所ニシテ、是亦國風漢風ノ二種アリ、其國風尊號ハ、神武天皇ヲ神日本磐余彦尊、又始馭天下之天皇ト稱シ、崇神天皇ヲ御肇國天皇ト稱シ奉ル如キ是ナリ、此他懿德、孝安、孝靈、孝元天皇ノ御名ニ、大日本ト加稱シ、開化、淸寧天皇ノ御名ニ、稚日本ト加稱シ、安閑天皇ヲ武小廣國排盾尊ト稱シ、推古天皇ヲ豐御食炊屋姫天皇ト稱シ奉ルガ如キ、凡ソ此類皆登極後ノ尊號ナルベシ、故ニ今之ヲ此ニ收ム、其漢風尊號ハ、孝謙天皇ヲ寶字稱德孝謙皇帝ト稱シ奉レル是ナリ、世之レヲ分稱シテ、其前位ニ孝謙ト稱シ、其再祚ニ稱德ト稱シ奉レリ、

〔續日本紀三文武〕大寶三年十二月癸酉、諸王諸臣奉誄太上天皇、〇持統諡曰大倭根子天之廣野日女尊、

〇日本書紀ニハ、高天原廣野姫天皇ニ作ル、

〔續日本紀三元明〕慶雲四年六月辛巳、天皇〇文武崩、十一月丙午、誄人奉誄、諡曰倭根子豐祖父天皇、

〇按ズルニ、本書文武天皇紀ニハ、天之眞宗豐祖父天皇ニ作ル、故ニ大日本史ニハ、彼此併稱シ

後鳥羽天皇ニ水無瀨、仲恭天皇ニ九條廢帝、（又後廢帝トモ云ヒ、一ニ半帝トモ稱シ奉ル、）後深草天皇ニ常磐井、富小路、龜山天皇ニ禪林寺、萬里小路、後宇多天皇ニ大覺寺、伏見天皇ニ持明院、花園天皇ニ萩原、後村上天皇ニ住吉、後龜山天皇ニ小倉等ノ別號アレドモ、今皆闕略ニ從ヒ、一ニ著聞ナルモノヽミヲ掲グ、

陵地號アリ、醍醐、村上二天皇ノ如キ是ナリ、世或ハ宇多天皇ヲ以テ陵地號トスレドモ、今斷ジテ之レヲ御在所號ト爲ス、又陵地號ヲ以テ一ノ稱號トスルモノアリ、高野、（孝謙）後田原、（光仁、光仁皇考施基親王ヲ田原天皇ト稱ス、）柏原、（桓武）深草、（仁明）田邑、（文德）水尾、（淸和）小松、（光孝）後山科（醍醐）ノ如キ是ナリ、此他欽明天皇ニ檜隈、聖武天皇ニ佐保、醍醐天皇ニ小野ト稱シ奉ル如キ、世ニ著聞ナラザルモノハ、今皆闕略セリ、

前帝號（追號院號ノ類）ニ後字ヲ加ヘテ稱號トスルモノアリ、後一條、後朱雀、後冷泉、後三條、後白河、後鳥羽、後堀河、後嵯峨、後深草、後宇多、後伏見、後二條、後醍醐、後村上、後龜山、後光嚴、（北朝）後圓融、（同上）後小松、後花園、後土御門、後柏原、後奈良、後陽成、後水尾、後光明、後西院、後櫻町、後桃園天皇ノ如キ是ナリ、中ニ就キ、前帝ノ一稱號ニ、後字ヲ加ヘテ追號トスルモノ、後深草、（深草ハ、仁明ノ一號、）後小松、（小松ハ、光孝ノ一號、）後柏原、（柏原ハ、桓武ノ一號、）後奈良、（奈良ハ、平城ノ一號、）後水尾、（水尾ハ、淸和ノ一號、）後西院（西院ハ、淳和ノ一號、）ノ六天皇アリ、追號ノ遺詔ニ出ヅルモノアリ、白河、後深草、龜山、後宇多、後伏見、花園、後嵯峨、光嚴、（北朝）光明、（同上）崇光、（同上）後圓融、（同上）後小松、後水尾是ナリ、中ニ就キ、花園、崇光（北朝）ノ二天皇ヲ除キ、他ノ十一天皇號ノ事ハ已ニ前ニ述ベタリ、

前代天皇ノ漢諡及ビ追號ヲ、彼此一字ヅヽ併用シテ追號トスルモノアリ、稱光、（稱德、光仁、）明正、（元明、元正、）靈元、（孝靈、孝元、）ノ如キ是ナリ、

追號ノ意義未ダ詳ナラザルモノアリ、土御門、東山、中御門、桃園ノ四天皇是ナリ、

峨、推古、舒明、皇極、齊明、（皇極重祚）ノ孝德、天智、弘文、天武、持統、文武、元明、元正、聖武、淳仁、光仁、桓武、仁明、文德、光孝、崇德、安德、顯德、（後鳥羽天皇ノ初號）順德、仲恭、光格、仁孝、孝明天皇ニシテ、而シテ舊史漢風諡奉上ノ事ヲ明記セルモノ、聖武、光仁、崇德、安德、顯德、順德ノ六天皇ニ過ザルナリ、按ズルニ、聖武ハ、淳仁天皇ノ天平寶字二年ニ上ル所ノ尊號ニシテ、勝寶感神聖武皇帝ノ略稱ナリ、（天平寶字三年六月紀ニ、聖武皇帝ト見ユ、然レドモ延喜ノ諸陵式ニハ、猶正シク勝寶感神聖武天皇トアリ、）其崇德、順德、及ビ後鳥羽天皇ノ初號顯德ノ如キハ、當昔所謂院號（即チ御在所號）ノ慣例ニ准ジ、或ハ謂テ院號トモ云ヘリ、一條兼良ノ說ニ、此三天皇ハ遠島ニテ崩御アリシヲ以テ、院號ヲ撰デ贈ラレタリトアリ、蓋シ、尋常漢風諡ト一例ニ視ルベカラザルヲ云フナルベシ、又弘文、淳仁、仲恭三天皇ノ諡號ハ、明治三年、始テ追上セラレシ所ナリ、抑漢諡ノ制、順德天皇以來永ク廢典トナリタリシニ、近世光格天皇崩御ノ時、更ニ復興セラレタリ、又漢諡ニ一帝二諡ノ例アリ、皇極天皇ノ再祚ニ齊明ト稱シ奉ル是ナリ、此後孝謙天皇ノ再祚ニ稱德ノ稱アレドモ、是レ生前ノ一尊號ヲ前後ニ分稱セシモノニシテ、一帝二諡ノ例ニハアラザルナリ、

御在所號アリ、世ニ之レヲ院號ト云フ、清和天皇位ヲ遜レテ清和院ニ坐セシヲ以テ、清和天皇ト稱シ奉ル類是ナリ、又追號アリ、一條院天皇曾テ一條院ニ坐セシヲ以テ、崩後、一條院ト稱シ奉ル類是ナリ、凡御在所號ニハ皇居號ニ因レルモノアリ、一條院ノ如キ是ナリ、仙院號ニ因レルモノアリ、清和ノ如キ是ナリ、寺院號ニ因レルモノアリ、花山、圓融ノ如キ是ナリ、今其生前崩後ニ拘ハラズ、御在所號ヲ以テ稱シ奉ル所ノ天皇ヲ列擧スレバ、平城、嵯峨、淳和、清和、陽成、朱雀、冷泉、圓融、花山、一條、三條、白河、堀河、鳥羽、近衛、二條、六條、高倉、四條、龜山、伏見、光嚴、（北朝）光明、（同上）正親町、櫻町ノ如キ是ナリ、又別ニ仙院ヲ以テ一ノ稱號トスルモノアリ、奈良、（平城）西院、（淳和）亭子院（宇多）ノ如キ是ナリ、此他嵯峨天皇ニ冷泉、宇多天皇ニ朱雀、六條、白河天皇ニ六條、鳥羽、

古事類苑

帝王部十六

諡號

諡號ニ二種アリ、其一ヲ國風諡ト爲ス、文武天皇ノ朝ニ、持統太上天皇ニ諡シテ大倭根子天之廣野日女尊ト稱シ奉ル是ナリ、此外文武、聖武、光仁、桓武、平城、淳和ノ六天皇、並ニ國風諡アリ、孝謙天皇天平勝寶八歳、聖武太上天皇崩ジ給フ、勅シテ曰ク、太上天皇出家佛ニ歸ス、更ニ諡ヲ奉ラズト、又孝謙天皇紀ノ首ニモ、寶字稱德孝謙皇帝ノ生前尊號ヲ標シテ、出家佛ニ歸ス、更ニ諡ヲ奉ラズ、因テ寶字二年、百官上ル所ノ尊號ヲ取テ之レヲ稱ストアリ、國風諡ヲ奉上セザルヲ云フナリ、然レドモ聖武天皇ハ、寶字二年更ニ諡シテ天璽國押開豐櫻彦尊ト稱シ奉レリ、

其二ヲ漢風諡ト爲ス、其制大寶令ニ始テ見エタリ、公式令ニ天皇諡ノ目アリテ、義解ニ、諡ハ生時ノ行迹ヲ累テ死後ノ稱ト爲ス、即チ天地ヲ經緯スルヲ文ト爲シ、亂ヲ撥キ正ニ反スヲ武ト爲ス類ヲ云フトアリ、是全ク漢土ノ制ニ倣ヘル故ニ、今目シテ漢風諡ト云フ、(漢風ノ二字ハ、天平寶字三年六月紀ニ見エタリ、)神武天皇以下、漢字音ヲ以テ稱スル所ノモノ是ナリ、神武等ノ諡號ハ、淡海御船勅ヲ奉ジテ撰ブト云フ、或ハ淡海公(藤原不比等)ノ撰ブ所トモ云フ、諸説詳ニ本文ニ見エタリ、

凡漢風諡號ヲ以テ稱スルモノ、神武、綏靖、安寧、懿德、孝昭、孝安、孝靈、孝元、開化、崇神、垂仁、景行、成務、仲哀、應神、仁德、履中、反正、允恭、安康、雄略、清寧、顯宗、仁賢、武烈、繼體、安閑、宣化、欽明、敏達、用明、崇

古事類苑

帝王部十六

諡號 尊號併入

受戒

灌頂

院被定了、予奉仰、内々參大宮、謁女房、門號被定之事申入了、今日申刻女院御薙髪也、

〔東大寺要録一本寺章〕菩薩戒始行

惠運僧都記録文

貞觀三年四月廿五日、皇太后、〇仁明后藤原順子幷北御息所〇文德女御藤原古子剃頭出家、貧道爲出家和上、長講師爲教授阿闍梨也、五月廿五日、啓奉令受比丘尼大戒、太政大臣〇藤原良房爲崇重延暦寺、勸進皇太后令受大乘戒、〇中略殿下允許、請廿僧尼傳戒師於五條宮、以受比丘尼大戒、〇中略皇太后法諱本覺、北御息所初法諱法忍、受戒之日、改爲容性云々、

〔三代實録二十清和〕貞觀十三年九月廿八日辛丑、太皇太后〇仁明后順子崩、〇中略天安二年八月乙卯、文德天皇崩、后哀慟柴毀、後遂落彩爲尼、請東大寺戒壇諸僧於五條宮、受大乘戒、屈延暦寺座主圓仁、受菩薩戒、

〔三代實録三十五陽成〕元慶三年三月廿三日癸丑、淳和太皇太后〇淳和后正子崩、〇中略當貞觀二年五月、於淳和院設大齋會、延諸寺名僧講法華經、裝具嚫施傾盡財寶、便留延暦寺座主圓仁大阿闍梨、受菩薩戒、奉太后法名稱良祚、

〔紫式部日記〕例よりもなやましき御けしきおはしませば、〇一條后藤原彰子御加持どもまゐる、〇中略御いたゞきの御ぐしおろし奉り、御いむ事うけさせ奉り給ふ、〇中略平らかにせさせ給て、〇後一條降誕後の事まだしきほど、さばかり廣きもや、南の庭、高欄のほどまで立こみたる僧も俗も、今一よりとよみてぬかをつく、

〔三代實録八清和〕貞觀六年正月十四日辛丑、延暦寺座主傳燈大法師位圓仁卒、〇中略貞觀三年六月、太皇太后藤原氏、〇仁明后順子請僧綱名僧於五條宮、四箇日間講法華經、太后受菩薩大戒、三昧耶戒、及檀灌頂、行大乘布薩、

圓滿院宮(御戒師)　僧正覺顯(唄師)　圓滿院宮御弟子宮(○中略御剃手)

御布施

戒師　織物被物一重　綾被物一重　御衣一具(練貫八御衣白單)　絹一懸子　綿一懸子

唄師　被物一重　裹物一

〔女院小傳〕長樂門院(忻子)後二條后、○中略德治三閏八、二爲尼、(眞實覺)

〔續史愚抄(桃園)〕寬延三年六月廿六日丁酉、皇太后宮(舍子、卅五歲、故院(櫻町)妃、二條故前關白吉忠女、)有院號定、○中略爲青綺門院、又年官爵如元、本封外加賜伍百戶者、奉行藏人頭左中將隆義朝臣、此日卽(○卽恐新誤)女院御落飾、(薙髮也)法諱、○闕

〔續史愚抄(後桃園)〕明和八年七月九日戊申、皇太后宮(富子、廿九歲、國母、桃園院妃、一條故前關白兼香女、)有院號定、○中略爲恭禮門院、又年官爵如元、本封外加賜伍百戶者、奉行藏人頭右中將隆建朝臣、此日新女院御落飾、(薙髮也)法諱、○闕

〔忠言卿記〕天明三年十月十二日庚午、此日大宮(○後桃園后藤原維子)院號定、○中略太后宮院號、被稱盛化門院之旨、日野黃門被示了、○中略後日聞、此日則有御薙髮、以一品深仁親王爲戒師云々、仁和寺宮也、

〔言成卿記〕天保十二年後正月廿二日、今日、大宮(○光格后欣子內親王)院號定陣儀也、○中略可爲新淸和院奏聞、○中略傳聞今曉戌刻比、有御薙髮之儀云云、○中略傳聞御薙髮戒師仁和寺宮云云、

〔新淸和院肝煎記〕天保十二年後正月廿二日、仁門院家(眞光院)參上、○中略御輿寄(江)被參、今晚、御薙髮御道場被設之事、則御輿寄切戶ゟ被進、西階昇、御輿寄南、十五帖敷ニ御道場被構、大師御像被懸、其後佛具被飾、酉刻仁和寺宮御參、○中略今晚御薙髮ニ付、戒師參上之旨、幷御伺御機嫌、以表使申入、○中略戌刻御薙髮御吉例也、御式被始、戒師宮、御受戒之御作法相濟、戌半刻過、戒師宮御退入、

〔實久卿記〕弘化四年十月十三日己未、今日大宮(○仁孝后藤原祺子)門號宣下也、上卿內大臣(家)參陣、新朔平門

からぬ世なり、禮成門院とかや申なり、

〔増鏡 十七 月草の花〕禮成門院も又中宮と聞えます、六日〇元弘三年六月の夜、やがて内裏へ入らせたまふ、いにし年御ぐしおろしにき、御悩み猶おこたらねば、いつしか五壇の御修法始めらる、

〔女院小傳〕後京極院、禧子 元應元、八、七爲中宮、正慶元、〇元弘二年五、廿院號、爲禮成門院、而元弘止之、元弘二、八、三十爲尼、

〔日本紀略 後十三 一條〕寛仁三年三月廿五日壬午、皇后宮〇三條后娍子落飾爲尼、戒師僧正濟信、乳母年來宮仕女多以出家、

〔殿暦〕嘉承二年九月廿一日、今日中宮〇堀河后篤子尼ニ成給、御髮戒師奉剃之、後於北面、女房奉剃云々、〇中略戌刻許賢暹法師、戒師、寛慶僧都、唄、各參入著座、僧座高麗端疊二枚、法印座ニ敷茵、御佛不懸、不置梵王經、是當時太皇太后宮御出家例也、次第如常、但花机上火舍一口、大花瓶等置之、事了布施、各裝束一具、夜裝束也、裹布施法印三裹、僧都二裹、〇中略女房御匣殿同成尼、出家云々

〔吉記〕元暦二年〇文治元年五月一日癸未、今日建禮門院有御遁世、戒師大原本成房云々、

〔源平盛衰記 四十八〕女院吉田御住居同御出家事

五月一日、〇文治元年女院〇高倉后德子御髮オロサセ給フ、御戒師ニハ、長樂寺ノ阿證坊上人印西ゾ被參ケル、

〔女院小傳〕建禮門院 平德子 高倉后、〇中略元暦二、〇二原作三今改、五、一爲尼、廿九、眞如覺、

〔女院小傳〕安喜門院 藤有子 後堀河后、〇中略寛元四、九、廿五爲尼、四十、眞淨、

〔女院御出家僧侶公卿御布施等例〕大宮院〇後嵯峨后藤原姞子

文永九年二月廿三日 御年四十五

僧侶

出家後再入內

〔源氏物語帚木二〕心深しやなどほめたてられて、あはれ進みぬれば、やがて尼になりぬかし、思ひ立程はいと心すめるやうにて、世にかへり見すべくも思へらず、〇中略つかふ人ふるごたちなど、君の御心はあはれなりけるものを、あたら御身をなどいふに、自らひ。た。ひ。髪をかき探りて、あへなく心ぼそければうちひそみぬかし、

〔河海抄帚木一〕ひたひ髪　垂。尼。事也

〔花鳥餘情帚木一〕昔の尼はたれ。尼。といひて、額髪を喝食などのやうに挾むなり、さるによりてひたひ髪をさぐるとはいふなり、

〔百練抄七二條〕長寛元年十二月廿六日、此日皇嘉門院〇崇徳后聖子御出家、年來令垂給、今日被剃頭、

〔女院小傳〕皇嘉門院藤聖子崇徳后、〇中略保元元、十、十一垂尼、惠清淨長寛元、十二、廿六爲尼、四十二

〔榮花物語浦々の別五〕長徳二年四月廿四日なりけり、帥殿〇藤原伊周はつくしのかた成ければ、ひつじさるのかたにおはします、中納言殿〇伊周弟隆家はいづものかたなれば、たんばのかたのみちよりとて、いぬゐざまにおはする、御くるまひきいづるまゝに、みや〇伊周弟、一條后定子隆家女は御はさみして御てづからあまに成給ぬとぞうすれば、あはれ宮はたゞにもおはしまさゞらんものを、かくものおもはせたてまつる事とおぼしつゞけて、泪こぼれさせ給へば宮のびさせ給、

〔日本紀略十一一條〕長徳二年五月一日庚子、今日皇后定子落飾爲尼、

〔百練抄四一條〕長徳二年五月一日、今日中宮出家爲尼、中宮定子依帥〇藤原伊周事出家、六月廿二日入。內。、人以不甘心、

〔增鏡十六久米のさら山〕中宮〇後醍醐后藤原禧子は、其まゝに御ぐしもたぐる時もなく、沈みたまへる御有さまいとことはりに、遠き御別れ〇先是天皇幸隠岐、故云の哀しさにうちそへて、御むねのひまなくおぼしこがる、后の位もとゞめられたまひて、院號の定めなど人の上のやうにほのかに聞しめす、うれし

[illegible]全剃

自レ絹先々可レ賜レ之、今夜誤最末ニ引レ之、又不レ可レ爲レ准、左兵衞督取レ之、次唄師料、綾被物一重、中宮大夫取レ之、裏物一、左兵衞督又取レ之次從僧等參進撤ニ布施、次僧退下、公卿退下、次於ニ同道場、被レ始ニ行七个日御逆修、公衡非レ爲ニ奉行、如レ元

○按ズルニ、後深草天皇ノ崩御ハ、正應六年ヨリ後ルヽ事十二年、嘉元二年七月十六日ニアリ、

〔女院小傳〕永福門院鏱子伏見后、○中略正和五、六、廿三爲レ尼、眞如源、四十六、

○按ズルニ、伏見天皇ノ崩御ハ、正和五年ノ次年、即チ文保元年九月三日ニアリ、

〔女院小傳〕廣義門院寧子後伏見后、○中略建武三、○延元元年二、廿五爲レ尼、四十五

○按ズルニ、後伏見天皇ノ崩御ハ、同年四月六日ニアリ、

〔榮花物語二十七衣の玉〕宮○一條后上東門院彰子の御ありさまを見たてまつれば、紅梅の御ぞ八ばかりたてまつりたるうへに、うきもんたてまつりて、えもいはずうつくしげにて、御ぐしはたけに一尺餘ばかりあまらせ給て、御ありさまさゝやかに、ふくらかに、うつくしうあいぎやうづきをかしげにおはします、たゞいまの國王○後一條の御おやと聞えさすべきにもあらず、をかしげに女御など聞えさせんによげなる御有樣なり、ことしは萬壽三年正月十九日、御歳三十九にぞならせ給ける、いみじうわかくめでたくおはしますに、あまの御裝束いみじうせさせ給へり、○中略いみじううつくしげにあまそぎたるちごどもの樣にぞおはします、御ぐしあげさせ給へりし御有さまにもよろず見えさせ給、

〔續世繼一望月〕女院○一條后彰子は、○中略萬壽三年正月十九日に、御さまかへさせ給、御年三十九、御名は清淨覺と申けり、○中略はじめは御ぐしそがせ給て、後にみなおろさせ給、

〔大鏡裏書〕上東門院彰子御事

萬壽三年正月十九日、出家、年三十九法名清淨覺、同日、院號、長暦三年五月七日、於ニ法成寺ニ剃ニ除鬢髮

〔扶桑略記二十八後朱雀〕長暦三年五月七日、上東門院○一條后彰子令レ剃ニ御髮、重受戒、大僧正明尊爲ニ戒師、

所、法皇同御坐御聽聞所南間、召公衡公卿可召之由有仰、仍廻公卿座方、招爲行（束帶）仰其由、畢爲行參進、前相國御參後告申其由、仍公卿著堂前座、前相國（直衣、束）公衡（改著直衣、西）吉田中納言（束帶、西、女院執權、年預也）中宮大夫（束帶、東）富小路中納言（束帶、東）滋野井中納言（束帶、東）別當（束帶、以上不帶劔笏、東）以上七人兼被下御點也（但非兼日御點、就當座被仰下也）此外侍從宰相（隆良）堀川宰相、左兵衛督（以上束帶、今日人々多來訪八講、仍著束帶也）等、暫候公卿座邊歟、此間雷鳴數聲、小時戒和尚青蓮院無品法親王（慈助、法皇御連枝、紫色法服）經簀子參上給（諸卿不動座）從僧持參居箱香爐箱等（入戒體）置脇机、敷草座於禮盤上退下、法親王自披正面透障子令參入、令著西上給、唄師良覺大僧正（法服）奉相從、但不入正面廻後戶、自妻戶參入著座、次戒師起座著禮盤、次塗香灑水等、次女院御拜（兩段再拜、如形歟、依爲簾中不見其儀）先春日社、次先公墳墓、次准后（當時令坐嵯峨給）此間事法皇令扶持申給歟、次所役女房（冷泉局、公泰卿女）（息、御五中納言入道實不、卿女、別當局、茂通卿女）持參雜具等、御脇息、御打敷、御手梳、御水瓶二口（各入湯）御剃刀、剃菜、并紙小札、脂燭等、御湯帷（打懸御脇息上）次奉除草髮（此間唄師唱設形唄、其音不絕）其儀先女房二人（新准后、御乳母）指脂燭（依爲密儀、及准后）冷泉局、奉結分御髮之後奉洗之、次戒師參簾中故令除之、次剃手權僧正勝惠（法服）自後戶方參入（依例不謁其座、又不著座、不賜布施）先奉剃左御髮、次奉剃右御髮、次剃除畢（唄師止音）付札（左許歟）次本役人參進撤雜具等、次著御法衣、次女房供御手水、次著御御袈裟、其儀仙院自令取御袈裟給、自簾中被指出之（此間女房可卷上御簾三尺許、但今度不及其儀歟）戒師進寄（先是降禮盤、令著簾下座給、件座大文高麗半帖也、本所兼被儲之）取之、誦頌之後返上、仙院令頂戴給、又被返下、如此三反畢著御之、次奉授御法名（遍照覺、御戒師撰申之、此外正法覺、圓鏡智等撰申之、其內被用遍照覺云々）次御授戒、先三禮、如來唄、表白、神分、次戒體、御受戒畢、戒師令復本座給、次預一人參上、撤正面透障子（依爲布施路也）次施給（○施恐誤）布施（本儀自後戶可被引之云々、而今夜甚雨太、無便之間、儲布施於寢殿階隱間、公卿列立寢殿西作合南簀子程取之也）公卿自下臈起座、列立作合南簀子、先自御聽聞所東南面妻戶取出御衣（蘇芳御單重、青御衣著、朽葉御小袿、入平絹假裏）中宮權大夫賴房（勘解由次官）取之進前相國、前相國取之、經廣庇入正面妻戶間、令置御戒師前給（直令退出給了）次織物被物一重、公衡取之（藏人判官說藤傳之）裹物一（納諸）吉田中納言取之、絹二裹（各五匹）滋野井中納言別當取之、綿二裹（各五十兩）侍從宰相、堀川宰相取之、鈍色裝束一具（裹物之後）

前相國御墳墓、二品大夫人等也、戒師又談戒體、次持參御出家什物、大納言局殿爲教卿傳之、東御方殿、如今出川太政大臣殿、同祗候、御帷、御脇息、御手洗、在貫簀打敷、御水瓶二口、各入湯、御剃刀四柄、打敷一枚、參差之、刃以左刮以紙裹御剃刀柄、御本結、二筋、紙札等一折敷、札上右字書之、机上破之插之、檀紙各二枚卷之爲二、紙捻二筋、各結合之、檀紙中卷藏之、爲裹御髮也、指燭菊葉等一折敷之、布指燭四筋、重土器二口入之、菊葉同之、爲盡儀者可略指燭、等也、以上折敷三枚、面押檀紙、次奉剃除美髮、女房役奉結分御髮、後奉洗之、其後剃手役人、參進奉剃之、此間唄發音、戒師前行、奉剃除右方御髮了、裹紙以紙捻結之、付右方札、左方作方同之、但爲付札、撤什物等、殘剃刀一柄、仙院著御法衣、任近例爲御付衣、仙院持御袈裟著御端御座、先之女房自御簾下、指出御剃刀、戒師奉除周羅髮、戒師降半疊、參進御簾下、取御剃刀奉除之、奉授御袈裟、其儀仙院自取御袈裟自簾中令指出給、戒師取之誦唄返進、仙院取之令頂戴給、如斯三度、畢著御之、奉授御法名、佛性覺、仙院令還著本御座給、此間御戒師還著半疊、取剃刀暫置机上、奉授沙彌戒、又奉授菩薩十戒、依別仰有此事、且存先規云々、神分廻向打磬、一度、戒師降半疊復座、從僧撤法具、次右少辨參進公卿後、申可有御布施之由於上首、家君○中略、次御戒師退出、今夜女房二人、右衛門督局、其父不知、及僧女云云、侍從局、安藝守季衡女、於私宿所出家、則歸參云々、

○按ズルニ、龜山天皇ノ崩御ハ、弘安六年ヨリ後ルヽ事二十三年、嘉元三年九月十五日ニアリ、

〔入道左大臣記〕正應六年○永仁元年六月七日、東二條院○後深草后藤原公子御出家也、即被始行御逆修、左少辨爲行奉行之、公衡同口入之、兼奉仕戒場御裝束、其儀以無量光院東庇御聽聞所也爲御所、西面三个間覆翠簾、北第一間傍東立廻五尺屏風、敷大文疊二枚、南北行爲女院御座、道場南面東第一間迫南敷小文疊一枚、東西行其上加東京茵爲戒師座、同西第二間敷小文疊一枚爲唄師座、東第二間傍北御簾立佛臺一基、奉懸釋迦三尊像、件本尊繡物也、戒師被隨身之、一尊別一幅也、其前立机一脚、置花瓶二口、火舍、塗香、灑水器各一口、散杖等、其左右立脇机各一脚、戒師物具等置之、右方立磬臺一基、左右切燈臺、机南立禮盤、御所北障子外、爲所役女房候所、其傍立御厨子、今度白木二階棚也、兼置雜具等、件置樣如定式、公衡以下暫候東公卿座、酉二點法皇○後深草召公衡、漸可有渡御戒場之由有仰、仍以預法師告申前相國、畢秉燭以前相國令參給、女院渡御御

明ル四月廿七日改元有テ、保元トゾ申ケル、此頃ヨリ法皇○鳥羽御不豫ノ事アリ、偏ニ去年ノ秋、近衞院先ダヽセ給ヒシ、御歎ノ積ニヤト世人申ケレドモ、業病受サセ給ヒケルナリ、日ニ隨テ重ラセ給ヘバ、月ヲ追テ憑少ク見エサセオハシマセバ、同六月十三日、美福門院、鳥羽ノ、成菩提院ノ御所ニテ御カザリオロサセ給、現世後生ヲ憑進ラセ給フ、近衞院モ先立給ヌ、又偕老同穴ノ御契淺カラザリシ法皇モ御惱重ラセ給フ、御歎ノ餘ニ思召立トゾ聞エシ、御戒ノ師ニハ、三瀧上人觀空ゾ被參ケル、哀成シ事共也、

〔猪隈關白記〕建仁元年十月十八日乙未、或人云、一昨日、宜秋門院○後鳥羽后藤原任子出家云々、

〔女院小傳〕宜秋門院藤任子後鳥羽后、○中略建仁元、十、十七爲尼、清淨智、三十、

〔女院御出家年々〕宜秋門院、後法性寺關白娘、後鳥羽院妃、建仁元年十月廿○廿恐十誤七日御出家、御年廿九

○按ズルニ、後鳥羽天皇ノ崩御ハ、建仁元年ヨリ後ルヽコト三十九年、延應元年二月二十二日ニアリ、

〔女院小傳〕陰明門院藤麗子土御門后、○中略承久二、正、廿四爲尼、年三十六、清淨妙、

〔女院御出家年々〕陰明門院中山入道太政大臣娘、土御門院妃、承久二年正月廿四日、御出家、御年三十六

○按ズルニ、土御門天皇ノ崩御ハ、承久二年ヨリ後ルヽコト十年、寛喜三年十月十一日ニアリ、

〔女院小傳〕東一條院藤立子順德后、○中略嘉祿二、八、七爲尼、清淨觀、三十六、

○按ズルニ、順德天皇ノ崩御ハ、嘉祿二年ヨリ後ルヽコト十八年、仁治三年九月十二日ニアリ、

〔竹林院左府記〕弘安六年八月十三日甲午、今日今出川院、御年三十一、○龜山后藤原嬉子有御出家事、○中略右少辨俊定年預院司奉行之、但每事省略、公卿殿上人以下、不及諸司催、只內々自本處被仰云々、後定當日奉行許也、於三身堂西園寺內、持佛堂也、小有其儀、當日早旦奉仕御裝束、○中略亥刻御戒師僧正道耀東寺長者、且女院御親昵也、參上、○中略次仙院渡御御座、御聽聞中、○中略戒師起座著半疊、所謂禮盤也、如中疊、塗香灑水等、打磬二度三禮、如來唄、啓白以下如常、仙院御拜、無起座、有合掌、各向其方、氏神春日、國主、故

悼亡而出家

〔三代實錄（三十五陽成）〕元慶三年三月廿三日癸丑、淳和太皇太后崩、（○中略）承和七年五月、淳和天皇崩、皇太后落髮爲尼、毀容骨立、

○按ズルニ、續日本後紀、九年十二月ニ作ル、本文ト二年ノ差アリ、附シテ參考ニ供ス、

出家出於不得止

〔岡屋關白記〕寛元四年四月廿日己卯、入夜參六條殿、鷹司院（○後堀河后藤原長子）可有落飾事也、廿九、自宣陽門院（○後白河皇女覲子）被勸申歟、有子細云々、松月上人夢想ニ、無御出家者、可爲重御惱之由見之間、去正月之比申之、又令密參院（○後嵯峨）給、彼（御在位）風聞時、有世聞、此條付總別宣陽門院被痛思食歟、此趣尤可然、取別御心中ニハ、令恐憚太政大臣（○藤原實氏）給事過千萬事、其故ハ爲天下權臣之上、當時一向被憑思食之人也、御戒師良惠僧正、（東寺長者）一唄師房圓法印、（東寺）ソリ手ハ盛兼卿子息也、（山）依非外人奉仕之、右大臣（○藤原兼平）已下公卿八九人許參候、依有所勞氣、早出歸近衞、

〔女院小傳〕鷹司院（藤原長子）後堀河后、（○中略）寛元四、四、廿爲尼（廿九、蓮性、）

夫帝在世中出家

〔日本紀略（醍醐）〕延喜五年五月十五日、皇后（○宇多）藤原温子落飾、（年三十四）

○按ズルニ、宇多天皇ノ崩御ハ、延喜五年ヨリ後ル丶コト二十七年、承平元年ニ在リ、

〔女院小傳〕高陽院、（藤原泰子、本名勳子、依衆難改之、）鳥羽后、（○中略）保延七、（○永治元年）五、五爲尼、（清淨理、四十七、）

○按ズルニ、鳥羽天皇ノ崩御ハ、永治元年ヨリ後ル丶コト十六年、保元元年七月二日ニ在リ、

〔本朝世紀〕康治元年二月廿六日、（○中略）是日待賢門院（藤原璋子○鳥羽后）於仁和寺法金剛院御所、有御出家事、（法名眞如）以僧正信證爲戒師、第五法親王被剃御髮、法皇（○鳥羽）幷上皇（○崇德）同臨幸、女房二人同爲尼、故顯仲卿女、（號堀河殿）故右京大夫藤定實朝臣女、（號中納言）女院春秋四十二、未及衰邁御、天下諸人知與不知無不悲歎者也、

〔百錬抄（七後白河）〕保元元年六月十二日、美福門院（○鳥羽后得子）御出家、

〔保元物語（一）〕法皇崩御事

後宮出家 受戒灌頂附

後宮ノ出家ハ、聖武天皇ノ皇后藤原安宿媛ニ始マリテ、其事蹟多端ナレド、殊ニ例外ナルモノハ、奉事セル天皇ノ在位中ニ出家スルト、出家シテ後ニ再ビ入内スルモノトス、其出家ノ後ニ再ビ入内スル事アリシハ、婦人ノ出家ハ、多クハ額髮ヲ剃ルニ止マルニ由レリ、故ニ初ニ額髮ヲ剃リテ尼ト爲リ、後ニ全剃シテ圓頂ト爲ルモノアリ、奉事セル上皇ノ出家ノ後ニ、倶ニ出家スルモノハ其例少カラズ、

信佛教而出家

〔東大寺要錄　一〕或日記云、天平廿年戊子正月八日、天皇幷后〇聖武后藤原安宿媛御出家、四月八日受菩薩戒、

〔兵範記〕仁安三年十月九日丁酉、今夜中宮〇二條后藤原育子御遁世、御年廿三、去永萬年中、二條院崩御以後、雖有此御願、先帝〇六條在位、幼主同輿之間、于今遲々、既當此時、今遂素懷給云々、下官雖有御傍親好、依神事奉行不能參入、于時御坐于高倉殿、戒師宇治大僧正覺忠、唄師法印全玄、剃除法印道圓、戒師唄師有施物云々、御名眞如覺云々、今日事大進光長奉行云々、

〔百練抄　七六條〕仁安三年十月廿二日、中宮育子出家、

由疾病出家

〔續日本後紀　二十仁明〕嘉祥三年三月辛丑、嵯峨太皇太后〇嵯峨后橘嘉智子依病入道、

〔百練抄　四一條〕正曆二年四月二日、太皇太后〇圓融后詮子三條第燒亡、御式曹司、六月遷東三條南院、火事之後造營也、九月十六日、太皇太后依御惱於式曹司出家、即號東三條院、天皇行幸、

〔安院小傳〕九條院、藤原呈子、近衛后、〇中略久壽二、八、十五、爲尼、御惱、年廿五、清淨觀、

〔山槐記〕永曆元年八月十九日甲子、今曉中宮〇二條后姝子、鳥羽皇女、依御惱危急有御出家云々、院〇後白河去夜有御幸、曉天還御云々、先々此事御發心之由粗有其聞、〇中略御年廿云々、大悲事也、自去春比不入御禁裏、御白河押小路殿也、

もむき申わきらめ給ふ、十戒を先の世にうけさせ給ひてやぶらせ給はざりければこそ、此世にて十善の位ながくたもち、佛法をわがめ、一切衆生をわはれみさせ給ふ心、いまだむかしより今に至るまでかばかりの帝王おはしまさず、いとゞことよひの御戒のしるしに、すみやかに御惱消除せうさんして、百年の御命ながくたもたしめ給へと申さるゝ、きくにたゞ今やませたまひぬるときこえてめでたき、さて御戒うけさせまゐらすれば、いとよくたもつ〳〵と仰らるゝ、殿たちたもつと仰らるゝやと申させ給へばうなづかせ給ふ、

〔續日本紀 稱德二十六〕天平神護元年十一月庚辰、詔曰、今勅久、今日方大新嘗乃猶良比乃豐明聞行日爾在、然此遍能常利余別仁在故方、朕方佛能御弟子等天、〈〇天上恐脱之字〉菩薩能戒乎受賜天在、此仁依天上都方波三寶仁供奉、次仁天社國社乃神等乎毛爲夜備末都利、次仁供奉留親王多知臣多知百官能人等、天下能人民諸乎愍賜慈賜牟等念天奈毛、還天復天下乎治賜、〈〇中略〉復勅久、神等乎方三寶余利離天不觸物曾止奈毛人能念天在、然經乎見末都禮方、佛能御法乎護末都利尊末都流方諸乃神多知仁伊末志家利、故是以出家人毛白衣毛相雜天供奉仁、豈障事波不在止念天奈毛、本忌之可如久方不忌之天、此乃大嘗方聞行止宣御命乎諸聞食止宣、

〔續日本後紀 仁明二十〕嘉祥三年三月己丑、令大法師道詮等請戒、主上口受永不殺生、

〔三代實錄 清和八〕貞觀六年正月十四日辛丑、延曆寺座主傳燈大法師位圓仁卒、〈〇中略〉天安二年、〈〇中略〉十二月皇太子殿祚、明年天皇〈〇清和〉屈圓仁於内裏受菩薩戒、

〔讃岐典侍日記 上〕六月廿日〈〇嘉承二年〉の事ぞかし、内〈〇堀河〉は例ざまにもおぼしめされざりし御けしき、ともすればうちふしがちにて、〈〇中略〉七月六日より御こゝち大事に重らせたまひぬれば、〈〇中略〉參りて見れば、殿や〈〇忠實〉大臣殿〈〇雅實〉など、院〈〇白河〉より戒うけさせ給ふべきなりと奏せさせ給うけりとて、せんせい法印めすべきさたせられ、其御もうけどもせらるゝ程なりけり、〈〇中略〉今は法印めし入よとてふたまなる碁など參らせて、戒のさたせさせたまふ、法印まゐらせ給ひぬれば、みき丁ばかりへだてゝ、御なはしとりてまゐれと仰らるれば取て參りたり、御手水まゐらすべけれど、おきわがらせ給ふべきやうなければ、紙をぬらして御手などのごはせ參らせなどする程ぞかなしき、御かうぶりなど持てまゐりたれば、するかせぬかのほどにおし入て、御なはし引かけて參らせたる、御ひもさゝむとおぼしめしたるなめり、ささんとせさせ給へど御手もはれにたればえさゝせ給はぬ、みる心ちぞ目もくれてはか〳〵しう見えぬ、かね打ならして事のお

天皇受戒

て藏人辨と申けるが扇に、妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者といふ文を書て、もたれたりけるを御覽ぜられけるよりこそ、いとゞ御心おこりにけれ、

〔古事談王道后宮一〕花山院御出家ノ時天下騷動ス、有人大入道殿〇兼家ニ申ス、仰云、ケシウハアラジ、能求ヨ云々、不令騷給云々、

〔大鏡太政大臣伊尹五〕花山院の御出家の本意あり、いみじう行はせたまふ、修行せさせたまはぬ所なし、されば熊野の道に千里の濱といふ所にて、御こゝちそこなはせたまへれば、濱づらに石のあるを御枕にて大とのごもりたるに、いと近くあまの鹽やく烟のたちのぼる心ぼそさ、げにいかにあはれにおぼされけんな、

旅の空よはのけぶりとのぼりなばあまのともし火たくかとやみん、かゝる程に御驗もいみじうつかせ給ひて、中堂にのぼらせ給へる夜、驗くらべしけるをこゝろみんとおぼしめして、御心の內に念じおはしましければ、護法つきたる法師、おはします御屛風のつらにひきつけられて、ふつとうごきもせず、あまりひさしくなれば、いまはゆるさせ給ふおり處つげつるをそうぞものがりをどりいぬるを、はやう院の御護法のひきとるにこそありけれと、人々あはれに見奉る、それさる事に侍り驗もなきによる事なれば、いみじきおこなひ人也ともいかでかなずらひ申さん、前生の戒力に又國王位をすて給へる、出家御功德かぎりなき御事にこそおはしますらめ、ゆくすゑまでもさばかりにならせ給ひなん御心には、懈怠せさせ給ふべき事かはな、

〔日本紀略後一條十四〕長元九年四月十七日乙丑、戌刻天皇落飾、崩于清涼殿、

〔扶桑略記聖武下拔萃〕天平廿一年〇天平勝寶元年正月十四日、〇中略後高野天皇〇孝謙受戒爲尼、名法基、

〇按ズルニ、後ハ、後日ノ義ナリ、

〔帝王編年記孝謙十一〕天平勝寶六年甲午四月、東大寺戒壇、天皇初登壇受戒、鑒眞和尙菩薩戒也、

かならぬ御けしきを、おほきおとゞ（○藤原伊尹）覺しなげき、御をぢ中納言（○藤原義懐、伊尹子）も人しれずたゞむねつぶれてのみおぼさるべし、説經をつねに花山の嚴久阿闍梨をめしつゝせさせ給、御心のうちの道心かぎりなくおはします、妻子珍寶及王位といふ事を御くちのはにかけさせ給へるも、惟成の辨いみじうらうたき物につかはせ給ふも、中納言もろ共にこの御道心こそうしろめたけれ、出家入道も皆れいの事なれど、これはいかにぞやある御心ざまのをり〳〵出くるはことごとならじ、たゞ冷泉院の御もの〻けのせさせ給なるべしなど歎き申わたる程に、猶あやしう例ならずもの〻すゞろはしげにのみおはしますは、中納言なども御とのゐがちにつかうまつり給ほどに、寛和二年六月廿二日の夜、にはかにうせさせ給ひぬとのゝしる、（○中略）なつの夜もはかなくあけて、中納言や惟成の辨など花山にたづねまゐりにけり、そこにめもつゝらかなる小法師にてついゐさせ給へるものか、あなかなしやいみじやとそこにふしまろびて、中納言も法師になり給ぬ、これしげの辨もなり給ぬ、あさましうゆゝしうあはれにかなしとはこれよりはかの事あべきにあらず、かの御ことぐさの妻子珍寶及王位も、かくおぼしとりたるなりけりとみえさせ給、

〔古事談一王道后宮〕此御出家（○花山）ノ發心ハ、弘徽殿ノ女御（恒德公（爲光）女）鍾愛ノ間忽薨逝、仍御悲歎ノ處、町尻殿（○藤原道兼）得便宜、書世間無常法文（妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者等ノ文也）、等奉見、被勸申御出家ノ事、諸共ニ出家御供可仕由被契申云云、而令剃御首給ノ後申云、大臣（○道兼父兼家）ニ替ラヌスガタヲ今一度ミエテ、可歸參ノ由申テ逐電スト云々、其時我ヲ謀リケリトテ涕泣給云々、

〔古今著聞集十三哀傷〕花山院、（○中略）世をそむかせ給事のおこりいとあはれにかなし、法住寺相國（○藤原爲光）の御むすめ、弘徽殿の女御とてさぶらはせ給けるが、限りなく御心ざし深かりけるに、おくれさせ給て御歎き淺からず、世中心細くおぼし亂れたりける比、粟田關白（○藤原道兼）いまだ殿上人に

定マレルニ由リテ、預メ讓シタマヒシモノニテ、藤原仲麻呂ガ、既ニ太保ニ任ゼラレテ、其日建言シテ太保ヲ置キ、類聚三代格天平勝寶元年六月廿六日ノ官符ノ、改元前數日ニ在リテ、天平勝寶トアルガ如クナラン、彼此對照シテ以テ當時ノ狀ヲ知ルベシ、故ニ今聖武天皇ノ出家ヲ以テ、天皇出家ノ首ニ居ケリ、

〔續日本後紀二十仁明〕嘉祥三年三月丁酉、是日天皇落飾入道、誓受淸戒、四品中務卿宗康親王、從四位上阿波守源朝臣多、同時入道、並天皇之皇子也、時人莫不悲之、　己亥、帝崩於淸涼殿、時春秋四十一、

〔皇年代略記村上〕康保四年五月廿五日、崩、四十二、先御落飾、法諱覺貞、於淸涼殿、

〔百練抄四花山〕寛和二年六月廿二日、夜、〇日本紀略作廿三日今曉、天皇偸出宮中、向花山寺出家、年十九、法名入覺、僧嚴久、藏人右少辨道兼扈從、以左少將道綱獻劒璽於東宮、道兼之謀也、中納言義懷、左中辨惟成追參花山寺、同以出家、

〔大鏡裏書〕花山院御事、在位二年　冷泉院第一皇子、〇中略寛和二年六月廿三日、丑刻許密々出禁中、向東山花山寺出家、左少辨藤原道兼奉從之、先之密奉劒璽於春宮、翌日招於權僧正尋禪剃御頭、法名入覺、年十九

〔榮花物語二花山〕一條殿の女御〇花山女御恆子は、〇中略はらませ給て、八月といふにうせ給ぬ、〇中略うち〇花山にもたれこめてぞおはしまして、御聲もをしませ給はず、いとさまあしき迄なかせ給、御めのと達せいし聞えさすれども聞しめしいれず、あはれにいみじ、〇中略寛和二年にもなりぬ、〇中略いかなるころにかあらん、よのなかの人いみじく道心おこして、あまほうしになりはてぬとのみ、きこゆ、これをみかど聞しめして、はかなきよを覺しなげかせ給ひて、あはれ弘徽殿〇恆子いかにつみふかゝらん、かゝる人はいとつみおもくこそあなれ、いかでかのつみをほろぼさばやとおぼしみだるゝ事ども御心の中にあるべし、この御心のあやしうたうときをりおほく、心のど

寺墾田一百町、七月乙巳、定諸寺墾田地限、亦大倭國分金光明寺四千町、並不與此詔合、續紀又曰、天平勝寶二年二月壬午、益大倭金光明寺封三千五百戸、通前五千戸、此詔豫曰五千戸、亦蓋追刻時所改增也、

〔日本靈異記中〕打法師以現得惡病而死緣第三十五

宇遲王者、天骨邪見、不信三寶、〇中略王眷屬奏於天皇、〇聖武諦鏡法師咀于宇遲、令捉將殺、〇中略天皇勅詔、朕亦法師、諦鏡亦僧、法師云、何殺於法師、宇遲招災非諦鏡咎、天皇剃除鬢髮受戒行道、故償此法師不殺諦鏡、

〔弘仁私記序〕天平勝寶之前、感神天皇(聖武)年號也、世號法師天皇、〇下略

〔水鏡中聖武〕次の御門聖武天皇と申き、〇中略七月二日、〇天平勝寶元年位を去て、御ぐしおろして、太上天皇とぞ申侍りし、

〔一代要記一聖武〕天平勝寶元年七月甲午、〇是日御讓位御出家、法名勝滿

〔神皇正統記聖武〕天下を治め給ふ事二十五年、天位を御女高野姫の皇女〇孝謙にゆづりて、太上天皇と申、後に出家せさせたまふ、天皇出家のはじめなり、〇中略皇后光明子も同じく出家せさせ給ふ、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶八歳五月壬申、勅曰、太上天皇〇聖武出家歸佛、更不奉諡、所司知之、

〇按ズルニ、水鏡ニハ、聖武天皇ノ出家ヲ讓位ノ後ノ事ト爲シ、一代要記ニハ、讓位ノ日ニ在リト爲ス、然レドモ靈異記ニハ、天皇ノ事ヲ擧ゲテ、天皇剃除鬢髮ト云ヒ、次ニ勅ヲ擧ゲテ、朕亦法師ト云ヒ、東大寺所藏ナル銅版詔書ニハ、菩薩戒弟子皇帝沙彌勝滿ナドアルニ據リテ考フルニ、在位ノ時ニ既ニ出家シタマヒシガ如シ、續日本紀天平勝寶元年閏五月癸丑ノ願文ニ、太上天皇沙彌勝滿トアルモ、亦在位ノ時ノ事ナリ、而シテ太上天皇トアルハ、當時讓位ノ議ノ既ニ

十三年發願時之語、非勝寶五年落成時之文、先後太政大臣鎌足公、不比等公、橘氏大夫人、縣犬養宿禰東人女三千代也、適不比等公生光明子、和銅元年十一月賜橘宿禰姓、天平五年正月薨、天平寶字四年八月贈正一位、爲大夫人、然此詔豫曰大夫人、殊不可曉、

又

施

封五千戸、

水田一萬町、

以前捧上件物、遠限日月、窮未來際、敬納彼三寶分、依此發願、太上天皇沙彌勝滿、諸佛擁護、法樂薰質、萬病消除、壽命延長、一切所願、皆使滿足、令法久住、拔濟群生、天下大地、人民快樂、法界有情、共成佛道、以代代國王、爲我等檀越、若我寺興復、天下興復、若我寺衰弊、天下衰弊、復誓、其後代有不道之主、邪賊之臣、若犯若破障、而不行者、是人必得敬〇敬恐殺誤辱、十方三世諸佛菩薩、一切賢聖之罪、終當墮大地獄、無數劫中、永無出離、十方一切諸天梵天、護塔大善神王、及普天率土、有勢威力、天神地祇、七廟尊靈、并佐命立功大臣將軍靈、共起大禍、永滅子孫、若不犯觸敬勤行者、世世累福終降子孫、共座〇座上恐脱出字城、早發覺岸、

天平勝寶元年

平城宮御宇太上天皇法名勝滿

右刻在前詔背、按續日本紀天平感寶元年閏五月癸丑、捨諸寺絁綿布稻墾田地詔文略同、遠江國相良平田寺、亦藏是日勅書、蓋是所賜大安寺、寺廢後在于此也、其紀年云天平感寶、與史同、按是歲七月讓位於皇太子、改元勝寶、然今詔在閏五月、而云勝寶者、是刻蓋同在刻勝寶五年詔之時、故記以改號耳、其在帝位而稱太上天皇、續紀及平田寺勅書皆同、疑不能明也、又按續紀是日所捨、東大

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年閏五月癸丑、詔捨大安、藥師、元興、興福、東大五寺、各絁五百疋、綿一千屯、布一千端、稻一十萬束、墾田地一百町、法隆寺絁四百疋、綿一千屯、布八百端、稻一十萬束、墾田地一百町、崇福、香山藥師、建興、法花四寺、各絁二百疋、布四百端、綿一千屯、稻一十萬束、墾田地一百町、因發御願曰、以花嚴經爲本、一切大乘小乘經律論抄疏章等、必爲轉讀講說、悉令盡竟、遠限日月、窮未來際、今故以茲資物、敬捨諸寺、所冀太上天皇（○聖武）沙彌勝滿諸佛擁護、法藥薰質、萬病消除、壽命延長、一切所願、皆使滿足、令法久住、拔濟群生、天下太平、兆民快樂、法界有情、共成佛道、

〔古京遺文〕勝寶感神聖武皇帝銅版詔書

菩薩戒弟子皇帝沙彌勝滿稽首、十方三世諸佛法僧、去天平十三年歲次辛巳、春二月十四日、朕發願稱、廣爲蒼生遍求景福、天下諸國各合（○合下恐脫力字）敬造金光明四天王護國之僧寺、并寫金光明最勝王經十部、住僧廿人、施封五十戶水田十町、又於其寺、造七重塔一區、別寫金字金光明最勝王經一部、安置塔中、又造法華滅罪之尼寺、并寫妙法蓮華經十部、住尼十人、水田十町、所冀聖法之盛、與天地而永流、擁護之恩、被幽明而恒滿、天地神祇、共相和順、恒將福慶、永護國家、開闢已降、先帝尊靈長幸珠林、同遊寶刹、又願太上天皇、太皇后藤原氏、皇太子已下、親王及大臣等、同資此福、俱到彼岸、藤原氏先後太政大臣、及皇后先妣、從一位橘氏大夫人之靈識、恒奉先帝、而陪遊淨土、長顧後代、而常衞聖朝、乃至自古已來至於今日、身爲大臣、竭忠奉國者、及見在子孫、俱因此福、各繼前範、堅字（○字恐守誤）君臣之禮、長紹父祖之名、廣給群生、通該庶品、同辭愛網、共出塵籠者、今以天平勝寶五年正月十五日、莊嚴已畢、仍置塔中、伏願前日之志、悉皆成就、若有後代聖主賢卿、承成此願、乾坤致福、愚君拙臣、改替此願、神明効訓、

右銅版詔書、藏在東大寺、二月十四日、續紀天平十九年十一月己卯詔所云亦同、然於十三年紀則係之三月廿四日、未知何謂也、是詔在讓位後數年、而言皇帝、又謂旣崩元正天皇、爲太上天皇、謂太皇太后宮子、爲皇太后、謂今上寶字稱德孝謙皇帝、爲皇太子、謂皇太后光明子、爲皇后者、皆是天平

受衣

壇灌頂、帝者密灌於此始焉、

〔日本紀略 醍醐〕延喜十年九月某日、太上法皇〇宇多登天台山、於座主増命坊受灌頂、其次廻心御受戒、戒壇現紫金之光、天子聞之、遣使増命授法眼和尚位、

〔百練抄 一四條〕永延二年十月廿九日、圓融院於天台戒壇院、受戒灌頂、

〔皇年代略記 光嚴〕觀應二年八月八日、於河州行宮御落飾、四十一、法諱勝光智、御戒師西大寺元燿上人、御授衣之延文元年月日、於河州離宮山良、覺明和尚奉令著禪衣、此時御諱上一字勝、被止之、

〔皇年代略記 光明〕觀應二年十二月廿八日、俄以御落飾、三十一、御菩提心云々、法諱眞常惠、御戒師泉涌寺了寂上人、〇中略文和四年八月四日、自河州東條行宮、出御伏見殿、此間令著禪衣御、御授覺明上人、其後遷御當所法〇法皇紹運錄作胤保、安寺、自去年月日、著御黑衣、御持齋云々、所々御經行、

〔園太曆〕觀應二年十二月廿八日、入夜大夫參御所、深更歸來、新院〇光明今夕酉刻御落飾、不可思議事也、御迷惑、且又定有利口等、能々可心得之旨勅定云々、

〔椿葉記〕觀應二年十二月廿八日、〇中略この日、光明院俄に御出家あり、御發心と聞ゆ、其後伏見のはうわんじにて、禪衣を著しましとます、長谷寺の御庵に御隱居あり、

〇

天皇出家

〔東大寺要錄 一〕或日記云、天平廿年戊子正月八日、〇扶桑略記作天平廿一年、即天平勝寶元年正月十四日、天皇〇聖武并后〇光明子御出家、四月八日、受菩薩戒名。勝。滿。以行基菩薩爲戒師云々、

〇按ズルニ、廿年恐ラクハ廿一年即天平勝寶元年ノ誤ナラン、

〔東大寺藏勅書〕勅旨、〇中略天平勝寶元年　平城宮御宇太上天皇法名勝滿

〔續日本紀 十七聖武〕天平勝寶元年四月甲午朔、天皇幸東大寺、御盧舍那佛像前殿、北面對佛、皇后太子並侍焉、〇中略勅遣左大臣橘宿禰諸兄白佛、三寶乃奴止仕奉流天皇、〇下略

灌頂

權僧正明雲爲御戒師、

〔吉記〕安元二年四月廿七日壬寅、院(〇後白河)登山御幸也、昨日依雨延引也、今日依可有御受戒、午刻出御、〇中略入夜著御布御法服、渡御戒壇、僧綱三口權少僧都實宴、(持三衣御戒牒)實全、(持座具草鞋)實修(持水瓶草鞋)等扈從、公卿已下同候御供、次羯磨法印顯智、教授前少僧都顯眞等、參向中門下、羯磨沙彌(入道太政大臣辭海)清海(右大將息)等相從、次著御回心床、此後次第存先例、戒和尚座主權僧正明雲、說淨法印覺算、羯磨教授見右、唄法眼圓雲、圓定、著衣衆六口、法橋顯意、靜然、永辨、智海、大法師源順、道淵等也、事了和尚已下賜祿、(公卿朝臣等取之)所司等祿書目六付寺家、依甚雨深更也、次還御講堂、有御誦經、前大僧正章實爲御導師、此間勅使親信朝臣參上、光憲朝臣申事由、(件勅使被用御共人歟)次參御中堂、千僧供事有啓白、章實同爲導師、次被始藥師經御讀經、次備御燈明、次被行御誦經、戒牒(藤中納言資興草之、堀河中納言忠親清書之、用青色紙、)度緣宣旨、(左中辨重方朝臣持參七條殿、大理取之、以光能朝臣被奏之、〇中略)　廿八日癸卯、後聞今日法皇令巡禮山上所々給、先文殊樓、次常行堂、次法華堂、次四王院、次千手堂、次無動寺、各有誦經、次於南山房七宮被供御膳、有御贈物、但不參會給云云、次還御、入夜參御中堂、有番論議事云々、　廿九日甲辰、後聞今日法皇參御西塔釋迦堂行堂、次法華堂、次寶幢院、各有御誦經、著御本覺院、實修僧都供御膳、有御贈物云々、次御橫川中堂、次法界房砂臺堂、次常行堂、次惠心院、次華臺院、次法華堂、各有御誦經、次參御中堂、有驗競事、五月一日乙巳、今日山御幸還御也、早旦參御中堂、有御供花事、又有御誦經藥師經御讀經、結願了給布施、次御歸洛畢、

〔增鏡十一今日の日陰〕又の年(〇正應三年)二月の比、一院(〇後深草)御髮おろし給ふ、〇中略二月十一日、龜山殿にて御いむ事受させ給ふ、四十八にぞならせ給ふ、御法名素實と申也、

〔元亨釋書一傳智〕釋空海、世姓佐伯氏、讃州多度郡人、〇中略十有三年、(〇弘仁、一代要記作十二年、)大同太上皇、(〇平城)入

著御座、二拜、次著御御所、公卿侍臣皆以扈從、今日終日雨下、當日早旦送遣粥幷時於諸僧房、（大十師八人、小十師十人、幷三師等也、）次賜法服於三師宿所、（和上二品覺法法親王、羯磨師權少僧都寬信、教授權律師淸圓也、以院使爲使、）戊刻槌入堂鐘、同刻臨幸戒壇、公卿侍臣束帶、法皇御布法服、御共僧綱三人、（法眼寬遍持三衣、權律師覺雅持草座、權律師寬雄持水瓶、）羯磨沙彌二人、（一人定遍、右馬權頭顯定男、）侍臣等執炬火前行、僧侶在御後、公卿同之、自戒壇西廊北腋門入御、次和尙羯磨教授著袈裟、大十師（權中）等各執香爐、教授師了、先例立堂前砌座下、（此間堂戶未開、）教授立留第三座邊、和上羯磨各立座前、從僧敷草座座具等、十師向北總禮、此間法皇入御堂內沙彌戒座、于時和上大十師更向南方、自取草鞋、置座之後、其後奉請師僧如常、（于時庭中立柱松等、）入道前大相國、幷沙彌定遍、南中門內敷草座南北、每奉請師僧各三禮唱頂戴、次和上以下退座、徘徊西軒廊、次又開堂戶、槌登壇鐘、和上以下下執香爐以上壇上、繞中央銅塔、凡壇上作法粗如常、沙彌戒導師畢講遺敎經、次法皇更起沙彌戒御座、向口御著衣取授衣鉢如常、法皇御手持衣鉢登壇、次第作法了後、拜御和上以下十一師、（三段、）了三師十師等列立東軒廊、給祿有差、（三師各白褂一領、本師紅衾一領、小十師黃衾各一帖、）抑入道相國依行步不豫、蒙法皇勅許先登壇、奉待法皇、然者於登壇以前作法者、二度行之、登壇以後同時行之事、法皇參御大佛殿、被行御誦經、壇下立數大幄、積諷誦物、諸僧三百口、以權律師覺雅爲導師、賜布施如常、又有千僧供事、次還御御所、召寺家所司、賜祿、主典代等取之、　十一日癸卯、法皇幷入道大相國令登天台山給、公卿侍臣皆悉供奉、皆布衣也、左右大將著直衣、自高陽院出御東洞院第、令出立給、於西坂下御手輿、御共侍臣十餘、公卿一兩參仕、其外皆退歸、（權中納言公能、三位中將忠雅、）秉燭著御南陽局御所、（前法性寺座主最雲、有御儲事、）所令出京給也、

〔玉海〕嘉應二年四月十九日己亥、此日法皇（○後白河）令下向南京給、明日依可有御受戒事、雖凶會日今日

〔百練抄（八高倉）〕嘉應二年四月廿日、太上法皇（○後白河）於東大寺受戒、入道太政大臣同參入受之、

〔百練抄（八高倉）〕安元二年四月廿七日、上皇（○後白河）爲御受戒、有登山御幸、內大臣以下供奉、關白扈從、座主

大辨大江朝臣、春宮權大夫藤原朝臣等候御前、公卿座本敷長押上、當時有識、北庇敷綠端疊爲座、(南面如本)侍臣執机立僧綱前、以威儀御菜分給之、召廳飯供之、公卿座給衝重、御齋畢、僧綱公卿退出、別納所差殿上饗、日沒之後、蒙雨滂沱、抑漏千僧供者三百僧、有令愁申、又有乞食者數百人、其聲及御所、忽召別納所別當泰淸朝臣、令運米五十斛、三十石給不預供養之僧、廿石施行乞者、今夕寺司賜別祿、別當僧正白大褂一重、(以判官代遣之、自餘召給之、)權別當平崇、小別當仁壽、各白大褂一領、三綱四人、遣寺勾當一人、各黃染衾一條、今夜於戒壇北堂、可被行說淨事、而僧正令奏曰、大小十師屈給、日沒又依降雨可難參見、先例不必行之、有議停之、　廿三日辛卯、(○中略)戊時還御圓融寺、

〔扶桑略記(二十七一條)〕寬和三年(○永延元年)十月廿六日、圓融法皇御幸南京、巡拜諸寺、於東大寺受戒、

〔榮花物語(三様々の悦)〕花山院はこぞの冬、山にて御受戒せさせ給て、その後くまのにまゐらせ給ひて、まだかへらせたまはざんなり、いかでかゝる御ありきをゑならはせ給けんと、あさましうあはれにかたじけなかりける御すくせとみえたり、

〔日本紀略(八花山)〕寬和二年十月日、法皇(○花山)於天台山戒壇院、受廻心戒、

〔百錬抄(四花山)〕寬和二年九月十六日、花山法皇令受天台戒給、義懷惟成兩法師同受之、

〔元亨釋書(二十六資治表)〕永長元年八月、上皇(○白河)出家、十月、受沙彌戒于隆命、

〔本朝世紀〕康治元年五月五日丁酉、是日法皇(○鳥羽)幷入道大相國(○忠實)於東大寺登壇受戒、去二日法皇從白河殿御幸宇治小松殿、入道相國本自坐此所、有御儲事、四日御進發、扈從公卿內大臣、左衛門督藤公敎卿、權中納言同公能卿、左近中將藤忠雅卿、(皆布衣也)院別當民部卿藤顯賴卿、判官代兵部權大輔平時信、主典代主計權助大江以平等、一昨日下向東大寺、爲奉仕御所御裝束也、以西室僧房爲御所、(圓融院御時、以食堂爲御所、今度食堂破損、仍用西室也、)酉刻著御東大寺西中門前、(輿礙[illegible]御門也)脫御車、即下御門、中堂巽角有一堆、號禮拜墓、掃部寮其上鋪小筵、供半帖、昔本願聖武天皇、於此墓上遙拜大佛、相次圓融法皇如此、法皇

有發菩提心者、尸毗則代鴿、薩埵亦投虎、彼皆異代也、目所未睹也、我君早捨王位、新作佛奴、著未嘗著之布服、用未嘗用之鐵器、能屈寢儀、昇降戒壇之上、可稱歎可稱歎、又侍臣曰、悲哉世皆無常、命能是幾、十善之主、既富春秋、其猶如此、我等何益、奔營塵區、涕泗橫骨、少心責躬、當此時也、陰雲忽起、風雨交會、知天衆龍神之降臨也、事畢參大佛殿、雲開雨霽、感應揭焉、大佛殿南砌當佛前間、敷長筵二枚、其上加御疊、立御屏風一帖、爲御座、東西敷疊爲公卿以下座、于時有御誦經事、庭中立十丈幄一宇、（東西立之）其下積信濃布一千端、（有中取十脚小盤十枚）御導師三會已講禪徵、咒願同已講長隆、法用之後、五百僧行道、經四面步廊、其路遠廻來遲、數刻推移、不堪徒然、昇出佛前緣起障子、勅左大辨大江朝臣（輔〇爲）讀之、口如懸河、響驚衆聽、聖武天皇悲願、叡慮可知、毗盧舍那之尊體丈尺易悟、御導師咒願給祿、（大桂各一、院司傳給）衆僧移著食堂、法皇入大佛殿、遍以禮拜、大佛之爲體也、聚金銅以鑄其像、築山岳以投其座、神也妙也、仰之彌高、其前東西懸錦像曼陀羅二鋪、色彰施、諸相具足、上摩天井、下及壇土、凡仰觀俯察、目眩曜焉、申刻遷御食堂、其禮堂設御座、（如大佛殿）一千僧著東西長床、供以熟食、（前日依寺家勘文、自御所遣送二百七十斛飯、盛埴鉢、菓子二種、雜菜八種、盛故作埴坏、）以信濃布三十端爲食巾、法皇起座、暫著西方第六床末、（自提御三衣、清壽法師數御草座、）爲磨二僧著東陪其下、諸僧悚慄皆欲下床、有勅不令動座、於是身積夏臈、眉點秋霜之徒、竊相語曰、不圖下一人之昔尊、加千僧之最末、我等忝居其上、豈非釋迦大師之恩哉、嗚咽者衆矣、道俗見之不覺涙下、法華經不說乎、謙下諸比丘、今望法皇之儀、遠泣釋尊之教、食頃還御于禮堂御座、次自公卿及六位、左右相分入堂內、各執鉢置僧前、（東西各第一床、璨覽不置鉢、）訖以澄心法師爲六種御導師、左近衞權少將實方、取白大掛一領給之、爰大佛殿上厭、長方上角木朽落、先是寺家結麻柱、今日上此角木、法皇還御之便、佇立于大佛殿北廊南砌覽之、更召御車榻暫御之、道俗跪候上厭所登夫二百人、向上如無人、有大工僧仁海者、高立檐端揚聲行事、不幾來上、召下仁海於御前給祿、（疋絹）仁海捧之、先南面禮大佛、次北向拜法皇、人皆莞爾、申時還御於晝御座、姑供威儀御齋、（始用御鉢、銀鉢塗金漆、）僧正權大僧都元杲、權少僧都穆算、權律師眞善、左大將藤原朝臣、左

爲一番、奉禮三柱菩薩、禮畢即著座、教授遺留、與最末大十師共拜禮著座、其後各執香爐、同時三度總禮、次打沙彌戒鐘、即和上羯磨教授起座、從北橋經下階、左繞從南橋登壇上、北面著座、沙彌戒畢、爰以教授權律師眞善兼爲沙彌戒御導師、其詞曰、

十戒波即十善、此度乃受給戒加波、先爾鵝珠乎守給天、次仁鳳闕爾波出給留物奈利介利、於乎自良落給之悉達太子乃昔乎思遣禮波、檀特乃山波跡時之天見天悲人。少古曾有介禮、戒乎人爾受給布禪定聖主乃今乎本禮波、日本乃國波堺擧天恩乎惜牟涙曾繁加利介留、我聞久、一時禪定乃帝、先爾毛出給弊利介利、萬機爾年積天古曾波四海乎波遍御坐介禮、鳳曆波之乎不幾須、龍顏毛浪末爾不浸須御坐爾、菩提乃御意乃發介牟古登、貴物加良悲古曾思介禮、五篇七聚乃戒、今日古曾波悉持御坐世、苦乎不穿奴輕支御步、蓮爾受天不傾曾可候加利介留、見聞隨喜乃若干乃人、御功德乎分天曾給利下部留、落涙波衣爾懸天、醉乃鄉乃珠毛古曾殘介禮、千葉花臺乃舍那、佰億蓮葉乃釋尊、諸共仁百千戒乎守給天、九品蓮爾升給弊登聞江給弊、御功德不限須、法界衆生萬天普及牟、廻向大菩提、次起座、如本還下著本座、此間小十師著鈍色甲、著下階座、下臈前立磬頭之相分著著衣授衣座、即御行著衣師前立、作法畢、還御本座、次和上打小磬、羯磨與和上問、其詞如常、次教授起座進御前、東面著座、奉問十三難十遮、問了教授起座、法皇又持衣鉢寸、鐵鉢口經七寸、塗金漆、起御座給、教授立御前、奉令御行南面之東橋頭、先教授登立、即誦將來羯磨、次奉請壇上、左繞奉禮三柱菩薩、次著給于羯磨前之御座、次教授作立誦羯磨、誦了即戒者拜給羯磨師三度、次羯磨師大戒作法畢、又拜給羯磨師如前、次戒者持衣鉢指西御行、大小十師最末人奉授六念文、次教授相副從西階奉下、戒者奉令行大威儀、謂剃御髮鬚、不中卑下也、其後進給于授衣師前之御座、授衣師後、即向壇禮拜、訖從西腋戶出御、暫留御西廊、羯磨二僧常從御後、爰和上羯磨教授大小師起座、出東腋戶、即列立東軒廊、給祿各有差、僧正權大僧都元杲白大褂一重、權律師眞一著紅染大衾一襲、大十師八人各紅染衾一條、小十師各黃染衾一條、公卿以下依次取之傳給、先是祿韓櫃二合立同東軒廊、在南面覆蓋緋綱等、抑御衣袈裟橫被皆用之以布、御鉢打鐵、口徑七寸、又登壇之間、持律有限、無人相從、獨提衣鉢兼持草座、瞻仰之徒、目不暫捨、僧侶各耳語曰、昔

御誦經物僧供等、復命具了之由、權律師眞善聽昇殿、同刻槌粥鐘、即引滿寺粥、幷供大小十師粥、（僧綱三人、高坏各十二本、大十師八人、衞重六合、小十師十人、各衞重四合、幷懸盤所儲也、）次槌入堂鐘、先和上僧正寛朝、羯磨權大僧都元杲、敎授權律師眞善、大十師八人、（東寺僧照鏡、仁延、定仁、禪蓮、興福寺僧承晴、元興寺僧仁□、招提寺僧千覃、慶遠、）小十師十人、（東寺僧性秀、智範、運心、峯成、興福寺僧常尋、法眞、元興寺僧明運、大安寺僧常燈、藥師寺僧曆綜、禪觀、）等聞鐘聲、集會戒壇院西廊外、戒壇之儀、東第二間北砌、敷長筵二枚、加御疊一枚、立御屛風一帖、爲入堂以前假御座、同砌西方敷長筵疊等、爲公卿以下僧俗座、東庇北第二間敷出雲筵一枚、其上供半疊、爲沙彌戒所御座、（西向）東北角間敷小筵二枚、爲羯磨沙彌二人座、（南面）南庇東第一間北邊御座（如沙彌戒所）爲著衣所御座、（南面）同間南壁下敷長筵一枚、爲著衣小十師座、其西爲敎授座、東戸下敷座如先、爲羯磨二人著衣座、（西面、但尋常受戒時、著衣座在東戸外、）南庇西第一間供授衣所御座、（如東著衣所御座、但東上、）又敷羯磨二人座如東、（尋常受戒時授衣座、在中間內西脇、）壇上艮角供御受戒所御座、和上羯磨敎授大十師小十師壇上座如常、受戒時座時同、卯時御出、（公卿以下著朝衣、僧綱以下整法服、）淸壽法師授御三衣、延源法師持御草座、次僧侶及羯磨沙彌、次公卿以下依次候、小舍人藤原惟時候御水瓶、（加御手巾）御隨身（著冠褐帶弓箭如常）東西相分制雜人闌入、撿非違使候南中門外、爰自廊向西御行、自同廊南折、經戒壇西軒廊、暫御堂北砌御座、次和上羯磨敎授（已上著衲袈裟）幷大十師（皆著甲袈裟）等執香爐、敎授爲前、入從西廊脇門、南折步進、經戒壇西軒廊東行、列立堂前座下、（座在堂砌、于時閉門戸、）但敎授立留第三座邊、和上羯磨大十師步進各座前、其從僧敷座具、即和上等北向、總禮如常、此間法皇入御堂內御座、次和上羯磨敎授幷大小十師、共脫淨履著堂南座、（南面東上）即奉請師僧、作法如常、羯磨沙彌二人、南中門內敷草座著、北向禮拜、諸寺名僧於中門外同音稱敬禮詞（於毛）數聲、（拜和）（上以下、大十師以上也、）小十師中之上臈二人爲堂達、次四人爲授衣師、次四人爲著衣師、不預列立、尋各座處著座、次堂達行事、次打登壇鐘、和上十師立座、徘徊西軒廊之間、開堂戸、（撤僧座、更同砌東方敷公卿座、）皆執香爐、敎授爲前、從南面東二戸參入、登立下層壇上、左繞至北面、（東上）即壇上各座上置香爐、但敎授猶捧香爐、自餘各持座具、至南面共敷座具總禮、次從南面西橋步登上層、左繞塔（壇上中央、本有金銅塔形、）行立南面、始自和上三人

聽其祇候、別當參議左大辨大江朝臣〇齊光有仰作御戒牒狀、寬平法皇御戒牒、中納言長谷雄卿作之、依舊貫也、草成獻之、參議勘解由長官藤原朝臣〇佐理書之、青色紙其狀云、蓋聞假身於浮雲沫山暗消煙浪之際、寄形於輕露蘆海屢變桑田之程、唯有德香普薰、無變花之離塵水、妙梯爲便、正法閣之住虛空、某甲遁黃屋而忘反、閇桑門而誓心、早懲赴焰之飛蛾、懸畏留籠之飛鳥、爰契寬和二年三月廿二日、於東大寺戒壇院受具足戒、唯願鏡知明了是誠、和南謹疏、此文之外、和上及戒壇堂達署、幷大十師加計字等、一如東大寺常戒牒、但無治部玄蕃官人署、嗚呼作者其人也、書亦拔俗焉、　二十一日己丑、寅時供御盥、次供御粥、遲明御車、其體象唐車、以青錦爲左右障子、以檳榔葺其上、舁十人、副御車、用褐衣白布紫簪等、出仁和寺西門、〇中略酉刻到東大寺、於西面中門外下御車、門內東南二許丈有一堆處、掃部所鋪小筵一枚、其上供御半疊、法皇著之、向巽三禮、觀者攬涙、詢于寺之長老曰、本願聖主禮寺護法之處是也、禪定法皇欲受戒、入此寺、亦禮之、三帝頓首誠是和靈堆也、次著御宿所、前二日判官代修理權亮藤原孝忠、主典代大炊允但波奉親等奉仕御裝束、以戒壇院食堂假板敷爲御在所、東二間爲夜御所、假屋其表覆唐綾、紫絲突縫南北東三方懸壁代、同三方立廻五尺御屛風六帖、施滿長筵、御座如常、但御疊如半疊、端皆用青錦、西方立三尺几帳二本、同方立籠臺、懸帽額、御簾上及梁下曳繡帽額、西北壁幷檽子間、曳廻纐纈軟障、第三間爲晝御座、西面又如常、第五間南北各敷兩面疊二枚、爲僧綱公卿、南僧綱、北公卿、並東上、北庇東第三戸間懸御簾、戸前作假橋、其前曳廻斑幔二條、南庭東爲曳斑幔各一帖、南北妻以御宿所東廊三間爲俗殿上侍、馬道敷加假板敷以三間爲僧殿上、其西三間爲進物所、自外所々隨便點定衝重、主殿所供常燈、進物所供御非時、僧綱公卿以下應賜饗人定之後、法皇密向戒壇院、豫問明日儀、便以經覽寺內、僧正行前、洎于覽、大炊屋米十五石、一甑炊之、數十人用轆轤下甑、資整者廿人許、預飯納槽、以樋引水洗飯也、侍臣曰、偉哉大哉、經數刻乃還行、此寺草創之後、堂閣屋舍頹毀有日矣、僧正寬朝自爲別當、致以修繕、土木之功溫故、構堅之飾知新、歷覽之次、法皇嘉歎、　廿二日庚寅、卯時供御盥、次供御粥、僧俗殿上應設饗、判官代中務大丞藤原師長奉勅、率主典代中務少錄國雅重、幷藏人公文雜色等、向大佛殿及食堂、實撿

亦登壇受レ戒、爲二沙彌澄修等四百四十餘人一授レ戒、又舊大僧靈祐、賢璟、志忠、善頂、道緣、平德、忍基、善謝、行潛、行忍等八十餘人僧、捨二於舊戒一重受二和上所レ授之戒一、後於二大佛殿西一別作二戒壇院一、即移二天皇受戒壇土一築二作之一、〇下略

〇按ズルニ、天平勝寶六年ハ、孝謙天皇即位六年ニ當ル故ニ、本文所謂天皇ハ、即チ聖武太上天皇ニシテ、皇太子ハ、即チ孝謙天皇ナリ、

〔日本紀略醍醐一〕昌泰二年十一月廿四日甲寅、太上法皇〇宇多於二東大寺一登壇受戒、春秋三十三令三右大辨式部大輔紀朝臣長谷雄作二戒牒文一、

〔扶桑略記醍醐二十三〕延喜四年、太上法皇〇宇多登二幸叡山一、御二於阿闍梨增命房一、法皇謂二增命闍梨一曰、我昔童年登二遊此山一、心中發レ願、出家住二於此一焉、萬機政務十有餘年、適遂二本意一、而依二侍侍之勸一、以二僧正益信一爲二出家師一、於二東大寺一受二聲聞戒一、今於二此山一和尚爲レ師、欲レ受二菩薩戒一、共保二眞密之法一、以攄二舊懷一矣、敬奉二叡旨一、忽作二御室於千光院一、　五年四月十四日、法皇於二叡山戒壇院一、以二增命阿闍梨一爲レ師、受二廻心戒一、戒壇之上現二紫金光一、見者奇レ之、〇又見二濫觴抄一、

〔日本紀略花山八〕寛和二年三月廿一日己丑、後太上法皇〇圓融自二仁和寺一向二東大寺一、昨日出門、　廿二日庚寅、法皇於二東大寺一受二具足戒一、〇又見二百錬抄、本朝世紀一、

〔圓融院御受戒記〕寛和二年三月十九日丁亥、申刻自二圓融寺一遷二御仁和寺內觀音院一、廿日、廿一日、並依二歸忌日一、今日有二御出一也、曆博士加茂光榮奉二仕御反閇一、僧侶侍臣步二從于御車之後一、先レ是可レ被レ下二宣旨一雜事、以二別當右近衞中將實資朝臣一于時爲二藏人頭一被レ奏二大內一、隨曆僧二口、無二度緣一宣旨事、可レ聽下公卿及派內裏昇殿者往還上事、可レ令下撿非違使設二御船一派制中濫行上之事、隨即以二宣旨一下二東大寺一、以二藏人所牒一給二大和國一、差二撿非違使左衞門少尉布瑠以孝、右衞門少志安茂兼、府生錦爲信等一遣レ之、有レ勅從之人省約爲レ本、以二其農業未一レ了州民有レ煩之故也、就中左大臣〇雅信以二院司貫首一可レ候、右大臣〇兼家依二外戚長者一欲レ從、別示二叡慮一共令レ留レ之、以外院司番頭并可レ役二仕之輩一、及可レ備二威儀一之法侶、豫令二差定

信實をめして七條院〈○後鳥羽母后〉へ奉らせ給ければ、女院は御覽じもあへず、御めもくらませ給ふここちし給ふ、

〔皇胤紹運錄〕後鳥羽院　承久三、七、八、依二天下事一忽出家、法名良然、

親自剃髮出家

〔後法興院關白記〕應仁元年九月廿二日、傳聞、去十七日、仙洞〈○後花園〉御出家云々、近臣四人又出家云々、今度之就二大變一御述懷云云、風聞之說如此、　廿三日後聞、仙洞御出家十九日、御戒師實相院增運僧正云云、近臣兩人〈烏丸同資任、萬里小路前大納言冬房、〉出家云云、委細事追而可レ尋記、

〔皇胤紹運錄〕後花園院　應仁元年九、廿、俄手介二切御本鳥一給御出家、法諱圓滿智、御戒師增運僧正、陣中隨二便宜一被レ召之云々、

臨終出家

〔皇年代略記〕〈後朱雀〉寬德二年正月十六日癸酉、太上天皇尊號、同十八日乙亥、御出家、〈法名精進行〉卽刻崩、

崩後出家

〔皇胤紹運錄〕後光嚴院　應安七、正、廿九、崩二柳原仙居一、〈三十七〉御閉眼之刻御落飾、法諱光融、

〔花營三代記〕應安七年正月廿九日、寅刻新院〈○後光嚴〉崩御、〈依二疱瘡一也、御年三十七、〉同卯刻御出家、〈御法名光融〉戒師泉涌寺長老聖皐上人、剃手安樂光院長老曇淨、

〔皇年代略記〕〈後圓融〉明德四年癸酉四月廿六日辛丑崩、〈春秋三十六、于時故經顯公小川亭爲二仙居一、〉御閉眼之後剃髮、〈法諱光淨、戒師泉涌寺竹岩賢怡和尙、〉

受戒

〔東大寺要錄　一〕或日記云、天平廿年戊子正月八日、天皇幷后御出家、四月八日、受二菩薩戒一名二勝滿一、以二行基菩薩一爲二戒師一云云、

〔扶桑略記　拔萃　聖武下〕天平廿一年〈○天平勝寶元年〉正月十四日、於二平城中島宮一請二大僧正行基一爲二其戒師一、太上天皇〈○聖武〉受二菩薩戒一名二勝滿一、

〔續日本紀　二十四　淳仁〕天平寶字七年五月戊申、大和尙鑒眞物化、〈○中略〉聖武皇帝師之受戒焉、

〔唐大和上東征傳〕天平勝寶六年四月、初於二盧舍那殿前一立二戒壇一、天皇初登壇、受二菩薩戒一、次皇后、皇太子

城甚愛不知其奸、遷都平城非是太上皇之旨、天皇（〇嵯峨）慮其亂階、擯於宮外、官位悉免焉、太上天皇大怒、遣使發畿內幷紀伊國兵、與藥子同輿、自川口道向於東國、士卒逃去者衆、知事不可、遂廻輿旋宮落髮爲沙門、

〔保元物語〕二新院御出家事

去程ニ新院（〇崇德）ハ爲義ヲ始トシテ、家弘、光弘、武者所季能等ヲ御供ニテ、如意山ヘ入セ給フ、〇中略武士共ハ皆何地ヘモ落行ベシ、丸ハ何ニモ叶ハヂバ先爰ニテ休ベシ、若兵追來ラバ、手ヲ合テ降ヲコヒテモ、命計リハ助リナントト仰ナリケレ共、判官ヲ始トシテ、各命ヲ君ニ進セヌル上ハ、何方ヘカ罷候ベキ、東國ナドヘ御開候ハヾ、イヅク迄モ御伴仕、御行末ヲ見果進セント申ケレバ、我モ左コソハ思シカ共、今ハ何トモ叶ヒ難シ、汝等ハ疾疾退散シテ命ヲタスカルベシ、各角テ侍ラバ、御命ヲモ敵ニ奪レナントト、再三シヒテ仰ケレバ、此上ハ却テ恐有トテ、諸將皆鎧袖ヲゾヌラシケル、角テ可叶ナラヂバ、皆散々ニ成ニケリ、〇中略御出家有度由仰ナリケレ共、此山中ニテハ難叶由申上レバ、御涙ニムセバセ給フゾ忝キ、〇中略兎角シテ知足院ノ方ヘ御幸ナシ奉リ、怪シゲナル僧坊ニ入レ進セテ、オモ湯ナドヲゾ進メ奉ケル、上皇是ニテ聽テ御グシオロサセ給ヒケレバ、（〇帝王編年記、作於仁和寺御出家、）家弘モ髻切テケリ、角テハ終ニ惡カリナン、イヅクヘカ渡御有ベキト申セバ、仁和寺ヘコソユカメ、ソレモヨモ被入ジ、只押ヘテ輿ヲカキ入レヨト有シカバ、御室ヘコソナシ奉レ、門主ハ故院ノ御佛事ノタメニ、鳥羽殿ヘ御出有ケリ、家弘ハ是ヨリ御暇申テ、北山ノ方ヘ罷ケル道ニテ、修行者ニ行逢シカバ、是ヲカタラヒ戒保ナドシテ、出家ノ形ニゾ成ニケル、

出家不出詔旨

〔承久軍物語〕六八日（〇承久三年七月）一院（〇後鳥羽）御出家あそばすべきよし、六波羅より申入ければ、則御室の道助法親王をめされて、御戒の師として、御飾をおろさせおはします、忽に花の御姿をかへさせ給ひて、墨染の御衣をめさるゝにも御涙にぬるゝ許なり、すなはち御姿をにせゑにうつさせ、

感時事而出家

内之間、不申案内参御前了、從是稱引來禁中也、奇怪之由、人々所被談也、丑時許、周防守經忠朝臣馳参内、於朝干飯方只今白川院上皇御出家事令遂御了由奏聞、則又乍驚從内御使往反、(頭中將)殿下令馳参給、上皇御出家後、則有御幸、令渡東北院御也、(東北院者、是故上東門院御室也、在法成寺、)今夕宿仕、

〔續世繼(二釣せぬ浦々)〕白河院、(○中略)位におはしまし丶時は、中宮(○賢子)の御事なげかせ給て、おはくのみだうどもつくらせ給き、院ののちは、その御むすめの郁芳門院(○媞子)かくれさせ給へりしこそ、かぎりなくなげかせ給て、御ぐしもおろさせ給しぞかし、四十五六の程にやおはしましけん、御なげきのあまりに、世をばのがれさせ給へりしかども、御受戒などはきこえさせ給はで、佛道の御名などもおはしまさゞりけるにや、敎王房ときこえし山の座主、御いのりのさいもんに、御名の事申されけるに、まだつかぬとおはせられければ、その心をえはべりてこそ、申あげ侍らめと申されけるとかや、

〔皇胤紹運錄〕白河院、嘉保三、(○永長元年)八、十、御落飾、(四十四)法諱融觀、依郁芳門院崩也、

〔實躬卿記〕德治二年七月廿六日、上皇(○後宇多)御幸壽量院殿、(○中略)先幸舊院法花堂云々、□□□於壽量院殿、有御落飾事、

〔皇年代略記(後宇多)〕德治二年七月廿六日、御出家、(四十一、於龜山殿新御堂、法諱金剛性、戒師僧正禪助、依遊義門院(皇后姈子內親王)御事、)

〔増鏡(十二浦千鳥)〕德治二年にもなりぬ、遊義門院(○後宇多后姈子內親王)そこはかとなく御なやみと聞えしかば、院(○後宇多)のおぼしさわぐ事限りなく、よろづに御祈念はらへとの丶しりしかど、なき御事にていと淺ましくあへなし、院も夫故御ぐしおろして、ひたぶるにひじりにぞならせ給ひぬる、其程さまざまのあはれおもひやるべし、

〔日本後紀(十七平城)〕大同四年四月丙子朔、讓位於皇太弟、(○嵯峨)戊寅、(○中略)天皇(○平城)遂傳位避病於數處、五遷之後、宮于平城、而事乖釋重、政猶煩出、尚侍從三位藤原朝臣藥子、常侍帷房、矯託百端、太上天皇(○平

悼亡而出家

以上御分國也、公卿等於後戸邊取之、御戒師分、綾被物一重、（右大將殿令取之給、依無藏人、判官代經守傳之、准大臣歟、）布施一裹、（右兵衛督取之、）預傳之、御直衣皆具、（在御衣、御指貫下御袴、以上納平裹、）帥取之、（預傳之、自餘効之、）長絹一裹、（五疋、按察取之、）綿一裹、（百兩、）三條前中納言取之、次唄師二口、上﨟唄師分綾被物一重、萬里小路前大納言取之、布施花山院宰相中將取之、下﨟分、（自六同前、）權大納言、冷泉宰相取之、次御剃手二口、（自六同前、）上﨟分、皇后宮大夫宗氏朝臣（布衣下絬）取之、下﨟分、前藤大納言師行朝臣（布衣下絬）取之、此外予、吉田中納言實躬朝臣等、依餘人數不取之、次從僧等入自後戸撤布施、次雜役僧二人、入後戸撤三衣以下、次僧侶退出、次公卿自下﨟起座退出、（○首書、雜役僧不給布施例也、）

○按ズルニ、皇代曆、一代要記、紹運要略、皇代畧記、皇年代略記、皇胤紹運錄等、九月七日御出家、法諱金剛源トシ、帝王編年記、增鏡並ニ金剛覺トス、然ルニ應永二十年正月釋有諸ノ記セル、天下南禪寺記ニ載セタル、其本堂金剛王寶殿ノ梁牌銘文ニ、永仁元年大歲癸巳十一月日、開山檀那金剛眼謹立ト見エ、其注ニ金剛眼ハ龜山御密號トアリ、又龜山殿御談義雜記拔萃ニモ德治三年五月十五日、今日御時以後、未刻御幸龜山殿、即依爲故禪林寺法皇之御月忌、於龜山殿大多勝院、被行御佛事云々、法皇御名、當法皇御名、宮御名等注給之、龜山院御法名金剛眼、當法皇御法名金剛性トアリ、法諱金剛眼ヲ以テ是トスベシ、

〔後二條關白記〕永長元年八月九日、丑刻一院（○白河）御出家、醍醐法眼勝覺奉剃御髮了、夜半渡東北院御云々、已及拂曉、

〔中右記拔書〕永長元年八月六日、女院者諱媞子、（○郁芳門院）太上皇（○白河）第一最愛之女、（○中略）嘉保三年八月七日、寅時許俄崩于六條殿寢殿、（年廿一、從去月廿二日、御身有溫氣、又令勞邪氣也、）傳聞、進退美麗、風容甚盛、性本寬仁、接心好施、因之上皇殊他子也、天下威權只在此人、而七八年來、每春令勞邪氣、佛神祈請逐年無止、今當此時已令崩給、生死無常、誠如春夢歟、仰天伏地歎而有餘、上皇此後御神心迷亂、不知東西給云云、呼嗟哀哉云云、　九日、（○中略）此申刻許、上皇欲出家給、有御氣色、人々參集、固以制申云云、經忠爲御使參

半帖、先加持灑水、灑淨三禮、唄打磬取香爐、啓白御出家之由、其間簾中簾外上下溺淚、無擡頭之人、表白漸了之間、公實卿入後戶妻戶、就御座北間簾下、申出御笏(木笏、女房用意此處、)進上皇、即退出後戶邊、次上皇御拜、先大神宮、次八幡、次先院(○後嵯峨)御廟、(各隔段再拜、各向其方、如法起居御拜、)御拜了、公實卿參進、賜御笏、如元進入簾中、次唱頂言、(戒師奉教之)流轉三界中、恩愛不能斷、棄恩入無爲、眞實報恩者、(戒師高唱之、且唱淚、聞人皆拭淚、)次戒師廣爲說法、(其詞在別)次以香水奉灌受者御頂、即讚云、(其詞有別)次受者自說偈言、(戒師奉教之一反)歸依大聖尊、能度三有苦、亦願諸衆生、普入無爲樂、次有御剃除儀、先雜役僧等、持參雜具御脇息、(文永御物云々)次打敷、次御手洗(文永御物云々)次御水瓶二、御剃刀箱二合、(一折敷置之、一合聖護院宮被進之、一合御戒師進之、)以上雜具、或古物、或永康卿新調之、次菊葉(折敷置之)次紙檀紙左右札(奉行人書儲敷)紙捻等、(一折敷置之)次御湯帷、(打懸御脇息上)次上皇令取御冠給、次令拔取御本結給、(以上被置御座右邊、文永隆行卿給、今度無役人、所役僧進入簾中云々、)之、次剃手等奉結分左右御髮(用紙捻)次令開御衣襟、(頸押下之、以御湯帷令引懸御肩上給、)次雜役人參進、奉洗御髮、剃手取水瓶、奉懸御湯、次剃手取剃刀、獻戒師、戒師取之、奉剃頂髮、此間上臈唄師唱毀形唄、(御剃除之間、唄音不斷、)次戒師歸著佛前座、次上臈剃手奉剃左御髮(下臈剃手奉懸御湯)次下臈剃手奉剃右御髮(上臈剃手奉懸御湯)此間下臈唄師出唄、(如初)次御剃除了、左右御髮以檀紙裹分之、即付札、銘云、左方右方、(但永治以後度々不被付右方札云々、)例、件札奉行人兼書儲之、(永治嘉應文永例)御髮進入簾中云云、次下臈剃刀奉剃御髭鬚、御剃髮之間、以菊葉和湯奉懸之、次法皇入御簾中、(自褰御簾令入給)此間雜役人等可撤御物具、次脫御俗服、次著御法衣、(永康卿調進之、鈍色御指貫、永康卿實于法印等候之、不召御袈裟例也、)次供御手水、(爲里小路前大納言候之)次法皇取御袈裟出御、(御座如元、無御簾之役人、)次戒師置御袈裟於袖上、頌文、大哉解脫服、次以御袈裟奉授法皇、次法皇以左右手令受之給、次持御袈裟一拜、即返給、戒師如此三反了、次法皇著御袈裟、有性僧都奉結御袈裟緒、次召御念珠、(但今度出御之時令持給、元來御所持菩提子、[illegible])次定御法名、(但依思食定云々、諱金剛眼、)次受者說自慶偈言、(戒師奉教之)適哉値佛者、何人誰不喜、福願與時會、我今獲大利、次頌了禮佛及師而座、次令受戒給、(沙彌十戒許也)次事了、戒師復本座、次法皇入御簾中、(無御簾役人)次卷道場南面御簾、(五位殿上人經守卷之)爲御布施路、次賜布施、(戒師分讚岐國勤之、唄師以下分美濃國勤之、)

〔百練抄(四後朱雀)〕寛德二年正月十六日、讓位於皇太子、依自去年冬玉體不豫也、十八日、太上天皇落飾入道、即刻崩于東三條院、(三十七)

〔百練抄(五白河)〕延久五年四月廿一日、上皇(○後三條)御出家、(法名金剛行)依病急也、(○又見扶桑略記)

〔一代要記(十一土御門)〕寛喜三年十月六日、落飾入道、(依不豫也)御法名行源、

〔入道左府記〕正應二年九月七日癸未、今日中院(○龜山)有御出家事、此事此一兩日、俄有其沙汰、是御脚氣連々不快之上、被催清淨之叡念、楚忽依思食立也、(春秋四十一)今日彼岸結願、已被遂其事、(○中略)先是新院、(後宇多)去夜自嵯峨殿幸此御所、御足御惱猶快(快上恐脫不字)之間、以御輿幸南禪院云々、大宮院(○龜山母后姞子)渡御南禪院、上皇(○後深草)同御彼御所、(○中略)此間粗伺見堂中御裝束儀、南禪院、(禪林寺殿上御堂也、南面、○中略)南西北東四方懸翠簾垂之、傍東御簾南一間敷大文高麗一枚、爲上皇御座、(南北行)南面西一間傍南御簾敷小文疊一枚、(東西行)爲御戒師座、西面南二三間、傍西御簾敷小文高麗二枚、爲唄師二人、御剃手二人座、(南上東面)後戶東腋、傍北御簾敷同疊一枚、(東西行)爲雜役僧座、本佛前立佛臺、懸釋迦繪像、(三尊御戒師進之)佛供如恒、立燈臺擧燈明、其前立前机、置灑水器散杖等、其前敷高麗、(半帖)其西方立脇机、置塗香器一口、半帖東立磬臺幡花等如日來、御脇息以下雜具等兼置佛後、(後壁外妻戶內、立置物棚一脚)歟、南廣庇正面間以西敷高麗二枚、(過(過恐迫誤)長押東西行)南爲公卿座、以上御裝束大概如此、以御座後簾中爲改著御法衣之所、又以其傍爲壯(○壯恐裝誤)俗服之所歟、申半刻御戒師前大僧正了遍、(東寺前長、永治鳥羽院、東寺僧等參勤歟、)率唄師以下參上、(○中略)次僧參上、御戒師了遍僧正、唄師二人、(法印長遍、法印權大僧都隆證、)御剃手二人、(權少僧都行雅、權少僧都有性、)雜役僧三人(已講憲基、教敏、禪忠、憲基之外唄師以下、御戒相具之歟、)等各入簾中著座、次戒師從僧、(但教敏禪忠等役之歟)持參三衣筥幷戒體等、置脇机上、次上皇有御咳聲、仍予起座、經公卿後簀子、入正面間廣庇邊、南面東一間褰御簾參入簾中、於御座北頭褰南第一間東御簾、上皇(御冠御直衣、著御下御袴、先々御布袴也、今度依怱忽密儀、著御御直衣、)出御著御御座、御座定後、予出後戶妻戶經西簀子復座、次戒師著佛前

由疾病而出家

〔皇胤紹運錄〕陽成天皇　天曆三、九、廿一出家、

〔日本紀略　村上　三〕天曆三年九月廿六日丙寅、勅奉度者三十人於陽成院、（○中略）依御體不豫也、　廿九日己巳、此曉太上天皇（陽成院）崩于冷泉院、

〔扶桑略記　醍醐　二十四裡書〕延長八年九月廿二日壬午、有御讓位事、　廿九日己丑、依御惱危、遂落飾歸眞、未刻崩于右近衞府、御年四十六、

〔帝王編年記　醍醐　十五〕延長八年九月廿九日、尊意爲御出家師、法名金剛寶、

〔日本紀略　花山　八〕寬和元年八月（○八月、扶桑略記作三月、）廿九日辛丑、後太上天皇（○圓融）依病落髮、法名金剛法、（○又見扶桑略記、百練抄、）

〔榮花物語　石九陰〕院（○一條）の御なやみいとおもらせければ、御ぐしおろさせ給はんとて、法性寺座主院源僧都めして、おほせらるゝ事どもいみじうかなしともおろかなり、（○中略）かくて御ぐし、六月十九日（○寬弘八年）たつの時におろしはてさせ給て、あらぬさまにておはします、

〔權記〕寬弘八年六月十九日辛酉、辰剋欲落之間、右宰相中將自院示云、只今可參、即馳參、有御出家事（○一條）也、右大辨奉仰問吉平朝臣云々、申云、午時吉、辰時次吉云々、辰剋入墓之時尤可忌、御惱難重、猶以吉時可有御出家、而以吉平次吉之說用、此時甚可奇、上皇御夜大殿、權僧正慶圓爲和尙、前權大僧都院源爲阿闍梨、權律師懷壽實誓爲唄、權大僧都隆圓、前權少僧都尋光剃御髮、權律師尋圓亦近候、又權大僧都明救候、左大臣奉沐御髮、事了賜祿於僧有差、奉剃之人不知案內、先奉剃御髮、次剃御鬢、只除髮遺鬢相似外道之體、仍故實出家之人先剃鬢也云々、

〔日本紀略　一條　十一〕寬弘八年六月十三日乙卯、有御讓位事、　十九日辛酉、辰刻太上皇（○一條）落髮入道、入墓之時雖可避忌、依御惱危急、遂叡念也、

〔日本紀略　後一條　十三〕寬仁元年四月廿九日丁酉、三條院太上天皇、依不豫落飾、（年四十二○又見百練抄）

但今暫被延引之條、彌爲天下、いかにいかに可畏入候と、如此有御奏聞云云、就之御餘波をしみなどゝて、何事にても室町殿申御沙汰若可然哉、且內々相談赤松播州之處、あるべき事にて候はゞ、上意之御憚不可然、可被申意見歟之由答之、仍處談合也云云、予答云、如此事就先例可有了見歟、而未勘其例、先可被勘先規哉、申御沙汰可然之由申意見之時、先例何事候哉と定、可被尋下歟、其時無先蹤者、併可爲雅意之申狀歟之由所相存也、黃門云、尤々先例定難同歟云云、爰大外記師世朝臣來、仍可勘之由仰遣歟、

〔皇年代略記 後小松〕永享三年三月廿四日、御出家、御年五十五、法諱素行智、御戒師永助法親王、

〔看聞日記〕永享三年三月廿四日、仙洞御落飾今夜御沙汰、其儀嚴重云云、御戒師一品親王、〇永助法親王御剃手理勝院僧正、眞光院僧正、雜役法師濟々參、〇中略御供出家人々、西園寺前右大臣、〇公光洞院前內大臣〇滿季按察前大納言、資家吉田大納言、家房醫師丹三位、幸基女房紀內侍、〇中略仙洞御事、以前再三被止申了、而押而御沙汰之間、御供人々までも不快云々、

〔觀音寺相國記〕永享三年三月廿四日戊子、院御出家也、春秋五十六此事自武家再三雖被申止、思食立之上、已亥刻被遂、此事、著座人々强不被催、面々依入魂參仕云々、〇中略上皇衣冠布袴、永豐朝臣奉仕之出御時內府候御簾、御隨身等南庭祗候、事儀了有御布施、內府以下取之云々、

〔皇年代私記 後水尾〕慶安四年五月六日、御落飾、五十六、法諱圓淨、戒師相國寺慈照院仲牌和尙、

〔議奏日次案〕正德三年八月十六日辛卯、今日仙洞〇靈元御落飾、辰刻許、以院司西園寺大納言、被奏御辭表、判官代丹波賴庸、主典代中原職周、申次尙長朝臣奏聞、攝政內覽御辭表、留御前、院司已下直退散、午刻爲御使中山前大納言被進之、爲御祝儀黃金三枚、二荷、三種被進之、亥下刻御落飾儀式首尾能相濟、被遂素懷候旨、以頭中將基香[illegible]御進之由也、

〔皇胤紹運錄〕靈元院、　正德三年八月十六日、御落飾、六十歲法諱素淨、御戒師梶井道仁法親王、

リ候ハン程ハ、皇居ヲ南山ニ移シ進ラスベシトノ勅定〇後村上ニテ候ト被奏、〇中略良暫有テ新院〇光明御涙ヲオサヘテ仰ラレケルハ、天下亂ニ向フ後、僅ニ帝位ヲ踐トイヘドモ、叡慮ヨリ起リタル事ニ非レバ、一事モ世ノ政ヲ御心ニ任セズ、北辰光消テ、中夏道闇キ時ナレバ、共ニ椿嶺ノ陰ニモ寄、遠ク花山ノ跡ヲモ追バヤトコソ思召ツレドモ、其モ叶ハヌ折節ノウサ、豈叡察ナカランヤ、今天運圖ニ膺、萬人望ヲ達スル時至レリ、乾臨枉テ恩免ヲ蒙ラバ、速ニ釋門ノ徒ト成テ、遂郤ニ幽居ヲ占ント思フ、此一事具ニ奏達有ベシト仰出サレケレドモ、顯能再往ノ勅答ニ及バズ、

〔椿葉記〕此日〇觀應二年十二月廿八日光明院、にはかに御しゆつけあり、御はつしんときこゆ、

〔皇胤紹運錄〕光明院　貞和四、十、廿七禪位、〇中略觀應二、十二、廿八俄御落飾、三十一法諱眞常惠、御戒師泉涌寺了寂上人、

〇按ズルニ、皇代略記光明院條ノ頭書ニ、法諱眞常惠、後改眞惠ト見エ、又一本皇胤紹運錄ニモ、後去常字ト見エタリ、

〔椿葉記〕城南の離宮には、閑素として歲月を送りましますほどに、明德三年十一月卅日、上皇は〇崇光法皇にならせ給、御戒師は常光國師〇鹿苑院主なり、法親王にこそ御受戒あるべけれども、幽閑の院中さたに及ばず、さりながら禪律の御戒師、先例なきにもあらず、

〔皇年代略記崇光〕明德三年十一月晦日、於伏見殿御出家、五十九、法諱勝圓心、先年無極和尙定中云々、御戒師常光國師、名諱明窓、

〔皇胤紹運錄〕熙成王法名金剛心、(中略)號後龜山院、

〔椿葉記〕三月廿四日、〇永享三年院〇後小松は法皇にならせたまふ、御戒師御室一品親王〇承助なり、今はいそぢに餘らせたまへば、實算も猶長久ならん爲には、めでたき御事なるべし、

〔建內記〕永享三年三月七日辛未、早旦向廣橋、依招引也、勸修寺中納言參會、亭主黃門相談云、仙洞〇後小松御落飾事、昨日自室町殿〇足利義教御返事無相違也、如此度々被仰下候上者、難被留申、此事已及數年之勅定也、

伊川ヲ御渡候シ時、懸ル止事ナキ御事トモ知奉リ候ハデ、玉體ニアシク觸奉リシ事、餘リニ淺マシク存候テ、此貌ニ罷成テ候、佛種ハ緣ヨリ起ル儀モ候ナレバ、今ヨリ薪ヲヒロヒ水ヲ汲ム態ニテ候トモ、三年ガ間常隨給仕申候テ、佛神三寶ノ御トガメヲモ免レ候ハントゾ申ケル、ヨシヤ不輕菩薩ノ道ヲ行給ヒシニ、罵詈誹謗スル人ヲモ咎メズ、打擲蹂躙スル者ヲモ却テ敬禮シ給ヒキ、況我已ニ貌ヲヤツシテ、人其昔ヲ知ズ、一時ノ誤何カ苦シカルベキ、出家ハ誠ニ因緣不思議ナレドモ、隨順セン事ハ努々叶フマジキ由ヲ仰ラレケレドモ、此者強テ片時モ離レ進ラセザリシカバ、曉閼伽ノ水汲ニ遣サレタル其間ニ、順覺ヲ召具シテ、潛ニ高野ヲゾ御出有ケル、御下向ハ大和路ニ懸ラセ給ヒシカバ、道ノ便モ好トテ、南方主上〇後村上ノ御坐アル吉野殿ヘ入セ給フ、此三四年ノ先マデハ、兩統南北ニ分レ、此ニ戰ヒ彼ニ寇セシカバ、呉越會稽ニ謀シガ如ク、漢楚覇上ニ軍セシニモ過タリシニ、今ハ散聖道人ト成セ給ヒテ、玉體ヲ麻衣草鞋ニヤツシ、鸞輿ヲ跣行ノ徒渉ニ易テ、遙々ト此山中迄分入セ給ヒタレバ、傳奏イマダ事ノ由ヲ奏セザル前ニ、直衣ノ袖ヲヌラシ、主上イマダ御相看ナキ前ニ、御淚ヲゾ流サセ給ヒケル、是ニ一日一夜御逗留有テ、樣々ノ御物語有、〇中略今ハトテ御歸アラントスルニ、寮ノ御馬ヲ進ラセラレタレドモ、堅ク御辭退有テ召レズ、イツシカ疲サセ給ヒヌレドモ、猶雪ノ如クナル御足ニ、アラ〳〵トシタル草鞋ヲ召レテ、立出サセ給ヘバ、主上ハ武者所マデ出御成テ御簾ヲ褰ラレ、月卿雲客ハ庭上ノ外マデ送進ラセテ、皆淚ニゾ立ヌレ給ヒケル、〇中略諸國御抖擻ノ後、光嚴院ヘ御歸有テ暫ク御坐有ケルガ、中使頻ニ到テ松風ノ夢ヲ破リ、舊臣常ニ參テ蘿月ノ寂ヲ妨ケル程ニ、此モ今ハ住憂ト思召、丹波國山國ト云所ヘ跡ヲ銷テ移ラセ給ヒケル、

〔太平記三十一〕持明院殿吉野遷幸事

北畠右衞門督顯能、兵五百餘騎ヲ率シテ、持明院殿ヘ參リ、〇中略四條大納言隆蔭卿ヲ以テ、世ノ静

光嚴院禪定法皇ハ、正平七年ノ比、南山賀名生ノ奥ヨリ、楚ノ囚ヲ赦サレサセ給ヒテ、都ヘ還御成タリシ後、世中ヲイトヾウキ物ニ思召知セ給ヒシカバ、姑射山ノ雲ヲ辭シ、汾水陽ノ花ヲ捨テ、猶御身ヲ輕ク持バヤト思召ケリ、御有增ノ末通テ、方袍圓頂ノ出塵ノ徒ト成セ給ヒシカバ、伏見里ノ奥、光嚴院ト聞エシ幽閑ノ地ニゾ住セ給ケル、是モ猶都近キ所ナレバ、舊臣ノ參リ仕ヘントスルモ厭ハシク、浮世ノ事ノ御耳ニ觸ルモ冷シク思召ケレバ、來無所止去無住、柱杖頭邊活路通ト、中峰和尚ノ作ラレシ送行偈、誠ニ由アリト御心ニ染テ、人工行者ノ一人ヲモ召具セラレズ、只順覺ト申ケル僧ヲ一人御供ニテ、山林抖擻ノ爲ニ立出サセ給フ、○中略是ヨリ高野山ヲ御覽ゼント思召テ、○中略日ヲ經テ紀伊川ヲ渡ラセ給ヒケル時、橋柱朽テ見ルモ危キ柴橋アリ、御足冷シク御肝消テ、渡リ兼サセ給ヒタレバ、橋ノ半ニ立迷ヒテオハスルヲ、誰トハ知ズ、如何樣此邊ニ臂ヲ張、作リ眼スル者ニテゾアルラント覺タル武士七八人、跡ヨリ來リケルガ、法皇ノ橋ノ上ニ立セ給ヒタルヲ見テ、此ナル僧ノ臆病氣ナル見度モナサヨ、是程急グ道ノ一ツ橋ヲ渡ラバトク渡レカシ、サナクバ後ニ渡レカシトテ押ノケ進ラセケル程ニ、法皇橋ノ上ヨリ押落サレサセ給ヒテ、水ニ沈マセ給ヒニケリ、順覺アラ淺マシヤトテ、衣著ナガラ飛入テ引起シ進ラセタレバ、御膝ハ岩ノカドニ當リテ血ニナリ、御衣ハ水ニ漬リテシボリ得ズ、泣々傍ナル辻堂ヘ入進ラセテ、御衣ヲ脱替サセ進ラセケリ、古モ懸ル事ヤアルベキト、君臣トモニ捨ル世ヲサスガニ思召出ケレバ、涙ノ懸ル御袖ハヌレテホスベキ隙モナシ、○中略諸堂御巡禮アル處ニ、只今出家シタル者ト覺シクテ、濃墨染ニシホレタル桑門二人御前ニ畏テ、其事トナク只サメ〴〵トゾ泣居タリケル、何者ナルラント怪ク思召テ、ツクヅクト御覽ジケレバ、紀伊川ヲ御渡有シ時、橋ノ上ヨリ法皇ヲ推落シ進ラセタリシ者共ニテゾ有ケル、不思議ヤ何事ニ今遁世ヲシケルゾヤ、是程心ナキ放逸ノ者モ、世ヲ捨ル心ノ有ケルカト思召テ過サセ給ヘバ、此遁世者御跡ニ從ヒテ、順覺ニ泣々申ケルハ、紀

人參南禪院、右大將已下候公卿座、座狹之間、人々徘徊便宜所、御戒師了遍僧正參仕、唄師二人、御剃手二人、雜役僧二人、相率參也、以南禪院道場爲其所、僧正入道場後簾中、參仕僧等相從、○中略御戒師留流轉三界中、紅涙浮眼、丹心銘肝、哀傷之悲、謂而有餘、溺涙不辨前後、不圖逢今儀、心中惘然之外無他者也、御落飾儀了、入御簾中歟、改御直衣、本儀令著布袴給歟、依密儀被用御直衣、令著椎鈍衣御云々、道場南面御簾上之、東面御簾垂之、次公卿起座、取御布施、自上臈次第取之、○中略次僧正以下退出、○中略御法名金剛眼、三十九、三字御法名者、宇多、朱雀、圓融、三代也、此外猶有之歟、

○按ズルニ、本文三字ノ法名トアルハ、所謂灌頂號ナリ、宇多上皇出家ノ條ニ引用セル台記久安三年六月十八日ノ文ヲ參看スベシ、

〔増鏡十一今日の日陰〕正應も三年になりぬ、○中略長月の初めつ方、中の院○龜山は御ぐしおろさせ給ふ、いとあはれなる事ども多かるべし、禪林寺殿にて、やがて御如法經などかゝせ給ふ、○中略ころもばしは禪僧にならせ給ふとて、ろうさうの御衣に、くはらといふけさをかけさせ給へり、

〔伏見院御落飾記〕正和二年十月十五日、今日上皇○伏見御幸伏見殿、明後日可被遂御出家之故也、○中略入道一位、於一條今出河被○被恐誤字範棧敷有見物、予同參其所、右大將遲參之間、出御及未刻、後聞關白、○中略候御車寄、中將忠兼朝臣候御劍、頭辨長隆朝臣付御車、未終刻令渡棧敷前給、

〔皇年代略記伏見〕正和二年十月十七日、御出家、四十九、法諱素融、

〔皇年代略記後伏見〕元弘三年六月廿六日、御落飾、四十六、法諱理覺、後改行覺、御戒師前天台座主二品慈道親王、

〔皇年代略記花園〕建武二年十一月廿二日、御落飾、三十九、法諱遍行、戒師法勝寺慈鎭上人、

〔皇年代略記光嚴〕觀應二年八月八日、於河州行宮御落飾、四十一、法諱勝光智、延文元年月日、於河州離宮由良、覺明和尚奉令著禪衣、此時御諱上、勝一字被止之、

〔太平記三十九〕光嚴院禪定法皇行脚御事

十方三世諸佛菩薩、照二視精誠、圓二滿宿願、夫至孝者德之本也、報恩者善之源也、先以二功德之上分、奉レ訪二考妣兩院之御菩提一矣、復請弟子以二此日、行二化他之衆善、併資二順次決定之往生、一期告レ終之刻、必預二聖衆之來迎、九品易往之間、宜レ蒙二如來之荷擔、乃至法界、利益無邊、敬白、

嘉應元年六月十七日　　佛弟子（諱）敬白

淸書了、有二御諱宸筆、行眞（○又見二玉海一）

〔雅言卿記〕文永五年十月三日、今日上皇（○後嵯峨）御二幸龜山殿、明後日御逆修、件日可レ被レ遂二御出家、□□□□□已下御點、頗被レ刷歟、未斜臨幸、御隨身折レ花、　五日、太上天皇於二龜山仙宮、被レ始二御逆修、即令二出家一給也、大殿（○藤原兼平）關白（○藤原基忠）已下濟々焉、御戒師、天台座主尊助法親王令レ候給、一生不犯、令レ披二一箇一間、上皇殊有二叡信、如レ此被レ用二御戒師一也、（○下略）

〔文永五年御落飾記〕十月五日、今日太上天皇（春秋四十九）可レ令レ除二花鬢一御之日也、（○中略）資季候二大多勝院公卿座、先レ是關白（○藤原基忠）以下、多以祗候、權辨依二師命一令レ打レ鐘歟、打鐘事、此日外被レ略之、被レ行二御逆修、（○中略）聖憲法印爲二御導師、可レ謂二富留那再誕、藏人皇后宮大進光朝、勘解由次官棟望等、勤二堂童子、事了關白取二布施、（右中辨資宣朝臣傳之）前宰相中將取二裹物、兵部卿二亞相等猶取二被物、資季取レ之後直退出、（新院御共殿上人、信通、經資等朝臣、賴親等相送、下レ殿、）歸二宿所、

○按ズルニ、此後十二ケ日、法會ヲ修行セラレシコトアレド今略ス、

〔增鏡（十一今日の日陰）〕又の年（○正應三年）二月の比、一院（○後深草）御髮おろし給ふ、年月の御本意なれど、たゆたひ過し給けるに、禪林寺殿（○龜山）こぞの秋おぼし立にしに、いとゞおどろかされ給ぬるにやありけむ、二月十一日、龜山殿にて御いむ事受させ給ふ、四十八にぞならせ給ふ、御法名素實と申也、

〔吉續記〕正應二年九月六日、參二白川殿、人々祗候、御落飾（○龜山）明日一定云々、（○中略）御戒師聖護院宮、被レ申二子細、仍被レ仰二了遍僧正（仁和寺）、申二領狀一云々、師卿奉行也、　七日、午始參二禪林寺殿、（○中略）隨二奉行之告、人

〇六條者順孫也、國母仙院〇平滋子者正妃也、忝爲三代帝王〇二條、六條、高倉之父祖、旁致萬機巨細之諮詢、因玆雖去害馬、未得絕塵累、雖追虛舟、未得去浮榮、只樂幽閑於山水之栖、漸送涼燠於二六之曆、然間先朝晏駕、傷老少之無定期、無常理、悟始終之難逃、閬苑花明、空望紅榮於春雨、紛陽葉脫、唯憐黃落於秋風、每見物之有盛衰、寔諳人事之不牢固、況不惑之齡屢過、厭俗之志彌深、仁日虞人之貢、定殞飛說之生命、多年齊民之憂、皆結輪廻之業因、加之擒充戮賓、雖思四海之安寧、懲惡除凶、非無五利之禁法、發露之誠、此時尤切、側聞如來正敎之中、殊勝之實語、逆修善業、功德無量、隨心所願、獲其果實、仍自晚夏六月十七日、迄于涼秋八月上旬候、初後相幷五十箇日、佛則顯數十體之尊容、經文寫一千部之妙典、便於洛東幽邃之精舍、敬開和南敬篤之齋筵、所喚者鷲子智德之輩、所唱者魚一〇魚本作興唄稱讚之聲、方今憶輪王悲衰容之因、慕釋提授法衣之跡、合二羽於佛前、剃雙鬢於頭上、發心日新、何待淨居天子之勸、機緣時至、便感普王如來之夢、昔爲鳳闕之尊、龍袞裁衣、今列桑門之侶、木叉携杖、隨又從今朝百箇日之間、手自爲每日之所作、修三時法華之秘密、企十部妙經之轉讀、須以百日滿千部也、抑弟子轉讀經典、積而有數、法華經則一萬五千百四十六部、千手經則三萬四百四十卷、其外藥師經二千五百九十八卷、懺法二千五百五十七卷、阿彌陀經六千七百廿卷、阿彌陀百萬遍念誦四十七度、又千手護摩二千六百卅三時、法華護摩五百三十一時、不動護摩七百七十時、大威德護摩廿八時、阿彌陀護摩四十二時、又阿彌陀供養百六十一度、又釋迦、藥師、正觀音、十一面、地藏、龍樹、普賢、文殊等各七度、法華百八十九度、千手二百十二度、如意輪二十一度、愛染王五十六度、不動明王百九十六度、大威德三百三十五度、毗沙門天百十四度、金剛童子四十九度、又長日供養法者、法華、阿彌陀、千手、不動、毗沙門等也、但每時奉讀法華經一卷、敢不交餘言、凡厥行業薰修幾多、算師不能知、佛智宜悉見、是皆忘現世之事、偏只爲後生之營而已、於戲襄野軒轅之跡、七聖誰轉大法之輪、崑丘驊騮之跡、八駿徒隔兩足之相、豈若弟子已入一實無爲之道、遂感三明不退之果、伏匃

奉摸寫素紙妙法蓮華經五十部

無量義經、觀普賢經、阿彌陀經、般若心經各五十卷、

六七日

奉造立金色等身不動明王像一體

奉摸寫素紙妙法蓮華經五十部

無量義經、觀普賢經、阿彌陀經、般若心經各五十卷、

結願日

奉造立金色等身普賢菩薩像一體

奉摸寫素紙妙法蓮華經五十部

無量義經、觀普賢經、阿彌陀經、般若心經、各五十卷、

每日

奉圖繪阿彌陀如來像一鋪

奉摸寫素紙妙法蓮華經十部(在具經)

已上素紙妙法蓮華經九百部也、但五十箇日間、可被滿一千部、而於今百部者、七七日可被供養矣、目錄在別、仍不載之、

右佛經造寫甄錄如斯、夫以一念潜通覺月澄菩提心之水、三諦觀察、惠風拂煩惱障之塵、甚深之理、不可得稱者歟、伏惟謬依十善之宿因、早纂百王之洪業、撫民惟疎、遙謝垂衣之德、淳化難施、忽追脫屣之蹤、爰追顧前事、倩思往緣、弟子在藩之時、待賢門院(○母后璋子)慈悲之恣早藏、登極之始、鳥羽前皇、拜覲之禮永斷以來、傷嗟之恨留胸、慘切之憂銘肝、不圖以孤露之微質、理一天於愚心、誠是祖宗之靈德、社稷惟保、降上玄之祐、繼嗣益弘、永曆先朝(○二條)者長嫡也、今上陛下(○高倉)者少子也、太上天皇

般若心經五十卷

一七日

奉造立金色等身藥師如來像一體

奉摸寫素紙妙法蓮華經五十部

無量義經、觀普賢經、阿彌陀經、般若心經各五十卷、

二七日

奉造立金色等身彌勒如來像一體

奉摸寫素紙妙法蓮華經五十部

無量義經、觀普賢經、阿彌陀經、般若心經各五十卷、

三七日

奉造立金色等身千手觀音像一體

奉摸寫素紙妙法蓮華經五十部

無量義經、觀普賢經、阿彌陀經、般若心經各五十卷、

四七日

奉造立金色等身地藏菩薩像一體

奉摸寫素紙妙法蓮華經五十部

無量義經、觀普賢經、阿彌陀經、般若心經各五十卷、

五七日

奉造立金色等身釋迦如來像一體　同三尺普賢菩薩像一體

文殊師利菩薩像一體

後開入、夜被始護摩、法印憲覺於東不動堂勤行、御本尊三尺阿彌陀本像、（往古尊像、定朝遺跡、）助手二口、前日召支度調儲雜具、當日渡壇所云々、

御誦經幄　散花机　堂童子座

已上撤却、毎日可供奉云々、

去保元三年謝尊號之後、重命卽至、抑退所請、地望空疲、唯有紫泥之依舊、石心不轉、猶恨白雲之絕交、襟懷相背、時代屢移、夫遜讓之道、遂志爲先、昔不堪馭俗而去客馬、今何求浮名而繫虛舟、三皇帝之父祖也、縱罷尊號誰爲卑、無何有之棲居也、欲樂閑放而養性、況乎羽林者、爲鳳闕之備矣、豈隨象外之遊、茅土者非箕山之有矣、寧致草泯之貢、其事皆違宿意、自今宜從停止、既追前蹤於永治、勿我後章於當時、

嘉應元年六月十七日

敬白

勤行逆修善根事

初日

奉造立金色等身阿彌陀如來像一體　同三尺觀世音菩薩像一體

勢至菩薩像一體

奉書寫金字紺紙妙法蓮華經一部　無量義經一卷

觀普賢經一卷　阿彌陀經一卷

般若心經一卷

奉摸寫素紙妙法蓮華經五十部　無量義經五十卷

觀普賢經五十卷　阿彌陀經五十卷

永治元年五位藏人經親勤仕例云々、次堂童子分花筥散花行道、了堂童子納花筥、次堂達授御誦經文於導師、（件文事未始以前、諷誦行事廳官授預僧、預僧撤立紙、置堂達經机、永範卿草之、院司權大納言隆季加署、）次打御誦經鐘、諷誦敎化如常、了揚御經題名、次讀願文、次說法、次賜布施導師、被物五重、大臣四人、大納言取之、

布施一裹　參議取之、（今度大相國雖取被物、參議取布施了、）

色々布二結、包革革（○上革恐衍）子二合、四位殿上人取之、

題名僧十一口、各被物一重、納言以下取之、

布施一裹、（布五段絹裹）四位以下殿上人取之、

頭中將幷下官取被物、五位取布施、

次每日御佛經供養

等身阿彌陀佛一鋪

三尊像供養了後、頗押西方、其跡中央立佛臺、奉懸此像、其前立花机、備閼伽、其左右立燈臺、供燈、

前机禮盤等如元、

素紙御經十二部

御導師禪智法印著禮盤、次法用、但無堂童子、預僧分花筥、　次說法　次布施

導師被物一重　公卿取之

布施一裹（布三反）殿上人取之

題名僧十一口、各布施一裹、（布二反）

次被始御懺法、僧徒起座、於便宜所、改著五條袈裟、又安香鑪錫杖名香筥等、次被始例時、次事了僧徒退下、公卿退下、

每日御佛供養以後、下官退出、以傳語記之、

次剃手二口

被物以下色目同前　　公卿侍臣次第取之

次事了戒師以下退下

此間以藏人頭右中將實守、御願遂了之由被申大內、（修理大夫奉仰、於渡殿邊仰之、）

寬平法皇〇宇多御遁世之日、以院司中納言被奏聞、萬壽上東門院御遁世日、以藏人頭被申大內、永治〇鳥羽依吉例以頭中將教長被申大內、今度依彼二代吉例、被用頭中將也、

次被始御逆修

金色等身阿彌陀三尊、金泥法華經一部、素紙同經六十部、

有御願文、式部大輔永範卿草之、

皇后宮權大夫朝方卿淸書、料紙紫裏白色紙有薄、

請僧十二口、豫參集便宜所、（鈍色裝束、著甲袈裟、但御導師宿裝束、件僧徒護摩阿闍利相加、鈍色裝束十三具、今朝分給了、）

法印禪智　同尊覺　同實寬　同公顯　少僧都澄憲　同勝憲

法眼顯智　同覩智　律師良明

法橋實慶　同尊澄　同智秀

修理大夫藤原卿、令院司右少將光能朝臣奏事由、卽奉仰令打鐘、法皇出御東御所簾中、次太政大臣、（忠）左大臣、（經）右大臣、（兼）內大臣、（雅）前大納言實定、權大納言隆季、同實房、前中納言光忠、光隆、權中納言邦綱、中納言宗家、右兵衞督兼雅、權中納言成親、同資長、同忠親、修理大夫成賴、參議敎盛、同家通、右大辨實綱、正三位俊盛、俊成、成範、朝方、實家、（已上直衣、右大辨實綱一人著束帶、）著堂前座、但中納言以下退在西廊、此外右衞門督時忠、參議資賢、右宰相中將宗盛、祇候御所方不座列、次導師禪智法印著禮盤、次堂達智秀法橋打磬、次法用堂童子著座、（右衞門權佐盛隆衣冠、藏人治部少輔兼光束帶、）其座在右方簀子、五位藏人勤此堂童子、雖存憚、

上﨟剃手尊覺、奉剃左御髮、下﨟剃手公顯、奉懸御湯、此間上﨟唄師公舜、唱毀形唄、次下﨟剃手公顯、奉剃右髮、尊覺懸御湯、此間下﨟唄師憲覺唱唄、次剃除了、左右御髮裹檀紙付札、（作札兼書云々、光能朝臣所作歟、）次下﨟剃手奉剃髮、（御剃髮之間、和菊奉懸之、）次法皇入御簾中、脫俗服、令著法衣給、次供御手水、此間僧徒撤雜役具、御髮暫置同御厨子、次法皇取御袈裟出御、次戒師奉除周羅髮、（作周羅髮、頂三五整歟、之見戒律作法云々、）次定御法名、（行眞）次戒師置袈裟於机上、頌文、大哉解脫服、以御袈裟奉授法皇、以左右手令受給、次捧御袈裟一拜、即返給戒師、如此三反、了法皇令著給、（永治寬遍法眼奉結御袈裟緒、今度尊覺法印結之、）次召御念珠、（菩提子水精裝束念珠、戒師被儲云々、）次遇哉値佛者偈、次奉授沙彌十戒、次說戒偈、次神分、次廻向、次令授菩薩戒給、被授申御法名行眞、日來被案撰歟、次法皇入御簾中、次戒師復本座、次卷南廂御簾、次給布施、

先戒師

綾被物一重　太政大臣取之　判官代成隆（○成隆一本作盛隆）傳之

布施二裹（絹白布各七反）　民部卿光忠、治部卿光隆取之

布袴御裝束一具（裹白絹裹、當日著御之御裝束也、脫御之後帖之裹調也）　皇后宮大夫實定取之

直衣御裝束一具（同裹）　權大納言隆季卿取之

鈍色裝束一具　權大納言實房卿取之

長絹二裹（各五匹）綿二裹（各百兩）　已上四裹、權中納言邦綱以下取之、

次唄師二口

各綾被物一重　左大臣、內大臣取之、（判官代光長、奉經傳之、）

布施一裹（各白布五段）　參議散三位取之

鈍色裝束一具

長絹一裹（五匹）綿一裹（五十兩）　已上納言以下取之

成親卿被獻內裏、判官代藤原光章給宮、主典代大藏少輔基兼於中門外又給宮相從、權中納言引率判官代主典代逐電、參內於大內、頭中將相逢奏御報書、次內覽納御厨子、次權中納言以下歸參、報書使進發之後、長方朝臣賜御隨身祿、左右將曹秦兼任、兼國各六丈絹四匹、府生秦賴文、中臣近武各同絹三匹、番長秦公景、兼宗各同絹二匹、主典代等取之、近衞六人各手作布二段、廳官取之、修理大夫仰云、各可候本府、次將曹以下退出、御報書事永治例、右少辨朝隆奉行、左中辨顯業朝臣草之、右少辨朝隆淸書、院司權中納言家成卿爲御使、

今度作者淸書御使併爲彼子息、吉例相叶、自然之前表也、

今度御報書有裹紙、其上卷禮紙二枚、又卷一枚、次入宮、以檀紙四枚各重二枚裹之、結中如例、巳刻攝政殿、太政大臣忠左大臣經右大臣兼內大臣雅以下納言、前納言、參議、散三位廿六人參入、依召殿下令參御前給、有御對面、次殿下令退出給、日來令煩發心地給、已有御氣色云々、午刻前大僧正覺忠、香染法服、令著納袈裟、法印公舜、同憲覺、尊覺、公顯、已上四人、宿裝束平袈裟、大僧正以下件五人宿房遠、又依別仰自去夕參宿近邊、大僧正令宿熊野御精進屋廊給、參上御所之間乘手輿、從僧步行、參上、暫被候西廊、未刻上皇自東廊御所渡御西面御所、御裝束布袴、先御坐母屋簾中、次太政大臣、左大臣、依召候御前座、次被召僧徒、前大僧正爲戒師、公舜、憲覺爲唄師、尊覺、公顯爲剃除、此外法橋實慶、阿闍梨眞圓、同源猷爲勤雜役、祗候北廂障子外、大僧正以下、至于役人、併八人、皆爲園城寺門徒、叡慮之所及、凡夫難知云々、戒師從僧持參三衣筥、置掖机上、次上皇出御簾外御座、次於南面御拜、永治例云々、次戒師著說戒座、灑水、次三禮唄、次打磬表白、次請和尙文、在答、次請阿闍梨文、在答、次御拜、先大神宮、次八幡、次鳥羽院陵、次待賢門院御墓、各向其方兩段再拜云々、先例多召人笏、今度被用元御笏云々、次流轉三界中頌、次髭毛爪皮文、次善哉大丈夫頌、次歸依大世尊文、次雜役僧等持參雜具御脇息、實慶法橋打敷、眞圓阿闍梨御手洗、源猷水瓶、又實慶御髮剃筥、又眞圓御湯帷御手巾等、又源猷已上置御座邊、幷打敷上、此後雜役三人僧相替勤之、次上皇取御冠、令解本結給、剃手尊覺法印、給件物等入御簾中、次剃手奉結分左右御髮、用紙捻、次令開御衣襟給、頸袖下以御湯帷令引懸御肩上給、次

盡ヌルニヤ、迚モ由ナシト思食立セ給テ、一筋ニ後世ノ御勤思召タツト聞エシ程ニ、仁安四年四月八日、改元アリテ嘉應ト云、嘉應元年己丑六月十七日、上皇法住寺殿ニシテ御出家アリ、御歲四十三、御戒師ハ園城寺ノ前大僧正覺忠、唄ハ法印公舜、憲覺、御剃手法印尊覺、權大僧都公顯也、今度皆智證ノ門徒ヲ用ラル、御布施ヲバ大相國已下ゾ被執行ケル、今日ヨリ始テ五十箇日ノ御逆修アリ、八月八日結願セラル、故ニ二條院ハ、御嫡子也シカ共先立セ給ヌ、新院〇六條ハ嫡孫、當今〇高倉ハ又御子ニテ御坐セバ、向後マデモ憑シキ御事ナレドモ、平家朝威ヲ蔑ロニスルモ目醒ク思食ケレバ、穢土ノ習、人ノ有樣モイトハシク思食ケレバ、十善ノ鬢髮ヲ落シ、九品ノ蓮臺ヲ志シ給モ最貴シ、平家ノ振舞中々御善知識トゾ思食ス、御出家ノ事、兼テ有披露ケレバ、雲上人御前ニ候テ、目出度御事ト色代申テハ、御齡モ盛ニ御坐セバ、今暫ナンド申合レケレ共、入道淸盛ハ善惡物申サズ、サコソト思ケルニヤ、

〔百練抄八高倉〕嘉應元年六月十七日、太上天皇〇後白河御出家、御年四十三御戒師前大僧正覺忠、御法名行眞、自今日被始御逆修、 廿三日依上皇御逆修初七日、被行非常赦、幷被召返流人十五人、但興福寺前別當惠信、長谷寺前別當宗覺等不被召返、依本寺訴也、 八月八日、上皇御逆修結願、其次被申上、年來御作善目錄、其藁修不追楚竹、

〔兵範記〕嘉應元年六月十七日壬寅、今日太上皇〇後白河令遁世給、御年四十三、追鳥羽院例、此四五箇年雖有御願、于今遲引、宿善期至、令遂素懷給也、於法住寺御所、御懺法堂有其儀、兼奉仕御裝束、其儀、御懺法堂西面母屋、幷南面兩面廂懸御簾、鋪設莊嚴、具見指圖、院司修理大夫成賴卿、左少將光能朝臣、兼日奉仰致其沙汰、且隨御所便宜、且准保延七年例所奉仕也、今朝左中辨俊經朝臣、持參御報書草、院司右中辨長方朝臣奏聞、入宮即令皇后宮權大夫朝方卿淸書、檀紙次奏淸書、御覽了又返給、長方朝臣納朴函、以檀紙四枚、各二枚重裹立押合前後結中、如常表裹了又進上、次修理大夫賜之、令院司權中納言

是三字、雖レ誤所レ行已久、余〇藤原細長奏曰、何以知レ誤乎、仰曰、寛平法皇、法名空理、灌頂號金剛覺、灌頂時名之灌頂後御消息與二猶書一空理、不レ書二金剛覺一、則知レ僧灌頂號猶二男字一、而古賢以爲二金剛覺是法名一、不レ知レ有二空理之御諱一、是故天子法諱三字、又有二金剛之字一、雖二古賢一不レ免二失誤之譏一、慎之令二努力一云々、

〔扶桑略記 二十三 宇多〕仁和五年〇寛平元年己酉正月、天皇談話曰、往日素懷御記云、朕自レ爲二兒童一、不レ食二生鮮者一、歸二依三寶一、八九歲之間、登二天台山一修行爲レ事、爾後毎年往二詣寺々一修行、至二十七歲一、言二中宮一可レ爲二沙門狀一、答曰、此極善也、大原寺有二練行法師靡佟者一、爲二彼法師一裁二縫細絎裝束并袈裟一、先可二以與一耳之、後日又答曰、善哉善哉、好二三寶事一、雖レ然暫見二盡世間一、須レ修二此事一、經二三四月一、復如レ是事未レ有二妻子一可也、若住二于世間一斷二煩腦一是難耳、答曰、諾然敢不二肯許一、後四ヶ月、大臣持二鳳輦一奉レ迎二先帝一〇光孝、恐心偷以悚戰、未レ及二復奏一、歷二四ヶ年一、傳二此寶位一、而代ロ人心有二兩端一、可レ治難、周文賢哲主也、

〔帝王編年記 十五 朱雀後〕天曆六年三月十四日、出家、御法名佛陀壽

〔百練抄 四 一條〕寛弘八年六月十九日、先皇〇一條御出家、法名精進覺

〔百練抄 六 崇德〕永治元年三月十日、太上天皇御出家、廿九、法名空覺、

〔續世繼 二 鳥羽の御代〕鳥羽院、〇中略かくてつぎのとし〇永治元年御ぐしおろさせ給き、御とし四十にだにみたせ給はねども、としごろの御はいも、又つゝしみのとしにて、年頃は御隨身などもとゞめさせ給て、ぐせさせ給はねども、白河のおほいのみかどゝのゝむかひに、御堂つくらせ給て、くやうせさせ給に、兵仗かへし給はらせ給て、めづらしく太上天皇の御ふるまひなり、うちつゞき石幡賀茂など御幸ありて、三月十日ぞ鳥羽殿にて御ぐしおろさせ給、すこしも御なやみもなくて、かくおもほしたつ事を、よの人なみだぐましくぞ思ひあへる、御名は空覺とぞきこえさせ給し、

〔源平盛衰記 三〕一院御出家事

一院〇後白河モ被レ思召ケルハ、〇中略清盛カク心ノ儘ニ振舞コソ然ベカラチ、是モ末代ニ及テ、王法ノ

緇徒精進者之爲高迹、雖尊居極而盡踏之矣、寢疾大漸、命近侍僧等、誦金剛輪陀羅尼、正向西方結跏趺座、手作結定印而崩、寢儀不動、儼然若生、念珠猶懸在於御手、梓宮御棺、其制同輿、以聖躬座崩、遂不頽臥也、遺詔火葬於中野、不起山陵、使百官及諸國不擧哀、停素服、亦勿任緣葬之諸司、喪事所須、總從省約、

〔仁和寺御傳〕宇多法皇　昌泰二(己未)年十月廿四日、於仁和寺御出家、(御年三十三)御法名空理、後改金剛覺、(○中略)延喜四(甲子)年三月、營室于仁和寺、(俗曰御室)

〔日本紀略(醍醐一)〕昌泰二年十月廿四日(○扶桑略記、濫觴抄作二十四日)甲申、太上皇(○宇多)落髮入道、權大僧都益信奉授三歸十善戒、御名金剛覺、(○中略)卽日請停尊號、其詞曰、前年讓位者爲社稷也、今日出家者爲菩提也云々、同日天皇上表、不許上皇之命、(○又見扶桑略記)

〔帝王編年記(十四宇多)〕昌泰二年十月十四日甲戌、出家、(御年三十四、法名金剛覺)號寬平法皇、

〔愚管抄(一宇多)〕寬平九年、御脫屣、(三十一)昌泰三年月日、御出家、(三十四)法名金剛覺、

〔大鏡(一宇多)〕寬平九年七月五日、おりさせ給ふ、昌泰二年つちのとのひつじ十月十四日、出家せさせたまふ、御名金剛覺と申き、承平元年七月十九日、うせさせ給ひぬ、御年六十六、(○中略)このみかどのたゞ人になり給ふほどなむどおぼつかなし、よくもおぼえ侍らず、

〔大和物語上〕みかど(○宇多)おりゐたまひて、又の年の秋、御ぐしおろしたまひて、所々山ぶみしたまひて行ひ給けり、備前の椽にて橘の良利と云ひける人、內におはしましける時、殿上にさぶらひて御ぐしおろし給ければ、やがて御ともにかしらおろしてけり、人にも忘られ給はでありきたまひける御ともに、これなんおくれ奉らでさぶらひける、かゝる御ありきし給ふいとあしき事なりとて、內より少將中將これかれさぶらへとて奉らせ給けれど、たがひつゝありき給、

〔台記〕久安三年六月十八日庚戌、今夜法皇(○鳥羽)談話及我朝古事、(○中略)仰曰、我朝天子出家時、法名多

〔續日本紀稱德二十九〕神護景雲三年五月丙申、縣犬養姉女等坐巫蠱配流、詔曰、現神止大八州國所知倭根子掛畏天皇大命乎、親王王臣百官人等天下公民衆聞食止宣久、犬部姉女波乎內都奴止爲氏、冠位擧給比根可婆禰改給比治給伎、然流物乎反天逆心乎抱藏氏、己爲首氏忍坂女王、石田女王等乎率氏、掛畏先朝乃依過氏棄給之氏厨眞人厨女許爾竊往乍岐多奈久惡奴止母相結氏謀家良久、傾奉朝庭、亂國家氏岐良比給之氏氷上鹽燒我兒志計志麻呂乎天日嗣止爲牟止謀氏、掛畏天皇大御髮乎盜給波利氏、岐多奈伎佐保川乃髑髏爾入氏、大宮內爾持參入來氏、厭魅爲流己止三度世利、(下略)

〔日本後紀桓武八〕延暦十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂薨、(中略)姉廣虫及笄年許嫁從五位下葛木宿禰戸主、既而天皇(孝謙)落飾、隨出家爲御弟子、法名法均、

〔三代實錄陽成三十五〕元慶三年五月八日丁酉、是夜太上天皇(清和)落飾入道、于時權少僧都法眼和尙位宗叡侍焉、廿五日甲寅、奉爲太上天皇度僧三十人、淳和太皇太后崩後例、度二十人、是日從四位下行阿波權守藤原朝臣安方請出家爲沙門、勅許之、安方侍奉清和院、隨主入道焉、

〔三代實錄陽成三十八〕元慶四年十二月四日癸未、申二刻、太上天皇(清和)崩於圓覺寺、(中略)天皇、(中略)好讀書傳、潛思釋敎、鷹犬漁獵之娛、未嘗留意、(中略)于時有僧正眞雅法師、自降誕初侍護聖躬、(中略)眞雅遷化、復有僧正宗叡法師、入唐求法、受得眞言、奉勸天皇、結香火之因、自遜皇位、御清和院、歸念苦空、發心菩提、朝夕之膳菜蔬在御、妍狀豐姿、不賜顏色、燕私寵引、自斯而斷、遂御山莊、落飾入道、是時僧正宗叡侍焉、山莊即是圓覺寺也、天皇寄事頭陀、意切經行、便欲歷覽名山佛壟、於是始自山城國貞觀寺、至于大和國東大寺、香山、神野、比蘇、龍門、大瀧、攝津國勝尾山、諸有名之處、經廻禮佛、或處留住、踰旬乃去、自勝尾山、歸於山城國海印寺、俄而入丹波國水尾山、定爲終焉之地、自後不御酒酢鹽豉、二三日一進齋飯、六時苦修、焦毀如削、斷除業累、禪念逾劇、恒厭此身、欲不御膳而捨之、至夫沙門修練者之所難行、

信佛教而出家

〔續日本紀 十八孝謙〕寶字稱德孝謙皇帝出家歸佛、更不奏諡、因取寶字二年百官所上尊號稱之、

〔東大寺藏勅書〕勅旨、○中略天平勝寶元年、○中略

今帝法名隆基○孝謙

〔續日本紀 二十四淳仁〕天平寶字六年五月辛丑、高野天皇○孝謙與帝有隙、於是車駕還平城宮、帝御于中宮院、高野天皇御于法華寺、六月庚戌、喚集五位已上於朝堂、詔曰、太上天皇○孝謙御命以氐卿等諸語部止宣久、朕御祖太皇后乃○孝謙母后光明子御命以氐朕爾告之久、岡宮御宇天皇乃○文武御父草壁日繼波加久氐絶奈牟止爲、女子能繼爾波在止母欲令嗣止宣氐、此政行給岐、加久爲氐今帝止立氐須麻比久流間爾、宇夜宇也自久相從事波無之氐、斗卑等乃仇能在言期等久、不言岐辭母言奴、不爲伎行母爲奴、凡加久伊波流倍枳朕爾波不在、別宮爾御坐坐牟時自加得言也、此波朕劣爾依之氐加久言良之止念召波、愧自彌伊等保自彌奈母念須、又一爾波朕應發菩提心緣爾在良之奈母止念須、是以出家氐佛弟子止成奴、但政事波常祀利、小事波今帝行給部、國家大事、賞罰二柄波朕行牟、加久能狀聞食悟止宣御命衆聞食宣、

〔扶桑略記 拔萃淳仁〕天平寶字六年六月、先帝高野娘、落花簪入佛道、法諱稱法基尼、卅五

〔帝王編年記 十一淳仁〕天平寶字六年六月、高野○孝謙出家、稱法基尼、

〔續日本紀 二十五淳仁〕天平寶字八年九月甲寅、詔曰、○中略此禪師○道鏡乃晝夜朝廷乎護仕奉乎見流仁、先祖乃大臣止之天仕奉之位名乎繼止念天在人奈利止云天、退賜止奏之可止毛、此禪師乃行乎見爾至天淨久、佛乃御法乎繼隆武止念行末之、朕乎毛導護末須己師乎夜多夜須久退末都良武止念天在都、然朕方髮乎曾利天佛乃御袈裟乎服天在止毛、國家乃政乎不行阿流己止不得、佛毛經爾勅久、國王伊王位仁坐時方菩薩乃淨戒乎受與止勅天在、此仁依天念倍方出家天毛政乎行仁豈障倍伎物仁方不在、故是以天帝乃出家之天伊末須世仁方出家之天在大臣毛在倍之止念天、樂末須位爾波阿良禰止毛、此道鏡禪師乎大臣禪師止位方授末都流事乎諸聞食止宣、○下略

名稱

御セリ、且ツ出家ノ天皇ニハ、上古ハ諡ヲ上ラザルヲ以テ例ト爲ス、聖武孝謙ノ二天皇ノ如キ是ナリ、

女帝ノ上皇ト爲リ出家シ給ヒシハ、古來孝謙天皇一人ノミ、是ハ其顱ヲ圓ニシ給ヒシニハアラズシテ、額髮ヲ剃除セシニ止マリシナリ、ナホ出家ノ事ハ、釋敎部ニ得度ノ篇アレバ參看スベシ、

受戒ハ、更ニ出家ノ後ニ於テスルアリ、出家セズシテ行フアリ、或ハ初ニ東大寺ニテ行ヒ、後ニ重ネテ延暦寺ニテ行フ等ノ事アリテ、其受戒ノ座ニ在リテハ、上皇ノ至尊ヲ降シ、布衣ヲ著ケ、鐵鉢ヲ持チ、衆僧ノ下ニ坐シ給フ等ノ事アリ、是モ釋敎部ニ、戒律ノ篇アレバ就キテ見ルベシ、

灌頂受衣ノ事モ、釋敎部ニ其篇アレバ此ニ贅セズ、宇多天皇ヲ金剛覺ト稱シ奉リシガ如キハ、所謂灌頂號ニシテ、灌頂ノ時ニ命ジタルナリ、

天皇在位ノ出家ハ、聖武天皇ニ昉リ、自ラ三寶奴ト稱シ、次ニ仁明天皇ハ、其大漸ニ及ビテ之ヲ行ヒ給ヘリ、花山天皇ハ、年少ニシテ世事ニ更歴シ給ハズ、衽席ノ愛ニ溺レ、奸臣ノ術中ニ陷リ給ヒシモノニテ、亦在位中ノ事ナリ、

〔名目抄 院中〕法皇ホウワウ

〔東寶記 八〕太政官符　治部省

應加置眞言宗年分度者四人事

右太上法皇〇宇多勅命曰、〇中略不任令法久住之思、勤狀陳請者、〇中略

延喜七年七月四日〇又見類聚三代格

〔千載和歌集 序〕わがのりのすべらき〇後白河につかへ奉りて、〇下略

古事類苑

帝王部十五

太上天皇出家 受戒、灌頂、受衣、天皇出家受戒、併入

出家トハ、所住ノ家ヲ出デ、剃髪シテ佛ニ歸スルノ謂ナリ、而ルニ我邦ニテハ、在家出家ヲ問ハズ、剃髪スルヲ以テ出家ト云フ、故ニ今此稱ニ依ル、

太上天皇ノ出家ヲ擧グレバ、清和上皇ハ、酒酢鹽豉ヲ御セズ、二三日ヲ間テ、一タビ齋飯ヲ進メ、宇多法皇ハ、諸國ヲ徧歷シ、備ニ辛酸ヲ嘗メ、仁和寺ノ開祖ト爲リ、其法ヲ後世ニ傳ヘタマヒシガ如キハ、殊ニ著明ナルモノナリ、光嚴上皇ノ、吉野ノ峰ヲ攀ヂテ、南朝ノ天皇ト相見テ、互ニ嫌隙ノ念ヲ其間ニ措キタマハザリシガ如キハ、蓋シ親親ノ情厚キニ由ルト雖モ、亦以テ當時佛教ヲ崇尙スルノ一旦ヲ觀ルベシ、要スルニ上皇ノ出家ハ、其緣由一樣ナラズ、或ハ疾病ニ由リ、或ハ皇子ヲ喪ヒ給フニ由リ、或ハ悼亡ニ由リ、悼亡ニモ後宮ノ事ニ關スルアリ、又其間ニハ時事ノ變故ニ感ジ給フアリ、叡旨ニ出デズシテ權臣ノ壓制ニ由ルアリ、而シテ出家スルニハ、必ズ僧ノ手ヲ借ルベキヲ、或ハ親手ニ剪髪シ給フアリ、且ツ其時ヲ擧グレバ、或ハ大漸ニ及ビテ俄ニ行ヒ給フアリ、或ハ登遐ノ後ニ至リテ剃髪シ給フアリ、

出家ハ、戒ヲ受ケ、法衣ヲ纏ヒ、法名ヲ命ズルヲ以テ、上皇モ亦此例ニ依リ、且ツ太上法皇、又ハ單ニ法皇ト稱シ奉レリ、其間ニハ寺院ニ御スルアリ、清和上皇ノ圓覺寺ニ於ケル、宇多法皇ノ仁和寺ニ於ケル圓融上皇ノ圓融寺ニ於ケルガ如キ是ナリ、然レドモ後世ハ多ク離宮ニ

古事類苑

帝王部十五

太上天皇出家 受戒、灌頂、授衣、天皇出家、授戒、併入

古事類苑

帝王部第二册目錄

神宮司廳藏版

古事類苑

帝王部二

古事類苑刊行會

BINDING INSTRUCTIONS FROM

CATALOGUE DEPT.

Bind	front cover in	
	back cover in	
	both covers in	

Mend ✓